Visitors from the future

葦切

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｖｉｓｉｔｏｒｓ　ｆｒｏｍ　ｔｈｅ　ｆｕｔｕｒｅ

【Ｎコード】
Ｎ０６７１Ｍ

【作者名】
葦切

【あらすじ】
　ネオ童実野シティで平穏に暮らす少年少女が、自称神様（笑）の依頼で過去に向かう事に。舞台はデュエルアカデミア、仲間と共にまだ見ぬ敵に立ち向かう！

第1話　事件は唐突にやって来る（前書き）

今回が初投稿です。
至らないところがあるかもしれませんが、よろしくお願いします。

それでは、第1話をお楽しみください！

※２０１０年１０月１０日に修正しました。

第1話　事件は唐突にやって来る

ＳＩＤＥ／???

ドゴォオオオン!!

扉を開けた俺を真っ先に出迎えたのは、すさまじい爆発音だった。
煙の中では2人の男が咳き込んでいる。

「ゲホッゲホッ!馬鹿野郎!無理すんなって言っただろ!」

「俺は俺の可能な範囲で試運転をしただけだ!」

「限度ってもんがあんだろ!明らかにオーバーヒート寸前だっただろうが!!」

今文句を言ってるのがクロウ・ホーガン。顔中にマーカーが付けられていて、オレンジ色の派手な髪型をしている。
この世帯の中では一番の働き者で、一番の苦労人だ。

で、クロウに逆ギレしてんのがジャック・アトラス。金髪で、普段は白いコートを着ている。　少し前まではデュエルキングとして名を馳せていたほどの実力者なんだけど、今はある人物にデュエルで負けて『元キング』となっている。
プライドの高い性格だが、それが災いして今だに職に就けていない。

ギャアギャア騒いでる2人を無視して、俺はパソコンの前に座っている男に話し掛けた。

「遊星、今度はどうした？」

「紅刃か？よく来たな」

こいつの名前は不動遊星。黒髪に金のメッシュ、青い上着を着ている。この中で一番機械に強い。

さっき言ったある人物ってのが遊星だ。つまり、こいつは『現キング』という事だ。

冷静でどこか熱いところがある、みんなのまとめ役。一言で言えばそんな感じだ。

「どうもエンジンの調整が上手くいかなくてな。2人にも手伝ってもらっているんだが、この有様だ」

遊星は苦笑しながら、まだ口喧嘩をしているジャックとクロウを見ながらそう答えた。さっきのはエンジンの試作品が故障したのか。

「ま、時間はまだあるんだし、気長にやればいいさ」

「そうだな」

近い内に『ＷＲＧＰ』とかいうライディングデュエルの世界大会があるらしく、遊星達はそれに向けてＤホイールを開発している。

説明するまでもないだろうけど、Ｄホイールっていうバイクに乗りながらやるのがライディングデュエルだ。正直、バイクに乗りながらデュエルする必要あるのかと思うけど、そんな事言ったらこのご時世のデュエルを否定する事になるから口には出さないでおく。

あ、紹介が遅れたな。
俺は真川紅刃（さながわくれは）、１６歳。黒髪黒目の高校生だ。

特技は剣術。剣道じゃなくて剣術だ。俺の家は代々剣の道場をやっていて、俺もそこで修行を受けていた時期がある。今でも毎日の鍛練は欠かさないし、護身用に真川家特製の黒い木刀を持ち歩いている。

デュエルも自信がある。これはデュエルアカデミアっていうデュエルを教える学校で鍛えたものだ。学校内では中等部の頃から上位のランクに入るほどだったけど、どんなデッキを使うかはお楽しみだ。

さて、自己紹介はこれくらいにして、喧嘩を止めるとしますか。

「おいお前ら、喧嘩する元気があるなら後始末しろ」

「んだと…って紅刃!?」

「いつからそこに?」

「エンジンが爆発起こしたところからだよ。俺も手伝うからさっさと片付けようぜ」

今この部屋は、爆発で四散したエンジンのパーツが散らばっている。てかこいつらよく無傷でいられるよな。

遊星がパソコンとにらめっこしている間に3人がかりで掃除を済ませると、再び扉が開いた。

「「お邪魔しま～す！」」

同時に挨拶をして元気良く入って来たのは双子の龍亞（るあ）と龍可（るか）だ。

龍亞は緑の髪を後ろで一つにまとめていて、龍可は頭の上にツインテールをつくっている。

やんちゃ真っ盛りな龍亞を姉のような龍可が注意するというのが日常の光景なんだが、実際は龍亞が兄で龍可が妹だ。これじゃ、ぱっと見ただけじゃ龍亞が兄だなんて思わないよな。

「遊星、調子はどう？」

双子と一緒に入って来た赤紫の髪をした俺と同い年の少女ー十六夜アキが遊星に話し掛けた。

カードの力を実態化させる能力を持った、いわゆる『サイコデュエリスト』の一人だ。その中でも特に力が強いから、普段は力を抑制する効果を持つ髪飾りを付けている。

昔は力をコントロールできずに辛い思いをしてきたが、アキの父親と遊星の必死の努力によって完全にコントロールできるようになった。今じゃアカデミアに通って幸せに暮らしている。

ちなみに、アキ達はアカデミアから直接来たらしく制服を着ている。

「アキ。まだエンジンが上手くいかない。どうにかしてパワーを上げる必要があるんだが…」

「そう。私にできる事があったら言ってちょうだい。いつでも力を貸すわ」

「ああ、ありがとう」

「ねえ、この機械ひどい事になってるけど何かあったの？」

「ああ、これか？エンジンの試作品だ。誰かさんが無理して壊しちまったけどな」

「俺は無理などしておらん！」

「はいはい、ストップ。これ以上喧嘩するなら叩っ斬るぞ」

俺はそう言いながら、腰に差してある木刀を引き抜いた。

「い、いや、それは勘弁…」

「フン…」

多少冷や汗をかいて後ずさる苦労人と元キング。俺の剣術の腕前を知ってるからこその賢明な判断だ。自慢じゃないが、そこらへんの木なら一振りで薙ぎ倒せる。

「紅刃、もう少し平和的に解決できないの？」

「ああ、悪い悪い」

小学生に怒られるようじゃ、俺もまだまだだな。そう思いながら木刀を納めると、また扉が開いた。

「こんにちは！」

「お、来たか月沙」

綺麗な銀色の髪が視界に入る。

こいつの名前は波星月沙（なみぼしつきさ）。銀髪ポニーテールで紫の瞳を持つ高校生だ。

月沙とは中等部で会ってからよく一緒に行動するようになり、今じゃ親友同然の付き合いだ。

俺と月沙もアカデミアに通っているけど、家が近いから一度着替えてここに来たから今は私服だ。

「差し入れって事でクッキーを持って来たの。みんなで食べましょ！」

「おお、月沙姉ちゃん太っ腹！」

うん、小学生は元気だな、いい事だ。

俺がテーブルを用意し、月沙がクッキーの箱をど真ん中に置いて蓋を開ける。中には美味そうに焼けたクッキーが敷き詰められている。

みんなでクッキーを食べながらワイワイ話す。そんな風に今日も平和な一日が過ぎていく。…はずだった。

みんながクッキーを食べようと手を伸ばした、その時だった。

ボオオォン！！！

部屋の空いている空間が爆発して白い煙を出したのは。

「「「「「「「「「！！？？」」」」」」」」」

濛々と立ち込める白煙。中に小さな黒い影が見える。

「な、何だこりゃ！？」

それは俺が知りたい。俺は不測の事態に備えて、静かに木刀に手を掛け居合の体制を取った。

煙が晴れていく。俺達は固唾を飲んでそれを見つめている。

そして、煙が晴れたそこには…

「ふぅ。なんとか無事に着いたみたいだ…」

白いローブを身に纏い、グレーの髪をしたちびっこがいた。

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

え、何こいつ。俺達にどうリアクションしろと？

「あ、どうもこんにちは」

「……誰だお前」

「僕かい？僕は神様だよ」

「よし、わかった。遊星、精神科の病院ってどこにあるっけ？」

「ちょ、いきなり病人扱い！？」

「急に出てきて『僕は神様です』って言って素直に信じる馬鹿はいねえよ」

「確かにそうだけどまずは話を聞こう！判断はそれからでも遅くないでしょ！」

「フン、聞くだけ聞いてやる。どんな笑い話を話す気だ？」

「最初から信じるつもりないよね！？ていうかみんなしてそんな軽蔑するような目を向けるのやめて！悲しくなってくるから！」

～しばらくお待ちください～

「…で？過去の世界に余計な奴が入って来て、そいつをとっちめるのに俺達の力が必要だって事か？」

「まあ、簡単にまとめるとそうなるね」

この神様（自称）が言うには、この時代のある科学者が自分の発明で過去の時代にタイムトリップしたらしい。しかし、その科学者

が何かしらやばい事を企んでいて、そいつを止めるために、この時代の、それもデュエルでかなりの実力を持つ俺達の力が必要だという。

「わざわざ私達に頼らなくても、あなたが片付けた方が早いんじゃないかしら」

「さすがに神が介入するのはいろいろとまずいからね、君達に協力してもらうしかないんだ」

今介入してるだろ。俺達とコンタクトとってるじゃねえか現在進行形で。

「一応、君達にも関係あるんだよ?過去で大規模な破壊活動が行われたら、未来であるこの時代もめちゃくちゃになっｔｙ」

「神と言ったな、過去に行くにはどうしたらいい?」

「即答!?」

さすが遊星、こういうのには敏感だな。

ちなみに、相手が神様だというのはみんな面倒だから信じる事にしている。でなけりゃこいつの登場シーンの説明がつかないからな。

「それは僕の力で行けるよ。でも、まだ条件があるんだ」

「条件?」

「デュエルモンスターズの精霊と心を通わす力が強大な人でないと

いけない」

「精霊と？」

「今回の黒幕は精霊世界もターゲットにしている。だから、精霊と共に戦える人が必要になる。それと、デュエル以外の戦闘でも強い人間も必要かな」

条件多いな。つまり、精霊が見える事が大前提かい。

「で？その条件を全部満たした奴はこの中にいるのか？」

「うん。真川紅刃、波星月沙、君達がその全ての条件を満たしている人間だよ」

「「え？」」

いや待て、どういう事だ？

月沙と龍可はカードの精霊を見ることができる。でもリアルファイトまで視野に入れるなら月沙しかいない。こいつにはある特技があるからな。

「ちょっと待て、月沙はまだいいけど、なんで俺なんだ？俺は精霊を見る事ができないぞ？」

「いや、君には充分な素質がある。後少し強い影響を出したら、君の力は精霊を見るまでに成長するはずだ」

これは意外だ。て事は俺も近い内に精霊を見る事ができるようになるのか。それはそれで楽しみだな。

「それじゃ、明日の午前11時にここに集合してね。それまでに準備を済ませといてね。異論は認めないよ。それじゃ！」

ボゥン！！

神様はそれだけ言い残すと、白い煙を撒き散らして消えてしまった。

「…行っちゃったね」

「紅刃、月沙、どうすんだ？やっぱ過去に行くのか？」

答えはもう決まってる。

「行くに決まってるだろ！ほっといたらこの時代までめちゃくちゃになっちまうんだし、俺達にしかできないのなら行かないなんて選択肢はない」

「私も行く！この時代の人達と過去の時代の人達を護るというのなら…」

「そっか…じゃあ、お前らには頑張ってもらわなくちゃな！」

「月沙、俺はお前に頼まれている物の製作を急ぐ。今は他の準備をしていてくれ」

「遊星…！わかった、よろしくね」

そういや、一昨日に月沙が遊星に何か頼み事をしてたっけ。何だ

ろうな？

「よし、それじゃ、準備といきますか！」

次の日、俺達は全員昨日の場所に集合した。

「月沙、できたぞ」

「え、本当に！？」

「ああ、大事に使えよ」

遊星はそう言って月沙に約束の物を手渡した。ホルダーに入ったそれは、拳銃型のデュエルディスクだ。

月沙は腰にホルダーを巻き付け固定した後、デュエルディスクを抜いて自分のデッキをセットし、目にも留まらぬ速さで左腕に装着・展開してカードを5枚引いた。

その後、すぐにカードをデッキに戻し、ディスクを取り外して元の拳銃の形に戻した。

「うん、とても使いやすいわ」

「撃ってみるか？」

「じゃあ、遠慮なく」

言うと同時にテーブルの上に置いてある空き缶に銃口を向け、水色の弾丸を放った。弾丸は寸分の狂いもなく空き缶に命中し、空き缶はそのままごみ箱に吹っ飛ばされ、中に吸い込まれていった。

俺達が唖然とする中、月沙は涼しい顔をしてディスクを数回回し、ホルダーに納めた。

「すっげ～！月沙姉ちゃんカッコイイ！」

「…おい、お前らまさか」

「月沙のデュエルディスクを銃弾を撃てるように改造した」

「ありがとう、遊星。大事に使わせてもらうね」

…おい、デュエルディスクはいつから武器になった?使用用途間違ってないか?

月沙の特技、それは射撃だ。祭やゲーセンの射的でターゲットを外したところを、俺はまだ一度も見た事がない。それだけ月沙のレベルが高いんだ、というか少なくとも俺から見たら次元が違う。

だからと言ってディスクと拳銃を融合させちゃいろいろとまずいだろ…。

あ、水色の弾丸についてだけど、話すと長くなるから今回は説明なしだ。また別の機会に説明するから待っててくれ。

「紅刃、お前の分もあるぞ」

「へ？」

そう言って遊星が俺に差し出したのは…

「……これ、デュエルディスクか？」

「ああ、そうだが」

幅が広めの日本刀を形をした黒と赤のデュエルディスクだった。

試しにデッキをセットし、腰にホルダーを取り付ける。居合抜きの要領で鞘から取り出し、虚空を斬る。何回か振り回した後、左腕に取り付け、ディスクを展開させる。そしてカードを5枚引く。すぐにカードを戻し、ディスクを変形させて鞘に納めた。

「……凄え。かなり馴染んでる」

「気に入ったか？」

うん、前言撤回するわ。

「ああ、最高だ。ありがとな」

刃の部分は真剣じゃないなまくらだ。万が一ミスをしても血を流す事はないだろう。

「デュエル以外の戦闘もあると言っていたからな。必要になる時が来るだろう。徹夜して作ったかいがあった」

それを聞いた瞬間、俺と月沙は遊星の肩を思い切り掴んだ。

「！？」

「遊星、ディスクを作ってくれた事には感謝するけど、今日は早く寝てくれ！」

「ほっといたら数日間一睡もしないでこっそり作業してるでしょ！その内過労死するから毎日ちゃんと睡眠を取って！」

「あ、ああ…気をつける」

俺達の気迫に圧されたのか、少したじろきながら合意してくれた。

ボゥゥン！！

「やあ、どうも」

そんなこんなの内に白い煙と共に神様（自称）が現れた。

「来たか」

「紅刃、月沙、準備はできてるかい？」

「もちろん！」

「ああ、いつでもいいぜ」

準備はもう済んでいる。後は過去へ向かうのみ！

「2人共、気をつけてね」

「悪い奴なんかこてんぱんにして来てよ！」

「あまり無理はしないでね」

「とっとと叩き潰して来い」

「離れていようが応援してるぜ！」

「お前達ならやれると信じている。頼んだぞ」

かつて共に戦った仲間達からの激励の言葉。どこか心にジンとくるものがあった。

「みんな…ありがとう！頑張るよ！」

「じゃあ、行ってくるぜ！」

「それじゃ、行くよ！」

ボォォオオン！！！

白煙が今度は俺と月沙も一緒に包む。視界は全て白で覆われた。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第1話　事件は唐突にやって来る（後書き）

いかがでしたか？

紅刃と月沙の設定は、物語がある程度進んだ後に公開します。

これから少しでも早く更新していく予定です。

第2話　相手は自分を知っていても自分は相手を知らなかったりする（前書き）

初のデュエルシーンです。
これって意外と時間がかかりますね…

それでは、第2話をどうぞ！

※２０１０年１０月１０日に修正しました。

第2話　相手は自分を知っていても自分は相手を知らなかったりする

ＳＩＤＥ／紅刃

今俺達は真っ白な空間の中に立っている。景色が動いているようには見えないけど、異空間の中を移動している途中らしい。

「さて、詳しい話をしておこうか」

少しの沈黙の後に神様（自称）が口を開いた。

「君達にはこれからデュエルアカデミアの入学試験を受けてもらう」

「入学試験？」

「筆記試験は、２人とも特別推薦って設定にしてあるから免除されてる。やるのは実技試験だけだから」

「設定ってどういう事だ？」

「神様をなめてもらっちゃ困るね。これくらいの情報操作は楽勝だよ」

要するにご都合主義かい。

「入学って事は最大で3年は滞在するんでしょ？私達の時代もちゃんと対策してくれてるんだよね？」

「さすがトリッパー、わかってるね。そこらへんは都合のいいようにしといてあるから安心していいよ」

ありがたいけど、また説明事項が増えたよめんどくさい。

神様（自称）が言う通り、月沙は異世界からやって来たいわゆるトリッパーらしい。俺達の活躍が単なるアニメとして放送されていて、デュエルもそこまで活発じゃない世界から来たという。

初めは信じられなかったけど、現にこいつはアニメで見た知識（月沙は原作知識と呼んでいる）を駆使して俺達を危険から何度も救ってくれてるわけだし、今は俺や遊星達も信じている。

ただ、そのアニメにはなぜか俺は登場していないらしい。まあ、俺はそんな事は気にしないし、どこの世界出身でも月沙は月沙だ。こんな事で見る目が変わるほど落ちぶれちゃいねえよ。

「あ、ちょっと聞いていい？」

「なんだい？」

「そのアカデミアの実技最高責任者の名前は？」

「クロノス・デ・メディチだよ」

「じゃあ、受験番号１１０番は？」

「遊城十代」

「へえ、なるほど…」

なにやら嬉しそうだ。そのクロノスや十代って奴を知ってるのか？

「紅刃、今回も私の原作知識が役に立ちそうだよ」

「って事はお前から見たアニメの世界か」

「月沙を選んだもう一つの理由はそれだよ。原作に出て来ない人物に的を絞れば見つけやすいからね」

なるほど、確かに未来を知っている月沙なら簡単に見つけられるかもしれない。

「そろそろ着くね。これ、君達の受験票。向こうで必要になるからね」

そう言って渡されたのは自分の受験票。番号は、俺がBで月沙がA。特別推薦だからか数字じゃなくアルファベットになっている。

受験票をズボンのポケットに入れると同時に、足元から例の白い煙が噴き出した。

煙が晴れると、眼前に巨大なドームが建っていた。

「なんだこれ？」

「試験会場の海馬ランドだよ」

海馬。俺も聞いた事がある海馬コーポレーションの社長、海馬瀬人の名字だ。よくこんなもんを造るよな…。

「僕ができるのはここまでだ。後は2人で頑張ってね」

「ああ、ありがとな」

「君達の携帯に一応僕のメアドと番号を登録しといたから、何かあったら連絡してね」

「「はい？」」

携帯を確認すると、確かに知らない名前が1つ入っている。さっきから散々神様（自称）って呼んでたけど、名前はフォッタ・トロッテというらしい。

「神様って携帯使うもんなんだな…」

「じゃあ、健闘を祈ってるよ」

ボゥウン！！

フォッタはそれだけ言い残すと、白い煙を上げて消えてしまった。

「それじゃ、中に入りましょ！」

月沙に先導されて俺もドームに足を運んだ。幸い、この一部始終を見ている人はいなかったから変な騒ぎにはならなかった。

「…まあ、こんなところか」

俺は今、トイレの個室に篭ってデッキ調整をしている。

というのもさっきフォッタから来たあるメールのせいでそうせざるをえなくなったからだ。

『さっき言い忘れたけど、この時代はまだシンクロ召喚のギミックがないからあまり多用しない方がいいよｆ＾＿＾；』

この一文のおかげで俺のサブデッキが使用不能になった。シンクロを使って初めて真価を発揮するのに、それを封じられちゃ決定打に欠ける。

しかし、このメールにはまだ続きがあった。

『それと、昔と未来とじゃ禁止・制限のリストが違うでしょ？この時代のリストを添付しといたから目を通しておいてね♪リストに合わせたカードは君達の持ち物に入れてあるからぜひ使ってね（ｏ＾－'）ｂ』

なんか手持ちのカードが増えてる気がしたのはお前が原因か。

で、そのリストを確認したわけだけど…

「…これはないだろ」

《死者蘇生》《強欲な壺》《天使の施し》…俺達の時代じゃ禁止カード扱いされているカードがわんさかある。これにシンクロなんて入れたらゲームバランスが崩壊するだろ。

なんて考えつつもせっかくだからそれらのカードも使わせてもらう事にする。相手も普通に使ってくるだろうしな。

試験で使うメインデッキをデュエルディスクにセットし、荷物をまとめて個室を出た。念のため手も洗っておく。

《受験番号A番の方、会場にお越しください》

A番…月沙の事か。あいつの切り札ってシンクロモンスターだよな?大丈夫なのか?

少し心配しながら廊下に出ると、一瞬思考が止まった。

『A番…次が紅刃の番か』

『どうしたの?何か心配事でも?』

『いや、過去のデュエルなんて勝手がわからんからな。むしろ楽しみなくらいだ』

そりゃ、仮面っぽいものを付けている黒服と赤い布を纏った男と兜を被った赤い服の女が剣を携帯して話しているのをみたら驚くだろ?

てか今こいつ俺の名前を言ったよな?なぜ知ってる?

とりあえず、この不審者は無視して会場に向かうか。

「……」

『……』

『……』

何だこいつら、なんでついて来るんだよ？めちゃくちゃ怪しいんだけど俺にどうしろと？しかも剣を抜き身で持ってるって事は俺を殺す気か？

…よし、ここは…。

俺はディスクの柄に手を掛け、振り向き様に抜き放った。男はそれに反応し、自分の剣を持ち上げる。

ギィン！！

廊下に金属音が響く。

男は剣を盾にして俺の攻撃を受け止めていた。この不意打ちに反応するか…相当場数を踏んでいるな。

俺は一旦後ろに飛び退き男と距離をとった。

「さっきからついて来てるだろ？何者だ？」

いつ戦闘になってもいいように、右手はディスクを握りしめている。

『な…！？』

『これは…！』

ん、何だこいつら？かなり驚いてるけど…今の俺の行動がそんなに信じられないのか？

『…何者だ、と言ったな。お前のデッキを見ればわかる』

男は剣を下ろして質問してきた。

「は？なんでお前らと俺のデッキが関係…」

ん？デッキ？

待てよ、こいつらどこかで見た気が…。

俺はディスクを鞘に納めてデッキを取り出した。中身を少し確認した後、１枚のカードを取り出した。

取り出したのはモンスターカード。イラストには目の前の男と同じ人物が写っている。

カードの名前は…

「《冥府の使者ゴーズ》…？」

『当たりだ。まさかこうしてお前と話す日が来るとはな』

両腕に2対の刃を携え一振りの剣を手に持っている男――ゴーズは、口元を少し緩めて答えた。

「て事は、そっちはカイエンか？」

『はい。こうしてお会いできて光栄です』

隣にいる女は、ゴーズのモンスター効果で呼び出されるモンスター、《冥府の使者カイエントークン》ことカイエンだ。

『俺達は一応お前の精霊だ。精霊の事は知ってるだろ？』

「ああ。要するに居候みたいなもんか」

『はい。貴方に私達の姿が見えなくても、いつも貴方の側で共に戦って来ました』

ゴーズはたとえデッキとの相性が悪くても必ず投入しているカードだ。このカードを預かってからいつでも共に戦って来たし、何度もピンチから救ってくれた。今じゃ俺にとっても大切な相棒だ。

『おそらく、過去に飛ばされたことでお前の力に強い影響が出たみたいだな。ここに来るまでに通った空間は精霊世界と同じ感覚があったから、それが原因だろう』

あの辺り一面真っ白な空間を思い出す。フォッタには感謝しないとな。

「そっか…。ま、これからもよろしく頼むぜ！」

『ああ！』

『ええ、よろしくお願いします！』

俺はカードをしまい、２人と堅く握手を交わした。お互い自然と笑みがこぼれていた。

《受験番号Ｂ番の方、会場にお越しください》

「やべ、もう俺の番か。急ぐぞ！」

『俺達はカードに戻る』

『頑張りましょう！』

ゴーズとカイエンはそれぞれ黒と白の光になってデッキにあるゴーズのカードに吸い込まれていった。カードに宿るってこういう事か。

俺は会場に向かって全力で走り出した。

広場に出ると、眼前にはデュエルフィールドが広がっていた。で、今俺がいるところは観客席。どうやら道を間違えたらしい。

「来ませんね…」

試験官らしき人が腕時計を見ている。今から下に行く道を探している暇はないな。なら取るべき行動はただひとつ！

「特別推薦だからと言って優遇する気はないノーネ。よって受験番号Ｂ番は失格ｎ「ちょっと待ったぁ！！」？」

声を遮り、俺は観客席から思い切り跳躍した。

「な！？」

「えっ！？」

「はあ！？」

「い〝っ！？」

周りが驚きの声を上げている中、フィールドの中央に着地した。

「受験番号Ｂ番真川紅刃、ただいま到着しました！」

試験官の人達、口をあんぐりって感じに開けてるよ。時間がないし、これしか方法がなかったんだからしかたないだろ？

「いや、ちょっと道に迷ってなぜか観客席に出て来ちゃって。道を探してる時間もないからこうして飛び降りてきたわけですけど…」

「フフ、相変わらずだね」

声のした方を見ると、月沙がいた。俺の事を知ってるから、平然としている。

「月沙！試験どうだった？」

「もちろん勝ったよ。楽勝楽勝♪」

月沙が試験官の１人を見ながら明るく答えた。そのクリーム色のおかっぱ頭をした試験官は額に青筋を立てて月沙を睨みつけている。あの人が月沙の相手をしたのか。

月沙は俺に近寄ると、小声で話し掛けた。

「あの人がここに来る時に言ったクロノス先生だよ。多分、十代と私に負けた腹いせで勝負してくるだろうから気をつけてね」

「腹いせて…面倒な事になりそうだな」

「切り札さえ封じれば何とかなるから」

「アドバイスサンキュ。でもわざわざ挑発しなくてもいいだろ」

「この頃はまだろくでなしだから、これくらいやっても罰は当たらないよ。じゃ、頑張ってね」

月沙は観客席に戻るべくこの場を去った。さて、まずは試験をクリアしないとな。

「ええと、俺の相手は…」

「私がするノーネ」

位置についたのはクロノス先生だった。

「その度胸に免じて、実技最高責任者のこの私が直々に相手をしてあげるノーネ」

何も免じてねえだろ、難易度上がってんぞオイ。にしても、奇妙な喋り方だな。

「それじゃ、よろしくお願いします」

俺は鞘からデュエルディスクを引き抜き、馴れた手つきで左腕に装着し、ディスクを展開させた。

「さっきのガンナーガールといい、生意気なディスクを使うノーネ」

ガンナーガールって…ああ、月沙の事か。そして、あいつがろくでなしって言った理由がわかった気がする。遊星が作ってくれたデュエルディスクを生意気だ?自分もエレキギターみたいなディスクを使ってるくせに馬鹿言ってんじゃねえよ!

「それでは、実技試験最終試合を始めるノーネ」

「お願いします!」

「「デュエル!」」

紅刃ｖｓクロノス

「先攻は譲るノーネ」

「じゃあ、遠慮なく。俺のターン！」

手札は…悪くないな。

「俺は、《豊穣のアルテミス》を召喚！」

ディスクのモンスターカードゾーンに手札のカードを1枚置く。
すると、フィールドに紫のマントをつけた奇妙な姿の天使が現れた。

《豊穣（ほうじょう）のアルテミス》
効果モンスター
星４／光属性／天使族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１７００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、カウンター罠が発動される度に自分のデッキからカードを1枚ドローする。

《豊穣のアルテミス》　ＡＴＫ／１６００

いつも思うけど、ソリッドビジョンシステムって凄いな。立体映像でここまで迫力を出せるなんてさ。

「リバースカードを2枚セットし、ターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×２

「アルテミス…パーミッションデッキとは、嫌らしいデッキを使うノーネ」

パーミッション。大量のカウンター罠で相手の行動を妨害し、場を有利に運ぶデッキだ。ただ、このデッキは手札消費が激しいから、アルテミスのようなドロー補助のカードが重要になる。

「生憎、これが俺のメインデッキなんでな」

「そんなデッキ、すぐに叩き潰してやるノーネ！私のターン、ドローニョ！」

「リバースカードオープン、《強烈なはたき落とし》！相手がデッキからカードを手札に加えた時、そのカード1枚を墓地に送る！」

「なっ！？」

《強烈なはたき落とし》
カウンター罠
相手がデッキからカードを手札に加えた時に発動する事ができる。
相手は手札に加えたカード1枚をそのまま墓地に捨てる。

「さあ、引いたカードを捨ててもらいますよ」

「ググ…！」

墓地に送られたのは《古代の機械兵士》か。先生のデッキは【古代の機械】かよ…。

《古代の機械兵士（アンティーク・ギアソルジャー）》
効果モンスター
星4／地属性／機械族／ＡＴＫ1300／ＤＥＦ1300

このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。

古代の機械シリーズのモンスターはたいてい攻撃時に魔法・罠の使用を封じる効果を持っている。攻撃反応系の魔法・罠が丸ごと使えなくなるから厄介なんだよな…。そっちも充分嫌なデッキ使ってんじゃねえか。

「カウンター罠が発動した事により、アルテミスの効果でカードを1枚ドローする」

「私は《トロイホース》を召喚するノーネ！」

クロノス先生のフィールドに巨大な木馬が現れる。

《トロイホース》
効果モンスター
星４／地属性／獣族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１２００
地属性モンスターを生け贄召喚する場合、このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

《トロイホース》　ＡＴＫ／１６００

「魔法カード発動、《二重召喚》！このターン、通常召喚を2回行う事ができるノーネ！」

《二重召喚（デュアルサモン）》
通常魔法
このターン自分は通常召喚を2回まで行う事ができる。

《トロイホース》は自身だけで地属性の最上級モンスターを呼び出せるサポートモンスター。《二重召喚》を使ってきたって事は、このターンで仕掛ける気か？

『切り札さえ封じれば何とかなるから』

月沙のアドバイスを思い出す。確かにそれが一番だけど、今の俺の手札なら…。

「罠カード、《亜空間物質転送装置》！自分のモンスター1体をエンドフェイズまでゲームから除外する！」

《亜空間物質転送装置（あくうかんぶっしつてんそうそうち）》
通常罠
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、発動ターンのエンドフェイズ時までゲームから除外する。

「俺はアルテミスを除外！」

ごつい機械が現れ、アルテミスに光線を当てる。次の瞬間には、アルテミスは跡形もなく消え去っていた。

「アルテミスを守るためにわざわざ場をがら空きにするトーハ、プレイミスもいいところナノーネ！」

馬鹿にしたように笑うクロノス。観客席からもあいつ馬鹿だとかとんだ雑魚だとかいう声が聞こえてくる。気にするな、今にわかるさ。

「《トロイホース》は地属性モンスターを生け贄召喚する時、2体

分の生け贄とする事ができるノーネ！《トロイホース》を生け贄に、《古代の機械巨人》を召喚するノーネ！」

トロイホースが光となって消えていき、代わりに巨大な機械兵が地を踏み締めた。

《古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）》
効果モンスター
星８／地属性／機械族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ３０００
このカードは特殊召喚できない。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。

《古代の機械巨人》　ＡＴＫ／３０００

あいつ終わったな、かわいそうに、そんな声が聞こえる中、機械巨人が俺を見下ろしている。

「……」

「行くノーネ！《古代の機械巨人》でダイレクトアタック！アルティメット・パウンド！」

機械巨人が俺を思い切り殴りつける。攻撃は何の抵抗もなく炸裂した。

紅刃　ＬＰ／４０００→１０００

「全然たいしたことないノーネ！この程度で我が校に入ろうなど笑止千万ナノーネ！」

もう勝ったつもりになっているクロノス先生。思わず溜息をつきそうになる。

「…先生、俺がただアルテミスを守るためだけにフィールドを空にしたと思ってんのか？」

「？」

その時、俺のフィールドに巨大な黒い穴が開いた。

「な、何デスーノこれは！？」

「自分フィールド上にカードが存在しない時にダメージを受けた時、こいつを手札から特殊召喚できる。来い、《冥府の使者ゴーズ》！！」

俺の呼ぶ声に応じるかのように、黒い穴からゴーズが飛び出した。装備品の刃が鈍い光を放っている。

《冥府（めいふ）の使者ゴーズ》
効果モンスター（制限カード）
星７／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ２７００／ＤＥＦ２５００
自分フィールド上にカードが存在しない場合、相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
この方法で特殊召喚に成功した時、受けたダメージの種類により以

下の効果を発動する。
●戦闘ダメージの場合、自分フィールド上に「冥府の使者カイエントークン」（天使族・光・星7・攻／守?）を1体特殊召喚する。このトークンの攻撃力・守備力は、この時受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。
●カードの効果によるダメージの場合、受けたダメージと同じダメージを相手ライフに与える。

《冥府の使者ゴーズ》　ＡＴＫ／２７００

「ゴーズの効果発動！戦闘ダメージを受けて特殊召喚された時、受けたダメージと同じ攻守を持つ《冥府の使者カイエントークン》を特殊召喚する！来い、カイエン！！」

黒い穴からもう1人、カイエンが飛び出した。カイエンが地に着くと同時に黒い穴が閉じた。

《冥府の使者カイエントークン》　ＡＴＫ／３０００

「たった1回の攻撃で、2体の最上級モンスターを召喚、しかもその内1体は我が古代の機械巨人と同じ攻撃力のモンスター…」

会場が驚きの声に包まれる。さっきとはえらい違いだな。

『今回は出番が早いな』

『次のターンで決着をつける気ですか?』

「そのつもりだ。2人共、頼んだぜ！」

ゴーズとカイエンは軽く頷き、倒すべき敵を見据えた。さあ、反撃開始だ！

「ぐぅ…カードを1枚セットしターンを終了するノーネ（伏せたのはミラーフォース。これで相打ちを狙って来ても一掃できるノーネ）」

《聖なるバリアー ミラーフォース ー》
通常罠（制限カード）
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「エンドフェイズ時に《亜空間物質転送装置》で除外されたアルテミスがフィールドに帰還する」

ゴーズの隣から強い光が放たれ、中からアルテミスがフィールドに戻って来た。

《豊穣のアルテミス》　ＡＴＫ／１６００

クロノス
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《古代機械の機械巨人》（ＡＴＫ／３０００）
魔法・罠／リバース×１

「俺のターン！手札から《サイクロン》発動！相手の魔法・罠を１枚破壊する！」

「んなっ！？」

リバースカードの真下から小規模の嵐が巻き起こり、リバースカードを破壊した。リバースはミラーフォースか…今のドローで《サイクロン》を引けてなかったら危なかったな。

《サイクロン》
速攻魔法（制限カード）
フィールド上の魔法または罠カード1枚を破壊する。

「バトル！カイエンで古代の機械巨人に攻撃！」

カイエンが剣を片手に飛び上がる。

「やはり相打ち狙いなノーネ！」

「誰が相打ちだなんて言った？」

「え？」

「手札から《オネスト》を墓地に送り効果発動！自分の戦闘を行う光属性モンスターの攻撃力を、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分アップさせる！カイエンは光属性で古代の機械巨人の攻撃力は３０００！よって攻撃力は６０００だ！」

《冥府の使者カイエントークン》　ＡＴＫ／３０００→６０００

「な、何でスート！？」

「行け、カイエン！オネスティ・レイジング・ブラッシュ！！」

『覚悟！ハァアア！！』

カイエンの背中から、オネストが持つ白い翼が生える。その翼をはためかせ、上空から金色の光を纏った剣で機械巨人を両断した。機械巨人は爆発を起こし、粉々に砕け散った。

クロノス　ＬＰ４０００→１０００

「マンママミーヤ！我が古代の機械巨人が！？」

「終わりだ！ゴーズでダイレクトアタック！エミサリーブラッシュ！！！」

『喰らえ！』

ゴーズが闇色の光を纏った剣を構え、爆発で発生した煙を突き抜ける。そしてクロノス先生の目の前に飛び込み、剣を横に凪いで一閃した。

「ぺ～ぺロンチ～ノ！？」

奇妙な悲鳴を上げて膝をつくクロノス先生。ゴーズ達は満足そうな表情を浮かべて勝敗の決したフィールドから文字通り姿を消した。

クロノス　ＬＰ／１０００→　０
紅刃　ＷＩＮ

「…え、え～、勝者、受験番号Ｂ番！」

「ありがとうございました！」

試験官が止まっていた思考を再び動かして勝敗を告げた。俺は礼を言ってからカードを全てデッキに戻し、ディスクを元の刀の形に戻して鞘に納めた。ディスクと鞘がキンッと澄んだ音を立てて一体化する。

「凄ぇ…」

「あのクロノス教諭を先攻2ターン目で倒した…」

「フン、ただのまぐれに決まっている！」

会場がざわつき始めた。これ以上ここにいてもしかたないか。

「こ、この私が…3回連続で負けるなンーテ…」

ショックから立ち直れていない教官の呟きを無視して、俺は広場を後にした。

「紅刃～！」

廊下を歩いていると、月沙が俺に駆け寄って来た。後ろには知らない奴が3人ついて来ている。

「月沙！」

「試験、上手くいったね！まさか封じるどころか逆に利用するなんてね」

「確かに俺のデッキは【パーミッション】だけど、攻撃も普通にできるからな」

「君のデュエルは見せてもらったよ」

月沙について来た3人の内の1人が会話に入って来た。

「相手の動きを封じる【パーミッション】を使っていながら、相手の切り札を封じるどころか逆に利用して布陣を整え、相手の切り札を凌駕するほどの攻撃力で一気に仕留める。それだけではなく、あえて場をがら空きにする事で油断を誘うとは…正に非の打ち所のない良いデュエルだったよ」

思わずポカンとしてしまった。やたら細かく分析されてるな…知識は相当あるようだ。

「あ、ああ、サンキュな。俺は真川紅刃だ。お前は？」

「紅刃か。俺は三沢大地。よろしく頼むよ」

三沢と名乗った黒髪の男と握手を交わす。多分、こいつは合格間違いなしだな。

「ところで月沙、三沢達とはどういった経緯で知り合ったんだ？」

「たまたま観客席で会っただけだよ。紅刃の友達っていうのもあるけどね」

「あ、僕は丸藤翔ッス！よろしくッス！」

「俺は遊城十代！お前のデュエル、すっげえワクワクしたぜ！」

眼鏡を掛けた少年、翔と元気はつらつな茶髪の少年、十代が自己紹介をしてきた。十代って月沙が言ってた１１０番の奴か。月沙の奴、知ってて近づいたな。

「ああ、サンキュ。よろしくな」

「さっき3人から試験の出来を聞いたけど、みんな合格圏内みたい」

「そっか。お前ら筆記はどうだった？俺と月沙は特別推薦だから受けてないけど」

「問題ない。自信はあるよ」

「僕は最下位ッス…」

あらら、お気の毒に…。

「俺は「１１０番だから筆記は最低クラスだよ」ちょ、月沙！？」

「受験番号は筆記試験の成績が良かった順に1番から割り振られるの。今回は１１９番までだよ」

「ああ、なるほど。十代は実技に力が偏りすぎてるんだな」

「あ、ああ！だから実技で筆記の分も頑張れば何の心配もいらない

ぜ！」

今絶対動揺したな。顔が少し引きつってたぞ。

「筆記がどれくらいのレベルかは知らねえけど、実技だけでやっていけるほど世の中は甘くないと思うぜ？」

「だったらそれを成し遂げてやればいいだけの話だろ？俺ならできる！」

開き直ったな、こいつ。その自信はどこから出て来るんだ？

「ま、なんにせよ、ここにいるメンツは全員合格だろ。これから同じ学園の生徒になるんだ、お互い頑張ろうぜ」

「ええ！」

「ああ！」

「はいッス！」

「当然だ！」

仲間でもありライバルでもある俺達５人は、新たな決意を胸に秘めて互いの健闘を祈った。

「あ、十代はこの時代の主人公だから」

「マジで！？」

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第2話　相手は自分を知っていても自分は相手を知らなかったりする（後書き）

どうでしたか？

この小説では、初登場のカードはテキストの詳細を載せる事にしています。自分なりには頑張ったつもりですが、気になる箇所があれば感想で指摘してください。

第3話　切り札は黒き冥王（前書き）

今回は万丈目の取り巻きとのデュエルです。後、精霊が何体か出て来ます。

それでは、どうぞ！

第3話　切り札は黒き冥王

ＳＩＤＥ／紅刃

俺達は今、フェリーに乗っている。

なぜかって？アカデミアが海の上にある孤島に建設されてるからだ。

なんでわざわざ海のど真ん中に建てる必要があるのかわからないけど、何かしら事情があるんだろう。

島はもう見えるくらいには近づいている。俺は船内の一室の窓からその様子を見ていた。

すると、数回ドアをノックする音が聞こえた。

「紅刃、いる？」

「月沙か？今開ける」

ドアを開くと、月沙と十代がいた。俺はとりあえず2人を部屋に入れた。

「翔と三沢はいないのか？」

「秘密の話だから、２人には席を外してもらったの」

「そういう事。精霊が見えない奴の前じゃ話せないからな」

「って事は精霊絡みの話か」

確かに、精霊が見えない上に声も聞き取れない人間からしたら、精霊と話をしている人間は不審者にしか見えないな。

「お前の精霊、ゴーズとカイエンって言ったっけ？試験で見たからすぐにでも話をしたかったんだけど、月沙に止められてさ」

「翔君と三沢君に変に思われるからよ」

なるほど、こいつならやりかねない。月沙に感謝だな。

「ゴーズ、カイエン、いるか？」

俺がデッキに呼び掛けると、ゴーズとカイエンが出てきた。

『呼んだか？』

「おお、出てきた！」

『？俺達が見えるのか？』

「ああ！俺は遊城十代、よろしく！」

『クリクリ～』

十代の自己紹介の後に、天使の羽を持った茶色いモンスターが出て来た。

『そちらは？』

「ああ、こいつか？俺の相棒のハネクリボーだ！」

『クリ～』

十代の精霊はハネクリボーか。

「じゃあ、次は私ね。スイレン、出て来て！」

月沙がそう呼ぶと、紫色のマフラーを首に巻いた女の子が現れた。

『お呼びですか、姫様？』

「『姫様』？」

「紅刃が精霊が見えるようになったの」

『ええっ！？本当ですか！？』

「ああ、見えてるぞ。お前は《氷結界の舞姫》か？」

『は、はい、そうです！』

「十代も精霊が見えるから、２人に挨拶してあげて」

『はい！私は《氷結界の舞姫》のスイレンと申します！名前は姫様からいただきました！』

「おう！俺は遊城十代、よろしくな！」

「こちらこそ。名前は言うまでもないよな？」

『はい、真川紅刃様ですよね？初めて姫様とお会いした時からいたから知っていますよ』

って事は、少なくとも中学の初めからはいたのか。

「え？お前ら知り合いじゃないのか？」

「俺が精霊が見えるようになったのはあの試験の日だ。だから、俺から見れば会うのは初めてなんだ」

「そうだったのか…」

「ところで、名前をつけてもらったのはカード名のままじゃ呼びづらいからだとして、なんで月沙を『姫様』って呼ぶんだ？」

むしろ自分が『姫』だろ。

「氷結界の一族にとって、私はお姫様みたいな存在なんだって」

他称姫様が苦笑まじりに答える。

『姫様は、前に私達の一族を滅亡の危機から救ってくれました。なので、みんな姫様の事をとても慕っておられるのですよ』

さらりと物凄い事実を言いやがった。こいつらは精霊界で一体何をやらかしたんだ？

「え？一体何があったんd」

「あ、そうそう、紅刃には後2人精霊がいるのよ」

説明するのが面倒になって話をずらしたな。ってちょっと待て。

「え、後2人？」

「今は精霊界に用事があって出かけてるけど、近い内に戻ってくるんじゃないかな？」

「それってどんな奴だ？」

「秘密。ただ、ゴーズとカイエンよりも前から一緒にいたモンスター達だよ」

「へ～。どんな奴か、今から楽しみだな！」

まるで精霊のバーゲンセールだな。某サ〇ヤ人じゃないけど。

でも、ゴーズ達より前からいる精霊か…気になるな。ま、その時になればわかるか。

『それにしても、お前ら完全にばらばらの階級になってしまったな』

ゴーズの言う通り、アカデミアには階級制度がある。

高等部編入組で成績の悪い奴らで編成されたオシリス・レッド、高等部編入組の中では優秀なラー・イエロー、そして中等部から上

がった優秀な奴らで構成されているのがオベリスク・ブルーだ。

十代は筆記試験が最下位だったからオシリス・レッドの赤い制服、筆記免除で実技がずば抜けて（自分で言うのもなんだけど）いる俺はラー・イエローの黄色の制服、女子の月沙はオベリスク・ブルーの白を基調にして青のラインが入った制服を着ている。

女子はレベルに関係なくオベリスク・ブルーに入れられる。周りについて来れなかったらどうする気だ？ちなみに、ブルー男子の制服は青いコートだ。制服としてはアブノーマルな気がする。

「俺はこれ気に入ってるぜ？情熱の赤は俺にピッタリだ！」

「俺は自分で黄色の服を着るのはあまり好きじゃないんだよな…せめて少しでも早く昇格したいな」

「早く上がって来てね！待ってるから」

「ああ、サンキュ」

俺に黄色は合わない。これなら別の階級に入れてほしかったな。

島に着いた後、先生達のお出迎えがあったけど、校長先生の長話は軽く聞き流した。やっぱこれってお約束なのか？

で、今はラー・イエローの寮にいる。外観や部屋は悪くない。住

む分には困らないな。

俺の部屋は1人部屋だ。フォッタのメールや精霊との話を見られる心配がないから、これは都合がいい。

とりあえず、今日は時間が充分あるから荷物の整理をしている。

木刀は鍛練用にして部屋に置いとくか。デュエルディスクが剣の役割を果たしてるし。

デッキは常にメインとサブの両方を携帯する。

このサブデッキは、本来使う気はないのに、父さんに「この道場の人間ならこれを使え！」って無理矢理持たされた物だ。剣がテーマのデッキだけど、シンクロが主体だからこの時代じゃ基本使えない。かと言って部屋に置きっぱなしにすると、万が一盗まれたら後が面倒だ。気が進まないが、持ち歩く以外には選択肢がない。

え、木刀はどうすんだって？わざわざ木刀なんかを盗む奴なんていねえよ。

さて、後は暇だし、散歩でもするか。

ブルー寮の辺りを通ったけど、何だあれ。もはや宮殿じゃねえか。格差付ける意味あるのか？

「何だよ、使わせてくれたっていいじゃねえか！」

ん？あれは十代と翔？ブルーの生徒２人と揉めてるな。

「十代、翔、どうした？」

「あ、紅刃！聞いてくれよ、こいつらがデュエルフィールドを使わせてくれないんだ！」

「は？」

「最新設備のフィールドを見つけたから使おうとしたんだけど…」

「上を見ろ」

「上？」

上を見る。なんかオベリスク・ブルーの紋章がある。

「ここはオベリスク・ブルーの所有地だ。お前達ごときが使っていい場所じゃｎ「よかったな～２人共、喜んで使わせてくれるってさ」何！？」

「貴様、何勝手な事を言っている！」

「そ、そうだよ紅刃君！ここは大人しく帰ろうよ」

翔が止めに入る。悪いけど、引くつもりはさらさらない。

「翔、お前らは悪くねえよ。ブルーだからなんでもやっていいわけ

じゃないだろ？フィールドひとつ使うのにいちいちブルーに頭下げて許可を取る必要がどこにある？どうしても使わせてくれないってんならそこのブルー生徒とデュエルすればいい。それならお互い文句ねえだろ？」

「お、ナイスアイデア！よし、そこのお前、デュエルしようぜ！」

「な、何ふざけた事を！？」

「ふざけてんのはお前らの方だろ。誰がここを使おうと自由じゃねえか」

少しいらついた調子で反論してやる。なんでこう話がわかんねえかな？

「あ！お前ら、よく見たら１１０番と『剣のＢ番』じゃないか！」

「何！？」

こいつら、俺達の事知ってるのか？

「受験番号はいいとして、何だその『剣のＢ番』って？」

「それは…」

「お前達、何をしている？」

話を遮ってまたブルー生徒が出て来た。なんか鳥っぽい頭をしている。

「あ、万丈目さん！」

「む、貴様らは１１０番と剣のＢ番！」

「いや、だからその剣のＢ番って何よ？」

「自分の噂も知らんのか？今年の実技試験の最終試合で、観客席から飛び降りて登場したあげくクロノス先生を3ターンで倒した、剣の形のデュエルディスクを持つ男、つまりお前の事だ」

「もうちょい呼びやすい肩書きはなかったのか？」

「知るか。後、オベリスク・ブルーに『銃のＡ番』が入って来たらしいな」

誰だか簡単に予想がつくな。

「一応聞くけど、どんな奴だ？」

「クロノス先生から1ダメージも受けずに倒した、銃の形のデュエルディスクを持つ女らしいが、貴様は何か知っているのか？」

「そりゃあ、俺の親友だからな」

「何だと！？」

てか月沙はそんな事したのか。さてはロックでもかけたな？

「なあ、話してる途中悪いんだけどさ、お前誰？」

あ、そういやそうだ。俺こいつの事知らないじゃん。

「お前達、この方を知らないのか！？」

「中等部を首席で卒業した、未来のデュエルキングと呼び声高い万丈目準さんだぞ！？」

「知らんわ」

即答。それ以外に返事のしようがないし。

「おかしいな」

「何がだ？」

「デュエルキングって1番って事だろ？この中で1番は俺だからさ」

「「何！？」」

自信満々だな、おい。ま、俺も負ける気はしないけどな。

「ちょうどいいや。十代と万丈目でデュエルすればいいだろ」

「万丈目『さん』だ！いいだろう、どちらが上かわからせてやる！」

「面白そうだな。よし、行くぜ！」

ディスクを展開する十代と万丈目。月沙の言ってた通り十代が主人公なら、ここで負ける事はまずないだろう。

「あなた達、何をしているの！？」

何だ？また誰か来たよ。これ以上話をこじらせないでくれ。

「天上院君！？」

来たのは天上院と呼ばれた金髪の女子生徒と月沙だった。

「月沙？」

「あ、紅刃いたの？」

「な、貴様は銃のＡ番！？なぜここに！？」

「それ聞くの何回目かな…？明日香さんと知り合って一緒に歓迎会に行こうとしたら見かけただけだけど？」

ぼやいてるところを見ると、月沙もあまり気に入ってはいないみたいだな。まあ、俺も月沙もそれぞれ剣と銃のデュエルディスクを納めたホルダーを装備してんだし、嫌でも目立つか。

「で、何してるの？」

「何、世間知らずなレッドとイエローの生徒に少々学園の厳しさを教えてあげようと思ってね」

世間知らずはお前の方だろ。あ、言い忘れてたけど、翔はオシリス・レッドで三沢はラー・イエローに入っている。

「もうすぐ歓迎会が始まるから、早く行った方がいいんじゃないか

しら？」

「ちっ。お前達、引き上げるぞ！」

「「はい！」」

去っていく万丈目達。なんか嫌な感じの奴らだったな。

「挑発には乗らない方がいいわよ。あいつらろくでもないんだから」

「ま、気をつけとくよ。ところで、お前は？」

「天上院明日香。呼びづらいだろうから明日香でいいわよ」

「そうか。俺は真川紅刃。よろしくな、明日香」

「月沙もそうだけど、紅刃も面白いディスクを持っているのね」

「ああ、これか。メカにやたら強い友人がいてさ、護身用って事で作ってくれたんだ。月沙のも同じだ」

「やっぱり、それは武器にもなるのね…」

「悪いようには使わないさ。じゃ、俺は歓迎会に行ってくるから、また今度な」

「うん、またね！」

明日香達に別れを告げて、自分の寮に向かった。十代達は寮が違うから連れはいなかった。

歓迎会の後、部屋に戻って寝ようとすると、アカデミアからもらった電子手帳にメールが来た。

『やぁ、剣のＢ番。午前０時にデュエル場で待っている。互いのベストカードを賭けたアンティルールで決闘だ。勇気があるなら来るんだな。ｂｙ方丈目』

「めんどくさ…」

『紅刃、どうする？』

『行かなければ後々面倒な事になりそうですけど…』

ゴーズとカイエンが出て来て俺の判断を仰ぐ。

「カイエンの言う通りだな。後で馬鹿にされんのも癪だし、行ってやるとするか」

そうと決まれば、さっさと行くか。俺はホルダーを付け直し、バッグを背負って部屋を出た。

目的地に向かう途中、十代と翔に会った。

「あ、紅刃君！」

「お前らも万丈目に呼び出されたのか？」

「ああ！デュエルならいつでも受けて立つぜ！」

「お前らしいな。よし、行くか！」

デュエル場に着くと、万丈目と昼間の連中が待っていた。

「ほう、逃げずに来たか」

「逃げる理由がないからな」

めんどくさいって事以外はな。

「まあ、まぐれでも手加減をしたであろうクロノス先生に勝った奴らだ。敬意を示して全力で潰させてもらうとしよう」

「実力さ！」

「初っ端から切り札召喚しといて何が手加減だ。それに、カードが応えてくれたから勝てたんだ」

「フン、戯れ事を。遊城十代、お前の相手はこの俺だ。真川紅刃は…」

「万丈目さん、こいつは俺にやらせてください！」

「そうか、好きにしろ」

丁度いい。いっぺんぶっ飛ばしておく必要があると思ってたところだ。

「あ、いたいた」

と、そこで月沙と明日香が来た。月沙が来たって事は、これは原作とやらの流れに入っている可能性が高いな。

「貴方達、時間外のデュエルは禁止されているはずよ！」

「明日香、言わなくていい」

「紅刃？」

「こんな時間に禁止されているアンティルールでデュエルをしようだなんて二度と考えられないようにしてやるから、今回だけは見逃してくれ」

そう言いつつデュエルディスクを展開させた。デッキが自動的にシャッフルされる。

「大丈夫。紅刃は凄く強いし、十代も実力があるからゆっくり観戦しよ？」

「…ふぅ、仕方ないわね」

「悪いな、明日香」

「話は済んだか？それと、これはカードじゃなくデッキその物を賭けたアンティデュエルだ」

「構わねえよ」

さて、始めるか！

「「デュエル！！」」

紅刃ｖｓＢ生徒１

「俺のターン、ドロー！俺は、《ゴブリン突撃部隊（とつげきぶたい）》を召喚！」

なんか武器を持った緑色のゴブリン達がたくさん出てきた。

《ゴブリン突撃部隊》
効果モンスター
星４／地属性／戦士族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ　０
このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になり、次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない。

《ゴブリン突撃部隊》　ＡＴＫ／２３００

「カードを２枚セットし、ターンエンドだ！」

Ｂ生徒１
ＬＰ／４０００
手札／３

モンスター／《ゴブリン突撃部隊》（ＡＴＫ／２３００）
魔法・罠／リバース×２

いきなり攻撃力２３００か…。まあ、この手札なら関係ないか。

「俺のターン！まず、《サイクロン》を発動！リバースカードを１枚破壊する！」

「ちっ！」

破壊したのは同じ《サイクロン》…さすがに汎用性が高いな。

「そして、フィールド魔法《天空の聖域》を発動！」

周りが天空に浮かぶ天使達のホームグラウンドに変わる。ソリッドビジョン凄えなオイ。

《天空の聖域》
フィールド魔法
天使族モンスターの戦闘によって発生する天使族モンスターのコントローラーへの戦闘ダメージは０になる。

「《天空の聖域》の効果で、天使族は戦闘ダメージを受けない！さらに、《天空聖者メルティウス》を召喚！」

俺の場に、オレンジの鎧を纏った白い結晶なような天使が現れた。

《天空聖者（エンジェルセイント）メルティウス》
効果モンスター
星４／光属性／天使族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１２００

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、カウンター罠が発動される度に自分は１０００ライフポイント回復する。さらにフィールド上に「天空の聖域」が存在する場合、相手フィールド上のカード１枚を破壊する。

《天空聖者メルティウス》　ＡＴＫ／１６００

「カードを２枚セットし、ターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《天空聖者メルティウス》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／《天空の聖域》・リバース×２

「攻撃力が低いのにわざわざ攻撃表示で出すとは、まだまだ甘いな。俺のターン、ドロー！《ヂェミナイ・エルフ》を召喚！」

《ヂェミナイ・エルフ》
通常モンスター
星４／地属性／魔法使い族／ＡＴＫ１９００／ＤＥＦ　９００
交互に攻撃を仕掛けてくる、エルフの双子姉妹。

《ヂェミナイ・エルフ》　ＡＴＫ／１９００

双子の姉妹のこのモンスター、効果はないけど攻撃力は高めだからなかなか侮れない。

「そして装備魔法《デーモンの斧》を《ヂェミナイ・エルフ》に装備！装備モンスターの攻撃力を１０００ポイントアップさせる！」

姉妹の１人が不気味なデザインの斧を持った。２本用意するとかはしないのな。

《デーモンの斧（おの）》
装備魔法
装備モンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする。
このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分フィールド上に存在するモンスター１体をリリースする事でデッキの一番上に戻す。

《ヂェミナイ・エルフ》　ＡＴＫ／１９００→２９００

「さあ、やれ！《ゴブリン突撃部隊》でメルティウスに攻撃！」

ゴブリン達が一斉に襲い掛かる。何もしなかったら多分集団リンチだな。

「ったく、罠だって事に気づけよ。リバースカードオープン！カウンター罠《攻撃の無力化》！相手モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる！」

《攻撃の無力化》
カウンター罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手モンスター１体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

バリアが張られ、ゴブリン達が弾き飛ばされる。

「ちっ、防がれたか」

「ただ防いだだけだと思ってるのか？」

「何？」

「メルティウスの効果発動！カウンター罠が発動された時、ライフを１０００回復する」

紅刃　ＬＰ／４０００→５０００

「さらに《天空の聖域》がフィールド上にある場合、相手のカードを1枚破壊する！」

「何だと！？」

「当然、《ヂェミナイ・エルフ》を破壊！カウンター・フラッシュ！」

メルティウスが双子に向けて閃光を発すると、斧ごと浄化されて跡形もなく消えてしまった。

「ぐうぅ！《ゴブリン突撃部隊》は攻撃した後守備表示になる」

《ゴブリン突撃部隊》　ＡＴＫ２３００→ＤＥＦ　０

「カードを2枚セットし、ターンエンド！」

Ｂ生徒１
ＬＰ／４０００
手札／０

モンスター／《ゴブリン突撃部隊》（ＤＥＦ／　０）
魔法・罠／リバース×２

「俺のターン！魔法カード《強欲な壺》を発動！カードを２枚ドロー！」

《強欲な壺》
通常魔法（禁止カード）
自分のデッキからカードを２枚ドローする。

本来なら禁止カードだけど、この時代の制限リストなら使用可能だ。俺のデッキは手札消費が激しいから助かる。

とにかく、カードを２枚ドローする。

『我を引いたか』

「ん？」

なんか声が聞こえた。それも男の声。

『我の声が聞こえるのか？』

声は俺が引いたカード…俺の切り札の１枚から聞こえてくる。

「あ、ああ、聞こえてるぜ。精霊世界から戻って来たのか？」

『なるほど。精霊と通じるようになったとゴーズから聞いていたが、本当のようだな』

マジで戻って来たのか…ずいぶん都合のいいタイミングだな。

『精霊世界から戻って早々、そこの愚か者の相手か？この世界も退屈しないものだな』

「この調子だと、今回は出番がありそうだな。頼んだぜ」

『よかろう』

「何をぶつぶつ言っている？」

あ、一般の人間には聞こえないんだった。

「ああ、悪い悪い。《勝利の導き手フレイヤ》を召喚！」

両手首と両足首に光輪を付けたチアガールが現れる。

《勝利の導き手フレイヤ》
効果モンスター
星１／光属性／天使族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　１００
自分フィールド上に「勝利の導き手フレイヤ」以外の天使族モンスターが表側表示で存在する場合、このカードを攻撃対象に選択する事はできない。
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在する天使族モンスターの攻撃力・守備力は４００ポイントアップする。

《勝利の導き手フレイヤ》　ＡＴＫ／　１００

「可愛いッス！」

翔が何か言っているけど何も聞こえないぞ、うん。

「フレイヤは俺の天使族の攻守を４００ポイントアップさせる効果を持つ。さらに他の天使族が俺の場にいる時は攻撃対象にならない」

《勝利の導き手フレイヤ》　ＡＴＫ／　１００↓　５００

《天空聖者メルティウス》　ＡＴＫ／１６００↓２０００

「バトル！フレイヤで《ゴブリン突撃部隊》に攻撃！」

フレイヤがゴブリン達に向かって行く。その時、Ｂ生徒１（もう呼び方これでいいや）がニヤリと笑った。

「フハハ、罠カード《聖なるバリアー ミラーフォース ー》だ！貴様の攻撃表示のモンスターを全て破壊する！貴様も所詮この程度だったな！」

「アホか。カウンター罠！バトルフェイズ中に発動した罠を無効にし、破壊する！」

「何っ！？」

《トラップ・ジャマー》
カウンター罠
バトルフェイズ中のみ発動する事ができる。
相手が発動した罠カードの発動を無効にし破壊する。

聖なるバリアが張られるも、俺がカードの効果を説明し終わると

同時に消え去った。

「…終わりだ」

「？」

「お前が罠カードを使い、俺が無効化した。この時点で俺の勝ちが決まったようなもんだ」

「は？高々罠１枚を防いだだけで、この俺にどう勝つっていうんだ？」

「…見せてやるよ、俺の切り札を！」

そう言い放った時、俺のフィールドに大きな黒い穴が発生した。ゴーズとカイエンが出て来た穴と同じ物だ。

「相手のカードの効果をカウンター罠で無効にした時、こいつは手札から特殊召喚できる！来い、《冥王竜ヴァンダルギオン》！！」

穴から黒い龍が飛び立ち、舞い上がる。体中に赤い模様と青い宝石を持つそいつは、たった今戻って来た俺の精霊だ。

《冥王竜（めいおうりゅう）ヴァンダルギオン》

効果モンスター

星８／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２５００

相手がコントロールするカードの発動をカウンター罠で無効にした場合、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、無効にしたカードの種類により以下の効果を発動する。

●魔法：相手ライフに１５００ポイントダメージを与える。
●罠：相手フィールド上のカード１枚を選択して破壊する。
●効果モンスター：自分の墓地からモンスター１体を選択して自分フィールド上に特殊召喚する。

《冥王竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／２８００

『グオォオオオオオォオオ！！！』

咆哮する俺の切り札。冥王の名に恥じない威圧感を前に、Ｂ生徒１が驚愕の表情を浮かべる。

「な、何だそのカードは！？」

「ヴァンダルギオンは無効にしたカードの種類によって効果が変わるモンスターだ。罠カードを無効にして特殊召喚した場合、相手のカードを１枚破壊する！」

「何っ！？」

「お前のリバースカードを破壊する！カーディナル・フレア！」

ヴァンダルギオンは赤い模様を輝かせ、口から暗い赤の色をした炎を吐いた。相手のリバースカード《次元幽閉》は赤炎に焼かれ消え去った。

《次元幽閉》
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
その攻撃モンスター１体をゲームから除外する。

「そしてメルティウスの効果でライフを１０００回復し、もう1枚のリバースカードを破壊！カウンター・フラッシュ！」

紅刃　ＬＰ／５０００↓６０００

メルティウスが破壊したのは《突進》だった。これも単純だけど結構強いな。

《突進》
速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで７００ポイントアップする。

「3重の罠か…効果を無効にするカードだったら勝負はまだわからなかったな」

「う、嘘だろ…こんな…」

「さてと…覚悟はいいか？」

「っ！」

「フレイヤでゴブリンに攻撃！」

フレイヤは待ちくたびれたかのように俺を一瞥し、ゴブリン達の内の1人の腹に蹴りを一発叩き込んだ。すると、蹴り飛ばされたゴブリンが他のゴブリン達にぶつかり、一斉に破壊された。

何こいつら面白いな。後フレイヤ、待たせてごめんな。

「メルティウスでダイレクトアタック！」

「ぐわっ！」

B生徒１　ＬＰ／４０００→２０００

「行くぜ、ヴァンダルギオン」

『奴にはちょうどいい制裁になるだろう』

「だな。ヴァンダルギオンでダイレクトアタック！冥王葬送！！」

「うわあああああああ！！！」

ヴァンダルギオンが放った黒い波動がB生徒１に直撃した。それを見てすかっとした気分になったのは、あいつの振る舞いを見ていれば当然の事だろうな。

B生徒１　ＬＰ／２０００→－　８００

紅刃　ＷＩＮ

「ま、こんなもんか」

カードとディスクを片付けて、B生徒1をどうしてやろうか少し考える。やっぱり初めから決めていた通りにしよう。

「そ、そんな馬鹿な…オベリスク・ブルーのこの俺が、ラー・イエローに負けるなんて…」

「ブルーの生徒が選ばれた人間だと思い上がっているからだろ。油断してると今みたいに足元すくわれるぞ？」

「う、うわぁ！？来るなぁ！」

自分のデッキを庇うように後ずさるB生徒1。

「情けねえなオイ。自分から言い出した事だろ？あ、一応録音しといたから、自分の都合のいいように告げ口しようたって無駄だからな」

「う…」

あ～あ、がっくりうなだれてるよ。

「ちょっとデッキ見せてみろ」

「あっ！」

強引にデッキを奪い取り、中身を確認する。

装備魔法がたくさん入っているな。さしずめ【装備ビート】ってところか。《ヂェミナイ・エルフ》は単純に攻撃力が高いから入れたんだろう。

「ほら、返すよ」

「え？」

「いいからさっさと持て」

デッキを手に握らせてから、俺は背負っていたバッグを降ろしてカードファイルを取り出した。

「確かあれがあったはず…お、あったあった」

俺はカードファイルからカードを2枚取り出し、残りをバッグにしまい再び背負い直した。

「やるよ。お前なら使いこなせるだろ」

「は…？」

B生徒1が呆然としたままカードを受け取る。俺があげたのは《ファイティング・スピリッツ》と《拘束解放波》だ。

《ファイティング・スピリッツ》
装備魔法
装備モンスターの攻撃力は相手フィールド上に存在するモンスター1体につき300ポイントアップする。
装備モンスターが戦闘によって破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する事ができる。

《拘束解放波》
通常魔法
自分フィールド上に表側表示で存在する装備魔法カード1枚を選択して発動する。
選択した装備魔法カードと相手フィールド上にセットされた魔法・罠カードを全て破壊する。

「い、いいのか…？俺は負けたんだぞ？」

「俺は賭け事は嫌いなんだ。よほどの理由がない限り、勝ったからって物を取ったりしねえよ」

「……」

「そのデッキは多分強い。でも、お前自身が弱い。成績がいいからって威張ってるようじゃ、この先ろくな人間にならないぞ？お前や俺より強い奴なんていくらでもいるしな。自分より下の相手でも対等に向き合って戦えるようになれば、お前のデッキも応えてくれるはずだ」

俺もこいつも、まだ発展途上。傲慢にさえならなければ、もっと上を目指せる。俺はそう信じている。

「紅刃、ガードマンが来たよ！見つかったら大変だから、早く逃げよう！」

月沙が駆け寄って来て、俺の手を引く。さすがに初日から校則違反がばれたらただじゃ済まないだろう。

「そうか。もう二度とアンティなんて仕掛けるなよ！じゃあな、お前も早く逃げろよ！」

こうして、俺達はデュエル場を後にした。

現在地は俺の部屋。メンバーは俺、月沙、十代、ゴーズ、カイエンの５人。

俺の精霊、ヴァンダルギオンが登場した事で十代が強く興味を持ち、仕方ないから俺の部屋で紹介する事にした。

「あ、月沙、デッキ調整ありがとな！凄くいい感じだったぜ！」

「どういたしまして」

「デッキ調整？」

「十代のデッキを見せてもらったんだけど、バランスが悪かったから少し調整してあげたの」

「デッキが嘘みたいによく回るようになったんだ！本当に感謝してるぜ！」

十代と万丈目のデュエルは中断されてしまったものの、十代は最後に《ミラクル・フュージョン》を引き当てていた。あのまま続行されていれば十代の勝ちだったのに、残念だ。

《ミラクル・フュージョン》
通常魔法
自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「Ｅ・ＨＥＲＯ」という名のついた融合モンスター１体を融合デッキから特殊召喚する。
（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「いつの間に…。まあ、それは置いといて」

俺は自分のデッキをテーブルの上に置いた。

「ヴァンダルギオン、出てきてくれ」

デッキから精霊が飛び出し……？

「……」

「……」

「ヴァンダルギオン、久しぶり！」

『2週間ぶりだな』

「「……誰？」」

『我は我だ』

「いや、どう見ても人間にしか見えないんだけど…」

出て来たのは、ヴァンダルギオンと同じ模様の黒いコートを着た男だった。

『精霊の中には擬人化できるモンスターもいる』

「いや、これっていいのか？」

「俺は遊城十代！で、こっちが相棒のハネクリボーだ！よろしくな！」

『クリクリ～』

『我が名はヴァンダルギオンだ』

「順応早っ！？」

まあ、龍の姿で出てこられるよりは話しやすいか？

『戻ったぞ』

「ん？」

今度はなんだ？女の声が聞こえたけど…。

『あ、お帰りなさい』

「え？まさか月沙が言ってた2人目？」

『ほう、カイエンが言っていた通り、精霊と通じるようになったか』

ヴァンダルギオンと似たような事を言って、デッキから2人目が出て来た。

「久しぶり、ボルテニス！」

『月沙か。元気にしていたか？』

「ってお前も擬人化かい！？」

こいつは《裁きを下す者－ボルテニス》…今回は出番はなかったけど、俺の2体目の切り札だ。

カードイラストだと、装甲に覆われていて下半身が結晶になっているという何とも奇妙な姿をしているけど、目の前のこいつは紫のローブを着て、イラストの頭に似た帽子を被った、紫の髪の女の姿になっている。手には長い杖を持っている。

『なら、お前は私にカードの絵と同じ姿で出てきてほしいのか？』

「いや、こっちの方が話しやすいから今のままでいい」

ていうか、こいつらアカデミアの制服を来たら俺達と同年代の生徒にしか見えないだろうな。

「ボルテニスっていうのか。俺は遊城十代。で、こいつは…」

『ハネクリボーだろう？同じ天使族だから言わなくてもわかる』

「お前ら、ゴーズやカイエンから俺の話を聞いてたみたいな事を言ってたけど…」

『我はゴーズと、ボルテニスはカイエンとそれぞれコンタクトをとっている。我は冥界で仕事をしている時に、ゴーズからよく人間界の話を聞いておる』

「なるほど、同じ属性だもんな。てか、やっぱ仕事あるんだな」

『我は冥王だぞ？定期的に帰って仕事をしなければ、冥界の者達に負担をかけてしまう』

「ちゃんと考えているんだな。ボルテニスはどうしてたんだ？」

『しばらく天空の聖域を空けていたから、様子を見に行って来た。演習に付き合っていて少し帰るのが遅れたが』

「なるほど…」

２人共、それなりの事情があるんだな。

「ところで、どうやって過去のこの世界に来れたんだ？」

小声で気になった質問をする。

『フォッタとかいう自称神に、未来の精霊界と行き来できるようにしてもらった』

またあいつか。ここに来た時に「協力できるのはここまで」とか言ってた割には、こまめにサポートをしてくれているみたいだ。

「？（何話してんだ？）」

「ねえ、２人共名前が長いから、紅刃に別の名前を付けてもらったら？」

不意に、月沙が提案して来た。

『いい考えだな』

『紅刃、何か考えはあるか？』

「そうだな…」

少し考えてみる。何かいい名前は…。

「ヴァンダルギオンは…『オーディン』ってのは？」

『オーディン…いいだろう』

「ボルテニスは『ゼウス』でどうだ？」

『雷を扱う神か…。女神ではないが、いいだろう。気に入った』

かなりランクの高い神だって事は気にしないのな。

「んじゃ、よろしくな！オーディン、ゼウス！」

『実際にこうして会うのは初めてだな。たまに冥界に帰るが、よろしく頼む』

『これからは、本当の意味で共に戦っていこう』

「それにしても、紅刃って凄えよな！精霊が４体もついてるなんてさ」

『いや、正式なパートナーはオーディンとゼウスだけだ』

「え？」

あ、この話してもいいのか。

「昔、どうしても勝てないデュエリストがいてさ。『今の俺じゃこいつらを上手く使いこなせないから、俺がもっと強くなったその時まで預かってほしい』って言って、俺に1枚のカードを渡して来た。それが、《冥府の使者ゴーズ》のカードだったんだ」

『紅刃は、私達の元々の主が引き取りに来るまでは、私達を相棒として扱う事を決めました。私達も2人の意思に従い、今は紅刃と共に歩んでいます』

この事は決闘場に行く前にゴーズから切り出された話題だ。

「俺達はあいつが強くなって帰ってくるのを待っているし、信じている。それまでの間、あいつの願いを聞き入れてやるのが、今の俺達にできる事だ」

「そっか…。そいつが戻って来たら紹介してくれよ!デュエルしたいからさ!」

『当然だ』

『その時は、お互いに全力を尽くしましょう』

なんていうか、凄く純粋だな。これがこいつが強い理由のひとつなのかもな。

そんな中、月沙が俺の耳元に顔を寄せて、小声で話しかけて来た。

「あんな約束してるけど、わざわざ未来から連れてくるつもり？」

「ここで俺達が未来人だってばらすわけにもいかないだろ」

あの自称神様が援軍を送る事でも考えてないと、十代と会う事はまずないだろ。

少し罪悪感を感じながらも、未来で頑張ってるであろう友人に心の中で声援を送った。

「ところで、お前ら自分の寮に戻らなくていいのか？」

「「あっ！？」」

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第3話　切り札は黒き冥王（後書き）

いかがでしたか？

ゴーズとカイエンの元々の主をどのタイミングで出すか考え中です。多分、出たらその話の内に返却する事になると思います。

次の更新も少し時間がかかりそうです…。

第４話　使うカードはお気に入りが１番（前書き）

今回は月沙とのデュエルです。結構長いです。

それでは、第四話をお楽しみください！

第４話　使うカードはお気に入りが１番

ＳＩＤＥ／紅刃

眠い。

今は授業中だ。それはいいんだけど、教えてる事が基本的な事ばかりじゃ、さすがに眠くなる。月沙も俺と同意見らしく、すでにダウンしている。

「シニョ～ル紅刃、話を聞いているノーネ！？」

「へ？あ、呼んでました？」

おっと、危うく夢の世界に旅立つところだった。

「話はちゃんと聞くノーネ！カウンター罠のカードを知ってる限り答えるノーネ！」

「ええと？《神の宣告》《魔宮の賄賂》《天罰》《マジック・ジャマー》《トラップ・ジャマー》《強烈なはたき落とし》《キックバック》《地獄の扉越し銃》《攻撃の無力化》なんかもあるだろ？他には《誤作動》《マジック・ドレイン》《アヌビスの裁き》それから…」

「わ、わかった、もういいノーネ」

俺は【パーミッション】の使い手だ。カウンター罠くらい、いく

らでも答えられる。

「では、シニョ～ラ月沙を起こすノーネ」

「はいはい。ほら、月沙起きろ、ご指名だぞ」

月沙は俺の右隣に座っている。月沙の右にあるのは壁だ。つまり、起こすのは必然的に俺の役目になる。

「むにゃ…ふあ？もう授業終わった？」

こいつ、ずいぶんと可愛い声を出すな。ってそうじゃなくて！

「まだ授業中だし、先生が呼んでるぞ？」

「え？」

「眠気覚ましに問題を出すノーネ。フィールド魔法《海》を墓地に送る事でフィールド上のカードを全て破壊するモンスターは「《海竜ーダイダロス》ですよね？」…正解なノーネ」

月沙は水属性に関する質問はたいてい答えられる。出す問題を間違えたな。

あ、さっき俺が言ったのも合わせてカードの説明は省くぞ。眠いしめんどくさい。

授業も全部終わって、今は俺の部屋でのんびりデッキ調整をしている。散歩もいいけど、たまにはこんな日も悪くない。

「そうだな…これでも入れてみるか」

『お前のデッキは光属性中心の【エンジェルパーミッション】だが、我やゴーズがいて邪魔ではないのか？』

「何言ってんだ。相手が大型のモンスターを出して来たら、カウンター罠や《オネスト》じゃ対応しきれない事もある。そういう時はお前らがいてくれると心強い」

『堕天使とかは使わないのですか？』

「闇属性の天使族か。強いのはわかるけど、デッキが重くなっちまうからなかなか使えないんだよな…。よし、できた」

ドンドン！ドンドン！

「ん？」

デッキの調整が終わると同時に、誰かが部屋のドアを叩いた。

「紅刃、いるか！？」

『何だ、騒々しい』

ゼウスが眉間に皺を寄せる。案外怒りっぽい性格らしい。

「ああ、今開ける」

ドアを開けると、必死の形相の十代がいた。何だ？非常事態か？

「大変だ、翔が誘拐された！」

「…は？」

え、誘拐？どういう事だ？

「ブルーの女子寮で捕まってるらしいんだ！一緒に来てくれ！」

『私達に協力を頼むという事は、犯人は複数いるのか？』

「いや、それはわからない。ただ、俺が女子寮までの道を知らないから案内してほしいんだ！」

「そっちかよ！？」

『ハァ…。仕方ない、行くぞ。早く準備しろ』

「ああ。ちょっと待ってろ」

俺はテーブルに置いといたデッキをディスクに納めた。

『ゼウスは人一倍正義感が強い。悪を裁くためなら無理をしてでもやり遂げようとする奴だ』

「ま、《裁きを下す者》だしな」

ゼウス以外がデッキに戻ったところで、俺は玄関の靴に手を伸ばした。

ＳＩＤＥ／月沙

女子寮前の池の近くで待機してるわけだけど…。

「ホントに覗いてないッスから～！」

縄でぐるぐる巻きにされてる翔君が可哀相になってきた。本当は無実なのに…。

「明日香さん、いい加減解放してあげたら？」

「十代の実力を見るいい機会よ。悪いけど、彼には今は犠牲になってもらうわ」

「犠牲って…」

明日香さんも翔が悪くない事には気づいてるけど、どうせならって事で十代を呼んでデュエルするつもりでいる。「もしかしたら紅刃を連れてくるかもしれないから、まあいいか」

「月沙さん、その紅刃って剣のＢ番の名前ですわよね？知り合いですの？」

「あ、それ私も気になります！」

明日香さんの友達…浜口ももえさんと枕田ジュンコさんが話しかけて来た。よくわからないけど、私も明日香さんと同じくらい尊敬されている。

「最初に会ったのは中学の始めだったかな？ちょうど私が虐められていた時だった」

「え、いじめ！？」

『何やってんだ、お前ら？』

『あ？』

『寄ってたかって虐めか？情けねえな、おい』

『んだと？ケンカ売ってんのかコラ！』

『それよりいいのか？後ろで先生見てるぞ？』

『『えっ！？』』

『ほら、行くぞ』

『え？あ、ちょっ！？』

その時は上手く私を引っ張り出してくれたっけ。

『ここまで来ればいいか。大丈夫か？』

『私は平気だけど、いいの？あいつらに目つけられるよ？』

『知った事か。返り討ちにしてやるまでだ』

『…』

『そういや、名前聞いてなかったな。俺は真川紅刃。お前は？』

『私は波星月沙…』

『そっか。よろしくな、波星！』

「それからは、私と紅刃はよく一緒にいた。今じゃ大切な親友だよ」

「そんな事が…」

「信じられませんわ。月沙さんが虐められていたなんて…」

「クラスの中で私が妙に強いのが気に入らなかったからしいけど、結構理不尽な理由だったな」

ジュンコさんは少し考えた後、真剣な顔で私を見た。

「月沙さん、その紅刃の事は好きなんですか？」

「え？うん、好きだよ」

「そうじゃなくて、恋をしているかどうかって事ですよ！」

「へ！？恋！？」

い、いきなり何言ってるの！？

「どうなんですか！」

ジュンコさんがずいっと迫ってくる。ちょっと怖い。

「いや、恋愛は考えた事ないけど…」

「聞いた限りだと、紅刃って凄くいい奴じゃないですか！ここで彼氏にしないと人生最大のチャンスを逃しますよ！」

「人生って、そんな大袈裟な…」

「あら、本人が来たわね」

「「「え？」」」

池を見ると、ボートに乗ってこっちに向かって来る紅刃と十代の姿があった。他の人には見えないけど、ゼウスも乗っている。

「あ、やっぱり来たんだ」

「あの黒髪の方が紅刃さんですか？」

「そうだよ」

「あら、いい殿方じゃないですの」

「殿方って…」

苦笑してると、いつの間にか岸に着いた3人がボートから飛び降りた。

「翔、無事か！？」

「アニキ～！助けてくださいッスよ～！」

『貴様らが犯人か？』

「落ち着け、ゼウス」

杖を振り上げようとするゼウスを紅刃が制する。

「月沙、これは一体どうなってんだ？」

「ああ、それは…」

「こいつは女子寮の風呂を覗いたのよ！」

私が説明しようとすると、ジュンコさんが私の台詞を遮って理由を告げた。

「は？」

「覗きをするなんて最低ですわ！」

「だから誤解だって…」

『誤解？』

「手紙で呼び出されただけらしいんだけど…」

「これがその手紙よ。もちろん、私が書いた物じゃないけど」

明日香さんが問題の手紙を取り出した。紅刃と十代がそれを凝視する。

「女子が書くにしちゃ、字が汚いな。誰かの悪戯か？」

まあ、私は犯人が誰か知ってるんだけどね。そこの池の奥に潜んでるし。

「じゃあ、翔は無罪じゃねえか！早く返せ！」

「いいえ！本当に覗いたなら、許される事ではありませんわ！」

「そこで、こうしましょう。今から私と十代がデュエルをして、十代が勝ったらこの事は誰にも言わないわ」

「ま、こころしい解決方法だな。十代、頼んだ」

「よっしゃ、それじゃ行くぜ！翔は絶対に助け出す！」

で、デュエルを始めた明日香さんと十代。途中で紅刃が私を自分の方へ連れ出した。

「なあ、結局犯人は誰なんだ？原作ならきっちり描写されてるはずだろ？」

「ああ、クロノス先生だよ。ほら、あそこにいる」

そう言って池の奥を周りにばれないように指差す。

「なんで水に潜ってんだよ？あの先生、お前の言う通りろくでなしみたいだな」

「今はね。後々改心するから大丈夫。それに…」

「サンダー・ジャイアントで攻撃！ボルティック・サンダー！」

「きゃあああ！！」

話の途中で、原作通り十代が《Ｅ・ＨＥＲＯ　サンダー・ジャイアント》で決着をつけた。

あ、サンダー・ジャイアントの電撃が池まで届いてる。当然、クロノス先生にもダイレクトアタック。

「ね？」

「…なあ、これってソリッドビジョンだよな？」

「うん。これは私にも仕組みがわからないんだよね…」

『私ももう一撃加えておくか？』

「いや、だから落ち着け」

紅刃とソリッドビジョンの謎について考えてる間に、問題は全部解決した。

「よし、それじゃ帰るか」

「ああ、そうだな」

『くだらん。私はカードに戻るぞ』

ゼウスはつまらなさそうにカードに戻っていった。

本当なら、ここで今日の話はお終いだけど…。

「待って！」

「ん？」

「どうしたの？」

「紅刃、ここに来てから、私達1回もデュエルしてなかったよね？」

「え？ああ、そういえば…」

「どう？この際だから1発やってみる？」

そう言って、腰のディスクに手を掛ける。せっかくなんだし、もっと楽しまなきゃ！

「お、いいな。それじゃ、やるか！」

お互いにホルダーからディスクを抜き出し、左腕にはめて展開させた。

「やっぱ2人のディスクはかっこいいよな！」

「そう？」

「ええ、とっても。全然見た事のない形ですし」

確かに、剣や銃の形なんてなかなかないからね。ていうかこの時代にあるのかな？

「じゃ、面白いデュエルを見せてくれよ！」

「ああ！全力で行くぜ、月沙！」

「うん！」

「「デュエル！」」

紅刃ｖｓ月沙

「私の先行、ドロー！モンスターをセット、カードを1枚セットしてターンエンド！」

まずは慎重に。

月沙
ＬＰ／４０００
手札／４
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×１

「俺のターン！俺は《豊穣のアルテミス》を召喚！」

パーミッションデッキでお馴染みの天使が召喚された。

《豊穣のアルテミス》　ＡＴＫ／１６００

「バトル！アルテミスで裏守備モンスターに攻撃！シャイン・ショット！」

アルテミスが放った光弾がリバースモンスターを襲う。破壊されたのは、氷の鳥だった。

「《氷結界の番人ブリザード》の効果発動！戦闘で破壊されて墓地に送られた時、カードを1枚ドローする！」

《氷結界の番人ブリザード》
効果モンスター
星１／水属性／水族／ＡＴＫ　３００／ＤＥＦ　５００

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
自分のデッキからカードを1枚ドローする。

ブリズドの効果で1枚ドローする。うん、悪くはない。

「やっぱそれかよ…。カードを3枚セットしてターンエンドだ」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×３

「う…いきなり3枚はきついな。私のターン、ドロー！」

私のデッキは【氷結界】。《氷結界》と名のついたモンスターで構成されている。相手の行動を制限するモンスターが多いけど、1番の強味はシンクロモンスターにある。

でも、ＧＸの世界にはシンクロ召喚は存在しないから、本来の力は出せない。デッキを組み直す時、苦労したんだよな…。

でも、勝てないわけじゃない。紅刃にはどこまで通用するかな？

「私は《氷結界の武士》を召喚！」

私のフィールドに水色の鎧武者が現れた。

《氷結界の武士（ひょうけっかい　もののふ）》
効果モンスター

星４／水属性／戦士族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ１５００
フィールド上に表側攻撃表示で存在するこのカードが表側守備表示になった時、このカードを破壊し、自分のデッキからカードを１枚ドローする。

《氷結界の武士》　ＡＴＫ／１８００

攻撃力はアルテミスより上。伏せカードが怖いけど、ここは攻める！

「《氷結界の武士》でアルテミスを攻撃！水氷刃！」

武士がアルテミスに斬りかかる！

「そう簡単に通すかよ！リバースオープン、《攻撃の無力化》！攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる！」

障壁が武士の刀を防ぐ。武士はそのまま後ろに飛び退いた。

「こいつはカウンター罠だ。アルテミスの効果でカードを１枚ドローする」

う、結局駄目だったか…。

「仕方ないか…。カードを１枚セット、ターンエンド」

月沙
ＬＰ／４０００
手札／４
モンスター／《氷結界の武士》（ＡＴＫ／１８００）

魔法・罠／リバース×２

「俺のターン！《勝利の導き手フレイヤ》を召喚！俺の天使族は攻守が４００ポイントアップする！」

この前のデュエルで登場したチアガールみたいなモンスターが出てきた。

《勝利の導き手フレイヤ》　ＡＴＫ／　１００↓　５００

《豊穣のアルテミス》　ＡＴＫ／１６００↓２０００

「やっぱり可愛いッス…」

「そこの女子２人、そいつをもう一度ふん縛ってくれ。反省が足りないみたいだ」

「了解ですわ！」

「さあ、大人しくしなさい！」

「うわぁああ！？ストップストップ！」

だから翔君は何もしてないって…。あの２人もノリがいいよね。

「気を取り直してバトルだ！アルテミスで《氷結界の武士》を攻撃！」

「罠カード《和睦の使者》！このターン、私のモンスターは戦闘破壊されず、戦闘ダメージも受けない！」

《和睦（わぼく）の使者》
通常罠
このカードを発動したターン、相手モンスターから受ける全ての戦闘ダメージは０になる。
このターン自分のモンスターは戦闘では破壊されない。

「…通すぜ」

紅刃は少し考えてから効果を受け入れた。リバースに罠を無効化するカードがあるのかな？

「カードを１枚セットし、ターンエンドだ」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／２０００）《勝利の導き手フレイヤ》（ＡＴＫ／５００）
魔法・罠／リバース×３

「私のターン！」

さて、どうしようか…。

「リバースカードオープン、《人造天使》！」

「えっ！？」

まずい！そのカードは…。

「何だ、あのカード？」

「あれはカウンター罠が発動される度に、攻守３００の《人造天使トークン》を特殊召喚するカードよ。カウンター罠を大量に使う紅刃のデッキとは相性抜群ね」

「そういう事だ！」

《人造天使（シンセティック・エンジェル）》
永続罠
カウンター罠が発動される度に、「人造天使トークン」（天使族・光・星１・攻／守３００）を１体特殊召喚する。

小さな大砲を４つ装備した、何となくメカっぽい天使が現れた。

アルテミスでドローして、《人造天使》でトークンを呼び出す。さらに、トークンはフレイヤの効果でパワーアップ…。下手に動いたら一気に不利になる…！

よし、だったらここは…！

「手札から《サイクロン》を発動！《人造天使》を破壊！」

「させるか！カウンター罠《魔宮の賄賂》！魔法・罠カードの発動を無効にし、破壊する！」

《魔宮の賄賂（わいろ）》
カウンター罠
相手の魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

相手はデッキからカードを1枚ドローする。

さっき悩んでたのは、魔法と罠の両方に対応できたからか！

「感じの悪いカードだからあまり使いたくはないんだけど、効果が強力だからな」

「確かに賄賂は好きになれないしね。《魔宮の賄賂》のもうひとつの効果で、カードを1枚ドローさせてもらうよ」

「そのカードを使わせるつもりはないけどな。カウンター罠《強烈なはたき落とし》！デッキからカードを手札に加えた時、そのカード1枚を墓地に送る！」

「そんな…これじゃ、ノーコストでデッキ破壊までされたようなものじゃない！」

「…賄賂よりもこっちの方が酷くない？」

愚痴りながら、引いたカードを墓地に送る。

「まあ、そう言うな。アルテミスの効果で2枚ドロー！さらに《人造天使》の効果で《人造天使トークン》を2体特殊召喚する！こいつらもフレイヤの効果で攻守アップだ！」

《人造天使》が球体のトークンを2体撃ち出す。

《人造天使トークン》　ＤＥＦ／　３００↓　８００

《人造天使トークン》　ＤＥＦ／　３００↓　８００

「でも、これくらいはまだ大丈夫！《強欲な壺》発動！２枚ドロー！さらに魔法カード《氷結界の三方陣》！手札の『氷結界』と名のついたモンスター３種類を相手に見せて、相手のカードを１枚破壊し、手札の氷結界のモンスター１体を特殊召喚する！」

《氷結界の三方陣（さんほうじん）》
通常魔法
手札の「氷結界」と名のついたモンスター３種類を相手に見せ、相手フィールド上に存在するカード１枚を選択して発動する。
選択した相手のカードを破壊し、自分の手札から「氷結界」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する。

「げっ！？」

紅刃の場には、もう伏せカードはない。今がチャンス！

「私が見せるのはこの３枚！」

《氷結界の封魔団（ふうまだん）》
効果モンスター
星４／水属性／魔法使い族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ２０００
手札から「氷結界」と名のついたモンスター１体を墓地へ送って発動する。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、次の自分のターンのエンドフェイズ時までお互いに魔法カードを発動する事はできない。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

《氷結界の軍師》

効果モンスター
星４／水属性／魔法使い族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１６００
手札から「氷結界」と名のついたモンスター１体を墓地へ送って発動する。
自分のデッキからカードを１枚ドローする。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

《氷結界の虎将（こしょう）　グルナード》
効果モンスター
星８／水属性／戦士族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ１０００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分のメインフェイズ時に１度だけ、自分の通常召喚に加えて「氷結界」と名のついたモンスター１体の召喚を行う事ができる。

「紅刃の《人造天使》を破壊し、《氷結界の虎将　グルナード》を特殊召喚！」

私のフィールドを中心に、赤いコートを来た女性と笠を被った老人、そして氷の大剣と鎧を身につけた戦士が現れ、巨大な魔法陣を創り出した。《人造天使》は魔法陣に入った途端に凍りつき、粉々に砕けた。そして、封魔団と軍師は消滅し、グルナードが私のフィールドに残った。

《氷結界の虎将　グルナード》　ＡＴＫ／２８００

「そして、《氷結界の封魔団》を守備表示で召喚！」

《氷結界の封魔団》　ＤＥＦ／２０００

「さらに、グルナードの効果発動！自分のメインフェイズに１度、

通常召喚に加えて、氷結界のモンスター1体を召喚できる！《氷結界の軍師》を召喚！」

《氷結界の軍師》　ＡＴＫ／１６００

「すっげえ！モンスターを一気に3体も出したぞ！」

「まだまだ！《氷結界の軍師》の効果発動！手札の氷結界のモンスターを1枚墓地に送り、カードを1枚ドローする！魔法カード《サルベージ》を発動！墓地の攻撃力１５００以下の水属性モンスターを2体手札に加える！軍師の効果で墓地に送った《氷結界の破術師》とブリズドを手札に加える！」

《サルベージ》
通常魔法
自分の墓地に存在する攻撃力１５００以下の水属性モンスター2体を手札に加える。

《氷結界の破術師》
効果モンスター
星3／水属性／魔法使い族／ＡＴＫ　４００／ＤＥＦ１０００
自分フィールド上にこのカード以外の「氷結界」と名のついたモンスターが表側表示で存在する限り、お互いに魔法カードはセットしなければ発動できず、セットしたプレイヤーから見て次の自分のターンが来るまで発動する事はできない。

流れるようにカードを操っていく。デッキが私に応えてくれている。私もそれに見合うデュエルをしないと！

「相変わらず凄えな。あんな大技を出したのにきっちり手札を確保

するなんてさ」

「褒めていただいてどうも。それじゃ、行くよ！グルナードでアルテミスを攻撃！アイススワード！」

グルナードが大剣を振り上げ、アルテミスを真っ二つに叩き斬った。

「くっ…」

紅刃　ＬＰ／４０００↓３２００

「武士と軍師で2体のトークンを攻撃！」

「フレイヤが残っただけでもマシか…」

「私はこれでターンエンド！」

月沙
ＬＰ／４０００
手札／2
モンスター／《氷結界の武士》（ＡＴＫ／１８００）《氷結界の虎将　グルナード》（ＡＴＫ／２８００）《氷結界の封魔団》（ＤＥＦ／２０００）《氷結界の軍師》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×１

「凄いですわ…あの状況から一気に逆転した…」

「これは俄然月沙さんが有利ね！」

「いや、勝負はまだわからないぜ？」

「え？」

「月沙の手札は《サルベージ》で回収した破術師とブリズドのみ。リバースカード以外は既に手の内がばれている。それに、紅刃はアルテミスの効果で手札を増やしている。いつ逆転されてもおかしくないわ」

そう。明日香の言う通り、今の私の手札にはモンスターのみ。新たに伏せられる魔法も罠もない。このリバースカードが頼りだ。

「面白くなってきたな。俺のターン！《強欲の壺》を発動し、２枚ドローする！永続魔法（コート・オブ・ジャスティス）を発動！俺の場にレベル１の天使族モンスターがいる時、１ターンに１度手札から天使族モンスターを特殊召喚できる！」

《コート・オブ・ジャスティス》
永続魔法
自分フィールド上にレベル１の天使族モンスターが表側表示で存在する場合、手札から天使族モンスター１体を特殊召喚する事ができる。
「コート・オブ・ジャスティス」の効果は１ターンに１度しか使用できない。

紅刃のフィールドの上に巨大な天使の輪が出現した。これって【パーミッション】だと事故要因じゃないの？

「俺の場にはレベル１のフレイヤがいる。よって、手札から《天空騎士パーシアス》を特殊召喚！」

輪の中からケンタウロスみたいな聖騎士が舞い降りた。

《天空騎士パーシアス（エンジェルナイト）》

効果モンスター

星５／光属性／天使族／ＡＴＫ１９００／ＤＥＦ１４００

守備表示モンスター攻撃時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。

また、このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた時、自分はカードを１枚ドローする。

《天空騎士パーシアス》　ＡＴＫ／１９００→２３００

「あれは貫通効果とドロー効果を持つモンスター！」

パーシアスは相手モンスターが守備表示でも戦闘ダメージを与えられる貫通効果と、戦闘ダメージを与えた時にカードを１枚ドローする効果を合わせ持つモンスターだ。上級モンスターにしては少し低めのステータスだけど、それを補う程の効果を持っている。

「パーシアスで封魔団に攻撃！パーシヴァル・セイバー！」

パーシアスが封魔団を斬ると同時に、私にも攻撃の余波が来る。

「くぅ！」

月沙　ＬＰ／４０００→３７００

「パーシアスの効果発動！戦闘ダメージを与えた時、カードを１枚ドローする！」

引いたカードを確認する。すると、紅刃の目が一瞬見開いた。

「モンスターをセット。フレイヤを守備表示に変更し、カードを2枚セットしてターンエンドだ」

《勝利の導き手フレイヤ》　ＡＴＫ／　５００→ＤＥＦ／　５００

紅刃
ＬＰ／３２００
手札／２
モンスター／《勝利の導き手フレイヤ》（ＤＥＦ／　５００）《天空騎士パーシアス》（ＡＴＫ／２３００）リバース×１
魔法・罠／《コート・オブ・ジャスティス》リバース×２

「私のターン！軍師の効果で手札から破術師を墓地に送り、カードを1枚ドロー！」

さて、一発行ってみよっか！

「私は武士と軍師をリリースし…」

「リリース？」

「生け贄の事だ。俺達の間ではそう呼んでいる」

この時代で言う生け贄と生け贄召喚は、私達の時代ではそれぞれリリースとアドバンス召喚と呼んでいる。この時代に合わせた方がいいんだろうけど、それはしない。生け贄って言葉が気に入らない。

「武士の効果は使わなくていいのか？」

「うん。私が呼び出すのはこのモンスター！」

手札から一枚のカードを取り出す。遂にこれを出す時が来た！

「アドバンス召喚！《リボルバー・ドラゴン》！！」

「…ゑ？」

文字通りリボルバーの頭を持つ機械のドラゴンが私の場に現れた。
３つの黒い銃口がギラギラ光っている。

《リボルバー・ドラゴン》
効果モンスター
星７／闇属性／機械族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ２２００
相手フィールド上に存在するモンスター１体を選択して発動する。
コイントスを３回行い、その内２回以上が表だった場合、そのモン

スターを破壊する。
この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「おお！なんか凄えかっこいいのが出てきた！」

「アドバンス召喚って何スか？」

「あ、生け贄召喚の事だよ」

「え…あの…月沙…？これは一体…」

「前から使ってみたかったんだよね。やっぱりかっこいい♪」

シンクロ関連のカードを抜いた時に空きができたからついでに入れてみたけど、やっぱり入れて正解だったよ！

「いや、これはいくら何でも関連性がなさすぎるんじゃ…」

「グルナードの効果発動！通常召喚に加え、氷結界のモンスターを召喚する！《氷結界の舞姫》を召喚！」

グルナードが出した魔法陣から、氷結界の舞姫ことスイレンが現れた。

《氷結界の舞姫》
効果モンスター
星４／水属性／魔法使い族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ　９００
自分フィールド上にこのカード以外の「氷結界」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合に発動する事ができる。
１ターンに１度、手札の「氷結界」と名のついたモンスターを任意

の枚数見せる事で、相手フィールド上にセットされた魔法・罠カードを見せた枚数分だけ持ち主の手札に戻す。

《氷結界の舞姫》　ＡＴＫ／１７００

「よろしくね、スイレン！」

『はい！お任せください、姫様！』

スイレンは私の呼びかけに振り向いて答えた。最も、私と紅刃と十代にしかわからないけど。

「スイレンの効果発動！私の場に他の氷結界のモンスターがいる時、手札の氷結界のモンスターを見せることで、相手がセットしている魔法・罠を見せた枚数分だけ手札に戻す！手札のブリズドを見せて、リバースカードを１枚手札に戻す！風雪の舞！」

『行きます！はああ！！』

スイレンが舞うと吹雪が巻き起こり、紅刃の伏せカードを１枚吹き飛ばした。

「《リボルバー・ドラゴン》の効果発動！コインを３回投げて２回以上表が出た場合、相手モンスターを１体破壊する！」

ソリッドビジョンのコインが３枚現れ、同時に宙を舞う。結果は…。

「よし！表は２枚！よって効果は成立！裏守備モンスターを破壊！ガン・キャノン・ショット！！」

3発同時に弾丸が放たれ、裏守備モンスターを破壊した。破壊したのは《マシュマロン》か…。このまま攻撃していたらまずかったかな。

《マシュマロン》
効果モンスター（制限カード）
星3／光属性／天使族／ＡＴＫ　３００／ＤＥＦ　５００
フィールド上に裏側表示で存在するこのカードを攻撃したモンスターのコントローラーは、ダメージ計算後に１０００ポイントダメージを受ける。
このカードは戦闘では破壊されない。

「バトル！リボルバー・ドラゴンでパーシアスを攻撃！」

《リボルバー・ドラゴン》が3つの銃口をパーシアスに向け、エネルギーを溜める。

「エネルギー充填完了！リボルバー・キャノン！！」

3本のレーザー砲がパーシアスを襲う。これで決まれば…！

「これ以上やられてたまるか！カウンター罠《攻撃の無力化》！」

「なっ！？2枚目！？」

「攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる！」

突如出現した時空の渦に、機械龍の攻撃が全て吸い込まれてしまった。

このターンはもう攻撃できないけど、次の紅刃のターンを凌げば…！

「…危なかったな。こいつが来てくれなかったら、正直やばかった」

「？」

不意に、パーシアスとフレイヤが白く光り始めた。

「これは…。…っ！まさか！」

パーシアスの効果で引いたカードは…！

「俺がカウンター罠の発動に成功した時、俺の場のモンスターを全てリリースして特殊召喚する！《裁きを下す者－ボルテニス》！！」

パーシアスとフレイヤが、巨大な光となりひとつになる。光を弾き飛ばして中から出て来たのは、カードイラストと同じ姿をしたゼウスだった。

《裁きを下す者－ボルテニス》
効果モンスター
星８／光属性／天使族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ１４００
自分のカウンター罠が発動に成功した場合、自分フィールド上のモンスターを全て生け贄に捧げることで特殊召喚する事ができる。この方法で特殊召喚に成功した場合、生け贄に捧げた天使族モンスターの数まで相手フィールド上のカードを破壊する事ができる。

《裁きを下す物－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００

『互いに話せるようになってからの初陣が月沙とのデュエルになるとはな』

「あはは…できれば出てきてほしくなかったかな…」

「これも勝負だ。やるからには全力で行く！ゼウスの効果発動！自身の効果で特殊召喚された時、リリースした天使族の数だけ相手のカードを破壊する！」

「さっき生け贄にしたのはパーシアスとフレイヤだから…」

「2枚のカードを問答無用で破壊ッスか！？」

「グルナードと《リボルバー・ドラゴン》を破壊！ジャッジメント・パニッシュ！」

『貫け！』

ゼウスは杖から光の槍が2本放ち、青い剣士と機械龍を貫き破壊した。

「くっ…、ターンエンド…」

月沙
ＬＰ／３７００
手札／１
モンスター／《氷結界の舞姫》（ＡＴＫ／１７００）
魔法・罠／リバース×１

「ここから反撃だ！俺のターン！《智天使ハーヴェスト》を召喚！」

今度は角笛を持った黄色い天使が出て来た。

《智天使（ちてんし）ハーヴェスト》
効果モンスター
星４／光属性／天使族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ１０００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在するカウンター罠１枚を手札に加える事ができる。

《智天使ハーヴェスト》　ＡＴＫ／１８００

「行くぜ！ハーヴェストでスイレンに攻撃！ハーメルン・スマッシュ！」

『きゃあ！？』

「スイレン！」

ハーヴェストの蹴りでスイレンが破壊される。ごめんね、スイレン…。

月沙　ＬＰ／３７００→３６００

「行くぞ、ゼウス！ボルテニスでダイレクトアタック！ボルティ・ジャッジライト！！」

『食らえ！』

ゼウスの杖から白い電撃が放たれる。でも…。

「これだけは通さない！罠発動！１度だけ戦闘ダメージを相手に代わりに受けさせる！」

《ディメンション・ウォール》
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
この戦闘によって自分が受ける戦闘ダメージは、かわりに相手が受ける。

「何！？ぐあああ！！」

電撃は異次元に飛ばされ、紅刃の前に現れ直撃した。

紅刃　ＬＰ／３２００→　４００

『ちっ、撃ち損ねたか』

「いや、そこは紅刃を心配するところでしょ」

ツッコんでみたけど、ゼウスはちらちら紅刃を見ている。素直じゃないな…。

「カードを１枚伏せてターンエンドだ」

紅刃
ＬＰ／　４００
手札／１
モンスター／《裁きを下す者－ボルテニス》（ＡＴＫ／２８００）
《智天使ハーヴェスト》（ＡＴＫ／１８００）
魔法・罠／《コート・オブ・ジャスティス》リバース×１

「紅刃がここまで追い込まれたのって初めてじゃないか？」

「やっぱり月沙さんは凄いッス！」

「でも、紅刃さんの場には伏せカードが1枚ある。それに、フィールド上は圧倒的に不利よ」

今、私のフィールドにはカードが存在しない。手札はブリズドのみ。ここで逆転のカードを引かないと私は負ける…。

「……フフ」

「？」

「なんで笑ってるんですの？」

ももえが訝しげに私を見る。

「いや、ちょっとね。この1枚がどんな結果を出すのかと思うと、なんかワクワクしてきたから、つい笑っちゃった」

「わかるぜ、その気持ち！このドローで逆転のカードを引けたら面白いよな！」

「この状況でそんな事を…」

「気持ちは俺もわかる。お前、いよいよあいつの考えが移ったんじゃないのか？」

「フフフ、そうかもね」

苦笑に苦笑で返しながら、この世界に行く時に見送りに来てなかった友人を思い出す。私達が過去に行ったなんて聞いたら、どんな反応をするかな？

「それじゃ、行くよ！私のターン、ドロー！！」

勢いよくカードを引く。引いたカードは…。

「よし！魔法カード《貪欲な壺》！私の墓地のモンスターを5体デッキに戻し、カードを2枚ドローする！」

《貪欲な壺》
通常魔法
自分の墓地に存在するモンスター5体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。
その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「ここでドロー加速か！」

「墓地にいる舞姫、破術師、武士、軍師、グルナードをデッキに戻す！」

墓地にいたモンスター達をデッキに戻すと、ディスクが自動でシャッフルしてくれた。毎回思うけど、どんな仕組みになってるんだろ？いつか帰ったら遊星に聞いてみようかな？

「2枚ドロー！」

引いたカードを確認する。これは賭けになるけど、やるしかない！

「魔法カード発動！《オーバーロード・フュージョン》！！」

《オーバーロード・フュージョン》
通常魔法（制限カード）
自分フィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、闇属性・機械族の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「私のフィールドと墓地から融合素材を除外し、闇属性・機械族の融合モンスターを融合召喚する！墓地の《リボルバー・ドラゴン》と《ブローバック・ドラゴン》を除外！」

《ブローバック・ドラゴン》
効果モンスター
星6／闇属性／機械族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ１２００
コイントスを3回行う。その内2回以上が表だった場合、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。
この効果は1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに使用する事ができる。

「あれ？そんなモンスター墓地にいたっけ？」

「まさか、《強烈なはたき落とし》で…！」

「御名答！」

「《貪欲な壺》で《リボルバー・ドラゴン》をデッキに戻さなかっ

たのはこれを狙っていたからか！」

《オーバーロード・フュージョン》。アニメのＧＸでは、翔君の兄、丸藤亮が、勝利だけを強く求める『ヘルカイザー』になってしまうきっかけとなったカード。亮さんはこの時、カードを想う心を忘れてしまった。

正直、このカードをＧＸの世界で使うのは抵抗があった。でも、私はこれをデッキに入れた。亮さんがこのカードを勝利の手段としてのみ使うのなら、私は仲間との絆のカードとして使うと決めた。

これもあいつが教えてくれた事。信じているからこそ、このカードを使うんだ！

「融合召喚！《ガトリング・ドラゴン》！！」

《ガトリング・ドラゴン》
融合・効果モンスター
星８／闇属性／機械族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ１２００
「リボルバー・ドラゴン」＋「ブローバック・ドラゴン」
コイントスを３回行う。表が出た数だけ、フィールド上のモンスターを破壊する。
この効果は１ターンに１度だけ自分のメインフェイズに使用する事ができる。

《ガトリング・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

赤い車輪を持ち、名前の通り三つ首のひとつひとつにガトリング砲を携えた機械龍。私がデュエルを始めるきっかけになったカード！

「【氷結界】によくそんなモンスターを入れたな…」

「思い出があるからね。《ガトリング・ドラゴン》の効果発…」

動、と言おうとしたところで止まった。待てよ、あの伏せカードは…。

「どうした？効果を使わないのか？」

「…効果は…」

もしあのカードがモンスター効果に対応するカードだったら…。

いや、あれはおそらくスイレンの効果で一度手札に戻されたカード。スイレンの効果を止めなかったところを見ると、モンスターの効果には対応できないはず。

でも、確信は持てない。かと言って、このまま攻撃しても、紅刃の手札には《オネスト》がいる可能性がある。どうする…？

『ギャオォオオ！！』

「！？」

び、びっくりした…。なんだ、《ガトリング・ドラゴン》が吠えただけか…。

いや、ただ吠えたんじゃない。何かを伝えようとしているみたいだった。

少し頭を冷やす。…うん、何が言いたいのか、何となくわかった気がする。

『躊躇う暇があったら迷わず撃て』。そうじゃないかな？

このモンスターは精霊じゃないけど、この遊戯王の世界に来る前は始めた時から切り札として使っていた。だから、何か通じるものがあるのかもしれない。

「…そうだよね。深く考えすぎるのもよくないよね」

「！（来るか？）」

「バトル！《ガトリング・ドラゴン》でハーヴェストに攻撃！」

「効果を使えば無効化される恐れがある。あえて攻撃してとどめを刺すつもりね」

「ガトリング・ブラスター！！」

３つのガトリング砲が一斉に火を噴いた。決まるか！？

「……悪いな」

瞬間、智天使の背に白い翼が生えた。

「《オネスト》の効果発動！俺の光属性のモンスターが戦闘を行う時、こいつを手札から捨てることで相手の戦闘モンスターの攻撃力分の数値を俺の戦闘モンスターの攻撃力に加える！」

《智天使ハーヴェスト》　ＡＴＫ／１８００→４４００

あちゃ～。ミスっちゃったか…。

ハーヴェストが放った光が銃弾を全て掻き消し、《ガトリング・ドラゴン》まで破壊した。《ガトリング・ドラゴン》も、あんな事を言った（？）んだから後悔してないはずだよね？

月沙　ＬＰ／３６００→１８００

「やっぱりあったんだ…。モンスターを伏せてターンエンド」

月沙
ＬＰ／１８００
手札／１
モンスター／リバース×１
魔法・罠／なし

最後の手札は、さっきデッキに戻した軍師。仕方ない、お手上げだ。

「んじゃ、決めるか！俺のターン！ハーヴェストで裏守備モンスターに攻撃！」

「ブリズドの効果で１枚ドロー」

「今度こそ決めるぜ！ボルテニスでダイレクトアタック！ボルティ・ジャッジライト！！」

白い電撃は、今度は何かに邪魔される事なく私を捉えた。

月沙　ＬＰ／１８００↓　０
紅刃　ＷＩＮ

決着が着いた途端に、足の力が抜けてへたり込んでしまった。

「あはは…負けちゃったか」

「かなりギリギリだったけどな。やっぱ強いよ、お前は」

「最後のリバースカードは何だったの？」

「ああ、これだよ」

そう言って見せてくれたのは…。

《天罰》
カウンター罠
手札を１枚捨てて発動する。
効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する。

「って、結局私の負けじゃん！！」

「舞姫の効果に使わなくて正解だったな」

この人鬼！？

「ほら、立てるか？」

未だ座っている私に、紅刃が手を差し延べて来た。

…あれ？一瞬ドキッて来た。

「あ、うん、ありがと…」

手を取って立ち上がる。

「まさか【氷結界】にガトリング関連のカードを入れてるなんてな…。なんでだ？」

「昔によく使ってたからね。久々に使ってみたくなったの」

「まあ、お前＝射撃って言っても間違ってないしな」

「否定はしないけどね」

苦笑しながらディスクをホルダーに納めた。

「ところで、さっきから顔が赤いけどどうした？」

「！？な、何でもない！」

言われてみれば、顔が少し熱い。思わず顔を背けてしまった。

「？ならいいけど…」

「ねえ、あれって…」

「これは脈ありですわ♪」

向こうでジュンコさんとももえさんが何か話してるけど、よく聞き取れない。

「すっげえデュエルだったな！面白かったぜ！」

「でも、なんで機械族なんか入れているの？あなたのそのデッキには合わないと思うけど」

「ああ、これ？」

私はデッキから《ガトリング・ドラゴン》を取り出した。

「昔よく使ってたんだ。私がデュエルを始めた時の最初の切り札がこのカードだった。デッキを【氷結界】に変えてからあまり使わなくなったけど、やっぱりこのカードとも一緒に戦いたいから、元々あった機械族のデッキと混ぜてみたの」

正確には、遊戯王の世界に来る前からずっと【機械族】を使っていた。トリップした後に精霊世界に行って、それから【氷結界】を使うようになった。

私にはどちらかひとつのデッキに絞るなんて事はやっぱりできない。だから、この世界に来る前に2つのデッキを混ぜたし、これからも使っていくつもりだ。

「そっか。やっぱ思い入れのあるカードでデュエルしたいもんな！」

「でしょ？」

「さてと、デュエルも終わったし、寮に戻るとするか！」

「そうね。約束通り、この事は秘密にしておくわ」

「うぅ、明日香さん、アニキ、恩に着るッス！」

「気にすんなって！それじゃ、また明日な！」

男子陣がボートに乗り込む。デュエルには負けちゃったけど、楽しかったな。

「月沙！」

去り際に、紅刃が振り返って私に声をかけた。

「デュエル、楽しかったぜ！またやろうな！」

「うん！次は負けないよ！」

こうして、翔君誘拐事件は幕を閉じた。

「月沙さん！やっぱり紅刃の事好きなんですか！？」

「え！？」

いや、まだ閉じてなかった！

「紅刃さんに手を貸してもらった時、顔が赤くなってたのがバッチリわかりましたわ！」

「あ、あの時の？私にもよくわからないんだけど…」

「きっと紅刃さんに恋をしてるんですわ♪」

「えええ！？？」

いきなりそんな事を言われても困るって！私はそんな事を考えた事は１度もないのに！

「月沙…」

「明日香さん？」

来た！明日香さん、何とかして！

「応援してるから、何かあったら私達に相談しなさい」

明日香さんまでぇえええ！！？

「私は今は恋愛にあまり興味がないから、力になれるかどうかはわからないけど…」

聞いてないしそこじゃないって！

『姫様、御自分に素直になられた方が…』

「（スイレン、いつの間に!?っていうかあなたまでそんな事言うの!?）」

ちなみに、私は精霊とテレパシーで話す事ができる。人前では普段からそうしている。

よし、ここは…。

「…みんな」

「「「『?』」」」

「お休みなさい!!」

とにかく逃げる!

「あ、逃げた!」

「は、速いですわ…」

「素直じゃないわね…」

『あ、待ってください、姫様〜!』

全速力で寮の自室に戻りながら、顔が火照っているのを感じた。

紅刃、あなたは私にとって何なのかな…?

「月沙の奴、なんで顔赤かったんだろな？」

『…気づけ馬鹿者が』

「は？」

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第４話　使うカードはお気に入りが１番（後書き）

いかがでしたか？

予想以上に長くなってしまった…デュエルの描写って難しいですね。

月沙のデッキは、【氷結界】＋《ガトリング・ドラゴン》という無茶すぎる構成になりました。

射撃のイメージを持つモンスターがこれくらいしか思い付かないので…。今後、どうにかしてコンボを見つける予定です。

そして、ある意味非常事態が…。

５Ｄ'ｓで『星界の三極神』なるカードが登場したのですが、その中に《極神聖帝オーディン》というモンスターがいました。

どうしよう、今さらこの作品のオーディンの改名をするわけにはいかないし…正直、物凄く悩んでます。

更新は、週に一度の頻度で進める予定です。予定通りに更新できるように頑張ります。

番外編　キャラ紹介（前書き）

キャラ紹介です。

軽いネタバレが入っているので、読む際には注意してください。

番外編　キャラ紹介

紅刃「今回は俺達の設定を紹介するんだったな」

月沙「本編もある程度進んで、私のデッキも判明したしね」

紅刃「んじゃ、俺から行くぜ。ええと、ここにパネルが…」

名前／真川紅刃（さながわくれは）

年齢／１６歳

身長／１６７？

容姿／黒髪黒目　腰にデュエルディスクを納めたホルダーを付けている

デュエルディスク／片刃の剣　色は赤と黒

特技／剣術・刃物の扱いほぼ全般

趣味／散歩

好きな物・事／デュエル・カレー・チョコ

嫌いな物・事／漬け物・他人を傷つける奴

詳細／本編の主人公。剣の道場に生まれた。父親に鍛えられたせい

か、剣術は相当な腕前で、毎日の鍛練は欠かさない。中学時代に月沙と出会ってから、よく一緒に行動している。「自分の信じる道を貫き通す」が信条で、仲間思いな性格。例え相手が敵でも、事情次第では助け出す一面もある。月沙ほどではないが、精霊との結び付きは強い。

デッキ／【エンジェルパーミッション】【???】

精霊／オーディン（冥王竜ヴァンダルギオン／♂）・ゼウス（裁きを下す者ーボルテニス／♀）・ゴーズ（冥府の使者ゴーズ／♂）・カイエン（冥府の使者カイエン／♀）

月沙「この【???】って？」

紅刃「父さんに無理矢理持たされた、全然使ってないサブデッキだ。お前が知らないのも無理ないな」

月沙「それにしても、精霊多いね…」

ゴーズ『俺達は一時的に世話になっているだけだ』

紅刃「うおぉう！？お前らいつの間に！？」

カイエン『私達が出て来ても問題ないと思ったので』

スイレン『次は姫様の番ですね！』

月沙「うん。私のはこれ」

名前／波星月沙（なみばし つきさ）

年齢／１６歳

身長／１６２？

容姿／銀色の髪をポニーテールにしている　目の色は紫　腰にデュエルディスクを納めたホルダーを付けている

デュエルディスク／銃身が下に少し長めの拳銃　色は青と黒

特技／射撃・料理

趣味／料理

好きな物・事／デュエル・甘い物

嫌いな物・事／虫・いじめ・虐待

詳細／異世界から来たトリッパー。原作知識を駆使して幾度となく紅刃達を助けてきた。トリップする前はどんな生活をしていたかについては不明で、本人もほとんど話そうとしない。明るく優しい、絆を重んじる性格だが、ある条件で怒りが限界を超えると冷たい性格に変わってしまう。小学生の頃からいじめられていて、いじめ関連の事には強い反感を持っている。精霊との結び付きが極端に強く、精霊の力を自分の物として使用する事ができる。昔に精霊世界である事件を解決した事があり、スイレンを始めとする氷結界の一族からは姫扱いされている。射撃の腕前は相当なもので、紅刃いわく「人間技じゃない」。紅刃は大切な親友で、同時に恋『バキャァアッ

！』

紅刃「おいぃぃいいい！？何パネル撃ち抜いてんだぁああ！？」

月沙「世の中には知らなくていい事もあるのよ」

ゴーズ『本編で詳しく説明していないのに力を使っていいのか？』

月沙「事前にネタバレ注意してるからいいんじゃない？」

ゼウス『とりあえず、残りを紹介するぞ』

オーディン『幸い、他の箇所は無事のようだな』

デッキ／【氷結界】（機械族混合）

精霊／スイレン（氷結界の舞姫／♀）

ゼウス『【氷結界】と【機械族】を合わせている者はおそらくお前だけだろうな』

月沙「オリジナリティがあっていいでしょ？」

紅刃「なんか俺より月沙の方が説明長くないか？」

スイレン『細かい事は気にしないでください』

オーディン『ところで、ひとつ気になる事が…』

紅刃「ん、何だ？」

オーディン『アニメ５Ｄ's で《極神聖帝オーディン》というカードが登場したのだが、我の名前はどうなるのだ？』

カイエン『あ、その事については既に考えがあるそうですよ』

オーディン『本当か！？』

スイレン『ただ、本編がもう少し進んでからでないと無理らしいですけど…』

オーディン『…作者はどこだ？』

紅刃「待て！早まるな！」

ゼウス『今回はこんなところか』

月沙「これからも『Ｖｉｓｉｔｏｒｓ ｆｒｏｍ ｔｈｅ ｆｕｔｕｒｅ』をよろしくね！」

紅刃「次回も見てくれよな！」

番外編　キャラ紹介（後書き）

とりあえず、現在の設定はこんなところです。

これからも少しずつでも更新していくのでよろしくお願いします！

第5話　決め台詞は意外と考えつかないものだと思う（前書き）

月一試験です。今回も紅刃がデュエルをします。

それではどうぞ！

第5話　決め台詞は意外と考えつかないものだと思う

ＳＩＤＥ／月沙

「なんじゃこりゃ…」

「ああ、これは俺の癖みたいなもので…」

「癖で壁に数式を書きまくる奴はいねえよ」

いやぁ、知ってたけど実際に見ると凄い…。

もうすぐ行われる月一試験に向けて、私と紅刃は三沢君の部屋で勉強する事にしたんだけど、まず目に入ったのは壁にびっしり書かれた数式の数々だった。

「この部屋は公共の物だろ？こんなにして大丈夫なのか？」

「定期的にペンキで塗り潰す事にしているから問題ない」

「そんなんでいいのか？てかせめてノートに書けよ」

「でも、勉強としては効果的だよね。さ、始めよっか！」

ここで勉強する事を提案したのは私。十代達の部屋って手もあったけど、翔君は《死者蘇生》のカードにお祈りし続けてるし、十代は爆睡してるしで集中できないだろうからやめた。

「なあ、この問題はどうやったら解けるんだ？」

「あ、そこは現在完了形だから…」

「お、なるほど。ありがとな」

「月沙、そこの英文間違ってるぞ？」

「え、嘘！？」

うん、凄く平和だ。

デュエルアカデミアといっても、デュエルばかり教えてるわけじゃなくて英語や現代文みたいな普通の教科もある。

私達はここに来る際に少し年齢を操作された高校2年生だから、この1年間の勉強は復習程度。でも、全部完璧に覚えてるわけじゃないからちゃんと勉強してる。

ま、この調子だと筆記は問題なさそうね。

試験当日。

私は原作の十代みたいに遅刻する事なく、余裕で廊下を歩いていた。

「月沙！」

振り返ると、紅刃と三沢君がいた。

「あ、２人共おはよう！」

「おはよう。今日の試験、自身あるか？」

「大ありだよ。７０点以下を取るなんて事はまずないね」

「あれだけやったんだ。俺達なら大丈夫だろ」

「だな。ん？」

「どうしたの？」

「あそこで何か揉めてるぞ？」

紅刃が指を指した方向には、レッドの生徒がブルーの生徒に何かをしているのが見える。

「行ってみよう」

近くに来るに連れて、話の内容が聞き取りやすくなってくる。

「なんだよ、いいカード持ってんじゃねえかよ」

「ああ！返せ！」

「うるせえんだよ！」

ブルー生徒がレッド生徒を蹴り飛ばす。カードを強奪…要するにカツアゲだ。

「オシリス・レッドごときが持っていちゃもったいねえな。俺様が大事に使ってやる、感謝するんだな」

「あいつは…」

「何か知ってるの？」

「あいつは瀬川。自分より下の階級の生徒を見下し、カードも平気で強奪すると聞いた事がある」

「瀬川…」

私の嫌いな人間に充分当てはまる。見てるだけで虫酸が走る…。

「ほらよ。後は雑魚ばっかだから返してやるよ」

瀬川はそう言ってカードをばらまき、その内の1枚を踏みつけ、踏みにじった。

許さない…！

私は止めに入ろうとしたけど、それよりも先に紅刃が動いた。

「何やってんだ、てめえ」

「あ？」

睨んできたけど、すぐに口を歪めた。

「はっ、誰かと思えば、剣のB番とかいう奴じゃねえか。そんなもんぶら下げて、ヒーロー気取りか？」

紅刃のデュエルディスクを指して冷ややかに笑う。明らかに人を見下したような目をしている。

「そのカードはそこの奴のもんだろ。返せよ」

見せてきたのは《邪帝ガイウス》。かなり強力なカードだ。

「わかってねえな。このカードを見てみろ」

《邪帝（じゃてい）ガイウス》
効果モンスター
星６／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１０００
このカードの生け贄召喚に成功した時、フィールド上に存在するカード１枚を除外する。
除外したカードが闇属性モンスターカードだった場合、
相手ライフに１０００ポイントダメージを与える。

「こんな強力なカード、落ちこぼれが使っていたら価値が下がる。俺様のような選ばれた人間のみが使っていい物なんだよ」

「ざけんな。自分が選ばれた人間だなんて考えてる自惚れ野郎にそいつを使う資格なんてねえよ」

紅刃も相当キレてるのか、握りしめた拳が震えている。

「あ？ラー・イエローのくせに俺様に盾突く気か？」

「ああ、そうさ。さっさと返せ下衆野郎」

「んだとてめえ！？」

今にも殴り合いになりそうなその時、

キ～ンコ～ンカ～ンコ～ン…

「ん？チャイム？」

「おらぁ！」

「ぐっ！？」

チャイムに気を取られた紅刃を、瀬川は思い切り殴り飛ばした。

「紅刃！？」

「あばよ！」

「っ、待ちやがれ！」

紅刃が立ち上がるも、瀬川は走り去ってしまった。

私はディスクを抜いて『撃とうとした』けど、やめた。紅刃以外の人の前でこの『力』を使うのはまずい。

「大丈夫か!?」

「俺は平気だ。くそ、迂闊だった…」

「悔やんでも仕方ないよ。早くカードを取り返さないと…」

「いいんです」

不意に、レッド生徒が口を開いた。

「もう、いいんです…あいつに奪われたら最後、もう二度と戻ってこないから…」

諦めたような口調で話す。でもね…。

「なんだ。それなら…」

「?」

「俺達が執行人第一人者じゃねえか」

私達が諦めると思う?

「私達が必ず取り返す。だから安心して?」

「今までの人間が無理だったなら、これからの人間なら可能かもしれない」

「かもじゃねえ。可能なんだよ」

「皆さん…」

私は散らばっているカードを拾い集めた。最後に、瀬川に踏みにじられたカードを拾い、まとめて返した。

「あなたが信じて作ったデッキでしょ？大切にね」

「…あ、ありがとうございます！」

「さて、まずは月一試験だ。もうあまり時間がない。話はそれからだ」

あ、確かにさっきチャイムが鳴ったしね。

「よし、早く行こう。お互い頑張ろうぜ」

私達は教室に向かって駆け出した。

ＳＩＤＥ／紅刃

筆記試験終了。３人で勉強したせいか、問題をすらすら解けた。

で、今は実技試験の順番待ちだ。

「お前ら、筆記はどうだった？」

「思ったより簡単だったよ」

「あれくらいなら楽勝だ」

「俺も同じだ。問題は実技だな」

「誰とデュエルするのかな？今から楽しみだな」

筆記は余裕な上に、実技は大好きなデュエル。もはや試験の事はどうでもよくなってきた。

「俺のターン、ドロー！よし、魔法カード《拘束解放波》を発動！自分の装備カード1枚と相手のセットされた魔法・罠カード全てを破壊する！」

ん？《拘束解放波》？

「《ヂェミナイ・エルフ》でダイレクトアタック！」

会場を見ると、アンティの件でデュエルをした万丈目の取り巻きの1人が勝利を掴み取っていた。

「あれってこの前カードをあげた人じゃない？」

「ああ、上手く使いこなせてるみたいで何よりだ」

それに、前に会った時よりも凄く生き生きした顔をしている。俺の思いが伝わったみたいだな。あいつにカードをあげて正解だった。

それから結構時間が経った。

三沢は難なく勝利し、十代も万丈目に勝った。しかし十代、相変わらずのドロー力だな。

「次！シニョ～ル紅刃、フィールドに上がるノーネ」

お、ようやく俺の番か。

「紅刃、頑張ってね！」

「油断するなよ。足元をすくわれないようにな」

「わかってるよ。じゃ、行ってくる」

フィールドに上がろうとすると、十代とすれ違った。

「やったな、十代」

「おう！紅刃も頑張れよ！」

「ああ！」

ハイタッチで交代する。さてと、俺の相手は…。

「紅刃、この俺が相手だ！」

「は？お前、さっきやったばかりだろ？」

「シニョ～ル紅刃の相手はイエローの生徒では務まらないノーネ。

そこで、特例としてシニョ～ル万丈目とデュエルさせるノーネ」

なるほど、俺を目の敵にしてるわけか。授業をろくに聞いてないのに内容を大体理解してるからだな。

「そういうわけだ。貴様とは前から戦いたいと思っていた。さあ、構えろ！」

「はぁ…しゃあねえな」

まあ、いいか。今はデュエルに集中だ。

「それと、デュエルの前にひとつ聞いておく」

「何だ？」

「貴様、俺の子分に何を吹き込んだ？」

「…は？」

「あの夜、貴様とデュエルした奴の事だ。『一から自分を鍛え直す』とか言ってこの俺の元を離れた揚句、最近はどんどん成績を上げている。貴様があいつに何かをしたとしか思えん」

何だ、そんな事か。

「大した成長じゃねえか。あいつにカードをあげて正解だったな」

「何！？そういえば、あれから見た事のないカードを使っていたが、出所は貴様か！」

「つべこべ言ってねえで、さっさと始めようぜ」

何か変な事を言われる前に始めた方が良さそうだ。「カードくれ」なんて言われてもやる気ねえし。

「ぐ…いいだろう。この俺が貴様を葬ってくれる！」

「望むところだ。全力で行くぜ！」

「「デュエル！」」

紅刃ｖｓ万丈目

「先攻はもらうぞ！ドロー！俺は《Ｖ（ヴィ）ータイガー・ジェット》を召喚！」

万丈目の場に虎型のジェット機が現れた。

《Ｖ（ヴィ）ータイガー・ジェット》
通常モンスター
星４／光属性／機械族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１８００
空中戦を得意とする、合体能力を持つモンスター。
合体と分離を駆使して立体的な攻撃を繰り出す。

《Ｖ（ヴィ）ータイガー・ジェット》　ＤＥＦ／１８００

「カードを１枚セットし、ターンエンドだ！」

万丈目

ＬＰ／４０００
手札／４
モンスター／《Ｖ－タイガー・ジェット》（ＤＥＦ／１８００）
魔法・罠／リバース×１

「俺のターン！」

俺のデッキには攻撃力１９００の下級モンスターは入っていない。
ここはいつも通り守りに入るか。

「《ジェルエンデュオ》を守備表示で召喚！こいつは戦闘では破壊されない！」

小さなピンクと黄緑の双子の天使が元気に飛び出す。ここは持ちこたえてくれよ！

《ジェルエンデュオ》
効果モンスター
星４／光属性／天使族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ　０
このカードは戦闘では破壊されない。
このカードのコントローラーがダメージを受けた時、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを破壊する。
天使族・光属性モンスターをアドバンス召喚する場合、このカードは2体分のリリースとする事ができる。

《ジェルエンデュオ》　ＤＥＦ／　０

「カードを2枚セットし、ターンエン…」

「この瞬間、リバース発動！」

ん？このタイミングで発動って事は永続罠か？

「永続罠《王宮のお触れ》！」

「何っ！？」

まずい！それは…！

「その様子だと、効果は知っているようだな」

「なあ、なんだあのカード？」

「十代…結構有名なカードだよ？」

「あれはお互いの罠カードの効果を封じるカードよ」

「あ、明日香さん！ジュンコさんにももえさんも！」

「これってピンチじゃない？」

「カウンター罠主体のあのデッキには大打撃ですわね」

《王宮のお触れ》
永続罠（準制限カード）
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカード以外のフィールド上の罠カードの効果を無効にする。

「フフフ、貴様のデッキは天使族とカウンター罠で占められている。天使族には攻撃力１９００の下級モンスターはいないから、守備表

示の《Ｖ－タイガー・ジェット》を戦闘破壊しづらい。そして、この《王宮のお触れ》がある限り、貴様のカウンター罠は全て無力化される！」

くそ、ピンポイントでメタを張って来やがった…！

「そんな…こんなのずるいッスよ！」

「いや、まだマシだよ」

「どういう事だよ？」

「万丈目のあのデッキは光属性が多い。もしそうじゃなかったら、《閃光を吸い込むマジック・ミラー》まで出されてほとんど何もできなくなるところだ」

《閃光を吸い込むマジック・ミラー》
永続罠
このカードがフィールド上に存在する限り、墓地またはフィールド上で発動した光属性モンスターの効果を無効にする。

まあ、対抗手段はあるにはあるんだけど…。

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《ジェルエンデュオ》（ＤＥＦ／　０）
魔法・罠／リバース×２

「俺のターン、ドロー！その伏せカードが速攻魔法の可能性がある

からな、早めに対処するとしよう。魔法カード《ハリケーン》を発動！フィールド上の魔法・罠カードを全て手札に戻す！」

フィールドを突風が襲い、魔法と罠が全て手札に戻る。

《ハリケーン》
通常魔法（制限カード）
フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て持ち主の手札に戻す。

「そして《Ｘ－ヘッド・キャノン》を召喚！」

今度は２つのキャノン砲を持った機械が出てきた。

《Ｘ（エックス）－ヘッド・キャノン》
通常モンスター
星４／光属性／機械族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ１５００
強力なキャノン砲を装備した、合体能力を持つモンスター。
合体と分離を駆使して様々な攻撃を繰り出す。

《Ｘ－ヘッド・キャノン》　ＡＴＫ／１８００

「永続魔法《前線基地》を発動！１ターンに１度、手札からレベル４以下のユニオンモンスターを特殊召喚できる！」

《前線基地》
永続魔法
１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に手札からレベル４以下のユニオンモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

ユニオン。モンスター自身が装備カードとなり、特定のモンスタ

ーに力を与えるモンスターだ。

「俺はこの効果を使い、《Ｙ－ドラゴン・ヘッド》を特殊召喚する！」

次はドラゴン型の戦闘機か。

《Ｙ（ワイ）－ドラゴン・ヘッド》
ユニオンモンスター
星４／光属性／機械族／ＡＴＫ１５００／ＤＥＦ１６００
１ターンに１度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして自分の「Ｘ－ヘッド・キャノン」に装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。
この効果で装備カード扱いになっている時のみ、装備モンスターの攻撃力・守備力は４００ポイントアップする。
（１体のモンスターが装備できるユニオンは１枚まで。
装備モンスターが戦闘によって破壊される場合は、代わりにこのカードを破壊する。）

《Ｙ－ドラゴン・ヘッド》　ＡＴＫ／１５００

「そして、《Ｙ－ドラゴン・ヘッド》を《Ｘ－ヘッド・キャノン》に装備！《Ｘ－ヘッド・キャノン》の攻守は４００ポイントアップする！」

２体のモンスターが変形合体した。なんか妙な迫力があるな。

《Ｘ－ヘッド・キャノン》　ＡＴＫ／１８００→２２００

「さらに、魔法カード《地割れ》を発動！貴様のフィールドの一番

攻撃力が低いモンスターを破壊する！《ジェルエンデュオ》を破壊！」

床に亀裂が走り、浮いてるはずの《ジェルエンデュオ》が落ちていった。重力でも働いてるのか？

《地割れ》
通常魔法
相手フィールド上に表側表示で存在する攻撃力が一番低いモンスター1体を破壊する。

「まずいんだな。このままじゃ負けてしまうんだな」

観客席から声が聞こえた。

月沙達と一緒にいるコアラみたいな顔のそいつは、前田隼人。十代と翔のルームメイトで、1回留年して引きこもり気味になってるらしい。十代のおかげで少しずつ解消しちゃいるけど、まだ足りないみたいだな。

「やっぱり、ブルーに勝つのは難しいんだな…」

「隼人！」

「？」

ネガティブに考えてる隼人に声を掛ける。留年したのはショックだったろうな。でもな…。

「しっかり見とけよ！ラー・イエローがオベリスク・ブルーに逆転

勝利するところをさ！」

「え…？」

「十代を見ただろ？デュエルを楽しんで、カードを信じている奴は奇跡を起こすもんなんだ！今からそれを証明してやるぜ！」

「ほざけ！貴様のフィールドはがら空きなんだぞ？」

「だからどうしたよ？」

「ぐ…《Ｖ－タイガー・ジェット》を攻撃表示に変更！」

《Ｖ－タイガー・ジェット》　ＤＥＦ／１８００→ＡＴＫ／１６００

「《Ｘ－ヘッド・キャノン》でダイレクトアタック！」

キャノン砲からレーザー光線が発射され、俺に襲い掛かる。止める手段はない。

「くっ…！」

紅刃　ＬＰ／４０００→１８００

「大口叩いた割には大したことないな！」

「…《ハリケーン》を使ってくれて助かったぜ」

「何？」

「手札の《冥府の使者ゴーズ》の効果発動！自分フィールド上にカードが存在しない時にダメージを受けた時、こいつを特殊召喚する！さらに、戦闘ダメージで特殊召喚された時、受けたダメージと同じ攻守を持つ《冥府の使者カイエントークン》を特殊召喚する！来い、ゴーズ、カイエン！」

『行くぞ！』

『はい！』

俺のフィールドに黒い大穴が出現し、ゴーズとカイエンが飛び出した。

《冥府の使者ゴーズ》　ＡＴＫ／２７００

《冥府の使者カイエントークン》　ＡＴＫ／２２００

「いきなり最上級モンスターを2体も召喚するだと！？」

「あれは入学試験の時に使った…」

「よっしゃあ！反撃だ、紅刃！」

「ぐっ…カードを1枚セットし、ターンエンドだ」

万丈目
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《Ｖ－タイガー・ジェット》（ＡＴＫ／１６００）
《Ｘ－ヘッド・キャノン》（ＡＴＫ／２２００）

魔法・罠／《前線基地》《Ｙ－ドラゴン・ヘッド》（装備）リバース×１

「俺のターン！《強欲な壺》を発動、２枚ドローする！」

お、これは…いけるか？

「《勝利の導き手フレイヤ》を召喚！俺の場の天使族の攻守は４００ポイントアップする！」

《勝利の導き手フレイヤ》　ＡＴＫ／　１００↓　５００

《冥府の使者カイエントークン》　ＡＴＫ／２２００↓２６００

「バトル！カイエンで《Ｖ－タイガー・ジェット》に攻撃！レイジング・ブラッシュ！」

『はあっ！！』

万丈目　ＬＰ／４０００↓３０００

「ゴーズで《Ｘ－ヘッド・キャノン》に攻撃！エミサリー・ブラッシュ！」

『おおおっ！』

「ぐっ…《Ｙ－ドラゴン・ヘッド》を装備したモンスターが戦闘によって破壊される時、代わりにこのカードを破壊する」

万丈目　ＬＰ／３０００↓２５００

よし、ある程度はライフを削れたな…。

「カードを3枚セットしてターンエンド！」

「無駄だ！《王宮のお触れ》を発動する！」

ちっ、面倒な…。

紅刃
ＬＰ／１８００
手札／２
モンスター／《冥府の使者ゴーズ》（ＡＴＫ／２７００）《冥府の使者カイエントークン》（ＡＴＫ／２６００）《勝利の導き手フレイヤ》（ＡＴＫ／　５００）
魔法・罠／リバース×２

『紅刃、どうします？このままでは思うように動けませんよ？』

「安心しろ。もうあいつが来てる」

『なら安心ですね。私も一仕事したから文句はありません』

万丈目に聞こえないように小声で話す。月沙みたいにテレパシーが使えたらな…。

「俺のターン！魔法カード《天よりの宝札》！互いのプレイヤーは手札が６枚になるようにカードをドローする！」

《天よりの宝札》

通常魔法（アニメ効果）
互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにデッキからカードをドローする。

「へえ、珍しいカードを持ってるんだな」

知らないふりしとこう。さっき月沙から聞いたけど、クロノス先生からもらったカードだろ、それ。

とにかく4枚ドロー。

…あ。

「フフフ、やはり勝利の女神はこの俺、万丈目の味方のようだな！俺は《Ｚ（ゼット）－メタル・キャタピラー》を召喚！」

今度は黄色い何かの土台のような機械が出て来た。

《Ｚ（ゼット）－メタル・キャタピラー》
ユニオンモンスター
星４／光属性／機械族／ＡＴＫ１５００／ＤＥＦ１３００
１ターンに１度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして

自分の「Ｘ－ヘッド・　キャノン」「Ｙ－ドラゴン・ヘッド」に装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で装備カード扱いになっている時のみ、装備モンスターの攻撃力・守備力は６００ポイントアップする。
（１体のモンスターが装備できるユニオンは１枚まで。装備モンスターが戦闘によって破壊される場合は、代わりにこのカードを破壊する。）

《Ｚ－メタル・キャタピラー》　ＡＴＫ／１５００

「そして魔法カード《死者蘇生》を発動！俺の墓地にある《Ｙ－ドラゴン・ヘッド》を特殊召喚する！」

《死者蘇生》
通常魔法（禁止カード）
自分または相手の墓地からモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

《Ｙ－ドラゴン・ヘッド》　ＡＴＫ／１５００

あれって確か相手の墓地からも蘇生できるんだっけ？未来人の俺から見たらとんだ壊れ性能だな。

「俺の場には『Ｘ』『Ｙ』『Ｚ』の３体が揃った！このモンスター達を除外し、融合デッキから《ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン》を特殊召喚する！」

下から『Ｚ』『Ｙ』『Ｘ』の順に積み重なり、合体して１体の巨大なモンスターになる。さすが変形合体、物凄い迫力だ。

《ＸＹＺ（エックスワイゼット）－ドラゴン・キャノン》
融合・効果モンスター
星８／光属性／機械族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２６００
「Ｘ－ヘッド・キャノン」＋「Ｙ－ドラゴン・ヘッド」＋「Ｚ－メタル・キャタピラー」
自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した場合のみ、融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは必要としない）。
このカードは墓地からの特殊召喚はできない。
手札のカードを１枚捨てる事で、相手フィールド上のカード１枚を破壊する。

《ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン》　ＡＴＫ／２８００

「見たか、紅刃！このモンスターで貴様に引導を渡してやる！」

…うん、このデュエル勝ったわ。

「リバースカードオープン、カウンター罠《昇天の黒角笛（ブラックホーン）》」

「何！？」

「モンスターの特殊召喚を無効にし、破壊する」

《昇天の黒角笛》
カウンター罠
相手モンスター１体の特殊召喚を無効にし破壊する。

「何でですの！？《王宮のお触れ》があるのに！」

「血迷ったか？《王宮のお触れ》の効果で罠カードは全て無効になるんだぞ？」

「ああ。確かに、そいつの召喚を無効にする事はできない。ただ、『発動さえしてくれれば』それでいい」

「何だと？」

「フフフ…そういう事か」

月沙は気づいたみたいだな。

「どういう事だよ？」

「まあ、見ててよ。面白い事が起きるから」

月沙が言い終えると同時に、俺の場のモンスターが白く光り始めた。

「何だこれは？」

「ゴーズ、ごめんな。無駄にリリースする事になっちまって…」

『気にするな。これが最善の策だ。後はお前達に任せた』

ゴーズ達が光の球となり、１つになって白く輝く。

「カウンター罠の発動に成功した時、俺の場のモンスターを全てリリースする事でこいつを特殊召喚する！《裁きを下す者－ボルテニス》を特殊召喚！」

光を内側から弾き飛ばし、中から姿を変えたゼウスが現れた。

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００

『あんな話を聞いた以上、尚更仲間達の想いを無駄にする事はできないな』

「馬鹿な！なぜそのモンスターが召喚できる！？貴様のカウンター罠は全て無効になっているんだぞ！？」

「お前もブルーならよく覚えとけ。《王宮のお触れ》は『効果』を無効にするだけで、『発動』までは無効にできないんだよ！」

「なっ！？」

凄く驚いてるけど、カードテキストはちゃんと読んどけよ…。

『私達がこんなくだらないお触れごときに屈するとでも思ったか？』

「理不尽な掟があるなら、俺達はそれを打ち砕くまでだ！ボルテニスの効果で、リリースした天使族の数だけ相手のカードを破壊する！リリースしたのはカイエンとフレイヤの２体！《ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン》と《王宮のお触れ》の２枚を破壊する！ジャッジメント・パニッシュ！！」

『さあ、裁きの時だ！』

白い電撃の槍が戦闘マシンとお触れをまとめて貫いた。大爆発を起こして崩れ去っていく。

「くそ！ならば、魔法カード《地砕き》を発動！ボルテニスを破壊する！」

《地砕き》
通常魔法
相手フィールド上に表側表示で存在する守備力が一番高いモンスター1体を破壊する。

「もう罠は自由に使えるよな！カウンター罠！手札を1枚捨てて、魔法カードの発動を無効にして破壊する！」

《マジック・ジャマー》
カウンター罠
手札を1枚捨てて発動する。
魔法カードの発動を無効にし破壊する。

「くそっ！これも駄目か！」

「まだだ！カウンター罠で相手のカードの効果を無効にした時、手札から《冥王竜ヴァンダルギオン》を特殊召喚する！」

『我も共に行くぞ！』

黒い穴が開き、龍の姿となったオーディンが飛び出した。

《冥王竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／２８００

「こ、このモンスターは…！」

「ヴァンダルギオンの効果！魔法カードを無効にして特殊召喚した時、相手に１５００ポイントのダメージを与える！デルフト・バスター！」

『喰らうがいい！』

オーディンは体にある青い宝石を光らせ、両手で青い光弾を作り出して発射した。

「うぐあっ…！？」

万丈目　ＬＰ／２５００→１０００

「馬鹿な…今は俺のターンだぞ？なのに、なぜあいつは自分のターンであるかのようにモンスターを繰り出せる…？」

「さて、どうする？まだ何かするか？」

「…《前線基地》の効果で《Ｗ－ウィング・カタパルト》を特殊召喚。カードを２枚セットし、ターンエンドだ」

万丈目の場に青い戦闘機が召喚される。これで『Ｖ』『Ｗ』『Ｘ』『Ｙ』『Ｚ』の５体が全部出たな。

《Ｗ（ダブル）－ウィング・カタパルト》
ユニオンモンスター
星４／光属性／機械族／ＡＴＫ１３００／ＤＥＦ１５００
１ターンに１度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして自分の「Ｖ－タイガー・ジェット」に装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で装備カード扱いになっている時のみ、装備モンスターの攻撃力・守備力は４００ポイントアップする。
（１体のモンスターが装備できるユニオンは１枚まで。装備モンスターが戦闘によって破壊される場合は、代わりにこのカードを破壊する。）

《Ｗ－ウィング・カタパルト》　ＤＥＦ／１５００

「（伏せたのは《聖なるバリア－ミラーフォース－》と《異次元からの帰還》だ。次のターンでもう一度《ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン》を出してやる）」

《異次元からの帰還》
通常罠（制限カード）
ライフポイントを半分払う。
ゲームから除外されている自分のモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。
エンドフェイズ時、この効果によって特殊召喚されたモンスターを全てゲームから除外する。

万丈目
ＬＰ／１０００
手札／２
モンスター／《Ｗ－ウィング・カタパルト》（ＤＥＦ／１５００）
魔法・罠／リバース×２

「俺のターン！」

行くぜ、このターンで決着をつける！

「魔法カード《大嵐》！フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する！」

《大嵐》
通常魔法（制限カード）　フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て破壊する。

「何！？くっ、このターンで使いたくなかったが、仕方ない！リバースカードオープン、《異次元からの帰還》！ライフを半分払い、自分の除外されているモンスターを可能な限り特殊召喚する！」

万丈目　ＬＰ／１０００→　５００

賢明な判断だな。このままだと確実に負ける。なら、予定を変更してでもライフを守るのが１番だ。でもな、これくらい予想済みだ！

「させるか！カウンター罠《神の宣告》！ライフを半分払い、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚と魔法・罠の発動を無効にし、破壊する！」

《神の宣告》
カウンター罠（制限カード）
ライフポイントを半分払って発動する。
魔法・罠カードの発動、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか１つを無効にし破壊する。

「なっ…！？」

強風で万丈目の最後のリバース…ミラーフォースまで吹き飛ばされた。

「バトル！ボルテニスで《Ｗ－ウィング・カタパルト》に攻撃！ボルティ・ジャッジライト！！」

『邪魔だ、消え失せろ！』

白い電撃が《Ｗ－ウィング・カタパルト》を貫く。口は悪いけど、やっぱり頼りになる奴だよ。

「人からひいきでもらったカードで勝負しても、俺には勝てないぜ？」

「！どこでそれを！？」

月沙から聞いたって事は黙っておこう。

「ま、そういうわけだ。…万丈目」

こいつになら言ってもいいよな？間違った道を進んでいる奴にだけ言う決め台詞。

「てめえを裁く！

ヴァンダルギオンでダイレクトアタック！冥王葬送！！」

『これで幕引きだ！』

「ぐわあああぁぁあぁああ！！」

オーディンが放った黒い光線が万丈目に炸裂し、ライフを削り切った。

万丈目　ＬＰ／　５００↓　０

紅刃　ＷＩＮ

「ば、馬鹿な…この俺が、２回も負けるだと…？」

かなり落ち込んでるな。プライド高そうだし、無理もないか…。

「万丈目」

「さんだ！何だ、俺を笑いに来たのか？」

「そんなんじゃねえよ。お前のそのデッキ、クロノス先生からもらったカードで作ったんだろ？」

「だからどうした？持ち主に返せとでも言うつもりか？」

「そんな必要ないだろ。そのデッキはちゃんとお前に着いてきてくれてるじゃねえか」

「？何をふざけた事を…」

「そうじゃなきゃ、あそこで《天よりの宝札》を引けたりしねえよ」

「！」

「手札は0、フィールドも不利だってのに、お前はそのカードを引けた。デッキがお前を信頼してんだよ」

「デッキが…？」

「お前はまだ自分のデッキを信頼し切れていない。もしできたら、俺や十代にも勝てるようになるかもな。じゃあな、楽しいデュエルだったぜ」

言いたい事は全部言った。後はあいつ次第だな。

「やったな、紅刃！」

「ちょっと危なかったけど、何とか勝てたね」

観客席に戻ると、月沙達が迎えてくれた。

「ボルテニスが来てなかったら負けてたかもな。…隼人」

「？」

「階級なんて関係ねえよ。要はお前のやる気次第だ」

「やる気…」

こいつのデュエルは見た事ないけど、まだ強くなれるはずだ。俺もそうだし、月沙や十代、他のみんなだって、成長は止まらない。頑張れば誰だって前に進めるんだ。

「次、これがラストなノーネ。シニョ～ラ月沙、フィールドに上がるノーネ」

「やっと私の番だ！」

そういえば、月沙はまだデュエルしてなかったな。

「よし、行ってこい！」

「楽しいデュエルを見せてくれよ！」

「月沙さん、頑張ってください！」

さて、対戦相手は…。

「もう1人、シニョ～ル瀬川、フィールドに上がるノーネ」

「何！？」

「瀬川だと！？」

「どうしたんですの？」

「瀬川って、確かカードを取り上げたりしている生徒じゃ…」

よりによって、瀬川とぶち当たっちまった…。

いや、これはむしろチャンスだ。奴にカードを返すように交渉するなら、こういった決まりみたいなものが間に入った方がやりやすい。あいつが素直に返すとは思えないからな。

「月沙…」

「わかってる」

既にフィールドに上がっている瀬川を見る月沙の目は、いつになく鋭い。

「あいつは私が倒す」

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第5話　決め台詞は意外と考えつかないものだと思う（後書き）

というわけで後編に続きます。

隼人は全然出てないので無理矢理出しました。でないとどこで出したらいいのやら…。

では、また次回！

第6話　ブチ切れても正気を保てる人は凄いと思う（前書き）

今回は少し早めに更新できました。
ただ、一部が少し暗いです。

それではどうぞ！

第6話　ブチ切れても正気を保てる人は凄いと思う

ＳＩＤＥ／月沙

まさか、実技試験で瀬川と当たるなんて…。

でも、話をつける手間が省けたから嫌ってわけじゃない。このデュエル、負けられない…！

「あ、あの…！」

フィールドに向かう途中で、さっきのレッド生徒に会った。

「君はさっきの…」

「あいつと、デュエルするんですよね…？」

「うん。大丈夫、負けはしないよ。必ず君のカードを取り戻すから、心配しないで？」

元気づけるように話す。この人のためにも、カードを取り返さなくちゃね。

「あ、そうだ」

「？」

「さっき瀬川に踏み付けられたカードがあるでしょ？このデュエル

だけ、使わせてくれないかな？」

「え！？でも、あなたのデッキに合うかどうか…」

「相性は悪くないから大丈夫」

【氷結界】に機械族を入れてるくらいだしね。

「…わかりました。そういう事なら、俺のカード、使ってください！」

デッキケースから取り出したカードを受け取り、私のデッキに加える。

「ありがとう。それじゃ、行って来るね」

「はい、頑張ってください！」

レッド生徒の声援を背中で受け、フィールドに上がる。フィールドには既に瀬川がいた。

瀬川「ほう、てめえはさっきの奴じゃねえか。それに、銃のA番と来たもんだ。少しくらいデュエルが強いからっていい気になってんじゃねえよ」

（デュエルが強いからって調子に乗ってんじゃねえよ）

瀬川の言葉と昔のいじめっ子の言葉が重なる。嫌な事を思い出さ

せないでほしいな。

「いい気になった覚えはないけどね。私より強い人なんていくらでもいるでしょ？」

「いや、最強は俺様１人。他は雑魚だけだ」

「…っ！このデュエルで私が勝ったら、奪ったカードを全部持ち主に返しなさい」

「別にいいぜ。そのかわり、てめえが負けたらてめえのカードをよこせ」

「いいわ。それでデュエルよ」

ここで負けるようじゃ、この先の戦いを乗り越える事はできない。これは試練のようなもの。でも、人の想いを背負っている今は負ける気がしない！

「それでは、始めるノーネ」

「「デュエル！」」

月沙ｖｓ瀬川

「先攻は私から！ドロー！私は《氷結界の武士》を召喚！」

水色の鎧武者を召喚する。氷結界の一族の中では重要な下級アタッカーだ。

《氷結界の武士》　ＡＴＫ／１８００

「カードを2枚セットしてターンエンド！」

月沙
ＬＰ／４０００
手札／3
モンスター／《氷結界の武士》（ＡＴＫ／１８００）
魔法・罠／リバース×2

「俺様のターン、ドロー！そんな雑魚、すぐに潰してやるぜ！」

眉間に皺が寄るのがわかる。私の仲間を雑魚呼ばわり…？

「俺様は《ゴブリンエリート部隊》を召喚！」

鎧で武装したゴブリンの集団が現れた。

《ゴブリンエリート部隊》
効果モンスター
星４／地属性／悪魔族／ＡＴＫ２２００／ＤＥＦ１５００
このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。
次の自分のターン終了時までこのカードは表示形式を変更できない。

《ゴブリンエリート部隊》　ＡＴＫ／２２００

「このモンスターはゴブリンの中でも選ばれた奴だけを集めた軍団！てめえのやわなモンスターとは格が違うんだよ！」

さっきからごちゃごちゃと…！

「行け！その鎧武者に攻撃だ！」

「罠発動《次元幽閉》！攻撃モンスターを除外する！」

武士の前に次元の裂け目が発生し、ゴブリン達を吸い込んでしまった。

《次元幽閉》
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
その攻撃モンスター1体をゲームから除外する。

「ちっ。カードを2枚セットしてターン終了だ」

瀬川
ＬＰ／４０００
手札／2
モンスター／無し
魔法・罠／リバース×2

「私のターン！」

伏せカードが気になるけど、ここは攻める！

「《氷結界の封魔団》を守備表示で召喚！」

私の場に赤いコートを着た女性が現れる。

《氷結界の封魔団》　ＤＥＦ／２０００

「そしてリバース発動《血の代償》！ライフを５００払う度にモンスターを通常召喚できる！」

《血の代償》
永続罠（準制限カード）
５００ライフポイントを払う事で、モンスター１体を通常召喚する。この効果は自分のメインフェイズ時及び相手のバトルフェイズ時にのみ発動する事ができる。

「この効果でライフを５００払い、《氷結界の軍師》を召喚！」

次に召喚したのは、白い髭を生やした老人。

月沙　ＬＰ／４０００→３５００

《氷結界の軍師》　ＡＴＫ／１６００

「軍師の効果で、手札の氷結界のモンスターを１枚捨て、カードを１枚ドローする！手札の《氷結界の番人ブリズド》を墓地に送り、１枚ドロー！バトル！軍師でダイレクトアタック！」

瀬川「ハッ、ぬるいんだよ！《攻撃の無力化》を発動！戦闘を無効にしてバトルフェイズを終了する！」

突如現れた障壁に攻撃が弾かれた。

「…カードを１枚セットし、ターンエンド」

月沙
ＬＰ／３５００
手札／１
モンスター／《氷結界の武士》（ＡＴＫ／１８００）《氷結界の封魔団》（ＤＥＦ／２０００）《氷結界の軍師》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／《血の代償》リバース×１

「俺様のターン！どんなに雑魚を並べようと、この俺様を倒す事はできない！」

「…雑魚？私の仲間達が？」

「まずは《ニュート》を召喚！」

風属性の悪魔族…組み合わせは微妙だけど、効果は強い。

《ニュート》
効果モンスター
星４／風属性／悪魔族／ＡＴＫ１９００／ＤＥＦ　４００
リバース：このカードの攻撃力・守備力は５００ポイントアップする。
また、このカードが戦闘によって破壊された場合、このカードを破壊したモンスターの攻撃力・守備力は５００ポイントダウンする。

《ニュート》　ＡＴＫ／１９００

「そして《二重召喚》を発動！このターンもう一度通常召喚を行える！《ニュート》を生け贄に《邪帝ガイウス》を召喚！」

「！」

瀬川の場に、紫のマントを羽織った黒い悪魔が召喚される。

《邪帝ガイウス》　ＡＴＫ／２４００

「あれは今朝奪い取ったカード…！」

「やっぱりデッキに入れてやがったか！」

「ガイウスの効果発動！生け贄召喚に成功した時、モンスター１体を除外する！封魔団を除外！」

ガイウスが放った黒い球体が封魔団を飲み込み消滅した。

「あっけねえな。所詮雑魚はこの程度か」

「あいつ、さっきから雑魚だの何だの言いやがって…！」

「紅刃君、落ち着いて！」

翔君が紅刃をなだめているのが見える。いや、それよりも…。

瀬川の使うモンスターは、覇気が感じ取れない。おそらく、あのデッキは奪ったカードで構成されてる。そんなデッキが最強だなんて、笑い話にもならない。

「ガイウスでその鎧武者を攻撃！」

「罠発動《和睦の使者》！このターンの間、私のモンスターの戦闘破壊と戦闘ダメージを無効にする！」

「ちっ、しぶとい野郎だ…ターンエンドだ」

瀬川
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《邪帝ガイウス》（ＡＴＫ／２４００）
魔法・罠／リバース×１

「私のターン！」

少し危険だけど、仕方ない。

「《壺の中の魔術書》を発動。お互いにカードを3枚ドローする」

《壺の中の魔術書》
通常魔法（漫画オリジナル）
互いのプレイヤーはカードを3枚ドローする。

「ほお。わざわざ手札を増やしてくれるのか」

「《氷結界の舞姫》を召喚！」

『私も行きます！』

スイレンが私のフィールドに躍り込んだ。頼りにしてるよ、相棒！

《氷結界の舞姫》　ＡＴＫ／１７００

「《血の代償》の効果を使い、軍師をリリースして《氷結界のロイ

ヤル・ナイト》をアドバンス召喚！」

軍師と入れ代わりで出て来たのは、槍を持った西洋風の白い騎士だった。

《氷結界のロイヤル・ナイト》
効果モンスター
星５／水属性／戦士族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ２０００
このカードがアドバンス召喚に成功した時、相手フィールド上に「アイスコフュントークン」（水族・水・星１・攻１０００／守０）１体を攻撃表示で特殊召喚する。
このトークンはアドバンス召喚のためにはリリースできない。

月沙　ＬＰ／３５００→３０００

《氷結界のロイヤル・ナイト》　ＡＴＫ／２０００

「ロイヤル・ナイトがアドバンス召喚に成功した時、相手の場に《アイスコフュントークン》を攻撃表示で特殊召喚する！」

《アイスコフュントークン》　ＡＴＫ／１０００

「あ？俺にトークンを渡すとか、何考えてんだ？」

「何であいつにモンスターを渡したんだよ？あいつの方が有利じゃん」

「いや、そうとは限らないぜ？」

紅刃は気づいたみたいだ。十代もフィールドをよく見ようよ…。

「そして、フィールド魔法《伝説の都　アトランティス》を発動！」

周りが古の海底神殿へと変わっていく。シンクロ召喚には不向きだけど、シンクロが使えないから意味はない。

《伝説の都（みやこ）　アトランティス》
フィールド魔法
このカードのカード名は「海」として扱う。
手札とフィールド上の水属性モンスターはレベルが１つ少なくなる。
フィールド上の水属性モンスターは攻撃力と守備力が２００ポイントアップする。

「手札とフィールドの水属性モンスターはレベルが１つ下がり、攻守が２００ポイントアップする！」

《氷結界の武士》　ＡＴＫ／１８００→２０００　Ｌｖ．４→３

《氷結界の舞姫》　ＡＴＫ／１７００→１９００　Ｌｖ．４→３

《氷結界のロイヤル・ナイト》　ＡＴＫ／２０００→２２００　Ｌｖ．５→４

《アイスコフュントークン》　ＡＴＫ／１０００→１２００　Ｌｖ．１→１

「ハッ、そんなちっぽけなパワーアップじゃ、俺のガイウスは倒せないぜ？」

何が『俺の』だ…奪い取ったくせに…。

『あの…姫様？』

「（え、スイレン？どうしたの？）」

『いえ、凄く険しいお顔をしておられましたので…』

「（ああ、そう？…大丈夫、心配しないで）」

いけないいけない、感情に流されるところだった。

「確かに私のこのモンスター達じゃガイウスを倒せない。でも、プレゼントしたトークンなら余裕で倒せるよ？」

「何！？しまっ…！」

「ロイヤル・ナイトで《アイスコフュントークン》に攻撃！ロイヤル・シェイパー！」

ロイヤル・ナイトが回転する槍を前に突き出しトークンに突進し、貫き破壊した。

「ぐおっ！？」

瀬川　ＬＰ／４０００→３０００

「武士を守備表示に変更し、効果発動！守備表示になった時、自身を破壊し、カードを１枚ドローする！」

武士が光の粒子となって消えていく。

「カードを1枚セットし、ターンエンド！」

月沙
ＬＰ／３０００
手札／１
モンスター／《氷結界の舞姫》（ＡＴＫ／１９００）《氷結界のロイヤル・ナイト》（ＡＴＫ／２２００）
魔法・罠／《伝説の都　アトランティス》《血の代償》リバース×１

手札は少ないけど、この調子なら…！

「ちっ、生意気な面しやがって」

（生意気なんだよ、お前は！）

また昔と重なった。つくづく癪に障る…！

「パワーアップってのはこうするんだよ！ガイウスを生け贄に、《偉大魔獣　ガーゼット》を召喚！」

不気味なモンスターが現れ、ガイウスを取り込む。あのモンスターは確か…。

《偉大魔獣（グレート）　ガーゼット》
効果モンスター
星６／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　　０／ＤＥＦ　　０

このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げたモンスター1体の元々の攻撃力を倍にした数値になる。

《偉大魔獣　ガーゼット》　ＡＴＫ　　０

「攻撃力０？」

「何スか、あのモンスター？」

「ちょっとやばいかもな」

「？」

「ガーゼットの攻撃力は、生け贄にしたモンスターの攻撃力の２倍の数値になる！ガイウスの攻撃力は２４００！よって、ガーゼットの攻撃力は４８００だ！」

《偉大魔獣　ガーゼット》　ＡＴＫ　　０→４８００

「攻撃力４８００！？」

「何よあのモンスター、でたらめじゃない！」

「さらに装備魔法（ビッグバン・シュート）を装備！攻撃力は４００ポイントアップし、貫通効果を得るぜ！」

《ビッグバン・シュート》
装備魔法
装備モンスターの攻撃力は４００ポイントアップする。
装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を

攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
このカードがフィールド上から離れた時、装備モンスターをゲームから除外する。

《偉大魔獣　ガーゼット》　ＡＴＫ／４８００→５２００

５２００…スイレンに攻撃されたらおしまいだ。

「どうだ！てめえら雑魚を軽く超えるモンスターだ！てめえはここで終わりだ！」

もう勝った気でいるのか、私達を見下し、下劣に笑っている。こいつは中学の連中と同じ、あるいはそれ以下の人間だ。

握りしめた右手が震えている。私もあまり感情を抑え切れてない。

「あそこでてめえを応援している奴らも、てめえのモンスターも、てめえ共々ただのクズだ。クズはクズらしくくたばってろよ！」

（クズはクズらしくくたばってりゃいいんだよ！）

ブチンッ

ＳＩＤＥ／スイレン

「《偉大魔獣　ガーゼット》で、その女に攻撃！」

ガーゼットの魔の手が私に迫ります。ここでやられたら、姫様が負けてしまう…！

「…罠発動《グラヴィティ・バインド－超重力の網－》」

姫様がリバースカードを発動させると、緑色の網が現れてガーゼットとロイヤル・ナイト様を捉えました。

「発動している間は、レベル４以上のモンスターは攻撃できない」

《グラヴィティ・バインド－超重力の網－》
永続罠（制限カード）
フィールド上に存在する全てのレベル４以上のモンスターは攻撃をする事ができない。

「くそ！どこまでもしぶとい野郎だ！」

「上手い！あれならガーゼットさえ何とかすれば、アトランティスの効果もあいまって月沙だけ攻撃できる状態になる！」

三沢様の言う通り、アトランティスの効果でレベルが下がっている私達なら、グラヴィティ・バインドの効果を受ける事はありません。

「カードを1枚セットしてターン終了だ！」

瀬川
ＬＰ／３０００
手札／１
モンスター／《偉大魔獣　ガーゼット》（ＡＴＫ／５２００）
魔法・罠／《ビッグバン・シュート》リバース×２

『姫様、ありがとうございます！おかげで助かり…姫様？』

振り返ってお礼を言おうとしたら、姫様の様子がおかしい事に気づきました。

私は長年姫様に仕えているので、姫様の事ならたいていわかります。今の姫様は何と言うか、怒りのオーラのようなものが滲み出ています。

『姫様…私はまだ心配です。姫様がまたあの時のようになられるのではないかと思うと…』

「（…大丈夫）」

『！』

「（もう流されない。あんな惨劇は二度と起こさない）」

姫様の声は怒りが滲んでこそはいますけど、はっきりとした決意がこもっていました。

『フフ、そうですか。なら安心です。私は姫様について行きますよ』

「（…ありがとう）」

そう言って、姫様はご自分のヘアゴムに手をかけ、

「（大丈夫…ちょっと、スイッチを切り替えるだけだから）」

一息で外しました。

ＳＩＤＥ／紅刃

白銀の髪が重力に引かれ背に落ちる。腰まである長髪が輝いて見えた。

「？なんで急に髪を解いたんだ？」

「…ついに出たか…」

「どういう事？」

明日香が聞いてくる。こいつらには話してなかったな。

「とうとうブチ切れやがったな、あいつ」

「え？ブチ切れるって…」

「月沙はブチ切れるとヘアゴムを外す」

「「ええっ！？」」

ジュンコとももえが驚いてる。こいつらになら、話してもよさそうだな。

「俺と月沙が中３の時の事だ…」

先生の手伝いで帰りが遅くなり、月沙も先に帰ってるだろうと思って校門を出た時だ。

「真川君！」

呼ばれて振り向くと、月沙の友人が息を切らして走って来ていた。

俺がいじめっ子の連中を黙らせ続けた結果、それまで月沙と仲良くしたいと思っても近づけなかった奴らが月沙と交流するようになった。こいつ…加奈美は、その前から月沙と仲良くしてる。今じゃ、俺と同じくらいよく話す仲だ。

そんな奴が、頭から血を流したまま俺に走り寄って来た。

「な、どうした！？その怪我は…」

「ハァ、ハァ…私の事はいいの…それよりも、月沙ちゃんが、いつもの人達に絡まれて路地裏に…」

「！どの辺りだ！？」

「案内する！こっちよ！」

俺は加奈美と一緒に月沙がいる場所へ走った。

「怪我は大丈夫なのか？」

走りながら尋ねた。応急処置すらしてないのに、その怪我でよく走れるもんだ。

「大丈夫、今は応急処置をしてる暇はないから…！でも、それだけじゃないの…」

「？どういう事だ？」

「それが…月沙ちゃんが本気で怒って、その人達を…！」

「月沙が！？」

あいつはそこまで喧嘩は強くない。射撃の腕はぴか一だけど、銃を持ち歩いているわけじゃない。一体何が…？

路地裏の入口に入ると、悲鳴が聞こえてきた。

「ひぃぃ！ぐわっ！」

「うわわ、た、助け、うぎゃあ！」

「何が起こってんだ？」

「急ぎましょ！」

広場に着くと、信じられない光景が広がっていた。

軽く３０人を越えてるだろう男子の連中がほとんど倒れている。

ある奴は胃の中の物を吐き、ある奴は顔中青く腫れていて、またある奴は恐怖のあまりか、気を失っている。

まだ立っているのは3人だけ。それぞれ、鉄パイプ、メリケンサック、釘バットを持っているが、みんな震えているのが丸わかりだ。

そして、月沙はというと…。

「ハァ、ハァ、ハァ…」

体のあちこちから血を流している。ヘアゴムはちぎれてコンクリートの床に落ちていて、長い銀髪は垂れ下がり、所々が血で汚れている。右手には鉄パイプが、血が滲むくらい強く握られていた。

少なくとも、俺の知ってる月沙じゃなかった。

「……何だよ、これ…？」

「月沙ちゃんと一緒に帰ってると、そこの人達にここまで連れて来られたの…」

『ここなら誰も助けに来ないぜ？』

『…どういうつもり？』

『決まってんだろ？いつも紅刃のせいでお前をぶっ飛ばせなかったんだ。今はあいつはいない、これはチャンスじゃねえか』

『…！加奈美には関係ないでしょ。加奈美は早く帰してよ』

『同罪だよ。お前とつるむ奴はみんな汚れてんのさ』

『っ、あんた…！』

『月沙ちゃん、気にする事ないよ。落ち着いて』

『そういうわけだ。さっさとくたばれ！』

『！きゃ…！』

ガツンッ！

『加奈美！大丈夫！？しっかりして！』

『クズはクズらしくくたばってりゃいいんだよ！』

「この怪我はその時に鉄パイプでやられたの。そしたら、月沙ちゃんが本気で怒って…」

「最終的にこうなった、てのか…」

多分、自分だけが被害者だったら、こうはならなかっただろうな。自分の友達である加奈美が傷つけられ、罵られたからブチ切れたんだろう。

「な、何だよ…お前、本当に月沙かよ…？」

「…それ以外の誰に見える？」

月沙の声は、聞いた事のないくらい冷たく、殺気を帯びていた。

「た、た、たかがお前の友達1人を殴ったくらいで、なんでそんなにキレるんだよ…？」

「『たかが』？」

月沙は気絶してる奴の頭を踏み付けた。いつもなら、死んでもやらない行為だ。

「その『たかが』なんて思う気持ちで、私の大切な友達を傷つけたって言うの？」

…間違いない。あいつがこんなに変わっちまったのは、自分にやっとできた大切な友達である加奈美が傷つけられた上に馬鹿にされたからだ。

月沙はずっといじめられてきたから、人との関わりがどれだけ大切なものかは俺よりも理解している。だからこそ、こうなった。

「私のせいだ…私がいたから、こんな事に…」

「お前のせいじゃない。悪いのはあいつらだ。でも…」

こんなのは、酷すぎる…！

「加奈美に、『くたばれ』って言ったよね…じゃあ、貴様らがくたばったら、人の痛みがわかるのか…？」

「ひぃ…！」

口調までもが変わった月沙の目は、怒りと憎悪に染まり、殺気を放ちながら連中を睨んでいた。いつもの優しい眼差しは、どこにもない。

月沙が鉄パイプを振り上げる。目の前まで来てるのに、連中は逃げる事すらできないでいる。

「月沙ちゃん…やめて…お願いだから、もうやめてよ…」

泣きながら呟く加奈美を見て、俺も覚悟を決めた。

月沙が右腕に握ったそれを、鉄パイプの男の脳天目掛けて振り下ろし、

ガァン！

俺が腰の木刀を引き抜き、鉄パイプを受け止めた。

「…！」

「なっ、お前は…！？」

月沙は鉄パイプを下ろし、俺を同じ目で見据えた。

「紅刃…何のつもり？」

「月沙、もういいだろ？こいつらは、お前を怒らせたらどうなるか、嫌と言う程わかったはずだ。もうお前が手を出す必要はない」

「いや…こいつらは、加奈美を傷つけた。だから、こいつらにも同じ痛みを…！」

「それでも、度が過ぎてちゃ何にもなんねえんだよ！！」

「！？」

思わず怒鳴ってしまった。でも、今は関係ない…！

「無駄に復讐しまくっても何も残らない！これ以上無駄に傷つけていたら、こいつらと同じかそれ以下になるんだぞ！」

「……」

「誰もそんな事望んじゃいない！これ以上はただの自己満足だ！何も生みやしないんだよ！」

俺の声が広場に響く。この場にいる全員が、俺の言葉を黙って聞いていた。

カラン…

月沙の手から、鉄パイプが落ちた。そして、腰が抜けたのか、単なる疲労なのか、月沙はその場にへたり込んだ。

「……さい……」

「？」

「ごめん…なさい……ごめ…」

月沙は、感情が高ぶっていたせいか、泣きながら何度も謝った。

「わかったんなら、それでいい。もう二度とこんな事するなよ」

俺も、月沙の頭を撫でて慰めた。

「加奈美、ちょっと月沙を頼む」

「うん…。月沙ちゃん、私なら大丈夫だから、もう安心して？」

「…うん……ぐすっ……うぅ……」

「…おい、お前ら」

「！」

俺は、緊張が解けて座り込んでいる連中に話し掛けた。

「わかったろ？あいつを本気で怒らせたらどうなるか…。次にこんな事をしてみろ、俺も黙っちゃいないぜ？」

「「「ひっ…す、すみませんでした！！！」」」

連中は、３人揃って土下座した。こんな事をしても罪を償った事にはならないだろ…。

誰よりも仲間思いだからこそ、誰かが傷つくと鬼にだってなる。

それが、あいつの隠れた一面だ。

「それからは、あいつはブチ切れる度にヘアゴムを外すようになっ

た。あいつは『スイッチを切り替える』ためにやってるらしいけどな。でも、あの時みたいな事には二度とならなかった。ちゃんと自分をコントロールできてるんだ」

「…そんな事が…」

みんな気まずそうにしている。こんな話を聞かされた直後じゃ、仕方ないか。

「ま、言えるのは、あいつは変に暴走したりしない事だな。それと…」

俺は、怒りを宿した目で射抜くように瀬川を睨む月沙を見て、さらに付け加えた。

「あの状態の月沙が負けた事は一度もない」

ＳＩＤＥ／月沙

「何だ？急に髪を解いて、なんになる？」

「…言いたい事はそれだけ？」

「あ？」

「貴様みたいな下劣な奴に、紅刃達の何がわかる？」

瀬川を真っ直ぐに見据える。見えるのは、憎たらしい顔が驚く有

様。

「な、何だよ…何生意気な目で俺様を見てんだよ！」

「私だけならまだいい。でも、私の大切な仲間達を馬鹿にした貴様は許さない！」

「…っ！ちっ、早くしろ、てめえのターンだ！」

このドローで逆転のカードを引かないと、私は負ける。

「私の…」

デッキよ、力を貸して！

「ターン！！」

引いたのは…。

「魔法カード《天よりの宝札》！お互いに手札が6枚になるようにドローする！」

最高の一手だ！

「ここでドロー加速…なんて運なの…？」

「舞姫の効果発動！私の場に他の氷結界のモンスターがいる時、手札の氷結界のモンスターを見せる事で、見せた数だけ相手のセットされている魔法・罠カードを手札に戻す！手札の《氷結界の破術師》と《氷結界の虎将　グルナード》を見せて、そのリバースカード

2枚を手札に戻す！風雪の舞！」

『姫様の障害になるものは全て取り除きます！』

スイレンが起こした吹雪が、瀬川の伏せカードをさらっていく。

「何っ！？（ちっ、ミラーフォースと《魔法の筒》が…）」

《魔法の筒（マジック・シリンダー）》
通常罠（制限カード）
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「そして、魔法カード《アームズ・ホール》を発動！デッキの上からカードを1枚墓地に送り、デッキか墓地から装備魔法を1枚手札に加える！」

《アームズ・ホール》
通常魔法
自分のデッキの一番上のカード1枚を墓地へ送って発動する。
自分のデッキ・墓地から装備魔法カード1枚を手札に加える。
このカードを発動するターン、自分は通常召喚する事はできない。

「ん？あいつ、あんなカード持ってたっけ？」

「いや、あれはおそらく…」

墓地に送られたカードを見て、笑みがこぼれた。このデュエルを終わらせるのにふさわしいモンスターが出せる。

「私はデッキから《魔界の足枷》を手札に加える」

「何だそれは？聞いた事ねえぞ？」

この時代のカードじゃないから当然だよ。

「そして、魔法カード発動（ミラクル・フュージョン）！」

「《ミラクル・フュージョン》！？」

「あれはＥ・ＨＥＲＯ専用の魔法じゃ…！」

「…あいつまさか…」

「私のフィールドと墓地から融合素材を除外し、Ｅ・ＨＥＲＯの融合モンスターを融合召喚する！墓地の《Ｅ・ＨＥＲＯ　アイスエッジ》と水属性モンスター《氷結界の番人ブリズド》を除外！」

《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　アイスエッジ》

効果モンスター

星３／水属性／戦士族／ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ　９００

１ターンに１度、自分のメインフェイズ１で手札を１枚捨てて発動する。

このターンこのカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。また、このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、相手の魔法＆罠ゾーンにセットされたカード１枚を破壊する事ができる。

「俺の知らないＥ・ＨＥＲＯ！？凄え、何が出てくるんだ！？」

「待て！そんなモンスター、いつ墓地に…」

「たった今の効果（アームズ・ホール）で墓地に送られた」

「なっ！？そんな馬鹿な事が…！？」

私のフィールドで冷気が渦を巻き始めた。Ｅ・ＨＥＲＯを使うのは十代だけじゃない！

「私は、貴様が雑魚だと言うモンスター達を、私のデッキを信じている！だからこそデッキが応えてくれた！そしてこのモンスターで貴様に引導を渡す！融合召喚《Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ》！！」

冷気の中から、純白に身を染めた氷のＨＥＲＯが現れた。

《Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　アブソルートＺｅｒｏ（ゼロ）》
融合・効果モンスター
星８／水属性／戦士族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ２０００
「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター＋水属性モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。
このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する「Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ」以外の水属性モンスターの数×５００ポイントアップする。
このカードがフィールド上から離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ》　ＡＴＫ／２５００→２７００　Ｌｖ．８→７

「すっげえ！めちゃくちゃかっこいいぜ！！」

「アニキ、はしゃぎすぎッスよ！」

「アブソルートＺｅｒｏは、仲間の存在を力に変えるモンスター！自分以外のフィールド上の水属性モンスターの数だけ、攻撃力が５００ポイントアップする！フィールドには舞姫とロイヤル・ナイトがいる。よって、攻撃力は１０００ポイントアップする！」

アブソルートＺｅｒｏの両手が刃へと形を変えていく。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ》　ＡＴＫ／２７００→３７００

「だが、俺様のガーゼットには勝てないぜ？」

確かに、これだけじゃまだ足りない。でも、私にはレッド生徒が呼び出してくれたこのカードがある！

「装備魔法《魔界の足枷》を発動。ガーゼットに装備」

「俺様のモンスターに装備？何を考えて…」

「装備モンスターの攻守は１００になる！」

「な、何だとぉ！？？」

《魔界の足枷（あしかせ）》
装備魔法

装備モンスターは攻撃する事ができず、攻撃力・守備力は１００になる。
また、自分のスタンバイフェイズ毎に、装備モンスターのコントローラーに５００ポイントダメージを与える。

不気味な顔が彫られた巨大な鉄球が付いた足枷がガーゼットに掛けられた。まるで、罪人を裁くために足止めをしているようだ。

《偉大魔獣　ガーゼット》　ＡＴＫ／５２００↓　１００

「この《アームズ・ホール》は貴様があの時踏みにじったレッド生徒のカードだ」

「は！？あいつの！？」

「貴様が雑魚だと言ったこのカードには、持ち主の想いが込められている。奪ったカードで作った貴様のデッキより何百倍も価値のあるカードだ！」

「何だと…？」

「さらに、魔法カード《スター・ブラスト》を発動！ライフを５００の倍数で払い、手札かフィールドのモンスター１体のレベルを、エンドフェイズ時まで払ったライフ５００につき１つ下げる！ライフを２０００払い、アブソルートＺｅｒｏのレベルを４つ下げる！これでグラヴィティ・バインドの効果は受けない！」

《スター・ブラスト》
通常魔法
５００の倍数のライフポイントを払って発動する。

自分の手札・フィールド上のモンスター1体のレベルをこのターンのエンドフェイズ時まで、５００ライフポイントにつき1つ下げる。

月沙　ＬＰ／３０００→１０００

《Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ》　Ｌｖ．７→３

「アブソルートＺｅｒｏでガーゼットに攻撃」

絶対零度の戦士が悪魔を切り裂く。すると、ガーゼットの足元が青白く光り出した。

「…Ｆｒｅｅｚｉｎｇ　ａｔ　ｍｏｍｅｎｔ」

ガーゼットは一瞬で凍り付き、光りを放ち粉々に砕け散った。

瀬川　ＬＰ／３０００→　０

月沙　ＷＩＮ

辺りがしんと静まり返っている。その中で、瀬川は膝をついた。

「そんな馬鹿な…この俺様が…こんな雑魚に…」

「約束だ。奪ったカードは全部持ち主に返せ」

デュエルディスクを片付けて歩み寄る。まだ1番の目的を果たしてない。

「ハッ、誰がそんな事…」

「しらばっくれても無駄。このデュエルディスクは友人の手作りでね、録音もしておいたし、他のデュエルディスクに音声を流す事もできる。この賭けの話は学園のデュエリスト全員が知っている」

「んなっ！？」

「カードを返せ！」

「俺のカードもだ！」

「デュエルに負けたんだから大人しく返せ！」

途端に、ブーイングの嵐が巻き起こった。どれだけの人からカードを奪ったんだ…！

「ち、畜生！これは俺のもんだ！誰にも渡さねえ！」

瀬川はデッキをしまって逃げ出した。

私はというと、ポケットにしまってたヘアゴムで髪を縛り始めた。

『姫様、追わなくてもよろしいのですか？』

「うん。もう向こうにあいつがいるから」

『え？』

私が指を指した方にいるのは、出口へ走っていく瀬川と…

『紅刃様！？』

剣型のディスクを振り上げ、飛び上がる紅刃だった。

「おおおおおお！！」

「ん？ひっ！？」

ガドンッ！！

「がっ…」

紅刃は着地する直前に、瀬川を上から叩き斬った。といっても、真剣じゃないから殴ったようなものだけど。

「ったく、潔くしてりゃ俺が斬る事にはならなかったろうに」

紅刃がディスクを鞘に納めると同時に、歓声が上がった。

ＳＩＤＥ／紅刃

あれから、瀬川が奪ったカードは全部持ち主に返却された。結構な人数から奪い取ってたみたいだ。

「はい、君のカード」

月沙は、ガイウスと借りていた《アームズ・ホール》をレッド生徒に返した。

「《アームズ・ホール》、役に立ったよ。ありがとう」

「い、いえ！お礼を言うのはこちらの方です！それに、あなたの役に立てて光栄です！」

「そんな大袈裟な…」

「そういえば、なぜ最後にアブソルートＺｅｒｏを出したんだ？舞姫とロイヤル・ナイトだけでも勝てただろ？」

苦笑いしてる月沙に三沢が質問をする。

「《アームズ・ホール》の効果でたまたまアイスエッジが墓地に行ったから」

「そんな理由で…」

あ、ジャックに影響されてきてるな、こいつ。その内、エンターテイメントがどうのこうのとか言わないでくれよ？

「本日の試験は終了です。皆さん、お疲れ様でした」

話の途中で、ハ…じゃなくて、スキンヘッドのおじさん…鮫島校長が直々に試験の終了を告げた。

「遊城十代君、真川紅刃君、フィールドに来てください」

「「え？」」

いきなり何を言い出すんだ？

「2人共行きなさい」

「了解。十代、ちょっとつかまってろ」

「え？おわっ！？」

下に下りるのがめんどくさいから、十代と一緒にフィールドに飛び下りた。

「びっくりした…凄えな、紅刃！」

「そりゃどうも」

「あ…ゴホン！遊城十代君。君は最後まで自分のデッキを信頼し、モンスターとの熱き友情を見せ、そして何より、最後の最後まで勝負を捨てることなく、終始デュエルを楽しむ姿勢を見せてくれました。よって、ラー・イエローに昇格です！」

「え、昇格？」

会場が大歓声に包まれる。昇格か、やったじゃねえか。

「そして、真川紅刃君」

「？」

「相手がオベリスク・ブルーでも対等に向き合い、勝利してなお相手を尊重する態度！そして、果敢にも不正を犯した生徒を止めるその勇気！とても感動しました。君に、オベリスク・ブルーへの昇格を認めます！」

「え？俺が？」

さっきよりもでかい歓声が響く。

「あまり実感ないな…階級なんて気にした事ないし…」

「紅刃も同じ事考えてるのか？」

「まあな。わかりました。ありがとうございます！」

「これからも精進するよう心がけてください」

「俺は…やっぱり辞退します！」

「「え！？」」

辞退！？何言って…いや、十代ならおかしくないな。

「俺はオシリス・レッドの方が居心地がいいんで！」

「ま、そんな選択もありか！」

こうして、俺は晴れてオベリスク・ブルーになり、十代はオシリス・レッドに残る事になった。

「なんじゃこりゃ…」

『わりと豪華だな』

『我は慣れているからいいが…』

ブルー寮の俺の新しい部屋に荷物を全部持って来たのはいいけど…。

「何だこの格差社会は…」

他の寮とは比べものにならないくらい豪華だった。こんな部屋を1人で使っていいのかよ…？

「確かに、イエローとレッドとはかなりの違いがあるな」

「この学園の風習だから仕方ないよ」

「うおっ！？いつの間に！？」

なぜか月沙と三沢もついて来てた。俺達って、なんだかんだで三沢と仲がいいんだな。

「つーか、なんでお前らまでついて来てんだよ？」

「ブルー寮の部屋がどうなっているのか気になってね」

「何か手伝う事ある？」

「いや、荷物はたいした量じゃないから大丈夫だ」

「そう？ならいいけど…。それにしても、ブルーの制服似合ってるじゃん」

今の俺は、レッドやイエローのより丈が長いブルーの制服を着ている。腰にはディスクを納めた鞘付きのホルダーを身につけている。

「そうか？サンキュな」

「しかし、昇格したかった理由が『服を変えたかったから』とは…」

「俺には黄色の服は似合わないからな」

そう、これが俺が昇格したかった唯一の理由だ。制服の色さえ変えてもらえりゃ何でもよかった。

「でも、ここはしばらく慣れそうにないな。ハァ、これならオシリス・レッドに入れてもらった方がよかったかな？」

「さすがに自分から降格したいなんて言ったら、先生達は腰を抜かすよ？」

「言えてら」

ま、なんにせよ、秘密の用事がある時に邪魔が入る事はなさそう

だ。

その日は、月沙と三沢を部屋に入れていろいろ話をして盛り上がった。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第6話　ブチ切れても正気を保てる人は凄いと思う（後書き）

はい、というわけで第6話でした！

月沙に関してですが、早速設定に不備が…。

ブチ切れると冷たい性格になるはずなのに、書いている内に「あれ？別にそこまで冷たくなくね？」みたいな事に…。自分で考えた設定を無視とか自分は何をやってるんだか…。

次回は廃寮の話にする予定ですので、楽しみにしててください。

それでは、葦切でした！

第7話　メインキャラが特殊能力を持っているのはよくある話（前書き）

やっと更新できました。そして長いです。

今回はオリジナルの設定が入ります。後、あの人が出て来ます。

それではどうぞ！

第7話　メインキャラが特殊能力を持っているのはよくある話

ＳＩＤＥ／紅刃

俺がオベリスク・ブルーに昇格してから数日が経った。

部屋はまあ、いいとしよう。だが、食い物くらいは調整してくれよ…。

朝昼晩毎回豪華な飯を出されても困るっての。フランス料理が出て来た時は、さすがに教職員一同の頭を疑ったぞ？

月沙もこれには参ってるらしく、いつもレッド寮やイエロー寮で飯を食ってる。今じゃ俺も一緒に他の寮の世話になってる。

で、今はイエロー寮で飯を食った帰りだ。

「今日はイエローに行って正解だったな。カレー美味かった」

「紅刃の好物だもんね」

ピリリリ、ピリリリ

「ん？メール？」

俺の携帯から着メロが流れる。誰からだ？

「誰から？」

「あ、フォッタじゃねえか」

まさかの自称神様かよ。ええと、内容は…。

『やっほ〜、元気してる？（＾Ｏ＾）／

月沙を連れて君の部屋に来てくれないかな？

それじゃ、待ってるよ〜』

「軽っ！？てか何こいつ今俺の部屋にいんの！？」

『顔文字まで使ってますね…』

「カイエン、ゴーズ、いつの間に…」

俺の後ろには、いつの間にかカイエンとゴーズが立っていた。

『神が直々に出て来るという事は、何かあったんじゃないか？』

「可能性はあるな。元々俺達の目的はイレギュラー討伐だし」

「じゃあ、早く行こう」

「やあ、久しぶり！」

「勝手に人の部屋に上がってんじゃねえよ…」

部屋に戻るといつぞやの白髪の少年がいた。とりあえず、俺と月沙は適当な所に腰掛けた。

「で、話は何だ？敵の居場所でも突き止めたのか？」

「いや、まだだよ。その前に、君にやってほしい事があるからね」

「やってほしい事？」

何か無茶苦茶な事を言わなきゃいいんだけど…。

「とりあえず、精霊のみんなにも出て来てもらっていいかい？」

『何の用だ？』

俺達が呼ぶまでもなく、ゼウスを筆頭に精霊が全員出て来た。俺達から呼び出す事って案外少ないな…。

「全員揃ったみたいだから本題に入るよ。紅刃、君に『アビリティ』を修得してほしいんだ」

「は？『アビリティ』？」

「そう。前にもデュエル以外の戦闘もあるって言ったよね。いつリアルファイトになってもおかしくないからね。相手が不思議な力を

使って来たら、紅刃の剣術とオーディン達の力じゃ間に合わない可能性もあるんだ」

そんなに強い敵なのか。なら場合によっちゃ必要かもしれないけど…。

「何だろう、俺達デュエリストから離れていってるような気がする…」

「まあまあ、そう落ち込まないで…」

『紅刃様のアビリティとなると、誰の力になるんでしょうか?』

スイレンの質問も最もだ。正体がわからないと修得のしようがない。

「紅刃のデッキはほとんど光属性だから、ゼウスの力が1番使いやすいかな」

『ほう、私の力か』

そういや、アビリティは自分の精霊とデッキで得意な能力が変わるんだっけ?なら納得だな。

『ゼウスの力となると、白い電撃を使うのか?』

「オーディン、正解!そうだね、コインを音速の3倍で打ち出したりとか…」

「俺に学園都市に行けとでも?」

「冗談だよ。とにかく、月沙とゼウスに手伝ってもらってアビリティを修得してね」

「わかった。不本意だけど、やるしかないな」

「じゃ、僕はそろそろ帰るね。それじゃ！」

ボォン！

フォッタはいつものように白い煙を出して消えてしまった。

「しかし、アビリティねえ…なんかカードゲームから離れてるような気が…」

「それは仕方ないよ」

月沙が苦笑している。ま、これも目的達成のためだ。やるしかないだろ。

「どうする？今からやる？」

「いや、明日からにするよ。今日は休ませてくれ」

その日は1日ぐっすり眠った。

「廃寮？」

「そ。立入禁止になっていて、入った生徒は帰って来ないって噂があるの」

翌日、月沙から持ち出されたのは廃寮の話だった。

「明日香さんがいないから、そこに向かったんじゃないかな？」

「は？なんで明日香？」

「明日香さんのお兄さんも廃寮で消えた人間の1人なの。だから、お兄さんの捜索に行ったんだと思う」

「マジでか…」

確かに、家族が被害に遭ってるんならそれくらいしてもおかしくないな。

「でも、お前はなんで上機嫌なんだ？」

友人が危険な所に行ってるのに、月沙はなぜか機嫌がいい。

「まあ、行ってみればわかるよ。十代達も興味本位で探険に行ってるから、私達も行こうよ」

まあ、廃寮がどんな所か気になるし、行ってみるか。

「わかった。んじゃ、早速行くか」

で、来たわけだけど…。

「不気味な割には掃除したらブルー寮くらいにはなるんじゃないか？」

「シャンデリアがあるくらいだしね」

薄暗いけど、中はブルー寮に似ている。掃除すれば家具もまだ使えるレベルだし、なんかもったいない気がする。

「ん？十代？」

「あ、紅刃！月沙も！」

途中で十代と翔、隼人と合流した。月沙が言ってた通りだな。

「お前らも探険か？」

「ああ。そうだ、これを見てくれよ」

十代が見せて来たのは、１枚の写真だった。見知らぬ男が写っている。

「あれ？何か書いてある」

「え？」

「ほら、ここ」

月沙は写真に書かれてる文字を指差した。なになに…。１０…Ｊ…Ｏ…Ｉ…Ｎ…。

「じゅう…じょいん？なんじゃこりゃ？」

「僕達も意味がわからなくて…」

翔達もお手上げらしい。じゅうじょいんってどういう意味だ？

「これ、『天上院』って読むんじゃない？」

「え？」

「１０は英語でテンって読むでしょ？全部英語にしたら、テンジョイン→テンジョウイン→天上院ってなると思うんだけど…」

「無理があるだろ、それ」

月沙の事だから、多分原作知識に入ってる奴だな。

「じゃあ、なんでこの写真が廃寮にあるんだ？」

「何か関係があるかもしれないんだな」

月沙は知ってるだろうけど、ここで聞くのはまずいか。後で明日香に聞いてみないと…

「きゃあああぁあああぁ！！」

「「「「「！？」」」」」

突然、悲鳴が聞こえた。この先の通路からだ。

「今のは明日香さんの声ッスか！？」

「行こうぜ！」

十代を先頭に先を急ぐ。明日香に何があったんだ？

「ん？」

「どうした？」

「これは…」

途中で十代が何かを拾った。こんな時に何やってんだ？

「今はそんな暇ないだろ！」

「いや、これ、明日香のカードだぜ？」

「は！？」

十代が持ってるのは《エトワール・サイバー》のカードだ。これを使う奴は、この島じゃ明日香しかいない。

「そんな、まさか明日香さん…」

「いや、何かを引きずった跡がある。これを辿れば何かわかるかもしれない」

「早く行こう！」

跡を辿ってひたすら走る。無事でいてくれよ…！

「！」

「どうした、月沙？急に立ち止ま…！？」

急に月沙が立ち止まるから何かと思えば、その先に謎の仮面の男が立っていた。傍らには、気絶して棺桶に入れられてる明日香がいる。

「誰だ、お前…？」

「私はタイタン。闇のデュエリストだ…」

「！？」

な…に…！？

「明日香に何しやがった！？」

「そこの娘には、貴様らをおびき寄せる餌になってもらった…」

「そんな事で明日香さんを…！」

「何が目的なんだ！」

「私の目的は、貴様らを闇に葬る事だぁ！」

そう言って、こいつは十代と俺と月沙を指差した。

「嘘だろ…？」

いくらなんでも驚きを隠せない。こいつは…！

「どうした？そんなに今の状況が信じられないか？」

「馬鹿な…」

「若〇ボイスだと…！？」

「「「そっち！！？？」」」

この独特の重低音、間違いなく若〇だ！

「え、知らないの？会社の上司をやってたり、Ｖの体制でレーザー光線を出したり、瞬間移動やデスビームを使ったりする超絶魔神ＷＡ☆〇Ａ☆ＭＯ☆ＴＯだよ？」

「何『そんなの常識でしょ？』みたいな感じで説明してるんスか月沙さん！？しかも真顔だし！」

「え！？もしかしてセ〇の声優！？凄え、こんな所で会えるなんて感激だぜ！」

「アニキ！？」

なるほど、月沙がご機嫌だったのは若〇ボイスが聞けるからか！原作で知ってるなら楽しみにしないはずがない！

「いや、私はタイタンだ。その若〇とやらではない」

「まさか明日香を襲ったのが若〇だとは…」

「だから私はタイタンだ」

「若〇ボイスを持っているとは…お前、何者だ？」

「いや、だから私はタイタンだ！そして闇のデュエリストだ！」

「ねえ、ちょっと『俺の本能が叫ぶのさ。貴様らを殺せと！』って言ってみて！」

「何わけのわからないリクエストしてるんスか！？」

「…俺の本能が叫ぶのさ。貴様らを、殺せとぉ！！」

「応えちゃったよ！？」

「…月沙、こいつは間違いなく本物だ」

「うん、強敵ね」

「どこをどう見て判断してるんスか！？」

「もうついて行けないんだな…」

翔、隼人、今回ばかりは俺も暴走させてもらうぜ。若〇ボイスを生で聞けるなんて体験、滅多にできないぞ？

「とにかく、明日香を傷つけたからには罪を償ってもらうぜ！」

デュエルディスク展開！デッキシャッフル！スタンバイＯＫ！

『紅刃、テンションがおかしいぞ…？』

「ゴーズか。ここでテンションを上げないでいつ上げる？若〇とデュエルするのはこの俺だ！」

『よほど嬉しいんだな…。まあ、いざとなったら助けてやる』

そう言って、ゴーズはカードに戻った。

「むう…調子が狂うが、いいだろう。闇のゲームで貴様を闇に葬ってやる！」

「全力で行くぜ！」

「「デュエル！」」

紅刃ｖｓタイタン

「では、わｔ「俺のタァァァン！！」いや、ちょっとｍ「《豊穣のアルテミス》を召喚！」だから勝手ｎ「カードを2枚セットしてターンエンドぉ！！」……」

《豊穣のアルテミス》　ＡＴＫ／１６００

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《豊穣のアルテミス》
魔法・罠／リバース×２

「今日の紅刃君、なんかおかしいッス…」

「【パーミッション】は基本先攻有利。闇のデュエルなら無理矢理にでも先攻を取る事くらい許されると思うけど」

「…私のターン、ドるぉぉ。手ｆ「リバースカードオープン！」待て、私はまだ何ｍ「カウンター罠《強烈なはたき落とし》！手札に加えたカード1枚をそのまま墓地に送る！」何だとぉ！？」

タイタンが墓地に送ったのはミラーフォース。やっぱみんな使ってんだな。

「アルテミスの効果！カウンター罠が発動する度にカードを1枚ドローする！」

「ぐ…まあ、いい。手札の《ジェネラルデーモン》の効果発動。このカードを手札から墓地に送り、デッキから《万魔殿（パンディモニウム）ー悪魔の巣窟（そうくつ）ー》を手札に加える。そしてそのまま発動！」

周りが気味の悪い悪魔の宮殿に変化する。

《ジェネラルデーモン》
効果モンスター
星４／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ２１００／ＤＥＦ　８００
このカードを手札から墓地に捨てる。
デッキから「万魔殿ー悪魔の巣窟ー」１枚を手札に加える。
フィールド上に「万魔殿ー悪魔の巣窟ー」が存在しない場合、フィールド上のこのカードを破壊する。

《万魔殿（パンディモニウム）ー悪魔の巣窟（そうくつ）ー》
フィールド魔法
「デーモン」という名のついたモンスターはスタンバイフェイズにライフを払わなくてよい。
戦闘以外で「デーモン」という名のついたモンスターカードが破壊されて墓地へ送られた時、そのカードのレベル未満の「デーモン」という名のついたモンスターカードをデッキから1枚選択して手札に加える事ができる。

「《インフェルノクインデーモン》を召喚。カードを1枚セットし、

ターンエンドだ」

タイタンの場に赤い王冠を被った悪魔が現れた。

《インフェルノクインデーモン》
効果モンスター
星４／炎属性／悪魔族／ＡＴＫ　９００／ＤＥＦ１５００
このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に５００ライフポイントを払う。
このカードが相手のコントロールするカードの効果の対象になり、その処理を行う時にサイコロを１回振る。２・５が出た場合、その効果を無効にし破壊する。
このカードがフィールド上に存在する限り、スタンバイフェイズ毎に「デーモン」という名のついたモンスターカード１体の攻撃力をエンドフェイズまで１０００ポイントアップする。

《インフェルノクインデーモン》　ＤＥＦ／１５００

タイタン
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《インフェルノクインデーモン》（ＤＥＦ／１５００）
魔法・罠／《万魔殿－悪魔の巣窟－》リバース×１

「俺のターン！《智天使ハーヴェスト》を召喚！」

俺の下級アタッカーで最高攻撃力を持つ黄色い天使の登場だ。

《智天使ハーヴェスト》　ＡＴＫ／１８００

「バトル！アルテミスで《インフェルノクインデーモン》を攻撃！」

「させん！罠発動《和睦の使者》！このターンの間、私のモンスターは戦闘破壊されず、戦闘ダメージも無効にする！」

「倒せなかったか。カードを1枚セットしてターンエンドだ」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１６００）《智天使ハーヴェスト》（ＡＴＫ／１８００）
魔法・罠／リバース×２

「私のターン、ドるぉぉ！スタンバイフェイズ時に、《インフェルノクインデーモン》の効果でライフを５００払う必要があるが、万魔殿の効果で払う必要はない」

デメリットを打ち消すフィールド魔法か…。

「《インフェルノクインデーモン》の効果発動！スタンバイフェイズ時に、私の場のデーモン1体の攻撃力をエンドフェイズ時まで１０００ポイントアップさせる！」

《インフェルノクインデーモン》　ＡＴＫ／　９００→１９００

「１０００ポイントも！？これじゃ、アルテミスがやられちゃうッス！」

「驚くのはまだ早い。手札から《ジェノサイドキングデーモン》を

召喚！」

出て来たのは、黒い大剣を持ち、赤い王冠を頭に頂く悪魔。こいつがデーモンの親玉か？

《ジェノサイドキングデーモン》
効果モンスター
星４／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ１５００
自分フィールド上に「デーモン」という名のついたモンスターカードが存在しなければこのカードは召喚・反転召喚できない。
このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に８００ライフポイントを払う。
このカードが相手のコントロールするカードの効果の対象になり、その処理を行う時にサイコロを１回振る。
２・５が出た場合、その効果を無効にし破壊する。
このカードが戦闘で破壊した効果モンスターの効果は無効化される。

《ジェノサイドキングデーモン》　ＡＴＫ／２０００

「攻撃力２０００…！」

「《ジェノサイドキングデーモン》でハーヴェストに攻撃！炸裂！五臓六腑ぅ！！」

「いや、それ先に自分が死ぬよな！？」

なんか自分のハラワタを蟲に変えてるし！そしてぶちまけてるし！せめて大剣使えよ！何のために持ってんだよ！

紅刃　ＬＰ／４０００→３８００

「ハーヴェストの効果発動！戦闘で破壊された時、墓地のカウンター罠を手札に加える！」

「無駄だ。《ジェノサイドキングデーモン》に戦闘破壊されたモンスターの効果は無効化される！」

「何！？」

くそ、厄介な効果を持ってるな…。

「フッフッフ…これを見るがいい…」

そう言って、タイタンは何かを取り出した。

何だあれ？真ん中に目玉の模様がある逆三角形の金色のブロックだ。

「あれは！？」

「何だそれ？」

「これは千年パズル。かつて伝説のデュエリスト、武藤遊戯が所持していた物だ…」

「なんで遊戯さんの物を…！？」

…ああ、思い出した！武藤遊戯のもう１人の人格が他の千年アイテムって奴と一緒に封印したんだっけ？あれ？記憶が曖昧だ…前に月沙に教えてもらったんだけどな…。

あ、なんか千年パズルが光り出した。本物なのか？

『ずいぶん呑気ですね…』

「スイレン？いや、どうも胡散臭くしか見えなくてさ…」

「フッフッフッ…消えてゆく、お前の体がライフと共に消えてゆくう…」

え？何電波な事言ってんのこいつ？

「うわぁあああ！！？」

突然、翔が悲鳴を上げた。なんだ？何があった？

「く、紅刃君の体が消えてる…！？」

…いや、あの、翔君？俺の体のどこが消えてるって？

「どうなってんだよ、これ…！？」

「フッフッフ…これは闇のゲーム…ライフが減る度に貴様自身の体が消えてゆく…」

だからどこも消えてないっての！俺は至って健康だぞ！？

『紅刃、聞こえる？』

「？」

今度は頭の中に聞き慣れた声が響いた。

『私よ、月沙。スイレンに手伝ってもらってテレパシーで会話してるの。そっちからも通じるはずだよ』

「（凄えな、おい。スイレンってそんな事できたのか？）」

『はい、一応魔法使い族ですから』

凄えな、魔法使い族。

「（で、どうなってんだこれは？俺に異常はないぞ？）」

『フォッタにプロテクトをかけてもらっといたから、催眠術が聞かないだけ。私もかけてもらってるよ』

「（いつの間に…ん？催眠術？）」

『あ、これただの催眠術だから』

「（おい！？ぶっちゃけていいのそれ！？）」

『まあ、そこはかとなく種明かしよろしく』

「（無責任だな！？）」

『それと、オーディンとゼウスの効果を使う時は注意してよ。サイコロを使うんだけど、細工してあるから。対象を取る効果を確実に無効にしてくるからね』

「（ハァ…了解）」

なら、対抗できるのは今手札にあるこいつか…。今はまだ使えないけどな。

「で？まだお前のターンだぞ？」

「何ぃ！？（動じていないだと！？そんな馬鹿な…）」

「な、なんで平静でいられるんだな？体が消えてるのに…」

「私達はこれよりも恐ろしい体験をしてる。今更こんなまやかしを見せられてもね…」

「！？」

タイタン、明らかに動揺してるぞ？

「こ、これよりも恐ろしい体験って、何があったんスか…？」

「君達が知るべき事じゃない」

「！…わかったッス…」

月沙が迫力押しで黙らせた。まあ、地縛神の話をするわけにはいかないしな。超巨大なくちばしがビルに突っ込んで来たり、巨人が手を振り下ろして来たりした時はさすがに怖かったな…。おまけに、俺は最終決戦でジャックとクロウ共々クラッシュしたし。

「ぬぅ…カードを1枚セットしてターンエンドだ…《インフェルノクインデーモン》の攻撃力は元に戻る」

《インフェルノクインデーモン》　ＡＴＫ／１９００↓　９００

タイタン
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《インフェルノクインデーモン》（ＤＥＦ／１５００）
《ジェノサイドキングデーモン》（ＡＴＫ／２０００）
魔法・罠／《万魔殿－悪魔の巣窟－》リバース×１

「なあ、なんで俺達に闇のゲームを挑むんだ？」

「これは依頼だ。依頼主の頼みを遂行するのは当然の事だろう？」

依頼ねえ…。イレギュラーの可能性があるけど、今はいいか。

「そうか。ま、いいか。俺のターン！《光神機－桜火》を召喚！」

俺の場に召喚されたのは、翼を持つライオンのような白いモンスターだ。

《光神機－桜火（ライトニングギア　おうか）》
効果モンスター
星６／光属性／天使族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１４００
このカードは生け贄なしで召喚する事ができる。
この方法で召喚した場合、このカードはエンドフェイズ時に墓地へ送られる。

《光神機－桜火》　ＡＴＫ／２４００

「レベル６のモンスターを生贄無しで召喚だとぉ！？」

「いわゆる妥協召喚って奴だ。デメリットを背負う代わりに召喚条件を軽くする事ができる。桜火の場合はエンドフェイズ時に墓地に送られる」

「それでも、攻撃力２４００のモンスターなら、《ジェノサイドキングデーモン》を倒せるぜ！」

「そういう事だ！桜火で《ジェノサイドキングデーモン》を攻撃！コズミック・アサルト！」

桜火が桜色の光を纏い、《ジェノサイドキングデーモン》に突っ込んで行く。そして、土手っ腹をぶち抜いて俺の元に帰還した。

「ぬぅうう！！」

タイタン　ＬＰ／４０００→３６００

「だが、手札の《デスルークデーモン》の効果発動！このカードを手札から墓地に送る事で、破壊された《ジェノサイドキングデーモン》を特殊召喚する！」

《デスルークデーモン》の力で、《ジェノサイドキングデーモン》が急速に回復していった。

《デスルークデーモン》
効果モンスター

星３／光属性／悪魔族／ＡＴＫ１１００／ＤＥＦ１８００
このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に５０ライフポイントを払う。
このカードが相手のコントロールするカードの効果の対象になり、その処理を行う時にサイコロを１回振る。
３が出た場合、その効果を無効にし破壊する。
自分フィールド上の「ジェノサイドキングデーモン」が破壊され墓地に送られた時、このカードを手札から墓地に送る事で、その「ジェノサイドキングデーモン」１体を特殊召喚する。

「ちっ、駄目だったか…。アルテミスで《インフェルノクインデーモン》を攻撃！」

「むぅ…」

「カードを１枚セットしてターンエンド。桜火はエンドフェイズ時に破壊される」

桜火は光に包まれて消滅した。

紅刃
ＬＰ／３８００
手札／２
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×３

「私のターン、ドるぉぉ！私は《ジェノサイドキングデーモン》を生け贄に捧げる！」

「上級か？」

「いでよ、《迅雷の魔王－スカル・デーモン》！！」

白い骸骨を纏い、翼を持つ悪魔が現れた。

《迅雷（じんらい）の魔王－スカル・デーモン》
効果モンスター
星６／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ１２００
このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に５００ライフポイントを払う。
このカードが相手のコントロールするカードの効果の対象になり、その処理を行う時にサイコロを１回振る。
１・３・６が出た場合、その効果を無効にし破壊する。

《迅雷の魔王－スカル・デーモン》　ＡＴＫ／２５００

「やばっ…！」

「フハハハ、さらに《デーモンの斧》を装備！攻撃力を１０００ポイントアップする！」

「それはさせねえよ！カウンター罠《魔宮の賄賂》！相手にカードを１枚引かせる代わりに、《デーモンの斧》の発動を無効にし、破壊する！」

「何ぃ！？」

「アルテミスがいるから、お互いに１枚ドローだ」

お互いにカードを１枚引く。…よし、後はあれが来れば…。

「まあ、いい。スカル・デーモンでアルテミスに攻撃！怒髪天昇撃！」

スカルデーモンが電撃を放ち、アルテミスを消し去った。

「ぐっ…」

紅刃　ＬＰ／３８００→２９００

「あぁぁ…紅刃君の右足が消えちゃったッス…」

「え、何言ってんだ？消えてるのは右腕だろ？」

「俺には胴体が消えてるように見えるんだな」

「「「あれ？」」」

ん？なんだこの矛盾？話が噛み合ってないぞ？

「…私はターンを終了する…」

タイタン
ＬＰ／３６００
手札／１
モンスター／《迅雷の魔王ースカル・デーモン》（ＡＴＫ／２５００）
魔法・罠／《万魔殿ー悪魔の巣窟ー》リバース×１

タイタンも落ち着きがない。ここでひとつ決めてみるか。

「なるほどな」

「？」

「闇のゲームとか言ってるけど、ただの催眠術だろ」

「!?な、何を言っている!?私は本当に闇のゲームを…」

「じゃあ、俺の体の消えてる部分が十代達にはバラバラに見えるのはなんでだ？」

「ぐっ…」

「え!?て事はただのインチキ!?」

「その千年なんたらの光が原因だろうな。元はマジシャンかなんかだろ。どういう経緯でこんな事をするのかは知らねえけど、もうちょい練習した方がいいんじゃないのか？」

「ぬ、ぐぐぐ…」

はい、そこはかとなく種明かし終了。結構効いてるな。さて、さっさと終わらせて…。

『紅刃!』

突然、デッキからオーディンが飛び出した。

「オーディン?どうした?」

『まずいぞ…闇がすぐそこまで迫っている』

「は？」

ブアァアアアアァア！！

「何！？」

「うわっ！？」

突然、広間の中央から黒い何かが噴き出した。

あれは、多分さっきオーディンが言ってた『闇』。そうじゃなくても、俺にはわかる。こいつはやばい！

「月沙、十代！明日香を頼む！」

「わかった！」

「任せろ！」

月沙と十代が明日香を救出する。その間に、それは俺とタイタン、さらに月沙と十代、明日香まで飲み込み、薄暗い空間に閉じ込めた。

「これは…」

「おい、タイタン！また何か仕組んだのか！？」

「ち、違う！私は何もしていない！」

「（月沙、どうなってんだ？まさかイレギュラーの仕業か？）」

『……ごめん。原作でこうなる事、忘れてた』

ええええぇえええぇえええ！！？

「（ちょ、忘れてたって…！？）」

『うん、若〇ボイスの件で浮かれてた』

「（おいおい、マジかよ…）」

『私もアビリティで援護するから、頑張って！』

「（十代に見られてもいいのか？）」

『どのみち、隠し通す事はできないよ』

「ぬぁぁあああ！！」

「「「！？」」」

な、何だあれ！？上から黒い物体が降って来て、タイタンに取り付いてる…？

「タイタン！！」

「た、助け…」

と、黒い物体が俺達にも襲い掛かって来た！

『させん！！』

俺の方はオーディンが青い光弾で破壊してくれた。

『クリ～！』

「ハネクリボー！？」

十代の方はハネクリボーが追い払っている。

月沙の方は…。

ジャキッ！ドドドドド！！

「…本当に使ったよ…」

月沙は銃型のデュエルディスクを右手で構え、冷気を込めた青白い弾丸を連続で６発撃ち出した。

弾丸は黒い物体に全部クリーンヒットし、一瞬で凍らせた。凍ったそれは跡形もなく砕け散った。

出たよ、月沙のアビリティ。

「つ、月沙？何だよ、それ…」

「説明してる余裕はないよ。今はこの状況をなんとかしないと」

「ぬぁぁあああ！！」

「今度はなん…いっ！？」

なんだあれ…黒い物体がタイタンの口に入り込んでる…？

「う、ぅぅ…フッフッフ…」

タイタンが不気味に笑う。なんだ？様子がおかしい。

「さあ、続けようか。本物の闇のゲームを…」

『な、何ですか、あれ…』

「多分…闇に体を乗っ取られたんだと思う」

「闇に！？」

この状況、見覚えがある。ボマーとミスティも、最後は地縛神に精神を乗っ取られて無理矢理戦わせられていた…。

そもそも、なんでこいつはこんな馬鹿な事をしたんだ？依頼、とか言ってたけど…その依頼主がなぜ俺達を消そうとしたかはわからない。でも、これしか生活費を稼ぐ手段がなかったとしたら…？何かが上手くいかなくて、この道に手を染めるしかなかったとしたら…？

「…いいぜ。お前は俺が救い出す！」

「救い出すって…」

「私達は、タイタンみたいな人を何度か見た事があるの。助けたいと思うのは当然でしょ？」

「月沙…」

月沙の言う通りだ。このまま闇に飲み込まれるなんて、哀しすぎる…！

『本当は後々復活するんだけど…本当の意味で救うなら、今しかない』

「（そうか…。んじゃ、原作ブレイク決行だ！）」

「そっか…。紅刃、負けるなよ！」

「当然だ！俺のターン！《強欲な壺》を発動！２枚ドロー！」

これは…！

「このターンで決着を付ける！手札の《天空の使者　ゼラディアス》の効果発動！こいつを手札から墓地に捨てる事で、デッキから《天空の聖域》を手札に加える！そしてそのまま発動！」

《天空の使者　ゼラディアス》
効果モンスター
星４／光属性／天使族／ＡＴＫ２１００／ＤＥＦ　８００

このカードを手札から墓地に捨てる。
デッキから「天空の聖域」1枚を手札に加える。
フィールド上に「天空の聖域」が存在しない場合、フィールド上のこのカードを破壊する。

「何だとぉ!?」

「フィールド魔法は1枚しか存在できない。万魔殿は破壊させてもらう!」

悪魔の宮殿が崩れ去り、天使の神殿が姿を現す。闇に覆われたこの空間を照らすこのカードは、俺の逆転のキーカードだ!

「そして、俺は《ゼラの戦士》を召喚!」

緑の鎧を来た戦士が召喚される。

《ゼラの戦士》
通常モンスター
星4／地属性／戦士族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１６００
大天使の力を手に入れる事ができるという聖域を探し求める戦士。
邪悪な魔族からの誘惑から逃れるため、孤独な闘いの日々を送る。

「天使族じゃない!?」

「フン、そんな雑魚で何ができる…」

「なら、見せてやるよ。こいつに秘められた力を!俺の場に《天空の聖域》がある時に《ゼラの戦士》をリリースする事で、手札から《大天使ゼラート》を特殊召喚する!」

《ゼラの戦士》が《天空の聖域》の力を受け、エメラルドの翼を持つ大天使へと姿を変えていく。

《大天使ゼラート》
効果モンスター
星８／光属性／天使族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２３００
このカードは通常召喚できない。
このカードは「天空の聖域」がフィールド上に存在し、自分フィールド上に表側表示で存在する「ゼラの戦士」１体を生け贄に捧げた場合のみ特殊召喚できる。
光属性のモンスターカード１枚を手札から墓地に捨てる事で、相手フィールド上に存在する全てのモンスターを破壊する。
この効果は自分フィールド上に「天空の聖域」が存在しなければ適用できない。

《大天使ゼラート》　ＡＴＫ／２８００

「ゼラートの効果発動！手札から光属性モンスター《ジェルエンデュオ》を墓地に送り、相手のモンスターを全て破壊する！」

「なっ…ならば、スカル・デーモンの効果発動！カード効果の対象になった時、サイコロを振ｒ「ああ、これ対象取らないから」何だとぉ！？？」

「行くぜ、ゼラート！ライトニング・スイープ！」

ゼラートが剣から放った光がスカル・デーモンを掻き消していく。

「さらに、墓地の光属性モンスター《豊穣のアルテミス》と《智天

使ハーヴェスト》を除外し、《神聖なる魂》を特殊召喚！」

白銀の天使が舞い降りる。これで準備は整った！

《神聖なる魂（ホーリーシャイン・ソウル）》
効果モンスター
星６／光属性／天使族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ１８００
このカードは通常召喚できない。
自分の墓地の光属性モンスター２体をゲームから除外して特殊召喚する。
このカードがフィールド上に存在する限り、相手のバトルフェイズ中のみ全ての相手モンスターの攻撃力は３００ポイントダウンする。

《神聖なる魂》　ＡＴＫ／２０００

「バトル！《神聖なる魂》でダイレクトアタック！ソウル・フラッシュ！」

「まだだ！罠発動《魔法の筒》！攻撃を無効にｓ「カウンター罠（トラップ・ジャマー）！バトルフェイズ中の罠の発動を無効にし、破壊する！」なっ…ぐおおぉ！？」

《神聖なる魂》が閃光を放ち、タイタンを貫く。

《トラップ・ジャマー》
カウンター罠
バトルフェイズ中のみ発動する事ができる。
相手が発動した罠カードの発動を無効にし破壊する。

タイタン　ＬＰ／３６００→１６００

「終わりだ。てめえを裁く！ゼラートでダイレクトアタック！シャイニング・スラッシュ！！」

大天使が剣に光を込め、振り下ろして全てタイタンに放つ！

「ぶるあぁぁあぁぁあああああ！！！」

あ、名台詞ありがとうございます。

タイタン　ＬＰ／１６００→　０

紅刃　ＷＩＮ

「やったぜ！紅刃の勝ちだ！」

「紅刃、そのデッキ、よく回ったね。【パーミッション】に《天空の聖域》を入れるだけでも結構難しいのに…」

『オーディン様やゴーズ様達まで入れてるのに…一歩間違えたら手札事故ですよ？』

「いいじゃねえか、勝ったんだから」

まあ、確かに月沙とスイレンの言う通り、【エンジェル・パーミッション】にゴーズ＋オーディン＋《コート・オブ・ジャスティス》＋ゼラートはやり過ぎか。今回は助かったけど、次からは自重しよう…。

「ぬぅ…負けてしまったか…」

タイタンは正気に戻ったみたいだ。よかったよかった。

「んじゃ、さっさとここから出るか」

「タイタンも早く！」

「？なぜ私を…」

ズァァアアァアア！！

「な！？ぬぁぁあああ！！何をする、離せぇ！」

な…黒い物体がまたタイタンに取り付きやがった！？

「ど、どうなってんだよ、これ！？」

「そっか！これは闇のゲーム！敗者は闇に取り込まれちゃうんだ！」

「ば、馬鹿な！本当に闇のゲームがあるというのか！？ぬぉおおあぁああ！！」

黒い物体はタイタンだけじゃ飽き足らず、俺達まで襲って来た！

「な、無差別かよ！？」

「さっきよりもずっと多い！？」

「くっ！」

月沙が氷弾で撃ち落とすけど、数が多過ぎる！

『ちっ、おい、力を貸せ！』

『最初からそのつもりだ！』

『ここは俺達の出番だ！』

『私も行きます！』

「スイレン、ハネクリボー！」

『お任せください！』

オーディンの呼びかけでゼウス、ゴーズ、カイエンが加勢し、スイレンとハネクリボーも立ち向かう。

「ここは任せる！タイタン！！」

「あ、おい、紅刃！？」

この場は月沙達に任せ、俺は単身タイタンの元へ向かった。ディスクは既に剣の形に戻してある。

「ぬぁあぁぁ！！た、助け…」

「今行くぞ！」

って俺の方にも黒いの来てるし！タイタンを意地でも引きずり込むつもりか！？

「っ、邪魔だ！」

ディスクを振るい、黒い物体を片っ端から斬っていく。だが、数が多過ぎて辿り着けない…！

『はぁ！！くっ、次から次へと！』

「これじゃ、切りがない！」

ゼウスと月沙が愚痴ってるように、状況はかなり悪い。くそ！不本意だけど、俺にもアビリティが使えたら…！

にしても、こいつら本当にいくら斬っても切りがねえ！元から邪悪なイメージはあったけど、ここまでとは思わないだろ！

…ん？イメージ？

『なあ、そのアビリティって奴、どうやって使ってんだ？』

『ああ、あれ？まずは、自分が使いたい力をイメージする。私の場合は水や氷ね。で、力をぶつけたい対象もイメージする。そして撃ち出すの』

『へえ。要するにイメージが大切って事か』

『そ。アビリティはイメージした対象にしか効果が出ないのも特徴だよ。後は、イメージや自分の気持ちが強ければ強いほどアビリティの威力も上がるってとこくらいかな』

『ずいぶんと都合のいい能力だな…』

そうだ。前に月沙にアビリティの使い方を聞いた時、あいつはイメージと気持ちが重要だと言ってた。

タイタンは、もうほとんど体が見えない。こうなりゃ、一か八かだ！

俺がイメージするのは雷。闇を掻き消す、ゼウスが使う白い電撃。対象はこの闇全て。気持ちは…月沙達を、タイタンを助けたい、いや、助け出す！

バチッ…バチチッ…

ディスクの刀身が白い電撃を帯び始めた。少しずつ強くなり、輝きを増していく…。

俺はディスクを振り上げ、逆手に持ち替え、両手で構えた。

『？紅刃、何をしているのです？』

「あれってまさか…」

この闇が俺達を飲み込むというんなら、俺はこの闇を全部まとめ

て掻き消す！

そのまま片膝を付き、ディスクで床を突く！

次の瞬間、轟音と共に視界が真っ白になった。

白光が消えると、周りは闇が噴き出る前に戻っていた。ただ違うのは、所々に白い電撃でバチバチいってるくらいだ。

とりあえず、立ち上がって状況確認。今いるのは、俺、月沙、十代、はぐれてた翔と隼人、精霊は全員無事だな。後、タイタンもいる。よかった、間に合ったみたいだ。

「み、みんな今までどこに行ってたんスか！？」

「でも、みんな無事でよかったんだな」

「翔、隼人！いや、さっきのあれに飲み込まれたんだけど、なんとか脱出できたみたいだな」

で、その他の皆さんが驚きの表情で俺を見てるのはなぜ？

「凄え、あれだけいたのに全部倒しちまった…」

『驚いたな…まさか、私の力をここまで引き出すとは…』

「嘘…アビリティ、使えちゃった…」

え？さっきのそんなに凄かった？

「？まあ、いいや…。ほら、立てるか？」

疑問は後回しにして、俺は腰を抜かしてるタイタンに手を差し延べた。

「…なぜだ…」

「？」

「なぜ、私を助けた？私は貴様らの敵なのだぞ？」

「…なんだ、そんな事か。お前は本当に悪い奴じゃない。まだやり直せるさ」

「何？」

「さっき、依頼主がどうとか言ってたよな？当然、報酬が出るはずだ。お前、これしか金を稼ぐ方法がなかったんじゃないのか？」

「ぐ…！」

図星か。

「お前が使ってた催眠術、欠点はあるけど、体が消えて見えるだけでも充分凄いと思うぞ？ちゃんと腕を磨けば、いつかは一流のマジシャンになれるんじゃないか？闇のゲームなんかより、そっちの方

が自分も相手も楽しめていいと思うけどな」

「…なぜ、私の事をそこまで…」

俺は思った事を素直に言っただけだ。でも…。

「お前とは、またどこかで会いたいからさ」

「……」

言っとくけど、若〇ボイスは関係ないぞ？

『フッ、相変わらずお人よしだな…』

聞こえてんぞ、ゴーズ。

「…すまなかった」

「？」

「どうやら私は、道を誤っていたようだ…おかげで目が覚めた…ありがとう」

正面から言われると照れ臭いな。

「…まあ、どういたしまして」

俺達は今、廃寮の外にいる。明日香はもう目を覚ましてる。

「すまなかった。私が過ちに気づかなかったばかりに、酷い目に遭わせてしまった…」

「え、ええ。事情はわかったし、もう気にしなくていいから」

自分を誘拐した相手に本気で謝られて、明日香は少し戸惑ってる。

「でも、あれって結局何だったんスかね？」

「おそらく、私が偽物の闇のゲームをしたために、罰が当たったんだろう。君達には本当に迷惑をかけてしまった…」

「いいっていいって。それより、これからはどうするの？」

「私は、真川紅刃が言った通り、またマジシャンを目指そうと思う。自分が楽しみ、相手も楽しめる仕事で生きてゆくつもりだ」

「紅刃でいいよ。お前のマジック、楽しみにしてるぜ」

「自分の腕に自身が持てたら、再びここを訪れよう。では、さらばだ紅刃、そして少年少女達よ。本当にありがとう」

「必ず遊びに来いよ！」

「僕も待ってるッス！」

「元気でね！」

上から十代、翔、月沙。未来のマジシャンは、片手を上げて去って行った。

「ああ、そうそう。明日香、これ」

「え？」

俺が取り出したのは『１０ＪＯＩＮ』のサイン入りの写真だ。

「これって『天上院』って読むのかって思ってさ。一応持って来たんだけど」

「…ありがとう。読み方はそれで合ってるわ。これは、私の兄さんの写真よ」

「え？この人が？」

「今は行方不明で…。何か手掛かりがあればと思って来たんだけど、収穫はこれしかなかったわね」

そう言って写真を見つめる明日香は、どこか悲しそうだった。

「見つかるよ」

「？」

「絶対にさ。私も手伝うよ」

「月沙…」

月沙、やけに核心を持った言い方だな。原作では見つかるんだろうな…。
そうじゃなくても、家族の事になるとなぜか敏感なこいつの事だ、どうしても力になりたいんだろう。

「…しゃあねえな。俺も手伝うか」

「紅刃？」

「俺も協力しないわけにはいかないよな！」

「明日香さん、僕も力を貸すッス」

「俺も手伝うんだな」

「みんな…うん、ありがとう」

さて、イレギュラーのついでに明日香の兄さんの捜索も手掛けるとしますか！

…あ、タイタンから依頼主の事聞くの忘れてた。

ＳＩＤＥ／月沙

翌日、私と紅刃は放課後に十代に呼び出された。まあ、用件はわかり切ってるけど…。場所は紅刃の部屋。メンバーは私、紅刃、十代、ゼウス、スイレンだ。

「で、話ってのは？」

「お前らが昨日使ってた不思議な力の事だけどさ、あれって何なんだ？」

やっぱりその話か。ここで隠しても仕方ないよね。

「あれはアビリティって言って、精霊の力を自分の力として使う能力なの」

「精霊の力を？」

「使える力はパートナーの精霊によって変わるの。私のパートナーはスイレンでしょ？スイレンは氷結界の一族だから、当然氷と水の力を持ってる。私もその氷と水の力を使えるの」

「え？氷はわかるけど、なんで水なんだ？」

『氷は水が冷えてできる物ですよね？水をベースにして、冷気を上手く加えれば自在に氷を操れるんですよ』

「なるほど…」

「俺はゼウスが持つ白い電撃を使える。まあ、アビリティが使えたのは昨日のあれが初めてだけど」

「え!?紅刃も元から使えるんじゃないのか？」

「アビリティを使うには、精霊との結び付きが極端に強い事が絶対条件なの。紅刃が精霊を見れるようになったのは最近なんだから仕方ないよ」

『だが、初めてであの量の闇を全て消し去るとは…。正直、驚いたな』

「凄かったよな！床全体から電気がバリバリッて上がってさ！」

「あの時は、ディスクに電気を溜めて床を突いて、地面に電気を流して広範囲に放出したんだけど…我ながらとんでもない威力だな」

あれは本当に凄かった。しかも私達には傷一つついてないし、私よりも素質あるかも。

「あ、それと、使えるアビリティはデッキにも左右されるの」

「デッキが何か関係あるのか？」

「デッキの主なタイプで使いやすいアビリティが決まるんだ。俺は光属性中心だから、同じ光属性のゼウスやカイエンの力が使いやすい。月沙は水属性中心だから水の力だな」

『後、自分の気持ちやイメージで威力も変わってきますね』

「へえ、凄えな！俺もアビリティ使えるかな？」

「十代はまだ精霊との結び付きがあまり強くないから無理だと思うよ？デッキも属性バラバラでしょ？」

「そっか…。まあ、いいや！使えるからってデュエルができなくなるわけじゃないしな！」

さすが十代、いつでも前向きね。

でも、この人いずれヤンデレ悪魔と融合して、モンスターを実体化できるようになるんだよね…。結び付きどころか一つになるから、あれもアビリティの内に入るのかな？

『さて、アビリティを修得した以上、完璧に使いこなせるようにならなければなるまい。暴走でもしたら後が面倒だからな』

「へ？」

『今日から特訓だ。覚悟しておけ』

確かにゼウスの言う通り、特訓は必要ね。でも…。

「あの…覚悟って？」

『いつ事件が起きてもいいように、１０日で終わらせてやる。わかったらさっさと行くぞ！』

「え、おい、ちょっと！」

いきなりゼウスに右腕を掴まれ引っ張られていく。あ、ドナドナ思い出した。

「てか実体化できんの！？」

『3分間だけだがな。他の連中もできる』

「何そのウル〇ラマン！？ってちょっと待てって！まだ部屋が…ああ、もう！オーディン、戸締まりよろしく！」

『オーディンは冥界に帰っている』

「マジで！？先に連絡入れろぉおおおぉぉ…」

あ、行っちゃった。

「紅刃も大変だね…」

「でも、ゼウスはなんか楽しそうに見えたぜ？」

『きっと、紅刃様がご自分と同じ力を使えるようになった事が嬉しいんですよ』

それもあるだろうけど、最近になってやっとお互いに話せるようになったからっていうのもあるんじゃないかな？

「そうかもね。さて、ゴーズとカイエンも特訓に付き合わされるだろうし、ここで留守番するしかないか」

この中で部屋の鍵を持ってる人はいないしね。

「だったら待ってる間にデュエルしようぜ！」

「あ、ナイスアイデア！でもデュエルディスクは無しでね」

紅刃がへとへとになって帰って来たのは、ちょうど夕食の３０分前だった。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第7話　メインキャラが特殊能力を持っているのはよくある話（後書き）

はい、もういろいろとやっちゃいました。

せっかくだし、何か特殊能力を付けたいな→ただチートドローやモンスター実体化じゃ面白くないな→紅刃達自身にモンスターの力を使わせるっていうのは？→あ、これいいかもしれない

という過程でできたのが、この『アビリティ』です。人によっては批判されるかもしれませんが、今後の展開で深く関わるので大目に見てくださると幸いです。

後、タイタンは助けました。最後辺りは性格や口調がおかしくなってるかもしれませんが、その辺は勘弁してください…。

次回も更新が遅れる可能性がありますが、できるだけ早めに更新する予定です。

それでは、辈切でした！

第8話　苦手な部類でも一応尊重するべき（前書き）

今回も長いです。タッグデュエルなので仕方ないと言えばそれまでなんですが…。

ちなみに、相手は遊戯王ＤＭのあのキャラ達です。

それではどうぞ！

第8話　苦手な部類でも一応尊重するべき

ＳＩＤＥ／紅刃

さて、突然だが質問だ。

前回俺達は廃寮で明日香の兄さんの捜索やら偽の闇のゲーム（途中から本物）やらをしたわけだけど、廃寮から出て行くところを誰かが見ていたらしい。

そいつが上に報告したのが原因で、負けたら退学の制裁タッグデュエルが行われる事になった。

で、十代と翔はオシリス・レッドだから受ける可能性は充分ある。

明日香は成績優秀だからとかオベリスク・ブルーだからとかいう理由で免除になった。

だが、同じブルーの俺と月沙が受けるのはおかしいと思うんだけど、これをどう思う！？

俺も月沙も筆記試験でオール８０点以上で実技試験も勝ってるぞ！？

こりゃ、どう考えてもクロノス先生辺りが意図的にやってるとしか思えない。そこまでして俺達を潰したいか！？

ペアは十代と翔のタッグと俺と月沙のタッグだ。ちなみに、隼人は俺達が影になってたらしく、なぜか見つからなかったみたいだ。

理不尽だな、おい。

まあ、組み合わせはいいとして、翔が自信を無くして島から抜け出そうとしやがった。イカダで海を越えるつもりだったらしいけど、常識ってもんを考えろよ。

俺達（特に十代）が必死に止める中、翔の兄さん、カイザーこと丸藤亮さんと明日香が登場。帰ると言って聞かない翔に餞別って事で十代と亮さんがデュエル。結果は十代の負けだったけど、十代の最後まで諦めない姿勢を見て翔は元気を取り戻したみたいだ。

で、今は解散して、俺と月沙は俺の部屋でタッグデュエルの準備をしている。

「相手が《王宮のお触れ》を使って来なけりゃいいけどな…」

「紅刃は罠をよく使うからね。…あ」

「どうした？」

「十代と翔の相手だけどさ、原作だと迷宮兄弟なの」

「は？迷宮兄弟？」

「昔に遊戯さんや城之内さんと戦った経験のある兄弟よ。コンビネーションは抜群」

伝説のデュエリスト達とデュエルした奴か。兄弟なら息は合うだろうな。

「でも、十代と翔は勝つんだろ？」

「うん。でも問題は私達。私達にも、遊戯さん達と戦った経験のある人達が用意されるはず」

「つまり、俺達もそれなりの覚悟をしとく必要があるって事か」

にしても、【エンジェル・パーミッション】と【氷結界】じゃ共通点がほとんどないのがきつい。特にゼウスの効果が使いづらい。氷結界のモンスターには天使族がいないから仕方ないっちゃ仕方ないんだけど…。

「何を入れりゃいいのやら…」

「結局のところは自分らしく、だよね。私がカウンター罠を何枚か増やしておくよ」

「あ、サンキュ！そうだ、除外してから特殊召喚ってのは？」

「それいいじゃん！じゃあ、これとこれを入れて…」

制裁タッグデュエル開催当日。

月沙の言った通り、十代と翔は見事迷宮兄弟に勝利して、退学から逃れた。

よし、次は俺達の番だ！

「やったな、十代、翔！」

「おう！楽しいデュエルだったぜ！」

「紅刃君と月沙さんも頑張って！」

「うん。必ず勝つよ！」

十代、翔と入れ代わりでフィールドに上がる。

「クロノス先生、俺達の相手は誰ですか？」

「フフフ、君達にも武藤遊戯や城之内克也と戦った凄腕デュエリストを用意しているノーネ」

「ほう。それは誰なんですか？」

校長、輝いてるよ。純粋だなあの人。

「それでは、入って来るノーネ！」

で、入って来たのは…。

「……え？」

あ、今のは月沙ね。

1人は、水色の髪に金縁の趣味の悪い眼鏡、虫のシルエットがプ

リントされた黄緑の服を着ている。
もう1人は、赤いニット帽を被り、緑の上着を着ている。

「彼らは、かつて全国大会で1位になったインセクター羽蛾と、当時2位だったダイナソー竜崎ナノーネ」

こいつらが全国レベル？あまりいい印象じゃないんだけど…。

「ひょひょひょ、お前達が俺達の相手かい？」

「そうだけどなんだよその奇妙な笑い方は」

「ずいぶん余裕だね。まあ、お前達が俺達に勝てるわけないけどね」

「先生～、こいつ本当に全国大会で1位になったんですか？めっちゃ感じ悪いんですけど」

「ワイ達の実力を知らないからそんな緩い感じでいられるんや。お前もそう思…」

竜崎が月沙に話し掛けようとして、なぜか止まった。月沙がどうかし…。

「……」

…物凄く冷めた表情してるよ、おい。「なんでこんな奴らが？」って顔に出てるぞ？

「なんや、その顔」

「紅刃、このデュエル私達の勝ちだよ。ていうか人間的に負ける気がしない」

「人間的!?てか勝利宣言やと!?」

「ちっ、女のくせに生意気な!余裕こいていられるのも今のうちだ!」

小物臭っ。てか性格悪っ。

「さっさと始めようぜ。これ以上長話しても無駄だ」

「そうだよね。早く始めようか」

「ちっ、覚えてろ!」

ライフは８０００からスタート。フィールドとモンスターは共有。魔法・罠の発動ができるのはそのカードの持ち主のみ（永続魔法・罠、フィールド魔法は例外）。ターンは月沙→羽蛾→俺→竜崎の順だ。

「フッフッフフ…」

「月沙、どうした?あいつらと何かあったのか?」

「何もないけど、特に羽蛾の方は性格最悪だからね。フフフ…アイツラッブス」

どうしよう、月沙が壊れた。遊星カムバック。

「…とにかく、全力で行くぜ！」

「「「「デュエル！」」」」

紅刃＆月沙ｖｓ羽蛾＆竜崎

「私のターン！《氷結界の舞姫》を召喚！」

『参ります！』

お、いきなりスイレンの登場か。

《氷結界の舞姫》　ＡＴＫ／１７００

「カードを2枚セットしてターンエンド！」

紅刃＆月沙
ＬＰ／８０００
手札（紅刃）／５
手札（月沙）／３
モンスター／《氷結界の舞姫》（ＡＴＫ／１７００）
魔法・罠／リバース×２

「ひょひょひょ、俺のターン！モンスターを守備でセット、カードを1枚セットしてターンエンドだ！」

羽蛾＆竜崎
ＬＰ／８０００
手札（羽蛾）／４
手札（竜崎）／５

モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×１

まずは様子見ってところか…。

「俺のターン！《豊穣のアルテミス》を召喚！」

もはやお馴染みの紫マントの白い天使が現れる。そこ、ワンパターンとか言うな。

「バトル！アルテミスでモンスターを攻撃！シャイン・ショット！」

白い光弾で破壊されたのは…虫？

「ひょひょ！《共鳴虫》の効果発動！戦闘破壊された時、デッキから攻撃力１５００以下の昆虫族モンスター１体を特殊召喚する！この効果で２体目の《共鳴虫》を特殊召喚！」

《共鳴虫（ハウリング・インセクト）》
効果モンスター
星３／地属性／昆虫族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ１３００
このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、デッキから攻撃力１５００以下の昆虫族モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
その後デッキをシャッフルする。

《共鳴虫》　ＤＥＦ／１３００

「リクルーターか！舞姫で《共鳴虫》に攻撃！雪月花！」

『そこをどいてください！』

スイレンの放った氷の花びらを乗せた吹雪が《共鳴虫》を切り裂いた。

「ひょ！次は《アルティメット・インセクト　ＬＶ３》を特殊召喚だ！」

青い芋虫みたいなモンスターが出て来た。不気味だな…。

《アルティメット・インセクト　Ｌ(レベル)Ｖ３》　†

効果モンスター

星３／風属性／昆虫族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ　９００

「アルティメット・インセクト　ＬＶ１」の効果で特殊召喚した場合、このカードがフィールド上に存在する限り、全ての相手モンスターの攻撃力は３００ポイントダウンする。

自分のターンのスタンバイフェイズ時、表側表示のこのカードを墓地に送る事で「アルティメット・インセクト　ＬＶ５」１体を手札またはデッキから特殊召喚する（召喚・特殊召喚・リバースしたターンを除く）。

《アルティメット・インセクト　ＬＶ３》　ＡＴＫ／１４００

「あれはレベルアップモンスター！？」

「何だよそれ？」

「特定の条件を満たす事で進化していくカードの事だ。数は少ないはずだが、それを持ってるとは…」

三沢、解説サンキュな。そんなに珍しいのか、あれ。

「カードを3枚セットし、ターンエンドだ」

紅刃＆月沙
ＬＰ／８０００
手札（紅刃）／２
手札（月沙）／３
モンスター／《氷結界の舞姫》（ＡＴＫ／１７００）《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×５

「ワイのターンや、ドロー！まずは《バルーン・リザード》を召喚！」

出て来たのは、風船みたいに膨らんだトカゲだ。

《バルーン・リザード》
効果モンスター
星４／地属性／爬虫類族／ＡＴＫ　５００／ＤＥＦ１９００
自分のスタンバイフェイズ毎にこのカードにカウンターを１個を乗せる。
このカードを破壊したカードのコントローラーにカウンターの数×４００ポイントのダメージを与える。

《バルーン・リザード》　ＡＴＫ／　５００

「そして《超進化薬》を発動！爬虫類族モンスター１体を生け贄に捧げ、手札から恐竜族モンスター１体を特殊召喚する！」

《超進化薬》
通常魔法
自分フィールド上の爬虫類族モンスター1体を生け贄に捧げる。
手札から恐竜族モンスター1体を特殊召喚する。

「バルーン・リザードを生け贄に《フロストザウルス》を特殊召喚や！」

トカゲに薬が投与され、突然変異を起こす。すると、全身が氷で覆われた恐竜になった。

《フロストザウルス》
通常モンスター
星6／水属性／恐竜族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ１７００
鈍い神経と感性のお陰で、氷づけになりつつも氷河期を乗り越える脅威の生命力を持つ。寒さには滅法強いぞ。

《フロストザウルス》　ＡＴＫ／２６００

「行け！《フロストザウルス》でアルテミスに攻撃や！フロスト・スタンプ！」

「カウンター罠《攻撃の無力化》！」

透明な障壁が現れ、アルテミスを踏み潰そうとする《フロストザウルス》の足を止めた。

「ちっ、それは攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させるんやったな」

「そういう事。アルテミスの効果で1枚ドロー！」

「今回はタッグだから私もドローさせてもらうよ」

「ちっ、カードを1枚セットしてターンエンドや！」

1ターン目からでかいのが出て来たな。全国元2位は伊達じゃないな。

羽蛾&竜崎
ＬＰ／８０００
手札（羽蛾）／４
手札（竜崎）／２
モンスター／《アルティメット・インセクト　ＬＶ３》（ＡＴＫ／１４００）《フロストザウルス》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／リバース×２

「私のターン！魔法カード《氷結界の三方陣》！手札の氷結界のモンスターを3種類見せる事で、相手のカードを1枚破壊し、手札から氷結界のモンスターを特殊召喚する！」

「なんやて！？」

「手札の《氷結界の武士》《氷結界の軍師》《氷結界の虎将　ライホウ》を見せて《フロストザウルス》を破壊し、ライホウを特殊召喚！」

手札からモンスター達が出現し、《フロストザウルス》を魔法陣で氷結させて破壊した。てか凍りづけの恐竜をさらに凍らせて破壊って…。

扇子を広げ腰に剣を差した将軍…ライホウは、スイレンの横に並んだ。

《氷結界の虎将　ライホウ》
効果モンスター
星６／水属性／戦士族／ＡＴＫ攻２１００／ＤＥＦ２３００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールド上で発動する相手モンスターの効果処理時に、相手は手札を１枚捨てる事ができる。
捨てなかった場合、その効果モンスターの効果は無効化される。

《氷結界の虎将　ライホウ》　ＡＴＫ／２１００

「ワイの恐竜が！？」

「そして舞姫の効果発動！味方の氷結界のモンスターがいる時、手札の氷結界のモンスターを任意の数相手に見せ、そのカードの枚数分相手の裏側表示の魔法・罠カードを手札に戻す！軍師と武士を見せてリバース２枚を手札に戻す！風雪の舞！」

「させるか！リバースカードオープン《威嚇する咆哮》！このターン相手は攻撃できん！」

《威嚇（いかく）する咆哮（ほうこう）》
通常罠
このターン相手は攻撃宣言をする事ができない。

『ガォオオォォォオ！！』

『ぐっ…、でももう片方は戻します！ハァアア！！』

カードからの謎の咆哮に怯みながらも、スイレンは残りの伏せカードを吹き飛ばした。

「（ありがとう、スイレン）《氷結界の武士》を召喚！ターンエンド！」

《氷結界の武士》　ＡＴＫ／１８００

紅刃＆月沙
ＬＰ／８０００
手札（紅刃）／３
手札（月沙）／２
モンスター／《氷結界の舞姫》（ＡＴＫ／１７００）《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１７００）《氷結界の虎将　ライホウ》（ＡＴＫ／２１００）《氷結界の武士》（ＡＴＫ／１８００）
魔法・罠／リバース×４

「俺のターン、ドロー！ひょひょひょ、スタンバイフェイズ時に《アルティメット・インセクト　ＬＶ３》は《アルティメット・インセクト　ＬＶ５》に進化する！」

「ちょっとストップ！ライホウの効果で、手札を１枚捨てないとモンスター効果を発動できないよ」

「ちっ、生意気な…。まあいい、手札を１枚捨てるよ」

なんか脱皮して蛹になりだした。虫ってでかいと気持ち悪く見えるな…。

《アルティメット・インセクト　ＬＶ５》
効果モンスター
星５／風属性／昆虫族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ　９００
「アルティメット・インセクト　ＬＶ３」の効果で特殊召喚した場合、このカードがフィールド上に存在する限り、全ての相手モンスターの攻撃力は５００ポイントダウンする。
自分のターンのスタンバイフェイズ時、表側表示のこのカードを墓地に送る事で「アルティメット・インセクト　ＬＶ７」１体を手札またはデッキから特殊召喚する（召喚・特殊召喚・リバースしたターンを除く）。

《アルティメット・インセクト　ＬＶ５》　ＡＴＫ／２３００

「ＬＶ３の効果で特殊召喚に成功した場合、こいつがいる限りお前達のモンスターは攻撃力が５００ポイントダウンする！」

《氷結界の舞姫》　ＡＴＫ／１７００→１２００

《豊穣のアルテミス》　ＡＴＫ／１６００→１１００

《氷結界の虎将　ライホウ》　ＡＴＫ／２１００→１６００

《氷結界の武士》　ＡＴＫ／１８００→１３００

「攻撃力を下げる効果！？」

しかも全員５００ポイントずつ…厄介な奴だな。

「……っ」

ん？月沙の様子がおかしい。別に前みたいにキレてるわけじゃない。なんていうか、怯えてる…？

「…月沙、手、震えてるぞ？」

「！？」

「心配すんな。ぱっぱと片付けりゃいいだけだろ」

「…うん…」

いつもの元気がない。やっぱ『あれ』か…。

「おやおや？もしかして、虫が苦手なのかい？」

羽蛾がわざとらしく驚く。ああいうのをウザいって言うんだろうな。

「…だからどうしたの？」

「ひょひょひょ、いやなに、ますますお前に俺の昆虫達の恐ろしさを見てもらいたくなってね～」

「おいおい、苦手なもんをわざわざ見せつけるなんて悪趣味やな。でも、ワイの恐竜も忘れてもらっちゃ困るで？」

竜崎も止める気はなく、むしろ「もっとやれ」とでも言いたげに羽蛾と月沙を見ている。悪趣味なのはお前もだろ。

月沙は昔から虫が苦手で（ただし可愛いのは除く）、アビリティ

も使えないほど怖がっちまう。
　確か、龍可も虫が嫌いだったな。２人に言わせれば「生理的に駄目」との事。あの時は「いっぺん全世界の虫に謝れ」ってツッコみかけたっけ。

「俺はまだ通常召喚をしていない。手札から《電動刃虫》を召喚！」

　顎がチェーンソーになっているクワガタが出て来た。

《電動刃虫（チェーンソー・インセクト）》
効果モンスター
星４／地属性／昆虫族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ　　０
このカードが戦闘を行った場合、ダメージステップ終了時に相手プレイヤーはカード１枚をドローする。

《電動刃虫》　ＡＴＫ／２４００

「攻撃力２４００の４つ星モンスターだって！？」

「そこだ！カウンター罠（キックバック）を発動！相手がモンスターを召喚した時、召喚を無効にしてそのモンスターを手札に戻す！」

　カードから放たれた衝撃波がクワガタをフィールドの外に押し出した。月沙ナイス！

《キックバック》
カウンター罠
モンスターの召喚・反転召喚を無効にし、そのモンスターを持ち主の手札に戻す。

「アルテミスの効果で、俺と月沙はカードを1枚ドローする！」

「フン、だが俺達の有利は変わらない！アルティメット・インセクトでライホウを攻撃！」

「くっ…」

紅刃＆月沙　ＬＰ／８０００→７３００

「カードを2枚セットしてターンエンド！」

羽蛾＆竜崎
ＬＰ／８０００
手札（羽蛾）／２
手札（竜崎）／２
モンスター／《アルティメット・インセクト　ＬＶ５》（ＡＴＫ／２３００）
魔法・罠／リバース×３

「俺のターン！」

まずはあの蛹をどうにかしないとな…。

「月沙、スイレンと武士を借りるけどいいか？」

「（スイレン、いい？）」

『はい！これも勝つためですから！』

「（ありがとう）うん、いいよ」

「サンキュな！舞姫と武士をリリースし、《光神機－轟龍》をアドバンス召喚！」

黄色の結晶を身につけた、巨大な龍の光神機が現れた。

《光神機－轟龍（ライトニングギアごうりゅう）》
効果モンスター
星８／光属性／天使族／ＡＴＫ２９００／ＤＥＦ１８００
このカードは生け贄１体で召喚する事ができる。
この方法で召喚した場合、このカードはエンドフェイズ時に墓地へ送られる。
また、このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

《光神機－轟龍》　ＡＴＫ／２９００→２４００

「元の攻撃力が２９００やと！？」

「お前卑怯だぞ！」

「どこが！？てかお前らに言われたくねえよ！轟龍でアルティメット・インセクトに攻撃！ドラグシャイン・バースト！」

轟龍が胸の球体を光らせ、口から金色の光線を放つ！

「ひょひょひょ、リバースカードオープン《和睦の使者》！攻撃をｍ「カウンター罠《盗賊の七つ道具》！ライフを１０００払い、罠の発動を無効にし、破壊する！」ひょ！？「そしてアルテミスの効

果で１枚ドロー！」ちょ、ぐわっ！？」

紅刃＆月沙　ＬＰ／７３００→６３００

羽蛾＆竜崎　ＬＰ／８０００→７９００

「これで攻撃力は元に戻るぜ！」

《豊穣のアルテミス》　ＡＴＫ／１１００→１６００

《光神機－轟龍》　ＡＴＫ／２４００→２９００

月沙がいい感じに妨害してくれる。おかげでこっちもやりやすい。

「アルテミスでダイレクトアタック！シャイン・ショット！」

「ぐぎゃあ！」

羽蛾＆竜崎　ＬＰ／７９００→６３００

「ライフポイントが並んだッス！」

「よっしゃあ！その調子だぜ２人共！」

「カードを１枚セットし、ターンエンド！」

紅刃＆月沙
ＬＰ／６３００
手札（紅刃）／３
手札（月沙）／４

モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１６００）《光神機－轟龍》（ＡＴＫ／２９００）
魔法・罠／リバース×３

なんとかアルティメット・インセクトを倒せたな。だが、油断はできない。あいつら、態度は悪いけど実力は本物だ。ここからどう来る…？

ＳＩＤＥ／月沙

羽蛾に竜崎か…。竜崎はともかく、羽蛾とは戦いたくなかったな。態度最悪だし、虫は苦手だし！

「ワイのターン！まずは《強欲な壺》を発動！２枚ドロー！よっしゃ！《俊足のギラザウルス》を特殊召喚！」

何の変哲もない、ただの二足歩行の肉食恐竜が出て来た。

《俊足（しゅんそく）のギラザウルス》
効果モンスター
星３／地属性／恐竜族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ　４００
このモンスターの召喚を特殊召喚扱いにする事ができる。
特殊召喚扱いにした場合、相手の墓地から相手はモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

《俊足のギラザウルス》　ＡＴＫ／１４００

「こいつは手札から特殊召喚できるカードや！その代わり、相手は

自分の墓地からモンスター1体を特殊召喚できるんやけどな」

「この場合は、直前にターンを行ったプレイヤーのみ選べるノーネ」

ここのタッグデュエルのルールってどうなってるんだろう?アルテミスの効果が2人適用なら、ギラザウルスも同じじゃないの?

「なら、俺はライホウを特殊召喚する」

《氷結界の虎将　ライホウ》　ＤＥＦ／２３００

「魔法カード《ハンマーシュート》！1番攻撃力が高いモンスター、轟龍を破壊や！」

どこからか飛んで来た巨大なハンマーが轟龍を叩き潰した。

《ハンマーシュート》
通常魔法
フィールド上に表側攻撃表示で存在する攻撃力が一番高いモンスター1体を破壊する。

「くそ、轟龍が…」

「これだけやないで！ギラザウルスを生け贄に、魔法カード《大進化薬》を発動！このカードが場にある限り、ワイは恐竜族モンスターを生け贄なしで召喚できるんや！最も、効果はお前らのターンで数えて3ターンの間やけどな」

《大進化薬》
通常魔法

自分フィールド上に存在する恐竜族モンスター1体をリリースして発動する。
このカードは発動後、相手のターンで数えて3ターンの間フィールド上に残り続ける。
このカードがフィールド上に存在する限り、レベル5以上の恐竜族モンスターをリリースなしで召喚する事ができる。

「恐竜族を生け贄なしで！？」

「これはまｚ「まずいわね。恐竜族には攻撃力の高い上級モンスターがたくさんいる。そして、このタイミングで発動したという事は、残りの手札は間違いなく上級の恐竜族よ」…」

あれ？十代と明日香さん以外に誰かしゃべった？

…いや、わかってるよ、三沢君でしょ？まさかこの頃から空気男の片鱗を見せてたとはね…正直びっくりだよ。

「ワイは《暗黒恐獣》を生け贄なしで召喚や！」

うん、どう見ても黒いティラノサウルスだね。

《暗黒恐獣（ブラック・ティラノ）》
効果モンスター
星７／地属性／恐竜族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ１８００
相手フィールド上に守備表示モンスターしか存在しない場合、このカードは相手プレイヤーに直接攻撃できる。

《暗黒恐獣》　ＡＴＫ／２６００

「行くで！《暗黒恐獣》でライホウに攻撃！ティラノ・ファング！」

ライホウが暗黒恐獣に破壊される。守備表示でよかった…。

「ワイはこれでターンエンドや！」

羽蛾＆竜崎
ＬＰ／６３００
手札（羽蛾）／２
手札（竜崎）／０
モンスター／《暗黒恐獣》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／《大進化薬》リバース×２

「私のターン！」

これは…仕方ない、賭けに出る！

「魔法カード《手札抹殺》！全てのプレイヤーは手札を全て捨て、捨てた枚数分カードをドローする！」

「ちっ、ワイは手札０やんけ」

「ドロー！よし、墓地の舞姫を除外し、《水の精霊　アクエリア》を特殊召喚！」

水色に染まった少女の姿をした精霊が現れる。今回新しく入れたカードの１枚だ。

《水の精霊　アクエリア》
効果モンスター

星４／水属性／水族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１２００
このカードは通常召喚できない。
自分の墓地の水属性モンスター１体をゲームから除外して特殊召喚する。
相手スタンバイフェイズ毎に相手の表側表示モンスター１体の表示形式を変更できる。
そのモンスターはこのターン表示形式を変更できない。

《水の精霊　アクエリア》　ＡＴＫ／１６００

「出て来たばかりだけどごめん…。アクエリアをリリースし、《ブローバック・ドラゴン》をアドバンス召喚！」

頭が銃の形をした機械龍を召喚。私ってよく機械族を入れても事故らないよね…。

《ブローバック・ドラゴン》　ＡＴＫ／２３００

「ひょ？水属性じゃない？」

「私が使うのは氷結界だけじゃないって事！《ブローバック・ドラゴン》の効果発動！コインを3回投げて、表が2回出たら相手のカードを1枚破壊する！」

３つのコインが宙を舞う。

「そ、そんな都合よく当たるもんか！」

「当たるよ」

「何や、その自信は？」

「いや、ほぼ間違いなく当たる」

紅刃が言い終えると同時にコインが落ちる。出たのは…。

「表は３枚！よって、《暗黒恐獣》を破壊！」

「何やて！？」

「ブローバック・ショット！」

銃口から青白い弾丸を発射し、黒い恐竜を撃ち抜く！

「気をつけろよ。月沙は８割の確率で効果を成功させるからな」

「確率高っ！？」

「アルテミスでダイレクトアタック！シャイン・ショット！」

「ひょひょひょ、罠カード《ドレイン・シールド》を発動！攻撃を無効にして、アルテミスの攻撃力分のライフを回復する！」

《ドレインシールド》
通常罠
相手モンスター１体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分の数値だけ自分のライフポイントを回復する。

羽蛾＆竜崎　ＬＰ／６３００→７９００

「ここでライフ回復かよ…」

「まだまだ！《ブローバック・ドラゴン》でダイレクトアタック！オートマチック・レーザー！」

次はレーザー光線だ！

「ぐああっ！？やりおったな！」

羽蛾＆竜崎　ＬＰ／７９００→５６００

「カードを1枚セットし、ターンエンド！」

「エンドフェイズに罠発動《リビングデッドの呼び声》！墓地のモンスター1体を特殊召喚する！」

「なっ！？」

しまった！これじゃ…！

「ひょひょひょ、俺が選択するのはもちろん《アルティメット・インセクト　ＬＶ５》！」

《アルティメット・インセクト　ＬＶ５》　ＡＴＫ／２３００

紅刃＆月沙
ＬＰ／６３００
手札（紅刃）／３
手札（月沙）／１
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１６００）《ブロー

バック・ドラゴン》（ＡＴＫ／２３００）
魔法・罠／リバース×４

「ま、自身の効果以外での特殊召喚じゃないから攻撃力が下がらないだけマシか…」

「いや、むしろ状況はかなり悪いよ」

「は？」

「俺のターン！ひょひょひょ、俺の切り札のお出ましだ！ＬＶ５の効果発動！俺のスタンバイフェイズ時にこのカードを墓地に送る事で、手札かデッキから《アルティメット・インセクト　ＬＶ７》を特殊召喚する！」

アルティメット・インセクトが脱皮をして、４枚の羽を持つ完全体へと姿を変えた。うぅ、気持ち悪…。

《アルティメット・インセクト　ＬＶ７》
効果モンスター
星７／風属性／昆虫族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ１２００
「アルティメット・インセクト　ＬＶ５」の効果で特殊召喚した場合、このカードが自分フィールド上に存在する限り、全ての相手モンスターの攻撃力・守備力は７００ポイントダウンする。

《アルティメット・インセクト　ＬＶ７》　ＡＴＫ／２６００

「ひょひょひょ、こいつは究極の昆虫だ！ＬＶ５の効果で特殊召喚した場合、お前達のモンスターの攻撃力を７００ポイントダウンさせる！」

《豊穣のアルテミス》　ＡＴＫ／１６００↓　９００
《ブローバック・ドラゴン》　ＡＴＫ／２３００↓１６００
「はあ!?７００も!?」
「さらに魔法カード《死者蘇生》!墓地の《暗黒恐獣》を特殊召喚する!」
《暗黒恐獣》　ＡＴＫ／２６００
「おお、助かるで、羽蛾!」
「感謝しろよ。アルティメット・インセクトで《ブローバック・ドラゴン》を攻撃!ポイズン・ストライク!」
昆虫がエネルギー弾を機械龍に発射した。《ブローバック・ドラゴン》は攻撃を受けたと同時に溶けてしまった。
紅刃＆月沙　ＬＰ／６３００↓５３００
「……っ」
思わず、右腕を掴んでしまった。苦手だからか、震えが止まらない。
「ひょひょひょ、どうだ?嫌いな昆虫に自分のモンスターがやられる感想は?」

「まあ、その怯えようじゃ口も聞けんか？そんなんじゃ、パートナーの足手まといやな！」

「さっさとサレンダーしちゃいなよ、弱虫！そうすれば楽になるぜ？」

悔しいけど、これじゃ反論もろくにできな…。

「黙れ」

「ん？」

「紅刃？」

「てめえ、黙って聞いてりゃ、人の弱みに付け込むような事ばかり言いやがって…！覚悟はできてんだろうな！」

紅刃の声は怒りがこもっていて、目は羽蛾を刺すように睨み付けている。

「何や？これも立派な戦術や！相手の弱点を攻めるのは基本やろ？」

「何が戦術だ。それに、月沙は弱虫なんかじゃない。人の何倍も何十倍もつらい思いをして来て、それを乗り越えてここに立ってるんだ！こいつは、てめえらよりもずっと強い！」

「紅刃…」

思わず涙が出そうになった。そんなに私なんかの事を…。

「生意気言うな！もしそれが本当だと言うなら、次のお前のターンで俺達に勝ってみろ！そしたら認めてやる！ま、無理だけどな！ひょひょひょひょ！」

「いいぜ。次の俺のターンでけりをつける」

「ひょひょひょ…は？」

周りが騒がしくなる。って勝利宣言！？て事は、あのコンボの準備が整ってるの？

「フン、やれるものならやってみろ！《暗黒恐獣》でアルテミスに攻撃！ティラノ・ファング！」

「う…くっ」

紅刃＆月沙　ＬＰ／５３００→３６００

「カードを2枚セットしてターンエンド！」

羽蛾＆竜崎
ＬＰ／６３００
手札（羽蛾）／０
手札（竜崎）／０
モンスター／《アルティメット・インセクト　ＬＶ７》（ＡＴＫ／２６００）《暗黒恐獣》（ＡＴＫ／２６００）

魔法・罠／《大進化薬》《リビングデッドの呼び声》リバース×２

「フィールドには攻撃力を下げる《アルティメット・インセクトＬＶ７》と、相手のモンスターが全て守備表示だと直接攻撃ができる《暗黒恐獣》がいる。しかも、次にあの恐竜使いが上級の恐竜族を引いたら《大進化薬》の効果で生け贄なしで召喚されてしまう。これではよほど攻撃力の高いモンスターを出さないとまずいぞ」

三沢君の言う通り、状況は最悪。でも、心配はあまりしてない。なぜかって？

「俺のターン！」

私には、最高のパートナーがついてるからだよ！

「フィールド魔法《天空の聖域》を発動！」

出た、紅刃を何度も助けてくれたフィールド魔法。ライディングデュエルで使えない分、思う存分に力を発揮している。

「今更そんなフィールド魔法が何の役に立つんや？」

「お前ら知らねえのか？《天空の聖域》はあるだけでカードの発動条件を満たしてくれる。こいつはその内の１枚だ！リバースカードオープン《裁きの光》！《天空の聖域》が場にある時に発動可能な罠カードだ。手札から光属性モンスター１体を墓地に送り、相手のフィールドか手札のカード１枚を墓地に送る！」

《裁きの光》
通常罠

「天空の聖域」がフィールド上に存在する時、光属性モンスターカード1枚を手札から墓地に捨てて発動する。
フィールド上の相手がコントロールするカードを1枚、または相手の手札からカードを1枚選択して墓地に送る。

「ひょ？って事は…」

「手札から《裁きを下す者－ボルテニス》を墓地に送り、《アルティメット・インセクト　ＬＶ７》を墓地に送らせてもらう！」

神殿から白い光が放たれ、究極の昆虫に裁きを下した。

「そんな！？俺の切り札が…」

「さらに魔法カード《冥界の光》を発動！俺の墓地から《冥府の使者ゴーズ》を含む3体のモンスターを除外し、《冥府の使者カイエントークン》を特殊召喚する！」

《冥界の光》
通常魔法（オリジナル）
自分の墓地から《冥府の使者ゴーズ》とその他のモンスターを2体除外し、自分フィールド上に《冥府の使者カイエントークン》（天使族・光・星７・攻２５００／守２７００）１体を特殊召喚する。
このカードを発動するターン、自分は通常召喚する事はできない。

「ゴーズ？そんなカード、墓地にありませんわよ？」

「もしかして、《手札抹殺》を使った時に墓地に送られてた？」

「墓地の《冥府の使者ゴーズ》《冥王竜ヴァンダルギオン》《裁き

を下す者－ボルテニス》を除外し、カイエンを特殊召喚！」

『さあ、反撃です！』

フィールドに黒い穴が開き、光と共にカイエンが飛び出した。

《冥府の使者カイエントークン》　ＡＴＫ／２５００

《冥界の光》は、私が元いた世界にはなかった、いわゆるオリジナルカードというものだ。初めて見た時はびっくりしたな。

それよりも、切り札を全部除外したという事は、残りの伏せカードは間違いなくあれだ！

「このカードを発動したターンは通常召喚をする事ができない」

「でも、ワイの《暗黒恐獣》には敵わんな！」

「『このターンでけりをつける』なんてかっこつけといて、たいした事ないじゃん！」

「何勘違いしているんだ」

「ひょ？」

あれ？

「まだ俺のメインフェイズは終了してないぜ」

少し違うけど、これってもしかして、遊戯王でも有名なあれ？

「な～に言ってんだい！もうお前は通常召喚できないじゃないか！」

あ、脳内で「クリティウスの牙」のＢＧＭが…。

「罠カード発動《異次元からの帰還》！！」

「《異次元からの帰還》？」

「ライフを半分払い、効果発動！」

紅刃＆月沙　ＬＰ／３６００→１３００

「このカードは、ゲームから除外されているモンスターを、エンドフェイズ時に再び除外する代わりに特殊召喚するカード。そのモンスターは、攻撃力の制限なしで可能な限り特殊召喚できる！」

「除外されているモンスター？…はっ！（あの時…）」

『よし、墓地の舞姫を除外し、《水の精霊　アクエリア》を特殊召喚！』

『墓地の《冥府の使者ゴーズ》《冥王竜ヴァンダルギオン》《裁きを下す者－ボルテニス》を除外し、カイエンを特殊召喚！』

「（あいつら、そこまで考えて…）」

紅刃と私の頭上に、異次元の扉が開かれる！

「さあ、行くぜ！まず1体目！《冥府の使者ゴーズ》！」

『まさか、こんな形で戦場に出るとはな』

《冥府の使者ゴーズ》　ＡＴＫ／２７００

「2体目！《氷結界の舞姫》！」

『私も、姫様と紅刃様の力になれるというのなら…！』

《氷結界の舞姫》　ＡＴＫ／１７００

「3体目！《裁きを下す者－ボルテニス》！」

『あの愚か者共には、1度天罰を下す必要があるようだな』

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００

「そして4体目！《冥王竜ヴァンダルギオン》！」

『我もこの者達には我慢ならん！』

《冥王竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／２８００

私と紅刃の精霊が全員フィールドに並んだ。その光景は、ただ圧巻の一言に尽きる。

「覚悟しろよ、この蟲野郎共！」

「ちょ、ワイは虫使わへんて！」

「何だろう、前にもこんな事があったような…」

気のせいじゃないよ。アテムに散々ダイレクトアタックされた事くらい覚えてるでしょ？

「バトル！ゴーズで《暗黒恐獣》に攻撃！エミサリー・ブラッシュ！」

『おおぉお！！』

ゴーズが暴君を一撃で斬り伏せる！

羽蛾＆竜崎　ＬＰ／６３００→６２００

「私も行くよ！舞姫でダイレクトアタック！雪月花！！」

『参ります！はぁああ！！』

「ぐぎゃあああ！？」

羽蛾＆竜崎　ＬＰ／６２００→４５００

「まだまだ行くぜ！カイエンでダイレクトアタック！レイジング・ブラッシュ！」

『斬る！』

「ひょ…！と、罠カード《次元幽閉》！カイエンをゲームかｒ「カウンター罠（トラップ・ジャマー）！バトルフェイズ中の罠の発動を無効にし、破壊する！」何っ！？ぐあぁああぁ！？」

羽蛾＆竜崎　ＬＰ／４５００→２０００

「てめえらを裁く！ボルテニスとヴァンダルギオンでダイレクトアタック！」

『同時攻撃か』

『面白い。オーディン、準備はいいな！』

『当然だ！』

ゼウスとオーディンがそれぞれ力を溜める。

「ひょ、ま、まだだ！罠カード《停戦協定》！効果モンスター１体につき、５００ポイントのダメージを与える！」

《停戦協定》
通常罠（制限カード）
フィールド上に裏側守備表示で存在するモンスターを全て表側守備

表示にする。
この時、リバース効果モンスターの効果は発動しない。
フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体につき500ポイントダメージを相手ライフに与える。

「そんな!?これじゃ、紅刃君達の負けッス!」

「ひょ、ひょひょひょ!残念だったな!効果モンスターは4体いるから2000ダメージ!これでお前達のライフは0だ!」

「ナイスや羽蛾!ワイ達の勝ちや!」

「へっへ~!ざまぁみろ~!」

プツンッ

「…散々馬鹿にしといて、今更停戦はないでしょ?」

「は?」

「ひょ?」

もうキレた。やる事はひとつしかないけど、さすがの私ももう許せない!

「ここまで馬鹿にされて、あんた達のくだらない協定なんか受け入

れられるか！！カウンター罠《神の宣告》！ライフを半分払い、《停戦協定》の効果を無効にし、破壊する！！」

紅刃＆月沙　ＬＰ／１３００→　６５０

「そ、そんな…！？」

「これって、まさか…」

「ああ、てめえらの負けだ！ツイン・ジャッジ・ブラスト！！」

黒と白。２つの力が混ざり合い、羽蛾と竜崎を飲み込んだ。

「「ぎゃあああぁぁあああああ！！！」」

羽蛾＆竜崎　ＬＰ／２０００→－３２００

紅刃＆月沙　ＷＩＮ

「…す、凄い…」

「まさか、これほどとは…」

「マ、マンマミーヤ…」

「すっげぇ！あいつら最高だぜ！」

十代の声を皮切りに見ていた人達が大歓声を上げた。

「月沙、サンキュな。お前が《神の宣告》を使ってくれなきゃ、今

頃負けてた」

カードとディスクをしまってる私に、紅刃がお礼を言って来た。

「タッグ用にカウンター罠を少し多めにしたからね」

「そ、そんな馬鹿な…」

「ワ、ワイ達が負けやと…？くそ！なんで遊戯や城之内だけやなく、こんな奴らにも勝てないんや！？」

「おい、お前ら」

紅刃が悔しがってる羽蛾と竜崎に話し掛けた。

「な、何や？」

「勝てない理由、教えてやろうか？」

「は？」

「真人間になれ。まずはそこからだ」

「！フン、何を偉そうに…！」

「人を見下してるようじゃ、勝てるもんも勝てねえよ。実力はあるのに、もったいねえ」

「…ちっ、羽蛾、行くで！」

「今日は負けたけど、次はけちょんけちょんにしてやるからな！」

「はいはい。あ、最後にひとつ」

「？ひっ！？」

「また月沙に何か変な事を言ったら裁くからな」

ディスクの剣先が羽蛾の喉元に突き付けられた。私の位置からは、紅刃の表情は見えないけど、まだ怒ってるという事はよくわかった。

「っ…わ、悪かったよ！」

羽蛾と竜崎は慌てて会場から出ていった。

「紅刃、ありがとう」

「？」

「私の事、あんな風に言ってくれて…」

「ん？ああ。虫が苦手なのはしゃあないけど、お前にはお前だけの強さがある。もうちょい自信持てよ」

…あれ？今なんかドキッて来た。

「あ、ありがとう…」

「？どうした？顔赤いぞ？」

「！な、なんでもない！」

慌てて顔を反らす。あれ？これって翔君誘拐事件でも似たような事があったような…。

「？まあ、いいや。さて、十代達のところに戻るか。退学を回避できたんだし、しばらくは安泰だな」

あ、負けたら退学だって事忘れてた。ムカついてたとはいえ、デュエルに夢中になってたみたいだ。

「あいつらがまた来たらどうする？」

「そりゃ、返り討ちにするだけだろ。いつ来たって追い返してやるよ」

「言うと思…はっ！」

思い出した！このままここにいたらまずい！

「紅刃、早くここから出よう！」

「え？」

「十代と翔君も早くここから出て！」

「え？お、おう！翔、行くぞ！」

「あ、待ってよアニキ～！」

とにかくここから脱出！

「ふぅむ、感づかれましたか…」

「なかなか鋭いノーネ」

鮫島校長とクロノス先生のぼやきが聞こえたけど気にしない！

走りながら十代、翔君と合流する。

「なあ、急にどうしたんだ？」

「紅刃が『いつ来たって追い返してやる』なんて言うからだよ！レポート３０枚書かされたいの？」

「げっ！？それは勘弁…！」

十代が嫌そうな顔をする。十代じゃなくてもやりたがる人なんていないよ…。

「ま、退学と宿題回避記念って事で、今日はパーッと盛り上がろうよ！」

「悪くないな。その案乗った！」

「僕も賛成ッス！」

「んじゃ、俺達の部屋に来いよ！みんなでやれるゲームが何個かあるからさ！」

「いいね！よし、決まり！」

レッド寮に向かって走りながら、こういうのを幸せって言うんだろうな、なんて考えてた。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第8話　苦手な部類でも一応尊重するべき（後書き）

というわけで、制裁タッグデュエルでした。

今回は案外早く書き上がりましたが、【パーミッション】の扱いづらさがよくわかりました。なるべく相手を目立たせて、なおかつカウンター罠で相手の動きを封じるって難しいです…。上手く書けていたでしょうか？

オリジナルカード《冥界の光》は、あの場面で精霊を全員並べるためだけに考案しました。でも、ゴーズとカイエンがデュエルで空気になりつつあるので今後も使用する予定です。紅刃のデッキに投入するんじゃなかった…。

後、1番苦労したのが羽蛾と竜崎のデッキです。

あいつらのデッキがよくわからない…！しかも竜崎が活躍できてるかどうか微妙だ！竜崎は後々登場する剣山と使用モンスターが被らないようにする事前提でモンスターを選んだので、強いのかどうかよくわからなくなってしまいました…。竜崎ファンの方々、ごめんなさい。

最後に、《狂戦士の魂》もどきのあのシーンは完全にネタです。羽蛾が出るならせっかくだからやってみたいなと思った結果がこれです。羽蛾と竜崎のファンの方々、ごめんなさい…。

では、また次回！

第9話　天空騎士は進化する（前書き）

今回はＳＡＬことサルとのデュエルです。それと、あのキャラが思いっ切り変わります。

それではどうぞ！

第9話　天空騎士は進化する

ＳＩＤＥ／月沙

「アニキ、月沙さん、大変ッス！」

教室に翔が慌てて入って来た。私は十代に勉強を教えてるところ。
紅刃は授業をサボってアビリティの特訓をしてる。ゼウスは最終確認って言ってたっけ。

「どうした、翔？」

「大変だよ！万丈目君が行方不明になっちゃったんだって！」

……はい？

「何だって！？」

「…翔君、今何て？」

「だから万丈目君が行方不明になっちゃったって…」

えぇぇえぇぇぇぇえ！！？

ちょっと待って！三沢君とのデュエルはまだだよ！？

「っ、探しに行こう！」

「お、おい、月沙!?待てよ!」

おかしい…!万丈目君が行方不明になるのは、万丈目君が三沢君と「負けたら退学」のルールでデュエルして負けた後のはず!なのにそれをすっ飛ばして行方不明なんて、何か異変があったとしか思えない!

授業?今はそんな暇はないよ!とにかく、原作通りに万丈目君を探しに行く!

校門は警備員がいるから、塀に空いてる穴から抜け出した。ここ、直さないとそのうち泥棒入るよ?

「月沙さん、探すって言ってもどこを探すんスか?」

「片っ端から。手当たり次第に行くよ」

「授業をサボってどこに行くつもり?」

「「うわぁっ!?」」

「明日香さん?ジュンコさんにももえさんも…」

声のした方を見ると、原作通り明日香さんがいた。そっちこそ何やってんの?

「万丈目の奴を探しに行くんだよ。このままほっとけないだろ？いいか、先生たちには内緒だぞ？」

「いいけど、１つ条件があるわ」

「条件？」

「私たちも一緒に行くわ」

「は？なんで？」

「あなた今言ったでしょ？このままほっとけないって」

というわけで明日香さん達と合流。さて、それじゃ探しに行こうか！

「お～い！万丈目～！」

「万丈目く～ん！」

「お～い！万丈目～！」

「いたら返事して～！」

森の中を進んでるけど、一向に見つからない。私はこの先の展開を知ってるからたいして気にしてない。原作にズレが出てなければ

の話だけど…。

「…ふぅ、全く…出て来なさーい！！理由もなしで雲隠れなんて情けないわよー！！」

男子陣よりも大きな声で明日香さんが叫ぶ。本当、男勝りだよね…。

「…相変わらずきついなぁ、お前」

「あら、当然よ。最近は軟弱な男子ばっかり」

「…俺は一応鍛えてるつもりなんだけどな」

「え？」

振り返ると、特訓してたはずの紅刃が立っていた。傍らにはゼウスがいる。

「紅刃！？」

「お前、特訓はいいのか？」

「ああ、問題ねえよ」

「特訓？何の特訓なのよ？」

「え？あ、ほら、俺剣術やってるだろ？毎日鍛練してるけど、もう少し時間がほしくてさ…」

ジュンコさんの質問に慌てて答える。さすがに「アビリティの特訓してました」なんて言えないしね。

「（ゼウス、どうだった？）」

『かなり時間がかかったが、合格だ』

ゼウスがニヤリと笑う。ゼウスから合格をもらえたんなら、もう大丈夫だろう。

「（そっか、ならよかった）紅刃、万丈目君知らない？」

「万丈目？」

「ああ、あいつ行方不明なんだよ。心配だからみんなで探してんだけど…」

「ああ、あいつならアカデミアを抜けるってさ」

「「「「「「えっ！？」」」」」」

え！？抜ける！！？

「ちょっと、抜けるって…」

「もっと言えば自主退学だな」

「自主退学ぅ！？」

そう来る！？っていうか、万丈目が自主退学って一体何が！？

「信じられませんわ…あの万丈目さんが自らアカデミアを去るなんて…」

「紅刃、どういう事なの？あの性格で自主退学なんて、あまり考えられないけど…」

ももえさんと明日香さんの言う通りだ。どうしてこうなったんだろ？

「…ま、話してもいいか」

ＳＩＤＥ／紅刃

昨日の夜、俺はゼウスとアビリティの特訓をしていた。

ズギャアアア！！

『…よし、いいだろう』

「ふう…」

『かなり時間がかかってしまったが、もうほとんど自由に使いこなせるな。明日は最終調整だ』

「OK。これで、何かあっても月沙並には対応できるな」

ガサッ…

「！誰だ！？」

突然、近くの茂みが怪しくざわついた。1度納めたディスクを抜くと同時に振るい、電撃を放つ。

ズバァアアア！！

茂みが一発で黒焦げになる。その先にいたのは、驚愕している見覚えのある奴だった。

「な…」

「万丈目…？」

万丈目は、たまたまここを通り掛かった時に俺が特訓しているのを見ちまったらしい。仕方ないから、アビリティと精霊について説明する事にした。

「フン、くだらんな。そんなお伽話、信用できるか」

「じゃあ、さっきのあれはどう説明する気だよ？」

「あんなもの、ただのトリックだろ。…と言いたいところだが」

「？」

「お前が嘘をつくとは思えない。仕方ないから信じてやる」

「そっか。そりゃ、ありがたい」

なんとか信じてもらえた。万丈目も素直じゃないな…。

「…紅刃」

「ん？」

「俺は…このアカデミアを抜けようと思う」

急に真面目な顔になったと思ったら、とんだ爆弾宣言を吐き出した。

「は！？なんでだよ！？急にどうした！？」

「お前とデュエルしてから、お前や波星君、十代を見ていて、気づいた。今のままの俺じゃ、ここで更なる高みを目指す事はできない。今は、お前達が遠く見える」

万丈目は普段からは考えられないほど真剣な表情で語った。

「外で一からやり直すつもりだ」

「…そっか。最近元気がないと思ったら、そんな事を考えてたんだ

な」

俺と万丈目がデュエルして以来、こいつはどこか思い詰めたような顔をしてる事が多かった。俺と月沙も心配して何度か声をかけたけど、「なんでもない」と言って突き放されてばかりだったな。

「…もう、ここには戻って来ないのか？」

「誰がそんな事を言った！俺は強くなって必ずここに戻って来る！その時はもう一度デュエルだ！次は負けん！お前の精霊とやらにもそう伝えておけ！」

「万丈目…」

『いつでもかかって来い。貴様の成長、楽しみにしているぞ』

ゼウスもやる気満々だな。

「いつでもかかって来い」

「！」

「貴様の成長、楽しみにしているぞ…だってさ」

「な、偉そうに…！」

「ハハハ、そういう奴だ、多めに見てくれ」

「フン…仕方ない。見ていろ、必ず今よりもずっと強くなってみせる！」

「ああ、その時は、またデュエルしようぜ！」

「…と、いうわけだ」

みんな唖然としてる。ま、無理もないか…。

あ、精霊とアビリティの事は伏せてあるから、そこら辺は勘違いしないように。

ＳＩＤＥ／月沙

なるほど…。万丈目君に変化を与えたのは紅刃だったのか。三沢君の出番が削り取られるわけだよ…三沢君ドンマイ。

「あいつがそんな事を…」

「そんなわけだ、今頃島を出てるんじゃないか？」

「そっか。それじゃ、教室に戻ろうか」

「まあ、待てよ月沙」

紅刃が私を呼び止める。

「この際だから、見送りに行かねえか？」

「見送りに？」

「お、いいなそれ！よし、みんな行こうぜ！」

十代が走り出したその時、

「！？」

「どうした？」

「あそこで何か動いた！」

「は？」

明日香さんが動く茂みに気づいた。

「万丈目か？」

「いや、どう考えても小さいだろ…」

あれって確か…。

「ウキィーー！！」

「「「「「うわぁああ！？」」」」」

やっぱり！出てきたのは、体のあちこちに機械を装備し、左腕にデュエルディスクをつけたサルだった。

サルは素早く動いて私達を撹乱した。

「っ、何だこいつ！」

ジュンコさんを人質に取る事はわかってる。なら…！

「ウキィ！」

「きゃあ…！」

「そこっ！」

私はディスクを抜き体を一回転させて、銃身をサルの機械に覆われてない部分に思い切り叩きつけた。

「ヴギッ！？ウキャ～！！」

いきなり反撃されて驚いたのか、サルは攻撃された箇所を痛そうに押さえて去っていった。

「大丈夫？」

「は、はい…ありがとうございます…」

いや～、ＢＬＡ○Ｋ　ＣＡＴ読んでてよかった～。あれ結構好きなんだよね。ト○インありがとう！さすがに４回も攻撃できなかったけど！

「にしても、何だったんだ？デュエルディスクを付けたサル？」

「あそこだ！」

「追え！捕まえるのだ！」

と、逃げるサルを追う３人の男が出て来た。簡単に説明すると、麻酔銃を持った黒スーツとサングラスの人、眼鏡をかけた大柄な人、性格の悪そうな、小柄で髭もじゃで眼鏡をかけた博士っぽい人。

「何だ、あの人達？」

「行ってみようぜ！」

十代の進言で、私達もサルを追う事になった。

ＳＩＤＥ／紅刃

崖に出ると、木の上にいるさっきのサルに麻酔銃を撃とうとしてるおっさん達がいた。

「ちょっと待て！あんたら何しようとしてんだ！？」

「ん？見ての通り捕獲だが？」

「捕獲？」

確かにあのサルはどう見ても普通じゃないけど…。

「あれはただのサルではない。我々が訓練を重ねて育て上げたデュエリストザルだ」

「デュエリストザル？」

「その名もＳｕｐｅｒ　Ａｎｉｍａｌ　Ｌｅａｒｎｉｎｇ！略してＳＡＬだ！」

「いや、そのまんまじゃねえか。文字じゃなきゃ聞き分けられねえだろ」

それより、あのサルが脱走したのは多分、無理矢理実験材料にされたからだろ。見た感じじゃ、懐いてるようには見えないしな。

「そうだ、君達もＳＡＬを捕まえるのを手伝ってくれないか？」

「どうするッスか、紅刃君？」

「…いい考えがある。俺に任せろ」

翔に一言言ってから、サルに向かって叫んだ。

「おい、そこのサル！」

「ウキ？」

「俺とデュエルしろ！もしお前が勝ったらこの先自由に生きろ！ただし負けたら素直に俺の言う事を聞く！悪い条件じゃねえだろ！？」

「……ウキ！」

サルは少し考えた後、意を決したように木から飛び降り、デュエルディスクを展開させた。

「交渉成立だな！」

俺もディスクを展開させる。サルとのデュエルか、楽しみだ！

「ちぇ、俺もやりたかったな…」

「仕方ないよ。今は応援しよう」

月沙、十代をなだめる役は任せた。

「んじゃ、全力で行くぜ！デュエル！」

『デュエル！』

うおっ、しゃべった！？

紅刃ｖｓサル

「先攻はもらうぜ！ドロー！」

やば…召喚できる奴がいない…！

「カードを3枚セットし、ターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／3
モンスター／なし
魔法・罠／リバース×3

「モンスターを出さない？」

「きっと何か考えがあるんですわ」

いや、ただの軽い手札事故だから。

『私のターン、ドロー！魔法カード《ハリケーン》を発動！フィールド上の魔法・罠カードを全て手札に戻す！』

「いっ！？」

俺のフィールドが一気にがら空きになった。これはまずいか？

『そして、《怒れる類人猿》を召喚！』

全身真っ赤にしてブチ切れてるゴリラが出て来たよ。俺何かした？

《怒れる類人猿（バーサークゴリラ）》
効果モンスター
星４／地属性／獣族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ１０００
このカードが表側守備表示でフィールド上に存在する場合、このカードを破壊する。
このカードのコントローラーは、このカードが攻撃可能な状態であれば必ず攻撃しなければならない。

《怒れる類人猿》　ＡＴＫ／２０００

「レベル４で攻撃力２０００…少しきついわね」

『《怒れる類人猿》でダイレクトアタック！』

ちょ、物凄い勢いで殴って来るんだけど！？って痛っ！ソリッドビジョンだけど気迫が痛い！

紅刃　ＬＰ／４０００→２０００

「いきなりライフを半分も減らされちゃった…」

「ジュンコ、心配は無用だ！手札の《冥府の使者ゴーズ》の効果発動！俺の場にカードがない時にダメージを受けた時、こいつ手札から特殊召喚する！そして戦闘ダメージの場合は、受けたダメージと同じ攻守の《冥府の使者カイエントークン》を特殊召喚する！」

『今回は出番が早いな』

『容赦はしませんよ！』

《冥府の使者ゴーズ》　ＡＴＫ／２７００

《冥府の使者カイエントークン》　ＡＴＫ／２０００

「キキッ！？」

こいつらがいてくれてよかった…。危ない危ない。

『カードを３枚セットし、ターンエンド』

サル
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《怒れる類人猿》（ＡＴＫ／２０００）
魔法・罠／リバース×３

「俺のターン！行くぜ、ゴーズで《怒れる類人猿》に攻撃！エミサリー・ブラッシュ！」

『我が主に拳を向けた事を後悔しろ！』

闇色の光を纏った刃がゴリラを襲う！

『永続罠（スピリットバリア）発動！私の場にモンスターがいる限り、私は戦闘ダメージを受けない！』

《スピリットバリア》
永続罠

自分フィールド上にモンスターが存在する限り、
このカードのコントローラーへの戦闘ダメージは0になる。

くそ…なんとか破壊できたけど、ダメージはなしか。

「まだだ！カイエンでダイレクトアタック！レイジング・ブラッシュ！」

『さっきのお返しです！』

「キキッ！？ウキキ…」

サル　ＬＰ／４０００→２０００

「モンスターをセット。カードを3枚セットし、ターンエンドだ！」

紅刃
ＬＰ／２０００
手札／２
モンスター／《冥府の使者ゴーズ》（ＡＴＫ／２７００）《冥府の使者カイエントークン》（ＡＴＫ／２０００）リバース×１
魔法・罠／リバース×３

『私のターン！《強欲な壺》を発動、２枚ドロー！永続罠《ＤＮＡ改造手術》！種族を１つ選び、フィールド上のモンスターを全てその種族に変える！』

《ＤＮＡ（ディーエヌエー）改造手術》
永続罠
発動時に１種類の種族を宣言する。

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上の全ての表側表示モンスターは自分が宣言した種族になる。

『私が選ぶのは獣族！』

『ん？これは…』

ゴーズとカイエンに爪やら尻尾やら獣の耳やらが生えてきた。ちょっと待て、なんかワイルドな感じになってるぞ？

『さらに、《アクロバットモンキー》を召喚！』

機械で造られた元気なサルが出て来て、すぐに獣っぽくなった。やはりというかなんというか、サルばっかだな。

《アクロバットモンキー》
通常モンスター
星３／地属性／機械族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ１８００
超最先端技術により開発されたモンキータイプの自律型ロボット。非常にアクロバティックな動きをする。

《アクロバットモンキー》　ＡＴＫ／１０００

「出たよ、メカ本田…」

「メカ本田？」

「何ですか、それ？」

「え！？いや、なんでもない、こっちの話！」

「「？」」

どうしたんだ、月沙？てか本田って誰？

『魔法カード《野性解放》！獣族モンスター１体の攻撃力を、そのモンスターの守備力分アップさせる！《アクロバットモンキー》を選択！』

《野性解放》
通常魔法
フィールド上に表側表示で存在する獣族・獣戦士族モンスター１体の攻撃力は、そのモンスターの守備力の数値分だけアップする。
エンドフェイズ時そのモンスターを破壊する。

《アクロバットモンキー》　ＡＴＫ／１０００→２８００

「攻撃力２８００！？」

「ゴーズを超えたッス！」

…まさか、このためだけに《ＤＮＡ改造手術》を使ってるんじゃないだろうな？

『《アクロバットモンキー》でゴーズに攻撃！アクロバット・ウッキー！』

そのネーミングセンスについて一度ツッコむべきか？

『ぐわっ！？』

『ゴーズ!?』

「くそ、攻撃を止めるカードがない…！」

紅刃　ＡＴＫ／２０００→１９００

『エンドフェイズ時に、《野性解放》の効果を受けたモンスターは破壊される。ターン終了』

サル
ＬＰ／２０００
手札／１
モンスター／なし
魔法・罠／《スピリットバリア》《ＤＮＡ改造手術》リバース×１

「俺のターン！」

相手の場にはモンスターがいない。カイエンの攻撃が通れば俺の勝ちだが…。

『紅刃、ここは臆せずに攻めましょう！』

「ああ！カイエンでダイレクトアタック！レイジング・ブラッシュ！」

『罠カード発動《炸裂装甲（リアクティブアーマー）》！攻撃モンスター１体を破壊する！』

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
その攻撃モンスター1体を破壊する。

『何!?きゃ!』

「カイエン!?」

まずいな。使えるカウンター罠がない…!

「…裏守備モンスターをリリースして《天空騎士パーシアス》をアドバンス召喚。魔法カード《強欲な壺》を発動、2枚ドローする」

下半身が白馬の聖騎士が現れた。なんか久しぶりに出した気がする。

《天空騎士パーシアス》　ＡＴＫ／１９００

「そして、手札から速攻魔法(サイクロン)を発動!《ＤＮＡ改造手術》を破壊!」

「ウギ!?」

「見た目がどうもな…。フィールド魔法《天空の聖域》を発動。カードを1枚セットしてターンエンドだ」

紅刃
ＬＰ／１９００
手札／2
モンスター／《天空騎士パーシアス》（ＡＴＫ／１９００）
魔法・罠／《天空の聖域》リバース×４

『私のターン！《怒れる類人猿》を召喚！』

《怒れる類人猿》　ＡＴＫ／２０００

げっ、２体目！？

『魔法カード《地割れ》！攻撃力が１番低い相手モンスター１体を破壊する！』

「紅刃さんの場にはパーシアスしかいないですわ！」

「このままじゃ、このターンで負けてしまうわ」

ももえと明日香の言う通り、パーシアスが破壊されたら《怒れる類人猿》にダイレクトアタックされて俺の負けだ。でもな、俺のデッキは【パーミッション】だ。

「カウンター罠を１枚も使わないまま、負けるわけにはいかねえんだよ！カウンター罠（デストラクション・ジャマー）！手札を１枚捨て、モンスターを破壊する効果の発動を無効にする！」

《デストラクション・ジャマー》
カウンター罠
手札を１枚捨てる。「フィールド上のモンスターを破壊する効果」を持つカードの発動を無効にし、それを破壊する。

「ウキッ！？」

「あ、危なかった…」

月沙が凄くほっとしてるけど、別に命がかかってるわけじゃないからな？

『《怒れる類人猿》でパーシアスに攻撃！』

『《攻撃の無力化》を発動！攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる！』

『…ターン終了』

サル
ＬＰ／２０００
手札／０
モンスター／《怒れる類人猿》（ＡＴＫ／２０００）
魔法・罠／《スピリットバリア》

「ここまで追い詰められるとはな。だが、勝負はここからだぜ！俺のｔ「ウキ～！」…は？」

ん？なんか別の所からサルの声が聞こえたような…。

「紅刃、あそこ！」

「ん？って、何だ！？」

月沙が指を差した方を見ると、野生のサルがたくさんいた。あれ？ここってこんなにたくさんサルが住んでるのか？

「あれって、あのサルの仲間ッスか？」

『クリクリ～』

「ハネクリボー？」

ハネクリボーが出て来て、十代に何かを伝えてる。てか、十代ハネクリボーの言葉わかるんかい。

「紅刃！そのサル、仲間のところに帰りたくて脱走したみたいだぜ！」

「なるほど。無理矢理研究に使われてたって予想は当たりみたいだな」

となると、いやそうじゃなくても、やる事はひとつしかない。

「サル。事情はわかった。でもな、デュエルはいつでも真剣勝負だ。楽しくやるにしても、何かを背負っていても、全力でぶつからなきゃ相手に失礼だ。だから、俺は全力でお前を倒す！」

「ウキ…」

サルは仲間を一瞥して、

「ウキ！」

強く鳴いた。『かかって来い』って言ってんのかな。

「ああ、行くぜ！俺のターン！」

引いたのは…よし、来た！

「俺の場のパーシアスをリリースする事で、こいつを手札から特殊召喚する！《天空勇士ネオパーシアス》！！」

パーシアスが黄金の光に包まれる。光から出たそいつは、全身を結晶化させ、下半身も結晶の塊と化した姿に進化していた。

《天空勇士ネオパーシアス（エンジェルブレイブ）》
効果モンスター
星７／光属性／天使族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ２０００
このカードは自分フィールド上の「天空騎士パーシアス」１体を生け贄に捧げる事で特殊召喚する事ができる。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
また、このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、自分のデッキからカードを１枚ドローする。
フィールド上に「天空の聖域」が存在し、自分のライフポイントが相手のライフポイントを超えている場合、その数値だけこのカードの攻撃力・守備力がアップする。

《天空勇士ネオパーシアス》　ＡＴＫ／２３００

「このモンスターは…！」

「ウキ…！？」

「このターンでけりをつける！速攻魔法（ダブル・サイクロン）！俺の魔法・罠とお前の魔法・罠を１枚ずつ破壊する！」

《ダブル・サイクロン》
速攻魔法
自分フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚と、相手フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して発動する。選択したカードを破壊する。

「伏せカードと《スピリットバリア》を破壊！」

赤と黄色、2つの竜巻がカードから飛び出し、互いのカードを破壊した。ちなみに、俺が選んだ伏せカードは《昇天の黒角笛》だ。

「さらに、永続罠《女神の加護》を発動！このカードが場にある限り、俺は3000ポイントのライフを得る！」

《女神の加護》
永続罠
自分は3000ライフポイント回復する。
自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードがフィールド上から離れた時、自分は3000ポイントダメージを受ける。

紅刃　LP／1900→4900

「3000ポイントも！？」

「でも、それだけじゃ勝てないわよ？」

「ただ回復したわけじゃないぜ？」

ネオパーシアスの体が輝きを増していく。攻撃力が上がったからだな。

「ネオパーシアスは、《天空の聖域》が場にあり、俺のライフが相手より上の時、互いのライフの差だけ攻撃力が上がる」

「え？って事は…」

「俺とサルのライフの差は２９００。よって、攻撃力は…」

《天空勇士ネオパーシアス》　ＡＴＫ／２３００→５２００

「「「「「５２００！？」」」」」

これだけあれば充分だ！

「バトル！ネオパーシアスで《怒れる類人猿》に攻撃！ネオ・パーシヴァル・セイバー！！」

光をありったけ込めた刃が、朱い類人猿を真っ二つに斬り伏せた。

「ヴッキィィイイイ！！？」

サル　ＬＰ／２０００→　０

紅刃　ＷＩＮ

「よし！」

「やった！紅刃君の勝ちッス！」

「…でも、あのサルまた研究所に連れて行かれるのね…」

ジュンコが悲しそうにサルを見てる。心配すんな、手は打ってある。

「よくやった！後は我々に任せろ！」

「「ちょ～っと待ったぁ！」」

俺と十代が研究者達の前に立ちはだかる。十代も考えは同じみたいだな。

「紅刃は、『デュエルで負けたら素直に言う事を聞く』とは言ったけど、『研究所に帰す』とは言ってないぜ？」

「何？」

「あいつは、このまま仲間の所に帰す」

「「「な！？」」」

「ウキ！？」

研究者達と一緒にサルも驚いてる。驚くも何も、最初からこうするつもりだったけどな。

「研究所で好き勝手に扱われるより、仲間と一緒に楽しくやる方がずっと生きがいがある。お前も、そのつもりで脱走したんだろ？」

「ウキ…」

「そう来なくっちゃ！」

「あなた達らしい結論ね」

サルの仲間達は俺の言葉がわかったのか、嬉しそうに騒いでる。

これで一件落着だな。

「邪魔だ！どけ！」

「うわっ！？」

「くっ！？」

な…！？こいつら、力ずくで来やがった！？

突然の出来事に俺達は反応できず、サルは網にからめ捕られてしまった。

「サル！」

「おい、約束を破るのかよ！？」

「フン、約束？何の事だ？約束した証拠でもあるのか？」

「…っ、こいつら…！」

こういう奴らは何度も見てる。たまにいる、性根の腐った奴らだ。

「そんなに仲間と一緒にさせたいならそうしてやってもいいぞ？ただし私の研究所でな！」

「何!?」

「他のサル共もみんな捕まえるんだ!実験動物は多いに越したことはないからな!」

黒スーツがサル達に麻酔銃を向ける。ここは俺が…

パァン!

「え?」

あれ?おかしいな?麻酔銃が粉々に砕けてるぞ?

…うん、まさかな。月沙が水弾ぶっ放したなんて事はないよな?翔達にアビリティの事知られたらまずいもんな?

月沙の方を見ると、ディスクの銃口を研究者共に向けていた。アビリティの事を知らない翔達は目を丸くしている。

…どう考えても予想通りです、本当にありがとうございました。

って、そうじゃねえ！！

「つ、月沙さん？今のって…」

「ちょっとね。今かなりイラッて来たから」

研究者共を睨んだまま答えてる。なんか口は笑ってるけど額に青筋立ってるし！

「おい！アビリティ使って大丈夫なのかよ！？」

「秘密じゃなかったのか？」

十代と一緒に詰め寄り、小声で問い詰める。

「どのみち、いつかは話す事になるだろうから。後々説明するのもめんどくさいし」

「ハァ…。まあ、いいか。そういう事なら、俺も自由にやらせてもらうぜ」

「紅刃…。わかった、お前らがそう言うなら、俺も止めねえよ」

「サンキュな」

さ～て、あの馬鹿共を裁くか！

「な、何だそれは！？」

「ただのデュエルディスクだけど？」

「そんなはずがない！普通の拳銃みたいに発砲できるなんてありえない！」

「でも、できるから麻酔銃を壊せたんでしょ？」

月沙が一歩進むと奴らは一歩下がる。もう対抗手段はないみたいだな。

俺はディスクを構え、一気に間合いを詰めた。

「ひっ！？この、喰らえ！」

大柄の男がスタンガンを取り出し、俺に突き出したけど、何も怖くない。軽くかわして、その右腕を掴んだ。

「なっ…！」

「そんなに動物を使って研究したいなら…」

高く振りかざしたディスクに白い稲妻が走る。一瞬、本当に使ってもいいのか不安になったけど、すぐにその考えを振り払った。

「自分の体でも使ってろ！！」

右腕を思い切り振り下ろし、電撃を纏ったディスクでぶった斬った。

「皆さん、お手柄ですにゃ～」

あれから、レッド寮長の大徳寺先生が来て、研究者共を島から追い出した。にしても、語尾に「にゃ」って…変わった人だな。

研究者共は俺と月沙のアビリティを見て戦意喪失してて、大徳寺先生の言う事を大人しく聞いてた。また電撃や弾丸で攻撃されたくなかったんだろうな。

サルは無事救出して、仲間と合流させた。みんな嬉しそうだな。

「さようなら～！」

「もう捕まるなよ～！」

「今度会ったら俺ともデュエルしようぜ～！」

サルは元気に手を振って、仲間と一緒に帰っていった。また会えるといいな。

「紅刃、月沙。ひとつ聞きたい事があるんだけど…」

大徳寺先生が研究者共を連れて帰った後、明日香が尋ねて来た。言いたい事はもうわかってる。

「なんだ？」

「さっきのあれ…一体何なの？」

「そうッスよ！隠さないで教えてよ！」

「…あれはアビリティ。デッキの力を自分の力として使う能力だよ」

「アビリティ？」

「デッキの力…って？」

精霊の事は伏せるつもりだな。

「デッキの特性、って言った方がわかりやすいかな？私のデッキは水属性の【氷結界】だから水や氷の力が使える。紅刃は光属性中心だから光…っていうか、切り札のボルテニスが使う電撃を扱える」

みんなポカンとしてるよ。ま、無理もないか。

「あなた達は、一体何者なの？」

「さあてね。今はまだ話せないな」

「何でッスか？」

「いつかは話す時が来る。だから、その時まで待っててくれないかな？」

月沙がそう言ったけど、どこか寂しそうだった。

…そっか。事が済んだら、俺と月沙は未来に帰る。こいつらとは、もう会えなくなるんだよな。

「…ええ、わかったわ」

明日香も、月沙の表情を見て少し申し訳なさそうにしている。

「ま、こんな力があるからって別にどうというわけじゃないし、今まで通りに接してくれないか？」

「当然だろ！俺達は仲間なんだからな！」

「そうッスよね。紅刃君、月沙さん、これからもよろしくッス！」

ホント、十代の元気には救われるよ。

「ああ、こちらこ…あああああっ！！」

「！？ど、どうしたんですの？」

「万丈目の見送り、忘れてた！！」

「「「「「「あ…」」」」」」

やっべえ…本来の目的をすっかり忘れてた…。この時間じゃ、もう島を出てるよな…。

ＳＩＤＥ／万丈目

ピリリリ、ピリリリ

「ん？」

船の寝室でデッキの調整をしていると、ＰＤＡにメールが来た。

誰からだ…？

差出人は…真川紅刃。紅刃から？

「何の用だ？」

とりあえず、内容を確認する。

『よお、今はもう島を出たところか？

せっかくだから、月沙や十代達と一緒に見送りに行こうとしたんだけど、ちょっとした事件に出くわして行けなかった…

しゃあないから、みんなを代表してメールで伝える

必ず戻って来い！みんな待ってるからな！』

「…フッ、このお人よしが…」

口元が緩むのを感じながら、トンデモ能力を使う恩人にメールを返した。

『十代達にも伝えておけ

俺は必ず、今よりもずっと強くなって復活する！覚悟しておけ！』

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第9話　天空騎士は進化する（後書き）

いかがでしたか？

タイトル通りネオパーシアスを出しましたが、現実だといちいち計算するのがめんどくさいです…。デュエルディスクなら自動で計算してくれるんだろうな…。

《天空の聖域》関連のカードはまだありますので、全部出せたらいいな、なんて考えてます。

万丈目は自主退学という形にしました。三沢の出番が減ってしまいましたが、なんとかして出番を増やすつもりです。でもどこで出そう…？

では、また次回！

第１０話　血が繋がってなくても似ている人はいる（前書き）

今回はＧＸの人達の代わりに５Ｄ'ｓの人達が出ます。

そして、新しいオリジナルキャラも登場します。

それではどうぞ！

第１０話　血が繋がってなくても似ている人はいる

ＳＩＤＥ／クロウ

今日の仕事を全部終えて、遊星達の所に戻った。

龍亞が突然「みんなで焼肉パーティーやらない？」って言ったから、今夜はそれをやる事になってる。焼肉はしばらく食ってねえし、俺も大賛成だ！今日はたらふく食うぜ！

今は夕方の５時。まだ時間があるな。とりあえず、部屋に入るか。

「ただいま！」

「クロウ。仕事は終わったのか？」

「ああ。今日は少なめだったから早めに終わった」

今いるのは、遊星、ジャック、龍亞、龍可、そして紅刃と月沙だ。アキともう１人がいないけど、多分買い出しにでも行ったんだろ。

「クロウ、仕事の調子はどうだ？」

「ああ、『仕事の調子は』いいぜ？」

紅刃の質問に、俺は『仕事の調子は』の部分を強調して答える。

「？何か不具合でもあるのか？」

「この馬鹿が浪費しまくってるせいで、いくら稼いでもまともな金額が残らねえんだよ！」

「馬鹿とはなんだ！ブルーアイズマウンテンを飲む事の何が悪い！？」

「1杯3000円もするコーヒーをちょくちょく飲むんじゃねえ！つーか自覚してんじゃねえか！」

駄目だこいつ、早くなんとかしないと…ジャック、キングやってる間に金銭感覚が鈍ったか？

「ジャック…少しは自重しようよ…。そんなんだからジャック・アホラスなんて言われるんでしょ？」

「誰もアホラスとは言っていないだろ！いや、それよりも月沙貴様ぁあああああ！！」

ジャック・アホラス…やば、ちょっと吹き出しかけた。

「ジャック、落ち着きなよ…」

「挑発に乗りやすいわね…」

「あいつは放っておいても大丈夫だろう」

龍亞はともかく、龍可と遊星は容赦ねえな。

「クロウ、お前大変だな…」

「同情ありがとよ…。おかげで少し元気が出…」

……。

「うおぉおおおぉぉおおおおおおおぉぉおおお！！！？？」

「ん？どうした？急に尻餅ついて」

「どうしたじゃねえ！！お前らなんでここにいるんだよ！？過去に行ってるんじゃないのか！？」

「実は向こうで冬休みに入ってさ、その間ここに帰る事になったんだ」

「冬休み！？」

「私達、今はデュエルアカデミアで潜入調査してるの。それで冬休みに入ったから、あの自称神様が『学生なら冬休みは必要でしょ？』って言って来て、この時間に送ってくれたってわけ」

「ああ、なるほど…」

うわ～、びっくりした。何の違和感もなく溶け込んでたからなおさら驚いたぜ。遊星達も何か言ってくれよ…。

「ただいま。食材買って来たわよ」

お、アキが帰って来たか。

「よお、アキ！」

「え…え！？紅刃！？」

「アキ、久しぶり！」

「月沙！？２人共どうして…」

「遊星、あいつらいつ帰って来たんだ？」

紅刃と月沙がアキに事情を説明してる間に、遊星に聞いてみた。

「午後の４時半だ。俺達も、急にあいつらが帰って来たのには驚いた」

「だろうな。連絡が一切なかったし」

「今年の年末年始は賑やかになりそうだな」

あの自称神様もいい事するじゃねえか。今日は焼肉パーティーもあるし、なおさら都合がいいな。

「戻ったわよ」

最近になって聞くようになった、物静かで落ち着いた声が耳に入った。さっき言った「もう１人」が帰って来たな。

「あら？見ない顔ね」

「ええと…どちら様？（月沙、知ってるか？）」

「（いや、原作にはあんな人は出て来なかった。私の影響で事象が歪んだみたいね）」

紅刃と月沙が小声で何か話してるな。多分、あいつは原作とやらには出て来ねえんだろ。

「あ、兄さん。頼まれたパーツ、買って来たわよ」

「ああ、すまない」

「「兄さん！？」」

そいつは買物袋を遊星に渡した。あいつらが驚くのも無理ねえな。俺達だって最初は信じられなかったんだし。

「え？遊星、『兄さん』って…？」

「ああ、こいつは「いいわよ。自己紹介なら自分でするから」そうか」

そいつは、状況についていけてない紅刃と月沙に向き直った。

「紹介が遅れたわね。私は篠村璃音（しのむらりおん）。遊星兄さんは、私の従兄妹（いとこ）に当たるわ」

「「……従兄妹ぉ！！？」」

大音響で俺達と全く同じリアクションをした。

ＳＩＤＥ／月沙

従兄妹!?私の知らない新キャラなのは新鮮だからまだいいとして、従兄妹!?

「あら、兄さんに親戚がいる事がそんなにおかしいかしら?」

改めて、篠村さんをまじまじと見つめる。

長めの赤い上着を前で留めて、中には白い服を着ている。ズボンの色は黒。髪は茶髪、目は空色。髪型は…簡単に言えば、遊星の「蟹」と呼ばれる原因になった、突き出た４つの髪を取った感じ?他にも少し違う箇所はあるけど、ぱっと見は遊星の妹と見られてもおかしくないくらい似ている。

「あなた達は?」

「あ…私は波星月沙」

「俺は真川紅刃だ。…従兄妹だっていう証拠はあるのか?」

「そう言うと思ったわ」

篠村さんは、近くに置いてある自分のバッグから古い書類を取り出した。

「不動博士の研究資料よ。私の両親が博士の親戚で、研究も一緒にしていたわ」

「不動博士!?」

資料を見ていくと、名簿の不動夫妻のすぐ下に「篠村」という苗字が2つ書かれていた。

「2人と不動博士の血縁関係を辿っていけば、事実である事がわかるわよ」

「本当に親戚なのか…」

「両親が資源の調達のために研究所を遠く離れている時にゼロリバースが起きた。私が生まれたのはその後よ」

ゼロリバース。モーメントを制御システムが不完全なまま作動させたせいで起きた大事故。その結果、地続きだったシティとサテライトは切り離され、遊星の両親は亡くなってしまった。篠村さんの両親は、本当に運がよかったとしか言えない。

「そうか…。お前の両親は、今何してんだ?」

「もうこの世にはいないわよ。交通事故で即死」

「あ…悪い、余計な事聞いちまって…」

「いいわよ。遊星兄さんは、今の私にとってはたった1人の家族みたいな存在なの。本当の兄妹みたいに『兄さん』って呼んでも、罰

は当たらないでしょ？」

なるほど、それで『兄さん』か…。

「兄さんを探すのには苦労したわ。フォーチュンカップで優勝してなければ、見つけるのはもう少し遅くなっていたでしょうね。まさか、元キングのジャック・アトラスまでいるとは思わなかったけど」

「誰が元キングだ！」

「いや、お前はキングでもないだろ」

あ～あ、またジャックとクロウの口喧嘩が始まった。

それにしても、またオリジナルキャラが出るなんて、考えもしなかったな…。そうだ！

「ねえ、篠村さん。あなた、デュエルってする？」

「？ええ、一応」

「なら、私とデュエルしない？」

「デュエル？」

「あなたの実力が知りたいし、交流の意味も含めてって事で。いいでしょ？」

「月沙姉ちゃんと璃音姉ちゃん、デュエルするの？見たい見たい！」

龍亞も、相変わらず元気だな。

「いいわよ。やりましょう」

「月沙、気をつけて。璃音は、遊星と互角以上に渡り合うほどの実力の持ち主よ」

「本当に!?ならなおさら楽しみじゃん!」

遊星の実力はみんなよく知ってる。だからこそ、もっとワクワクする!

外に出て、間合いを取ってデュエルディスクを構える。

「気になってたけど、面白いディスクを使うのね」

「ちょっと遊星に改造してもらったけどね。あ、ちょっと待ってて!」

一旦部屋に戻る。今のデッキのままじゃまずい!

「どうしたんだ、あいつ?」

「過去と今とじゃ、カードの制限リストが丸っきり違う。シンクロ召喚すらないから、デッキをかなり変える必要があるんだ」

「はあ!?シンクロなし!?」

「代わりに《強欲な壺》や《死者蘇生》があるから、それでなんとか乗り切れてるけどな」

「お待たせ！」

部屋から出て、再び位置に着く。不正行為だと思われないように、みんなの目の前でデッキをシャッフルした。

「それじゃ、始めましょう。後、私の事は璃音でいいわよ」

「うん！行くよ、璃音！」

「「デュエル！」」

月沙ｖｓ璃音

「先攻は譲るわ」

「それじゃ、遠慮なく！ドロー！まずは《光の護封剣》を発動！３ターンの間攻撃を封じる！」

３本の光の剣が降って来て、璃音のフィールドを囲むように突き刺さった。遊戯王の中でも有名なカードだから、遊戯王を知らなくてもこのカードなら知ってるって人もいるんじゃないかな？

《光の護封剣》
通常魔法（制限カード）
相手フィールド上に存在するモンスターを全て表側表示にする。
このカードは発動後、相手のターンで数えて３ターンの間フィールド上に残り続ける。
このカードがフィールド上に存在する限り、相手フィールド上に存在するモンスターは攻撃宣言をする事ができない。

「いきなり攻撃封じかよ？」

「そして、《氷結界の封魔団》を守備表示で召喚！」

《氷結界の封魔団》　ＤＥＦ／２０００

「封魔団の効果発動！手札の氷結界のモンスターを１体墓地に送る事で、次の私のターンのエンドフェイズまでお互いに魔法カードを使う事はできない！私は手札から《氷結界の破術師》を墓地に送るよ。封魔の結界！」

封魔団…といっても１人しかいないけど…は結界を作り、フィールド全体を覆った。

「カードを１枚セットして、ターンエンド！」

月沙
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《氷結界の封魔団》（ＤＥＦ／２０００）
魔法・罠／《光の護封剣》リバース×１

「私のターン、ドロー」

璃音はどんなデッキを使うのかな？

「…モンスターをセット。カードを２枚セットし、ターンエンド」

璃音

ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×２

今の時点じゃ、どんなデッキかわからないな…。

「私のターン！チューナーモンスター《氷弾使いレイス》を召喚！」

氷の銃を持つ氷結界の一族の一員。個人的にお気に入りのカードだけど、チューナーだから向こうじゃ使えないんだよね…。

《氷弾使いレイス》
チューナー（効果モンスター）
星２／水属性／海竜族／ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ　８００
このカードはレベル４以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。

《氷弾使いレイス》　ＡＴＫ／　８００

「く～、久しぶりだな、シンクロ召喚！」

「久しぶり？」

「ちょっと訳があって、今までシンクロ召喚を禁止にしてたの。今は使えるけどね。さあ、行くよ！レベル４《氷結界の封魔団》にレベル２《氷弾使いレイス》をチューニング！」

結界が消え、レイスが２つの星になって、２つの青い輪を描く。
その中に封魔団が飛び込み、４つの星に変わっていく。

「封印されし猛虎の誇りが、仲間を導く牙となる！秘めたる力を解き放て！シンクロ召喚！」

集いし星達が、光の柱となる！

「咆哮せよ！《氷結界の虎王ドゥローレン》！！」

光の柱から現れたのは、冷気を纏った水色の虎だった。

《氷結界の虎王（こおう）ドゥローレン》
シンクロ・効果モンスター（準制限カード）
星６／水属性／獣族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ１４００
チューナー＋チューナー以外の水属性モンスター１体以上
１ターンに１度、自分フィールド上に表側表示で存在するカードを任意の枚数手札に戻すことができる。
このカードの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで、この効果で手札に戻したカードの枚数×５００ポイントアップする。

《氷結界の虎王ドゥローレン》　ＡＴＫ／２０００

チューナーモンスターとその他のモンスターのレベルを合計し、その数と同じレベルのシンクロモンスターをエクストラデッキから召喚する…これがシンクロ召喚！

「なるほど…そういう事か」

紅刃はもう私の戦術に気づいたみたい。さあ、ガンガン攻めるよ！

「ドゥローレンの効果発動！自分フィールド上のカードを任意の数手札に戻し、戻したカード１枚につき、攻撃力を５００ポイントア

ップさせる！《光の護封剣》を手札に戻し、攻撃力を５００ポイントアップ！バウンス・フォース！」

虎王が雄叫びを上げると、光の剣がカードに吸い込まれていった。

《氷結界の虎王ドゥローレン》　ＡＴＫ／２０００→２５００

「バトル！ドゥローレンで裏守備モンスターに攻撃！アイスブレイク・クロー！」

ドゥローレンが、冷気を込めた爪でモンスターを切り裂く。さて、正体は…。

「…《スクラップ・ゴブリン》は戦闘で破壊されない」

なっ！？【スクラップ】！？

《スクラップ・ゴブリン》
チューナー（効果モンスター）
星３／地属性／獣戦士族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　５００
フィールド上に表側守備表示で存在するこのカードが攻撃対象に選択された場合、バトルフェイズ終了時にこのカードを破壊する。
このカードが「スクラップ」と名のついたカードの効果によって破壊され墓地へ送られた場合、「スクラップ・ゴブリン」以外の自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついたモンスター１体を選択して手札に加える事ができる。
また、このカードは戦闘では破壊されない。

《スクラップ・ゴブリン》　ＤＥＦ／　５００

【スクラップ】…がらくたで作られたモンスター達に付けられた名前。でも、仲間との繋がりは抜群。そして、1番怖いのがシンクロモンスター…。

「…もう一度《光の護封剣》を発動。ターンエンド。エンドフェイズ時に、ドゥローレンの攻撃力は元に戻る」

《氷結界の虎王ドゥローレン》　ＡＴＫ／２５００→２０００

魔法を封じる効果は封魔団が場にいる間だけ。今は普通に使える。

月沙
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《氷結界の虎王ドゥローレン》（ＡＴＫ／２０００）
魔法・罠／《光の護封剣》リバース×１

「ドゥローレンの効果を使って、《光の護封剣》の効果を毎ターン持続させるつもりか」

「これなら、相手の攻撃だけ封じて一方的に攻められるわね」

「私のターン。《スクラップ・キマイラ》を召喚」

がらくたで作られた幻想の生き物が召喚された。

《スクラップ・キマイラ》
効果モンスター
星４／地属性／獣族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ　５００
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「スクラッ

プ」と名のついたチューナー1体を選択して特殊召喚する事ができる。
このカードをシンクロ素材とする場合、「スクラップ」と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できず、他のシンクロ素材モンスターは全て「スクラップ」と名のついたモンスターでなければならない。

《スクラップ・キマイラ》　ＡＴＫ／１７００

「私も行くわよ。レベル４《スクラップ・キマイラ》にレベル３《スクラップ・ゴブリン》をチューニング！」

ゴブリンが３つの星となり、私のとは違う黒い輪を描く。

「巡りし想いが、闇を穿つ悪魔となる！光を導く星となれ！シンクロ召喚！壊せ！《スクラップ・デスデーモン》！」

光の柱から出て来たのは、くず鉄の悪魔だ。気のせいか、遊星と前口上が似てるような…。

《スクラップ・デスデーモン》
シンクロモンスター
星７／地属性／悪魔族／ＡＴＫ２７００／ＤＥＦ１８００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上

《スクラップ・デスデーモン》　ＡＴＫ／２７００

「レベル７で攻撃力２７００！？」

「でも、どうするの？攻撃はできないよ？」

「ならできるようにするだけよ。《サイクロン》を発動、《光の護封剣》を破壊」

「!?」

竜巻が剣を吹き飛ばす。まずい、ロックが外れた!

「《スクラップ・デスデーモン》でドゥローレンに攻撃!デビルズ・フィスト!」

デスデーモンがドゥローレンを殴り飛ばす。ドゥローレンは元の攻撃力が少し低めだからなぁ…。

月沙　ＬＰ／４０００→３３００

「カードを1枚セットし、ターンエンド」

璃音
ＬＰ／４０００
手札／2
モンスター／《スクラップ・デスデーモン》（ＡＴＫ／２７００）
魔法・罠／リバース×３

「なかなか面白い戦術ね。でも、これだけじゃないでしょう?」

「まさか!私のターン!《デブリ・ドラゴン》を召喚!」

他のドラゴン族に比べて小さめな白いドラゴン。前に遊星からもらったんだよね。

《デブリ・ドラゴン》
チューナー（効果モンスター）
星４／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ２０００
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力５００以下のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。
このカードをシンクロ素材とする場合、ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。
また、他のシンクロ素材モンスターはレベル４以外のモンスターでなければならない。

《デブリ・ドラゴン》　ＡＴＫ／１０００

「《デブリ・ドラゴン》の効果で、墓地から攻撃力５００以下のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する！《氷結界の破術師》を特殊召喚！」

《氷結界の破術師》　ＡＴＫ／　４００

あれ？破術師が嬉しそうに見える…。向こうじゃ手札コストにしか使えなかったからな…向こうでも活躍させられるように頑張ろう。

「《氷結界の封魔団》の効果で墓地に送ったモンスターね」

「そういう事！レベル３《氷結界の破術師》にレベル４《デブリ・ドラゴン》をチューニング！封印されし神の槍が、冷気を携え天を突く！秘めたる力を解き放て！シンクロ召喚！貫け！《氷結界の龍グングニール》！」

翼を広げ、氷の龍が咆哮する！

《氷結界の龍　グングニール》
シンクロ・効果モンスター
星７／水属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ１７００
チューナー＋チューナー以外の水属性モンスター１体以上
手札を２枚まで墓地へ捨て、捨てた数だけ相手フィールド上に存在するカードを選択して発動する。選択したカードを破壊する。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

《氷結界の龍　グングニール》　ＡＴＫ／２５００

「来た！月沙姉ちゃんの主力モンスターだ！」

「グングニールの効果発動！手札を２枚まで墓地に送り、その枚数分相手のカードを破壊する！手札を１枚墓地に送り、《スクラップ・デスデーモン》を破壊！アイス・ウィンド！」

「速攻魔法（スクラップ・スコール）発動！デッキからスクラップモンスターを１体墓地に送り、カードを１枚ドロー！さらに私の場のスクラップモンスター１体を破壊する！デッキから《スクラップ・ビースト》を墓地に送り、《スクラップ・デスデーモン》を破壊するわ」

《スクラップ・スコール》
速攻魔法
自分フィールド上に表側表示で存在する「スクラップ」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。
自分のデッキから「スクラップ」と名のついたモンスター１体を墓地へ送り、カードを１枚ドローする。
その後、選択したモンスターを破壊する。

グングニールが翼で吹雪を起こしたけど、デスデーモンが吹雪が当たる直前に破壊された。

「破壊にタイミングを合わせたか…。動きに無駄がないな」

「【スクラップ】は墓地にモンスターがいるほど強くなる。おそらく、次のターンで璃音の切り札が出る」

ビーストを墓地に送った…そろそろ遊星の言う切り札が出る！

「グングニールでダイレクトアタック！フリージング・ジャベリン！」

口から吐き出された槍のような氷の息吹が璃音を襲う！

ガキィィン！

「！防がれた！？」

攻撃を防いだのは…かかし？

「罠カード《くず鉄のかかし》。１ターンに１度、相手の攻撃を無効にし、このカードを再びセットする」

《くず鉄のかかし》
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手モンスター１体の攻撃を無効にする。
発動後このカードは墓地に送らず、そのままセットする。

本当に遊星と似てるな。デッキのイメージもピッタリだし。

「さっすが。私はこのままターンエンドだよ」

月沙
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《氷結界の龍　グングニール》（ＡＴＫ／２５００）
魔法・罠／リバース×１

「私のターン。あなたが主力を出したなら、私もそれ相応のモンスターで対抗しないと失礼ね」

「もう切り札を出す手筈は整ってるんでしょ？」

「今から見せてあげるわ。魔法カード《死者転生》を発動！手札を１枚捨て、墓地のモンスター１体を手札に加える！」

《死者転生》
通常魔法
手札を１枚捨てて発動する。
自分の墓地に存在するモンスター１体を手札に加える。

「手札に加えるのは「《スクラップ・キマイラ》」！？」

「スクラップの効果は大体知ってるよ。使った事はないけどね」

璃音の驚いた顔って初めて見たな。

「物知りなのね。あまり出回ってないはずだけど」

「ちょっと訳ありでね」

「フフ…まあ、いいわ。手札に加えた《スクラップ・キマイラ》を召喚！」

《スクラップ・キマイラ》　ＡＴＫ／１７００

「キマイラが召喚に成功した時、墓地のスクラップと名のついたチューナー１体を特殊召喚する！チューナーモンスター《スクラップ・ビースト》を特殊召喚！」

体の一部が何かのコードになっている機械獣がキマイラに呼び出される。

《スクラップ・ビースト》
チューナー（効果モンスター）
星４／地属性／獣族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１３００
フィールド上に表側守備表示で存在するこのカードが攻撃対象に選択された場合、バトルフェイズ終了時にこのカードを破壊する。
このカードが「スクラップ」と名のついたカードの効果によって破壊され墓地へ送られた場合、「スクラップ・ビースト」以外の自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついたモンスター１体を選択して手札に加える事ができる。

《スクラップ・ビースト》　ＡＴＫ／１６００

「レベル４《スクラップ・キマイラ》にレベル４《スクラップ・ビースト》をチューニング！巡りし想いが、絆を示す証となる！光を

導く星となれ！シンクロ召喚！鳴動せよ！《スクラップ・ドラゴン》！！」

全身がくず鉄でできた巨大な龍。このモンスターが【スクラップ】のエース…！

《スクラップ・ドラゴン》
シンクロ・効果モンスター
星８／地属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２０００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
１ターンに１度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを１枚ずつ選択して発動する事ができる。
選択したカードを破壊する。
このカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、シンクロモンスター以外の自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついたモンスター１体を選択して特殊召喚する。

《スクラップ・ドラゴン》　ＡＴＫ／２８００

『グオォオォオオォオオ！！』

…！この感じ…まさか…！

「《スクラップ・ドラゴン》でグングニールに攻撃！トラッシュ・バースト！！」

銀色のブレスがグングニールを捕らえ、一撃で消し去った。

「くぅ…！」

月沙　ＬＰ／３３００→３０００

璃音「ターンエンド」

璃音
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《スクラップ・ドラゴン》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／リバース×２

「私のターン！《貪欲な壺》を発動！」

「ここでドロー強化…」

「墓地の封魔団、レイス、《デブリ・ドラゴン》、ドゥローレン、グングニールをデッキに戻し、カードを2枚ドロー！さらに魔法カード《手札断殺》！互いに手札を2枚墓地に送り、カードを2枚ドローする！」

《手札断殺》
速攻魔法
お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送り、デッキからカードを2枚ドローする。

璃音に墓地肥やしをさせる危険があるけど、他に手がない。これに賭ける！

「ドロー！」

「…いいカードは来たかしら？」

「…来たよ。逆転の一手が！魔法カード《オーバーロード・フュージョン》！」

「え？何あれ？」

「龍亞…この前アカデミアで習ったでしょ？フィールドと墓地から融合素材のモンスターを除外して、闇属性・機械族の融合モンスターを融合召喚するカードよ」

龍可、説明ありがとう！

「でも、月沙のデッキにはそんなモンスター入ってないぜ？」

「いや、1体だけいる」

「は？」

「シンクロの代わりの切り札として入れてた、あいつの昔の相棒だ」

「墓地の《リボルバー・ドラゴン》と《ブローバック・ドラゴン》を除外！」

「そんなモンスター、いつの間に…！」

「おそらく、グングニールの効果と《手札断殺》で墓地に送っていたんだろう」

「融合召喚！《ガトリング・ドラゴン》！！」

三つ首の機械龍が、くず鉄の龍の前に立ちはだかる！

《ガトリング・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「すっげえ！かっこいい！」

龍亞が凄くはしゃいでる。子供って純粋だな。

「あなたのデッキ、【氷結界】だけじゃ…」

「私の元祖切り札よ！《ガトリング・ドラゴン》の効果発動！コインを３回投げて、表が出た数だけモンスターを破壊する！」

ソリッドビジョンのコインが３枚飛ぶ。

これも賭け。１枚だけ表なら、損失なしで優位に立てる。私ってギャンブル多いな…。

「表は……よし、１枚！《スクラップ・ドラゴン》を破壊！トリプル・ファイア！」

３つのガトリング砲が《スクラップ・ドラゴン》を蜂の巣にした。でも、あのモンスターは確か…。

「《スクラップ・ドラゴン》の効果発動！相手によって破壊され墓地へ送られた時、シンクロモンスター以外の墓地にあるスクラップモンスター１体を選択して特殊召喚する！」

「時間を稼ぐつもりか！？」

「そうはさせない！カウンター罠《ヒーローズルール２》！墓地のカードを対象に取る効果を無効にする！」

《ヒーローズルール２》
カウンター罠
墓地のカードを対象とする効果モンスターの効果・魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

「なっ…！？」

「まだまだ！《氷結界の舞姫》を召喚！」

『私も参ります！』

《氷結界の舞姫》　ＡＴＫ／１７００

一瞬、璃音が目を見開いたように見えた。多分、この人は精霊が見える…！

「バトル！舞姫でダイレクトアタック！雪月花！」

氷の花びらと吹雪は、かかしに阻まれずに璃音に直撃した。

「…っ！」

璃音　ＬＰ／４０００→２３００

「《ガトリング・ドラゴン》でダイレクトアタック！ガトリング・ブラスター！！」

「《くず鉄のかかし》を発動！攻撃を無効にする！」

無数の銃弾に撃たれても平然として立っているかかし。少しはへこんだりしないのかな？

「決められなかったか…。私はこれでターンエンドだよ」

月沙
ＬＰ／３０００
手札／０
モンスター／《ガトリング・ドラゴン》（ＡＴＫ／２６００）《氷結界の舞姫》（ＡＴＫ／１７００）
魔法・罠／０

手札も伏せカードも尽きた。私の直感だけど、これは多分負け、かな？

「私のターン！…」

璃音が引いたカードを凝視してる。

『あの方は、一体何を引いたんでしょうか？』

「（さあ…。ひとつだけ言えるのは…）」

やがて、璃音が溜息をついて苦笑した。

「…さすがね。この子を引けてなかったら私の負けだった」

「（あれが、逆転のキーカードだという事！）」

「これが今引いたカード！《スクラップ・キマイラ》を召喚！」

《スクラップ・キマイラ》　ＡＴＫ／１７００

２体目…あのモンスターは【スクラップ】の必須カード。デッキに3枚あってもおかしくない。

「効果発動！蘇生するのは《スクラップ・ソルジャー》！」

《スクラップ・ソルジャー》
チューナー（効果モンスター）
星５／地属性／戦士族／ＡＴＫ２１００／ＤＥＦ　７００
フィールド上に表側守備表示で存在するこのカードが攻撃対象に選択された場合、バトルフェイズ終了時にこのカードを破壊する。
このカードが「スクラップ」と名のついたカードの効果によって破壊され墓地へ送られた場合、「スクラップ・ソルジャー」以外の自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択して手札に加える事ができる。
このカードをシンクロ素材とする場合、「スクラップ」と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

《スクラップ・ソルジャー》　ＡＴＫ／２１００

「レベル5…って事はまさか…」

「気づいたみたいね。レベル４《スクラップ・キマイラ》にレベル５《スクラップ・ソルジャー》をチューニング！巡りし想いが、双龍となりて翼を翳す！光を導く星となれ！シンクロ召喚！食らいつけ！《スクラップ・ツイン・ドラゴン》！！」

《スクラップ・ドラゴン》の頭が2つに増えたようなドラゴンが現れる。…ああ、終わったな。

《スクラップ・ツイン・ドラゴン》
シンクロ・効果モンスター
星9／地属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２２００
「スクラップ」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上
1ターンに1度、自分フィールド上に存在するカード1枚と相手フィールド上に存在するカード2枚を選択して発動する事ができる。選択した自分のカードを破壊し、選択した相手のカードを手札に戻す。
このカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、シンクロモンスター以外の自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する。

《スクラップ・ツイン・ドラゴン》　ＡＴＫ／３０００

「《スクラップ・ツイン・ドラゴン》の効果発動！私の場のカードを1枚破壊し、相手のカードを2枚手札に戻す！スクラップ・ダブル・アベンジ！」

『きゃあっ！？』

「（スイレン！？）」

セットされた《くず鉄のかかし》が光になって双龍に取り込まれる。すると、2つの頭が口からくず鉄の爆弾を吐き出した。爆弾はすぐに弾け、スイレンと機械龍をフィールドから吹き飛ばした。

「これで決まりよ！《スクラップ・ツイン・ドラゴン》でダイレクトアタック！トラッシュ・ツイン・バースト！！」

「きゃあああぁあああ！？」

一対の光線が、私のライフを丁度削り切った。

月沙　ＬＰ／３０００→　０

璃音　ＷＩＮ

「あ～、負けちゃった…」

「強いわね。まさかスクラップのシンクロモンスターを全部使うとは思わなかったわ。ソルジャーを《スクラップ・スコール》で墓地に送って、あそこでキマイラを引けてなかったら、負けてたわね」

『ガウッ！』

璃音の肩に何かが出て来た。ええと…小さくなった《スクラップ・ドラゴン》？

「その子は？」

「やっぱり、あなたも精霊と通じているのね。《スクラップ・ドラゴン》のフィレスよ。普段はこうして小さくなってるの」

精霊ってそんな事もできるんだ。こうして見ると、可愛いな。

「あなたの精霊は？」

「私？スイレン、自己紹介してあげて」

『はい！《氷結界の舞姫》のスイレンです！よろしくお願いします！』

「ええ、こちらこそ」

「2人共、いいデュエルだった」

精霊達と自己紹介してると、遊星達が近寄って来た。

「やっぱり2人共強いや！次は俺ともデュエルしてよ！」

「龍亞、あまり迷惑かけないの」

「相変わらずの関係だな」

龍亞も龍可も、みんな変わってないなぁ。久々に会えたからとても嬉しいし、璃音とも仲良くなれたから、帰って来て本当によかった。

「あれ？紅刃？月沙も？」

「え？」

急に別の声が聞こえた。振り向くと、金髪青目で腕の部分が青い白の上着を来た、見覚えのある人がいた。

「「俊也!?」」

風嶺俊也…かつてダークシグナーの事件で共に戦った仲間の1人がそこにいた。

「久しぶり!元気だった?」

「当然だよ。みんなは?」

「貴様に心配されるまでもない!」

「ジャック…もうちょい丸くなれよ…」

「いろいろあったが、俺達は変わらず元気だ」

「俊也、旅の方はどうだった?」

「龍可ちゃん!うん、結構いろんな所に行って来たよ。懐かしい人達にも会えたしね」

俊也は事件の後、もっといろんな所に行って修業するために世界各地を旅していた。ここに帰って来たって事は、そろそろ自信がついたのかな?

「あら、なら私も今はその懐かしい人達の1人なのかしら?」

「え？…あ！璃音！？」

「気づくのが遅いわよ。私の顔なんかとうの昔に忘れたわけ？」

「いや、そんな事ないよ…あはは」

「…なあ、お前ら知り合いなのか？」

みんなが疑問に思ってる事を紅刃が代弁した。

「旅の途中でちょっとね」

「彼のおかげで、兄さんの居場所を完璧に把握できたの。俊也には感謝してるわ」

「そうか。俊也、ありがとう」

「お礼を言われるほどの事はしてないよ」

「懐かしい人達ってのは、一体誰だ？」

「ええと、ボマーさんにミスティさん、鬼柳にも会ったな」

「やたらと懐かしいメンツだな…」

「ミスティにも会ったの？元気だった？」

アキってミスティさんとは特別な関係だったんだっけ？

「うん。もしネオ童実野シティに寄る事があったら、アキによろし

く伝えといてってさ。あ、そうだ！」

「どうした？」

「今日ここに来るまでに焼肉用の肉をもらっちゃってさ…せっかくだからみんなで食べない？」

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

「え？みんなどうしたの？」

どういう経緯でもらったかはわからないけど、そっかぁ、焼肉か…。

「…俺達、今夜焼肉パーティーする予定なんだけど…」

「え？」

「あああ！？ジャックてめえ、それ俺が狙ってた奴だぞ！」

「知った事か！食卓は戦場だ！相手の肉でも力ずくで奪い取る！」

「そういうわけだから、その肉もらい！」

「何ぃ！？紅刃貴様ぁ！！」

「3人共、少し落ち着いて食べなさい！」

「そこのもやし取ってもらえるかしら？」

「はい、どうぞ」

「あ、俊也！野菜そんなに入れないでよ！」

「成長期なんだから、これくらい食べないと駄目でしょ？」

「…凄い事になってるわね」

「ああ。賑やかだな」

上からクロウ、ジャック、紅刃、ジャック（2回目）、アキ、璃音、私、龍亞、俊也、龍可、遊星。お察しの通り、今は焼肉パーティーの真っ最中。予定より肉が増えたけど、あまり問題なさそうね。

『ずいぶんとやかましいな』

『悪くはないわよ。賑やかでいいんじゃない？』

『ゴーズ、そこの肉を取ってもらえぬか？』

『ああ。ほら』

『グルル…』

『？お前も食うか？』

『ガウッ』

『その後、どうなったんですか？』

『そこでミスティさんが《サイクロン》で《スピリットバリア》を破壊しちゃって…』

精霊組も、どこで用意して来たのかみんなで焼肉を食べてる。上から順に、ゼウス、カイエン、オーディン、ゴーズ、フィレス、ゴーズ（2回目）、フィレス（2回目）、スイレン、そして俊也の精霊の《風霊使いウィン》。俊也も精霊が見える人の1人で、ウィンは俊也のパートナーを勤めている。スイレンとは結構仲がよくて、よく一緒に話してる。

あの後、紅刃、璃音、俊也と4人で集まって精霊の事でいろいろ話をした。精霊のみんなも再会や出会いが会って嬉しそうにしてたな。

「月沙、過去の件なんだが…今のところはどうだ？」

みんなが騒いでる中、遊星がそんな事を聞いて来た。

「今のところは何の音沙汰もなし。イレギュラーの手掛かりすら掴めてないの」

「イレギュラー？」

「ああ、この事件を起こした奴の事を私達でそう呼んでるの」

「そうか…」

「向こうの人達とも楽しくやってるけど、いつかは別れなくちゃいけないと思うと、ちょっと寂しいかな」

「…いつか事件が解決して、離れ離れになったとしても、絆は繋がっている」

「！」

「きっとまた会える機会が来るはずだ。今は、今のこの時を楽しもう」

「遊星…」

…やっぱ、遊星には敵わないな。私も、遊星や紅刃みたいに真っ直ぐな心を持てたらな…。

「そうだよね。ありがとう、遊星！さて、私も参戦しよっか！隙あり！」

「あっ！月沙！それは俺のカルビだ！」

「食卓は戦場なんでしょ？」

未来に不安を感じるより、私は今を楽しもう。この冬休みがいい思い出になるように！

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第１０話　血が繋がってなくても似ている人はいる（後書き）

いかがでしたか？

今回は遊星達御一行が登場しました。しかし、ジャックがどうしてもギャグ要員に…。かっこいいジャックの書き方がよくわかりません…。

新しく出て来た璃音のデッキは【スクラップ】にしました。遊星の従兄妹なんてある意味無茶な設定を活かすにはこれ以外思い付きません。そのせいで精霊を誰にするかでかなり悩みました。最終的に《スクラップ・ドラゴン》になりましたけど…。

俊也のデッキは次回で使用する予定です。ウィンが精霊だという時点で大体予想がつく人も多いでしょうが…。

では、また次回！

第１１話　チューナーにもいろんな使い道がある（前書き）

今回はいろんな（？）キャラが出て来ます。そして、俊也のデッキも公開します。

それではどうぞ！

第１１話　チューナーにもいろんな使い道がある

ＳＩＤＥ／紅刃

「３…２…１…」

「「「ハッピーニューイヤー！！」」」

現在時刻は午前０時。新年で１番始めに聞いたのが月沙、龍亞、クロウの掛け声とクラッカーの音×１６（精霊含む）だ。

前回の焼肉パーティーに参加した１０人で、龍亞と龍可の家で年越ししようって話になったんだ。みんなそれぞれ新年の挨拶をしている。

しっかし、とんでもない１年だったな…。シグナーとダークシグナーの戦いがあって、遊星達はゴーストとやらと一悶着あって、俺と月沙は過去へトリップ…ここまで濃い１年を過ごした奴ってそうそういねえぞ？

「今年はどうなる事やら…」

「どうかした？」

「いや、なんでもない」

月沙の質問を軽く受け流す。ま、今はそんな事どうでもいいか！

「初詣で？」

「新年の初めだし、みんなで行かない？」

朝、みんなで雑煮とお節をつついてる時に月沙がこんな提案をした。

「いい考えね。でも、この辺りに神社なんてあったかしら？」

「あるよ。数は少ないけどね」

「意外ね…。ないものだと思ってたけど」

璃音に同感だ。かなり近未来みたいな感じになってるこの街で神社ってのが妙な違和感がある。

「初詣でかぁ。月沙姉ちゃんに賛成！行こうよ！」

「そうだな。９時くらいに出かけよう」

というわけでみんなで初詣でに行く事になった。あ、クロウ、それ最後の伊達巻き！

ＳＩＤＥ／月沙

うん、予想はしてたけど、物凄い混み具合ね。
神社の数が少ないからか、かなりの人数が集まっていた。なんとか初詣では済ませて来たけど、早めに行って正解だった。

「月沙姉ちゃんは願い事何にしたの？」

「秘密。こういうのは言わない方が叶いやすくなるものなの」

「そうなの？」

「クロウ、大丈夫？あまり元気ないみたいだけど…」

「ああ、気にすんな。（今年こそは収入をまともに使えたらな…）」

クロウ、考えてる事が顔に出てるし、目が遠いよ。
でも、この先ブルーアイズマウンテン（１杯３０００円）１２連打＋旅行費が待ってるんだよな…ホントドンマイ。

「あ、ジャック！」

「？カーリーか」

駆け寄って来たのは新聞記者のカーリー渚さん。いつもはグルグル眼鏡をかけてるけど、眼鏡をとったら美人なんだよな…。

「みんなも明けましておめでとう！」

「ああ、今年もよろしく」

「お前も初詣でか？」

「それもあるけど、初詣での取材をしてるの」

ジャックと話す時はとても生き生きしてるけど、これはジャックが好きだから。

実はこの人、元ダークシグナーなんだけど、その時のジャックとのデュエル中にジャックから告白されたの。でも、ダークシグナーだった時の記憶は全くないし、ジャックもそんなそぶりを全然見せないから関係がなかなか進展しない。アニメで見た記憶じゃ、物凄く熱い告白だったのにな…あれ多分ジャックでも二度と言えないと思う。

「そうか。年の初めから大変だな」

「アトラス様！」

「よお、明けましておめでとさん」

「ん？狭霧？」

「牛尾さん！」

また誰か来た。この人達は、セキュリティの狭霧深影さんと、その部下の牛尾哲さんだ。

「お前達も初詣でに来たのか？」

「一応しましたが、今日は神社の警備に来ました」

「ま、こんだけ人が集まってりゃ、トラブルが起きてもおかしくないよな」

「…ところで、なんであなたがここにいるのよ？」

「…それはこっちの台詞なんだから」

火花を散らして睨み合う狭霧さんとカーリーさん。２人共ジャックの事が好きだから、お互いをライバル視してる。ここにジャックの行きつけのカフェで働いてるステファニーって人も入るし、ジャックって元キングだからか結構モテるよね。

「そういや、お前らおみくじは引いたか？」

「ああ、さっきやって来た。俺は吉だ」（遊星）

「私も吉よ」（アキ）

「俺は大吉だ」（ジャック）

「俺は凶…」（クロウ）

主に資金的な意味でだと思う。ってあれ？おみくじ？

「みんないつの間に引いたの？」

「お前らがトイレに行ってる間にな」

て事は、私と紅刃と璃音と俊也がまだ引いてないのか。

「そっか。じゃあ、私も引いて来るよ」

「俺も行くか。あ、牛尾達はどうだった？」

「私は小吉」

「ハハッ、俺は大凶だ…」

「あらら…」

牛尾さん、狭霧さんの事好きなのに全く振り向いてくれないからね。頑張れ。

「さ、早く行こう」

俊也を先頭にして、私達４人はおみくじを引きに行った。

さて、引いたけど何が書いてるかな？

「私は小吉ね」（璃音）

「俺は吉か」（紅刃）

「僕は大吉だね」（俊也）

みんな結果はそれなりにいいみたい。私のは…。

「あ、吉だ」

「あら、よかったじゃない」

「ええと、何々…『例え大切な人と離れ離れになっても、いつか必ず会えます』…」

「早く戻ろうぜ」

紅刃と俊也は先に走っていった。

「大切な人、か…」

「紅刃とか？」

「な、何言ってるの璃音！？」

「顔赤いわよ」

「！？」

璃音に指摘されて、顔が火照っている事に気づいた。あれ？なんで顔赤いんだろ…？

「好きなんじゃないの？彼の事が」

「そ、そんなんじゃないって！あいつとはただ中学からの友達で…」

「そう。ならいいけど（自分の気持ちに気づいてないみたいね。ま、そのうちわかるでしょうけど）」

ていうか、なんで紅刃？あいつは大切な友達で…友達で…。

何だろ、このもやもやした感じ？

…私は紅刃の事を、本当はどう思ってるのかな…？

ＳＩＤＥ／俊也

初詣でも終わって、今はみんなで帰ってる途中。さすがに、たいていの店は閉まってる。カーリーさん達とは仕事の関係で、神社で別れた。

「お、俊也じゃねえか！」

「ん？あ、リキッド、沖田！セリアさんも！」

後ろから声をかけられて振り返ると、僕の昔の同僚がいた。

「明けましておめでとうございます。皆さんも元気そうで何よりで

す」

「お前らもな。会うのはアルカディアムーブメントの事件以来か？」

今敬語で挨拶した眼鏡をかけた人が沖田、僕に真っ先に声をかけたのがリキッド、後1人の女の人がセリアさん。この3人と僕は、かつてサイコデュエリスト養成施設のアルカディアムーブメントで一緒に働いていた仲間だ。

セリアさんが研究員で、沖田とリキッドと僕は指令であちこちに駆り出されていた。

まあ、僕は精霊世界と通じてるのを買われて入っただけで、サイコデュエリストじゃないけどね。何の目的かは知らないけど、僕が無能力者だという事がばれないようにそれなりの配慮はされていた。

でも、後にダークシグナーの攻撃を受けてアルカディアムーブメントの本部は崩壊。僕は前から総帥のディヴァインのやり方が気に食わなかったから、これを機に同じ考えを持つこの3人とクーデターを起こして、この組織を壊滅させた。今はそれぞれの新しい人生を楽しんでる。

「3人共初詣での帰り？」

「そんなところです。私は行く途中でたまたま会っただけですけど」

「お前らはずいぶんと大人数だな」

「このメンツで年越ししたしね」

3人も加えて龍亞君と龍可ちゃんの家に向かった。数日前に再会したばかりだというのに、結構話が弾んだ。アキもセリアさんとは

仲がいいらしく、楽しそうに話してる。

そんなこんなで家に着いた。のはいいんだけど…。

「なあ、俊也」

「ん？」

「俺とデュエルしてくれないか？」

急にリキッドからそんな事を言われた。

「いいけど…急にどうしたの？」

「よく考えたら、旅から帰って来てから、お前とは一度もデュエルしてないなって思ってさ」

そういえば、リキッド達とは事件の後から一度もやってないよな。

「わかった。一発やろう！」

「俊也は以前よりずっと強くなってるわ。覚悟した方がいいわよ」

アキが言う通り、旅に出る前よりも強くなってる事が実感できる。

でも、強くなってるのはリキッドも同じ事。面白くなりそうだな。

「そいつは楽しみだな。誰かデュエルディスクを貸してくれ」

「俺のを使え」

「お、サンキュー」

リキッドが遊星にデュエルディスクを借りて準備をしてる間に、僕も家から自分のデュエルディスクを取って来た。

「それじゃ、始めようぜ！」

「よし、行くぞ！」

「「デュエル！」」

俊也ｖｓリキッド

「先攻は譲るよ」

「わかった。俺のターン！モンスターとカードを1枚ずつ伏せてターンエンド！」

リキッド
ＬＰ／４０００
手札／４
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×１

「僕のターン、ドロー！モンスターをセット。カードを2枚セットしてターンを終了するよ」

俊也
ＬＰ／４０００
手札／３

モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×２

「まずはお互い様子見か…」

「俺のターン！モンスターをリリースして、《ストーム・サモナー》をアドバンス召喚！」

最初に出て来たのは、大きなパラボラを装備したごついモンスターだ。

《ストーム・サモナー》
効果モンスター
星６／風属性／サイキック族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ２０００
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、このカード以外のサイキック族モンスターが戦闘によって破壊した相手モンスターは墓地へ送らず、相手のデッキの一番上に置く事ができる。このカードがカードの効果によって破壊された時、このカードのコントローラーはこのカードの攻撃力分のダメージを受ける。

《ストーム・サモナー》　ＡＴＫ／２３００

「行くぜ！《ストーム・サモナー》で裏守備モンスターに攻撃！サイコ・ストーム！」

「罠カード《和睦の使者》！戦闘破壊と戦闘ダメージを無効にする！」

リバースモンスターを光が包み、パラボラからの攻撃を防いでくれた。

「くそ、倒せなかったか」

「でも、戦闘そのものは無効にならないよ？」

「は？」

「伏せていたのは《風霊使いウィン》！リバース効果で、相手の風属性モンスター《ストーム・サモナー》のコントロールを得る！」

《風霊（ふうれい）使いウィン》
効果モンスター
星３／風属性／魔法使い族／ＡＴＫ　５００／ＤＥＦ１５００
リバース：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手フィールド上の風属性モンスター１体のコントロールを得る。

《風霊使いウィン》　ＤＥＦ／１５００

「げっ！？」

「ウィン、よろしく！」

『任せて！』

ウィンが霊術で《ストーム・サモナー》を僕のフィールドに引き寄せる。

「マジかよ…。次からは気をつけないとな。カードを１枚セットしてターンエンドだ！」

リキッド
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／なし
魔法・罠／リバース×２

「ピンポイントでコントロールを奪いやがった…」

「偶然だよ。僕のターン！ウィンと《ストーム・サモナー》をリリースし、《神鳥シムルグ》をアドバンス召喚！」

エメラルドに染まった神の鳥獣がフィールドに舞い降りる。さあ、頼んだよ！

《神鳥（しんちょう）シムルグ》
効果モンスター
星７／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ２７００／ＤＥＦ１０００
このカードは特殊召喚できない。
このカードをアドバンス召喚する場合、リリースするモンスターは風属性モンスターでなければならない。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、お互いのプレイヤーはお互いのエンドフェイズ毎に１０００ポイントダメージを受ける。
この時、それぞれのプレイヤーが受けるダメージは魔法・罠カードをコントロールしている数×５００ポイント少なくなる。

《神鳥シムルグ》　ＡＴＫ／２７００

「早速お出ましか…」

「バトル！シムルグでダイレクトアタック！ゴッドトルネード！」

シムルグが翼を動かし、緑色の竜巻をリキッドにぶつける！

「カウンター罠《攻撃の無力化》！バトルフェイズを終了させる！」

竜巻が渦に全て飲み込まれていく。決まれば大ダメージだったんだけどな…。

「仕方ない、カードを1枚伏せるよ。そしてエンドフェイズにシムルグの効果発動。エンドフェイズ毎に互いに１０００ポイントのダメージを受ける。ただし、自分の場の魔法・罠１枚につき５００ポイント少なくなるけどね」

「俊也は2枚、リキッドは1枚…リキッドが５００ポイントのダメージを受ける事になりますね」

沖田が言い終えると同時にフィールドに突風が巻き起こり、リキッドのライフを削っていった。

「うおっ…」

リキッド　ＬＰ／４０００→３５００

俊也
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《神鳥シムルグ》（ＡＴＫ／２７００）
魔法・罠／リバース×２

「まだこれからだ！俺のターン、ドロー！よし、来た！」

沖田とリキッドは同じ【サイキック族】の使い手だ。でも、戦法はそれぞれ違う。

沖田はライフの回復に重点を置くのに対して、リキッドはガンガン攻めるタイプだ。

ここからどんな攻め方をするのか、楽しみで仕方ない。

「魔法カード《緊急テレポート》を発動！手札かデッキからレベル３以下のサイキック族を１体特殊召喚する！」

《緊急テレポート》
速攻魔法（制限カード）
自分の手札またはデッキからレベル３以下のサイキック族モンスター１体を特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズ時にゲームから除外される。

「俺がデッキから特殊召喚するのは《サイコ・コマンダー》だ！」

砲台のついたＵＦＯみたいな乗り物に乗った軍服っぽいのを着ているモンスターがテレポートで姿を現す。

《サイコ・コマンダー》
チューナー（効果モンスター）
星３／地属性／サイキック族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ　８００
自分フィールド上に存在するサイキック族モンスターが戦闘を行う場合、そのダメージステップ時に１００の倍数のライフポイントを払って発動する事ができる（最大５００まで）。
このターンのエンドフェイズ時まで、戦闘を行う相手モンスター１

体の攻撃力・守備力は払った数値分ダウンする。

《サイコ・コマンダー》　ＡＴＫ／１４００

「手札の《アーマード・サイキッカー》は、俺の場にサイキック族がいる時にリリースなしで召喚できる！」

《アーマード・サイキッカー》
効果モンスター
星６／地属性／サイキック族／ＡＴＫ２２００／ＤＥＦ１８００
自分フィールド上にサイキック族モンスターが表側表示で存在する場合、このカードはリリースなしで召喚する事ができる。
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、自分は破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを受ける。
さらに受けたダメージの数値以下の攻撃力を持つモンスター１体を自分の墓地から特殊召喚する事ができる。

《アーマード・サイキッカー》　ＡＴＫ／２２００

「行くぜ！レベル６《アーマード・サイキッカー》にレベル３《サイコ・コマンダー》をチューニング！念波を込めし一対の銃弾よ、今こそこびりつく煩悩を貫け！シンクロ召喚！構えろ！《ハイパーサイコガンナー》！！」

右手を黒、左手を白の銃に改造されたサイキッカー…。こんなモンスター、今まで見た事がない…！

《ハイパーサイコガンナー》
シンクロ・効果モンスター
星９／地属性／サイキック族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２５００

チューナー＋チューナー以外のサイキック族モンスター1体以上
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
また、このカードが守備表示モンスターを攻撃したダメージステップ終了時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ自分のライフポイントを回復する。

《ハイパーサイコガンナー》　ＡＴＫ／３０００

「攻撃力３０００!?」

「俺のレッドデーモンズと互角だと!?」

ジャック、気にするところそこじゃないから。

「これが、君の新しい切り札か…!」

「沖田もそうだけどな。いろいろ試してきた結果だ!リバースカードオープン《サイコ・チャージ》!墓地のサイキック族を3体デッキに戻し、カードを2枚ドローする!《カバリスト》《サイコ・コマンダー》《アーマード・サイキッカー》をデッキに戻す!」

《サイコ・チャージ》
通常罠
自分の墓地に存在するサイキック族モンスター3体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。
その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

《カバリスト》はリキッドが最初のターンで伏せたモンスターだ。

戦闘破壊されたら手札補強…デッキもちゃんとリキッドに応えてくれてる。

《カバリスト》
効果モンスター
星１／地属性／サイキック族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　１００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、８００ライフポイントを払う事で自分のデッキからサイキック族モンスター１体を手札に加える。

「さらに魔法カード《二重召喚》を発動！このターンの間、通常召喚は２回までできる！《サイコ・ウォールド》を召喚！」

なんか腕の生えたカタツムリみたいなモンスターが出て来た。

《サイコ・ウォールド》
効果モンスター
星４／地属性／サイキック族／ＡＴＫ１９００／ＤＥＦ１２００
８００ライフポイントを払って発動する。
自分フィールド上に表側表示で存在するサイキック族モンスター１体は、１度のバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる。
この効果を発動するターンこのカードは攻撃する事ができない。

《サイコ・ウォールド》　ＡＴＫ／１９００

「まだだ！《サイコ・ウォールド》の効果発動！ライフを８００払う事で、俺のサイキック族１体はこのターンの間２回攻撃ができる！俺が選ぶのは当然（ハイパーサイコガンナー）！」

リキッド　ＬＰ／３５００→２７００

「攻撃力３０００で2回攻撃…」

「バトルだ！《ハイパーサイコガンナー》でシムルグに攻撃！ハイパーサイコブラスト！」

２つの銃口からレーザーが…！今やれる事は…。

「仕方ない。罠発動《風霊術－「雅（みやび）」》！僕の場の風属性モンスターをリリースし、相手のカード1枚をデッキの1番下に戻す！」

《風霊術－「雅（みやび）」》
通常罠
自分フィールド上に存在する風属性モンスター1体をリリースし、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して発動する。
選択した相手のカードを持ち主のデッキの一番下に戻す。

「何っ！？」

「シムルグをリリースし、《ハイパーサイコガンナー》をデッキに戻す！ウィン！」

『了解！ハッ！』

ウィンが術を発動させると、シムルグが風のエネルギーと化して超能力の狙撃手を吹き飛ばした。

「しまった！切り札が…」

「これで僕の場にモンスターはいないけど、《サイコ・ウォールド

》は効果を使ったターンの間は攻撃できないんだったよね」

「その通りだ…。カードを1枚セットし、ターンエンド」

リキッド
ＬＰ／２７００
手札／１
モンスター／《サイコ・ウォールド》（ＡＴＫ／１９００）
魔法・罠／リバース×１

サイキック族はライフと引き換えに効果を発動する種族。その分、ライフを回復する魔法・罠もいくつか存在する。上手く行けば少ない攻撃で決着がつくんだけど…。

「僕のターン！よし、チューナーモンスター《デブリ・ドラゴン》を召喚！」

《デブリ・ドラゴン》　ＡＴＫ／１０００

「《デブリ・ドラゴン》！？」

「チューナーモンスター…！今までのデータでは、俊也さんはチューナーモンスターをデッキに入れてなかったはず…！」

「いや、それよりもだ！俊也、お前ウィン以外は鳥獣族しか入れてないんじゃねえのかよ！？」

そう、僕の今までのデッキはウィンを加えた【鳥獣族】で、他の種族はおろかチューナーも使ってなかった。でも、それじゃこれから先は通用しない。僕には鳥獣族だけを使うより、風属性のあらゆ

るモンスターで戦う方が向いているんだ。

「昔の僕と同じだと思ったら大間違いだよ！《デブリ・ドラゴン》の効果で、墓地の攻撃力５００以下のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する！ウィンを特殊召喚！」

《風霊使いウィン》　ＡＴＫ／　５００

「そして、ウィンと風属性モンスター《デブリ・ドラゴン》を墓地に送り、《憑依装着（ひょういそうちゃく）ーウィン》を特殊召喚！」

ウィンが《デブリ・ドラゴン》を黄色の龍に変えて自分の元に引き寄せる。どんなモンスターを使ってもあれになるのが不思議だ。

《憑依装着ーウィン》
効果モンスター
星４／風属性／魔法使い族／ＡＴＫ１８５０／ＤＥＦ１５００
自分フィールド上の「風霊使いウィン」１体と他の風属性モンスター１体を墓地に送る事で、手札またはデッキから特殊召喚する事ができる。
この方法で特殊召喚に成功した場合、以下の効果を得る。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

《憑依装着ーウィン》　ＡＴＫ／１８５０

「上手く蘇生して憑依装着に繋げたわね」

「だが、このままでは《サイコ・ウォールド》を倒す事はできない。

どうする？」

「バトル！ウィンで《サイコ・ウォールド》を攻撃！龍風波！」

『喰らえ！』

ウィンが黄色の龍を突撃させる。サポートは任せてくれ！

「な、自爆する気か！？」

「まさか！速攻魔法（イージーチューニング）！墓地のチューナー１体を除外して、そのモンスターの攻撃力をウィンに与える！《デブリ・ドラゴン》を除外！」

《イージーチューニング》
速攻魔法
自分の墓地に存在するチューナー１体をゲームから除外して発動する。
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体の攻撃力は、発動時にゲームから除外したチューナーの攻撃力分アップする。

《憑依装着－ウィン》　ＡＴＫ／１８５０→２８５０

「な、攻撃力が…！？ぐわっ！」

リキッド　ＬＰ／２７００→１８５０

「へっ、やるな！だが、これならどうだ！罠カード《カース・サイキック》！サイキック族が戦闘破壊された時、攻撃をしたモンスターを破壊して、破壊されたモンスターのレベル×３００ポイントのダメージを与える！」

《カース・サイキック》
通常罠
自分フィールド上に表側表示で存在するサイキック族モンスターが相手モンスターの攻撃によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。
その時に攻撃を行った相手モンスター1体を破壊し、相手ライフに破壊された自分のサイキック族モンスターのレベル×３００ポイントダメージを与える。

「何っ!?」

『そんな…きゃあっ!』

「うわっ!?」

俊也　ＬＰ／４０００→２８００

まずい…ウィンが破壊された以上、今の僕のフィールドはがら空きだ。

「…カードを1枚セットしてターンエンド」

俊也
ＬＰ／２８００
手札／1
モンスター／なし
魔法・罠／リバース×1

「俺のターン、ドロー!《強化人類サイコ》を召喚!」

強化人類って…。サイキック族の皆さんは人体改造にまで手を出したんですか？

《強化人類サイコ》
効果モンスター
星４／地属性／サイキック族／ＡＴＫ１５００／ＤＥＦ　８００
自分の墓地に存在するサイキック族モンスター１体をゲームから除外して発動する。
このカードの攻撃力は５００ポイントアップする。
この効果は１ターンに２度まで使用できる。

《強化人類サイコ》　ＡＴＫ／１５００

「サイコの効果発動！墓地のサイキック族１体を除外し、攻撃力を５００ポイントアップさせる！墓地の《ストーム・サモナー》と《サイコ・ウォールド》を除外！」

《強化人類サイコ》　ＡＴＫ１５００→２０００→２５００

「さらに装備魔法（サイコ・ソード）を発動！サイコに装備！自分のライフが相手よりも低い時、その数値だけ装備モンスターの攻撃力をアップさせる！」

《サイコ・ソード》
装備魔法
サイキック族モンスターにのみ装備可能。
自分のライフポイントが相手より下の場合、その数値だけ装備モンスターの攻撃力がアップする（最大２０００まで）。

《強化人類サイコ》　ＡＴＫ／２５００→３４５０

ええぇえぇえええ！？

「これが通ったらリキッドの勝ちだな」

「さすが、パワータイプの【サイキック族】を使うだけはありますね」

「これで終わりだ！《強化人類サイコ》でダイレクトアタック！！」

改造人間が《サイコ・ソード》を振り上げ襲い掛かって来る！てか危なっ！？

「罠カード《ガード・ブロック》！」

ガキィイイイン！！

かろうじてデュエルディスクで攻撃を受け止めた。なんかディヴァインを思い出す。

「っ、戦闘ダメージを無効にしてカードを1枚ドローする」

《ガード・ブロック》
通常罠
相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。
その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

「くそ、このターンは無理だったか。俺はこれでターンエンドだ。やれる事は全部やった。さあ、どう来る！？」

リキッド
ＬＰ／１８５０
手札／０
モンスター／《強化人類サイコ》（ＡＴＫ／３４５０）
魔法・罠／なし

どうする？このままじゃ負けるのは目に見えてる。このドローで勝負が決まる…！

いや、僕は強くなった。そりゃあ、まだまだ未熟だけど、旅の中で共に戦ってきたデッキがある。このデッキなら…

「僕のターン、」

必ず応えてくれる！

「ドロー！！」

！これは…。

「（なんだ？何を引いたんだ？）」

「リキッド、このデュエル、僕の勝ちだ」

「！」

遊星達がざわついてる。いきなり勝利宣言したんだ、無理もないか。

「そうか…。俺は今の俺の全力を尽くした！今度はお前の全力をぶつけろ！」

「うん、それじゃ行くぞ！まずは《デブリ・ドラゴン》を召喚！」

《デブリ・ドラゴン》　ＡＴＫ／１０００

「効果発動！《風霊使いウィン》を特殊召喚！」

《風霊使いウィン》　ＡＴＫ／　５００

「またそれか？」

「ここで憑依装着を使用しても攻撃力は到底及びませんよ？」

「確かにね。でも、僕の場にモンスターが2体いる事が重要なんだ」

「2体？」

「（ウィン、ごめん…毎回コストに使ってしまって）」

最後の手札を使う前に、テレパシーで相棒に謝罪する。今のところ、精霊が見えてテレパシーが使えないのは紅刃と龍可ちゃんだけだ。

『何も謝る必要はないよ。憑依装着のはいつもアタッカーとして使ってくれてるでしょ？俊也と一緒に戦ってる事には変わりないんだから、もっと自信持っていこうよ』

「（…ありがとう）」

本当に、いつも励まされるよ。

「フィールドのモンスター2体と墓地のモンスター1体を除外する事で、このモンスターを特殊召喚する！フィールド上のウィンと《デブリ・ドラゴン》、墓地の《神鳥シムルグ》を除外！」

ウィンと龍と神鳥が風に包まれ見えなくなる。

「フィールドを大気で支配しろ！《Ｔｈｅ　アトモスフィア》！！」

渦巻く大気の中から、球体のカプセルを持つ巨大な鳥が現れた。

《Ｔｈｅ　アトモスフィア》
効果モンスター
星８／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ　８００
このカードは通常召喚できない。
自分フィールド上に存在するモンスター2体と自分の墓地に存在するモンスター1体をゲームから除外した場合に特殊召喚する事ができる。
1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに1体のみ装備する事ができる。
このカードの攻撃力・守備力は、このカードの効果で装備したモンスターのそれぞれの数値分アップする。

《Ｔｈｅ　アトモスフィア》　ＡＴＫ／１０００

「な、何だそのモンスターは！？」

「相手の知らないモンスターを使うのは君だけじゃないって事さ。アトモスフィアの効果発動！相手のモンスターを装備し、そのモンスターの攻撃力と守備力を吸収する！」

「何！？って事はまさか…」

「《強化人類サイコ》を装備！」

アトモスフィアがサイコを吸い込み、カプセルに閉じ込める。攻撃力は…

《Ｔｈｅ　アトモスフィア》　ＡＴＫ／１０００→２５００

「マジかよ…」

「フィニッシュだ！《Ｔｈｅ　アトモスフィア》でダイレクトアタック！テンペスト・サンクションズ！！」

「ぐわぁあああ！？」

巨大な竜巻がリキッドに直撃し、このデュエルの決着をつけた。

リキッド　ＬＰ／１８５０→　０

俊也　ＷＩＮ

「ちっくしょお…負けちまった…！」

「でも、前よりも強くなってたじゃないか」

「そういうお前もな。開放感のあるデュエルだったぜ」

ソリッドビジョンが消えた後、互いに拳をぶつけ合って健闘を讃えた。

「お前とのデュエルは楽しかったぜ。沖田はなんか腹黒いｓ「何か言いましたか？」…セリアはデッキ破壊してくるから太刀打ちできないし…」

「うわぁ…」

２人共えげつなっ。ていうか、沖田ってそんなキャラだっけ？

「遊星、ディスク貸してくれてありがとな」

「構わない。２人共いいデュエルだった」

リキッドが遊星にディスクを返してる時、セリアさんが話し掛けてきた。

「俊也さん、あなたのデッキは…」

「ああ、これですか？鳥獣族以外にも相性がいいカードがないかと思って、旅の間で探してデッキに入れたんです。《デブリ・ドラゴン》はウィンを蘇生できるし、《イージーチューニング》にも使えるから重宝してますよ」

まあ、結局は鳥獣族中心なんだけどね。

「シンクロモンスターは何があるんですか？」

「ああ…シンクロモンスターは1枚も持ってないんです」

「ええっ！？」

やっぱり驚くよね。チューナーはあるのにシンクロモンスターがないなんて。

「本当だ。俊也はチューナーを《イージーチューニング》のコストくらいにしか使わないからな」

紅刃も話に入ってきた。やっぱりシンクロモンスターってあった方がいいのかな？

「…俊也さん、これを」

「え？」

突然、セリアさんが4枚のカードを渡してきた。って、これってサイキック族のシンクロモンスター一式じゃないか！

「あの、これって…」

「シンクロモンスターがあれば戦略の幅も広がるでしょう。まだ枚数はありますので、遠慮なく受け取ってください」

「セリアさん…ありがとうございます！」

サイキック族が必要なカードもあるな…風属性のサイキック族ってあったかな？

「タイムトリップ？」

紅刃の言う冬休みの最終日、紅刃と月沙は街の人気のない場所を歩きながら、僕と璃音にイレギュラーについての説明をした。

この時代の人間が過去に飛んで悪巧みをしている事、紅刃と月沙は神様に頼まれて過去の世界で調査をしている事、事件解決のためにはアビリティが必要だという事、そしてアビリティの事…。普通ならとても信じられないような話だ。

「へぇ…面白そうね」

あ、あっさり信じたよ。

「私に協力できる事はないかしら？私はアビリティがないから一緒に行く事はできないけど…」

「そもそもシンクロがないからシンクロ召喚をするわけにもいかないしね。【スクラップ】はシンクロする事が前提のモンスター群だし」

「とりあえず、お前らは遊星達と一緒に街を守ってくれ」

「わかったわ」

「悪いけど、その依頼は引き受けられないね」

「は！？」

みんな驚いてるよ。いきなり依頼を蹴ったから当然か。

僕は軽く助走をつけて、右足を思い切り振り上げた。

ゴオォオオォオオオオ！！

天に向かって突風が舞い上がる。

唖然とするみんなに振り向いて、引き受けない理由を告げた。

「僕も一緒に行くからね」

「もう行くのか？」

「ああ。向こうの冬休みはもう終わりだしな」

数日後の朝、僕は紅刃、月沙と一緒に荷物をまとめて別れの挨拶をした。

「そうか。大変だろうが、お互い頑張ろう」

「向こうでくたばったら承知せんぞ！」

「心配いらないよ。必ず帰る」

ボオォン！

突然、白い煙が吹き出した。現れたのは白髪の少年、フォッタ。

「やあ。準備はできたかい？」

「ああ。早く行こうぜ」

「まさか俊也もフォッタに頼まれてたとはな」

「まあね。アビリティを完全に修得するのに苦労したよ」

「待って！」

部屋の扉が開き、璃音が僕とクロウの間に割って入った。

「璃音姉ちゃん？」

「俊也、これを」

璃音が僕に何かを差し出す。

「これは…」

「デュエルディスクよ。私は行けないから、せめて餞別に…」

渡されたデュエルディスクは、白を基調にして所々に緑の装飾が施されている。試しに展開してみると、かなり馴染んでる。

「うん、凄くいいよ。ありがとう」

「どういたしまして」

この数日間でわかった事だけど、璃音は遊星並に機械に強い。ていうか、何でも直せるしいろんな物を作れる。

「璃音、遊星、徹夜はほどほどにね。この前みたいに3日間寝ないで作業なんて事は許さないよ?」

「…わかった」

「フフ、なるべくそうならないように気をつけるわ」

…やっぱり似てるな、この2人。話が合う事からもかなり仲がいいし。

「そうだ、紅刃!」

「ん?」

龍可ちゃんも、紅刃に1枚のカードを渡した。

「この子を連れていって。きっと力になってくれるわ」

「これは…サンキュな。大事に使わせてもらうよ」

何をもらったんだろ?後で聞いてみよう。

「それじゃ、出発するよ!」

「気をつけてね」

「よっしゃ、行ってこい!」

「健闘を祈る」

「ああ、お前らも元気でな!」

ボォオオン!

紅刃が挨拶をした後、足元から煙が吹き出し、背景が真っ白になった。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第11話　チューナーにもいろんな使い道がある（後書き）

というわけで、冬休み編終了です。といっても2話だけですけど…。

牛尾はおみくじを引いたら絶対大凶だと思います。全然報われてないし…。

俊也のデッキは鳥獣族多めの【風属性】です。今回はウィンの他に《デブリ・ドラゴン》しか出ませんでしたが、ちゃんと他の種族も入ってます。

シンクロはあえてなしで。シンクロ召喚だけがチューナーの取り柄ではありませんし。まあ、セリアからシンクロモンスターを貰いましたけど。

沖田、リキッド、セリアは『遊戯王5D's WORLD CHAMPIONSHIP 2010 -Reverse of Arcadia-』で登場したキャラです。今後の展開にも関わるので、再登場もする予定です。

次回からはGXの世界での話になります。では、また次回！

番外編　キャラ紹介その２（前書き）

冬休み編で登場したオリジナルキャラの紹介です。

番外編　キャラ紹介その２

紅刃「さて、オリジナルキャラが増えたからまたキャラ紹介だ」

月沙「今回は璃音と俊也の紹介だよ」

璃音「まずは私からね」

俊也「パネルは確かここに…」

名前／篠村璃音（しのむらりおん）

年齢／１６歳

身長／１５８？

容姿／茶髪で目は空色　髪型は遊星の蟹の部分を取った感じ　後ろ髪は遊星より少し長い

デュエルディスク／遊星とほぼ同じ

特技／修理　機械の作成

趣味／機械弄り　発明　ジョギング

好きな物・事／デュエル　りんご　コーヒー

嫌いな物・事／物を粗末にする事

詳細／物静かで落ち着いた性格。怒鳴り散らす事は滅多にない。この世のあらゆる物は全てどこかで活躍できる場面があると考えている。遊星の従兄妹で、大きくなってからは遊星に会うために各地で情報を集めていた。やがて俊也と出会い、ネオ童実野シティにいる事を突き止めついに再会、今に至る。遊星とは話が合う事もあり仲がよく、一緒に作業をして徹夜する事もよくある。両親は交通事故で他界しており、遊星を本当の家族のように慕い、彼の事を「兄さん」と呼ぶ。たまに奇妙な物を発明する事があり、周囲をどたばたに巻き込む事も。そこには遊星が絡んでいる事もある。紅刃達のデュエルディスクを見て、自分だけのオリジナルのデュエルディスクを研究している。体力はあまりなく、本人もそれを気にして最近毎朝ジョギングをしている。デッキは【スクラップ】を使用。精霊のフィレスは相棒で、ペットのような存在でもある。

デッキ／【スクラップ】

精霊／フィレス（スクラップ・ドラゴン／♂）

月沙「あ、いつも朝起きたらいないと思ったらジョギングやってたんだ…」

璃音「いつ体力が必要になるかわからないから」

紅刃「ていうか、フィレスって♂だったんだな…」

璃音「あら、意外かしら？」

紅刃「いや、そんな描写一度もなかったからさ」

フィレス『グルル…』

俊也「で、発明の件だけど…」

璃音「いろいろ案はあるのよ？兄さんも手伝ってくれる事もあるし」

紅刃「お手伝いロボはもう作らないでくれよ…包丁がトラウマになりかけた」

俊也「（その場にいなかったから詳しい事はわからないけど、一体何があったんだろ…）」

月沙「次は俊也の番だよ」

俊也「ＯＫ！パネルは…あ、あったあった」

名前／風嶺俊也（かざみねしゅんや）

年齢／１６歳

身長／１６５？

容姿／金髪青目

デュエルディスク／白と緑のカラーリング

特技／サッカー

趣味／料理

好きな物・事／デュエル　そば　風

嫌いな物・事／お茶漬け

詳細／真面目で素直な性格。元アルカディアムーブメントの一員。サイコデュエリストではないが、精霊世界と通じているという事にディヴァインが目を付け、仲間に引き入れた。そこで沖田、リキッド、セリアと出会う。４人共ディヴァインのやり方に疑問を感じ、ダークシグナーの襲撃に便乗して本部を壊滅させた。それからは紅刃達に協力し、事件の解決後に世界中へ旅に出た。アビリティで風を操る事ができるが、旅に出る前はそこまで強くなかった。が、旅の途中でフォッタに紅刃達に協力をするよう依頼され、修業の末アビリティの強化に成功する。顔がいいからか女子には人気がある。料理の腕は壊滅的で、俗に言う暗黒物質（ダークマター）ができる。紅刃と月沙はこれを食べて一度入院しかけた。最近は見た目だけは改善された。現在これを食べても平気だと判明しているのは本人とウィン、璃音、フィレスだけである。デッキは元々【鳥獣族】だったが、旅の途中でいろんな風属性のカードを取り入れた。精霊のウィンとは家族同然の付き合いである。

デッキ／【風属性】（鳥獣族中心）

精霊／ウィン（風霊使いウィン／♀）

俊也「ちょっと待って！容姿の項目、僕だけ短いんだけど！？」

紅刃「いや、他に特筆する部分がないから」

俊也「酷っ！？」

璃音「料理は美味しいのにね」

フィレス『ガウッ』

紅・月「「どこが！？」」

ウィン『私達はお腹壊したりはしないけど…』

紅刃「（こいつらの胃袋はどうなってんだ…）」

俊也「あ、おにぎり作ってきたんだけど食べる？」

紅刃「いや、え、遠慮しとく…」

月沙「私はまだ死にたくない私はまだ死にたくない私はまだ…」

ウィン『えっと…大丈夫？』

俊也「今回はここまでだね」

璃音「私はしばらくお別れね」

俊也「あはは…再登場する予定だから、それまで待っててね」

月沙「あ、締めの台詞を…これからも『Ｖｉｓｉｔｏｒｓ　ｆｒｏｍ　ｔｈｅ　ｆｕｔｕｒｅ』をよろしくね！」

紅刃「次回も見てくれよな！」

番外編　キャラ紹介その２（後書き）

璃音はメインキャラに入れる予定ですが、今はシンクロを使う予定がないのであえて見送りました。俊也は今後も活躍させる予定です。

では、次回をお楽しみに！

第１２話　熱血な人間には好かれるタイプと嫌われるタイプがいる（前書き）

今回はほぼギャグ回です。相手はあの熱血野郎です。

それではどうぞ！

第１２話　熱血な人間には好かれるタイプと嫌われるタイプがいる

ＳＩＤＥ／紅刃

「風嶺俊也です。これからよろしくお願いします」

始業式の後、編入生って事で俊也が俺達のクラスで自己紹介した。ちなみに、十代達とは既に知り合っていて、ウィンも十代に挨拶している。

「あの人、なかなかのイケメンよね♪」

「お友達になれないかしら？」

周りの女子がキャーキャー騒いでる。あいつ、結構モテるよな。

「シニョ～ル俊也は本人の希望でオシリス・レッドに配属する事になったノーネ」

周りが（特にブルー生徒）騒がしくなる。俊也いわく「肩が凝るから」らしいけど、１人部屋を確保できたから何かと都合がいいだろ。

「なあ、紅刃。よっ！」

「なんだ？」

「テニスってデュエルと何の関係があるんだ？」

「んなもん知らねえよっと！」

体育の授業でテニスをやってるわけだけど、デュエリスト養成が目的ならあれか、運動不足解消か？

「大体、基本的な事しかやらないとはいえ、他の授業もぶっちゃけいらないよな？」

「そんな事言わないの！５教科と体育と実技だけなんだからまだいい方でしょ！」

ジュンコが言う５教科ってのは、国語・数学・英語・デュエル史・錬金術の事だ。といっても、国語はカードの効果とかの勉強だけどな。あれ、国語じゃなくね？

デュエル史は普通の歴史と比べたら浅いけど、その分内容は濃い。実技はもちろんデュエルだ。

俺が１番ツッコみたいのは錬金術。一般教養として必要なのか？

あ、詳しい状況を言ってなかったな。俺と十代、ジュンコとももえでタッグを組んでダブルスで対戦している。てかなんで男女混合？

「鮎川先生も本当はバレーボールがやりたかったそうですわ。あっ！」

ももえが俺の球を打ち返すも、話していたからなのか手元が狂い

上へと上がった。あ、鮎川先生は女子寮の寮長で保険の先生な。

十代は飛び上がりスマッシュの体制に入る。こいつ運動神経いいんだよな。

「どっちも同じだよ！どぉりゃあぁぁああ！！」

バシィ！

お、ナイススマ…って飛びすぎだなありゃ。…ん？

「やばっ！？避けろ月沙！」

「え？」

ボールは明日香とシングルスで対戦してた月沙へ。って打ち返した直後で体勢が崩れてる！

バシィ！

「ん？」

不意に、月沙の前に謎の人物が飛び出しボールを打ち返した。まあ、当たらなかったからいいか…って次は俺の方に来てる！？

「紅刃君危ないッス！」

カンッ！

俺はそのボールを、ラケットを剣のように横に凪いで弾いた。あ

れだ、条件反射ってやｔ「はがっ！？」…え？

…ボールはクロノス先生の顔面にジャストミート。わ～、俺って案外コントロールいいな～、ってそうじゃないどうしよう俺。

ＳＩＤＥ／月沙

「大丈夫？怪我はなかったかい？」

「うん、大丈夫。ありがとう。」

私を助けてくれたのはあの修○もどきこと綾小路ミツルだった。

「……」

「あ、あの？」

私を見たきり動かない。あれ？なんか嫌な予感が…。

「！いやぁ、あはは、失敬失敬。しかし知らなかったよ。我がデュエルアカデミアに君のような可憐な子がいたなんて」

そして手を取られる。これってまさか…。

「君、名前は？」

「な、波星月沙だけど…」

「月沙君か。いやぁ、名前も素敵だ」

「え、え？」

すると、無意識に手を取っていたのかハッとした感じで手を離した。

「あっははは、ちょっとキザだったかな。忘れてください！あーっはははは！青春、青春！！」

綾小路はそう言って去っていった。…どうしよう、明日香さんからシフトチェンジされたよ。紅刃助けて…ってあれ？なんでそんなに落ち込んでるの？

ＳＩＤＥ／紅刃

当然のごとく俺は呼び出しを食らいました。なぜか十代も一緒だけどな。

とりあえずノックする。

「入るノーネ」

「失礼しますすいませんっしたあぁぁあああ！！」

「謝るの早っ！？」

「十代も早く頭下げろ！つーかなんでお前もいんの！？」

「知らねえよ！連帯責任とかじゃねえか？」

「なら頭下げる！」

「うおっ！？」

「…わかったからまずはこっちに来るノーネ…」

なぜか呆れたような顔をしたクロノス先生が、十代とドアを開けて1秒で頭を下げた俺に手招きした。

「ゴホン…わざとやったわけじゃないにしてーも、このまま帰すのは出しっぱなしのビールでスーノ」

「は？ビール？」

「その心は？」

「生ぬるいーノ」

「なんじゃそりゃ…」

十代と一緒にがっくり肩を落とす。この人って洒落好きなのか…？

「2人共我が名門のテニス部に1日体験入部するノーネ。今回はそれで許してやるノーネ」

テニスで天下取ってどうすんだよ。ここデュエルアカデミアだぞ？

相手のサーブを打ち返しまくって、その数は3桁を越えている。
俺はまだいけるけど、十代はさすがに堪えてるみたいだ。あ、空振って倒れた。

で、その相手ってのは…

「立て、立つんだ遊城十代君！これぐらいで挫けちゃいけない！！今、がんばらないでどうするんだ！今日という日は今日しかないんだぞ！！」

「当たり前じゃないか…なんだ、この暑苦しい奴は…」

テニス部部長こと綾小路ミツルだ。さっき月沙を助けてくれたのもこいつだ。それはいいんだけど、何この修〇もどき？

「そして明日という字は明るい日と書くのだ！さあ、明日のために後５０球！！」

「うえぇえ！？」

後５０球か。十代体力持つか？

「どうだ、元気が出てきたろう！僕と一緒に頑張るんだ！汗と涙は明日の糧になる！！美しき青春、バンザイ！！」

元気が出るのはお前だけだろ。１人で盛り上がってるところ悪い

んだけど、俺達はそこまで熱くなれないから。そうだな…冬休みの間は顔を見なかったけど、あいつならついていけるんじゃないか？

ＳＩＤＥ／月沙

「４８…４９…５０！」

あ、やっと終わった。私は俊也、翔君、明日香さん、ジュンコさん、ももえさんと一緒に練習を見ていた。

「紅刃、途中途中でラケットの網の部分じゃなくて側面で打ち返してたけど、こっちの方が凄くないかな？」

「僕も同感ッス」

俊也、翔君、それは剣術をやってるからだよ。

とりあえず、私達はコートの中に入った。

「！やぁ月沙君！嬉しいなぁ、僕のためにタオルとドリンクまで準備してくれ…」

はい、修〇もどきは無視。

「紅刃、お疲れ様。はい、これ」

「お、サンキュ。この練習、さすがに少しきついな」

「アニキ、ドリンクとタオルを持って来たッス！」

「サンキュー、翔！助かるぜ！」

私が紅刃に、翔君が十代にそれぞれドリンクとタオルを渡す。2人共疲れてるからね、翔君と一緒に準備した。

「き、君！」

「ん？」

と、急に綾小路が凄い形相で紅刃に詰め寄って来た。

「月沙君とはどんな関係なんだい！？」

「月沙？中学時代からの親友だけど？」

「それがどうかしたの？」

「「「「「「いや、嘘でしょ（だろ）」」」」」」

綾小路以外一斉に否定！？

「はあ！？俺は嘘ついてないぞ！？」

「だって、ねえ？」

「お前ら仲良すぎだろ」

「紅刃さんの部屋に2人でいる事も多いですし…」

「知らないうちに恋人関係になったのかと…」

「紅刃君、うらやましいッス…」

「僕はこの中で1番付き合いが長いけど、男女の間柄にしては仲良すぎだと思うよ？」

「お前ら…」

恋人……。

ボッ！！

「？月沙、どうした？顔赤いぞ？」

「っ、な、なんでもない！！」

ちょ、何言ってるのみんなして！？想像しちゃったじゃない！

「そうか…名前で呼び合うとは、そんなに深い関係だとは…」

綾小路がなんかぶつぶつ言ってるよ！あれ？この展開って確か…

「真川紅刃君！」

「へ!?な、なんだ?」

「僕と、月沙君のフィアンセの座を賭けてデュエルしろ!!」

「「「「「「えええぇえええぇえええ!?」」」」」」

ぎゃあぁぁぁあああ!!!やっぱり!!

この状況でそんな事言わないで!私は今猛烈に赤面しているから!!!

「月沙さん、このデュエルで紅刃さんが勝ったら告白のチャンスですわよ♪」

「だぁから、違うってのぉおおおぉおお!!!」

「まあ、いいけどさ…フィアンセがどうのこうのって月沙自身が決める事だろ?俺達が介入していい事じゃないだろ」

「よし、そうと決まればデュエルだ!」

「人の話聞けよ!」

「フィアンセ…って何だ?食えるのか?」

向こうは向こうで話進んでるし!ええと、ええと…

「(ちょ、スイレン、ヘルゥゥウプッ!!)」

『ひ、姫様、どうかなさいました!?』

「（す、スイレン、えと、あの、そそその、わた、私はそ、その、どうしたらいいんでしょおぉかあぁああ！てか今すぐ穴掘って！隠れるからそのままオゾン層突き抜けるからあれ大気圏てどこだっけ！？）」

『えええええ！？あの、姫様まずは落ち着いてください！』

『あ～、スイレン、実はかくかくしかじかで…』

ウィンナイス！スイレンなんとかしてぇえええ！！

『なるほど…。姫様、あの…もう少しご自分に素直になられた方がよろしいのでは？』

「（な、なななななな…！？）」

ちょおおぉぉぉおおおお！！？スイレンまでえぇえええぇぇえええ！？

ちょっとＭＡ☆ＴＴＥ！！私は紅刃とは何もないからていうかなんで話がそんな方向に行くわけ！？もうやめて私のライフはｚ

～強制終了～

ＳＩＤＥ／俊也

ええと…月沙が絶賛テンパり中だから代わりに僕が状況を伝える

よ。

紅刃と綾小路君がデュエルをする事になったけど、紅刃にはいろんな意味で負けてほしくないね。

「準備はいいか！？」

「ああ。やるからには全力で行くぜ！」

「「デュエル！」」

紅刃ｖｓ綾小路

「俺のターン！《天空聖者メルティウス》を召喚！」

紅刃が朱色の鎧を着た天使を召喚する。

《天空聖者メルティウス》　ＡＴＫ／１６００

「（これは少し事故ったか？）カードを2枚セットし、ターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《天空聖者メルティウス》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×２

「僕のターン！魔法カード《サービスエース》を発動！自分の手札からカードを1枚選び、相手はそのカードの種類を言い当てる。当

たりならそのカードを破壊するけど、外れの場合はそのカードを除外し、１５００ポイントのダメージを与える！」

《サービスエース》
通常魔法（アニメオリジナル）
自分の手札からこのカード以外のカードを1枚選択し、相手にそのカードの種類を当てさせる。
当たった場合はそのカードを破壊する。
外れの場合はそのカードをゲームから除外し、相手に１５００ポイントのダメージを与える。

へえ、なかなか面白いカードを使うな。

「僕が選ぶのはこのカードだ！さあ、何を選ぶ？」

「…魔法カードだ」

「罠カードかもしれないよ？」

「構わない。それで勝負だ！」

綾小路君は怪しく笑い、カードを表にする。

「残念、モンスターカードだ。よって、１５００ポイントのダメージを与える！」

綾小路君が見せたのは《メガ・サンダーボール》だ。

《メガ・サンダーボール》
通常モンスター

星２／風属性／雷族／ＡＴＫ　７５０／ＤＥＦ　６００
地面を転がり回り、周囲に電撃を放つボール。

エネルギー弾が高速で飛び出し、紅刃に直撃した。わ、痛そっ。

「…１５－０」

紅刃　ＬＰ／４０００→５５００

あれ？回復？

「何!?なぜ回復している!?」

「カウンター罠《奇跡の回復》を発動したぜ。手札を１枚捨ててダメージを与える効果を無効にし、その与えるダメージ分ライフを回復する」

《奇跡の回復》
カウンター罠（オリジナル）
手札を１枚捨てて発動する。
「ダメージを与える効果」を持つカードの効果を無効にし、無効にした数値分だけ自分はライフポイントを回復する。

「さらにメルティウスの効果発動!カウンター罠が発動する度に俺はライフを１０００回復する!」

紅刃　ＬＰ／５５００→６５００

「ぐ…まさか逆手に取るとは…」

「さすがだね。効果ダメージすらものともしない」

「これなら、バーンでライフを削り切られる心配はあまりないわね」

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

綾小路
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／なし
魔法・罠／リバース×１

モンスターを出さない？何を企んでるんだ？

「俺のターン！《智天使ハーヴェスト》を召喚！」

両足に翼を生やした天使が現れた。

《智天使ハーヴェスト》　ＡＴＫ／１８００

「バトル！メルティウスでダイレクトアタック！セイント・シュート！」

天空聖者の閃光が綾小路君を貫く。

「ぐぅっ！？」

綾小路　ＬＰ／４０００→２４００

「ハーヴェストでダイレクトアタック！ハーメルン・スマッシュ！」

次は智天使が光を纏った足で蹴りを入れる！

「これ以上は好きにさせないよ！罠発動（レシーブエース）！直接攻撃を無効にして１５００ポイントのダメージを与える！」

《レシーブエース》
通常罠（アニメオリジナル）
相手モンスター１体の直接攻撃を無効にし、相手に１５００ポイントのダメージを与える。
その後、自分はデッキの上からカードを３枚墓地に送る。

障壁が蹴りを防ぎ、またエネルギー弾が飛んで来た。

「っ！？」

紅刃　ＬＰ／６５００→５０００

「バーンデッキか…」

「もうひとつの効果で、デッキからカードを３枚墓地へ送るよ」

「カードを１枚セットし、ターンエンドだ」

紅刃
ＬＰ／５０００
手札／１
モンスター／《天空聖者メルティウス》（ＡＴＫ／１６００）《智天使ハーヴェスト》（ＡＴＫ／１８００）
魔法・罠／リバース×２

バーンデッキ。効果ダメージを与えるカードで戦うデッキだ。速攻で決着がつく事も珍しくない。

「僕のターン！魔法カード《スマッシュエース》を発動するよ！デッキの１番上のカードを墓地に送り、それがモンスターだったら相手に１０００ポイントのダメージを与える！」

《スマッシュエース》
通常魔法（アニメオリジナル）
デッキの一番上のカードをめくる。
そのカードがモンスターカードだった場合、相手に１０００ポイントのダメージを与える。
めくったカードは墓地に送る。

「…これはラッキーだ。引いたのはモンスターカード。１０００ポイントのダメージを与える！」

あれは《神聖なる球体》だ。気のせいか、ボールのモンスターばかりのような…。

《神聖なる球体（ホーリーシャイン・ボール）》
通常モンスター
星２／光属性／天使族／ＡＴＫ　５００／ＤＥＦ　５００
聖なる輝きに包まれた天使の魂。
その美しい姿を見た者は、願い事がかなうと言われている。

「くっ！」

紅刃　ＬＰ／５０００→４０００

「さらにもう一度(サービスエース)を発動するよ！」

また《サービスエース》か…。

「ライフがあるとはいえ、少しきついですわ」

「さあ、どの種類を選ぶ？」

心理戦か…。これは誰でも迷うな。紅刃はどうする？

「そうだな。俺は…

選ばねえよ」

「「「「「「「「「…は？」」」」」」」」」

は？え？選ばないって？

「ど、どういう事だ君！ルール違反をする気か！？そこまでして月沙君を自分の物にしたいか！」

「…月沙が『物』？」

あ、スイッチ入った。

「人を物扱いする奴に負けるつもりはねえよ！カウンター罠《神の宣告》！ライフを半分払い、《サービスエース》の発動を無効にする！」

「何っ！？」

紅刃　ＬＰ／４０００→２０００

「メルティウスの効果でライフを１０００回復する」

紅刃　ＬＰ／２０００→３０００

「さっきからイライラしてたけど、今ので個人的にものすっげえ頭に来たからな…覚悟はできてんだろうな？」

「ひっ！？」

なぜか黒いオーラを出してるように見えるんだけど、嫉妬…なわけないかな？

「ももえ、これはひょっとして…」

「ええ。相思相愛の可能性ありですわ！」

ジュンコさん、ももえさん、僕もそれに１票入れとくよ。

「カウンター罠でカードの発動を無効にした場合、こいつを手札から特殊召喚できる！行け！《冥王竜ヴァンダルギオン》！！」

紅刃のフィールドに黒い穴が開き、冥王竜が咆哮と共にはい上がる！

《冥王竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／２８００

『紅刃…何をそんなにイライラしている？』

「さあな。あいつがフィアンセがどうのこうのって言った辺りからだけど、原因は俺でもわからない」

『そうか…（自分の気持ちに気付いていないのか？）』

オーディンも紅刃の異変に気付いてるみたいだ。

「魔法カードを無効にして特殊召喚した場合、相手に１５００ポイントのダメージを与える！デルフト・バスター！」

青い光弾が綾小路君のライフを削り取る！

「ぐわあぁあああ！」

綾小路　ＬＰ／２４００→　９００

「う…カードを１枚セットしてターンエンドだ」

綾小路
ＬＰ／　９００

手札／１
モンスター／なし
魔法・罠／リバース×１

「俺のターン！終わらせるぜ…！ヴァンダルギオンでダイレクトアタック！」

「リバースカードオープン！《グラビティ・バインド―超重力の網―》！レベル４以上のモンスターは攻ｇ「カウンター罠！バトルフェイズ中の罠の発動を無効にする！」なっ…！」

紅刃　ＬＰ／３０００↓４０００

「冥王葬送！！」

『悪く思うな。これも勝負だ』

オーディンの黒い波動がこのデュエルの決着をつけた。

綾小路　ＬＰ／　９００↓　０

紅刃　ＷＩＮ

「ふぅ…やれやれだ、全く」

「この僕が負けたぁ！？うわあぁあああぁあああ！！」

綾小路君は号泣して走り去ってしまった。なんていうか、最初から最後まで熱い人だったな…。

「で、月沙、どうす…ん？」

「…から私はそんなんじゃないってでも紅刃が勝ったら私はいやだからそうじゃなくて…」

月沙は未だにショートしまくってる。耐性なさすぎでしょ…。

「お～い、月沙～」

ポンッ

「ひゃあああぁああ！！？し、俊也！？な、なな何！？何か用！？」

「肩叩いただけでそこまでびっくりしなくても…。デュエル終わったよ？もちろん紅刃の勝ちで」

「あ、ああ、そう？そっか、紅刃の勝ちか…」

ようやく落ち着いてきたみたいだ。ていうか、やっぱりデュエルを見る余裕がなかったか…。

「月沙、終わったぞ。あいつももう懲りただろ」

「あ、ありがとう…」

「ところでお2人共どうするんですの？」

「「え？」」

「そうですよ！紅刃が勝ったんだから、紅刃が月沙さんのフィアン

セですよね、月沙さん！？」

「あ、ちょっと…」

明日香さんも僕と同じ事を考えてるみたいだ。今そんな事を言ったら…

「ああ、そんな事言ってたな」

「え…フィア…～～～～～～～～～～！！！」

あ～…せっかく落ち着いたのに…。

「おい、顔赤いぞ？」

「な！？なななな、な～んの事かな、木ィィィ原くゥゥゥゥゥゥゥン！！」

「いや、俺木原じゃなくて真川だし木原神拳使えないし、ていうかなぜに木原？」

ああ、遂に別ジャンルのネタが…。

「い、いいいや、なんでもない、なんでもないよ～、あははははは、失礼しましたあぁぁあぁぁあああああああ！！！」

『姫様！？あ、皆様、私もこれで！』

月沙はこれ以上ないくらいに顔を真っ赤にして、全速力でコートから飛び出して走り去ってしまった。

「…月沙さんって…」

「恋愛の耐性、全くなかったんスね…」

「あ、あいつ、どうしたんだ…？」

『少しは察しろ…』

『俊也、これって…』

「（うん、僕も応援するけど、あの上がりようじゃ苦労するだろうね…）」

とりあえず、紅刃に意見を聞くとしよう。

「紅刃、どうするの？」

「どうするって言われてもな…。月沙は俺を恋愛対象としては見てないだろ？」

いや、見てるから。本人はあれで自覚してないけど１０００％見てるから。

「だから、俺がどうこう言う問題じゃねえだろ？」

「あ、そう…」

これはいろいろと面倒な事になりそうだね…。

「結局、フィアンセって何なんだ？」

「ハァ…婚約者って意味よ…」

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第１２話　熱血な人間には好かれるタイプと嫌われるタイプがいる（後書き）

いかがでしたか？

今回紅刃が使用した《奇跡の回復》は、ギアルさんの『ＧＸ　ＭＩＮＩ　ＳＴＯＲＹ』で登場したものです。しかし、効果が強すぎると思ったのでこちらで少し効果を調整させてもらいました。実際の効果は手札コストがなく、代わりに相手の手札を捨てさせるものです。ギアルさん、申し訳ありません。

では、また次回！

第１３話　考える事は皆同じ（前書き）

今回は神楽坂戦です。でも紅刃はデュエルしません。

それではどうぞ！

第１３話　考える事は皆同じ

ＳＩＤＥ／紅刃

ポケットから整理券を取り出して文字を読む。

なんでも、伝説のデュエリスト武藤遊戯のデッキが展示されるらしく、一目見ようとみんな大騒ぎってわけだ。

俺と月沙と俊也は１番乗りで整理券をゲットし、今は俺の部屋でオーディン達も入れて雑談をしてる。

「しっかし、ど偉い事をやってくれたな、お前」

「シンクロはしてないからいいでしょ？」

俊也がした『ど偉い事』ってのは、まあ、回想で見た方がわかりやすいだろ。

昨日の実技の授業で、俊也がやった事は次の通りだ。

「ククク、どうする、オシリス・レッド？俺のサイコ・ショッカーを倒せるかな？」

B生徒
ＬＰ／２００
手札／０
モンスター／《人造人間－サイコ・ショッカー》（ＡＴＫ／２４００）
魔法・罠／なし

俊也
ＬＰ／１１００
手札／２
モンスター／なし
魔法・罠／リバース×１

《人造人間－サイコ・ショッカー》
効果モンスター
星６／闇属性／機械族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１５００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、お互いに罠カードを発動する事はできず、フィールド上の罠カードの効果は無効化される。

サイコ・ショッカーは全ての罠の発動そのものを封じるモンスターで、カウンター罠をたくさん使う俺にとって１番嫌いなモンスターだ。十代が冬休みの間にサイコ・ショッカーの精霊とデュエルしたって言ってきた時は「未来に帰ってて本当によかった」って思ったくらいだ。

「まあ、オシリス・レッドごときがそんなモンスターを出せるわけないけどな！」

「出せるさ！僕のターン、ドロー！」

「俊也、大丈夫かな？」

「心配すんな、月沙。あいつも成長してんだ、きっと勝てる」

「…この勝負、もらったよ」

「何？」

「チューナーモンスター《デブリ・ドラゴン》を召喚！」

《デブリ・ドラゴン》　ＡＴＫ／１０００

「「え？」」

「チューナーモンスター？」

「聞いた事ないぞ？」

「何だあのモンスター？」

周りがざわつく。そりゃそうだ。チューナーなんてこの世界にまだ存在してないからな。

「効果発動！自分の墓地から攻撃力５００以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚する！《風霊使いウィン》を特殊召喚！」

《風霊使いウィン》　ＡＴＫ／　５００

「さらに、ウィンと風属性モンスター《デブリ・ドラゴン》を墓地

に送り、デッキから《憑依装着－ウィン》を特殊召喚！」

《憑依装着－ウィン》　ＡＴＫ／１８５０

「フン、そんな雑魚で何ができる！」

「魔法カード《イージーチューニング》。墓地のチューナー１体を除外し、除外したチューナーの攻撃力を僕の場のモンスター１体の攻撃力に加える。《デブリ・ドラゴン》を除外し、ウィンの攻撃力を１０００ポイントアップ」

《憑依装着－ウィン》　ＡＴＫ／１８５０→２８５０

「馬鹿な！？攻撃力２８５０だと！？」

『俊也、これはもう思いっ切りやってもいいよね？』

「（全然大丈夫。むしろそうしてくれ）家族を馬鹿にする事は許さない！ウィンでサイコ・ショッカーに攻撃！龍風波！！」

『吹き飛べ！』

「ぐわぁあぁぁあああ！？」

Ｂ生徒　ＬＰ／　２００→　０

俊也　ＷＩＮ

「「（（えええぇえええ！？））」」

デュエルを見ていた女子がキャーキャー騒いでるのが気にならないくらい衝撃的な瞬間だった。

「シニョ～ル俊也、そのチューナーとは一体何なノーネ!?全然聞いた事がないーノ!?」

「（どうごまかす気だよあいつぅうぅぅ!?）」

「（歴史がめちゃくちゃになったらどうすんのよ!?）」

「ああ、チューナーっていうのはただのカテゴリーのひとつですよ」

「カテゴリー?」

「ほら、ユニオンとかスピリットとか特殊なカテゴリーがあるじゃないですか。それと同じです」

「そ、そうなノーネ?」

「ただのカテゴリーね…よくそれで切り抜けられたね」

「僕の新しい戦術だからどうしても使いたくてね。シンクロモンスターさえ使わなければ大丈夫だよ」

というわけで、新カテゴリーのチューナーはこのデュエルアカデミアで一躍話題になったってわけだ。

「まあ、おかげで私もチューナーを使えるようになったからいいけどね。シンクロ召喚できないのはきついけど」

『それぱかりは仕方ありませんよ。しかし、私達にはあまり関係ありませんね』

「確かに…。俺はシンクロどころかチューナーすら使わないからな」

俺は未来でもシンクロ召喚は使ってない。まあ、単純にデッキに合うチューナーが見つからないだけなんだけど…。

「あ、そうだ！」

『どうなさいました？』

「明日の遊戯さんのデッキの特別展示が始まるのは朝の９時でしょ？それなら、この時間にはもう準備は終わってるはず」

『…まさかフライングで乗り込む気か？』

「ゴーズ正解！」

なんとまあ、ずいぶんと大胆な行動を思いつくもんだな。

『整理券はどうするの？』

「明日また行けばいい話だよ」

『確かに、時間通りに行くのでは人が混んでいて、まともに見れそ

うにないな』

「珍しいな、ゼウスがこういう事に賛成するなんて」

『私もそこまで固いわけではない。盗むのでないなら無問題だ』

『我も伝説のデュエリストのデッキは気になる。止めはしない』

「やった！それじゃ、早速行こう！」

暗闇の中を走って行くと、見慣れた４つの影が見えた。

「十代！」

「お、紅刃！どうしたんだ？」

そっちのメンツは十代、翔、隼人、三沢か。

「ちょっと武藤遊戯のデッキを拝見しにな」

「奇遇だな。俺達も同じ事を考えてたところだ」

答えたのは三沢だ。

「それじゃ、みんなで見に行こうよ」

「ああ！早く行こうぜ！」

メンバーも増えた事だし、さっさと用件を済ま…

マンママミーアァアァアア！！

…え？

「今の声は？」

「クロノス先生…じゃないかな？」

いや、あんな悲鳴を上げるのクロノス先生しかいないだろ。

「展示室から聞こえたんだな」

「行ってみようぜ！」

展示室に辿り着き、ドアを思い切り開けると…

「「「「ああ！！」」」」

「デッキがない！？」

何かに割られた痕跡のある空のショーケースと狼狽しているクロノス先生がいた。

「んん！？シニョ～ル紅刃！？」

「まさかクロノス先生が！？」

「ち、違うノーネ！私じゃないノーネ！」

「…クロノス先生はここで何をしていたんですか？」

「ここで警備をしていたノーネ。そして、シニョ～ル遊戯のデッキが気になったノーデ展示室に入ったら、デッキがなくなってたノーネ」

あんたも同じ事を考えてたんかい。

「ならクロノス先生は白だよ。警備をしてたんならケースの鍵も持ってるはず。わざわざケースを割る必要がない」

「た、確かに鍵はここにあるノーネ」

月沙、いい推理だけど多分原作知識だろ。

「なら、デッキを盗んだ犯人はまだ近くにいるはず。少なくともこの島からは出ていないはずだよ」

「手分けして探そうぜ」

「ウッ、ウウ…事が公になると私が責任取らされるノーネ。ドロップアウトボーイ、シニョールたちだけが頼りなノーネ！」

「俺と月沙と俊也は向こうを探す！十代達はそっちを探してくれ！」

「わかった！よし、行こうぜ！翔、隼人！」

「はいッス！」

「んだな！」

「俺もいるぞ！」

三沢、マジで頑張れ。

「そっちはどうだった？」

「いや、駄目だ。俊也は？」

「こっちにもいないよ」

俺達は月沙の原作知識を頼りに、崖を片っ端から調べている。デッキを盗んだ奴が翔とデュエルしてるらしいんだが…。

『紅刃！』

「オーディン！お前らどうだった？」

『いや、見つからない』

『俺もだ』

『私の方も見つかりません』

『私も…』

『くそ、見つけたら血祭りｎ「ゼウス落ち着け」』

精霊総動員でも駄目か…。

『あれ？スイレンは？』

「そういや、まだ戻って来てないな」

『皆さん！』

あ、戻って来た。

「スイレン、どうだった？」

『見つけました！こちらです！』

「よし！でかしたスイレン！」

スイレンの案内で森の中を突き進む。途中翔の悲鳴が上がると、

俺達はさらに足を速めた。お、そろそろ着くな。

「凄い…俺がこんなに強い！」

崖にいたのは、デュエルに負けて落ち込んでる翔と、高笑いするイエロー生徒だった。

「翔、大丈夫か！？」

お、十代達も到着だ。

「アニキ…悔しいよ…あいつが…」

「あいつがデッキを盗んだのか？」

『貴様か！ボルｔ「だから落ち着けって！」』

ああ、もう！なんでこいつはやたらと好戦的なんだよ！？

「神楽坂！？」

「三沢、知ってるのか？」

「ああ。俺と同じラー・イエローの生徒だ」

「神楽坂君、早くデッキを返すんだ。今ならまだ大きな騒ぎにならずに済む」

「断る」

「！」

「これこそ俺が求めていた最強のデッキだ！「そりゃ、デュエルキングのデッキだからな」…俺なら、武藤遊戯のデュエルを完全に研究してる俺なら、彼のデュエルを１００％再現できる！「再現するだけでしょ？」っ…もう俺は誰にも負けない！「勝率１００％のデッキなんて存在しないだろ」ぐぐ…クロノスだろうが、カイザーだろうが、誰にも！！「それって逆につまらないと思うけど」話の途中でいちいちツッコみを入れるなぁあぁぁ！！話しづらくて仕方ないんだよ！」

俺も月沙も俊也も思った事をそのまま言ってるだけだぞ？

「まあ、いいや。神楽坂君、こういうのはどう？僕とデュエルして、君が勝ったら見逃す。僕が勝ったらデッキを返す」

出たよデュエル万能説。俊也の事だからどうにかなるだろ。

「お前は、チューナー使いの風嶺俊也か。本当に俺に勝つ気でいるのか？」

「そうじゃなきゃ、こんな条件出さないよ」

そう言いながらデュエルディスクを展開する。こいつは面白い事になりそうだな。

「いいだろう、相手になってやる」

「俊也、頑張ってね（さすがにカオスや黒魔術師とはやりたくないな…）」

「うん、ありがとう。それじゃ、準備はいいかい？」

「ああ。行くぜ！」

「「デュエル！」」

俊也ｖｓ神楽坂

「先攻はもらうよ。ドロー！モンスターをセット、カードを2枚セットしてターンエンド！」

俊也
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×２

「俺のターン！魔法カード《融合》を発動！」

《融合》
通常魔法
手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する。

いきなりかよ！？

「手札の《幻獣王ガゼル》と《バフォメット》を融合！」

《幻獣王ガゼル》
通常モンスター
星４／地属性／獣族／ＡＴＫ１５００／ＤＥＦ１２００
走るスピードが速すぎて、姿が幻のように見える獣。

《バフォメット》
効果モンスター
星５／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ１８００
このカードが召喚（反転召喚）に成功した時、「幻獣王ガゼル」をデッキから１枚手札に加える事ができる。

「いでよ、《有翼幻獣キマイラ》！」

始めに召喚されたのは、２つの頭と白い翼を持つ幻想の獣だ。

《有翼幻獣キマイラ》
融合・効果モンスター
星６／風属性／獣族／ＡＴＫ２１００／ＤＥＦ１８００
「幻獣王ガゼル」＋「バフォメット」
このカードが破壊された時、墓地にある「バフォメット」か「幻獣王ガゼル」のどちらか１枚をフィールドに特殊召喚する事ができる。
（表側攻撃表示か表側守備表示のみ）

《有翼幻獣キマイラ》　ＡＴＫ／２１００

「行くぜ！《有翼幻獣キマイラ》でモンスターに攻撃！幻獣衝撃粉砕！」

キマイラが裏守備モンスターに突進を仕掛ける！

ドゴォッ！

「何！？」

表になった緑の鳥が突進を真正面から受け止めやがった…！あれは確か遊星が使っていた…。

「《シールド・ウィング》は1ターンに2度まで戦闘で破壊されない」

《シールド・ウィング》
効果モンスター
星2／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　９００
このカードは1ターンに2度まで、戦闘では破壊されない。

《シールド・ウィング》　ＤＥＦ／　９００

「厄介なモンスターだ…。カードを1枚セットしてターンエンドだ」

神楽坂
ＬＰ／４０００
手札／2
モンスター／《有翼幻獣キマイラ》（ＡＴＫ／２１００）
魔法・罠／リバース×1

「なあ、三沢。あの神楽坂ってどんな奴なんだ？」

気になったから三沢に聞いてみた。俺はあいつにあった事ないからな。

「あいつは記憶力が良すぎて、自分で組んだデッキは無意識のうちに誰かのデッキに似てしまう。そこをつかれていつも勝負には負けるが、デッキを真似るって事は一瞬で他人のデッキの特徴を読み取るって事だ」

「！」

「デッキからそれを作ったデュエリストの人格まで読み取りそのタクティクスを再現する。今奴の持っているデッキが最強と言うなら、今のあいつは無敵のデュエリストと言う事だ」

「なんて奴だ…」

そんなに凄いのにこんな事するなんて、なんかもったいない気がするな。

「僕のターン！…い〝っ！？」

ん？どうしたんだあいつ？

ＳＩＤＥ／俊也

ええぇぇぇえ！！？なんで！？なんでこのカードがデッキに入ってるの！？

『俊也…紅刃と合流する前に、寮でカードの整理とデッキ調整をしてたでしょ？』

「（え？）」

ウィンに言われて、記憶を探る。ええと、あの時は確か…。

「よし、大体片付いたぞ。後一息ｄ「俊也、いるか？」ん？紅刃？ちょっと待って！今行く！」

慌てて調整したデッキをかき集め…。

「（あの時かあああぁぁあああ！！！）」

『デッキをかき集めた時に巻き込まれたんだろうね…』

どうすんの、僕！？こんな不完全なデッキで遊戯さんのデッキ相手に戦えるの！？いや、完全に無意味なわけじゃないけど！！

「どうした？早く続けろ」

神楽坂君の声で我に帰る。そうだ、今はデュエル中だ。こうなった以上は仕方ない。

「あ、ああ、ごめん。…キマイラは風属性か…なら丁度いいか」

「丁度いいだと？」

「永続罠《霊術結界》を発動！モンスターのリバース効果は召喚に成功した時に発動する！」

《霊術結界》
永続罠（オリジナル）
お互いのモンスターのリバース効果は召喚に成功した時に発動する。
自分のスタンバイフェイズ毎に５００ライフポイントを払う。
払わなければこのカードを破壊する。

フィールドが薄い虹色の結界に包まれる。

「え、何それ！？」

「どうした？そんなに驚いて」

「いや、私のいた世界になかったから…。《冥界の光》以外にもあったんだ…」

「ああ、なるほど…。まあ、たまにはこういう事があっても面白いんじゃないか？」

向こうで何か話してるけど、気にしない。

「そして、手札から《風霊使いウィン》を召喚！」

《風霊使いウィン》　ＡＴＫ／　５００

「しまった！それは…」

「《霊術結界》の効果で、ウィンのリバース効果を発動するよ！相手の風属性モンスター1体のコントロールを得る！」

『さあ、こっちに来なさい！』

ウィンの霊術でキマイラが僕のフィールドに移動する。

「さらに、ウィンとキマイラを墓地に送り、《憑依装着－ウィン》をデッキから特殊召喚！」

《憑依装着－ウィン》　ＡＴＫ／１８５０

「キマイラの効果が発動するのは破壊された時。コストで墓地に送られた時は発動しないよ」

「ぐ…」

まあ、キマイラが風属性だったのが運の尽きだね。

「バトル！ウィンでダイレクトアタック！龍風波！」

『まずは一撃！ハァッ！！』

黄色の龍が神楽坂に突撃する。

「ぐあっ！？」

神楽坂　ＬＰ／４０００→２１５０

「よっしゃあ！先手を取ったぜ！」

「カードを１枚セットし、ターンエンド！」

俊也
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《シールド・ウィング》（ＤＥＦ／　９００）《憑依装着－ウィン》（ＡＴＫ／１８５０）
魔法・罠／《霊術結界》リバース×２

『この調子なら勝てるかも！』

「（油断は禁物だよ。伝説のデュエルキングのデッキだ、何が来てもおかしくない）」

「俺のターン、ドロー！魔法カード《手札断殺》を発動！互いに手札を２枚捨て、カードを２枚ドローする！」

あ、よかった。さっき引いたこのカードは墓地にある方が都合がいい。

「モンスターをセット。カードを１枚セットしてターンエンドだ！」

神楽坂
ＬＰ／２１５０
手札／０
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×２

裏守備か…。何を仕掛けたんだ?

「僕のターン!《霊術結界》はスタンバイフェイズ毎にライフを５００払わないと自壊する。僕はライフを払わずにそのまま破壊するよ」

カードを墓地に送ると、結界が瞬く目に消えていった。

さて、どうしようか…。《霊術結界》があるのにわざわざ裏守備表示にしたって事は、リバース効果を持つモンスターじゃないはずだ。遊戯さんのデッキは詳しく知らないけど、戦闘破壊に耐性があるモンスターか守備力が高いモンスターのどちらかのはず。一応ウィンが貫通効果を持っている。ここは攻撃力を底上げするか。

「手札から《ハンター・アウル》を召喚!」

武器を持ったフクロウの鳥人が召喚される。

《ハンター・アウル》
効果モンスター
星４／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ　９００
自分フィールド上に表側表示で存在する風属性モンスター1体につき、このカードの攻撃力は５００ポイントアップする。
また、自分フィールド上に他の風属性モンスターが存在する限り、相手はこのカードを攻撃対象に選択する事はできない。

《ハンター・アウル》　ＡＴＫ／１０００

「《ハンター・アウル》は、「この時を待っていた!」え?」

「リバースカードオープン《黒魔族復活の棺》！相手がモンスターを召喚した時、そのモンスターと自分のモンスター1体を墓地に送り、自分の墓地から魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する！」

《黒魔族復活の棺》
通常罠　（アニメオリジナル）
相手がモンスターの召喚に成功した時に発動する事ができる。
そのモンスター1体と自分フィールド上に存在するモンスター1体を墓地へ送り、自分の墓地に存在する魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する。

「墓地の魔法使い族…《手札断殺》はそのために…！」

「《ハンター・アウル》と俺のモンスターを墓地に送り、最上級魔術師を特殊召喚するぜ！」

最上級魔術師…！まさか…！

「現れろ！《ブラック・マジシャン》！！」

墓地から現れたのは、最上級の黒魔術師。武藤遊戯の象徴とも言えるエースモンスター…！

《ブラック・マジシャン》
通常モンスター
星7／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ２１００
魔法使いとしては、攻撃力・守備力ともに最高クラス。

《ブラック・マジシャン》　ＡＴＫ／２５００

「《ブラック・マジシャン》…！こいつが遊戯さんのデッキの象徴とも言えるモンスター！」

「《ブラック・マジシャン》！」

「本物を見るのは初めてだ…！」

「（やるな、神楽坂。キマイラのコントロールを奪われはしたものの、それを除けばデュエル開始から《黒魔族復活の棺》までの流れに全く無駄がない。わずかな時間デッキを見ただけでここまでのプレイングをするとは…）」

「…ウィンを守備表示にしてターンエンド」

俊也
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《シールド・ウィング》（ＤＥＦ／　９００）《憑依装着－ウィン》（ＤＥＦ／１５００）
魔法・罠／リバース×２

「俺のターン！魔法カード《天よりの宝札》！互いに手札が６枚になるようにカードをドローする！」

運もいいみたいだ。手札０の時にドロー加速のカードを引くなんて…。

「手札の《ワタポン》の効果発動！カードの効果によってデッキから手札に加えた時、このカードを特殊召喚できる！」

あ、なんか可愛い毛玉みたいなモンスターが出て来た。

《ワタポン》
効果モンスター
星１／光属性／天使族／ＡＴＫ　２００／ＤＥＦ　３００
このカードが魔法・罠・効果モンスターの効果によって自分のデッキから手札に加わった場合、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

《ワタポン》　ＡＴＫ／　２００

「さらに《ワタポン》を生け贄に《ブラック・マジシャン・ガール》を召喚！」

次に出て来たのは、青とピンクの服を着た、《ブラック・マジシャン》の弟子。このモンスターも遊戯さんと深い関わりのあるモンスターだ。

《ブラック・マジシャン・ガール》
効果モンスター
星６／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ１７００
お互いの墓地に存在する「ブラック・マジシャン」「マジシャン・オブ・ブラックカオス」１体につき、このカードの攻撃力は３００ポイントアップする。

《ブラック・マジシャン・ガール》　ＡＴＫ／２０００

「《ブラック・マジシャン・ガール》だと！？」

「師弟コンビが揃った…！」

「か…可愛い！」

若干1名リアクションが違う！

「僕、俊也君には勝ってもらいたいけど、彼女だけは応援しちゃおうかな～」

「馬鹿！何言ってんだぁ！」

「だって、ブラマジガールは遊戯さんのデッキにしか入ってないし、今夜限りの恋かもしれないんだよ！？」

「それはそうなんだな…」

「恋って、んな大袈裟な…」

隼人君もそこで納得しない！

「《強欲な壺》を発動！2枚ドロー！邪魔な鳥には退場してもらおうか！魔法カード《千本ナイフ》を発動！俺の場に《ブラック・マジシャン》がいる時、相手のモンスター1体を破壊する！《シールド・ウィング》を破壊！」

《千本（サウザンド）ナイフ》

通常魔法

自分フィールド上に「ブラック・マジシャン」が表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。

相手フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する。

《シールド・ウィング》が無数のナイフに貫かれ破壊されてしまう。でも神楽坂君、『センボンナイフ』じゃなくて『サウザンドナイフ』だからね？

「しまった…！」

「行くぜ！《ブラック・マジシャン》でウィンに攻撃！黒・魔・導（ブラック・マジック）！」

《ブラック・マジシャン》の黒い魔導がウィンを襲う！

「させないよ！罠発動《次元幽閉》！攻撃モンスターを除外する！」

「よし！これで《ブラック・マジシャン》を封じられる！」

「甘い！速攻魔法《光と闇の洗礼》！《ブラック・マジシャン》を生け贄にする！」

《光と闇の洗礼》
速攻魔法
自分フィールド上の「ブラック・マジシャン」を生け贄に捧げる事で発動する事ができる。
自分の手札・墓地・デッキの中から「混沌の黒魔術師」を1体選択して特殊召喚する。

《次元幽閉》がかわされた！？

「このデッキはお前達の想像を遥かに超えている！神のカードが抜けた穴を十分に埋めるほどにな！貴様らは今から伝説を目にする！

デッキから《混沌の黒魔術師》を特殊召喚！」

《ブラック・マジシャン》が洗礼を受け、更なる姿へ進化する！

《混沌の黒魔術師》
効果モンスター（禁止カード）
星８／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２６００
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、自分の墓地から魔法カード１枚を選択して手札に加える事ができる。
このカードが戦闘によって破壊したモンスターは墓地へは行かずゲームから除外される。
このカードがフィールド上から離れた場合、ゲームから除外される。

《混沌の黒魔術師》　ＡＴＫ／２８００

「こいつは…！」

「混沌の…」

「黒魔術師…」

「伝説のマジシャン…最強レベルモンスターの１人…」

『伝説…。俊也、これって…』

「（うん。厳しい戦いになりそうだね…）」

想像以上に強い。そして、それを使いこなしてる神楽坂君も凄い。

僕は、この強大な相手に勝てるのか…？

...To be continued

第１３話　考える事は皆同じ（後書き）

以上、神楽坂戦前編でした。

今回はさすがに長すぎるので前後編に分けました。書いてる内に話が長くなってしまって…。でも、初めての前後編で主人公の紅刃がデュエルしないっていうのは…。

またオリジナルカードとして《霊術結界》を登場させました。リバース効果をもう少し使いやすくできないかと思って考えたカードです。

次の更新はあまり時間がかかりません。では、また次回！

第１４話　自分だけのデッキで戦え（前書き）

神楽坂戦後編です。一部ネタもあります。

それではどうぞ！

第１４話　自分だけのデッキで戦え

ＳＩＤＥ／俊也

俊也
ＬＰ／４０００
手札／６
モンスター／《シールド・ウィング》（ＤＥＦ／　９００）《憑依装着－ウィン》（ＤＥＦ／１５００）
魔法・罠／リバース×１

神楽坂
ＬＰ／２１５０
手札／３
モンスター／《混沌の黒魔術師》（ＡＴＫ／２８００）《ブラック・マジシャン・ガール》（ＡＴＫ／２０００）
魔法・罠／リバース×１

まずいな…。《次元幽閉》がかわされた上に最強クラスの魔法使い族を出して来るなんて…。

「このカードが特殊召喚に成功した時、墓地の魔法カードを1枚を手札に戻す！《強欲な壺》を手札に！そして、《ブラック・マジシャン・ガール》は墓地の《ブラック・マジシャン》の数だけ攻撃力が３００ポイントアップする！」

《ブラック・マジシャン・ガール》　ＡＴＫ／２３００

リリースにすら無駄がない。これが、デュエルキングのデッキ…！

「まだバトルフェイズ中だ！《混沌の黒魔術師》でウィンに攻撃！滅びの呪文！」

『きゃあっ！？』

「ウィン！？」

ウィンが《混沌の黒魔術師》の攻撃を受けて次元の彼方に飛ばされた！？

「《混沌の黒魔術師》に戦闘破壊されたモンスターは除外される！続いて《ブラック・マジシャン・ガール》でダイレクトアタック！黒・魔・導・爆・裂・破（ブラック・バーニング）！」

《ブラック・マジシャン・ガール》が桃色の光弾を放つ！

「うわぁああっ！？」

俊也　ＬＰ／４０００→１７００

「うわぁ～…見かけと違って威力は強力ッス…」

「綺麗な花には棘があるんだな」

「いよいよ追い詰められたな。俊也のライフは残り半分…」

「もう1度《強欲な壺》を発動、カードを2枚ドロー！カードを1枚セットし、ターンエンド！」

神楽坂
ＬＰ／２１５０
手札／４
モンスター／《混沌の黒魔術師》（ＡＴＫ／２８００）《ブラック・マジシャン・ガール》（ＡＴＫ／２３００）
魔法・罠／リバース×２

「クックックック…貴様程度のデュエリストが俺に勝とうなんて１０００年早いぜ！」

「人のデッキでよく言うよ…」

「あんだけやっといて手札４枚かよ…」

「さすが、遊戯さんのデッキだぜ！」

強い。神楽坂君は、あのデッキを使いこなしてる。
一応、《天よりの宝札》の効果で僕も手札が増えている。反撃に移るなら今だ！

「僕のターン！君のモンスターが両方闇属性なのは残念だったね」

「何？」

「相手の場に同じ属性のモンスターが２体以上いる時、このモンスターを特殊召喚できる！行け、《神禽王アレクトール》！」

銀色の鳥人が、赤い翼を広げ舞い降りる！

《神禽王(しんきんおう)アレクトール》
効果モンスター
星６／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ２０００
相手フィールド上に同じ属性のモンスターが表側表示で２体以上存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
１ターンに１度、フィールド上に表側表示で存在するカード１枚を選択する。
選択されたカードの効果はそのターン中無効になる。
「神禽王アレクトール」はフィールド上に１体しか表側表示で存在できない。

《神禽王アレクトール》　ＡＴＫ／２４００

「そして、これが反撃の狼煙だ！魔法カード《大嵐》！フィールド上の魔法・罠を全て破壊する！」

「何だと！？」

破壊されたのは《聖なるバリア－ミラーフォース－》と予想通りもう１枚の《黒魔族復活の棺》だ。伏せカードですら凶悪な布陣だよ…。

「僕がセットしていたのは《荒野(こうや)の大竜巻》！セットされた状態で破壊された時、表側表示のカード１枚を破壊する！」

《荒野の大竜巻》
通常罠
魔法&罠カードゾーンに表側表示で存在するカード１枚を選択して破壊する。
破壊されたカードのコントローラーは、手札から魔法または罠カー

ド1枚をセットする事ができる。
また、セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する。

「何!?という事は…」

「当然《混沌の黒魔術師》を破壊!吹き飛べ!」

強風が黒魔術師をフィールドから吹き飛ばす!

「ぐ…《混沌の黒魔術師》は破壊された時、ゲームから除外される…」

「アレクトールの効果発動!相手の表側表示のカードの効果をエンドフェイズ時まで無効にする!バーミリオン・ドレイン!」

アレクトールの赤い風が魔術師の効果を封じ込める。

《ブラック・マジシャン・ガール》　ＡＴＫ／２３００→２０００

「さらに、《アーマード・ビー》を召喚!」

メタリックな蜂のモンスター。効果がなかなか強力だからデッキに入れてるけど、今回も役に立ってくれそうだ。

《アーマード・ビー》
効果モンスター
星４／風属性／昆虫族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１２００
１ターンに１度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。

選択した相手モンスターの攻撃力をエンドフェイズ時まで半分にする。

《アーマード・ビー》　ＡＴＫ／１６００

「《アーマード・ビー》の効果発動！エンドフェイズ時まで、相手モンスター1体の攻撃力を半分にする！ポイズン・ニードル！」

《ブラック・マジシャン・ガール》　ＡＴＫ／２０００→１０００

《アーマード・ビー》が《ブラック・マジシャン・ガール》の杖に毒針を撃ち込む。なんか杖に魔力が溜まらないらしく、杖をブンブン振っている。

「あああ！俊也君、ブラマジガールに何するんスかあぁあ！」

「杖に撃ち込んだから別にいいでしょ！このデュエルで死ぬわけじゃないし！アレクトールで攻撃！ラプトリアル・ウィンド！！」

赤い風を纏った神禽王の一撃が《ブラック・マジシャン・ガール》を破壊する。

「ぐうっ！」

神楽坂　ＡＴＫ／２１５０→　７５０

「さよなら、《ブラック・マジシャン・ガール》…」

翔君、そこまで落ち込まないで！《アーマード・ビー》には悪いけど、昆虫にやられるよりはマシでしょ！

「これで終わりだ！《アーマード・ビー》でダイレクトアタック！ビー・カッター！」

《アーマード・ビー》が衝撃波を放つ！やったか…！？

ボンッ！

「え！？」

突然、茶色のモンスターがたくさん現れて攻撃を防いだ。

「そうだ、遊戯さんのデッキにはあのモンスターがいたんだ…」

あのモンスター？…！まさか…！？

「手札の《クリボー》の効果だ。手札から墓地に送る事で、１度だけ戦闘ダメージを無効にする」

《クリボー》
効果モンスター
星１／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　３００／ＤＥＦ　２００
相手ターンの戦闘ダメージ計算時、このカードを手札から捨てて発動する。
その戦闘によって発生するコントローラーへの戦闘ダメージは０になる。

「ここで《クリボー》かよ…」

「攻守共に万全だな」

「ありがとう《クリボー》。さすが、俺が数千枚の中から選んだモンスターだぜ。お前には、これまで何度も助けてもらったな」

『クリ～…』

「いや、お前が選んだわけじゃねえだろ！何度も助けてねえし！」

「あはは…本当に遊戯さんになりきってるよ…」

《クリボー》も困ってるし。本当に人格までトレースしてるよ。遊戯さんが見たらなんて思うかな？

「カードを3枚セットしてターンエンド！」

俊也
ＬＰ／１７００
手札／１
モンスター／《神禽王アレクトール》（ＡＴＫ／２４００）《アーマード・ビー》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×３

「《クリボー》、お前がくれたチャンス、無駄にはしないぜ！俺のターン！」

神楽坂君は引いたカードを見た瞬間、ニヤリと笑った。

「行くぜ！お前はこのターン、このデッキの本当の力を思い知る事になるぜ！」

「本当の力？」

「墓地より闇属性と光属性のモンスターを1体ずつ除外する！」

《ワタポン》と《クリボー》が除外される。なんだ？何をするつもりだ？

「えっ！？墓地から闇と光のモンスター…！？」

「何？この特殊な召喚条件は…？」

「そんなカードは…」

「あっ！いや、あｒ「あるよ。この召喚条件で呼び出すモンスター…そのカードが入っているだけで、デュエルの勝敗を左右すると言われているカードだよ」…」

三沢君、ドンマイ。月沙は多分狙ってやってるんだろうな…。

「その1枚は　あまりの強さと凶悪な効果でデュエルモンスターズの公式大会では禁止カードとなった《混沌帝龍（カオス・エンペラー・ドラゴン）　―終焉の使者―》。そしてもう1枚は、禁止カードにこそなってないけど（私のいた世界では禁止カードだけど）、混沌帝龍と双璧をなす強さを持った…」

「そう…このカードこそがこのデッキの真のエース！出でよ！《カオス・ソルジャー　―開闢の使者―》！！」

神楽坂の場に現れたのは、すさまじいまでの威厳を放つ、最強の剣士だった。

《カオス・ソルジャー　－開闢(かいびゃく)の使者－》
効果モンスター（禁止カード）
星８／光属性／戦士族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２５００
このカードは通常召喚できない。
自分の墓地の光属性と闇属性モンスターを１体ずつゲームから除外して特殊召喚する。
自分のターンに１度だけ、次の効果から１つを選択して発動する事ができる。
●フィールド上に存在するモンスター１体をゲームから除外する。この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃する事ができない。
●このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、もう１度だけ続けて攻撃を行う事ができる。

《カオス・ソルジャー　－開闢の使者－》　ＡＴＫ／３０００

「カオス・ソルジャー…」

なんて威圧感だ…。これが、遊戯さんのデッキの本当の力なのか？

「さらに、魔法カード《死者蘇生》を発動！墓地の《ブラック・マジシャン》を特殊召喚！」

最上級の魔術師が再びフィールドに現れる。

《ブラック・マジシャン》　ＡＴＫ／２５００

「また《ブラック・マジシャン》…！」

「まだだ！魔法カード《死者転生》！手札を１枚捨て、《ブラック・

マジシャン・ガール》を手札に加える！さらに魔法カード《師弟の絆》を発動！俺の場に《ブラック・マジシャン》がいる時、手札かデッキから《ブラック・マジシャン・ガール》を特殊召喚する！」

《師弟の絆》
通常魔法（映画オリジナル）
自分フィールド上に「ブラック・マジシャン」が表側表示で存在する場合に発動する事ができる。
自分の手札またはデッキから、「ブラック・マジシャン・ガール」1体を特殊召喚する。

《ブラック・マジシャン・ガール》　ＡＴＫ／２０００

「来たあああ！！ブラマジガールッス！」

翔君は無視しといて、まいったな…。まさか師弟コンビまで復活するなんて…。

「さあ、バトルだ。受けてみるがいい…デュエルモンスターズ最強の戦士の攻撃を！カオス・ソルジャーで《神禽王アレクトール》に攻撃！開闢双破斬！」

「ぐ…！永続罠（スピリットバリア）！僕の場にモンスターがいる時、戦闘ダメージを０にする！」

神禽王が、開闢の使者の剣で真っ二つに斬られる。衝撃はバリアでなんとか防いだけど、威力がとんでもなく高い事はわかる。

「戦闘ダメージはなしか…。だが、これからがこのカードの真の力だ！！モンスターを戦闘破壊した時、もう一度だけ続けて攻撃でき

る！」

「何っ！？」

「《アーマード・ビー》に攻撃だ！時空突刃・開闢双破斬！」

《アーマード・ビー》まで破壊されてしまった。ごめん…。

「これでとどめだ！《ブラック・マジシャン》でダイレクトアタック！黒・魔・導！」

「2体の犠牲は無駄にはしない！罠発動（ガード・ブロック）！戦闘ダメージを無効にし、カードを1枚ドローする！」

「小癪な…！《ブラック・マジシャン・ガール》でダイレクトアタック！黒・魔・導・爆・裂・破！」

「もう一度（ガード・ブロック）を発動！」

「ぐ…しぶとい奴め…。ターンエンドだ」

神楽坂
ＬＰ／７５０
手札／０
モンスター／《カオス・ソルジャー　－開闢の使者－》（ＡＴＫ／３０００）《ブラック・マジシャン》（ＡＴＫ／２５００）《ブラック・マジシャン・ガール》（ＡＴＫ／２０００）
魔法・罠／なし

ふぅ、な、なんとか持ちこたえた…。

「すっげえ！2人共凄えよ！見てても最高に楽しいデュエルだぜ！」

「《ガード・ブロック》を2枚も使うなんて…」

「なんて奴らだ…。神楽坂は驚異的なタクティクスで相手を圧倒し、俊也もかなりの粘りを見せている…」

《ガード・ブロック》が2枚来た時はどうしようかと思ったけど、無駄にはならなかったな。

「ひとついい事を教えてやる。カオス・ソルジャーにはもうひとつ効果がある。そのターンの間カオス・ソルジャーが攻撃できなくなる代わりに、相手のモンスター1体を除外する効果だ」

「そんな！？」

「これじゃ、《シールド・ウィング》の効果は意味がないんだな！」

「なるほど…。なら、このターンで決着をつけなきゃいけないね」

幸い、神楽坂君の場には伏せカードがない。あのカードが来れば、確実に勝てる…！

「僕のターン、ドロー！」

……。

「どうした？勝負を捨てたか？」

「……まさか。勝てる勝負を捨てる理由がどこにある？」

「何？」

「僕も《死者転生》を発動するよ。手札を１枚捨てて、墓地の《風霊使いウィン》を手札に加える。そしてそのまま召喚！」

《風霊使いウィン》　ＡＴＫ／　５００

「何だと！？」

「なんでウィンを復活させたんだ？」

「攻撃力５００で何ができる！？」

「神楽坂君、君にはなくて僕にあるものがある。何かわかるかい？」

「俺にはないもの…？」

「それは、カードを信じる心と絆だ！自分自身で選び抜いたカードだからこそデッキが応えてくれる！信じる心も強くなる！他人のデッキをそのまま使うようじゃ、どんなに強いデッキでもどこかに綻びができる！本気で勝ちたい人達は、自分だけのデッキを作り上げているんだ！」

「自分だけの…」

遊星達も、十代達も、紅刃や月沙に璃音や僕だって、みんな自分が信じる自分だけのデッキでデュエルしてるんだ！

「そして、ウィンは僕にとって1番大切なパートナーだ。どうせ決着をつけるなら、自分が最も信頼するモンスターで。そう思うのはみんな同じでしょ？」

語気を緩めて問い掛ける。神楽坂君の1番信頼しているカードって何なのかな？

「それに、君の今の切り札とも勝負したいしね！手札から速攻魔法（イージーチューニング）を発動！墓地のチューナー1体を除外し、そのモンスターの攻撃力を僕のモンスター1体の攻撃力に加える！」

「出たな。だが、貴様のチューナーモンスターは《デブリ・ドラゴン》のみ。聞いた話じゃ、チューナーには攻撃力が高いモンスターがほとんどいないと言ったそうじゃないか。たかが攻撃力を１０００上げただけで何になる？」

「俊也がデッキに入れてるのは《デブリ・ドラゴン》だけじゃない。でも、1枚使ったくらいじゃとてもライフを削り切れない…」

「誰が『1枚だけ』だなんて言った？」

僕はそう言って、《イージーチューニング》の裏に重ねていたカ

ードをずらして見せつけた。

「あれは！？」

「な…２枚目だと！？」

「まず１枚目！《死者転生》で墓地に送った《デブリ・ドラゴン》を除外！ウィンの攻撃力を１０００ポイントアップさせる！」

《風霊使いウィン》　ＡＴＫ／　５００→１５００

「そして２枚目は《地獄からの使い》！攻撃力は…チューナーモンスター最大の２６００！！」

《地獄からの使い》
チューナー（効果モンスター）
星７／地属性／悪魔族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ１８００
このカードは特殊召喚できない。
このカードはモンスター１体をリリースして召喚する事ができる。
この方法で召喚したこのカードのレベルは５になり、元々の攻撃力・守備力は半分になる。

「２６００！？」

「おい…て事は…」

「《地獄からの使い》を除外して、ウィンの攻撃力をさらに２６００ポイントアップさせる！」

《風霊使いウィン》　ＡＴＫ／１５００→４１００

「こ、攻撃力…４１００だと！？」

「（さて、フィニッシュだ。ウィン、頼むよ）」

『任せて！このデュエルのフィニッシャーになれるのなら光栄だよ！』

ウィンの杖に膨大なエネルギーが溜まる。今度こそ決める！

「最高に楽しかったよ。ウィンでカオス・ソルジャーに攻撃！チューニング・ストーム！！」

『これで終わりよ！』

ウィンが杖から巨大な竜巻を一直線に開闢の使者に放ち、このデュエルに終止符を打った。

「ぐわあああぁぁあぁぁあああ！！」

神楽坂　ＬＰ／　７５０→　０

俊也　ＷＩＮ

「す、凄い…勝っちゃった…」

「やったな、俊也！」

「まさか《イージーチューニング》を２枚も使うなんてね」

「ガッチャ！2人共、最高に面白いデュエルだったぜ！」

『まあ、よくやったな』

『かっこよかったですよ、俊也様、ウィン様！』

デュエルが終わると、緊張が解けたからかウィンと同時に座り込んでしまった。そこに見ていたみんなが思い思いの言葉を投げ掛ける。

『ゼウス、スイレン…うん、ありがとう』

「はは…まさか、デッキに偶然紛れ込んだこいつが役に立つとはね…」

僕はそう言って、ディスクから《地獄からの使い》を取り出した。

「は？偶然？」

「デッキの調整をしてた時に紅刃が呼んで来て、慌ててデッキを束ねた時に交ざったんだ」

「う…悪い…」

紅刃がばつの悪い顔をする。

「いいって。こうして勝ったんだし」

「それに、信じて墓地に送ったんでしょ？」

「うん、《手札断殺》が来た時にね。本当にお手柄だよ」

「この俺が…負けた…？」

ふと見ると、そこにはうなだれてる神楽坂君の姿が。

「俺は…こんな強いデッキを使っても…勝てないのか！？俺にはやはり…才能がまるでないんだ！」

「いや…」

「そんな事ないさ」そう言おうとした時だった。

「いや、そうでもないさ」

「！カイザー！…」

あ、亮さん！明日香さんもいる。

「お兄さん！」

「明日香！どうしてここに！？」

「俺達も一足早くデッキを見たくてな」

亮さんと明日香さんまで…。やっぱり考える事はみんな同じなんだな。

「会場に行ってみたらケースが壊れてて、デッキは消えていた。それで辺りを探してみたら、あなた達を見つけたわけ」

「止めようと思ったが、止めるにはあまりにも惜しいデュエルだったからな」

「そりゃそうだ」

「あはは…おかげでくたくたですよ…」

主に緊張で。

「それにどうやら、観ていたのは俺達だけじゃないようだ」

「え？」

辺りを見渡すと、いつの間にか大勢の生徒がいた。…まさかみんなフライングしようなんて考えてないよね？

「本当なんだな！」

「いやぁ、凄いデュエルだったぜ！」

「いいもん観させてもらった。勉強になったよ！」

「神楽坂、お前凄いよ！見直したぜ！」

「俊也様、やっぱり素敵です！」

あの…スイレンは仕方ないとして、僕は様付けされたり「素敵」って言われるような大層な人間じゃないけど…。

「みんな…」

「確かに他人のデッキを勝手に持ち出した事は許されない行為だ。しかし、その武藤遊戯のデッキが戦い、力を発揮する姿をみんなが見たがっていた事も事実だ。みんなもここは大目に見るだろう」

「キング・オブ・デュエリスト武藤遊戯のデッキをあれだけ使いこなすなんて…！」

「凄いぜ神楽坂！」

「けど俺は負けた…どうして…！？」

「さっきも言ったでしょ？デッキを信じる心と絆だよ」

「デッキを信じる…？」

「確かにそのデッキは強い。でも、君が考えたデッキじゃない。それじゃ、デュエルには勝てないんだ」

「自分が時間と労力をかけたからこそデッキを心の底から信じる事が出来る。そして、そのデッキとの間に絆ができる。そこから生ま

れる信念がデュエリストに気迫を与え、ぎりぎりの戦いでは勝敗を左右する。今のデュエル…本物の武藤遊戯であれば、俊也はそのプレッシャーに負けていたかもしれない」

亮さんの言う通りだよ。僕もまだまだだな。

「やっぱり、そのデッキの本当の力を引き出すのは遊戯さんにしか出来ない事なのさ！約束通り、デッキは返してくれるな？」

「勿論だとも！」

神楽坂君が十代君にデッキを渡そうとした時…

「ん？これは一体何の騒ぎなノーネ？」

あれ？クロノス先生だ。先生自身も捜索してたんだ。

「あ、そうだ！先生～！」

紅刃が何かを思いついたらしく、クロノス先生の所まで行って事情を説明した。

「なるホ～ド。そういう事なら、許してあげるノーネ」

「でさ、……ってのは？」

「なな！？」

「デッキを盗んだ罰って事でさ」

「…わかったノーネ。そういう事なら私がなんとかするノーネ！」

「サンキュー、クロノス先生！」

紅刃は何かの許可を得た後、僕らの所に戻って来た。

「はい、みんな注も～く！」

「紅刃、何する気？」

「明日の午後１２時から、神楽坂が武藤遊戯のデッキを使ってデュエルをする！戦いたい奴はデッキを調整して決闘場に１２時に集合だ！」

……。

「「「「「「ええええぇぇえええええ！！？」」」」」」

僕らデッキ捜索先発部隊は揃って驚きの声を上げた。

「え？これってどういう…」

神楽坂君もかなりうろたえてるよ。

「デッキを盗んだ罰だ！ちゃんと全員捌けよ！」

こんなメリットともデメリットともとれない罰は初めてだよ。

「……フッ、いいだろう」

神楽坂君は遊戯さんになりきり、みんなに向かって叫んだ。

「そういう事だ！みんなの挑戦、待っているぞ！」

ウオオォォオオオオ！！

『全く…お前らしいな』

「こういうのも悪くねえだろ？俺だってデュエルしたいんだしな」

ゼウスが呆れた顔で笑う。ダークシグナーの事件では物凄く頑固な性格だったのに、今はだいぶ丸くなってるな。今でも充分頑固だけど…。

ＳＩＤＥ／紅刃

あれから数日が経った。

神楽坂はほとんどの生徒を相手に遊戯さん（俺もそう呼ぶ事にした）になりきってデュエルをし、勝率９割以上という快挙を成し遂げた。

神楽坂を負かしたのは俺、月沙、十代、亮さんくらいだ。俊也は「疲れるし、１度やったからいい」と言ってやらなかった。まあ、教師陣まで参戦したのには驚いたけどな。

ちなみに、俺はゼウスで勝負を決めたわけだけど、ゼウスが昨日の鬱憤晴らしとばかりに電撃をぶっ放してたのには、ソリッドビジョンだとはいえ冷や冷やしたな。俺、サイコデュエリストじゃなくてよかった…。

「ねえ、月沙」

「何？」

「これ、いつまで持ってればいいの？」

廊下を歩いてる途中で俊也が月沙に見せたのは、サッカーボールが入ったネットだ。

「まだだよ。いつあれが出てもおかしくないからね」

「だからあれって何さ…？」

「サッカー、得意なんでしょ？」

「確かにそうだけど…って答えになってない！」

そういや、俊也がアビリティを使う時は足を使う事が多いけど、ここから来てるのか。

「お～い、俊也君～！」

ん？翔だ。慌てた様子で走って来る。

「翔君？どうしたの？」

「大変だよ！俊也君の偽物が現れた！」

「「え？」」

「（とうとう出たか…）」

俺達は翔についていき、現場に向かった。

「アニキ～！」

「あ、翔！ありがとな！」

「早くこっちに来るんだな！」

「全く、誰が僕に化け…」

「待ってたよ、俊也君！」

ズザァアアァアア！

俺と俊也は偽物を見た瞬間、頭から地面に滑り込んで向こう岸まで突っ込んだ。ズッコケたの久しぶりだよ。

俊也のコスプレをした神楽坂が俊也になりきって自信満々な様子で出迎えてくれやがった。

「神楽坂…何やってんだよ？」

「僕はわかったんだ！何故デッキを信じる事が出来なかったか！それはつまり、僕のなりきり方が半端だったからだあぁぁぁあ！」

「なんじゃそりゃ！？」

駄目だこいつ、全然わかってねえ…。

「デッキだって君に似せて作り直した！これで僕は身も心も君になりきれる！さあ、どっちが強いかｍ「タイガークラアアァアァッシュ！！」ぐぼぉあ！？？」

ええぇえぇ…。

「波星大佐、目標を撃墜しました」

「ご苦労、風嶺君。これで任務完了だ」

「2人共どんなノリッスか…」

お～い、なんか混ざってるぞ？日〇と染〇の技が合体してんぞ？

サッカーボールを思い切り蹴って神楽坂をぶっ飛ばした俊也は、こうなる事を知ってただろう月沙に敬礼をした。「サッカーボールを持ってろ」ってこういう事だったのか…。

「お～い、神楽坂～？生きてるか～？」

「これは…」

「勝負どころじゃないッスね…」

その後、なんとか回復した神楽坂が俊也にデュエルを挑み、《イージーチューニング》3連打で返り討ちにあったのはまた別の話だ。

…To be continued

第１４話　自分だけのデッキで戦え（後書き）

というわけで、神楽坂戦終了です。

俊也のデッキはあくまでも【風属性】のはずなのに、なぜか鳥獣族ばかりになってしまいます。一応ウィンや《デブリ・ドラゴン》《アーマード・ビー》以外にも鳥獣族以外の種族は入ってるんですが…。

神楽坂フェイバリットカードって何でしょうね？個人的には気になるところです。

では、また次回！

第１５話　本音を語る時はよく考えよう（前書き）

ｖｓレイです。今回は紅刃が半分空気になってるような…。

それではどうぞ！

第１５話　本音を語る時はよく考えよう

ＳＩＤＥ／俊也

レッド寮の食堂にみんなが集まっている。召集をかけた徳寺先生の横には、見慣れない男子が立っている。

バンダナを頭に巻いて、その上に帽子を深く被っている。なんか、女の子みたいな顔の人だな。

「ニャ～。皆さんに紹介したい人がいますのニャ～。編入テストを受けてこの度オシリス・レッドに入ってきた、早乙女レイ君だニャ」

「女の子みたいに綺麗な子なんだな」

「隼人君もそう思う？でも、なんか元気がないみたいだね」

何か思い詰めてるような…。相談に乗ってあげられないかな？

「編入先がオシリス・レッドなんで落ち込んでるのかな？その気持ち、わかるな…」

「それはないよ。途中編入生はまｚ「フレ～！フレ～！レ～イ！」十代君！？」

いきなり応援をしだす十代君。ていうか何の応援？

「な～に、成績悪くても気にするな！俺達と一緒に楽しくやろうぜ

！」

「何を勘違いしてるんだニャ？」

「え？心痛めてる編入生に慰めの言葉をかけてるんじゃ…」

レイ君はササッと大徳寺先生の後ろに隠れてしまう。

「早乙女君は成績が悪くてオシリス・レッドに入ってきたわけじゃないのニャ。途中編入生はまず、この寮に入るんだニャ。早乙女君の成績なら、近いうちにラー・イエローに移るのニャ」

僕が言いかけた事を大徳寺先生が＋αをつけて復唱する。

「えっ？いやぁ…とにかくオシリス・レッドの仲間が増える事は大歓迎だぜ！なあ、翔、隼人、俊也！」

「「うん！もちろん！」」

「当然だよ。よろしく、レイ君」

僕も最近ここに入ってきたばかりだけど、また賑やかになりそうだね。

「よかったニャ～。部屋が足りないんでどうしようかと思ってたニャ～」

「へっ？」

「どういう事ですか？」

「しばらく俊也君の部屋を使わせてもらいなさい。1人で部屋を使ってるから丁度いいニャ」

「はい」

「少し汚いところだけど、どうぞ」

「そんな事ないよ。ちゃんと片付いてるし」

レイ君の紹介の後に夕食を食べてから、僕はレイ君を部屋に案内した。適当にテーブルと座布団を出してお互いに座る。ベッドは元々2段式だから寝床に困る事はない。

「自己紹介、まだだったね。十代君達が結構騒いでたから…。僕は風嶺俊也。最近ここに編入したんだ」

「え？君も？」

「うん。デュエリストとして上を目指すためにね」

本来の目的はイレギュラー討伐だけど、こっちも間違いじゃない。

「とにかく、これからよろしく」

「うん。よろしく」

僕が右手を出すと、レイ君も応じて握手をした。

でも、なんか違和感がある。なんていうか、十代君や紅刃といる感覚じゃなくて…。月沙や明日香さんみたいな感覚かな？う～ん。そうだ、あれ試してみよう。

レイ君をまじまじと見つめる。

「な、何？」

「……君、もしかして女の子？」

「！？」

「…図星みたいだね」

酷いうろたえようだな。

「…なんでわかったの？」

レイ君…いや、レイちゃんはそう言うと、帽子とバンダナを取り除いた。長く伸ばした髪がサラリと落ちる。

「知り合いに演技が物凄く上手い人がいてさ、その人は相手の演技も一発で見抜いちゃうんだ。多分、その人の影響かな？」

もちろん、紅刃や月沙じゃないし、璃音でもない。自由気ままに旅をする、短い時間だったけどアルカディアムーブメントで共に過ごした同僚の事だ。旅の途中で偶然会った時に演劇のバイトの中で

教えてもらったけど、上手くいったみたいだ。

「凄いんだね、その人」

「性格で言ったら女の子版十代君かな？」

「何それ？」

苦笑するレイちゃん。だいぶ打ち解けたかな。

「ところで、この学園に来た理由は何だい？」

「！」

「男装してまでここに来るなんて、よほどの理由がないと普通はしないからね」

「…俊也先輩になら、話してもいいかな」

「『先輩』？」

「あ、私小学５年だから」

「！！？」

危うく大声を出すところだった…。危ない危ない。

「驚いたな…。年齢を偽ってまでアカデミアに来るなんて…」

「私は亮様に会いに来たの」

「亮様？…って、カイザー亮の事？」

「そう。亮様に告白する事が私の目的よ」

「……」

「ど、どうしたの？」

「いや、物凄い行動力だなぁって思ってね。月沙に見習ってもらいたいくらいだよ」

「月沙って誰？」

「僕の友人の女の子だよ。アカデミアにいるから近い内に会えると思うよ。月沙も好きな人がいるんだけど、自分で認めないし恋愛に対する耐性が全然ないんだ」

「へえ。１度会ってみたいな」

「明日辺りにでも紹介するよ。で、亮さんへの告白はいつ決行するんだい？」

あれ？また驚いた顔で見てるよ。僕何かした？

「ここまで聞いて、止めないの？」

「なんで？僕の事を信頼してるから話したんでしょ？」

「…変わった人ね、俊也先輩って」

「それはお互い様でしょ？」

変わり者同時でクスリと笑った。

翌日、校舎内で全校集会が開かれた。

「毎年恒例、北にある姉妹校、デュエルアカデミア・ノース校との友好デュエルが近づいております。昨年は2年生だった丸藤君がノース校代表を倒し、本校の面目躍如となりました」

へえ、友好デュエルか。面白そうだな。ていうか、やっぱり亮さん強いな。

レイちゃんが亮さんの方を見てると、翔君が話し掛けてきた。

「へへ、僕の兄さんなんだ！」

「へぇ～」

「僕と違って成績良いからね」

「今年の本校代表はまだ決まっていませんが、誰が選ばれてもいいように、皆さん日々努力を怠らないように」

「よしっ！代表目指していっちょ頑張るか！」

「いくら兄貴でも、やっぱ今年もカイザー亮で代表は決まりッス！」

凄い自信だな。いや、その前に自分が頑張ろうよ。

「ちぇっ…ん？」

十代も、レイちゃんの様子に気付いたみたいだ。

「？」

「そっかあ…もうそんな時期か」

「やっぱり原作であったイベントなんだ」

夜、僕は紅刃と月沙を連れてレッド寮に向かった。その道中でレイちゃんの事を話すと、月沙がさっきの通りに返事をした。

「とにかく、レイちゃんに君達を会わせたくてね」

「なら、寮に行くのは時間の無駄だね」

「は？どういう事だよ？」

「レイちゃんは寮にはいないよ。十代と寮の近くの崖の下でデュエルしてるんじゃないかな？」

「それを先に言ってよ…」

「ごめんごめん。じゃ、行こうか！」

月沙を先頭にして、僕らは浜辺に向かった。

さてと、現場に到着！あ、デュエルの最中か…。

『スパークマン！お前はヒーローのくせにか弱い女性に攻撃するなんて！』

『あぁ…俺はなんて事をしてしまったんだ！お嬢さん、大丈夫ですか！？』

『自分を責めないで…。戦うこと、それは宿命なのだから。ね？』

『あぁっ…！惚れたあぁああ！』

……

「「「……」」」

「…幻覚か？」

「いや、話は原作通りに進んでるよ」

「あの…ヒーロー…だよね…？」

何このカオスな状況？

フェザーマンはレイちゃんにコントロールを取られてるみたいだ。

『スパークマン様…酷い！』

『そんなつもりじゃ…！』

『じゃあ、私の為に戦ってくださいますか？』

「いや、なんでそうなるんだよ！？」

『もちろん！』

「「いいの！？」」

十代もびっくりだよ。だから何これ？

『お願い、スパークマン様！フェザーマンさんも！』

「女の子は恋をすれば強くなる。不可能なんてないの！」

いろんな意味で強くなってる気が…。あ、帽子とバンダナ取った。

「ああ、女の子に男のヒーローをぶつけたのが間違いだったぜ」

十代君、そういう問題？

「やっぱ女の子には女の子だろ！バーストレディ！お前に任せた！」

《Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ》
通常モンスター
星３／炎属性／戦士族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ　８００
炎を操るＥ・ＨＥＲＯの紅一点。
紅蓮の炎、バーストファイヤーが悪を焼き尽くす。

『嘆かわしい事。そのような小娘ごときに惑わされるとは…』

バーストレディさん、ご最もです。

『クリクリ！』

「おぉ～！なんかバーストレディ、いつもより迫力あるぜ…。魔法カード《バースト・リターン》！自分フィールド上にバーストレディがいる時、バーストレディ以外のＥ・ＨＥＲＯを全て手札に戻す！」

《バースト・リターン》
通常魔法
「Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ」が自分フィールド上に表側表示で存在する時のみ発動する事ができる。
フィールド上の「Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ」以外の「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターを全て持ち主の手札に戻す。

『あぁっ…俺達は何をしていたんだ！』

『恋にうつつを抜かすなんて！』

『『ヒーローにあるまじき行為だ！！』』

『あんた達、さっさと戻ってきなさい！』

『『は～い！』』

『えぇえええ！？』

うん、もうツッコむのめんどくさくなってきた。

その後、フレイム・ウィングマンを融合召喚して一撃で決着をつけた。

『クリクリ！』

「ガッチャ！レイ、面白いデュエルだったぜ！」

「レイちゃん、十代！」

「俊也せ…俊也！」

あ、『先輩』は人前では禁止だったな。

「デュエルしてたの？」

「うん…負けちゃったけど…。十代…俊也…僕…」

今のレイちゃんは頭に何も被らずに髪を下ろしている。でも、男装してたからか一人称が『僕』のままだ。

「そこから先は　ずっと見ていた後ろの奴に行ってくれないか？」

「え？」

後ろにいたのは、亮さんと明日香さん、翔君、隼人君だ。

「出番よ。男の責任でしょ？」

うん、明日香さんって男勝りだよね。

「亮様…」

戸惑う亮さんって初めて見るな。

「フフフ…」

「ごめんなさい。昼間、寮に忍び込んだのは僕だったんだ。十代はそれを止めようとしただけなんだ」

「わかっている」

何があったのかは後で聞いてみよう。今は邪魔しちゃまずい。

「亮様がデュエルアカデミアに進学なさってから会いたくて会いたくて…やっとここまでやって来たの」

「「へぇ～…」」

「十代とのデュエルには負けたけど、亮様への思いは誰にも負けな

い！乙女の一途な思いを受け止めて！」

遂に告白したよ。その行動力を少し月沙に分けてやってほしい。

「な～んかカイザーもタジタジだな。それにしても、凄え迫力。デュエルと同じだ」

「「「空気読めよ」」」

未来組で3人揃って口調も無視してツッコんだ。さすがに今のはないでしょ…。

「デュエルじゃないもん！」

「そうね、一途な思いは素敵よ。でも、今のあなたが言ったように、デュエルのヒーローと違って本物の男性はウィンクや投げキッスじゃだめなの。デュエルも恋も、気持ちと気持ちが繋がって初めて実るんじゃないかしら？」

「自分の恋愛に興味がない割には詳しいんだｎ「何か言った？」…いや、なんでもありません」

紅刃もそこは黙ってようよ…。

「あなた亮様の何なの！？まさか恋のライバル！？」

はい、ストップ！変な方向に勘違いしてない！？

「そ、そんなんじゃないわ…」

「レイ、お前の気持ちは嬉しいが…」

「亮様！」

「今の俺にはデュエルが全てなんだ」

…さすがカイザー。告白に『デュエルが全て』と返せる辺りがいい感じに予想を裏切ってる。

「亮様…」

亮さんは、レイちゃんに落ちていたバンダナを渡した。

「レイ、故郷に帰るんだ」

「そこまでする事ないだろ！女の子だってオベリスク・ブルーの女子寮に入れてもらえば…」

十代君、君は本当に仲間思いだよ。でも、今回は事情が事情だ。

「レイはここにはいられない」

「え…？レイにはまだ秘密があるのか？男に化けた女と見せて…実は男だったりして！」

そんなんで退学にはならないでしょ…。仕方ない、僕からネタばらしするか。

「レイちゃんはまだ小学5年だよ」

「「はぁあああ!?」」

「「えええぇぇ!?」」

「へへ…」

十代君と紅刃、翔君と隼人君のコンビでの叫び声に、レイちゃんは笑って返した。

「何なんだよ!?俺ってば小学生に苦戦したのかよおぉ!はぁ～…」

「ごめんね。ガッチャ!楽しいデュエルだったよ!」

あ、レイちゃんに決め台詞を取られてズッコけた。

「…あはははは!最高だ!これだからデュエルは楽しいんだよ!あっはははは!」

「十代、声渇いてるぞ?」

「うっ…」

まあ、これで解決だね。でも、レイちゃんにはやってもらいたい事がある。

「あ、俊也先輩!そこの人達は?」

あ、素性がばれたから『先輩』は解禁なんだ。

「ん?ああ、君に会わせたくて連れて来たんだ」

「俺は真川紅刃、よろしくな」

「私は波星月沙」

「私は早乙女レイ。こちらこそよろしく」

「レイちゃん、ちょっといいかな？」

「？」

レイちゃんをみんなから少し離して、小声で話し掛ける。

「ひとつ頼みたい事があるんだけど…」

「頼みたい事？」

「月沙に紅刃が好きだって事を自覚させてほしいんだ」

「え？」

「このままじゃいつまにたっても進展がないし、これだけ行動力があるレイちゃんならできると思うんだ」

「…わかった、やってみる！恋の事なら任せて！」

「ありがとう、頼んだよ」

さてと、後はレイちゃんに任せるか。１番の理由は、月沙に毎回オーバーヒートされたら対処に困るからだけどね。

ＳＩＤＥ／月沙

「月沙先輩！」

俊也と内緒話をしてたレイちゃんが、急に私に話し掛けてきた。

「何？」

「あの…私とデュエルして！」

「え？」

いきなり何を言い出すかと思えば…。

「いいけど…手加減はしないよ？」

「そう来なくっちゃ！」

なんで私にデュエルを挑むかはわからないけど、デュエルならいつでも受けて立つ！

「へえ、かっこいいね、そのデュエルディスク」

レイちゃんの視線の先には私が展開した銃型のデュエルディスク

が。

「私が作ったわけじゃないけどね。さて、準備はいい？」

「うん！行くよ！」

「「デュエル！」」

月沙ｖｓレイ

「先攻はどうぞ」

「じゃあ、遠慮なく行くよ！私のターン！私は《恋する乙女》を召喚！」

出たよ、《恋する乙女》…。弱点はあるけど、厄介な効果を持ってるんだよな…。

《恋する乙女》
効果モンスター（アニメオリジナル）
星４／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ　４００／ＤＥＦ　３００
このカードは表側攻撃表示でフィールド上に存在する限り、戦闘で破壊されない。
このカードを攻撃した相手モンスターに乙女カウンターを１つ乗せる。

《恋する乙女》　ＡＴＫ／　４００

「カードを２枚セットし、ターンエンド！」

レイ
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《恋する乙女》（ＡＴＫ／　４００）
魔法・罠／リバース×２

「私のターン！チューナーモンスター《氷結界の風水師》を召喚！」

私が召喚したのは、鏡を持ち青っぽい服を来た女の子だ。

《氷結界の風水師（ふうすいし）》
チューナー（効果モンスター）
星３／水属性／魔法使い族／ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ１２００
手札を１枚捨て、属性を１つ宣言して発動する。
宣言した属性のモンスターはこのカードを攻撃対象に選択する事ができない。
この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り１度しか使用できない。

《氷結界の風水師》　ＡＴＫ／　８００

「チューナーモンスター？」

「新しい種類のモンスター群だよ。風水師の効果発動！手札を１枚捨て、属性を１つ宣言する。宣言した属性のモンスターは風水師を攻撃する事はできない！私は光属性を選ぶよ」

「え！？それじゃ、コントロールを奪えない！」

「さっきのデュエルは少し見てたけど、同性愛に興味はないからね。

カードを2枚セットし、ターンエンド！」

月沙
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《氷結界の風水師》（ＡＴＫ／　８００）
魔法・罠／リバース×２

「私のターン、ドロー！う…ターンエンド」

レイ
ＬＰ／４０００
手札／４
モンスター／《恋する乙女》（ＡＴＫ／　４００）
魔法・罠／リバース×２

何もせずにターン終了…やっぱり、相手からの攻撃がないとデッキが上手く回らないみたいだ。

「私のターン！《氷結界の御庭番》を召喚！」

刀を2本持った…自分で使ってるのに性別わからないや。

《氷結界の御庭番（おにわばん）》
効果モンスター
星２／水属性／水族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ１６００
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、相手は自分フィールド上に表側表示で存在する「氷結界」と名のついたモンスターを効果モンスターの効果の対象にする事はできない。

《氷結界の御庭番》　ＡＴＫ／　１００

「攻撃力たったの１００？」

「わざわざ攻撃表示で出す意味あるの？」

「こうするんだよ！魔法カード《右手に盾を左手に剣を》を発動！このターンの間、全ての表側表示のモンスターの攻撃力と守備力を入れ替える！」

《右手に盾を左手に剣を》
通常魔法
エンドフェイズ終了時まで、このカードの発動時に存在していたフィールド上の全ての表側表示モンスターの元々の攻撃力と元々の守備力を入れ替える。

《氷結界の風水師》　ＡＴＫ／　８００→１２００

《氷結界の御庭番》　ＡＴＫ／　１００→１６００

《恋する乙女》　ＡＴＫ／　４００→　３００

「なるほど、あえて守備力の高いモンスターを並べたのはそのためか」

「バトル！風水師で《恋する乙女》に攻撃！」

レイ　ＬＰ／４０００→３１００

「うぅ…《恋する乙女》は攻撃表示の時戦闘では破壊されない！そ

して、攻撃をした相手モンスターに乙女カウンターを１つ乗せる！」

「残念！《氷結界の御庭番》がいる限り、私の氷結界のモンスターはモンスター効果の対象にならない！」

「そ、そんな！？」

「続いて御庭番で攻撃！」

「うわっ！？」

レイ　ＬＰ／３１００→１８００

「エンドフェイズ時にモンスターの攻守は元に戻る。ターンエンド」

《氷結界の風水師》　ＡＴＫ／１２００→　８００

《氷結界の御庭番》　ＡＴＫ／１６００→　１００

《恋する乙女》　ＡＴＫ／　３００→　４００

月沙
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《氷結界の風水師》（ＡＴＫ／　８００）《氷結界の御庭番》（ＡＴＫ／　１００）
魔法・罠／リバース×２

「相手の動きを制限するのが【氷結界】の特性だよ。さあ、どう来る？」

『御庭番様…』

『すまぬ。姫への忠義を捨てるわけにはいかぬからな』

こっちはこっちである意味悲痛な会話をしてるよ。御庭番って昔でいう将軍直属の監察官みたいな役職だっけ？恋愛をする暇がないわけd……

「（リンドウ来てたの！？）」

『姫？久しぶりだな。デュエルが始まる直前にカードに宿らせてもらった』

《氷結界の御庭番》ことリンドウは、私に振り返って微笑した。

氷結界の一族は、こうしてたまに人間界に遊びに来る事がある。リンドウは見た目も声も男女の中立な上に本人も性別を教えてくれないから、どっちでも通用しそうな名前って事で『リンドウ』の名前をあげた。

『今はデュエル中だ。ライフポイントを守る術はあるのか？』

「（あなたを守る術、でしょ？ちゃんと対策してるから大丈夫だよ）」

相変わらず、自分の心配は一切しないんだから…。

「私のターン！よし！《白魔導士ピケル》を召喚！」

羊の帽子を被った幼い…ってもういいや。私ロリコンじゃないし。

《白魔導士ピケル》
効果モンスター
星２／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ　０
自分のスタンバイフェイズ時、自分のフィールド上に存在するモンスターの数×４００ライフポイント回復する。

《白魔導士ピケル》　ＡＴＫ／１２００

あのデッキはライフの消耗が激しいから、それを補うために入れてるんだろうな。そして三沢君のアイドルカードでもある。今ここに三沢君がいたら歓喜してるだろうね…。

「バトル！ピケルで《氷結界の御庭番》を攻撃！」

「させないよ！リバース発動《和睦の使者》！このターン、私のモンスターは戦闘では破壊されず、戦闘ダメージも０になる！」

「くっ…ターンエンド…」

レイ
ＬＰ／１８００
手札／４
モンスター／《恋する乙女》（ＡＴＫ／　４００）《白魔導士ピケル》（ＡＴＫ／１２００）
魔法・罠／リバース×２

「私のターン、ドロー！…あ」

「どうしたの？」

うわぁ…私も案外チートだな…。

「行くよ！魔法カード《ミラクル・フュージョン》！フィールドと墓地からモンスターを除外して、Ｅ・ＨＥＲＯを融合召喚する！」

「Ｅ・ＨＥＲＯ！？十代と同じ…！」

「墓地の《Ｅ・ＨＥＲＯ　アイスエッジ》とフィールドの水属性モンスター《氷結界の風水師》を除外！」

「アイスエッジ？いつの間に…」

「風水師の効果で墓地に送ったカードだな」

「融合召喚！《Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ》！」

《Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ》　ＡＴＫ／２５００

氷のＨＥＲＯ…シンクロモンスターの代わりに入れたけど、今じゃ《ガトリング・ドラゴン》に並ぶ私の切り札の１枚だ。

「アブソルートＺｅｒｏは、フィールド上の水属性モンスターの数だけ攻撃力が５００ポイントアップする！」

《Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ》　ＡＴＫ／２５００→３０００

「攻撃力３０００！？」

「亮さんに比べたらまだまだだよ」

最初のターンから攻撃力８０００のサイバーエンドが出てくるのも珍しくないしね。

「これで決める！アブソルートＺｅｒｏで《恋する乙女》を攻撃！Ｆｒｅｅｚｉｎｇ　ａｔ　ｍｏｍｅｎｔ！！」

ＨＥＲＯの氷の一撃が《恋する乙女》に炸裂した。１日に２回もＥ・ＨＥＲＯにやられるなんて、不憫だな…。

「うわあぁぁぁ！？」

レイ　ＬＰ／１８００→　０

月沙　ＷＩＮ

「ガッチャ！いいデュエルだったよ！」

「ああ！それ俺の台詞！」

１度やってみたかったんだよね～。ヒーローで決めたんだし、別にいいでしょ？

「凄い…何もできなかった…」

「少し弱点が多いのがまずいかな？《恋する乙女》に頼りすぎだと思うよ？」

「効果を無効にされちゃ、たいていのデッキは動きが止まるだろ」

「あ、確かに…。レイちゃん、ちょっとデッキを見せてくれないかな？」

「いいけど…」

レイちゃんからデッキを借りて、紅刃と一緒に覗き込む。

「…除去系のカードがほとんどないね。もう少し多くてもいいんじゃないかな？」

「攻撃を受けて効果を発動するみたいだから、攻撃を強制するカードも入れとくと役に立つぞ？」

「あ、なるほど…。」

「後、上級モンスターがないのが痛いな。奪ったモンスターを効率よく使うなら何枚か入れとくべきだな」

「ピケルを入れたのはいい判断だね。ライフを消費しやすいから、他にも回復手段が必要かも」

てきぱきとアドバイスをする私と紅刃に、どこからか取り出したメモ帳に改善点を書いてるレイちゃん。なんていうか、先輩と後輩ってこんな感じなんだな。

「ま、こんな感じかな」

「ありがとう！紅刃先輩、月沙先輩！……」

「ん？どうした？」

レイちゃんが私と紅刃をじっと見つめている。

「いや、紅刃先輩と月沙先輩ってお似合いだな～って思って」

「は？」

「え？」

「付き合ってたりする？」

「つ…！」

「！！！？？」

「（いきなり爆弾仕掛けたよ…）」

「ま、まままさかそんな、あははは…」

「い、いや、俺達はただの親友だぞ？なあ？」

「そそそ、そそ、そそそそうだよね！親友だよね！」

「物凄くテンパってるけど大丈夫か？」

「なな、何の事！？私はいつもどおぉぉりだけど！？」

「どう見てもいつも通りじゃないわよ…」

だだだだ大丈夫だよ明日香さん！私は紅刃の事はそんな風には見てないよ！

「レイ、月沙に一晩泊めてもらえ」

「え？」

はいぃぃいいいい！？？

「今更レッド寮に泊まるよりも、女子寮の方が都合がいいでしょ？（目的のためにもこれくらいのサポートはしないとね）」

「私はちょっと忙しいし、お願いね？」

「（ありがとう、俊也先輩！）はい！月沙先輩、お願いします！」

亮さんも俊也も明日香さんも何言ってるの！？レイちゃんもなんで賛成！？やめて！テンパりすぎて死んじゃう！！

「月沙、顔真っ赤にしてどうしたんだ？」

「さあな」

「鈍感な人が２人いたよ…」

「じゃ、行きましょ？月沙先輩！」

「え！？あ、う、うん、ＯＫ！私はいつでもスタンバイＯＫだよ！」

「お前は少し落ち着け…」

ふぅ、や、やっと落ち着いた…。

今は私の部屋で、レイちゃんとたわいもない話をしている。スイレンなら、リンドウと情報交換してるよ。

『なんと…そのドローパンとやらはそんなに種類があるのか』

『ええ！中でも、黄金の卵パンは当たり中の当たりで…』

「ところで月沙先輩？聞きたい事があるんだけど…」

不意に、レイちゃんが真剣な顔つきになって話し掛けてきた。

「何？急に改まって…」

「紅刃先輩の事、好きなの？」

「！！！！！？？？」

な、ちょ、えええぇえええええぇ！！？

「な、え！？す、すす好きって！？」

「だから、恋愛対象として好きかって事！ｌｉｋｅじゃなくてｌｏｖｅ！わかる？」

「わ、わわわわわわわわ、わかるけど！？ええと、ｐｒｅｖｉｏｕｓとｉｍｐａｔｉｅｎｃｅ！？ｓｕｂｓｔａｎｃｅかｅｍｐｈａｓｉｚｅ！？」

「どれも１８０°違うよ。ていうかなんでそうやたらと難しい単語が出てくるわけ？（ああ…俊也先輩の言う通り重症だよ…）」

あ、え、な、そ、え、ええと、そうだ！スイレン！スイレンとリンドウは…

『姫様、お２人でごゆっくり～』

『スイレン、いいのか？』

『いいんですよ！さ、俊也様の所にでも行きましょう！』

「（ちょおおぉぉお！！スイレン、リンドウ、置いてかないでえぇぇぇぇえ！！）」

ああ、行っちゃったよおおおぉぉお！！私を生殺しにする気！？

「月沙先輩！」

「ひゃうっ！？な、なな、なななな何！？」

「やっぱり月沙先輩は紅刃先輩の事が好きなんだよ！」

「えええぇぇえ！？く、紅刃の事が！？あははは、ま、まさ、まさか！」

「紅刃先輩の事でそんなに動揺してるのが何よりの証拠！」

「う！」

「じゃあ聞くけど、紅刃先輩が明日香先輩と仲良く話してたらどう思う！？」

「地味に具体的！？そ、そりゃあ嫌だけど…」

ていうか顔近い！さっきからどんどん近づいてる！私押されてるって！

「じゃあ、紅刃先輩が他の女の人と付き合ってたらどう思…！」

「嫌だよ！！！」

「！」

あれ？

「嫌だよ、そんな…。紅刃がどこか遠くに行って2度と戻って来なくなりそうで…そんなの、やだよ…」

声が段々しりすぼみになる。自分でもびっくりだ。私のどこにそんな感情があったんだろ？

「…それだよ」

「え？」

「今、凄く泣きそうな顔してたよ？」

「！」

「よっぽど好きなんだね、紅刃先輩の事」

さっきまであんなにパニックになってたのに、今はやけに頭が冷えている。

「……うん、多分…」

「多分じゃないよ。免疫がないから、今まで自分の本当の気持ちに気付かなかっただけ」

確かに、恋愛の事になると頭がおかしくなって、まともな判断ができないでいた。いつも側にいるのが当たり前になっていてっていうのもあるかも…。

「…私…紅刃の事、好きなんだ…」

やっと気付いた。なんだろう、よくわからないけど、嬉しい。

「やっと自覚したね。これで任務完了だよ」

「うん。レイちゃん、ありが…え?任務?」

「え?…ハッ!?」

慌てて口を両手で塞ぐレイちゃん。でも、もう遅い…!

「レイちゃん?任務って、どういう事かなぁ?」

「あ、いや、その…月沙先輩、なんか黒いオーラが…」

「話をずらしちゃ駄目だよ?」

「う…(俊也先輩、ごめん…)…し、俊也先輩に頼まれてさ…」

「俊也に？」

「『いい加減自覚してほしいから、なんとかしてくれないか』って…。デュエル中に亮様や明日香さんと話してたから、２人にも協力してもらったみたい…。確か、昨日『すぐにオーバーヒートするから対処がめんどくさい』って言ってたような…」

「へぇ～。情報提供ありがとう。さぁて、明日は不吉を届けに行かなくちゃ…フフ、フフフ…」

「つ、月沙先輩…（俊也先輩、本当にごめん…）」

ＳＩＤＥ／俊也

「バイバーイ！来年小学校卒業したら、またテスト受けて入学するからね～！」

「へへっ…だってよ！」

「その時は俺はもういないけどな」

翌日、レイちゃんは船に乗って故郷に帰っていった。僕らは昨日のメンツで見送りしている。

「いやぁ～、あの迫力には負けるぜ」

「物凄い執念だったしな」

「待っててね～！十代様～！」

え？『十代様』？

「な…何で俺なんだよ！？」

「きっとあなたのデュエルに惚れたんでしょ？ウフフ」

「後は任せた」

「じゃあアニキ、先に帰るね」

「ゆっくり見送ってあげるんだな」

「船が見えなくなるまで見送ってあげなきゃね～」

「僕達も行こうか」

「そういうわけだ、先に行ってるぜ」

「どうぞごゆっくり～」

「えええぇえ！？」

僕達もみんなに便乗して先に踵を返した。

「待っててね～！きっとよ～！十代様～！！」

「それじゃ、一旦寮に戻ろうぜ」

紅刃の提案で、分かれ道でそれぞれ寮に戻る事にした。さて、僕も…

ピリリリ、ピリリリ

「ん？誰かＰＤＡか携帯鳴ってるぞ？」

「あ、僕の携帯からだ。メール…レイちゃんから？

「レイから？」

「なんて来たんスか？」

みんな知りたがってるみたいだし、読み上げよう。ついさっき別れた人からメールっていうのも珍しいな。

「ええと、何々…『黒猫…もとい白猫に要注意　ＰＳ．ごめんなさい』…は？」

白猫？それになんで謝ってるの？

「なんだその意味不明な文章は？」

「さあ…。まあ、白猫に気をつければ…」

ズキュウウン！

「…え？」

「そういう事。さ、覚悟はできた？」

そう言う月沙は、ニッコリ笑顔で僕にデュエルディスクの銃口を向けていた。さっきのは僕の足元に発砲した音だ。

「あの…月沙さん？これって…」

「レイちゃんから聞いたよ？私がオーバーヒートすると対処するのがめんどくさいって？」

「え！？いや、それは…（あ、なるほど…だから『ごめんなさい』か…）」

なんか、凄く嫌な予感が…。

「さてと…不吉を届けに来たよ」

「あ、『黒猫…もとい白猫』ってそういう事か。確かに髪が白いな」

「あはは…不吉は勘弁かな…」

そう言いつつ、ジリジリと後ろに下がる。やばい、危険信号が赤になってる！

「じゃあ…『少し、頭冷やそうか』はどう？」

「余計たちが悪いよ！とにかく失礼しましたぁ！」

「待てコラァアアア！！」

逃げながら、月沙の攻撃を間一髪でかわしていく。って、なんでアビリティ全開！？

「うわわっ、ちょ、レーザー砲はシャレになんないって！」

「そっちだってちゃっかりアビリティでスピードアップしてるじゃない！」

「な、何だあれは…！？」

「見た事ないんだな…」

「あ、亮さんと隼人には説明してなかったっけ？…しゃあねえ、俺から説明しますよ」

『姫も大変だな』

『でも、昨日までよりずっといい表情を浮かべていらっしゃるじゃないですか』

「（ちょ、危なっ！ウィン、ヘルプ！）」

『いや、これはさすがにちょっと…ごめん、助けられないや』

「（おおぉぉおおおい！！？）」

だああぁあぁあああ！！なんでこんな目にぃいいいぃいいいい！？

…To be continued

第１５話　本音を語る時はよく考えよう（後書き）

いかがでしたか？

この話や第４話で俊也達が言ってた人物はもうすぐ登場させる予定です。あれ？オリキャラが急速に増えてるような…？

それにしても、俊也と月沙の本当の切り札がまだ出てないというのは…。俊也のは単純に出す機会がないだけですけど。早くシンクロ出したいな…。

紅刃は今回空気になりかけてましたけど、次回は活躍させます。

では、また次回！

第１６話　結果だけが全てじゃない（前書き）

今回は少し飛ばして万丈目サンダーの話に入ります。

それではどうぞ！

第１６話　結果だけが全てじゃない

ＳＩＤＥ／紅刃

「お～、よくいらしたな、市ノ瀬校長」

「しばしうちの悪童らがお世話をかけますがよろしくお願いしますよ」

「いや、私の方こそ」

今日はノース校との友好デュエル当日だ。今は港でノース校の人達を出迎えてるところだ。

こっちの代表は十代に決まった。最初に推薦されたのは、十代の他にも三沢、俺、月沙がいた。でも、月沙が「あまり原作に関わりすぎるのもまずい」と言い出したから、俺と月沙は適当な理由をつけて辞退。十代と三沢が代表の座を賭けてデュエルして、それに勝った十代が代表になった。

ちなみに、ノース校の代表は1年生らしく、先輩の亮さんは代表決めに参加しない事になった。相手は誰だろうな？

「ところで…トメさんはお元気ですかな？」

「勿論！トメさんはこの対抗試合には欠かせない人ですから」

「は？なんでトメさん？」

「ちょっとした理由があってね…」

月沙が顔を引き攣らせて笑う。購買のおばちゃんがどうかしたのか？

「校長先生！挨拶はその辺にしてさ、早く俺の相手紹介してよ！」

「これ十代君、行儀が悪いぞ！」

「でも、俺早く対戦相手に会いたくってさ！」

「そうか…君が噂の十代君か」

「よろしく～！おっつぁんがノース校の校長先生？」

あ、ノース校の校長先生…長いから市ノ瀬校長でいいか…がズッコけた。

「これ、十代君！」

「で、誰なのさ？俺と戦う相手は！」

「それはだな…「俺だ！」」

ん？

「誰だ！？」

「俺だ！」

この声、どこかで…って！

「ああっ！？お前は…」

「万丈目！？万丈目だ！」

「万丈目さんだ！」

紫のシャツに黒いコート、そして特徴的な鳥頭。

かつてこの学園を去った万丈目準がそこにいた。

「万丈目？…って、誰？」

「修業のために1度この学園から出て行った、ここの生徒だよ」

「フッ、久しぶりだな。それと、お前は誰だ？」

あ、そうか。俊也と万丈目は初対面だっけ。

「僕は風嶺俊也。オシリス・レッドの編入生で、紅刃と月沙の昔の知り合いだよ。よろしく、万丈目君」

「で、俺の相手は誰だって？」

「目の前にいる」

「え？どこだ？」

「俺だ！」

「どれだ？」

「だから俺だ！」

十代、それは素でやってるのか？

「俺って…それじゃもしかして　俺のデュエルの相手って…万丈目かぁ！？」

「いや、話の流れと服装で察しろよ！万丈目が着てるのはノースの制服だろ！」

「紅刃の言う通りだ！そして俺は万丈目じゃなくて万丈目さんだ！」

「「サンダー！」」

…はい？『サンダー』？

「てめえら、さっきから聞いてりゃサンダーさんの事を呼び捨てにしくさって！」

「いや、サンダーさんってなんだよ？雷のイメージどこにもないだろ？あれか？ケン○ッキーか？カー○ル・サンダースさんの略称か？」

「ああ？いっちょシメてやろうか！？」

「放っておけ。それと貴様ら何忍び笑いしている？」

月沙達にはウケたみたいだな。

バババババババ！

ん？何の音だ？上から…ヘリコプター？しかも2機？

「あぁっ！あれは…！」

「なんだありゃ？」

「あのマークは…！万丈目グループだ！」

「あ、三沢いたのか」

「最初からいた！」

「ところで、万丈目グループって何？」

「知らないのか？有名な大企業だぞ？」

「「いや、全然」」

そうこうしている内に、着地したヘリコプターから2人降りてきた。

「久しぶりだな、準！元気でやっているのか？」

「正司兄さん！長作兄さん！」

「え？お前兄弟いるの？」

「ああ。上に２人な。兄さん達、何しに来たんだ！？」

「勿論お前の勝利を祝福する為にさ！」

「あまり心配をかけるなよ、準！」

お～い、もう勝利を確信してんのか？こっちには毎ターンデスティニードローのスキルを持つＨＥＲＯ使いがいるんだぞ？

ドドドドド！

今度は何だ騒々しい。って、ん？カメラ？

「は～い！いいお顔！この画もらいます！」

「２カメ！次、万丈目君のアップ拾うよ～、ＯＫ？」

「な、なんじゃこりゃ？」

「これは何の騒ぎですかな？」

市ノ瀬校長も知らないのかよ！？

「ありゃ？聞いてないんスか？今年は全国でテレビ中継するんスよ！」

「「「「「えええぇぇえええ！？」」」」」

「何だと!?」

はあ!?テレビ中継!?しかも全国!?

「テレビ中継!?それじゃ、この俺の顔が日本国中映っちゃうわけぇええ!?」

「まさか全国生放送とはな…」

「確かに、全国的に介入するのはいろいろとまずいよね…」

今俺は、月沙、俊也と一緒に廊下を歩いている。観客席に向かう途中だ。

「!」

「どうした?」

「この部屋から万丈目君の声が…」

「は?」

月沙が部屋のドアを覗き込み、俺と俊也もそれに倣う。

「どういうつもりなんだ、兄さん達!?」

「決まっているじゃないか。このテレビ中継は、俺達兄弟の約束を実現に移す1プランなんだよ」

そうか、ここは控室か。

「プラン？」

「そうだ」

「（これ、原作であった流れだ）」

「（じゃあ聞くけど、万丈目君の兄さん達の最大の目的は？）」

「（世界に万丈目帝国を創り上げる事だっけ？）」

「（くだらなっ！？）」

ばれないように小声で話してるからな？テレパシー使ってないからな？

「そこで今日はお前をプロモートし、カードゲーム界のスターにするのが我らの狙い！」

「（そんな簡単になれるかよ！）」

「準、クロノス教諭とかに聞いたが…お前、３ヶ月前にここを退学したそうじゃないか」

「それは「いいか、準！」！？」

「お前は元々俺達兄弟の落ちこぼれ！」

…『落ちこぼれ』？

「我が万丈目グループ主催でテレビ中継するからには、絶対に負ける事は許さん！！」

万丈目の兄さんは、そう言ってでかいケースを取り出した。

「ここには、俺と兄貴が金にものを言わせたカードが山と入っている！これを使い、最強のデッキを組み立てるのだ！！いいな、準！決して万丈目グループの顔に泥を塗るような事はするなよ、準！」

「「準！！」」

「はい、ストップストップ、そしてざけんな馬鹿兄貴共」

「「「！」」」

あ～、もう限界だ。月沙と俊也には悪いけどここは介入させてもらうぜ。

「紅刃!?波星君に俊也も!?」

「武者修行のために自主退学して、別の学校の頭取るくらいに成長した奴が落ちこぼれだ?冗談はその腐った思考回路だけにしとけ」

「何!?貴様、何様のつもりだ!」

「学生様のつもりですけど何か?」

「ぐ…貴様…!」

「万丈目君、ちょっと来て」

「え?な、ちょっと待ちたまえ!」

月沙が万丈目を引っ張ってく。後は任せたぜ。

「待て!準とはまだ話ｇ「僕らはあなた達に話があるんですけどね?」くっ…!?」

俊也もやる気満々だな。それじゃ、足止めついでに思う存分からかってやるとしますか。

ＳＩＤＥ／十代

「もう～！テレビ中継するならもっと早く言ってくれよ～！」

全く、テレビに出るなら身嗜みはきっちりしないと！確かトイレに鏡があったはず…！

「早くしないと…ん？」

「さてと、ここならゆっくりできるでしょ？」

トイレ前には月沙と万丈目がいた。思わず隠れちまったよ。

「何の真似だ？」

「紅刃は昔からああいうのが嫌いでね…いつも割って入って好き勝手に振る舞うの」

「あいつ…」

なんだ？何か揉め事でもあったのか？

「勝たなきゃいけないって思ってる？」

「当たり前だ！俺は兄弟の落ちこぼれなんかであるはずがない！勝って勝って、勝ち続けるんだ！勝つんだ！明日も明後日も、その次も、その次の次も！勝って勝って勝ち抜くんだ！誰も俺の背負っているものの重さなんかわかりゃしない！『勝て』と言うだけだ！いつも『勝て』と…！」

『勝て』って…万丈目の兄貴達に言われてるのか？

「…確かに、私にはあなたの背負ってるものの重さはわからないかもしれない」

「だろうな。兄さん達はいつも俺に『勝て』と言うだけだ！失敗したら落ちこぼれと蔑む！なんで俺はあんな家族の元に生まれたんだ！俺にはあんな家族は必要な…！」

ズガンッ！！

「…な…」

「な…波星…君…？」

『あんな家族は必要ない』万丈目がそう言い切る前に、月沙は壁を思いっ切り殴り付けた。

「あなたの背負ってるものの重さがどれだけの重さかはわからない。でも、『家族がいない事の重さ』なら、痛いほどよくわかる…！」

右腕を降ろして万丈目に向き直った月沙の顔は、とても悲しげだった。

「家族って、仲良くするものでしょ？仲間とはまた違った特別な存在でしょ？なのに、『必要ない』なんて思わないでよ…」

月沙…昔に何があったんだ？あんなに悲しそうな月沙は初めてだ。

「…わ、わかった…。済まなかった、波星君」

「いいよ。落ちこぼれだなんて言われたら、誰だってムカつくし。私こそ、急に驚かせてごめん」

…2人共、俺の知らない所で闘ってるんだ。俺も負けられない…！

ＳＩＤＥ／紅刃

「ではここに！デュエルアカデミア本校！」

「ノース校！」

「対抗デュエル大会の開催を宣言する！」

鮫島校長と市ノ瀬校長の宣言で、遂に対抗デュエル大会が開催された。

俺と俊也は月沙と合流して、一緒に観戦している。

「クロノス教諭！デュエリストの紹介を！」

「信じられないノーネ！私の姿ーガ、今全国に流れているなンーテ！そ…それではこれよーリ、デュエルアカデミア本校！ノース校！対抗試合を始めるノーネ！まず紹介するはドロップアウトボー…じゃなかった、遊城十代！！」

よし、クロノス先生、後で覚悟しとけよ。

「頑張れアニキ！負けるな～！」

「対するはノース校、「いらん！俺の名は俺が告げる！黙って引っ込めと言ったんだ、おかっぱ野郎！」」

ブッ！おかっぱって…。

「お、おかっぱじゃないワーヨ～！！これは有名なカリスマ美容院デ～！いつの間にあら…がんじがらメ～ナ…なぁ、なぁ、なぁ…ドロップアウトォォ…」

「あぁっ！？」

クロノス先生、自分でマイクのコードに絡まってステージから落ちるってどうなんだよ…。

「大丈夫か？クロノス先生…」

「お前達！この俺を覚えているか！この学園で俺が消えて清々したと思っている奴！俺の退学を逃げ出しただけだとほざいた奴！知らぬなら言って聞かせるぜ！その耳かっぽじってよく聞くがいい！！

地獄の底から不死鳥の如く復活してきた俺の名は！！一！十！」

『百！千！』

「万丈目サンダー！！」

『サンダー！！万丈目サンダー！！』

「わぁ～、凄い人気だ…」

「もはや宗教だな…。サンダー教でも立ち上げたらどうだ？」

「俺は！」

『サンダー！！』

「万丈目！」

『サンダー！！』

ああ、なるほど。万丈目さんだ↓万丈目さんだー↓万丈目サンダー、か。

「行くぞ十代！このデュエル、負ける訳にはいかないからな！」

「来い！万丈目！」

「万丈目さんだ！」

「「デュエル！」」

いや～、こいつらのデュエル凄えな。

万丈目はレベルアップモンスターのアームド・ドラゴンで十代を追い詰めるわ、十代は《融合》を駆使していろんな融合モンスターを出すわ、見ているこっちが熱くなる。あ、ＬＶ７に進化した。何だあれかっこいいな。

「これが…アームド・ドラゴン究極の姿！」

「あんなモンスター、俺がやったカードにはなかったはずだぞ！？」

「何っ！？」

「う～っ！頑張れ十代君！負けるんじゃないぞぉおおお！！」

Ｗ校長が１番ヒートアップしてるような気がするのは気のせいか？

「フフフ…！見たか！伝説のレベルアップモンスター《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》だ！！」

銀の鎧を纏った武装龍が咆哮する。

《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》
効果モンスター
星７／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ１０００

このカードは通常召喚できない。
「アームド・ドラゴン　ＬＶ５」の効果でのみ特殊召喚できる。
手札のモンスターカード１枚を墓地に送る事で、そのモンスターの攻撃力以下の相手フィールド上表側表示モンスターを全て破壊する。

「うわ～かっちょいいな～！俺も欲しいな～！」

「馬～鹿が！お前の身が危ないんだぞ！感心してる場合か！」

「だけどさ～、こんなにワクワクする事ってあるかよ～！俺、今ピンチになるくらい強いモンスターと戦ってるって事だぜ～！すっげぇ！デュエルしててよかった～！」

「ええい、どこまでも鼻につく！俺は貴様のように何も考えず、毎日をただチャラチャラと生きていくわけにはいかないんだ！見ろ！この張り詰めた視線を！万丈目家の夢と野望を全部俺の肩に乗せた、この重い視線を！俺は、兄さん達の期待に応える為、そして俺の価値を証明する為、どんな事があってもこごほぉうっ！！？」

『……』

「～～～～～～～～～～～～！！！」

いや～、我ながら見事なクリティカルヒットだな。ん？何やったかって？俺のデュエルディスクを万丈目の頭目掛けてぶん投げただけだけど？

あ、ディスク回収しないと。面倒だから飛び降りよう。

「～～～～、な、何をする貴様ぁあああ！！」

「何って喝入れだけど？」

「デュエルディスクを投げ付ける喝があるかぁあぁあああ！！殺す気か貴様は！？」

「んな怒る事ないだろ？たかがクリティカルヒットしたくらいで」

「狙ったな！？狙ってやったな！？親父にも投げられた事ないのに！？」

「当然だろ。てか自分の子供にデュエルディスクぶん投げる親の顔が見てみたいわ」

「あの…万丈目？紅刃？」

あ、なんか十代がものすっげえ言いづらそうにしてるよ。

「十代？…ハッ！そ、そうだ、今はデュエル中だ！紅刃、１対１の真剣なデュエルに水をｓ「少しは気が楽になったか？」…何？」

「兄貴の期待とか家族の夢とかも大事だとは思うけどさ、その事ばかり考えてたらいつか潰れるぞ？修行して来たんだろ？自分自身の目標のためにさ」

「自分自身の…目標…」

どうも、馬鹿兄貴共のプレッシャーで楽しくデュエルできてないみたいだから、ちょっとな。こんないい勝負、楽しまないと損だろ？

「気負いすぎなんだよお前は。じゃあな、俺は観客席に戻ってるぜ」

俺はそう言って、正規のルートで戻っていった。

「貴様ぁ！サンダーさんになんて事を！」

「…うるさい！これしきの事でごちゃごちゃ騒ぐな！さあ、続けるぞ、十代！」

「万丈目…ああ！そう簡単にはやられないぞ、万丈目！」

「万丈目さんだぁあああ！！」

「紅刃…何やってんの…」

観客席に戻った俺を最初に迎えたのは月沙の呆れ顔だった。

「いいだろ、こんぐらい？」

「デュエルディスクを投げ付ける人って初めて見たわ…」

「明日香、俺のは飛び道具じゃないから遠距離攻撃はこうでもしないと届かないんだよ」

「デュエルディスクは攻撃するための物じゃないわよ…」

「紅刃、俊也、ちょっと…」

「ん？」

話の途中で、月沙が俺と俊也を離れた所まで連れて行った。

「この後の展開なんだけどさ、万丈目が負けそうになる時にテレビ局の人が中継を中止にするの」

「いきなりネタばらしかよ…結局十代が勝つのな」

「…月沙、ここでその話を持ち出したって事は…」

「もちろん止めに行くよ」

「やっぱり…。よし、行こう！」

「全く、放送するなら最後まで見せろってのの…」

つーわけで俺達はテレビカメラの所に向かった。

「罠カード《ミラクル・キッズ》！墓地の《ヒーロー・キッズ》１体につき、相手モンスターの攻撃力を４００ポイント下げる！よって《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》の攻撃力は１２００ポイントダウン！」

《ミラクル・キッズ》
通常罠
エンドフェイズ時まで相手モンスター1体の攻撃力は、自分の墓地に存在する「ヒーロー・キッズ」の枚数×４００ポイントダウンする。

《ヒーロー・キッズ》
効果モンスター
星２／地属性／戦士族／ＡＴＫ　３００／ＤＥＦ　６００
このカードが特殊召喚に成功した時、デッキから「ヒーロー・キッズ」を任意の枚数特殊召喚する事ができる。

《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》　ＡＴＫ／２８００→１６００

「何だと!?」

お、そろそろフィニッシュか。

「フレイム・ウィングマンで《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》に攻撃！」

「まずいまずい！カットだカット～！」

「その前にお前をカットォオオオォォ！！」

「ぐがばっ!?」

何の躊躇いもなくぶった斬りました。やり過ぎ?むしろ上等！

「俊也、なんとかできそう?」

「うん、バイトで使った事あるから大丈夫」

「テレビカメラを使うバイトってあるのかよ?ま、こんないいデュエル、最後まで見届けないと損だからな」

「ぐわぁあああああ!!」

あ、決着がついた。十代の勝ちか。

ん?万丈目の所に馬鹿兄貴共が…?

「準!貴様何をやっているんだ!自分のやった事がわかっているのか!?」

「万丈目一族に泥を塗りおって!」

「すまない…兄さん達…」

「貴様、俺達の与えたカードはどうした!?」

「何故使わない!?」

「そうすればもっと強いデッキが出来たはずだ!」

「俺は…自分のデッキで勝ちたかったんだ…」

「この馬鹿弟が!」

「たがら貴様は落ちこぼれだというのだ!」

「確かに、兄さん達のカードなら、強いデッキは作れたかもしれない」

ん？

「あれ？この言葉は原作にないはず…」

「だが！これは俺が自分自身の力ではい上がって手に入れたカードで作ったデッキだ！俺はこのデッキを信じている！嫌でも離れない雑魚もそこに入れてもいい！俺は自分の力で勝ち得たこのデッキで、カードで戦える事を誇りに思っている！そう思える、様々な過程を得て自分の力で作り上げたデッキこそが、本当に強いデッキなんだ！」

「万丈目…」

俺達が入学した時じゃ、こいつが話すなんて考えられない言葉だ。学園を離れてる間に、変わったんだな…。

『アニキ～、かっこいい事言ってるけど雑魚はないんじゃな～い？』

「（何か言ってるが今は無視だ無視！）」

ん？あれって万丈目の精霊か？

「黙れ！途中経過などよりも結果が大事だ！」

「万丈目一族の恥が！」

「やめろあんた達！いい加減にしろよ！万丈目は一生懸命戦ったんだ！」

十代も我慢しきれなくなったのか話に割って入った。

「他人が我ら兄弟の事に口出しするのか」

「兄弟なら尚更そんな態度はないだろう！俺も万丈目…サンダーも、出来る事の全てを出し切ってデュエルしたんだ！」

「我々は途中経過などに興味はない。結果を問題にしているのだ！」

「そ～ネそ～ネ、結果は大事なノーネ。でもなんか癪に障るノーネ」

「我々兄弟にとって重要な事は結果だ！結果こそ全て！勝利こそ全てなのだ！大体、このデュエルの為に、どれだけの金を注ぎ込んだと思っているのだ！」

「こいつは俺達の顔に泥を塗ったのだ！」

「だけど…あんた達には勝った…。サンダーはデュエルだけじゃなく、あんた達が与えたくだらないプレッシャーと必死に闘ったんだ！苦しみながらも、サンダーはあんた達を乗り越えたんだ！！」

「そうなノーネ！その通～リ！かきごオ～リ！…あら？御呼びでないノーネ…」

「デュエルの意味は勝ち負けだけじゃない。もっと大事な事を教わる事なんだ！」

「2人共よく言ったよ」

「紅刃！」

「波星君、俊也…」

俺達もフィールドに上がった。少し言いたい事があるんでな。

「確かに、社会に出たら結果は大事だろう。あんた達の言う事は間違いじゃない。だが、裏の努力を無下にする権利は誰にもない！万丈目は俺達の見えないところで闘っていた！他人の力で楽に手に入れるよりも、自分の力で苦労して手に入れたものの方がずっとでかい！あんた達にも、そんな頃があったはずだ！」

「何を偉そうに！勝利以上に価値のあるものなど存在しない！」

「そうかな？」

月沙も乱入か。

「周りを見てごらん」

「周り？」

「よくやったぞ、サンダー！」

「さすがはサンダーだ！万丈目サンダー！」

「引っ込め馬鹿兄貴共～！」

「万丈目サンダー、バンザ～イ！」

物凄い勢いのサンダーコール。こいつカリスマか？

「万丈目君の事を慕っている人があんなにたくさんいる。みんな、万丈目君の努力と実力を認めてるんだよ。今のあなた達じゃ、絶対に手にする事のできないものだよ」

「そういう事です。結果だけじゃ、人との繋がりは生まれない。結果や勝利じゃ得られないものだってたくさんあるんですよ」

俊也が話した後、不意に月沙が前に出た。まだ話す事があるのか？

「あなた達は…万丈目君の事を、どう思ってるの？」

「何？」

「万丈目君をこんな風に扱って、こんなにプレッシャーをかけて、追い詰めてるのに何とも思わないの？同じ家族なんでしょ？なんで仲良くできないの？なんで万丈目君の事を理解しようとしないの？」

月沙…こいつは、いじめと家族の事に関しては過剰に反応する。

いじめは知ってるからいいとして、家族については何があったんだ？

「…っ、もういい！見損なったぞ、準！行くぞ正司！」

馬鹿兄貴共はヘリコプターに乗って帰っていった。

「（兄さん…）」

ヘリを見つめる万丈目の肩を月沙が軽く叩く。

「？」

「きっと、わかり合える日が来るよ」

「波星君…」

月沙の過去については俺もよく知らない。月沙がいつか話してくれるのを待つか…。

「ではではデ～ハ、出港の時間もありますノ～デ、これより表彰式を行いたいと思いますノーネ！」

クロノス先生が指揮を取る。万丈目は、「やり残した事がある」と言ってここに残る事になった。

「そしてご褒美を渡すのは…ミス・デュエルアカデミ～ア！」

「ミス・デュエルアカデミアって？」

「そんな人がいたんスか？」

「ド～ゾ！」

で、出て来たのは…

「は？トメさん？」

「メイクアップモンスターだ！」

「ブッ！」

十代、変な事言うな！吹き出しちまったじゃねえか！

「では勝者の校長はこちら～に」

しかも鮫島校長にキスゥウウウ！？1年間楽しみにするほどの褒美ってそれ！？W校長が1番盛り上がってた理由ってそれ！？

「俺達、こんなものの為に戦ってたのかよぉおお！」

「万丈目君！強くなれよ！来年こそはもっと強くなれよ！」

市ノ瀬校長もどんだけキスしてもらいたいんだよ！？泣くほどの事か！？あ、行っちまった。

「校長…」

「これでよかったのかね？」

「もちろん」

「だが…」

「ここに残っても、万丈目サンダーは3ヶ月ものの欠席でオベリスク・ブルーでは進級出来ないのニャ～」

「えぇっ！？」

「もしも進級したければ、出席日数の関係ないオシリス・レッドに入るしかないのニャ」

「何！？この俺がオシリス・レッドだと？こいつらと同じ！」

なんとまあ…。てか先生方にもサンダー定着してるよ。

「文字通り　同僚になるんだね」

「うるさい！」

「よろしく頼むぜ、同僚！」

「これからよろしく！」

「断る！何で俺がこいつらとおぉおおお！？」

「そんじゃあ、万丈目の入寮を祝して…」

「勝手に決めるな！」

「留年するよりマシだろ？」

『一！十！百！』

「千！」

『万丈目サンダー！』

みんなノリノリだなオイ。

『万丈目サンダー！！』

「信じられん…この俺がこいつらの仲間とは！」

「そう言いつつちゃっかりポーズ決めてんじゃねえか」

「うるさい！…ちょっと耳を貸せ」

「？」

万丈目が内緒話ってのも珍しいな。

「（今日の夜１０時に灯台に来い。用件は、お前ならわかるはずだ）」

「は？」

万丈目はそれだけ話すと、十代達の所に戻っていった。夜１０時に灯台…？あ、そういう事か。

晩飯食ったらデッキ調整しとくか。今の万丈目なら、面白いデュエルができそうだ。精霊の事もその時に聞けばいいだろ。

夜の１０時か…楽しみだ。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第１６話　結果だけが全てじゃない（後書き）

はい、というわけで、万丈目サンダー戦前編でした。紅刃ｖｓ万丈目は次回に持ち越しになります。

紅刃は最近空気になりがちだったので少しはっちゃけました。そういえば、デュエルもしてないような…。

では、また次回！

第17話　1度離脱したメインキャラはたいてい強くなって帰還する（前書き）

万丈目サンダー戦後編です。ようやく紅刃と万丈目がデュエルします。

それではどうぞ！

第17話　1度離脱したメインキャラはたいてい強くなって帰還する

ＳＩＤＥ／紅刃

夜１０時。俺は万丈目に言われた通りに灯台に行った。

「…遅刻はしなかったようだな」

灯台には、既に万丈目がいた。当然、デュエルディスクを腕に付けている。

「やっぱりデュエルか」

「前に言っただろ？ここに戻ってきた時にもう一度勝負しろと」

俺のアビリティがばれたあの夜を思い出す。あれから3ヶ月か…長かったような短かったような…。

「そうだったな。今回は兄貴のプレッシャーもないし、のびのびとデュエルできるだろ」

「ああ。…そろそろ始めるか。成長した俺の力、見せてやる！」

互いにディスクを展開し、デッキをシャッフルする。あ、俺のはディスクが自動でやってくれてるからな。

「そのデュエルディスク、相変わらず奇妙だな」

「友人が作ってくれた物だ。いざという時に役に立ってくれてるよ」

「そうか。さあ、行くぞ、紅刃！」

「ああ！全力で行くぜ！」

「「デュエル！」」

紅刃ｖｓ万丈目

「俺のターン！《豊穣のアルテミス》を召喚！」

ワンパターンとか言うな！こいつは俺の必須カードなんだからしゃあないだろ！

「カードを3枚セットし、ターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／2
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×３

「いきなり伏せが3枚…俺のターン！」

「さて、どう来る？」

「（おそらく、あの伏せカードの中にはあれがあるはず。むやみに召喚できない）モンスターをセット。カードを2枚セットしてターンエンドだ」

万丈目
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×２

モンスターを伏せたか…。読まれたか？

「俺のターン！フィールド魔法《天空の聖域》を発動！天使族モンスターの戦闘では天使族のコントローラーは戦闘ダメージを受けない！」

周りが天使の神殿へと姿を変える。俺のモンスターが最も力を発揮できる場所だ。

「そして、《ホーリー・ジェラル》を召喚！」

アルテミスの横に、黄緑の奇妙な天使が現れる。

《ホーリー・ジェラル》
効果モンスター
星４／光属性／天使族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ２０００
フィールド上に「天空の聖域」が存在する場合、このカードが戦闘によって破壊される以外の方法で墓地に送られた時、自分は１０００ライフポイント回復する。

《ホーリー・ジェラル》　ＤＥＦ／２０００

「バトル！アルテミスで裏守備モンスターに攻撃！シャイン・シュ

ート！」

アルテミスの光弾が、裏守備モンスター…仮面を付けた龍を撃ち抜く。

「戦闘破壊された《仮面竜》の効果を発動！デッキから攻撃力１５００以下のドラゴン族を特殊召喚する！」

《仮面竜（マスクド・ドラゴン）》
効果モンスター
星３／炎属性／ドラゴン族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ１１００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力１５００以下のドラゴン族モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「俺が出すのは《アームド・ドラゴン　ＬＶ３》だ！」

《仮面竜》がいた所に小さな龍が現れた。

《アームド・ドラゴン　ＬＶ３》
効果モンスター
星３／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ　９００
自分のスタンバイフェイズ時、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送る事で、手札またはデッキから「アームド・ドラゴン　ＬＶ５」１体を特殊召喚する。

《アームド・ドラゴン　ＬＶ３》　ＡＴＫ／１２００

「やっぱりそれか。ターンエンドだ」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１６００）《ホーリー・ジェラル》（ＤＥＦ／２０００）
魔法・罠／《天空の聖域》リバース×３

「俺のターン！スタンバイフェイズ時、アームド・ドラゴンはＬＶ３からＬＶ５へと進化する！」

アームド・ドラゴンが成長し、体が赤みを帯びる。

《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》
効果モンスター
星５／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１７００
手札からモンスター１体を墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つ、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して破壊する。
また、このカードが戦闘によってモンスターを破壊したターンのエンドフェイズ時、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送る事で、手札またはデッキから「アームド・ドラゴン　ＬＶ７」１体を特殊召喚する。

《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》　ＡＴＫ／２４００

「簡単には出させねえよ！カウンター罠《神の警告》！ライフを２０００払い、モンスターの特殊召喚を無効にし、破壊する！」

《神の警告》
カウンター罠

２０００ライフポイントを払って発動する。
モンスターを特殊召喚する効果を含む効果モンスターの効果・魔法・罠カードの発動、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか１つを無効にし破壊する。

紅刃　ＡＴＫ／４０００→２０００

「アルテミスの効果で、カウンター罠が発動する度に１枚ドローする！」

「フッ…あえてレベルアップさせ、進化形ごと墓地に送る作戦か。だが、俺の方が一枚上手だったようだな」

「何？」

「リバースカードオープン《リビングデッドの呼び声》！自分の墓地からモンスター１体を特殊召喚する！」

「！」

「蘇れ！《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》！」

《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》　ＡＴＫ／２４００

くそ、墓地に送ろうが関係なかったか…！

「ＬＶ５の効果発動！手札からモンスターを１枚墓地に送り、そのモンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つ相手モンスター１体を破壊する！手札から２体目の《仮面竜》を墓地に送り、《ホーリー・ジェラル》を破壊する！デストロイド・パイル！」

「だが、《ホーリー・ジェラル》の効果発動！《天空の聖域》がある時にカードの効果で破壊された時、ライフを１０００回復する！」

紅刃　ＡＴＫ／２０００→３０００

「ただではやられないか！《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》でアルテミスを攻撃！アームド・バスター！」

確か、あのモンスターの進化条件は『相手モンスターを戦闘破壊する』事だっけ？なら、尚更通すわけにはいかねえな！

「カウンター罠《攻撃の無力化》！攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる！」

「何！？」

「さらにアルテミスの効果で１枚ドロー！戦闘破壊がトリガーなら、攻撃を防ぐまでだ！」

「ちっ、そうやすやすと決めさせてくれそうにもないな。カードを１枚伏せてターンエンドだ！」

万丈目
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》（ＡＴＫ／２４００）
魔法・罠／《リビングデッドの呼び声》リバース×２

「俺のターン！」

お、いいもんを引いたな。

「モンスターをセット！アルテミスを守備表示に変更！カードを１枚セットし、ターンエンド！」

《豊穣のアルテミス》　ＤＥＦ／１７００

紅刃
ＬＰ／５０００
手札／２
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＤＥＦ／１７００）リバース×１
魔法・罠／リバース×２

「防戦一方か？俺のターン！」

万丈目はドローした後、手札とフィールドを交互に見た。次の作戦を考えてるんだろ。

「（奴のデッキは【エンジェル・パーミッション】。下手に動けばカウンターで一気に戦況をひっくり返される。ここは…）」

やがて、万丈目は手札からカードを１枚取り出した。

「《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》の効果発動！手札の《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》を墓地に送り、アルテミスを破壊する！デストロイド…」

「かかったな！カウンター罠《天罰》！手札を１枚捨て、モンスタ

ー効果を無効にし、そのモンスターを破壊する！」

俺が効果の説明を言い切った途端に、アームド・ドラゴンに雷が落ちて跡形もなく消えてしまった。

「ちっ、しくじったか…」

「これで終わりじゃないぜ」

「！」

「相手のカード効果をカウンター罠で無効にした時、こいつは手札から特殊召喚できる！行け！《冥王竜ヴァンダルギオン》！！」

フィールドに空いた黒い穴から、冥王竜が舞い上がる！

《冥王竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／２８００

「遂に出て来たか…冥界の王が！」

『我を警戒していたか』

「何！？こいつ精霊か！？」

『我の声が聞こえるのか？』

「やっぱりお前も精霊が見えるようになったか。こいつは、ヴァンダルギオンのオーディンだ」

「そうか。こっちも精霊がいるにはいるが、ただの雑魚だ」

『アニキ～、それはないでしょ～！？』

「うわっ！？この馬鹿、勝手に出て来るな！」

なんか万丈目のデッキから、赤いパンツをはいたナメクジを人型にしたような黄色の奇妙なモンスターが出て来たんだけど…。

「ええと、そいつがお前の精霊か？」

「ああ、不本意ながらな」

『そうよ～！オイラは《おジャマ・イエロー》よ～！よろしく…って、アニキ～、不本意って酷くな～い？』

「ええい、さっさとデッキに戻ってろ！」

『愉快な奴がパートナーになったな』

「うるさい！」

…本当にこれから先愉快な事になりそうだな、あいつ。

「…まあ、とりあえずデュエル再開だ。ヴァンダルギオンの効果発動！モンスター効果を無効にして特殊召喚した時、俺の墓地からモンスターを1体特殊召喚する！」

「何！？まだそんな効果が！？」

「こいつの特殊召喚時の効果は3つあるんでな！俺が選ぶのは、≪

天罰》のコストで墓地に送った《冥府の使者ゴーズ》！リボーン・オブ・ザ・ビヨンド！」

『俺も行くぞ！』

まだ開きっ放しの穴から光が漏れ、ゴーズも飛び出した。

《冥府の使者ゴーズ》　ＡＴＫ／２７００

「何だと！？そいつも精霊か！？」

『新しく精霊と通じるようになったのか。俺はゴーズ。よろしく頼む』

「あ、ああ…。紅刃、貴様何体の精霊を連れているんだ！？」

「４体だけど」

「よ…！」

万丈目がかなり驚いてる。ゴーズとカイエンは居候みたいなもんだけど…。

「（１人で４体だと！？何なんだこいつは！？）モンスターをセットしてターンエンドだ！」

万丈目
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／リバース×１

魔法・罠／リバース×２

「俺のターン！…お互い手札が尽きてきたな。手札補充だ。魔法カード《天よりの宝札》！互いに手札が６枚になるようにカードをドローする！」

「ここでそれを引くか…。十代並に引きが強い奴だ」

「あいつほどじゃないさ。アルテミスを攻撃表示に変更！バトル！アルテミスで裏守備モンスターに攻撃！シャイン・シュート！」

アルテミスが次に破壊したのは…何だあれ？カマキリ？いや、トンボか？

「《ドラゴンフライ》は戦闘破壊された時、デッキから攻撃力１５００以下の風属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚する！」

まんまじゃねえか。和訳したら見たまんまトンボだろ。

《ドラゴンフライ》
効果モンスター
星４／風属性／昆虫族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ　９００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力１５００以下の風属性モンスター１体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

「この効果で２体目の《ドラゴンフライ》を召喚！」

《ドラゴンフライ》　ＡＴＫ／１４００

またリクルーターか…。またアームド・ドラゴンを出されるのも面倒だが、ここは攻める！

「まだ行くぜ！ゴーズで攻撃！エミサリー・ブラッシュ！」

『おおおお！』

万丈目　ＬＰ／４０００→２７００

「ぐっ…！もう一度（ドラゴンフライ）を召喚！」

《ドラゴンフライ》　ＡＴＫ／１４００

「ヴァンダルギオンで攻撃！冥王葬送！！」

『失せろ！』

万丈目　ＡＴＫ／２７００→１３００

「耐え切ったか…！デッキから《アームド・ドラゴン　ＬＶ３》を特殊召喚する！」

《アームド・ドラゴン　ＬＶ３》　ＡＴＫ／１２００

やっぱりまだあったか…。まあ、これでライフに差を付けれたからいいか。

「カードを3枚セットし、ターンエンド！」

「罠発動《転生の予言》！墓地のカード2枚をデッキに戻す！」

《転生の予言》
通常罠（制限カード）
墓地に存在するカードを2枚選択し、持ち主のデッキに加えてシャッフルする。

「俺は《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》2体をデッキに戻す！」

アームド・ドラゴンを2体…。再利用するつもりだな。

紅刃
ＬＰ／３０００
手札／３
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１６００）《冥王竜ヴァンダルギオン》（ＡＴＫ／２８００）《冥府の使者ゴーズ》（ＡＴＫ／２７００）リバース×１
魔法・罠／《天空の聖域》リバース×４

「俺のターン！スタンバイフェイズ時にアームド・ドラゴンはＬＶ５になる！」

《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》　ＡＴＫ／２４００

「…紅刃、俺の手札も増やしたのは間違いだったな」

「て事は、あるんだろ？逆転の一手が」

「これだけ引ければな！魔法カード《ハリケーン》を発動！魔法・罠を全て手札に戻す！」

そう来たか。今の俺は《ハリケーン》を防ぐ事はできない。なら…！

「リバース発動《亜空間物質転送装置》！アルテミスをエンドフェイズ時までゲームから除外する！それにチェーンして速攻魔法《非常食》を発動！自分の魔法・罠を墓地に送り、送ったカード１枚につき１０００ポイントライフを回復する！」

《非常食》
速攻魔法
このカード以外の自分フィールド上に存在する魔法・罠カードを任意の枚数墓地へ送って発動する。
墓地へ送ったカード１枚につき、自分は１０００ライフポイント回復する。

「《亜空間物質転送装置》とリバース１枚を墓地に送り、ライフを２０００回復！」

紅刃　ＬＰ／３０００→５０００

ごつい機械が現れ、レーザー光線でアルテミスを亜空間へ飛ばした。なんか入学試験を思い出すな。

「ここでアルテミスを除外…。そこまでドローソースを破壊されたくないか」

「さあな」

本当はもっと別の理由があるんだけどな。

「まあいい。このターンでお前のそのモンスター達を全滅させてやる！魔法カード《レベルアップ！》」

！あれは…。

「これは、レベルモンスターを召喚条件を無視して進化させる事ができるカードだ！」

《レベルアップ！》
通常魔法
フィールド上に表側表示で存在する「ＬＶ」を持つモンスター１体を墓地へ送り発動する。
そのカードに記されているモンスターを、召喚条件を無視して手札またはデッキから特殊召喚する。

て事は…来るか！？

「《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》を墓地に送り、《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》を特殊召喚！」

アームド・ドラゴンが成長し、銀色の鎧を纏った武装龍へと進化した。…アルテミスを除外しといて正解だったな。

《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》　ＡＴＫ／２８００

「ＬＶ７の効果発動！手札からモンスター１体を墓地に送る事で、そのモンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つ相手の表側表示のモンスター全てを破壊する！」

『我らを全滅させるとなると…攻撃力２８００以上のモンスターか』

『そんなモンスターが都合よく出て来るわけ…』

「いや、いるぜ。あいつが墓地に送るのはおそらく…」

「そう！攻撃力２８００の《闇より出でし絶望》だ！」

《闇より出でし絶望》
効果モンスター
星８／闇属性／アンデット族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ３０００
このカードが相手のカードの効果によって手札またはデッキから墓地に送られた時、このカードをフィールド上に特殊召喚する。

やっぱりな…。十代とのデュエルでも使ってたからもしやとは思ったけど、本当に来たよ…。

「ヴァンダルギオンとゴーズを破壊だ！ジェノサイド・カッター！」

『ぐおっ！？』

『ぐわっ！？』

「オーディン！？ゴーズ！？」

「まだだ！３体目の《仮面竜》を召喚！」

《仮面竜》　ＡＴＫ／１４００

「今なら召喚を無効にされる心配はない！」

こいつ、やっぱ《キックバック》を警戒してるのか？

《キックバック》
カウンター罠
モンスターの召喚・反転召喚を無効にし、そのモンスターを持ち主の手札に戻す。

「さらに魔法カード《シールドクラッシュ》を発動！裏守備モンスター１体を破壊する！」

「何！？」

《シールドクラッシュ》
通常魔法
フィールド上に守備表示で存在するモンスター１体を選択して破壊する。

くそ、《マシュマロン》が破壊されたか…！

「《マシュマロン》か、厄介なカードだ。だが、カードの効果で破壊してしまえば問題ない！《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》でダイレクトアタック！アームド・ヴァニッシャー！！」

武装龍の一撃から俺を守るカードはない。ここは食らうしかない…！

「ぐあぁぁあっ！？」

紅刃　ＬＰ／５０００→２２００

「続いて《仮面竜》でダイレクトアタック！」

「つぅ…、くっ」

紅刃　ＬＰ／２２００→　８００

「カードを１枚セットし、ターンエンド！」

「…エンドフェイズ時に《亜空間物質転送装置》で除外されていたアルテミスはフィールドに戻る」

《豊穣のアルテミス》　ＡＴＫ／１６００

万丈目
ＬＰ／１３００
手札／１
モンスター／《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》（ＡＴＫ／２８００）
《仮面竜》（ＡＴＫ／１４００）
魔法・罠／リバース×２

まずいな、ライフが１０００を切った。でも、なんでだろうな。

「！お前…」

万丈目が俺の顔を見て何かに気付く。多分、俺の口角が上がってるのに気付いたんだろ。

このデュエル、めちゃくちゃ楽しい！

「…俺も案外、十代とかに影響されてんのかね…」

「十代といい、お前といい、どいつもこいつも呑気な奴ばかりだ…」

万丈目はそこで一旦話を止める。

「だが、今ならわからんでもないな…その気持ち」

そう言った万丈目もニヤリと笑っていた。

「さて、これが運命のドローか。何が出るかは引いてのお楽しみだ」

「当然だろ」

「よし、行くぜ！俺のターン！」

引いたのは…魔法カード！

「《強欲な壺》！さらに2枚ドロー！…！」

「（表情が変わった？）」

「魔法カード《冥府の光》！墓地からゴーズとモンスター2体を除外し、《冥府の使者カイエントークン》を特殊召喚する！」

『ようやく私の出番ですか！』

俺が除外したのはゴーズと《ホーリー・ジェラル》《マシュマロン》だ。

《冥府の使者カイエントークン》　ＡＴＫ／２５００

「そいつも精霊か！？」

『ゴーズがいるから、私がいてもおかしくないでしょう？』

「さらに手札から《天空聖者メルティウス》を召喚！そして《天空の聖域》を発動！」

オレンジの鎧を身につけた結晶型の天使が現れ、周りが再び天使のホームグラウンドに変化する。

《天空聖者メルティウス》　ＡＴＫ／１６００

「カードを３枚セットし、ターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／　８００
手札／１
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１６００）《冥府の使者カイエントークン》（ＡＴＫ／２５００）《天空聖者メルティウス》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／《天空の聖域》リバース×３

「リバースカードがまた３枚…！（しかも攻撃して来なかった…ミラーフォースを読まれたか？）」

悩んでるな。まあ、俺のデッキは【パーミッション】だし、いきなりカードを３枚も伏せられたらそれだけで行動を制限してるようなもんだ。

「（まあ、今悩んでいても仕方あるまい。ドローしてから考えるか）俺のターン、ドロー！」

「カウンター罠発動！」

「何！？このタイミングでだと！？」

「《強烈なはたき落とし》！相手がデッキから手札にカードを加えた時、そのカード１枚を墓地に送る！」

「く…」

万丈目は苦い顔で引いたカードを墓地に送った。だが、まだ続きがある！

「アルテミスの効果で１枚ドロー！メルティウスの効果でライフを１０００回復！」

紅刃　ＬＰ／　８００→１８００

「さらに、メルティウスは《天空の聖域》がある時にカウンター罠が発動した時、ライフを１０００回復した後に相手のカードを１枚破壊する！」

「ちっ、追加効果か！？」

「俺が破壊するのは…ずっと伏せていたそのリバースカードだ！カウンター・フラッシュ！」

天空聖者が放った光は、万丈目のリバースカード…《コーリング・

マジック》だ。どうりでずっと発動しなかったわけだよ。

《コーリング・マジック》
通常魔法
相手がコントロールする魔法・罠カードの効果によってセットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、デッキから速攻魔法カード1枚を選択してお互いに確認し自分フィールド上にセットする。

「モンスターの効果で破壊されたから《コーリング・マジック》は発動しない…。だが、なぜアームド・ドラゴンを破壊しなかった?」

「切り札には切り札で対抗しようと思ってな。お前に『挑戦を待ってる』って言った奴がいるだろ?」

「…!そうか。なら、そいつの顔をとくと拝ませてもらおうじゃないか!」

『あの…もしかして、私の出番これだけですか?』

「う、悪い…カウンター罠が全部手札に戻されたから迂闊に攻撃できなかったんだ…」

『構いませんよ。今はこれが最善の戦術です。全力で行かないと万丈目に失礼でしょう』

本当、話をわかってくれて助かるよ…。

「悪い、恩に着る!俺のカウンター罠が発動に成功した時、俺のモンスターを全てリリースする事でこいつを特殊召喚する!」

カイエンを含む3体が光となりひとつに重なる。

「《裁きを下す者－ボルテニス》！！」

巨大な光が弾け、中からゼウスが姿を現した。

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００

「こいつが…俺に言葉を残した４体目の精霊…！」

『その通りだ』

「！」

『貴様にとって、会うのは初めてになるな。私の名はゼウス。紅刃の精霊の１人だ』

「まさか、月一試験でとどめを刺されたモンスターがそうだったとはな」

「ボルテニスの効果発動！特殊召喚する時にリリースした天使族の数だけ相手のカードを破壊する！俺がリリースしたのは3体！」

「！俺のカードも丁度…3枚！」

『裁きではないが、その者達には消えてもらう！』

「行け、ゼウス！ジャッジメント・パニッシュ！！」

ゼウスの杖から飛び出す3本の電光が2体の龍と最後のリバース

…ミラーフォースを貫く！

「くっ、アームド・ドラゴンが…。モンスターをセットし、ターンエンド！」

万丈目
ＬＰ／１３００
手札／０
モンスター／リバース×１
魔法・罠／なし

「（まだだ…このターンで紅刃がモンスターカードを引かなければ、まだ勝機がある！十代や紅刃がそうしているように、俺もまだ諦めない！）」

あの目…まだ諦めてない。前の万丈目だったらとっくに絶望してただろうに…。

「俺のターン！…ボルテニスでモンスターに攻撃！ボルティ・ジャッジライト！」

白い電撃の槍に貫かれたのは…壺…？って、あれは！？

「俺にもまだチャンスはあったか！《メタモルポット》のリバース効果発動！お互いに手札を全て捨て、カードを５枚ドローする！」

《メタモルポット》
効果モンスター（制限カード）
星２／地属性／岩石族／ＡＴＫ　７００／ＤＥＦ　６００
リバース：お互いの手札を全て捨てる。

その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを5枚ドローする。

「まだそんな隠し玉があったとはな…。モンスターをセットしてターンエンドだ」

紅刃
ＬＰ／１８００
手札／４
モンスター／《裁きを下す者－ボルテニス》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／《天空の聖域》リバース×２

「俺のターン、ドロー！…よし！」

来るか！？

『気をつけろ。まだ何か仕掛けてくるぞ』

「魔法カード《四次元の墓》！墓地のレベルモンスター2体をデッキに戻す！」

《四次元の墓》
通常魔法
自分の墓地に存在する「ＬＶ」を持つモンスター2体を、自分のデッキに加えてシャッフルする。

「俺は墓地から《アームド・ドラゴン　ＬＶ7》とＬＶ5をデッキに戻す！…おい、イエロー！少し力を貸せ！」

『え？アニキ、もしかしてオイラを使ってくれるの？』

「仮にも俺の精霊だ！この逆転の一手に貢献しろ！魔法カード《死者転生》を発動！手札の《おジャマ・イエロー》を墓地に送り、墓地から《闇より出でし絶望》を手札に加える！」

『使うってそういう事ぉおぉぉ！？』

…あいつなりに信頼してんだな。

「行くぞ！《アームド・ドラゴン　ＬＶ３》を召喚！」

《アームド・ドラゴン　ＬＶ３》　ＡＴＫ／１２００

「魔法カード《レベルアップ！》！アームド・ドラゴンをＬＶ５に進化させる！」

《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》　ＡＴＫ／２４００

「ＬＶ５の効果発動！手札から《闇より出でし絶望》を墓地に送り、ボルテニスを破壊する！」

しまった…！そのための《死者転生》か！

「行け！デストロイド・パイル！」

『くそっ…！』

「ゼウス！？」

「バトル！アームド・ドラゴンでモンスターに攻撃！アームド・バ

スター！」

アームド・ドラゴンが俺の裏守備モンスターを破壊する。破壊されたのは、何かのシンボルのような『新星』の名を持つ天使だ。

「《コーリング・ノヴァ》の効果発動！戦闘破壊された時、デッキから攻撃力１５００以下の光属性・天使族のモンスターを特殊召喚する！」

《コーリング・ノヴァ》
効果モンスター
星４／光属性／天使族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ　８００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、デッキから攻撃力１５００以下で光属性の天使族モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
また、フィールド上に「天空の聖域」が存在する場合、代わりに「天空騎士パーシアス」１体を特殊召喚する事ができる。

「お前もリクルーターか！そいつは確か、《天空の聖域》がある時は《天空騎士パーシアス》を特殊召喚できるはずだ！パーシアスを出すつもりか？」

「…違う」

「？」

違う。パーシアスじゃない。

出すのは、俺と未来の仲間を繋ぐ絆のモンスター。

「俺が出すのはこいつだ！」

力を貸してもらうぜ、龍可！

「召喚！《フェアリー・アーチャー》！！」

《フェアリー・アーチャー》
効果モンスター
星３／光属性／天使族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ　６００
自分のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在する光属性モンスター１体につき４００ポイントダメージを相手ライフに与える事ができる。
この効果を発動するターンこのカードは攻撃する事ができない。
「フェアリー・アーチャー」の効果は１ターンに１度しか使用できない。

４枚の羽を持ち、黄色で縁取られた桃色の弓を手にした妖精。ここに戻る前に龍可から預かったモンスターだ！

「何だそのモンスターは？見た事も聞いた事もないぞ？」

「俺の大切なカードの１枚だ」

「（得体の知れない奴だ…）カードを１枚セット！エンドフェイズ時に、モンスターを戦闘破壊した《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》はさらに進化する！出でよ！《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》！！」

再びＬＶ７となったアームド・ドラゴンが雄叫びを上げる！

《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》　ＡＴＫ／２８００

「ターンエンドだ！」

万丈目
ＬＰ／１３００
手札／０
モンスター／《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／リバース×１

「（俺の伏せカードは《和睦の使者》。万が一アームド・ドラゴンが突破されても、まだ次に繋ぐ事ができる！）」

「俺のターン！」

よし！これで終わりだ！

「魔法カード《死者蘇生》！墓地のボルテニスを特殊召喚する！」

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００

「さらに、《智天使ハーヴェスト》を召喚！」

《智天使ハーヴェスト》　ＡＴＫ／１８００

「リバースカードオープン《異次元からの帰還》！ライフを半分払い、除外されている《ホーリー・ジェラル》と《マシュマロン》を特殊召喚！」

紅刃　ＬＰ／１８００→　９００

《ホーリー・ジェラル》　ＡＴＫ／１０００

《マシュマロン》　ＡＴＫ／　３００

「そんなにモンスターを並べてどうする気だ？」

「…これで５体揃った」

「何？」

「本当は４体いれば充分だけど、やっぱり最大出力で決めたいしな」

「どういう事だ？」

「《フェアリー・アーチャー》の効果発動！１ターンに１度、俺の場の光属性モンスター１体につき４００ポイントのダメージを相手に与える！」

「何だと！？お前の場には光属性モンスターが５体…という事は…」

「ダメージは…２０００だ！」

『お前がフィニッシャーだ。決めてこい！』

《フェアリー・アーチャー》は、ゼウスに励まされるとひとつ頷き、先端に宝石のような物が付いた矢を弓につがえ、万丈目に狙いを定めた。矢の先端には大きな光が込められている。

「行けぇ！シャイニング・アロー！！」

光の矢は真っ直ぐに飛び、狙い通りに万丈目を捕らえた。

「ぐわぁぁっ！？」

万丈目　ＬＰ／１３００→　０

紅刃　ＷＩＮ

「くそ…！結局負けてしまったか…」

ソリッドビジョンが消えると、俺は万丈目に近づいた。

「強くなったな。《ハリケーン》を使われた時はどうしようかと思ったぞ？」

「お前、《キックバック》は伏せてなかったのか？」

「ああ、今回は手札に来なかったな」

「そうか。なるべく通常召喚はしないようにしていたが、取り越し苦労だったようだな」

確かに、こいつは最後の《アームド・ドラゴン　ＬＶ３》を召喚した時以外は、伏せカードがある状態で通常召喚をしなかった。そんなんでよく戦えたもんだ。

『なかなか面白いデュエルだったぞ。月一試験の時よりもずっとな』

あ、ゼウス達も出て来た。

「ん？誰だお前達は？」

『私はゼウス。こっちがオーディンだ』

「何！？姿が丸っきり違うぞ！？」

「こいつらは擬人化できるんだ。普段はこの姿で過ごしてる」

「妙な能力を持ってるな…」

『龍と奇妙な天使の姿でいるよりは話しやすいと思うが？』

『奇妙とは何だ！？仮初めの姿とはいえ、馬鹿にするな！』

「仮初めだと？」

『ゼウスの本来の姿はこの人型なんです』

「おいちょっと待て。それは俺も初耳だぞ？」

『まあいい』

あ、スルーされた。

『ところで…隠れてないで、いい加減出て来たらどうだ？』

「「は？」」

ガササ…

ゼウスの謎の言葉に反応するかのように、近くの茂みが音を立てた。

「あはは…やっぱりばれてたか」

「月沙!?」

「波星君!?」

「月沙がばれたんじゃ、僕達も出ないわけにはいかないよね」

「だな!」

「俊也!?十代も!?」

なんと、出て来たのは月沙、俊也、十代だった。スイレンとウィン、ハネクリボーもいる。

『見に来てたのか?』

『うん。ちょっと内緒話が聞こえたから、みんなで見に行こうと思って』

ゴーズの問いに、ウィンが明るく答える。

「それにしても、凄いデュエルだったぜ!万丈目も楽しそうにデュエルしてたしな!」

『クリクリ~!』

「言われてみれば、確かに…。それに、負けたというのにやけにすっきりしている」

「楽しいデュエルってのは、そういうもんなんだよ」

「ところで…そこの2人も精霊か？」

『そ。私はウィン。俊也のパートナーだよ』

『私はスイレンです！姫様にお仕えしております！』

「ひ、姫様？」

「月沙の事をそう呼んでるんだよ」

「私はお姫様みたいな高貴な人間じゃないけどね」

『そんな事ないですよ！姫様は私達氷結界の一族を滅亡の危機からむがが っ！？』

『これ以上は話がこじれるからよせ』

ゼウスがスイレンの口を塞ぐ。いつの間にか精霊のリーダー的存在になってるよ…。

「（め、滅亡の危機…？）」

「十代、来てるのはお前らだけか？」

「ああ。万丈目の精霊の事もあるから、精霊が見える奴だけで行く

事になってさ」

なるほど。それなら翔達がいないのにも納得がいく。

「ところで、万丈目君の精霊はお･j『は～い、呼んだ～?』あ、出て来た」

俊也が言い終わる前にイエローがデッキから飛び出した。

『あなたがイエロー様ですね。私はスイレンです!よろしくお願いします!』

『さ、様って…オイラ、嬉し～!』

「いや、スイレンは基本誰にでも様付けで敬語だから」

『ええ!?そうなの!?』

月沙の補足にオーバーリアクションを取るイエロー。そこまで驚く事か?

「ま、なんにせよだ」

俺は1歩踏み出し、万丈目に右手を出した。

「これからよろしくな、万丈目!」

「!」

万丈目は少し驚いたような顔を見せ、

「断る！と言いたいところだが…同じ学園の仲間だ。付き合ってやらんでもない」

自分なりの答えを述べて、握手に応じてくれた。

俊也は会ったばかりだけど、ここにいるのは万丈目の理解者だ。

異を唱える奴は誰もいなく、みんな笑って受け入れた。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第17話　1度離脱したメインキャラはたいてい強くなって帰還する（後書き）

いかがでしたか？

万丈目は《メタモルポット》を使ってませんでしたが、デュエルの都合上使わせる事になりました。他にもアニメや漫画で使用していないカードがあるかもしれませんが、ご了承ください。

久々に紅刃がデュエルしましたが、どうでしたか？《フェアリー・アーチャー》は龍可が使用したカードですが、紅刃のデッキとも充分相性がいいので、龍可から受け取った形で紅刃のデッキに投入しました。

夏休みもそろそろ終わる上に試験もあるので更新は遅くなりますが、これからもよろしくお願いします。

では、また次回！

第１８話　誰でもいつでも満足を求めて生きている（前書き）

今回はデュエルも十代達の出番もありません。

またオリジナルキャラの登場回です。そしてタイトルから察する通りあの人も出ます。

それではどうぞ！

第１８話　誰でもいつでも満足を求めて生きている

ＳＩＤＥ／紅刃

「まず、アカデミアの先生（大徳寺先生）が古代遺跡にピクニックに行こうって言い出して、俺達と後何人かが一緒に行く事になった。で、遺跡で休憩してると突然辺りが緑色の光に包まれて太陽が３つに分裂したんだ。すると、光が思いっ切り強くなって、気が付いたらここにいた、というわけだ」

「要するに原因不明の不思議な現象でここに飛ばされたって事ね」

「それはそれは、大変じゃったのう」

よおみんな、紅刃だ。

今ここにいるのは、俺、月沙、俊也、オーディン、ゼウス、スイレン、ウィン、龍可、クリボン、トルンカ、レグルスだ。

え？後半のメンバーがおかしいって？そりゃそうだろ。俺達はエンシェントフェアリー・ドラゴンが治める精霊世界に飛ばされたんだからな。

異世界っつってもいろいろあるわけで、俺達はそのひとつに飛ばされたってわけだ。時間軸が気持ちいいくらいでかくズレてるけど、深い事は気にしない方向で行こう。

「月沙、十代達は大丈夫なのか？」

「原作通り進むはずだから問題ないよ。向こうの事件が終わったら私達も戻れるはずだよ」

そっか、そんならよかった。しばらくはこの世界でのんびりするとしますか。

シュバンクの街を歩きながら、俺達はいろんな話をした。

龍可はたまたま精霊世界の様子を見に来て、偶然立ち往生してた俺達を見つけたらしい。

トルンカとレグルスはダークシグナーの件で龍可とは仲が良く、一緒に戦った月沙や俊也とも交流がある。オーディン達も協力してたらしく、何だ俺だけ初対面じゃねえか。いや、レグルスは1度エンシェントフェアリー・ドラゴンと一緒に実体化したから初対面じゃないな。

トルンカは見た目はどう見ても子供だが、実際は老魔導師らしい。何その見た目は子供素直は大人みたいなノリ？

ダークシグナーの件で一時期体が縮んでいたけど、今はもう元の姿に戻れるらしい。あれ？『らしい』って本日何回目？まあ、子供の姿が気に入ってるからあえてそのままにしてるんだとか。

「なあ、子供の状態だと魔法の威力も下がるんじゃないか？」

「マイナスの呪い（ダークシグナーの部下にかけられた奴）にかかってるわけじゃないから、魔法は普通に使えるわい。わしは今の姿に満足しておるから、これでいいんじゃよ」

「でも、結構便利そうだよね、その体を縮める魔ほ……ん？『満足』？」

「どうなさいましたか？」

『満足』に反応した月沙にスイレンが尋ねる。あ、ここでは実体化してるようなもんだから、精霊の会話も『』じゃなくて「」で表示するからｎ「あああぁぁあぁぁあぁぁあああああ！！！」！！？

「クリ！？」

「つ、月沙さん、どうしたの？」

「龍可ちゃん、遊星は今どこ！？」

「え！？で、出掛けてるけど…」

「どこに行ったかわかる！？」

「月沙、落ち着け。龍可がびくついてるだろうが」

「え！？あ、ごめん…」

ゴーズに指摘されて、龍可に猛然と詰め寄ってた月沙が謝罪した。ていうか何があった？

「別にいいよ、大丈夫だから。確かクラッシュタウンって言ってたような…」

「クラッ…！？」

「月沙、そのクラッシュタウンとやらがどうかしたのですか？」

あまりの驚きっぷりにカイエンまで心配そうに話し掛ける。だから何があった？

「遊星がいつ出掛けたかわかる？」

「あれ？私の話無視ですか？」

「2、3日前くらいかな？」

「そっか…じゃあ、間に合うかどうかわかんないなぁ…ハァ…」

「月沙、凄い落ち込みようだけど大丈夫？」

がっくりうなだれた月沙をウィンが心配して慰めている。後、話を無視されて落ち込んでるカイエンをゴーズが慰めている。マジで何があった？

ピリリリ、ピリリリ

「誰か電話鳴ってるよ？」

「…あ、私の携帯だ」

月沙が急に鳴り出した携帯を開き、通話ボタンを押す。

「もしもし」

『もしもし！月沙、元気か？』

「え…？え！？勇香！？」

「勇香からか」

「電話なんて久しぶりだね」

……

「「って、えぇえええぇぇえぇえええええ！！？」」

何ぃいいいい！？勇香だとぉおおおぉお！？？

『なんか悲鳴が聞こえた気がすんだけど…』

「ああ、気にしないで。紅刃と俊也があなたが電話してきたのにびっくりしてるだけだから」

『そうか？まあ、そっちは元気そうで何よりだ』

「それにしても、ホント久しぶり！旅の調子はどう？」

『調子っつっても自由気ままに動き回ってるだけだからな…。特にでかい病気にはかかってないし、調子は悪くないぜ』

月沙がスピーカーモードに切り替えたから俺達にも声が聞こえる。あいつが病気にかかってるところ自体が想像つかないんだけど…。

「勇香って誰？」って思ってるお前のためにも、1度説明しとく必要があるな。

名前は天原勇香（あまばらゆうか）。あんな話し方をしてるけど、れっきとした女子だ。

髪は黒い長髪、瞳は黒。俺達と一緒にダークシグナーやサイコデュエリストの事件に立ち向かった1人だ。

元々はチーム・サティスファクションの一員で、何でも一時期ディヴァインに洗脳されてアルカディアムーブメントに所属してたらしく、俊也や沖田、リキッドとは同僚だったそうだ（男女で分けるとかしなかったのか？）。

洗脳が解けた後はそりゃあもう大暴れだった。リアルファイトで洗脳された連中を何人もぶっ飛ばして無理矢理洗脳を解くわ、俊也と一緒にディヴァインの所に乗り込んで（俊也から借りたデッキで）フルボッコにするわ、今までの鬱憤を晴らすかのようにやりたい放題だった。俺と月沙が2人に初めて会ったのも、丁度洗脳されてる奴らをぶっ飛ばしまくってる時で、第一印象が『狂戦士』で一致したのも今じゃいい思い出だ。

その後は特に行く当てもなく世界中をぶらりと旅してたわけだが、連絡はほとんどなかった。まさか、ここで連絡してくるとはな。てか精霊世界と人間界で電波届くんかい。

『今どこにいるんだ？』

「精霊世界だよ。ちょっと事情があってね」

『精霊世界？また厄介な事になってんじゃねえだろうな？』

「平気平気！たいしたことないから」

「勇香、お前はどこにいるんだ？」

『その声は紅刃か？久しぶりだな！もう一通り世界一周しちまったから、しばらくはネオ童実野シティでゆっくり過ごそうと思ってな。休憩がてらクラッシュタウンに寄るところだ』

そういや、さっきから妙な音が聞こえると思ったらD・ホイールに乗ってんのか。

「クラッシュタウン？」

月沙がさっき話題になってた単語に反応する。

「勇香、その町、名前が変わってない？」

『名前？あ、町が見えてきた。ええと…』

しばらく間を置いてるから、看板の文字を解読してるんだろ。てか今見えてきたのに見えるわけｎ『あ、わかった』見えたのかよ！？

『「クラッシュタウン」って書いてるな。ってこれは当然だろ』

「よかった！これなら間に合うかもしれない！」

『は？』

間に合うって何が？みんなわけがわからないといった表情を浮かべている。

「勇香、ひとつ頼みたい事があるんだけどいい？」

『いいけど…何をすればいいんだ？』

「近くに大きな鉱山がない？」

『あ、あれか？あるけど、それがどうかしたか？』

「鉱山の中を進んで行くと、線路が螺旋状に設置されてる大きな崖があるの。そこに行くと上からセルジオって人が落ちてくるから、その人を助けてほしいの」

『要するに人助けか。わかった、任せとけ！』

「ありがとう！救出できたら連絡して！」

『わかった』

「あ、セルジオさんを助ける前に鉱山が爆発したらゲームオーバーだからよろしくね」

『は？…まあ、いいや。んじゃ、早速行くか！また後でな！』

「頼んだよ！それじゃ！」

互いに挨拶し終わると、月沙は携帯を切った。

「そのセルジオって人、原作では死ぬのか？」

「原作ではね。本当は私が行く予定だったけど、こんな状況だしね」

「助かるといいな」

レグルスがくぐもった声で呟く。頼んだぜ、勇香…！

ＳＩＤＥ／勇香

月沙に言われた通り、私は鉱山に突入する事にした。今は夜。暗闇に紛れて、って考えもあるけど、姿を隠すつもりはさらさらない。

とりあえず、何人かがＤ・ホイールで洞窟に入ってくのが見えた。なら、私もＤ・ホイールで殴り込みをかけても問題ないみたいだな。

洞窟に入って、そのままオレンジのＤ・ホイールを走らせていく。さっき入ってった連中に追い付くのにあまり時間はかからなかった。

「ん？誰だお前？」

連中の内の１人が私に気付き、他の奴らも振り向いた。

「よお、お疲れさん。ひとつ聞きたい事があるんだけどいいか？」

「あ？」

「ここって何をやってんだ？旅の途中で工場見学みたいな気分で寄ってみたはいいけど、どんな所かよく知らなくってさ。もちろんタダでとは言わねえ。話によっちゃ、協力してやるよ」

「あ？生意気言ってんじゃ…！」

「まあ、待て。労働者は少しでも多い方がいい。いいだろう、教えてやるよ。ついて来い」

案外すんなりと話が通ったな。まあ、こいつらの感じからしてろくな内容じゃなさそうだけどな。

で、広場に出たわけだけど…一言で言って『奴隷制度万歳』みたいな事になってんな。鞭まで使って働かせてるよ。

「…何だよこれ」

「ダインを掘らせてるのさ」

「ダイン？D・ホイールに使われてる鉱石の事か？」

「そうだ。ダインが採れる事がわかってから、人が集まって『クラッシュタウン』って町が出来た。この山の近くにある。で、ここを仕切ってたのがマルコムとラモンだ。しかし鉱石を掘る作業員を巡って争いをするようになってな、デュエルによって人手を取り合うようになった」

結局デュエルで決めるのかよ…。

「各地から腕に自信があるデュエリストが集まってはデュエルをして、勝てば莫大な大金を得る事が出来る」

「負けたら…ああなるのか？」

へばりながらもツルハシを振るってる奴らに目を向けて尋ねる。

「そうだ。勝った側の作業員となって一生を山の中で暮らす事になり、二度とここから出ることはない」

「さっき『仕切ってた』っつったな。今は誰に支配権があるんだ？」

「マルコムだ。ラモンは今日ここに送られてきた。だが、マルコムの弟のロットンさんがもうじき謀反を起こす。支配権はロットンさんの物になる」

兄を裏切ってまでダインがほしいのかね…？ここで働かされてる連中も自業自得だけど、労働基準法とかに思いっ切り違反してるのもまた事実だ。そして何より、こういったもんは大嫌いだ。

「なるほど、説明ありがとさん。じゃあ…そのロットンとかいう奴をぶっ飛ばせば、こんなくだらない制度をぶち壊せるんだな？」

「何?ぐわっ!?」

「な、貴様!がふぅっ!?」

「ごぼっ!?」

「げぼぁ!?」

「ぐぶぉ!?」

前以てD・ホイールから降りてた私は、周りの連中を全員ぶちのめした。銃を持ってたけど、撃たれる前に仕留めりゃ問題ない。

「何だあいつは!?」

「手を上げろ!大人しぐはぁっ!?」

銃を向けてきた奴には、さっき倒した奴が持ってた銃で応対した。殺さないように肩辺りを狙ったんだけど、流血はない。ここの連中はみんなショックガンを持ってるみたいだな。

私はD・ホイールに乗って、敵を銃で蹴散らしながら先を急いだ。何発かは外したけど、月沙の見様見真似でも案外やれるもんだな。

しばらく適当に進んでると、また広場に出た。下は底が見えない

くらい深い崖で、足場は壁伝いに設置されたトロッコの線路のみ。

「螺旋状の線路…月沙が言ってたのはこの事か？」

まだ鉱山は爆発（？）してないみたいだし、手遅れじゃないはずだけど…。

「ん？」

何となく上を見ると、何かが落ちてくるのが見えた。…いや、訂正させてくれ。『誰か』が落ちてくる。

まさか、月沙が言ってたのはこういう事か？…ここからじゃ届かない。この地形じゃ助走もつけづらいし、仕方ない、アビリティを使うか…。

ゴォオオオッ！

私はD・ホイールから降りて、足から炎を噴出させ、落下地点に向かって跳躍した。

落ちる男の腕をぎりぎりのところでしっかり掴む。そのまま向こう岸に着地した。

「大丈夫か、あんた？」

「な…わ、私は助か…っ！ぐわ…あぁああ…！」

「！おい、どうした！？…！」

突然苦しみ出す男。首には何かの機械が付けられていて、そこからバチバチいってる。これを壊せばいいんだな？

「ちょっと動くなよ。今助けてやっから」

私は指に炎を込めて、機械をその指で縦になぞった。すると、機械がすっぱり切れたから引きはがしてやった。

「う…ハァ…ハァ…ハァ…」

「どうだ？楽になったか？」

「はい…。あ、ありがとうございます。何とお礼を言っていいのやら…」

「たいしたことはしてねえよ。あんた、名前は？」

「私はセルジオ。ここで働いてる人間だ」

セルジオ…！じゃあ、当初の目的達成って事でいいみたいだな。

「セルジオさんか。私は天原勇香、よろしくな。あ、そうだ！ちょっと電話してもいいか？」

「？ええ、構いませんよ」

月沙に連絡しとかねえと…。会話を聞かれないように少し離れて携帯を操作する。

『はい、もしもし』

「もしもし、私だ。ちゃんと救出しといたぜ」

『ホントに!?よかった…!』

「で、次はどうすればいいんだ?」

『ううん…そうだ!じゃあさ…』

ドゴォ……ン……

「ん?」

どこかからでかい爆発音が聞こえた。距離はだいぶあるみたいだから耳を塞ぐほどじゃねえけど。

『どうしたの?』

「いや、鉱山が爆発してな…」

『そう?ま、いいか。じゃあ、次のお願いだけど…』

ＳＩＤＥ／鬼柳

ちっ、まずい事になりやがった…！

俺は捕まったニコとウェスト、そしてこの町を救うために遊星とタッグを組んで、2人をさらった張本人のロットンにデュエルを挑んだ。

そこまではいいんだが、デュエルの途中でバーバラに2人を人質に取られちまった…！

バチィッ！

「きゃっ！」

「うわっ！？」

バーバラが2人を鞭で打ちやがった…！

「やめろおぉおおぉぉ！！…くっ！」

これ以上あいつらを傷つけるわけにはいかねえ！ここは奴の要求通りサレンダーするしか…

「駄目！」

「！？」

「鬼柳さん、あなたは戦い続けなければ…！戦い続ける、その生き様を、私達だけじゃない、この町に堕ちていった人達に見せてくれるんじゃなかったの！？あなたは死神なんかじゃない！この町の救

世主なのよ！」

ニコが涙を流しながら叫ぶ。俺が、救世主…？

「さあ、どうするんだい！？」

ガチャッ

「！」

鞭を振り上げているバーバラに、一丁のショックガンが突き付けられた。ロットンとバーバラについていた住民だ。

「ふ、ふざけるな！これ以上、お前達の言いなりになってたまるか！」

「そうだ！俺達の運命は俺達自身のものだ！だったら俺達は、救世主の鬼柳に俺達の運命を賭ける！」

「お前達…」

…こいつらは、こんな俺に未来を託してくれている。なのに、俺が諦めてどうすんだよ！

「サレンダーは…しねえ！」

「鬼柳…！」

「小賢しい…！」

ドンドンッ！

「「ぐわぁあああ！？」」

2人が倒れる。ロットンがショックガンをぶっ放しやがった！

「ロットン！」

「やめろ、ロットン！」

「お前までもがそんな汚え真似しやがるのか！それでもデュエリストか！」

「リアリストだ」

「貴様…！」

「ロットン…！」

「バーバラの言う通りだ。勝敗は端から決まっていた。お前達は最初から死んでいたんだ。お前達は、この町に殺された亡者なんだよ！」

「くっ…！」

周りがどよめく中、ロットンが俺達に銃口を向ける。くそ、ここまでか…！？

「アディオス」

ガキンッ！

「！」

奴が引き金を引こうとしたその時、どこからかカードが飛んできてショックガンを弾き落とした。

カードが飛んできた方角を見る。そこには、懐かしい顔があった。

「鉄砲玉のクロウ様の参上だぜ！」

「クロウ！？」

「へっ！遊星、あんまりお前の帰りが遅いんでな！迎えに来たぜ！」

「フッ…」

「鬼柳さん！」

「鬼柳兄ちゃん！」

ニコ達の方を見ると、縄を解かれてバーバラに捕まっていた。

「ニコ！ウェスト！」

「来るんじゃないよ！この子達がどうなっても知らないからね！」

「「うぅ…」」

バチンッ！

「キャッ！？」

突然、誰かがバーバラから鞭をたたき落とし、ビンタで張り倒した。

「ジャック・アトラスは、レディと言えど非道な真似は許さない！」

「ジャック！」

「遊星、鬼柳のような疫病神に会いに行くからこんな事になるんだ！」

そう言いつつも、顔がにやけてるぞ？でも…

「最高だぜ！1人足りないが、チームサティスファクションの復活だ！」

勇香がいれば完璧なんだが、仕方ないか。あいつは今どこで何をしてるんだ？

「凄いや！チームサティスファクションが揃ってる！」

『ウォオオォォオオオ！！』

町のみんなも盛り上がってる！さあ、ここからが本番だぜ！

「くっそぉ！…へへへへへ」

なんだ？あいつ何笑って…って、何か手に持ってる？

ピッ

ドゴォン！ズドォン！ドガァン！

なっ！？町中の建物が爆発してやがる！？いつの間にこんなもんを…！

「ロットン…！きゃあっ！」

ロットンは近寄るバーバラをはねのけ、１人でＤ・ホイールに乗って逃げやがった…！

「イヤッッホォォォオオォオウ！」

くそ、今はニコとウェストを…！

「きゃあああ！？」

「うわぁあああ！？」

「！？」

ニコとウェストの真上に破壊された家の瓦礫が降りかかっていた。
しかもでかい！

「ニコ！ウェスト！」

くそ、間に合わねえ…！

ドンッ！

「！？」

俺の横を何かが通り過ぎた。

俺はそれを一瞬判別できなかったが、すぐに何かわかった。

燃えるような炎の色をした…D・ホイールだ！

D・ホイールに乗った、黒い長髪を靡かせているそいつは片手でニコとウェストを抱え、瓦礫をかわして横滑りで止まった。

「大丈夫か、お前ら？」

「は、はい…」

そいつはニコとウェストを降ろすと、俺達に向き直った。

「悪い、遅くなった」

アイシールドをしまってヘルメットを脱ぐと、ここにいないはずの5人目のメンバーがいた。

「久しぶりだな、みんな！」

「「「「勇香!?」」」」

「勇香?…あっ！お姉ちゃん、もしかして…！」

そいつは自分が誰だか気付いたウェストに振り向き、改めて名乗りを上げた。

「チームサティスファクション最後の1人、天原勇香だ！よろしく！」

「ニコ、ウェスト！」

相乗りしている奴がD・ホイールを降りてヘルメットを脱いだ。

そいつの正体は…

「父さん!?」

「父ちゃん!?」

なんと、ニコ達の父ちゃんだった！

「な！？あんた、崖から落ちたんじゃ…」

「いやぁ、鉱山の中を適当に走り回ってると上から落ちてきてさ。助ける事ができてよかったぜ！」

D・ホイールから昔から使ってる青と赤のテンガロンハットを取り出して被りながら、勇香は笑って理由を告げた。

「父ちゃん！」

「父さん！…うぅ…無事でよかった…！」

「すまない…心配をかけてしまったな」

親子3人で抱き合っている。本当によかった…。

「勇香、ありがとな」

「礼はいいさ。それより、逃げたあの大馬鹿野郎を追わなくていいのか？」

！そうだ、ロットンとは決着をつけねえと…！

「鬼柳、俺のD・ホイールを使え！」

「！」

遊星が自分のD・ホイールを立てながら俺に話し掛ける。

「デュエルの決着をつけて来るんだ！1ターンで奴を倒してこい！」

「遊星…すまねえ！」

ここは遊星達に任せる！俺は遊星のD・ホイールに乗ってロットンの後を追った。

SIDE／勇香

しっかし、町が偉い事になってんな…。こりゃ、全部直すのに相当な時間がかかるぞ？

「勇香、どうしてお前がここに…」

遊星が不思議そうに話し掛けてくる。

「旅の途中で寄っただけだ。ったく、休憩のつもりがとんだお祭り騒ぎになってんな」

ガラッ…

「！？クロウ兄ちゃん、危ない！」

「え？」

建物からまたでかい瓦礫が崩れ落ち、クロウを押し潰そうとして…って危なっ！？

「うおっ！？」

私は足の裏から軽く炎を出して加速して、

ゴッ！！

瓦礫を殴り飛ばした。吹っ飛んだ先には人がいないから大丈夫だ。

「気をつけろよ？今はどの建物も欠陥住宅同然なんだからな」

「お、おお、サンキュー…」

「…ところで、なんでみんな白けてんだ？」

みんな信じられないものでも見るかのように私を見てんだけど…。

「勇香…お前は、いつからそんな馬鹿力になった？」

「は？」

「いや、お前は元から異常な身体能力を持っていたが、あれだけ大きなものを殴り飛ばす事はできなかったはずだ」

まあ、ジャックの言う事は最もだな。

「勇香、気のせいかもしれないが…足から炎のようなものが出てなかったか？」

「ああ、これの事か？」

私は質問してきた遊星の前で、右手に炎を纏わせた。

「！それは…」

「月沙と同じアビリティだ。セルジオさんを助ける事ができたのもこいつのおかげだ」

「アビリティだと！？」

「父ちゃん、本当なの？」

「ああ、本当だ」

「で、アビリティを使いこなす特訓をしてたら、アビリティ以外にもいろいろ鍛えられてさ。前よりも体の調子がずっとよくなったっていうか…ん？」

みんなまた黙りこくってるけど今度はどうした？

「…どう鍛えたら瓦礫を素手で殴り飛ばせるようになるんだよ…？」

「時々精霊世界に行ってモンスターと格闘してた」

「待て待て待て！おかしいだろ！？そして無理だろ！絶対返り討ちに遭うじゃねえか！」

「最初はそうだったけど、今じゃドラゴン族が相手でも勝てるようになったな」

「鍛えられすぎだろ!?」

「でも、さすがに混沌帝龍には敵わなかったな…」

「当たり前だろ!禁止カード舐めんな!つーかバケモンかお前は!?ホントに女子!?」

「クロウ、相変わらずツッコみが冴えてるな!」

「嬉しくねえよ!って、今までの話は全部嘘かよ!?」

「いや、全部マジだけど」

「なんで俺の周りはこうも無茶苦茶な奴ばかりなんだ…」

「退屈はしないだろ?」

「まあ、確かにな」

変わってないな、クロウ。さすがこのメンツの頼れるストッパーだ。

「あ、そうだ!鉱山の事だけど…」

「鉱山がどうかしたのか?」

「中の人達は私が全員まとめて助けといた」

「は…？」

セルジオさん以外はみんな頭に『？』を浮かべている。

「ここがどんな所かは鉱山の連中に聞いたからさ、どうせならって思って奴隷扱いされてる人を全員助けて、ロットンについてた奴らもみんな改心させたんだ。今はついでに呼んだセキュリティが後始末をしてる」

「みんな改心って…しかもセキュリティをついでで呼ぶなよ…」

「貴様は相変わらずやる事が無茶苦茶だな」

「そりゃどうも」

本当は半分月沙の依頼だけどな。『できるだけ多くの囚人を助けて夕方に町に行く』って内容なんだけど、それだけじゃ駄目だと思ってロットン側の奴らも改心させた。

「お、鬼柳が帰ってきた」

「え？」

「ほら、あのずっと向こう」

ずっと向こうにD・ホイールに乗った鬼柳が見える。

「…俺には何も見えないぞ？」

「そうか?あ、ロットン乗せてるじゃん!ありゃ伸びてるな。鬼柳が勝ったみたいだし、これで一安心だな」

「…勇香、視力はいくつだ?」

「視力?さあな。私はしばらくの間全然測ってないからな…」

「お前、絶対視力2倍以上になってるだろ?」

SIDE／月沙

ピリリリ、ピリリリ

「あ、電話だ」

「勇香からじゃねえのか?」

みんなとお喋りをしている時に携帯電話が鳴り出した（オーディンとゼウス以外の精霊はカードに戻ってるけど）。とりあえず、電話に出よう。

「もしもし」

『もしもし、私だ』

電話の相手はやっぱり勇香だ。

「勇香、どうだった？」

『全部解決したよ。セルジオさんも生きて家族と再会できたし、一件落着だ』

「よかった…。これで目的は達成ね」

「なら、もうここにいる必要はないな。過去の人間界に戻る準備をしてくる。オーディン、手伝え」

「わかった」

ゼウスとオーディンは帰る準備をしに行った。また龍可ちゃん達とはしばらくお別れか…。

『そうそう、イレギュラーの件の調子はどうだ？』

「全然。何の音沙汰もなくてさ…あれ？」

私はここで違和感を覚えた。あれ？イレギュラー？

「な、なんでイレギュラーの話知ってるの！？」

『私もフォッタの依頼を受けてるからな』

「ええっ！？勇香も！？」

『ただ、今は待機中だけどな。あいつの判断で過去に送るってさ』

なるほど、要するに補充要員か…。あの自称神様も考えてるんだな。

「そっか。でも、勇香がいてくれると心強いよ！」

『まあ、私が行くまでやられんじゃねえぞ！』

「当然！」

『じゃ、そろそろ切るぞ？この電話自体内緒でしてるからな』

「わかった！それじゃ、またね！」

『ああ！頑張れよ！』

「準備ができたぞ」

携帯をしまうと、ゼウスとオーディンが戻ってきた。後ろの空間には大きな穴が空いている。あの穴に入って過去の人間界に戻るみたい。

「もう行くの？」

「うん。向こうのみんなはとっくに戻ってきてるだろうし」

「そうか。ちゃんと戻ってくるんじゃぞ」

「ああ。そっちも元気でな。龍可は遊星達によろしく言っといてく

れ」

「わかったわ」

「レグルス、龍可ちゃんをちゃんと護ってあげてよ」

「言われずともそのつもりだ」

「俊也、私の事子供扱いしないでよ！」

「え！？そんなつもりじゃ…」

全部解決してここに戻ったその時は、またこんな風に笑って話せるといいな。私達は、そのために戦うんだ。

「よし！それじゃ行くか！」

「みんな、頑張ってね！」

「気をつけるんじゃぞ！」

「健闘を祈る！」

「みんなありがとう！またね！」

別れを告げて、私達は穴の中に入っていった。

ＳＩＤＥ／勇香

翌日、ロットンとバーバラはセキュリティに逮捕された。まあ、人権侵害もいいところだったから当然だな。鬼柳はニコ達と一緒にこの町に残る事にした。

そういや、町の名前が変わったな。この町を救った鬼柳にちなんで『サティスファクションタウン』だ。…鬼柳はともかく、町のみんなはどんだけ満足したいんだよ…。つーかこのチーム伝説どころかとうとう地名にまでなっちまったよ。我ながら凄えな。

「やっぱり残るのか、鬼柳？」

「ああ。この町で、ニコ達と共に俺の生き様を貫いてみたい」

「鬼柳さん…」

「鬼柳兄ちゃん…！」

「生き様、か…。そういう生き方も悪くねえな」

「勇香さん、助けていただいてありがとうございました。本当に何とお礼を言っていいのやら…」

「気にすんな。家族と幸せにな」

ちなみに、みんなには月沙の依頼の件は伏せてある。あいついわく『ここで原作知識を使ったなんて知ったら何て言われるかわから

ないから』だそうだ。あいつは、単純にセルジオさんに生きてもらいたいだけなんだろうな。

「遊星」

「！」

「お前が来てくれなかったら、俺は…。ありがとう」

「鬼柳…」

鬼柳と遊星が微笑んで握手をする。今回特に頑張ったのがこの2人だったな。

「チームサティスファクションが再結成するのも悪くねえって思ったけどな」

「冗談言うな。あんなはちゃめちゃな日々はもうごめんだ。だが、久々に5人揃って楽しかったな」

「私も丁度いいタイミングでネオ童実野シティに行こうと思ってよかったよ」

「は？」

「あれ、言ってなかったっけ？もう世界を粗方回ったからネオ童実野シティでしばらく過ごす事にしたんだ」

「本当か！？」

「嘘言ってどうすんだよ。鬼柳、町の復興頑張れよ。たまに遊びに行くからな」

「ああ。その時は遊星達や他のみんなも連れてこい。歓迎するぜ」

別れの挨拶を告げた私達は、ネオ童実野シティに向けて自分のD・ホイールを走らせた。

「「さようなら～！」」

叫ぶニコとウェストに、私は片手を上げて応えた。

「…行ってしまいましたね」

「今生の別れってわけじゃねえんだ。また会えるさ」

「そうですね。さあ、2人共帰ろう」

「「は～い！」」

「（この町を復活させるまでは、まだ満足できねえぜ…）」

「遊星、アキ達は元気か？」

「ああ。この前は、アキがD・ホイールのライセンスを取ったな」

「本当か！？ライディングデュエルやってみてえな！」

「まだ始めたばかりだ。あいつも喜ぶだろうし、いろいろ教えてやってくれ」

「沖田達にも顔見せとけよ！同僚だろ？」

「そのつもりだよ。ジャックは早く職を見つけねえとな！」

「何！？おちょくっているのか！？」

やっぱこのチームは最高だな！また５人で何かでかい事をやるのを楽しみにしてるぜ！

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第１８話　誰でもいつでも満足を求めて生きている（後書き）

いかがでしたか？

勇香の事は前から紅刃達の話に出ています。第１５話の俊也の話が１番わかりやすいと思います。今回は演技しませんでしたが…。

勇香の精霊は今回出ませんでしたが、一応います。登場するのはもう少し後になりそうです。

セルジオを助けたのにも、『鬼柳を後々活躍させる』というちゃんとした理由があります。また登場させる予定ですので、楽しみにしていてください。

では、また次回！

番外編　新制限がぶっ壊れてると思う人は挙手（前書き）

三幻魔編に行く前に番外編をやります。本編はもうしばらくお待ちください。

それではどうぞ！

番外編　新制限がぶっ壊れてると思う人は挙手

璃音「みんな、元気にしてるかしら？璃音よ」

フィレス『ガウッ』

勇香「ん？今回は私達だけか？」

璃音「そうよ。私達はしばらく本編には出れないから番外編を任されたの」

勇香「言ってて悲しくないのか？番外編ってなると、やっぱ私のキャラ紹介か？」

璃音「いいえ、あなたのキャラ紹介はないわよ」

勇香「は！？なんでだよ！？」

璃音「だってあなたの使用デッキが決まってないもの」

勇香「えええぇえええぇえ！！？」

璃音「デッキが決まらないと当然精霊も決まらないわ」

勇香「本編で私の精霊が出てこなかったのはそういう事か！？」

璃音「安心して、【炎属性】という事だけは決まってるから」

勇香「あ、そうなのか？」

璃音「でなきゃ、炎のアビリティなんて使えないでしょ？まあ、【炎属性】だからデッキが決まらないんだけど」

勇香「どういう意味だ？」

璃音「レベル８くらいで汎用性の高い炎属性のシンクロモンスターが今のところいないからよ」

勇香「謝れ！《ブラック・ローズ・ドラゴン》と《ブラック・ブルドラゴ》に謝れ！」

璃音「《ブラック・ローズ・ドラゴン》はアキの切り札だから無理。《ブラック・ブルドラゴ》は確かに強いけど、【デュアル】専門でしょう？【デュアル】を炎属性だけで組むのは少し無理があるわよ？」

勇香「じゃあ、私の切り札をシンクロにしなければ…」

璃音「あなたの切り札はシンクロ。これは決定事項よ」

勇香「おい…。でも、紅刃と俊也はシンクロ使ってないじゃねえか。おまけに、紅刃は光属性統一だろ？闇属性のゴーズとヴァンダルギオンがいるぞ？」

璃音「俊也は一応サイキック族のシンクロモンスターを持ってるし、ゴーズは預かってるだけ。ヴァンダルギオンは特例よ」

勇香「特例て…。ん？デッキがないからって紹介しない理由にはならないんじゃねえのか？」

璃音「本当の理由は、まだオリキャラが登場するからよ」

勇香「まだ出るのかよ!?てか最初からそう言えよ!」

璃音「あなたの紹介はもう1人と合わせてやる予定よ」

勇香「この短期間で何人増やせば気が済むんだ?」

璃音「メインは私達も入れて6人で行くつもりらしいわ」

勇香「マジでか…」

璃音「話は変わるけど、本編にしばらく出れない私達がどうしたら出番を得られるかを考えてみたの」

勇香「へえ、何か案は出たのか?」

璃音「あるわよ。その名も、『今回のキーカード』!」

勇香「…何だその『今日の最強カード』みたいなノリは?」

璃音「後書きのスペースを取って、その話の中心となったカードを紹介して私達が考察する、といったおまけコーナーよ」

勇香「何じゃそりゃ…?てか後書きをそんな事に使っていいのかよ?」

璃音「大丈夫、作者に許可は取ったわ」

勇香「行動早いな！？」

璃音「というわけで、まずは練習よ」

《スクラップ・ドラゴン》
シンクロ・効果モンスター
星８／地属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２０００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
１ターンに１度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを１枚ずつ選択して発動する事ができる。
選択したカードを破壊する。
このカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、シンクロモンスター以外の自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついたモンスター１体を選択して特殊召喚する。

勇香「ってお前の切り札じゃねえか！？」

璃音「効果を発動する時は自分のカードも破壊する必要があるけど、そこはあまり気にしなくていいわね」

フィレス『グルル』

勇香「私のツッコみは無視か！？…まあ、破壊されたらされたで墓地のスクラップモンスターを蘇生できるし、なかなか強力だな」

璃音「チューナーに縛りがないから【ドラゴン族】にも採用できるわね。除去手段が少ないドラゴン族では今後重宝するかもしれないわ」

勇香「でも、たいていは【スクラップ】で活躍するだろうな」

璃音「まあ、こんなところかしらね」

フィレス『ガルッ』

勇香「なんかイマイチ乗り気しねえな…」

璃音「（このまま何もしないで待ってたら、再登場する頃には私達の事忘れ去られてるわよ?空気王になってもいいの?）」ボソッ

勇香「よぉし!次回から張り切って行くぜ!!」

璃音「（単純ね…）とりあえず、私達が本編でレギュラーになるまでは続けるからよろしく」

勇香「あ、期間限定なんだ…」

フォッタ「もしかしたらずっと続けるかもしれないけどね」

勇香「まあ、別にいいけど…ってうぉおおぅ!?あんたいつの間に!?」

フォッタ「いいでしょこれくらい!1番出番少ないの僕なんだよ!」

勇香「あ、どうもすいませんでした…」

璃音「ところで、なんでこのタイミングで来たのかしら?」

フォッタ「よくぞ聞いてくれました!あ、説明する前に…口寄せの術!」

勇香「ＮＡ○ＵＴＯ！？」

　ボオォオン！

紅刃「ん？何だここ？」

勇香「うおおい！？ホントに口寄せしちまったよ！？」

フォッタ「よく来たね」

俊也「いや、十中八九君が呼んだでしょ？」

月沙「璃音と勇香はわかるけど、なんでアキとクロウと鬼柳と龍亞がいるの？」

クロウ「俺が知りてえよ！」

龍亞「どうなってんのこれ？」

アキ「あ、あの時の自称神様じゃない」

フォッタ「その呼び方やめて！悲しくなるから！」

鬼柳「いいからさっさと話せ」

フォッタ「あ、うん、そうだね。実は、次の制限改訂が決まったから君達に発表しようと思ってね」

月沙「あ、もうそんな時期なんだ」

フォッタ「クロウ達は特に影響が出るから呼びました」

クロウ「マジかよ！《黒い旋風》制限解除来い！」

紅刃「（いや、無理があるだろ…）」

フォッタ「じゃあ、早速行ってみよ～！まずは新禁止カードから！」

〔新禁止カード〕

《レスキューキャット》

《イレカエル》

《大嵐》

《洗脳ーブレインコントロールー》

俊也「《大嵐》が禁止！？」

紅刃「一応助かるな。カウンター罠を使う前に一掃されちゃ困るからな」

勇香「【レスキューシンクロ】と【ガエル帝】は終了のお知らせだな」

月沙「やっとあのえげつない１ＫＩＬＬから解放される！」

アキ「ブレインコントロールが禁止…確かにあれは強いわね」

鬼柳「《精神操作》とは違ってリリースにも使えるからな」

フォッタ「次は新制限カードだよ」

〔新制限カード〕

《氷結界の龍　トリシューラ》

《黒い旋風》

《インフェルニティガン》

《死者蘇生》

《ブラック・ホール》

《王宮の弾圧》

クロウ「ぎゃあああぁあああ!!《黒い旋風》が制限にぃいいいいいい!!?」

俊也「いや、これで妥当でしょ?」

紅刃「って待たんかいぃいいぃいいいい!!!なんで《死者蘇生》と《ブラック・ホール》が制限復帰してんだぁあああ!??」

フォッタ「さあ?」

紅刃「さあ?じゃねえよ!」

龍亞「ホントに何で帰ってきたんだろ?両方めちゃくちゃ強力だよね?」

鬼柳「《インフェルニティガン》も制限か…。わかっていたが、こんなんじゃ満足できねえぜ…」

月沙「それは私の台詞じゃあああぁぁあああああ!!!!」

鬼柳「ぐぅっはぁあああぁ!!?」

クロウ「鬼柳ぅうううぅうう!!?」

月沙「あんたのせいで、あんたのせいでトリシューラがあぁあああぁあああ!!!!」

鬼柳「俺がやったわけじゃねえよ!確かに【インフェルニティ】ならトリシューラ3体出せるけど!それと涙目になるほどの事じゃねえだろ!?」

月沙「うるさいうるさいうるさい!!ただでさえドゥローレンが準制限なのにぃいい!!ブリューナクは仕方ないけど!」

紅刃「あ、ブリューナクはいいんだ」

月沙「誰だトリシューラを悪用した奴は!?1人残らず爆☆殺してやるぅうう!!」

フォッタ「こんな時でもネタは忘れないんだね」

アキ「月沙落ち着いて！大体あなたトリシューラ1枚しか持ってないじゃない！」

月沙「…そうだった…」

紅刃「凄い落ち込みようだな…隅っこで体育座りしていじけてるよ…」

アキ「月沙、確かにトリシューラは1枚しか入れられないわ。でも禁止になったわけじゃないでしょ？それに、そのカードは大切なんでしょ？なら、枚数なんて関係ないんじゃない？」

月沙「アキ…ぐすっ…」

紅刃「一応収まったな…」

璃音「シンクロ使いとして、《王宮の弾圧》が制限になったのは嬉しいわね」

クロウ「畜生…弾圧型の【ＢＦ】も使いづらくなっちまった…」

紅刃「諦めろ。インチキ効果集団の宿命だ」

フォッタ「どんどん行くよ！次は新準制限カード！」

〔新準制限カード〕

《スナイプストーカー》

《カオス・ソーサラー》

《サイクロン》

《魔法の筒》

《おジャマトリオ》

紅刃「げ、《スナイプストーカー》かよ…」

月沙「あ、丁度入れようか考えてたんだよね。銃持ってるし」

紅刃「採用理由そこ!?」

俊也「月沙のデッキって何気に手札消費激しいからやめた方がいいんじゃない？」

月沙「言われてみれば、融合やグングニールに、他にも手札コストが必要なカードがたくさんあるしね」

璃音「《カオス・ソーサラー》がまた準制限になったわね」

龍亞「うわ、【カオス】がまた強くなっちゃうよ…」

鬼柳「こいつはいつも制限と準制限を行ったり来たりしてるな」

俊也「《サイクロン》が準制限になったのは大きいね」

勇香「やっぱ《大嵐》が禁止になったからか？なんにせよありがたいな」

アキ「《魔法の筒》と《おジャマトリオ》まで準制限に…」

俊也「これで【ロックバーン】とかが強化されるね」

フォッタ「最後は晴れて制限解除されたカードだよ」

〔制限解除カード〕

《ゴブリンゾンビ》

《黄泉ガエル》

《サイバー・ドラゴン》

《ブラック・ローズ・ドラゴン》

《団結の力》

《王宮のお触れ》

アキ「あ…」

月沙「……」

クロウ「（ぶ、ブラック・ローズが制限解除…）」

紅刃「お、《ゴブリンゾンビ》と《黄泉ガエル》が制限解除か～」
↑棒読み

俊也「【アンデット族】と【黄泉帝】には注意しないとね～」↑棒

読み

月沙「……」

アキ「さ、さっきも言ったでしょ？大切なカードなら枚数は関係ないって…」

月沙「うわあぁぁぁあああん！！アキの馬鹿ぁあああぁあああ！！！」

アキ「つ、月沙落ち着いて！」

クロウ「…2人共哀れな…」

勇香「と、とにかく、《サイバー・ドラゴン》が制限解除されるとはな」

フォッタ「これでサイバー流は完全復活だね」

俊也「むしろ全盛期以上の力を発揮するんじゃないかな？」

鬼柳「《団結の力》も復帰したな」

龍亞「いやったあぁあああ！これで《パワー・ツール・ドラゴン》がもっと強くなる！」

俊也「あれ？《団結の力》なんて使ってたっけ？」

龍亞「う…見えない所で使ってるんだよ！」

クロウ「で、最後の制限解除カードが…」

紅刃「お触れ帰ってくんじゃねえぇえええええ！！！」

俊也「うわぁ…【パーミッション】にとっては厳しいね…」

紅刃「畜生ぉおお！あれか！？【パーミッション】は時代遅れか！？もう用済みなのかコラァアァアアア！！！」

勇香「ま、まあ、サイコショッカーが出なくてよかったじゃねえか」

紅刃「出てきてたまるかぁあああ！！」

フォッタ「以上、新禁止・制限カードでした～！」

クロウ「今回はいろんな意味でもろにダメージ受けた奴が多かったな…紅刃とか月沙とか…」

璃音「《死者蘇生》や《ブラック・ホール》の制限復帰で環境がどう変わるか見物ね」

鬼柳「ま、仕方ない。新しい禁止・制限で満足するしかねえ！」

月沙「……なんでトリシューラが制限でブラック・ローズが無制限に……」

アキ「月沙、お願いだから元気出して！」

紅刃「なんでお触れだ畜生ぉおおお！！」

龍亞「…向こうは大変そうだね…」

俊也「…放っておこう」

フォッタ「今回はこれくらいだね」

璃音「月沙と紅刃が再起不能だから私達で締めるわよ。これからも『Ｖｉｓｉｔｏｒｓ　ｆｒｏｍ　ｔｈｅ　ｆｕｔｕｒｅ』をよろしくね」

フィレス『ガウッ！』

勇香「次回も見てくれよな！」

番外編　新制限がぶっ壊れてると思う人は挙手（後書き）

はい、新制限は正直受け入れがたいです（特にお触れが）。《死者蘇生》と《ブラック・ホール》の制限復帰には驚かされました。

話に出て来た通り、次回から後書きのスペースを少し取ってカード考察をしたいと思います。勝手なものですが、お願いします。

次回からはオリジナル要素も取り入れた三幻魔編に入りますので、楽しみにしててください。

では、また次回！

第１９話　リアルファイトはカードゲームではよくある事（前書き）

今回から三幻魔編に入ります。

またオリジナルキャラが登場します。そして、タイトル通りリアルファイトもあります。

それではどうぞ！

第19話　リアルファイトはカードゲームではよくある事

ＳＩＤＥ／オーディン

今、紅刃達が校長室で話をしている。何でも、この学園に封印されている、世界を破滅させるほどの力を持つという三幻魔のカードとやらの封印を解こうとする輩…セブンスターズが現れたらしい。

三幻魔のカードは学園の地下の遺跡に封印され、七精門と呼ばれる7つの巨大な石柱がそのカードを守っていて、それぞれの柱に対応する7つの鍵によって開かれるそうだ。

七精門の鍵は、この島の古の決まりでデュエルによって取り合うらしい。そこで、紅刃達が鍵を守る者に選ばれた。ただ馬鹿正直に7人選ぶのではなく、ダミーも用意するようだ。

我は何をしているかというと、カイエンを連れて廊下に出ている。

『どうしましたか？』

『…最近、お前が何かに悩んでいるように見える』

『！』

カイエンは表面に出ているとは思っていなかったのか、目を見開いた。

『我が気付かないとでも思ったか？何を悩んでいる？』

『…私は、私とゴーズは紅刃のデッキにいていいのでしょうか？』

『何？』

『ゴーズの効果の発動条件は「自分の場にカードがない時」。カウンター罠を大量に使用する上にフィールド魔法の《天空の聖域》まで使用する紅刃のデッキとは相性が悪いです。ただでさえデッキのバランスが難しいのに、私達と私達のサポートカードまで入れたら足手まといになるのでは…』

なるほど。ゴーズとカイエンは元々紅刃のパートナーではない。そこで他人の紅刃が使ったところで最大限の力を引き出せるとは限らない。《大嵐》があるものの、紅刃の【エンジェル・パーミッション】とは確かに相性が悪い。

『お前達のせいで負けた事が1度でもあったか？』

『いえ…でも、この先そうなるかもしれませんし…』

『要らぬ心配はするな。お前の主が戻って来るまでは、紅刃を支えてやれ。それがお前の主の望みでもあろう』

しばし沈黙が続く。先に静寂を破ったのはカイエンだった。

『…はい、そうですね。ありがとうございます、少し気が楽になりました』

『そうか。なら、それでいい』

あやつは、いつまでゴーズとカイエンを待たせるつもりだ？仕方のない奴だ。

ＳＩＤＥ／紅刃

七精門の鍵を預かったその日の夜、いつものように修行をするために外に出た。内容はいつもと同じ、剣術とアビリティだ。

ちなみに、俺と月沙と俊也が持ってる鍵はダミーだ。敵を撹乱させる作戦を使うらしい。

「セブンスターズねえ…世界を破滅なんかさせて何が面白えんだか…」

『まだ敵の目的がそうだと決まったわけじゃないだろう。だが、それほどのカードなら復活を阻止しなくてはな』

ゼウスは相変わらず正義感に燃えてんな…。ま、これを乗り越えればイレギュラーと戦うための力も少しはつくだろうし、悪い事ばかりじゃないな。

今、ゴーズとカイエンは精霊世界に出掛けている。明日には戻るらしい。

「ま、いずれにせよ油断はできな…ん？」

『どうした？…！』

森の中にあるいつも修行に使っている広場に、先客が1人いた。

「……」

振り返ったそいつは、足元まである黒いマントを着て頭はフードで隠している。マントの下には黒いズボンをはいている。

そして何よりも奇妙なのは、顔全体を隠す白い仮面だ。ぱっと見はミュージカルの悪役にでも出演してそうな身なりだ。

「誰だお前？」

「…来たか。待っていたぞ、真川紅刃」

「待っていた？」

声を聞く限りじゃ男だな。仮面の男はマントから右腕を出した。マントの下に紫の上着と青いシャツが見える。

バシュウウッ！

「『！？』」

突然、仮面の男の右手から紫の光が現れ、竜巻のように細長い渦を巻いた。

渦はある程度伸びると先端からさらに横へ伸び、そこで霧散した。

中にあったのは、どこからどう見ても黒い大鎌にしか見えない。

「鎌…？」

「悪いが、貴様にはここで消えてもらう！」

そいつは大鎌を逆手に構え、猛スピードで俺に接近した。

「な…！？」

仮面の男はすれ違い、代わりに目の前には大鎌の刃が迫る。俺はそれを、咄嗟に抜いたデュエルディスクでぎりぎり防いだ。

「後ろががら空きだ」

ゴッ！

「がっ！？」

男は大鎌を回転させ、そのまま柄の方で俺の頭を殴り飛ばした。

『紅刃！？』

「っう…っくそ、いきなり何だって…！？」

ギィン！ガン、キン、ガキィ！

今度は鎌を振り下ろてきたところをディスクで受け止めた。そのままラッシュを受け流す。今気付いたけど、こいつは左腕にデュエルディスクを付けている。

『紅刃！…貴様っ！』

ゼウスも杖を振り上げ、先端を仮面の男目掛けて振り下ろした。

が、

ガキィッ！

仮面の男に届く事はなく、突然現れた誰かに阻まれた。

ＳＩＤＥ／ゼウス

私は紅刃を援護しようと奴の後ろを取り、杖で殴って気絶させるつもりだった。だが、私の攻撃は何者かによって同じ大鎌で阻まれてしまった。

『ちっ、邪魔をするな！』

私は後ろに飛びのきながら杖から電撃を放った。奴はそれを横に跳んでかわす。

『おいおい、俺の事もう忘れたのか？』

『何？』

言われて奴の顔を見る。茶髪の顔を見た瞬間、すぐに見覚えがある事に気付いた。

『貴様…ヒジュラか！？』

『ちゃんと覚えててくれたみてえ、だなっ！』

ヒジュラは口を歪めて鎌を振り下ろし、衝撃波を撃ち出した。私はそれを上に跳んでかわした。

『ゼウス、加勢するぞ！』

『オーディン、手を出すな！こいつは私が倒す！』

オーディンの加勢を断りながら、杖と鎌で打ち合いを続ける。まさか、こいつが出て来るとは…。

『あやつはヒジュラ！？なぜ奴が…』

ギィンッ！

何十回かの打ち合いの後、鍔ぜり合いに持ち込んだ。力は互角…いや、こいつにだけは負けてたまるか！

『…ちっ、てめえにものを頼むのは癪に障るが…』

『頼むだと？』

『主を何とかしてくれ』

『何？』

ヒジュラはそう言うと、飛びのいて鎌を肩に担いだ。

『おい、主！』

紅刃と仮面の男は未だ交戦し続けていた。実力はほぼ互角か…？

「後にしろ！今は忙しい」

「お前の精霊だろ？話を無視していいのか？」

「聞いてやるよ。貴様を倒した後でな！」

仮面の男は一旦後ろに退き、最初と同じような体制で突進を仕掛けた。鎌の刃が紅刃に迫る！

『紅刃！』

「（こうなりゃやけだ！）」

ズバァァッ！

紅刃は咄嗟にディスクを地面に突き刺し、下から白い電撃を放った。

「！？」

「そこだ！」

ドゴッ！

「ぐあっ！？」

男が立ち止まるところを狙い、紅刃は白い電撃を纏わせた突きで広場の端まで吹き飛ばした。

『てめえの主もアビリティ使いか…！』

『条件は貴様らも同じ事だ』

『ケッ、気付いてやがったか』

『奴の鎌と貴様の鎌の見た目が全く同じだからだ。そもそも、手品でも鎌をあんな風に出す事はできない』

最初に鎌を見た時もしやとは思ったが、本当に奴が絡んでいたとは…。

『主！俺達とこいつらの実力はほぼ互角、このまま戦り合っても埒が明かない。そこでだ、デュエルで勝敗を決めるってのはどうよ？』

「何！？」

『デュエルだと？』

『どういうつもりだ？』

向こうから仕掛けておいていきなりデュエルだと？何を考えている…？

「…いいだろう。ただし、闇のデュエルでだ」

「闇のデュエル…」

闇のデュエル。ダメージが現実の物になり、敗者には死が待ち受けている。紅刃も一応経験があるが…。

「…いいぜ。やってやろうじゃねえか」

こいつが引くわけはないか。

「紅刃！」

第三者の声が響く。振り返ると、なぜか俊也とウィンがいた。

「俊也、ウィン！？なんでここに…」

「散歩のついでに紅刃に会いに行こうと思って…。紅刃、これは一体…」

『ウィン！精霊世界に行ってゴーズとカイエンを呼んで来い！緊急事態だ！』

『えっ！？』

『急げ！！』

『わ、わかった！』

私の気迫に圧されたのか、ウィンは慌てて自分の足元に魔法陣を描き、姿を消した。

「ギャラリーがいようと関係ない。やるなら早くしろ」

仮面の男は鎌を消し、デュエルディスクを展開させた。紅刃も同じようにディスクを起動させる。

『紅刃、気をつけろ』

「わかってる」

私とオーディン、そしてヒジュラはそれぞれカードに戻った。紅刃のデッキなら奴の効果はあまり気にならないが、油断は禁物だ。

「始めるぞ」

「ああ、全力で行くぜ！」

「「デュエル！」」

紅刃ｖｓ仮面の男

ＳＩＤＥ／俊也

「先行はもらうぜ！ドロー！」

あいつは一体何者なんだ？鎌を消したところを見るとアビリティ使いのように見えるけど…。

「《豊穣のアルテミス》を召喚！」

《豊穣のアルテミス》　ＤＥＦ／１７００

…出たよ、アルテミス。紅刃ってほとんど高確率で最初に引き当てるよね。

「カードを2枚セットし、ターンエンドだ！」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＤＥＦ／１７００）
魔法・罠／リバース×２

守備表示…手札に《オネスト》はないみたいだ。

「俺のターン。《ダーク・グレファー》は手札からレベル５以上の闇属性モンスターを墓地に送る事で特殊召喚できる。手札から《ダーク・ジェネラル　フリード》を墓地に送り、特殊召喚する」

《ダーク・ジェネラル　フリード》
効果モンスター
星５／闇属性／戦士族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ１７００
このカードは特殊召喚できない。

自分フィールド上に表側表示で存在する闇属性モンスターを対象にする魔法カードの効果を無効にし破壊する。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分のドローフェイズ時に通常のドローを行う代わりに、自分のデッキからレベル４の闇属性モンスター１体を手札に加える事ができる。

全身真っ黒の戦士が現れた。なんか怪しい雰囲気で笑ってる。

《ダーク・グレファー》
効果モンスター
星４／闇属性／戦士族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ１６００
このカードは手札からレベル５以上の闇属性モンスター１体を捨てて、手札から特殊召喚する事ができる。
１ターンに１度、手札から闇属性モンスター１体を捨てる事で自分のデッキから闇属性モンスター１体を選択して墓地へ送る。

《ダーク・グレファー》　ＡＴＫ／１７００

「効果発動。手札とデッキから闇属性モンスターを１枚ずつ墓地に送る。…準備は整った」

「は？」

「墓地にモンスターを３体送っただけ…何が来るんだ？」

「３体である事に意味がある。墓地の闇属性モンスターが３体のみの場合、このモンスターは手札から特殊召喚できる。出でよ、《ダーク・アームド・ドラゴン》！」

現れたのは、黒い武装龍。万丈目君のアームド・ドラゴンにそっ

くりだ。

《ダーク・アームド・ドラゴン》
効果モンスター（制限カード）
星７／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ１０００
このカードは通常召喚できない。
自分の墓地に存在する闇属性モンスターが３体の場合のみ、このカードを特殊召喚する事ができる。
自分のメインフェイズ時に自分の墓地に存在する闇属性モンスター１体をゲームから除外する事で、フィールド上に存在するカード１枚を選択して破壊する。

《ダーク・アームド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２８００

「何だこいつ？黒い…アームド・ドラゴン…？」

「万丈目君のカードに似ている…？」

「安心しろ、その万丈目とかいう奴とは何の関係もない。だが、終わりだ。このモンスターは墓地の闇属性モンスター１体を除外する度に相手のカードを１枚破壊する効果を持つ。もちろん１ターンの発動回数に制限はない」

そうか！特殊召喚の条件は闇属性モンスターが墓地に３体いる事。つまり、最低でも効果は３回使える。対して、紅刃の場のカードも３枚。一掃してダイレクトアタックを受けたらそれだけで決着がつく…！

「行くぞ。《ダーク・アームド・ドラゴン》の効ｋ「待てよ。まだ俺は何もやってないぜ？」何？」

「カウンター罠《昇天の黒角笛》！《ダーク・アームド・ドラゴン》の特殊召喚を無効にし、破壊する！」

黒い角笛がひとりでに鳴り出し、黒龍は墓地に墜とされた。

「アルテミスの効果で1枚ドロー！」

「…そう来なくてはつまらない。《死霊騎士デスカリバー・ナイト》を召喚」

馬に乗った骸骨の騎士が降り立つ。厄介なモンスターが出て来たな…。

《死霊騎士デスカリバー・ナイト》
効果モンスター
星４／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ１９００／ＤＥＦ１８００
このカードは特殊召喚できない。
効果モンスターの効果が発動した時、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを生け贄に捧げなければならない。
その効果モンスターの発動と効果を無効にし、そのモンスターを破壊する。

《死霊騎士デスカリバー・ナイト》　ＡＴＫ／１９００

「バトルだ。デスカリバー・ナイトでアルテミスを攻撃！ヘル・ナイト・ブレード！」

「カウンター罠《攻撃の無力化》！」

死霊騎士の剣を透明な障壁が防いだ。

「アルテミスの効果で1枚ドロー！」

「だが、デスカリバー・ナイトの効果が発動する。モンスター効果が発動した時、このモンスターをリリースする事で効果を無効にし、そのモンスターを破壊する」

「「！？」」

『リリース』！？

「リリース…だと…？」

「なんで君がその言葉を…？」

リリースは未来の言葉。この時代ではリリースじゃなく『生け贄』と呼んでいる。『リリース』と呼ぶのは僕と紅刃と、今この場にいない月沙の3人のみ。他の人が使うはずがない。

「知りたければ、俺を倒してみろ。効果でアルテミスは破壊だ」

「く…なら、勝って聞き出すまでだ！」

「できるならな。魔法カード《闇の誘惑》を発動。カードを2枚ドローし、手札から闇属性モンスター1体を除外する。ただし、手札に闇属性モンスターがいなければ手札は全て墓地に送られるがな」

《闇の誘惑》
通常魔法（制限カード）

自分のデッキからカードを2枚ドローし、その後手札の闇属性モンスター1体をゲームから除外する。
手札に闇属性モンスターがない場合、手札を全て墓地へ送る。

今の相手の手札は《闇の誘惑》を除くと0。ここで賭けに出る気かな？

「2枚ドロー。…運がいいな。《ダーク・ネフティス》を除外する」

《ダーク・ネフティス》
効果モンスター
星8／闇属性／鳥獣族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１６００
自分の墓地に闇属性モンスターが3体以上存在する場合、その内2体をゲームから除外する事でこのカードを手札から墓地に送る事ができる。
この効果で墓地に送られた場合、次の自分のスタンバイフェイズ時にこのカードを墓地から特殊召喚する。
このカードの特殊召喚に成功した時、フィールド上に存在する魔法または罠カード1枚を破壊する。

「そして魔法カード《天よりの宝札》を発動」

「何！？」

「互いにカードを6枚ドローする。俺は6枚ドロー」

「く…俺は1枚ドローする」

なんて引きだ…。ここで最強のドロー強化カードを引くなんて…。

「カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

仮面の男
ＬＰ／４０００
手札／４
モンスター／《ダーク・グレファー》（ＡＴＫ／１７００）
魔法・罠／リバース×２

強い。《ダーク・アームド・ドラゴン》を封じられたにも関わらず、ここまでのプレイングをするなんて…。

しかも、紅刃のフィールドにはカードがない。どうする…？

ＳＩＤＥ／紅刃

まずいな。１ターンキルを防いだはいいけど、これじゃアルテミスでドローした意味がない。しかも俺のフィールドには何もない。

「俺のターン！」

！来たか…！

「魔法カード《大嵐》！フィールドの魔法・罠を全て破壊する！」

「ちっ…」

破壊したのはミラーフォースと《リビングデッドの呼び声》。危ねえ危ねえ…。

「魔法カード《天使の施し》！カードを3枚ドローし、手札を2枚捨てる！」

この時代じゃまだ禁止にはなってないから助かる。

「《智天使ハーヴェスト》を召喚！」

《智天使ハーヴェスト》　ＡＴＫ／１８００

「さらに、墓地の光属性モンスター《豊穣のアルテミス》と《ホーリー・ジェラル》を除外し、《神聖なる魂》を特殊召喚！」

《神聖なる魂》　ＡＴＫ／２０００

純白の女天使が舞い降りる。さあ、行くぜ！

「バトル！ハーヴェストで《ダーク・グレファー》に攻撃！ハーメルン・スマッシュ！」

智天使の蹴りで闇の戦士が吹き飛ばされる。

仮面の男　ＬＰ／４０００→３９００

「手札の…！？くっ！？」

？手札から何か出そうとしたみたいだけど、途中でやめた…？

「《神聖なる魂》でダイレクトアタック！ソウル・フラッシュ！」

「墓地の…ぐっ！？」

『使わせるか！』

「「？」」

「ぐあっ！？」

仮面の男　ＬＰ／３９００→１９００

何だ？今何かをしようとしたみたいだけど…。

「ぐ…手札の《トラゴエディア》の効果を発動。戦闘ダメージを受けた時、手札から特殊召喚できる」

《トラゴエディア》
効果モンスター（制限カード）
星１０／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　？／ＤＥＦ　？
自分が戦闘ダメージを受けた時、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
このカードの攻撃力・守備力は自分の手札の枚数×６００ポイントアップする。
１ターンに１度、手札のモンスター１体を墓地へ送る事で、そのモンスターと同じレベルの相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体のコントロールを得る。
また、１ターンに１度、自分の墓地に存在するモンスター１体を選択し、そのターンのエンドフェイズ時までこのカードは選択したモンスターと同じレベルにする事ができる。

「《トラゴエディア》の攻守は俺の手札１枚につき６００ポイントアップする。俺の手札は３枚、よって攻守は１８００だ」

《トラゴエディア》　ＡＴＫ／１８００

黒く禍禍しい悲劇の悪魔。ゴーズよりも召喚条件が緩い上に効果も強力なんだよな…。

だが、妙だ。なんでハーヴェストからの戦闘ダメージで召喚しなかった？さっき墓地から発動しようとしたのは、こいつのデッキは【闇属性】だから、多分の効果で墓地に送った《ネクロ・ガードナー》。

《ネクロ・ガードナー》
効果モンスター（制限カード）
星３／闇属性／戦士族／ＡＴＫ　６００／ＤＥＦ１３００
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。
相手モンスターの攻撃を１度だけ無効にする。

あれを使えば《トラゴエディア》を守り抜き、ダメージを最小限

に抑えて次のターンを迎える事ができたはず。なぜ使わなかった？

「…カードを2枚セットしてターンエンド」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《智天使ハーヴェスト》（ＡＴＫ／１８００）《神聖なる魂》（ＡＴＫ／２０００）
魔法・罠／リバース×２

「俺のターン…」

あいつのデッキは、おそらく墓地の闇属性モンスターが鍵だ。有利にさせる危険性はあるけど、仕方ない。

「カウンター罠《強烈なはたき落とし》！デッキから手札に加えたカード１枚をそのまま墓地に捨てさせる！」

「…」

墓地に送られたのは《大嵐》。これでカウンター罠がまとめて破壊される危険はなくなった！

「俺がカウンター罠の発動に成功した時、こいつは俺のモンスターを全てリリースする事で手札から特殊召喚する！行け！《裁きを下す者ーボルテニス》！！」

２体の天使がひとつの光になり、その中からゼウスが姿を現した。

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００

「ボルテニス…」

「効果発動！リリースした天使族モンスターの数だけ相手のカードを破壊する！ジャッジメント・パニッシュ！」

『さあ、裁きを受けよ！』

杖から放たれた白い電撃が《トラゴエディア》を貫いた。

「…魔法カード《名推理》を発動。相手はモンスターのレベルを宣言し、俺はモンスターが出るまでデッキからカードをめくる。出たモンスターが宣言したレベルでなかった場合、そのモンスターを特殊召喚する。他にめくったカードは全て墓地に送られる」

《名推理》
通常魔法（制限カード）
相手プレイヤーはモンスターのレベルを宣言する。
通常召喚が可能なモンスターが出るまで自分のデッキからカードをめくる。
出たモンスターが宣言されたレベルと同じ場合、めくったカードを全て墓地に送る。
違う場合、出たモンスターを特殊召喚し、残りのカードを墓地へ送る。

「好きなレベルを選べ」

また面倒なカードを…。前のターンで使わなかったのは全体除去を警戒してたのか？

あのデッキには『ダーク』と名のつくモンスターが多い。効果はどれも強力だ。上級を出されるのはまずい。ここは…

「…8だ」

切り札になるモンスターには、ゼウスやオーディンみたいにレベル8のモンスターも少なくない。わけのわからない効果はごめんだ。

「まず1枚目。…レベル5の《ダーク・パーシアス》だ。特殊召喚する」

何そのチートドロー？まあ、最上級モンスターが出ないだけマシか…。

《ダーク・パーシアス》
効果モンスター
星5／闇属性／天使族／ＡＴＫ１９００／ＤＥＦ１４００
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、自分の墓地に存在する闇属性モンスター1体をゲームから除外する事で、自分のデッキからカードを1枚ドローする。
このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する闇属性モンスターの数×１００ポイントアップする。

《ダーク・パーシアス》　ＡＴＫ／１９００

「そして、チューナーモンスター《ダーク・リゾネーター》を召喚」

《ダーク・リゾネーター》
チューナー（効果モンスター）

星3／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ１３００／ＤＥＦ　３００
このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

「チューナーモンスター！？」

『馬鹿な！？なぜ奴が…いや、当然か』

「当然ってどういう事だよ？」

『…ヒジュラはシンクロモンスターだ。その主がチューナーモンスターはもちろん、他のシンクロモンスターも所持していてもおかしくない』

マジかよ…。ヒジュラの正体はわからないけど、シンクロ召喚まで使うとなると、かなり手強いな。

「レベル５《ダーク・パーシアス》にレベル３《ダーク・リゾネーター》をチューニング！」

悪魔が音叉を鳴らして3つの星になり、それぞれが紫の輪を描く。その中に闇に堕ちた天使が飛び込み、５つの星になる。

「悪魔の翼が、終焉を誘(いざな)いその身に纏う！闇と共に突き抜けろ！シンクロ召喚！呼応せよ！《ダークエンド・ドラゴン》！！」

光の柱から現れたのは、体に悪魔の顔を持ち、背に悪魔の翼を生やした黒い龍だった。

《ダークエンド・ドラゴン》
シンクロ・効果モンスター

星８／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ２１００
チューナー＋チューナー以外の闇属性モンスター１体以上
１ターンに１度、このカードの攻撃力・守備力を５００ポイントダウンし、相手フィールド上に存在するモンスター１体を墓地へ送る事ができる。

《ダークエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

こいつが、あいつの切り札か？だが、この違和感は何だ？これほどのモンスターなのに、ダークエンド自身に勢いが感じられない。どうなってやがる…？

「ダークエンドの効果発動。１ターンに１度攻守を５００下げる事で、相手のモンスター１体を墓地に送る。ダーク・イヴァポレイション」

《ダークエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００→２１００

ダークエンドの腹の口が開き、黒い闇が放たれる。それが地面を伝いゼウスを飲み込もうとする。

「ゼウスに手は出させない！リバースカードオープン《亜空間物質転送装置》！エンドフェイズ時までボルテニスを除外する！」

ごつい機械の光線が間一髪でゼウスを救った。

「かわしたか。まあいい。ダークエンドでダイレクトアタック。ダーク・フォッグ」

今度は自身の口から黒い濃霧を吐き出す。こいつを出すためなら、

これくらいの攻撃耐え切ってやる！

「ぐぁぁあああっ！！くっ…」

紅刃　ＬＰ／４０００→１９００

「紅刃！」

「俊也、心配…すんな。これくらい、どうって事ねえ！」

『紅刃！』

『戻ったぞ！』

俺が攻撃に耐え切った後、精霊世界に行ってたカイエンとゴーズが戻ってきた。

『ハァ、疲れた…ちゃんと連れてきたよ』

「ウィン！」

ウィンも疲れた様子で戻ってきた。お疲れ様。

「２人共、早速で悪いけど出番だ。俺の場にカードが存在しない時に直接攻撃を受けた時、手札から《冥府の使者ゴーズ》を特殊召喚し、受けたダメージ分の攻守を持つ《冥府の使者カイエントークン》を特殊召喚する！」

《冥府の使者ゴーズ》　ＡＴＫ／２７００

《冥府の使者カイエントークン》　ＡＴＫ／２１００

「…ゴーズとカイエンか…」

『『！？』』

仮面の男が喋った瞬間、ゴーズとカイエンが異常なほどの反応を見せた。

「どうした？」

『お前、まさか…！』

「あいつを知ってるのか？」

『…私達が、「マスター」の声を聞き間違えるはずがありません』

は？『マスター』？

……！まさか…！？

「おい、顔を見せろ！」

仮面の男は少し沈黙した後、

「…いいだろう。どうせ貴様らは死にゆく運命だ」

フードと仮面を取った。

「『『！？』』」

肩まで伸びた灰色の髪に緑の瞳。もう見間違えようがなかった。

ゴーズとカイエンを俺に預け、その2人がずっと会いたがっていた奴が、そこにいた。

「将人…？」

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第１９話　リアルファイトはカードゲームではよくある事（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「番外編で言ってた通り、今回から新コーナーに入るぜ」

璃音「作者の個人的な感想とかも入ってる場合があるから、そこは多めに見てちょうだいね」

フィレス『ガウッ』

璃音「今回は仮面…じゃなくて将人が最後に使用した《ダークエンド・ドラゴン》よ」

《ダークエンド・ドラゴン》
シンクロ・効果モンスター
星８／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ２１００
チューナー＋チューナー以外の闇属性モンスター１体以上
１ターンに１度、このカードの攻撃力・守備力を５００ポイントダウンし、相手フィールド上に存在するモンスター１体を墓地へ送る事ができる。

璃音「攻守を下げるだけで相手のモンスターを墓地送りにできるのは強力ね」

勇香「破壊じゃないから《スターダスト・ドラゴン》とかも安全に除去できるな」

フィレス『グルル』

勇香「でもステータスが下がると戦闘破壊されやすくならないか？」

璃音「《亜空間物質転送装置》で1度除外したり、《禁じられた聖杯》とかで効果を無効化すれば問題ないわよ」

勇香「あ、その手があったか！」

璃音「今回はここまでよ」

勇香「次回も見てくれよな！（完全に紅刃の台詞パクってるけどいいや）」

――――――――――――

いかがでしたか？

とうとうリアルファイトまでやってしまいました。戦闘の描写は上手く書けていないかもしれませんが、そこは多めに見てくれると幸いです。

このデュエルは前後編にして、次回で決着をつける予定です。ただ、次の更新は少し遅くなるかもしれません。

では、また次回！

第２０話　一難去ってまた一難どころの騒ぎじゃない（前書き）

ＰＶが１０万を突破しました。ありがとうございます！

今回は紅刃ｖｓ将人の決着がつきます。

それではどうぞ！

第２０話　一難去ってまた一難どころの騒ぎじゃない

ＳＩＤＥ／紅刃

「将人…？」

「カードを1枚セットし、ターンエンド」

俺の声を無視して、仮面の男――将人は自分のターンを終わらせた。それと同時に、《亜空間物質転送装置》で除外されていたゼウスが戻ってきた。

将人
ＬＰ／１９００
手札／０
モンスター／《ダークエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２１００）
魔法・罠／リバース×１

紅刃
ＬＰ／１９００
手札／０
モンスター／《裁きを下す者－ボルテニス》（ＡＴＫ／２８００）
《冥府の使者ゴーズ》（ＡＴＫ／２７００）《冥府の使者カイエントークン》（ＡＴＫ／２１００）
魔法・罠／なし

『！あいつは…！？』

『将人！なぜお前が…』

『俺は貴様らを消す。それだけだ』

『私ですよ！カイエンです！忘れてしまったのですか！？』

「…知らないな」

『『！？』』

おい…いくら敵に回ってるとはいえ、自分のパートナーだった奴に『知らない』はないだろ…？

『2人共、そう悲観するな』

この中で1番冷静になっているゼウスがゴーズ達に話し掛けた。

『どういう事だ！？』

『奴からは生気が感じられない。目も虚ろなところを見ると、何者かの介入があったと考えるのが自然だ』

『何？』

よく見ると、確かに様子がおかしい。まるで、誰かに操られてるような…。

「要するに、1度ぶっ飛ばして正気に戻せばいいんだな？」

『そういう事だ』

『ですが、これは闇のデュエルです。負けた方は闇に取り込まれてしまいますよ？』

「俺がアビリティでなんとかする」

廃寮であれだけの威力を出せたんだ、上手くいくはず…！

「あの…ひとつ聞いてもいい？」

デュエルを再開しようとすると、俊也が遠慮がちに尋ねてきた。

「何だ？」

「あの人って知り合いなの？」

そうか、俊也は会った事なかったっけか。

「…あいつは銘丈将人（めいじょうまさと）。ゴーズとカイエンの…元々のパートナーだ」

「え！？」

『元々の…！？』

「《エメラルド・ドラゴン》でダイレクトアタック！」

将人　ＬＰ／１２００↓　０

「デュエルしてくれてありがとう」

「礼をするのはこっちの方だ。勉強になった」

「将人、惜しかったな」

「次は勝てるよ！」

「ああ、ありがとう」

中学時代、将人は俺や月沙、加奈美と同じクラスだった。よく４人で一緒にいたっけな。

将人はどうもカードの引きが悪いらしく、いつもここ１番ってところでいいカードが引けないでいた。そのせいか、全敗ってわけじゃないけど、勝つより負ける事の方が多かった。

いろんなカードを試したけど、結局駄目だった。試しに俺が将人のデッキを使ってみた時は余裕で勝てたから、構成は悪くないはずなんだけどな…。

「引っ越し！？」

そんなある日、将人から出されたのが引っ越しの話だ。

「ああ、父さんの仕事の都合でな。○△☆シティという所に行くらしい」

「それってかなり遠いじゃない！？」

「もう、ここには戻って来ないの…？」

「多分な」

「そんな…」

加奈美が悲しそうな表情を見せる。いきなりこんな話を聞かされたんじゃ、無理ねえよな…。

「引っ越しはいつだ？」

「…明後日だ」

「明後日！？」

「なんでもっと早く言ってくれなかったの！？」

「すまない…言い出しづらくてな」

将人は申し訳なさそうに目を伏せた。重い空気が辺りを包む。

「…将人、明日は予定ないよな？」

「？ああ、特に用事はないが…」

「だったら話は早い！４人でどっかに遊びに行こうぜ！」

「「え？」」

「は…？」

３人がきょとんとした顔で俺を見た。

「引っ越し前の思い出づくりだ！最後とは言わないけど、別れる前くらい楽しくやりたいだろ？」

「あ、それいいね！」

「私も真川君に賛成かな」

「…悪くないな」

「んじゃ、決定だ！」

その次の日は１日中町を回って遊びまくった。あの時は本当に楽しかったな。

そして引っ越し当日。

俺は月沙と加奈美と一緒に将人の見送りに行った。

「いろいろ世話になったな」

「いつでも遊びにおいでよ！」

「ああ。…紅刃、ひとつ頼みがある」

「ん？頼み？」

「このカードを預かってほしい」

そう言って、将人は1枚のカードを俺に差し出した。俺は不思議に思いながらそれを受け取る。

「！おい、これって…」

「冥府の使者…ゴーズ…？」

「ちょっと待って！それは精霊のカードでしょ！？」

「ゴーズとカイエンは了承済みだ」

「そうじゃなくて！」

この時期は加奈美は元より俺も精霊が見えなかったけど、月沙と将人の話で精霊の存在を知った。だから、ゴーズが精霊のカードで将人がどれだけ大切にしているかも知っている。だからこそ、なぜ俺にゴーズのカードを預けるのか見当もつかなかった。

「今までずっとデュエルしてきて気付いた。今の俺じゃ、こいつら

を使いこなす事ができない」

「！」

「このまま負け続けて、これ以上こいつらに不様な姿を見せるわけにはいかない。だから、お前に預かってもらいたい」

「んな事言ったって…」

「だが、期間限定だ」

「は？」

「俺は今よりずっと強くなって、またこの町に戻る。その時まで、そいつらをお前の相棒として預かっていてくれ」

「将人…」

将人の目を見たら、何も言い返せなくなった。こいつの覚悟は半端じゃない。悩んで悩んで悩み抜いて、ゴーズやカイエンとも話をして、こうする事に決めたんだ。こいつは必ず強くなる。なら、そのために俺がしてやれる事は何だ？答えは…

「…わかった。その代わり、必ず返してもらいに来い！」

「ああ。そのつもりだ」

こいつのたったひとつの頼みを、次に会うその時まで聞き入れてやる事だけだ！

次に会う時はネオ童実野シティでって思ってたんだけどな…よりによって最悪の形での再会になっちまった。

だが、あいつが間違った道を進んでいるなら、俺は全力で正しい道に引きずり戻す！

「ゴーズ、カイエン！」

『『？』』

「多分…これが、俺がお前らの相棒として戦う最後のデュエルになる」

『最後の…』

「このデュエルで、将人の目を覚ましてやろうぜ！」

『…ああ！』

『わかりました。ならば、相手がマスターであろうと手加減はしません！』

「それじゃ、行くぜ！俺のターン！引いたのは《天よりの宝札》！互いに手札が６枚になるようにカードをドローする！」

引いたカードは…まあ、悪くない。

「《勝利の導き手フレイヤ》を召喚！俺の場の天使族の攻守は４００ポイントアップする！」

レベル１の全体強化モンスターは頼りになるな。

《勝利の導き手フレイヤ》　ＡＴＫ／　１００↓　５００

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００↓３２００

《冥府の使者カイエントークン》　ＡＴＫ／２１００↓２５００

「罠発動《激流葬》。モンスターが召喚された時、フィールドのモンスターを全て破壊する」

《激流葬》
通常罠（制限カード）
モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時に発動する事ができる。
フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

な…！？ダークエンドごと一掃する気か！？

「させるか！手札の《紫光の宣告者》の効果発動！こいつ自身と天使族モンスターを墓地に送る事で、罠カードの発動を無効にし、そのカードを破壊する！」

《紫光の宣告者（バイオレット・デクレアラー）》
効果モンスター
星２／光属性／天使族／ＡＴＫ　３００／ＤＥＦ　５００

自分の手札からこのカードと天使族モンスター1体を墓地に送って発動する。
相手の罠カードの発動を無効にし、そのカードを破壊する。
この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

「手札からこいつと《光神機－轟龍》を墓地に送る！」

「…」

「バトル！ゴーズで《ダークエンド・ドラゴン》を攻撃！エミサリー・ブラッシュ！」

『食らえ！』

ゴーズが手持ちの大剣でダークエンドを真っ二つに斬り裂く。

「ぐっ…」

将人　ＬＰ／１９００→１５００

「カイエンでダイレクトアタック！レイジング・ブラッシュ！」

『マスター、行きますよ！』

「これが決まれば紅刃の勝ちだ！」

カイエンが剣を構え、将人に斬り掛かる。これで決着か…？

ゴォォォォ…ン…

『くっ！？』

しかし、突然別のモンスターが現れ音波でカイエンの侵攻を防いだ。

「何！？」

「手札の《バトルフェーダー》の効果発動。相手が直接攻撃する時、このモンスターを特殊召喚してバトルフェイズを終了させる」

《バトルフェーダー》
効果モンスター
星１／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動する事ができる。
このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する。
この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

《バトルフェーダー》　ＡＴＫ／　０

あれはジャックが使ってたカード…。さすがに一筋縄じゃいかないか。

「カードを2枚セットしてターンエンド」

紅刃
ＬＰ／１９００
手札／１
モンスター／《裁きを下す者－ボルテニス》（ＡＴＫ／３２００）
《冥府の使者ゴーズ》（ＡＴＫ／２７００）《冥府の使者カイエン

トークン》（ＡＴＫ／２５００）《勝利の導き手フレイヤ》（ＡＴＫ／　５００）
魔法・罠／リバース×２

「俺のターン。魔法カード《地割れ》を発動。攻撃力が１番低い相手モンスター１体を破壊する」

文字通り地割れが発生し、フレイヤが落ちていった。

「くそ、フレイヤが…」

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／３２００→２８００

《冥府の使者カイエントークン》　ＡＴＫ／２５００→２１００

「そして魔法カード《デビルズ・サンクチュアリ》を発動。《メタルデビル・トークン》を特殊召喚する」

《デビルズ・サンクチュアリ》
通常魔法
「メタルデビル・トークン」（悪魔族・闇・星１・攻／守０）を自分のフィールド上に１体特殊召喚する。
このトークンは攻撃をする事ができない。
「メタルデビル・トークン」の戦闘によるコントローラーへの超過ダメージは、かわりに相手プレイヤーが受ける。
自分のスタンバイフェイズ毎に１０００ライフポイントを払う。
払わなければ、「メタルデビル・トークン」を破壊する。

将人の場にメタリックな謎の生物が現れた。

《メタルデビル・トークン》
トークン
星１／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　　０／ＤＥＦ　　０
このトークンは攻撃する事ができない。
「メタルデビル・トークン」の戦闘によるコントローラーへの超過ダメージは、かわりに相手プレイヤーが受ける。
自分のスタンバイフェイズ毎に１０００ライフポイントを払う。
払わなければ、「メタルデビル・トークン」を破壊する。

《メタルデビル・トークン》　ＡＴＫ／　０

「さらに、《バトルフェーダー》《メタルデビル・トークン》をリリースし、《ダーク・ホルス・ドラゴン》をアドバンス召喚！」

２体がリリースされ、代わりに鋼の鳥のようなドラゴンが姿を現した。

《ダーク・ホルス・ドラゴン》
効果モンスター
星８／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ１８００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手のメインフェイズ時に魔法カードが発動された場合、自分の墓地からレベル４の闇属性モンスター１体を特殊召喚する事ができる。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

《ダーク・ホルス・ドラゴン》　ＡＴＫ／３０００

「攻撃力３０００！？」

『そんな…ゼウス達じゃ歯が立たないよ…』

『ちっ、面倒なモンスターを…！』

「《ダーク・ホルス・ドラゴン》でボルテニスに攻撃。ダーク・ブラック・メガフレイム」

闇の黒炎がゼウスを襲う…ってまたゼウスかよ！？

「カウンター罠《攻撃の無力化》！バトルフェイズを終了させる！」

ゼウスの前に現れた渦が黒炎を全て飲み込んだ。これでこのターンは凌いだか…。

「…カードを2枚セットし、ターンエンド」

将人
ＬＰ／１５００
手札／2
モンスター／《ダーク・ホルス・ドラゴン》（ＡＴＫ／３０００）
魔法・罠／リバース×２

「攻撃力３０００のモンスター…。どうすれば倒せるんだ？」

今の俺の手札は1枚。このドローで逆転のカードを引かねえと、今度こそゼウス達が危ない…！

「俺の…ターン！《強欲な壺》を発動！2枚ドロー！」

！これは…。

『どうした？』

「…ゼウス、オーディン。『あれ』行くぜ？」

『！』

『なるほどな。出すのは久々ではないか？』

たった今手札に来たオーディンはいつでも行けるようだ。

『こんな戦い、早く終わらせるぞ』

「ああ。行くぜ、将人！フィールドの《裁きを下す者－ボルテニス》と手札の《冥王竜ヴァンダルギオン》を墓地に送る！」

「切り札を2体共墓地に？」

『何をするつもりなの？』

手札のオーディンが黒い光になり、ゼウスの周りで渦を巻く。

「融合召喚！《天空冥王ボルテニス》！！」

黒い渦が晴れると、そこには黒いマントを羽織り、オーディンを模した大剣を持ち、普段の人の姿をしたゼウスが立っていた。

《天空冥王（エンジェルプルート）ボルテニス》

融合・効果モンスター（オリジナル）

星８／闇属性／天使族／攻３２００／守２８００

「裁きを下す者－ボルテニス」＋「冥王竜ヴァンダルギオン」

手札またはフィールド上の「冥王竜ヴァンダルギオン」とフィールド上に存在する「裁きを下す者－ボルテニス」を墓地に送った場合のみ、エクストラデッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは必要としない）。
1ターンに1度、自分のデッキからカウンター罠1枚を手札に加える事ができる。
その後、デッキをシャッフルする。
墓地のカウンター罠1枚を除外する事で、除外したカウンター罠の効果を使用する事ができる（この効果はスペルスピード3として扱う）。
この効果はデュエル中1度しか発動できない。

《天空冥王ボルテニス》　ＡＴＫ／３２００

「天空…」

「冥王だと…？」

『凄い…！』

本当はもう1パターンあるんだけど、こっちはオーディンがフィールドに出てないと出せないからな。

『紅刃、さっさと奴を正気に戻すぞ！』

「当然だ！ボルテニスの効果発動！1ターンに1度、デッキからカウンター罠を1枚手札に加える事ができる！俺が選ぶのは《神の宣告》だ！」

《神の宣告》。半分のライフと引き替えに、モンスター効果以外

を全て封じる事ができる最強のカウンター罠。こいつがあれば、たいていのカードは無効化できる…！

「バトル！ボルテニスで《ダーク・ホルス・ドラゴン》を攻撃！エミサリー・ジャッジ・スレイヤー！！」

『消え失せろ！！』

ゼウスが飛び上がり、黒い電撃を纏った剣で闇の黒炎竜に斬り掛かる。

「墓地の…うぐっ！？」

？まただ…。何か枷でもあるのか？

将人　ＬＰ／１５００→１２００

ビッ

ダメージの衝撃で、将人が付けていたマントの留め金が外れ飛ばされた。

「「！」」

『あれは…！？』

俺達の視線は全て将人の首に集まる。首には銀色の機械がはめられていた。

『もしかして…首輪？』

『操られている、という線で間違いなさそうだな』

『誰がこんな事を…！』

『落ち着け、カイエン！紅刃、ここは俺が行く！』

「わかった！ゴーズでダイレクトアタック！エミサリー・ブラッシュ！」

『目を覚ませ、将人！』

ゴーズが闇色の光を放つ剣を構え、将人に突進する。

ガキィン！

が、間一髪のところでデュエルディスクで防がれた。

『止めただと！？』

「罠発動（ガード・ブロック）。戦闘ダメージを無効にし、カードを1枚ドローする」

「なら、カイエンで攻撃だ！レイジング・ブラッシュ！」

『（この一撃で決着を…！）』

「ぐ…墓地の《ネクロ・ガードナー》の効果発動！墓地から除外する事で、相手の攻撃を1度だけ無効にする！」

カイエンの剣は、モンスターの影に防がれた。やっぱり、さっき

から使おうとしてたのは《ネクロ・ガードナー》だったか…。

「…カードを2枚セットし、ターンエンド」

「エンドフェイズ時に永続罠《闇次元の解放》を発動。除外されている闇属性モンスター1体を特殊召喚する」

《闇次元の解放》
永続罠
ゲームから除外されている自分の闇属性モンスター1体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する。
このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊してゲームから除外する。
そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「除外されている…？」

「まさか、《闇の誘惑》で除外した…！」

「《ダーク・ネフティス》を特殊召喚」

闇次元の中から炎の翼を広げ、闇の不死鳥が舞い降りた。

《ダーク・ネフティス》　ＡＴＫ／２４００

「《ダーク・ネフティス》は特殊召喚された時、相手の魔法・罠カードを1枚破壊する」

炎に焼かれ、手札に呼んだばかりの《神の宣告》が破壊された。

「…」

紅刃
ＬＰ／１９００
手札／１
モンスター／《天空冥王ボルテニス》（ＡＴＫ／３２００）《冥府の使者ゴーズ》（ＡＴＫ／２７００）《冥府の使者カイエントークン》（ＡＴＫ／２１００）
魔法・罠／リバース×２

「《神の宣告》が破壊された…」

『せっかくゼウスの効果で手札に加えたのに…』

「俺のターン。…そろそろ終わりにする」

『何？』

何か来る…！

「墓地の７種類の闇属性モンスター…《ダーク・ジェネラル　フリード》《ダーク・グレファー》《ダーク・アームド・ドラゴン》《死霊騎士デスカリバー・ナイト》《トラゴエディア》《ダーク・リゾネーター》《ダークエンド・ドラゴン》を除外する」

「７種類!?」

『何をするつもりだ？』

俊也とゴーズの疑問の声をよそに、７体のモンスターが除外され

ていく。

「出でよ、《究極宝玉神　レインボー・ダーク・ドラゴン》！」

七色の光と共に、７つの宝玉を体に埋め込んだ黒い龍が姿を現した。

《究極宝玉神（きゅうきょくほうぎょくしん）　レインボー・ダーク・ドラゴン》
効果モンスター
星１０／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ４０００／ＤＥＦ　　０
このカードは通常召喚できない。
自分の墓地に存在する闇属性モンスターを7種類ゲームから除外した場合のみ特殊召喚する事ができる。
このカードを除く自分フィールド上と自分の墓地に存在する闇属性モンスターを全てゲームから除外する事で、除外したカード1枚につき、このカードの攻撃力は５００ポイントアップする。

レインボー・ダーク…七色の…闇…。

『攻撃力…４０００…！？』

「…」

「行くぞ。レインボー・ダーク・ドラゴンでカイエントークンに攻撃」

「これを受けたら紅刃の負けだ！」

『そんな…』

「…」

「レインボー・リフレクション！」

バシュゥウウ！！

「な…に…！？」

「え…？」

究極宝玉神は、攻撃をする前に『消滅した』。

『何が怒ったの…？』

『紅刃、ゼウス、ありがとうございます。助かりました。』

『礼はいい』

「貴様、何をした！？」

「…誰が『攻撃してもいい』なんて言った？」

「何？」

「ボルテニスの効果はもうひとつある。墓地のカウンター罠を除外する事で、そのカードの効果を使用する。《神の宣告》を除外して、レインボー・ダークの召喚自体を無効にさせてもらった」

紅刃　ＬＰ／１９００

破壊されてなけりゃ、２回使えたのにな…残念だ。

『あれ？何で《神の宣告》を使ったのにライフが減ってないの？』

「ゼウスの効果で使ったのは《神の宣告》の効果のみ。発動コストまではコピーしないんだよ」

俊也、解説サンキュな。

「ぐ…《ダーク・ホルス・ドラゴン》でカイエントークンを攻撃！ダーク・ブラック・メガフレイム！」

「リバース発動《攻撃の無力化》！」

「！？」

２枚目の《攻撃の無力化》でできた渦が、また黒炎を吸い込む。

「…《ダーク・ネフティス》を守備表示に変更。カードを２枚セットし、ターンエンド」

将人

ＬＰ／１５００
手札／１
モンスター／《ダーク・ホルス・ドラゴン》（ＡＴＫ／３０００）
《ダーク・ネフティス》（ＤＥＦ／１６００）
魔法・罠／リバース×２

「俺のターン！」

「罠カード《運命の分かれ道》！」

《運命の分かれ道》
通常罠
お互いのプレイヤーはそれぞれコイントスを1回行い、表が出た場合は２０００ライフポイント回復し、裏が出た場合は２０００ポイントダメージを受ける。

「お互いにコイントスをし、表が出ればライフを２０００回復し、裏が出れば２０００のダメージを受ける」

『ここでギャンブルか！？』

今の俺の伏せカードは《マジック・ジャマー》。罠カードを防ぐ事はできない…。

「さあ、運命のコイントスだ」

フィールドの中央に2枚のコインが現れ、同時に宙を舞う。

チャリー…ン

「え！？」

『嘘！？』

『何！？』

『そんな…！？』

『馬鹿な！？』

「！？」

出たのは…

「両方共…裏…！？」

コインが光弾となって俺と将人に向かう。これが意味するのは、俺達の…

「ぐあぁああっ！？」

「ぐはぁっ！？」

引き分け…？

紅刃　ＤＬＯＷ　将人

ＳＩＤＥ／俊也

バキィッ！

将人に光弾が当たると同時に首輪にもダメージが入ったらしく、音を立てて砕けた。ただの鉄屑となった謎の機械が、首を離れて地面に落ちた。

『紅刃、大丈夫か！？』

「あ、ああ、俺は平気だ…」

「ぐぅっ、ハァ、ハァ…」

『将人！』

『マスター！』

ソリッドビジョンが消えた後、ゴーズとカイエンが将人に走り寄った。ゼウスとオーディンは既に分離している。

「ハァ、ハァ…ゴーズ、カイエン…」

『『！』』

「…すまない…とんだ迷惑をかけたな…」

『将人！』

「もう大丈夫だ」

『マスター…！よかった…』

「ったく…心配かけやがって…」

どうやら正気を取り戻したみたいだ。よかった…。

『やっと元に戻ったか』

デュエルが終わったからか、さっき鎌の精霊も出て来た。

『！？』

『お前は！？』

「引っ越ししてからしばらく後に勝手について来た。知り合いだと聞くが…」

『ヒジュラ、なぜお前が…』

『よお、久しぶりだな』

「え、知り合い？」

『ゴーズとカイエンとヒジュラと我は、冥界でよく共に行動していた。ゼウスもよく来ていたな』　全員知り合いだったんだ…意外だ。

『しかし、これは一体…』

オーディンが壊れた機械の首輪を見遣る。

『精霊の力が一切効かないから、どうしても他の奴らの協力が必要でな』

「どういう事？」

「誰かが突然後ろから攻撃してきてな。首輪を付けられてこの様だ」

「は？」

『多分てめえらの予想通りだ。主はその首輪で操られていた』

やっぱり…。でも、疑問がいくつか残る。

「ヒジュラは首輪を付けられた時現場にいたはずだろ？なんでほったらかしにした？」

紅刃がその疑問を代弁してくれた。

『さっき言ったろ？精霊の力じゃ壊れねえって。この首輪を付けた

野郎にも聞かないから、そいつに従うしかなかった』

『精霊の力が効かない…？』

『ああ。エネルギーとかの都合上、唯一デュエルで負ければ自壊する仕組みだと聞いたからな。主を倒せそうな奴っつったら、主が普段から話してるてめえしか思い付かなかった』

「俺も何度も抵抗をしたが、カード1枚の使用を止めるのが関の山だった」

《ネクロ・ガードナー》とかを散々蹂躙ってたのはそのせいだったのか。

「で、その操ってた奴って誰なの？」

「それが…仮面とマントをいつも付けていたから、素顔を見た事がないんだ。それどころか、詳しい目的すら聞かされていない」

『万一洗脳が解けた時に情報が漏れないように考慮していたのか。ただの馬鹿ではないようだな』

敵の目的も不明か…。全く、一体どうなってるんだ？

「あ、そうだ…これ、お前に返すよ」

紅刃はそう言って、ゴーズのカードを差し出した。そういえば、ゴーズは元々将人のカードだったね。

「いや…さっき俺が使ったのは本来のデッキじゃない」

「は？」

「明日もう1度デュエルしてくれ。俺がゴーズとカイエンのパートナーに相応しいかどうか…」

ヴァアアァアア！！

「！」

『『『『『『！？』』』』』』

「これは…！？」

突然、僕達の回りから黒い何かが発生した。しまった、これが闇のデュエルだという事を忘れてた…！

『ちっ、闇が噴き出してきたか…！』

「だったらまとめて…！」

フラッ

「…！」

紅刃は電撃を出そうとしたけど、体がふらついた。デュエルディスクを杖代わりにしてバランスを取る。2回しかダメージを受けてないとはいえ、ここまで体力を持っていかれるなんて…。

『全然大丈夫じゃないだろ！』

「ここは僕が…！はぁっ！！」

僕は右足を振り上げ前方に風を撃ち出した。すると、前の闇に巨大な穴が空いた。逃げ道はもうそこしかない！

「早く行こう！」

「よし！」

みんなで一斉に外に出る。これでなんとか…

ギュオッ！

「ぐあっ！？」

『がっ！？』

『ぐおっ！？』

「「！？」」

最後尾の紅刃とゼウス、オーディンが何かに吹き飛ばされた。

『何!?』

『え!?』

「紅刃!?」

「つぅ…っ、将人!」

紅刃は1枚のカードを将人に向けて投げた。将人がそれを取ると同時に、

ズァアアッ!

穴が、完全に閉じた。

『紅刃!』

『ゼウス、オーディン!』

「くそ、もう1度…!」

『私も手伝う!』

ドーム状になって急速に縮む闇に向けて、僕とウィンはありったけの風を叩き付けた。闇が一気に晴れていく。

「な!?」

『いねえ!?』

でも、闇が晴れた後のそこには誰もいなかった。

『まさか…もう手遅れだった…?』

「そんな…」

「とりあえず、1人消したか」

「「『『『『!?』』』』」」

後ろから声がする。振り返ると、仮面とマントを身につけた人がいた。

『てめえは…!』

『知ってるのか?』

『将人に首輪を付けやがった張本人だ』

『何!?』

こいつが…将人を操っていた…！

「紅刃達に攻撃したのも…君か？」

「ああ、そうさ。丁度こんな風に」

ドンッ！

『っ…あ…』

仮面の男が銃を取り出し、ウィンに向けて撃った。一瞬、頭が真っ白になった。

「ウィン！！大丈夫、しっかりして！」

『くぅ…う…』

「人間にも効く、対精霊用のエネルギー弾だ。下級モンスターなら当分は動けまい」

「くっ…！」

紅刃達だけじゃなく、ウィンまで…。こいつは僕が…！

「……だ……」

「将人？」

「紅刃が闇に飲み込まれたのは、俺のせいだ…」

将人の手が震えている。その手にあるのは、さっき紅刃から投げ渡された《冥府の使者ゴーズ》のカード。

「俺は自分が許せない。だが…」

そのカードがズボンのポケットに突っ込まれる。

「それを促した貴様も許さん！！」

将人はもう1度大鎌を取り出し、仮面の男に斬り掛かった。

「おおおぉおおぉおおお！！！」

バチィチチチチチ！！

刃は仮面の男に届く事なく、緑の障壁によって防がれた。将人はそのまま障壁ごと斬り裂こうとしたけど、やがて弾き飛ばされてしまった。

「ぐぅっ！？」

『マスター！？』

「対精霊用の電磁バリアだ。無論、アビリティも通じない。電磁だから生身でも干渉できないだろうがな」

そんな…これじゃ、何もできない…。

「本当は全員まとめて葬ってやりたいところだが…楽しみは後に取

っておこう」

「楽しみ？」

「近い内にまた会う事になるだろう。さらばだ」

そう言って、仮面の男は去って行った。

「逃がすか！！」

「待つんだ！」

追いかけようとする将人を、僕は右腕を掴んで止めた。

「なぜ止める！？」

「アビリティも使えなくて触れる事すらできないのに、どうやって引き止めるつもりなんだ！？」

『主…悔しいのはわかりすぎるほどよくわかるが、今の俺達じゃどうしようもねえんだ』

『今はウィンを治療する方が先です』

「……」

将人の手から鎌が落ち、ドサッという音と共に消えた。

ゴッ！！

自由になった右手は、すぐ側にあった木に嫌というほど強く打ち付けられた。木と拳の間から赤い水が一筋流れる。

「……くそ……畜生……」

両膝を突く将人に声をかける勇気は、誰にもなかった。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第２０話　一難去ってまた一難どころの騒ぎじゃない（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「よお、みんな！１０万アクセスありがとな！…ハァ…」

璃音「どうしたの？」

勇香「いや…せっかくめでたい事になってんのに、本編の内容が暗すぎだろ…」

璃音「確かに主人公戦線離脱は痛いわね。さ、今回のキーカードは…」

勇香「いやいやいや、軽すぎるだろ！もうちょっと何かあるだろ！」

璃音「紅刃は主人公よ？その内ピンチになったら再登場するわよ」

勇香「ずいぶんと気楽だなオイ」

フィレス『ガルル』

璃音「さて、今回のキーカードは《究極宝玉神　レインボー・ダーク・ドラゴン》よ」

勇香「お前、１０万祝う気ねえだろ？」

《究極宝玉神　レインボー・ダーク・ドラゴン》

効果モンスター
星１０／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ４０００／ＤＥＦ　　０
このカードは通常召喚できない。
自分の墓地に存在する闇属性モンスターを7種類ゲームから除外した場合のみ特殊召喚する事ができる。
このカードを除く自分フィールド上と自分の墓地に存在する闇属性モンスターを全てゲームから除外する事で、除外したカード1枚につき、このカードの攻撃力は５００ポイントアップする。

璃音「【ダークモンスター】なら、墓地に7種類揃えるのも難しくないわね」

勇香「いきなり攻撃力４０００は厳しいよな。でも、2番目の効果はあまり発動機会がなさそうだな」

璃音「《異次元からの埋葬》や《終焉の精霊》《ネクロフェイス》を使えば除外要員を確保できるわよ」

勇香「でもよ、こいつはＧＸのキャラが使ってたカードだって聞いたんだけど、それ使ってもいいのかよ？」

璃音「だからキーカードなんでしょ？ちゃんと秘密があるらしいわよ。そうじゃなきゃ、何もできずに即退場したモンスターなんて出さないわよ」

勇香「メタ発言全開かよ…」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「これからもよろしく！次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

ＰＶが１０万を越えたというのに、紅刃は降板したり暗い雰囲気で話が終わったりで、本編は全然めでたくありません…。明るい雰囲気に戻せるのはいつになるやら…。

ここからはしばらくオリジナルの話が続きます。セブンスターズ戦はもう少し先になりそうです。

ヒジュラの正体はまだ秘密ですが、オリカではありません。その内デュエルでも登場しますが、何のモンスターかわかった方もいるのではないでしょうか？

最後に、この小説を閲覧してくださってありがとうございます。これからも『Ｖｉｓｉｔｏｒｓ ｆｒｏｍ ｔｈｅ ｆｕｔｕｒｅ』をよろしくお願いします。

では、また次回！

第２１話　生死がはっきりしていないのは生存フラグだと思いたい（前書き）

お待たせしました、第２１話です。

懲りずにまたオリキャラが出ます。レギュラーじゃありませんけど…。

それではどうぞ！

第２１話　生死がはっきりしていないのは生存フラグだと思いたい

ＳＩＤＥ／俊也

「月沙！」

翌朝、僕は将人を連れて月沙とスイレンに会いに行った。将人は「会わせる顔がない」って言って嫌がってたけど、これからの戦いのために将人の協力はどうしても必要だ。そのためには、１度月沙とスイレンにも顔を見せた方がいい。

「あ、俊也！…あれ？」

「…よお」

「もしかして、将人！？」

『将人様！？』

「ああ。久しぶりだな、月沙、スイレン」

「フォッタが助っ人って事で呼んできたんだ」

あらかじめ２人で決めておいた嘘でつじつまを合わせる。

「そうなんだ！久しぶり、元気にしてた？」

「そうじゃなければここにいないだろう」

今は真逆の状態だけどね。

『あ、という事は、ゴーズ様とカイエン様もご一緒で？』

「ああ、ここにいる」

将人はデッキケースからカードを取り出し、２人に見せた。それと同時に、ゴーズとカイエン、そしてヒジュラが出て来た。

『おはようございます』

『まあ、この通りだ。これからは将人と共に戦うつもりだ』

「そっか。やっと会えたんだし、よかった」

『へえ、てめえらが波星月沙とスイレンか』

『え？どちら様ですか？』

『俺はヒジュラ。主の３人目の精霊だ』

「３人目！？」

「口の悪い押しかけ精霊だが、仲良くしてやってくれ」

『誰が口が悪いって？』

「お前だ、ヒジュラ。それと『押しかけ』は認めるのか」

「あはは…。私は波星月沙。よろしくね、ヒジュラ」

『私はスイレンと申します！これからよろしくお願いします！』

『ああ。…けっ、喧嘩の相手がいねえと張り合いねえな』

ヒジュラは頭を掻きながら仏頂面で呟いた。

「え？」

『ゼウスだよ。最初の頃は会う度に喧嘩してたし、今でも喧嘩仲間だ』

ちょっと待って。それ僕も初耳だよ？

「そ、そうなんだ…。紅刃ならこの学園で暮らしてるけど…」

『あいつらは今精霊世界にいる。冥界関係でトラブルがあったから救援要請が入ったらしくてな、カードを返したらすぐに行っちまった』

「トラブル？何があったんだろ…」

自然に話して真実を隠すヒジュラ。これなら当分は心配ないだろう。月沙にとって、紅刃が闇に飲まれたという事実は重すぎる。

『将人様、その手はどうしたのですか？』

スイレンが指を差したのは、包帯を巻いてある将人の右手だった。

「ここに来る前に怪我をしてな。特に問題はない」

『そうですか？ならいいのですが…』

悔しくて木を思い切り殴ったなんて言えないからか、上手くごまかした。

『あ、俊也様、ウィン様はいらっしゃいますか？お話がしたいのですが…』

「あ、ああ、ウィンはちょっと風邪を引いちゃって…」

『え！？』

「ウィンが？」

「セブンスターズの件もあるから、精霊世界のエンディミオンで休ませてるよ。敵の中に精霊が見える奴がいたら、いつ襲われるかわからないからね」

もちろん風邪というのも嘘。万が一スイレンがお見舞いに行った場合のために、ウィンと病院の人達に一芝居打ってもらうよう、病院まで運んでくれたゴーズに頼んでもらった。今はそれなりによくなってるみたいだ。

本当はウィンの側でずっと看病してあげたいけど、将人のためにここに残る事にした。

確かに、紅刃達が死んだも同然になってしまったのはとても悲しい。でも、人前では平静を装ってるけど、責任を感じてふさぎ込ん

でる将人の方がずっと悲しんでるんだ。ヒジュラは将人を正気に戻すためとはいえ、逆に紅刃達を犠牲にしてしまったのではないかと考えて落ち込んでるし、ゴーズとカイエンも近くにいたのに助け出す事ができなかった事を悔やんでいる。だから、僕がみんなを支えてやらなきゃいけないんだ。

月沙には、最低でもセブンスターズとの戦いが終わるまでは黙っておくつもりだ。もちろん、他のみんなにも。ここでみんながパニックになりでもしたら、最悪の事態になりかねない。

僕だって、1人より大勢が大切なんて考えは持ちたくない。でもこうするしかないんだ。憎まれ役は僕だけで充分だ。

SIDE／紅刃

「ん…いつつ…ここは…」

ふと目が覚めると、天井が見えた。俺はベッドで寝ていたみたいだ。

「目が覚めたか」

横を見ると、ゼウスがいた。

「ゼウス…。ここはどこだ?」

「冥界城の寝室だ。お前は城の外観を見る前に寝てしまったがな」

あ、記憶がはっきりしてきた。

誰かの攻撃で吹っ飛ばされた後、俺達はなんとか精霊世界にワープする事ができた。咄嗟だったからどこに出るかわかったもんじゃなかったけどな。無事にオーディンの故郷の冥界に着いたとわかったら、安心してその場で倒れちまって…気絶してる間にゼウスとオーディンが運んでくれたのか。2人も攻撃を受けたってのに、俺自身が情けない。

「お前、怪我はいいのか？」

「確かにあれは威力があったが、最上級モンスターならあの程度は足止めにしかならない。私もオーディンも完治している。後はお前だけだ」

「そうか。オーディンは？」

「ここに来たついでに仕事を片付けている途中だ」

そういや、オーディンは冥界の王だったな。

「ん？オーディンが仕事をしてるって事は、俺達の時代の冥界か？」

「そうだ。まあ、早く将人達と合流したいところだが、体を治すのが先だ。後2、3日もすれば大丈夫だろう」

「2、3日か…俺が死んだと思ってパニクってなけりゃいいけどな」

上半身が包帯だけだったから、近くにあった自分の赤いシャツを着ながら話を続けた。でも、なんでボロボロ？よく見たらズボンも悲惨な事になってる。

「月沙辺りなら最悪泣きかねない。セブンスターズとの戦いに悪影響を出さないためにも、早く戻らねばな」

「ああ。あれ、俺の上着は？」

「そこにあるが…」

ゼウスが指を差した先には、壁に掛けてあるオベリスク・ブルーの上着があった。のはいいんだけど…。

「…なんでボロボロ？」

「自分の服の状態も気付かなかったのか…。《ダークエンド・ドラゴン》に攻撃された時点であの有様だ」

上着は見るも無残な姿に変わり果てていた。なんか直しようがないくらいずたずたにされてるし、足まであった後ろの裾も短くなっている。

「うわぁ…帰ったら制服替えてもらおう」

とりあえず普段そうしているように着込むと、部屋のドアが開いてオーディンが入ってきた。

「起きていたか」

「オーディン！仕事はいいのか？」

「さっき全て終わらせた」

仕事早いな。だから人間界に留まってられるんだろうけど。

「それより、丁度いい。お前に会いたいという人物が2人来ている」

「俺に？」

俺に会いたい奴？誰だ？

「入れ」

オーディンが一言命じると、そいつらが部屋に入ってきた。

1人は茶髪で紫の瞳の男の子で、灰色のパーカーを着ている。歳は俺と龍亞の間くらいか？もう1人は黒いショートヘアと黒目の、月沙と同じくらいの女子だ。白い上着と黒いスカートといった身なりをしている。

「えっと…真川紅刃、だよな？」

男の子の方から先に話し掛けてきた。

「ああ、そうだけど…誰だお前ら？」

「俺は波星怜磨（なみぼしれいま）！よろしく、紅刃兄ちゃん！」

「あたしは木下鈴佳よ」

「怜磨に鈴佳か。俺は真川紅刃、よろし…ん？」

ちょっと待て、今どっかで聞いた単語が出て来たぞ？

「怜磨、お前の名字は？」

「波星だけど？」

「…お前、姉ちゃんいるか？」

「いるよ？月沙姉ちゃん。いつも紅刃兄ちゃんと一緒にいるだろ？」

「…は…」

「「「は？」」」

「はあぁぁあああぁぁあ！！？」

自分でも驚くくらいの大声で叫んじまった。

「あいつ弟いたのか！？聞いてねえぞそんな事！」

「いや、それは姉ちゃんが話してないだけだろ？」

「怜磨は元の世界での月沙の弟よ。私は元の世界での月沙の昔からの友達」

「元の世界？」

「月沙は自分の事をトリッパーだと言っていただろう？こやつらはトリップする前の世界の住人だ」

俺の疑問はオーディンが一発で解決してくれた。怜磨をよく見ると、どことなく月沙に似ている。

「あれ？怜磨と鈴佳って人間だろ？なんでこんな所に？」

「あたし達は1度死んだからよ」

「え…？」

「俺達は向こうの世界で死んじゃったんだ。ここは死んだら人間精霊関係なく行き着く場所だから、こうして冥界でのんびり暮らしてるってわけ」

「…悪かったな、嫌な事思い出させちまって…」

「そんな事より自分の体を心配しなさい。…そうだ」

鈴佳は何を思ったのか、部屋に置いてあるテレビをつけて、上着のポケットから取り出したリモコンをテレビに向けてボタンを押した。

『…勝者、シニョ～ラ月沙！』

画面を見た瞬間、目が点になった。

テレビに映ってるのは、デュエルアカデミアの実技の授業で丁度

勝った月沙だった。

「驚いた？このリモコンを操作すれば、特定の人の様子を見る事ができるの。暇な時はこれで月沙の様子を見てるのよ。もちろん時間軸も自由に設定できるわよ」

いや、これ盗撮じゃね？どういう仕組みかは聞かないけど、人権大丈夫か？

「他にも紅刃兄ちゃんや遊星のチャンネルも見てるよ。で、昨日紅刃兄ちゃんのチャンネルを見たら、将人さんとデュエルしてるのが映ってた」

「！」

あのデュエルも見られてたのか！？

「将人達はどうなった？」

「あんたが死人扱いされてるわよ。人前では元気そうに振る舞ってるけど、精神的なダメージが大きいみたい」

死人扱いて…。まあ、闇に引きずり込まれたように見えたんだからしゃあないか。早いとこ帰って再会しないとな。

「で、あんたを攻撃した奴もバッチリ映ってたわ」

「！誰だ！？」

「仮面と黒マントの男。男だというのは声で大体わかったわ。将人

を利用した張本人よ」

将人をあんな風にしちまった奴か。許せねえ…！

「将人はあのデュエルで使ったデッキを、自分の本来のデッキじゃないと言った。あのデッキは仮面の男から与えられた物よ」

「極めつけに、あのレインボー・ダーク・ドラゴン。あれは本来この世界に存在しないはずなんだ」

「存在しない？」

「たいていのダークモンスターは、特定のモンスターをベースにしてデザインされているんだ。《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》と《ダーク・アームド・ドラゴン》みたいにね」

万丈目が使っている武装龍と将人が出した黒い武装龍が脳裏に浮かぶ。色を除けば、確かにそっくりだ。

「で、レインボー・ダーク・ドラゴンのベースが《究極宝玉神　レインボー・ドラゴン》。でも、これは後々ある人物が手に入れる世界で１枚だけのカードなんだ。原作知識になるから誰かは言えないけどな」

「世界で１枚だけ…。遊戯さんの《ブラック・マジシャン・ガール》みたいなもんか」

「で、それがある原因でダーク化したのがレインボー・ダークなんだ。つまり、レインボー・ダークは今は存在しない」

「逆に、あたし達がいた世界ではどこにでもある普通のカードとして売り出されているわ。つまり、あいつは月沙と同じトリッパー。イレギュラーと繋がってる可能性だって充分有り得るわ」

トリッパーで、イレギュラーとも関係があるかもしれない。なら、どうにかしてそいつを取っ捕まえるのが1番か…？

「この世界は、あたし達にとってはアニメの世界。あたし達の世界は、遊星の《スターダスト・ドラゴン》や遊戯の《ブラック・マジシャン・ガール》ですら普通のカードとして売ってて、いろんな人が使ってるようなところよ。そこの住人が敵に回ったら、どんなモンスターが出て来るかわからないわよ？地縛神なんか出されたらたまったもんじゃないわ」

「地縛神まで売ってんのかよ！？」

あんな化け物クラスのモンスターとはもう戦いたくねえぞ！？つーかこいつらの世界別の意味で怖え！

「そこでよ！あんたは唯一シンクロモンスターを使ってない！」

「…そうだけど、それがどうかしたか？」

「ゴーズとカイエンが抜けた事で、あんたのデッキは多少回りやすくなったわ。カイエンが自分達が事故要員じゃないかってよく落ち込んでたくらい、《天空の聖域》入り【エンジェル・パーミッション】とゴーズは相性が悪いのよ。それは、実際にデッキを使ってるあんたが1番よく知ってるはずよ」

確かに、ゴーズが手札にある状態でダイレクトアタックを受ける

時、必ずしもフィールドが空なわけじゃなかった。てか、カイエンそんな事考えてたのか。なんで気付いてやれなかったんだ…？

「でも、相手は異世界人。今回みたいにいきなりシンクロ召喚してくる事もあるし、1ターンキルに特化したデッキさえ使ってくる可能性もあるわ。あんたも、いざという時のためにシンクロ召喚できるようにした方がいいわ」

鈴佳の言う事は正論だ。でも、俺がシンクロ召喚を使わないのには理由がある。

「鈴佳、なんで俺がシンクロ召喚しないか知ってるか？」

「何よ？」

「天使族のチューナーとシンクロモンスターを知らないんだ」

「「…は？」」

鈴佳と怜磨の声が綺麗に重なった。

「アカデミアでも習った事ないし、そもそも俺のデッキにシンクロ

召喚のギミックまで投入したら事故るんじゃないかって…」

「ハァ…安心なさい。ちゃんと天使族のチューナーもシンクロモンスターもあるわよ」

「マジで!?」

「ボルテニスを使うからなるべく天使族で統一したいんでしょ?それに、あたし達の世界じゃ、シンクロも入れた【パーミッション】だって存在するわよ」

「あ、なんだ…そんなデッキもあるのか…」

聞いた事ないから無理だと思ってたけど、大丈夫なら後は集めるだけだ。

「ほら」

鈴佳はポケットからケースを出し、何枚かのカードを取り出してそのまま俺に渡した。

「これは…!」

「天使族のチューナーよ。で、シンクロモンスターはこっち」

さらにシンクロモンスターのカードも何枚か取り出す。でも、急に手が止まった。

「…」

「どうした？」

「いえ…このカードは必要かしらって思って…。正直、こっちのシンクロモンスターの方が強いし…」

一応、その2枚のカードを確認した。両方召喚条件は同じだけど、効果も種族も違う。

「…こいつも使う」

「え？」

「必要ないカードなんて1枚もない。もしこいつが弱いっていうんなら、俺はこいつの強さを証明する。貰うぞ」

鈴佳は少し目を見開いて俺を見た後、口元を緩めた。

「そうね。そんな事、どっかのメ蟹ックも言ってたわね」

「メ蟹ック？」

「あ、いや、こっちの話よ！」

「？」

「くしゅっ！」

「兄さん、どうしたの？」

「なんでもない。…風邪か？」

「そういえば、私達ここ最近一睡もしてないわね。少し休みましょう」

「ああ…（特に体調はなんともないんだが…）」

「じゃあ、デッキを組んで1時間後に城の中庭でデュエルよ。対戦相手が待ってるわ。場所はオーディンに教えてもらいなさい。それじゃ、また後で」

「対戦相手？お前らじゃないのか？」

「ああ。誰かはお楽しみだ。じゃあな！」

鈴佳と怜磨はそれだけ伝えると部屋を出て行った。

「シンクロ召喚…か…」

「アカデミアではしばらく使えないだろうが、持っておくに越した事はない」

「だな。じゃ、早速組むか！」

1時間後、デッキを組み終わった俺はオーディンとゼウスに案内されて中庭に向かった。まだ昼間だってのに、空は夜になっていた。

「今、昼だよな？」

「冥界は万年夜だ。いつも満月に照らされている」

月光が中庭に差し込んで、いかにも神秘的な雰囲気を醸し出している。庭を見て綺麗だなんて思うのは初めてだ。

「来たわね」

中庭の中央には石でできたサークルがあり、鈴佳と怜磨はその中に立っていた。

「いいデッキは組めたかしら？」

「おかげ様でな。で、そいつは誰だ？」

2人以外にももう1人いた。腰に何本もの剣を差して、深緑のマントと同色のターバンを身につけた金髪の男だ。

「あんたの対戦相手よ」

「俺の？ええと、名前は…」

「私の名はクヴァシル。精霊世界の各地を旅している者だ。真川紅刃、君の事情は既に聞いている」

「え？」

「そろそろ力を与えるべきだと考えてここに来た。どのみち、君には1度ここに来てもらうつもりだったがな」

力？何者だこいつ？

「力って…どういう事だ？」

「オーディンとゼウスの新たな力だ」

「何だと？」

新たな力。その言葉にオーディンが反応した。

「このデュエルは、その新たな力を使いこなせるかを見極めるデュエルだ。私を倒してみろ」

クヴァシルの左腕にデュエルディスクが現れ、デッキが自動でシャッフルされた。どうやって出してんだよ…。

「誰だか知らないけど、いいぜ。やってやろうじゃねえか！」

俺もディスクを左腕に付けて展開させた。それと同時に、ゼウスとオーディンがカードに入る。

「ここはデュエル場としても使われてるわ。なかなかいい場所でしょ？」

「俺達は離れて見てるよ」

怜磨が鈴佳から離れていった後、俺とクヴァシルもある程度距離を取った。

「さあ、始めようか」

「全力で行くぜ！」

「「デュエル！」」

紅刃ｖｓクヴァシル

「私のターン！永続魔法《神の居城－ヴァルハラ》を発動！自分の場にモンスターが存在しない時、手札から天使族モンスター１体を特殊召喚できる」

《神の居城－ヴァルハラ》
永続魔法
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札から天使族モンスター１体を特殊召喚できる。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

天使族を特殊召喚…。あいつも俺と同じ天使族使いか。

「ヴァルハラの効果で、手札から《堕天使アスモディウス》を特殊召喚！」

「堕天使？」

居城から現れたのは、紫の翼を背に生やした闇の天使だった。

《堕天使（だてんし）アスモディウス》

効果モンスター

星８／闇属性／天使族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２５００

このカードはデッキまたは墓地からの特殊召喚はできない。

１ターンに１度、自分のデッキから天使族モンスター１体を墓地へ送る事ができる。

自分フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分フィールド上に「アスモトークン」（天使族・闇・星５・攻１８００／守１３００）１体と、「ディウストークン」（天使族・闇・星３・攻／守１２００）１体を特殊召喚する。

「アスモトークン」はカードの効果では破壊されない。

「ディウストークン」は戦闘では破壊されない。

《堕天使アスモディウス》　ＡＴＫ／３０００

「いきなり攻撃力３０００かよ…。ジャックを思い出すな…」

「元キングはたいていそうだったわね。今でもやってるけど」

「ヘックシュ！」

「どうしたジャック？風邪か？」

「いや、そんなはずはない。この俺がそんな柔な体質だと思うか？」

「まあ、お前が病気で弱ってるところ自体想像つかないけどな。それに馬鹿は風邪を引かないし」

「何だと！？勇香貴様ぁ！」

「だったらさっさと就職しろ！職探しに付き合ってやってんのに今日で何件はねられたと思ってんだ！？」

「アスモディウスの効果発動！デッキから天使族モンスターを1体墓地に送る！」

効果を使った！

「そいつを長く居座らせるわけにはいかねえな！手札の《朱光の宣告者》の効果発動！こいつと天使族モンスター1体を墓地に送る事で、モンスター効果を無効にし、そのモンスターを破壊する！」

《朱光の宣告者（バーミリオン・デクレアラー）》
チューナー（効果モンスター）
星2／光属性／天使族／ＡＴＫ　３００／ＤＥＦ　５００
このカードと天使族モンスター1体を手札から墓地へ送って発動する。

相手の効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する。
この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

「手札から《光神機－轟龍》と一緒に墓地に送るぜ」

朱色の光が堕天使を浄化する。まさか宣告者にモンスター効果版があったとはな。チューナーだし、汎用性は高そうだ。

「最初から動きを封じられるとはな。だが、アスモディウスは破壊された時、《アスモトークン》と《ディウストークン》を場に残す」

《アスモトークン》
トークン
星５／闇属性／天使族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ１３００
カードの効果では破壊されない。

《ディウストークン》
トークン
星３／闇属性／天使族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ１２００
戦闘では破壊されない。

《アスモトークン》　ＡＴＫ／１８００

《ディウストークン》　ＤＥＦ／１２００

トークンを２体も残すのかよ…そんなモンスター聞いた事ねえぞ？

「私はまだ通常召喚をしていない。《アスモトークン》をリリースして《光神テテュス》をアドバンス召喚！」

今度は光属性の天使。結局上級モンスターが場に残ったか。

《光神(こうしん)テテュス》
効果モンスター
星５／光属性／天使族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１８００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分がドローしたカードが天使族モンスターだった場合、そのカードを相手に見せる事で自分はカードをもう１枚ドローする事ができる。

《光神テテュス》　ＡＴＫ／２４００

「カードを２枚セットしてターンエンド！忠告しておくが、《ディウストークン》は戦闘では破壊されない」

クヴァシル
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《光神テテュス》（ＡＴＫ／２４００）《ディウストークン》（ＤＥＦ／１２００）
魔法・罠／《神の居城－ヴァルハラ》リバース×２

さて、俺も行くか！

「俺のターン！永続魔法(コート・オブ・ジャスティス)を発動！俺の場にレベル１の天使族がいる場合、１ターンに１度手札から天使族モンスターを特殊召喚できる！」

「ヴァルハラに対して《コート・オブ・ジャスティス》か…」

両方効果は似たようなもんだけど、長所は違うんだよな。《コー

ト・オブ・ジャスティス》はヴァルハラと違って他にモンスターがいても効果を使えるけど、レベル１の天使族モンスターが必要なのが一手間かかる。

「そして、《勝利の導き手フレイヤ》を召喚！」

レベル１の天使族が必要な俺のデッキじゃ、こいつの全体強化は助かる。たかが４００、されど４００だ。

《勝利の導き手フレイヤ》　ＡＴＫ／　１００↓　５００

「フレイヤはレベル１の天使族モンスターだ。よって、《コート・オブ・ジャスティス》の効果を使用する事ができる！手札から《豊穣のアルテミス》を特殊召喚！」

毎度お馴染み【パーミッション】必須モンスターだ。こいつがいなきゃ始まらない！

《豊穣のアルテミス》　ＤＥＦ／１７００↓２１００

「カードを１枚セットし、ターンエンドだ！」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《勝利の導き手フレイヤ》（ＡＴＫ／　５００）《豊穣のアルテミス》（ＤＥＦ／２１００）
魔法・罠／リバース×１

「手札を使い切ったか。私のターン！テテュスが場に存在する時、

ドローしたカードが天使族だった場合、それを相手に見せる事でもう1度ドローできる」

「ドローブーストかよ…」

「ドロー！《堕天使スペルビア》！もう1枚ドロー！《ダーク・ヴァルキリア》！ドロー！《オネスト》！ドロー！…ここで終了だ」

おい、最後変なの入ってなかったか？

「《天使の施し》を発動！カードを3枚ドローし、手札を2枚捨てる！」

またドローか。スペルビアとテテュスが墓地に送られるのが見えた。

「そして、《ダーク・ヴァルキリア》を召喚！」

青い服と機械みたいな翼が特徴の堕天使が現れた。

《ダーク・ヴァルキリア》
デュアルモンスター
星４／闇属性／天使族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ１０５０
このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。
●このカードが表側表示で存在する限り1度だけ、このカードに魔力カウンターを1つ置く事ができる。

このカードの攻撃力は、このカードに乗っている魔力カウンターの数×３００ポイントアップする。
その魔力カウンターを１つ取り除く事で、フィールド上のモンスター１体を破壊する。

《ダーク・ヴァルキリア》　ＡＴＫ／１８００

「行くぞ！《光神テテュス》でアルテミスを攻撃！」

「させるか！カウンター罠《攻撃の無力化》！バトルフェイズを終了させる！」

「防いだ…！」

「アルテミスの効果で１枚ドロー！」

「仕方ない。カードを１枚セットしてターンエンド」

クヴァシル
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《光神テテュス》（ＡＴＫ／２４００）《ディウストークン》（ＤＥＦ／１２００）《ダーク・ヴァルキリア》（ＡＴＫ／１８００）
魔法・罠／《神の居城－ヴァルハラ》リバース×３

「俺のターン！《強欲な壺》を発動！２枚ドローする！さらに《天使の施し》を発動！３枚ドローし、カードを２枚捨てる！」

手札は３枚…。クヴァシルの手札には《オネスト》がいる。テテ

ユスには攻撃できないな。

「アルテミスを攻撃表示に変更！バトル！アルテミスで《ダーク・ヴァルキリア》を攻撃！シャイン・シュート！」

《豊穣のアルテミス》　ＤＥＦ／２１００→ＡＴＫ／２０００

アルテミスの光弾は、特に妨害を受ける事もなく標的に命中した。

クヴァシル　ＬＰ／４０００→３８００

「カードを2枚セット。ターンエンドだ」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《勝利の導き手フレイヤ》（ＡＴＫ／　５００）《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／２０００）
魔法・罠／《コート・オブ・ジャスティス》リバース×２

「私のターン、ドロー！テテュスの効果発動！《アテナ》を見せてもう1枚ドロー！魔法カード《光神化（こうしんか）》を発動。手札の天使族を攻撃力を半分にして特殊召喚する！」

《光神化》
速攻魔法
手札の天使族モンスター1体を特殊召喚する。
このカードで特殊召喚されたモンスターは攻撃力が半分になり、エンドフェイズ時に破壊される。

「この効果で、私は《アテナ》を特殊召喚！」

青白い光を纏い、新たな天使が舞い降りる。

《アテナ》
効果モンスター
星７／光属性／天使族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ　８００
自分フィールド上に存在する「アテナ」以外の天使族モンスター１体を墓地に送る事で、自分の墓地に存在する「アテナ」以外の天使族モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する。この効果は１ターンに１度しか使用できない。
フィールド上に天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚される度に、相手ライフに６００ポイントダメージを与える。

《アテナ》　ＡＴＫ／２６００→１３００

「《アテナ》か…。確か、バーン効果を持ってたな」

待てよ？《光神化》を使ったって事は…。

「それだけではない。リバースカードオープン《地獄の暴走召喚》！特殊召喚した攻撃力１５００以下のモンスターと同名カードを自分の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する！」

《地獄の暴走召喚》
速攻魔法
相手フィールド上に表側表示モンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力１５００以下のモンスター１体の特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。
その特殊召喚したモンスターと同名カードを自分の手札・デッキ・

墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する。
相手は相手フィールド上のモンスター1体を選択し、そのモンスターと同名カードを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。

「デッキから《アテナ》を2体特殊召喚！」

《アテナ》　ＡＴＫ／２６００

《アテナ》　ＡＴＫ／２６００

やっぱりな…。大量展開から一気に押し切るつもりだ。《光神化》で攻撃力が半分になるからこそできるコンボだ。

「君もフレイヤかアルテミスを出すんだ」

「…アルテミスをデッキから2体特殊召喚する」

《豊穣のアルテミス》　ＤＥＦ／１７００→２１００

《豊穣のアルテミス》　ＤＥＦ／１７００→２１００

「フレイヤを出してさらに強化はしないのか」

「《オネスト》があるし、どうせ最上級ビートなんだから長く持たないさ」

「わかっているみたいだな。光神化で特殊召喚した《アテナ》の効果発動！自分フィールドの天使族1体を墓地に送り、墓地から天使族モンスターを特殊召喚する！《ディウストークン》を墓地に送り、

《ダーク・ヴァルキリア》を特殊召喚！」

《ダーク・ヴァルキリア》　ＡＴＫ／１８００

「《アテナ》３体の効果発動！天使族モンスターが特殊召喚された時、相手に６００ポイントのダメージを与える！１８００ダメージを受けてもらう！」

「やばい！これを後２回も繰り返されたら…！」

「このターンで確実に負けるわね…（さあ、紅刃…あんたはこれをどう切り抜ける？）」

大型モンスターばっか展開して来やがって…【天使族】にもいろいろあるな。

でも、この先オーディンとゼウスの新たな力が必要になる。ここで負けるわけにはいかねえんだ…！

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第２１話　生死がはっきりしていないのは生存フラグだと思いたい（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「…私達、一応再登場したな…」

璃音「私は名前出て来なかったんだけど」

勇香「いいだろ、遊星を『兄さん』って呼べば特定できるんだし。むしろまたオリキャラが増えたのが問題だろ」

璃音「三幻魔編前半の重要人物だから多めに見てあげなさい。確かにオリキャラが多いと読者が混乱する可能性があるけど」

フィレス『グルルゥ』

璃音「さて、今回のキーカードは《アテナ》よ」

《アテナ》
効果モンスター
星７／光属性／天使族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ　８００
自分フィールド上に存在する「アテナ」以外の天使族モンスター１体を墓地に送る事で、自分の墓地に存在する「アテナ」以外の天使族モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する。この効果は１ターンに１度しか使用できない。
フィールド上に天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚される度に、相手ライフに６００ポイントダメージを与える。

勇香「天使族で固めとけば簡単にバーンダメージを使えるな」

璃音「フィールドと墓地の天使族モンスターを入れ替える効果も強力よ」

勇香「《アテナ》や召喚制限がかかってる奴以外なら最上級でもガンガン出せるのもいいな」

璃音「今回クヴァシルがやったように《光神化》と《地獄の暴走召喚》で3体展開できれば1ターンキルも夢じゃないわね」

勇香「怖っ…。相手の天使族でもダメージが出るからミラーマッチだと悲惨な事になるな。紅刃大丈夫か？」

璃音「他にも、こんな使い方があるわよ。まず、《光神機－桜火》を妥協召喚する。次に《アテナ》の効果で桜火を墓地に送り、その桜火を特殊召喚する」

勇香「あ、そんな事できるのか」

璃音「こうすれば自壊効果が消えるからフィールドに留まる事ができるわ。《ダーク・ヴァルキリア》なら、通常召喚が必要だけど毎ターンデュアル効果が使えるわよ」

勇香「しかも《アテナ》の効果で追加で１２００ダメージ…あまり敵に回したくないな、こういう奴…」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

またオリキャラが…。どうしても出さざるをえなかったんです、すみません…。

今回のデュエルは試練みたいなものですので、コンセプトは違うけど【天使族】同士でやらせてみました。ただ、紅刃の手札消費が余計多くなって書くのが難しく…。次回こそはシンクロ召喚させます。

では、また次回！

第２２話　冥界には３０００年前のあの人もいる（前書き）

お待たせしました、第２２話です。

今回でクヴァシルとのデュエルは決着が着きます。そして、他にもいろんな変化があります。

それではどうぞ！

第２２話　冥界には３０００年前のあの人もいる

ＳＩＤＥ／紅刃

「《アテナ》３体の効果発動！天使族モンスターが特殊召喚された時、相手に６００ポイントのダメージを与える！１８００ダメージを受けてもらう！」

クヴァシル
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《光神テテュス》（ＡＴＫ／２４００）《アテナ》（ＡＴＫ／１３００）《アテナ》（ＡＴＫ／２６００）《ダーク・ヴァルキリア》（ＡＴＫ／１８００）
魔法・罠／《神の居城－ヴァルハラ》リバース×２

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《勝利の導き手フレイヤ》（ＡＴＫ／　５００）《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／２０００）《豊穣のアルテミス》（ＤＥＦ／２１００）《豊穣のアルテミス》（ＤＥＦ／２１００）
魔法・罠／《コート・オブ・ジャスティス》リバース×２

俺は今、クヴァシルって奴とデュエルをしている。シンクロを混ぜた新デッキを試すってのもあるけど、オーディンとゼウスの新たな力を手に入れるためでもある。

「やばい！これを後2回も繰り返されたら…！」

「このターンで確実に負けるわね…」

でも、状況はあまりよくない。てかこのままだと1ターンキルされちまう。手札増強も兼ねて、伏せた罠カードに手を掛けた。

「カウンター罠《地獄の扉越し銃》！自分へのダメージを代わりに相手に与える！」

《地獄の扉越し銃》
カウンター罠
ダメージを与える効果が発動した時に発動する事ができる。
自分が受けるその効果ダメージを相手に与える。

「ぐぅ…！」

光神化した《アテナ》の攻撃をカードが吸収する。すると、カードから赤い銃が飛び出して、クヴァシルを自動で狙撃した。

クヴァシル　ＬＰ／４０００→３４００

「アルテミス3体の効果で合計3枚ドロー！」

いつもの3倍だ。丁度手札が切れてきたから助かる。

「だが、まだ2体いる！」

「通さねえよ！手札の《ハネワタ》の効果発動！こいつを墓地に送る事で、このターン俺が受ける効果ダメージは0になる！」

《ハネワタ》
チューナー（効果モンスター）
星１／光属性／天使族／ＡＴＫ　２００／ＤＥＦ　３００
このカードを手札から捨てて発動する。
このターン自分が受ける効果ダメージを０にする。
この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

「あれ？なんで最初から《ハネワタ》を使わなかったんだ？」

「たった今引いたカードにあったか、手札を増やすためにあえてタイミングをずらしたかのどっちかね」

さすが鈴佳。ちなみに、正解は後者だ。俺のデッキって手札消費が激しいから、ドロー強化によく悩まされてるんだよな…。

「《ダーク・ヴァルキリア》を再度召喚、そして効果発動！魔力カウンターを１つ乗せ、攻撃力を３００ポイントアップさせる！」

《ダーク・ヴァルキリア》　ＡＴＫ／１８００→２１００

「さらに、魔力カウンターを１つ取り除く事で、相手モンスター１体を破壊できる！フレイヤを破壊する！」

堕天使の闇の波動で、フレイヤが破壊される。全体強化と《コート・オブ・ジャスティス》を警戒してきたか？

《豊穣のアルテミス》　ＡＴＫ／２０００→１６００

《豊穣のアルテミス》　ＤＥＦ／２１００→１７００

《豊穣のアルテミス》　ＤＥＦ／２１００→１７００

「魔力カウンターを失った《ダーク・ヴァルキリア》の攻撃力は元に戻る」

《ダーク・ヴァルキリア》　ＡＴＫ／２１００→１８００

「バトル！《ダーク・ヴァルキリア》でアルテミスに攻撃！」

「カウンター罠《攻撃の無力化》！バトルフェイズを終了させる！」

本日2回目の時空の渦が堕天使の攻撃を吸い込んだ。

「2枚目か…」

「アルテミスの効果でカードを3枚ドロー！」

「勝負を急ぎすぎたか。カードを1枚セットしてターンエンドだ。エンドフェイズに、《光神化》で特殊召喚した《アテナ》は破壊される」

クヴァシル
ＬＰ／３４００
手札／２
モンスター／《光神テテュス》（ＡＴＫ／２４００）《アテナ》（ＡＴＫ／２６００）《アテナ》（ＡＴＫ／２６００）《ダーク・ヴァルキリア》（ＡＴＫ／１８００）
魔法・罠／《神の居城－ヴァルハラ》リバース×３

さて、あの《アテナ》2体をどうにかしないとな。手札も溜まったし、行くか！

「俺のターン！」

引いたのはレベル7のモンスター。よし、行ける！

「魔法カード《ライトニング・ボルテックス》を発動！手札を1枚捨て、相手の表側表示のモンスターを全て破壊する！」

「何！？」

《ライトニング・ボルテックス》
通常魔法
手札を1枚捨てて発動する。
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。

「くっ…ならば、罠カード発動《無力の証明》！私の場にレベル7以上のモンスターが存在する時に発動可能だ。相手のレベル5以下のモンスターを全て破壊する！」

《無力の証明》
通常罠
自分フィールド上にレベル7以上のモンスターが表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。
相手フィールド上に表側表示で存在するレベル5以下のモンスターを全て破壊する。
このカードを発動するターン、自分フィールド上に存在するモンスターは攻撃する事ができない。

「な！？」

３体のアルテミスが破壊された直後、巨大な稲妻の渦が発生し、クヴァシルのモンスターは全てそれに飲み込まれた。

「ちゃんと対策してやがったのか…！」

「そう簡単に敗れるつもりはないからな」

さすがに一筋縄じゃいかないか。上手く行けばこのターンで俺の勝ちだったんだけどな。

「だったら別の手で攻めるだけだ！チューナーモンスター《ハネワタ》を召喚！」

羽のあるオレンジの丸い天使が召喚される。

《ハネワタ》　ＡＴＫ／　２００

「こいつはレベル１だ！《コート・オブ・ジャスティス》の効果で、手札から《天空勇士ネオパーシアス》を特殊召喚！」

黄金の輪の中から結晶化した天空騎士が降りてきた。

《天空勇士ネオパーシアス》　ＡＴＫ／２３００

「レベル１とレベル７…」

「多分、あれを出すつもりね」

「行くぜ！レベル７《天空勇士ネオパーシアス》にレベル１《ハネワタ》をチューニング！」

《ハネワタ》が１つの黄色い輪になる。その中にネオパーシアスが飛び込み、黄色みを帯びて輝く白い７つの星になる。

「舞い散る白羽が、天空を翔け現世を照らす！希望の光を振り翳(かざ)せ！」

思えば、サブデッキをしばらく使ってないからシンクロ召喚は本当に久しぶりだな。久々のシンクロ召喚で出すのは、こいつだ！

「シンクロ召喚！飛来せよ！《ライトエンド・ドラゴン》！！」

天使のような翼を広げ、純白の聖龍がフィールドを照らす！

《ライトエンド・ドラゴン》
シンクロ・効果モンスター
星８／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ２１００
チューナー＋チューナー以外の光属性モンスター１体以上
このカードが戦闘を行う場合、モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
このカードの攻撃力・守備力は５００ポイントダウンし、このカードと戦闘を行う相手モンスターの攻撃力・守備力はエンドフェイズ時まで１５００ポイントダウンする。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「ゴアァァァアアア！！」

ライトエンドが咆哮する。よし、気合い充分だ…

カァアアァア…

「！？」

「何！？」

「え！？」

「これは…！？」

突然、ライトエンドが黄色く輝き出した。それと同時に、ディスクに置かれたライトエンドのカードも黄色に光り始めた。

ＳＩＤＥ／将人

調整が済んだデッキを束ね、ベッドに寝転んだ。

俺はあれからデュエルアカデミアに編入する事になった。編入生は始めはオシリス・レッドに所属するらしく、俺もそれに従った。今は俊也と同じ部屋で暮らしている。

だが、気分は優れない。どうしてもあの夜の事件が脳裏に焼き付いて離れようとしない。

俺は取り返しのつかない罪を犯してしまった。言い訳はしない。月沙がこの事を知ったら、間違いなく俺を恨むだろう。

俊也から聞いたが、月沙は紅刃とかなり仲が良く、紅刃に対して恋愛感情すら抱いていたらしい。その紅刃がもうこの世にいないと知ったらどうなる？あまり考えたくない。

よく周り――主に十代――からデュエルを挑まれるが、全部断っている。授業の場合は仕方ないが、それ以外だととてもやる気にはなれない。

少し寝るか。外出する気力もない。

カァアァアア…

「ん？」

狭まる視界に、紫の光が差し込む。横を見ると、机の上に置いたデッキが光っている。

起き上がってみると、デッキではなく1枚のカードが紫色に淡く輝いているのがわかった。光っているのは《ダークエンド・ドラゴン》だ。

カードを手に取ってみた。特に何があるというわけでもない。数秒後光は収まり、それ以上は何も起こらなかった。

「何だ、今のは…？」

ＳＩＤＥ／紅刃

しばらく経つと、ライトエンドとカードの光が消え、召喚した時と同じ状態に戻った。

「今のは、一体…」

俺は特に何もしていない。じゃあ、今の現象は何だったんだ…？

「今は気にする事じゃない。続けるぞ」

「っと、そうだったな」

怪奇現象は後回しだ。今はデュエルに集中しろ。

でも、なんか体が少し軽くなったような…。気のせいか？

「行くぜ、バトル！《ライトエンド・ドラゴン》でダイレクト…」

「罠カード《威嚇する咆哮》！このターンお前は攻撃宣言を行えない！」

ライトエンドは攻撃の構えを取る前に、カードから飛び出した咆哮に怯んでしまった。

「どのみち戦闘ダメージはなしか。カードを2枚セットしてターンエンドだ！」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《ライトエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／《コート・オブ・ジャスティス》リバース×２

「私のターン！《神の居城－ヴァルハラ》の効果発動！」

フィールドががら空きだから効果を使う事ができるようになったか。次は何が来る？

「出でよ、《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》！」

《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》（ザ・スプレンディッド・ヴィーナス）

効果モンスター

星８／光属性／天使族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２４００

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する天使族以外の全てのモンスターの攻撃力と守備力は５００ポイントダウンする。

また、自分がコントロールする魔法・罠カードの発動と効果は無効化されない。

《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》　ＡＴＫ／２８００

４枚の白い翼に黄金の体。見た事のない天使がフィールドに舞い降りた。

「初めて見たな」

「これは特別なカードだ。人間界では世界に１枚しかないプラネットシリーズの内の１枚とされている」

なるほど、道理で知らないわけだ。

「《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》が場にいる限り、天使族以外のモンスターは攻撃力と守備力が５００ポイントダウンする」

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００→２１００

デッキが【天使族】でよかった…。実質攻撃力３３００じゃねえ

かそいつ。

「魔法カード《禁じられた聖杯》を発動！このターンの間の攻撃力（ライトエンド・ドラゴン）を４００ポイントアップさせ、効果を無効にする！」

《禁じられた聖杯》
速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。
エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は４００ポイントアップし、効果は無効化される。

ライトエンドの効果を警戒してきたか？

「させるかよ！リバースカードオープン！」

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２１００→２５００

「な！？発動しない！！」

俺が《禁じられた聖杯》を防ぐべく使おうとしたカードは、なぜか発動しなかった。

「《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》が場にいる限り、私の魔法・罠は無効化されない」

そんなのありかよ！？俺のデッキには魔法・罠に対抗できるカウンター罠が多い。それらを全部封じられるのは厳しい。

「行くぞ！《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》で《ライト

エンド・ドラゴン》に攻撃！ホーリー・フェザー・シャワー！」

無数の白羽が矢のように発射され、ライトエンドを貫き破壊した。

「ぐっ…！」

紅刃　ＬＰ／４０００→３７００

「ターンエンドだ」

クヴァシル
ＬＰ／３４００
手札／１
モンスター／《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／《神の居城－ヴァルハラ》

ライトエンドがやられた今、俺のフィールドはがら空きだ。次で逆転のカードが引けないと、多分負ける…！

「俺の…ターン！！」

！

「モンスターをセットし、ターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／３７００
手札／１
モンスター／リバース×１

魔法・罠／《コート・オブ・ジャスティス》リバース×２

「モンスターをセットしただけ…」

「クヴァシルのデッキは上級モンスターを特殊召喚で展開するデッキ。殴り負けする事はほとんどないわね。しかも、手札には《オネスト》がいる」

言ってろ。まだ手はある。

「まずいよ…魔法・罠を無効にできないんじゃ、どうしようもないよ…」

「それはどうかな？」

後ろから、聞き慣れない声が聞こえた。

「確かに、今の紅刃君の状況は絶望的だ。だが…紅刃君、君はこんなところで諦めるようなデュエリストじゃないだろう？」

後ろに振り返ると、１人の男が立っていた。

瞳の色は紫で、青い学ランと黒いシャツを着ている。そして、何よりも髪型が目立つ。色は赤と黒と黄色で、形は…何かヒトデ？みたいな感じだ。しかも、前にどこかで見た事あるような気がする。

ただ、一目見て『こいつは強い』と判断できた。それだけ、こいつの雰囲気が異質だという事だ。強い奴ならたくさん会ってきた。でも、十代や遊星とも、ジャックや亮さんとも違う感じがする。

でも、言葉の意味ははっきりとわかる。

「当然だろ？誰が諦めるかよ！」

「その意気だ」

男は微笑すると鈴佳と怜磨の隣りに並んだ。このまま観戦するつもりらしい。

「なんであんたがここに…」

「たまたま通り掛かっただけだ」

ん？あいつら知り合いなのか？…まあ、いいや。

「続けるぞ。私のターン！」

クヴァシルはドローした後、しばらく黙り込んだ。

「（本来ならこのまま《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》で攻撃し続けて後続のモンスターを待てばいずれ勝てる。だが、今回はそう都合よく行かないだろう。ここは紅刃を試す意味でも…）」

やがて、意を決したのか引いたカードをディスクに差し込んだ。

「魔法カード《天よりの宝札》を発動」

「「「「!?」」」」

「互いに手札が6枚になるようにカードをドローする。私は5枚ドローする」

「…俺も5枚ドローだ」

「ここでドロー加速…決めに来たわね」

「でも、同時に紅刃の手札も増えた。勝負はまだわからないよ」

「ああ。それに、あの《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》には弱点がある」

「弱点？」

「魔法カード《光神化》を発動。手札から《緑光の宣告者》を特殊召喚する」

《アテナ》の時と同じように青白い光を纏い、朱光とも紫光とも違う緑色の宣告者が飛び出した。

《緑光の宣告者（グリーン・デクレアラー）》
効果モンスター
星２／光属性／天使族／ＡＴＫ　３００／ＤＥＦ　５００

自分の手札からこのカードと天使族モンスター1体を墓地に送って発動する。
相手の魔法カードの発動を無効にし、そのカードを破壊する。
この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

《緑光の宣告者》　ＡＴＫ／　３００↓　１５０

「さらに、《緑光の宣告者》をリリースし、《堕天使ディザイア》をアドバンス召喚！」

出されたばかりの宣告者と入れ代わり、黒と金の鎧を着た堕天使が現れた。

《堕天使ディザイア》
効果モンスター
星１０／闇属性／天使族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２８００
このカードは特殊召喚できない。
このカードは天使族モンスター1体をリリースしてアドバンス召喚する事ができる。
1ターンに1度、自分のメインフェイズ時にこのカードの攻撃力を１０００ポイントダウンし、相手フィールド上に存在するモンスター1体を墓地へ送る事ができる。

《堕天使ディザイア》　ＡＴＫ／３０００

「レベル１０のモンスターを1体で！？」

「ディザイアは特殊召喚できない代わりに、天使族モンスター1体のリリースでアドバンス召喚できる」

それで攻撃力３０００かよ…。少しまずいか？

「（あの伏せモンスターは戦闘破壊耐性を持っている可能性は高い。堅実に除去しておくか）ディザイアの効果発動！」

効果…！？

「攻撃力を１０００ポイント下げる事で、相手モンスター１体を墓地に送る！」

「まずいよ！これが決まったら連続攻撃で紅刃の負けだ！」

「それはない」

焦る怜磨に、男は動じずに言い切った。

「え？」

「どうしてそう言い切れるのかしら？」

「…この時を待ってたぜ！」

「何？」

「カウンター罠発動《天罰》！手札を1枚捨て、モンスター効果の発動を無効にし、そのモンスターを破壊する！」

天から雷が落ち、ディザイアを消し飛ばす！

「…なるほど、考えたな」

「《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》の効果は、『魔法と罠の発動と効果を無効にされない』だったよな？でも、『モンスターの効果も無効にされない』とは言ってないからもしかしたらと思ったけど、正解だったみたいだな」

「そうか！モンスター効果を無効にする《天罰》なら発動できる！」

「《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》の弱点ってこの事だったのね」

「そして、1度カウンター罠で効果を無効にすれば…」

「俺は止まらない！カウンター罠で効果を無効にした事で、手札から《冥王竜ヴァンダルギオン》を特殊召喚する！」

「ようやく出陣か！」

フィールドに黒い穴が開き、龍の姿のオーディンがはい出てきた。

《冥王竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／２８００→２３００

「来たか…この冥界を統べる王が…！」

「ヴァンダルギオンの効果発動！モンスター効果を無効にして特殊召喚した時、墓地からモンスターを1体特殊召喚できる！俺が蘇生させるのは《ライトエンド・ドラゴン》だ！リボーン・オブ・ザ・ビヨンド！」

オーディンが出て来た穴から光が溢れ、ライトエンドが舞い上がった。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００→２１００

「共に行くぞ、ライトエンド！」

「ギャオォオオオ！！」

冥王の言葉に答えるように、聖龍が雄叫びを上げた。

「だが、私の有利に変わりはない！《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》でヴァンダルギオンに攻撃！ホーリー・フェザー・シャワー！」

「相棒は簡単にやらせはしない！墓地の《エンジェル・ガードナー》の効果発動！俺のモンスターがフィールドから離れる時、代わりに墓地のこいつ自身と他の天使族モンスター1体を除外する事ができる！こいつ自身と《光神機－轟龍》を除外する！」

《エンジェル・ガードナー》
効果モンスター（オリジナル）
星１／光属性／天使族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　５００

このカードは1ターンに1度戦闘では破壊されない。
自分フィールド上のモンスター1体が相手のカードによってフィールドから離れる時、代わりに自分の墓地に存在するこのカードと天使族モンスター1体を除外する事ができる。

巨大な丸い盾を構え、翼を生やした小さな鎧騎士の幻影が現れ、オーディンの前に立ち塞がる。

「見た事のないカードだ…！」

「どうやらこの世界にしかないカードのようね」

「《天使の施し》で捨てたカードか。だが、戦闘ダメージは受けてもらうぞ」

無数の羽の矢はほとんど盾に弾かれるが、何発かは俺に当たった。

「くっ…」

紅刃　ＬＰ／３７００→３２００

「カードを2枚セットし、ターンエンド」

クヴァシル
ＬＰ／３４００
手札／１
モンスター／《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／《神の居城－ヴァルハラ》リバース×２

なんとか凌げたか…。あの《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》と手札の《オネスト》をどうにかしないと勝てない。そのためには…。

「応えてくれよ…！俺のターン、」

信じるぜ、『デッキ（お前ら）』を！

「ドロー！！」

……

『相棒はオーディンだけではないだろう？』

「…ああ！さあ、見せてやろうぜ！俺達の全力を！」

「来るか…！」

「行くぜ！フィールドの《冥王竜ヴァンダルギオン》と手札の《裁きを下す者－ボルテニス》を墓地に送る！」

たった今引いたゼウスが白い光となり、オーディンを包むように渦を巻く。

「融合召喚！《断罪竜ヴァンダルギオン》！！」

白い渦が晴れると、デュエルの時の姿のゼウスを模した鎧を身につけ、自分の翼に加えゼウスが持つ翼も背負うオーディンの姿があった。

《断罪竜ヴァンダルギオン》
融合・効果モンスター（オリジナル）
星８／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３５００／ＤＥＦ２８００
「冥王竜ヴァンダルギオン」＋「裁きを下す者－ボルテニス」
手札またはフィールド上の「裁きを下す者－ボルテニス」とフィールド上に存在する「冥王竜ヴァンダルギオン」を墓地に送った場合のみ、エクストラデッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは必要としない）。
このカードが特殊召喚に成功した時、自分の墓地からカウンター罠１枚を自分フィールド上にセットする。
この効果でセットしたカウンター罠はセットしたターンから発動する事ができる。
相手がコントロールするカードの効果をカウンター罠で無効にした場合、以下の効果から１つ選び発動する。
●相手ライフに１５００ポイントダメージを与える。
●相手フィールド上のカード１枚を選択して破壊する。
●自分の墓地からモンスター１体を選択して自分フィールド上に特殊召喚する。

《断罪竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／３５００→３０００

「な、何だよこれ…」

「将人とのデュエルで使ったモンスターと対の存在…！」

「オーディンとゼウスのどちらかがフィールドに出てるかでベースになるモンスターが決まるようだな」

「そういう事だ！断罪竜の効果発動！特殊召喚した時、墓地のカウンター罠を１枚セットする！この効果でセットしたカードはこのタ

ーンから発動可能になる！《天罰》をセット！」

「となると、《オネスト》は使えないな…」

「バトル！《ライトエンド・ドラゴン》の効果発動！攻守を５００下げる事で、攻撃対象のモンスターの攻撃力をエンドフェイズ時まで１５００ポイントダウンさせる！」

「リバースカードオープン《次元幽閉》！攻撃モンスターを除外する！」

ライトエンドの前に次元の裂け目が開き、標的を吸い込もうとする。

「このターンで終わらせる！墓地の《エンジェル・ガードナー》の効果発動！」

「２枚目だと！？」

クヴァシルが驚きの声を上げる。さすがにこれは予想外だったみたいだな。

「《天罰》のコストで墓地に送ったモンスターだ！ライトエンドが除外される代わりに、墓地のこいつと《豊穣のアルテミス》を除外する！」

《エンジェル・ガードナー》とアルテミスの幻影が身代わりになるかのように裂け目に飛び込み、無理矢理裂け目を閉ざした。

「ライトエンドの効果はこのまま発動するぜ！ライト・イクスパン

ション！」

ライトエンドの胸にある緑の宝玉から光が発生し、《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》の力を削いでいく。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２１００→１６００

《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》　ＡＴＫ／２８００→１３００

「《ライトエンド・ドラゴン》で《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》に攻撃！シャイニングサプリメイション！！」

聖龍が放つ光のブレスが黄金の天使を貫いた。

「ぐぅ…！」

クヴァシル　ＬＰ／３４００→３１００

「これで俺のモンスターの攻撃力は元に戻る！」

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／１６００→２１００

《断罪竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／３０００→３５００

「紅刃、決めるぞ！」

「ああ！《断罪竜ヴァンダルギオン》でダイレクトアタック！」

「まだだ！罠カード《ヘブンズ・ジャッジメント》！デッキから攻

撃モンスターと同じレベルの天使族モンスターを墓地に送る事で、
そのモンスターを破壊する！」

《ヘブンズ・ジャッジメント》
通常罠（漫画オリジナル）
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
そのモンスターと同じレベルの天使族モンスター1体を自分のデッキから墓地に送る事で、そのモンスターを破壊する。

また攻撃反応系の罠か。でもな、俺には《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》のせいで使えないでいたこのカードがある！

「カウンター罠《魔宮の賄賂》！魔法・罠の発動を無効にし、相手はカードを1枚ドローする！」

「！？」

「さらに、ヴァンダルギオンの効果！カウンター罠で効果を無効にした時、相手フィールド上のカードを1枚破壊する！ヴァルハラを破壊だ！エミサリー・パニッシュ！」

オーディンの宝玉から電撃が放たれ、ヴァルハラを焼き尽くした。

「無効にした…」

「って事は紅刃兄ちゃんの…」

「俺達の勝ちだ！冥王雷浄！！」

「幕引きだ！！」

体に埋め込まれた宝玉と模様が光り、電撃を纏った白い波動がライフをねこそぎ奪い取った。

クヴァシル　ＬＰ／３１００↓　０

紅刃　ＷＩＮ

「勝った…か…」

どうも気が抜けたのか、俺はその場に座り込んでしまった。ソリッドビジョンが消え、分離したオーディンとゼウスがカードから飛び出した。

「やったな、紅刃！」

「ああ。冷や冷やしたけどな」

「よくやった」

俺がなんとか立ち上がると、クヴァシルが近寄ってきた。

「伏せていたモンスターは何だ？」

「こいつだよ」

俺はデュエルディスクから1枚のカードを取り、クヴァシルに見せた。

「《マシュマロン》…戦闘破壊されないモンスターか」

「天使族には除去効果を持つ奴が少ないからな。魔法や罠さえ使ってこなけりゃ耐え切れるし、モンスター効果での破壊なら《天罰》で反撃できる。もう1度(ライトニング・ボルテックス)が飛んできたらお終いだったけどな」

「なるほどな…。これなら新たな力を託しても問題なさそうだ」

クヴァシルはそう言うと、2枚のカードを取り出した。

「オーディン、ゼウス、これを」

2枚のカードはそれぞれオーディンとゼウスの手に渡った。

「どんなカードなんだ?」

「…何も書かれていない」

「は?」

「私のも同じだ」

2人が持ってるカードは確かに何も書かれてない。シンクロモンスターと同じ白い枠で、イラストとテキストと名前の欄が空白の状態だ。

「真名…自分の本当の名前を唱えなければ、そのカードを使う事はできない」

「本当の名前?」

「『オーディン』『ゼウス』という名は紅刃が名付けた名だ。精霊の中には、真名を知らずして生まれ、本来の力を封じられている者がいる」

「本来の力だと？」

「真名はそれだけ強い力を持っている」

初耳だな。オーディンとゼウスにそんな秘密があったなんて…。

「真名を知るにはどうすればいい？」

「試練を乗り越えた者にはその権利がある。まずはオーディン、これを受け取ってほしい」

クヴァシルは腰から一本の長めの刀を鞘ごと外すと、そのままオーディンに差し出した。

「真名は物に形を変えて眠っている。その真名の持ち主が手にすれば、自動で真名を知る事になる」

「…わかった。ありがたく受け取らせてもらう」

オーディンは少し間を開けると、クヴァシルの刀を片手で掴んだ。

キュウウゥ…

「「「「「!?」」」」」

刀を掴んだと同時に、オーディンの全身と刀が紫色に光り始めた。
まるで刀が持ち主に反応しているみたいだ。

「これは…?」

「刀と持ち主が共鳴している。真名を伝達しているところだ」

やがて、伝達が済んだのか光が収まった。

「…どうだ、オーディン?」

「問題ない。無事に真名を知る事ができた」

一応成功したみたいだ。変な事故とかが起こらなくてよかった。

「次はゼウスだ。杖を出してくれ」

「杖?何をするつもりだ?」

ゼウスは疑問を口にしながらも、右手から黄色の光を出して杖を取り出した。丁度将人が鎌を出すのと同じ感じだ。

「これを杖に埋め込む」

袋を取り出しクヴァシルが中から出したのは、1枚の白い羽だった。

「埋め込むだと？」

「杖をしっかり持っていろ。終わるまで決して離すな」

クヴァシルが羽をゼウスの杖にあてがうと、羽は水に潜るように杖の中に入っていった。

すると、オーディンと同じようにゼウスも光り始めた。色は黄色だ。光が止むのにはあまり時間がかからなかった。

「…終わったぞ」

「ならば、後は名乗るだけだ。カードを掲げ、真名を名乗るんだ」

「それだけでいいのか？」

オーディンの問い掛けに、クヴァシルは無言で頷いた。

「なら、行くぞ」

ゼウスは杖をしまうと、カードを空に翳した。オーディンもそれに倣う。

「我が名はリーシェ！」
「我が名はロディス！」

２人が名乗りを上げると、突然カードが輝き出した。

「カードが…！？」

大体１０秒くらい経った頃に光が消え、２人はそれを合図に手を降ろしカードを確認した。

「カードはどうなった？」

「あたしも気になるわ」

「ちゃんとイラストもテキストも書いてある」

２人が見せたカードには、確かに２人の新しい姿があった。効果は…なんじゃこりゃ、俺のデッキとの相性最高じゃねえか。

「紅刃、これも渡しておく」

クヴァシルはカードを３枚俺に渡した。３枚とも同じカードで…っておい、これって…！？

「私自身のカードだ。新たな力を使うのに必要になる。後、このデッキもやる」

終いにはさっきのデュエルで使ったデッキを丸ごと、しかも無理矢理俺に持たせた。

「あの…これ、お前のデッキじゃ…」

「試練のために使っただけにすぎない。元から渡すつもりでいた」

「…なんか、いろいろされて逆に罪悪感が…」

「気にするな。自分のデッキはある。私はしばらくしたらまた旅に出るから同行はできないが、健闘を祈る」

ほんと、感謝してもしきれないな。このデッキも使って、もっと強くならねえと…。

「…ああ、サンキュな！ところで…」

「？」

「オーディン、ゼウス…お前らの事、これからは何て呼んだらいい？」

真名がわかった以上、普段どっちを名乗るかは本人が決める事だ。

「オーディンは『ロディス』って呼んだ方がいいんじゃない？」

鈴佳が話に割り込んできた。さっきから話に入りたがってたよう

に見えたのは気のせいか？

「実は、『オーディン』って名前のカードが実在するのよね…」

「「は？」」

「後々そのカードに出会ったらまぎらわしいわよ？」

「そうか…。なら、我は今後『ロディス』の名を使おう」

「ゼウスは…」

「私は『リーシェ』が気に入っているが…『ゼウス』はお前からもらった名だ。少し気が引ける」

「気にすんな。これからも一緒にいるんだし、お前の好きな名前を使えばいいさ」

「そうか。なら、ありがたく改名させてもらうとしよう」

「じゃ、改めてよろしくな！ロディス、リーシェ！」

「ああ」

「これからも共に戦おう」

さて、相棒が強くなってついでに改名したのは…ってこれは改名じゃなくて『名前を思い出した』の方がいいのか？まあ、いいや。とにかくめでたい事だけど、さっきからずっと気になっていた事がある。

「ところで…お前誰？」

俺が問い掛けたのは、デュエルの途中で観戦しに来た謎の男だ。

「…紅刃兄ちゃん、知らないの？」

怜磨が呆れたような目で俺を見る。

「知らないも何も、初対面の相手だぞ？」

「紅刃君。君はつい最近、デュエルアカデミアで俺と『相棒』のデッキとデュエルしていたな」

「は？」

「神楽坂君がデッキを盗んだが、最終的にいい方向に持っていってくれたな。ありがとう」

「神楽坂…って遊戯さんのデッキの件か！？なんで知ってんだよ？あの件はアカデミアの中でしか知られてないは…ん？」

ちょっと待て。今こいつ何て言った？

「…悪い、もっかい言って」

「？だから、神楽坂君が…」

「違う、その前」

「俺と相棒のデッキとデュエルしていたな、と言ったんだが…」

「…『俺と相棒の』…？」

「紅刃…あんたまさか、知らないわけじゃないでしょうね？」

「鈴佳まで…。じゃあ、誰だよこいつ？」

「ハァ…仕方ないわね」

鈴佳は溜息をついた後、めんどくさそうに男の紹介を始めた。

「この人はアテム。武藤遊戯の裏の人格としてデュエルキングにまで上り詰めた、３０００年前の古代エジプトの王で歴代最強クラスのデュエリストよ」

……はい？

あ、どっかで見た事あると思ったら、十代が持ってるポスターに写ってる遊戯さんと似てるんだ。で、裏の人格って事は、アテムの言う『相棒』って遊戯さんの事か？いや待てよ？そういや、月沙が遊戯さんの話をしてくれた時にアテムの説明もあったような…でも

アテムって冥界に帰ったんじゃなかったっけ?あ、ここ冥界じゃねえか。ならいてもおかしくねえよな。鈴佳と怜磨ってこんな凄い奴と知り合いなのか、凄えなオイ。ていうか他にも言いたい事はいろいろあるけど、とりあえず全部まとめて吐き出しておこう。で、今の俺の心境は…

「…えええぇえええぇぇえええええぇえええ!!!??」

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第２２話　冥界には３０００年前のあの人もいる（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「オーディンとゼウスはとうとう改名したな」

フィレス『ガルルッ』

璃音「この件で１番困ったのは作者よ。オーディンが登場してすぐにアニメで《極神聖帝オーディン》が出て来たから、名前が被らないようにするにはどうしたらいいかかなり悩んだそうよ」

勇香「それでこうなったのか…。にしても、アテムまで登場するとは…」

璃音「冥界なら何でもありでしょう？そのうち豊臣秀吉や源義経あたりが出て来そうね」

勇香「この小説はいつからリアルファイト専門になったんだ？」

璃音「そろそろ進めるわよ。今回紹介するのは《ライトエンド・ドラゴン》よ」

《ライトエンド・ドラゴン》
シンクロ・効果モンスター
星８／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ２１００
チューナー＋チューナー以外の光属性モンスター１体以上
このカードが戦闘を行う場合、モンスターの攻撃宣言時に発動する

事ができる。
このカードの攻撃力・守備力は５００ポイントダウンし、このカードと戦闘を行う相手モンスターの攻撃力・守備力はエンドフェイズ時まで１５００ポイントダウンする。

璃音「攻撃力３０００クラスのモンスターを2回も戦闘破壊できるのは評価できるわね」

勇香「攻撃力が下がるのが欠点だけど、《禁じられた聖杯》や《亜空間物質転送装置》とかでリセットしてやれば効果を繰り返し使う事ができるな」

フィレス『グルル』

勇香「でも、同じ召喚条件で1ターンに1度相手モンスターの表示形式を変更できる《神聖騎士パーシアス》の方が使いやすくないか？」

璃音「それぞれ長所と欠点があるのよ。上手く使い分けられるかはデュエリストの腕次第ね」

勇香「なるほどね。【光属性】を組むなら1枚くらい入れておいても損はないな」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「次回も見てくれよな！」

ーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

オーディンとゼウスの改名に関しては本当に悩みました。オーディンを出してすぐに同名のカードが出るものだから修正も効きませんし、今回こういう形で名前を変更するしかありませんでした。オーディンだけじゃ不自然なのでゼウスも名前を変えましたが、この展開は少し無理矢理すぎたでしょうか…？なんにせよ、これからロディスとリーシェをよろしくお願いします。

書いてるうちに紅刃のデッキが目茶苦茶に…。最悪、アテムみたいに現実じゃ回らなさそうなデッキになりかねませんね。オリカは必要最低限に留めるつもりですが、それ以外はゲームとかでちょくちょく回して調整する予定です。

アテムについてなんですが、今回の冥界での話を書いてるうちに『冥界なら死んだ人間を出してもいいんじゃないか？』と考えついたので、冥界に帰ったアテムを登場させる事にしました。口調は少し自身ないですが、これで合ってますか？

冥界なので、璃音の言う通り歴史の偉人を出す手もありますが、現在検討中です。

では、また次回！

第２３話　人間我慢が必要だ（前書き）

今回はデュエルはありません。そしてかなり長いです。

暗いしカードゲームから思いっ切り掛け離れてますが、ご了承ください。

それではどうぞ！

第２３話　人間我慢が必要だ

ＳＩＤＥ／紅刃

「ＯＫ、特訓終了よ」

「やっと終わりか…」

鈴佳が特訓の終わりを告げた直後に、俺はその場にへたり込んだ。

今俺がいるのは城の地下にある闘技場だ。なんでそんな所にいるか説明する必要があるな。話は数時間前にさかのぼる。

デュエルが終わってクヴァシルからいろいろ貰ってアテムと知り合いになった後、とりあえず包帯を変えるために医療室に行ったんだけど、なぜか怪我が半分以上治っていた。

クヴァシルが言うには、《ライトエンド・ドラゴン》をシンクロ召喚した時のあの現象が関係しているらしいけど、クヴァシルでもよく知らないそうだ。確かにあの時少し体が軽くなったような気がしたけど、あの光に治癒能力があったなんてな。

次の朝に起きた時には、怪我はほとんど完治していた。何だあれ、俺の自己治癒力を高める効果でもあるのか？

枕元を見ると、綺麗に畳まれた真新しい服と1枚の紙が置いてあった。紙にはこう書いてある。

『あんたの服ボロすぎるから、新しいのを作っておいたわ。今日からそれを着なさい　ｂｙ鈴佳』

あいつ裁縫できるのか？とりあえず、その服を着て食堂に向かった。

食堂には既に昨日のメンバーが全員集まっていた。みんなもう朝食に手を付けている。

「おはよう」

「あ、おはよう。似合ってるじゃん、それ」

俺が着ているのは、アカデミアの制服を鈴佳がアレンジした物だ。ズボンは藍色で、上着はオシリス・レッドやラー・イエローと同じタイプだ。

で、どこがアレンジされてるかっていうと、色が赤でも青でも黄色でもなく黒だという所だ。ラインは赤で、俺はその下に赤いシャツを着ている。あ、デュエルディスクは今までと同じようにホルダーで腰に提げてるぞ。あれ、このカラーリングって俺の私服とほとんど同じじゃないか？

「そうか？」

「作ったかいがあったわね。万丈目がノース校の制服を着て授業を受けてるんだし、アカデミアで着ても問題ないでしょ」

「言わないとオベリスク・ブルーだってわからねえだろうけどな。鈴佳って裁縫得意なのか？」

「将来は服とかを作るテキスタイルデザイナーっていうのになるのが夢だったのよ。今はこの冥界で同じ仕事をしているわ」

「それでか。サンキュな」

とりあえず全員の食事が終わると、クヴァシルが話を持ち込んできた。

「紅刃、怪我はもういいのか？」

「ああ。多分ライトエンドのあれが原因だろうけど、怪我の治りが早くなってさ。もうほとんど完治してるし、いつでも現世に帰れるぜ」

「そうか。だが、帰る前にやってもらいたい事がある」

「やってもらいたい事？」

「ロディスやリーシェと話し合いをしたんだが…これから先もっと強大な敵が現れた場合、今の紅刃のアビリティでは太刀打ちできないかもしれない」

「!?」

「私との特訓である程度アビリティを使いこなせるようにはなったが、現世で私達を襲った敵を倒す事は難しい」

あの電磁バリアの事か…。

俺達が冥界にワープした後の事は鈴佳達から聞いている。電磁バリアを破るほどの威力を出せるかは自信がない。

そもそも、あそこで闇をまとめて吹き飛ばせなかったからこんな事になってるんだ。俺にはまだ耐久力も足りないのかもしれない。

「そこでだ。お前にはリーシェのアビリティの強化と同時に、ロディスのアビリティも修得してもらう」

「ロディスの?」

「昨日エンディミオンに連絡をして、《王立魔法図書館》で我のアビリティについて調べてもらった」

いつの間に…。てかあのモンスター、やっぱり施設なのか。

「それでわかったんだが、モンスターの系統や使用者の熟練度によって使用できるアビリティが変わってくるらしい。中には翼や爪を生やすものや変わった特殊能力があり、他にも鍛えていけば1体のモンスターで複数のアビリティが使用可能になるそうだ」

「そのうち獣人化したりしそうだな…。で、それとお前のアビリテ

ィと何の関係があるんだ？」

「我のアビリティは身体強化の部類に入るらしい」

「身体強化か…」

それは便利だな。あの時はダメージに体が完全に耐え切れなかったから、耐久力強化には持ってこいだ。

「後、私のアビリティなんだが…まずはこれを見ろ」

リーシェはそういうと、昨日やったのと同じように杖を取り出した。

「杖…がどうかしたのか？」

「いや、問題は杖じゃない」

途端に、杖がまた光の渦に包まれた。柄が短くなり、逆に先端が伸びる。

渦が晴れると、リーシェの杖は1本の大剣に変わっていた。柄は剣のそれと似たような感じに短くなっていて、杖の先端だった部分からは白い大きな両刃の刀身が伸びている。

「これって確か…」

俺はデッキからリーシェの新しいカードを取り出し確認した。イラストでリーシェが持っている武器と同じ物を、目の前のリーシェが持っている。

「真名を知ってからこの力が身についた。それより、アビリティの強化もそうだが、お前にはこの剣を自由に使えるようになってもらう」

「は？」

「デュエルディスクのままだと耐え切れずに破損する可能性がある」

「いや、お前らは俺に何を求めてんだ？俺は普通のデュエリストだぞ？」

「剣を人間相手に使うのは危険じゃないのか？」

「アテム、ツッコむところが違うと思うのは俺だけか？」

アテムは今まで黙ってたと思ったら、まともそうでどこかズレている質問をしてきた。

「望めば斬っても外傷はない」

「都合いいなオイ」

まあ、ディスクが壊れたら話にならないし、身につけといて損はないな。

「まあ、いいか。で、俺はどうすればいいんだ？」

「実践が1番だろう。地下に闘技場がある。そこでモンスターと戦ってもらう」

城の地下に闘技場って…。

で、地下の闘技場で闇属性のモンスターと延々と戦ってたってわけだ。

「飲み込みが早いな。この1日だけでだいぶ強くなってる」

「褒めていただいてどうも。でもよ…あんな奴まで出さなくてもいいだろ？」

俺はロディスの言葉を軽く受け止め、近くに煙を上げて転がっている馬鹿でかいモンスターを指差した。

「ああ、あれはこのモンスターよ」

鈴佳から1枚のカードを受け取り、それを確認する。

《ダークネス・デストロイヤー》
効果モンスター
星7／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ１８００
このカードは特殊召喚できない。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

「道理でかいくせして無駄に動きが早くて一撃が重いわけだよ畜生！」

「あれについていける紅刃も充分凄いよ…」

「現実でナルガ〇ルガと戦り合ってんのかと思ったぞ…せめてレベル６以下にしてくれよ…」

「でもちゃっかり倒してるよね？」

「次は《メンタルスフィア・デーモン》でも呼ぼうかしら？」

「いや、やめてくんね？強くなる前に殺されるってそれ」

「冗談よ。さ、ここから出ましょ！」

「あのモンスター達はどうすんだ？」

闘技場でダウンしているモンスター軍団に目を向けて質問をする。

「あれは冥界で逮捕した犯罪集団だ。全然懲りてないから『真川紅刃を倒したら釈放する』と言ったら喜んで協力してくれた」

「リーシェ、俺の特訓はいつから犯罪者矯正プログラムになったんだ？」

仕事に逮捕…冥界って案外現世と大差ないのかもな。

「ていうか、実践なら最初からロディスかお前が相手した方がいいんじゃないのか？クヴァシルも剣の手練れらしいし」

特訓中に頭に浮かんだ考えをそのままぶつけてやると、リーシェの表情はハッとしたものに変わった。

「…は、早く休憩室に行くぞ！」

リーシェは顔を赤くして一足先に出て行った。あいつ、あんな可愛い一面もあるんだな…。

「考えていなかったようだな」

「ロディス、顔が引き攣ってんぞ？お前も同罪だろ」

「！？」

「ま、まあ、結果は出たんだからいいでしょ？」

「そうそう、た、倒したならもういいじゃん！」

「誰も気付いてなかったのかよ…」

休憩室に行った俺は、そこの自販機でスポーツドリンクを買って口を付けた。

「紅刃！」

椅子に腰を下ろした俺にアテムとクヴァシルが近づいてきた。この2人は俺が特訓をしている間に、いつの間にか姿を消していた。

「アテム、クヴァシル」

「特訓は済んだのか？」

「今日のところはな」

「どうしたの？そんな焦ってさ」

確かに、2人共様子がおかしい。何かあったのか？

先に口を開いたのはアテムだった。

「現世の状況が気になってテレビで覗いていたんだが…少しまずい事になった」

「まずい事？」

「このままだと、月沙が危険だ」

「「「「「！？」」」」」

え…月沙が…？

「ど、どういう事だよ！？月沙が敵に狙われてるってのか！？」

「ああ、狙われている。それも、彼女にとって最悪の敵に」

「最悪の…？」

「ハッ！？まさか…！アテム、クヴァシル、テレビで見てたんでしょ！？録画とかしてないの！？」

俺以上に鈴佳が血相を変えて叫び出した。

「心当たりがあるのか？」

「…ええ」

「俺も多分、鈴佳さんと同じ事を考えてるよ」

怜磨まで…。敵について何か知ってるのか？

「安心しろ、録画はしてある。丁度ここにテレビがあるから、それで見よう」

クヴァシルが懐から出したリモコンを操作すると、大画面のテレビに録画されたビデオが流れ始めた。

ビデオの内容は、今から数時間前の出来事だ。

ＳＩＤＥ／月沙

今日の授業はなし。特にやる事もない私は、森の中の日当たりのいい原っぱで仰向けに寝転がっている。

紅刃が冥界に行ってから数日が経つけど、帰って来る気配は全然ない。向こうで何が起こってるんだろ?そんなに大変な事なのかな?

「冥界、か…」

何となく呟くと、デッキからカードを3枚取り出した。

《リボルバー・ドラゴン》《ブローバック・ドラゴン》そして《ガトリング・ドラゴン》。私がデュエルを始める時、初めて鈴佳から貰ったのがこの3枚のカードだ。

『何これ?』

『《ガトリング・ドラゴン》よ。後、それの融合素材。月沙のイメージにピッタリだと思うんだけど…。』

『あ、そうか。姉ちゃん、射的得意だもんな』

『…かっこいい…』

『『え?』』

『気に入ったよ、ありがとう!これでデッキを作ってみるよ!』

『気に入ってもらえて何よりよ。さ、私と怜磨も手伝ってあげるから、早速デッキを組みましょ！』

『え、俺も！？』

『あんたの姉ちゃんでしょ！つべこべ言わずに手伝いなさい！』

『わ、わかったわかった（宿題は後回しにしよ…）』

『じゃ、始めましょうか！』

『うん！』

こっちの世界に来た時には、デッキのカードの大半が消えていて、この3枚と少しのサポートカードしかなかった。それからだっけ、私が【氷結界】を使うようになったのは…。

こっちの世界の冥界はまずないとして、怜磨は向こうで元気にしてるのかな？鈴佳は生きてるけど、もう会う事はないかもね。でも、無理な話だけど…また、会いたいな…。

「月沙？」

声が聞こえた。この声は…俊也だ。

「俊也？」

「ちょっとみんなでドッジボールしようと思って、場所探しにね」

体を起こすと、将人と翔君や明日香さん、隼人君にジュンコさんとももえさん、後三沢君と万丈目君も一緒にいるのが見えた。

「月沙は何してるの？」

「暇だから日光浴」

私が立ち上がると、翔君が私の右手にあるカードに気付いた。

「それって月沙さんのフェイバリットトッスか？」

「うん。昔の友達から貰ったんだ。その友達と私の弟と一緒にデッキを組んだっけ」

「月沙さんって弟がいるんですか？」

「今はどこで暮らしていらっしゃるのですか？」

「天国、だといいな。もう死んじゃったから」

「あ…ご、ごめんなさい…」

「気にしなくていいよ。もう気持ちの整理はついたから」

申し訳なさそうにするももえさんに笑って接してあげた。これは私の問題だから…。

「そういえば、十代と吹雪さんは大丈夫なの？」

「兄さんは順調に回復しているわ。もっと長く傍にいてあげたいけど、鮎川先生が『こっちは大丈夫だから友達と思い切り遊んでおいで』って…」

「アニキは外に出たがってたけど、休養が先だからって理由で監禁中ッス」

「監禁中って…」

「鮎川先生がしっかり見張ってるんだな」

十代はこの前、セブンスターズの最初の刺客と闇のデュエルをした。ダークネスと名乗るその男を何とか倒したけど、重傷で倒れてしまった。

負けた方がカードに封印されるというルールだったから、ダークネスの魂はカードに封印された。ダークネスは元々別の人間に憑依していて、そのダークネスが封印された事で元々の魂が戻ってきた。

じゃあ、その憑依されていた人間は誰だったのか？それが、行方不明だった明日香さんのお兄さん、天上院吹雪さんだったんだ。

吹雪さんもかなりの重傷で、今も保健室で眠っている。でも、明日香さんの言う通り順調に回復しているみたいだから、しばらくすれば目を覚ますでしょ。原作ではそうだったし。

「そうだ、月沙君もドッチボールやるかい？」

「あれ？三沢君いたんだ」

「最初からいた！」

「ごめんごめん、冗談だよ。もちろん参加するよ」

なんかからかいたくなったからやってみた。でも後々これが素になってくるんだよなぁ…。

「それにしても、万丈目君と将人まで来るなんて珍しいね？」

「別にやりたいからついてきているわけではない」

素直じゃないな～。そこが万丈目君らしいんだけど。

「…外出する気分じゃなかったんだが、俊也に無理矢理連れていかれてな」

将人は私と目が合うと、つらそうに目を逸らした。

「最近元気ないし、気分転換にでもって思ってさ」

「あ、ああ、そうなんだ…」

将人、本当にどうしたのかな？私に言えない事でもあるのかな…？

「それじゃ、行こうか！」

私は笑顔でそう言って、カードをデッキにしまおうとした。

「戦いの最中に球遊びとは、呑気なものだな」

「「「「「「「「「！？」」」」」」」」」

声のした方に、みんなで一斉に振り返った。そこにいたのは…。

「な…貴様は…！？」

「また会ったな。夜丈将人、風嶺俊也」

黒いフード付きのマントに…白い…仮面…？

「何をしに来た！？」

「将人、俊也、知っているのか？」

「何者なんだ、あいつは！？」

「……で…」

「ん？」

手の力が抜け、風でカードが広場の中央まで飛ばされた。

「なんで……なんで…あんたが……」

「月沙さん…？」

「あいつの事知ってるんですか！？」

みんなが何か言ってるけど、全然耳に入らない。脳内では、向こうの世界での最悪の悪夢がフラッシュバックしている。

「久しぶりだな…波星月沙…」

「貴様、月沙を知っているのか…？」

「ああ…

『世界で1番憎い、この手で殺した人間』くらい、はっきりと覚えているよ」

静寂が辺りを包む。その中で、私は目の前の悪夢を見つめる事しかできない。

「こ…殺した…？」

「な、何言ってるんスか！？月沙さんは今ここに生きてるじゃないッスか！？」

「くだらんバレバレの嘘をつくな！」

「…本当だよ」

もう隠す事はできないと悟り、私は自分から全て打ち明ける事にした。

「私は1度死んだ」

「…な、何を言って…」

「まず、私はこの世界の人間じゃない」

私は少し俯いて話し始めた。きっと、みんな驚いた顔をしているんだろうな。

「この世界の…人間じゃない…？」

「私が住んでいた世界は、どんなカードもどこにでもある普通のカードとして世界中に出回ってるような所だった。アームド・ドラゴンや《ブラック・マジシャン》はもちろん、三幻魔や三幻神すら普通の商品の1つだった」

「嘘…！？」

「サイバー流もブルーアイズも全然珍しくない。デュエルモンスターズは社会にもあまり影響がないし、プロデュエリストなんて職業はどこにもない。デュエルアカデミアもないし、本当に平凡な世界だった」

「何だと!?」

「私はそんな世界で、両親と私と弟の４人家族で暮らしていた。親友もいて、とても幸せな毎日だった…」

それが、一瞬で壊れた。

その日は怜磨と一緒に家に帰っていた。たまたま帰る時間が一緒だったからだっけ。

向こうの世界にいた時の私は瞳も髪も茶色で、髪は下ろしていた。

「姉ちゃん、帰ったらデュエルしようよ!あれからまたデッキを強化したんだ!」

「本当に?でも、私だって強くなってるんだ!負けないよ!」

「望むところだ!」

どこにでもあるような下校中の風景。この世界で最後の幸せな時間だった。

家の近くまで来た時、悪夢が始まった。

「グハァ！？…ァア…」

「きゃあああぁああ！！？」

突然、悲鳴が聞こえた。

「！？今のって…」

「父さんと母さんだよ！早く行こう！」

不安になった私達は、急いで玄関に向かった。

「お母さん、お父さん、何…が…あ…」

「姉ちゃん、どうし…え…？」

信じられない光景が目に飛び込んできた。

家に土足で入ってきてる黒いマントの人間がいる。その足元には、

血塗れの両親の姿があった。

「お父さん!?」

「母さん!?」

返事はない。もう死んでいる。

「来たか、波星月沙」

振り返ったその男は、仮面とフードで顔を隠していた。手には拳銃が1丁握られている。

「来た…って…どういう事…?なんで…なんでお父さんとお母さんを殺したの!?」

こいつが殺したのは目に見えている。自然と涙が溢れた。

「貴様を殺すためだよ」

「私を…殺す…?」

「そう、こんな風に」

そう言って、男は左腕を構えた。付けているのは…デュエル…ディスク…?

「《神獣王バルバロス》を召喚」

1枚のカードを取り出し、ディスクにセットする。すると、

『ヴォオォオオオ！！』

アニメみたいに、赤い槍を持つ獣戦士が現れた。

「え…？」

「モンスターが…実体化した…？」

「やれ」

男の命令で、バルバロスは槍を構え、私目掛けて突き出した。

突然の事で体が反応できない。

やられる…！？

「危ない！！」

右から衝撃。倒れ込んで2秒後に状況が理解できた。

怜磨が私を庇って突き飛ばしてきた。そしてバルバロスの槍は怜磨の腹を貫いた。

「がはっ…」

「怜磨！！？」

「やはりな。貴様なら月沙を庇うと思っていた」

「ね…えちゃん…逃…げろ…」

「で、でも…」

「早く逃げろ！！！」

「う…」

私はそこから走り去った。

ごめんね、怜磨…ごめんね、ごめんね…。

「ハァ…ハァ…」

とにかく走る。どこかに隠れられそうな所は…。

角を曲がると、近所のおばあちゃんが見えた。家の前を掃除しているみたいだ。

「おばあちゃん！」

「おや、月沙ちゃん？どうしたんだい、そんなに慌てて？」

「変な人に襲われてるの！匿ってもらえる！？」

「そりゃ大変だ！早く家の中に…」

『お入り』その言葉を聞く事はできなかった。

頭上から光が降ってきて、おばあちゃんに直撃。それと同時に爆発し、私は後ろに吹っ飛ばされた。

「きゃあっ！？」

地面を背中で滑り、痛みを堪えて体を起こす。

「逃げ切るつもりか？」

空から降りてきたのは、仮面の男を乗せた機械の龍…《サイバー・ドラゴン》だった。その下には、既に事切れたおばあちゃんがいた。

「おばあちゃん！？」

「さあ、まだ逃げるのか？それとも…大人しく殺されるか？」

「っ…！」

怖くなった私は、逃げる事を選んだ。

「そうか…まだ楽しませてくれるか！」

それから、私はいろんな人を頼った。近所の人、コンビニの店員、

そして警察も。

でも、助けようとしてくれた人はみんな殺された。手を差し延べてくれた人達は、みんな命を奪われた。

また、1人死んだ。今のは学校の担任の先生だ。もう諦めようかと思ったけど、先生が死に際に叫んだ『逃げろ』の一言で、私はまた走った。

「ハァ…ハァ…だ、誰か…！」

ふと頭の中に鈴佳の顔が浮かぶ。そうだ、鈴佳に助けてもら…。

そこで気付いた。私は、『助けてくれる人を身代わりにして逃げ延びている』だけじゃないの？

そう思った途端、激しい罪悪感が押し寄せてきた。これじゃ、私が殺してるようなものじゃない…。

私は近くの路地裏に潜り込んだ。もう誰かを頼っちゃいけない。そしたら、その人が殺されてしまうから。最低でも、鈴佳にあいつを近づけちゃ駄目だ。

行き止まりの広場を見つけ、私はその中央に倒れ込んだ。体力はとっくに限界を越えていて、もう1歩も動けない。

「ハァ…ハァ…ゲホッ…」

とりあえず、ここでしばらくやり過ごそう。その間に体を休めて、これからの事を…。

「それで逃げ切ったつもりか？」

背筋が凍り、一瞬息が止まった。

なんとか起き上がり振り返ると、仮面の男が立っていた。

「そんな…」

「楽しかったよ。無様に逃げる貴様を追いかけ、頼る人全てを殺していく。最高の娯楽だった」

近づいてくる。でも、１歩も動けない。

「貴様は俺の人生を台なしにした。貴様が憎くて憎くて仕方ないんだ。だから…」

もう目の前まで来ている。恐怖と疲労で声すら出ない。人生を台なしにした？私が何をしたっていうの？

「もう少し、楽しませてもらうよ」

瞬間、足が地面を離れた。足を上げている男を見て、蹴り飛ばされたんだと認識。それと同時に地に落ちた。

「が…あぐっ…ぐあっ！？」

それから、一方的な暴行の餌食になった。殴る、蹴る、ナイフで刺されもした。私にはもう抵抗する力はなく、ただされるがままに傷つけられていた。

「ゼェ、ハァ…もういいだろ」

仮面の男は懐から拳銃を取り出し、私の左胸に銃口を押し付けた。

「もう気が済んだ。これで終わりにしてやる」

「……な……んで……」

「？」

「怜…磨を…お父さんや…お母…さんを…たくさん…の人…を……殺…し…たの…？」

最後の力を振り絞り、聞いておきたい事を言い切った。

「簡単な事だ。貴様に絶望というものを見せてやりたかったのさ」

理不尽だ。でも、もう声を出す力もない。

「あばよ、クズ野郎」

銃声が鳴り響き、私の意識は闇に墜ちた。

「そして気がついたら、この世界で生きていた。髪と目の色も今の色に変わっていた。私はいわゆる『転生者』なの」

話し終えて気がつくと、辺りが不気味なくらい静かになっていた。

「…月沙、本当なの?そんな話、僕だって聞いた事ないよ?」

「当然だよ。この話は誰にもしてないんだから」

スイレンを除いては、ね。精霊の事を知らない人もいるから、この事実は伏せておく。

「はっきり覚えているみたいだな」

「当然でしょ?あんな悪夢、忘れたくても忘れられない。いや、忘れちゃいけないのかもしれない」

話しながら、ヘアゴムに左手を添える。

「あんたの正体も、私がいつ何をしてあんたの人生を狂わせたのかも、なんであんたがここにいるのかもわからない。でも…」

ヘアゴムを一気に外し、腰のデュエルディスクを引き抜く。力を込めると、ディスクが青く光り始めた。

「殺された人達の敵は取る！！」

引き金を引き、冷気を込めた青い弾丸を撃つ。いつもの2倍の威力だ。

「無駄だ」

バチチチィッ！！

突然、仮面の男の周囲に電気の壁が発生し、弾丸を防ぎきった。

「！？」

「この電磁バリアにはアビリティも闇の力も通用しない」

「闇の力も！？」

アビリティが効かない！？そんな馬鹿な事が…！？

「っ、なら！」

もう1度力を込め、レーザーを後ろの地面に撃ち出した。その反動で男に向かって高速で飛んでいく。

「無駄だと言っているのがわからないのか？」

目の前まで近づいた時、また電磁バリアが現れ私を直撃した。

「あぁあああぁああ！！」

「月沙!?」

「月沙さん!」

「ぐっ…うっ…!」

なんとか銃口を男に向ける。後は引き金を引けば…。

「フン」

「がっ!?」

腹に衝撃が走る。男に蹴り飛ばされて吹っ飛んだ。あの時と同じだ。

「!」

「ぐぅ…ゲホッゲホッ」

「波星君!」

「大丈夫!?」

万丈目君が叫び、俊也と将人が駆け寄ってきた。

「へ…平気…大丈夫だから…」

ふらつきながらも立ち上がると、仮面の男がカードを拾っているのが目に入った。あれはさっき私が落としたカードだ。

「《リボルバー・ドラゴン》に《ブローバック・ドラゴン》、そして《ガトリング・ドラゴン》か…。なかなかいいカードだな」

「それを返せ！」

「待つんだ！」

私が駆け出そうとすると、俊也に止められた。

「放せ！」

「突っ込んでもバリアに防がれるだけだ！僕らじゃあいつに指1本触れられない！」

「ほぉ…余程大切なんだな」

男は感心したように呟き、カードを1つに束ねて、懐から何かを取り出した。

「！待て！！ふざけた真似をするな！！」

将人が何かに気づいたかのように声を荒げた。なんで…

ボゥッ

時間が止まった。

何かに火がついた時にだけ聞く事ができる音。

男の手の中にあるカードは、ライターの火で燃え出していた。

「なら、今のうちに消しておかねばな」

男はそれをゴミを扱うかのように足元に捨てた。

ブツッ

「貴…様ぁ！！！」

ゴウッ！

「うわっ！？」

「くっ！？」

完全にキレた。鈴佳と怜磨との思い出のカードをよくも…！

ディスクにはありったけの力が込められ、冷気と光が溢れ出している。私を中心に冷気が溢れ、周りの地面に少しずつ氷が張られていく。

「この程度で逆上するとは、心が狭いな」

「『この程度』…？」

ディスクの光がさらに強くなる。そろそろ最大だ。

「デュエリストにとってカードは魂だ！それを『この程度』なんて考えで燃やして、許されると思っているのか！？」

「俺も限界だ。加勢させてもらう！」

叫んだのは俊也だった。将人も鎌を出して構えている。

「いいか？いくらアビリティが効かないといっても、限界があるはずだ。３人で攻撃すればさすがに耐え切れないだろ」

将人の言葉に俊也と２人で頷く。これなら攻撃が届くはず。

「「「行け！！！」」」

俊也は暴風を、将人は衝撃波を、私は冷気の光線を。それぞれ最大級の一撃を叩き込んだ。

3つの攻撃が電磁バリアにぶつかる。これでどうだ…？

「…《次元幽閉》を発動」

電磁バリアが解除され、攻撃が全て吸い込まれていく。

「何！？」

「え！？」

吸い込み切った後に残ったのは、閉じていく次元の裂け目と《次元幽閉》のカードを持つ無傷の仮面の男だった。

「…そんな…」

「あれだけの攻撃を…」

「防ぎ切っただと…？」

今のは、私の最大の攻撃だった。俊也と将人のも、それくらいの威力だったはずだ。なのに、それでも効かないなんて…。

「今日の夜9時に灯台に来い」

「！？」

「デュエルだ。今度こそ息の根を止めてやる」

仮面の男はそれだけ伝えると、背を向けて立ち去ろうとする。

「！ま…」

追いかけようとすると、俊也に手で制された。

「今追いかけても結果は変わらないよ。それに、逃げたわけじゃない」

「…」

確かに、あの電磁バリアがある限り私達には何もできそうにない。悔しいけど、ここは俊也に従った方がよさそうだ。

ディスクをしまい、燃やされたカードの前で膝をつき、灰になってしまったそれをすくい取った。

思い出のカードは、もう原形を留めていない。風が吹いて、全てさらわれてしまった。

「……」

「月沙君…」

「くそ、何なんだあいつは！？」

「カードを燃やすなんて…」

「酷いですわ…」

みんな気持ちは同じみたいだ。大切なカードを燃やすなんて、正

気の沙汰じゃない。そう考えてるんだろうな。

私はやがてゆっくり立ち上がり、いつの間にか流れていた涙を拭って歩き始めた。

「月沙？」

「…部屋でデッキ調整をしてくる」

俊也の疑問に答えつつ、傍を横切った。殺された人達のためにも、負けるわけにはいかないんだ。

「…決着をつける！」

ＳＩＤＥ／鈴佳

「…以上だ」

全部見終わると、クヴァシルはテレビを消してリモコンをしまった。

月沙がスイレンに話すのを盗み聞きして大体の内容は知ってたけど、改めて聞くと酷い話ね…。それでも私を気遣ってくれたんだから、感謝しないとね。最初は私を頼ってくれなかった事が悲しかったけど…。

「『息の根を止める』と言っているあたり、闇のデュエルかサイコパワーを使ってくるのは間違いないだろう」

「確かに《次元幽閉》を実体化させてるし、過去にモンスターも使ってたしね」

「…！ロディス、俺を現世に帰してくれ！どうせあの仮面の男は俺が死んだと言って揺さ振りをかけるはずだ。俺が行って支えてやらねえと…！」

「無理だ…。冥界から現世へ向かうワープホールはまだ修復中だ。ダークシグナーとの戦いの傷痕がまだ残っている。使えるようになるまでには後2、3日かかる」

「な…まだ修理が終わってないのかよ！？」

前にダークシグナーとの戦いで、日没までに4つの制御装置の封印が間に合わなかったせいで冥界の王が復活し、冥界でも大騒ぎになっていた事がある。でも、冥界の王はロディスよ。ルドガーとゴドウィンが冥界の王と呼んでいたそいつは、冥界で封印されていた巨大な魔物。そいつは冥界と現世を繋ぐワープホールを無理矢理こじ開けて現世に行ってしまった。遊星と《セイヴァー・スター・ドラゴン》が倒したものの、ワープホールのダメージはかなり酷く、修復するのにかなりの時間がかかるらしく、今でも修理が続いている。

「我が度々移動に使っていたのは緊急用のワープホールだ。あれは人間が使うには危険すぎる。今回はたまたま上手くいったが、次も無事で済む保障はない」

よくもまあ、それで無事にここまで来れたものね。

「だったら帰れないじゃねえか！」

「それだけじゃない。あのワープホールはまだフォッタに改造されてないから過去に戻る事ができない」

「そういう事。僕でもさすがにそこまで介入する事はできないな」

「くそ！俺はただ遠くから見守る事しかできねえのかよ！？」

「気持ちはわかるけど、ここは耐えるしかないよ」

紅刃は悔しそうにテーブルを叩く。私だって行きたいわよ。でも、私はもう死んでるし…。

…ん？

「なぁ！？フォッタ、いつの間に！？」

「ヤッホ。元気にしてた？」

「ヤッホじゃねえよ！いるなら早く言え！」

いつの間にか白髪の少年が私達の前にいた。自然に割り込んできたから気づかなかったじゃない…。

ちょっと皮肉を言ってからかってやろっと。

「あ、自称神様じゃない」

「その呼び方やめて！冥界でも流通してるのそれ！？」

「さあね～♪」

「あ、そうだ！フォッタ、俺達を過去に送ってくれ！」

私がからかっていると、急に紅刃がフォッタに頼み事をし出した。

「そうか！我々を過去に送ったのはこいつだったな」

「あ、その…」

「どうした？」

「実は、最近忙しくてさ…ここに来るまでに力をほとんど使い果たしちゃったんだよね…」

「「「は？」」」

「冥界のワープホールを改造しに来たはいいんだけど…回復するのには2、3日かかりそうなんだ…」

「はあぁぁぁぁぁぁ！？」

「だってほら、僕神様見習いだし…」

「初めて聞いたわそんな話！何だお前自称神様（笑）じゃねえか！」

「悪い方向にグレードアップさせないでよ!?」

「いや、これは（笑）がついてもいいよね?」

「それくらいが妥当でしょ」

「酷っ!?この人達冷たっ!?」

当然の処置よ。でもまずいわね…。フォッタまで力を使えないとなると、もう移動手段がない。

「冥界と現世で連絡を取り合う場合は特別な機械が必要だ。連絡で伝える事もできない」

「こっちから向こうに干渉するのは無理って事かよ…くそっ!」

これじゃ、加勢すらできない。私達は見ているだけしかできないの?

「どうすんのよ…。私と怜磨とアテムはもう死んでるから無理だとして、最低でも紅刃を送らないとまずいわよ?あいつは仲間の事になると不安定なところがあるから心配だわ」

「でもどうやって送るんだよ?ワープホールも自称神様（笑）の力も使えないんだよ?」

「だから僕の名前はフォッタだって!」

「クヴァシル、何か手はないのか!?」

「いや…残念ながら、過去に向かう術は知らない」

「緊急用のワープホールは危険すぎるが…やるべきか？」

「駄目だ！失敗したら今度こそ助からないぞ！」

「落ち着け！」

みんなで揉めていると、紅刃が叫んで黙らせてきた。

「紅刃…？」

「何か策があるのか？」

「…ここであいつのデュエルを見届ける」

「「「「「！？」」」」」

「な…！？」

「月沙に会いに行かなくていいのか！？」

「あいつがどんな奴か、あんたなら知ってるでしょ！」

リーシェと一緒に問い詰める。ほんと、何を考えてんのよこいつ！？月沙が心配じゃないの！？

「ああ、知ってる。だから信じられるんだよ」

「「？」」

「俺は信じる。月沙も、俊也達も」

「……」

「俺はあいつが転生した後に中学で知り合った時からずっとあいつと一緒にいた。だから、今のあいつの事は何となくわかるんだ。あいつなら乗り越えられる。道を踏み外しても俊也と将人、スイレンが支えてくれる。俺はそう信じる」

「紅刃…」

「さてと、まだ時間があるし、自主練でもして来ようかな。どうせ行けないなら、行けるようになるまでに修行を終わらせたいしな」

紅刃はそう言うと、さっさと部屋を出て行ってしまった。

「なんだよあいつ!?姉ちゃんが危ないってのに…」

「やめなさい!」

「す、鈴佳さん?」

「1番いても立ってもいられないのはあいつなのよ?そのあいつが黙って見届けるって言うなら、私達が騒ぐのはおかしいでしょ?」

それ以上は、私もみんなもしばらく黙ったままだった。

紅刃が出て行く時、あいつが思い切り拳を握りしめているのが見えた。そのあいつがいろいろ考えて出した答えを、私達が一蹴する

のはお門違いってものよ。

多分、この中で1番月沙の事を想ってるのは、私でも怜磨でもないのかもしれないわね。

なら、私はあんたに賭けるわよ…紅刃！

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第２３話　人間我慢が必要だ（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「暗いな…」

璃音「暗いわね…」

フィレス『グルルゥ…』

勇香「しかもどこかのバトル漫画みたいにリアルファイトしてるし…これってカードゲームだよな？」

璃音「そこは話の進行上仕方ない事よ。今これを読んでいるそこのあなたも、その辺りを理解してもらえると嬉しいわ」

勇香「さ、カード考察といくか！今回はデュエルがなかったけど、何を紹介するんだ？」

璃音「月沙の初代切り札（ガトリング・ドラゴン）よ」

《ガトリング・ドラゴン》
融合・効果モンスター
星８／闇属性／機械族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ１２００
「リボルバー・ドラゴン」＋「ブローバック・ドラゴン」
コイントスを３回行う。表が出た数だけ、フィールド上のモンスターを破壊する。
この効果は１ターンに１度だけ自分のメインフェイズに使用する事

ができる。

璃音「最大3体のモンスターを破壊できるのは心強いわね」

勇香「自爆する可能性があるのが弱点が？破壊がトリガーになるモンスターを破壊するって手もあるな」

璃音「融合素材も優秀よ。まとめて【機械族】や【サイバー・ドラゴン】で活躍できるわ。《パワー・ボンド》や《オーバーロード・フュージョン》も共有できるわよ」

勇香「まあ、月沙みたいに全く関係ない【氷結界】とかに入れてる奴はまずいないだろうけどな。あれでよく今まで事故らなかったな…」

璃音「今は燃やされて使用できなくなったけど、この穴をどう埋めるつもりなのかしらね？」

勇香「あいつの今の切り札もまだ出てないし…次回辺りであいつの本気が見れるか？」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

…はい、前書きで言った通りくらいです。その上またデュエル以外の戦闘が…。物語の進行上こうする必要があるので、多めに見てください。

それにしても、戦闘描写って難しいですね。どう表現すれば上手く伝わるのか、いまいちよくわかりません。今回は上手く表現できていたでしょうか？

次回はちゃんとデュエルをやりますので、楽しみにしていてください。

では、また次回！

第２４話　罪を償いたいならまず生きろ（前書き）

今回はデュエルが入ります。月沙ｖｓ仮面の男です。

内容は変わらず暗いですが、最後まで読んでいただけると幸いです。

それではどうぞ！

第２４話　罪を償いたいならまず生きろ

ＳＩＤＥ／紅刃

「だりゃあ！！」

ディスクを振り下ろし白い電撃を放つ。１ｍの厚さを持つ鉄板は真っ二つに斬り裂かれた。

「ハァ…ハァ…よし、今日はこれくらいにしとくか」

「やっているな」

休憩室に行こうとすると、出入り口からロディスが入ってきた。

「ロディス！」

「そろそろ時間だ。行くぞ」

「ああ」

ロディスに連れられて闘技場を出て、城の中を移動する。そろそろ月沙が仮面の男と待ち合わせた時間になる。

「ここだ」

案内されたのはやけにでかい広間だった。たくさんの人が集まっていて、奥には馬鹿でかいモニターが１台設置されている。

「紅刃！」

「来たわね」

ロディスと一緒に広間に入ると、怜磨達が出迎えてくれた。

「なあ、ここに集まってる人達は一体…」

「仮面の男に殺された人達よ」

「！」

「おばあちゃんが昼間の月沙の様子を見ていたらしくて、関係者に噂が広がったのよ。ロディスがそれを見て『ならみんなで見ればいい』って言ってここに連れて来たわけ」

「あのな…野球観戦じゃないんだぞ？」

「それは皆も重々承知している。それなりの覚悟でここにいるのだ」

「そうか…。ていうか、いくら何でも人数多すぎないか？」

どう見てもどこかの町の人達が全員集合したような感じなんだけど…。

「あの仮面の男は町ごと滅ぼしたのよ」

「町ごと！？」

「力に溺れて目に入った人間全てを殺して、揚げ句の果てに町を丸ごと吹き飛ばしたのよ。思い出すだけで虫酸が走るわ…！」

町ごとって…何を考えてんだあの殺人鬼は！？

「この事は月沙はまだ知らないわ。でも、もし知ってしまったら…」

「いつ壊れてもおかしくないってか…。月沙…」

「おや、君は紅刃君かい？」

「え？」

振り向くと、背の低い白髪のばあさんが俺達の前に立っていた。

「あ、おばあちゃん！」

「おお、鈴佳ちゃん！いつも元気だねえ」

「誰だこの人？」

「さっき言ってたばあちゃんだよ」

俺が怜磨に小声で質問すると、怜磨も同じように返してくれた。

「他のみんなも元気そうじゃの。紅刃君、君の活躍は見ているよ。いつも月沙ちゃんを護ってくれてありがとう」

「へ？」

「中学で会った時から、いつも一緒にいたでしょう?月沙ちゃんは私にとって孫みたいな子なんじゃ。何かあったらと思うと心配で心配で…。でも、紅刃君がいつも傍で護ってくれるようになってからは、友達もたくさんできてのう。こうして安心して見守っていられるのも紅刃君のおかげじゃ。本当にありがとう」

ばあさんはそう言って深々と頭を下げてきた。

「いや、ちょ、頭を上げてくださいよ!俺はそんな大した事してませんって!」

「いや、君は充分月沙の助けになっているよ」

慌てる俺に声を掛けてきたのは、若い男の人だった。

「え?あなたは?」

「俺は渡辺。月沙と鈴佳の担任を受け持っていた」

「ええ!?月沙の先生!?」

「そう。月沙は転生する前はクラスの友達とよく遊んでいたんだが、転生した後は小学校の頃から虐められていてね。君と出会わなかったら今頃どうなっていたか…」

あれ?俺ってもしかして、知らないうちに月沙の人生を変えてたのか?

「あ、そうだ!ここの人達に聞きたい事が…」

「？」

部屋にいる人達全員が俺に注目する。ていうかこれだけの広さで話聞こえてたのか？冥界の人達って耳が発達してんのか？

「あの…こういうのもなんかあれですけど…月沙を恨んでやしませんか？」

「恨む？」

「はい。話を聞く限りじゃ、月沙があなた達が殺されるきっかけをつくったように見えるので、恨んでる人がいてもおかしくないと思って…。今のうちにはっきりさせておきたいんです」

しんと静まり返る。緊張で冷や汗が出た。

「…確かに…恨んでないって言ったら、嘘になる」

最初に答えてくれたのは、渡辺先生とは別の男性だった。

「そりゃ、最初はブチ切れたさ。なんで俺が巻き添え食って殺されなきゃいけないんだって…。月沙は俺にとって死神みたいな奴でしかなかった。あいつが殺された時、ざまあ見ろって思ったくらいだしな」

やっぱり、そう思う人もいるんだな…。

「でも…あいつ、目茶苦茶反省してるんだ」

「え？」

「あいつは殺された後、何もない真っ白な場所に魂だけ飛ばされてさ。そこで、かなり落ち込んでたんだ。泣きながら、何度も『ごめんなさい』って謝り続けて…。月沙を悪く思ってた俺が、逆に罪悪感で一杯になるくらいにな」

あいつが、そんな事を…。

「転生させるために会いに来た神様が宥めてようやく収まったんだ。俺もそん時はほっとしたよ」

『落ち着きましたか？』

『…はい…』

『じゃあ、改めて自己紹介をします。私はノルフェナ。神を勤めている者です』

『神様…？』

『あなたに、ある依頼をしたくて新たな命を授けるために、ここに呼びました』

『依頼…？私に…？』

『ええ。デュエルモンスターズはご存じですか？』

『はい…』

『では、その中の「氷結界の一族」の事も知っていますか？』

『はい、知ってます…』

『もうすぐ、その氷結界の一族が住んでいる里に危機が訪れます。
あなたにその危機から一族を救ってもらいたいのです』

「おい、ちょっと待てコラ。話が飛躍しまくってるぞ？」

「いや、これは本当の話だから」

「ていうかそんな場面まで覗き見できんのかよ？」

「冥界も天界も同じあの世だからできるんだよ」

『…無理です…』

『？』

『私には、できません…』

『…なぜですか？』

『私は、たくさんの人に助けを求めました。でも、みんな殺されてしまいました。あれだけの人を犠牲にしてしまったのに、それを背負って生きる事すらできませんでした。そんな私が、そんな救世主みたいな事をできるわけないじゃないですか…』

『……』

『いくら謝っても謝り切れません。恨まれて当然なんです。なのに、それを無視して生きていくなんて…できませんよ…』

『…だからこそです』

『…？』

『あなたがそれを償い切れない罪と捉えていて、犠牲にしてしまった人達を強く想っているからです』

『え…？』

『生きなさい。殺された人達の分も、強く幸せに生きなさい。それが、最高の罪滅ぼしです』

『罪滅ぼし…？』

『殺された人達は、今冥界にいます。冥界といっても、現世と大して変わりませんけど…。あなたの家族とおばあさんと先生は、あな

たが生きる事を望んでいます』

『お母さん達が…？』

『それに、他の人達も冥界で新たな生活を始める事でしょう。だから、気にする事はないんですよ』

『…いえ、気にします』

『？』

『忘れるわけにはいかないんです。冥界で有意義に過ごせるとしても、私の罪が晴れる事はありませんから…。』

『……』

『だから…新しい命で、その罪と共に生きます！』

「そしてあいつは氷結界の里に転生して、本当に里を救った」

なんて奴だ…。あいつ、いつもそんな覚悟を持って生きてるのか…。

そういや、いつだったかスイレンが『一族を救った』とか言ってたっけ。話は本当みたいだな。

「それから、人間界に行って0歳からやり直した。どんな時も、俺達の分も生きるって覚悟があったからかな？くじける事なんてほとんどなかった」

確かに、あいつ弱みを見せた事はあまりなかったな。

「そこで、殺されたみんなで決めたのさ。月沙を応援してやろうってな。反対した奴は1人もいなかったよ。ここでの暮らしも悪くないし、むしろ生活が改善された奴もいるくらいだから、あまり恨むほどでもないさ」

「…なるほどな。それを聞いて安心したよ」

この人を見ても周りの人達を見ても、嘘はない事がわかる。なんだよ、あいつ…俺が知ってる以上に強いじゃねえか。

それにしても、この町の人達って本当に優しいよな。満場一致で許すなんて状況は滅多にないぞ？幸せ者だな、あいつは…。後、冥界ってそんなに治安いいのか？

バンッ！

「ん？」

いきなりドアが開かれ、一組の男女が息を切らして走ってきた。

「ろ、ロディス様！月沙は、月沙のデュエルはどうなりましたか！？」

「いや、まだ始まっていない」

「ハァ、ハァ、そう、ですか…」

ロディス『様』って…。あまり慣れないな。

「父さん、母さん、焦りすぎだよ…。まだ9時にすらなってないよ？」

はい？

「怜磨？先に来てたのか」

「子供の命懸けの戦いを見守るのは親として当然でしょ！」

「あの…もしかして、月沙と怜磨の両親ですか？」

「え？そうだけど…。！もしかして、紅刃君！？」

「はあ、そうですけど…」

「本当にロディス様の言う通りだったのか…」

まさかの両親登場かよ。まあ、この件ではいるのが普通なんだろうけど。

「まさか、こうして会える日が来るとは…。いつも月沙が世話になっているね」

「世話って、んな大袈裟な…」

月沙の父さんは一方的に握手をして挨拶もした。ていうか人がよさそうだなこの人。

「紅刃君とスイレンちゃんが月沙の1番の支えになっているのはみんな知ってるわよ。ほんと、感謝してもし切れないわね」

なんかだんだん懇談会みたいなノリになってきてないか?俺は月沙の保護者でも教師でもないぞ?

「まあ、俺にとっても月沙は大切なや…!?」

「どうしたんだい?」

「もう時間じゃねえか!?」

「何!?」

時計はもう9時を差している。いつの間にかついているモニターに白い人影が映った。

SIDE／月沙

夜9時ジャスト。準備を終えた私は、いつも明日香さんと亮さんがいる灯台に着いた。

「来たか」

灯台には、既に仮面の男がいた。潮風でマントがはためいている。

「逃げずに時間通り来た事は褒めてやる」

「私は貴様を倒さなきゃいけないんだ。逃げるなんて選択肢は始めからない」

髪はいつものポニーテールにしないで、転生前と同じように下ろしている。もう腰の位置よりも長い。

もう会う事はないと思ってたけど、会ったなら話は別。怜磨達のためにも、こいつは必ず倒す！

「では、早速始めよう。と、言いたいところだが…」

「？」

「そこに隠れているのはわかっている。出て来い」

「…ばれていたか」

近くの茂みから、昼間のメンバーが出て来た。危険だからついて来るなって言ったのに…。

「なんで来たの？危険だって言ったでしょ？」

「だからだよ。仲間が危ないのに僕達が黙ってるとでも？」

「ハァ…好きにしなさい」

「月沙、絶対負けんなよ！そんな奴ぶっ飛ばせ！」

声を張り上げたのは、保健室で寝てるはずの十代だった。

「十代！？あんた、怪我は…」

「平気平気！もう大じょ、いつつ…！？」

「十代、無理しちゃ駄目なんだな！」

「まだ完治してないのに鮎川先生に無理言って飛び出すからッスよ！」

「だって、月沙のあんな話を聞いた後じゃ、いても立ってもいられないだろ！？」

あんな話って…無理矢理聞き出したな…。

「仕方あるまい。こいつはそういう男だ」

「お兄さん…」

「亮さん！？」

「話は聞いた。止めはしないが…必ず勝て」

主要メンバーがほとんど揃っちゃった…。あいつがいつみんなを殺そうとするかわからない。私がみんなを護るんだ…！

『姫様…』

「（スイレン？）」

ディスクを引き抜くと、スイレンが飛び出してきた。

『いよいよですね』

「（うん…。怜磨達の仇を取るためにも、負けるわけにはいかない）」

『本当に危なくなったその時は…わかってますよね？』

「（大丈夫。さあ、行くよ！）」

『はい！』

スイレンははっきりと返事してカードに戻っていった。

「作戦会議は済んだか？」

「やっぱり精霊が見えるのね。始めるよ」

互いにディスクを展開すると、デッキが自動でシャッフルされた。

『あれ』をやらずに終わらせるのが1番だけど…多分、そうはいかないだろうな。

「当然、これは闇のデュエルだ。負けた者は闇に葬られる」

「だろうと思ったよ。行くよ」

このデュエル、必ず勝つ！

「「デュエル！」」

月沙ｖｓ仮面の男

「私の先行、ドロー！モンスターをセット！カードを2枚セットしてターンエンド！」

月沙
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×２

「俺のターン。相手の場にのみモンスターが存在する時、手札から《サイバー・ドラゴン》を特殊召喚する」

サイバー流の主力であり、亮さんの主力でもある機械の龍がいきなり召喚された。

《サイバー・ドラゴン》
効果モンスター
星５／光属性／機械族／ＡＴＫ２１００／ＤＥＦ１６００
相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在していない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

《サイバー・ドラゴン》　ＡＴＫ／２１００

「《サイバー・ドラゴン》だと！？」

「なるほど…話に聞いている通り、月沙がいた世界ではそれほど珍しくないみたいだな」

意外にも亮さんが冷静に分析する。さすがカイザーだ。

「さらに、《死霊騎士デスカリバー・ナイト》を召喚する」

馬に乗った悪魔の騎士。将人がよく使っているモンスターだ。

《死霊騎士デスカリバー・ナイト》　ＡＴＫ／１９００

「ちっ。モンスター効果を封じるつもりか」

「バトルだ。デスカリバー・ナイトでモンスターに攻撃」

死霊騎士が剣を振り下ろす。が、それは難無く受け止められた。

「《氷結界の修験者》は攻撃力１９００以上のモンスターとの戦闘では破壊されない！」

《氷結界の修験者（しゅげんじゃ）》
効果モンスター
星４／水属性／戦士族／ＡＴＫ１５００／ＤＥＦ１０００
このカードは攻撃力１９００以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。

《氷結界の修験者》　ＤＥＦ／１０００

「戦闘破壊耐性！」

「まあ、いいだろう。カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

仮面の男
ＬＰ／４０００
手札／2
モンスター／《サイバー・ドラゴン》（ＡＴＫ／２１００）《死霊騎士デスカリバー・ナイト》（ＡＴＫ／１９００）
魔法・罠／リバース×２

デスカリバー・ナイト…早めに潰しておかないと危険だ。

「私のターン！魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動！手札からモンスターを1体墓地に送り、手札かデッキからレベル1のモンスター1体を特殊召喚する！」

《ワン・フォー・ワン》
通常魔法（制限カード）
手札からモンスター1体を墓地へ送って発動する。
手札またはデッキからレベル1モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「レベル1？」

「そんな雑魚クラスのモンスターを出してどうするつもりだ？」

「万丈目君、それを紅刃の前で言ったら怒られるよ？」

「は？」

「レベル１ナメんな！俺のデッキの中核だぞ！」

「紅刃、まずは落ち着こうか？」

「私はデッキから《氷結界の番人ブリズド》を特殊召喚する！」

《氷結界の番人ブリズド》　ＤＥＦ／　５００

この時代の人間はレベル１のモンスターがどれだけ重要かわかっていない。未来なら重宝されているというのに…。

「修験者とブリズドをリリースし、《氷結界の虎将　ガンターラ》をアドバンス召喚！」

色黒の僧侶の戦士が私のフィールドに現れた。

《氷結界の虎将　ガンターラ》
効果モンスター
星７／水属性／戦士族／ＡＴＫ２７００／ＤＥＦ２０００

自分のエンドフェイズ時、自分の墓地に存在する「氷結界の虎将ガンターラ」以外の「氷結界」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する事ができる。
この効果は1ターンに1度しか使用できない。

《氷結界の虎将　ガンターラ》　ＡＴＫ／２７００

「おお！なんか凄そうなのが出て来た！」

「バトル！ガンターラでデスカリバー・ナイトに攻撃！」

「馬鹿め！リバースカードオープン《次元幽閉》！攻撃モンスターを除外する！」

「リバース発動（トラップ・スタン）！このターンの間、罠カードの効果を全て無効にする！」

「何！？」

《トラップ・スタン》
通常罠
このターンこのカード以外のフィールド上の罠カードの効果を無効にする。

「行け、ガンターラ！水氷闘波！」

ガンターラが拳から放つ氷の闘気が、悪魔の騎士を一撃で成仏させた。

「ぐうぅ！」

仮面の男　ＬＰ／４０００→３４００

「これで効果が使える！カードを１枚セットし、エンドフェイズ時にガンターラの効果を発動！１ターンに１度、墓地から氷結界のモンスター１体を特殊召喚する！墓地から《氷結界の大僧正》を守備表示で特殊召喚する！虎将の導き！」

ガンターラが魔法陣を発生させると、そこから笠を被った仏教徒が召喚された。

《氷結界の大僧正（だいそうじょう）》
効果モンスター
星６／水属性／魔法使い族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ２２００
このカードは召喚・反転召喚に成功した時、守備表示になる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する「氷結界」と名のついたモンスターは魔法・罠カードの効果では破壊されない。

《氷結界の大僧正》　ＤＥＦ／２２００

「そんなモンスターいたっけ？」

「《ワン・フォー・ワン》で墓地に送ったカードだ」

「大僧正が場にいる限り、私の氷結界のモンスターは魔法・罠の効果では破壊されない！ターンエンド！」

月沙
ＬＰ／４０００

手札／０
モンスター／《氷結界の虎将　ガンターラ》（ＡＴＫ／２７００）
《氷結界の大僧正》（ＤＥＦ／２２００）
魔法・罠／リバース×２

「凄いですわ！たった２ターンで上級モンスターを２体揃えるなんて！」

「しかも魔法・罠では破壊されないし、これなら楽勝よ！」

「ももえ、ジュンコ、まだわからないわよ。どんな状況でも逆転される可能性は充分あるのよ？」

明日香さんの言う通り、いつ何が来てもおかしくない。この布陣でしばらくの間持ちこたえられるかどうか…。

「俺のターン。ほお、いいカードを引いたな」

仕掛けてくる！

「《サイバー・ドラゴン》をリリースし、《邪帝ガイウス》をアドバンス召喚！」

《邪帝ガイウス》　ＡＴＫ／２４００

「ガイウス！？」

「帝モンスター…！」

「ガイウスがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカード

を1枚除外する。ガンターラを除外！」

虎将が闇に飲まれていく。これで毎ターンの蘇生はなくなった…！

「ガイウスで大僧正を攻撃！」

邪帝が放つ闇のエネルギー弾が大僧正を襲う！

「罠発動《D2シールド》！私の守備表示モンスター1体の守備力を2倍にする！」

《D2（ディーツー）シールド》
通常罠
自分フィールド上に表側守備表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターの守備力は、元々の守備力を倍にした数値になる。

《氷結界の大僧正》　ＤＥＦ／２２００→４４００

大僧正の周りにシールドが展開され、エネルギー弾はそのままガイウスにぶつかった。

「ぐぅ！？」

仮面の男　ＬＰ／３４００→１４００

「守備力を2倍にするカードだと！？」

「見た事がないな。やはり異世界のカードなのか？」

「そういえば、『氷結界』のカテゴリも聞いた事がないわね」

「違う世界から来たっていうのは本当みたいッスね…」

「それだけじゃないよ。《Ｄ２シールド》の効果はエンドフェイズ後も持続される。大僧正は当分の間フィールドに留まり続けるだろうね」

これで防御はほぼ完璧。後はガイウスをどかして攻撃の準備を整えないと…。

「ちっ！カードを１枚セットしてターン終了だ！」

仮面の男
ＬＰ／１４００
手札／１
モンスター／《邪帝ガイウス》（ＡＴＫ／２４００）
魔法・罠／リバース×２

「私のターン！」

使用モンスターから考えて、あいつのデッキはおそらく【カオス】。除外される前に決着をつける！

「魔法カード《天よりの宝札》！お互いに手札が６枚になるようにカードをドローする！」

「ここで《天よりの宝札》？少し危険じゃないか？」

「あいつのデッキが【カオス】だと考えてるんでしょうね」

「【カオス】？」

「光属性と闇属性から優秀なモンスターを選んで取り入れたデッキだよ。中には除外効果を持つモンスターもいる」

「な！除外だと大僧正じゃ対処できねえじゃねえか！」

「そこをガイウスと他のモンスターで殴られたらゲームオーバー。下手に時間を稼ぐより、さっさと準備を進める方がいいんだよ」

引いたカードは悪くはない。まだガイウスを倒せないから、今は守りを固めるしかないか…。

「チューナーモンスター《氷結界の術者》を召喚！」

《氷結界の術者》
チューナー（効果モンスター）
星２／水属性／水族／ＡＴＫ１３００／ＤＥＦ　　０
このカード以外の「氷結界」と名のついたモンスターが自分フィールド上に存在する限り、全てのレベル４以上のモンスターは攻撃宣

言をする事ができない。

《氷結界の術者》　ＤＥＦ／１２００

「術者と他の氷結界のモンスターが場にいる時、レベル４以上のモンスターは攻撃できない。カードを２枚セットしてターンエンド」

月沙
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《氷結界の大僧正》（ＤＥＦ／４４００）《氷結界の術者》（ＤＥＦ／　０）
魔法・罠／リバース×３

「さらに守りを固めたか」

「まだ攻撃に入れないみたいだな」

「俺のターン。…ククッ」

「？」

「フハハッ…来たぞ！礼を言うよ。手札を増やしてくれたおかげでこのカードを引けたよ」

まさか…『あれ』を引いたというの！？

「墓地の闇属性モンスター《死霊騎士デスカリバー・ナイト》と光属性モンスター《サイバー・ドラゴン》を除外し、《カオス・ソーサラー》を特殊召喚！」

光と闇、２つの力で現れた混沌（カオス）の魔法使い。【カオス】の切り札が、ついに出て来た…！

《カオス・ソーサラー》
効果モンスター（準制限カード）
星６／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ２０００
このカードは通常召喚できない。
自分の墓地の光属性と闇属性モンスターを１体ずつゲームから除外して特殊召喚する。
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体をゲームから除外する事ができる。
この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃する事ができない。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

《カオス・ソーサラー》　ＡＴＫ／２３００

「《カオス・ソーサラー》…！」

「カオス・ソルジャーと同じ召喚方法だ！」

「さらに《クリッター》を召喚！」

目が３つある小さな悪魔が飛び出した。

《クリッター》
効果モンスター（制限カード）
星３／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ　６００
このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキか

ら攻撃力１５００以下のモンスター１体を手札に加える。

《クリッター》　ＡＴＫ／１０００

攻撃力１５００以下なら何でもサーチできるモンスター。何が来るかわかったものじゃない。

「《カオス・ソーサラー》の効果発動！１ターンに１度、表側表示のモンスター１体を除外する！大僧正を除外だ！カオス・ディメンジョン！」

魔術師が開く異次元へと続く穴を大僧正の足元に開き、そのまま引きずり落とした。

「大僧正が…！？」

「バトルだ！《クリッター》で《氷結界の術者》を攻撃！」

「モンスターが全滅した！？」

「ガイウスでダイレクトアタック！」

「くっ！？罠カード《ガード・ブロック》！戦闘ダメージを無効にする！」

ガイウスが放ったエネルギー弾をデュエルディスクで防ごうとしたけど、闇のデュエルだという事を思い出してぎりぎりでかわした。

「…カードを１枚ドローする」

「効果を使用した《カオス・ソーサラー》はこのターン攻撃する事ができない。カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

仮面の男
ＬＰ／１４００
手札／３
モンスター／《邪帝ガイウス》（ＡＴＫ／２４００）《カオス・ソーサラー》（ＡＴＫ／２３００）《クリッター》（ＡＴＫ／１０００）
魔法・罠／リバース×３

「いい判断だな。あのままデュエルディスクで防いでいたら、サイコパワーもあいまってディスクが粉々になっているところだった」

「やっぱり…サイコデュエリストなのか？」

俊也が問い掛ける。サイコデュエリストとの関わりが多かったし、薄々感づいていたんだろう。

「ああ、そうさ。この力は素晴らしい。気に入らない奴は全て葬れる」

「ふざけるな！その力のせいで、人生を狂わされて死ぬほど悩んだ人だっているんだぞ！」

アキの事だ…。かつて黒薔薇の魔女と呼ばれた友人の顔が頭に浮かぶ。

「だからどうした。こんな強力な力を持っているんだ、使わないともったいないだろう？」

「こいつ…！」

「なら、貴様はどこでサイコデュエリストの力を身につけたの？」

「…いいだろう。どうせ貴様はここで死ぬ。冥土の土産に教えてやろう。だが…これを説明するには、俺の正体も明かさなくてはな」

「！？」

この仮面の男の…正体…？

仮面の男は、おもむろに仮面とフードを取った。少し短めの金髪で、邪悪な笑みを浮かべている。

「月沙、誰だか知っているのか？」

「いや…私には覚えがない」

将人の質問に正直に答える。どこかで会ったような気はするけど…。

「覚えてないようだな。なら思い出させてやろう」

少しいらついた様子で、男は話を始めた。

「俺の名は尾形駿河（おがたするが）。航空士を目指していた。ある日、俺は航空会社の面接をしに、その会社に向かっていた。その途中で、道路のど真ん中を歩く子猫を見つけた」

「子猫？」

「信号は丁度赤になった。しかし、子猫は歩道に避難する様子はない。そこに、１人の女の子が現れた。それが、波星月沙だ」

それと同じシーンがないか、記憶を探ってみる。でも、あやふやすぎて上手く思い出せない。

「月沙は子猫が危ないと悟ると、道路に飛び出し子猫を抱えた。しかし、歩道に戻ろうとした時、月沙はあろう事か転んでしまった」

「！」

「そこで、俺は飛び出した。なぜあそこで見捨てなかったのか、今でも疑問だよ」

『こんな所を歩いていたら危ないよ。さ、行こう』

『みゃあ』

『もう信号が赤だ…早く、きゃっ！？』

『！』

『転…』

プップー！キキィイィィ！！

『あ…！？』

『危ない！！』

『え！？わっ…！？』

『ぐあぁあぁあ！！？』

「月沙と子猫に怪我はなかったが、俺は両足を轢かれ大怪我を負った。両足は使い物にならなくなり、航空士の夢は当然断たれた」

「！？」

…思い出した。確かあの後、私が近くの人に頼んで救急車を呼んでもらったはずだ。

「航空士になる事は俺の夢であり、俺の全てだった。だが、それが二度と叶わないと知った時から、俺は月沙と子猫を激しく恨んだ。貴様らさえいなければ、今頃俺は自由に空を飛んでいたはずなのに、それを不可能にした貴様らが許せなかった」

「……」

「いつか必ず復讐する。俺の目標は復讐に変わった。それだけを考

えて入院していたある日、俺の前にある男が現れた」

『君が尾形駿河か？』

『そうだが…』

『君には復讐したい相手がいる。違うかね？』

『いえ…います。俺の人生を台なしにした奴に、復讐したいです！』

『なら、私の元に来い。それ相応の力を授けよう』

「俺はその人についていき、人体改造を受けた」

「人体改造！？」

「俺はあの方に感謝しているよ。両足は復活したし、デュエルモンスターズのカードを実体化できるサイコデュエリストの力も与えてくれた。しかも、見返りは何かと聞くと、『今はまだいい。いずれ私の仕事を手伝ってもらう事になるが、ここに住んで自分のやりたいようにやれ』と言うじゃないか。私は早速月沙の元に向かい、なぶり殺して目的を達成させた。もちろん、子猫も見つけ出して殺し

た」

私への、復讐…。そのために、他の関係ない人まで巻き込んだというの…？

「しかし、あの方は言った。『波星月沙は別の世界に転生して、今もまだ生きている』と」

「「「！？」」」

『別の世界に転生して』…？まさか、イレギュラーと何か関係が…！？

「俺の復讐はまだ終わっていなかった。そこで、あの方の力を借りてこの世界に来た。貴様を、この手で完全に葬るためになぁ！」

「…確かに、私は貴様に恨まれてもおかしくないかもしれない」

1人の人生を台なしにした事は許される事じゃない。でも…！

「でも、私への復讐のために関係ない人達まで殺したのは許せない！その人達のために、私は貴様を倒す！！」

私はたくさんの犠牲を出してしまった。その人達のためにも、私は生きなくちゃいけないんだ…！

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第２４話　罪を償いたいならまず生きろ（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「尾形って奴、やる事がぶっ飛んでないか？」

璃音「町を丸ごと滅ぼすカードって一体何かしら？そもそも、町を滅ぼした理由もわかってないわね」

フィレス『グルッ』

勇香「月沙が負けたら俊也達も無事じゃ済まないかもな…。絶対勝てよ！」

璃音「今回紹介するのは、尾形が使用した《カオス・ソーサラー》よ」

《カオス・ソーサラー》
効果モンスター（準制限カード）
星６／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ２０００
このカードは通常召喚できない。
自分の墓地の光属性と闇属性モンスターを１体ずつゲームから除外して特殊召喚する。
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体をゲームから除外する事ができる。
この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃する事ができない。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

璃音「今や【カオス】の切り札ともいえる存在よ。墓地に光属性と闇属性のモンスターを溜める事くらい簡単にできるわ」

勇香「簡単に特殊召喚できて除外効果付き、おまけにリリース要員にもなれるし、厄介なモンスターだな」

璃音「他にも【魔法使い族】や【ライトロード】でも活躍できるわよ。制限も緩くなったから大会とかで見かける事も多いかもしれないわね」

勇香「シンクロ素材にもできるし、攻撃できなくなるデメリットはあまり気にならないんじゃないか？自分のモンスターも除外できるっていうのは、覚えておくと役に立つかもな」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

最後まで終わらず、結局このデュエルの結末は次回まで持ち越しになってしまいました…。次回で決着をつけさせる予定です。

では、また次回！

第２５話　禁止・制限は本当に大切（前書き）

月沙ｖｓ尾形の決着です。

今回はかなり長いですので注意してください。

それではどうぞ！

第２５話　禁止・制限は本当に大切

ＳＩＤＥ／紅刃

俺は今、冥界から巨大モニターで月沙のデュエルを見ている。

あの尾形って奴は俺が直接ぶん殴りたいところだけど、冥界から現世へ向かうワープホールが完全に修復されていない以上、俺はここに留まらざるをえない。俺にできるのは、ここで月沙を信じて見守るだけだ。

「みゃあ」

「ん？」

足元から声が聞こえた。下を見ると、白い子猫がいた。

「猫？」

「あ、その猫、月沙が助けた奴じゃない」

「こいつが？」

「あんたも、月沙が心配なのね」

「みゃあお」

鈴佳は子猫を優しく抱き上げた。そうか…あいつはお前にとって、

命の恩人だからな。

「最後まで見届けようぜ。あいつならきっと勝てるさ」

「みゃあ」

みんな応援してんだ。負けるなよ、月沙…！

ＳＩＤＥ／月沙

「私のターン！」

尾形
ＬＰ／１４００
手札／３
モンスター／《邪帝ガイウス》（ＡＴＫ／２４００）《カオス・ソーサラー》（ＡＴＫ／２３００）《クリッター》（ＡＴＫ／１０００）
魔法・罠／リバース×３

月沙
ＬＰ／４０００
手札／５
モンスター／なし
魔法・罠／リバース×２

復讐…。尾形はそのために私を殺した。その過程で、多くの人達を殺した。そして、私はその人達のために尾形を倒そうとしている。殺すつもりはない。闇に葬るつもりもない。でも、やっている事は同じかもしれない。

それでも、私はこいつを倒す。そうでなければ、殺された人達が報われない…！

「魔法カード《手札断殺》を発動！お互いに手札を2枚捨て、カードを2枚ドローする！」

「俺に墓地を肥やさせていいのか？」

「墓地を利用するのは貴様だけじゃない！」

墓地に落ちたカードを見ると、《マシュマロン》と《ネクロ・ガードナー》が確認できた。

「魔法カード《ミラクル・フュージョン》！フィールドと墓地から融合素材を除外して、Ｅ・ＨＥＲＯを融合召喚する！」

「《ミラクル・フュージョン》だと？」

「墓地の《Ｅ・ＨＥＲＯ　アイスエッジ》と《氷結界の虎将　ライホウ》を除外！融合召喚！《Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ》！」

氷を司る白銀の戦士が現れる。私のフィールドが冷気で溢れていく。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ》　ＡＴＫ／２５００

「来たぜ！月沙のＨＥＲＯだ！」

「ちっ…厄介な…！」

「さらにもう１枚を発動（ミラクル・フュージョン）！」

「何！？」

「フィールドのアブソルートＺｅｒｏと墓地の《氷結界の修験者》を除外し、２体目のアブソルートＺｅｒｏを融合召喚！」

《Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ》　ＡＴＫ／２５００

「融合モンスターを使って同じ融合モンスターを召喚するだと？」

「そっか、カイザーは学年が違うから月沙のデュエルを見た事がほとんどないんだっけ。見てろよ、あのＨＥＲＯは凄え効果を持ってるんだぜ！」

アブソルートＺｅｒｏの効果は２つある。１つ目はフィールドの水属性モンスターの数だけ攻撃力を上げる効果。もう１つは…。

「除外したアブソルートＺｅｒｏの効果発動！フィールドから離れた時、相手モンスターを全て破壊する！」

そう、どんな形でフィールドを離れても発動する全体除去効果！

「フリーズ・デモリッシュ！」

尾形のフィールドに魔法陣が現れ、一瞬で氷塊の中にモンスターを閉じ込める。氷塊はすぐにモンスターごと粉々に砕け散った。

「全体除去ができるとは…。しかもそれを利用して同じモンスターを出す事で、更なる除去を可能にする。そして相手はアブソルートＺｅｒｏを破壊しない限り、安心してモンスターを出せない。見事なタクティクスだ」

亮さんに褒められるなんて、私も成長してるみたいね。

「《クリッター》の効果発動。フィールドから墓地に送られた時、デッキから攻撃力１５００以下のモンスターを１体手札に加える。《バトルフェーダー》を手札に加える」

ダイレクトアタックを止めるモンスター…。早めに使わせた方がよさそうだ。

「アブソルートＺｅｒｏでダイレクトアタック！Ｆｒｅｅｚｉｎｇ　ａｔ　ｍｏｍｅｎｔ！！」

「まだ温存しておきたかったが…。リバースカードオープン《聖なるバリアー ミラーフォース ー》！攻撃表示のモンスターを全て破壊する！」

ここでミラーフォース…！

「モンスターはいないから効果は意味がないな」

「ああ！？惜しい！」

「どのみち、これで終わるとは思ってなかったけどね。《氷結界の舞姫》を召喚！」

『私も参ります！』

氷結界の里を出た時からいつも一緒にいてくれている、私のパートナー。

「（頼んだよ、スイレン！）」

『お任せください、姫様！』

「精霊のお出ましか」

「精霊？」

「お前は気にしなくていい」

翔君の疑問を将人はすぐにごまかした。今ここで説明するのは面倒だ。

「ターンエンドよ！」

月沙
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《氷結界の舞姫》（ＡＴＫ／１７００）
魔法・罠／リバース×２

「ここまで来て波星君は未だにノーダメージとは…」

「行ける！月沙さん、勝てますよ！」

万丈目君とジュンコさんの言う通り、状況は私が有利。でも、油断はできない。気を抜けばすぐにやられる。

「俺のターン！まず、《サイバー・ドラゴン》を特殊召喚！」

《サイバー・ドラゴン》　ＡＴＫ／２１００

「また《サイバー・ドラゴン》！？」

「そして魔法カード《地砕き》を発動！舞姫を破壊する！」

しまった！？

『きゃあっ！？』

「（スイレン！）」

「まだ通常召喚を行っていない。《魔導戦士ブレイカー》を召喚だ！」

赤い鎧を着た魔法使いの騎士が颯爽と現れる。

《魔導戦士　ブレイカー》

効果モンスター

星４／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１０００

このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1つ置く（最大1つまで）。
このカードに乗っている魔力カウンター1つにつき、このカードの攻撃力は300ポイントアップする。
また、このカードに乗っている魔力カウンターを1つ取り除く事で、フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を破壊する。

《魔導戦士　ブレイカー》　ＡＴＫ／1600

「ブレイカーを召喚した時、自身に魔力カウンターを1つ乗せて攻撃力を300ポイントアップさせる！」

《魔導戦士　ブレイカー》　ＡＴＫ／1600→1900

「さらに魔力カウンターを取り除く事で相手の魔法・罠を1枚破壊する！マナ・ブレイク！」

ブレイカーが放つ魔力が、私の伏せカードを破壊した。

《魔導戦士　ブレイカー》　ＡＴＫ／1900→1600

「ミラーフォースが…！？」

「バトルだ！ブレイカーでダイレクトアタック！」

ブレイカーが剣を振り下ろしてくるのを見て、私はディスクを盾にして防いだ。

「くっ…！」

月沙　ＬＰ／４０００→２４００

「さらに《サイバー・ドラゴン》でダイレクトアタック！エヴォリューション・バースト！」

機械龍のレーザー光線を防ぎ切る術は私にはない。そのまま攻撃を受けた。爆発で視界が奪われる。

「月沙！！」

「月沙さん！」

「月沙君！」

月沙　ＬＰ／２４００→　３００

「うっ…ぐ…」

片膝をついて、倒れる事だけは防ぐ。体中が痛い。闇の力とサイコパワーが重なって異常な力を発揮している。まずい、視界が霞んできた。

「大…丈夫…。氷の盾で、ダメージは抑えたから…」

即席で氷の盾を創ってなかったら意識が飛んでたかもしれない。アビリティが使えてよかった…。

「まだ立つか。これは貴様の犠牲になった人達の恨みの一撃だと思え」

「恨み…？」

「貴様が頼った人間は全て殺された。貴様と関わりさえしなければ、まだ生きながらえる事ができた。貴様と会わなければ、人生を潰される事などなかったのだ」

「……」

…こいつの言う事は間違っていない。私が無力だったから、私が助けを求めたから、みんな殺された。恨まれたって文句は言えない。

「ふざけんな！そんなの、お前が自己満足で殺したからだろ！」

「十代？」

「月沙は悪くない！恨まれるのはお前の方だ！」

「その通りよ。あなたは自分の罪の重さを理解していない！月沙を殺した理由も、他人を巻き込んだ事も、全て当てつけでしかないわ！」

「明日香…さん…」

十代と明日香さんが強く反論した。２人共、怒りを顕わにしている。

「うるさい！貴様らには夢を断たれた者の気持ちなどわかりはしない！ターン終了だ！」

尾形

ＬＰ／１４００
手札／２
モンスター／《サイバー・ドラゴン》（ＡＴＫ／２１００）《魔導戦士　ブレイカー》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×２

「私のターン！魔法カード《強欲な壺》を発動！カードを2枚ドローする！」

手札は…よし、悪くない。一応持ちこたえられる。

「（何なんだ、あいつは…。俺がどれだけ有利でも、押されているような感じが消えない。いつまで経ってもあいつから闘気が消えない。何があいつをそこまで動かしている？）」

「月沙、まだまだこれからだ！」

「まだ充分戦えるんだな！」

「負けたら許さんぞ！」

みんなが声援を送ってくれる。そうだ、私には仲間がついている。何も恐れる事はない。

「（！そうか…まだあの手が残っていた！）」

「モンスターをセット！」

「月沙、貴様が死んだ後の世界の事を知りたいとは思わないか？」

「死んだ後？」

「そうだ。俺は貴様を追う途中に他人を殺していく中で、ある感覚を覚えた。殺すという行為に対しての快感だ」

「！」

「貴様を殺した後も、俺は貴様と関わりのあった人間を片っ端から殺していった」

え…？

「思い出すだけでもぞくぞくする。特に、貴様の親友を殺すのは楽しくて仕方なかった」

親友…？

「！？貴様まさか、鈴佳を…！？」

「貴様と同じように逃げ続けて、最後は俺になぶり殺されたよ。あの恐怖に歪んだ顔は忘れられそうにない」

「そ…そん…な…」

私や怜磨達だけじゃなく…鈴佳まで…？

「だが、まだ足りなかった。俺は貴様が憎い。故に、貴様が関わりを持っていた者全てが憎い」

「な…無茶苦茶だろ！？理不尽すぎる！」

「理不尽？知らんな」

「…！」

「そこで俺は、何をしたと思う？」

「……」

「答える気力もないか？まあ、いい。俺は貴様が住んでいた町を、丸ごと焼き尽くした」

「「「え…！？」」」

「「「や…」」」

「焼き尽くした…だと…？」

「そうさ。空からモンスターの力でな。逃げ惑い、泣き叫び、終いにはみんな等しく命を散らせていく。あの光景は最高だったなぁ」

「ま…町…まで…」

そんな…私が住んでいた町や…町の人達全員が…殺された…？

「だが、まだだ。貴様が生きているのなら、俺の復讐はまだ終わらない。俺は、貴様らに七精門の鍵が渡された日の夜、紅刃に１人の刺客を仕向けた」

「「！？」」

「！まさかあいつ…！？」

「間違いない。仕掛けに来たな」

「まずいよ！姉ちゃんがただでさえ崩れかけてるのに、そんな事まで言ったらどれだけショックを受けるかわかったもんじゃないよ！？」

「…！」

紅刃…？なんで紅刃が？それに刺客？あの日の夜に？

「その刺客は、俺が操った将人だった」

「…！？」

「え…？」

「将人には紅刃と闇のデュエルをさせた。引き分けたのは予想外だったがな。洗脳はその時に解けた」

「く…！」

じゃあ、将人がこの過去の世界に来てるのは…尾形に操られていたから…？

「そして、引き分けた場合は当然両者が闇に飲み込まれる。偶然居合わせた俊也の助けもあって、全員闇から逃れるところだった」

『ところだった』…？

「闇はドーム状になって紅刃達を取り囲み、紅刃達は中から穴を開けてそこから脱出しようとした。そこで、俺は最後尾にいた紅刃に攻撃を仕掛けた。当然、紅刃は逃げ遅れて闇の中に消えた」

「闇…に…？」

「つまり、こういう事だ。

『真川紅刃は死んだ』」

……え……？

「死んだ…？」

「紅刃君が…死んだ…？」

嫌だ。

「馬鹿な！？あいつがそう簡単に死ぬなどありえん！」

嘘だ。

「当然、その場にいた将人と俊也も知っているはずだ」

「「…」」

信じたくない。

「なあ、将人、俊也、嘘だろ？紅刃は急用で島を出てるだけなんだろ？前にそう言ってたじゃねえか！」

「それは…」

「…」

「何とか言えよ！！あいつは今も生きてんだろ！？」

体が動かない。確かめられないけど、十代が将人か俊也の胸倉を掴んでるのかな？

そうだよ。俊也も将人も、冥界で起きた事件を解決しに行ってるって言ってたじゃない。こんなの…ただの出まかせだよ…。

「……本当だ……」

「え…？」

「本当だ。あいつは闇に飲み込まれた。俺達は…助ける事ができなかった…」

……

「な…」

「おい…嘘だろ…？」

「みんな、紅刃を大切に想ってるのに…言えるわけ、ないじゃないか…」

「……う……そ……」

「月沙！？」

「嘘…でしょ…？」

お父さんも…お母さんも…怜磨も…近所のおばあちゃんも…先生も…町中の人達も…鈴佳も…紅刃まで…。

みんな…死んだ…。もう…みんなには…会えない…。

「月沙さん！？」

「月沙君！？」

鈴佳…もう…会えないの…？

「波星君！」

「月沙！」

紅刃…もう…一緒に…いてくれないの…？

「月沙！」

「月沙さん！」

嫌…。

「嫌ぁあああぁあああぁあああぁあああぁあああぁあああ！！！！！」

ＳＩＤＥ／紅刃

『嫌ぁあああぁあああぁあああぁあああぁあああぁあああ！！！！！』

最悪だ。

町が滅ぼされた事や鈴佳が殺された事が知られた上に、俺が死ん

だと誤解までしちまった…！

月沙は両膝をつき、頭を抱えてうずくまってしまった。

《姫様！？しっかりしてください！姫様！》

『嫌…嫌だ…行かないで…』

慌てて出て来たスイレンの声も十代達の声も届いてないらしく、泣きながらうわごとのように呟き続けている。

「あぁぁ…月沙ちゃん…」

「月沙！」

「月沙…！なんて事に…！？」

広間は蜂の巣をつついたような大騒ぎになっている。ばあさんも両親も気が気じゃないようだ。

「くそ…恐れていた最悪の事態が…！」

「…多分…」

「？」

「多分…姉ちゃんは、鈴佳さんと紅刃兄ちゃんに依存してたんだと思う」

「依存？」

「親友の鈴佳さんや紅刃兄ちゃんと一緒にいる事が、とても幸せだったんだ。俺から見ていても、本当に幸せそうだった。でも…」

「その2人が死んだ事を知らされて取り乱してしまった、と…」

怜磨の言葉を引き継いだのはクヴァシルだった。

「くそ！フォッタ！まだ力は戻らないのか！？」

「ちょ、リーシェ落ち着いて！？まだかかるってさっきから何度も言ってるでしょ！」

あんな月沙、初めて見たな…。

「まずいな…。どうにかして専用の携帯を転送できればいいんだが…」

いつも明るいはずのお前が…。

「どうすれば…ああもう！私や紅刃が傍にいてあげられれば…！」

こんな風に取り乱すなんて…何やってんだよ、俺は…？

「これじゃ、デュエルにならないぜ…。なんとかして、紅刃が生きている事だけでも伝える事ができれば…」

「うるせえ！！！」

俺が思い切り怒鳴ると、辺りが一発で静まり返った。

「く、紅刃…？」

「今更ごちゃごちゃ言っても仕方ないんだ。俺はあいつを信じる！」

「信じるって…！」

鈴佳が反論しようとしたけど、なぜか途中でやめてしまった。

「どうした？」

「…なんでもないわ（あれだけ強く拳を握りしめてたら、あんたの気持ちが丸わかりじゃない…）」

『どうした、早くターンを続けろ！これは闇のデュエルだ、サレンダーは許されんぞ！』

『っ！てめえ！』

『アニキ、落ち着いて！』

『暴力は駄目なんだな！』

『これ以上黙って見てられるか！』

モニターを見ると、挑発をする尾形に殴りかかろうとして翔と隼人に抑えられている十代の姿があった。

『無駄な事を。俺には指1本触れる事さえできん！』

『何！？』

尾形はそう言うと、月沙に近寄ってきた。

《何をするつもりですか！》

スイレンが月沙の前に、武器を構えて立ちはだかる。

『邪魔だ。やれ、ブレイカー』

《な…！？くっ！》

ブレイカーが実体化し、スイレンに斬りかかってきた。スイレンはそれを受け流すうちに、月沙から離れてしまう。

『う…ぐすっ…』

『（いいぞ！こいつはもう戦意を失っている！もはや勝敗は決している！）さっさと続けろ！』

『ぐっ！？』

「！」

尾形は泣き続ける月沙を横から蹴り飛ばした。そして、頭を思い切り踏み付けた。

『がっ…！う…』

『月沙！』

『どうしたよ！早く続けろよ！何ならターンを終了して、デュエルが終わるまで何もしなくてもいいんだぜ？』

《姫様！？ぐっ…！》

「何なんだあの野郎は！？」

「月沙から離れなさいよ！」

広間の人達からは大ブーイングが巻き起こる。俺はというと、必死で怒りを押さえ付けている。

バチィッ

右手から白い火花が散った。アビリティが暴発しかけてんのか？

『あいつ…！』

《もう限界だ！助太刀する！》

《これ以上は黙って見てられません！》

《ちっ…面倒だが、これじゃ話にならねえ！》

『お前ら…！』

ゴーズ、カイエン、ヒジュラも飛び出し、尾形に斬りかかる。が、電磁バリアに跳ね返されてしまった。

《くそ…！3人がかりでも駄目なのか！？》

『だから言っただろ？俺には触れる事すらできな…！？』

言い終える前に、尾形は吹っ飛んだ。

「へ…？」

横から風の弾丸が飛んできて、尾形に直撃したと理解するのに数秒かかった。

《不意打ちなら対応できないみたいね》

『ウィン！？』

飛んできた方向には、杖を構えたウィンがいた。

《ただいま、俊也！》

『怪我はもういいの？』

《うん、もうへっちゃら！》

『ぐぅ…き…さま…！』

《ウィン様！？》

『おっと！』

ウィンはさっきと同じ風の弾丸を放ち、ブレイカーを攻撃した。

ブレイカーはダメージを受けると実体化が解けた。

《あ、ありがとうございます！》

《どういたしまして！》

《主》

『…何だ？』

モニターに目を戻すと、ヒジュラと将人が何か話していた。

《責任を感じるのもいいが、てめえにはやる事があるんじゃねえか？》

『？』

《ガツンと言って立ち直らせてきやがれってんだ》

『！…ああ』

将人は何を思ったのか、上半身だけ起こした月沙に歩み寄った。

『月沙』

『……』

『立て』

『……』

駄目だ、完全に心が折れてやがる…。あいつ、どう立ち直らせるつも…

バキィッ！

「……」

俺はもちろん、その光景を見ていた全員が絶句した。

将人は何を思ったのか、月沙の胸倉を掴み上げて思い切り殴り飛ばしていた。

『…ま…さと…？』

月沙は痛むはずの左の頬を押さえる事も忘れて、呆然と将人を見上げている。

『逃げるな！！』

『！？』

『泣きたければ好きなだけ泣けばいい。俺の事が嫌いになったならいくらでも嫌え。だが、この闘いから逃げる事だけは絶対に許さん！』

《……》

スイレンに至っては真っ白になって固まっている。

『犠牲になった人達や、お前の親友や紅刃の事を本当に想っているなら、全ての元凶をぶちのめせ！』

『…！』

『今の感情を全て奴にぶつけろ。泣くのも恨むのも、その後でも遅くはない』

将人は言いたい事を全部言い切ったのか、踵を返して元の位置に戻り、

『ぐっ！？』

ヒジュラに頭を殴られた。

《「ガツン」の意味が違えぇえええ！！何泣き崩れてる女子高生を殴り飛ばしてんだ！？》

『俺はあいつを立ち直らせようとしただごぉ！？』

あ、今後はスイレンに飛び蹴りされた。

《姫様に何をなさってるんですか！？》

《スイレン、落ち着いて！》

《これが落ち着いていられますか！？》

『ちょっとあんた、何月沙さんを殴ってんのよ！』

『貴様、女性に拳を振るうとは何事だ！』

『将人、今のはやりすぎだと思うんだけど…』

『殿方として最低ですわよ！』

『将人君…今のは人としてどうかと…』

『そこまで言うか！？』

「ぼろくそ言われてるな、あいつ…」

「大丈夫なのか？」

将人を揃って非難する翔達。まあ、女子をぶん殴ったんだからしゃあないだろうけど…。

『…カードを1枚セットし…ターン、エンド…』

え？

月沙
ＬＰ／３００
手札／１
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×２

みんなが声の主を見る。月沙は、確かに立ち上がってターンを進めていた。

『『『『『《《《月沙！？》》》』』』』』

『波星君！？』

『月沙君！』

『『《月沙さん！》』』

《姫様！》

「立った…！」

「ついに復活か！？」

いや、少し様子がおかしいように見える。雲が月を多い隠したせいで、顔は影でよく見えないけど…まだ立ち直り切れてないのか？

『ようやく再開する気になったか。俺のターン、ドロー！魔法カード《暗黒の宝札》を発動！自分の場の闇属性モンスター《魔導戦士ブレイカー》をリリースし、カードを2枚ドローする！』

《暗黒の宝札》
通常魔法（オリジナル）
自分フィールド上の闇属性モンスター1体をリリースして発動する。カードを2枚ドローする。

『さらに魔法カード《天使の施し》を発動！カードを3枚ドローし、手札を2枚捨てる！』

ここで《天使の施し》か…。また《カオス・ソルジャー》が出るんじゃねえだろうな？

『！ふ、ふふ…』

《？》

『ふはははははは！はははははは！』

なんだ？急に笑い出した…。何を引いたんだ？

『何がおかしいんだよ！？』

『これが笑わずにいられるか！このデュエルを終わらせるに相応しい、最高のカードを引いたんだからな！』

『「最高のカード…？」』

俺と十代の声が重なる。

『墓地の闇属性モンスター《クリッター》と光属性モンスター《マシュマロン》を除外！』

雲行きが怪しくなる。何を出すつもりだ？

『出でよ！デュエルモンスターズ最悪にして最強のカード！《混沌帝龍　－終焉の使者－》！！』

地面に黒い穴が開き、赤いたてがみを持つ黒龍がはい出てきた。

《混沌帝龍（カオス・エンペラー・ドラゴン）　－終焉の使者－》

効果モンスター（禁止カード）

星８／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２５００

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の光属性と闇属性モンスターを１体ずつゲームから除外して特殊召喚する。

１０００ライフポイントを払う事で、お互いの手札とフィールド上

に存在する全てのカードを墓地に送る。
この効果で墓地に送ったカード1枚につき相手ライフに３００ポイントダメージを与える。

《混沌帝龍　－終焉の使者－》　ＡＴＫ／３０００

辺りに稲妻が走り始め、暴風がフィールドを襲った。

『混沌帝龍!?』

「混沌帝龍だと!?」

「馬鹿な!?あれは既に禁止カードに指定されているはずだ!」

『《カオス・ソルジャー　－開闢の使者－》と対を為す、最強の禁止カード…!』

『汚えぞ!制限くらい守れよ!』

『だからどうした!?これは非公式のデュエルだ!制限など関係ない!』

馬鹿だ…馬鹿すぎる…。ここまで腐った奴だとは思わなかった…!

『うわぁあぁぁあ!!』

突然、翔が悲鳴を上げた。どうしたんだ?

『だ、だだ誰なんスか君達!?』

『は？』

『これは…！？』

『《冥府の使者ゴーズ》にカイエントークン、《風霊使いウィン》に《氷結界の舞姫》…！？』

『ど、どうなってるの！？』

『嘘…実体化してる！？』

『ええ！？』

え？実体化？

「どうやら、混沌帝龍をサイコパワーで実体化させた事で、周囲にも多大な影響を与えているらしいな」

「と、いうと…？」

「スイレン達は今、全員実体化している」

「はぁあぁぁ！？」

なんじゃそりゃ！？どんだけ影響力があるんだよあのモンスター！？

『ん？見た事のないモンスターが…？』

『いや、まあ…俺は擬人化してるからわからなくて当然だけどよ…』

『いい事を教えてやろう！俺が町を滅ぼす時に使ったのはこの混沌帝龍だ！』

『……』

『いつ見てもこいつの力は最高だ！貴様を葬るに相応しい！』

確かに、あのモンスターなら町１つ滅ぼすなんて簡単だろうな。

『貴様を殺した暁には、貴様が関わった全ての人間と場所を滅ぼしてやろう！手始めに、ここにいる連中全員とこのデュエルアカデミアを地獄に堕とす！』

『そんな…！』

『《混沌帝龍　－終焉の使者－》の効果発動！ライフを１０００ポイント払い、互いの手札とフィールド上に存在する全てのカードを墓地に送り、送ったカード１枚につき相手ライフに３００ポイントのダメージを与える！』

尾形　ＬＰ／１４００→　４００

「まずい！この効果が決まったら月沙のライフが持たない！」

『くそ！ここまでか…！？』

月沙…お前なら…この状況、どうする？

『ははははは！吹き飛べ！セメタリー・オブ・ファイヤー！！』

カッ！

混沌帝龍が力を解放しようとすると、突然天から雷が落ち、混沌帝龍を塵も残さず消し去った。

「え…？」

『何！？』

『な…何だ！？何が起こった！？混沌帝龍はどこに消えた！』

あの雷…思いっ切り見覚えがあるんだけど…。

『…カウンター罠…《天罰》…。手札を1枚捨て、モンスター効果を無効にし…そのモンスターを破壊する…』

『《天罰》だと！？』

「あれは紅刃が使っているカード…！」

『おのれぇえ！！墓地の《異次元の女戦士》とガイウスを除外し、

《カオス・ソルジャー　－開闢の使者－》を特殊召喚！』

《異次元の女戦士》
効果モンスター
星４／光属性／戦士族／ＡＴＫ１５００／ＤＥＦ１６００
このカードが相手モンスターと戦闘を行った時、そのモンスターとこのカードをゲームから除外する事ができる。

尾形はブチギレて、遊戯さんのデッキに入ってた混沌の剣士まで出してきた。

《カオス・ソルジャー　－開闢の使者－》　ＡＴＫ／３０００

『カオス・ソルジャーまで！？』

「私達の世界じゃ禁止カードよ！？汚すぎるわ！」

え…マジで？

『カオス・ソルジャーでモンスターに攻撃！開闢双破斬！！』

カオス・ソルジャーの剣はモンスターを捕らえはしたものの、斬り裂く事はなかった。

『何！？』

『チューナーモンスター《氷弾使いレイス》は、攻撃力１９００以上のモンスターとの戦闘では破壊されない…』

《氷弾使いレイス》　ＤＥＦ／　８００

『ちぃいいっ！ターンエンドだ！』尾形
ＬＰ／　４００
手札／２
モンスター／《サイバー・ドラゴン》（ＡＴＫ／２１００）《カオス・ソルジャー　－開闢の使者－》（ＡＴＫ／３０００）
魔法・罠／リバース×２

　切り札を封じられたから、かなり頭に来てるな。さっさと決着をつけないとまずいぞ…？

『（まさか混沌帝龍が封じられるとは思わなかったが…まあ、いい。手札には《バトル・フェーダー》と《オネスト》が、墓地には《ネクロ・ガードナー》がある。おまけに、伏せカードは《魔法の筒》に《神秘の中華なべ》がある。死角はどこにもない。どんなカードを使おうが、俺に勝つ事はできない！）』

《神秘の中華なべ》
速攻魔法
自分フィールド上のモンスター1体を生け贄に捧げる。
生け贄に捧げたモンスターの攻撃力か守備力を選択し、その数値だけ自分のライフポイントを回復する。

『姫様…』

『…スイレン』

『？』

『もう大丈夫』

『！』

『大丈夫』？

『もう鈴佳も紅刃も戻って来ない。だからって、ここで泣きじゃくって闘いを放り出す事を、２人が、怜磨達が望むはずがない。私を恨んでない人が１人でもいるなら、私はその人の分まで生きなくちゃいけない』

スイレンに背を向け、フィールドを見据え、言葉を繋いでいく。

『だから…尾形、貴様を倒す！私の全てを賭けて！！』

雲が晴れ、月明かりがフィールドを照らす。

「！」

決意に満ちた月沙の瞳の色は、明るい紫から深い青に変わっていた。

カァアァアア！

『何だ!?』

「あれは…!」

突然、月沙のデュエルディスクが青く強く光り始めた。いや、あれは…エクストラデッキが光ってるのか?

『!』

『将人、それは…?』

『…まただ…。ダークエンドが光っている…』

「ん?ライトエンド…?」

青い光に反応するかのように、将人の《ダークエンド・ドラゴン》のカードと俺の《ライトエンド・ドラゴン》のカードも光り始めた。ただ、ダークエンドのは紫の強い光で、ライトエンドのは黄色の弱々しい光だ。

「馬鹿な…!?『覚醒』しただと…!?」

この現象を見て、クヴァシルが驚きの声を上げた。

「『覚醒』?」

「アビリティを完全に解放した状態だ。瞳の色が変わり、戦闘能力が飛躍的に上がるが、強い心がなければ到達できない境地だ」

「何だよその中2臭い裏設定!?」

「それだけじゃない。アビリティを持つ者どうしでは、特定のカードが共鳴して光を放つ場合があると言われている」

「共鳴?この前のライトエンドの現象もそれなのか?」

「おそらくな。シグナーと似たようなものだ。今思い出したが、まさかこの目で見る事ができるとは…」

クヴァシル、そういう大切な事は忘れるなよ…。

『私のターン!!リバースカードオープン《リビングデッドの呼び声》!自分の墓地からモンスターを1体特殊召喚する!《氷結界の舞姫》!自分の墓地からモンスターを1体特殊召喚する!《氷結界の舞姫》を特殊召喚!』

『姫様…!』

『スイレン、頼んだよ!』

『!はい!』

月沙の言葉に答え、スイレンはフィールドに上がった。

《氷結界の舞姫》　ＡＴＫ／１７００

『上級モンスターを出さない?』

『何を考えているの…?』

『魔法カード《水氷の宝札》！フィールドのレベル４以下の水属性モンスターを選択し、選択したモンスター１体につき１枚、カードをドローする！』

《水氷（すいひょう）の宝札》
通常魔法（オリジナル）
自分フィールド上に存在するレベル４以下の水属性モンスターを任意の数選択し、選択したモンスター１体につき１枚カードをドローする。
選択したモンスターは、エンドフェイズまで攻撃力が０になる。

『舞姫とレイスを選択し、カードを２枚ドロー！』

このドローで全てが決まる。何を引いた…？

『…選択したモンスターは、エンドフェイズまで攻撃力が０になる』

《氷弾使いレイス》　ＡＴＫ／　３００↓　０

《氷結界の舞姫》　ＡＴＫ／１７００↓　０

『攻撃力が０になっちゃった…』

『きっと最上級モンスターを召喚するつもりですわ』

『…スイレン』

『はい？』

『「あれ」行くよ！』

月沙はいつもと同じように笑って、スイレンに指示を出した。

『…！はい！やりましょう！』

『何をする気か知らんが、この状況を覆す事などできはしない！』

『やってみなくちゃわからない！手札から《氷結界の忍》を召喚！』

手札から召喚されたのは、青い装束を着てマスクで口を隠し、短刀を持った忍者だった。

《氷結界の忍（しのび）》
効果モンスター（オリジナル）
星３／水属性／戦士族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ　５００
このカード以外の「氷結界」と名のついたモンスターが自分フィールド上に存在する場合、このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
その場合、このカードの攻撃力はダメージ計算時のみ半分になる。
このカードが「氷結界」と名のつくシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用された場合、このターンの間そのシンクロモンスターは直接攻撃する事ができる。

《氷結界の忍》　ＡＴＫ／１０００

『生け贄召喚しない！？』

『何を考えているんだ！？』

これでモンスターは3体。エクストラデッキ…。レベルは…9…？

「！あいつまさか…！？」

「ええ、来るわね」

鈴佳も気づいたみたいだ。あいつ、『あれ』をやる気か…！？

『これが私の本当の力！レベル４《氷結界の舞姫》とレベル３《氷結界の忍》にレベル２《氷弾使いレイス》をチューニング！』

レイスが2つの青い輪になり、スイレンと忍が7つの星になる。輪と星は、アビリティの影響を受けてか強く輝いている。

『チューニング！？』

『何それ！？』

『あいつまさか…！？』

『封印されし綿津見（わたつみ）の槍が、氷壁を砕き唸りを上げる！秘めたる力を解き放て！』

☆４＋☆３＋☆２＝☆９

『シンクロ召喚！邁進（まいしん）せよ！《氷結界の龍　トリシューラ》！！』

青い体に、銀色の鎧と翼。相手を威圧する銀の三つ首。氷結界最強を誇る月沙の真の切り札が、青い輝きを纏い舞い降りた。

《氷結界の龍　トリシューラ》
シンクロ・効果モンスター（制限カード）
星９／水属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２７００／ＤＥＦ２０００
チューナー＋チューナー以外のモンスター２体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の手札・フィールド上・墓地のカードをそれぞれ１枚までゲームから除外する事ができる。

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／２７００

『『『ギャオォオオォオオオ！！』』』

咆哮する三つ首の氷龍。でも、いつもと違う。

何度か見た事はあるけど、今みたいに全身から青く強い光を放っている事はなかったはずだ。これもアビリティの力なのか…？

「…勝てるわね」

隣りにいる鈴佳が小さく呟く。

「奇遇だな。俺もあいつが負ける気がしねえんだ」

このターンで決まるだろうな…！

ＳＩＤＥ／月沙

「「「ギャオォオオォオオオ！！」」」

「久々の出番よ、トリシューラ！」

今までほとんど使う機会がなかった。たまに思い切り暴れさせてやらないとかわいそうだ。

「シンクロ…召喚…？」

「見た事のない召喚方法だ…」

この時代にはまだシンクロ召喚がないけど、今はもう関係ない。

「月沙、そのモンスター…」

俊也が何かに気づいたかのように私に問い掛ける。

「私の精霊だよ。宥めるのに苦労したっけな…」

普段は眠っているのに、自分の出番が来ると喜んで力を貸す好戦的な性格だ。封印が解けた時に氷結界の里を荒らし回っただけの事はある。

私にとって、トリシューラも相棒だ。この闘い、一緒に勝つんだ！

「そ、そのカードは…！？」

尾形は当然効果を知っているみたいだ。でも、もう遅い！

「トリシューラの効果発動！トリシューラがシンクロ召喚に成功した時、フィールド・墓地・手札のカードを1枚ずつ除外する！私が除外するのは、フィールド上のリバースカード、墓地の《ネクロ・ガードナー》、そして右の手札だ！トリニティ・バイス！」

トリシューラが3つの口から青い光を吐き出し、指定したカードを跡形もなく消し去っていく。

「ちぃっ！（《バトルフェーダー》と《魔法の筒》、《ネクロ・ガードナー》がやられたか…。だが、まだ手札には《オネスト》がいる。カオス・ソルジャーには攻撃力が届かないから当然を攻撃する事になる。その瞬間、ジ・エンドだ！）」

まだだ。まだ手札から発動するカードを持っている可能性がある。

「魔法カード、」

私はそれも取り除くために、最後の手札を掲げた。

「《シンクロキャンセル》！！」

「何！？」

「シンクロモンスター1体をエクストラデッキに戻し、そのモンスターのシンクロ召喚に使用したモンスターを私のフィールドに特殊召喚する！」

《シンクロキャンセル》
通常魔法

フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター1体をエクストラデッキに戻す。
さらに、エクストラデッキに戻したこのモンスターのシンクロ召喚に使用したモンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、この一組を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「トリシューラをエクストラデッキに戻し、墓地の舞姫、暗殺者、レイスを特殊召喚！」

《氷結界の舞姫》　ＡＴＫ／１７００

《氷結界の忍》　ＡＴＫ／１０００

《氷弾使いレイス》　ＡＴＫ／　８００

「そして、もう1度舞姫と忍にレイスをチューニング！再び邁進せよ！トリシューラ！」

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／２７００

「効果発動！最後のリバースカードと手札、墓地のブレイカーを除外する！トリニティ・バイス！」

トリシューラがもう1度光を吐き、カードを殲滅しに掛かる。

「リバースカードオープン《神秘の中華なべ》！自分のモンスター1体をリリースし、そのモンスターの攻撃力か守備力の数値分だけライフを回復する！《サイバー・ドラゴン》をリリースし、攻撃力分の数値、２１００ポイントのライフを回復する！」

尾形　ＬＰ／　４００→２５００

「どうだ！これで俺の場にいるのは攻撃力３０００のカオス・ソルジャーのみ！攻撃力２７００のトリシューラで倒す事はできない！俺の勝ちだ！」

「…誰も『モンスターに攻撃する』なんて言ってない」

「？」

「《氷結界の忍》をシンクロ素材に使用した氷結界のシンクロモンスターは、このターン直接攻撃ができる！」

「何！？」

氷龍の青い光が一段と強くなり、３つの口には冷気と光が蓄えられている。

「ば…馬鹿な…こんな事が…！？」

「たくさんの人達を殺され、仲間を利用され、大切な仲間まで殺された怒り！止められるものなら止めてみろ！《氷結界の龍　トリシューラ》でダイレクトアタック！！トライデント・ブリザード！！！」

３つの青い吹雪が槍のように尾形に突進する。が、電磁バリアに衝突した。

「は、はは、そうだ！俺にはこの電磁バリアを発生させる特殊ベルトが…」

ビキッ

「！？」

機械のベルトにひびが入る。電磁バリアが弱まっていく。

「何！？昼間の3人掛かりの攻撃と同等だというのか！？」

「同等なわけがあるか。覚醒状態のアビリティはモンスターにも影響が出る」

「要するに、比べるまでもないってか…」

「な、なら《次元幽閉》を…」

尾形がカードを取り出そうとした時、バリアが攻撃に耐え切れずに破られた。

「ぎゃあああぁぁあぁぁあああ！！！」

3つの吹雪を全て食らい、尾形は巨大な氷塊に閉じ込められた。

尾形　ＬＰ／２５００↓　０

月沙　ＷＩＮ

「や…った…」

終わった。勝ったんだ。

これで…少しは罪滅ぼし…できた…かな…？

ＳＩＤＥ／紅刃

「や…やった！やったぞ！」

月沙の父さんの声を皮切りに、大歓声が広間に響き渡った。

「とうとうやったな」

「ああ」

「これで少しは楽になってくれるといいけどね」

「本当によくやった！教師としても嬉しい限りだ」

全くだ。本当によくやったよ、あいつは…。

《姫様！？》

モニターを見ると、月沙が気を失って倒れていた。

《精神的にもダメージを受けすぎたんだ。そっとしておいてやれ》

心配そうな顔をするスイレンにゴーズが声を掛けている。一応、大丈夫みたいだな…。

『あれ？さっきのモンスター達はどこに？』

『混沌帝龍の力がようやく収まったんじゃないかな？』

翔達に見えてないって事は実体化も解けたのか。ていうか、さすが禁止カード、とんでもない力を持ってんな。

ガシャアン！

突然氷塊が砕け、中からボロボロになった尾形が出て来た。

『ハァ、ハァ、ハァ、ち、畜生ぉお…！ハァ、ハァ…』

やっぱりさっきのがかなり効いたらしく、地面にはいつくばって息を荒くしている。

ズアァアア…

尾形の周りから闇が吹き出す。そうか、これって闇のデュエルだ

ったっけ…。

『ベ、ベルト…くそ、動け！』

ベルトのスイッチらしき物を何度も押しているけど、もう壊れて使い物にならない。

『く、来るなぁあああ！！』

ズバァアアン！

「！」

どこからか風と衝撃波が飛んできて、闇を掻き消した。

『俊也！』

「将人？」

飛んできた方角を見ると、俊也と鎌をしまっている将人がいた。

『ゼェ、ゼェ、た、助か…がぁっ！？』

何を思ったのか、俊也は助走をつけて尾形を蹴り飛ばした。転がる尾形に、今度は将人が近づいていく。

『ひ、ひぃいぃぃ！ぐぶっ！』

将人は容赦なく尾形の顔面に拳を叩き込んだ。

『貴様には死ぬ価値もない』

『僕達の分はこれくらいにしとくよ』

相当頭に来てたんだな、あいつら…。気持ちはよくわかるけど。

『ヒヒィィン！』

は？『ヒヒィィン！』？

『何！？』

『うわっ！？』

空から降って来たそいつに気づいた将人と俊也は、そいつの着地地点から飛びのいた。

『何だあいつ！？』

突然の乱入者にこっちも向こうも騒がしくなった。

とりあえず姿を確認。…ええと、簡単に言うと『白馬に乗ってい

る黒マント』？

「あれは《魔轟神獣ユニコール》！？」

「怜磨、知ってるのか？」

「うん。あれも精霊だろうね。しかも実体化している」

『尾形が世話になったな。こいつは預からせてもらう』

黒マントは1度ユニコールから降りて、尾形をユニコールに乗せ、落ちないように縄で縛り付けた。

《誰ですか、あなたは！？》

『まさか、イレギュラーじゃ…』

『イレギュラー、か。お前達は俺達の組織の事をそう呼んでいるみたいだな』

『組織？』

カイエンと俊也の質問には答えてくれるみたいだ。って『組織』？

「フォッタ、イレギュラーって1人だけじゃないのか？」

「いや、確証がないから人数は把握できてないんだ。組織だっていうのは今知った」

神ですら情報を掴めないのかよ…。

『そうだな…。組織の名前くらいは教えといてやる』

そいつはユニコールに乗り直した。もう帰る気か。

『俺達は「ニュートラル」。覚えておけ』

黒マントはそう言い残すと、ユニコールを駆って空に走り去ってしまった。

『…馬って、空を飛べるんだ…』

明日香、俺があえてスルーしたところをツッコんでくれてありがとう。

「参ったわね…。敵が組織だというのはわかったけど、どれくらいの規模かわからないし、敵の1人が【魔轟神】の使い手とはね…」

「鈴佳、魔轟神って何だ？」

「光属性悪魔族のカテゴリよ。手札を捨てる事で効果を発揮する強力なモンスター群。獣族の魔轟神獣もいるわ」

「とにかく、厄介な相手だって事か」

「そういう事」

一応尾形の脅威が去ったとはいえ、問題は山積みだな。俺も早いとこアビリティの強化を急がねえと…。

ＳＩＤＥ／月沙

…眩しい…。

目を開くと、白い天井が見えた。

『姫様、お目覚めですか？』

体を起こして横を見ると、スイレンがいた。

「ここは？」

『保健室です。鮎川様は用事でいませんけど。十代様はこっそり抜け出しています』

「そう…」

『具合はいかがですか？丸１日眠っておられましたが…』

「そんなに寝てたんだ。…まだ少し痛むかな？」

「今はゆっくりお休みになってください」

「ありがとう。そうするよ」

そっか…。私、尾形とデュエルして、勝ったんだっけ。そして、そのまま倒れちゃったんだ…。

体が痛むから、夢じゃないんだ。という事は…。

「死んじゃったんだな。鈴佳も、紅刃も…」

『…姫様…今はもう、我慢しなくていいんですよ?』

「え…?」

『将人様に殴られてから、ずっと泣くのを我慢しておられましたよね?』

「!そ、そんな事は…」

『わかるんですよ。何年あなたのパートナーを勤めていると思っていらっしゃるんですか?』

スイレンはそう言って優しく笑うと、実体化して私をそっと抱き寄せた。

「今は誰も文句は言いませんし、私が言わせません。思う存分、泣いていいんですよ?」

「…!うっ…」

私はスイレンの言葉に甘え、強く抱きしめて思い切り泣いた。

もう1度会いたかった。もっと一緒にいたかった。なのに、みん

な死んじゃった…。

傍にいて…行かないで…。

会いたいよ…みんな…。

ＳＩＤＥ／俊也

月沙が泣き始めるのを見て、僕と将人、明日香さんは保健室を覗くのをやめた。

「…これからどうするの？」

「俺に聞くな…」

「…わからないよ…」

愚問だよ、明日香さん。月沙とどう向き合えばいいかなんて、今の僕達にはわからない。

「なあ、どうしたんだ？」

振り向くと、気が済んだのか十代が帰ってきていた。

「十代？」

「聞いての通りよ…」

「…！そうか…」

月沙の泣き声を聞いて、十代は納得したように呟いた。

「…後で、月沙に会わないか？なんか食べ物でも持ってさ」

「私はいいけど。兄さんの看病があるから必然的に会うし」

「僕は…遠慮しとくよ」

「俺もだ…」

当然、僕と将人は十代の誘いを断る。

「なんでだよ！少しでも元気づけようとか思わないのか！？」

「俺達は、その場にいたのに紅刃を救えなかった…。なのに、どんな顔をして月沙に会えというんだ…」

「あ…悪い…」

「気にするな。お前は悪くない」

沈黙が辺りを包む。僕達はしばらくの間、月沙が泣き続けるのを黙って聞いていた。

...To be continued

第２５話　禁止・制限は本当に大切（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「長え！長すぎる！」

璃音「書いてるうちにいつの間にか長くなりすぎていたそうよ」

フィレス『ゴアァッ』

勇香「だからって１７ページは長すぎだろ…」

璃音「さて、今回のデュエルは禁止・制限の経験があるカードが大量に登場したわね」

勇香「禁止なのに混沌帝龍とカオス・ソルジャーまで出て来やがって…。昔はこんなのが横行してたのかと思うと恐ろしいな…」

璃音「今回紹介するのは、現在制限カードで強力なパワーカードの《氷結界の龍　トリシューラ》よ」

《氷結界の龍　トリシューラ》
シンクロ・効果モンスター（制限カード）
星９／水属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２７００／ＤＥＦ２０００
チューナー＋チューナー以外のモンスター２体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の手札・フィールド上・墓地のカードをそれぞれ１枚までゲームから除外する事ができる。

勇香「シンクロ召喚できれば問答無用で3ヶ所から除外…。破壊を挟まないから《スターダスト・ドラゴン》にも妨害されない上に、シンクロ素材の指定がチューナーとそれ以外のモンスター2体以上だけとか、相当強いぞ…？」

璃音「【インフェルニティ】などでは3体並ぶのも珍しくないわ。そのせいで制限になったんでしょうけどね」

勇香「月沙がやったみたいに《シンクロキャンセル》とかで使い回すのもいいな」

璃音「ただ、このカードはとても高価なのよね…」

勇香「小中学生の小遣いじゃ手が届かないだろうな…。デュエルターミナルで頑張って当ててくれ」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

…はい、長くなりすぎましたね。分割するのにも少し不自然のような感じがしたので、まとめて1話分として投稿する事にしました。

ようやくＧＸの世界でシンクロ召喚を出す事ができました。これからは解禁してどんどん使いますので、楽しみにしていてください。

では、また次回！

第２６話　負けられない理由は人それぞれ（前書き）

今回も大増量でお送りします。

ようやく原作に沿った展開に戻ります。ＶＳカミューラです。

後、今回はオリカが少し多めなので注意してください。

それではどうぞ！

第２６話　負けられない理由は人それぞれ

ＳＩＤＥ／月沙

私と尾形のデュエルから、数日が経った。

セブンスターズの１人の吸血鬼カミューラさんが現れた。原作通り、クロノス先生と亮さんが敗北し人形にされてしまったらしい。

『らしい』というのは、私はその場にいなかったからだ。ずっと保健室に篭っていた。鈴佳が死んで、紅刃が死んで…簡単には立ち直れない。

今でもその事を思い出す度に泣きそうになる。他人の前では我慢してるけど、１人の時はよく泣いた。スイレンも他のみんなも、たいていはいつもそっとしておいてくれた。

今は泣いていない。もう飽きるくらい泣いたからかな？悲しくて悲しくて仕方ないのに、もう涙は出そうにない。

…いつまでも泣いていたら、みんなに笑われちゃうよね。年末に、紅刃や遊星みたいに真っ直ぐに生きる事ができたらな、なんて考えた事があったな。紅刃の分まで生きるなら、私も真っ直ぐ生きないと。

年末、か…。そういえば、今年は神社でおみくじを引いたっけ。確か、『例え大切な人と離れ離れになっても、いつか必ず会えます』って書いてたような…。

…何期待してんだろ、私。紅刃達はもう死んでるのに、会えるわけないじゃない。こういうのは外れるものだし…。

…行こうか。カミューラさんが闇のデュエルで死ぬのを防がないと。あの人はこんな事で死んでいい人じゃない。

頭と両腕に巻き付いた包帯と、尾形と戦った後から下ろしたままの髪をそのままに、私は保健室を出た。

ＳＩＤＥ／ジュンコ

「月沙さん、大丈夫でしょうか…？」

「それ、何回も聞いたわよ」

ももえはこの数日間、ずっと月沙さんの事を心配している。いや、ももえだけじゃなく私や他の人もそうだけど…。

紅刃や前の世界の親友が死んだと知ったせいで、月沙さんは心に深い傷を負ってしまった。心配で保健室に行くと、いつも泣き声が聞こえてきて、私達はしばらく月沙さんに会えずにいる。顔を合わせられるのは、明日香さんと遊城十代、鮎川先生くらいしかいない。

今日も懲りずに保健室に行く途中だ。私達じゃ力になれないかも

しれないけど、少しでも月沙さんを元気づけてあげたい。

「大丈夫じゃないからこうして保健室に会いに行くんでしょ？」

「そうですけれど…私達が、月沙さんを元気づけるなんてできるんですの…？」

あ～、すっかりネガティブになってるよ。

「あんたまで落ち込んでてどうするのよ！？責任を感じてる俊也と将人に比べたら、私達なんて大したことないじゃない！それに、みんなセブンスターズとの戦いで忙しいんだから元気づけるのは私達の役目でしょ！？」

「…そうですわね。…また泣いてたら、部屋に入れる自信ありませんけど…」

「う…それは確かに…」

でも、下手に明るく行ってもかえって傷つけるだけだし、何て言えばいいのやら…。

ドォオオン！

「「！？」」

後ろから何かが落ちた音がした。

「なんとか着地できたか…。全く、何も空に繋ぐ事ないだろ…」

…え？

後ろを振り向くと、１人の男がいた。どこかで見たような模様が入った黒いコートを前を開けて着ていて、赤いシャツが見えている。背中にはリュックサックを背負っている。見覚えのある黒髪黒目、そして何より目立つのは、剣のような形をしているデュエルディスクらしき物を、腰に巻き付けたホルダーの鞘に収めている部分だ。

「な…」

「あ、ああ…」

開いた口が塞がらないとはまさにこの事だ。

「ん？ジュンコにももえじゃねえか」

そいつこそ、月沙さんの傷心の原因の１人で、誰もが死んだと思っていた真川紅刃だった。

ＳＩＤＥ／紅刃

俺を見て驚きのあまり声を失うジュンコとももえ。あ、俺死んだ事になってたんだった。

「そんなに驚くなよ。幽霊じゃないし、ちゃんと生きてるから安心しろ」

「あ、あわわ…」

「…はっ！あ、あんた今までどこに行ってたのよ！闇に飲み込まれたんじゃなかったの！？」

先に我に返ったジュンコが怒鳴ってきた。

「どこって…説明しても信じてくれるかどうか…」

「いいから説明しなさい！」

「わかったわかった…。ただ、今から話す事は全部本当だからな。まあ、俺が未来人だって事はもう俊也と将人から聞いてるみたいだけど」

「！？どうしてそれを…！？」

ももえも我に返る。修行中にここの様子を見てた鈴佳から聞いて、俊也と将人が俺達の事情を説明した事は知っている。あのまま隠し通すのは無理そうだからしゃあないか。

とりあえず、2人に事情を説明する。あ、ここに戻ってくる前の事も今説明しておくか。

「いよいよだね」

「ああ」

冥界のワープホールが完全に復活し、フォッタが過去にも行けるように改造したから、俺とロディス、リーシェは過去の現世に戻る事になった。見送りには、月沙が住んでいた町の人全員が来てくれた。

「いろいろ世話になったな」

「気にしなくていいわよ。アビリティの修行も一応終わったんでしょ？」

「ああ。これ以上の強化は向こうでやる」

「紅刃君、月沙ちゃんをよろしく頼んだよ」

「僕からも頼む。今月沙を元気づけてやれるのは君しかいない」

「これからも2人で幸せにね」

ばあさんと月沙の両親からも見送りの言葉を貰った。

「あの…月沙の母さん？その言い方だと俺と月沙が付き合ってるように聞こえるんですけど…」

「いや、実際付き合っててもおかしくない関係でしょ」

「怜磨！？お前何言って…」

「なんだ？お前月沙の事が好きなのか？」

「いや、そうは言ってねえだろ！」

何言ってんだこの３０００年前の王様は！？なんでいつの間に俺が月沙が好きって事になってんだよ！？

「紅刃！月沙を幸せにしてやってくれ！」

「渡辺先生、あんたが決める事じゃないでしょうに…」

俺の手を取って笑顔で言う渡辺先生。あの、俺が月沙と付き合う事前提で話が進んでないか？

「そもそも、月沙は俺の事を親友程度にしか思ってなごっ！？」

頭を硬い物で殴られる。横を見ると杖を持ったリーシェがいた。

「何すんだよリーシェ！？」

「お前が鈍いからだ」

「理不尽だなオイ！てかどういう意味だよそれ！？」

「ハァ…気づけ馬鹿…」

呆れたように溜め息をつくリーシェ。俺何か悪い事したか？

「ったく…。クヴァシル、いろいろありがとな」

「礼には及ばない。前にも言ったように私はついて行けないが、幸運を祈っている」

「クヴァシル…。ああ、サンキュな」

「紅刃、もし相棒や城之内君達に会う事があったらよろしく伝えといてくれ。最も、冥界に行った事を信じてくれるかはわからないがな」

「わかった。まあ、会う事自体珍しいけど…」

「アテム、我のいない間は冥界を頼む」

「ああ。ただ、お前の分も全部片付けておくぜ？」

は？冥界を頼む？

「ロディス、どういう事だよ？」

「我が不在の時は、アテムや鈴佳がここを治めてくれている」

「王の経験はあるから勝手はわかるぜ。ただ、『あまり負担を掛けたくない』と言って自分の仕事はある程度取っておく事がほとんどだけどな」

いつの間にそんなシステムに…。政治って大変だな。

「私は補佐役だけどね。みんないい人達だから、私が手伝う事にも賛成してくれてるわ」

「鈴佳、お前政治家にもなれるんじゃねえか？」

「そっちはニュートラルの件で大変なんだ。俺ができるのは、お前が抜けている間に非常事態にならないようにここで代役を勤める事だけだ」

「…わかった。すまないな」

「気にするな。思い切り暴れて来い」

ロディスとアテムって仲良いよな…。やっぱ王様どうしだからか？

「紅刃、これを」

鈴佳は俺に1つのリュックサックを渡してきた。

「何だこれ？」

中身を確認すると、紙袋が1つ。その中には1着の服があった。

「これは？」

「月沙の新しい服よ。餞別にって思ってね。目分量でサイズを測るのは得意だから、そこは気にしなくていいわよ」

「目分量って凄くないか？」

「そう？」

「紅刃兄ちゃん、俺からも！」

玲磨が渡してきたのは1枚のカードだ。

「姉ちゃんに渡してくれよ。今の姉ちゃんのデッキのイメージにピッタリだと思って選んだんだ！」

確かに、こいつなら月沙のデッキで充分活躍できるだろうな。

「わかった。必ず届ける。…ところで、なんで俺の事を『兄ちゃん』って呼ぶんだ？」

「いや、別に？何となくだよ」

「何となくって…」

ずっと思ってた疑問をぶつけてみたけど、上手い具合にはぐらかされた。

「（そうなったらいいな～って思ったからなんて、言えないよな…）」

「さて、僕は力が戻ったら天界に行ってニュートラルの事を報告しなくちゃね。できる限りのサポートはするから、そこんとこはよろしくね」

「わかった。いろいろ悪いな」

「いいっていいって。僕らは依頼人だからね、これくらいはやらないと」

フォッタはワープホールの改造でまた力を使い切っちまった。聞いた話じゃ、力をかなり使うし完全に回復し切ってない状態でやったからしい。俺達が早く帰れるように急いでくれたのはありがたい。今度何か奢るか。

「そろそろ行くぞ」

「ああ、そうだな」

「姉ちゃんに冥界の事でも話してやりなよ！みんな恨んでなんかないからさ！」

「ニュートラルなんてぶっ倒せ！」

「頑張って！」

物凄い声援だな。俺はスポーツ選手か？

「じゃ、いってらっしゃい！」

「ああ、行ってくる！」

鈴佳に最後の言葉を掛けられ、俺達はワープホールに飛び込んだ。

ワープホールの中はなんかグニャグニャした紫の空間だった。俺達はその中を飛んでいる。

飛んでいるっていうのは、まあ無重力みたいなもんだ。何分かその中をひたすら前へ進んでいた。

「なんていうか、予想通りの光景だな」

「出口だ」

「お！」

前方に穴を発見。あそこを抜ければデュエルアカデミアだ。

「戻ってきたんだな」

「ああ！行くぜ！」

そして、俺達は、過去の世界に飛び出した。

「…ん？」

未だに消えない浮遊感。視界一杯に広がる夕焼け空。下を見ると

遠い大地。って…

「何で空ぁあああぁあああぁあああ!!?」

そのまま真っ逆さまに落ちていく。ロディスとリーシェは飛べるからいいけど、俺は飛べねえぇえええぇえええ!!

「何をそんなに慌てている?」

「このままだと俺墜落死だぞ!?」

「何のために我のアビリティを修得したのだ?」

「あ、そうか!ていうか少なくともこんな事態は想定してねえよ!」

ま、とにかくアビリティ発動だ!でないと月沙達に会う前に死んじまう!

俺の周りを光の渦が巻く。渦が晴れると、俺の上着はロディスが着ているコートに変わっていた。

龍の姿のロディスの模様と似た模様が入っている黒いコートで、ロディスが前を閉じているのに対して俺は前を開けている。

俺は体制を立て直すと、でかい音を立てて着地した。ロディスとリーシェは後からゆっくり降りてきた。

「なんとか着地できたか…。全く、何も空に繋ぐ事ないだろ…」

これがロディスのアビリティだ。身体能力がかなりに上がる。まあ、まだ発展途上だけど、修行でもっと伸ばせる。

「な…」

「あ、ああ…」

「ん？ジュンコにももえじゃねえか」

で、冒頭に戻る。

「なるほど、冥界ね…」

「あ、普通に話信じるんだ」

「アビリティやら未来やらニュートラルやら…今更何を聞いても驚かないし、何でも信じられそうな気がするわ…」

「まあ、短期間でいろいろあったからな…」

おまけに精霊まで実体化するし…無理もないか。

「それより、早く月沙さんに会ってあげてください！紅刃さんが生きていると知ったら、きっと元気になると思いますわ！」

「いや、そうしたいのは山々なんだけど…」

「「？」」

「先にセブンスターズの方を何とかしないとな。クロノス先生と亮さんがやられたんだろ」

「…！は、はい…」

「冥界から見ていたけど、相手は蝙蝠（こうもり）を飼い馴らしていて、視界も共有できるみたいだ。大方、十代達の戦術はばれてるだろうな」

これは原作知識って奴で、鈴佳と怜磨から教えてもらった。何とまあ、卑怯な手を使うもんだ。

「じゃ、じゃあ、明日香さん達は勝てないんじゃ…」

「少なくとも、何かしらの対策はされてるだろうから苦戦必至だな。俺のデッキは前の奴から結構変えている。まともに戦えるのは俺くらいだろ。十代は引きの強さがあるけど負傷してるしな」

月沙がトリシューラを出した事で俊也と将人がシンクロの説明をしたから、俺もシンクロ召喚とクヴァシルから貰ったカードを取り入れたデッキに改良した。基本は【エンジェル・パーミッション】だけど、冥界で改良したし、奴も予測できないはずだ。

「じゃあ、早く行ってきて！私達は月沙さんにこの事を知らせに行くわ！」

「ああ、頼む。それじゃ、俺は行くからな！」

俺はそう言うと、地面を蹴って低空ジャンプで城に向かった。ロディスとリーシェも後に続く。

「あれもアビリティかしら…？」

「多分、そうだと思いますわ…」

うん、案外便利だな、この能力。そのうち瞬歩でも使えるようになるんじゃないか？

ＳＩＤＥ／月沙

カミューラの城の前まで行くと、十代達が中に入っていくのが見えた。

『姫様、本当に大丈夫なんですか？』

スイレンが出て来て、心配そうに話し掛けてきた。

「大丈夫。もう平気だから」

自分に言い聞かせるようにして答える。本当はまだ大丈夫じゃないけど、カミューラを助けるつもりの人は、多分私しかいない。

「じゃあ、行くよ」

私は開け放された扉をくぐり、城の中に入った。

城の中では、丁度十代がカミューラさんにデュエルを挑んでいたところだった。

「坊や、よく来たわね！その勇気を讃えて、可愛い人形にしてあげるわ」

「御託はいい！お前は俺が倒す！」

「待って！」

私はそれに待ったをかける。全員が私を見て驚きの表情を浮かべた。

「月沙！？お前どうして…！？」

「私だって七精門の鍵を持ってるのよ？カミューラ、今回は私が相手よ」

「あら、女の子には今は興味がないわ。私が人形にしたいのはそこの坊やよ」

「へえ、私と戦うのが怖いんだ？」

「何？」

「自信がなくて手負いの相手を選ぶっていうのならそれでもいいけど？まあ、女の子1人に怯えるような人が十代に勝てるとは思わないけどね」

「っ…！いいわ、相手してあげようじゃない！」

挑発には簡単に乗ってくれた。さて、《幻魔の扉》には注意しないと…。

「月沙、お前だってまだ怪我が治り切ってねえじゃねえか！ここは俺が…」

「大丈夫」

十代の言葉を遮り、私は右腕の包帯を取った。腕にはもう傷1つついてない。

「あっ！？」

「治ってる！？」

「どういうわけか治りが早くてね。もう怪我は完治してるから平気」

頭の包帯を取りながら理由を告げた。十代と翔君と明日香さん、後隼人君は、最近保健室にいるから私の怪我の具合については知ってたけど、ここまでとは思ってなかったみたいね。

「月沙…その…」

俊也は何か言いたそうにしてるけど、口ごもって言えずにいる。

将人は私から目を逸らしていた。

「俊也、将人…私は恨んでないから」

「！」

「え？」

「紅刃が死んだのは2人のせいじゃない。全部尾形が仕組んだ事だから、そこはもう気にしないで」

「月沙…」

「だが…」

「『だが』も『でも』もなし。私が気にするなって言ってるんだから。それに…」

私は一旦言葉を切り、2人に背を向けた。

「いつまでもうじうじしてられない。あいつの分まで生きるのが私達の役目なんだ」

「月沙…」

本当はまだ部屋に閉じこもっていたい。悲しくてどうにかなりそうだ。でも、私にはやるべき事がある。ここで止まってなんかいられない…！

「十代、ここは私にやらせて。これは私なりのけじめだから」

「月沙…。わかった！任せたぜ！」

十代は少し考えてから、笑顔で挑戦権を譲ってくれた。

十代の闇のアイテムがあるから人質の心配はない。それでも、あの《幻魔の扉》には気をつけないと…。

「そうね…念のために逃げ道を塞いでおこうかしら」

カミューラさんが指を鳴らすと、城の扉がひとりでに閉じてしまった。

「扉が勝手に閉じた!?」

「これで、お仲間さんを逃がす事はできないわよ?」

アビリティがあるから、やろうと思えばいつでも脱出できるけどね。

「私が勝てばいいだけの事。さあ、始めようか。ま、どうせ蝙蝠を使ってデッキを覗いてるから、私達の戦術はお見通しなんでしょ?」

「!?なぜそれを…!?」

「何だと!?」

「汚いッスよ!」

「正々堂々勝負しろよ!」

話を聞いてたのか、十代達が抗議してきた。

「戦いはデュエルの前から始まっているのよ?卑怯なんて言わない

でね」

『姫様、何か裏をかけるような手はありませんか？』

「（この世界ではまだトリシューラしかシンクロ召喚していない。他のシンクロモンスターを出して早めに終わらせるよ！）」

トリシューラを出したんだから、今更隠したって仕方ない。《幻魔の扉》を発動される前に決着を…

ズドォオオォオ！！

「！？」

後ろから凄まじい破壊音がして、私は思わず振り返った。

「何だ！？」

「いきなり扉が壊れたッス！？」

扉は粉々に砕かれ、煙が濛々と立ち込めている。辺りには、白い何かが所々に走っている。

「これは…電気か？」

電気？電気…白い…電気…。

「白い…電撃…？」

頭に浮かんだワードを無意識のうちに口に出す。

「！誰だ！？」

煙が晴れてくると、３つの人影が見えた。でも、まだよく見えない。

「お前か？カミューラってのは」

「！？」

心臓が跳ね上がった。

今の声…いや、まさかそんな…。だって、あいつはもう…。

真ん中の人影が大きな何かを片手で振るい、煙を軽く吹き飛ばした。

「え…？」

見覚えのある模様が入った黒いコート、紫の柄と白い両刃を持つ大剣。扉を破壊したのは…

「俺が相手だ」

私が今1番会いたい人だった。

「紅……刃……？」

「紅刃！？」

「紅刃君！？」

「え…！？」

「何だと…！？」

みんなが驚きの声を上げる。

「よお、久しぶりだな」

「紅刃!?貴様死んだはずじゃ…」

「ちゃんと生きてら。幽霊じゃねえから安心しろ」

『オーディン様…ゼウス様も…!?』

『スイレンか。心配を掛けたな』

『案ずるな。私達も命を落としてはいない』

傍らにはオーディンとゼウスがいた。オーディンは腰に刀を差している。

紅刃がゆっくりと近づいてくる。

あいつは死んだんだ。もう帰って来ないんだ。二度と会えないんだ。なのに…。

「連絡もできなくて悪かったな。後は俺に任せろ」

紅刃は私の頭をポンと軽く叩き、通り越していった。

ＳＩＤＥ／紅刃

なんか月沙が驚きのあまり無反応だけど、今は気にしないでおく

か。でも、ここにいるとは思わなかったな。ジュンコとももえの行動は無駄になったか？

「失礼します…。月沙さ…っていない！？」

「どこに行ったんですの！？」

「カミューラ、選手交代だ。鍵ならある」

俺のはダミーだけど、向こうも散々やってんだから文句は言わねえだろ。

「…まあ、いいわ。あなた、なかなかいい人形になれそうだし」

そういや、負けたら人形にされんだっけ。今は負ける気がしないから別にいいけど。

「俺にはそんな趣味はねえよ。それより、俺のデッキの情報はあるのか？蝙蝠の仕組みは知っている」

「！さあね。デュエルをすればわかるわ。そういえば、蝙蝠達はあなたの姿を1度も見てないみたいだけど…」

「実際いなかったからな。さあ、始めようぜ」

俺が念じると大剣が光の渦を纏い、いつも使っている剣型のデュエルディスクに変わった。そのままディスクを装着して展開させる。

向こうもディスクを構えてデッキをセットする。その瞬間、さりげなくカードを1枚デッキに入れたのが見えた。大方、《王宮のお触れ》でも入れたんだろ。ずっとパーミッションしか使ってないから、情報があってもおかしくない。

でも、今の俺は過去の物差しじゃ測れない。俺達の新しい力、見せてやるぜ！

「（2人共頼んだぞ）」

『任せろ』

『加減は無用だ。行くぞ！』

ロディスとリーシェがデッキに戻り、これで準備は整った。

「じゃあ、始めましょうか」

「ああ、全力で行くぜ！」

「「デュエル！」」

紅刃ｖｓカミューラ

「わｔ「俺のターン！」な！？」

悪いが先行は取らせないぜ。俺のデッキは先行有利だからな。

「《勝利の導き手フレイヤ》を召喚！こいつが場にいる限り、俺の天使族の攻撃力と守備力は４００ポイントアップする！」

レベル１の全体強化モンスター。頼りにしてるぜ！

《勝利の導き手フレイヤ》　ＡＴＫ／　１００↓　５００

「そして、永続魔法（コート・オブ・ジャスティス）を発動！俺の場にレベル１のモンスターがいる時、１ターンに１度手札から天使族モンスター１体を特殊召喚できる！俺の場にはレベル１のフレイヤがいる。よって、効果を使用し、手札から《光神機－轟龍》を特殊召喚！」

《光神機－轟龍》　ＡＴＫ／２９００↓３３００

「いきなり攻撃力３０００オーバーの貫通持ちモンスターだと！？」

「カードを２枚セットし、ターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《勝利の導き手フレイヤ》（ＡＴＫ／　５００）《光神機－轟龍》（ＡＴＫ／３３００）
魔法・罠／《コート・オブ・ジャスティス》リバース×２

「私のターン、ドロー！魔法カード《幻魔の扉》を発動！」

もう来たのか…！

《幻魔の扉》
通常魔法（アニメオリジナル）
自分の魂を幻魔に預け発動する。
相手の場のモンスターを全て破壊し、墓地のモンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚することができる。
このカードの発動後にデュエルに負けた場合、自分の魂は幻魔のものとなる。

「あ！？いきなりそれかよ！？」

「説明するまでもないわよね。このカードの発動後デュエルに負けた場合、自分の魂は幻魔のものとなる！でも私は慎み深いから、また生け贄の役をお前の仲間に譲ってあげる！さあ、誰の魂を代わりにしようかしら？」

それは慎み深いとは言わないぞ？

禍々しい風貌の扉が現れ、同時に十代達が黒い霧が包まれた。

「どうせなら仲間達みんなを犠牲にしてあげてもいいわね！そして一気に鍵を頂くわ！」

「卑怯な手を使いやがって…！」

「お前が負ければいいだけ。お前が勝ちに走れば、仲間達はまた人形になるのよ？」

確か、鈴佳達の話だと十代が持っている闇のアイテムが発動して闇の力を打ち消すはずだ。

カァアァァア！

「！」

「ぎゃあああぁっ！」

「これは…！？」

よし、聞いていた通りだ。十代のペンダントが強く光り、黒い霧を掻き消した。

「闇のアイテムの力で、闇の力が破られたのよ！」

「よし！後は頼んだぞ、紅刃！」

「ぐあああぁっ！」

ていうか、なんでカミューラまでダメージを受けてんだ？

「（明日香の兄ちゃん、ありがとよ！）お前の闇の力は破られた！もう仲間達が犠牲になる事はない！一度発動してしまった《幻魔の扉》を止める術はない！幻魔との契約は自分の魂でするんだな！」

「くっ…でもデュエルに勝てば何の事はない。このターンで終わらせる！私は誇り高きヴァンパイア一族の魂を幻魔に預け発動！相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！さらに《光神機－轟龍》を私のフィールドに特殊召喚する！」

フレイヤと轟龍が破壊され、轟龍が奪われてしまう。誰だよ、こんなカード作った奴…？

「そして、《不死のワーウルフ》を召喚！」

《不死のワーウルフ》
効果モンスター（アニメオリジナル）
星４／闇属性／アンデット族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ　７００
このカードが戦闘で破壊されたとき、デッキから同名のカードを特殊召喚することができる。この効果で特殊召喚に成功する度に、このカードの攻撃力は５００ポイントアップする。

《不死のワーウルフ》　ＡＴＫ／１２００

「攻撃力２９００と…」

「１２００…」

「全ての攻撃が通れば、このターンで紅刃は敗北する！」

「ここまでよ！《不死のワーウルフ》でダイレクトアタック！」

不気味な狼のモンスターが俺に噛み付いてくる。俺はディスクを噛ませて身体的には事なきを得た。

紅刃　ＬＰ／４０００→２８００

「自分のモンスターに倒されるといいわ！《光神機－轟龍》でダイレクトアタック！」

「悪い、轟龍…！罠発動！デッキから攻撃モンスターと同じレベルの天使族モンスターを墓地に送り、そのモンスターを破壊する！」

「何！？」

「轟龍のレベルは８！デッキからレベル８の《裁きを下す者－ボルテニス》を墓地に送る！」

上空から光の柱が轟龍を捕らえ、跡形もなく消し去った。

「ちっ…カードを２枚セットし、ターンエンドよ」

カミューラ
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《不死のワーウルフ》（ＡＴＫ／１２００）
魔法・罠／リバース×２

モンスターが全滅しちまったけど、まだ行ける…！

「俺のターン！魔法カード《強欲な壺》を発動！カードを２枚ドロ

ーする！」

「それにチェーンして永続罠《王宮のお触れ》を発動！お互いの罠を全て封じる！これであなたの強さの秘訣は無駄になるわ！」

「くそ！紅刃の対策もしていたのか…」

やっぱり、あの時入れたのは《王宮のお触れ》だったか。確かに少しきついな。

「フン、無駄なのは貴様のその考えの方だ」

「何？」

「万丈目？」

「例えカウンター罠を封じたところで、こいつがそのまま一方的にやられる事などありえん。戦った俺だからこそわかる」

さすがだな。俺の事わかってんじゃねえか。

「そういうわけだ、俺の攻め手はカウンター罠だけじゃない！チューナーモンスター《ハネワタ》を召喚！」

俺が召喚したのは、翼の生えたオレンジの丸い天使だ。

《ハネワタ》　ＡＴＫ／　２００

「チューナーだと！？」

「紅刃は今までチューナーをデッキに入れてなかったはず…！」

「…！」

「まさか、あなたもシンクロ召喚を！？」

「そうじゃなけりゃ、ここで召喚しねえよ！《ハネワタ》のレベルは1だから《コート・オブ・ジャスティス》の効果を使用できる！手札から《天空騎士パーシアス》を特殊召喚！」

《天空騎士パーシアス》　ＡＴＫ／１９００

「レベル５《天空騎士パーシアス》にレベル１《ハネワタ》をチューニング！鋼鉄の意志が、黄金（こがね）を纏いて現世に降り立つ！希望の光を振り翳せ！」

☆５＋☆１＝☆６

「シンクロ召喚！奮い立て！《鉄騎皇イグドラシル》！」

光の柱から、黄金の鎧と剣を身につけたモンスターが現れた。

《鉄騎皇イグドラシル》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星６／光属性／天使族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１９００
チューナー＋チューナー以外の天使族モンスター１体以上
このモンスターがフィールドに存在する限り、自分フィールド上の天使族モンスターは相手の魔法・罠の効果の対象にならない。
このカードが攻撃を行うダメージステップ時、エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の半

分の数値分アップする。

《鉄騎皇イグドラシル》　ＡＴＫ／２４００

「これが、紅刃のシンクロモンスター…」

「すっげえ！かっこいいぜ！」

「フィールドにモンスターがいない状態から攻撃力２４００のモンスターを召喚しただと…！？」

「バトル！イグドラシルで《不死のワーウルフ》を攻撃！」

イグドラシルが黄金の剣を振り上げる。

「イグドラシルの効果発動！こいつが攻撃する時、ダメージステップ時に攻撃対象のモンスターの攻撃力の半分の数値をこいつの攻撃力に加える！」

《鉄騎皇イグドラシル》　ＡＴＫ／２４００→３０００

「ゴールデン・カリバー！」

黄金の光を纏わせた鉄騎皇の一撃がワーウルフを真っ二つにした。

「ぐあぁう…！？」

カミューラ　ＬＰ／４０００→２２００

「くっ…《不死のワーウルフ》が破壊された時、デッキから同名カ

ードを攻撃力を５００上げた状態で特殊召喚する！」

《不死のワーウルフ》　ＡＴＫ／１２００→１７００

蘇生効果か。リリース要員を残しちまったか？

「さらに魔法カード《天よりの宝札》を発動！互いに手札が６枚になるようにカードをドローする！」

「手札を使い切ってからの発動だと！？」

このターンはイグドラシルで充分だと思ったからな。どうせお互いに補充するなら自分が使い切ってからの方がいい。

「魔法カード《サイクロン》！当然《王宮のお触れ》を破壊だ！」

「しまった！？」

ラッキーだな。これでこっちのペースに持ち込める。

「カードを３枚セットし、ターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／２８００
手札／２
モンスター／《鉄騎皇イグドラシル》（ＡＴＫ／２４００）
魔法・罠／《コート・オブ・ジャスティス》リバース×３

「あ、言っとくけど、イグドラシルがいる限り天使族は魔法・罠の対象にできないからな」

「ちっ…厄介な効果を…。私のターン、ドロー！」

さて、準備は万端だな。後は攻撃してくるのを待つだけだ。

「まず、私も《サイクロン》を発動するわ。その伏せカードを破壊する！」

くそ、《マジック・ジャマー》が破壊されたか…！

「ふふふ…！お前はヴァンパイア一族の本当の恐ろしさをまだ知らない。ヴァンパイアは死する事はないのよ！《不死のワーウルフ》を生け贄に、《ヴァンパイア・ロード》を召喚！」

カミューラは人型のヴァンパイアを呼び出した。

《ヴァンパイア・ロード》
効果モンスター
星５／闇属性／アンデット族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ１５００
このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与える度に、カードの種類（モンスター、魔法、罠）を宣言する。
相手はデッキからその種類のカード１枚を選択して墓地に送る。
また、このカードが相手のカードの効果で破壊され墓地に送られた場合、次の自分のスタンバイフェイズにフィールド上に特殊召喚される。

《ヴァンパイア・ロード》　ＡＴＫ／２０００

「さらに、《ヴァンパイア・ロード》を除外する事で手札から《ヴァンパイアジェネシス》を特殊召喚する！」

《ヴァンパイアジェネシス》
効果モンスター
星８／闇属性／アンデット族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２１００
このカードは通常召喚できない。
自分フィールド上に存在する「ヴァンパイア・ロード」１体をゲームから除外した場合のみ特殊召喚する事ができる。
１ターンに１度、手札からアンデット族モンスター１体を墓地に捨てる事で、捨てたアンデット族モンスターよりレベルの低いアンデット族モンスター１体を自分の墓地から選択して特殊召喚する。

《ヴァンパイアジェネシス》　ＡＴＫ／３０００

ちょっと待てコラ。紫に変色して筋肉増強＋巨大化っておかしいだろ。進化前の方がずっとかっこいいっての。何これバイオ〇ザード？

「攻撃力…」

「３０００！」

「カミューラのキラーカードだ…！」

「その攻撃力も凄まじいが、モンスター効果も厄介だ」

「永続魔法（ジェネシス・クライシス）を発動！このカードにより１ターンに１度デッキからアンデッド族モンスター１枚を手札に加える！」

《ジェネシス・クライシス》
永続魔法（アニメオリジナル）

自分の場に「ヴァンパイアジェネシス」が存在しない時、このカードと自分の場の全てのアンデット族モンスターを破壊する。
1ターンに1度、自分のデッキからアンデット族モンスター1体を手札に加える事ができる。

「さらに《ヴァンパイアジェネシス》はアンデッド族モンスター1体を墓地に捨てる事で同族のレベルの低いモンスターを墓地から特殊召喚できる！手札の《龍骨鬼》を捨てて《不死のワーウルフ》を特殊召喚する！」

《不死のワーウルフ》　ＡＴＫ／１２００

《ヴァンパイアジェネシス》の効果に必要なコストを《ジェネシス・クライシス》で補う作戦か。モンスターを全滅させるにはジェネシス本体を倒すしかないな。そうすれば、《ジェネシス・クライシス》の効果でカミューラの場はがら空きになる。

「ちょっとそのモンスターは邪魔ね。《ライトニング・ボルテックス》を発動！」

「げっ！？」

「手札を1枚捨てて、相手の表側表示のモンスターを全て破壊する！」

やばっ！？全体除去には耐性がねえぞ！？

「念のため、《ヴァンパイア・レディ》を召喚しておくわ」

女性の吸血鬼まで出て来た。これはやばいな…。

《ヴァンパイア・レディ》
効果モンスター
星４／闇属性／アンデット族／ＡＴＫ１５５０／ＤＥＦ１５５０
このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与える度に、カードの種類（モンスター、魔法、罠）を宣言する。
相手はデッキからその種類のカード１枚を選択して墓地に送る。

《ヴァンパイア・レディ》　ＡＴＫ／１５５０

「行くわよ！《ヴァンパイアジェネシス》でダイレクトアタック！ヘルビシャス・ブラッド！」

「くっ！罠発動《リビングデッドの呼び声》！墓地のボルテニスを特殊召喚する！」

モンスターの姿に変わったリーシェが巨大なヴァンパイアの前に呼び出される。

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００

『紅刃、このままでは私をどのタイミングで出しても負けてしまうぞ！？何か手はないのか！？』

「（安心しろ。そうじゃなけりゃ最初から呼び出したりしねえよ！）」

修行の成果で、精霊との意志疎通ができるようになった。これで変人扱いされずに済む。

「俺の場にレベル7以上のモンスターが墓地から特殊召喚された時、《精霊の姫巫女》は手札から特殊召喚できる！」

白と緑の服を着た天使がジェネシスに立ちはだかる。

《精霊の姫巫女》
効果モンスター（オリジナル）
星４／風属性／天使族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ１２００
自分フィールド上にレベル7以上のモンスターが自分の墓地から特殊召喚された場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。この方法で特殊召喚に成功した場合、このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、相手のバトルフェイズ中のみこのカード以外の自分フィールド上に存在するモンスターの攻撃力は１００ポイントアップする。
自分フィールド上にレベル7以上のモンスターが表側表示で存在する場合、このカードを攻撃対象に選択する事はできない。

《精霊の姫巫女》　ＡＴＫ／１７００

「今更そんな小娘を出したところで何になる！？」

「自身の効果で特殊召喚した《精霊の姫巫女》が場にいる限り、相手のバトルフェイズの間こいつ以外の俺のモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする！」

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００→３８００

「何！！くっ、なら《精霊の姫巫女》を…」

「俺の場にレベル7以上のモンスターがいる限り、こいつは攻撃対

象にされない！」

「！？」

「そんなカードがあるなんて…！」

「危なかった…」

「ちっ！このままターンエンドよ！」

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／３８００→２８００

カミューラ
ＬＰ／２２００
手札／０
モンスター／《ヴァンパイアジェネシス》（ＡＴＫ／３０００）《不死のワーウルフ》（ＡＴＫ／１２００）《ヴァンパイア・レディ》（ＡＴＫ／１５５０）
魔法・罠／《ジェネシス・クライシス》リバース×１

「なんとか生き延びたけど、デュエルはカミューラが圧倒的に有利…」

「確かに、カミューラの場に《ヴァンパイアジェネシス》と《ジェネシス・クライシス》がある限り、カミューラの手札のモンスターが途切れる事はない…」

「さらにまたそのカードをコストに、毎ターン《ヴァンパイアジェネシス》による蘇生コンボが成立している…」

「まさに危機的状況は変わらないニャ…」

「闇の力なんて使わなくても、充分強いじゃねえか。なんで闇の力に頼るんだ？」

これだけの戦術を扱うくらいなら、何も闇の力を使う必要なんてないだろ？

「デュエルに勝つ事など、私にとって何の意味もない…」

「は？」

「中世ヨーロッパにおいて、ヴァンパイア一族は全盛を誇り、我々は誇り高き一族として孤高に生きていた」

おい、話がいきなりぶっ飛んでるぞ？

「しかし、人間共は我々をモンスターと呼び、その存在すら許さなかった。そして一族は滅んで…私1人だけ、棺の中で永遠の眠りについていた」

「……」

「そんな私を起こす者がいた。『闇の力を使い、ヴァンパイア一族を復活させないか』と…。『その力を貸そう』ってね。私がデュエルした相手を人形にするのはただの遊びじゃない。この人形の魂を使い、滅びたヴァンパイア一族を復活させ、我々一族の魂を認めず滅ぼした人間共に復讐する事！」

「そんな凄え事になってるなんて…。つまり、このデュエルはヴァ

ンパイア一族と人類の対決ってわけ？」

「そういう事になるわね。一族の運命を背負った私は勝たなければならない！お前に勝ち目はないわ！」

「…嘘くさっ」

「「は？」」

俺が思わず呟いた一言に、十代とカミューラが同時に反応した。

「一族を復活、ねえ…。そんな相手が守るかどうかもわからないような約束は当てにしない方がいいぞ？」

「何！？約束が嘘だとでもいうのか！？」

「そうと決まったわけじゃねえよ。でも、闇の力なんかに頼って一族を復興させても、その一族が本当に喜ぶと思うか？」

「な…」

「一族のためを想うなら、闇の力なんかに頼らないでお前自身の力で復興させてみろ。それと、お前らを化け物扱いしたのはあくまでそうした連中だけだろ？この世の人間全員がそう思っているわけじゃないだろ」

「ぐ…そうだが、それでも私は人間が憎い！復興に協力してくれた男は例外だが、他の人間は信用できはしない！」

「少なくとも、俺は化け物だなんて思ってないけどな」

「！？」

「それに、俺にだって負けられない理由があるんだよ。せっかくまたみんなに会えたってのに…」

俺はデッキに手を掛けた。このターンで決着をつけるとすれば、必要なのはあのカード…！

「また離れ離れになったら、哀しすぎるだろうが！」

そうならないためにも、ここで負けるわけにはいかねえんだ！

「俺のターン！！」

…来た！

「魔法カード《チューナーズ・コール》！俺の場のモンスターのレベルを1つ下げ、手札からチューナーを1体特殊召喚する！」

《チューナーズ・コール》
通常魔法（オリジナル）
自分フィールド上のモンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターのレベルを1つ下げ、手札からチューナーモンスター1体を特殊召喚する。

「俺は《精霊の姫巫女》のレベルを1つ下げ、手札からチューナーモンスター《ブレード・トラディショナー》を特殊召喚する！」

《精霊の姫巫女》　Ｌｖ．４→３

俺が特殊召喚したのは、たった今引いたクヴァシルと同じ姿のモンスターだ。これがクヴァシルからデッキと一緒に渡された3枚のカードの正体だ。もちろん、デッキには3枚入れている。

《ブレード・トラディショナー》
チューナー（効果モンスター）
星1／光属性／天使族／ＡＴＫ　５００／ＤＥＦ　５００
このカードは戦闘では破壊されない。
フィールド上のモンスター1体のレベルを1つ下げる。この効果は1ターンに2度使用する事ができる。

《ブレード・トラディショナー》ＡＴＫ／　５００

「《ブレード・トラディショナー》は1ターンに2回までモンスターのレベルを1つ下げる事ができる！この効果で《精霊の姫巫女》のレベルを2つ下げる！」

《精霊の姫巫女》　Ｌｖ．３→２→１

「レベルを1まで下げた…？」

「レベルを下げるだけじゃ何も起きないわよ？」

「これでいいんだよ。行くぜ！レベル８《裁きを下す者－ボルテニス》とレベル１《精霊の姫巫女》にレベル１《ブレード・トラディショナー》をチューニング！」

1つの黄色の輪にリーシェと姫巫女が飛び込み、９つの星になる。

「レベル１０のシンクロだと！？」

「何を出すつもりなの…？」

「裁きの剣（つるぎ）が、白雷を下し現世に閃く！希望の光を振り翳せ！」

☆８＋☆１＋☆１＝☆１０

「シンクロ召喚！裁け！《雷光断罪－ボルテニス》！！」

光の柱を中から一閃。杖が俺が扉を壊すのに使った大剣に変わっていた。

紫のローブと帽子に純白の天使の翼。人型に戻ったリーシェが進化を遂げてフィールドに現れた。

《雷光断罪（レイジングジャッジ）－ボルテニス》

シンクロ・効果モンスター（オリジナル）

星１０／光属性／天使族／ＡＴＫ３６００／ＤＥＦ３０００

「ブレード・トラディショナー」＋「裁きを下す者－ボルテニス」＋チューナー以外のモンスター１体

このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のデッキからカウンター罠１枚を墓地に送る。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、カウンター罠を発動する度に相手フィールド上のカード１枚を除外する事ができる。

自分フィールド上のモンスターが相手のカードによってフィールドから離れる時、代わりに墓地に存在するカウンター罠１枚を除外する事ができる。

《雷光断罪－ボルテニス》　ＡＴＫ／３６００

「な、何だこのモンスターは!?」

「ボルテニスに進化系が存在したとは…」

『ゼウス様の新しい力…』

「す…ごい…」

『これが私の新たな力だ!』

「見せてやろうぜ、リーシェ!こいつがシンクロ召喚に成功した時、デッキからカウンター罠1枚を墓地に送る!俺は《魔宮の賄賂》を墓地に送る!そしてバトル!《雷光断罪ーボルテニス》で《ヴァンパイアジェネシス》を攻撃!」

「ちょっとびっくりしたけど、残念だったわね。罠カード《聖なるバリアーミラーフォースー》!これでその切り札も墓地送りよ!」

確かに、このままだとそうなるな。でも、このターンで決めるなら…。

「いや、発動してくれなきゃ困る」

「?」

「カウンター罠!バトルフェイズ中の罠の発動を無効にし、そのカードを破壊する!」

「何!?」

「そして、ボルテニスの効果発動！カウンター罠が発動される度に、相手フィールド上のカードを1枚除外できる！」

「何ですって！？」

「俺が選ぶのは《ヴァンパイアジェネシス》だ！パニッシュメント・リムーヴ！」

『大人しく眠っていろ！』

リーシェが白い電撃が宿る剣を地面に突き立てると、ジェネシスの足元から雷の柱が吹き出し、ジェネシスを消し飛ばした。

「《ジェネシス・クライシス》は、《ヴァンパイアジェネシス》がいない時はそのカード自身と自分の場のモンスターを全て破壊するんだったよな？」

「は！？しまった！？」

気づいたみたいだが、もう遅い。カミューラの場のモンスターは《ジェネシス・クライシス》ごと全て破壊された。

「終わりだぜ。てめえを裁く！《雷光断罪ー ボルテニス》でダイレクトアタック！レイジング・ジャッジライト！！」

『ハアァアアアアアア！！』

リーシェが剣を振り下ろし、ありったけの白い電撃をカミューラにぶつけた。

「きゃあああああ！？」

カミューラ　ＬＰ／２２００↓　０

紅刃　ＷＩＮ

「紅刃の勝ちだ！」

「やっぱあいつは強いぜ！」

みんなの歓声を聞きながら、俺はデュエルディスクとデッキをしまった。

「俺の勝ちだ…ん？」

突然、カミューラの後ろに《幻魔の扉》が現れた。まさか、デュエルで負けたから…！？

「は…！？そ、そんな…！？」

「（リーシェ！）」

『わかっている！』

俺は地面を蹴って高速でカミューラに近づき、カミューラを右腕で抱えて横に飛びのいた。そこにリーシェが雷光断罪の姿で、扉が開き切る前に電撃をぶち込み破壊した。

「危なかったな」

「な…なぜ、私を…」

下ろしてやると、カミューラが呆然とした様子で俺に問い掛けてきた。

「さっきも言ったろ？一族を復興させたいなら自分の力でやってみろって。そうじゃなくても、お前はこんなところで死ぬべきじゃない」

「…お人よしね。敵に情けを掛けるなんて…」

「俺は自分の信じるように行動している。そこに敵味方は関係ないさ。とにかく、道を確かめながら自分の生きたいように生きろよ」

ゴゴゴゴゴ…

なんだ？城が揺れ出したぞ？

「カミューラ、どうなってんだこれ？」

「…私が負けると、城が崩れる仕組みになっているのよ」

「用意周到すぎだろ！？そっち方面でも充分食っていけるって！」

「紅刃、早く逃げるぞ！」

「うおぉう！？亮さんいつの間に！？」

「人形から元に戻った。早く行くぞ！」

「ほら、月沙行くよ！」

「あ…うん…」

同じく元に戻ったクロノス先生も一緒に、全員で出口へ走る。まだボーッとしている月沙は俊也が引っ張っている。ていうか崩れるスピード早っ！？このままだと全員生き埋めだぞ！？

「亮さん、カミューラを頼みます！」

俺はディスクを抜いてリーシェの剣に変え、落ちてくる瓦礫を電撃で撃ち落としていった。

「紅刃君危ない！？」

「え？」

着地と同時に翔の警告が聞こえた。その直後に真上から瓦礫が破壊される音がした。

「将人！？」

「早くしろ！」

「わ、わかった！」

助けてくれたのは鎌を持った将人だった。そのままみんなと合流する。

「生きているならなぜ連絡をよこさなかった！？」

「未来の冥界と過去の現世でどうやって連絡できんだよ！？とにかく、説明は後だ！」

「あ！？出口が…！？」

前を見ると、俺が壊した扉は瓦礫に埋もれてしまっていた。このままじゃ脱出できない。

「ここは俺がやる！」

俺はさっきリーシェがやったのと同じように電撃を放ち、瓦礫の山をまとめて吹き飛ばした。

「凄え…」

「急げ！」

全員が外に出てさらに離れると、城は完全に崩れ去ってしまった。

「あ、危なかった…」

「これでひとまず安心だな」

将人は鎌をしまい、俺もアビリティを全部解いてディスクを鞘に収めた。

「あ、そのコート…アビリティで作った奴だったんスか」

「それに何だその服は？俺のパクリか？」

「違うわボケ。服がボロボロだったから、向こうで知り合った奴に作ってもらったんだよ」

「誰がｂ「かっこいいじゃねえかその制服！似合ってるぜ！」こら十代！話している途中で割り込むな！」

「万丈目、お前はまだいい方だ。俺なんてさらに空気扱いされつつあるからな」

「……すまん…」

「まるで夢のようなノーネ…」

「アビリティ…？私には何の事やらよくわからないニャ～…」

教師陣にはアビリティを説明してないから当然だろ。

「それより、あの闇からどうやって脱出したの？飲み込まれたら脱出できないと思うんだけど…」

「何も飲み込まれちゃいねえよ。ぎりぎりでワープして、なんとか冥界に飛んだんだ」

「冥界！？」

「俺の精霊のおかげだよ。怪我の治療もあったけど、冥界からこっちに行くのに必要なワープホールが修理中だったからすぐに帰れなくてさ…」

「そんな話信じ…られなくも…ないな…」

万丈目が反論しようとしたけど、すぐに思い止まった。ま、いろいろあったしな。

「怪我が治ってもまだ修理が終わってなかったから、ついでにアビリティの修行もしてきた」

「その結果が、さっきのコートと剣ってわけね」

「そういう事。で、修理が終わったからこうして戻って来たってわけだ」

「…さっきも聞いたが、なぜ連絡をよこさなかった？」

「冥界から現世に電波を送るには特殊な携帯が必要なんだ。そっちにはないから連絡は無理だ」

「なるほどな…（俺はなぜゴーズとカイエンに確認を頼まなかった…くそ…）」

「あ、それと、俺がいない間の出来事は大体知ってる」

「は？」

「どういう仕組みかは知らないけど、現世の映像を冥界で再生できるんだ。簡単に言えば、テレビの生中継みたいなもんか？」

「ええ！？」

「待てよ？って事は…」

「ああ。月沙と尾形のデュエルはリアルタイムで見ていた」

月沙を見ると、俺を見たまま固まっている。ていうか、俺が来てからずっとこの調子だな。他のみんなも俺の言葉に呆然としている。

そういや、月沙と再会してからまだろくに話をしてなかったな。俺は月沙に向き直った。

「ま、そういうわけだ。俺は元から死んじゃいねえよ」

「……」

「よくやったよ、お前は。冥界の人達もちゃんと見てたぜ。みんなお前の事を応援してたんだぞ？まあ、その、何だ…」

月沙に会ったら、何を話せばいいか、正直迷ってた。今のも、嘘じゃないけど突発的に出て来た言葉だしな。でも、１番伝えたい言葉は決まってんだ。

「ただいま」

「……っ！」

「！？」

俺がその言葉を伝えると、月沙はいきなり正面から抱き付いてきた。

「つ、月沙…？」

「…ぐすっ…」

「へ？」

「よかった…うっ…生きてて…よかった…ぐすっ…うぅ…」

「…。心配かけて悪かったな。俺はそう簡単には死なねえから安心しろ」

「うぅ…えぐっ……おかえ…ひぐっ、なさ……うっ……」

泣き出した月沙を、俺は左手で抱いて右手で頭を撫でてやった。
抱くなんて柄じゃないけど、今くらいはいいよな…？

「本当に帰って来てよかったッス…ぐすっ」

「翔まで泣いてどうするんだな？」

「全く…世話のかかる連中だ…」

「これd「これでいつものメンバーが揃ったわね」明日香君…」

「フッ…」

「青春だニャ～…」

「よくわからないけど、よかったノーネ」

『姫様…うっ…』

『お前まで泣く事はないだろう？』

『ゼウス様…！オーディン様も、お2人共ご無事で何よりです…』

『我が修理を急ぐよう事前に指示をしておけばよかったのだが…すまなかったな…』

『別にいいですよ。こうしてまた会えたんですから！』

「よかった…」

「こう言うのもなんだが…これで月沙とも前のように接する事ができるな」

「やっぱみんな揃ってないとな！」

「（どうしてこの子達をうらやましく思うのかしら…？…いつからかしらね？こういう暖かい時間を忘れてしまったのは…）」

月沙が泣き止むのは、まだ時間がかかりそうだな。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第２６話　負けられない理由は人それぞれ（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「だから長ええぇえ！！前回よりも１ページ増えてんじゃねえか！」

璃音「デュエル以外の描写が長すぎたのが原因ね。計画性のない作者でごめんなさいね」

フィレス『グルルル』

紅刃「あんまり長いと読む方も疲れるだろうからな…。注意しねえと」

リーシェ『大体１話何ページくらいが丁度いいのか教えてくれるとありがたい』

璃音「さて、今回紹介するのは…」

勇香「待て待て待て！なんでお前らが出て来てんだよ！？」

紅刃「今回俺が使ったカードの中には、読者が考えてくれたカードがあるからお礼を言いにな。朱さん、オリカ投稿サンキュな！大事に使わせてもらうぜ！」

璃音「それじゃ、気を取り直して…。本当は《雷光断罪－ボルテニス》を紹介するところだけど…」

リーシェ『さすがにこの小説オリジナルのカードを出すのもまずいだろ』

璃音「というわけで、進化前の《裁きを下す者－ボルテニス》を紹介するわ」

《裁きを下す者－ボルテニス》
効果モンスター
星８／光属性／天使族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ１４００
自分のカウンター罠が発動に成功した場合、自分フィールド上のモンスターを全て生け贄に捧げる事で特殊召喚する事ができる。この方法で特殊召喚に成功した場合、生け贄に捧げた天使族モンスターの数まで相手フィールド上のカードを破壊する事ができる。

璃音「【エンジェル・パーミッション】において切り札とも言える存在で、紅刃のエースモンスターの１体よ」

紅刃「自分のモンスターを全員リリースする必要があるけど、リリースした天使族の数だけカードを破壊する除去効果が売りだ」

勇香「《冥王竜ヴァンダルギオン》との違いは、カウンター罠なら何でも対応できるところだな」

璃音「発動さえできればいいから、《王宮のお触れ》で効果を無効にされていても特殊召喚できるのも強みね」

リーシェ『だが、場合によってはモンスターを全てリリースする事が自らの首を絞める事になる。私を使いこなすつもりなら、使い所を間違えるな』

紅刃「《人造天使》を使うと簡単に出せるな。後、普通に通常召喚・特殊召喚できるから、いざという時は効果を捨ててでも出す必要があるぞ」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

リーシェ『これからもこの小説をよろしく頼む』

紅刃「次回も見てくれよな！」

勇香「ああっ！？それ私の台詞！」

紅刃「最初にこの台詞を使ったのは俺だろ…」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

自分でも驚くくらい長いです。次回からは自重…できたらいいな…。

今回登場した《鉄騎皇イグドラシル》と《精霊の姫巫女》は朱さんが考えてくださったオリカです。朱さん、ありがとうございました！イグドラシルは『レベル６のシンクロモンスターが欲しいな…』と思ったのでシンクロモンスターにしてみましたが、いかがでしょうか？

ようやく紅刃が帰還しました。長かったような短かったような…。
とにかく、オリジナルのシリアスな話はひとまず終了です。次回からは明るく行けるかもしれません。

では、また次回！

第２７話　人は関わりのもとに生きている（前書き）

前回と前々回は長すぎましたが、今回は１０ページ以内に収まりました。

デュエルはありません。後日談みたいな感じです。

それではどうぞ！

第27話　人は関わりのもとに生きている

ＳＩＤＥ／紅刃

月沙がようやく泣き止んだ後、カミューラを先生方に任せてとりあえず解散した。

ロディスとリーシェが改名した事について説明するために、精霊が見える奴には1度俺の部屋に集合するように言っておいた。で、6人で俺の部屋に向かったんだけど…。

「……」

「……」

「（月沙…あんなに大胆だったか？）」

「（いや、あんな事する前に自分がパニクるはずだけど…）」

「（うらやましい奴め…！）」

「（万丈目君は明日香さん一筋じゃないの？）」

月沙はずっと俺の腕に無言で抱き付いている。さすがに振りほどきはしないけど、かと言って口に出す事もできない。はっきり言って、恥ずかしい。俺達別に恋人関係じゃねえだろ…。

あ、これが怜磨が言ってた『俺と鈴佳依存症』か？まあ、あれだ

けショックを受けてしばらく会ってなくて、しかも俺が死んだと思ってたからこうなるのも無理はないかもしれないけど…。

「やっぱお前らって仲良いよな！」

十代、お前はこの状態に対して疑問はないのか？

「そ、そうかな…えへへ…」

「「「「（駄目だ、キャラが軽く崩れてる…）」」」」

お～い、いつもの姫様はどこに行ったんだ～？余計に恥ずかしいんだけど？

ていうか密着しすぎだろ！なんかいろいろとやばいから誰かなんとかしてくれ！十代は多分素で、俊也と将人と万丈目はあえてスルーしてるけど、精神的にかなりやばいから誰か助けてくれよ！

「あ、つ…うぇ！？」

「あら！？」

だぁぁあぁぁ！厄介な奴に出くわしちまったよ畜生！なんでここでジュンコとももえが出て来るんだよ！？

「あ、ジュンコさん、ももえさん」

「ちょ…何やってんのよあんた！？」

「いや、俺は何もしてないけど」

「ちょっと、久しぶりにあったから、その…離れたくなくて…」

「「（だからって普通ここまでやる！？）」」

あ、ジュンコと考えがシンクロした気がした。

「あはは…事情が事情だし、ここは大目に見てくれないかな？」

「む…俊也さんがそう言うなら、仕方ありませんわね」

「ももえ！？」

あれ？ももえが簡単にダウンした？

「…っ、まあいいわ。ただし！」

「？」

「月沙さんに手をｄ「出さねえよ」…わかってるならいいのよ」

全く、何を想像してんだか…。

「とにかく、月沙さんが元気になって何よりですわ」

「（違う方向に復活してないか？）」

「それでは、私達は帰りますので…。さ、行きますわよ、ジュンコさん！」

「あ、ちょっと待ちなさいよ！」

2人はそのままどこかへ行ってしまった。変な勘違いされなくてよかった…。

「それにしても…あの月沙さん、何か可愛かったわね」

「写真はバッチリ撮っておきましたわよ♪」

「……1枚頂戴」

「俊也、お前ももえに何か好かれるような事でもしたか？」

「いや、特には…」

「そうか？ならいいけど…」

「（俊也って女子に結構人気があるからね。近いうちにファンクラブを創立するっていう噂まで立ってるし）」

意外にも、月沙が小声で話してくれた。

「（マジでか…。ま、そっとしておこうか）」

「（うん！）」

飛び切りの笑顔で返事された。可愛いと思ったのはここだけの秘密だ。

「（紅刃と話すのが物凄く嬉しそうだ…）」

「（完全に甘えている…）」

「（もはや普通の恋人どうし同然だ…）」

「この部屋に入るのも久しぶりだな」

部屋の中に入ると、精霊達も全員出て来た。俺達はそれぞれ適当な場所にくつろいだ。月沙もさすがに自重したのか、俺から離れて座った。まあ、俺のすぐ隣りに座ってるけど。

「じゃあ、まずはロディスとリーシェについてだな」

「は？何だそれ？」

『私達の事だが？』

とりあえず説明しとく。

「なるほどね。紅刃がゼウスの事をリーシェって呼んでたからどうしてだろうって思ってたけど…」

『そういう事だ、これからは真名の方で呼んでくれ』

『へっ、新しい力ねえ…。俺にかかれば、そんなもん一発で封じられるぜ』

『何？』

「先にフィールドに出ればの話だろ」

『わざわざ最上級モンスターを出すよりも普通のシンクロ召喚の方がずっと出しやすいだろ？』

『貴様、何を言う！？そういう貴様こそ、場合によっては足を引っ張るだけだろうが！』

『自軍を壊滅させて特殊召喚する奴に言われたかねえよ！』

『何！？』

『それに、効果の数なら俺の方が上だぜ？』

『貴様のもう1つの効果などただのおまけみたいなものではないか！』

『そういうてめえは効果を使った後はただのデカブツじゃねえか！』

『誰がデカブツだ！』

リーシェとヒジュラが激しい口喧嘩をしているのを見て、みんな唖然としている。

「…ロディス、いつもああいう感じなのか？」

『ああ。我が介入するまではずっと続けている』

『最初の頃は顔を合わせる度に喧嘩してたからな…』

『最後は戦闘に発展する事も…』

ゴーズとカイエンの目が遠い。苦労してんだろうな…。

『てめえを狩ってやろうか！？』

『貴様こそ覚悟はできているのだろうな！？』

「ってオイ！こんな所で武器を出すな！」

『2人共やめろ。この寮を更地にするつもりか？』

「喧嘩の領域超えてね！？」

『フン…』

『チッ』

あ、収まった。伊達に仲介し続けてるわけじゃねえな。

『ねえ、冥界ってどんな人がいるの？』

喧嘩が収まったのを見て、ウィンが質問をしてきた。

「そうだな…。１番衝撃的だったのは、やっぱアテムかな？」

「「「「「『『『…』』』」」」」」

あれ？冥界組以外みんなフリーズしてね？どうした？

「アテムって…遊戯さんの裏の人格の…？」

「すっげえ！そんな凄い人と会ったのかよ！？なあ、デュエルしたのか！？」

特に十代が異常なほどの反応を示している。そういや、あいつデュエルキングだったな…。

「いや、やってない。俺も忙しかったしな」

「そっかぁ…。俺も会いたかったな～」

「死んだ後なら会うチャンスはあるだろ。その時までのお楽しみだな。後は、月沙しか詳しく知らないだろうな」

「え？」

「鈴佳と怜磨にも会ってきた」

「!?」

月沙が目を見開いた。そりゃそうだろ、自分の親友と弟なんだし。

「あいつら、お前の事心配してたんだぞ?今は向こうで元気にやってるよ」

「そ…か…。2人共、元気でよかった…」

「ああ、そうそう、2人からお前に渡してくれって預かってる物がある」

「え?」

俺は1度下ろしていたリュックサックを月沙に渡した。

「そのリュックサックは鈴佳が作った奴だ。開けてみな」

月沙は俺に言われた通りにリュックサックを開けて中身を取り出した。

「これって…!」

「鈴佳が餞別にってさ。俺が今着ている服も、鈴佳が作ってくれたんだ」

「そっか。あいつ、裁縫得意だったっけ…」

「後、これは怜磨からだ」

俺は1枚のカードを取り出し、月沙に渡した。

「！」

「お前のデッキに合うようにって選んだらしい。魔法使い族ならそこそこいるから問題ないだろ」

「うん…これなら行ける！」

「そうだ、その服今着てみないか？」

「え？」

「俺達は外に出てるから、着替えてみなよ」

『案ずるな。覗く奴は全て裁く』

「誰もそんな事しねえよ」

「…うん、わかった」

「じゃあ、男子陣は一旦退散するぞ」

俺が部屋から出ると、他の男子も後に続いた。

「サイズがバッチリだ…」

『あ、いいじゃないですか！』

『かっこいい！』

「え！？」

『お似合いですよ、姫様！』

「そ、そうかな？」

途中途中でそんな会話を聞いた。

「入っていいよ」

「わかった」

部屋からＯＫの返事が聞こえると、俺は部屋の扉を開けて中に入った。

「ど、どうかな？」

「……」

いや、どうって…。

月沙が着ているのは、男子の制服のアレンジみたいな奴だ。上着は青いタイプの半袖で、俺や十代達と同じように前を開けて、中に白いポロシャツを着ている。下はスカートじゃなく、ベルト付きの黒い短パンを穿き、腰にはお馴染みの銃型デュエルディスク入りのホルダーを付けている。

もう怪我が治っているからか左腕の包帯は外してある。そして、いつもと同じように髪をポニーテールにしていた。

まあ、要するにこういう事だ。

「似合うじゃねえか、それ」

「本当？」

「嘘ついてどうすんだよ？」

「かっこいいな、それ！」

「女の子が『かっこいい』っていうのも、なんか変な感じがするけど…」

「いや、1人いるだろ。かっこいい部類に該当する奴」

「あ～…いたな…」

「確かに、『可愛い』よりも『かっこいい』だよね」

「誰の事だ？」

「さあ？」

「知らんな」

将人と十代は会った事ないから知らないよな。

「へくしっ！」

「どうしたの？風邪？」

「いや、違うだろ。ていうか、遊星もブルーノもお前も連続で徹夜してなんでぴんぴんしてんだよ？少しは寝ろよ」

「僕達は別に平気だけど？」

「仮眠は3日前に1時間取ったから問題ない」

「頼むから毎日寝てくれない！？マジでお前らの事心配だからさ！」

「ニュートラル…か…」

「尾形が連れ去られたところを見ると、あいつも組織の一員だろうな。またいつか、何かを仕掛けてくるかもしれない」

今は将人がニュートラルについて説明中だ。月沙はあの白馬の黒マントが出て来る前に気絶したからこの事を知らない。

「まだ終わってないのか…」

「怜磨達の話だと、白馬は《魔轟神獣ユニコール》の精霊らしい」

「ユニコール!?て事は、【魔轟神】が相手か…きついな…」

やっぱり月沙も知ってるみたいだ。よっぽど厄介な奴なんだな。

「魔轟神？何だそれは？」

「この時代にはないカテゴリだよ。手札に関する効果を持つ強力な悪魔なの」

『なんかすっごく怖いイメージしかないじゃないの～！』

「何にせよ、俺達の戦いはまだ始まったばかりだ。三幻魔の事件も序章にすぎない」

「セブンスターズよりもやばい奴がいるってのかよ…」

『クリィ～』

「…なら、返り討ちにするだけだよ」

「！」

「尾形がまた来たとしても、私はもう大丈夫。いつ組織の刺客が来ても返り討ちにできるように、私達はもっと強くなる。それだけだよ」

…月沙も、ようやく復活したみたいだな。

「うん、そうだよね。僕達はそのためにここにいるんだから」

「俺はずいぶんと迷惑を掛けてしまったというのもあるが、奴らは個人的に気に入らん」

「俺も協力するぜ！未来人だろうが異世界人だろうが関係ない！仲間が戦ってんだから黙ってられないぜ！な、ハネクリボー！」

『クリクリ～！』

『オイラ達も協力するわよ～！』

「勝手に決めるな！…だが、十代だけにいい格好はさせない。俺も手伝ってやろうじゃないか」

「十代、万丈目…。サンキュな。よし！まずはセブンスターズだ。鍵は絶対守り切る！」

「「「ああ！」」」

「「うん！」」

十代の協力を得た俺達は、気持ちを新たにセブンスターズ戦へ意気込んだ。

「着いたな」

「うん」

今日はもう遅いから解散した。俺はというと、月沙を女子寮に送ってやってるところだ。

俺が月沙を送る事は満場一致で決定された。理由は以下の通りだ。

「1番仲が良いのはお前だろ？夜道は危ないし、送ってけって！」

ｂｙ十代

「レッド寮は女子寮からかなり遠い。ブルー寮のお前が適任だ」ｂｙ将人

「僕は帰ってやる事があるから（棒読み）。じゃ、よろしく」ｂｙ俊也

『あ、私も氷結界の里に用事がありました（棒読み）。というわけで、姫様をよろしくお願いします！』ｂｙスイレン

『我はやる事がある。お前が行っている間に済ませておく』ｂｙロディス

『眠い。部屋で寝ているぞ。たまにはカードの外で眠りたい』ｂｙリーシェ

「お前だけでは心配だ。俺もいがほぉうっ！？『あら？万丈目様もレッド寮に用事がありませんでしたか？』」ｂｙ万丈目

約2名絶対嘘だろ。そんなに俺と月沙を2人にしたいか？いや、嫌なわけじゃないけど。それと、万丈目はスイレンに裏拳で腹を殴

られてたけど大丈夫か？

そんなこんなで女子寮に着いた。俺の役目はここまでだな。

「じゃ、俺は寮に戻るぜ。また明日な」

「うん」

俺は別れの挨拶をして踵を返し…

「…待って！」

月沙に呼び止められた。

「？」

「そ、その…ごめん！」

「は？」

いや、いきなり謝られてもどうリアクションすればいいかわからないんだけど…。

「え、ええと…紅刃の部屋に行く間、ずっと、その…抱き付いてたでしょ？迷惑…だったよね？」

「え？」

「それに、さっきまでは手を繋いでたし…」

抱き付くのはともかく、手を繋ぐくらいは別に構わないけど…。

「紅刃がいなくなって…もう二度と会えないって思って、気づいたんだ。私、紅刃に依存してたんじゃないかって…」

「！」

「自分ではわかってるの。いつまでも甘えたままじゃ駄目だって事くらい…。紅刃がいなくても、1人で立とうって…そう、思ってた…」

「……」

「でも、こうして紅刃が帰ってきて…とても嬉しくて…また、甘えちゃった。駄目だってわかってるのに、頼っちゃいけないって思ってるのに…」

「…そんな事ねえだろ」

「え…？」

「人間ってのは独りじゃ生きていけない。かといって、2人でも駄目だ。何人もの人間が関わって、初めて生きていけるんだ。俺だって…ロディスがいて、リーシェがいて、俊也がいて、ウィンがいて、将人がいて、ゴーズがいて、カイエンがいて、ヒジュラがいて、スイレンがいて、そしてお前がいて…それで生きていけてんだ」

そもそも、俺だってロディスとリーシェがいなけりゃ今頃闇の中だしな。

「俺1人に頼りすぎてるって思うなら、他の人に頼れ。そりゃ、自分だけでやらなきゃいけない事だってないわけじゃない。でも、自分の心の拠り所くらいはあってもいいんじゃないか？」

「心の…拠り所…？」

「俺がお前の心の拠り所になってやる。スイレンだって、喜んでこの役を買って出るだろうさ」

月沙は呆然としたまま俺を見ている。俺何か変な事言ったか？

「…うん。ありがとう」

「ああ。さてと、俺も早く部屋に戻らねえとな」

「あ、引き止めてごめん…」

「気にすんな、誰だって悩みの1つや2つくらいあるさ。じゃ、また明日な！」

「うん、また明日！」

俺は背を向けると、ゆっくりと男子寮に歩いていった。

ＳＩＤＥ／リーシェ

スイレンやロディスと一緒に後を付けてきたのはいいのだが…。

『なんであれで付き合ってないんでしょうかね？』

『それは私が知りたい』

『紅刃もいい加減恋愛感情を抱いてもいいものだが…』

なのになぜあんな言葉が出る？あれが俗に言う『鈍感』という奴なのか？

『ああもう！姫様も早く告白してしまえばいいのに！』

『お前はパートナーとしてその方面の心配はないのか？』

『ないわけではありませんけど、紅刃様なら安心できますよ！』

笑顔で言い切るスイレン。まあ、私も同じ考えだが…。

『この件は我らが無駄に介入するべき事ではないだろう。黙って見守るのが1番だ』

「…何やってんだお前ら？」

『『『…』』』

振り返ると、帰ったはずの紅刃が半目で私達を睨んでいた。なぜばれた？

『く、紅刃様!?いつからここに!?』

「いや、たった今来たばかりだけど」

『妙な気配を感じてな。我らで消息を辿っていたところだ』

ロディスは顔色1つ変えずに嘘をついた。この状況で表向きだけでも平然としていられるとは…。

「妙な気配？」

『今はもう消えたがな。セブンスターズやニュートラルの偵察の可能性があるが、特にデッキを弄っていたわけではないだろう？』

「ああ。そんな暇なかったしな」

『無理に追う必要はない。私達も早く戻るとするか』

「そうだな」

私も話を合わせて自然に解散に持ち込んだ。こういう時、ロディスの度胸にはいつも助けられているな。

『わ、私もそろそろ行かなければ…！では、失礼しますね！』

スイレンも空気を読んでこの場から脱出した。ばれるとどうなるかわかったものではないと悟ったのだろう。

他人の恋愛などあまり興味はなかったが、こうして客観的に見てみると面白いものだ。またスイレンやロディスと一緒に尾行するの

も悪くないな。

ＳＩＤＥ／紅刃

「よし、今日はここまでにしとくか」

翌日、日課の修行を終わらせた俺は、寮に戻るために歩き出した。

俺と月沙の制服については、学校からは特に何も言われなかった。この学園の制服のアレンジだからいいのか？

まあ、特にやる事もないし、部屋でゆっくり昼寝でもするか。最近はいろいろあってそんな暇なかったしな。

「あ、紅刃！」

帰る途中で月沙に会った。服装が変わってるとなんか新鮮だな。

「月沙！どうした？」

「いや、たまたま見つけたから声を掛けてみただけ。やっぱり、その服目立つよね」

「他に着てる奴なんていねえからな。お前だって目立つだろ。青い服着て髪が白い女子生徒なんだし」

「そうかもね。…ん？」

「どうした？」

「何か大切な事を忘れてるような…」

しばらく頭を悩ませている。原作とかで何かあるのか？

「青…白……ああっ！？」

「何だ？」

「紅刃、十代達が温泉に行くみたいな事聞いてない！？」

「温泉？いや、特には…」

「そう…とにかく、急がないと！」

「お、おい！」

いきなり走り出した月沙を追いかけていく。何だ？事件でもあるのか？

着いたのは島の隅にある大きな円盤の建物だ。ここって確か、温泉施設だったような…。俺と月沙はその建物の裏側に行った。

「スイレン、いる？」

『どうかしましたか？』

「ここから精霊世界に行ける？」

『行けますけど…』

「大至急連れてって！」

『はい！任せてください！』

スイレンは空中に魔法陣を描いた。すると、魔法陣がワープホールに変わった。

「ありがとう！さあ、行くよ！」

「あ、ああ！」

月沙に言われるがままにワープホールに飛び込む。しばらくして外に出ると、昨日みたいに上空から落とされる事なくすぐに着地できた。

「あ、よかった…間に合ったみたい」

「間に合ったって何に…」

「《青眼の白龍》のダイレクトアタック！滅びのバーストストリイィィィーム！強靭！無敵！最強おぉぉ！！」

「うわあぁっ！」

「粉砕！玉砕！大喝采！！フハハハハハ！！」

「…は？」

え、何この状況？

「兄貴～！」

「十代！」

なぜかブルーアイズ3体にフルボッコにされて気絶した十代に、翔と隼人が駆け寄った。傍らにはハネクリボーもいる。

「名言聞けてよかった～。どうせなら生で聞かないと！」

「…要するにさっきの台詞を聞きたかっただけか」

「そういう事♪」

確かに強烈な台詞だったな、あれ。

「紅刃？月沙にスイレンも！」

声がした方を見ると、俊也と将人に万丈目がいた。ゴーズ達も外

に出ている。ウィンとカイエンがいないのは、多分こいつらが温泉に漬かってたからだろ。

「お前らも来てたのか？」

「なぜか精霊世界に来てしまってな。十代があいつとデュエルしていたところだ」

「あいつ？」

「己の力で立ち上がれるか？立てればよし。立ち上がれなければそこまでだ」

「立ち上がれるに決まってるだろ！うっ！いて…」

「…誰あれ？」

「《正義の味方　カイバーマン》の精霊…らしい…」

「…『名前も格好もダサい』とツッコんだら負けなのか？」

「多分…」

でも、なんでブルーアイズのデッキを？あれは海馬瀬人って人が持ってる伝説のカードじゃねえのか？

「ああ、あれって海馬さん本人が作ったカードなんだよね」

「何！？」

「おまけに海馬ランドのマスコットキャラでもあるし、カイバーマンのヒーローショーもあるらしいよ」

「そうなの…？」

「いまいちセンスがわかんねえな」

どこからツッコめばいいんだよ！？何やってんだあの社長は！？

「とりあえず、十代達の所に行こうよ」

俊也の先導で、俺達は十代達の元に向かった。

「十代！」

「あ、みんな！あれ？紅刃、月沙？スイレンも…なんでここに？」

「え？ええと…スイレンがここに引き寄せられたみたいでさ、私達もついて来たの」

「そ、そうなんですよ！自分でもよくわかりませんけど！」

考えてなかったな。そんな嘘通るわけ…。

「そうなのか？ならいいか」

通るんかい！？

「ところで、貴様が負けたせいで俺達は元の世界に帰れなくなったというわけだな？」

「「えっ！？」」

「あっ！そういえば…。何とかなんねえかな？」

「私がワープホールを開きますのでご安心ください！」

「本当か！？助かるぜ！…あれ？」

「どうした？」

「カイバーマンがいない…」

確かに、さっきの海馬もどきはどこかに消えていた。

「どこに行ったんだ？」

「デュエルが済んで満足したんじゃない？」

「では、開きますね」

スイレンは魔法陣を2つ描き、ワープホールを2つ用意した。

「凄え！何か出て来た！」

「十代様達は左のワープホールを使ってください。私達は右のを使います。ゴーズ様、誘導お願いします」

「わかった」

俺達は早速ワープホールに飛び込んだ。ブルーアイズか…。1度デュエルしてみたいな。

「兄貴～！早く早く！温泉で作ったゆで卵食べるッスよ！」

「おう！俺3個な！」

「俺も3個もらう」

「僕は2個でいいよ」

「俺…5個かな～」

「俺は4個だ」

「えっ！？駄目ッスよ！」

「じゃあデュエルで勝負だ！」

「あ、いいねそれ！」

「フン、いいだろう！今日こそ貴様に勝つ！」

「何でそうなるんスか～！」

『ハァ…見たかったな～、ブルーアイズ』

『仕方ありませんよ。精霊と言えど異性の風呂に入るわけにはいきませんから』

外はもう夕方になっていた。十代達はゆで卵争奪戦の話し合いをしながらレッド寮に向かい、ブルーアイズを見れずに落ち込んでいるウィンをカイエンが慰めている。俺と月沙はその後ろにゆっくりついていっている。

「あいつら、ホント仲良いよな」

「みんな同じオシリス・レッドだしね」

俺達だけ違うんだよな。月沙は女子だし俺だって最初はイエローだったし。

「…なんか、やっと戻ったって感じだな」

「え？」

「スイレンから聞いたんだけど、紅刃が死んだって話が出て来てから、みんな表情がいつもより暗かったらしくてさ。その紅刃が戻って来て、やっとみんないつも通りになったっていうか…」

「…悪い。心配掛けちまったな」

「いいよ。こうしてみんな笑ってるんだし。それに…」

「？」

「私も、紅刃が戻って来てくれてすっごく嬉しいから！」

また、満面の笑顔を見せられた。

…やっぱりこいつに暗い顔は似合わねえよな。こいつだけじゃなく、みんないつまでも笑ってられるように。だから俺は強くなる。強くなってこいつらを、この世界を護ってみせる。

「紅刃、月沙！早く来なよ！」

「お前らも一緒にゆで卵食べようぜ！」

前を見ると、俊也と十代が呼んでいる。確かに、みんないい笑顔だな。

「ゆで卵か…。久しぶりだな」

「俺もしばらく食ってねえな。わかった、今行く！」

俺は呼びかけに応えて、また月沙と一緒に走り出した。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第２７話　人は関わりのもとに生きている（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「ようやく平和になったわね」

フィレス『ガウッ』

勇香「平和…なのか？社長もどきが出て来てる時点で普通じゃない気が…」

璃音「少しでも私達が出る余裕があるくらいだから平和よ」

勇香「とにかく、お前らは睡眠を取れ。過労死するぞ？」

璃音「それは《スピード・ウォリアー》に言ってあげなさい」

勇香「…《スピード・ウォリアー》さん、すんませんでした…」

璃音「さて、今回はデュエルはなかったけど、少しだけ出て来た《正義の味方　カイバーマン》を紹介するわ」

勇香「っておい！話をはぐらかすな！」

《正義の味方　カイバーマン》
効果モンスター
星３／光属性／戦士族／ＡＴＫ　２００／ＤＥＦ　７００
このカードを生け贄に捧げる事で、手札から「青眼の白龍」１体を

特殊召喚する。

勇香「…社長の美的センスと思考回路が心配になってくるモンスターだな」

フィレス『グルル…』

璃音「そこは問題じゃないわよ。このモンスター1体で《青眼の白龍》をフィールドに出せるわ」

勇香「手札から上級の通常モンスターを特殊召喚できる《古のルール》もあるけど、こっちはモンスターだから少しは使い回しやすいか？」

璃音「《デブリ・ドラゴン》での特殊召喚もできるわ。起動効果で発動コストだから効果は使えるし、そのままシンクロ召喚してもいいわね」

勇香「確か《スキルドレイン》でも防げないんだっけ？…関係ないけど、私達の周りって《デブリ・ドラゴン》の使用率高いよな…。最近出てないけど」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

アテムの件が世間一般に知られているかどうかは覚えてません…。もし間違っていたら修正します。

月沙に渡された服は、３期以降のレイの服の色違いです。後、ズボンが少し長いです。

カイバーマンはおまけみたいな感じで出しました。毎回カードを出さないと『今回のキーカード』で紹介するカードがなくなってしまうので…。

後、さりげなくブルーノが初登場です。台詞１つしかありませんでしたけど…。また５Ｄ'ｓの時代に戻らない限り出番は増えないと思います。

次回は少し更新が遅れるかもしれません。では、また次回！

第２８話　人間は未熟な生き物（前書き）

第２８話です。

今回はオリキャラどうしの対戦です。また、オリカも多数登場するので苦手な方は注意してください。

それではどうぞ！

第２８話　人間は未熟な生き物

ＳＩＤＥ／紅刃

チャイムが今日の授業の終わりを告げた。

あれから数日の間にいろいろあった。万丈目の馬鹿兄貴共が学園を買収しようとして万丈目に勝負を挑んできたり（万丈目の事は認めたみたいだ）、三沢が婿入りしたり（１日でフラれた）、潜水艦が攻め込んで来たり（十代が連れ去られかけた）…うん、どれも普通じゃねえな。

ニュートラルは特に動きを見せていない。様子見って事か？

「紅刃、一緒に帰ろ！」

「ああ、そうするか」

俺達はというと、まず俺は毎日こうして月沙と一緒に帰っている。悪い気はしないし、俺もこの方がい…いや、やっぱ何でもない。

俊也と将人は同じレッド寮だからか十代達と仲が良い。最近はよく一緒にいるようになった。

まあ、要するに至って平和に過ごしてるってわけだ。もちろん、アビリティの訓練はしてるぞ？

クヴァシルの言ってた『覚醒者』については、もう３人に説明し

てある。今のところ、覚醒者は月沙だけだ。…自分で言ってて恥ずかしいな、これ。これって捉えようによってはただの中2病患者だろ。

「紅刃」

教室を出ようとすると、将人が俺の名前を呼んだ。俊也も将人に付き添っている。

「将人？どうした？」

「頼みがあるんだが…俺とデュエルしてくれないか？」

「デュエル？」

また急な話だな。

「前にも言ったが、あの時俺が使ったのは俺の本来のデッキじゃない。俺の本当の力が、お前にどこまで通じるか確かめたい」

そういやそんな事言ってたな。あの後すぐに冥界に行ったから忘れてたけど。

「わかった。俺もお前とは改めてデュエルしたいと思ってたしな」

よく考えてみると、俺ってまだ将人のデッキ内容知らないんだよな。昔は悪魔族中心のデッキを使ってたけど…。

「1時間後にレッド寮前でいいか？」

「構わない。また後でな」
将人はそれだけ言うと立ち去った。
「早くデュエルしたいんだろうね。口元が笑ってたし」
俊也が将人の背中を見て呟いた。ルームメイトでもあるし、仲が良いんだろ。
「よし、俺もデッキ調整するか！」

で、1時間後。

「将人って、今はどんなデッキ使ってんだろうな？」
「そっか。紅刃は見る機会なかったっけ」
俺は月沙と一緒にレッド寮に向かっているところだ。デッキ調整は自室で済ませてきた。
「前よりもずっと強くなってるよ。ゴーズとカイエンも使いこなせてるし」
「なら、尚更気を引き締めて行かねえとな」
そうこう話してるうちに目的地に着いた。将人は既にスタンバイ

している。

「来たか」

「ああ」

「2人共いいデュエルを見せてくれよ！」

「十代？」

近くには俊也と一緒に十代と翔、隼人に万丈目もいた。寮の前でやるんだし、観戦するのは普通か。

「お前らがどんなデュエルをするのか、見てやろうじゃないか」

「なんでそんな上から目線なのさ？」

「見物客は何人いても変わらないだろ。始めるぞ」

「そうだな」

「私は十代達と一緒に見てるね」

俺はいつものようにデュエルディスクを展開させた。

「今度こそは誰にも邪魔されない。行くぞ！」

「ああ！全力で行くぜ！」

「「デュエル！」」

紅刃ｖｓ将人

「先攻は譲る」

「いいのか？」

「どうせなら全力のお前と戦いたい」

「そうか。なら遠慮なく行かせてもらうぜ！ドロー！永続魔法（コート・オブ・ジャスティス）を発動！俺の場にレベル１の天使族がいる時、１ターンに１度手札から天使族モンスター１体を特殊召喚できる！」

「早速来たか…」

レベル１の天使族を多用する俺にとって、このカードの存在は助かる。

「《勝利の導き手フレイヤ》を召喚！俺の場の天使族の攻撃力と守備力は４００ポイントアップする！」

《勝利の導き手フレイヤ》　ＡＴＫ／　１００→　５００

「《コート・オブ・ジャスティス》の効果発動！手札から《豊穣のアルテミス》を特殊召喚！」

《豊穣のアルテミス》　ＡＴＫ／１６００→２０００

「カードを２枚セットし、ターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《勝利の導き手フレイヤ》（ＡＴＫ／　５００）《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／２０００）
魔法・罠／《コート・オブ・ジャスティス》リバース×２

「俺のターン、ドロー！」

さあ、どう出る？

「俺は手札から《スナイプストーカー》を召喚する！」

銃を持った小柄の悪魔がフィールドに現れる。

《スナイプストーカー》
効果モンスター（準制限カード）
星４／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ１５００／ＤＥＦ　６００
手札を１枚捨て、フィールド上に存在するカード１枚を選択して発動する。
サイコロを１回振り、１・６以外が出た場合、選択したカードを破壊する。

《スナイプストーカー》　ＡＴＫ／１５００

「効果発動！手札を１枚捨ててサイコロを１回降り、１と６以外が出た場合相手のカード１枚を破壊する！俺はアルテミスを選択する！」

《スナイプストーカー》が銃を構えると、前に１から６までの数

字が現れルーレットのように回り出した。ルーレットが止まり、銃口に重なったのは…

「…3だ。よって、アルテミスを破壊する！スナイプ・シュート！」

アルテミスが3の数字ごと撃ち抜かれた。まずいな…。

「墓地に送った《ヘルウェイ・パトロール》の効果発動！墓地からこのモンスターを除外し、手札から攻撃力２０００以下の悪魔族モンスター1体を特殊召喚する！」

やっぱり、あいつのデッキは【悪魔族】か！

《ヘルウェイ・パトロール》
効果モンスター
星４／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１２００
このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターのレベル×１００ポイントダメージを相手ライフに与える。
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、手札から攻撃力２０００以下の悪魔族モンスター1体を特殊召喚する。

「チューナーモンスター《ダーク・リゾネーター》を特殊召喚！」

《ダーク・リゾネーター》　ＡＴＫ／１３００

「レベル４《スナイプストーカー》にレベル３《ダーク・リゾネーター》をチューニング！」

リゾネーターが音叉を鳴らして3つの紫の輪になり、《スナイプ

ストーカー》が飛び込み４つの星になる。

「チューニング！？」

「あいつもシンクロ召喚を使えるのか？」

「天頂に輝く死の星よ、地上に舞い降り生者を裁け！」

☆４＋☆３＝☆７

「シンクロ召喚！狩れ！《天刑王（てんけいおう）　ブラック・ハイランダー》！」

光の柱から現れたのは、大鎌を持った死神だ。

《天刑王（てんけいおう）　ブラック・ハイランダー》

シンクロ・効果モンスター

星７／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２３００

悪魔族チューナー＋チューナー以外の悪魔族モンスター１体以上

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、お互いにシンクロ召喚をする事ができない。

１ターンに１度、装備カードを装備した相手モンスター１体を選択して発動する事ができる。

選択したモンスターに装備された装備カードを全て破壊し、破壊した数×４００ポイントダメージを相手ライフに与える。

《天刑王　ブラック・ハイランダー》　ＡＴＫ／２８００

『早速俺の出番か！』

ん？ブラック・ハイランダーが喋った？

「ああ。頼んだぞ」

「なあ、そいつって…」

「言ってなかったな。ヒジュラはブラック・ハイランダーの精霊だ」

『そういうわけだ、よろしくな！』

なるほど、どうりでどっかで見た事あるような鎌を持ってると思ったら…。

「続けるぞ。ブラック・ハイランダーがフィールド上に存在する限り、互いにシンクロ召喚する事はできない」

「シンクロ封じ！？」

厄介な効果を持ってるな…。攻撃力も高いし、簡単には倒せないか？

「バトルだ。ブラック・ハイランダーでフレイヤを攻撃！死兆星斬（デス・ポーラ・スレイ）！」

『食らいやがれ！』

ヒジュラが鎌を振り下ろしてくる。この攻撃を受ければライフが一気に削られる…！

「カウンター罠《攻撃の無力化》！バトルフェイズを終了させる！」

透明の障壁が張られ、大鎌の一撃をぎりぎりで防いだ。

『ちっ、面倒なカードだ』

「…カードを1枚セットし、ターンエンド」

将人
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《天刑王　ブラック・ハイランダー》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／リバース×１

「俺のターン！魔法カード《強欲な壺》を発動！カードを2枚ドローする！」

引いたのは…よし、これなら行ける！

「《コート・オブ・ジャスティス》の効果で、手札から《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》を特殊召喚！」

空中に浮かぶ天使の輪から黄金の天使が舞い降りる。

《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》　ＡＴＫ／２８００→３２００

「何スかあのモンスター！？」

「見た事ないんだな」

あ、プラネットシリーズってこの世界にはないんだっけ？

「ＶＥＮＵＳが場にいる時、天使族以外のモンスターの攻撃力と守備力は５００ポイントダウンする！」

《天刑王　ブラック・ハイランダー》　ＡＴＫ／２８００→２３００

「ほとんど天使族のみを使うお前にとって相性は抜群というわけか！」

「さらに《智天使ハーヴェスト》を召喚！」

角笛を持つ黄色の天使だ。天使族の下級モンスターの最大攻撃力がこいつの１８００ってのは…。

《智天使ハーヴェスト》　ＡＴＫ／１８００→２２００

「バトル！《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》でブラック・ハイランダーに攻撃！ホーリー・フェザー・シャワー！」

ヒジュラに無数の白羽が降り注ぐ。これでシンクロ召喚は使えるようになる。

「リバースカード《ヘイト・バスター》！悪魔族モンスターが攻撃対象に選択された時、相手の攻撃モンスターと攻撃対象になった悪魔族を破壊し、破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

《ヘイト・バスター》
通常罠

自分フィールド上に表側表示で存在する悪魔族モンスターが攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。
相手の攻撃モンスター1体と、攻撃対象となった自分モンスター1体を破壊し、破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「何!?」

『どのみちここでお役御免かよ!?』

爆発が発生し、ヒジュラとＶＥＮＵＳが破壊され、爆発の余波が俺に襲い掛かる。

「カウンター罠《奇跡の回復》!手札を1枚捨て、効果ダメージを無効にしてその数値分ライフを回復する!」

紅刃　ＬＰ／４０００→６８００

「ライフを逆に回復しただと!?」

「続けて行くぜ!フレイヤでダイレクトアタック!」

「っ…」

将人　ＬＰ／４０００→３５００

「ハーヴェストでダイレクトアタック!ハーメルン・スマッシュ!」

智天使が繰り出した回し蹴りが将人の直撃する。

「ぐっ…！」

将人　ＬＰ／３５００→１３００

「ああっ！？直撃ッス！」

「他にリバースカードを出さないからだ！」

「…いや、これでいい」

将人がそう呟いた瞬間、フィールドに黒い大穴が開いた。

思いっ切り見覚えがあるな。どう考えても、あいつらしかいないだろ！

「これは…！」

「手札の《冥府の使者ゴーズ》の効果発動！俺の場にカードが存在しない状態でダメージを受けた時、手札から特殊召喚する！」

穴からゴーズが飛び出した。やっぱあいつが出すと様になってるな。

《冥府の使者ゴーズ》　ＡＴＫ／２７００

「さらに、ゴーズが戦闘ダメージで特殊召喚された時、受けたダメージと同じ攻守を持つ《冥府の使者カイエントークン》を特殊召喚する！来い、カイエン！」

ゴーズに続きカイエンも飛び出すと、穴は役目を終えたのを見計

らったかのように閉じた。

《冥府の使者カイエントークン》　ＡＴＫ／２２００

『こうしてまた対峙する日が来るとはな』

「やっぱ厄介な効果持ってるよな、お前ら」

『今の私達はマスターのパートナー。手加減はしません！』

「そう来ねえと面白くないからな！全力で来い！ターンエンドだ！」

紅刃
ＬＰ／６８００
手札／０
モンスター／《勝利の導き手フレイヤ》（ＡＴＫ／　５００）《智天使ハーヴェスト》（ＡＴＫ／２２００）
魔法・罠／《コート・オブ・ジャスティス》

「俺のターン！…！」

引いたカードを見た時、将人の表情が変わった。どうした？

「（これを使うと、紅刃の手札も大量に増やしてしまう。今はカウンター罠がないから安全に攻撃できるが…）」

「考えてるな」

「何を引いたんだろ？」

「（まずはこれを先に使おう）魔法カード《冥剣の波動》を発動！俺の場にゴーズがいる時に発動できる。効果ダメージで特殊召喚している時はそのダメージと同じ攻守のカイエントークンを特殊召喚し、戦闘ダメージで特殊召喚している時は受けたダメージと同じ数値のダメージを相手に与える！」

《冥剣の波動》
通常魔法（オリジナル）
自分フィールド上の《冥府の使者ゴーズ》1体を選択して発動する。以下の効果から1つを選択して使用する。
●自分フィールド上に「冥府の使者カイエントークン」（天使族・光・星7・攻／守？）を1体特殊召喚する。
このトークンの攻撃力・守備力は、選択した「冥府の使者ゴーズ」が特殊召喚される時に受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。
この効果は選択した「冥府の使者ゴーズ」の効果で「冥府の使者カイエントークン」が特殊召喚に成功していない場合のみ使用する事ができる。
●選択した「冥府の使者ゴーズ」が特殊召喚される時に受けたダメージと同じダメージを相手ライフに与える。
この効果は選択された「冥府の使者ゴーズ」の効果で「冥府の使者カイエントークン」が特殊召喚に成功している場合のみ使用する事ができる。

「俺はダメージを与える効果を選択！特殊召喚する時に受けた２００ダメージを相手に与える！」

『我が主への苦痛は返させてもらう！』

ゴーズが剣から紫の波動を放ち、俺のライフをさらっていった。

「回復しといて正解だったな…」

紅刃　ＬＰ／６８００→４６００

「紅刃」

「ん？」

「俺は…やはりお前とは最高のデュエルがしたい。このカードを使うのは正直躊躇ったが、互いに手札がなければそれは実現できない」

互いに手札…まさかあれか？

「だからこそ、俺はこのカードを使う！魔法カード《天よりの宝札》！」

「！」

「互いに手札が６枚になるようにカードをドローする！」

俺と将人の手札は０。お互いに６枚引く事になる。

「最高のデュエル、か…。俺も始めからそのつもりだ。俺だって出し惜しみはしねえよ！」

「フッ…。なら、行くぞ！チューナーモンスター《ダーク・スプロケッター》を召喚！」

あのモンスターって、前にジャックが使ってた…。

《ダーク・スプロケッター》
チューナー（効果モンスター）
星１／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　４００／ＤＥＦ　０
このカードが闇属性のシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、フィールド上に表側表示で存在する魔法または罠カード１枚を破壊する事ができる。

《ダーク・スプロケッター》　ＡＴＫ／　４００

「レベル７《冥府の使者ゴーズ》にレベル１《ダーク・スプロケッター》をチューニング！」

『後は任せたぞ！』

１つの紫の輪にゴーズが飛び込む。レベル８って事は…。

「闇より出でし悪魔の双翼、濃霧を払い終焉を誘え！」

☆７＋☆１＝☆８

「シンクロ召喚！呼応せよ！《ダークエンド・ドラゴン》！」

悪魔の翼と顔を持つ、漆黒の龍がフィールドに降り立った。

《ダークエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「前と口上変わってないか？」

「操られていた自分との決別の証だ。《ダーク・スプロケッター》の効果発動！闇属性モンスターのシンクロ素材になった時、相手の

表側表示の魔法・罠を1枚破壊する！《コート・オブ・ジャスティス》を破壊！」

やばっ！？これがないと速攻でモンスターを展開できねえ！

「さらにダークエンドの効果発動！攻守を５００下げ、相手のモンスター1体を墓地に送る！ハーヴェストを墓地へ！ダーク・イヴァポレイション！」

ダークエンドの腹の口から黒い闇が吐き出され、ハーヴェストを闇に引きずり込んだ。

ハーヴェストは戦闘破壊で効果を発動するモンスターだ。効果でやられた上に破壊すらされてないんじゃ意味がない…！

「バトル！ダークエンドでフレイヤに攻撃！ダーク・フォッグ！」

ダークエンドが口から黒い濃霧を放ち、フレイヤを破壊する。

「くっ…」

紅刃　ＬＰ／４６００→３０００

「カイエンでダイレクトアタック！レイジング・ブラッシュ！」

『行きます！ハァッ！』

「ぐあっ…！」

カイエンが光を纏った剣で俺を斬った。カイエンからもろに攻撃

を食らうのは初めてじゃないか？

紅刃　ＬＰ／３０００→　８００

「一気にライフが削られた！？」

「さすが元々のパートナー…紅刃よりも使いこなせてる…」

「魔法カード《デモンズ・ポーション》を発動！墓地のレベル４以下の悪魔族１体を除外し、そのモンスターの攻撃力分のライフを回復する！」

《デモンズ・ポーション》
通常魔法（オリジナル）
自分の墓地に存在するレベル４以下の悪魔族モンスター１体を除外して発動する。
除外したモンスターの攻撃力分の数値だけ自分のライフポイントを回復する。

「《スナイプストーカー》を除外し、ライフを１５００回復する！」

将人　ＬＰ／１３００→２８００

ここで回復か…。ロディスを警戒してるな。

「そして魔法カード《おろかな埋葬》を発動！デッキからモンスターを１体墓地に送る！」

《おろかな埋葬》
通常魔法（制限カード）

自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。

「俺が選ぶのは《ダメージ・イーター》だ！」

「《ダメージ・イーター》？」

「また知らないカードが…」

「あはは…未来のカードだから仕方ないよ。墓地から自分を除外する事で、効果ダメージを回復効果に変えるモンスターだよ」

《ダメージ・イーター》
効果モンスター
星２／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　８００
相手がダメージを与える魔法・罠・効果モンスターの効果を発動した時、墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する事ができる。
その効果は、ライフポイントを回復する効果になる。
この効果は相手ターンにのみ発動する事ができる。

「カードを2枚セットしてターンエンドだ！」

将人
ＬＰ／２８００
手札／１
モンスター／《冥府の使者カイエントークン》（ＡＴＫ／２２００）
《ダークエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２１００）
魔法・罠／リバース×３

ライフ回復に《ダメージ・イーター》…。ロディスの効果でライ

フを削るのは諦めた方がよさそうだ。

それにしても、ここまで有利な状況で相手の反撃に備えるとはな。あのリバースカードも他のモンスターを対処するための奴だろ。

「…強くなってるな、お前。昔よりずっと」

「俺もただ時間を浪費しているわけじゃない。どうすればこいつらの力を最大限に引き出せるか、それを考えて修行を重ねてきた」

力を引き出すのはデュエリストである俺達次第だ。デッキに入れるカードは1枚も無駄にできない。リバースカードを上手く調整してゴーズを出しやすくするあたり、将人は無駄なプレイングをしていない。

俺が次のターンで引くはずだったカードは《天よりの宝札》だ。結果論だけど、先に使って自分の布陣を整えるとはな。

「俺も負けてられねえな！俺のターン！」

お、これなら…！

「墓地の光属性モンスター《智天使ハーヴェスト》と《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》を除外し、《神聖なる魂》を特殊召喚！」

《神聖なる魂》　ＡＴＫ／２０００

「さらにチューナーモンスター《朱光の宣告者》を召喚！」

《朱光の宣告者》　ＡＴＫ／　３００

白い天使と朱い天使。レベルの合計は８！

「お前が闇なら俺は光だ！レベル６《神聖なる魂》にレベル２《朱光の宣告者》をチューニング！舞い散る白羽が、天空を翔け現世を照らす！希望の光を振り翳せ！」

☆６＋☆２＝☆８

「シンクロ召喚！飛来せよ！《ライトエンド・ドラゴン》！」

ダークエンドとは違う、天使の翼を背負う白龍が光の柱から飛び出した。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

『ギャオオォオォオ！』

『ゴアァアァアァ！』

「！？」

「これは…！？」

突然２体の龍が咆哮し、体とカードが光り出した。ライトエンドは黄色に、ダークエンドは紫に。

「何だあれ！？」

「あ…！」

月沙がデッキから1枚のカードを取り出した。そのカードも青く光っている。

「トリシューラ…？」

「そうか…！」

「何か知ってるのか？」

「アビリティを持つ奴の特定のカードは、互いに光って共鳴する事があるらしい」

「なら、これがそうだと言うのか？」

「多分な」

「でも、僕のカードは光ってないよ？」

確かに、俊也のカードは光を出していない。

「その特定のカードを持ってないんじゃないか？」

「特定のカード…か…」

やがて、3枚のカードの光は止んで2体も元に戻った。

「収まったな…」

「特にデュエルに支障があるわけじゃないだろ。続けてくれ」

「ああ」

今は後回しだ。さて、行くか！

「ライトエンドの効果発動！こいつが戦闘を行う時、攻守を５００ポイント下げる事で相手モンスター１体の攻撃力と守備力を１５００ポイントダウンさせる！ダークエンドの攻撃力と守備力を１５００ポイント下げる！ライト・イクスパンション」

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００→２１００

「リバース発動《亜空間物質転送装置》！」

「なっ！？」

「ダークエンドをエンドフェイズまで除外する！」

ごつい機械が光線を発射し、ダークエンドを異次元へ避難させた。

「くそ！ならカイエンに効果を使う！ライト・イクスパンション！」

『うぅ…』

ライトエンドが腹の宝玉から出す光でカイエンの力を奪っていく。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２１００→１６００

《冥府の使者カイエントークン》　ＡＴＫ／２２００→　７００

「ライトエンドでカイエンに攻撃！シャイニングサプリメイション！」

せめてカイエンだけでも倒しておかねえと…！

「速攻魔法（ハーフ・シャット）！モンスター1体の攻撃力を半分にし、そのモンスターの戦闘破壊を無効にする！」

《ハーフ・シャット》
速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターはこのターン戦闘では破壊されず、攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで半分になる。

「ライトエンドの攻撃力を下げてダメージを抑えるつもりだ！」

「俺はカイエンを選択する！」

「何！？」

《冥府の使者カイエントークン》　ＡＴＫ／　７００→　３５０

「カイエン！？ライトエンドじゃないの！？」

いや、あいつが自滅するとは考えづらい。あのリバースカードは、おそらくダメージを打ち消すカード…！

『くぅっ！』

ライトエンドが吐き出した光の波動を、カイエンが剣を盾にして防いだ。

「まだだ！罠カード《ガード・ブロック》！戦闘ダメージを無効にし、カードを1枚ドローする！」

「何！？」

将人に向かう攻撃の余波が2つに裂け、将人を避けて通り過ぎた。

「大丈夫か、カイエン？」

『ええ、おかげ様で』

「モンスターとライフを両方守り切り、なおかつライトエンドの効果を無駄遣いさせるとは…」

「カードを3枚セット！さらに《天よりの宝札》を発動！」

「お前もか…！」

「出し惜しみはしないっつったよな？」

互いにカードを引く。これで手札コストは確保できた。

「カードをもう1枚セットし、ターンエンド！」

「エンドフェイズ時に、カイエンの攻撃力が元に戻りダークエンドが帰還する！」

さっきの機械がまた光線を放ち、ダークエンドをフィールドに転送した。

《冥府の使者カイエントークン》　ＡＴＫ／　３５０↓２２００

《ダークエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

紅刃
ＬＰ／　８００
手札／５
モンスター／《ライトエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×４

「《ダークエンド・ドラゴン》の攻撃力が元に戻ってるんだな？」

「１度フィールドから離れた事で、攻撃力と守備力がリセットされたんだ」

「それにしても、あの２体ってなんか似てるよな？名前とか、攻撃力と守備力が下がるところとか」

「言われてみれば確かに…」

「あの２体は対になるドラゴンなの。だからステータスも効果も似たような感じなんだ」

迎撃の準備は万端だ。後はあいつがどう出るかだ。

「俺のターン！…（これなら…勝てる！それにはまず、あのリバースカードを全て取り除かなければならない）」

考えてるな。俺の伏せカードは４枚。下手に動けばロディスやリーシェが飛び出す可能性があるし、慎重になるのは当然だろ。

「（ダークエンドを囮には使いたくないが…）…俺は…ダークエンドの効果を発動する！」

「！」

「攻守を５００下げ、ライトエンドを墓地に送る！ダーク・イヴァポレイション！」

ダークエンドの腹の口が開く。

「そこだ！カウンター罠《天罰》！手札を１枚捨てモンスターの効果を無効にし、そのモンスターを破壊する！」

天から雷が落ち、ダークエンドが塵になった。

「済まない…ダークエンド…」

「さらに、カウンター罠で効果を無効にした事で、手札から《冥王竜ヴァンダルギオン》を特殊召喚する！」

『我も参戦させてもらう！』

俺のフィールドにも黒い大穴が開き、龍に変身したロディスが這い出した。

《冥王竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／２８００

「モンスター効果を無効にして特殊召喚した時、第３の効果が発動する！墓地からモンスターを１体特殊召喚する！リボーン・オブ・ザ・ビヨンド！」

『我らにもう１度力を貸してくれ！』

光が漏れた穴から飛び出したのは、首飾りを掛けた女天使だ。

《勝利の導き手フレイヤ》　ＤＥＦ／　５００

「フレイヤ！？」

「アルテミスじゃないのか！？」

「フィールドには天使族が１体もいないのに！？」

「何を考えている！？」

「……」

「（何か策があるのか？だが、今の俺には関係ない！）魔法カード《サイクロン》を発動！リバースカードを破壊する！」

「カウンター罠《魔宮の賄賂》！魔法・罠の発動を無効にし、相手はカードを１枚ドローする！」

「まだだ！魔法カード《大嵐》！フィールド上の魔法・罠を全て破壊する！」

「何!?」

まずいな…。《攻撃の無力化》と《トラップ・ジャマー》が破壊された。凌ぎ切れるか…?

「魔法カード《冥界流傀儡術(めいかいりゅうくぐつじゅつ)》!自分フィールド上のモンスターを、合計レベルが墓地の悪魔族1体のレベルと同じになるように除外し、その悪魔族を特殊召喚する!」

《冥界流傀儡術》
通常魔法
自分の墓地の悪魔族モンスター1体を選択する。
合計レベルがそのモンスターのレベルと同じようになるように、自分フィールド上のモンスターをゲームから除外する。
その後、選択したモンスターを特殊召喚する。

「同じレベル?」

「という事は…」

あいつの場にはカイエンしかいない。そして、墓地に眠る同じレベルの悪魔族もあいつのみだ。

「レベル7のカイエンを除外し、墓地からレベル7のゴーズを特殊召喚!」

『ゴーズ、後は頼んだわよ!』

『任せろ!』

カイエンが除外され、入れ代わりでゴーズがフィールドに現れた。

《冥府の使者ゴーズ》　ＡＴＫ／２７００

「（フレイヤはこの際無視だ。次のターンで天使族を召喚して高攻撃力で叩くつもりだろうが、今は関係ない！）バトル！ゴーズでライトエンドに攻撃！エミサリー・ブラッシュ！」

『その攻撃力では、効果を使ったところで俺を越えられまい！』

ゴーズが飛び上がり、紫に光る剣を振り上げる。

「ライトエンドの効果発動！攻守を５００下げ、ゴーズの攻守を１５００ポイントダウンさせる！ライト・イクスパンション！」

『ぐうっ…！』

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／１６００→１１００

《冥府の使者ゴーズ》　ＡＴＫ／２７００→１２００

『これしきで負けるか！』

ライトエンドが目くらましの光を発するも、ゴーズはそれに突っ込み剣を突き立てようとして…

ガキィッ！

丸い大きな盾に防がれた。

紅刃　ＬＰ／　８００→　７００

「馬鹿な！？なぜ破壊されない！？」

「墓地の《エンジェル・ガードナー》の効果だ。俺のモンスターがフィールドから離れる時、代わりとしてこいつと天使族１体を墓地から除外できる。代わりにこいつとアルテミスを除外した」

「そんなモンスターをいつの間に！？」

「《奇跡の回復》や《天罰》のコストで墓地に送っていたな」

「…カードを３枚セットし、ターンエンド」

『何！？』

将人
ＬＰ／２８００
手札／２
モンスター／《冥府の使者ゴーズ》（ＡＴＫ／２７００）
魔法・罠／リバース×３

よし、俺のターンが回ってきた！

「（伏せたのは2枚目の《ヘイト・バスター》だ。ゴーズに攻撃した瞬間、俺の勝ちが決まる。それに、保険として《ガード・ブロック》と《和睦の使者》もある。例え轟龍が来たところでこの3枚をかい潜る事はできないはずだ）」

「ライトエンドの効果を使えるのは後1回か…」

「でも、ヴァンダルギオンがいるから大丈夫ッスよ」

「いや、わからないよ。あのリバースはさすがにブラフじゃないだろうし、今の紅刃の場には伏せカードがない」

「効果の発動を止める手段がない以上、迂闊に攻撃できないよ…」

確かに、今の俺のフィールドにはカウンター罠は1枚もない。

「将人も凄えな！紅刃と互角以上に渡り合ってるぜ！」

「どちらが勝ってもおかしくないな」

「俺のターン！」

これは…！

「どうする、紅刃？今のお前のフィールドにはカウンター罠が存在しない。止める手段はないぞ」

「…ああ。『フィールドには』な」

「何？」

「チューナーモンスター《ブレード・トラディショナー》を召喚！」

《ブレード・トラディショナー》　ＡＴＫ／　５００

「そのモンスターは…！」

「新たな力を手に入れたのはリーシェだけじゃない！レベル８《冥王竜ヴァンダルギオン》レベル１《勝利の導き手フレイヤ》にレベル１《ブレード・トラディショナー》をチューニング！」

１つの黄色の輪にロディスとフレイヤが飛び込んでいく。

「まさか、フレイヤを蘇生したのはこのためか！？」

「武の魂が、冥王に宿りて現世に轟く！希望の光を振り翳せ！」

☆８＋☆１＋☆１＝☆１０

「シンクロ召喚！切り拓け！《エミサリー・セイバー・ドラゴン》！！」

光の柱から飛び出したロディスは武士のような風貌の龍になっていて、その手には１本の巨大な日本刀が握られていた。

《エミサリー・セイバー・ドラゴン》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星１０／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３８００／ＤＥＦ２８００

「ブレード・トラディショナー」＋「冥王竜ヴァンダルギオン」＋チューナー以外のモンスター1体
このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在するカウンター罠を5枚まで選択し、手札に戻す。
このカードの攻撃力は、この効果で手札に戻したカウンター罠1枚につき３００ポイントアップする。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分はカウンター罠を手札から発動する事ができる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分はカウンター罠を発動する時、除外されているカード1枚を持ち主の墓地に戻す事で、発動条件を無視して発動する事ができる。

《エミサリー・セイバー・ドラゴン》　ＡＴＫ／３８００

「これが、ロディスの新しい力…」

『紅刃、我はいつでも行けるぞ』

「わかった！エミサリー・セイバーがシンクロ召喚に成功した時、墓地のカウンター罠を5枚まで手札に戻す！」

「カウンター罠の回収だと！？」

「墓地から《攻撃の無力化》《奇跡の回復》《天罰》《魔宮の賄賂》《トラップ・ジャマー》を手札に戻す！さらに、この効果で手札に戻したカウンター罠1枚につき３００ポイント攻撃力をアップさせる！」

《エミサリー・セイバー・ドラゴン》　ＡＴＫ／３８００→５３００

「攻撃力５３００！？」

「（ここまでとは…。だが、攻撃を仕掛けてくれれば、それだけで決着がつく！）」

「さらに、魔法カード《ライト・イクスパンション》を発動！ライトエンドが場にいる時に発動できるカードだ。相手モンスター１体の攻守を１５００ポイント下げる！」

《ライト・イクスパンション》
通常魔法（オリジナル）
自分フィールド上に「ライトエンド・ドラゴン」が表側表示で存在する時のみ発動する事ができる。
相手モンスター１体の攻撃力・守備力はエンドフェイズ時まで１５００ポイントダウンする。

「ゴーズの攻守を１５００ポイントダウンさせる！行け、ライトエンド！」

ライトエンドが本日４回目の光を放ち、再びゴーズの力を封じる。

《冥府の使者ゴーズ》　ＡＴＫ／２７００→１２００

「バトル！《エミサリー・セイバー・ドラゴン》でゴーズを攻撃！」

「リバースカードオープン《ヘイト・バスター》！」

「２枚目！？」

「ゴーズとエミサリー・セイバーを破壊し、エミサリー・セイバー

の攻撃力分のダメージを与える！」

２枚目かよ…。昔はここまで引きは強くなかったぞ？

「終わったな」

「将人の勝ちなんだな！」

「手札からカウンター罠（トラップ・ジャマー）を発動！」

「何！？」

「手札からの罠だと！？」

「エミサリー・セイバーがいる限り、俺は手札からもカウンター罠を発動する事ができる！」

こいつ自身には耐性は付いてないけど、カウンター罠の力を１００％引き出せる！

『くそ、ここまでか…』

『悪く思うな。これも勝負だ』

「行け、エミサリー・セイバー！紫電冥閃！！」

ロディスが紫の雷を込めた刀を横に凪いで、ゴーズを斬り裂いた。

「（紅刃の手札には《魔宮の賄賂》がある。《ガード・ブロック》を使ったところで防がれるだけだ…）」

将人　ＬＰ／２８００→　０
紅刃　ＷＩＮ

「あ、危なかった…」

ソリッドビジョンが消えると、俺はほっと息をついて腰を下ろした。

「…負けたか。やはり強いな、お前は」

「お前こそ、めちゃくちゃ強くなってんじゃねえか。勝ったのにライフが１０００を切ってるのって久しぶりだぞ？」

「そうなのか？」

「紅刃はたいていカウンター罠で相手の動きを封じるから、ライフを削られにくいんスよ」

「戦闘破壊されないモンスターも多めに使うしね」

デュエルが終わったからか、俊也達も近づいてきた。

「２人共、凄え面白いデュエルだったぜ！」

「あそこまでやる奴は、学園内でも滅多にいない。ブルーでも充分やっていけるレベルだ」

「万丈目…。いや、しばらくは昇格するつもりはない」

「何？」

「どちらかというと、レッド寮の方が落ち着くからな」

「わかるぜ、その気持ち！やっぱここが居心地がいいもんな！」

俺は…どっちともいえないな。案外ブルー寮にも慣れてきてるし。

『ゴーズ、カイエン、お前達のパートナーはやはり将人でなければならないようだな。紅刃とて、あそこまで使いこなす事はできないだろう』

『ロディス…』

『確かに、私達のパートナーはマスターです。でも、紅刃やあなた達と過ごした時間も大切なものなんですよ？』

『そうか。こちらの事は気にするな。今まで共にいれなかった分、将人を支えてやれ』

『はい！』

『そのつもりだ』

ロディスの言う通りだな。俺じゃ、いや、誰でも将人の代わりにはなれねえよ。

「だが、ダークエンドを囮として使ってしまうあたり、俺もまだ未熟だな」

「未熟なのは私達も同じだよ。だからこうして学園で学ぶんじゃない？」

「要するに学生＝未熟ってか…」

「正確には人間＝未熟だけどね。そうじゃなきゃ、わざわざ学校に行く意味ないでしょ？」

「な…！この俺が未熟だと言うのか！？」

「未熟ならまだまだ成長できる。いつも完璧が最高なわけじゃないのよ」

「まあ、それはそうだが…」

ま、言えてら。どんな秀才でも欠点はあるしな。

「紅刃、今日は付き合わせて悪かったな」

「いや、気にすんな。楽しかったしな」

「俺もだ。さて、早く宿題を片付けなくてはな」

「ああっ！？そうだった！将人、俊也、手伝ってくれ！」

「授業中寝てるからでしょ？仕方ないな…」

「一緒にやるぞ。道具を持って食堂に集合だ。ついでにお前らも来い」

「了解ッス！」

「すぐに準備するんだな！」

「俺は遠慮ｓ「強制参加だ」何！？」

「私達が見張っといてあげるから、早く準備してきたら？」

「波星君！？」

「すまない。そっちは任せる」

焦る万丈目を俺達に任せ、将人達はさっさと部屋に戻っていった。

「見逃してくれるとかは…」

「ないに決まってるでしょ？」

「諦めろ。コミュニケーションも大切だぞ？」

「くそ…ハァ…（無理矢理突破するにも、この2人は戦闘力が高すぎる。精霊もいるし、逃げるのは不可能だな…）」

溜め息をついて自室に向かう万丈目に、俺と月沙は苦笑いをしながらついていった。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第２８話　人間は未熟な生き物（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「最近オリカが増えてきたよな？」

璃音「デュエルのつじつまを合わせるためには、どうしても必要なのよ」

フィレス『グルル…』

紅刃「それに、《天よりの宝札》を使いすぎてるような気が…」

ロディス『手札が必要な場面が多いとはいえ、少し自重しなければ…』

勇香「…で？お前らがいるって事は、ヴァンダルギオンの紹介でもするのか？」

璃音「あら？ツッコまないのね」

勇香「いや、何ていうか…疲れてんだ。ツッコみ役をほとんど私とクロウと龍可でこなしてるからな…。何より周りがカオスなんだよ、うん」

紅刃「…お気の毒に…」

璃音「それじゃ、《冥王竜ヴァンダルギオン》を紹介するわよ」

《冥王竜ヴァンダルギオン》
効果モンスター
星８／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２５００
相手がコントロールするカードの発動をカウンター罠で無効にした場合、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
この方法で特殊召喚に成功した時、無効にしたカードの種類により以下の効果を発動する。
●魔法：相手ライフに１５００ポイントダメージを与える。
●罠：相手フィールド上のカード１枚を選択して破壊する。
●効果モンスター：自分の墓地からモンスター１体を選択して自分フィールド上に特殊召喚する。

紅刃「ボルテニスと違って、ノーコストで特殊召喚できるモンスターだ」

ロディス『カウンター罠をただ発動させるだけではなく、効果を無効にする必要があるがな。無効にしたカードの種類によって、特殊召喚時に発動する効果が変わる』

勇香「魔法なら１５００ダメージ、罠なら相手フィールド上のカードを１枚破壊、モンスターなら墓地からモンスターを蘇生…どれを使っても損はないな」

紅刃「《天罰》のコストで墓地に送ったモンスターを効果で蘇生するのも強力だな」

璃音「あまり見ないと思うけど、《虚無を呼ぶ呪文》で複数の種類のカードを無効にできれば、ヴァンダルギオンの効果を複数使用できるわ。例えば、魔法、罠、モンスターの効果を全て同時に無効に

できたら、３つの効果が全て発動するわ」

勇香「えげつないな、それ…」

ロディス『しかし、《虚無を呼ぶ呪文》はチェーン４以降にしか発動できない。無理に採用する必要はないぞ』

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロディス『これからもこの小説を読んでもらえるとありがたい』

紅刃「次回も見てくれよな！」

勇香「だからそれは私の台詞だぁぁあああ！！」

――――――――――――――

いかがでしたか？

おまけコーナーでも言ってる通り、最近オリカと《天よりの宝札》の使用頻度が上がってきました。あまり多用するべきじゃないとわかってるんですが…。デュエルの脚本って難しいですね…。

なるべく使わないように頑張ります。でも、雷光断罪やエミサリー・セイバーとかはまた別の話ですけど…。

後、いい加減俊也にもデュエルをさせたいんですが、どこに入れたらいいのやら…。空気にならないように頑張らなければ…。

では、また次回！

第２９話　からかいとオーバーキルはほどほどに（前書き）

今回は一気にアニメ3話分進みます。

後、紅刃達４人が軽く暴走します。

それではどうぞ！

第２９話　からかいとオーバーキルはほどほどに

ＳＩＤＥ／月沙

「これで送信っと」

私はメールの内容を確認して、宛先に送信した。

今私は自分の部屋で携帯を弄っている。というのも、ある目的ができたからだけど。

誰にどんな内容のメールを送ったかって？それは内緒だよ。

待ってる時間が暇だし、最近あった事の話でもしようか。

まずは、黒蠍盗掘団の話かな。

原作通りに来日したマグレ警部に言われて、十代達は鍵を各場所に保管して盗まれた。私達のはダミーだというのはあらかじめ十代が警部に言ってある。ダミーは隠さずに普段通り持ち歩いてほしいって話だけど、単に盗む時紛らわしいだけでしょ？

そこで、私達は会議（？）を開くべく１度集合した。

「で…何で俺の部屋なんだ？」

そこはご愛嬌という事で。

「何て事なのニャ…」

「だから！何でみんなここに…！」

「大変な事になりましたな！」

「マグレ警部！みんな！」

するとマグレ警部と一緒に他のメンバーも万丈目君の部屋に入ってきた。

「私が呼んだのです。事情聴取をしようと思いましてな」

「それもそうだニャ」

「では皆さん、別室でお話を伺いましょう」

「よし！俺達も手分けして　犯人を捜そう！」

「いや。誰も動くな」

「万丈目…？」

「万丈目君、どういう事なのニャ？」

「何故なら…鍵を盗んだ犯人は…この中にいる！」

「「「「「「「「「「「「「ええ！？」」」」」」」」」」」」」

みんなが一斉に驚きの声を上げる。もちろんは私は例外だけど。

「この事件は俺が必ず解決してみせる！名探偵万丈目サンダーの名に懸けて！」

うん、金〇一だね。『じっちゃんの名に懸けて！』だね。声優が同じだからかあまり違和感ないや。

「調子いいな…」

「お〜、なんかかっこいいぞ！」

「アニキ…」

紅刃と翔君は呆れ顔で万丈目君と十代を見ている。

「俺はみんなが集まる前に、全ての犯行現場を回って来た」

「そっか！犯行現場には　幾つもの証拠が残っている！」

「お前もやればできるんだな」

「どういう意味だ！？」

将人の言う事もあながち間違ってない…と思う。

「そういえば…床に付け爪の様な物が落ちていたわ…」

「天上院君…真剣に犯人を捜す気があるのか？部屋はこまめに掃除しろ」

「ま…毎日してるわよっ！」

「そんなものは俺が捨ててておいた」

「ご…ごめんなさい…」

「そういえば…会議室の金庫の前にも足跡が…」

「学園内は土足厳禁！ちゃんと上履きを履く！足跡なら俺が拭いておいた」

「そ…それはすまなかったのニャ…」

「そういえば…俺たちの部屋の壁にも穴が…」

「そうそう」

「借りた部屋に傷を付けるな！敷金戻ってこないぞ！」

「敷金って…」

「穴なら俺が埋めておいた」

「わ、悪いな万丈目…」

「さんだぐぉっ！？」

ここで、紅刃と将人が万丈目君の頭に同時に拳骨を繰り出した。

「アホかお前はぁあぁぁあ！！お前が証拠隠滅してどうすんだ！？」

「現場保存という言葉を知らないのか！？一から出直せ馬鹿探偵！！」

「ぐぅぅ…２人同時に拳骨とは…」

「あ…でも　それじゃあ犯人は誰なのニャ？」

「お前！お前！お前！そしてお前だ！」

気を取り直した万丈目君は、迷わず警部と一緒に来た４人を指差した。

「な、何を証拠にそんな事を！」

「そうよ！犯人扱いするなら証拠があるんでしょうね！？」

「あるとも」

「しかし、証拠らしき物は全て君が…」

「フフフ…証拠は…コレだ！」

万丈目君が取り出したのは、万丈目君の精霊のおジャマ３兄弟のカードだ。前の学園買収の件で、万丈目君が島の井戸でイエローの他のおジャマ２体を見つけたんだっけ。

「それぞれの部屋を回った時、俺は密かにこいつらを鍵と一緒に置いてきた。そして俺の部屋には　大勢の目撃者がいる！」

さらに見せたのは、これも学園買収の件で万丈目が井戸から引き取ったモンスター達のカードだ。

「こいつらは、お前達の犯行の一部始終を目撃していた！」

『間違いない！』

『こいつらだ！』

『おいら達は見たんだ！』

「目撃者だと！？」

「どこにいるの？そんなの」

『おいおい！おめえらにはこの！』

『桜吹雪が！』

『紋所が！見えねえのかい！』

「「「「全然見えない」」」」

「桜吹雪と紋所はともかく、おジャマ達の姿が見えて声も聞ける時点であなた達は黒ですよ」

「「「「何!?」」」」

俊也が万丈目君のフォローに入った。さすがに万丈目君1人だけじゃ役不足だと思ったのかな?

「わかりやすい証拠なら…付け爪の話がありましたよね?ミーネさんの爪が1つだけ短いのは、その付け爪を落としたからじゃないですか?」

「っ!?」

ミーネは慌てて指を隠すけど、気づかれた後じゃ意味がない。

「図星ですね」

「俊也、俺の台詞を取るな!そしてマグレ警部!あなたがこの一味の黒幕だ!あなたは俺達に鍵をわざと保管させ、手下にその場所を教えていた!そして、わざとらしく疑って見せて俺達に弁明させた!そうする事によって、彼らを疑う気持ちを消したんだ!」

ここだけ聞くと、まともな推理に見えるんだけどな…。

「ヘッヘッヘッヘ…流石は名探偵を名乗るだけはある」

「「「「「「「「「どこが!?」」」」」」」」」

今度は私も入れて一斉にハモった。

「滅茶苦茶な推理だが結果は全て大当たりだ!そう、私達の正体は!」

と言って、5人は上着を脱ぎ捨てた。

「「「「「黒蠍盗掘団！」」」」」

「「「「「「黒蠍盗掘団！？」」」」」」

「ああ…そんなカードあったな…」

「私は数年前七精門の鍵を奪う仕事の依頼を受け、下をこの島に送り込んだのだ！」

「「「「「それが！黒蠍盗掘団！」」」」」

「時間をかけた割には、仕事が雑だぜ…」

「「「「「それが！黒蠍盗掘団！」」」」」

「何か面白えぞこいつら」

「本当」

「確かに」

「「「「「それが！黒蠍盗掘団！」」」」」

「でも、鍵を盗んだだけじゃ七精門は開かない。意外と間が抜けてるのね」

「それが！黒蠍盗掘団！」

「やかましいわ！ロ○ット団かお前らは！？」

「ホントロ○ット団だよね」

「だからお前らはロ○ット団なんだ」

「そんなんじゃいつまで経ってもロ○ット団だよ？」

「「「「「それが…は？」」」」」

「いや…なぜロ○ット団？」

「だってそうだろ？盗っ人なのに肝心な所で抜けてんだよ」

「ていうか、本業よりもメカとかを造ってた方が凄いんじゃない？」

「確かに、奴らの技術力は異常だな」

「もうロ○ット団辞めてそっち方面で生きていく方がいいでしょ？遊星や璃音とも仲良くできそうだし」

「いや、あの…何の話だ？」

「というわけでお前ら発明家になれ」

「どういうわけだぁああ！！だからロ○ット団って何の団体だ！？」

「お頭、落ち着いて…」

シャウトする警部もといザルーグを宥めるチック。ま、４人掛かりのボケならこんなもんでしょ。

あ、ここからはずっと台詞のターンだから、混乱しないように台詞の前に名前を1文字入れておくね。

俊「じゃあ、電撃で返り討ちにされながらも延々とピ〇チュウを追いかけるか、発明家として人生を賭けるか、どっちがいい？」

ザ「どちらも命懸けだろうが！他に選択肢はないのか！？」

月「じゃあ、バンドでも組んだら？『放課後ブラックスコーピオンタイム』とかいいんじゃない？」

ザ「長いわぁあぁぁ！！せめて『放課後黒蠍タイム』にしろ！なぜそこだけ英語なんだ！？そもそも黒蠍タイムって何だ！？」

月「何となくだけど」

ザ「何となくでパクるな！それより我らは楽器に携わった事などないのに元ネタに敵うか！？」

月「いや、なんで『ポケ〇ン』知らなくて『け〇おん！』は知ってるの？」

紅「あれか？記憶力の問題か？」

将「これだから中年親父は…」

ザ「誰が中年親父だぁあぁあああ！！？」

ゴ「お頭、落ち着いて…」

月「他には何かないかな？」

将「黒蠍オールスターズ」

紅「黒蠍ｐｒｏｊｅｃｔ」

俊「コンサドーレ黒蠍とかは？」

ザ「バンドから離れろやぁああ！！最後はバンドですらないだろ！？そして謝れ！元ネタの方々と全国のファンに謝れ！」

紅「じゃあ、何がいいんだよ？野球チームか？バスケのチームか？」

ザ「５人でできるか！？」

俊「国会議員や総理大臣にでもなったら？」

ザ「難しい！難しすぎる！」

将「やめておけ。こんな奴に任せたら日本は終わりだ」

ザ「どういう意味じゃゴラァアアァアア！！！」

ク「お頭、落ち着いて…」

俊「じゃあ、他には何か…」

月「コンビニのアルバイトとか、道路工事のアルバイトとか…」

ザ「アルバイトは却下だ！」

将「バンジージャンプやロッククライミングでもやってろ」

ザ「もはや職業ですらないだろうが！」

将「安心しろ、命綱はなしだ」

ザ「死ねって言ってるよな？遠回しに死ねって言ってるよな！？どこをどう安心すればいいんだ！？」

紅「もういいよ、『ＫＵ☆ＲＯ☆ＳＡ☆ＳＯ☆ＲＩ』って名前でバーでも開いてろよ」

ザ「適当だなオイ！？」

月「アナウンサーやグルメレポーターとかは？」

俊「駄目でしょ、人相的に」

ザ「表に出ろやクソガキィィイイイイ！！！」

ク「お頭、落ち着いて…」

紅「あれだ、もうラスベガスに行って大金賭けて負けて来いよ」

ザ「負ける事前提！？もっと何か応援するとかないのか！？」

月「負けるね」

将「負けるだろ」

俊「負けると思う」

ザ「全員一致!?」

紅「俺達の予想はこうだけど、お前はどう思うよサンダー君?」

万「ここで俺に振るのか!?」

ザ「勝つよな!?俺は勝てるよな!?」

万「いや、負けるな」

ザ「ぐおおぉおぉぉおおおおぉぉ!!!!!」

俊「まさかの即答…」

ミ「お頭…」

はい、ターン終了。

頭を抱えながら大声を上げてのたうち回るザルーグを、残りのメンバーは疲れ切ったような目で眺めていた。

「で、本題は何だっけ?」

「ゼェ、ゼェ、どうすりゃ、ハァ、鍵が、ゼェ、開くんだ…ゲホッ、

ゲホッ」

すっかり疲弊した状態のザルーグに、みんなが哀れみの目を向けている。あ、もちろん私達４人は例外で。

「あ、ああ…教えてやろう。俺とデュエルして勝てば門は開かれる」

「待て待て！俺は！？」

「私もいるわよ！」

「大徳寺先生も！」

「いやいや、私はいいのニャ…」

「デュエル…ゼェ、そうか…依頼された、ゲホッ、時に貰った、ゼェ、こいつが…。ならばデュエルだ、小僧…ゴホッ」

ザルーグはフラフラの状態でデュエルディスクをセットしようとしたけど、体力が持たないのか両手を床についてしまった。

「…自分で言っておいて何だが、その…無理しない方がいいぞ？」

「なんの…！盗掘団の頭が、ゼェ、これしきの事で、へばってられ、ゼェ、られ、られるか…」

「体力ないな」

「中年親父だから？」

「誰が中ね、ゲホッゴホッ！」

「お頭、無理しないで！」

「あんまり怒ると血圧上がるぞ？」

「誰のせ、ガフゥッ！」

「「「「お頭ぁあああぁああ！！」」」」

十代の言葉に反応してまた叫ぼうとしたザルーグは、血を吐いて倒れてしまった。私達がやっといてアレだけど…大丈夫？

「お頭しっかり！」

「死んじゃ駄目だ！」

「ゲホッ、ゼェ、ゼェ、小僧…勝負は、明日に、してくれ…ハァ、明日の、午後０時に、この寮の、ゲホッゲホッ、外で、デュエルだ…安心、しろ…鍵も、ちゃんと…ハァ、盗んだ分は持って…来る…」

「わ、わかった…約束は守れよ？」

「ああ…い、行くぞ、野郎…ど…ゲボォゥッ！」

「ぎゃあああ！！」

「お頭ぁああ！！」

「早く連れてくよ！」

「り、了解ぃぃぃ！」

黒蠍の４人は、また血を吐いて倒れたザルーグを運んで部屋から出て行った。

「「「「……」」」」

「「「「……」」」」

「まさかここまで効果があるとはな…」

「正直びっくりだよ…」

「あの…効果っていうか…大丈夫ッスかね…？」

「どうすんだよ？十代、万丈目」

「俺達のせい！？」

「どう考えてもお前らが原因だろ！」

「いや、最終的にとどめを刺したのはお前らだろ」

「敵ながら哀れね…」

「月沙さん…少しやりすぎだと思うニャ～…」

「相手の気力を減らそうとして事前に打ち合わせたんですけど…ごめんなさい、確かにやりすぎました…」

さすがに血を吐いて戦闘不能になるなんて思わなかったし、ねえ…？

でも、途中から私も含めてみんな楽しんでたな…。ザルーグさん、ごめんなさい。そしてご愁傷様。

次の日、約束通りなんとか回復したザルーグと万丈目がデュエルをして、原作通り万丈目が勝って鍵を回収し、精霊になってカードに宿ったザルーグ達を引き取った。

私達は後日ザルーグに謝りに行った。笑って許してくれたからいいけど、ずいぶんやつれてたな…。

黒蠍盗掘団の話はここまで。

アビドス3世の話は…別にいっか。原作とほとんど変わらなかったし。

廃寮でのセブンスターズ戦の話をしようか。タイタンが出るはずだったけど、私達っていうか紅刃が助けたから誰が出るかわからなかったんだよなぁ…。

「グルナードでアルテミスに攻撃！」

「まだだ！手札から《オネスト》の効果を発動！」

「カウンター罠《威風堂々》！バトルフェイズ中のモンスター効果を無効にする！」

「ああっ！？」

「私の勝ちね！」

「ちっくしょお…まさかカウンター罠で負けるなんて…」

私と紅刃は、紅刃の部屋でデュエルをしていた。ただ、たまにはって事でデュエルディスクは使ってないけど。

「でも、ディスクなしってのも案外新鮮だな」

「私がいた世界ではこれが普通なの。まあ、デュエルディスクの方が迫力あるけど」

『姫様！』

急にスイレンとロディス、リーシェが出て来た。

「スイレン？どうかした？」

『いえ…何か妙な胸騒ぎがして…』

「胸騒ぎ？」

『私も似たような感覚を覚えた』

『月沙、原作ではこの時期に何かなかったか？』

「原作？ええと…」

私は記憶を辿ってみた。原作…胸騒ぎ…廃寮…セブンスターズ…セブンスターズ？

「あ！多分セブンスターズだ！」

『セブンスターズだと？』

「誰と誰がデュエルしてんだ？」

「この前がアビドス3世だったから、廃寮で明日香さんとタイタンさんがデュエルしているはずだよ」

「明日香とタイタンが！？」

『でも、タイタン様は以前、紅刃様がお助けになられて改心されましたので、再び裏の社会に足を踏み出すような事はしないと思うのですが…』

「多分、タイタンさんの代わりに別の誰かが選ばれているはずだよ」

『なら、ニュートラルの人間が関係している可能性が高い。早く行くべきだろう』

「よし、廃寮に行くぞ！」

私達が廃寮に着いて中に入ると、既に十代達が来ていた。

「十代！」

「紅刃！？月沙も！？」

「妙な気配がしてここに来たんだけど、何があったの？」

「いいところに来たな。お前らに用がある奴がいる」

「用？」

もうデュエルは終わったみたいだ。今いるのは、十代、明日香さん、俊也、将人、万丈目君、翔君、隼人君、亮さん、吹雪さん、それから…

「あああ！？ついに見つけたぞ！真川紅刃、波星月沙！」

「「…は？」」

…見間違いじゃないよね？なんでこいつがここにいるの？

「いや、あの…なんでお前がここに？」

「決まっているだろ！俺様がセブンスターズの一員だからだ！」

「「……」」

そう、こいつは最初の月一試験で私がフルボッコにした瀬川だった。

「何だその目は！？」

「だって、セブンスターズって言うくらいだからどんな凄い人が出て来るのかと思ってたら…ねえ？」

「俊也、本当にこいつで合ってるのか？」

「うん。一応助けたんだけど…」

床を見ると、タイタンが付けるはずだった闇のアイテム（マスク）がばらばらになって落ちていた。多分、将人あたりが壊したんだろうな。

「で、俺と月沙に用ってのは？」

「当然、てめえらへの復讐だ！」

「わかった。じゃあさっさと帰れ」

「はあ！？早過ぎるだろうが！」

「まさかとは思うけど、あんたがセブンスターズになった理由って

それ？」

「その通りだ！大量のカードを失い、ブルーにいながら地位も堕ちた俺に、『力を与える代わりに自分に協力しろ』と言ってきた野郎がいた」

「いや、元々盗んだカードばっかだろ」

「俺はそいつに従い、そいつが行動を起こすまで動くなという約束も守ってやった。そして、ついにその時が来た！だが、練習がてらにそこの女にデュエルを持ち掛けたらこの様だ！」

「そんな気持ちでデュエルを挑まれるなんて、私もずいぶんナメられたものね…」

明日香さんの声に怒気が混じっている。私はというと…うん、もう怒る気力すら失せた。影丸理事長、これはどう見ても人選ミスですよ…。

「『やらなきゃいけない事がある』と喚いていたから助けてやったはいいが…十代や今のお前の話を聞く限りじゃ放っておいた方がよかったか？」

「いや、さすがにそれはまずいだろ。こんな奴でも生きた人間なんだから」

「こんな奴とは何だ！？喧嘩売ってんのか！？」

「売ってんのはお前だろ…」

紅刃も興ざめって感じだ。ハァ…心配して損した…。

確かに私はブチ切れてこいつをぶっ飛ばしたし、紅刃も思い切り斬ったけどさ、恨まれる筋合いはないでしょ？恐喝しまくってたそっちが悪いんだからさ？

「とにかくデュエルだ！てめえらをぶっ倒さねえと気が済まねえんだよ！」

「ハァ…しゃあねえな…」

紅刃は溜め息をつくと、めんどくさそうにデュエルディスクを展開させた。それを見た瀬川もディスクを構える。

「（…ロディス、リーシェ。お前らは今回休みな）」

『は？』

「こいつにはサブデッキで充分だ。ていうかこっちの方が早く終わる」

『なるほど…パーミッションは基本長期戦向きだからな。わかった、我らはゆっくり見物するとしよう』

「（サンキュな）」

『どうせなら瞬殺してこい』

「（それはよっぽど手札がよくないとできないっての…）」

紅刃はディスクからデッキを抜き取り、もう1つのデッキをセットした。

「紅刃？あんたサブデッキなんて持ってたっけ？」

「使う機会は全然ないけどな。父さんに無理矢理持たせられたデッキだ」

「サブだと！？ナメてんのか！？」

「全力で行くから安心しろ。後、このデッキに勝てないようじゃ月沙や俺に勝つのは無理だ」「何！？」

紅刃のお父さんが持たせたサブデッキ…。どんなデッキなんだろ？

「さっさと終わらせるぞ」

「調子に乗ってられんのも今のうちだ！」

「いや、調子に乗ってねえから」

「「デュエル！」」

紅刃ｖｓ瀬川

「先攻はもらうぜ。俺のターン！魔法カード《強欲な壺》！カードを2枚ドローする！…あ」

紅刃はドローしたカードを見た瞬間、なぜか固まった。

「どうしたんだ？」

「手札事故でも起こしたか？ざまぁねえな！」

「…多分、終わったな…これ」

え？まさか本当に瞬殺するの？

「魔法カード《二重召喚》を発動！このターン俺は2回通常召喚ができる！手札から《Ｘ－セイバー　エアベルン》を2体召喚する！」

長い爪を装備したライオンのようなモンスターが2体現れた。

《Ｘ（エックス）－セイバー　エアベルン》
チューナー（効果モンスター）
星3／地属性／獣族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ　２００
このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、相手の手札をランダムに1枚捨てる。

《Ｘ－セイバー　エアベルン》　ＡＴＫ／１６００

《Ｘ－セイバー　エアベルン》　ＡＴＫ／１６００

「さらに魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動！手札からモンスターを1体墓地に送り、手札かデッキからレベル1のモンスター1体を特殊召喚する！デッキから《ＸＸ－セイバー　レイジグラ》を特殊召喚！」

次に出て来たのは、2本の短剣を持ち赤いマントを身につけたカメレオンだ。

《ＸＸ（ダブルエックス）－セイバー　レイジグラ》
効果モンスター
星１／地属性／獣戦士族／ＡＴＫ　２００／ＤＥＦ１０００
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスター１体を手札に加える事ができる。

《ＸＸ－セイバー　レイジグラ》　ＡＴＫ／　２００

あれ？このパターンは…。

「レイジグラがフィールドに出た時、墓地のＸ－セイバーを１体手札に戻す！《ワン・フォー・ワン》で墓地に送った《ＸＸ－セイバー　フォルトロール》を手札に戻す！そして、フォルトロールは俺の場にＸ－セイバーが２体以上いる時に特殊召喚できる！当然、ＸＸ－セイバーも対象範囲だ！」

赤いマントと鎧で身を包み、大剣を持つ戦士が召喚された。

《ＸＸ－セイバー　フォルトロール》
効果モンスター
星６／地属性／戦士族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１８００
このカードは通常召喚できない。
自分フィールド上に「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスターが表側表示で２体以上存在する場合のみ特殊召喚する事ができる。
１ターンに１度、自分の墓地に存在するレベル４以下の「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

《ＸＸ－セイバー　フォルトロール》　ＡＴＫ／２４００

「…終わった…うん、これは終わった」

「は？」

「見てればわかるよ…」

【暗黒界】か【魔轟神】じゃなきゃ止められないよ、あれは…。

「レベル１《ＸＸ－セイバー　レイジグラ》にレベル３《Ｘ－セイバー　エアベルン》をチューニング！めんどくさいから口上はなしだ！」

☆１＋☆３＝☆４

「シンクロ召喚！《アームズ・エイド》！」

腕の形をした武装品…遊星も使ってるモンスターだ。

《アームズ・エイド》
シンクロ・効果モンスター
星４／光属性／機械族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ１２００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとしてモンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。
この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、装備モンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする。
装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

《アームズ・エイド》　ＡＴＫ／１８００

「まだまだ行くぜ！《おろかな埋葬》を発動！デッキから2体目のフォルトロールを墓地に送る！フィールド上のフォルトロールの効果でレイジグラを特殊召喚！」

《ＸＸ－セイバー　レイジグラ》　ＡＴＫ／　２００

「レイジグラの効果で墓地のフォルトロールを手札に戻す！レベル６《ＸＸ－セイバー　フォルトロール》にレベル３《ＸＸ－セイバー　エアベルン》にチューニング！」

☆６＋☆３＝☆９

「シンクロ召喚！《ＸＸ－セイバー　ガトムズ》！」

赤いマントと白い大剣を身につけた司令官。まさか開幕１ターン目で出すなんて…。

《ＸＸ－セイバー　ガトムズ》
シンクロ・効果モンスター
星９／地属性／獣戦士族／ＡＴＫ３１００／ＤＥＦ２６００
チューナー＋地属性モンスター１体以上
自分フィールド上に存在する「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスター１体をリリースして発動する。
相手の手札をランダムに１枚捨てる。

《ＸＸ－セイバー　ガトムズ》　ＡＴＫ／３１００

「ここからが本番だ！手札のフォルトロールを特殊召喚！」

《ＸＸ－セイバー　フォルトロール》　ＡＴＫ／２４００

「そして、ガトムズの効果発動！俺の場のＸ－セイバーをリリースする事で、相手の手札をランダムに１枚捨てる！レイジグラをリリース！」

ガトムズが剣にある『ＸＸ』の紋章から光の球を放ち、瀬川の手札１枚に当てる。瀬川はそれを墓地に送った。

「手札破壊…！」

「ハッ、でかい割には地味な効果だな！」

「本当に地味だと思うか？」

「何？」

「フォルトロールの効果でレイジグラを蘇生し、効果でフォルトロールを手札に戻す！そしてそのままフォルトロールを特殊召喚！」

《ＸＸ－セイバー　レイジグラ》　ＡＴＫ／　２００

《ＸＸ－セイバー　フォルトロール》　ＡＴＫ／２４００

「ガトムズでフォルトロールとレイジグラをリリース！手札を２枚墓地へ！もう１体のフォルトロールの効果でレイジグラを蘇生し、効果で墓地のフォルトロールを手札に戻す！」

《ＸＸ－セイバー　レイジグラ》　ＡＴＫ／　２００

「うん？」

「これは…」

吹雪さんと亮さんは気づいたみたい。こうなったらもう止まらない。

「フォルトロールを特殊召喚し、ガトムズの効果でレイジグラと効果を使用したフォルトロールをリリース！手札をさらに２枚墓地へ！」

《ＸＸ－セイバー　フォルトロール》　ＡＴＫ／２４００

「ば、馬鹿な…先攻１ターンで…俺様の手札を全部墓地に送っただと！？」

「凄いね…。まさかいきなり無限ループをやってのけるなんて…」

「あれがＸ－セイバーの特技、通称無限ハンデスです」

「無限ハンデス…」

私が勝手にそう呼んでるだけだけどね。正式名称は忘れちゃった。

「さらにフィールドのフォルトロールの効果でレイジグラを蘇生！レイジグラの効果で墓地のフォルトロールを回収し、そのまま特殊召喚！」

《ＸＸ－セイバー　レイジグラ》　ＡＴＫ／　２００
《ＸＸ－セイバー　フォルトロール》　ＡＴＫ／２４００
「そろそろラストだ。《アームズ・エイド》は1ターンに1度、モンスター1体に自分を装備させる事ができる！ガトムズに装備！装備モンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする！」
《ＸＸ－セイバー　ガトムズ》　ＡＴＫ／３１００↓４１００
「カードを1枚セットし、ターンエンド！」
紅刃
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《ＸＸ－セイバー　ガトムズ》（ＡＴＫ／４１００）
《ＸＸ－セイバー　レイジグラ》（ＡＴＫ／　２００）《ＸＸ－セイバー　フォルトロール》（ＡＴＫ／２４００）《ＸＸ－セイバー　フォルトロール》（ＡＴＫ／２４００）
魔法・罠／《アームズ・エイド》（ガトムズに装備）リバース×２
「やっと終わったんだな…」
「紅刃の奴、あんなデッキを隠し持っていたのか…」
「すっげえ！他にも戦略があるんだろ？俺も戦ってみたいぜ！」
「今のを見てそう思えるのは、多分十代君ぐらいだよ…」
最初からあんなの決められちゃ、ほとんどの人が対処し切れない

よ…。あ、十代なら《天よりの宝札》を引けるかも…。

「くぅぅ、卑怯な…」

「俺は今の手札でやれる事をやっただけだ。誰が相手でも自分がどんなデッキを使っていても、やるからには全力で行く。でないと、相手に失礼だからな。…《幻魔の扉》とかは例外だけど」

ま、あれはチートカードだしね。

「紅刃、お前の言う通りだ。全力でデュエルをする事こそが相手へのリスペクトになる」

「亮さん…」

リスペクト、か…。今はまだ関係ないけど、どうにかしてヘルカイザー化するの止められないかな？いざとなったら私がデュエルを挑むけど…やっぱり無理そうだな…。

「ぐ…まあいい。このドローで逆転のカードを引けばいい話だ（《天よりの宝札》かミラーフォースを引けばまだ行ける。あの野郎に吠え面かかせてやるぜ！）」

さて、手札1枚で何をするか…。

捨てられたカードは、どれもタイタンが使うはずだったデッキに入っているカードだった。あのデッキをそのまま使ってるみたいだし、《天よりの宝札》でも来ない限り安心かな？

「俺様のターン、ドロー！…フフ、フハハハハハ！」

「何を引いたんだ？」

「おそらく、ドロー系のカードでしょうね…」

まずい…本当に引いたの？

「やはり勝利の女神は俺様に…」

「カウンター罠《強烈なはたき落とし》！」

「……は？」

うわぁ…。

「相手がデッキからカードを手札に加えた時、そのカード1枚を墓地に送る」

「……え……つ、つまり……」

「お前の手札は0だ。どうせドロー系のカードかミラーフォースあたりを引いたんだろうけど、運が悪かったな」

「……」

瀬川は真っ白になって最後の手札を墓地に送った。あ、本当に《天よりの宝札》だ。もしかしてドロー力上がった？

瀬川
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／なし
魔法・罠／なし

「酷い…」

「鬼かあいつは…」

「いくらなんでもこれは酷いッス…」

「…正直、あのデッキとはやりたくないな…。普段のデッキの方がまだ可愛いげがある」

上から俊也、将人、翔君、万丈目君。やっぱりカウンター罠は使うんだ…。

「何もできないだろうから勝手にターンを進めるぞ？ドロー！…そうかい、徹底的に叩き潰せってか…」

「？」

「魔法カード《野性解放》！俺の場の獣族か獣戦士族１体の攻撃力

を、エンドフェイズまでそのモンスターの守備力分アップさせる！」

あ～…もはやオーバーキルの領域だ…。

「獣戦士族のガトムズを選択！守備力の数値２６００を攻撃力に加える！」

《ＸＸ－セイバー　ガトムズ》　ＡＴＫ／４１００→６７００

「ハッ！ま、待て！そこまでやるか！？」

「引いたもんはしゃあねえだろ？それに、全力で行くってさっき言ったろ？モンスターで総攻撃！セイバー・スクランブル！」

一斉に斬り掛かるＸ－セイバーの皆さん。ていうか、ガトムズは《アームズ・エイド》装備してる意味ないでしょ？それ装備したら腕力上がるの？

「ちょ、ま、ぎゃあああああぁぁあああ！！？」

瀬川　ＬＰ／４０００→　０

紅刃　ＷＩＮ

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

微妙な空気の中、紅刃はデッキとディスクをさっさと片付けた。

「あ…あは…あはは…なんにもできねえ…１枚もカード使ってねえ…」

瀬川は完全に放心状態だ。立ち直るのにはしばらくかかりそう…。

『相変わらずえげつないな…』

『仕方あるまい。今回はたまたま手札がよすぎただけだ』

「闇の力に頼った時点でお前の負けだ。自分自身の力でデッキを組んだら、その時はいつでも相手してやる」

「紅刃…」

今言っても、もう1度戦う気なんて起きないから…。

結局、瀬川はそのまま放置するといろいろとまずい気がするから部屋まで運んであげた。もう恐喝からは足を洗ったみたいだから、ひとまず安心かな。

十代達は大徳寺先生の件で思い詰めてるけど、近いうちに解決するから放置しといて問題なし。私が今1番興味があるのは…

ピリリリ、ピリリリ

あ、来た来た。ええと、内容は…。

『わかったわ。他の3人からもメールが来たし、すぐに作るから待

ってなさい』

手筈通りに進んでるみたいだ。後は待つだけね。

楽しみだな、学園祭…！

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第２９話　からかいとオーバーキルはほどほどに（後書き）

☆今週のキーカード☆

勇香「何ていうか…哀れだな…」

フィレス『グルゥ…』

璃音「私達まで参加しなくてよかったわね。もしそうだったらザルーグは血を吐くくらいじゃ済まされなかったでしょうね」

勇香「どんだけボケ倒すつもりだよ!?確かに６人掛かりは凄い事になりそうだけどさ!」

璃音「まあ、それは置いておきましょう。今回は《ＸＸ－セイバー　ガトムズ》を紹介するわよ」

《ＸＸ－セイバー　ガトムズ》
シンクロ・効果モンスター
星９／地属性／獣戦士族／ＡＴＫ３１００／ＤＥＦ２６００
チューナー＋地属性モンスター１体以上
自分フィールド上に存在する「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスター１体をリリースして発動する。
相手の手札をランダムに１枚捨てる。

勇香「紅刃がやらかした無限ハンデスのキーカードか…」

璃音「紅刃がやったように動けば、相手の手札が例え１００枚あっ

ても全て墓地送りにできるわ」

勇香「フィールドに置いとくと都合が悪いＸ－セイバーを処理できるのも嬉しいところだな。何気に攻撃力が３０００を越えてるから、力押しでも充分通用するだろ」

璃音「シンクロモンスターの中でも珍しい、チューナーどうしでもシンクロ召喚できるタイプでもあるのよ。エアベルン２体と他のレベル３チューナーの組み合わせでも問題なく召喚できるわ。【Ｘ－セイバー】を使うなら覚えておきなさい」

勇香「ただ、地属性のモンスターが必要だから注意しろよ。Ｘ－セイバーは全部地属性だから心配ないとは思うけど」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

元ネタの皆様、そのファンの皆様、申し訳ありません。書いてるうちにどうしてもやってみたくなったんです…。

瀬川のデッキはまんまタイタンです。なので、デュエルの内容は原作と同じです。

月沙のメールの相手は…多分、気づいてる方も多いと思います。
次回ではっきりさせます。

では、また次回！

特別編　沈黙からの来訪者（前編）（前書き）

今回は紅煌蒼さんの作品『遊戯王ＧＸ　静かなる力』とのクロスオーバーです。前後編に分けてお送りします。

後書きのおまけコーナーでも紅煌蒼さんのキャラが登場しますので、最後までご覧ください。

それではどうぞ！

特別編　沈黙からの来訪者（前編）

ＳＩＤＥ／紅刃

「あ、そうだ！紅刃、これあげる」

「ん？」

月沙はそう言って１枚のカードを渡してきた。

俺と月沙はいつものように俺の部屋でデュエルとかをしていた。

ていうか、もはや日常茶飯事だな…。

今はデッキ構築の話をしていて、月沙は思い出したようにポケットからカードを取り出したってわけだ。

「お、これは…」

「ドローパンを買ったら当たったの。私の世界になかったカードが出て来たりするからいつも楽しみにしてるけど、まさかこれが出るなんてね」

「これは使えるな。サンキュな、月沙」

「どういたしまして」

「ええと、とりあえず…これと入れ替えるか」

俺はデッキから抜くカードを手早く決めて、今貰ったカードと入れ替えた。こいつはかなり強いぞ？

「んじゃ、試してみるか。月沙、相手してくれないか？」

「もちろん！」

俺達はそれぞれ自分のデッキをシャッフルしようとした。まずは早いとこあいつを出さないと…

ポゥッ

「ん？」

「え？」

デッキを置こうとした時に、俺と月沙の目の前に突然小さな光の球が発生した。

「何これ？」

「さあ？」

いや、でも待てよ？何か嫌な予感が…。

カァアァアア！

って予感的中！？

「きゃあっ！？」

「ぐっ！？」

光の球が強く輝き出し、視界が真っ白になった。

カッ！

「う…」

「何だったんだ、今の…は？」

視界が晴れると、森が目に入った。

今俺達がいるのは、森のど真ん中にあるそこそこ広い原っぱだ。

「ここ…どこ？」

「どうやら、精霊界のようだな」

「ロディス！」

ロディスとリーシェ、スイレンも出て来た。にしても、精霊界？

「さっきの光の球が原因でしょうけど…なぜこうなったのでしょうか？」

「さあ…。とりあえず、この辺りを散策でもして…」

「いや、今はそんな暇はなさそうだ」

「え？」

月沙の言葉を遮り、リーシェが杖を取り出した。目線の先には森がある。

「何かが潜んでいる。殺気を感じるあたり、友好的ではないだろうな」

「ったく、ここでリアルファイトかよ…」

俺のぼやきを合図に、全員武器を構える。俺はディスクをリーシェの大剣に変化させた。

「とりあえず、一発当てておびき出してみるか」

俺は剣に電気を纏わせ、それを大きく振り上げた。そして、そのまま右手で振り下ろ…

カッ！

「へ？」

訂正。振り下ろす直前に、攻撃の直線上に強い光が現れた。俺はその正体を確認する間もなく剣を振り下ろしてしまった。

「う…一体何が…」

ズドォオオオ！！

「「……」」

電撃をぶっ放した後に気づいたけど、光の中から現れた１組の男女の丁度真ん中を白い電撃が通り抜けていた。相手にとってはいきなりな上に掠ってもおかしくないくらいすれすれの攻撃範囲だったから、そいつらは完全に硬直していた。

「わ、悪い！大じょ…」

「オオォオオォォオオオオ！！」

あ！　やせいの　りゅうこつきが　とびだしてきた！

《龍骨鬼》
効果モンスター
星６／闇属性／アンデット族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ２０００
このカードと戦闘を行ったモンスターが戦士族・魔法使い族の場合、
ダメージステップ終了時にそのモンスターを破壊する。

「「「「……」」」」

またもや絶句する俺達人間組。さっきの攻撃は一応当たったらしく、ご立腹のようだ。

「…なんで《龍骨鬼》？」

「うわ…でか…」

「な、何あれ？」

「《龍骨鬼》…だよな…？」

上から俺、月沙、謎の女子、謎の男子。いや、本当にこれどういう事だよ？

「グオォオアアァアア！！」

怒り狂って突進してくる《龍骨鬼》。ていうか謎の男女を狙ってるし！危なっ！？

「な…！？」

「京哉様！」

「お兄ちゃん、危ない！」

「私達で止めるぞ！」

「主に手を出す事は許さん！」

謎の男女の前に、いきなり４人の精霊が現れた。あいつらデュエリストか？ていうかなぜに『お兄ちゃん』？いや、今はそんな事考えてる場合じゃねえ！

「みんな伏せて！」

「「「「！？」」」」

「は？」

「え？」

月沙は一言叫ぶと、銃型のデュエルディスクから冷気の弾丸を連射した。

謎の一行は咄嗟に伏せて、弾丸は全部《龍骨鬼》の胸にある朱い球体を捉えた。

「ゴアァアアウゥウゥゥオオオオオ！？」

ん？かなり効いてるぞ？あの球体ってもしかして弱点？

「紅刃！」

「わかった！締めは任せろ！」

そうだな、最近できるようになったあれで行くか。

俺は悶える《龍骨鬼》に向かって走り出し、もう１度剣に電気を纏わせた。今度はそれを刃の形に操作する。

謎の一行の前で飛び上がり、両腕で剣を振り上げる頃には、剣の刃を電気で拡張した感じになっていた。擬似的な剣の巨大化だ。

「おおおおお！！」

一刀両断。俺は骸骨だらけのゾンビを上から球体ごとぶった斬った。

「グギャアアァァアアアアア！！」

《龍骨鬼》は苦しみ悶え、この場から逃げ出して森の中に消えてしまった。

「なんとか撃退できたか…。月沙、お前弱点でも狙ったか？」

「うん。胸の朱い球体が弱点らしいよ。やっぱりｗｉｋｉは偉大だね」

「は？」

まあ、いいや。さて、次の問題はこいつらだ。

「で、さっきは悪かったな。怪我はないか？」

「あ、ああ…大丈夫だ」

「私も…。あの、あなたたちは…？」

あ、まだ自己紹介してなかったな。

「俺は真川紅刃」

「私は波星月沙。よろしくね」

「私は神谷喬。よろしく」

「俺は立花京哉だ。それにしても、人間みたいなフルネームを持つ精霊も珍しいな」

「…そうか。俺ってもう精霊扱いされるところまで来てるのか…」

「え？」

「私達…れっきとした人間なんだけど…」

「人間！？いや、でもエネルギー弾撃ったり電撃出したりしてただろ？」

「あれはアビリティって言って、精霊の力を自分のものとして使う特殊能力だよ」

「特殊能力!?」

「そんな話は聞いた事ないけど…」

「いや、普通は知らなくて当然だけどね。それより、京哉君はちゃんと責任は取ってよね。私も手伝うから」

「え?」

「わかってるよ?わかってるさ、俺が人間から段々離れてきてる事ぐらい。でもさ、捉えようによっちゃ中2病に認定されるレベルの特殊能力だぞ?あれか?俺はデュエリストよりも死神とかエクソシストとか忍とかが向いてるのか?〇解しろってか?神ノ〇化を使えってか?千〇を覚えろってか?あ、そうだ、〇護に瞬〇でも習おうかな?ロディスのアビリティで身体強化できるんだし、やり方さえ覚えればできるんじゃないか?こうなったらとことん普通の人間から外れるのも悪くないかもな。よし、つーわけでちょっと〇魂界行ってくるわ」

「いや、待てえええぇぇえええ!!!」

京哉は物凄い形相で俺を引き止めた。何だよ、俺の事なんかほっといてくれよ…。

「いろいろツッコみたい所があるけどまず待て!なんだよその凄まじいまでの現実逃避は!?それとごめん!本当に悪かった!」

「安心しろ、俺は気にしてねえから。あ、ついでに剣術の稽古をつけてもらうか」

「全力で気にしてんじゃねえか！？」

「紅刃、落ち着いて！〇護に会うなら〇座町だよ！」

「そういう問題じゃねえ！話をややこしくするな！」

「あ、そうだったな。そうだ、瞬〇なら夜〇さんがいたな。多分教えてくれるだろ」

「無理だから！それ以前の問題だから！月沙も逆に足を引っ張るな！」

「ご、ごめん…。紅刃、とにかく諦めて！私だってトレ〇ンに弟子入りしたくても無理だと決め込んでるんだから！あ、グ〇イもいいかも？氷の魔法使ってるし」

「お前も同類かぁあああぁあああ！！！」

「…私達、完全に空気になってませんか？」

「そこはツッコんだら負けだよ」

「…悪い、どうかしてた」

「いや、いいんだ。俺が悪かったから気にするな」

俺がなんとか立ち直るのには結構な時間がかかったらしい。

「ところで、お前らの精霊って…」

「見た感じだと、サイレント・マジシャンと《ブリザード・プリンセス》と《氷帝メビウス》と…誰？」

「なぜ私だけ知らない！？」

「だって本当に知らないし…」

俺も知らないや。アカデミアの教科書にも載ってないな。

「俺から紹介する。サイレント・マジシャンのアオイ、《ブリザード・プリンセス》のアリス、フェルリル・エントリオのフェル。みんな俺の精霊だ」

「私の精霊はメビウスです…」

「そうか、よろしくな」

「そっちの精霊は…誰だかさっぱりわからないんだが…」

「この姿だ、わからなくても無理はないだろう」

「右から《裁きを下す者－ボルテニス》のリーシェ、《冥王竜ヴァンダルギオン》のロディスだ」

「ボルテニスとヴァンダルギオン！？姿が全然違うぞ！？」

そうだよな。俺も初めて見た時はびっくりしたよ。

「いわゆる擬人化という奴だ」

「私のパートナーは、《氷結界の舞姫》のスイレンだよ」

「よろしくお願いします！」

「《氷結界の舞姫》？知らないカードだ…」

「ち、ちょっとわけありでね（未来と異世界のカードだなんて言えない…）」

「そうだ、さっきから気になってたんだけど…」

「ん？」

「お前らの服装ってデュエルアカデミアの制服に似てるよな？」

「いや、一応制服だけど」

「え？」

「でも、あなたたちみたいな服装の人はアカデミアにいないはず…」

「「え？」」

京哉と喬の服装はそれぞれレッドとブルーの制服だ。でも、こいつらは知らない顔だ。

「それはおかしい。この服装で毎日うろついている上に変わったデュエルディスクを持ち歩いていれば、嫌でも記憶に残るはずだが…」

「でも、私達はあなたたちの事を知らないですよ？」

「まだ不可解な点がある。これだけ多くの精霊がいるのに、我らが1度も遭遇しないはずがない」

「では、一体どうなっているのだ…？」

ボオォオオン！

メビウスが呟いた直後、突然白い煙が吹き出した。あれ？て事は…。

「何だ！？」

「やあやあ、みんなご機嫌よう！」

「よし、さっさと事情を説明しろ」

「早っ！？もっとこう、何かあるでしょ！」

現れたのは自称神様（笑）だった。

「自称でも（笑）でもないから！いつまで引っ張るのそのネタ！？」

「人の心を読むな」

「あの…この子は…」

「ああ、こいつはフォッタ。自称神様（笑）だ」

「だから違うって！せめて神様見習いって言ってよ！」

「（見習いだったんですか？）」

「（あだ名がグレードアップしてる…）」

「まあ、いい。この状況を説明しろ」

「わかってるって。そのために来たんだから…」

ロディスに先を促され、フォッタはコホンと１つ咳ばらいした。

「まず、ここは紅刃達の世界の精霊界なんだ」

「俺達の世界って…どういう意味だ？」

「平行世界って知ってるかな？」

「ああ。パターンの違う世界がいくつもあるって奴だろ？」

「そ。で、京哉達は違う世界からここに呼び出されたってわけ」

「違う世界？」

「なるほどな。それなら私達が初対面なのも頷けるな」

「じゃあ、なんで私達がここに呼び出されたの？」

「それはだね…」

フォッタは1度言葉を切る。この場にいるみんなが肝心な答えを待っていた。

「暇を持て余した神々の遊う〝いっ！？」

話を最後まで聞かずに、俺は脳天に拳骨を1発お見舞いした。

「要するにお前らの勝手な都合じゃねえか！つーかお前ら忙しいんじゃなかったのかよ！？」

「違う世界の人達にまで迷惑かけないでよ！本当にごめんなさい！この馬鹿がこんな事態引き起こしちゃって！ほら、あんたも頭下げる！」

「うわっ！？」

フォッタの頭を無理矢理下げさせて、自分も頭を下げる月沙。何ていうか、フォッタが小学生並の体型だからか親子に見える。

「そう謝るなって。俺達は気にしてないからさ」

「なんか、あなたたち家族みたい…」

「は？」

「ふぇっ！？そ、そそそんな事ないよ！私達、べ、別にそんな関係じゃないから！」

月沙はなぜか顔を真っ赤にして、全力で否定し出した。何もそこまで必死にならなくても…。

「（姫様、いい加減耐性つけないと持ちませんよ？）」

「（月沙ってもしかして…）」

「（か、家族！？フォッタはともかく、紅刃と家族！？確かにそうなったら嬉しいけど、いやそうじゃなくて！だあああ！とにかく今のは忘れろ！そして落ち着け私！）」

顔を真っ赤にして頭を抱えている。そこまで俺との家族関係が嫌か？それはそれで悲し…何考えてんだ俺？

「（あの…リーシェ？だっけ）」

「（何だ？）」

「（紅刃って、もしかして鈍感？）」

「（ああ、見ての通りだ。早く気づいてもよさそうなものだが…）」

「（…仲間だ）」

「（？）」

リーシェと喬が小声で何か話してるみたいだけど、よく聞き取れない。

「月沙は私に任せて。他のみんなはゆっくりしてていいから」

「？わかった」

なんか知らないけど喬が月沙を宥めるみたいだ。ま、そっちは任せておくか。

「…まだ話終わってないけどもういいや…」

ＳＩＤＥ／月沙

「で、結局気持ちは通じないままで…」

「そこまでしたのに…」

私は今、喬ちゃんと恋愛の話をしている。私は紅刃が好きで、喬

ちゃんは京哉君が好き。で、その2人が鈍感なわけだから、妙な仲間意識がある。おかげで話が弾むし、何より仲良くなれた気がする。

「喬ちゃんはよくキスなんてできるよね。私だったら絶対無理…」

「でも、私以外の人もやってるのに、京哉は全く気づかないし…」

「もう病気レベルじゃないの？鈍感の域越えてない？」

聞いた限りだと、京哉君を好きな人はたくさんいるらしい。喬ちゃんはもちろん、精霊にまで惚れられるなんて、凄い環境で育ってるんだな…。京哉君の苦悩も考えたら、喬ちゃんには悪いけどこのまま鈍感でいた方がいいかもしれない。

「こんな変形の仕方もあるんだな」

「お前はいつも腰に提げてるのか？」

紅刃と京哉君はデュエルディスクが同じ剣のタイプだからか、気が合うみたい。精霊のみんなも仲良くしてるみたいだし、今回の件はあってよかったと思う。

「あ～…月沙も復活したみたいだし、そろそろ話を再開してもいい？」

あ、そうだった。いつまでもここにいるわけにはいかないもんね。

「あ、ごめん…」

「いいって。元はと言えば、上が勝手にやった事だからね。僕はあ

くまで連絡係だし」

「で、どうするんだ？帰る方法はあるんだろ？」

「上の人達は異世界人どうしでデュエルをしたらどうなるかに興味があるらしくてね。言い方は悪いけど、実験ってところかな」

「要するに俺達の誰かがデュエルしろって事？」

「京哉、話がわかるね。その通り！今回は君と紅刃にやってもらうよ」

「俺？いや、ちょっと待て。『今回は』って事はまたやる予定があるのか？」

「さあね。そこは気まぐれで変わるよ」

とりあえず、紅刃と京哉君がデュエルすれば全部解決って事か。

「じゃあ、私達は観戦してるね」

「京哉、頑張って」

「おう！」

紅刃と京哉君はディスクを展開させて、精霊はデッキに戻った。
そしてお互いのデッキが自動でシャッフルされ…あれ？

「京哉君のデュエルディスクって、自動シャッフル機能付いてるんだ？」

「うん。私達の世界では最先端の技術なの。…紅刃のデュエルディスクも同じ機能付いてるんだね」

「私のも同じ。こっちでは普通に出回ってる機能だよ」

「そうなんだ…」

「準備はいいよな？」

「ああ、全力で行くぜ！」

あ、始まるみたい。

「「デュエル！」」

紅刃ｖｓ京哉

「先攻は貰う！俺のターン！《豊穣のアルテミス》を召喚！」

紅刃のデュエルでは毎回必ず出て来る、紫のマントを身につけた天使が召喚された。

《豊穣のアルテミス》　ＡＴＫ／１６００

「【パーミッション】か！？」

「カードを3枚セットし、ターンエンド！」

紅刃

ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×３

「厄介なデッキだな…。俺のターン、ドロー！《王立魔法図書館》を守備表示で召喚！」

《王立魔法図書館》
効果モンスター
星４／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ２０００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分または相手が魔法カードを発動する度に、このカードに魔力カウンターを１つ置く（最大３つまで）。
このカードに乗っている魔力カウンターを３つ取り除く事で、自分のデッキからカードを１枚ドローする。

《王立魔法図書館》　ＤＥＦ／２０００

「さらにフィールド魔法《魔法都市エンディミオン》を発動！」

周りが魔法使い族が暮らす大都市に変わる。精霊のアオイ達を見て何となく予想してたけど、京哉君のデッキは【魔法使い族】、それも【魔力カウンター】…！

《魔法都市エンディミオン》
フィールド魔法
自分または相手が魔法カードを発動する度に、このカードに魔力カウンターを１つ置く。
魔力カウンターが乗っているカードが破壊された場合、破壊された

カードに乗っていた魔力カウンターと同じ数の魔力カウンターをこのカードに置く。
1ターンに1度、自分フィールド上に存在する魔力カウンターを取り除いて自分のカードの効果を発動する場合、代わりにこのカードに乗っている魔力カウンターを取り除く事ができる。
このカードが破壊される場合、代わりにこのカードに乗っている魔力カウンターを1つ取り除く事ができる。

「《王立魔法図書館》は、お互いの魔法カードが発動する度に自分に魔力カウンターを乗せる効果を持つ。《魔法都市エンディミオン》が発動した事で、魔力カウンターを1つ乗せる！」

《王立魔法図書館》　M／0→1

「魔法カード《トゥーンのもくじ》を発動！デッキからトゥーンと名のついたカードを1枚手札に加える！」

《トゥーンのもくじ》
通常魔法
「トゥーン」という名のついたカードをデッキから1枚手札に加える。

「トゥーン？どこかで聞いた事があるような…」

遊戯王の世界では、トューンのカードはペガサスさんしか持ってないはず。まさか、京哉君は私と同じトリッパー？いや、京哉君の世界とこっちの世界とじゃ、カードの事情が違うのかも。

「俺は2枚目の《トゥーンのもくじ》を手札に加える！」

「同じカードを手札に？」

「《魔法都市エンディミオン》も、お互いの魔法カードが発動する度に自分に魔力カウンターを乗せるカードだ。《トゥーンのもくじ》が発動した事で、図書館と魔法都市に魔力カウンターをそれぞれ1つずつ乗せる！」

《王立魔法図書館》　M／1→2

《魔法都市エンディミオン》　M／0→1

「そして手札に加えた《トゥーンのもくじ》を発動！3枚目の《トゥーンのもくじ》を手札に！さらに図書館と魔法都市に魔力カウンターを1つ乗せる！」

《王立魔法図書館》　M／2→3

《魔法都市エンディミオン》　M／1→2

「まさか、魔力カウンターを溜めるためのカードか？」

「その通り！そして、これで3つ溜まった！《王立魔法図書館》の効果発動！魔力カウンターを3つ取り除き、カードを1枚ドローする！」

《王立魔法図書館》　M／3→0

「そして、3枚目の《トゥーンのもくじ》を発動！デッキから《トゥーン・仮面魔道士》を手札に加える！」

あれ?そっち?てっきり《トゥーン・ヂェミナイ・エルフ》だと思ってたんだけど…。

《トゥーン・仮面魔道士》
トゥーンモンスター
星４／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ　９００／ＤＥＦ１４００
召喚・反転召喚・特殊召喚したターンには攻撃できない。
フィールド上の「トゥーン・ワールド」が破壊された時このカードも破壊する。
自分のフィールド上に「トゥーン・ワールド」があり相手がトゥーンをコントロールしていない場合、このカードは相手プレイヤーを直接攻撃できる。
このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、自分のデッキからカードを１枚ドローする。

「図書館と魔法都市にはさらに魔力カウンターが溜まる！」

《王立魔法図書館》　Ｍ／０→１

《魔法都市エンディミオン》　Ｍ／２→３

「魔法カード《精神統一》！デッキから同名カード１枚を手札に加える！」

「まだあるのかよ！？」

《精神統一》
通常魔法
デッキから「精神統一」を１枚手札に加える。
このカードは１ターンに１度しか使用できない。

《王立魔法図書館》　M／1→2

《魔法都市エンディミオン》　M／3→4

「まだだ！魔法カード《天使の施し》！カードを3枚ドローし、手札を2枚捨てる！」

《王立魔法図書館》　M／2→3

《魔法都市エンディミオン》　M／4→5

「図書館の効果発動！魔力カウンターを3つ取り除き、カードを1枚ドローする！」

回りすぎでしょ…。あれ？これってまさか…。

「喬ちゃん、京哉君のデッキって【図書館エグゾ】？」

「何それ…？」

「あ、いや、知らないならいいの。何でもないから」

「…？」

よかった、【魔力カウンター】で正解だった。もしエグゾディアのデッキだったらかなりやばかった。

「そろそろ行くか！墓地の闇属性モンスター《混沌の魔法騎士》を除外して、手札の《混沌術士フェリエル・エントリオ》を特殊召喚

！」

『ここは私が行こう！』

《ブラック・マジシャン》が帽子を取ったような感じの魔法使い。京哉の精霊の１人、フェルが呼び出された。

《混沌術士フェリエル・エントリオ》
効果モンスター（オリジナル）
星８／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ１８００
このカードは墓地にある魔法使い族または闇属性モンスターを１体除外して特殊召喚する事ができる。
この効果によって特殊召喚した場合、このカードの攻撃力と守備力は除外したモンスターの攻撃力と守備力分アップする。
１ターンに１度次の効果を使用する事ができる。
●　自分の墓地の魔法使い族モンスターを除外する事で相手のフィールド上の魔法、罠カードを１枚破壊する。
●自分の墓地の闇属性モンスターを除外する事で相手フィールド上のモンスターを１体破壊する。

《混沌術士フェリエル・エントリオ》　ＡＴＫ／１８００

「行くぞ、フェル！フェリエル・エントリオは特殊召喚時に除外したモンスターの攻撃力と守備力を吸収する効果を持っている！《混沌の魔法騎士》の攻撃力と守備力は１５００と２０００だ。その分の数値を加える！カオス・ノヴァ！」

『力を分けてもらうぞ！』

除外されたモンスターがフェルに魔力を分け与える。…あれ？

《混沌術士フェリエル・エントリオ》　ＡＴＫ／１８００→３３００

「さらに、《混沌の魔法騎士》は手札か墓地から除外された時、自分フィールド上に特殊召喚できる！」

《混沌の魔法騎士》
効果モンスター（オリジナル）
星７／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ１５００／ＤＥＦ２０００
このカードは通常召喚出来ない。
手札または墓地にあるこのカードが除外された時、このカードを特殊召喚する事ができる。
この方法で特殊召喚に成功した場合、このカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。
このカードが相手モンスターを戦闘で破壊し墓地に送った時、相手の魔法、罠ゾーンに存在するカードを１枚破壊する。

《混沌の魔法騎士》　ＡＴＫ／１５００

「この方法で特殊召喚された《混沌の魔法騎士》は攻撃力が１０００ポイントアップする！」

《混沌の魔法騎士》　ＡＴＫ／１５００→２５００

もしかして…京哉君って予想以上に強い！？

「行ける…行けるよ、京哉」

「さすがだな」

「どんな効果を持っているかはわかりませんが、これは少しまずいですね…」

紅刃はこのままやられるようなデュエリストじゃない。あの伏せカードに何か対抗策があるはずだ。

どうするの、紅刃…？

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

特別編　沈黙からの来訪者（前編）（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「ここまで読んでくれた人達、ありがとう。おまけコーナーの時間よ」

勇香「今回は特別編だ！ゲストって事で、サイレント・ソードマンのカイト、ミスティック・ソードマンのアキト、≪戦姫－イザナミ≫のイザナミに来てもらったぜ！」

フィレス『ガルルッ』

イザナミ『…なんで私達が本編に出れないんですの？』

アキト『仕方ないだろ、旦那がデッキを机に置きっぱなしにしてたんだから』

勇香「ええと、その時の状況を詳しく…」

カイト『主が自室でデッキ調整をしていたら喬殿が訪問してきて、デッキの回りを確認するためにデュエルしようとしたら、光の球が現れたんです』

勇香「後は紅刃達と同じか」

璃音「まあ、単純に人数が多すぎて書き分けが難しいって作者が言ってたから、それが1番の原因でしょうね。どちらも精霊が大勢登

場するし」

イザナミ『くぅ…残念ですわ…』

カイト『ところで、なぜ《龍骨鬼》が…』

璃音「こっちの作者がカミューラ戦で詳細を載せ忘れたから、その腹いせでしょうね」

勇香「無理矢理出番をつくるとはな…。結局やられ役だけど」

アキト『とりあえず、カード考察とやらに入ろうぜ！』

璃音「そうね。今回紹介するのは、京哉の精霊の1人、フェルこと《混沌術士フェリエル・エントリオ》よ」

勇香「オリカは紹介しないんじゃなかったのかよ？」

璃音「こっちの作者が考えたわけじゃないからセーフよ」

《混沌術士フェリエル・エントリオ》
効果モンスター（オリジナル）
星８／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ１８００
このカードは墓地にある魔法使い族または闇属性モンスターを1体除外して特殊召喚する事ができる。
この効果によって特殊召喚した場合、このカードの攻撃力と守備力は除外したモンスターの攻撃力と守備力分アップする。
1ターンに1度次の効果を使用する事ができる。
● 自分の墓地の魔法使い族モンスターを除外する事で相手のフィールド上の魔法、罠カードを1枚破壊する。

●自分の墓地の闇属性モンスターを除外する事で相手フィールド上のモンスターを1体破壊する。

璃音「墓地の闇属性か魔法使い族を1体除外すれば特殊召喚できるわ。2体の除外が必要な《カオス・ソーサラー》よりも緩いコストで出せるのが強みね」

勇香「除外したモンスターの攻守を受け継ぐから、どいつを除外しても無駄にならないな」

アキト『旦那は普段、除外されたら特殊召喚できる《混沌の魔法騎士》と一緒に使ってるな』

カイト『さらに墓地の特定のモンスターを除外する事で、相手のカードを1枚破壊できます。攻撃力が高いだけじゃありませんよ？』

イザナミ『除外したモンスターをも有効に扱えれば完璧ですわ。《闇次元の解放》などで特殊召喚したり、《異次元からの帰還》で大量展開に繋げるのも面白いですわね』

勇香「ただ、《スキルドレイン》とかで効果を無効にされたら攻撃力が元に戻っちまう。《ディメンジョン・マジック》とかで上手くかわせばどうにかなるけどな」

アキト『一応、効果以外での召喚もできる。あまり機会はないだろうが…』

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「カイト、アキト、イザナミ、来てくれてありがとな！」

カイト『また機会があったらよろしくお願いしますね』

イザナミ『次こそは本編に顔を出したいものですわね』

アキト『ま、ゆっくり旦那達の帰りを待つとするか』

璃音「次回は別のゲストが来るから、楽しみにしててちょうだいね」

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

今回は特別編という事で、初めて他作品とのクロスオーバーを書かせていただきました。京哉達が偽物になっていなければ幸いです。

《龍骨鬼》は完全にネタです。カミューラ戦を読み返していると《龍骨鬼》の詳細を載せ忘れている事に気づき、どうせならという事で登場させました。『森にアンデッドなんているの？』なんていう質問は受け付けませんし、後悔もしてません。

長くなるので、デュエルの続きは次回へ持ち越しです。大至急進めますので、楽しみにしててください。

では、また次回！

特別編　沈黙からの来訪者（中編）（前書き）

予想以上に長くなってしまったので急遽3部構成にしました。クロスオーバー中編です。

それではどうぞ！

特別編　沈黙からの来訪者（中編）

ＳＩＤＥ／紅刃

京哉
ＬＰ／４０００
手札／５
モンスター／《王立魔法図書館》（ＤＥＦ／２０００・Ｍ／０）《混沌術士フェリエル・エントリオ》（ＡＴＫ／３３００）《混沌の魔法騎士》（ＡＴＫ／２５００）
魔法・罠／《魔法都市エンディミオン》（Ｍ／５）

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×３

まずいな。正直、予想外だ。京哉がここまでやる奴だとはな…。

「厄介なそいつには退場してもらう！フェリエル・エントリオの効果発動！墓地の闇属性モンスター《トゥーン・仮面魔道士》を除外する事で、相手モンスター１体を破壊する！カオス・パイル！」

フェルが杖に紫の魔力を集中させる。アルテミスを片付けて一気に終わらせるつもりだろうが…。

「俺のデッキは【パーミッション】だ！簡単に突破されてたまるか

よ！カウンター罠《天罰》を発動！手札を１枚捨てて、モンスター効果を無効にしてそのモンスターを破壊する！」

「何！？」

『馬鹿な…ぐおぉっ！？』

「フェル！」

フェルは雷に打たれて消えてしまった。あいつを長くフィールドに残すのは危険だ。

「アルテミスの効果！カウンター罠が発動した時、カードを１枚ドローする！」

「くっ…！なら、《混沌の魔法騎士》でアルテミスに攻撃だ！」

「カウンター罠《攻撃の無力化》！バトルフェイズを終了させる！」

魔法騎士の攻撃を透明な障壁が受け止める。

「またカウンター罠…！」

「アルテミスの効果で１枚ドロー！」

「…カードを２枚伏せてターンエンドだ！」

京哉
ＬＰ／４０００
手札／３

モンスター／《王立魔法図書館》（ＤＥＦ／２０００・Ｍ／０）《混沌の魔法騎士》（ＡＴＫ／２５００）
魔法・罠／《魔法都市エンディミオン》（Ｍ／５）リバース×２

「俺のターン！」

よし、ここで攻めるか！

「魔法カード《強欲な壺》を発動！カードを２枚ドローする！」

「魔法カードが発動した事で、図書館と魔法都市に魔力カウンターを１つずつ乗せる！」

《王立魔法図書館》　Ｍ／０→１

《魔法都市エンディミオン》　Ｍ／５→６

「６つ溜まった…！」

「永続魔法（コート・オブ・ジャスティス）を発動！俺の場にレベル１の天使族モンスターがいる時、１ターンに１度手札から天使族モンスター１体を特殊召喚できる！」

「いいのか？さらに魔力カウンターが溜まるぞ？」

《王立魔法図書館》　Ｍ／１→２

《魔法都市エンディミオン》　Ｍ／６→７

「そんな事を気にして出し惜しみなんかしてられねえよ！…あ」

俺は手札のモンスターを抜き取ろうとして、ある事に気づいて止まった。

「？」

「どうした？」

「あ、いや…」

「大丈夫だよ、シンクロ召喚くらい使っても。異世界人に自分が未来人だなんてばれても大して問題ないって」

「な、馬鹿…！」

フォッタが一応隠しておいた事実を暴露してしまった。何言ってんだあいつ…！

「シンクロ召喚？」

「未来人って…何の事？」

「あ～、もう仕方ないな…。そうだよ、私達はわけありで過去の時代に来た未来人だよ」

月沙が観念したように説明し出した。

「「未来人！？」」

「これは意外な…」

「で、紅刃は今未来の新しい召喚方法を使おうとしている…違う？」

「ハァ…その通りだよ。なら、今度こそ本当に出し惜しみはなしだ！チューナーモンスター《ハネワタ》を召喚！」

羽を生やしたオレンジの丸い天使が現れる。

《ハネワタ》　ＡＴＫ／　２００

「チューナーモンスター？」

「こいつはレベル１の天使族モンスターだ！よって、《コート・オブ・ジャスティス》の効果を使用できる！手札の《天空勇士ネオパーシアス》を特殊召喚！」

空中に浮かぶ黄金の輪の中から、結晶化した天空騎士が舞い降りた。

《天空勇士ネオパーシアス》　ＡＴＫ／２３００

「行くぜ！これが俺達のデュエルだ！レベル７《天空勇士ネオパーシアス》にレベル１《ハネワタ》をチューニング！」

《ハネワタ》が１つの黄色の輪になり、そこに天空勇士が飛び込み７つの星になる。

「舞い散る白羽が、天空を翔け現世を照らす！希望の光を振り翳せ！」

☆７＋☆１＝☆８

「シンクロ召喚！飛来せよ！《ライトエンド・ドラゴン》！！」

天使の両翼を広げ、白い龍が舞い上がった。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「すっげえ！何だ今の！？」

「チューナーとそれ以外のモンスターを墓地に送って、そのモンスターの合計レベルと同じレベルを持つシンクロモンスターをエクストラデッキから特殊召喚する。これがシンクロ召喚だ」

「レベルを利用した特殊召喚…！」

「あの…エクストラデッキって？」

「この時代で言う融合デッキの事だよ。上限が１５枚に設定されちゃってるけど」

「これが未来のモンスターか…！効果も凄いんだろうな！」

なんか、十代みたいな奴だな。ワクワクするのはわかるけどさ。

フェルと魔法騎士を見た時内心同じ感情だったし。

「効果はまだ使わないけどな。バトル！ライトエンドで《混沌の魔法騎士》に攻撃！シャイニングサプリメイション！」

聖龍の口から放たれた光の波動が魔法騎士に迫る。

「リバースカードオープン、《和睦の使者》！自分のモンスターの

戦闘破壊と戦闘ダメージを無効にする！」

　透明な障壁が再び攻撃を防ぐ。他にも厄介な効果を持ってそうだから早めに倒しておきたかったんだけど、仕方ないか。

「カードを1枚セットし、ターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１６００）《ライトエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／《コート・オブ・ジャスティス》リバース×２

「俺のターン！…よし！《サイレント・マジシャン　ＬＶ４》を召喚！」

　白い衣装に身を包んだ小さな魔法使いが飛び出した。レベルモンスターか…。

《サイレント・マジシャン　ＬＶ４》
効果モンスター
星４／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ１０００
相手がカードをドローする度に、このカードに魔力カウンターを１つ置く（最大５つまで）。
このカードに乗っている魔力カウンター１つにつき、このカードの攻撃力は５００ポイントアップする。
このカードに乗っている魔力カウンターが５つになった次の自分のターンのスタンバイフェイズ時、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送る事で、自分の手札またはデッキから「サ

イレント・マジシャン　ＬＶ８」１体を特殊召喚する。

《サイレント・マジシャン　ＬＶ４》　ＡＴＫ／１０００

「さらに魔法カード《レベルアップ！》！サイレント・マジシャンをＬＶ８に進化させる！」

「いきなりかよ！？」

小さな魔法使いが強い光を放ち、大人の姿になった。

《レベルアップ！》
通常魔法
フィールド上に表側表示で存在する「ＬＶ」を持つモンスター１体を墓地へ送り発動する。
そのカードに記されているモンスターを、召喚条件を無視して手札またはデッキから特殊召喚する。

《サイレント・マジシャン　ＬＶ８》
効果モンスター
星８／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ３５００／ＤＥＦ１０００
このカードは通常召喚できない。
「サイレント・マジシャン　ＬＶ４」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。
このカードは相手の魔法カードの効果を受けない。

《サイレント・マジシャン　ＬＶ８》　ＡＴＫ／３５００

「攻撃力３５００…！」

でかいな。でも、乗り越えられない壁じゃない…！

『あれが未来のモンスター…。…なんか、京哉様の気持ちがよくわかります』

「アオイ…。ああ！未来のデュエルに俺達がどこまで通用するか、やってみようぜ！」

『はい！』

「魔法カードが発動した事で、図書館と魔法都市に魔力カウンターが１つずつ乗る！」

《王立魔法図書館》　Ｍ／２→３

《魔法都市エンディミオン》　Ｍ／７→８

「図書館の効果発動！魔力カウンターを３つ取り除き、カードを１枚ドローする！」

《王立魔法図書館》　Ｍ／３→０

「そして《精神統一》を発動！デッキから３枚目の《精神統一》を手札に加える！図書館と魔法都市にはさらに魔力カウンターが溜まる！」

《王立魔法図書館》　Ｍ／０→１

《魔法都市エンディミオン》　Ｍ／８→９

「もう1度図書館の効果発動！」

「おい、ちょっと待て！魔力カウンターが溜まってねえぞ！？」

「いや、俺には魔法都市がある！1ターンに1度、取り除く魔力カウンターを肩代わりできる！」

「な、肩代わり！？」

今溜まっている魔力カウンターは9つ。足りない分を補うには充分だ。

「魔法都市から魔力カウンターを3つ取り除き、カードを1枚ドロー！」

《魔法都市エンディミオン》　M／9→6

「そして、手札の《神聖魔導王　エンディミオン》の効果発動！《魔法都市エンディミオン》の魔力カウンターを6つ取り除く事で、手札か墓地から特殊召喚する！」

な…フィールド魔法と直接リンクしているモンスターまでいるのかよ！？月沙が呟いてた『6つ』ってこの事か！

《神聖魔導王　エンディミオン》
効果モンスター
星7／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ２７００／ＤＥＦ１７００
このカードは自分フィールド上に存在する「魔法都市エンディミオン」に乗っている魔力カウンターを6つ取り除き、自分の手札または墓地から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する魔法カード1枚を手札に加える。
1ターンに1度、手札から魔法カード1枚を捨てる事で、フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

《神聖魔導王　エンディミオン》　ＡＴＫ／２７００

「エンディミオンがこの方法で特殊召喚に成功した時、墓地から魔法カードを1枚手札に加える！俺は《天使の施し》を回収する！」

魔法カードの再利用…。また厄介な奴が出て来たな。

「エンディミオンにはまだ効果がある！手札の魔法カードを1枚捨てて、フィールド上のカードを1枚破壊する！」

「何！？」

破壊効果まであるのかよ！？

「手札の《精神統一》を捨てて、《ライトエンド・ドラゴン》を1枚破壊する！」

「っ、させるか！カウンター罠（デストラクション・ジャマー）！手札を1枚捨てて、フィールド上のカードを破壊する効果を無効にし、そのカードを破壊する！」

魔法都市の主が魔力を解き放つも、弾き返されて自滅してしまった。

「アルテミスの効果で1枚ドロー！」

「くそ！なら戦闘で倒すだけだ！サイレント・マジシャンで《ライトエンド・ドラゴン》に攻撃！サイレント・バーニング！！」

『勝負です！』

アオイが杖に膨大な魔力を溜めて攻撃体勢に入る。やっぱり効果を知ってるのと知らないのとじゃ、行動が違うな。

「…選択を間違えたな」

「？」

「ライトエンドは戦闘で真価を発揮するモンスターだ！こいつが戦闘を行う時、自分の攻撃力と守備力を５００ポイント下げる事で、相手の戦闘モンスターの攻撃力と守備力をエンドフェイズまで１５００ポイントダウンさせる！」

「何！？」

「行くぞ、ライトエンド！ライト・イクスパンション！」

『うぅっ！？』

腹の宝玉から強烈な光が溢れ、アオイの魔力を封じ込めていく。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００→２１００

《サイレント・マジシャン　ＬＶ８》　ＡＴＫ／３５００→２０００

「迎え撃て！シャイニング・サプリメイション！」

ライトエンドは光のブレスで迎撃し、アオイはなす術なく敗れた。

『ぐっ…すみません、京哉様…！』

「アオイ！」

京哉　ＬＰ／４０００→３９００

「まさか、攻撃力を下げる効果を持ってるなんてな…」

「どうする？ライトエンドはまだ戦えるぞ？」

『ギャオォォォォオオオ！！』

ライトエンドは自分が元気だという事を主張するかのように咆哮した。

「まだだ！《混沌の魔法騎士》でアルテミスに攻撃！」

「ダメージは受けるか…。墓地の《エンジェル・ガードナー》の効果発動！俺の場のモンスターがフィールドから離れる時、代わりにこいつと他の天使族モンスターを墓地から除外できる！こいつと《ハネワタ》を除外する！」

甲冑を着た小さな天使が攻撃を止めてくれたけど、戦闘ダメージまでは防いでくれなかった。

「くっ…！」

紅刃　ＬＰ／４０００→３１００

「（くそ、魔法騎士の効果は戦闘破壊しないと発動できない…！）速攻魔法（ディメンション・マジック）！」

やば！？それは…！

「自分フィールド上に魔法使い族モンスターがいる時、自分のモンスターを生け贄にして手札から魔法使い族モンスターを特殊召喚する！」

《ディメンション・マジック》
速攻魔法
自分フィールド上に魔法使い族モンスターが表側表示で存在する場合に発動する事ができる。
自分フィールド上に存在するモンスター１体をリリースし、手札から魔法使い族モンスター１体を特殊召喚する。
その後、フィールド上に存在するモンスター１体を破壊する事ができる。

「《混沌の魔法騎士》を生け贄に、《ブリザード・プリンセス》を特殊召喚！」

『さあて、ここは私の出番だよ！』

魔法騎士が退場し、代わりに鎖付きのでかい氷のハンマーを持った青い姫が現れた。…あの武器、物騒だな…。

《ブリザード・プリンセス》
効果モンスター

星８／水属性／魔法使い族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２１００
このカードは魔法使い族モンスター１体をリリースして表側攻撃表示でアドバンス召喚する事ができる。
このカードが召喚に成功したターン、相手は魔法・罠カードを発動する事ができない。

《ブリザード・プリンセス》　ＡＴＫ／２８００

「そして、《ディメンション・マジック》のもう１つの効果！フィールド上のモンスターを１体破壊する！ライトエンドを破壊する！アリス！」

『ＯＫ！とっとと消えなさい！』

アリスの武器から青い光線が放たれ、ライトエンドはあっという間に破壊されてしまった。

「くそ、ライトエンド…」

《王立魔法図書館》　Ｍ／１→２

《魔法都市エンディミオン》　Ｍ／０→１

「《ブリザード・プリンセス》でアルテミスに攻撃！アイスクラッシュ・ハンマー！」

『だぁあぁぁあああ！！』

ハンマーがクリーンヒットし、アルテミスはあっさり粉砕された。

「ぐっ…！まずいな…」

紅刃　ＬＰ／３１００→１９００

「《天使の施し》を発動。カードを３枚ドローし、手札を２枚捨てる」

《王立魔法図書館》　Ｍ／２→３

《魔法都市エンディミオン》　Ｍ／１→２

「図書館の効果発動！魔力カウンターを３つ取り除き、カードを１枚ドローする！」

《王立魔法図書館》　Ｍ／３→０

どんだけドローするんだよ…。いい加減呆れてきた。

「魔法カード《魔力掌握》！魔力カウンターを乗せる事ができるカードに魔力カウンターを１つ乗せる！」

魔力カウンターを直接溜めるカード…？

《魔力掌握（まりょくしょうあく）》

通常魔法

フィールド上に表側表示で存在する魔力カウンターを置く事ができるカード１枚に魔力カウンターを１つ置く。

その後、自分のデッキから「魔力掌握」１枚を手札に加える事ができる。

「魔力掌握」は１ターンに１枚しか発動できない。

「俺は魔法都市に魔力カウンターを１つ乗せる」

《魔法都市エンディミオン》　Ｍ／２→３

「さらに、デッキから《魔力掌握》を１枚手札に加える」

「サーチ効果…！連続で使うつもりか？」

「安心しろ、《魔力掌握》は１ターンに１度しか発動できない」

《王立魔法図書館》　Ｍ／０→１

《魔法都市エンディミオン》　Ｍ／３→４

「カードを１枚セットし、ターンエンドだ！」

京哉
ＬＰ／３９００
手札／１
モンスター／《王立魔法図書館》（ＤＥＦ／２０００・Ｍ／１）《ブリザード・プリンセス》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／《魔法都市エンディミオン》（Ｍ／４）リバース×２

「俺のターン！魔法カード《天よりの宝札》！互いに手札が６枚になるようにカードをドローする！」

「ここで手札増強…」

「いくらライトエンドがいるとはいえ、状況は紅刃が不利。賭けに

出たみたいね…！」

エンディミオンは墓地からの特殊召喚もできるって言ってたな。
魔法都市に魔力カウンターが６つ揃うのは…仕方ないか。

《王立魔法図書館》　Ｍ／１→２

《魔法都市エンディミオン》　Ｍ／４→５

「魔法カード《死者蘇生》！墓地の《裁きを下す者－ボルテニス》を特殊召喚する！」

『私もそろそろ暴れさせてもらう！』

奇怪な天使の姿になったリーシェが墓地から蘇った。

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００

《王立魔法図書館》　Ｍ／２→３

《魔法都市エンディミオン》　Ｍ／５→６

「そしてチューナーモンスター《ブレード・トラディショナー》を召喚！」

深緑のマントを羽織った剣士。俺のデッキに必要不可欠なチューナーだ。

《ブレード・トラディショナー》　ＡＴＫ／　５００

「またチューナーか！」

「こいつはレベル１の天使族だ！《コート・オブ・ジャスティス》の効果で手札から《勝利の導き手フレイヤ》を特殊召喚する！」

チアガールみたいな天使…って、最近こいつの出番多いな。何だかんだで効果とステータスが気に入ってるしな…。

《勝利の導き手フレイヤ》　ＡＴＫ／　１００

「フレイヤが場にいる限り、俺の場の天使族は攻撃力と守備力が４００ポイントアップする！」

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００→３２００

《ブレード・トラディショナー》　ＡＴＫ／　５００→　９００

《勝利の導き手フレイヤ》　ＡＴＫ／　１００→　５００

「紅刃、あれを出すつもりね…！」

「全体強化か！」

「今は関係ないけどな。レベル８《裁きを下す者－ボルテニス》とレベル１《勝利の導き手フレイヤ》にレベル１《ブレード・トラディショナー》をチューニング！」

１つの黄色い輪にリーシェとフレイヤが飛び込む。

「レベルの合計は…１０…！」

「裁きの剣が、白雷を下し現世に轟く！希望の光を振り翳せ！」

☆８＋☆１＋☆１＝☆１０

「シンクロ召喚！裁け！《雷光断罪－ボルテニス》！」

光の柱を斬り開き、天使の翼と大剣を持つ人型の姿のリーシェが現れた。

《雷光断罪－ボルテニス》　ＡＴＫ／３６００

「ボルテニスの進化形態…！？」

『こちらも本気で行くぞ！』

さあ、ここからが本番だ！

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

特別編　沈黙からの来訪者（中編）（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「さて、『今回のキーカード』の時間よ」

フィレス『ガオルルッ』

勇香「今回のゲストは、『遊戯王ＧＸ　静かなる力』で活躍中の、山本葵さんと山本海度さん、そして木原利光こととトッシーだ！」

利光「逆だ！木原利光が本名だ！」

勇香「んな固い事言うなよ、トッシー」

璃音「そうよ、トッシー。呼びやすくていいじゃない」

トッシー「そういう問だ…って表記変わってるじゃねえか！？」

海度「それより、紅刃君はついに切り札を出してきたね」

葵「これって京ちゃんピンチ！？」

トッシー「それでもアニキが負けるはずがねえッス！いや、だから表記戻せよ！」

璃音「それじゃ、カード考察に入るわよ」

トッシー「無視!?だから表記戻せっつってんだろ!」

璃音「今回紹介するのは、ｋ「京ちゃんが愛用してる魔法使い族モンスター《サイレント・マジシャン　ＬＶ８》！」…葵さん、台詞取らないでください…」

葵「だってせっかく急に出れるようになったんだし、テンション上げてもいいじゃん！」

勇香「は?どういう意味だそれ?」

璃音「本来この特別編は前後編で終わらせる予定だったのよ。でも、後編が長すぎるからやむなく中編と後編に分けたわけ」

海度「本来俺達はゲストとして呼ばれてなかったんだけど、こうして中編の分のおまけコーナーができたから急遽選ばれたんだ」

勇香「そっか。まあ、なんつうか、余り者みたいな扱いでごめんな」

葵「全然ＯＫだよ!こうして京ちゃんのカードをみんなで考察できるんだから!」

トッシ光「そうそう!アニキと一緒じゃないのは少し残念だけ…何だよこの中途半端な名前表記は!?」

海度「とにかく、カードテキストをどうぞ!」

《サイレント・マジシャン　ＬＶ８》
効果モンスター
星８／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ３５００／ＤＥＦ１０００

このカードは通常召喚できない。
「サイレント・マジシャン　ＬＶ４」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。
このカードは相手の魔法カードの効果を受けない。

璃音「コホン…レベルアップモンスターの中でも最高クラスの攻撃力を持つモンスターよ」

海度「通常、ＬＶ４から進化させるためには、相手にカードを５回引かせた上で、次の自分のスタンバイフェイズまで守り切らなければならない」

利ミッツン「だが、《レベルアップ！》を使えばいきなり攻撃力３５００の強力モンスターに進化できるぜ！ていうか利ミッツンって何だよ！？中途半端にすんな！」

勇香「カード消費２枚だけで出せるのが強みだな。いきなり出された相手からしたらたまったもんじゃねえぞ？」

海度「もう１つの効果は相手の魔法に対する完全耐性。相手の《収縮》や《地砕き》とかが効かないのはなかなか侮れないな」

葵「後は《王宮のお触れ》を出しておけば伏せカードを気にしないで攻撃し放題♪」

璃音「相手が《光の護封剣》を発動していても攻撃できるわよ。攻撃力もあいまってなかなか便利ね」

頭施魅津「光属性の魔法使い族だから《オネスト》や《ディメンション・マジック》に対応してるぜ！…怒っていいよな？これはもう

怒っていいよな？」

勇香「（少しやりすぎたか…。反省反省っと）」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「葵さん、海度さん、トッシー、来てくれてありがとな」

利光「だから俺は利光だ！あ、表記直ってる！」

葵「次は京ちゃんも一緒にね！」

璃音「次があればだけど…そうですね、考えておきます」

海度「お礼を言うのはこちらの方だよ。また機会があればよろしく」

璃音「ええ、こちらこそ。さて、紅刃ｖｓ京哉も次回で決着よ。お楽しみに」

勇香「次回も見てくれよな！」

ーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

おまけコーナーで言ってた通り、後編が長すぎたので分ける事にしました。後編は明日か明後日までには投稿できそうです。

次回はついに決着です。京哉がある意味とんでもないカードを使いますが、何かわかりますか？ヒントは『遊戯王ＧＸ　静かなる力』の本編にあります。

では、また次回！

特別編　沈黙からの来訪者（後編）（前書き）

クロスオーバー後編です。

紅刃ｖｓ京哉、ついに決着です。意外なカードも出て来ます。

それではどうぞ！

特別編　沈黙からの来訪者（後編）

ＳＩＤＥ／紅刃

紅刃
ＬＰ／１９００
手札／３
モンスター／《雷光断罪－ボルテニス》（ＡＴＫ／３６００）
魔法・罠／《コート・オブ・ジャスティス》リバース×１

京哉
ＬＰ／３９００
手札／６
モンスター／《王立魔法図書館》（ＤＥＦ／２０００・Ｍ／３）≪ブリザード・プリンセス≫（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／《魔法都市エンディミオン》（Ｍ／６）リバース×２

【魔力カウンター】がここまで厄介だとは思わなかったな…。とにかく、リーシェの進化に成功したのはでかい。反撃開始だ！

「ボルテニスがシンクロ召喚に成功した時、デッキからカウンター罠１枚を墓地に送る！《神の宣告》を墓地に送る！」

「（カウンター罠を墓地に…何の意味があるんだ？）」

「バトル！ボルテニスで《王立魔法図書館》に攻撃！レイジング・ジャッジライト！」

『でやぁあああ！！』

リーシェが振るった大剣から莫大な白い雷が走り、図書館を一瞬で消し去った。

「これ以上の図書館でのドロー増強は無理か…。魔法都市の効果発動！魔力カウンターが乗っている自分のカードが破壊された時、乗っていた魔力カウンターを魔法都市に移し替える！」

《魔法都市エンディミオン》　M／6→9

「そんな効果まであるのかよ…。カードを1枚セットし、ターンエンド！」

紅刃
LP／1900
手札／2
モンスター／《雷光断罪－ボルテニス》（ATK／3600）
魔法・罠／《コート・オブ・ジャスティス》リバース×2

『（何とか巻き返せたな）』

「（ああ。でも、あいつがこのままやられるとは思えない。何か隠し玉があるかもしれない）」

リーシェとテレパシーで会話をする。修行の成果か、最近になってこんな能力まで使えるようになった。喜ぶべきなのか悲しむべきなのか…。

「やっぱり強いな、お前は」

「そうか？これでも精一杯なんだけどな」

「それでも強い。でも、俺だってまだ負けてない！俺のターン、ドロー！…はぁっ！？」

京哉は引いたカードを見た瞬間素っ頓狂な声を出した。何を引いたんだ？

「なんでお前が……いや、使ってもいいのかよ？これって私情に入るだろ？……何だよその理由！？……ハァ、わかったよ。確かに、お前ならこの状況を打開できそうだ」

精霊と話してるのか？もう3人共出てるはずだけど…まだ顔を出してない奴がいるのか？

「私情…？っ！まさか…」

「おそらく、そのまさかだろうな」

「喬様とメビウス様は心当たりがあるのですか？」

「うん。多分、みんなびっくりすると思う」

「そんなに凄いカードなの？」

俺達はともかく、月沙がびっくりするようなカードはそうそうないと思うけどな。たいていのカードはみんな知ってるし。

「《魔法都市エンディミオン》から魔力カウンターを6つ取り除き、

墓地から《神聖魔導王　エンディミオン》を特殊召喚する！」

《魔法都市エンディミオン》　Ｍ／９→３

《神聖魔導王　エンディミオン》　ＡＴＫ／２７００

「エンディミオンの効果で墓地から《天使の施し》を手札に加え、そのまま発動！カードを３枚ドローし、手札を２枚捨てる！」

《魔法都市エンディミオン》　Ｍ／３→４

「そして、エンディミオンの効果発動！手札から魔法カード《魔力掌握》を墓地に送り、ボルテニスを破壊する！」

「そう来ると思ったぜ…！カウンター罠《天罰》！」

「２枚目！？」

「手札を１枚捨てて、モンスター効果を無効にしてエンディミオンを破壊する！」

本日２度目の天誅が魔法使いの王を消し去った。

「ボルテニスの効果発動！カウンター罠が発動する度に相手のカード１枚を除外する！」

「除外！？」

「対象は《ブリザード・プリンセス》だ！パニッシュメント・リムーヴ！」

『反撃はさせん！』

『うわっ！？』

「アリス！？」

リーシェが剣を地面に突き刺すと、アリスの足元から電撃の柱が発生してそのままアリスをフィールドから消してしまった。

「そして、手札の《冥王竜ヴァンダルギオン》の効果発動！カウンター罠で相手のカードの効果を無効にした時、手札から特殊召喚する！」

『ようやく我の出番か』

黒い大穴が開き、龍の姿のロディスが飛び上がってきた。

《冥王竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／２８００

「もう１体も出て来たか…！」

「モンスター効果を無効にして特殊召喚した時、自分の墓地のモンスター１体を特殊召喚する！《フェアリー・アーチャー》を蘇生！リボーン・オブ・ザ・ビヨンド！」

『我に続け！』

大穴は光を吐き、弓矢を持つ天使が飛び出した後に自動で閉じた。

《フェアリー・アーチャー》　ＤＥＦ／　６００

「これだからパーミッションは…。だが、今はそこまで関係ない！魔法カード《死者転生》！手札を１枚捨てて、墓地のモンスターを１体手札に加える！フェリエル・エントリオを手札に戻す！」

《魔法都市エンディミオン》　Ｍ／４→５

「そして、墓地の闇属性モンスター《混沌の魔法騎士》を除外して特殊召喚！」

『再び参る！』

《混沌術士フェリエル・エントリオ》　ＡＴＫ／１８００

「フェリエル・エントリオの効果！除外したモンスターの力を吸収する！カオス・ノヴァ！」

また吸収…。もう１度この光景を見るとは思わなかったな。

《混沌術士フェリエル・エントリオ》　ＡＴＫ／１８００→３３００

「さらに、《混沌の魔法騎士》は墓地から除外された時、特殊召喚できる！この方法で特殊召喚した場合、攻撃力は１０００ポイントアップする！」

《混沌の魔法騎士》　ＡＴＫ／１５００→２５００

「一気に体勢を立て直した…！」

「フェリエル・エントリオの効果発動！墓地の闇属性モンスター《魔導戦士ブレイカー》を除外し、相手モンスターを1体破壊する！今度こそボルテニスを破壊だ！カオス・パイル！」

『京哉殿の障害になる者は全て葬るまで！』

フェルが紫のエネルギー弾をリーシェに向けて撃ち出す。

「ボルテニスの効果発動！」

『私には効かん！』

リーシェは赤紫の光を帯びた大剣を振るい、エネルギー弾を簡単に斬り裂いた。

「何！？破壊されない！？」

「俺の場のモンスターがフィールドから離れる時、代わりに墓地のカウンター罠1枚を除外できる。この効果で代わりに《天罰》を除外した」

『くっ…私では歯が立たない…』

「…フェル、打開策が1つだけある」

『打開策？』

「そのためには、お前を生け贄にしなきゃいけない…。それでもいいか？」

『なんだ、そんな事ですか。おそらくそれが最善の策。そのためなら生け贄くらいお安いご用ですよ』

『どうせなら思いっ切りガツンと行っちゃってよ！』

『私達はもう参加できませんが…勝ちましょう！』

「アリス…アオイ…」

アリスとアオイの声が聞こえる。ああいう会話をするあたり、あいつらも強い絆で結ばれてるんだろうな。

「みんな、すまない！罠カード発動《リビングデッドの呼び声》！墓地の《サイレント・マジシャン　ＬＶ４》を攻撃表示で特殊召喚する！」

《サイレント・マジシャン　ＬＶ４》　ＡＴＫ／１０００

「そして、俺は《混沌術士フェリエル・エントリオ》《混沌の魔法騎士》《サイレント・マジシャン　ＬＶ４》を生け贄に捧げる！」

「3体のリリース！？」

「（バルバロス？それとも《ギルフォード・ザ・ライトニング》？いや、結局はリーシェ達がフィールドに残るから何の解決にもならない。一体何を出すつもりなの？）」

フェル達がそれぞれ光の球になり、急に発生した雷雲に吸い込まれていく。

「主の契約の下、天空の雷よ！舞い降りよ！」

雷雲が電気を帯び始め、中央――フィールドの真上に大きな穴が開く。

「《オシリスの天空竜》！！！」

……は？

『ゴアアァアアアアア！！』

いやいや、ちょっと待て。

確かに隠し玉があるとは思ってたけどさ…。

「う…そ…？何で、三幻神が…？」

神のカードをデッキに入れてるなんて、いくらなんでも予想できねえだろ！？

《オシリスの天空竜》
効果モンスター（原作効果）

星１０／神属性／幻神獣族／ＡＴＫ　？／ＤＥＦ　？
このカードを通常召喚する場合、自分フィールド上に存在するモンスター３体をリリースしてアドバンス召喚しなければならない。
このカードの通常召喚は無効化されない。
このカードは罠・モンスターの効果を受けない。
魔法カードの効果は１ターンのみ受け付ける。
このカードの攻撃力・守備力は自分の手札の枚数×１０００になる。
相手フィールド上にモンスターが召喚・特殊召喚された時、そのモンスターが攻撃表示なら攻撃力が、守備表示なら守備力が２０００ポイントダウンする。
この効果によって攻撃力または守備力が０になったモンスターは破壊される。

《オシリスの天空竜》　ＡＴＫ／　？

口が２つある、赤く巨大な龍神が雷雲から現れ、フィールドに舞い降りる。

「おい、なんでお前が三幻神を…！？」

「ちょっといろいろあってな…。私用で使わないのを条件に契約したから普段はデッキに入れてないんだけど…」

『京哉相手にここまで互角以上に渡り合ってきた事は誉めてやろう、真川紅刃』

やっぱりこいつも精霊か。なんて威圧感だ…。

「京哉の話じゃ私用で使っちゃ駄目らしいけど、このデュエルに何かやばい事でも懸かってるのか？」

沈黙が辺りを包む。神が出て来るんだ、何か緊急事態があるんじゃ…。

『最近どうも退屈でな。異世界人とのデュエルと聞いて勝手にデッキに忍び込ませてもらった』

……。

「「「「『『……』』」」」」

「……要するに、単純に暇だったから契約内容を一旦無視したって事か？」

『そういう事になるな』

「そういう事になるな、じゃねえええぇぇえええええ！！！お前三幻神だろ！？もう少ししっかりしろよ！」

「いや、こいつら基本的に軽いから。俺の重要な選択肢で賭け事してたし」

「軽っ！？どんだけ退屈してたんだよ！？」

見た目と中身が反比例してんじゃねえか！？もう少し責任持てよ！

『まあ、今はそんな事は関係ない』

「いや、『関係ない』で終わらせたら駄目じゃね？」

『京哉を倒したくば、我を超えてみせよ！』

「…ハァ、しゃあねえな」

『まあ、三幻神と戦う経験はこの先もう得る事はないだろう』

『これはこれでいい機会かもしれないな』

神のカードが出るのは予想外だったけど、俺にはリーシェとロディスがついている。俺だって負けてられるか！

「それじゃ、続けるぞ。オシリスの攻撃力と守備力は自分の手札の枚数×１０００の数値になる。俺の手札は４枚！攻撃力と守備力は４０００だ！」

《オシリスの天空竜》　ＡＴＫ／　？→４０００

「攻撃力４０００…！」

手札をガンガン増やせるあいつのデッキとは好相性ってわけか…！

「バトルだ！《オシリスの天空竜》でヴァンダルギオンに攻撃！超電導波サンダー・フォース！！」

『食らうがよい！』

オシリスの口から青白い電撃の束が放たれ、真っ直ぐにロディスを狙う。

「墓地の《エンジェル・ガードナー》の効果発動！アルテミスと一

緒に除外して、ヴァンダルギオンの戦闘破壊を無効にする！」

「まだいたのか！？」

甲冑の天使がまた攻撃を防いだ。当然、戦闘ダメージはありだ。

『ぐぅ…』

「ぐあぁっ、く…！」

紅刃　ＬＰ／１９００→　７００

「ライフが１０００を切った！」

「これが三幻神の力…！」

「破壊できないか…。俺はこのままターンエンドだ！」

京哉
ＬＰ／３９００
手札／４
モンスター／《オシリスの天空竜》（ＡＴＫ／４０００）
魔法・罠／《魔法都市エンディミオン》（Ｍ／４）《リビングデッドの呼び声》リバース×１

これだけやっといて、まだライフを１００しか削れてない。神のカードを抜きにしても、京哉はめちゃくちゃ強い…！

「オシリス…攻略するのはかなり大変だよ」

「攻撃力と守備力が両方２０００以上じゃないと召喚も特殊召喚もできない…」

月沙の言葉で、オシリスの効果を思い出した。効果が効かないのはまだいいとして、問題はもう１つの効果だ。召喚か特殊召喚されたモンスターの攻撃力か守備力を２０００ポイントダウンさせ、数値が０になった時点で破壊…。このままだとチューナーすら出せない。

唯一逆転できるとすれば、京哉がさっきから使い回してるあのカード。あれを引ければ…！

「俺の…ターン！！」

…来た！

「魔法カード《天使の施し》！カードを3枚ドローし、手札を2枚捨てる！」

「手札０であれを引くとは…」

この3枚に懸かっている。モンスターとあのカードを引けなかった時点で逆転は無理だ。いずれは墓地のカウンター罠が足りなくなって負ける。

このドローに懸ける！

「ドロー！！！」

引いたカードは…！

「（何を引いたんだ？）」

「紅刃…」

「……手札を2枚墓地へ…」

《魔法都市エンディミオン》　M／4→5

「…これで条件が整った」

「？」

つくづく、俺も悪運が強いな！

「リバースカードオープン、罠発動《聖龍の加護》！墓地に光属性モンスターが5体以上と光属性のドラゴン族が存在する時に発動できる！墓地の光属性のドラゴン族を除外する事で、このターン俺の場のモンスターは相手のカードの効果を受けない！」

《聖龍の加護》
通常罠（オリジナル）
自分の墓地に光属性のモンスターが5体以上と光属性・ドラゴン族モンスターが存在する時のみ発動する事ができる。
墓地に存在する光属性・ドラゴン族モンスター1体を除外する。
このターンのエンドフェイズ時まで、自分フィールド上のモンスターは相手のカードの効果を受けない。

「俺の墓地にはネオパーシアス、ボルテニス、フレイヤ、《ブレード・トラディショナー》、そして今墓地に送った《智天使ハーヴェ

スト》の丁度5体の光属性モンスターと《ライトエンド・ドラゴン》がいる！ライトエンドを除外する！」

ライトエンドが光になってリーシェ達を包み込む。

「まさか、さっきの《天使の施し》で条件が揃ったのか！？」

「その通り！これでオシリスの効果は俺のモンスターに届かない！」

「オシリスが無効にするのは自分自身への効果のみ…」

「効果の対象が自分のモンスターなら問題なく発動できます！」

「（あれって私が上げたカード…！）」

ここに来る直前に月沙からこのカードを貰ってなけりゃ、負けてたかもな…。

「そして、これが最後の手札！魔法カード《冥王竜の選択》！ヴァンダルギオンの効果を1つ使用する！」

《冥王竜の選択》
通常魔法（オリジナル）
自分フィールド上に存在する「冥王竜ヴァンダルギオン」1体を選択して発動する。
「冥王竜ヴァンダルギオン」の効果を1つ選択して、発動条件を無視して発動する。
このターンの間、選択したモンスターは攻撃する事ができない。

「俺は3つ目の効果を発動！墓地の《ブレード・トラディショナー

》を特殊召喚する！リボーン・オブ・ザ・ビヨンド！」

『また出番だ！』

ロディスが黒い大穴を開くと、中から深緑の剣士が飛び出した。

《ブレード・トラディショナー》　ＡＴＫ／　５００

「その代わり、このターンの間ヴァンダルギオンは攻撃する事ができない」

《魔法都市エンディミオン》　Ｍ／５→６

でも、このデメリットは関係ない！

「《フェアリー・アーチャー》の効果発動！１ターンに１度、俺の場の光属性モンスター１体につき４００ポイントのダメージを相手に与える！俺の場には光属性のボルテニス、トラディショナー、《フェアリー・アーチャー》自身がいる！よって、１２００ポイントのダメージを与える！シャイニング・アロー！」

アーチャーが光を込めた矢を放ち、京哉を射抜いた。

「ぐうっ！？」

「京哉！」

京哉　ＬＰ／３９００→２７００

「トラディショナーの効果発動！１ターンに２回までフィールド上

のモンスターのレベルを1つ下げる事ができる！この効果を2回使用し、《フェアリー・アーチャー》のレベルを2つ下げる！」

《フェアリー・アーチャー》　Ｌｖ．３→２→１

「レベル８《冥王竜ヴァンダルギオン》レベル１《フェアリー・アーチャー》にレベル１《ブレード・トラディショナー》をチューニング！」

１つの黄色の輪に、今度はロディスと《フェアリー・アーチャー》が飛び込む。

「ヴァンダルギオンの進化形態まであるのか！？」

「武の魂が、冥王に宿りて現世に閃く！希望の光を振り翳せ！」

☆８＋☆１＋☆１＝☆１０

「シンクロ召喚！斬り拓け！《エミサリー・セイバー・ドラゴン》！！」

日本刀を構え、武者と化した冥王竜がフィールドに降り立った。

《エミサリー・セイバー・ドラゴン》　ＡＴＫ／３８００

「これが進化したヴァンダルギオン…！」

『神が相手と言うのなら、我も全力を出すまでだ！』

「エミサリー・セイバーがシンクロ召喚に成功した時、墓地からカ

ウンター罠を5枚まで手札に戻す！《天罰》《攻撃の無力化》《デストラクション・ジャマー》《神の宣告》《盗賊の七つ道具》を手札に戻す！」

「カウンター罠の再利用！？（だが、ボルテニスの使用回数を減らしてまで戻す事に何の意味が…？）」

「そして、手札に戻したカウンター罠1枚につき３００ポイント攻撃力をアップする！」

《エミサリー・セイバー・ドラゴン》　ＡＴＫ／３８００→５３００

「攻撃力５３００！？」

「オシリスを上回っただと！？」

「バトル！エミサリー・セイバーでオシリスに攻撃！」

「させるか！リバース発動《和睦の使者》！このターン俺のモンスターは戦闘では破壊されず、戦闘ダメージも０にする！」

京哉もここで《和睦の使者》を使うなんて、どんだけ強いんだよ…。でもな…。

「このターンで終わりだ！エミサリー・セイバーがいる限り、俺は手札からもカウンター罠を発動する事ができる！」

「手札から！？じゃあ、手札に回収したのは…」

「攻撃力を上げるためだけじゃねえ！手札からカウンター罠《盗賊

の七つ道具》を発動！さらに、エミサリー・セイバーが場にいる時、除外されている自分のカードを1枚墓地に戻す事で発動条件を無視して発動できる！」

「コストを変える効果…！？」

「《天罰》を墓地に戻して発動！罠カードの発動を無効にする！」

「これで京哉を守るものはもうない！」

「嘘…」

「行け、ロディス！紫電冥閃！」

『神よ、これで終幕だ！』

『ぐぅ…見事だ、冥王竜よ…』

ロディスは紫の雷を纏った刀を横に振るい、一撃で天空竜を斬り伏せた。

「うわっ…！」

京哉　ＬＰ／２７００→１４００

「はは…俺の負けか…」

「楽しかったぜ。《雷光断罪－ボルテニス》でダイレクトアタック！レイジング・ジャッジライト！！」

『ぜやぁあああああ！！』

リーシェが放ったありったけの白い電撃が、このデュエルに終止符を打った。

京哉　ＬＰ／１４００→　０

紅刃　ＷＩＮ

「終わった、か…」

ソリッドビジョンは消えて、空も元通りに晴れた。

「京哉、大丈夫…？」

「ああ、心配するな」

喬とメビウスは京哉とアオイ達に駆け寄っていろいろ話している。にしても、かなりぎりぎりだったな…。

「お疲れ様！」

「凄かったですよ、今のデュエル！」

こっちには月沙とスイレンが来た。ちなみに、ロディスとリーシェは普段の姿に戻っている。

「ああ、本当にやばかったけどな…」

「異世界のデュエリストは相当強いようだな。我らもさらに精進せ

ねば…」

「紅刃」

「？」

振り返ると、いつの間にか京哉達が目の前に来ていた。

「本当に強いな、お前。神のカードまで使ったっていうのに…。あれだけやられたら逆に清々しいっていうか…」

「京哉が本気でデュエルして負けたところ、滅多に見ないよ…？」

「そうなのか？でも、俺もぎりぎりだったし、充分強いだろ」

実際、雷光断罪とエミサリー・セイバーがなかったら負けてただろうしな。

「そうか？それにしても、凄かったな、シンクロ召喚！めちゃくちゃかっこよかったし！」

「他にもいろんなチューナーやシンクロモンスターがいるけどな。俺が使ったのはほんの一部だ」

「もっといろんなのがいるのか！こっちの世界でも早く出ないかな～…」

「長生きしてりゃ、そのうち使えるようになるさ」

俺が持ってるカードは特別な奴が多いから、あるかどうかはわか

らないけどな。

「みんなお疲れ様。上の人達も多分満足してると思うよ」

フォッタも話に入って来た。動機はある意味不純だけど、楽しいデュエルができたから許すとするか。

「ええと、自称神様（笑）だっけ？」

「フォッタだよ！いい加減それから離れてよ！」

「ああ、すまん。あんなに楽しいデュエルができたんだ、ありがとな」

「意外だね。てっきり怒るものだと思ってたけど」

「まさか。ただ、次からはちゃんと事情を説明してからにしてくれよ」

「『次からは』ってまた来るつもり？」

「次があったらって話だよ」

そういや、こいつら異世界人だっけ。もうそろそろお別れか…。

「じゃ、あまり長くアカデミアを空けるわけにもいかないし、そろそろみんなを元の場所に帰すよ」

フォッタはそう言って、例の小さな光の球を出現させた。

「もうお別れですか…」

「時間は短かったが、楽しかったな」

「また機会があればお願いしますよ」

「それは上の人次第だよ。まあ、申請はしておくけどね」

「もうちょっと一緒にいたかったな～…」

「きっとまた会えますよ！」

「いろいろ苦難が待ち受けているだろうが、健闘を祈る」

「ああ。お前も喬をしっかり支えてやれ」

わかりづらいだろうから一応補足しとくけど、上から順にアオイ、リーシェ、フェル、フォッタ、アリス、スイレン、ロディス、メビウスだ。てかロディスお前、ニュートラルの事話したのか？

「喬、頑張って。私、喬の事応援してるからさ」

「うん、ありがとう。…月沙も、誰かに取られないようにね」

「う…わ、わかってるよ」

あいつら何話してんだ？この短期間で1番仲良くなってるけど…。

「紅刃、次は負けないからな！」

「望むところだ。後、オシリスには『気持ちはわからなくもないけどもうちょいしっかりしとけ』って伝えといてくれ」

「はは…わかった、伝えとく」

光が強くなってきた。そろそろだな。

「それじゃ、『またな』」

「ああ！」

そして、視界が真っ白になった。

視界が晴れると、見慣れた光景が飛び込んできた。要するに、俺の部屋だ。

「…戻って来たのか？」

『そのようだな』

精霊界から帰って来たからか、ロディス達はもう実体化が解けている。

「夢じゃ…ないよね？」

『私達全員が共有していて、なおかつここまではっきりした記憶が

夢のわけがあるか。れっきとした現実だ』

「…だよな」

『また、会えるでしょうか…？』

「会えるさ」

俺達は最後まで『さよなら』は言わなかった。俺も最後の言葉は『さよなら』じゃなくて『またな』にした。

あいつらとはまた会いたい。今度は俺達から向こうに行ってみたいな。京哉達が暮らす世界がどんな所か、この目で確かめてみたい。

「…うん、そうだね。きっとまた会えるよ」

「俺もその時までにもっと強くならないとな」

ま、そういうわけだ。

いつかまた会おうな、京哉！

...To be continued

特別編　沈黙からの来訪者（後編）（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「クロスオーバーはまだ続いてるわよ。今回のキーカードの時間よ」

フィレス『グオルルル…』

勇香「最後のゲストは、喬と同じく『遊戯王ＧＸ　静かなる力』でメインヒロインとして活躍中の坂上倭、赤坂凛、如月涼の３人だ！」

凛「みんなよろしく！」

倭「ていうか、なんで京哉君が負けてんのや！？おかしいやろ！」

勇香「いや、２人共全力を出し切ったんだし、文句はつけられないだろ」

倭「うぐ…せやけど、やっぱ悔しいやん！」

涼「あはは…。ところで、なぜ喬さんが選ばれたんでしょうか？私達も入れて４人全員出るわけにはいかなかったんですか？」

璃音「キャラが多すぎると書き分けが難しいのよ。ただでさえ精霊が多いのに、人間まで増えたら空気化する人が出て来るわよ？」

涼「う…それは嫌ですね…」

勇香「喬が選ばれたのは、単純にこっちの作者の好みだな」

倭「ちょっとそっちの作者シバいたるわ」

勇香「なんで!?そこまで出たいか!?」

倭「出たいに決まっとるやろ!京哉君と一緒に出るだけでアドバンテージを稼げるんやで!」

勇香「アドバンテージ…?」

璃音「確かに、今回の件で喬は月沙の応援を貰ったわね」

凛「う…先を越された…」

涼「普段からもっとアピールしておけば…」

璃音「（これはみんな大変ね…。京哉は早くどうにかしなさいよ…）」

勇香「???…わっけわかんね～…」

涼「とにかく、カード考察に入りましょうか」

璃音「そうね。今回紹介するのは、京哉が奥の手として使用した、三幻神のうちの1体《オシリスの天空龍》よ」

勇香「ついに神のカードを考察する時が来たのか…」

《オシリスの天空竜》
効果モンスター（原作効果）
星１０／神属性／幻神獣族／ＡＴＫ　？／ＤＥＦ　？
このカードを通常召喚する場合、自分フィールド上に存在するモンスター３体をリリースしてアドバンス召喚しなければならない。
このカードの通常召喚は無効化されない。
このカードは罠・モンスター効果を受けない。
魔法カードの効果は１ターンのみ受け付ける。
このカードの攻撃力・守備力は自分の手札の枚数×１０００になる。
相手フィールド上にモンスターが召喚・特殊召喚された時、そのモンスターが攻撃表示なら攻撃力が、守備表示なら守備力が２０００ポイントダウンする。
この効果によって攻撃力または守備力が０になったモンスターは破壊される。

璃音「３体ものリリースが必要な分、効果は桁違いのものばかりよ」

倭「罠とモンスターの効果が効かないって時点で充分凄いやんか！召喚も無効にされへんし…あ、魔法カードは１ターンのみって事は、《死者蘇生》も１ターンしか効かへんのか…」

凛「攻撃力と守備力は手札が多ければ多いほど上がるよ。手札をどうやって温存していくかが問題だね」

璃音「１番厄介なのが、最後の効果よ」

涼「どんなモンスターでも、召喚か特殊召喚されたら攻撃力か守備力が２０００ポイントも下げられてしまいますね」

勇香「おまけに、この効果で数値が０になったら即破壊…。ビート

ダウンって言うより【苦痛ワンフー】みたいなコントロール系のデッキに向いてるのかもな。【苦痛ワンフー】については遊戯王ｗｉｋｉで見といてくれ」

倭「今回の京哉君のデッキみたいに手札をガンガン増やすデッキにもオススメや！攻撃力を上げてやれば戦闘破壊される心配もあまりあらへんで！」

勇香「ま、神のカードを上手く使いこなせるかどうかはデュエリストの腕の見せ所だな。ゲームの奴はこの原作効果よりも弱体化してるけど、強いもんは強い」

凛「後、三幻神の中でこのカードだけＯＣＧ化されてないんだよね…」

涼「三幻神は1年毎に1枚ＯＣＧ化されてますけど、早く出て来てほしいですね」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「倭、凛、涼、来てくれてありがとな！」

倭「次は本編でよろしゅうな！」

勇香「次があればだけどな…」

涼「こちらこそありがとうございました！」

凛「僕達の活躍もよろしくね！」

璃音「ええ。みんなも『遊戯王ＧＸ　静かなる力』をよろしく頼むわよ」

勇香「私達が宣伝していいのかよ…。まあ、いいか！次回も見てくれよな！」

――――――――――

いかがでしたか？

これにてクロスオーバー『沈黙からの訪問者』は完結です。紅煌蒼さん、本当にありがとうございました！

オシリスの効果を乗り越えるにはどうしてもオリカが必要でした。なるべく使わないようにしようとしてるのに…。

紅煌蒼さんの『遊戯王ＧＸ　静かなる力』は大変面白い小説ですので、この文章をご覧になった皆さんもぜひ読んでみてください。

では、また次回！

第３０話　学園祭はたまに意味不明なクオリティの作品が飛び出す（前書き）

今回は学園祭の話です。当然、ブラック・マジシャン・ガールが登場します。

少し長めですので、読む際にはご注意ください。

それではどうぞ！

第３０話　学園祭はたまに意味不明なクオリティの作品が飛び出す

ＳＩＤＥ／勇香

「お、勇香じゃねえか」

「クロウ？」

私が遊星達が住んでるガレージに立ち寄ると、丁度クロウが仕事を終わらせて帰ってきた。

「仕事は終わったのか？」

「ああ。今日は案外早めに終わったぜ」

「そうか。あ、シュークリーム買ってきたんだけど、食うか？」

「本当か？気が利くな！遊星達と一緒に食おうぜ！」

私はというと、差し入れついでに遊星達に会いに来ただけだ。メカなんて私にはよくわかんねえし、私がいたところで何ができるってわけじゃないけど、これくらいはしてやらないとな。

ま、うちにはメカニックが３人もいるんだし、素人の私達が手を出すわけにはいかないだろ。

それは置いといて、さっさと中に入るか。

「ただいま～」

今の台詞を言ったのはクロウな。私は龍亞と龍可の家に居候している。…ちゃんとバイトで稼いでるからな？ニートとフリーターは違うぞ？

部屋の中にはジャックがいない。例のメカニック組がパソコンを弄っていた。

「こういうのはどう？」

「あ、いいんじゃないかな？」

「いや、ここはこうするべきだ」

「なるほど…これならパワーがもっと上がるわね」

私達が入ってきた事にも気づかずに作業に没頭している。本当にこういうのが好きなんだな。

「じゃあ、これで試してみましょう」

「だが、全部終わらせるには時間がかかる」

「一晩かければ充分でしょ？」

「そうだね。それじゃ、今日も徹夜で作業って事で…」

「寝ろぉおおおぉおおおお！！！」

私は馬鹿2人の頭をわしづかみにして、一息で机に沈めた。

一応言っとくけど、パソコンのキーボードは無事だ。机の空いてるスペースにデコをぶつけたって言えばわかりやすいか？

「いっだぁぁあ!?あ、あれ?勇香にクロウ?」

「…いるならいるって言いなさいよ…」

「聞いてねえだけだろ!」

デコを抑えて文句を言うブルーノと璃音を、私は一言で一蹴してやった。

「それより、また徹夜する気かよ!?そのうちぶっ倒れるぞ!」

「大丈夫だ。週に1度は5時間睡眠を取っている」

「週に1度って時点で大丈夫じゃねえだろ!」

遊星もどう考えてもズレてる返事をしてきた。本当にこの徹夜組ときたら…。

「ちなみに最後に寝たのはいつだ?」

「5日前だよ」

「お前らそんなんでよく元気でいられるよな…」

しかも3人共目の下に隈がないし。何こいつらアンドロイド?

「クロウもちゃんと見張っとけよ…」

「わ、悪い。てか、ちょっと目を離したらすぐこれかよ…」

なるほど、要するに狸寝入りか畜生。どんだけ開発したいんだよこいつら…？

ボォオオン！

「「「「「！？」」」」」

突然、部屋の空いてるスペースから煙が吹き出した。ん？このパターンって…。

「やあ、みんな！」

「…やっぱお前か」

煙が晴れると、自称神様ことフォッタが立っていた。

「だから僕は自称じゃなくて本物の神様だって！」

「人の心を読むなよ」

「で、どうしたの？私と勇香に増援でも頼みに来たのかしら？」

璃音が言ってる事は、多分この場にいるみんなが思ってるだろうな。私達ならいつでも行けるから、別に今来たところで何の問題もないけど。

「いや、今回のはそんなに重い用件じゃないよ。この依頼は璃音が適任だと思ってね」

「私？」

璃音が適任の依頼ねえ…。大方ものづくりってところだろ。

「暇ができたか紅刃達の様子を見に行ってきたんだけど、デュエルアカデミアが丁度学園祭の時期だったんだ」

「学園祭？」

「寮がレッド、イエロー、ブルーの3つに分かれてるのは知ってるよね？で、レッド寮はコスプレデュエルをやる事になったんだ」

「コスプレデュエル？…って、何だそりゃ？」

「デュエルモンスターズのモンスターの衣装を着てデュエルするんだよ」

「モンスターのコスプレか…。面白そうだね」

ブルーノには好印象みたいだ。

『ブルーノとフォッタは初対面じゃないのか？』って思ってるそこのお前に説明しとく。フォッタは最近1度だけここに来た事がある。

敵の組織について少しわかったらしくて、その報告に来たんだ。ブルーノは最初はテンパってたな…。

ニュートラルとかいう名前で、目的も規模もほとんど不明。わかってるのは、敵のうち1人が精霊持ちの【魔轟神】使いで、もう1人が月沙と因縁がある奴だって事くらいだ。後者は月沙が倒したらしいけど、また襲って来るかもしれないってさ。

ま、それは置いとくか。コスプレねえ…。〇タクとはまた別の次元だろうし、なかなか面白そうだな。

「で、その衣装を私に作ってほしいと？」

「そういう事。どの衣装にするか話し合ってたんだけど…」

紅『…やっぱりねえな…』

俊『未来のモンスターだから仕方ないよ』

紅『俺のはこの時代にもあるはずなんだけど…』

月『璃音がいたら作ってくれそうなんだけどなぁ…』

フ『なら、僕が直接頼んで来ようか？』

月『え、いいの？』

フ『丁度非番だからね。お安いご用だよ』

将『なら頼む』

フ『ＯＫ！』

「というわけなんだ」

なるほどな。向こうにあるのはあくまで昔からいたモンスターの衣装だ。シンクロモンスターとかまでは当然用意されてないはずだ。

「それで、どうかな？引き受けてくれる？」

「…サイズとほしいモンスターの衣装を聞いてきて」

「え？」

「面白いじゃない。４人分くらい、喜んで作らせてもらうわよ」

璃音は意外とあっさり引き受けた。

「それと、完成したらあなたが直接届けなさい」

「そのつもりだよ。それじゃ、早速行ってくるよ」

フォッタはまた煙を起こして消えてしまった。便利そうだな、あのテレポートみたいな能力。

「フフフ…」

「どうした？」

「楽しみなのよ。どんな衣装を要求されても作り上げてみせるわ…」

珍しく璃音が燃えてる…！こいつ、本当にものづくりが好きなのな。

「俺達も手伝うか？」

「いえ…手出しは無用よ、兄さん。ここは私の戦場（いばしょ）よ」

あれ？字が違うような気がしたのは気のせいか？てか燃えすぎだろ。どんだけ楽しみなんだよ？

「なあ…璃音ってこういうキャラだっけ？」

「さあ…。普段は大人しいはず、なんだけどな…」

クロウに少し曖昧な返事をして、テーブルに置いといた箱を片手で持ち上げた。

「シュークリーム買ってきたんだけど…食うか？」

しばらくして、注文が届いた。璃音は地下に作った開発室に入って行った。必要な物はほとんど揃ってるからか、買い出しの荷物は少なかった。

フォッタは急用が入ったから、携帯の電波を異次元で通じるようにしてから天界に戻ったらしい。だから、注文は月沙達からのメールで届いた。フォッタって案外多忙なんだな…。

ん？『開発室って何？』だって？

私がネオ童実野シティで暮らすようになってから、璃音は大家のゾラさんに許可を貰って地下に開発室なる物を作ったんだ。ゾラさんは遊星に対して甘いからな、遊星の従兄妹だって言ったら一発で気に入られたから許可には困らなかった。

暇があれば部屋に篭っていろいろ作ってる。ただ、本当にいろいろ作ってんだよな。バズーカ砲やらマシンガンやらを背負って部屋から出てきた時はお前それ何に使うつもりだよってツッコんだ記憶がある。

「戻ったぞ」

お、ジャックが帰ってきた。

「あ、お帰りジャック」

「お邪魔してるぞ」

「勇香か。璃音はどうした？」

「実はかくかくしかじか四角いムー〇というわけで…」

みんなを代表して、私が簡単に説明しといた。

「ほお、学園祭の衣装か」

「ところで、どんな作業をしてるんだろうね？注文を見る限りだと難易度が高そうだから気になるんだけど…」

「璃音がドアを閉める前に、中に盗聴器を仕掛けておいた」

「遊星ナイス！」

璃音は部屋に篭る時、いつも鍵を閉めて誰も入れないようにしている。あいつ単独の場合はどんな作業をしているかは誰にもわからない。完全防音だから音も聞こえないし。

「なんで盗聴器？」

「監視カメラは作るのに時間がかかる。画像はないが、音だけでもある程度想像できるだろう」

「そんなもんなのか？」

「とにかく、せっかく設置したんだし、聞いてみようよ」

ブルーノに促され、遊星は盗聴器と繋がってるだろうスピーカーの電源を入れた。

カチッ『ズパパパパドカーンバキバキガラガッシャンズドーンバババピチュンピチュンチュイーンバリバリバリバリゴッガドッドゴーンドカカッシュパパパズバッビュオオオビキビキボーッシャシャシャシャッブシャーバキャッシュコーッズガッドドドd』カチッ

「「「「「……」」」」」

遊星は察したのかすぐに電源を切った。

「……何やってんだ、あいつ…？」

「衣装作り…だよな…？」

「服を作る音とはとても思えんぞ？」

「き、きっとテンションが上がってるんだよ。張り切りすぎて失敗しなきゃいいけど…」

「…璃音、お前は何をやってるんだ…？」

ガチャッ

「「「「「！？」」」」」

突然、地下のドアが開いた。あ、説明し忘れてた。地下のドアは床にある。

「グルル…」

ドアからひょっこり出て来たのは、実体化したフィレスだった。

「フィレス？」

フィレスは璃音の手伝いとしてたまに実体化するから、遊星達も知っている。フィレスの存在自体に驚く奴はこの中には誰もいない。

「……」

フィレスは無言で口から何かを吐き出し、ドアを閉めてしまった。カチャッと鍵を掛ける音がする。意外と器用なんだよな、あいつ…。

遊星はフィレスが吐き出した鉄屑を拾い上げた。みんながそれに注目する。

「どうした、遊星？」

「…これは俺の盗聴器だ。しかも破壊されている」

「気づかれたか…」

『ほっといて』って事だろうな。何をやってんのかは物凄く気になるけど、本人が知られたくないなら仕方ないか。

「あ、そうだ。ジャック、シュークリーム買ってきたんだけど、食うか？」

「シュークリームか。いただくとしよう」

私はとりあえず、シュークリームの残りをジャックに上げといた。

ＳＩＤＥ／俊也

今日は学園祭当日。レッド寮ではコスプレデュエルをやる事になってて、僕は今その衣装に着替えてる。

それにしても、フォッタが直接届けてくれたこの衣装、クオリティが高すぎる。璃音、気合い入れすぎでしょ…。

…よし、着替え完了。僕はみんなと合流するために更衣室を出た。

「みんなお待たせ！」

「あ、俊…！？」

遅れてきた僕を迎えてくれたのは、みんなの驚きの視線だった。

「な、何だその衣装…？」

「ああ、これ？《サーチ・ストライカー》っていうモンスターなんだけど…どうかな？」

「クオリティ高いッス…」

ご丁寧に両腕の武器まで完全再現だ。本当は服だけのつもりだったけど、璃音がここまでやるとは思わなかったな…。

「他のみんなも似合ってるね」

「本当に似合ってますか！？」

「うん。ピッタリだと思うよ」

ジュンコさんとももえさんは明日香さんの横で喜々としている。この３人の格好は《ハーピィ・レディ三姉妹》だ。１・２・３の３人共揃ってる。ジュンコさんとももえさんは最初は嫌がってたけど、

僕と吹雪さんが（月沙の指導で）頼んだらなぜかあっさり引き受けてくれた。

万丈目君はなんと《ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン》だ。そんなごつい衣装、よく用意できたね…？

十代君のはもはや何のコスプレかわからない。いろんなモンスターがごちゃまぜになってる。まあ、お祭りだし、これはこれでありかな？

月沙のは《氷結界の舞姫》だ。髪の色と髪型、後目の色を除けばスイレンとそっくりだ。髪はいつものポニーテールにしてるけど、スイレンと同じ氷の髪飾りを使っている。これは月沙がアビリティで作った物らしい。

将人は《天刑王　ブラック・ハイランダー》の衣装を着ている。動きやすいように鎧も少し加工してある。こんなのどうやって作ったんだろう…？

で、紅刃のは《裁きの代行者　サターン》だ。凄いよ、翼まで抜かりないよ。ここまで来るとある意味尊敬するよ、璃音。

「さあ諸君！メンバーも揃ったところで、早速オシリス・レッド怒涛のコスプレデュエルを始めようではないか！」

「何が始まるんだ？コスプレデュエル？」

「面白そうじゃん！」

万丈目君が開催宣言をすると、どんどん観客が集まって来た。さ

すが伝統行事。

「最初は僕が行ってもいいかな？」

「いいだろう！」

僕は一足先に立候補した。僕だってデュエルはしたいからね。

両腕の武器のボタンを押すと、勝手に解除された。それを適当なところに置いて自分のデュエルディスクを装着した。デュエルをする事も考えての設計らしいけど、どこまで気合い入ってんだろう？

カシャ！

ん？今のはシャッターの音？

「兄さん…」

「いや～、ちょっと見ない間に妹がこんなに美人になってくれて、兄さんは嬉しいよ！」

振り向くと、吹雪さんが明日香さんの写真を撮っていた。

「兄さん　その写真…」

「明日香のファンクラブのメンバーに配ろうと思ってね！」

ファンクラブ？そんなのがあるの？

「待ちなさい兄さん！」

「嫌なこった！」

「写真返して！」

「「（えぇ～…）」」

「何だあのはっちゃけぶりは…」

「あはは…（完全復活したみたいだし、これはこれでよかった、うん）」

「吹雪さんって…」

「ああいうキャラだったんだ…」

人って見かけによらないものだね。昔はどんなだったのか、ちょっと気になる。

「（天上院君の写真ゲット～！吹雪さん、俺はあなたを尊敬するぜ！）」

何か変な心の叫びが聞こえた気がしたけど気にしない。

「さて、この《サーチ・ストライカー》に挑むデュエルモンスターはどこのどいつだ！？」

「あの～、私もデュエルしたいで～す！」

あ、早速立候補が…ってあれ？

「ん？」

「おおっ！」

「ブラック・マジシャン・ガール！？」

みんなが声を揃えてその名前を呼ぶ。現れたのは、なんとブラック・マジシャン・ガールだった。

「トメさんじゃない…！」

「おいおい、ブラマジガールだぜ！」

「超可愛い！」

「本物そっくりじゃん！」

観客にも大好評みたいだ。それより、トメさんのあれは意図的に目を逸らしてたんだから思い出させないでよ…。さすがにあの人がブラック・マジシャン・ガールの衣装を着るとは思わなかったからな…あれは物凄い衝撃だよ、うん。

「いいですか？」

「当たり前だ！コスプレデュエル実行委員長、この万丈目準が許可する！」

「そうだったんだ…」

ここにもはっちゃけてる人がいたよ…。

「でも一体誰ッスかね？オシリス・レッドに女子はいないし…」

「（精霊か？）」

「（精霊だな）」

「（原作通りだ…）」

「フフッ！お手柔らかにお願いします！」

「あ、うん、こちらこそ」

十中八九精霊だろうな…。僕も精霊を連れてるからか、何となくわかる。

「レッド寮のイベント、盛り上がってるノーネ」

「しまった！コスプレに手間取って遅れをとったか…」

聞き慣れた声がする。声が聞こえた方を見ると、クロノス先生と亮さん、三沢君が来ていた。

ていうか三沢君、《アマゾネスペット虎》の衣装を着てるのはタニヤさんに未練があるからかな？

「シニョール俊也のお相手は～？」

「ブラック・マジシャン・ガールか…」

「プリティーなノーネ！キュートなノーネ！グラッチェなノーネ！」

先生、うるさいです。

「僕の作ったステージにブラマジガールが…！この企画最高ッス！」

キィーン！

ちょっ！？翔君ハウリング！

「丸藤翔！さっさとリングサイドの実況席に来い！解説者を待たせるな実況アナ！」

「ごめ～ん！」

万丈目君に怒鳴られて実況席に戻る翔君。待たせちゃ駄目なのは観客でしょ？

「只今より、本日のメインイベント、風嶺俊也ＶＳブラック・マジシャン・ガールのコスプレデュエルを行います！解説は伝説の《ＸＹＺ－ドラゴンキャノン》！」

「はぁい！」

万丈目君、発音には気をつけようね。月沙と紅刃が笑いを堪えてるんだけど…。

「実況はこの私、丸藤翔でお送りします！」

「それはいいから早くやれ～！」

「おっと！いよいよデュエルモンスターの登場だ！」

「何を言っている？最初からいるだろうが！」

「赤コーナー、未知のモンスター《サーチ・ストライカー》こと風嶺俊也！」

翔君は万丈目君をスルーして実況を続ける。万丈目君頑張れ。

「なんだあれ？」

「知らないモンスターだ…」

そりゃあね、未来のモンスターだし。

「きゃあぁあぁあ！」

「俊也君～！」

いきなり女子からの大声援。凄く盛り上がってるな…。

「月沙、これってまさか…」

「ファンクラブの人達だね。規模はそれなりに大きいみたい」

「オシリス・レッドに対する差別があるにも関わらず、ここまでの人望を集めるとは…」

「人望とは少し違うだろ」

紅刃達が何か話してるけど女子の歓声で聞き取れない。僕って女子にここまで応援されるような事したっけ？

「俊也様、頑張って～！」

なんで様付け？疑問に思いながら小さく手を振ると、また歓声が上がった。お祭りだからテンション高いのかな？

「青コーナー！これは凄いぞ！我らがアイドル！ブラック・マジシャン・ガールの登場だ！」

「だから端からいるだろう？」

「いや、これはノリなんで…」

「今日は応援よろしくね！」

「うおおぉぉぉぉお！！」

今度は男子から歓声が上がる。ってあれ？翔君観客に混じってない？と思ったらすぐに実況席に戻っていた。

「おい貴様、今向こうにいただろ？」

「そうッスか？気のせい気のせい」

気のせいじゃないよね？確かにいたよね？

「そうか？」

「さあ、両者デュエルディスクを展開だ！」

「それじゃ、始めようか」

「よろぴくで～す！」

「「デュエル！」」

俊也ｖｓブラック・マジシャン・ガール

「先攻は僕の独断でブラマジガール！」

「なんで！？レディーファーストならともかく独断！？」

そんな僕のツッコみをよそに歓声が沸く。

「勝手に先攻決めないでよ！俊也君が不利じゃない！」

「行けぇ！ブラマジガール！」

「やかましいーノ！」

「まるで男子生徒ｖｓ女子生徒の全面戦争だな」

「それじゃ、私のターン、ドロー！」

なんか勝手に先攻取ってるし！もういいよ！

「モンスターを裏守備表示で召喚してターンエンド！」

ブラック・マジシャン・ガール
ＬＰ／４０００
手札／５
モンスター／リバース×１
魔法・罠／なし

「いいぞブラマジガール！可愛い～！」

「は～い！」

「ブラボー！ブラマジガール！さて、続いては俊也選手のターン！」

「あはは…なんかやりづらいな…。僕のターン、ドロー！」

フィールドには裏側表示のモンスターが1体のみ。これなら何とかなりそうだ。

「魔法カード《天使の施し》を発動！カードを3枚ドローし、手札を2枚捨てる！そして《デブリ・ドラゴン》を召喚！」

ドラゴン族のシンクロモンスターは持ってないけど、僕にとっては重要なモンスターだ。

《デブリ・ドラゴン》　ＡＴＫ／１０００

「さて…ＸＹＺ－ドラゴンさん、俊也選手の出方はどうっすかね？」

「このパターンは、おそらく憑依装着に繋げるつもりだ」

「《デブリ・ドラゴン》が召喚に成功した時、墓地から攻撃力５００以下のモンスター１体を特殊召喚できる！《天使の施し》で墓地に送った《風霊使いウィン》を特殊召喚！」

呼び出したのは。僕の大切なパートナーのウィンだ。

《風霊使いウィン》　ＡＴＫ／　５００

『凄い歓声だね…』

「（みんなお祭りだからテンションが上がってるんだよ）」

『（違うと思う…）』

「（それより、早速行くよ）」

『わかった』

「そして、フィールド上の《風霊使いウィン》と風属性モンスター１体を墓地に送る事で、デッキから《憑依装着－ウィン》を特殊召喚する！」

『行くよ！憑依装着！』

《デブリ・ドラゴン》が姿を変え、黄色の龍の精霊になってウィンの傍に佇んだ。

《憑依装着－ウィン》　ＡＴＫ／１８５０

「俊也様の主力モンスターよ！」

「やっちゃえ！」

「この方法で特殊召喚したウィンは貫通効果を得る！最初から加減はしないよ！ウィンで裏守備モンスターを攻撃！龍風波！」

『はぁっ！』

ウィンが杖を振ると、龍がモンスターに向かって突進していった。

さて、モンスターの正体は…。

「おっと！ブラマジガールのモンスターは　《ファイヤーソーサラー》だった！」

「これは見ものだな」

《ファイヤーソーサラー》

効果モンスター

星４／炎属性／魔法使い族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ１５００

リバース：自分の手札を２枚ランダムに選択しゲームから除外する。

相手ライフに８００ポイントダメージを与える。

ブラック・マジシャン・ガール　ＬＰ／４０００→３６５０

「う…まだまだ！さあ、みんな…行きますよ！」

「おおおおっ！」

再び男子が雄叫びを上げる。

「《ファイヤーソーサラー》のリバース効果発動！」

「これはナイスですね～、ＸＹＺ－ドラゴンさん！」

「まあな。自分の手札を2枚ランダムに選択し、ゲームから除外。相手に８００ポイントのダメージを与える」

「可愛い顔してやるぞ～！ブラック・マジシャン・ガール！」

除外されたのは《マジシャンズ・ヴァルキリア》と《ブラック・マジシャン・ガール》だ。手札を2枚も、しかもランダムに除外か…。普通ならデメリットが大きいけど…。

「いっけ～！ブラマジガール！」

「せ～の！」

「1！2！3！」

え、何？翔君なんで掛け声出してるの？男子もなんでそれに答えてるの？

「う～っ！ファイアー！」

向こうもなんかノッてるし！うわっ火が飛んできた！

「くっ…」

俊也　ＬＰ／４０００→３２００

「ブラマジガール、貫通ダメージを受けながらも俊也選手にダメージを与えた！」

「俊也君！」

「大丈夫、まだ行ける！カードを2枚セットし、ターンエンド！」

俊也
ＬＰ／３２００
手札／３
モンスター／《憑依装着－ウィン》（ＡＴＫ／１８５０）
魔法・罠／リバース×２

「受けたダメージは俊也の方が大きいが、ブラマジガールは手札を2枚も消耗している。ここからどう切り返す？」

「引っ込め！相手は女の子だぞ！」

「おっと、ここで俊也選手に猛烈なブーイング！」

「何が引っ込めよ！俊也様は負けてないわよ！」

観客席がやけに騒がしい。集中集中っと…。

「ファンクラブの応援があるとはいえ、やりにくいだろうな、俊也…」

「当然なノーネ」

「しかし、あのブラック・マジシャン・ガールも抜け目がない」

「私のターン！行きま～す！」

「おぉ～！」

「ドロー！」

「ドロー！」

本当に凄い人気だな、ブラック・マジシャン・ガール。ここからどう反撃してくるかな？

「《マジシャンズ・ヴァルキリア》を攻撃表示で召喚！」

召喚してきたのは、ブラック・マジシャン・ガールに似たモンスターだ。

《マジシャンズ・ヴァルキリア》
効果モンスター
星４／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１８００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は表側表示で存在する他の魔法使い族モンスターを攻撃対象に選択する事はできない。

《マジシャンズ・ヴァルキリア》　ＡＴＫ／１６００

「グッドです！あのカードがある限り、俊也選手は他の魔法使い族モンスターを攻撃出来ない！」

「解説は俺だ！」

「ご、ごめん…」

「単体じゃウィンを倒せないよ。どうするつもり？」

「ちゃんと手は打ってるよ。魔法カード《次元融合》！」

！あれは…！

「ライフを２０００払って、お互いに除外されているモンスターを可能な限り特殊召喚する！」

《次元融合》
通常魔法（禁止カード）
２０００ライフポイントを払う。
お互いに除外されたモンスターをそれぞれのフィールド上に可能な限り特殊召喚する。

ブラック・マジシャン・ガール　ＬＰ／３６５０→１６５０

「召喚するのは《マジシャンズ・ヴァルキリア》と《ブラック・マジシャン・ガール》か～？」

「当ったり～！」

《マジシャンズ・ヴァルキリア》　ＡＴＫ／１６００

《ブラック・マジシャン・ガール》　ＡＴＫ／２０００

これでブラック・マジシャン・ガールの場には、２体の《マジシャンズ・ヴァルキリア》と彼女自身――《ブラック・マジシャン・ガール》が揃った。

「ブラボー！ブラマジガール！」

「ブラマジガールは伝説のデュエルキング武藤遊戯のデッキにしか入っていないはずだが…」

「案外本物だったりしてな」

「さあ！みんな行くッスよ～！１！２！３！」

「バトル！」

みんなノリノリだ。ついていけないよ…。

「《ブラック・マジシャン・ガール》でウィンを攻撃！」

「せ～の！」

「ブラック・バーニング！」

『うわっ！』

桃色の光弾が発射され、ウィンはその爆発に飲み込まれた。

俊也　ＬＰ／３２００→３０５０

「くっ、ウィン…！」

「まだまだ！今度はダイレクトアタックしちゃいま～す！《マジシャンズ・ヴァルキリア》の攻撃！」

「せ～の！」

「ダブ～ル！」

「マジ～ック！」

「イリュージョン！」

だから何このノリ！？ってうわっつ！？

俊也　ＬＰ／３０５０→１４５０

「俊也様！」

「このままダイレクトアタックを受けたら負けてしまいますわ！」

「どうすんのよこれ！？」

「罠カード《ダメージ・コンデンサー》！戦闘ダメージを受けた時、手札を１枚捨てて発動できる！受けたダメージの数値以下の攻撃力を持つモンスター１体をデッキから特殊召喚する！」

《ダメージ・コンデンサー》
通常罠
自分が戦闘ダメージを受けた時、手札を１枚捨てて発動する事ができる。

その時に受けたダメージの数値以下の攻撃力を持つモンスター1体をデッキから攻撃表示で特殊召喚する。

「受けたダメージは１６００！攻撃力１６００の《サーチ・ストライカー》を特殊召喚する！」

今の僕と同じ格好のモンスターが、両腕に武器を装備して現れた。

《サーチ・ストライカー》
効果モンスター
星４／風属性／戦士族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１２００
このカードが裏側守備表示モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算を行わず裏側守備表示のままそのモンスターを破壊する事ができる。
この効果を発動した場合、このカードはバトルフェイズ終了時に守備表示になり、次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない。

《サーチ・ストライカー》　ＡＴＫ／１６００

「おっと、俊也選手、自分がコスプレしているモンスターを召喚したぞ！」

「これじゃ、攻撃できないな…。カードを1枚セットしてターンエンド！」

ブラック・マジシャン・ガール
ＬＰ／１６５０
手札／１
モンスター／《マジシャンズ・ヴァルキリア》（ＡＴＫ／１６００）

《マジシャンズ・ヴァルキリア》（ＡＴＫ／１６００）《ブラック・マジシャン・ガール》（ＡＴＫ／２０００）
魔法・罠／リバース×１

「何とか凌ぎ切ったか…」

「でも、状況はかなりまずいよ」

「確かに、《マジシャンズ・ヴァルキリア》が場にいる限り、俊也は他の魔法使い族モンスターを攻撃出来ない」

「そうか…1体のヴァルキリアが他の1体を守り、他の1体がそれを守っているってわけか」

「ブラマジガールのデッキのモンスターはおそらく魔法使い族のみ。このままだとモンスターでの攻撃ができない」

このまま持久戦に持ち込まれるとまずい。早くあのロックを何とかしないと…！

「行くぞ！僕のターン！魔法カード《強欲な壺》を発動！カードを2枚ドローする！さらに魔法カード《壺の中の魔術書》！お互いにカードを3枚ドローする！」

《壺の中の魔術書》
通常魔法（漫画オリジナル）
互いのプレイヤーはデッキからカードを3枚ドローする。

引いたのは…よし！これなら勝てる！

「まず、速攻魔法（サイクロン）を発動！その伏せカード１枚を破壊する！」

破壊したのは《魔法の筒》。このまま攻撃していれば負けていた。

「魔法カード《死者蘇生》を発動！墓地の《憑依装着－ウィン》を特殊召喚する！」

『私もまだ行けるよ！』

《憑依装着－ウィン》　ＡＴＫ／１８５０

「そして、魔法カード《融合》！フィールド上の《憑依装着－ウィン》と《サーチ・ストライカー》を融合する！」

ウィンと《サーチ・ストライカー》が時空の渦に飲み込まれる。

「融合召喚！《風霊騎士ウィン》！」

渦から現れたのは、鎧を身に纏い槍を携えたパートナーだ。

《風霊騎士ウィン》
融合・効果モンスター（オリジナル）
星６／風属性／魔法使い族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ１５００
「ウィン」と名のついたモンスター＋風属性モンスター
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカード以外の自分フィールド上の風属性モンスターの攻撃力は５００ポイントアップする。
１ターンに１度、手札からモンスターを１体墓地に送ることで、自分の墓地からレベル４以下の風属性モンスター１体を特殊召喚する事ができる。

《風霊騎士ウィン》　ＡＴＫ／２５００

「何だあのモンスター？」

「素敵！」

『俊也、融合したのはいいけど、あのロックをどうやって解くの？』

「（心配ないよ。このターンで終わらせる！）ウィンの効果発動！手札からモンスターを１体墓地に送り、自分の墓地に存在するレベル４の風属性モンスター１体を特殊召喚する！手札から《シールド・ウィング》を墓地に送り、《サーチ・ストライカー》を特殊召喚！ウィンド・コンダクト！」

『もう１度力を貸して！』

槍から竜巻が発生し、その中から《サーチ・ストライカー》が呼び戻された。

《サーチ・ストライカー》　ＡＴＫ／１６００

「そして、風霊騎士は場にいる間、味方の風属性モンスターの攻撃力を５００ポイントアップさせる！」

《サーチ・ストライカー》　ＡＴＫ／１６００→２１００

「攻撃力が《ブラック・マジシャン・ガール》を上回った！」

「なんだよ俊也！大人気ないぞ！優しくねえ！」

「俊也君、酷いよ～！このままじゃブラマジガールが負けちゃうよ～！」

「ギャルが相手でも手を抜かず…さすが、極悪非道の風嶺俊也」

「そこまで言われる筋合いはないと思うんだけど！？手を抜かないのは当然でしょ！」

「そうよ！そっちはロックかけてるんだからいいじゃない！」

思わずツッコんだら女子の観客も反論してくれた。何だろう、観客の大部分が僕を応援する女子とブラック・マジシャン・ガールを応援する男子に分かれてる気がする…。

「とにかく、どうするの？攻撃はできないよ？」

「できないなら、その原因を取り除けばいい。リバースカードオープン《リビングデッドの呼び声》！墓地の《デブリ・ドラゴン》を特殊召喚する！」

《デブリ・ドラゴン》　ＡＴＫ／１０００→１５００

「そして、《サーチ・ストライカー》と《デブリ・ドラゴン》をリリース！」

「最上級モンスターを出す気か！？」

「こいつが僕の切り札だ！アドバンス召喚！《始祖神鳥シムルグ》！！」

２体と入れ代わりで舞い降りたのは、金色に輝く神鳥だ。

《始祖神鳥シムルグ》
効果モンスター
星８／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ２９００／ＤＥＦ２０００
このカードが手札にある場合通常モンスターとして扱う。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、風属性モンスターの生け贄召喚に必要な生け贄は１体少なくなる。
風属性モンスターのみを生け贄にしてこのカードの生け贄召喚に成功した場合、相手フィールド上のカードを２枚まで持ち主の手札に戻す。

《始祖神鳥シムルグ》　ＡＴＫ／２９００→３４００

「おおっと！ここで俊也選手の切り札が登場だ！我らがブラック・マジシャン・ガールにどう対抗するのか～！」

「いや…これはまずいぞ！」

「え？」

翔君、悪いけどこのターンで決着だよ。

「シムルグの効果発動！風属性モンスターのみのリリースでアドバンス召喚に成功した時、相手フィールド上のカードを２枚まで手札に戻す！」

「え！？それじゃ…」

「《マジシャンズ・ヴァルキリア》２体を手札に戻す！アゲインスト・ブラスト！」

シムルグが翼を広げて突風を巻き起こし、２体のヴァルキリアを吹き飛ばした。

「ロックが解除された！」

『なるほど！これなら攻撃できる！』

「バトル！《風霊使いウィン》で《ブラック・マジシャン・ガール》に攻撃！エメラルド・ジャベリン！」

『行くよ！ハァッ！』

ウィンは緑の風を纏った槍を投げ付け、《ブラック・マジシャン・ガール》を貫いた。槍は宙返りすると持ち主の手元に戻ってきた。

ブラック・マジシャン・ガール　ＬＰ／１６５０→１１５０

「う…うぅ…」

「あ…ブラマジガールが負けちゃう…」

「まあ、勝負あったな」

「ああ…」

「やった！」

「俊也君の勝ちよ！」

観客席の温度差が激しいな。勝っても負けても罪悪感が…。

「はいはい！みんながっかりしないで！」

「！」

僕が攻撃を躊躇っていると、急にブラック・マジシャン・ガールが声を張り上げた。

「最後まで楽しもう！私、今日はみんなに応援してもらえてとっても幸せだよ！さあ、最後なんだし思いっ切りやっちゃって！」

今ので罪悪感が完全に消えた。

「…そうさせてもらうよ。《始祖神鳥シムルグ》でダイレクトアタック！アンセスター・トルネード！！」

シムルグの金色の竜巻が残りライフを削り切った。

ブラック・マジシャン・ガール　ＬＰ／１１５０→　０

俊也　ＷＩＮ

「あ～！やっぱり負けちゃった…。でも最高！楽しかったよ～！」

「最高！楽しかったぜ！よくやったよ！」

「本当に、とても幸せなデュエルでしたね。万丈目さん…じゃなく

てＸＹＺ－ドラゴンさん」

「まあな」

「これって僕が勝ってもよかったのかな？」

ステージから離れて疑問を口に出す。女子の観客はご満悦の様子だけど…。

「よかったんじゃない？楽しいデュエルだったんでしょ？」

あ、明日香さんいつの間に。

「うん。最高だよ」

「きっと彼女もそう思ってるさ」

「正体は謎だがな…」

「（精霊だけどね）」

あ、ブラック・マジシャン・ガールが寮の裏に行った。…ちょっと会いに行こう。

僕はみんなに一言断ってからブラック・マジシャン・ガールを追った。

寮の裏に行くと、案の定ブラック・マジシャン・ガールがいた。

「あの…」

『え？』

「さっきはありがとう。いいデュエルだったよ」

『どうも』

『あ、やっぱり私が見えるんだ。ウィンちゃんだっけ？私と同じ精霊みたいだし』

向こうもある程度は気づいてたらしい。実体化は解いてるみたいだ。

「やっぱりここにいたか」

「あれ、紅刃？月沙も」

振り返ると紅刃と月沙も来ていた。

「ブラック・マジシャン・ガール、お前どこから来たんだ？ここの生徒じゃなさそうだし」

『え？ええ！？私が見えるの！？』

「うん。私達は精霊が見えるからね」

『将人と十代も見えるけど…あの2人はどうしたの?』

「あいつらなら、向こうでデュエルしてるぞ」

「青コーナー、孤高の死神《天刑王　ブラック・ハイランダー》こと銘丈将人!」

翔君の実況が聞こえた。コスプレデュエルは続行するみたいだ。

「で、お前は何者だ?」

『私は精霊界から遊びに来ただけ。丁度お師匠様との修行が休みだから』

『お師匠様』ってやっぱりブラック・マジシャンの事かな?公式でそういう関係だし。

「お師匠様って…マハードさんの事?」

『!?どうしてそれを!?』

「あ、図星?って事は、あなたの名前はマナかな?」

『ええ!?何で知ってるの!?』

あの~、マハードって誰?それに、何で本名当てられたの?

「まあ、話せば長くなるんだけど…実はかくかくしかじかみさわみさわってわけなんだ」

『そんな事が…』

ちょっと月沙さん？そんな簡単に転生者の話しちゃっていいの？

とにかく、マハードとマナがアテムの《ブラック・マジシャン》と《ブラック・マジシャン・ガール》だというのはわかった。

「って、疑わないんだ…」

『だって面白いじゃない、そういう話！』

「信じるなとは言わないけど、そんな基準で判断していいのか？」

紅刃、同感だよ。

「でも、アテムは冥界にいるんでしょ？マナとマハードさんも冥界にいるんじゃないの？」

『ああ、精霊界は嘘。冥界から来たって言っても信じてくれないって思ってたから』

「冥界から干渉できるのかよ？」

『ワープホールをこっそり使って、ね』

「って事は無断じゃねえか！？」

『いいじゃない！修行の遠征から帰ってきたばかりなんだから！』

「遠征なんてあるんだ…」

「ったく、ばれないうちに帰れよ…（俺が冥界に行った時に会わなかったのは丁度遠征に行ってたからか…）」

『わかってま～す！』

ブラック・マジシャン・ガールもといマナは明るく返事をした。

まあ、気持ちはわからなくもないけどね。

さてと、学園祭はまだ長いし、外して置きっぱなしの武器を取りに行くついでにコスプレデュエルの観戦でもしようかな。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第３０話　学園祭はたまに意味不明なクオリティの作品が飛び出す（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「私が作った衣装、ちゃんと着てくれてるみたいね」

フィレス『ガルッ』

勇香「お前、どうやって作ったんだ？盗聴器からは凄い音が聞こえたんだけど…」

璃音「秘密よ。さ、考察に入るわよ」

勇香「おい…。まあ、いいや。今回は何を紹介するんだ？」

璃音「俊也の切り札モンスター《始祖神鳥シムルグ》よ」

《始祖神鳥シムルグ》
効果モンスター
星８／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ２９００／ＤＥＦ２０００
このカードが手札にある場合通常モンスターとして扱う。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、風属性モンスターの生け贄召喚に必要な生け贄は１体少なくなる。
風属性モンスターのみを生け贄にしてこのカードの生け贄召喚に成功した場合、相手フィールド上のカードを２枚まで持ち主の手札に戻す。

璃音「手札で通常モンスターとして扱う珍しい効果を持つモンスタ

ーよ。わずかながら《古のルール》などの通常モンスターのサポートを受ける事ができるわ」

勇香「風属性モンスターだけをリリースすれば、相手のカードを2枚まで手札に戻せる。魔法や罠も戻せるってのがおいしいな」

璃音「風属性モンスターのリリースを1体減らす効果もなかなか強力ね。ただ、《風帝ライザー》や《トラファスフィア》みたいにアドバンス召喚する事で初めて効果を発動するモンスターは効果を使用できないから注意しなさい」

勇香「風属性の通常モンスターの2体分のリリースになれる《ウィンドフレーム》の効果を使える唯一のモンスターだ。風属性の上級モンスター全員に使える《暴風小僧》を使った方が早いけど、こっちは攻撃力が高めだからな。使うかどうかはお前次第だ」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

ようやく俊也にデュエルさせる事ができました。今回使用した《風霊騎士ウィン》はＨＩＲＯさんが投稿してくださったカードです。ただ、今後の展開も考えて、勝手ながら融合素材を少し変更させて

いただきました。少し範囲が広くなりすぎましたが、これればかりはどうしようもありません…。

それにしても、我ながら俊也の切り札が登場するのが遅いですね。もう少し俊也の出番を増やしたいけど三幻魔編の間はデュエルさせられるかどうか…。

次回も学園祭で行きますが、デュエルは入れない予定です。

では、また次回！

第３１話　無断と無意識は恐ろしい（前書き）

今回も学園祭です。デュエルはありません。

それではどうぞ！

第３１話　無断と無意識は恐ろしい

ＳＩＤＥ／月沙

今は午後1時ジャスト。レッド寮で開催されたコスプレデュエルは大成功だった。

レッド寮の催しは午前中で終了で、午後はみんな自由行動みたい。

私と紅刃はブルーだけど、ブルーでやる喫茶店の担当の時間は12時から1時まで。丁度フリーになったところ。

スイレン達はいつの間にかいなくなっていた。適当に学園を回ってるんだと思う。

肝心なのはここからだ。衣装が届いた後、璃音からメールがあったんだけど、内容はこうだった。

『衣装、どうかしら?自信はあるわよ?後で写真送ってちょうだいね』

これはもう集合写真を撮ったから大丈夫。問題はその後。

『それと、学園祭は紅刃と2人で回ったらどう?彼の事好きなんでしょ?』

赤面したのは言うまでもないね。

何で知ってるのかを聞いたらこう返ってきた。

『フォッタが教えてくれたのよ。その場にいた遊星とジャックとクロウ、後ブルーノと勇香も知ってるわよ。私とクロウは薄々感づいてたけどね』

とりあえず、あの自称神様（笑）には制裁を加えておいた。

でも、璃音の意見には賛成だ。私は紅刃の事が、その、す、好き…だし、少しでも長く一緒にいたいし…。ほら、学園祭とかの大きなイベントって好きな人とか恋人とかと一緒に回ったりするものでしょ？私もそうしたいな～、なんて…。

とにかく、まずは紅刃を誘わないと何も始まらない！頑張れ私！

今は丁度さっきまで働いてた喫茶店を出たところ。誘うなら今だ！

「さてと、どこに行くかな…」

「ね、ねえ、紅刃」

「ん？」

「あの、よ、よかったらその…一緒に回らない？」

「そうだな…。それじゃ、一緒に回るか」

「本当！？」

「あ、ああ…」

よし！上手く誘えた！今日は目一杯楽しもう！

「（何かいつもと様子が違う気がするけど…気のせいか？）」

ＳＩＤＥ／将人

俺は俊也と一緒にイエローの縁日を回っている。祭りもたまにはいいもんだ。フランクフルトをかじりながらそんな事を考えていた。

「次はどこに行く？」

「そうだな…ん？」

考えようとして、遠くにいるある奴らが視界に入った。

「これがタコ焼きか…」

「初めて見るわけではないだろう？」

「食べた事はない。新鮮な感じがする」

一組の男女のようだ。女はタコ焼きをゆっくり口に運んだ。

…ん？あいつら、ロディスとリーシェじゃないか？だが、２人共

ブルーの制服を着ている。

「……美味い」

「美味くなければ店に出る意味がないだろう」

「ここまで美味い物を食べられるとは…！」

「そこまで感動する事か？」

リーシェらしき人物は次々とタコ焼きを食べていく。精霊は3分間しか実体化できないはず。だが、マナ（本人から聞いた）は3分以上実体化できていた。なぜだ？

「…よし、もう1つ買いに行こう！」

「よほど気に入ったんだな…」

2人はそのままタコ焼き屋に行ってしまった。

「…」

「どうしたの？」

「…いや、何でもない」

考えるのも面倒だ。見なかった事にしよう。

「かき氷でも食うか」

「あ、いいね！」

俺達は近くのかき氷屋に足を運…ん？

「かき氷っつったらやっぱメロンだろ！」

「いや、俺はブルーハワイが好みだ」

「私はイチゴですね」

そんな会話をしながら歩いてきたのは、どこからどう見てもヒジュラ達だった。

ヒジュラはレッド、ゴーズとカイエンはブルーの制服を着ている。

いや、それは後回しだ。

「お前ら、何をやってるんだ？」

さすがに無視する気が失せたから、声を掛ける事にした。

「ん？お、主と俊也じゃねえか」

「お前ら、３分間しか実体化できないんじゃなかったのか？」

「修行を積めば実体化できる時間も延びる。パートナーの影響もあるから、将人達が強くなってきている証拠でもある」

「へえ…。ちなみに、何分実体化できるの？」

「さしずめ、３時間くらいですね」

「多っ!?凄い延びてる!」

こいつら、どんな修行をしているんだ?

「まあ、それは置いといてだ。せっかくの祭りなんだし、俺達精霊も実体化して参加しようぜって事になったんだ」

「他の人達も自由に回ってますよ」

なら、さっきのロディスとリーシェも見間違いじゃないみたいだな。

「ところで、その制服はどうしたの?」

「ああ、これか?俺の提案で予備の奴をパクッてきた」

「おい…」

まあ、こいつらしいというか…。だが、そのままの格好で表に出るわけにはいかないのもまた事実だ。大目に見てやるか。

ＳＩＤＥ／月沙

私と紅刃は地下のデュエル場に向かっている。何でも、この学園

祭でマジックショーをやる事が一昨日決まったらしく、私達もそれを見る事にした。

「もうやってるみたいだな」

「入ろっか」

というわけで会場にゴー。プログラムにも書いてなかったしどんな内容なのかわからない。さて、何をやってるのかな？

「それでは皆さん、次のマジックをお見せしましょう！」

あ、マジックをやってる最中じゃなくてよかった。やっぱり最初から見てないとわけがわからないもんね。

「あの人、テレビでたまに見るよな？」

「あ、そういえば…」

名前は忘れたけど、テレビとかでよくマジックをやってる人だ。有名人を生で見れるなんて、ちょっとラッキーだな。

「これは私のアシスタントにやってもらいましょうか」

「アシスタント？」

「それでは皆さん、ご注目ください」

「「え？」」

あれ？

「ここに秘密のアイテムがあります。今からこれを使って、Ｍｒ．クレバーを消してご覧にいれましょう」

「…おい、あいつは…」

仮面に黒い服、そしてあの特徴的な声は…！

「若〇…！？」

「いや、タイタンって呼んでやれよ」

以前廃寮で助けた若〇ことタイタンだった。マジックの修行に出るとか言ってたけど、まさか有名人のアシスタントをしてるなんて…。

「では行きます！１、２、３！」

タイタンが持っている黄色い立方体に埋め込まれた水晶玉が光り出すと、クレバーさんがみるみる消えていき、最終的に完全に消え去った。

「凄え！」

「本当に消えたぞ！？」

「どこに行ったの？」

効果は他の人達にも効いてるみたい。確実に腕を上げている。

「それでは、Ｍｒ．クレバーを呼び出してみせましょう」

少し経ってから、タイタンはまた立方体を掲げた。

「1、2、3！」

「うおっ！？」

「あっ！」

後ろが急に騒がしくなった。振り返ってみると、いつの間にか移動したクレバーさんが現れるところだった。

「すっげえ…」

「廃寮での時とは大違いだ…」

私と紅刃はステージに戻るクレバーさんを見ながら、驚きを隠せないでいた。

私達はマジックショーが終わった後、舞台裏にいるタイタンに会いに行った。

「あ、紅刃、月沙！」

「ん？お前らも来てたのか？」

途中でばったり会ったのは、十代と翔君、隼人君、明日香さんだ。
偶然にも、あの時廃寮にいたメンバーが揃った。

「ああ。今からタイタンに会いに行くところなんだけど、一緒に行くか？」

「お、目的は同じか」

「私達も今行くところだよ」

「それなら一緒に行くんだな！」

そして、控室前。久々に会うから何か緊張するな…。

「うう…何か緊張するッス…」

「すいませ～ん！」

「ちょ、アニキ！？」

十代は緊張している翔君もお構いなしにノックした。こういう性格の人が大物になれる素質を持ってるのかな？

「誰です…おお、お前達は！」

ドアを開けたのはタイタンだった。

「よお、久しぶりだな」

「まさかあなたが来てるなんてね。びっくりしたわよ？」

「知り合いの人達かね？」

タイタンの後ろから顔を出したのはＭｒ．クレバーさん本人だ。

「はい。私を過ちから救ってくれた恩人達です」

「そうか、君達が…」

「Ｍｒ．クレバーさんなんだな！」

「こんなに間近で会えるなんて感激ッス！」

「私も君達に会えて嬉しいよ」

目を輝かせている翔君と隼人君に、物怖じもせずにやんわりと対応するクレバーさん。さすが有名なマジシャン、緊張に強い。

「君達の事はタイタンから聞いているよ。特に真川紅刃君」

「はい？」

「君はタイタンを命の危機から救うだけでなく、人生をも変えたそうじゃないか」

「人生って、んな大袈裟な…」

紅刃は大きく評価されても謙遜している。こういうところも好き

なん…いやいやいや、今は関係ないって！

「私の弟子が世話になったね。君の活躍がなかったら私は彼と巡り会う事はなかっただろう。感謝してるよ」

「いえ、礼を言われるほどの事は…は？弟子？」

「私はあれからクレバー師匠に弟子入りしたのだよ」

「マジか！？」

「ええ！？嘘！？」

まさかの弟子入り！？いや、アシスタントをしてたから当然なのかもしれないけど…。

「彼の姿を消すマジックの才能は本物だよ。練習の仕方が悪かっただけで、私がアドバイスをしたらぐんぐん上達していった。今のタイタンならそこらのアマチュアよりもレベルが高いだろう」

「凄い…この短期間でそこまで…」

明日香さんが驚きの声を漏らす。タイタンがそこまでやるとは思わなかった。見直したよ。

「だが、マジックの世界はたった1つの術だけではやっていけない。今は師匠の下で他のマジックの修行を積んでいる」

向上心も立派だ。タイタンってこんなキャラだっけ？

「何と…。そういや、どうして急にここに来たんだ？」

「それは、タイタンが『次のショーはデュエルアカデミアでやりたい』という希望があったからだよ」

「お前達に、今の私を見てもらいたくてな」

うん、最終的に助けたのは紅刃だけど、原作ブレイクして本当によかった。この人凄くいい人じゃん。

「そうか…。お前、初めて会った時よりずっと生き生きしてるじゃねえか。闇のデュエリストなんかよりもずっと似合ってるぞ？」

「もう闇のデュエルはごめんだ。こうして真っ当に生きる事がここまで素晴らしいとは思わなかった。本当にありがとう」

「ん…まあ、よかったな。これからも頑張れよ」

紅刃は照れてるからか、視線を少しずらして答えた。

「さて、私達は次のショーの準備がある。面会はここまでだ」

「では、また会おう」

「ああ、またな」

「次はもっと凄いマジックを見せてね！」

「そのつもりだ。私も次に会う時までにさらに精進しよう」

こうして、タイタンとの面会は終了した。あの人、本当は凄い人なんだ。次はどんなマジックを見せてくれるのかな。楽しみにしてよう。

「タイタンって凄えな！マジックはやらないけど、俺も負けてられないぜ！」

十代は相変わらずの熱血ぶりを見せてくれている。気持ちはわかるけどね。

「意気込むのはいいけど、今は学園祭を楽しみましょう」

「それもそうだな。次は…ブルーの喫茶店はまだ行ってなかったな。行ってみようぜ！」

「あ、待ってよアニキ～！」

「置いてかないでほしいんだな！」

十代はブルー寮にダッシュで向かってしまい、翔君と隼人君は慌てて追いかけていった。

「私も喫茶店に行こうかしら。ジュンコとももえもいるだろうし」

「俺はイエローの縁日でも見てくかな」

「あ、私も縁日に行くよ！」

「それじゃ、ここからは別行動ね」

「ああ、またな」

明日香さんは喫茶店に行く前に、すれ違いざまに私の耳元に顔を寄せてきた。

「（2人きりなんだから頑張りなさいよ）」

「!?ちょ…」

私が何か言う前に明日香さんは走り去ってしまった。

明日香さんとジュンコさんとももえさんは、私の恋愛感情について知っている。紅刃が冥界から帰ってきた2日後に、3人に問い詰められて仕方なく打ち明けたんだけど、ジュンコさんとももえさんが物凄い勢いだったな…。

「月沙、どうした?顔赤いぞ?」

「ふぇっ!?い、いいいや、ななな何でもない!は、早く行こう!」

「お、おい、ちょっと!」

あああああ!顔が熱い!きっと真っ赤だ!明日香さんの馬鹿ぁあああ!!

「（さっきの悲鳴、妙に可愛かったな…いやいや、何考えてんだ俺は?変態か?）」

な、何とか落ち着いた…。今は丁度イエローの会場に着いたところ。ここで平常心を取り戻せてよかった。よくやった、私。

「（何で急に走り出したんだか…。ま、気にしないでおくか）思ったよりいろいろやってるな」

確かに、出店はそれなりに多い。輪投げ、タコ焼き、かき氷、りんご飴、射的…射的？

「射的もやってんのか。寄ってくか？」

「うん！それじゃ、行こっか！」

というわけで射的屋に行く事にした。

「お、月沙君に紅刃じゃないか」

「あ、三沢君！神楽坂君も！」

射的屋で店番をしていたのは、意外にも三沢君と神楽坂君だった。

「お前ら、ここの担当なのか？」

「まあな。どうする？やってくか？」

「やるに決まってるじゃん！値段は？」

「３発で２００円だ」

神楽坂君の質問の答えは当然ＹＥＳ。迷う事なく２００円を払った。私はお祭りに行く時、必ず射的屋に立ち寄っていろいろ撃ち落としてきた。ていうか、正直負ける気がしない。

景品はカードみたい。プラスチックのケースに入ってる。あ、《メタル・リフレクト・スライム》だ。

《メタル・リフレクト・スライム》
永続罠
このカードは発動後モンスターカード（水族・水・星１０・攻０／守３０００）となり、自分のモンスターカードゾーンに守備表示で特殊召喚する。
このカードは攻撃する事ができない。（このカードは罠カードとしても扱う）

シンクロには使えないけど守備力が３０００もあるから壁にできるし、リリース要員にも最適だ。丁度持ってないし、あれは貰おう。

２つ目は…《因果切断》か…。あれも使えるな、貰いっと。

《因果切断（いんがせつだん）》
通常罠
手札を1枚捨てて発動する。
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択してゲームから除外する。
その後、相手の墓地に存在する除外したモンスターと同名のカードを全てゲームから除外する。

で、３つ目はどうしよっかな…。

「あ、《トラップ・ブースター》まであるのかよ？」

《トラップ・ブースター》
速攻魔法（アニメオリジナル）
手札を１枚捨てる。
このターンのエンドフェイズまで、手札から罠カード１枚を発動する事ができる。

「ほしいな…」

「ん？お前なら罠関係のカードはたいてい揃えていると思ってたんだが…」

「パック買ってもなかなか当たらねえんだよ。おかげでカードが結構被っちまって…。たまにレッドの奴らに分けてやってるくらいだ」

…Ｔａｒｇｅｔ，ｌｏｃｋ　ｏｎ！

「神楽坂君、銃３丁借りるよ」

「は？」

私はコルク銃３丁にそれぞれコルクをセットした。とある村でＫ１が使った戦法だ。…いや、的はぬいぐるみみたいに大きいわけじゃないから特にやる意味はないけど、何かかっこいいじゃん？それに、１発撃つ毎にいちいちコルクをセットし直すのめんどくさいし。

「さてと…」

コルク銃を両手で2丁構える。

「お、おい！2丁流で撃ち落とせるのかよ！？」

「両手で1丁の方が安定すると思うんだが…」

「心配無用だ」

動揺する2人に紅刃が軽く答える。それを合図に、私は引き金を交互に引いた。

まず1発目、標的は《トラップ・ブースター》、命中、撃破。

続いて2発目、標的は《メタル・リフレクト・スライム》、命中、撃破。

空になったコルク銃を両方手放し、残りの1丁を右手に持ち替えて3発目を撃った。

標的は《因果切断》、命中、撃破。

ここまでの動作にかけた時間、約2秒。狙った獲物は無事に全部ゲットした。

「「……」」

「こいつの射撃の腕はそこらの警官や自衛隊よりもずっと上だ。射的で的を外したところは、少なくとも俺は1度も見た事がない」

三沢君と神楽坂君は唖然としている。そこまで驚く事かな？

「あの…景品撃ち落としたから貰えるよね」

「あ、ああ！ちょっと待ってろ」

神楽坂君は落ちた景品を拾う作業に入った。

「しかし、ここまで見事な射撃は見た事がないな。的を全て最も倒しやすいポイントに当てている」

「（だから銃型のデュエルディスクを持ち歩いてんだろ？）」

「（射撃は得意中の得意だからね。アビリティも銃を通した方が精度高いし）」

「（なるほど…）」

アビリティ絡みの話は小声にしとく。神楽坂君はアビリティの事知らないし、あまり口外するわけにもいかないしね。

「ほら、撃ち落とした景品だ。ちゃっかりレアカードばかり狙ったな？」

「そりゃ、持ってなくて自分のデッキに使えそうなカードがあったらほしいでしょ？」

神楽坂君からカードを受け取った。《メタル・リフレクト・スライム》は元の世界じゃパックに入ってないんだよなぁ…。よかったよかった。

あ、そうそう、忘れないうちに…。

「紅刃、これあげる」

「え？」

私は1番最初に撃ち落とした《トラップ・ブースター》を紅刃に渡した。

「これって…！いいのか？」

「元々そのつもりで取ったんだし、遠慮しないで」

「そうか。サンキュな！」

私からカードを受け取った紅刃は、嬉しそうにお礼を言った。

…今ドキッて来た。

「ど、どういたしまして…」

目を逸らしちゃった。今絶対顔が赤い自信がある。あれ？これってもしかして末期症状？

「どうした？また顔が赤いけど…」

「ええ！？い、いや別に！と、とにかく次の店にレッツゴー！」

ああもう！何かテンションがおかしい！とにかく落ち着け私！

「あ、おい、待てって！…また走ってったよ…。三沢、神楽坂、それじゃ！」

「ああ、来てくれてありがとう」

「…三沢、あの2人…本当に付き合ってないんだよな？」

「そのはずなんだが…何か自信なくなってきたな…」

よ、よし、落ち着いた。平常心だ平常心。

「とりあえず、タコ焼きでも買って食うか？」

「そ、そうだね」

私達は屋台でタコ焼きを買って、近くのベンチに腰掛けた。

そういえば、タコ焼きってあまり食べないんだよな…。久しぶりだ。

とりあえず、食べよっか。

「「…あ、美味しい！」」

あれ？

右を見ると、私と同じように隣のベンチに座ってタコ焼きを持ったスイレンが私を見ていた。

……あれ？

「す、スイレン！？」

「姫様！？」

「あ、ウィンとマナもいるじゃねえか！」

「あ、どうも～」

3人共実体化してアカデミアの制服を着ている。マナはコスプレデュエルの件でさすがに目立つからか、髪の色を茶色に変えている。魔法か何かかな？

「お前ら何やってんだ？」

「実はかくかくしかじか働け元キンというわけなの」

「なるほど、事情はわかった。でも、あいつはちゃんと職探ししてるからな？半ニートだからな？」

「何で半分？」

「よく1杯３０００円のコーヒー飲んでるから」

「あ～、なるほど…」

「あの…何の話？」

「へっくし！」

「どうした元キン、風邪か？」

「誰が元キンだ！せめて元キングと呼べ！この俺が風邪など引くか！…くそ、なかなかいい職が見つからん」

「お前はまず接客の仕方を学べ」

「…ところで何でお前らはブルーアイズマウンテン飲みながらカタログ見てんだ？６０００円誰が出すと思ってんだコラ」

「マナは人間のパートナーいないよね？なんで実体化できるの？」

「私はちゃんと修行してるからね♪」

さすが最上級魔術師の弟子。

「そういや、お前らいつの間に仲良くなってんだ？」

「私達は3人共同性の魔法使い族ですから」

言われてみれば確かに。ならここまで早く打ち解けてるのも納得がいく。

「さあてと、次はどこに行こうかな～！」

『その前に私の許可を取れ』

「は～…い…？」

マナが呑気に立ち上がると、目の前にはどこかで見たような人がいた。

「…お師匠様、いつからそこに…？」

『たった今だ』

…どこからどう見ても《ブラック・マジシャン》こと マハードさんだ。そうか、もうばれちゃったか…。

『無断で冥界のワープホールを使うなと前に言っただろ！』

「すみませんでしたぁあああ！！」

速攻で土下座するマナ。本当に無断だったんだ…。

「あんたマハードさんだろ？大目に見てやれよ」

『！？なぜ私の名を…！？それに私が見えるのか！？』

「その事については私が説明します。とりあえず、ここだと人目に付きますし、少し移動しましょう」

虚空に話し掛ける不審者のレッテルを貼られるのはごめんだからね。私はみんなを人目の付かない場所に連れていった。

『なるほど…。しかし、そんな事が本当に起こり得るものなのか？』

「でも、私は実際この時代に生きてますし、遊戯さんやアテムの事も大体知ってますよ？」

私はいつも修行に使っている広場で、マハードさんに転生者関連の事と私達が精霊を見れる事を説明した。

『むう…私やマナの名前を知っているところを考えると、信じるしかないな』

半信半疑だけど、何とか信じてもらえたみたいだ。

『しかし、これと今回のマナの行動とはまた別の問題だ』

「う…」

まあ、勝手な行動をしちゃったんだし、私達もこれ以上は介入できないよね。

『ハァ…。遠征の後だから余暇としてこの学園祭に参加するくらいは許してやろうと思っていたら、また勝手に行動するとは…』

「え？」

「…要するに、元から連れてってやるつもりだったのか」

「えぇぇぇぇぇ！！？そんな～…」

あらら…。じゃあ、大人しくしてたらお咎めなしで学園祭に行けたんだ。

『だから、今回は見逃してやろう』

「本当！？」

『ただし、次はないと思え』

「は～い！」

マナは師匠に許してもらっていつもの調子を取り戻した。マハードさんってこういうところは優しいのかな？

『私も適当に回るとしよう』

「制服なら予備の物が置いてありますよ。ご案内致します」

「私達も行く？」

「いえ、姫様と紅刃様はこのまま学園祭をお楽しみください！」

私達が行く必要はないならそれはそれでいいけど…。

「それじゃ、行きましょうか」

『うむ』

スイレン達は制服を取りに行っちゃった。

「あ、そうそう」

ウィンが思い出したように声を上げると、私達の方に振り返って悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「どうぞ『お2人で』ごゆっくり～」

「！！？」

「は？」

私が何か言う前に、ウィン達は…ってあれ？デジャヴ？

「月沙、また顔が赤いけどどうかしたか？」

だあぁぁぁぁぁぁ！！これで3回目！

「なななな、な、何でもない！何でもないから！うん、大丈夫！」

「そうか…？」

「ほ、ほら、時間ももったいないし、行こ！」

「うわっと！？」

私は紅刃の手を引いて走り出した。な、何とか置き去りにしなくて済んだけど…あれ？手を引いて…？

今手を繋いでる！？ちょ、ちょっと待って！まだ心の整理が…いやそうじゃなくて、あああ！もうわけがわからない！

とにかく誰か私を静めて！カムバック平常心！

学園祭も無事に終了して、今はレッド寮がキャンプファイヤーで盛り上がってる。

私？私は何とか平常心を取り戻せたよ。後は特に暴走する事なく学園祭を楽しめた。

私と紅刃はレッド寮の裏で星空を眺めている。綺麗なのに、普段はあまりみないんだよね…。

「学園祭、楽しかったね」

「そうだな」

話があまり続かない。もどかしいな、もう！

「…強くならねえとな…」

「え？」

不意に、私の右に並んで座っている紅刃が呟いた。この雰囲気で出てくる言葉にしては、ちょっと変だ。

「いや、もしセブンスターズやニュートラルが世界をめちゃくちゃにしちまったら、この空も二度と見れなくなるかもしれないってさ…」

紅刃は静かに話し始めた。十代達が騒ぐ声が一緒に聞こえる。

「祭りで馬鹿騒ぎして、楽しいデュエルをして、こうして星空を見て…そんな事すら、できなくなるのかもしれない。俺は前より強くなった。それは実感できる。ロディスもリーシェも、もっと強くなった。でも、それでもニュートラルには敵わない可能性だってある」

「そう…かな。紅刃は充分強いよ」

「いや、まだだ。俺はまだニュートラルの連中と直接戦ってない。洗脳されてた将人とのデュエルも数に入れたとしても、あの時は引き分けだった」

一旦言葉を切って、空を仰いだ。

「どこかで怖がってんだよな…。奴らと戦うのが」

…意外だ。

紅刃はいつだって、誰が相手でも全力で立ち向かっていってる。最後まで諦めないでカードを信じて、自分の信じる道をひたすら突き進むような奴だ。その紅刃が、私の前で弱気になるなんて…。

「相手がどんな奴かなんてさっぱりわからない。不思議だよな。そこら辺にいる不良やダークシグナーは何ともなかったのに、ニュートラルの事になると後ろ向きになっちまう」

「…」

「こうして過去に来てるけど、俺っている意味あんのかな、なんて考えたりもして…。どうしたんだろうな、俺…」

「…当然だよ」

「？」

「怖いと思うのは当たり前。そうやって自分を甘く見ない態度も強さの１つだよ」

「そうか…？」

「うん。でも、紅刃は１人で戦ってるわけじゃない」

「！」

「ロディスとリーシェはもちろん、俊也と将人もいるし、私だっている。みんな目的は同じ。私達はみんなで戦ってるんだよ」

「みんなで…」

振り返ってみれば、私はいつも紅刃から戦う勇気を貰っていた。紅刃だけじゃない。くじけそうになった時は、いつも仲間がついていた。だから、何度でも立ち上がれるんだ。

「何があっても、私達がついている事を忘れないで。独りじゃないんだから」

「…」

紅刃が助けてくれなかったら、将人が殴ってくれなかったら、今の私はなかったかもしれないし、もしかしたらここにすらいなかったかもしれないんだ。だから、今度は私が紅刃を助ける番。

「…ありがとな」

「！」

「この件に関してはどうもネガティブになっちまってさ。お前のおかげで楽になった。もう大丈夫だ」

紅刃はいつもと同じように笑いかけてくれた。またドキッてなったけど、何とか逃げ出したい衝動を抑える。

「お前らはもちろん、十代達も遊星達も頑張ってんだ。俺ももっと強くならないとな」

星空を見上げてそう言った紅刃は凄くかっこよかった。もう駄目

だ、私って本当に紅刃が好きなんだな。

いつも一緒にいるのに、紅刃は私の気持ちに気づいてくれない。

…やっぱり嫌だ。

私は紅刃と一緒に生きていきたい。それも依存しすぎない程度に。

今まではそうだったし、これからも、ずっと…。

「…！？」

気がつくと、紅刃の横顔は一瞬０距離にあった。

…あれ？０距離？

チョットマッテ、ワタシイマナニヤッタ？

「月、沙…？」

左の頬を抑えてびっくりしながら私を見ている紅刃。ええと、これはつまり…。

無意識に、紅刃の頬に…。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！？？

「あ、あはは、こ…これは、その…一瞬の気の迷いと言いますか…し、失礼しましたぁあああぁぁあああああ！！！」

無意識に何やってんだ私ぃいいぃぃいいいい！！？何で！？何がどうしてこうなったの！？恥ずかしすぎる！！

1回思いっ切り何かに打ち込んで心を落ち着けるしかない！どうするの！？どうするアイ◯ル！？いや違う！だからこんな時は、えええと…

「一！十！百！千！万丈目サンd「鳥頭ああああああ！！」ごふぁっ！？」

サンダーにダイレクトアタック！！いやだから違うって！

「ぐぅぅ…いきなり何を…」

「私とデュエルしろぉおおおおおおお！！」

「はあ！？」

とにかくデュエルだデュエル！私の気持ちが収まるまで何回でもやりまくる！

「さっさとデュエルディスク用意しやがれ鳥頭！」

「誰が鳥頭だ！」

「月沙さん、口調がおかしくなってるッスよ！？」

「知るかぱっつぁん！」

「ぱっつぁん！？ぱっつぁんって何！？」

「いいだろう！そこまで言うなら相手してやる！」

よし！まずはこいつをぶっ倒したらぁ！！

「ど、どうしたの、月沙…？」

「（顔が真っ赤だ…）…紅刃と何かあったか？」

「ええ！？」

それ聞くなあああああ！！！

「ええとその、あの、紅刃と星空見てて紅刃を励まして、それから…あああ！！思い出させんなぁぁあああ！！！」

「がふぅっ！？」

「将人！？」

さっきまで意識しないように頑張ってたのに唇の感触があああああ！！もういい！完全に静めるために全員ぶっ倒すってばよ！！

「何があったのかな…？」

「私にはわからん…」

最終的にはそこにいるまだ実体化中のマナとマハードさんにもデュエルしてもらう！ていうか今ここにいる人全員倒す！

「準備ができたぞ！」

「よし！行くぞ！」

「「デュエル！」」

さあ！私を満足させてみろおおおぉおぉおおお！！！！

ＳＩＤＥ／紅刃

月沙が走り去った後も、しばらくの間硬直していた。

あいつ、いきなり俺の頬にキスしてきた。なぜかはわからないけど、あいつ物凄く恥ずかしがってたな。顔が今日見た中で１番真っ赤だったし。

「グングニールでダイレクトアタック！フリージング・ジャベリン！！」

「ぐあああああ！？」

これってどう反応すればいいんだ？初めてだからさっぱりわからない。

「紅刃」

横を見ると、明日香がいた。なぜか《ハーピィ・レディ１》の衣装を着てたけどこの際ほっとくか。

「あなた、月沙に何をしたの？これ以上ないくらいに暴走してるんだけど…」

「速攻魔法発動！《狂戦士の魂》！！ドロー！モンスターカード！ドロー！モンスターカード！ドロー！モンスｔ（ｒｙ」

「どれだけ攻撃するつもぐはぁ！がほぉ！げふぅ！ぶほぉ！」

「三沢君！？」

…相当テンパってんな、あいつ。

「いや、俺はむしろされた方だ」

「え？」

「その…頬に、キスされたんだ…」

実際に口に出すと恥ずかしい。人前で言う事じゃねえだろこれ。

「な、なるほど…どうりで顔が真っ赤なわけだわ…（無意識でしょうけど、ずいぶん大胆になったわね…）」

「…ハァ…わけわかんねえや…」

まあ、嬉しいのは認めよう。好きな奴にキスされて喜ばない奴はまずいないしな。

「…紅刃、この際だから聞くけど…」

「ん？」

「あなたは月沙の事をどう思ってるの？」

ついに来たかその質問。ま、答えは決まってるけどな。

「あいつは…中学からの友達で、一緒に戦ってきた仲間で…」

明日香は次に続く言葉を待っている。面倒だし、ぶっちゃけるか。

「1番、ずっと傍で護ってやりたい奴かな」

「…それって、つまり…」

「俺は月沙の事が好きだ。もちろん恋愛対象として」

明日香は目を丸くしてポカンとしている。そこまで驚く事か？

「…ええと…冗談抜きで？」

「こんなしょうもない嘘ついてどうすんだよ？」

「…いつから？」

「冥界にいた時からだな」

正確に言うと、鈴佳と怜磨に無理矢理自覚させられたんだけどな。

「告白はしないの？」

「それができたら苦労しねえよ。ポーカーフェイスを保つの難しいんだぞ？」

「そ、そう…（私が2人に教えてあげたら多分確実にくっつくけど、自然に気づかせた方がよさそうね）」

「シンクロ召喚！邁進せよ！《氷結界の龍　トリシューラ》！！効果発動！相手のフィールドと墓地と手札からカードを1枚ずつ除外する！さらに《シンクロキャンセル》を3枚発動して合計4回シンクロ召喚！さらに効果を3回発動！トリニティ・ヴァイス4連打ぁ！」

「ちょ！？僕だけ酷くないッスか！」

「ダイレクトアタック！トライデント・ブリザァァアアアアド！！」

「うわあああ！？」

「「……」」

まだ暴走してるよ。てか《シンクロキャンセル》３連発とか何があったんだよ？

「フフ…。私は戻るけど、紅刃はどうする？」

「もうしばらくここにいる。俺がいたら多分止まらないだろ。落ち着いたら教えてくれ」

「わかったわ」

明日香はそのまま戻っていった。後はほっとけばどうにかなるだろ。

ま、なんにせよ、今までで最高の祭りだったな。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第３１話　無断と無意識は恐ろしい（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「月沙、見事な暴走っぷりだったわね」

フィレス『グルル』

勇香「レッド寮にいた奴ら、ご愁傷様」

璃音「ところで、ちゃんとクロウにコーヒー代返しなさいよ？」

勇香「もう返したから大丈夫だ。でも、そこまで美味くはなかったな…」

璃音「それ、ジャックとクロウの前では絶対に言っちゃ駄目よ。さて、今回は《メタル・リフレクト・スライム》を紹介するわよ」

《メタル・リフレクト・スライム》
永続罠
このカードは発動後モンスターカード（水族・水・星１０・攻０／守３０００）となり、自分のモンスターカードゾーンに守備表示で特殊召喚する。
このカードは攻撃する事ができない。（このカードは罠カードとしても扱う）

璃音「いわゆる罠モンスターの１つね。守備力３０００のモンスターをノーコストで召喚できるのは魅力的ね」

勇香「《レベル・スティーラー》の特殊召喚にも便利だな。《ザ・カリキュレーター》の攻撃力も底上げできる」

璃音「罠カードとしても扱うから《サイクロン》などの魔法・罠除去で破壊されてしまうのが弱点ね」

勇香「後、攻撃できない『効果モンスター』だから注意しとけよ」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

Ｍｒ．クレバーは適当に考えたキャラなのであしからず。

マハードは何とか登場させる事ができました。今後アテムが登場すれば、また出てくると思います。

次回は見学旅行などの関係で更新が遅れてしまいますので、しばらくお待ちください。

では、また次回！

第３２話　世の中嫌な再会もある（前書き）

何か予想以上に早く投稿できました。第３２話です。

今回登場するのは５Ｄ'ｓで活躍したあの人です。

それではどうぞ！

第３２話　世の中嫌な再会もある

ＳＩＤＥ／月沙

学園祭で忘れてたけど、今はセブンスターズとの戦いの真っ最中なんだっけ。

十代達は原作通り大徳寺先生の捜索を始めた。ほっといても解決するだろうけど、一応私達未来組も別行動で捜索する事にした。

で、今の私達の状況はと言うと…。

「そんな…」

「大徳寺先生が、７人目のセブンスターズだとは…」

イエロー寮の近くで、私が今後の展開を絶賛暴露中。今さら黙ってても仕方ないし、未来組だから問題ないでしょ？

「さっきも言ったように、先生はもう寿命が短い。十代との最終決戦は邪魔したくない」

「でも、万丈目達は大丈夫なのか？」

「あの人は大事な生徒を殺すような真似はしないよ。デュエルが済めば自動的に解放される」

今回はどうしても手出しをしたくない。あの人の最期を見届けて

あげたいんだ。

「…わかった。お前に従おう」

「僕も賛成だよ。何たって、僕はレッドの生徒だからね」

「俺も構わないぞ？それが1番だ」

3人は快く了承してくれた。感謝しないとね。

「…みんな、ありがとう。じゃあ、都合の悪い時は演技でやり過ごして…」

「みんな！」

振り返ると、三沢君が走ってきていた。そっか、ここはイエロー寮の近くだもんね。

「三沢？」

「聞いたぞ。大徳寺先生の捜索をしているんだって？」

「うん。学園でこれだけ捜索しても見つからないから僕達で捜そうって事になってね」

「俺も手伝わせてくれ。少しでも役に立ちたいからな」

う…どうしよう。少し動きづらくなるけど…。

「本当？じゃあ、よろしくね」

ここは素直に協力しよう。十代戦の前に先生に会わなければ大丈夫。何とかなる。

「ん…？三沢、首筋に蜘蛛が付いてるぞ？」

「え？」

あ、本当だ。蜘蛛が引っ付いて…服の中に入っちゃった。

「おい、服に入ったぞ？」

「うわ、嫌だな…」

三沢君は蜘蛛を払うために上着を脱ごうとした。私は後ろを向いてた方が…。

「う、気持ち…わ…る…」

「三沢？」

急に三沢君の動きが鈍くなった。一体どうし…

コォオオォ…

「「「!?」」」

「何だこれは?」

…信じられないものを見てしまった。

三沢君の右腕が紫に光り出した。いや、腕じゃなくて…腕に『痣』が浮かんだって言う方が正しい。

そして、その痣の模様は…。

「これって…!?」

『蜘蛛』。

「フフフ…久しぶりだな、シグナーと共に歩む者達よ…」

三沢君が喋った。いや、これは三沢君の声じゃない。

「…！誰だお前は！？」

将人は三沢君が操られている事はわかっても正体までは知らない。
でも、私達は知っている。

「真川紅刃と銘丈将人がこの時代で初めて出会った広場。そこで待っているぞ…」

それだけ言うと、痣は綺麗に消え去った。

「ん？俺は一体…」

三沢君は正気を取り戻したみたいだ。張り付いていた蜘蛛は地面に落ちて消えた。

「…とりあえず、手分けして捜すぞ。俺と月沙はこの森の奥に行く。俊也と将人はブルー寮の方向、三沢はこの近くで手掛かりを捜してくれ」

「わかった。それじゃ、また後で落ち合おう」

紅刃の進言で、私達はそれぞれ指定の場所に向かった。

しばらくして、俊也と将人が後から追いついてきた。

「紅刃、ナイスアドリブ」

「ああ。あいつを巻き込むわけにはいかないからな」

そう。おそらく、あの人はデュエルを挑んでくる。だとしたら、

当然あのモンスターを召喚しようとしてくるはず。もし召喚されてしまったら、多くの人々が犠牲になってしまう可能性がある。

「事情はさっき俊也から聞いた。だが、なぜこの時代に現れたんだ？」

「わからない。そもそも、あの人はもう私達の時代にすらいないはず。何で戻ってきたのか、見当もつかない」

蜘蛛の痣…。何で？何であの人が…？

ＳＩＤＥ／紅刃

軽いデッキ調整を終わらせた後、俺達は目的地に到着した。

あいつが言ってた場所は、要するに俺達がいつも修行に使ってる場所だ。『俺達』って言うのは、アビリティの修行もそこでやってるからだ。

にしても、不気味な雰囲気だな…。将人の時とはまた違う感覚だ。

森の中の広場。その中央にそいつはいた。

「久しぶりだな」

「まさかお前が出てくるなんてな…。ホント、笑えねえよ」

本当に笑えねえ。しかも、旧モーメントで会った時と全く同じ格好じゃねえか。

赤い模様が入った黒い装束を着て、左腕の機械の義手を剥き出しにした白髪の男。

「できれば、もっと別の形で会いたかったな。…ルドガー」

奴はルドガー・ゴドウィン。前にダークシグナーとして敵対したデュエリストだ。

「何で…？何であんたがここにいるの！？」

月沙と遊星からは、ルドガーは弟のレクス・ゴドウィンと一緒に、５０００年前から続くシグナーとダークシグナーの戦いの運命に決着をつけるために消えていったって聞いている。つまり、俺達の時代にもこの時代にもいないはずだ。

「知れた事だ。あるお方に復活させてもらったのだ。ただし、ダークシグナーとしてだがな」

そう言うルドガーは、眼球の白目の部分が黒く染まり、顔にはマーカーみたいな赤い模様が浮かび上がっている。ダークシグナーの特徴だ。

「『あるお方』…？まさか、貴様ニュートラルと繋がっているのか！？」

「そうだ。あの方は私に貴様らを消すように依頼してきた。貴様らにはここで消えてもらう」

デュエルディスクを構え、デュエルの準備をするルドガー。消えるつもりはさらさらない。ここは俺が…！

「そうだな…。まずは銘丈将人、貴様から相手をしてもらおう」

「何？」

「風嶺俊也、貴様もだ。２ｖｓ１のハンデは付けてやろう」

２ｖｓ１！？

「紅刃と月沙は相当な実力の持ち主だ。楽しみは後に取っておきたいのでな」

「…ずいぶんナメられたもんだね。僕と将人が弱いと言ってるって意味で受け取ってもいいのかな？」

「どう取ろうが人の勝手だ。だが、邪魔はさせんぞ」

ルドガーが右腕を上げると、蜘蛛の痣が強く光った。

ゴオオォォオ！！

「うわっ！？」

「なっ！？」

「く…！」

「う…！」

紫の炎が吹き出し、俺と月沙は炎の壁の外側に、将人と俊也は内側にいる形になってしまった。地上には紫の炎で蜘蛛の地上絵が描かれてるだろうな。

「やっぱり、これは闇のデュエル…！」

「くそ！だったら、俺がアビリティで壁をぶち抜いて…」

「待て、紅刃！」

俺がディスクを抜こうとしたら、将人に声で制された。

「ここは俺達に任せてくれ」

「負けはしないから安心して見ててよ」

「でも…！」

「もう逃れる事はできん。さあ、闇のデュエルだ！」

くそ…。俺と月沙はもちろん、将人と俊也もシグナーじゃない。かなり危険だけど、ここは信じるしかない…！そうだ、ここで仲間を信じれないでどうすんだよ？

「…わかった」

「負けないでよ？」

「うん！」

「任せろ」

２人は頷いてデュエルディスクを展開させた。

「貴様らはそれぞれ４０００のライフ、私はその2倍、８０００のライフで始める。互いに最初のターンでは攻撃できない。ルールはこれでいいな？」

「構わないよ」

「始めるぞ」

「「「デュエル！」」」

将人&俊也ｖｓルドガー

ＳＩＤＥ／将人

「先攻は貰う！ドロー！」

俊也の話だと、ダークシグナーはいくつか特殊なモンスターを使

うらしい。それらが出る前に決着をつけるべきだが、今は守りに徹しておこう。

「モンスターをセット。カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

将人
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×２

「僕のターン！《ウィンドフレーム》を召喚！」

竜巻のようなモンスター。実質、始祖神鳥の専用サポートだ。

《ウィンドフレーム》
効果モンスター
星４／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ　２００
風属性の通常モンスターを生け贄召喚する場合、このモンスター１体で2体分の生け贄とする事ができる。

《ウィンドフレーム》　ＡＴＫ／１８００

「カードを2枚セットしてターンエンド！」

俊也
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《ウィンドフレーム》（ＡＴＫ／１８００）
罠／リバース×２

「私のターン！フィールド魔法（スパイダー・ウェブ）を発動！」

地面に巨大な蜘蛛の巣が張り巡らされた。

《スパイダー・ウェブ》
フィールド魔法
モンスターが攻撃宣言をした場合、そのモンスターはダメージステップ終了時に守備表示になり、そのモンスターのコントローラーから見て次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない。

「早速厄介なのが出てきたな…」

「そして、相手フィールド上にのみモンスターが存在する時、《ＤＴスパイダー・コクーン》を手札から特殊召喚できる！」

「ダークチューナーだと！？」

くそ、もう来たか…！

《ＤＴスパイダー・コクーン（ダークチューナー）》
ダークチューナー・効果モンスター（ＴＦオリジナル）
星５／闇属性／昆虫族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
このカードをシンクロ素材とする場合、ダークシンクロモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

《ＤＴスパイダー・コクーン》　ＡＴＫ／　　０

「さらに、《ダーク・スパイダー》を召喚！」

蜘蛛のようなモンスターが召喚された。奴のデッキは蜘蛛型のモンスターで構成されているのか？

《ダーク・スパイダー》
効果モンスター
星１／闇属性／昆虫族／ＡＴＫ　　０／ＤＥＦ　　０
１ターンに１度、自分フィールド上に表側表示で存在する昆虫族モンスター１体のレベルをエンドフェイズ時まで２つ上げる事ができる。

《ダーク・スパイダー》　ＡＴＫ／　　０

「《ダーク・スパイダー》の効果発動！昆虫族モンスター１体のレベルをエンドフェイズ時まで２つ上げる！私はスパイダー・コクーンを選択する！」

《ＤＴスパイダー・コクーン》　Ｌｖ．５→７

「行くぞ！レベル１《ダーク・スパイダー》にレベル７、スパイダー・コクーンをダークチューニング！」

スパイダー・コクーンが黒い７つの星となり、《ダーク・スパイダー》に埋め込まれる。

「闇と闇重なりしとき、冥府の扉は開かれる！光無き世界へ！」

☆１－☆７＝☆－６

「ダークシンクロ！出でよ！《地底のアラクネー》！」

下半身が蜘蛛になった女性が現れた。これがダークシンクロ…！

《地底のアラクネー》
ダークシンクロ・効果モンスター（ＴＦオリジナル）
星－６／地属性／昆虫族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１２００
チューナー以外のモンスター１体－ダークチューナー
このカードはシンクロ素材とするチューナー以外のモンスター１体のレベルからダークチューナーのレベルを引き、その数値が－６に等しい場合のみシンクロ召喚することができる。
このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動する事ができない。
１ターンに１度、相手フィールド上に存在するモンスター１体を装備カード扱いとしてこのカードに１体のみ装備する事ができる。
このカードが破壊される場合、代わりに装備したモンスターを破壊する。

《地底のアラクネー》　ＡＴＫ／２４００

モンスターのレベルからダークチューナーのレベルを引いた数と同じレベルのダークシンクロモンスターを召喚する。これがダークシンクロらしい。こうも早く召喚されてしまうとは…。

「《地底のアラクネー》の効果発動！１ターンに１度、相手モンスター１体を装備カード扱いとして装備する！」

「何！？」

「《ウィンドフレーム》を戴こう。トワイナー・スレッド！」

《ウィンドフレーム》が蜘蛛の糸でぐるぐる巻きにされ、ルドガーのフィールドに移動されてしまった。

「《ウィンドフレーム》が…！？」

「まずいな。アラクネーは破壊される時、装備したモンスターを身代わりにできる効果を持っている」

「1度に2回破壊しないと倒せない…」

ちっ、面倒な効果だ。除外なら対処できるか？

「カードを1枚セットし、ターンエンド」

「悪いけど、そのモンスターにはここで退場してもらうよ！リバースカードオープン！速攻魔法（ダブル・サイクロン）！お互いの魔法・罠カード1枚を破壊する！」

《ダブル・サイクロン》
速攻魔法
自分フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚と、相手フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して発動する。
選択したカードを破壊する。

「僕の残りのリバースカードと、アラクネーに装備されている《ウィンドフレーム》を破壊する！」

赤い竜巻と黄色の竜巻がそれぞれ対象のカードを破壊していく。

「リバースカードを犠牲にしてまで自らのモンスターを解放したか…」

「いや、これでいいんだ。破壊したのは《荒野の大竜巻》！セットされた状態で破壊された時、相手の表側表示のカード1枚を破壊する！」

「何！？」

《荒野の大竜巻》
通常罠
魔法&罠カードゾーンに表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する。
破壊されたカードのコントローラーは、手札から魔法または罠カード1枚をセットする事ができる。
また、セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する。

「当然、アラクネーを破壊！」

今度は茶色の竜巻が発生し、アラクネーを吹き飛ばした。

「ほお…」

ルドガー
ＬＰ／８０００
手札／２
モンスター／なし

魔法・罠／《スパイダー・ウェブ》リバース×1

奴の場にはモンスターがいない。引いたのはチューナーモンスター。畳み掛けるなら今だ！

「俺のターン！チューナーモンスター《ダーク・リゾネーター》を召喚！」

音叉を持った小さな悪魔。悪魔族のチューナーの中でもなかなか優秀な奴だ。

《ダーク・リゾネーター》　ＡＴＫ／１３００

「さらに、《シールド・デーモン》を反転召喚！」

大きめの盾を構えた悪魔がリゾネーターの横に並ぶ。

《シールド・デーモン》
効果モンスター（オリジナル）
星４／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ１８００
自分フィールド上に悪魔族のチューナーモンスターが表側表示で存在する時、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
このカードがシンクロ召喚に使用され墓地に送られた場合、そのシンクロモンスターは１度だけカードの効果では破壊されない。

《シールド・デーモン》　ＤＥＦ／１８００

「レベル４《シールド・デーモン》にレベル３《ダーク・リゾネーター》をチューニング！」

リゾネーターが音叉を鳴らして紫の輪になり、《シールド・デーモン》がその中に飛び込む。

「天頂に輝く死の星よ！地上に舞い降り生者を裁け！」

☆４＋☆３＝☆７

「シンクロ召喚！狩れ！《天刑王　ブラック・ハイランダー》！」

大鎌を手に持ち、モンスターの姿になったヒジュラがフィールドに現れた。

《天刑王　ブラック・ハイランダー》　ＡＴＫ／２７００

『がら空きか。思い切りやってもいいよな？』

「ああ、早く終わらせるぞ。ブラック・ハイランダーでダイレクトアタック！死兆星斬！」

『大人しく冥界にでも帰ってろ！』

ヒジュラが鎌を振り回し、ルドガーに袈裟斬りを食らわせた。

「ぐおっ…！」

ルドガー　ＬＰ／８０００→５３００

「ぐ…《スパイダー・ウェブ》の効果発動！モンスターが攻撃した時、そのモンスターを守備表示にする！」

『ちっ…！』

蜘蛛の糸が絡まり、ヒジュラが強制的に守備表示にされる。

《天刑王　ブラック・ハイランダー》　ＡＴＫ／２７００→ＤＥＦ／２３００

「そして、次の自分のターンのエンドフェイズまで表示形式を変更する事はできない」

「…ターンエンドだ」

将人
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《天刑王　ブラック・ハイランダー》（ＡＴＫ／２７００）
魔法・罠／リバース×２

「僕のターン！魔法カード《強欲な壺》を発動！カードを２枚ドローする！」

あのリバースカードはブラフの可能性が高いが、あえて発動しなかったという事も考えられる。何を狙っているんだ…？

「そして、魔法カード《融合》を発動！手札の《風霊使いウィン》と《ランス・リンドブルム》を手札融合！」

《ランス・リンドブルム》
効果モンスター

星４／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ１２００
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「融合召喚！《風霊騎士ウィン》！」

鎧と槍を身につけたウィンが出陣してきた。大量展開して速攻で決めるつもりか。

《風霊騎士ウィン》　ＡＴＫ／２５００

「まだだ！《サファイアドラゴン》を召喚！」

藍色の体を持つ龍が吠える。攻撃力は充分だ。

《サファイアドラゴン》
通常モンスター
星４／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ１９００／ＤＥＦ１６００
全身がサファイアに覆われた、非常に美しい姿をしたドラゴン。
争いは好まないが、とても高い攻撃力を備えている。

《サファイアドラゴン》　ＡＴＫ／１９００

「さらに、風霊騎士が場にいる限り、僕の場の他の風属性モンスターの攻撃力は５００ポイントアップする！」

《サファイアドラゴン》　ＡＴＫ／１９００→２４００

「攻撃力２４００！」

『全部通れば勝ちだけど、そんな美味しい話はないよね…』

「（だとしても、今は攻めるだけだ！）バトル！《風霊騎士ウィン》でダイレクトアタック！エメラルド・ジャベリン！」

『貫け！』

ウィンが投げた槍が、翡翠色に輝く風と共にルドガーを貫いた。

「ぐおぉぉっ！」

ルドガー　ＬＰ／５３００→２８００

「ぐ…だが、《スパイダー・ウェブ》の効果で守備表示になる」

『う…！』

ウィンまで蜘蛛の糸に動きを封じられた。

《風霊騎士ウィン》　ＡＴＫ／２５００→ＤＥＦ／１５００

「（ウィン、大丈夫？）」

『私は大丈夫。だから続けて』

「（わかった）《サファイアドラゴン》でダイレクトアタック！サファイア・スパーク！」

これが決まればライフは１０００を切る！

「頃合いか。罠発動（スパイダー・エッグ）！」

「「！？」」

ルドガーの前に蜘蛛の卵が現れ、代わりに藍色のブレスに貫かれた。その中から3匹の蜘蛛が飛び出す。

「墓地の昆虫族が3体以上の時、相手モンスターのダイレクトアタックを無効にして《スパイダートークン》を3体攻撃表示で特殊召喚する！」

《スパイダー・エッグ》
通常罠
相手が直接攻撃を宣言した時、自分の墓地に昆虫族モンスターが3体以上存在する場合に発動する事ができる。
そのモンスターの攻撃を無効にし、自分フィールド上に「スパイダートークン」（昆虫族・地・星1・攻／守100）3体を攻撃表示で特殊召喚する。

《スパイダートークン》　ＡＴＫ／　１００

《スパイダートークン》　ＡＴＫ／　１００

《スパイダートークン》　ＡＴＫ／　１００

トークンを一気に3体も呼び出したか。このターンで2体消す必要があるが…。

「う…やっぱり苦手だ…」

「落ち着け。あまり気にするな」

そういえば、月沙は虫が苦手だったな。こいつとデュエルさせなくてよかった。

《サファイアドラゴン》　ＡＴＫ／２４００→ＤＥＦ／１６００

「これ以上は無理か…。ターンエンド」

俊也
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《風霊騎士ウィン》（ＤＥＦ／１５００）《サファイアドラゴン》（ＡＴＫ／２４００）
魔法・罠／なし

まずい。奴の場には3体のトークンが残った。次で仕掛けてくる…！

「フフフ…私のターン！これで我が神を召喚する手筈が整った」

「何！？」

「もう来たのか！？」

「行くぞ！《スパイダートークン》２体をリリース！」

空中に何か不気味な物体が現れる。心臓のように規則正しく鼓動を刻んでいる。

「あれは…！」

「『地縛神』の心臓部…！」

心臓部？あれがそうなのか？

「我が運命の光に潜みし亡者達の魂よ！流転なるこの世界に暗黒の真実を導くため、我に力を与えよ！」

心臓部が膨大な光を放つ。ついに来るのか！？

「現れよ！《地縛神　Ｕｒｕ》！」

地響きが鳴る。そのモンスターがあまりにも巨大だからだ。

黒い体に赤い幾何学模様。姿形は…蜘蛛。

「ついに出たか…！」

初めて見るが、何だこの姿は？何だこの邪悪なオーラは？

「フハハハ！もはや逃れる事などできんぞ！」

これが、地縛神だと言うのか…？

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第３２話　世の中嫌な再会もある（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「…次の更新はかなり遅くなるって言ってなかったか？」

璃音「修学旅行やら部活やら、何より進路活動や勉強を見越しての判断よ」

フィレス『ガルルル…』

璃音「【スパイダー】についてほとんど知らないというのもあるけど、あまり心配はいらなかったみたいね」

勇香「計画性がないのかうちの作者は…」

璃音「早めに更新できたんだからよしとしましょう。ぶっちゃけ、修学旅行の空いた時間にほとんど書き上げたみたいだし」

勇香「それでいいのか…？」

璃音「さてと、考察を始めましょう。今回紹介するのは、ルドガーが使用するダークシンクロモンスター《地底のアラクネー》よ。なお、ここではシンクロモンスターになったＯＣＧ版のものを扱わせてもらうわ」

《地底のアラクネー》
シンクロ・効果モンスター

星６／地属性／昆虫族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１２００
闇属性チューナー＋チューナー以外の昆虫族モンスター１体
このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動する事ができない。
１ターンに１度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに１体のみ装備する事ができる。
このカードが戦闘によって破壊される場合、代わりにこの効果で装備したモンスターを破壊する事ができる。

璃音「表側表示の相手モンスターなら、たいてい何でも装備できるわ」

勇香「装備したモンスターは、破壊される時の身代わり用だ。戦闘破壊にしか対応してないから気をつけろよ」

璃音「攻撃する時に相手の魔法と罠を封じるというおまけも付いてるわよ。こうして見ると、素材に制限が掛かっている分なかなかしぶといモンスターね」

勇香「【デュアル】なら《炎妖蝶ウィルプス》を使ってシンクロ召喚できるし、《ギガプラント》で何度でも蘇生できるから狙ってみるのも悪くないな」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「次回も見てくれよな！」

ーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

何か思ったよりもずっと早く書き上がりました。計画性なさすぎだろ自分…。基本は『最低でも1週間に1回更新』を目標にしていますので、今後もよろしくお願いします。

アムナエルのデュエルも考えたんですが、いかんせんデッキがはかなりめんどくさそうですので、急遽ルドガーさんにお越しいただきました。次回ももちろん活躍しますので楽しみにしててください。

では、また次回！

第３３話　似た境遇の人には妙な親近感を覚える（前書き）

いろいろやっちゃった感がある第３３話ですが、後悔はしていません。

オリカも多数登場するので、苦手な方は注意してください。

それではどうぞ！

第３３話　似た境遇の人には妙な親近感を覚える

ＳＩＤＥ／将人

『キシャアアアア！！』

まずい。追い詰めたはいいが、全てはあの地縛神を召喚するためだったという事か。

しかし、何だあれは…。他のモンスターとは何もかも違う…！

《地縛神　Ｕｒｕ（ウル）》
効果モンスター（原作効果）
星１０／闇属性／昆虫族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ３０００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、「地縛神」と名のつくカードを召喚・反転召喚・特殊召喚する事ができない。
フィールド上にフィールド魔法が表側表示で存在しない場合、このカードの以下の効果は無効となり、このカードはエンドフェイズ時に破壊される。
このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
相手モンスターはこのカードを攻撃対象にする事ができない。
このカードは相手の魔法・罠カードの効果を受けない。
１ターンに１度、このカード以外の自分フィールド上に存在するモンスター１体をリリースする事で、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択し、このターンのエンドフェイズ時までコントロールを得る。

《地縛神　Ｕｒｕ》　ＡＴＫ／３０００

ルドガー
ＬＰ／２８００
手札／２
モンスター／《地縛神　Ｕｒｕ》（ＡＴＫ／３０００）
魔法・罠／《スパイダー・ウェブ》

将人
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《天刑王　ブラック・ハイランダー》（ＡＴＫ／２７００）
魔法・罠／リバース×２

俊也
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《風霊騎士ウィン》（ＤＥＦ／１５００）《サファイアドラゴン》（ＡＴＫ／２４００）
魔法・罠／なし

「いつ見ても不気味だな…」

「でも、何かおかしい」

「は？」

「地縛神は生き物の魂も生け贄にするモンスター。なのに、そういった様子が全然ない」

そういえば、俊也もそんな事を言っていたな。確かに、魂が集まるとか、そんな現象は見られない。

「安心しろ、この地縛神は魂を生け贄にする事はない」

「え…？」

「かつて我々ダークシグナーが手にしていた地縛神とは別物らしい。同じ地縛神のカードが2枚もあるという事自体想像つかんが…」

性質の違う地縛神だと？アカデミアの人達が犠牲にならずに済むのならいいが、どうなっているんだ…？

「まあいい。地縛神が私の場にいる事が重要なのだからな！《地縛神　Ｕｒｕ》の効果発動！自分フィールド上のモンスター1体をリリースする事で、エンドフェイズ時まで相手モンスター1体のコントロールを得る！」

「何！？」

「まさか、これを見越してあえて大ダメージを受けたのか！？」

「私は残りの《スパイダートークン》をリリースし、《サファイアドラゴン》のコントロールを得る！やれ、Ｕｒｕ！」

Ｕｒｕが口から糸を吐き、《サファイアドラゴン》を捕らえてしまう。

「くっ…」

「そして、手札の《マザー・スパイダー》の効果発動！私の墓地に存在するモンスターが昆虫族のみの場合、相手の表側守備表示のモンスター2体を墓地に送る事で特殊召喚する！」

「しまった！？」

《シールド・デーモン》の守備範囲は『破壊する』効果のみ！破壊を通さず直接『墓地に送る』効果には対応していない！

「墓地に送るのは《風霊騎士ウィン》と《天刑王　ブラック・ハイランダー》だ！」

『そんな！？』

『畜生、ここまでかよ…！？』

「ウィン！？」

「くそ、ヒジュラ…！」

ウィンとヒジュラが光になってフィールドから消え、代わりに地縛神ほどではないが巨大な蜘蛛が現れた。

《マザー・スパイダー》
効果モンスター
星６／闇属性／昆虫族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ１２００
自分の墓地に存在するモンスターが昆虫族のみの場合、このカードは相手フィールド上に表側守備表示で存在するモンスター2体を墓地へ送り、手札から特殊召喚する事ができる。

《マザー・スパイダー》　ＡＴＫ／２３００

「フハハハハ！バトルだ！《マザー・スパイダー》で俊也にダイレクトアタック！」

巨大蜘蛛が硬化された糸を吐き、鞭のように俊也に叩きつけてきた。

「ダメージは俺に任せろ！罠カードオープン《冥府への誘い》！攻撃対象を俺自身に変更する！」

「何だと！？」

《冥府への誘い》
通常罠（オリジナル）
相手モンスターが攻撃宣言をした時に発動する事ができる。
攻撃対象をこのカードのプレイヤーに変更し、ダメージ計算後にバトルフェイズを終了する。
その後、手札から自分フィールド上に《冥府の使者ゴーズ》を１体特殊召喚し、自分フィールド上に「冥府の使者カイエントークン」（天使族・光・星７・攻／守？）を１体特殊召喚する。
このトークンの攻撃力・守備力は、この時受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。

俊也に迫っていた糸は急に向きを変え、俺を打ち付けた。

「ぐあぁっ！」

「将人！」

将人　ＬＰ／４０００→１７００

ダメージが現実のものになっている。闇のデュエルだというのは本当のようだな。地縛神の攻撃を直接受けたら、おそらく無事では済まない。

「っ…、そして、バトルフェイズは終了する…」

「自らを盾にして仲間を護ったか…。攻撃を行った《マザー・スパイダー》は《スパイダー・ウェブ》の効果で守備表示になる」

《マザー・スパイダー》　ＡＴＫ／２３００→ＤＥＦ／１２００

「…狙いはこれだけじゃない！バトルフェイズが終了した後、手札から《冥府の使者ゴーズ》を特殊召喚し、受けたダメージと同じ攻守を持つ《冥府の使者カイエントークン》を特殊召喚する！現れろ！ゴーズ、カイエン！」

『俺達の出番か！』

『参ります！』

フィールドに黒い大穴が開き、ゴーズとカイエンが飛び出した。

《冥府の使者ゴーズ》　ＡＴＫ／２７００

《冥府の使者カイエントークン》　ＡＴＫ／２３００

「なるほど…。ゴーズの効果を無理矢理発動させたようなものか。魔法カード《壺の中の魔術書》を発動！全てのプレイヤーはカード

を3枚ドローする！」

本来は『互いのプレイヤー』が対象になるが、この変則デュエルではプレイヤー全員に効果が及ぶ。

「カードを2枚セットしてターンエンドだ！《サファイアドラゴン》は返してやろう」

Ｕｒｕから解放された《サファイアドラゴン》が帰ってくる。トークンのリリースは無駄になったな。

ルドガー
ＬＰ／２８００
手札／１
モンスター／《地縛神　Ｕｒｕ》（ＡＴＫ／３０００）《マザー・スパイダー》（ＤＥＦ／１２００）
魔法・罠／《スパイダー・ウェブ》リバース×２

強い。地縛神がなくてもダークシグナーでなくても、こいつは相当強い。だが、なぜ蘇ったんだ？

「ルドガー！確かにお前は強い！地縛神に頼らずともだ！だが、お前ほどのデュエリストがなぜこんな真似をする！？」

「私には蘇らせてくれた者への恩がある！それに背く事などできん！」

「それが破滅の道を辿る事になってもか！？」

「構わん！私は貴様らを消す！運命の糸から逃れる事など不可能な

のだ！」

「違う！運命は変えられる！」

俺が何か言い返す前に俊也が叫んだ。

「あなたは以前、弟のレクス・ゴドウィンと一緒に運命に決着をつけた！シグナーの戦いの連鎖を断ち切ったんだ！あなたは運命を打ち破る事ができたんだ！なのに、あなたはまた運命に翻弄されている！しかも、偽りの運命に！」

「偽りの運命…？」

「本来、もうあなたはこの世に存在しない！こうして僕らと戦う事なんてありえない！でも、あなたは自分を蘇らせてくれた人に縛られてここに来た！あなたはあんな正体不明の組織に好き勝手に操られていいような存在じゃないはずだ！」

「ぐぅ…！黙れ！もはや我々には戦う事しかできぬ！互いを潰し合う道しか残されていないのだ！」

こいつ…。

なぜだ？こいつの言葉にはどこか違和感を感じる。それがなぜなのかはわからないが、何か妙だ。どうなっている…？

「…ならば、俺達が新たな道を切り開くまでだ！俺のターン！」

「将人、地縛神はかなり危険だ。魔法も罠も効かないし、直接攻撃までできる」

「ちっ、仮にも『神』の名を持つモンスターだという事か…」

「でも、弱点はある。フィールド魔法がなければ効果が無効になり、エンドフェイズに自壊する。効果もモンスター効果なら通用する。そして、もう1つある。地縛神は攻撃対象にならない。でも、相手の場にいるのが地縛神だけだったら、残った攻撃対象は…」

「…なるほど、そういう事か」

要するに、地縛神を無視してダイレクトアタックができるから他のモンスターを潰せばいい。

「罠発動!墓地のシンクロモンスター《天刑王　ブラック・ハイランダー》を守備表示で特殊召喚する!」（ロスト・スター・ディセント）

《ロスト・スター・ディセント》
通常罠
自分の墓地に存在するシンクロモンスター1体を選択し、自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、レベルは1つ下がり守備力は0になる。
また、表示形式を変更する事はできない。

「この効果で特殊召喚したモンスターは効果が無効になり、守備力が0になる。さらにレベルが1つ下がる」

《天刑王　ブラック・ハイランダー》　ＤＥＦ／２３００↓　０
Ｌｖ．７↓６

『結局こんな役回りかよ…』

「（済まない。我慢してくれ）さらに魔法カード《チューナーズ・コール》！自分フィールド上のモンスターのレベルを1つ下げ、手札からチューナーを1体特殊召喚する！ブラック・ハイランダーのレベルを1つ下げ、手札から《ダーク・リゾネーター》を特殊召喚！」

このデュエルでこのモンスターを使うのは2回目だな。

《天刑王　ブラック・ハイランダー》　Ｌｖ．６→５

《ダーク・リゾネーター》　ＡＴＫ／１３００

「レベル５《天刑王　ブラック・ハイランダー》にレベル３《ダーク・リゾネーター》をチューニング！闇より出でし悪魔の双翼、濃霧を払い終焉を誘え！」

☆５＋☆３＝☆８

「シンクロ召喚！呼応せよ！《ダークエンド・ドラゴン》！」

悪魔を象った龍。こいつが俺の切り札だ。

《ダークエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「将人の切り札か！」

「これなら行ける！」

「ダークエンドの効果発動！攻守を５００下げる事で、相手モンスター1体を墓地に送る！」

《ダークエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００→２１００

「対象は《マザー・スパイダー》だ！ダーク・イヴァポレイション！」

ダークエンドの腹の口から黒いエネルギーが吐き出され、《マザー・スパイダー》を闇に引きずり落とした。

「バトル！カイエンでダイレクトアタック！レイジング・ブラッシュ！」

『さあ、終わらせましょう！』

カイエンが剣を構え、ルドガーに突撃する。

「選択を誤ったな。永続罠《鎮守の煌画》を発動！攻撃対象を地縛神に変更する！」

「何！？」

《鎮守の煌画》
アニメオリジナル
永続罠
自分フィールド上に「地縛神」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。
相手モンスターの攻撃宣言時、自分フィールド上に表側表示で存在する「地縛神」と名のついたモンスターをその攻撃対象に選択する事ができる。

「地縛神」と名のついたモンスターがフィールド上を離れた時、このカードを破壊する。

「迎撃しろ、地縛神よ！ヘル・スレッド！」

主人の言葉に応えるかのようにＵｒｕが糸を吐き出し、カイエンを地面に叩きつけた。

『ぐあっ！』

「カイエン！」

将人　ＬＰ／１７００→１０００

「ちなみに、このカードは使用回数に制限はないぞ」

「という事は、地縛神しか攻撃できないというわけか…」

「そうだった…地縛神にはあのカードがあるんだっけ…」

いや、まだだ。次の俺のターンまでダークエンドを維持できれば、確実に除去できる。手札には、それが可能なカードがある。今は耐えるしかない。

「カードを2枚セットし、ターンエンド！」

将人
ＬＰ／１０００
手札／３
モンスター／《冥府の使者ゴーズ》（ＡＴＫ／２７００）《ダーク

エンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２１００）
魔法・罠／リバース×２

「僕のターン！…よし、これなら…！」

何か状況を打破できるカードを引いたのか？

「魔法カード《死者蘇生》！墓地から《風霊騎士ウィン》を特殊召喚！」

《風霊騎士ウィン》　ＡＴＫ／２５００

「ウィンがフィールドに戻ってきた事で、《サファイアドラゴン》の攻撃力は５００ポイントアップする！」

《サファイアドラゴン》　ＡＴＫ／１９００→２４００

「またその小娘か。その程度では地縛神には敵わぬぞ？」

『小娘って…』

「僕のパートナーをナメてもらっちゃ困るよ。装備魔法（フュージョン・ウェポン）を発動！ウィンに装備！」

赤い武器がウィンの槍と合体した。あの装備魔法は確か…。

「これはレベル６以下の融合モンスターにだけ装備できるカード。装備モンスターの攻守を１５００ポイントアップする！」

「何…！？」

《フュージョン・ウェポン》
装備魔法
レベル６以下の融合モンスターのみ装備可能。
装備モンスターの攻撃力と守備力は１５００ポイントアップする。

《風霊騎士ウィン》　ＡＴＫ／２５００→４０００

「攻撃力４０００だと！？」

「よし！これなら地縛神を戦闘破壊できる！」

「《鎮守の煌画》の効果を使わなかったらそのまま俊也達の勝ちだ！」

「敵わないなら超えればいい！《風霊騎士ウィン》でダイレクトアタック！ウィンド・バスター！！」

『これで決める！』

ウィンの槍から緑の風を纏ったレーザー砲が放たれ、ルドガーに向かって一直線に突き進む。

「罠カード発動（グランド・リフレクト）！」

突然、ルドガーの前に障壁が現れウィンの攻撃を防いだ。

「私の場に地縛神が存在する時、相手モンスター１体の攻撃を無効にし、相手に１０００ポイントのダメージを与える！」

《グランド・リフレクト》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に「地縛神」と名のついたモンスターが表側表示で存在する時、相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手モンスター1体の攻撃を無効にし、相手に1000ポイントのダメージを与える。

障壁は攻撃を全て受け切ると、エネルギー波を発して俊也を攻撃した。

「うあぁっ！くぅ…！」

俊也　LP／4000→3000

『将人!?』

「俊也、大丈夫か!?」

「何とかね…。でも、このターンは地縛神を倒せなくなった…」

「私が何の対策もしていないとでも思ったか?」

「くっ…。カードを1枚セットし、ターンエンド…」

俊也
LP／3000
手札／1
モンスター／《風霊騎士ウィン》（ATK／4000）《サファイアドラゴン》（ATK／2400）
魔法・罠／リバース×1

「私のターン！ほお…。魔法カード《天よりの宝札》！互いに手札が6枚になるようにカードをドローする！」

ここで手札増強のカードを引くとは…。

「これはいいカードを引いたな。装備魔法《地縛光》を発動！Ｕｒｕに装備する！」

Ｕｒｕが青白い光に包まれる。

「何だあれ？」

「私の知らないカードだ…」

「フフフ…装備モンスターは、モンスター効果ではフィールドを離れない！」

《地縛光》
装備魔法（オリジナル）
「地縛神」と名のついたモンスターにのみ装備可能。
装備モンスターはモンスター効果でフィールドから離れない。

「何…！？」

「そんなめちゃくちゃな！？」

これではダークエンドの効果が効かない…！

「さらに魔法カード《サイクロン》を発動！《フュージョン・ウェ

ポン》を破壊する！」

「しまった！？」

『くっ…！』

突風が吹き荒れ、槍の合体を解いてしまった。これで戦闘破壊すらできなくなった…。

《風霊騎士ウィン》　ＡＴＫ／４０００→２５００

「まだまだ行くぞ！《グランド・スパイダー》を召喚！」

また蜘蛛か…。あまり好きじゃないな。

《グランド・スパイダー》
効果モンスター
星４／地属性／昆虫族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ１５００
このカードが自分フィールド上に表側守備表示で存在する場合に相手がモンスターの召喚・特殊召喚に成功した時、そのモンスターを守備表示にする事ができる。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

《グランド・スパイダー》　ＡＴＫ／　０

「そして、《地縛神　Ｕｒｕ》の効果発動！《グランド・スパイダー》をリリースし、《ダークエンド・ドラゴン》のコントロールを得る！」

Ｕｒｕが再び糸を吐き、ダークエンドを捕らえようとする。

「まずい！あいつ、ダークエンドの効果を使うつもりだ！」

「ハハハハハ！貴様らは私に敗れる運命にある！地縛神になど敵いはしないわ！」

「だが、ダークエンドに手出しはさせない！罠カード《亜空間物質転送装置》！ダークエンドをエンドフェイズまで除外する！」

カードからレーザー光線が放たれ、ダークエンドを一時的にフィールドから消した。対象を失った糸が空を切る。

「フン…まあいい。ならば、まずは貴様から消えてもらう！地縛神よ、将人にダイレクトアタックをしろ！ヘル・スレッド！」

地縛神が攻撃体勢に入る。本当に直接攻撃ができるのか…。

「これを食らったら将人のライフは０だ！」

「将人…！」

「手札から《バトルフェーダー》の効果を発動！このモンスターを特殊召喚し、バトルフェイズを終了する！」

振り子時計のようなモンスターが鐘を鳴らし、超音波で地縛神の動きを止めた。

《バトルフェーダー》　ＤＥＦ／　０

「危なかった…」

『間一髪で凌いだか…』

「ぐう…！魔法カード《地縛雷》！地縛神が場にいる時、相手に１５００ポイントのダメージを与える！」

《地縛雷》
通常魔法（オリジナル）
自分フィールド上に「地縛神」と名のついたモンスターが表側表示で存在する時のみ発動する事ができる。
相手に１５００ポイントのダメージを与える。

しまった！効果ダメージまでは…。

「そうはさせない！手札から《ライフ・コーディネーター》を捨てて効果発動！効果ダメージを無効にして、そのカードを破壊する！」

《ライフ・コーディネイター》
効果モンスター
星２／風属性／サイキック族／ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ　４００
相手が「ライフポイントにダメージを与える効果」を持つカードを発動した時、手札からこのカードを捨てる事でその発動を無効にし破壊する。

カードから放たれた雷を水色のモンスターが全身で受け止め、そのまま跳ね返してカードを破壊した。

「済まない、俊也…」

「さっきのお礼だよ」

「どこまでも邪魔しおって…！ターンエンドだ！」

「エンドフェイズ時にダークエンドは帰還する！」

攻守の変化をリセットされたダークエンドがフィールドに戻ってきた。

《ダークエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

ルドガー
ＬＰ／２８００
手札／２
モンスター／《地縛神　Ｕｒｕ》（ＡＴＫ／３０００）
魔法・罠／《スパイダー・ウェブ》《鎮守の煌画》

「大人しく負けていればいいものを…！」

「俺達はここで負けるわけにはいかないからな」

「だが、地縛神は最強の効果を持つモンスターだ！魔法と罠は効かず、《地縛光》の効果でモンスター効果での除去も通用しない！しかも、《鎮守の煌画》の効果で攻撃できるのは地縛神のみ！貴様らに勝ち目はない！」

確かに、今のあの地縛神はほぼ無敵だ。このままじゃ２人共やられてしまうだろう。だが…。

「…それがどうした？」

「何？」

「地縛神は確かに強い。だが、無敵ではない！必ず突破口があるはずだ！」

「そんなものなど…」

「俺は決して諦めない！最後の最後までデッキを、こいつらを信じる！」

『将人…』

俺がこんな事を言うなんて、前ならありえなかったかもな。

「昔の俺なら諦めていたかもしれない。だが、今は違う！紅刃にゴーズとカイエンを預けて、強くなるために努力して、その先に俺に足りないものを見出だした！それはカードを信じる心だ！」

「信じる心だと…？」

「昔の俺はそれが欠けていた。心のどこかで、負ける事をカードのせいにしていた。そうやって自分の弱さと向き合おうとしていなかったんだ。こいつらの可能性を引き出すのは俺の役目だ！逃げていては強くなどなれない！」

そうだ。俺は知らないうちに逃げていた。目の前に大きな壁が現れても、それを乗り越えようとしなかった。だからいつも負け続けていたんだ。それを乗り越えなければ強くなれないというのに…！

「相手が地縛神だろうが関係ない！最後までこいつらと共に戦い、

お前を倒す！！」

「小癪な…！」

「それに、お前はただ偽りの運命に流されているだけじゃないのか！？どこかで必死に抗っているんじゃないのか！？」

「何…？」

「俺はお前の事をよく知らない。だが、俺もかつて洗脳されていた身だ。お前のこの行動が本心かどうかくらいはわかる！」

「！？」

さっきから見ていれば、こいつの言葉に感じていた違和感もどこから来るかがわかる。こいつは自分の意思で動いていない。俺とルドガーにはどこか共通点がある。俺達は、他の者に自らの意思を縛られた経験のある者どうしだ。

「お前はこうなる事を望んでいないはずだ！誰かに縛られ、動けないでいる！もしそうだというのなら、俺はお前を救い出す！ただそれだけだ！！」

ゴォオオオォォ…

ん？

ゴォオオオォォ…

何だ、この音は…？いや、何かの鳴き声か？

『ゴォオオオォォ！』

ＳＩＤＥ／遊星

「…これでよし！」

「ブルーノ、そっちは終わったか？」

「うん。バッチリだよ」

俺とブルーノはD・ホイールの整備を終わらせ、工具を片付けた。

「2人共、アキ達がお菓子を持ってきたわよ。早く来なさい」

「本当！？」

「わかった」

璃音が呼びに来てくれた。こんなパターンもそう珍しい事じゃないし、今は丁度いいタイミングだ。

璃音に連れられて居間（？）に入ると、ジャックやクロウの他にもアキと龍亜に龍可、勇香もいた。

「あ、遊星、ブルーノ！」

「お邪魔してるわ」

「ああ、構わない」

「菓子持ってきたぞ。今日はビスケットだ」

「早く食べようよ～！」

「龍亞、少し落ち着きなさいよ…」

龍可が溜め息混じりに窘める。賑やかなのは別に嫌いじゃないんだがな…。

「いつまで待たせるつもりだ？」

「ごめんごめん。じゃ、いただきます！」

ブルーノがジャックに軽く謝り、箱に大量に詰められたビスケットに手を伸ばした、その時だった。

キュオォォォ…

「何！？」

「なっ！？」

「え！？」

「これは…！」

俺達の右腕にある、シグナーの痣が突然光り出した。

「シグナーの痣が…！？」

「おい、まさかまた何かやばい事が起きてんじゃねえだろうな？」

勇香の推測は正しいだろう。だが、一体何が…？

シュンッ

「何！？」

「消えただと！？」

俺が原因を考えようとしたら、俺達の痣が全て消えてしまった。

「ええ！？」

「どこに行ったの！？」

「兄さん、これって…？」

「これは、ダークシグナーやゴーストとの戦いで起こったのと同じ現象…！」

俺やジャックのデュエルで、痣が全て1人に集まった時と同じだ。その結果、次にドローするカードが《救世竜　セイヴァー・ドラゴン》に変化した。

「じゃあ、赤き竜が誰かに力を貸してるってのかよ？」

「おそらくな。可能性があるとすれば、過去にいる紅刃達の誰かだろう」

「赤き竜は過去にも干渉できるというのか？」

「でも、赤き竜が力を貸さなくちゃいけないほどの敵って、一体何者なの…？」

いずれにしろ、正確な事はわからない。どこで何が起きているんだ…？

ＳＩＤＥ／将人

コオォォオオ…

突然、俺のデッキの１番上のカードが黄色に光り始めた。

「これは…？」

一体どうなっている？

「あれは…！？」

「背中に…赤き竜の痣…！？」

『ゴアァアアア！！』

ダークエンドまでもがカード毎紫に光り出した。

「！ライトエンド！？」

「トリシューラも…！？」

紅刃と月沙が持つライトエンドとトリシューラのカードもそれぞれ黄色と青に光っているようだ。

それを確認して前を向くと、視界が急に真っ黒になった。

「！？」

何も見えない。どういう事だ？一体何が起きた？

『ゴオォォオオオ！』

目の前に赤い何かが現れた。これは…赤い…竜？

「！まさか…お前は紅刃達が言っていた赤き竜なのか？」

『ゴオォォォオオオ！』

赤き竜が吠えた時、俺の頭の中に何かのイメージが浮かんできた。

黒い…龍。４枚の翼を持つ、黒い龍が描かれたカード。これは…

シンクロモンスター？ダークエンドとよく似ている…。いや、まさ

か、ダークエンドが進化した姿なのか？

その考えに行き着くと、カードの名前と効果も入ってきた。なるほど…そういう事か…。

「力を…俺に力を貸してくれるのか…？」

『ゴォォオオオオオ！！』

赤き竜は俺の言葉を認めたのか、強く吠えて消えていった。それを見届け、俺は1度目を閉じた。

なぜ俺に力を貸してくれるのかはわからない。だが、1つだけわかる事がある。

俺もあいつも、ルドガーを偽りの運命から救いたいという事だ！

「そういう事か…。ならば、遠慮なく使わせてもらう！」

目を開くと、目の前にはルドガーと地縛神がいた。

「！？その目は…！？」

「俺のターン！！」

俊也の声を無視して光り輝くカードを引く。カードを確認すると、カードは光を失った。

「俺は《救世竜　セイヴァー・ドラゴン》を召喚！」

引いたカードを迷わずデュエルディスクに叩きつけると、妖精のような桃色の龍が現れた。

《救世竜　セイヴァー・ドラゴン》
チューナー（効果モンスター）
星１／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
このカードをシンクロ素材とする場合、「セイヴァー」と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

《救世竜　セイヴァー・ドラゴン》　ＡＴＫ／　０

「救世竜!?」

「あれはセイヴァー・スターとセイヴァー・デモンのシンクロ素材にしか使えないはず…！」

「まさか…赤き竜の力だというのか!?」

「レベル８《ダークエンド・ドラゴン》とレベル１《バトルフェーダー》にレベル１《救世竜　セイヴァー・ドラゴン》をチューニング！」

セイヴァー・ドラゴンが巨大化し、その中にダークエンドと《バトルフェーダー》が飛び込む。

「闇に羽ばたく悪魔の翼よ！怨念と悔恨を束ね、救世の名の下（もと）に抹消せよ！」

☆８＋☆１＋☆１＝☆１０

「シンクロ召喚！具現せよ！《セイヴァー・ダーク・ドラゴン》！！」

光の柱から現れたのは、両腕の代わりに得た４枚の黒い翼を広げた、更なる進化を遂げた《ダークエンド・ドラゴン》だった。

《セイヴァー・ダーク・ドラゴン》
シンクロ・効果モンスター
星１０／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ４０００／ＤＥＦ２８００
「救世竜　セイヴァー・ドラゴン」＋「ダークエンド・ドラゴン」＋チューナー以外のモンスター１体
このカードが破壊される時、代わりに相手のカード１枚を破壊する。
１ターンに１度、エンドフェイズ時まで相手の表側表示モンスター１体の効果を無効化する事ができる。この効果を使用したターンのバトルフェイズの間、そのモンスターの攻撃力１０００ポイントにつき１回追加で攻撃する事ができる。
エンドフェイズ時にこのカードをエクストラデッキに戻し、自分の墓地に存在する「ダークエンド・ドラゴン」１体を特殊召喚する。
《セイヴァー・ダーク・ドラゴン》　ＡＴＫ／４０００

『あれは…！？』

『凄い…！』

「3体目の…救世竜…！」

「セイヴァー・ダークの効果発動！相手モンスター1体の効果を無効にする！」

「何！？」

「ブーストチャージ！」

Ｕｒｕの体から光が漏れ出し、それをセイヴァー・ダークが全身で吸収していく。

「よし！効果を無効にするなら《地縛光》の効果の範囲外だ！」

「さらに、こいつは効果を無効にしたモンスターの攻撃力１０００ポイントにつき1回追加攻撃ができる！」

「何だと…！？」

「Ｕｒｕの攻撃力は３０００だから…」

「4回も攻撃できるのかよ…！？」

「さらに永続罠《最終突撃命令》を発動！全てのモンスターは永続的に攻撃表示になる！これで《スパイダー・ウェブ》の効果は通用しない！」

《最終突撃命令》
永続罠
このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に存在する表側表示モンスターは全て攻撃表示となり、表示形式は変更できない。

「セイヴァー・ダークで《地縛神　Ｕｒｕ》を攻撃！ダーク・ブースト・バイト！」

セイヴァー・ダークは紫のエネルギーを纏ってＵｒｕに突進し、一直線に貫いた。

「ぐぉおおぉぉぉ！？」

ルドガー　ＬＰ／２８００→１８００

「馬鹿な…！？地縛神が、この私が敗れるというのか…！？」

「ああ、これで終わりだ！セイヴァー・ダークでダイレクトアタック！バイオレット・バースト！！」

セイヴァー・ダークが宙返りをして口から紫の波動を吐き出し、ルドガーの残りライフを全て削り取った。

「ぐぉおおおおぉぉぉおおおぉおお！！！」

ルドガー　ＬＰ／１８００→　０

将人＆俊也　ＷＩＮ

決着がつくと、周りの炎の壁が消えていった。

「ルドガー！」

俺達は倒れるルドガーに駆け寄った。俺がルドガーを抱え起こす。

「ぐ…礼を言うぞ…」

「何？」

「お前達が私を倒してくれたおかげで…私は奴から解放された…」

そう言って微笑むルドガーの目は普通の人間のそれに戻り、顔の模様も消えていた。

「私はレクスと共に…冥界で暮らしていた…。だが、ニュートラルと名乗る謎の男が、私達の下に現れた…」

「ニュートラル！？」

「奴は、私達を生き返らせる代わりに…自分の組織に入るように言ってきた…」

「そんな事ができるの…？」「できるから…私は今ここにいる…」

「…」

「当然、私達は断った…。もう現世に干渉するつもりはない。それに、得体の知れない組織に入るなど、できはしないからな…」

「じゃあ、何で…」

「奴は、無理矢理私達を従え生き返らせたのだ…」

「無理矢理？」

「私にもよくわからないが…気づいた時には、私達は組織の言いなりに動くようになっていた…」

何だそれは…。まるで洗脳だ。

だが、俺の目は正しかったようだ。こいつは、本心で行動しているわけじゃなかったんだ。

「ここに来て、辛うじて正気を保つ事ができた…。だから、少しでも負ける確率を上げるために…2人同時に相手するように仕向けたのだ…」

「そうやって、デュエルに負ける事で洗脳を解こうとしたのか…」

洗脳、か…。俺も洗脳されていた時期があった。抵抗もした。気持ちはわかる。

「ん？ちょっと待て。ゴドウィンはどこに行ったんだ？」

「レクスはまだ…組織にいるだろう…いつかお前達の前に現れるはずだ…」

「そうか…」

ならば、俺達がやるべき事は1つだ。

「…俺はお前と初めて会ったし、レクスという奴もほとんど知らない。だが、もし出会う事があったら俺達が倒して解放する」

「…頼めるか…？」

「ああ。約束だ」

「あの人ともいろいろあったしね」

「俺も協力する」

「私も。だから安心して」

「そうか…。なら、頼んだぞ。弟を…レクスを、救ってくれ…」

ルドガーはそれだけ言い残すと、黒い塵になって消えてしまった。

「ルドガー…」

軽くなった両腕を下ろして、俺は立ち上がった。

「安心しろ。レクスは俺達が…！」

見上げると、俺の救世竜が空に消えていくのが見えた。

ＳＩＤＥ／遊星

しばらくすると、１度消えた痣が戻ってきた。

「痣が戻った…！」

ジャックが呟くと、痣は光を失い、いつもの状態に戻った。

「どうなってやがんだ？」

「わからない。一応、事は済んだみたいだが…」

しかし、わからない事が多い。赤き竜が介入するほどの事件…一体何が…。

まさか、ニュートラルが動き出したのか？今度、紅刃達に聞いてみる必要がありそうだ。

ＳＩＤＥ／将人

「覚醒？」

レッド寮の近くまで来た時、俊也が話を切り出してきた。

「うん。救世竜のカードを引いた時、君の瞳が紫になっていた」

確かに、体の奥底から力が湧いてくるような感じはしたが、月沙と同じ現象が俺にも…？

「どうにかして使いこなせば、奴らに対抗できる強力な一手になるかもな」

「私は前から特訓してるから、ある程度の事は教えてあげられるよ。いつ何が起きてもいいように頑張ろう」

「ああ、よろしく頼む」

覚醒…。端から聞けば頭の弱い馬鹿が好き好んで使っていそうな言葉だが、敵の規模や強さがはっきりしていない以上、使いこなせるようにしなければならない力だ。

アビリティを完璧に使いこなす事が、勝敗を分ける事にもなりかねない。デュエルもそうだが、俺自身もっと強くならなければ…。

待っていろ、ニュートラル。人を好き勝手に操る罪は重いという事を教えてやる…！

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第３３話　似た境遇の人には妙な親近感を覚える（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「やっちまったよ…。とうとう『セイヴァー』のオリカまで出しやがった…」

璃音「まあ、過ぎた事は仕方ないわよ。二次創作なんてやりたい放題やってなんぼでしょ？」

フィレス『ガウルルッ』

勇香「やりすぎて逆につまらなくなったら元も子もないだろ…。何か私の使用デッキも嫌な予感がするんだけど…」

璃音「モンスターとかがオリカだらけのデッキは使わないそうよ。それより、あなたのデッキまだ決まってないの？」

勇香「仕方ねえだろ！炎属性単体で使えるシンクロドラゴンが全然出て来ねえんだからよ！つーか『ラヴァル』でさっさとレベル８くらいのシンクロドラゴン出せやコラァアアア！！」

璃音「ハァ…あまり高望みしない方がいいわよ。今回はルドガーが使用した《地縛神　Ｕｒｕ》を紹介するわ。なお、効果はＯＣＧ版のものを取り扱わせてもらうわ」

《地縛神　Ｕｒｕ》
効果モンスター

星１０／闇属性／昆虫族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ３０００
「地縛神」と名のついたモンスターはフィールド上に１体しか表側表示で存在できない。
フィールド上に表側表示でフィールド魔法カードが存在しない場合このカードを破壊する。
相手はこのカードを攻撃対象に選択する事はできない。
このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
１ターンに１度、このカード以外の自分フィールド上に存在するモンスター１体をリリースする事で、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択し、このターンのエンドフェイズ時までコントロールを得る。

璃音「でたらめな効果を持つ地縛神の１体よ」

勇香「攻撃対象にされなくて、この攻撃力で直接攻撃までできるとか、無茶苦茶なモンスターだな…」

璃音「アニメとは違って、魔法と罠は通用するわよ。後、フィールドにいるのが地縛神だけの場合は攻撃自体ができないから注意しなさい。ただし、フィールド魔法が消えるとすぐに自壊するわ」

勇香「さて、こいつの固有効果だけど、自分のモンスター１体をリリースすれば、相手のモンスターをエンドフェイズまで奪う事ができる」

璃音「特殊召喚やトークンを使ってモンスターを常に供給できれば、相手にとってかなり厄介な効果になるわね」

勇香「これだけやばい効果を持ってんのに、普通に特殊召喚できるのが怖いよな…。今じゃ、墓地に送って《死者蘇生》で即登場、な

んて笑えない芸当もできる。フィールド魔法を維持できれば、味方としては凄く心強いな」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

前書きでも言いましたが、後悔はしていません。これからもぶっ壊れにならない程度にオリカを使用するかもしれませんので、どうぞよろしくお願いします。

本編でも言ってた通り、長官も出します。いつ出るかはお楽しみに…。

では、また次回！

第３４話　運転中の妨害は厳禁（前書き）

今回も変則マッチを行います。セブンスターズ編、大詰めです。

それではどうぞ！

第３４話　運転中の妨害は厳禁

ＳＩＤＥ／月沙

私達…っていうか将人と俊也がルドガーを倒してる間にアムナエルの件も決着がついたみたい。

となると、そろそろ三幻魔編も大詰めかな？後は万丈目君と吹雪さんの意味不明なＬＯＶＥ（？）デュエルの後に理事長降臨くらいだっけ。

私達は今、いつもの広場で特訓中。私と将人は何だかんだで覚醒したから、それをいつでも引き出せるようにいろいろやってる。でも、この手の能力には体力の消耗が付き物で…。結構疲れるんだよなぁ、これ…。

「…よし、休憩するか」

紅刃の一言で、私達は休憩する事にした。

私はまだ覚醒状態のアビリティを使いこなせるわけじゃないけど、少しずつ使えるようになってきてる。将人は始めたばかりだからか、上手く力を引き出せないみたい。…ぱっと見はどこかのバトル漫画にしか見えないよね。何か悲しくなってきた。

『皆様、飲み物をどうぞ』

「あ、ありがと」

スイレンがどこかから持ってきたスポーツドリンクを受け取り…
ってどこのスポーツ漫画？また悲しくなってきた。

「ところで、１つ言いたい事があるんだけど…」

「？」

「お前、忙しいんじゃなかったのかよ？」

「忙しい時期はもう過ぎたからね」

紅刃の質問に答えたのは、自称神様（笑）ことフォッタだった。

「だ～か～ら～！僕は神様見習いだって！」

「はいそこ、人の心を読まない！」

全く…。フォッタは、単純に私達の特訓を見に来ていた。何でも、私と将人が覚醒を使えるようになったからその調査が目的らしいけど。

「それにしても、セブンスターズとの戦いは僕達が勝ったし、しばらくは平和そうなんだけどね…」

「ニュートラルやゴドウィンの件もあるし、気を抜くわけにはいかねえな」

俊也と紅刃がそんな事を話してるのを聞いて、私はそれを否定するために話に入っていった。

「…いや、まだ終わりじゃない」

「え？」

「まだ黒幕との最終決戦が残ってる」

「黒幕だと？」

「そう。地震が起きて、万丈目君が七精門の鍵に引っ張られて空を飛んだら合図だよ」

「は？何じゃそりゃ？」

ゴゴゴゴゴ…

紅刃の疑問に答えるかのように、突然島全体が揺れ出した。

「な、何だ！？」

「ついに始まった。最終決戦の幕開けだよ…！」

私がみんなにそう伝えると、地震が収まった。

「何だあれは!?」

将人の視線の先には、デュエルアカデミアから天に飛び出している、一筋の緑の光があった。それに合わせて、七精門の柱が地中から突き出てきた。

「七精門だ!」

「あれがか!?」

『皆様、あれを…!』

スイレンが指を差した方向には、鍵に引っ張られて飛んでいく万丈目君の姿があった。

「本当に飛んでる!?」

「あらら…」

「とにかく追うぞ!」

紅刃の先導で、私達は万丈目君が飛んでいった方へ走り出した。

私達が到着したのは、７つの石柱――七精門が突き出た盆地。十

代達はもう着いていて、私達はクロノス先生や鮫島校長と同着だった。

「皆さーん！」

「何事なノーネ!?一体全体、どうなってるノーネ!?」

「お前ら、何があったんだ!?」

「みんな!?それが…七精門の鍵が…」

「「「「「「サンダーのせいで！」」」」」」

十代を筆頭に、みんなが声を揃えて万丈目君を指差した。ていうか吹雪さんは便乗しないでください。

「ええと…万丈目が何をやらかしたんだ?それと、吹雪さんのその格好は何ですか?」

今の吹雪さんはアロハシャツにウクレレ装備という、どこのバカンスだと言いたいくらいに場違いな格好だ。なんでその服装を選んだんだか…。

「いやぁ、ノリだよノリ」

「どんなノリだよ」

「ん?誰だそいつは?」

万丈目が指を差した先には、フォッタがいた。

「あ、えっと…お気になさらず～」

「フォッタ、それは無理があるぞ？」

「は！？まさか、紅刃と波星君の隠しｇ「「なわけあるかぁあああああ！！！！」」ごふぁっ！？」

何で！？何でそうなるの！？ていうかそれって…あああぁぁぁぁあぁあああああ！！！

「次言ったら斬るぞてめえ」

「ぐふ…も、申し訳ありませんでした…」

「万丈目君、今のはさすがにないよ…」

「月沙の奴、どうしたんだ？」

「察しろ…」

「？」

ゴゴゴゴゴ…

「また地震か！？」

「あれは…！？」

ハァ、ハァ…地震のおかげで何とか落ち着いた…。顔を上げると

盆地の真ん中の地面から何かの機械が出てきたのが見えた。その機械には、3枚のカードが浮かんでいる。

「あれは三幻魔のカード！？」

「三幻魔！？」

「あのカードが…？」

「今なら、カードを戻せば三幻魔の封印が間に合うかも知れません！」

「だったらすぐに回収だ！」

紅刃は3枚のカードを回収するために走り出した。

『そのカードを貴様達にくれてやるわけにはいかんな！』

「！？」

紅刃が手を伸ばす前に、突然上空にヘリコプターが現れた。そのヘリコプターから落下してきた大きな『何か』から機械の腕が伸び

て、先に三幻魔のカードを回収してしまった。

「三幻魔のカードが!?」

「何だこいつ!?」

『儂の声を忘れたかね?鮫島!』

落ちてきたのは、何かよくわからないロボットだった。中心に装着されてるカプセルっぽい巨大な容器の中の培養液?に浸ってる老人に見える男がいる。…うん、説明がぐだぐだだ。

「この声は、まさか影丸理事長!?」

『ええ!?あのロボットがこの学園の理事長なんですか!?』

「(違う違う、その中のおじいさん)」

「お前がセブンスターズのボスか?」

『その通り!七精門の鍵をセブンスターズにを狙わせたのも、また鮫島に鍵を守る様に指示したのもこの儂だ!』

「なら七精門が勝手に開いたのは?」

『最初から幻魔の封印を解くのに鍵など必要なかったのだ』

「は?」

『三幻魔復活の本当の鍵。それははデュエリスト達の闘気に満ち溢

れた空間。セブンスターズとお前達、この戦いにおいてデュエリストの闘気が充分に集まると考えたのだ。鮫島がダミーの鍵を用意してたのは予想外だったが、特に問題ではなかったな』

「良かった…封印が解けたのが俺のせいじゃなくって…」

その事実を聞いてホッとする万丈目君。でも、鍵を持ち出したのは感心しないな。

「要するに、三幻魔の復活に必要な闘気を集めるために、お前はデュエルアカデミアをこの島に造り、そして俺達を利用したって事か？」

『フフフ…その通り。幻魔復活のデュエリストを育てるためにな。貴様らは本当に良くやってくれた』

わかってはいたけど…利用されてたとなると、さすがにイラッと来る。

『後少しでこの儂に、幻魔復活により永遠の命と世界の覇権がもたらされる』

「永遠の命と世界の覇権？」

「幻魔には俺達の知らない秘密がまだあるのか？」

よくあるパターンだよね、これって。まさにラスボスがほしがりそうなものだし。

「そうはさせん！貴様の野望はオベリスク・ブルーのカイザー、丸

藤亮が阻止してみせる！」

「いや！カイザー、ここは一、十、百、千、万丈目サンダーに任せてもらおう！」

「いや、普通に名乗れよ」

「いやいや、ここはこのオベリスクブルーの…う～ん…ブリザードプリンスこと天上院吹雪がお相手しようじゃないか！」

「絶対今考えましたよね？ていうかその服装じゃ格好つきませんって」

「紅刃、いちいちツッコんでたらきりがないって」

とにかく、アカデミアのデュエリストが次々に名乗りを上げていった。

「ならラーイエローのｍ『残念ながら儂の相手の候補は決まっている』…」

三沢君、ドンマイ。でも候補？原作だとそうは言ってなかったはず…。

『儂の相手は…遊城十代、真川紅刃、波星月沙、風嶺俊也、銘丈将人、貴様らのうちの誰かだ！』

「俺達だって！？」

「私達も！？」

『精霊の力を最も強く感じる貴様らでなくては意味がないのだ。無論、断る事は許さん！』

影丸のロボットから腕と足が出てきて、さらに三幻魔のカードを加えたデッキがデュエルディスクにセットされた。

ああ、そうか。私達はアビリティが使える。精霊との結び付きが強い事が条件だから…。十代がアビリティを使えないのはよくわからないけど。

『そうだな…。遊城十代！儂と戦え！』

「俺か！？」

ここはやっぱり原作通り十代だよね。

「十代、任せた」

「負けるなよ！」

「おう！それじゃ、行ってくるぜ！」

将人と紅刃に送り出され、十代は影丸と対峙した。

「今回は俺達の出る幕はなさそうだな」

「後はゆっくり見物しよっか」

「見物って…そんな呑気な…」

翔君、大丈夫だよ。心配しなくても、十代は必ず勝つから。

「あなた達に見物している暇はありませんよ」

「「「「『!?』」」」」

後ろから、どこかで聞いたような声がした。

思わず振り返ると…。

「……!」

「お久しぶりですね」

「お前は…!?」

長身に灰色の髪。間違いない。

「…ゴドウィン…！？」

――そう、私達の時代の治安維持局長官にして最後のダークシグナー、レクス・ゴドウィンだった。

「誰だあいつ？」

「さあ…？」

「どうしましたか？幽霊を見たような顔をしていますが…？」

「…いや、別に？意外だと思ってさ」

「意外？」

「こんなに早く会えるとはな。それに、それは何の真似だ？」

紅刃が言う『それ』は、ゴドウィンの傍らにあるある物。それは、紛れもなくD・ホイールだ。

「あなた達とデュエルをしようと思いましてね」

「デュエルだと？」

「それも、ライディングデュエルでね」

「!?」

ライディングデュエル。D・ホイールに乗りながら、フィールド魔法《スピード・ワールド2》の中で戦うデュエル。普通の魔法カードは使えず、代わりに『SP(スピードスペル)』と呼ばれる特別な魔法カードを使って戦う事になる。

一応、私達はD・ホイールを持っている。ライディングデュエルもできる。でも、大きな問題がある。

「ちょっと待て!ここには俺達のD・ホイールがない!ライディングデュエルは無理だ!」

私達はこの時代にD・ホイールを持ってきていない。こんな事態、想像すらしてなかったし…。

「できないのならば、私の地縛神にこの島を沈めてもらいます」

「はあ!?」

何その理不尽すぎる要求は!?

『待て!よくはわからぬが、儂の邪魔をするつもりか!?』

「影丸…といいましたか。私の目的は、真川紅刃を始めとする未来から来た人間と遊城十代の抹殺。それ以外の犠牲など、知った事ではありません」

『何だと!?』

「紅刃達と俺の抹殺!?」

「俺達はまだわかるけど、何で十代まで範囲に入ってんだよ?」

「彼も我々の目的の大きな障害になると判断したからです」

やっぱり主人公だから?でも、これで十代もこの戦いの『関係者』になってしまった。

「彼らを今まとめて潰せるのなら、島1つなど安い代償です」

「代償だと?ふざけるな!貴様が何者かは知らないが、そんな事を俺達が許すと思っているのか!?」

「許可など最初から求めてはいません」

「ぐ…!」

憤慨する万丈目君を、ゴドウィンは一言で黙らせた。

「お喋りが過ぎましたね。では、始めましょうか」

そう言ってゴドウィンは後ろを向き…ってあれ?このパターンは…。

ギュイィィン…

「あれは！？」

「ダークシグナーの痣…！」

背中に浮かび上がったのは、紫に光るコンドルの地上絵の痣だった。まさか…。

「ぬうぅうううぅおおおぉおぉおお！！」

ゴドウィンの服が破けて上半身が顕わになり、筋肉が増大し、髪も伸びていく。振り返ったゴドウィンの体には紫の模様が刻まれていて、目もダークシグナーのそれに変わっていた。左腕は義手になっている。

「フフフフ…」

「本当にダークシグナーなのか…？」

「ああ。あれが、最後のダークシグナーだ」

私はというと…雰囲気ぶち壊しだけど、笑いを堪えていた。だって、まさかまた『超』官化が見られるなんて思わなかったし…。いや、今はそんな事を気にしている場合じゃない。

「あんたまさか、本当にこの島を沈めるつもりなの！？」

「ライディングデュエルができないというのなら、無条件で全て葬り去るまでだ！」

「復活して根性まで腐ったか…！？」

最初からこのつもりでこんな無茶な条件を出したんだと思う。卑怯な…！

「ゴドウィンだっけ？君は運がないね」

「何？」

ここで、今まで黙っていたフォッタが話に入ってきた。

「僕が今ここにいるという事はとんだ計算ミスだね。未来からＤ・ホイールを持ってくる事ぐらい朝飯前さ」

「何！？」

「そうか、まだお前がいたか！」

フォッタは仮にも神様見習い。ていうか今それができなかったら困る！

「仮にもは余計だよ」

「だから人の心を読むんじゃない！」

「ぬぅ…！」

「さて、誰が出るんだい？」

「俺がやる！」

真っ先に立候補したのは紅刃だった。

「俺は1度あいつと戦ってる。リベンジには丁度いい」

紅刃は遊星達と一緒にゴドウィンと戦った事があるけど、最終的にライフをたったの1だけ残してクラッシュしてしまった。リベンジしたい気持ちはわかる。でも、紅刃を信じてないわけじゃないけど、ゴドウィンは1人で挑んでどうにかなる相手じゃない。確実に勝って目を覚まさせるためには…。

「わかった。それじゃ…」

「待って！私も行く！」

「え？」

「私ならゴドウィンの2体のシンクロモンスターを倒せるかもしれない。それに、私だって力になりたい！」

「…わかった。頼んだぜ！」

「うん！」

あのモンスター達の蘇生効果は厄介だ。完全に倒すには、私が切

り札を出すしかない…！

「僕達は…」

「俊也と将人は休んでてくれ。前にルドガーと戦ってるし、万全な状態なのは俺と月沙だけだ」

「う…」

「仕方ない。好きにしろ」

普通に特訓してるとはいえ、まだダメージが抜け切ってるかどうかは微妙なんだろう。ここは紅刃と私で何とかするしかない。

「それじゃ、持ってくるね」

フォッタは1度この場から消えた。そして、そこまで待たないうちに戻ってきた。

「これで合ってるよね？」

「ああ、間違いない」

紅刃のD・ホイールは赤い模様が入った紫。私のD・ホイールはトリシューラをイメージしたデザインだ。…別に三つ首じゃないからね？

「え、ちょ…何だそれ？」

何も知らない十代達は突然の出来事に混乱しているみたい。まあ、

無理もないけどね。

「説明は俊也と将人にしてもらって」

「丸投げ!?」

「…まあ、いいでしょう」

すると、上空に巨大な地上絵が縦に現れた。ゴドウィンの背中にある痣と同じコンドルだ。

「あれは何なノーネ!?」

「どうなっているんだな!?」

「やっぱあれが『コース』か」

「その通り。さあ、準備しなさい」

私と紅刃はデッキを手早くライディング用に組み替えて、D・ホイールに乗り込んだ。私は1度ヘアゴムを取って、髪を下の位置でひとまとめにしてからヘルメットを被った。ポニーテールのままじゃ被りづらいしね。

「（スイレン、デッキで待機してて）」

『はい！』

スイレンははっきり返事するとデッキに戻っていった。

スタートラインに着くと、空の地上絵が傾き始めた。それを見て、私と紅刃はアイシールドを下ろした。

ていうか超官…じゃなかった、長官、ダークシグナーの状態だからってヘルメットは被ろうよ？まあ、ランニングデュエルじゃないだけマシかな？そんな事をされたら主に私がデュエルどころじゃない。

「２ｖｓ１の変則デュエル。あなた達２人にはそれぞれ４０００のライフ。そして私にはその２倍、８０００のライフ。互いにファーストターンでは攻撃できない。先攻は譲りましょう。異存はありませんね？」

「ないよ」

「行くぞ、ゴドウィン！」

私達はＤ・ホイールを走らせて勢いよくジャンプさせ、空中のコンドルの地上絵のコースへと移った。

「「「《スピード・ワールド　２》セット・オン！」」」

Ｄ・ホイールのコンピュータを操作し、専用のフィールド魔法を展開させる。何か、これを使うのも久しぶりだな。

《スピード・ワールド　２》
フィールド魔法（アニメオリジナル）
「Ｓｐ（スピードスペル）」と名のついた魔法カード以外の魔法カードをプレイした時、自分は２０００ポイントダメージを受ける。
お互いのプレイヤーはお互いのスタンバイフェイズ時に１度、自分

用スピードカウンターをこのカードの上に１つ置く（お互い１２個まで）。
自分用スピードカウンターを取り除く事で、以下の効果を発動する。
●４個：自分の手札の「Ｓｐ」と名のついたカードの枚数×８００ポイントダメージを相手ライフに与える。
●７個：自分のデッキからカードを１枚ドローする。
●１０個：フィールド上に存在するカードを１枚破壊する。

「さあ、かかってくるがいい！」

「言われなくても！」

このデュエル、絶対に負けられない！

「ああ、全力で行くぜ！」

「「「デュエル！」」」

紅刃＆月沙ｖｓゴドウィン

ＳＩＤＥ／紅刃

「最初は私が行く！ドロー！」

互いに最初のターンは攻撃できない。一応安心してモンスターを

並べられるけど、油断はできない。

「《氷結界の武士》を召喚！」

最初にフィールドに出てきたのは、水色の鎧を着た武者だった。

《氷結界の武士》　ＡＴＫ／１８００

「カードを１枚セットし、ターンエンド！」

月沙
ＬＰ／４０００
ＳＰＣ／０
手札／４
モンスター／《氷結界の武士》（ＡＴＫ／１８００）
魔法・罠／リバース×１

「次は俺だ！ドロー！」

月沙　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／０→１

紅刃　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／０→１

ゴドウィン　ＬＰ／８０００　ＳＰＣ／０→１

「俺は《豊穣のアルテミス》を召喚！」

パーミッションの必須モンスター。いつも頼りにしてるぜ。

《豊穣のアルテミス》　ＡＴＫ／１６００

「カードを2枚セットし、ターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／４０００
ＳＰＣ／１
手札／３
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×２

「我のターン！」

あ、一人称が『我』に変わった。

月沙　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／１→２

紅刃　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／１→２

ゴドウィン　ＬＰ／８０００　ＳＰＣ／１→２

「相手フィールド上にのみモンスターが存在する時、手札から《太陽の神官》を特殊召喚できる！」

出たよ、《サイバー・ドラゴン》と同じ効果を持つ半上級モンスター…。

《太陽の神官》
効果モンスター
星５／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ２０００
相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモン

スターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから「赤蟻アスカトル」または「スーパイ」1体を手札に加える事ができる。

《太陽の神官》　ＡＴＫ／１０００

「そして、チューナーモンスター《赤蟻アスカトル》を召喚！」

文字通り、赤い蟻のモンスターが飛び出してきた。もうシンクロ召喚か…。

《赤蟻アスカトル》
チューナー（効果モンスター）
星３／地属性／昆虫族／ＡＴＫ　７００／ＤＥＦ１３００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在するレベル５のモンスター１体を選択して特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効化され、そのターンのエンドフェイズ時に墓地へ送られる。

《赤蟻アスカトル》　ＡＴＫ／　７００

「もう来るの…！？」

「レベル５《太陽の神官》にレベル３《赤蟻アスカトル》をチューニング！」

アスカトルが３つの輪になり、神官がそれを潜り抜ける。

「太陽昇りし時、全ての闇を照らし出す！降り注げ光よ！」

☆５＋☆３＝☆８

「シンクロ召喚！出でよ！《太陽龍インティ》！」

太陽のシンボルマークに４つの首が生えたような赤い龍が現れた。

《太陽龍インティ》
シンクロ・効果モンスター（原作効果）
星８／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２８００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
１ターンに１度、エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力を０にすることができる。
この効果は相手ターンでも使用できる。
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、このカードを破壊したモンスターを破壊し、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

《太陽龍インティ》　ＡＴＫ／３０００

「《太陽龍インティ》…！」

「まだもう片方は揃ってない。そっちの召喚を食い止めれば…！」

「これで終わると思ったか？」

「「？」」

「墓地のチューナー1体を除外し、《泣き神の石像》を特殊召喚！」

インティの横に、何の変哲もない石像が現れる。

《泣き神の石像》
効果モンスター
星2／闇属性／岩石族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　５００
自分の墓地に存在するチューナー1体をゲームから除外して発動する。
このカードを手札から特殊召喚する。

《泣き神の石像》　ＡＴＫ／　０

「そして、手札の《ＤＴ　黒の女神ウィタカ》の効果を発動！ライフを１０００払い、手札から特殊召喚する！」

ゴドウィン　ＬＰ／８０００→７０００

「何！？」

ゴドウィンが次に出したのは、黒い布を纏った奇怪なモンスターだ。

《ＤＴ（ダークチューナー）　黒の女神ウィタカ》
ダークチューナー・効果モンスター（ＴＦオリジナル）
星3／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
このカードは通常召喚できない。
１０００ライフポイントを払った場合に特殊召喚する事ができる。
1ターンに1度、自分フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター1体を選択して発動する事ができる。

このカードは選択したモンスターと同じレベルになる。
このカードをシンクロ素材とする場合、ダークシンクロモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

《ＤＴ　黒の女神ウィタカ》　ＡＴＫ／　０

「ダークチューナー…！？」

「この流れは、あの時と同じじゃねえか！」

以前、俺や遊星達が戦った時も、ゴドウィンは今と全く同じ動きをした。という事は…。

「ウィタカの効果発動！自分フィールド上のシンクロモンスター１体のレベルをコピーする！我の場のシンクロモンスター、インティのレベルは８！よって、ウィタカのレベルも８となる！」

《ＤＴ　黒の女神ウィタカ》　Ｌｖ．３→８

「レベル２《泣き神の石像》にレベル８《ＤＴ　黒の女神ウィタカ》をダークチューニング！」

今度はウィタカが黒い８つの星になり、《泣き神の石像》に埋め込まれていく。

「闇に月満ちる時、魔の囁きが聞こえ出す！死へと誘(いざな)え！」

☆２＋☆－８＝☆－６

「ダークシンクロ！いでよ、《月影龍クイラ》！」

インティとは対照的な、月をイメージした青い龍が召喚された。

《月影龍クイラ》
ダークシンクロ・効果モンスター（原作効果）
星－６／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ２０００
このカードはシンクロ素材とするチューナー以外のモンスター１体のレベルからダークチューナーのレベルを引き、その数値が－６に等しい場合のみ、シンクロ召喚する事ができる。
自分フィールド上に存在する「太陽龍インティ」が破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在するこのカードを特殊召喚する。
自分フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在する「太陽龍インティ」を特殊召喚する。
このカードは自分のターンのエンドフェイズ時に破壊される。

《月影龍クイラ》　ＡＴＫ／２５００

「くそ、もう出てきたか…！」

「我はこのままターンエンドだ！自分のターンのエンドフェイズ時、クイラは破壊される」

クイラは月が沈むように墓地に行ってしまった。

ゴドウィン
ＬＰ／７０００
ＳＰＣ／２
手札／２
モンスター／《太陽龍インティ》（ＡＴＫ／３０００）
魔法・罠／なし

インティとクイラで厄介なのは、クイラの持つ蘇生効果だ。片方が墓地に沈めば、もう片方がフィールドに昇る。名前の通り、太陽と月みたいなモンスターだ。

攻略方法は2つある。1つは俺がカウンター罠で蘇生効果を無効にする。そうすれば蘇生効果は使えなくなる。もう1つは…。

「（私がトリシューラをシンクロ召喚して、フィールドと墓地にいる2体をまとめて除外する事。でも、氷結界のカードで組んだこのデッキじゃ少し出しづらい。いや、それでも地縛神を召喚される前に倒さないと…！）私のターン！」

月沙　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／２→３

紅刃　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／２→３

ゴドウィン　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／２→３

「《Ｓｐ－エンジェル・バトン》を発動！スピードカウンターが２つ以上ある時、カードを２枚ドローし、手札を１枚捨てる！」

《Ｓｐ－エンジェル・バトン》
スピードスペル
アニメオリジナル
通常魔法
自分用スピードカウンターが２つ以上ある場合に発動する事ができる。
デッキからカードを２枚ドローし、その後に手札１枚を墓地へ送る。

「そしてリバースカードオープン！永続罠《リビングデッドの呼び声》！墓地に送った《氷結界の大僧正》を攻撃表示で特殊召喚する

！」

頭に笠を被り、杖を持った僧正が蘇る。

《氷結界の大僧正》　ＡＴＫ／１６００

「さらに、手札から《氷結界の軍師》を召喚！」

《氷結界の軍師》　ＡＴＫ／１６００

「軍師の効果発動！手札から氷結界のモンスター１体を墓地に送り、カードを１枚ドローする！」

一気にモンスターを３体並べたか。大僧正の効果で《リビングデッドの呼び声》の自壊効果は効かない。後は戦闘破壊やモンスター効果さえなければ充分持ちこたえられる。

「カードを１枚セットし、ターンエンド！」

月沙
ＬＰ／４０００
ＳＰＣ／３
手札／２
モンスター／《氷結界の武士》（ＡＴＫ／１８００）《氷結界の大僧正》（ＡＴＫ／１６００）《氷結界の軍師》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／《リビングデッドの呼び声》リバース×１

「俺のターン！」

月沙　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／３→４

紅刃　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／３→４

ゴドウィン　ＬＰ／７０００　ＳＰＣ／３→４

「《フェアリー・アーチャー》を召喚！」

弓矢と４枚の羽を持つ妖精が呼び出される。龍可から貰ったカードがここでも役に立つとはな…。

《フェアリー・アーチャー》　ＤＥＦ／　６００

「効果発動！俺の場の光属性モンスター１体につき４００ポイントのダメージを与える！俺の場の光属性モンスターはアルテミスとこいつの２体！２体分、８００ポイントのダメージだ！シャイニング・アロー！」

光を込めた矢が放たれ、ゴドウィンの背中を真っ直ぐに射抜いた。

「ぐおっ…！」

ゴドウィン　ＬＰ／７０００→６２００

「アルテミスを守備表示にしてターンエンドだ！」

《豊穣のアルテミス》　ＡＴＫ／１６００→ＤＥＦ／１７００

伏せカードのうち１枚は《攻撃の無力化》。俺と月沙のどっちに攻撃してきても１ターンなら防げる。

紅刃
ＬＰ／４０００
ＳＰＣ／４
手札／３
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＤＥＦ／１７００）《フェアリー・アーチャー》（ＤＥＦ／　６００）
魔法・罠／リバース×２

「我のターン！」

月沙　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／４→５

紅刃　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／４→５

ゴドウィン　ＬＰ／６２００　ＳＰＣ／４→５

「我は《キラー・トマト》を召喚！」

「は？」

「《キラー・トマト》？」

ゴドウィンが出したのは、顔があるトマト。割とメジャーなモンスターだ。

《キラー・トマト》
効果モンスター
星４／闇属性／植物族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ１１００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力１５００以下の闇属性モンスター１体を自分フィール

ド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

《キラー・トマト》　ＡＴＫ／１４００

「あんなモンスター使ってたか？」

「《キラー・トマト》…リクルーター…攻撃力１５００以下の闇属性モンスター……っ！まさか、自爆特攻！？」

「そうか…！あいつ、地縛神を呼び出す気か！？」

いや、まだだ。このターンだけなら防げる！

「自爆特攻？フフフ…そんな事をする必要はない」

「何？」

「《Ｓｐ－ダーク・リクルート》を発動！スピードカウンターが５つ以上ある時、攻撃力１５００以下の闇属性モンスター１体をリリースし、そのモンスターの攻撃力以下の闇属性モンスターをデッキから特殊召喚する！」

《Ｓｐ－ダーク・リクルート》
通常魔法（オリジナル）
自分用スピードカウンターが５つ以上ある時に発動する事ができる。
自分フィールド上に存在する攻撃力１５００以下の闇属性モンスター１体をリリースし、デッキからそのモンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つ闇属性モンスター１体を特殊召喚する。

「攻撃力１５００以下！？」

「それじゃ…！？」

「我は《キラー・トマト》をリリース！」

《キラー・トマト》が上空に飛んでいき、強い光を発する。光が止んだ時には、地縛神の心臓部に変わっていた。

「究極の破壊をもたらせ！最強の地縛神！出でよ！Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ！！」

心臓部が強く光り、一気に巨大化していく。その中から、地上絵と同じコンドルの姿をした地縛神が現れた。

《地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ》
効果モンスター（原作効果）
星１０／闇属性／鳥獣族／ＡＴＫ　１／ＤＥＦ　１
このカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、「地縛神」と名のつくカードを召喚・反転召喚・特殊召喚する事ができない。フィールド上にフィールド魔法が表側表示で存在しない場合、このカードの以下の効果は無効となり、このカードはエンドフェイズ時に破壊される。
●このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
●相手モンスターはこのカードを攻撃対象にする事ができない。
●このカードは相手の魔法・罠カードの効果を受けない。
●１ターンに１度、自分のターンのバトルフェイズをスキップする事で、相手ライフを１にする事ができる。

《地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ》　ＡＴＫ／　１

「そんな…こんなに早く…！？」

よりによって特殊召喚かよ…。《スピード・ワールド　２》を破壊する事はルール上できないから、自壊効果はないも同然。蘇生制限もないし、厳しい相手だな…。

「Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａの効果発動！バトルフェイズをスキップし、相手のライフを１にする！」

「くそ、壊れ効果が…！」

「対象は、波星月沙だ！」

「…っ！」

「行け、地縛神よ！ポーラスター・オベイ！！」

Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａが紫の極太光線を放ち、月沙にぶち当てた。

「うあああぁぁあぁあああああああ！！」

月沙　ＬＰ／４０００↓　１

「月沙！」

月沙はそのままＤ・ホイールごと吹っ飛ばされて宙に浮く。

「走れないＤ・ホイーラーにターンは回ってこない」

ゴドウィンの言葉が耳に入った時、月沙はコース外に吹っ飛ばされていた。

まずい！この高さから落ちたら助からない！

「そのまま地獄に堕ちるがいい！」

「月沙ぁあああ！！」

畜生！ここからじゃ助けられない！俺にはどうする事もできないのかよ！？

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第３４話　運転中の妨害は厳禁（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「ライディングデュエルか…。いつかやるとは思ってたけど、最初が超官との変則マッチだなんてな」

璃音「漢字間違ってるわよ。間違ってはないけど」

フィレス『グルル…』

勇香「いや、どっちだよ？それより、月沙が大変な事になってんだけど…」

璃音「ここで切るくらいだからどうせ助かるでしょ？」

勇香「二次元独特の見解だな…」

璃音「さて、今回は一気に2枚行くわよ。ＯＣＧ版の《太陽龍インティ》と《月影龍クイラ》の紹介よ」

《太陽龍インティ》
シンクロ・効果モンスター
星８／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２８００
「赤蟻アスカトル」＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、このカードを破壊したモンスターを破壊し、そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える。

フィールド上に存在するこのカードが破壊された場合、次のターンのスタンバイフェイズ時、自分の墓地に存在する「月影龍クイラ」1体を特殊召喚する事ができる。

《月影龍クイラ》
シンクロ・効果モンスター
星6／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ２０００
「スーパイ」＋チューナー以外のモンスター1体以上
このカードが攻撃対象に選択された時、攻撃モンスターの攻撃力の半分だけ自分のライフポイントを回復する。
フィールド上に存在するこのカードが破壊された場合、自分の墓地に存在する「太陽龍インティ」1体を特殊召喚する事ができる。

璃音「破壊される度に互いを蘇生させ合うシンクロモンスターよ。専用のチューナーが必要だけど、素早く召喚できれば制圧力はなかなかのものよ」

勇香「インティは戦闘破壊されたら攻撃してきたモンスターを道連れにして、そいつの攻撃力の半分のダメージを与える。相手モンスターを破壊できるのが強いな。単純に攻撃力も高いし」

璃音「クイラは攻撃してきたモンスターの攻撃力の半分自分のライフを回復するわ。たいていは回復量がダメージ量を上回るから、ほぼ確実にライフを増やせるわね。原作効果と比べたら、インティは弱体化してるけどクイラは強化されてるわね」

勇香「弱点は本編で言ってた通りだ。除外や蘇生効果の無効には注意しないとな。一応、《スキルドレイン》とかじゃ蘇生効果は無効にできないけど」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

初めてライディングデュエルに挑戦しましたが、手札調整が難しいですね。手札補充系の魔法カードは使えませんし…。

長官戦は結構長引きそうなので、もしかしたら3部構成になるかもしれません。

では、また次回！

第３５話　神なら何をやってもＯＫなわけじゃないはず（前書き）

前回に引き続き、ＶＳゴドウィンです。

軽く超展開になりかけてるので注意してください。後、オリカもたくさん出ます。こんなはずじゃ…。

それではどうぞ！

第３５話　神なら何をやってもＯＫなわけじゃないはず

ＳＩＤＥ／月沙

強烈な痛みと浮遊感が私を襲った。

地縛神の一撃で大きく吹っ飛ばされ、コースを外れてしまった。

視界には、地上絵が現れた時から曇り始めた空が映る。大ダメージを受けたばかりで、体にあまり力が入らない。

このまま落ちたら死ぬ。私はここで『また』死ぬの？

…いや、まだだ。まだ、死ねない。

「…ま、だ……まだ…負けられない！！」

ブチッ

髪が自由になる。アビリティを一気に解放したからヘアゴムが切れたのかな。

Ｄ・ホイールを通して空中に氷のレールを創り、その上を走る。

「何！？」

そのまま滑るようにコースに戻り、レールをコース内まで延長し、真っ直ぐコース上に復帰した。後ろで氷のレールが粉々に割れる音がした。

「月沙…！？」

「私は大丈夫。気にしないで」

覚醒を使わなきゃこんな芸当はできなかった。本当に危ない。覚醒状態はできるだけ保っておこう。

「あそこから復帰するとはな…。まあいい。カードを1枚セットし、ターンエンドだ」

ゴドウィン
ＬＰ／７０００
ＳＰＣ／５
手札／０
モンスター／《太陽龍インティ》（ＡＴＫ／３０００）《地縛神Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ》（ＡＴＫ／　１）
魔法・罠／リバース×１

月沙
ＬＰ／　１
ＳＰＣ／５
手札／２
モンスター／《氷結界の武士》（ＡＴＫ／１８００）《氷結界の大僧正》（ＡＴＫ／１６００）《氷結界の軍師》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／《リビングデッドの呼び声》リバース×１

紅刃
ＬＰ／４０００
ＳＰＣ／５

手札／3
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＤＥＦ／１７００）《フェアリー・アーチャー》（ＤＥＦ／　６００）
魔法・罠／リバース×２

「ん？」

「あ…！」

ふと周りを見ると、光の雪みたいなものが黒雲に覆われた空を流れていた。まるで1カ所に集まるみたいに…。

『姫様、周りの様子が…！』

「（スイレン！ってあなた苦しそうじゃない！）」

『紅刃、まずい事になった…』

「（リーシェ、ロディス？）」

『我々精霊の力が吸収されているようだ』

「（何だって！？）」

スイレン達が事態の急変を告げるために出てきた。みんな顔色が悪い。

『原因は、おそらくあれだ』

ロディスが指を差した方では、いつの間にか召喚された《神炎皇

ウリア》と《降雷皇ハモン》が光を吸収していた。

「あれが三幻魔！？」

「フン、そんなもの我が地縛神には通用しない！」

デュエルをしている十代と影丸は平気だろうけど、私と紅刃は違う。これじゃ、デュエルどころじゃない。

「どうすれば…？」

キュウウゥゥン…

「「「！？」」」

急に右腕が熱くなった。

何事かと思って確認すると、信じられないものが目に入った。

「！？」

「これは…！？」

「馬鹿な!?シグナーの痣だと!?」

そう、私と紅刃の右腕に浮かんで光っているのは、遊星達しか持ってないはずのシグナーの痣だ。

私のは竜の足の痣で、アキと同じもの。紅刃は竜の手で、龍可と同じ痣だ。

「何で私達にシグナーの痣が…?」

『!これは…』

『力が戻っていく…?』

『あれ?さっきまで苦しかったのに…?』

スイレン達はなぜか力を取り戻している。

『紅刃、月沙!』

あ、通信だ。D・ホイールの画面がテレビ電話に切り替わり、俊也と将人が映った。

「俊也、将人!?どうやって通信を入れたんだ?」

『フォッタに通信を入れてもらったんだ。ちょっと異常事態が起きて…』

「幻魔の件なら知ってるよ。ここから見える」

『それもあるが、もっと奇妙な事が起こった』

『僕と将人に、なぜかシグナーの痣が…！』

そう言って俊也は右腕を見せてくれた。俊也の右腕にはドラゴンヘッドの痣が浮かび上がっていた。

「ドラゴンヘッド！？」

「俺のはこれだ」

将人の右腕には竜の尾の痣。これはクロウのだ。

「実は、私達にも痣が…」

「え！？」

「おそらく、赤き竜が君達に一時的に力を貸してくれてるみたいだね」

俊也と将人の間にフォッタが割り込んできた。

「赤き竜が？」

「その痣が精霊達を守ってくれている。そっちもロディス達に三幻魔の影響が出てないはずだよ」

「そうか。赤き竜はロディス達精霊を守るために…」

遊星達は痣が消えた事で大騒ぎになってるんだろうな。ごめん、少しの間借りるよ。

「とにかく、精霊の事は心配しないで！地縛神を召喚されたみたいだけど頑張って倒してほしい。それじゃ！」

通信はここで切れた。Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａは大きすぎるから、遠くからでもはっきりわかるんだろうな。

「ぬうぅ…！忌ま忌ましい赤き竜めが…！」

「前は力を利用しようとしてたくせに…」

『とにかく、私達はもう大丈夫だ。デュエルを続けてくれ』

リーシェ達はカードに戻っていった。赤き竜がリーシェ達を守ってくれてる以上、私達も負けるわけにはいかない！

「私達はまだ戦える！ここで引き下がるわけにはいかない！私のターン！」

月沙　ＬＰ／　１　ＳＰＣ／５→６

紅刃　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／５→６

ゴドウィン　ＬＰ／６２００　ＳＰＣ／５→６

「《氷結界の軍師》の効果で、手札から氷結界のモンスター１体を墓地に送り、カードを１枚ドローする！」

引いたカードは…来た！

「《氷結界の舞姫》を召喚！」

『参ります！』

引いたのは、私の大切なパートナーだった。

《氷結界の舞姫》　ＡＴＫ／１７００

「そして、リバースカードオープン！《雪月花》！私の場に舞姫がいる時、デッキの１番上からカードを１枚墓地に送る！それがレベル４以下のモンスターなら相手モンスター１体を破壊。レベル５か６のモンスターならカードを１枚ドロー。魔法か罠なら手札に加える。レベル７以上のモンスターなら、そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える！」

《雪月花》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に「氷結界の舞姫」が表側表示で存在する時発動する事ができる。
自分のデッキの１番上からカードを１枚墓地に送り、送ったカードの種類により以下の効果を使用する。
●レベル４以下のモンスター：相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を破壊する。
●レベル５・６のモンスター：デッキからカードを１枚ドローする。
●レベル７以上のモンスター：そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手に与える。
●魔法・罠：そのカードを手札に加える。

さて、何が出るか…。祈るような気持ちでカードを引く。

「！…引いたのはレベル５《氷結界の虎将　ライホウ》！よって、カードを１枚ドローする！」

う…カードを引いたのはいいけど、手札には氷結界のモンスターがいない。スイレンの効果が使えないのは仕方ないか。

「カードを１枚セットし、ターンエンド！」

月沙
ＬＰ／　１
ＳＰＣ／６
手札／２
モンスター／《氷結界の武士》（ＡＴＫ／１８００）《氷結界の大僧正》（ＡＴＫ／１６００）《氷結界の軍師》（ＡＴＫ／１６００）《氷結界の舞姫》（ＡＴＫ／１７００）
魔法・罠／《リビングデッドの呼び声》リバース×１

「俺のターン！」

月沙　ＬＰ／　１　ＳＰＣ／６→７

紅刃　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／６→７

ゴドウィン　ＬＰ／６２００　ＳＰＣ／６→７

「《Ｓｐ－クリスタル・チェンジ》を発動！スピードカウンターを３つ取り除き、手札から天使族モンスター１体を特殊召喚する！」

《Ｓｐ－クリスタル・チェンジ》
通常魔法（オリジナル）
自分用スピードカウンターを３つ取り除いて発動する。
手札の天使族モンスター１体を特殊召喚する。
このカードで特殊召喚されたモンスターは攻撃力が半分になり、エンドフェイズ時に破壊される。

紅刃　ＳＰＣ／７↓４

「俺は手札から《裁きを下す者－ボルテニス》を特殊召喚する！」

青白い光を全身から放ち、リーシェが姿を現した。

「この効果で特殊召喚されたモンスターは攻撃力が半分になり、エンドフェイズに破壊される」

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００↓１４００

それってまんま《光神化》じゃん。それでどうするつもりなの？

「そして、チューナーモンスター《ブレード・トラディショナー》を召喚！」

あれは紅刃の専用チューナー…！

《ブレード・トラディショナー》　ＡＴＫ／　５００

「《ブレード・トラディショナー》の効果発動！俺の場のモンスターのレベルを２回まで１つ下げる事ができる！」

「なるほど、特殊召喚したボルテニスのレベルを下げ、シンクロ素材にするつもりか」

そうか！それであえてクリスタル・チェンジを…！

「いや、俺は《フェアリー・アーチャー》のレベルを１つ下げる！」

《フェアリー・アーチャー》　Ｌｖ．３→２

「何？」

「何で《フェアリー・アーチャー》なの！？」

「《フェアリー・アーチャー》の効果発動！光属性モンスター１体につき４００ポイントのダメージを与える！俺の光属性モンスターは４体！１６００ポイントのダメージだ！シャイニング・アロー！」

「ぐおっ！ぬう…！」

光を込めた矢がまたゴドウィンを貫く。

ゴドウィン　ＬＰ／６２００→４６００

「行くぜ！レベル４《豊穣のアルテミス》とレベル２《フェアリー・アーチャー》にレベル１《ブレード・トラディショナー》をチューニング！」

１つの黄色い話に手札と妖精が飛び込む。

「蒼白の月光が、牙となりて現世を揺らす！希望の光を振り翳せ！」

☆４＋☆２＋☆１＝☆７

「シンクロ召喚！友愛の光、《月光龍ストライク・ジークヴルム》！」

戦闘機のような翼を背負った白い龍が、リーシェと並んで飛び立った。

《月光龍（げっこうりゅう）ストライク・ジークヴルム》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星７／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ２５００
光属性チューナー＋チューナー以外の光属性モンスター１体以上
このモンスターが自分フィールド上に表側攻撃表示で存在する限り、相手はこのモンスター以外のモンスター及びこのモンスターのコントローラーを攻撃対象に選択する事ができない。
１ターンに１度、自分フィールドに表側表示で存在する光属性モンスター１体をこのモンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。
この効果で自分のモンスターを装備した場合、装備モンスターの攻撃力と守備力は、装備したモンスターの元々の攻撃力と守備力の半分の数値だけアップする（同時に装備できるモンスターは１体まで）。
装備モンスターがフィールドを離れる場合、装備カード扱いとしてこのカードに装備されたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効化される。

《月光龍ストライク・ジークヴルム》　ＡＴＫ／２５００

「私の知らないモンスター…！」

「ジークヴルムの効果発動！１ターンに１度、俺の場の光属性モンスター１体をこいつ自身に装備する！ボルテニスを装備！テイク・イン・ソウル！」

『ここはお前に力を貸そう！』

リーシェが光になってジークヴルムの体に入り込む。

「そして、装備したモンスターの半分の攻守をこいつの攻守に加える！」

《月光龍ストライク・ジークヴルム》　ＡＴＫ／２５００→３９００

「インティを上回った！？」

「バトル！ストライク・ジークヴルムで《太陽龍インティ》を攻撃！ムーンライト・スパーク！！」

ジークヴルムは月光を収束させた光線を口から吐き出し、インティを掻き消そうとする。

ゴドウィン　ＬＰ／４６００→３７００

「むう…！《太陽龍インティ》の効果発動！このモンスターを戦闘破壊したモンスターを破壊し、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

インティは負けじと４つの口とシンボルマークみたいな腹から炎を吐き、ジークヴルムを破壊した。そして、吐き出した炎のうちの

1つが紅刃に直撃した。

「ぐああっ、ぐう…！」

紅刃　ＬＰ／４０００→　１００

「紅刃！」

「まだだ！ジークヴルムが破壊された時、装備していたモンスター、ボルテニスを特殊召喚する！」

炎から流れ出した光の粒子が集まり、モンスターの姿のリーシェになった。

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００

「この方法で特殊召喚したモンスターの効果は無効になる。だが、ボルテニスは元々フィールド上で自分から発動できる効果を持っていない！」

これでクリスタル・チェンジのデメリットが打ち消された…！

「小癪な…！インティが破壊された時、墓地のクイラを特殊召喚する！」

《月影龍クイラ》　ＤＥＦ／２０００

「カードを1枚セットしてターンエンドだ！」

紅刃

ＬＰ／　１００
ＳＰＣ／４
手札／０
モンスター／《裁きを下す者－ボルテニス》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／リバース×３

「なぜライフが１００になるのにも関わらず攻撃をした？インティの効果を忘れたわけではないはずだ」

「どうせ次のお前のターンでライフが１になるんだ、払える分は払っておかないとな」

それでこんな事を…。

「フフフ…わかっているではないか。我のターン！」

月沙　ＬＰ／　１　ＳＰＣ／７→８

紅刃　ＬＰ／　１００　ＳＰＣ／４→５

ゴドウィン　ＬＰ／６２００　ＳＰＣ／７→８

「《スピード・ワールド　２》の効果発動！スピードカウンターを７つ取り除き、カードを１枚ドローする！」

ゴドウィン　ＳＰＣ／８→１

「《地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ》の効果発動！バトルフェイズをスキップし、真川紅刃、お前のライフを１にする！」

「やっぱり来たか！」

「せいぜいコースアウトしないよう気をつけるがいい！ポーラスター・オベイ！！」

地縛神がまた紫の光を放ち、今度は紅刃にぶつける。紅刃はそれに飲み込まれた。

「ぐあああああぁぁあああぁぁあああああ！！！」

「紅刃！」

『リーシェ様！』

中がどうなってるのかは見えない。大丈夫…だよね…？

「…終わったな…」

「まだだ！」

「「『！？』」」

光を突き破って、紅刃の紫のD・ホイールが飛び出した。リーシェもそれに並んで飛んでいる。

紅刃の上着は長いコートに変わっていた。あれはロディスのアビリティだ。身体強化でダメージを軽減したのかな？

「紅刃、リーシェ、大丈夫！？」

「ああ、何とかな…」

『ちっ、相変わらず化け物じみた効果だ…！』

「ほう…よくコースアウトしなかったものだ」

「俺も毎日をダラダラ過ごしてるわけじゃないんでな（磁力で無理矢理抑えつけなかったらどうなってたか…。まだ加減がきかないのがラッキーだったな）」

「カードを2枚セットし、ターンエンド！エンドフェイズにクイラは破壊され、インティが復活する！」

《太陽龍インティ》　ＡＴＫ／３０００

「エンドフェイズ時に罠発動！《アトリビュート・シンクロ》！」

「《アトリビュート・シンクロ》？」

「墓地の同じ属性どうしのチューナーとそれ以外のモンスターを除外し、そのモンスターと同じ属性のシンクロモンスターをエクストラデッキからシンクロ召喚する！」

《アトリビュート・シンクロ》
通常罠（オリジナル）
自分のエクストラデッキのシンクロモンスター1体を選択して発動する。
墓地から選択したモンスターと同じ属性の指定されたモンスターを除外し、選択したモンスターをシンクロ召喚扱いで特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効になる。

このカードを発動したターン、自分はバトルフェイズを行う事ができない。

「俺が出すのは光属性のシンクロモンスター！除外するのは光属性のモンスターだ！墓地のレベル７《月光龍ストライク・ジークヴルム》とレベル１《ブレード・トラディショナー》を除外してチューニング！」

墓地から２体が現れ、トラディショナーが１つの黄色い輪になり、月光龍が７つの星になる。

「舞い散る白羽が、天空を翔け現世を照らす！希望の光を振り翳せ！」

☆７＋☆１＝☆８

「シンクロ召喚！飛来せよ！《ライトエンド・ドラゴン》！」

天使の翼を持つ聖龍が飛び立つ。ついに来た、紅刃の第３のエースモンスター…！

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効になる」

ゴドウィン
ＬＰ／３７００
ＳＰＣ／１
手札／０
モンスター／《太陽龍インティ》（ＡＴＫ／３０００）《地縛神

Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ》（ＡＴＫ／　１）
魔法・罠／リバース×３

「《ライトエンド・ドラゴン》…それがお前の絆の象徴か？」

「は？」

「人間とは愚かなものだ。死ねば孤独になるというのに、絆を求めようとする。無駄な事だ」

「お前、また絆を否定するのか！？」

「当然！お前達２人がいくら強い結束で繋がっていようとも、我には勝つ事ができない！この最強の地縛神にはな！」

確かに、状況はほぼ最悪。私達の場のモンスターじゃゴドウィンのモンスターは倒せない。でも、希望がないわけじゃない！

「なら、試してみる？」

「何？」

「私達が本当に敵わないかどうかを！チームプレイなんて大それた事はできてないけど、やれるだけやって次に繋ぐ事はできる！私達やモンスター達の間にある絆を否定させやしない！」

『姫様…』

「ならば、やってみるがいい！無理だろうがな！」

「言われなくても！」

頼んだよ…私のデッキ！

「私のターン！！」

月沙　ＬＰ／　１　ＳＰＣ／８→９

紅刃　ＬＰ／　１　ＳＰＣ／５→６

ゴドウィン　ＬＰ／３７００　ＳＰＣ／１→２

…来た！これなら行ける！

『『『グルル…』』』

エクストラデッキから唸り声が聞こえる。トリシューラが目を覚ましたみたいだ。

「（トリシューラ…あなたの力が必要なの。協力してくれる？）」

『『『グアァア！』』』

むしろこの戦いに参加できる事が嬉しいみたいだ。相変わらず好戦的なんだから…。

「（ありがとう…。頼んだよ）ゴドウィン！このターンで地縛神とインティ、クイラを倒す！」

「月沙！？」

「ほう…ならばやってみるがいい！」

ナメ切ってる…。これでも、同じ態度でいられるか見物ね。

「《氷結界の武士》を守備表示に変更して効果発動！守備表示になった時武士は破壊され、私はカードを1枚ドローする！」

手札はこれで4枚！

「《氷結界の舞姫》の効果発動！私の場に他の氷結界のモンスターがいる時、手札の氷結界のモンスターを任意の数公開してその枚数分相手の魔法・罠を手札に戻す！手札の《氷結界の風水師》を公開し、真ん中のリバースカードを手札に戻す！氷雪の舞！」

『そのカードは取り除かせてもらいます！』

スイレンが雪混じりの竜巻を起こし、選択したカードを吹き飛ばした。

「そして今見せた《氷結界の風水師》を召喚！」

鏡を持ち薄紫の服を着た女性が召喚される。

《氷結界の風水師》　ＡＴＫ／　８００

「レベル４《氷結界の軍師》にレベル３《氷結界の風水師》をチューニング！封印されし神の槍が、冷気を携え天を突く！秘めたる力を解き放て！」

☆４＋☆３＝☆７

「シンクロ召喚！貫け！《氷結界の龍　グングニール》！」

光の柱の中から、全身を薄めの氷で包んだような氷龍が飛び出した。

《氷結界の龍　グングニール》　ＡＴＫ／２５００

「グングニールの効果発動！手札を２枚まで墓地に送り、その枚数分相手フィールド上のカードを破壊する！」

「何だと！？」

「手札を１枚墓地に送り、《地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｃａ》を破壊する！アイス・ウィンド！！」

グングニールが吹雪を巻き起こし、Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｃａを氷漬けにする。最強の地縛神は、氷と共に呆気なく粉々に砕け散った。

「よし！もう直接攻撃をされる心配はない！」

「馬鹿な…地縛神が…！？」

「これで終わりじゃない！《Ｓｐ－デッド・シンクロン》！スピードカウンターが５つ以上ある時、墓地からシンクロ素材を除外してシンクロ召喚をする事ができる！」

《Ｓｐ－デッド・シンクロン》

通常魔法
自分用スピードカウンターが5つ以上ある場合に発動する事ができる。
自分のエクストラデッキのシンクロモンスター1体を選択する。
選択したモンスターのシンクロ召喚に必要なチューナー及びチューナー以外のモンスターを自分の墓地から選択してゲームから除外し、選択したシンクロモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。
この特殊召喚はシンクロ召喚扱いとする。
この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時にゲームから除外される。

私の墓地には《氷結界の軍師》で墓地に送ったモンスターもいる。
もう準備はできている！

キュオオォォ…

エクストラデッキから青い光が漏れ出した。カードを取り出すと、トリシューラのカードが青く光っていた。

『ギャオオォォオオ！』

「ライトエンド！？」

それに合わせてライトエンドも光り始める。紅刃を見ると、カードの方も黄色に光り輝いていた。

「墓地のレベル5《氷結界の虎将　ライホウ》とレベル1《氷結界の番人ブリズド》にレベル3《氷結界の風水師》を除外してチューニング！」

墓地からまた3つの青い輪が現れ、6つの星が吸い込まれていく。

「封印されし綿津見の槍が、氷壁を砕き唸りを上げる！秘めたる力を解き放て！」

☆5＋☆1＋☆3＝☆9

「シンクロ召喚！邁進せよ！《氷結界の龍　トリシューラ》！！」

銀色の翼を広げ、三つ首の氷龍がライトエンドと並んで飛行を始めた。

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／２７００

『『『ギャアアアァァアアア！！』』』

トリシューラも全身を青く光らせている。青と黄色が道を翔ける。

「こいつら…。例の共鳴って奴か？」

『おそらくな』

「そのカードは…！？」

「トリシューラの効果発動！トリシューラがシンクロ召喚に成功した時、相手のフィールド、墓地、手札からカードを1枚ずつ除外する！フィールドからは《太陽龍インティ》、墓地からは《月影龍クイラ》、そして手札を1枚除外する！トリニティ・バイス！」

トリシューラが3つの口から青い光線を吐き、インティとクイラは異次元に飛ばされ、スイレンが戻した手札も除外された。

「本当に倒した…！」

『これは…決まりか？』

「ぐうぅぅ！手札から除外された《D・D・ブースト》の効果発動！このカードが除外された時、カードを2枚ドローする！」

《D・D・ブースト》
通常罠（オリジナル）
このカードが除外された時、カードを2枚ドローする。

除外された時？トリシューラの対策なの？効果が壊れかけてる…いや、でも今は関係ない！

「バトル！グングニールでダイレクトアタック！フリージング・ジャベリン！！」

グングニールが槍のような氷の息吹を放つ。決まれ…！

「！？」

ゴドウィンの前に時空の渦が現れ、氷の息吹を全て吸い込んでしまった。

「く…罠カード《亜空間物質転送装置》！トリシューラをエンドフ

エイズ時まで除外する！」

今度はトリシューラ自身が異次元に消えていく。

「デッド・シンクロンの効果でシンクロ召喚したトリシューラは、エンドフェイズ時に除外される。でも1度フィールドから離せば制約は解除される。さらに《Ｓｐ－シフト・ダウン》を発動！スピードカウンターを6つ取り除き、カードを2枚ドローする！」

《Ｓｐ－シフト・ダウン》
通常魔法
自分用スピードカウンターを6つ取り除き発動する。
自分のデッキからカードを2枚ドローする。

月沙　ＳＰＣ／9→3

「カードを1枚セットしてターンエンド！エンドフェイズ時に除外されたトリシューラが帰還する！」

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／２７００

三つ首の龍が戻ってきた。何とかフィールドから離れずに済んだけど…紅刃、後は頼んだよ！

月沙
ＬＰ／　1
ＳＰＣ／3
手札／1
モンスター／《氷結界の大僧正》（ＡＴＫ／１６００）《氷結界の舞姫》（ＡＴＫ／１７００）《氷結界の龍　グングニール》（ＡＴ

K／２５００）《氷結界の龍　トリシューラ》（ＡＴＫ／２７００）
魔法・罠／《リビングデッドの呼び声》リバース×１

「地縛神とインティ、クイラがいなくなった今なら、遠慮なく攻撃できる！俺のターン！」

月沙　ＬＰ／　１　ＳＰＣ／３→４

紅刃　ＬＰ／　１　ＳＰＣ／６→７

ゴドウィン　ＬＰ／３７００　ＳＰＣ／２→３

「バトル！《ライトエンド・ドラゴン》でダイレクトアタック！シャイニング・サプリメイション！」

ライトエンドの光の波動がゴドウィンを狙い撃つ。今度こそ…！

「罠カードオープン《栄誉の賛》！」

「！？」

「直接攻撃を受けた時、その攻撃を無効にし《贄の石碑トークン》を２体特殊召喚する！」

《栄誉の賛》
通常罠（原作効果）
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合に相手モンスターの攻撃宣言を受けた時に発動する事ができる。そのモンスターの攻撃を無効にし、「贄の石碑トークン」（岩石族・地・星１・攻／守０）２体を特殊召喚し、デッキから「地縛神」と名のついたカード

を1枚手札に加える。

ライトエンドの攻撃が透明の障壁に防がれてしまい、代わりに2つの石碑が現れた。

《贄の石碑トークン》　ＤＥＦ／　０

《贄の石碑トークン》　ＤＥＦ／　０

「そしてデッキから地縛神を1枚手札に加える」

「だが、お前の地縛神は倒した！デッキには残ってない！」

トークンが2体…。このターンで倒すのは無理かな。

「ところが、あるのだよ」

「「？」」

ゴドウィンがデッキからカードを1枚取り出し、それを表にする。

「もう1体の地縛神が！」

「あれは！？」

「嘘…2枚目のＷｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ！？」

そのカードは、既に墓地にあるはずの《地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ》だった。

何で2枚目が!?地縛神はこの世界には1種類につき1枚ずつしかないはず…。

『2体目の地縛神…!?』

『紅刃、リリース要員を揃えさせるわけにはいかん!』

「（わかってる!）ボルテニスで《贄の石碑トークン》に攻撃!ボルティ・ジャッジライト!」

『消え去れ!』

白い雷の槍が石碑を砕く。これで特殊召喚をしない限り地縛神は召喚できなくなった。

「メインフェイズ2で《スピード・ワールド　2》の効果発動!スピードカウンターを7つ取り除き、デッキからカードを1枚ドローする!」

紅刃　ＳＰＣ／7→0

「さらに、《勝利の導き手フレイヤ》を召喚!」

首飾りを身につけた女天使が召喚された。少しでも攻撃力を上げるつもりね。

《勝利の導き手フレイヤ》　ＡＴＫ／　１００

「こいつの効果で、俺の天使族の攻守は４００ポイントアップする!」

《勝利の導き手フレイヤ》　ＡＴＫ／　１００↓　５００
《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００↓３２００

「そして、手札の《異次元の精霊》の効果発動！自分フィールド上のモンスター1体を除外し、こいつを特殊召喚する！《ライトエンド・ドラゴン》を除外して特殊召喚！」

ライトエンドがフィールドから消えて、代わりに小さな可愛い天使が飛び出した。

《異次元の精霊》
チューナー（効果モンスター）
星１／光属性／天使族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　１００
このカードは自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体をゲームから除外し、手札から特殊召喚する事ができる。
次のスタンバイフェイズ時、この特殊召喚をするためにゲームから除外したモンスターをフィールド上に戻す。

《異次元の精霊》　ＤＥＦ／　１００↓　５００

「除外したモンスターは次のスタンバイフェイズ時にフィールド上に戻る。ターンエンドだ」

紅刃
ＬＰ／　１
ＳＰＣ／０
手札／０
モンスター／《裁きを下す者－ボルテニス》

（ＡＴＫ／３２００）《勝利の導き手フレイヤ》（ＡＴＫ／　５００）《異次元の精霊》（ＤＥＦ／　５００）
魔法・罠／リバース×２

１度フィールドから離してライトエンドの効果を使えるようにするつもりか。とりあえず、これなら何とかなりそう。

「フフフ…我のターン！」

月沙　ＬＰ／　１　ＳＰＣ／４→５

紅刃　ＬＰ／　１　ＳＰＣ／０→１

ゴドウィン　ＬＰ／３７００　ＳＰＣ／３→４

「スタンバイフェイズ時に除外されたライトエンドが帰還する！」

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「構わん。魔法カード《壺の中の魔術書》を発動！」

「え！？」

「何！？」

スピードスペルじゃ…ない…！？

「何やってんだ！？そんな事をしたらお前が２０００ポイントのダメージを受けるんだぞ！？」

「我のライフは元から大量にある。２０００ポイントぐらい、くれてやる！」

私達の倍のライフにものを言わせてきたか…！

天から青白い雷が落ち、ゴドウィンがダメージを受けた。

「ぐおぉおお…！」

ゴドウィン　ＬＰ／３７００→１７００

「ククク…互いにカードを3枚ドローする。さあ、カードを引くがいい！」

「「……」」

手札が増えたのは嬉しいけど、何か嫌な予感がする…。

「《スピード・ワールド　２》の効果発動！スピードカウンターを４つ取り除き、手札のスピードスペル1枚につき８００ポイントのダメージを与える！」

ゴドウィン　ＳＰＣ／４→０

ゴドウィンが見せたのは《Ｓｐ－エンジェル・バトン》1枚だけ。

でも、私達にとどめを刺すには充分すぎる火力だ。

「対象は真川紅刃だ！我に平伏すがいい！」

ゴドウィンのＤ・ホイールから電撃に似たレーザー光線が放たれ

る。このままだと紅刃が…！

「く…ここまでかよ…！」

「紅刃をやらせはしない！罠カード《親睦の使者》！このターン私達のモンスターはカードの効果では破壊されず、効果ダメージも無効にする！」

《親睦の使者》
通常罠（オリジナル）
このカードを発動したターン、相手から受ける全ての効果ダメージは0になる。
このターン自分のモンスターはカードの効果では破壊されない。

私がカードを発動すると透明の障壁が現れ、ゴドウィンの攻撃を受け切った。

「何っ！？」

「サンキュー、月沙。助かった」

「どういたしまして」

「…いいだろう。墓地の光属性モンスター《太陽の神官》と闇属性モンスター《泣き神の石像》を除外し、《カオス・ソーサラー》を特殊召喚！」

「《カオス・ソーサラー》！？」

またゴドウィンが前に使ってなかったカードが…！？

《カオス・ソーサラー》　ＡＴＫ／２３００

「《カオス・ソーサラー》の効果発動！このターンの攻撃を放棄し、相手モンスター1体を除外する！グングニールを除外！」

「まずい！除外じゃ守り切れねえ！」

大僧正が防げるのは魔法と罠による破壊だけ。モンスター効果の、しかも除外には対応していない！しかも、《親睦の使者》も対象外！

今の私に除外への対抗策はない。グングニールはそのまま除外されてしまった。

「これで地縛神を倒す事はできまい！」

「くっ…」

「我はカードを3枚伏せる！」

「このタイミングで？」

まだメイン2にも入ってないのにそんなに伏せる？何を狙ってるの？

「そして、《贄の石碑トークン》と《カオス・ソーサラー》をリリース！」

また地縛神の心臓部が現れ、怪しく光り出す。

「究極の破壊をもたらせ！最強の地縛神！出でよ！Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ！！」

ゴドウィンが1体目の時と同じ台詞を言うと、心臓部が強い光を放ち、2体目の地縛神が姿を現した。

「くそ！また出てきやがった！」

「フフフ…」

《地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ》　ＡＴＫ／　１００

「ん？攻撃力１００？1じゃないのか？」

Ｄ・ホイールの画面に表示されたＷｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａの攻撃力は、なぜかさっきよりも2桁多かった。

「Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａの効果発動！自分フィールド上のカードを3枚までデッキに戻す！」

さっき伏せられた3枚のカードがデッキに戻される。

「Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａにあんな効果があったか…？」

Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ…攻撃力１００…3枚デッキに戻す……！？

「まさか…原作効果じゃない！？」

「原作効果？」

「さらに、戻した枚数分相手の手札をランダムに捨てさせる！」

「ハンデス効果！？」

私の手札が２枚、紅刃の手札が１枚紫に光る。私達はそれを墓地に送った。

「そして、捨てさせたカード１枚につき、攻撃力を１０００ポイントアップさせる！」

《地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ》　ＡＴＫ／　１００→３１００

「攻撃力３１００…！？」

「やっぱり…！紅刃、あの地縛神はさっきのとは効果が違う！」

「は？」

「この地縛神の効果は私が元々いた世界で使われていたもの。魔法と罠が効くようになった代わりに、地縛神を無視しての直接攻撃ができなくなってる！」

「何！？」

《地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ》
効果モンスター（ＯＣＧ効果）
星１０／闇属性／鳥獣族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　１００
「地縛神」と名のついたモンスターはフィールド上に１体しか表側

表示で存在できない。
フィールド上に表側表示でフィールド魔法カードが存在しない場合このカードを破壊する。
相手はこのカードを攻撃対象に選択する事はできない。
このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
このカードが召喚に成功した時、このカード以外の自分フィールド上のカードを3枚までデッキに戻し、戻した数だけ相手の手札をランダムに捨て、このカードの攻撃力を捨てた数×１０００ポイントアップする。

「でも、効果の違う同名カードを入れるなんてありなのかよ!?」

「当然!我は神を従えし者。神の力が１つだけとは限らないのだよ!」

「っ、無茶苦茶な…!」

「神に抗う事などできない!これは運命で決まっている事だ!」

「違う!運命は自分で切り開くもんだ!１人でできなくても、仲間との絆で打ち砕く!そこに立ちはだかるのが神だろうが鬼だろうが関係ねえ!」

「ならば、この絶望的な状況をどうするというのだ!?神を従える我を打ち砕く事など不可能なのだ!」

確かに、モンスターが最低限までしか除去されてないとはいえ、私達が有利とは決して言えない。でも、ゴドウィンの言葉が正しいとも思わない!

「我の最強の地縛神の前に敵などおらぬ！塵と化すがいい！ハハハハハハハハ！」

まだ終わらない！ここで負けたら十代達が…！そんな事、絶対にさせやしない！

…でも、私がダイレクトアタックを仕掛けられたら、攻撃を防ぐ手段はない。ゴドウィンもそれをわかってるはず。

多分、私はここまで。何も残せないけど、後は紅刃に全てを託す！

紅刃、必ず勝ってゴドウィンを解放して…！

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第３５話　神なら何をやってもＯＫなわけじゃないはず（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「シグナーの痣が一時的に紅刃達に移ったみたいね」

フィレス『グルルル』

勇香「助かってるみたいだからいいけど、遊星達は大騒ぎだな。ジャックの痣だけ残ってるからなおさら不可解だし」

璃音「遊星達と接点がない将人に至っては救世竜まで使い出す始末…。将人をシグナーの関係者として認めた証拠かしら？」

勇香「１度も会ってないのに仲間ってのも何か変な感じだけどな」

璃音「それじゃ、考察に入りましょう。今回はゴドウィンが使う最強の地縛神、《地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ》を紹介するわ。これも例のごとくＯＣＧ仕様よ」

勇香「最近そればっかだな…」

《地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ》
効果モンスター（ＯＣＧ効果）
星１０／闇属性／鳥獣族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　１００
「地縛神」と名のついたモンスターはフィールド上に１体しか表側表示で存在できない。
フィールド上に表側表示でフィールド魔法カードが存在しない場合

このカードを破壊する。
相手はこのカードを攻撃対象に選択する事はできない。
このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
このカードが召喚に成功した時、このカード以外の自分フィールド上のカードを3枚までデッキに戻し、戻した数だけ相手の手札をランダムに捨て、このカードの攻撃力を捨てた数×１０００ポイントアップする。

璃音「通常召喚にしか対応してないけど、自分フィールド上のカードを3枚までデッキに戻して、その数まで相手の手札を削る効果を持っているわ」

勇香「そして捨てさせた手札の枚数分攻撃力アップか…。最大で３１００、この１００の違いが勝敗を分ける事になるんだろうな」

璃音「《クリッター》とかでサーチできるのは他の地縛神にはない利点ね」

勇香「ただ、《キラー・トマト》とかで特殊召喚しても効果は発動しないから注意しろよ」

璃音「それにしても、ＯＣＧ化するにあたって原作と丸っきり違う残念効果になってしまったわね」

勇香「そりゃお前、ライフを1にする効果が出回ったら、適当なバーンダメージと合わせて簡単に1ターンキルができちまうじゃねえか。ライフをいくら回復しても1発で1にされちまったらやってられねえよ」

璃音「それもそうね。さて、今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

結局漫画版の手札増強に頼ってしまった…。大量のライフにものを言わせた結果がこれです。１ｖｓ１だったらどうすんだ…。

やっぱりかなり長いので３部構成になりました。次回で決着です。次回も入れて後２、３話くらいでＧＸ第１期は終了ですね。

今回紅刃が使用した《月光龍ストライク・ジークヴルム》はＡＳＡさんが投稿してくださったカードです。ＡＳＡさん、ありがとうございます。

では、また次回！

第３６話　間違っている仲間は引きずってでも連れ戻せ（前書き）

お待たせしました、ゴドウィン戦後編です。やっぱりオリカ大量ですので注意してください。

それではどうぞ！

第３６話　間違っている仲間は引きずってでも連れ戻せ

ＳＩＤＥ／遊星

俺は今、不可解な事態に直面している。

いつものようにみんなで集まっていろいろ話をしていると、突然５つのシグナーの痣が光り出した。

それだけならいいが、今度は痣が消えてしまった。しかも、前回、いや、今までとは違い、なぜかジャックの痣だけが消えずに残り、今も赤い光を点けている。

まさか、紅刃達に何かあったのか？それともゴーストやイリアステルか？…わからない。

一体、どこで何が起こっているんだ…？

ＳＩＤＥ／紅刃

コースを走る俺の目に映るのは、コンドルの姿をした最強の地縛神。こいつによって、俺と月沙は今窮地に立たされている。

ゴドウィン
ＬＰ／１７００
ＳＰＣ／０
手札／１
モンスター／《地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ》（ＡＴＫ／３１００）
魔法・罠／なし

月沙
ＬＰ／　１
ＳＰＣ／５
手札／２
モンスター／《氷結界の大僧正》（ＡＴＫ／１６００）《氷結界の舞姫》（ＡＴＫ／１７００）《氷結界の龍　トリシューラ》（ＡＴＫ／２７００）
魔法・罠／《リビングデッドの呼び声》

紅刃
ＬＰ／　１
ＳＰＣ／１
手札／２
モンスター／《裁きを下す者－ボルテニス》（ＡＴＫ／３２００）《勝利の導き手フレイヤ》（ＡＴＫ／　５００）《異次元の精霊》（ＤＥＦ／　５００）《ライトエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／リバース×２

今の俺には、あのモンスターを破壊する術も攻撃を防ぐ術もない。
それは月沙も同じはず。ここでどっちかが確実にやられてしまう。

「バトルだ！そうだな…」

前を走るゴドウィンが振り向き、品定めをするかのように俺達を見比べる。

「地縛神よ！波星月沙を攻撃せよ！」

「…っ！」

攻撃対象は月沙か！？

「さあ、絆を断ち切れ！デス・シンギュラリティ！！」

《地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ》が月沙に真正面から体当たりを仕掛ける。どんどん月沙との距離が縮まっていく。

攻撃を止められない。庇う事すらできない。

畜生…！俺はまた何もできないのか！？大切な奴１人護り抜けないのかよ！？

『魔法と罠が効くようになった代わりに、地縛神を無視しての直接攻撃ができなくなってる！』

「！？」

待てよ？『魔法と罠が効くようになった』？

「死ね！波星月沙！」

「くっ…！」

「カウンター罠《攻撃の無力化》！相手モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる！」

「何！？」

巨大な時空の渦が出現し、地縛神を丸ごと飲み込む。すると、俺達の後ろに同じ渦が現れ、たった今飲み込まれた地縛神が吐き出された。

「やっぱりな。魔法と罠が効くようになったんなら、《攻撃の無力化》でも充分止められる！」

「ぬぅ…」

「俺の大切な仲間を死なせはしない！絆は簡単に切れたりしねえんだ！」

「紅刃…ありがとう…」

「フン…まあいい。《Ｓｐ－ヴァニティ・ドロー》を発動！スピー

ドカウンターが０の時、カードを３枚ドローする！」

「はあ！？」

「３枚も！？」

《Ｓｐ－ヴァニティ・ドロー》
通常魔法（オリジナル）
自分用スピードカウンターが０個の時発動する事ができる。
デッキからカードを３枚ドローする。

「我はカードを３枚セットし、ターンエンドだ」

ゴドウィン
ＬＰ／１７００
ＳＰＣ／０
手札／０
モンスター／《地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ》（ＡＴＫ／３１００）
魔法・罠／リバース×３

全部伏せた…。危険な感じしかしないな。

俺のデッキには能動的に破壊をするカードがほとんど入ってない。
破壊は月沙に任せるしかない。

「紅刃が護ってくれたこのライフ、無駄にはしない…！私のターン！」

月沙　ＬＰ／　１　ＳＰＣ／５→６

紅刃　ＬＰ／　１　ＳＰＣ／１→２
ゴドウィン　ＬＰ／１７００　ＳＰＣ／０→１

「！（このカードは…！地縛神を倒す事はできないけど…）カードを１枚セットし、ターンエンド！」

「エンドフェイズ時に罠カードオープン《地縛神の威圧》！」

「《地縛神の威圧》？」

「自分フィールド上に地縛神が存在する場合に発動できるカードだ。互いのプレイヤーは自分のモンスターを１体選択し、それ以外のモンスターを墓地に送る！」

「何！？」

「そんな…！？」

《地縛神の威圧》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に「地縛神」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。
互いのプレイヤーは自分フィールド上のモンスターを１体選択し、それ以外のモンスターを墓地に送る。

『破壊』じゃなくて『墓地に送る』だから、大僧正の効果じゃ防げない！

「我のモンスターは《地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ》のみだ。さあ、好きなモンスターを選ぶがいい！」

『姫様、トリシューラを残してください！』

「（スイレン！？）」

『少しでも攻撃力が高いモンスターがいれば役に立つかもしれません』

「（でも…）」

『私に構わず、選択してください！』

「（…ごめん、スイレン…）私は《氷結界の龍　トリシューラ》を選択する…」

「俺は…」

『紅刃、ライトエンドを選べ』

「（悩む暇くらいくれよ…）」

『フィールドでは通常モンスター同然の私と、戦闘ではほぼ確実に勝てるライトエンドと、どちらが効率がいいかぐらいわかるだろ？』

「（リーシェ…悪い！）俺が選ぶのは《ライトエンド・ドラゴン》だ」

俺達がそれぞれモンスターを選択すると、リーシェ達はフィール

ドから消えてしまった。

「さらに我はもう1枚リバースカードを発動する！」

「まだあるのか？」

「罠カード《イモータル・ポーション》！地縛神1体の攻撃力分ライフを回復する！」

《イモータル・ポーション》
通常罠（オリジナル）
フィールド上に表側表示で存在する「地縛神」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターの攻撃力・守備力のどちらか1つを選択し、その数値分自分のライフポイントを回復する。

「Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａの攻撃力は３１００！よってライフを３１００回復する！」

ゴドウィン　ＬＰ／１７００→４８００

「一気に回復した…！？」

実質損失０かよ…。

月沙
ＬＰ／　１
ＳＰＣ／６
手札／２
モンスター／《氷結界の龍　トリシューラ》（ＡＴＫ／２７００）

魔法・罠／《リビングデッドの呼び声》リバース×1

月沙はカードを1枚伏せただけ…。あれは地縛神を倒すためのカードか?それとも…。

「わかったか?地縛神に立ち向かう術はないという事が!月沙の《親睦の使者》も、紅刃の《攻撃の無力化》も、所詮は無駄な足掻きにすぎない。神の前では絆など無力!そんなものでは運命に傷をつける事さえできない」

「何?」

「人間とは所詮生涯孤独な生き物。死にゆく時も独りだ。絆など最初からない。そう勝手に思い込んでいるだけだ。仮にあったとしても、運命に打ち勝つ事はできない。打ち勝てるのは唯一、神のみだ」

また『運命』に『神』か…。昔に戦った時と同じだ。

「貴様らは何のために戦う?世界が滅ぶからか?仲間が危険だからか?違う。貴様らはただ、自分が死にたくないだけだ」

「「…!」」

「死にたくないから、仲間や絆などというまやかしを掲げて戦おうとする。だが、それも無駄な事。神の前では人間など無力!ましてや仲間や絆など、武器にも鎧にもなりはしない!」

……。

「自らの愚かさと無力さを噛み締め、滅びゆくがいい!」

「…何勘違いしてんだ？」

「？」

「確かに、俺はまだ死にたくない。こんな所で死ねない。それは認める。でもな、俺達が戦う1番の理由は、お前も入れた仲間を救うためだ！」

「我を入れた…だと？」

「お前は遊星と最後まで戦い抜き、自分が運命に抗おうとしていた事を気づかされ、兄のルドガーとの絆も思い出したはずだ！遊星とも解り合ったはずだ！お前はもう、遊星の、俺達の仲間なんだ！」

「！」

「紅刃…」

今言わないでいつ言うんだ。思いの丈をぶつけるように、俺はさらに叫ぶ。

「お前の言う通り、人間は1人じゃ無力な存在かもしれない！だが、何人もの人間が力を合わせる事で、数字やデータじゃ測れないくらいのでかい希望を生み出せる！」

そうだ。俺は、俺達はいつだって、助け合って困難を乗り越えてきたんだ。

「嬉しい時も悲しい時も気持ちを分かち合って、道を踏み外したら

引きずってでも正しい道に連れ戻す！それが仲間だ！」

俺だって弱い人間だ。でも、仲間が後押ししてくれるから、一緒に隣りを走ってくれるから、今までどんな壁にも立ち向かっていけたんだ！そして、今もそうだ！

「お前は道を踏み外した仲間だ！だから、俺達が絶対に救い出す！こんな所で、負けるわけにはいかねえんだよ！！」

キュウウウゥゥン…

「「！」」

何だ？痣が…。

シュンッ

「痣が消えた！？」

「痣が消えた…」

「これは…来るかもしれないね」

「何がだ？」

「４体目の救世竜が…！」

「俺の痣も消えただと！？」

「ねえ、何が起きてるかわからないの！？」

「龍亞、無茶言わないでよ…」

「一体、どうなっている…？」

痣が消えると、背中が熱くなった。多分、シグナーの痣が俺の背中に浮かび上がってるんだろ。

キュオオォォォ…

デッキトップまで光り出した。これは、将人の時と同じ…。って事は、このカードは『あれ』か？

「これは…赤き竜の力…？」

「（もしかして…！）紅刃、私がサポートする！リバースカードは気にしないで！」

「月沙…？…ああ！」

目を閉じてカードに触れる。温かい。強い力が込められているのがわかる。

今だけでいい。赤き竜…俺に、俺達に力を貸してくれ！

「俺の、ターン！！」

「…！（不動…遊星…）」

月沙　ＬＰ／　１　ＳＰＣ／６→７

紅刃　ＬＰ／　１　ＳＰＣ／２→３

ゴドウィン　ＬＰ／４８００　ＳＰＣ／１→２

引いたカードを確認すると、予想通り救世竜だった。

画面を確認する。これなら…いけるか？

「ん…？」

画面が光を反射し、俺の顔が映る。

俺の目…っていうか瞳が黄色に…？俺の目の色は黒のはずだ。って事は…まさか俺も『覚醒』したのか？

…また一般人から外れちまったよ…。ツイてねえよな…お互いさ。

「永続罠（エンジェル・リフト）を発動！墓地からレベル２以下のモンスター１体を特殊召喚する！」

《エンジェル・リフト》
永続罠
自分の墓地に存在するレベル２以下のモンスター１体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。
このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターがフィールド上から離れた時このカードを破壊する。

「墓地からレベル１の《勝利の導き手フレイヤ》を特殊召喚！」

チアガールみたいな女天使が復活する。何だかんだでいつもデッ

キに入れているモンスターだ。

《勝利の導き手フレイヤ》　ＡＴＫ／　１００↓　５００

「そして《救世竜　セイヴァー・ドラゴン》を召喚！」

桃色の妖精みたいなドラゴンが空を飛ぶ。

《救世竜　セイヴァー・ドラゴン》　ＡＴＫ／　０

「セイヴァー・ドラゴン…やっぱり…！」

「レベル８《ライトエンド・ドラゴン》とレベル１《勝利の導き手フレイヤ》にレベル１《救世竜　セイヴァー・ドラゴン》をチューニング！」

セイヴァー・ドラゴンが巨大化し、その中にライトエンドとフレイヤが飛び込む。

「金色纏いし煌めく翼が、仁愛の意思で現世を変える！希望の光を振り翳せ！」

☆８＋☆１＋☆１＝☆１０

「シンクロ召喚！」

俺はＤ・ホイールごと光に包まれ、そのまま宙に浮いた。締めとして、Ｄ・ホイールと一体化したそいつの名を叫ぶ。

「救済せよ！《セイヴァー・ライト・ドラゴン》！！」

４枚の翼を広げ、金色の光を宿す白竜が、黒い曇天に舞い上がった。

《セイヴァー・ライト・ドラゴン》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星１０／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３８００／ＤＥＦ３２００
「救世竜　セイヴァー・ドラゴン」＋「ライトエンド・ドラゴン」＋チューナー以外のモンスター１体
このカードがフィールドから離れた時、フィールド上のカード１枚につき８００ポイントのダメージを相手に与える。
１ターンに１度、エンドフェイズ時まで相手の表側表示モンスター１体の効果を無効化できる。
また、無効化したモンスターの攻撃力・守備力を０にする。
エンドフェイズ時にこのカードをエクストラデッキに戻し、自分の墓地に存在する「ライトエンド・ドラゴン」１体を特殊召喚する。

《セイヴァー・ライト・ドラゴン》　ＡＴＫ／３８００

「あれが、４体目のセイヴァー…！」

こいつが、『スター』でも『デモン』でも『ダーク』でもない、

俺の救世竜…！

「セイヴァー・ライトの効果発動！相手モンスター１体…Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａの効果を無効にし、攻撃力と守備力を０にする！」

「何だと！？」

「クライム・イルミネート！」

セイヴァー・ライトが額の宝玉から光の柱を放ち、地縛神に命中させる。すると、地縛神の動きがかなり鈍くなった。

《地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ》　ＡＴＫ／３１００
↓
０

「さらに《Ｓｐ－トラスト・フォロー》を発動！俺のライフが相手のライフを２０００以上下回っている時、手札のモンスター１体を墓地に送り、その攻撃力分の数値を俺のモンスター１体に加える！」

《Ｓｐ－トラスト・フォロー》
通常魔法（オリジナル）
自分のライフポイントが相手のライフポイントを２０００以上下回っている時のみ、自分フィールド上のモンスター１体を選択して発動する事ができる。
手札からモンスター１体を墓地に送る。
選択したモンスターの攻撃力は、そのモンスターの攻撃力分の数値アップする。

「俺は手札から《冥王竜ヴァンダルギオン》を墓地に送り、セイヴ

ァー・ライトの攻撃力を２８００ポイントアップさせる！」

『我の力、存分に使うがいい！』

ロディスの力を受け継ぎ、セイヴァー・ライトが輝きを増していく。

《セイヴァー・ライト・ドラゴン》　ＡＴＫ／３８００→６６００

「攻撃力６６００だと！？」

「これで終わりだ！ゴドウィン、お前を救い出す！《セイヴァー・ライト・ドラゴン》で《地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ》を攻撃！ラディアント・サプリメイション！！」

セイヴァー・ライトが金色の光を纏い、Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａに突っ込んでいく。

「罠発動《大地の拒絶》！地縛神がいる時に攻撃してきたモンスターを破壊し、その攻撃力分のダメージを相手に与える！」

《大地の拒絶》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に「地縛神」と名のついたモンスターが表側表示で存在する時、相手の攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手の攻撃モンスターを破壊し、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える。

「赤き竜の力も所詮その程度！我に、神に勝つ事などできない！」

「知るか！」

「！？」

俺はそんな事お構いなしにアクセルを全開にし、全速力で地縛神に突撃する。

「ゴドウィン、私さっき言ったよね？『サポートする』って」

「サポートだと？…！まさかそのリバースカードは！？」

「これが希望を繋ぐ最後の欠片！カウンター罠《氷結陣》！私の場に氷結界のモンスターがいる時、相手のカードの効果を無効にして破壊する！」

「何だと！？」

《氷結陣》
カウンター罠（オリジナル）
自分フィールド上に「氷結界」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。
効果モンスターの効果・魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

《大地の拒絶》のカードの真下に魔法陣が現れ、カードが氷漬けにされて砕け散った。

…月沙、やっぱりお前とのタッグは最高だよ。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

救世竜が地縛神の土手っ腹を貫き空へ飛翔する。最強の地縛神は黒い霧になって跡形もなく消えてしまった。

「ぐおおおおぉおおおおおおおお！！」

ゴドウィン　ＬＰ／４８００→　０

紅刃＆月沙　ＷＩＮ

セイヴァー・ライトの中から下を見下ろす。デュエルの決着がついたからか、地上絵のコースが消えていくのが見えた。

「うわっ…！」

って月沙達が落ちる！まずい！

「月沙、ゴドウィン！っ、《セイヴァー・ライト・ドラゴン》！」

俺の指示に従うようにセイヴァー・ライトが高速で飛び、月沙とゴドウィンを取り込む。そして、十代達がいる広場に近づき、俺達を降ろしてまた空に昇った。

俺と月沙は慌ててブレーキをかけてＤ・ホイールを止めた。俺はＤ・ホイールから吹っ飛んだゴドウィンを片手で抱えているから、危なっかしかったけどな。ゴドウィンのＤ・ホイールは、地面に激突する前に黒い塵になって消えていた。

「紅刃！？」

「月沙さん！」

十代達が駆け寄る中、俺はD・ホイールから降りてゴドウィンを地面に降ろした。もうダークシグナーの痣は消えていて、体格も元に戻っていた。俺の方も覚醒が解けたのか、さっきまで感じていた俺の中の強い力が眠ったのがわかる。背中も熱くないし、痣も消えたみたいだな。

「痣が戻った…！」

「一応、事態は収まったみたいね」

「今のは何だったんだ…？」

「ゴドウィン、大丈夫か？」

「…なぜ…私を助けたのですか…？もう、死んでいるようなものだというのに…」

「せっかく現世にいるんだ。最後の最後まで生きろ」

「そう…ですか…」

ゴドウィンは弱々しく笑みを浮かべた。だいぶ疲労しているみたいだ。

「迷惑をかけてしまいましたね…。洗脳されていたとはいえ、申し訳ない事をしてしまいました…」

「気にしないでよ。困った時はお互い様でしょ？また同じ事があっても助けるよ」

月沙もD・ホイールから降りていた。ヘルメットは俺と同じく被ったままだ。

「…ありがとうございます…。私は、あなた達が少し羨ましかったのかもしれません…」

「俺達が？」

「若くして、多くの絆を持つあなた達が…心から笑い合える仲間を何人も持つあなた達が…。そんな心の闇に付け込まれたのでしょう。だから、絆を、仲間との繋がりを否定した…」

ゴドウィン…お前、そんな事を…。

「そして…兄さんとの絆も、再び忘れてしまった…。大切な人は、忘れてはいけないものは…いつも傍にあるというのに…」

「心のどこかでは、ルドガーの事を覚えていたはずだ。だから、紅刃と月沙にデュエルを挑むという形で助けを求めた。ルドガーと同じように、呪縛から解放してほしかった。違うか？」

「…当たりです…。さすが、兄さんを倒しただけの事はありますね…」

将人の予想はどんぴしゃだった。遊星が言ってたように、誰にも忘れられないものがあるんだな。

「紅刃…君が最後のドローをした時…あなたの姿が一瞬、遊星と被って見えました…」

「遊星と？」

「絆を、仲間を大切にするあなた達が似ているからでしょう。そして、月沙と共に、再び絆の力を示してくれた…」

「ゴドウィン…」

「私や兄さんを操った敵…ニュートラルは、強大な力を持つ組織です。ダークシグナーの事件よりも厳しい戦いが待っているはずです。ですが…あなた達なら、乗り越えられる。そう、信じています…」

「…ああ。俺達が奴らを倒して、この世界を護ってみせる。ああ、そうだ」

「？」

「さっきも言ったけど、お前もルドガーも俺達の仲間だ。それだけは忘れるな。冥界に行ったら、ルドガーや鈴佳達によろしく言っといてくれ」

「フフ…約束します」

ゴドウィンは優しく微笑んで、俺の頼みを聞き入れてくれた。

「あなた達を、信じていますよ…」

全身が黒くなり、ゴドウィンは塵になって消えてしまった。跡には何も残らない。

「ゴドウィン…」

「これが、ダークシグナーの末路か…」

「何か、かわいそうな人だったッスね…」

「ああ、事情はちゃんと説明しといたから」

亮さんと翔の言葉に疑問を持ったけど、フォッタが直ぐさま理由を教えてくれた。

「そうか。サンキュな」

ゴドウィン。後は俺達に任せて、安心して冥界で暮らしてくれ…。空を見上げると、いつの間にか晴れていた。

「…ってあれ？何で十代が？影丸とデュエルしてたんじゃ…」

「それならもう解決したぜ！ほら、あそこに…」

十代が指を差したそこには、ヘリの乗組員に看病を受けている、

腰を押さえた影丸の姿があった。てかあのロボットはどうした？

「実はかくかくしかじかデュエル最高ってわけなんだ」

「二次元って本当に便利だな…。要するに、ここの若い人達を見てもう1度青春を謳歌したくなったけど、青春を取り戻すために若さを得る目的が、いつの間にか永遠の命やら世界の覇権やらをほしがるようになってしまったってか…」

「それで俺が元気づけたら自分で立つ努力をして、立てたと思ったらギックリ腰になっちまったんだ」

「何やってんだか…」

苦笑しながら俺はヘルメットを脱いで、D・ホイールにしまった。

「とにかく、これで解決だね」

同じくヘルメットを脱いだ月沙の瞳の色が青から紫に戻っていく。覚醒を解いたな。

「本当に…よか…た…」

「お、おい！」

ヘルメットを落として前に倒れ込む月沙を正面から支える。顔を見ると、気絶して眠っていた。

「覚醒状態を長時間保つからだ。ただでさえ通常より体力の消耗が激しいのに…」

「そういや、コースアウトしかけてからずっとそのままだったな…」

将人はある程度扱いがわかってるのか、原因をすぐに指摘してくれた。

「しばらく休ませた方がいいんじゃない？特訓の後だったから余計疲れてるだろうし」

「俊也…。だよな。明日香、寮まで運んでくれないか？」

「あなたが運びなさい」

「はあ！？何でだよ！？」

「女の子に力仕事をさせるつもり？あなたが運べばいいじゃない」

何言ってんだこいつは！？

「でも、俺は男だぞ！？女子寮には入れないだろ！だから月沙の部屋なんて入った事ねえし…」

「私がついてあげるから案内は心配しなくていいわ。引率にクロノス先生にもついてもらうから許可も下りるはずよ」

「私も行くノーネ？」

いや待て待て！俺が行くのはちょっと…。

「紅刃、観念しなよ（後の月沙の反応が面白そうだし）」

「俺達は行かないからな（俺も疲れてるし早く休みたい）」

俊也と将人は拒絶!?何か言わせろよ!

「紅刃君グッジョブ!」

「吹雪さん何がグッジョブ!?アロハシャツ着て言っても何かすっげえムカつくんですけど!」

『紅刃様!』

「（スイレン!?）」

『姫様をよろしくお願いします!』

「（どういう意味だそれぇえええ!?お前もそっちサイドか!?）」

『こういう時姫様をお任せできるのは紅刃様しかおりません!』

「（どういう時だよ!?）そうだ!フォッタ、お前ならテレポートか何かで…」

「あ～疲れちゃった～。今日はもう力は使えないな～」

「棒読みすぎるわ!そして寝っ転がるな!」

「そういうわけだから、よろしくね?」

明日香の違和感のある笑顔を見て確信する。こいつ、謀りやがっ

た…！

「…ハァ、わかったよ」

俺は観念して、月沙を背中に背負った。

「それじゃ、行きましょうか。クロノス先生もお願いします」

「わかったノーネ」

わかるなぁぁあああ！！

「ここよ」

そんなわけで、俺と明日香は今月沙の部屋の前にいる。クロノス先生は外で待機中だ。

「…ん……スゥ……」

…さっきから首筋に息がかかってるけど大丈夫だ、問題ない。俺の理性は生半可な衝撃じゃ壊れない。

ていうか俺ってさっきまで命懸けでデュエルしてたんだよな？どうしてこうなった？

「入りましょうか」

「ああ。お邪魔しま～す…」

先生から借りたマスターキーを使って部屋に入った。お、綺麗に整頓されてるな。女の子らしいな。

とりあえず、ベッドに寝かせて布団をかけてやる。何ていうか、こいつの寝顔ってかわ…いや待て俺。

「にしても、何かそわそわするな…。女子寮なんて初めてだからか？」

「無理もないでしょうね」

「ところで、お前の兄さん、どういう性格してんだよ?あそこで『グッジョブ』って言って送り出すなよ…」

「あなたが月沙が好きだって事を知ってるからよ」

「おいいいぃぃいい!?何他言してんだ!?」

「兄さんが勝手に気づいただけよ。変なところで鋭いから。そのうち今回みたいな事を促すかもね」

もうやだこの兄妹!俺は盛大に溜め息をついた。

「…何か、月沙には頼ってばかりだな…」

「？」

「さっきのデュエル、月沙がメインで動いてたんだ。俺なんて本当にサポート程度しかできなくて…。1回攻撃を防いでやれたのが関の山だ」

「紅刃…」

「受け身型なんだよな、俺。パーミッションは大抵どんなカードも封じる。でも、代わりに相手に依存してんだ。相手に罠が効かなかったり、伏せたカードに対応した効果を使ってくれなかったら上手く身動きが取れない。…俺はまだ弱い」

「そんな事ないわよ。あの最後の光のドラゴン…遠くから見えてたけど、紅刃が召喚したモンスターなんでしょ？」

「あれは赤き竜が力を貸してくれた結果だ。そうじゃなきゃ、負けていたかもしれない」

俺には、積極性がない。自分から戦い、自分の力で打ち破るような、そんな積極性が…。

「…パーミッションをやめるつもり？」

「まさか。それは俺の相棒を捨てるのと同じだ。カウンター罠は絶対に使う」

「じゃあ、どうするの？」

「…わからない。パーミッションはただでさえ構築難易度が高いんだ。でも、強くなるためには意地でも弱点を補わなきゃいけない」

そうじゃなきゃ…みんなを護れない。弱点は克服する。もっと強くならないと…！

「ん…」

「「！」」

「ん…あれ…？ここは…？」

月沙が目を覚ました。何か知らないけど気まずい。早く帰ればよかった。

「お前の部屋だ」

「紅刃…？明日香も…」

「紅刃が運んでくれたのよ？感謝しなさい」

「お前が無理矢理やらせたんだろうが！」

「え…紅刃…が…～～～～～！！？」

月沙はなぜか顔を赤くして頭から布団を被ろうとした…みたいだけど、覚醒の反動で体が思うように動かないのか、顔だけ背けてしまった。

「そういう事だから、私は少し抜けるわね」

「いや、どういう事だよ！？」

「それじゃ、ごゆっくり～」

「おい、待てコラ！」

明日香はさっさと部屋から出ていっちまった。この状況で2人きりにさせる気か！？

「……」

「……」

気まずっ！どうすんだよこの雰囲気…？

「……あ～、何だ、その……ありがとな」

「…え…？」

月沙が俺に顔を向ける。まだ少し顔が赤い。

「俺の事、護ってくれただろ？それに、最後の攻撃もサポートしてくれたし…」

「いいって。当然の事をしただけだから。紅刃だって私を助けてくれたでしょ？そうじゃなかったら、今頃私…。ありがとう」

笑顔で礼を言われた。

でも…何で素直に喜べないんだ？

「こうして一緒に戦っていけるのも、紅刃やみんなが傍についてい

てくれるからかな？私はまだ弱いけど、紅刃が一緒にいたら何だか負ける気がしなくてさ」

「お前はそこまで弱くねえだろ。もっと強くならなきゃいけないけど、お前は充分強い」

…俺よりもずっと、な。

「そう…かな…？でも、紅刃には敵わないよ」

「それはやってみなくちゃわからないだろ？…それに、俺はお前が思うほど強くない」

「え？何か言った？」

「いや、何でもない」

最後の言葉は小声で呟いただけだったから、月沙の耳に届く事はなかった。

「紅刃、先生が待ってるからそろそろ行くわよ」

また話の糸口を掴めないでいると、明日香が部屋に入ってきた。

「ああ、そうか。それじゃ、俺はもう行くからな」

「私は後で看病してあげるから」

「病気じゃないけどね…。うん、ありがとう」

「じゃ、ゆっくり休めよ」

「うん」

こうして俺と明日香は部屋を出た。

「（紅刃…何か悩んでるみたいだったけど…大丈夫かな…？）」

「そんなに思い詰めてたら、話も弾まなくて当然ね」

女子寮の廊下を歩いている時、明日香が話し掛けてきた。

「盗み聞きしてたのかよ…」

「そう悲観する事ないんじゃない？一応危機は乗り切ったんだし、そんな調子じゃ次の期末試験でいい結果を出せないわよ？」

期末試験…か…。そういや、もうそんな時期だったな…。

「…そうだな。期末で落ちてたら話にならねえ。勉強が優先だ」

とは言っても、この学校でやる事は基本的な事ばかりで、あまり勉強する必要はないんだけどな。

「ごちゃごちゃ考えても仕方ないわよ。期末試験が終わってからゆっくり考えればいいでしょ？」

「ああ。それじゃ、頑張るとするか」

とりあえず表面だけ取り繕う。

まだ気になるけど、少しは気が楽になったな。明日香には感謝しねえと…。

気持ちを半分無理矢理切り替えて、俺と明日香は女子寮の外に出た。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第３６話　間違っている仲間は引きずってでも連れ戻せ（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「三幻魔編もついに終了か…。１期は終わったし、いよいよ私達の出番か？」

璃音「まだ１期の話は終わってないわよ」

フィレス『グルッ』

勇香「え？まだあるっけ？」

璃音「期末試験が残ってるでしょ？ＧＸを知ってる人は何があるかわかるわよね？」

勇香「期末試験？何かあったっけな…？」

璃音「さてと、考察に入るわよ。今回は赤き竜の力で具現した特別なモンスター《救世竜　セイヴァー・ドラゴン》よ」

《救世竜　セイヴァー・ドラゴン》
チューナー（効果モンスター）
星１／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
このカードをシンクロ素材とする場合、「セイヴァー」と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

璃音「特定の条件でのみシンクロ素材にできるモンスターよ。ＯＣ

Gで現在対応してるのは、《セイヴァー・スター・ドラゴン》と《セイヴァー・デモン・ドラゴン》の2体のみね」

勇香「レベル1だから割と出しやすいんだよな。《ワン・フォー・ワン》に《金華猫》、《エンジェル・リフト》に《リミット・リバース》なんかもある」

璃音「でも、『セイヴァー』はそう安々と出せるほど召喚しやすくはないわ。手札で腐ったら《調和の宝札》や《ゴブリンのやりくり上手》で処理するのも1つの手よ」

勇香「一応なら《スターダスト・シャオロン》、《セイヴァー・デモン・ドラゴン》なら《スクリーン・オブ・レッド》がある。ま、一工夫しないと扱いづらいから注意しろよ」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

はい、ライトエンドもセイヴァー化させました。ダークエンドもそうだったし、いいですよね？

そして、段々オリカが増えていく…。なるべくOCGのカードを

使うよう工夫しなければ…。

後1、2話くらいで2期に行けそうです。次の話を早く書き上げます。

では、また次回！

第３７話　いつも実力の１２０％を出し切るつもりで戦え（前書き）

大増量でお送りする第１期最終話です。後半のデュエル内容がぶっ飛んでますが、ご了承ください。

それではどうぞ！

第３７話　いつも実力の１２０％を出し切るつもりで戦え

ＳＩＤＥ／月沙

「《天刑王　ブラック・ハイランダー》でダイレクトアタック！死兆星斬！」

『おらぁ！』

「ぐわぁっ！」

レッド生徒　ＬＰ／１２００→　０

「《憑依装着－ウィン》でダイレクトアタック！龍風波！」

『せいっ！』

「うがぁああっ！」

レッド生徒　ＬＰ／　７００→　０

「《冥王竜ヴァンダルギオン》でダイレクトアタック！冥王葬送！」

『これで幕引きだ！』

「ば、馬鹿な…ぐあああああぁぁ！？」

ブルー生徒　ＬＰ／１８００→　０

今は期末試験をやってる途中。それも、実技試験。

紅刃達は簡単に負けるはずもなく、あっという間に勝っちゃった。
あんな危険な戦いを勝ち抜いてきたんだし、当然だよね。

私？私は今…。

「《氷結界の龍　グングニール》でダイレクトアタック！フリージング・ジャベリン！」

「きゃあああっ！」

ブルー女子　ＬＰ／１３００→　０

丁度とどめを刺したところ。ちょっと苦戦したけど、特に問題なく倒せた。

観客席に戻ると、既に試験を終えた紅刃達がいた。

「無事に勝てたみたいだな」

「まあね。筆記はどうだった？」

「あんなの簡単だろ？」

「僕も大丈夫だよ」

「思ったより大した事ないな」

「だよね。私も同じ」

筆記もみんな楽勝だったみたい。だって、『《青眼の白龍》のレベル・属性・種族・攻撃力・守備力を答えろ（完全解答）』なんて問題を出されても…ねえ？

「あ、そういや、卒業模範デュエルってのがあったな」

「卒業模範デュエル？」

「ああ。卒業生で成績トップの人が、在校生から好きな相手を選んで模範デュエルをするってイベントがあるんだとさ」

「へ～。誰がデュエルするんだろうね？」

「卒業生はカイザーしかいないだろ」

「だよな。問題は在校生だ。誰が選ばれるんだか…」

紅刃達がいろいろ予想してるけど、原作だと十代が選ばれたんだっけ。私達は…ないだろうな…。

でも、私は亮さんが卒業する前にどうしてもやっておきたい事がある。そのための準備をしないと…。

あれから数日後。隼人は突如来日したペガサスさんにカードデザ

イナーとしてスカウトされて、Ｉ２（インダストリアル・イリュージョン）社に行くためにこの島を出た。見送りはしたよ?次に会うのはまだ先だな…。

卒業模範デュエルは原作通りに亮さんと十代が戦った。結果は引き分け。ていうか攻撃力３６９００ｖｓ２０９００ってインフレしすぎでしょ?さすがレギュラー組、強い。

で今は卒業模範デュエル開催日の夜。私は灯台である人を待っていた。

あ、足音だ。…来た。

「来てくれてありがとうございます…亮さん」

「まさか、お前がこれを渡してくるとは思わなかったな」

来たのは、カイザーこと亮さんだった。手には私が送った『果たし状』があった。

「卒業する前に、１度戦っておきたかったんです。わがまま言ってすみません」

「構わない。俺も、シンクロ召喚に興味があるからな。…始めるか」

「はい」

私達はデュエルディスクを展開させた。

そう、これが私がやっておきたい事。ヘルカイザーになる前の亮

さんと1度手合わせをしたかった。

ここまで来たら後には引けない。全力を尽くす！

「「デュエル！」」

月沙ｖｓ亮

「先攻は貰います。ドロー！」

亮さんは後攻有利。でも、私はお互いに全力で戦いたいから先攻を取る！

「魔法カード《天使の施し》！カードを3枚ドローし、手札を2枚捨てる！モンスターをセット！カードを2枚セットし、ターンエンド！」

月沙
ＬＰ／４０００
手札／3
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×２

亮さんの事だから、手札にはもう《サイバー・ドラゴン》があるはず…。

「俺のターン！《プロト・サイバー・ドラゴン》を召喚！」

どう見ても《サイバー・ドラゴン》の面影があまり残ってないけど、あれは《サイバー・ドラゴン》の代わりになるモンスター。て

事は…。

《プロト・サイバー・ドラゴン》
効果モンスター
星３／光属性／機械族／ＡＴＫ１１００／ＤＥＦ　６００
このカードはフィールド上に表側表示で存在する限り、カード名を「サイバー・ドラゴン」として扱う。

《プロト・サイバー・ドラゴン》　ＡＴＫ／１１００

「このモンスターはフィールドに存在する限り、《サイバー・ドラゴン》として扱う！そして魔法カード《融合》を発動！フィールドの《プロト・サイバー・ドラゴン》と手札の《サイバー・ドラゴン》２体を融合！出でよ！《サイバー・エンド・ドラゴン》！！」

三つ首の機械龍。いきなり切り札が来た…！

《サイバー・エンド・ドラゴン》
融合・効果モンスター
星１０／光属性／機械族／ＡＴＫ４０００／ＤＥＦ２８００
「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

《サイバー・エンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／４０００

「このモンスターは貫通効果を持っている！《サイバー・エンド・

ドラゴン》でモンスターに攻撃！エターナル・エヴォリューション・バースト！」

３つの口から強力なレーザー砲が放たれる。でも、これは想定済み…！

「伏せモンスターは《氷結界の修験者》！攻撃力１９００以上のモンスターとの戦闘では破壊されない！」

《氷結界の修験者》　ＤＥＦ／１０００

「そして罠カード《ガード・ブロック》！戦闘ダメージを無効にし、カードを１枚ドローする！」

よし、防ぎ切った！

「なるほど、そんな手があったか…。さすがは未来のデュエリストだ。カードを１枚セットし、ターンエンド」

亮
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《サイバー・エンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／４０００）
魔法・罠／リバース×１

「私のターン！」

あ、丁度いいところに！

「手札から速攻魔法発動！《エネミー・コントローラー》！」

みんな大好き社長のエネコン！でも効果はＯＣＧ版！

《エネミーコントローラー》
速攻魔法
次の効果から１つを選択して発動する。
●相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体の表示形式を変更する。
●自分フィールド上に存在するモンスター１体をリリースして発動する。
このターンのエンドフェイズ時まで、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体のコントロールを得る。

「このカードの効果は２つある。相手モンスター１体の表示形式を変更するか、私のモンスター１体をリリースして相手モンスターのコントロールをエンドフェイズ時まで奪い取る事ができる！」

手札に上級モンスターがいればいいんだけど、そう都合よくはいかないよね。

あ、コマンド入力が…え～と…ああもう！こうなったら適当だ！

「↓・↑・→・Ａ・Ｂ！このコマンドで、《サイバー・エンド・ドラゴン》を守備表示に変更する！」

私が言った通りにエネコンが起動して、《サイバー・エンド・ドラゴン》が強制的に守備表示にされた。面白いからこれからも使おうかな？

《サイバー・エンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／４０００↓ＤＥＦ／２

８００

「そして手札から《氷結界の妖精》を召喚！」

水色の髪を持つ氷の妖精…っていうか見た目が完全にチ○ノだけど気にしない！

《氷結界の妖精》
効果モンスター（オリジナル）
星３／水属性／水族／ＡＴＫ　９００／ＤＥＦ　９００
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択する。選択したモンスターは次の相手ターンのエンドフェイズ時まで表示形式の変更ができず、効果も無効化される。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

《氷結界の妖精》　ＡＴＫ／　９００

「新しい氷結界のモンスターか…」

「見た目にはどうかツッコまないでください…」

「？」

「《氷結界の妖精》の効果発動！次の相手ターンのエンドフェイズ時まで、相手モンスター１体の表示形式の変更と効果を封じる！パーフェクトフリーズ！」

とりあえずサイバー・エンドを氷漬けにして動きを封じる。

「サイバー・エンドを封じたか…！」

「さらにリバースカードオープン《リビングデッドの呼び声》！自分の墓地からモンスターを1体攻撃表示で特殊召喚する！《冬の忘れ物　レティ・ホワイトロック》を特殊召喚！」

どこかで見た事があると思って前にネットで調べてみたら、このモンスターも東〇が元ネタだった。亮さんは知らないみたいだからよかった…。

《冬の忘れ物　レティ・ホワイトロック》
効果モンスター（オリジナル）
星８／水属性／水族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ２９００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、互いのプレイヤーはドローフェイズ・メインフェイズ・バトルフェイズに魔法・罠カードの効果の使用及び発動・セットはできない。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、このカード以外の水族モンスターの攻撃力・守備力は５００ポイントアップする。
さらに「氷結界の妖精」の攻撃力・守備力は９００ポイントアップする。

《冬の忘れ物　レティ・ホワイトロック》　ＡＴＫ／２３００

「このモンスターがいる限り、お互いにメインフェイズ2とエンドフェイズにしか魔法・罠を使用できず、セットもできない」

「何…！？」

「さらに、レティ・ホワイトロック以外の私の水属性モンスターの攻撃力と守備力は５００ポイントアップする！」

《氷結界の修験者》　ＤＥＦ／１０００→１５００
《氷結界の妖精》　ＡＴＫ／　９００→１４００
「そして、《氷結界の妖精》はさらに９００ポイントアップする！」
《氷結界の妖精》　ＡＴＫ／１４００→２３００
「カードを１枚セットしてターンエンド！」

月沙
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《氷結界の修験者》（ＤＥＦ／１５００）《氷結界の妖精》（ＡＴＫ／２３００）《冬の忘れ物　レティ・ホワイトロック》（ＡＴＫ／２３００）
魔法・罠／《リビングデッドの呼び声》リバース×１

布陣は整えた。私も動きづらくなるけど、これで少しは時間稼ぎができるはず…。

「俺のターン！…月沙、さすがだが惜しかったな」

「え？」

「俺はユニオンモンスター《アーマード・サイバーン》を召喚！」

うわっ！それは…！

《アーマード・サイバーン》
ユニオンモンスター
星４／風属性／機械族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ２０００
１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分の「サイバー・ドラゴン」及び「サイバー・ドラゴン」を融合素材とする融合モンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。
この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、１ターンに１度、装備モンスターの攻撃力を１０００ポイントダウンし、フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を破壊できる。
（１体のモンスターが装備できるユニオンは１枚まで。装備モンスターが破壊される場合は、代わりにこのカードを破壊する。）

《アーマード・サイバーン》　ＡＴＫ／　０

「このモンスターは《サイバー・ドラゴン》か、《サイバー・ドラゴン》を融合素材とするモンスターに装備できる！《サイバー・エンド・ドラゴン》に装備！」

《サイバー・エンド・ドラゴン》がキャノン砲付きの戦闘機みたいなモンスターと合体する。

「そして《アーマード・サイバーン》の効果発動！装備モンスターの攻撃力を１０００ポイントダウンさせ、相手モンスター１体を破壊する！」

《サイバー・エンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／４０００→３０００

「《冬の忘れ物　レティ・ホワイトロック》を破壊する！ジャッジメント・キャノン！」

２つのキャノン砲が火を噴き、レティを破壊してしまった。

「く…レティ・ホワイトロックがフィールドから離れた事で、ステータスが元に戻る…」

《氷結界の修験者》　ＤＥＦ／１５００→１０００

《氷結界の妖精》　ＡＴＫ／２３００→　９００

「これで魔法と罠が使えるな。魔法カード《天使の施し》！カードを3枚ドローし、手札を2枚捨てる！そして速攻魔法《融合解除》！《サイバー・エンド・ドラゴン》を融合デッキに戻し、融合素材の《サイバー・ドラゴン》3体を墓地から特殊召喚する！」

まさか、今の手札の施しで《サイバー・ドラゴン》を墓地に落としたの！？

《融合解除》
速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在する融合モンスター1体を選択してエクストラデッキに戻す。
さらに、エクストラデッキに戻したこのモンスターの融合召喚に使用した融合素材モンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、この一組を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

墓地から機械龍が3体飛び出した。ちょっとまずいな…。

《サイバー・ドラゴン》　ＡＴＫ／２１００

《サイバー・ドラゴン》　ＡＴＫ／２１００

《サイバー・ドラゴン》　ＡＴＫ／２１００

「バトル！《サイバー・ドラゴン》で《氷結界の妖精》に攻撃！エヴォリューション・バースト！」

「罠カード《立ちはだかる強敵》！私の場のモンスター１体を選択し、相手モンスター全てに選択したモンスターを攻撃させる！」

《立ちはだかる強敵》
通常罠
相手の攻撃宣言時に発動する事ができる。
自分フィールド上の表側表示モンスター１体を選択する。
発動ターン相手は選択したモンスターしか攻撃対象にできず、全ての表側攻撃表示モンスターで選択したモンスターを攻撃しなければならない。

「私が選ぶのは《氷結界の修験者》！修験者は攻撃力１９００以上のモンスターとの戦闘では破壊されない！」

修験者が妖精の前に飛び出し、レーザー光線を結界で防いだ。他の２体もついでに攻撃してきたけど、それも全部防ぎ切った。

「そう来るか…。このままターンエンドだ」

亮
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《サイバー・ドラゴン》（ＡＴＫ／２１００）《サイ

バー・ドラゴン》（ＡＴＫ／２１００）《サイバー・ドラゴン》（ＡＴＫ／２１００）
魔法・罠／リバース×１

何とか防ぎ切ったけど、やっぱり亮さんは強い…！カイザーの異名は伊達じゃない。でも、私だってまだ負けてない！

「私のターン！魔法カード《マジック・プランター》！私の場の永続罠１枚を墓地に送り、カードを２枚ドローする！」

《マジック・プランター》
通常魔法
自分フィールド上に表側表示で存在する永続罠カード１枚を墓地へ送って発動する。
自分のデッキからカードを２枚ドローする。

引いたのは…よし！ナイスタイミング！

「チューナーモンスター《氷弾使いレイス》を召喚！」

１丁の銃を手にしている女銃士が現れる。私のお気に入りのチューナーだ。

《氷弾使いレイス》　ＡＴＫ／　８００

「チューナーモンスター…いよいよ来るか…！」

「レベル４《氷結界の修験者》とレベル３《氷結界の妖精》にレベル２《氷弾使いレイス》をチューニング！」

青い２つの輪と７つの星が同調して、一筋の光の柱を生み出す。

「封印されし綿津見の槍が、氷壁を砕き唸りを上げる！秘めたる力を解き放て！」

☆４＋☆３＋☆２＝☆９

「シンクロ召喚！邁進せよ！《氷結界の龍　トリシューラ》！」

銀色の鎧を身につけた三つ首の龍が、月光に照らされた。

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／２７００

『『『ギャオオォォオオオ！！』』』

「これが、月沙の切り札か…（初めて戦うが、これがシンクロモンスター…。今まで見てきたモンスターの中でも、一際違う迫力を感じる…）」

「トリシューラの効果発動！相手のフィールド・墓地・手札からカードを１枚ずつ除外する！フィールドの《サイバー・ドラゴン》と墓地の《プロト・サイバー・ドラゴン》を除外！トリニティ・バイス！」

トリシューラが青い光線を吐き出し、２体の機械龍を除外した。

「《サイバー・ドラゴン》を除外するとは…」

「バトル！トリシューラで《サイバー・ドラゴン》に攻撃！トライデント・ブリザード！」

3つの吹雪がまとめて1体の《サイバー・ドラゴン》に向かっていく。

「罠カードオープン《アタック・リフレクター・ユニット》！」

「！」

「《サイバー・ドラゴン》1体を生け贄に捧げ、デッキから《サイバー・バリア・ドラゴン》1体を特殊召喚する！」

《アタック・リフレクター・ユニット》
通常罠
自分フィールド上の「サイバー・ドラゴン」1体を生け贄に捧げて発動する。
自分の手札・デッキから「サイバー・バリア・ドラゴン」1体を特殊召喚する。

《サイバー・ドラゴン》が変形して、襟巻きみたいなバリア装置を身につけた。

《サイバー・バリア・ドラゴン》
効果モンスター
星6／光属性／機械族／ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ２８００
このカードは通常召喚できない。
このカードは「アタック・リフレクター・ユニット」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。
このカードが攻撃表示の場合、1ターンに1度だけ相手モンスター1体の攻撃を無効にする。

《サイバー・バリア・ドラゴン》　ＡＴＫ／　８００

「う…攻撃できない…」

《サイバー・バリア・ドラゴン》は攻撃表示の時、相手の攻撃を１度だけ無効にする。私の場のモンスターはトリシューラ１体のみ。攻撃は通らない。

「…カードを１枚セットしてターンエンド」

月沙
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《氷結界の龍　トリシューラ》（ＡＴＫ／２７００）
魔法・罠／リバース×１

「俺のターン、ドロー！…フ…」

「？」

「魔法カード《天よりの宝札》！互いに手札が６枚になるようにカードをドローする！」

手札０枚の状態で最強のドロー強化カード…。十代と同じでドロー力が強すぎる！

「俺は《プロト・サイバー・ドラゴン》を召喚！」

《プロト・サイバー・ドラゴン》　ＡＴＫ／１１００

「ここで出してきたという事は、《サイバー・ドラゴン》関係のカードを使うつもりですか？」

「正解だ。魔法カード《融合》！フィールドの《サイバー・ドラゴン》と《プロト・サイバー・ドラゴン》を融合し、《サイバー・ツイン・ドラゴン》を融合召喚する！」

２体が融合し、双頭の機械龍が現れる。出たよ、２回攻撃ができる強力モンスター…。

《サイバー・ツイン・ドラゴン》
融合・効果モンスター
星８／光属性／機械族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２１００
「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」
このカードの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。
このカードは一度のバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる。

《サイバー・ツイン・ドラゴン》　ＡＴＫ／２８００

「バトル！《サイバー・ツイン・ドラゴン》で《氷結界の龍　トリシューラ》に攻撃！さらにダイレクトアタック！エヴォリューション・ツイン・バースト！」

《サイバー・ツイン・ドラゴン》が２つの口からレーザー光線を放ち、１つはトリシューラに、もう１つは私に当たった。

「うあああ！…っ、…！」

月沙　ＬＰ／４０００→３９００→１１００

「続けて《サイバー・バリア・ドラゴン》でダイレクトアタック！」

「ぐ…！」

月沙　ＬＰ／１１００→　３００

「カードを２枚セットしてターンエンドだ！」

亮
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《サイバー・ツイン・ドラゴン》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／リバース×２

ライフがもう１０００を切っちゃった…。でも、手札は増えた。
反撃は充分できる！

「私のターン！…！」

あ～…念のためにデッキに入れといたんだけど…。

「あまり使いたくないな…何か感じ悪いし…」

「？」

「仕方ないか…。魔法カード《手札断殺》を発動！互いにカードを２枚ドローし、手札を２枚捨てる！」

「む…」

少し危険だけど、なりふりに構ってても仕方ないしね。

「魔法カード《死者蘇生》！《手札断殺》で墓地に送った《氷結界の舞姫》を特殊召喚！」

『ほんの少しの間ですが…参ります！』

スイレンですら、今はフィールドに留めるのは危険だ。私が蘇生させたのには、別の理由がある。

《氷結界の舞姫》　ＡＴＫ／１７００

「なぜレベル４のモンスターを特殊召喚した？生け贄にするにしても、直接上級モンスターを出す方が早いはずだ」

「このモンスターは特殊召喚じゃ効果を発揮できないんです」

「…？」

力を借りるよ、怜磨！

「《氷結界の舞姫》をリリースし…《ブリザード・プリンセス》をアドバンス召喚！！」

巨大な氷塊の鎖付きハンマー――モーニングスターを持つ氷の姫。私の弟が冥界から送ってくれたカード…！

《ブリザード・プリンセス》　ＡＴＫ／２８００

「生け贄１体でレベル８のモンスターを召喚しただと…！？」

「魔法使い族1体のリリースでアドバンス召喚できる効果を持っているんです。そして、《ブリザード・プリンセス》が召喚されたターン、相手は魔法・罠を使う事ができない！」

「何！？」

「そして魔法カード《地砕き》！相手の1番守備力が高いモンスター1体を破壊する！」

《地砕き》
通常魔法
相手フィールド上に表側表示で存在する守備力が一番高いモンスター1体を破壊する。

「当然、《サイバー・バリア・ドラゴン》を破壊！」

どこからか巨大な幻影の腕が降ってきて、地面を思い切り殴り付けた。《サイバー・バリア・ドラゴン》はその衝撃に耐え切れずに爆発してしまった。

これで攻撃を止められる心配はない。このターンで決めるのは無理だけど、この攻撃は確実に通す！

「さてと…亮さん、このデュエルを受けてくれたお礼に見せてあげますよ。シンクロ召喚の更なる可能性を…！」

「更なる可能性？」

「魔法カード《ミラクルシンクロフュージョン》！」

「！（十代が使う《ミラクル・フュージョン》と似た名前のカード…）」

「自分のフィールドと墓地から融合素材になるモンスターを除外し、シンクロモンスターを素材とする融合モンスターを融合召喚する！」

《ミラクルシンクロフュージョン》
通常魔法
自分のフィールド上・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、シンクロモンスターを融合素材とするその融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。
また、セットされたこのカードが相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、自分はデッキからカードを1枚ドローする。

「シンクロモンスターを融合素材にするだと？」

「墓地の《氷結界の龍　トリシューラ》と《氷結界の虎将　グルナード》を除外！融合召喚！《幻影波氷魔　ミラージュ・コールダー》！」

私の場に現れたのは、それなりに大きい水色の球体だった。

《幻影波氷魔（げんえいはひょうま）　ミラージュ・コールダー》
融合・効果モンスター（オリジナル）
星１０／水属性／悪魔族／ＡＴＫ　？／ＤＥＦ　０
水属性シンクロモンスター＋水属性モンスター
このカードは融合召喚及びこのカードの効果でしか特殊召喚できない。

このカードが特殊召喚に成功した時、自分の墓地の水属性モンスター1体を除外して発動する。
このカードの元々の攻撃力は、除外したモンスターの元々の攻撃力と守備力を合計した数値になり、除外したモンスターと同名カードとして扱う。
1ターンに1度、自分フィールド上のこのモンスター以外の水属性モンスター1体を対象にする相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にする事ができる。
この効果は相手ターンでも発動する事ができる。
このカードが相手によってカードの効果で破壊され墓地に送られた時、墓地の水属性モンスター2体をゲームから除外する事で、このモンスターを墓地から特殊召喚する事ができる。

《幻影波氷魔　ミラージュ・コールダー》　ＡＴＫ／　？

「攻撃力『？』…？何だこのモンスターは？」

「ミラージュ・コールダーの効果発動！墓地の水属性モンスター1体を除外する！私が除外するのは、《氷結界の交霊師(こうれいし)》！」

《氷結界の交霊師》
効果モンスター
星７／水属性／魔法使い族／ＡＴＫ２２００／ＤＥＦ１６００
相手フィールド上に存在するカードが、自分フィールド上に存在するカードの枚数より４枚以上多い場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手プレイヤーは1ターンに1度しか魔法・罠カードを発動する事ができない。

「《天使の施し》か《手札断殺》で墓地に送ったカードか。だが、

ただ除外するわけじゃなさそうだな」

「はい！このモンスターの元々の攻撃力は、この効果で除外したモンスターの攻撃力と守備力の合計分の数値になります！攻撃力は２００、守備力は１６００！よって、攻撃力は３８００！」

《幻影波氷魔　ミラージュ・コールダー》　ＡＴＫ／　？→３８００

球体が形を変え、水色の交霊師の姿になった。でも、下半身は球体のまま。

「そして、この効果で除外したモンスターと同名カードとして扱います」

「…感じが悪いというのはそういう事か？」

「はい…。強いのは認めてますけど…」

何か邪神を思い出すなぁ…。悪魔族だし、悪い意味でモンスターを取り込んでるように見えるから何か素直に受け入れられないんだよね…。

「とにかく、気を取り直して…バトル！ミラージュ・コールダーで《サイバー・ツイン・ドラゴン》を攻撃！ミラージュ・フリーズ・フォース！」

上半身が水色の交霊師になった悪魔が、氷の球体で機械龍を破壊した。

「ぐぅ…！」

亮　ＬＰ／４０００→３０００

「《ブリザード・プリンセス》でダイレクトアタック！フローズン・ブレイク！」

「ぐあああっ！」

《ブリザード・プリンセス》がモーニングスターを振り回して、鎖で繋いだ氷塊で亮さんを殴った。うわぁ、痛そう…。

亮　ＬＰ／３０００→　２００

「メイン2で魔法カード《アドバンス・ドロー》を発動！レベル８以上のモンスター…《ブリザード・プリンセス》をリリースし、カードを2枚ドローする！」

相手はあの亮さんだ。攻撃力が２８００でもフィールドに置いとくと危険だ。何しろ、私のライフは残り３００。万が一サイバー・エンドとかが来たら確実に負ける。

「そして魔法カード《命削りの宝札》！手札が5枚になるようにカードをドローし、5ターン後のスタンバイフェイズ時に手札を全て捨てる！」

《命削りの宝札》
通常魔法（アニメオリジナル）
自分の手札が5枚になるよう、自分のデッキからカードをドローする。

このカードが発動してから5ターン目のスタンバイフェイズ時、自分の手札を全て捨てる。

「…カードを4枚セットしてターンエンド！」

月沙
ＬＰ／　３００
手札／１
モンスター／《幻影波氷魔　ミラージュ・コールダー（氷結界の交霊師）》（ＡＴＫ／３８００）
魔法・罠／リバース×５

「…見事だ」

「え？」

「侮ってなどはいなかった。最初から全力で戦っているつもりだ。だが、ここまで追い詰められるとはな。今年の1年生は面白いデュエリストが多い」

「私はかなり必死ですけどね…」

「それでいて、カードを無駄にしていない。無意味に残ってしまった《リビングデッドの呼び声》すらアドバンテージに変えてしまうタクティクスはあまり見ない」

「…教えてくれた人達がいますから。どんなカードも無駄にはならないという事、最後まで諦めない事…私1人じゃ手に入れるなんてできなかった考えばかりです」

遊星や紅刃みたいに、自分の意思を真っ直ぐに貫き通すような生き方ができたら…って、いつもそう思う。

だからかな。いつも自分のデッキの可能性を信じていられるのは…。

「なるほどな。お前がなぜここまで強いのか…わかった気がする。だが、俺もまだ負けてはいない。己のデッキの可能性を信じる。その事を改めて教えてくれたのは、お前や紅刃、十代を始めとする多くの在校生だ」

そう言いながら、亮さんは静かにデッキトップに指を当てた。

「俺も報いなければならない。今、最高のデュエルをしてくれているお前に。俺に大切な事を確認させてくれた人達に！俺のターン、ドロー！！」

…何でだろう。《サイバー・ドラゴン》は1体除外したはずなのに、残りの2体は墓地にいるはずなのに、サイバー・エンドが出てきそうな気がする…！

ＳＩＤＥ／紅刃

凄えな。カイザー相手にお互いぎりぎりの戦いをしている。

月沙がカイザー宛てに果たし状を書いているのが見えたから、主や紅刃、俊也と一緒にこっそり覗いてみたらこの有様だ。お互いライフが１０００以下…月沙もなかなかやるな。

「凄いな…ほぼ互角だよ」

「あいつも成長してるんだろ。このまま簡単に勝てるとは思えんがな」

「俺のターン、ドロー！！」

お、再開したな。

「俺も《命削りの宝札》を発動しよう。手札が5枚になるようにカードをドローする！…よし！魔法カード《異次元からの埋葬》！除外されているモンスターを3枚まで墓地に戻す！」

《異次元からの埋葬》
速攻魔法（制限カード）
ゲームから除外されているモンスターカードを3枚まで選択し、そのカードを墓地に戻す。

「俺は《サイバー・ドラゴン》を墓地に戻す！」

ん？月沙のモンスターにはノータッチか？墓地に戻すと危険だと判断したみたいだな。

「さらに、ライフを半分払い速攻魔法を発動！機械族の融合モンスターを融合召喚する時、自分の墓地から融合素材を除外する事で融合召喚ができる！」

《サイバネティック・フュージョン・サポート》
速攻魔法（アニメオリジナル）
自分のライフポイントを半分払って発動する。
このターンに機械族融合モンスター1体を融合召喚する場合、手札または自分フィールド上の融合素材モンスターを墓地に送る代わりに、自分の墓地に存在する融合素材モンスターをゲームから除外する事ができる。

亮　ＬＰ／　２００→　１００

「そして魔法カード《パワー・ボンド》！機械族の融合モンスターを、攻撃力を2倍にして融合召喚する！」

来た！ハイリスクハイリターンの融合カード！

《パワー・ボンド》
通常魔法
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、機械族の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。
このカードによって特殊召喚したモンスターは、元々の攻撃力分だけ攻撃力がアップする。
発動ターンのエンドフェイズ時、このカードを発動したプレイヤーは特殊召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。

「墓地の3体の《サイバー・ドラゴン》を除外！現れろ！《サイバー・エンド・ドラゴン》！」

…まあ出てきたよ。しかも攻撃力は…。

《サイバー・エンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／４０００→８０００

「まだだ！魔法カード《二重魔法》！手札の魔法カード《融合》を墓地に送り、相手の墓地の魔法カード１枚を使用する！」

《二重魔法（ダブルマジック）》
通常魔法
手札の魔法カードを１枚捨てる。
相手の墓地から魔法カードを１枚選択し、自分のカードとして使用する。

「俺は《命削りの宝札》を使用する！カードを５枚ドロー！」

ちょ！？何だそのドロー加速！？そんなのありかよ！？

「装備魔法《巨大化》をサイバー・エンドに装備！俺のライフが相手のライフを下回っている時、装備モンスターの元々の攻撃力を倍にする！」

《巨大化》
装備魔法（制限カード）
自分のライフポイントが相手より下の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。
自分のライフポイントが相手より上の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を半分にした数値になる。

《サイバー・エンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／８０００→１２０００

まさかの《巨大化》！？見てるこっちが凄く不安になってきた！

「このターンで決められなければ俺の負けだ。だから、出し惜しみはなしだ！リバースカードオープン《リミッター解除》！機械族モンスターの攻撃力を２倍にする！」

おいおい！そこまでやるか！？

《リミッター解除》
速攻魔法（制限カード）
このカード発動時に、自分フィールド上に表側表示で存在する全ての機械族モンスターの攻撃力を倍にする。
この効果を受けたモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

《サイバー・エンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／１２０００→２４０００

「そして魔法カード発動！《魔法石の採掘》！手札を２枚捨てて、墓地の魔法カード１枚を手札に加える！」

《魔法石（まほうせき）の採掘》
通常魔法（準制限カード）
手札を２枚捨てて発動する。
自分の墓地に存在する魔法カードを１枚手札に加える。

「手札に加えるのは《リミッター解除》！そしてそのまま発動！サイバー・エンドの攻撃力はさらに２倍になる！」

《サイバー・エンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２４０００→４８０００

まさかの使い回し！？攻撃力が十代の時の３６９００を軽く突破してるんだけど！？

「さらに罠カード《パワー・ドレイン》を発動！モンスターの攻撃力が上がった時、フィールド上のモンスター全ての上昇した分の攻撃力をサイバー・エンドに加える！」

《パワー・ドレイン》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力が上がった時に発動する事ができる。
お互いのフィールド上のモンスターの攻撃力の合計から元々の攻撃力の合計を引いた数値を、エンドフェイズ時まで攻撃力が上がったモンスターの攻撃力に加える。

「よってサイバー・エンドの攻撃力は４４０００ポイントアップ！」

《サイバー・エンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／４８０００→９２０００

いや待てぇえええ！！攻撃力９２０００でおかしいだろ！？元々の攻撃力の４０００がめっちゃ小さく感じるぞ！？月沙も顔が引き攣ってるし！

「バトルだ！サイバー・エンドで…」

「ちょっと待ってください！」

「どうした？」

「《異次元からの埋葬》で私のモンスターを墓地に戻さなかったのは失敗でしたね。どうせなら…切り札どうしで勝負しませんか？」

「何？」

「永続罠《氷結転移陣》！私の場の氷結界のモンスター1体を選択し、除外されている氷結界のモンスターを特殊召喚する！」

《氷結転移陣》
永続罠（オリジナル）
自分フィールド上の「氷結界」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。
除外されている自分の「氷結界」と名のついたモンスター1体を選択し特殊召喚する。
その後、選択したモンスターの攻撃力分の数値を特殊召喚したモンスターの攻撃力に加え、選択したモンスターを除外する。
このカードがフィールド上から離れた時、このカードの効果で特殊召喚したモンスターを破壊する。
そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「何…？だが、氷結界のモンスターはフィールドにはいないぞ？」

「さっき言いましたよね？ミラージュ・コールダーは『除外したモンスターと同名カードとして扱う』って…」

「…！そうか！そのモンスターは今《氷結界の交霊師》としても扱う！」

「そういう事です！舞い戻れ！トリシューラ！」

月沙のフィールドに青白い魔法陣が現れ、中央にトリシューラが転送された。

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／２７００

「そして、選択したモンスター…ミラージュ・コールダーを除外し、その攻撃力３８００ポイントをトリシューラに与える！」

ミラージュ・コールダーが光となってトリシューラに取り込まれる。

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／２７００→６５００

うわぁ、これですらちっぽけに見えるよ。あいつどうする気だよ？

「だが、サイバー・エンドの攻撃力には届かない！」

「『今は』ですけどね」

「？（純粋にパワーで勝負するというのか？…面白い）」

「まさかあいつ、攻撃力で真っ向勝負する気か？」

「亮さん相手に通用するの…？」

「ここからが本番だ！罠カード《アクア・オーバードライブ》！」

何だそれ？俺の知らないカードだ。

「手札を全て墓地に送り、効果発動！」

墓地に送った最後の手札は…《氷結界の虎将　ガンターラ》か？

「墓地の水属性モンスターを全て除外し、除外したモンスターの攻撃力を全てトリシューラの攻撃力・守備力に加算する！」

《アクア・オーバードライブ》
通常罠（オリジナル）
手札を全て墓地に送り発動する。
自分の墓地に存在する水属性モンスターを全て除外し、除外したモンスターの攻撃力の合計分の数値をエンドフェイズ時まで自分フィールド上の水属性モンスター1体の攻撃力・守備力に加える。
選択したモンスターが戦闘を行う時、相手への戦闘ダメージは0になる。
また、戦闘を行った相手モンスターの攻撃力の2倍のダメージを相手に与える。
エンドフェイズ時、このカードの効果で除外したモンスター1体につき1000ポイントのダメージを受ける。

「墓地の水属性モンスターを全て除外し、攻撃力を合計分…12700ポイントアップさせる！」

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／６５００→１９２００

「一気に20000近くまで跳ね上げたか…！」

「駄目だ！それでもまだ届かない！」

「（状況は俺が有利のはず。だが、月沙は一切諦めていない。まだ策があるのか？）行くぞ！《サイバー・エンド・ドラゴン》で《氷結界の龍　トリシューラ》に攻撃！エターナル・エヴォリューション・バースト！！」

「攻撃宣言時に罠発動《Ｄ．Ｄ．サクセション》！除外されているカード１枚につき攻撃力を１０００ポイントアップさせる！」

《Ｄ．Ｄ．サクセション》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターの攻撃力を、エンドフェイズ時まで除外されているカード１枚につき１０００ポイントアップさせる。

「除外されているカードは私の１０枚と亮さんの４枚を合わせて１４枚！攻撃力は１４０００ポイントアップ！」

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／１９２００→３３２００

「まだまだぁ！罠カード《パワー・ドレイン》！」

「何！？」

え？

「説明は以下省略！トリシューラの攻撃力は１１８５００ポイントアップ！」

「１１８５００ぅ！？」

「何だそのでたらめな数値は！？」

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／３３２００→１５１７００

あれ、おかしいな?デュエルモンスターズって攻撃力が１５００も行くようなカードゲームだっけ?

「サイバー・エンドを上回っただと!?」

「迎え撃て、トリシューラ!トライデント・ブリザード!!」

３本のレーザーと３本の吹雪。三つ首の龍の攻撃が真正面からぶつかり合う。心なしか、威力が普段の数十倍もあるかのように見えるのは俺だけじゃないはずだ。

「…月沙、認めよう。お前はこの学園の中でも間違いなくトップクラスの実力の持ち主だ」

「え?」

「だが、このデュエルは俺の勝ちだ!ダメージステップ時に手札から速攻魔法発動!《決闘融合－バトル・フュージョン》!!」

「なっ…!?」

あれは十代とのデュエルで使っていた…。

「自分の融合モンスターが戦闘を行うダメージステップ時、ダメージステップ終了時まで戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分の数値を自分の攻撃モンスターの攻撃力に加える!」

《決闘融合－バトル・フュージョン》
速攻魔法（ＴＦオリジナル）
自分フィールド上に存在する融合モンスターが戦闘を行う場合、そ

のダメージステップ時に発動することができる。
その自分のモンスターの攻撃力は、ダメージステップ終了時まで戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の数値分アップする。

「よって、《サイバー・エンド・ドラゴン》の攻撃力は…

『２４３７００！！』」

《サイバー・エンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／９２０００→２４３７００

おいいいいいぃぃ！！？攻撃力が２０００００越えやがったぞ！？化け物かあいつ！？もうインフレってレベルじゃねえだろ！？

「うわあああぁぁあぁあああああ！！」

トリシューラは当然耐え切れずに超極太レーザーキャノンに掻き消され、そのまま月沙も飲み込んで轟音を上げた。実体化してたら多分この地域は丸ごと吹っ飛んでたな…。

月沙　ＬＰ／　３００→　０

亮　ＷＩＮ

ＳＩＤＥ／月沙

ライフが０になると同時に、その場にへたり込んでしまった。ソリッドビジョンの煙が晴れると、亮さんの姿が見えた。

「あはは…ハァ、負けちゃった…」

「だが、本当にぎりぎりだった。卒業前にもう１度最高のデュエルができた。ありがとう」

「どういたしまして」

…無理！本当に無理！攻撃力１５００００越えた私も私だけど、２４３７００って何！？せっかくデッキをパワー型に切り替えたのに！やっぱり亮さん相手に攻撃力で勝負するんじゃなかった！

苦笑いを浮かべながらも何とか立ち上がり、ついでにデッキとディスクも片付けた。

「…１つ聞いていいですか？」

「何だ？」

「デュエルモンスターズって…攻撃力が１０００００を越えるようなカードゲームでしたっけ…？」

「…正直俺も驚いている。あそこまで攻撃力を上げたのは初めてだ」

「あはは…ですよね…」

もう笑うしかないや。負けたのに、悔しいを通り越していっそ清々しい。

「これなら、俺も安心して卒業できる。こんなに強いデュエリストが何人もいるんだからな」

「私なんてまだまだですよ。十代や紅刃の方がよっぽど強いです」

紅刃はカウンター罠で動きを封じるし、十代なんて毎ターンディスティニードローだし。

「紅刃とも戦ってみたかったが…またいつかの楽しみにとっておくとしよう。…今日はもう遅い。そろそろ帰るか」

「はい」

亮さんもデッキとディスクを片付けて、寮に帰るべく歩き出した。

「…亮さん！」

私が大声で呼ぶと、亮さんは一旦立ち止まり振り替えった。

「１つだけ…約束してくれませんか？」

「何だ？」

「この先何があっても…カードを信じる心を忘れないでください」

「…！」

亮さんは少しだけ目を見開くと、何事もなかったかのようにまた微笑んだ。

「わかった、約束しよう」

そして、そのまま寮へ戻っていった。

『姫様、残念でしたね』

亮さんが見えなくなると、スイレンが苦笑しながら出てきた。

「確かに残念だけど、楽しいデュエルだったよ。…ちょっと未知の体験をしたけど」

『あはは…あんな攻撃力、この先もう出ないんじゃないですか？』

「というか出てほしくない。あんなパワー合戦、もう二度とやりたくないし…精神的にきつい」

『ですよね…。私達も帰りましょうか』

「うん」

スイレンがデッキに戻るのを合図に、私は歩き出した。

…亮さんがヘルカイザーになったとしても、さっきの約束だけは忘れてほしくない。果たし状もこのために送った。

もし、約束を忘れてしまったなら、その時は…。

「…私が倒す！」

ＳＩＤＥ／俊也

「「……」」

…物凄いデュエルを見てしまった。僕と将人は固まったままだ。

攻撃力１５１７００のトリシューラｖｓ攻撃力２４３７００のサイバー・エンド…どう考えても次元が違いすぎる。月沙ってあそこまで強かったっけ？

「…帰るか」

「…うん、そうだね」

僕と将人は気まずい雰囲気で寮に帰ろうとした。

「あれ、紅刃は？」

「？あいつどこに…」

将人はそこまで言って絶句した。どうしたって…。

「……」

紅刃は物凄い勢いで落ち込んでいた。両手両膝をついて…ネットとかでたまに見る、いわゆる『ｏｒｚ』の状態だ。

「あんなのありかよ…つか勝てるわけねえ…。実力は同じくらいだよな？勝率五分五分だし。あれ？あいつ本当にあんなに強かったっけ？」

「…紅刃、気持ちはよくわかるけど、今日はもう帰るよ？」

「…ああ…」

紅刃がふらりと立ち上がるのを見て、僕達は寮に戻るべく足を動かした。

「…おでん食いたいな…」

「街中だったら付き合ってやるよ」

「僕も」

月沙って、多分この学園の在校生の中で１番強いんじゃないかな？あんなデュエルを見せられたからか、紅刃は遥か彼方まで突き放

されたような気分になってるように見える。ここが街中だったら、迷う事なく屋台に直行してただろうね。いや、お酒は飲まないと思うけど。

「ハァ…」

「新学期からまた頑張ればいいさ」

…将人の言う通りだね。新学期、頑張ろう。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第３７話　いつも実力の１２０％を出し切るつもりで戦え（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「第１期の最後でとんでもないデュエルになっちまったな…」

璃音「デュエルは攻撃力が全てではないわ。でも、あれはさすがに無茶苦茶ね…」

フィレス『グルルゥ…』

勇香「２４３７００か…。これ以上の攻撃力が出るとはとても思えないけどな」

璃音「甘いわよ。デッキには入ってないけど、もしカイザーがドロー加速系のカードを使って《オネスト》を２枚引き当てて使ったら…」

勇香「わかった。その先はもう言うな」

璃音「それじゃ、カード考察に入りましょう。第１期ラストを飾るキーカードは、カイザーこと丸藤亮の切り札（サイバー・エンド・ドラゴン）よ」

《サイバー・エンド・ドラゴン》
融合・効果モンスター
星１０／光属性／機械族／ＡＴＫ４０００／ＤＥＦ２８００
「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」

このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

勇香「攻撃力４０００の貫通効果を持つ融合モンスターだ。切り札に相応しいでかさだな」

璃音「機械族であるおかげで《パワー・ボンド》や《リミッター解除》で攻撃力を底上げできるわ。併用すれば攻撃力は１６０００。攻撃が決まった時は爽快でしょうね」

勇香「融合素材は《サイバー・ドラゴン》３体だ。少し重いけど、《プロト・サイバー・ドラゴン》や《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》なんかが代わりになるからそこまで苦労はしないと思うぞ？」

璃音「反面、《キメラテック・フォートレス・ドラゴン》に吸収される可能性があるわ。そこは注意しておきなさい」

勇香「光属性だから《オネスト》なんかも使えるし、戦闘面なら融合モンスターの中でも最強クラスだろうな」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「第２期もよろしく！次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

はい、攻撃力はやりすぎました。始めは５００００越えを目指してましたが、どうせなら１０００００まで上げようと思い、調整しているとなぜか２０００００を軽く越えてました。どうしてこうなった…？

第１期ラストなのに月沙がメインになってしまいましたが、今後の展開のためにどうしても月沙と亮をこのタイミングでデュエルさせなければなりませんでした。第２期は紅刃もちゃんと活躍させます。

今回月沙が使用した《氷結界の妖精》と《冬の忘れ物　レティ・ホワイトロック》はＨＩＲＯさんが、《幻影波氷魔　ミラージュ・コールダー》はＡＳＡさんが投稿してくださったオリカです。ＨＩＲＯさん、ＡＳＡさん、ありがとうございます。

さて、いよいよ第２期です。これからもこの小説をよろしくお願いします。

では、また次回！

特別編　大空からの来訪者（前書き）

長らくお待たせしました。今回はウイングさんの『遊戯王ＧＸ＆amp;リボーン～騎士を従えしマフィアのボス～』とのクロスオーバーです。おまけコーナーも特別ゲストがいるので、是非ご覧ください。

それではどうぞ！

特別編　大空からの来訪者

ＳＩＤＥ／紅刃

ピンポーン…

呼び鈴が鳴ったのを聞いて、俺は丁度読み終えたばかりの本を置いてドアに向かった。

「は～い…あ、月沙か」

「紅刃、またデュエルの相手をしてほしいんだけど…」

「わかった。まあ、とりあえず入れ」

「うん、お邪魔します」

来たのはいつも通り月沙だった。とりあえず部屋に入れる。

「あれ？この本って…」

月沙はさっき俺が床に置いた本を拾った。

「ゴドウィンと戦った時にフォッタが来ただろ？多分あいつの忘れ物だろ。勝手に俺の部屋でくつろいでたし」

「へえ…。これ、私がいた世界にもあったんだよね」

「そうなのか？」

「人気だったな～。向こうでもアニメ化してたし」

その本は、マフィアや死ぬ気の炎がどうのこうのって話の漫画だ。内容も未来に行ったりとかでいろいろぶっ飛んでるけど、炎だけで水やら雷やらを表現できてるのが驚きだ。一応剣も出てくるけど、俺のは漫画の中のキャラとは違って大剣だ。参考にはなるけど真似は難しいな。

「まあ、そのうち取りに来るだ…」

ボォオオン！

「…噂をすれば何とやらってか？」

「やあ、元気にしてる？」

白煙を巻き上げて堂々と不法侵入を果たしたのは、相変わらずの自称神様（笑）だった。

「あ、フォッタ！」

「ヤッホ～。それと紅刃、何度も言うけど僕は神様見習いだからね？」

「勝手に人の心を読むな。用件はこれか？」

「あ、やっぱりここに置きっぱなしだったんだ。ありがと～」

俺は例の本をそいつに手渡した。やっぱりこいつのだったか。

「で、今回の用件だけど…」

「忘れ物を取りに来たんじゃないの？」

「それもあるけどね。前に異世界人とデュエルした事があるでしょ？また異世界人に会ってほしいんだ」

「異世界人？京哉達か？」

「いや、今回は別の人達だよ」

俺と月沙は以前、天界の都合で異世界人に会った事がある。で、俺がその異世界人――京哉とデュエルをした。あいつは本当に強かったな…。

「今回はこの漫画も関係あるんだけどね」

「は？」

「それが？」

この漫画っていうのは、さっき俺が渡したばかりの奴だ。

「どういう事？」

「おい、お前まさか…」

「？」

「俺達に真６〇花と戦えと…」

「違うよ。断じて違うから安心して」

「そうか。ならよかった」

さすがにあんな『人間やめました』みたいな連中とはリアルファイトしたくねえよ。俺達マフィアじゃないし。

「今回もデュエルしてもらうよ。デッキの準備よろしく」

「もう調整は済んでるから大丈夫」

「俺もいつでも行けるぞ」

「それなら大丈夫だね。じゃ、出発するよ。いざ、無限の彼方へ！」

「バ〇かお前は」

俺のツッコミを合図に、背景が真っ白になった。

視界が晴れると、俺達はいつぞやの森の広場に立っていた。

「連れてきたよ～」

「…来たか」

もう相手は呼んでるみたいだな。一体どんな奴が…。

「「…は？」」

一瞬思考が止まった。いや、おかしいだろ。何？こいつらも未来人？

「おいてめえら、初対面の人間に『は？』ってどういう事だ？」

「いや、どういう事って言われても…」

「ごめん、ちょっと予想の斜め上の相手だったから…」

「「？」」

フォッタがさっき言ってた意味がわかった。うん、これは予想外だ。

俺の目の前にいるのは、後ろ髪が長い沢田綱吉と髪が黒い獄寺隼人だった。

どう見ても１０代目とその右腕の血縁者だろ。それぐらい似ている。ちなみに２人共オシリス・レッドの制服を着ている。伏せ字はどうしたって？ここまで来ると伏せるのめんどい。

「とりあえず、みんな自己紹介よろしく」

フォッタの誘導で俺達は自己紹介を済ませる事に。まあ、当然の

流れだな。

「俺から行くか。俺は真川紅刃だ」

「私は波星月沙。よろしく」

「ああ、よろしく。俺は沢田綱宗」

思いっ切りどこかで聞いたような名前だな。

「俺は獄寺勇斗だ。てめえら11代目に手を「出さねえから」」

お前もか。てかこいつ今『11代目』とか言わなかったか？

「綱宗は沢田綱吉の義理の息子で、ボンゴレファミリー11代目候補なんだって」

「やっぱりね…。義理にしてはよく似てるけど」

「やっぱり父さん達を知っているんだな」

「やっぱりって？」

「このチビに漫画を見せられたからな」

「チビ言うな！で、見せたのがこれ」

フォッタが取り出したのは、俺がさっき読んでた奴とは別の巻数の漫画だった。説明する手間が省けたから助かる。

「じゃあ、勇斗君は？」

「獄寺隼人の息子」

「義理じゃなくて？」

「義理じゃねえよ。実の息子だ」

「え、あいつ結婚できたのか？」

「何気に失礼な事言ってんじゃねえよ」

おっと、勇斗に睨まれた。本当に獄寺とそっくりだな。

「そういえば、お前達のその服は何だ？アカデミアの物にしては見ないタイプだ」

「ああ、これか？ちょっと訳があってな。こんな服装だけど、俺達は両方ブルーだ」

「月沙はともかく、紅刃はとてもそうには見えないな…」

「まあ、上着に青の要素なんてないからな」

やっぱみんな服装に違和感を感じるのな。俺の上着は黒い生地に赤いライン。中には赤いシャツを着ている。藍色のズボンだけでブルーだとわかる奴はまずいない。

「それじゃ、デュエルと行こうか。今回はタッグデュエルだよ」

「だから2人ずつ呼んだのか」

「頑張りましょう、１１代目！」

「ああ」

「あ、組み合わせはくじ引きで決めるから」

「は？」

フォッタが取り出したのは…ってあいつの懐は四次元ポ〇ットか？とにかく、棒を４本取り出した。

「同じ色でタッグになるよ。さ、引いた引いた」

タッグか…。俺としては、１番馴染んでるから月沙がいいんだけど、綱宗や勇斗とも組んでみたいしな…。ま、なるようになるだろ。

「（くじ引き…。俺は誰とでもいいけどな）」

「（やっぱり紅刃とがいいな…）」

「（１１代目と組むのは俺だ！誰にも任せねえ！）」

…約１名オーラが違う奴がいるけど無視しよう。

俺達はそれぞれ棒をつまみ、一斉に引いた。

「俺のは…赤か」

「俺も赤だ」

俺は綱宗とのタッグか。

「私と勇斗君は白だね」

「何でだあああぁあああぁあああああ！！？」

激しく落ち込む勇斗。正にこの世の終わりと言わんばかりの絶望っぷりだ。そこまで落ち込む事か？

「はいはい、文句言わない！それじゃ、準備して」

俺達はデュエルをするべく距離を取った。勇斗は渋々だけどな。

「ちっ、何で１１代目以外の奴と…」

「考えてる事は予想通りだけどそこまで嫌な顔しないで、傷つくから」

「…大丈夫かあいつ？」

「慕ってくれるのは嬉しいんだけど…。勇斗、やるからには手加減なしだ」

「…はい。１１代目がそう言うのなら…」

「あれ？手加減する気だったの？」

「とりあえず始めるぞ」

俺の言葉を合図にして、全員デュエルディスクを展開させた。

「さっきから気になっていたけど、それはデュエルディスクだったのか」

「武器の形をしたデュエルディスクか。珍しいな」

まあ、剣と銃のディスクなんて滅多に見かけないだろ。

「知り合いに作ってもらったの。専ら護身用」

「ん？何だその機能？」

勇斗が指を差したのは、自動でシャッフルされる月沙のデッキだ。

「自動シャッフル機能。紅刃のにも付いてるよ」

「異世界ってのは便利な機能があるんだな」

そんなこんなで、俺達はようやく準備を終えた。

「ライフポイント、フィールド、墓地、除外したカードは全て共有。伏せカードを発動できるのはセットしたプレイヤーのみ。ライフは４０００から。順番はさっきコインで決めたけど、勇斗→紅刃→月沙→綱宗で。Ｓｉｅｔｅ　ｐｒｏｎｔｉ？」

「何でイタリア語？」

「ボンゴレがイタリアのファミリーだから」

「まあ、いいか。紅刃、よろしくな」

「ああ、全力で行こうぜ！」

「勇斗君、頑張ろう！」

「仕方ねえな。こうなったらやけだ！」

「あはは…（大丈夫かな…？）」

「「「「デュエル！」」」」

紅刃＆綱宗ｖｓ月沙＆勇斗

「俺のターン、ドロー！俺は《ジェネティック・ワーウルフ》を召喚！」

腕が４本ある、攻撃力２０００の獣戦士。効果はないけど、厄介だな…。

《ジェネティック・ワーウルフ》

通常モンスター

星４／地属性／獣戦士族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ　１００

遺伝子操作により強化された人狼。本来の優しき心は完全に破壊され、闘う事でしか生きる事ができない体になってしまった。その破壊力は計り知れない。

《ジェネティック・ワーウルフ》　ＡＴＫ／２０００

「そして永続魔法《神聖なる森》を発動！俺達の植物・獣・獣戦士族は1ターンに1度戦闘では破壊されない！」

あれって俺達の時代のカードじゃねえか。やっぱ勇斗や綱宗も未来人なのか？いや、向こうじゃカードの種類が少し違うのかもしれないな。

《神聖なる森（スピリチュアル・フォレスト）》
永続魔法
自分フィールド上に表側表示で存在する植物族・獣族・獣戦士族モンスターは、1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。
この効果は1ターンに1度しか適用できない。

「このままターンエンドだ！」

月沙&勇斗
ＬＰ／４０００
手札（月沙）／５
手札（勇斗）／４
モンスター／《ジェネティック・ワーウルフ》（ＡＴＫ／２０００）
魔法・罠／《神聖なる森》

伏せカードはなしか。効果破壊できれば何とかなるか？

「俺のターン！モンスターをセット！カードを2枚セットしてターンエンド！」

紅刃&綱宗
ＬＰ／４０００
手札（紅刃）／３

手札（綱宗）／5
モンスター／リバース×1
魔法・罠／リバース×2

「私のターン！《氷結界の軍師》を召喚！」

《氷結界の軍師》　ＡＴＫ／１６００

「軍師の効果発動！手札から氷結界のモンスター1体を墓地に送り、カードを1枚ドローする！《氷結界の破術師》を墓地へ！」

「氷結界？（知らないカテゴリだ…。あれが異世界のカードなのか？）」

破術師は月沙がシンクロ素材やコストに重宝しているモンスターだ。いきなり墓地に行ったとなると、厳しいな。

「バトル！《ジェネティック・ワーウルフ》でモンスターに攻撃！ええっと…攻撃名何？」

「考えてねえ」

攻撃名を言われる事なく、《ジェネティック・ワーウルフ》は俺が伏せたモンスターを殴り付けた。

「こいつは《マシュマロン》だ！戦闘では破壊されない！」

《マシュマロン》　ＤＥＦ／　５００

「うわ、嫌なのが来た…」

「裏側表示で攻撃された時、相手に１０００ポイントのダメージを与える！」

《マシュマロン》が口から光弾を吐き出し、月沙にぶつけて反撃した。

「くぅ…！」

月沙＆勇斗　ＬＰ／４０００→３０００

「…カードを2枚セットしてターンエンド！」

月沙＆勇斗
ＬＰ／３０００
手札（月沙）／３
手札（勇斗）／４
モンスター／《ジェネティック・ワーウルフ》（ＡＴＫ／２０００）
《氷結界の軍師》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／《神聖なる森》リバース×２

「俺の番か。行くぞ！俺のターン！」

さて、綱宗はどんな戦い方をするのやら…。

「手札から《Ｄ．Ｄ．アサイラント》を召喚！」

大剣を持つ暗殺者。確か、除外系の効果を持っていたはずだ。

《Ｄ．Ｄ．（ディー ディー）アサイラント》

効果モンスター
星４／地属性／戦士族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ１６００
このカードが相手モンスターとの戦闘によって破壊された時、そのモンスターとこのカードをゲームから除外する。

《Ｄ．Ｄ．アサイラント》　ＡＴＫ／１７００

「さらに永続魔法《勇気の旗印》を発動！俺達のターンのバトルフェイズ時、俺達のモンスターの攻撃力は２００ポイントアップする！」

《勇気の旗印（はたじるし）》
永続魔法
自分フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターは、自分のバトルフェイズ中のみ攻撃力が２００ポイントアップする。

「バトル！《Ｄ．Ｄ．アサイラント》で《ジェネティック・ワーウルフ》を攻撃！《Ｄ．Ｄ．アサイラント》が戦闘で破壊された時、戦闘を行った相手モンスターとこのモンスターを除外する！」

《Ｄ．Ｄ．アサイラント》　ＡＴＫ／１７００→１９００

《ジェネティック・ワーウルフ》が応戦すると、《Ｄ．Ｄ．アサイラント》は大剣を突き刺して自分ごと相手を除外した。

紅刃＆綱宗　ＬＰ／４０００→３９００

「《神聖なる森》の効果で《ジェネティック・ワーウルフ》は１ターンに１度だけ戦闘で破壊されない。そこで、破壊ではなく除外する事で《ジェネティック・ワーウルフ》を除去し、戦闘ダメージは

《勇気の旗印》で軽減する。さすがです、１１代目！」

《勇気の旗印》は未来じゃマイナーだけどな。ちょっとした戦闘補助程度に考えとけばいいだろ。

「ターンエンドだ」

紅刃＆綱宗
ＬＰ／３９００
手札（紅刃）／３
手札（綱宗）／４
モンスター／《マシュマロン》（ＤＥＦ／　５００）
魔法・罠／《勇気の旗印》リバース×２

「俺のターン！フィールド魔法《森》を発動！昆虫・植物・獣・獣戦士族モンスターの攻撃力は２００ポイントアップする！」

フィールドは特に変わらない。ここ自体が森だからだ。

《森》
フィールド魔法
全ての昆虫・植物・獣・獣戦士族モンスターの攻撃力と守備力は、２００ポイントアップする。

「そして、《幻獣ワイルドホーン》を召喚するぜ！」

次にフィールドに出たのは鹿みたいな獣戦士だ。

《幻獣（げんじゅう）ワイルドホーン》
効果モンスター

星４／地属性／獣戦士族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ　０
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

《幻獣ワイルドホーン》　ＡＴＫ／１７００→１９００

「こいつは貫通効果を持つモンスターだ！ワイルドホーンで《マシュマロン》を攻撃！」

《マシュマロン》がでかい角で突き上げられる。貫通持ちのモンスターが来るとはな…。

紅刃＆綱宗　ＬＰ／３９００→２５００

「《氷結界の軍師》を守備表示にしてターンエンドだ！」

《氷結界の軍師》　ＡＴＫ／１６００→ＤＥＦ／１６００

月沙＆勇斗
ＬＰ／３０００
手札（月沙）／３
手札（勇斗）／３
モンスター／《氷結界の軍師》（ＤＥＦ／１６００）《幻獣ワイルドホーン》（ＡＴＫ／１９００）
魔法・罠／《神聖なる森》《森》リバース×２

「勇斗君、《おろかな埋葬》とか《手札断殺》とか入れてないの？」

「そんなカード入れてねえよ」

「え、【幻獣】使いなのに！？」

「俺のデッキは獣戦士族中心の【ビースト】だ！」

幻獣はよく知らないけど、墓地で効果を発揮するモンスターでもいるのか？何にせよ、さっさとワイルドホーンと軍師を片付けないとな…。

「俺のターン！」

お、これなら…。

「魔法カード《光神化》！手札の天使族モンスター１体を攻撃力を半分にして特殊召喚する！《智天使ハーヴェスト》を特殊召喚！」

青白く光る智天使がフィールドに踊り出る。

《智天使ハーヴェスト》　ＡＴＫ／１８００↓　９００

「そして、チューナーモンスター《ハネワタ》を召喚！」

続けて俺が出したのは、翼を生やした丸い黄色の天使だ。

《ハネワタ》　ＡＴＫ／　２００

「チューナーモンスター！？」

「まさか、シンクロ召喚か！？」

「あれ？２人共シンクロ召喚を知ってるの？」

意外だ。綱宗と勇斗が着ている制服は過去の時代の物。その時代にチューナーモンスターとシンクロモンスターがあるとは思えない。

「ペガサス会長が俺に特別に託してくれた試作段階のカードがある。それがチューナーとシンクロモンスターなんだ」

「会長が直接ね…。俺達の方じゃ普通に出回ってるけどな」

「何！？…いや、異世界ならありえるな…」

「そういうわけだ。そして、こいつが異世界のシンクロモンスターだ！レベル３《マシュマロン》とレベル４《智天使ハーヴェスト》にレベル１《ハネワタ》をチューニング！」

《ハネワタ》が１つの黄色の輪になり、その中に２体の天使が飛び込む。

「舞い散る白羽が、天空を翔け現世を照らす！希望の光を振り翳せ！」

☆３＋☆４＋☆１＝☆８

「シンクロ召喚！飛来せよ！《ライトエンド・ドラゴン》！！」

４枚の天使の翼を広げた白銀の聖龍。今じゃ俺のエースモンスターの１体だ。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「何だありゃ!?」

「《ライトエンド・ドラゴン》…」

「バトル!ライトエンドで…」

「ちょっと待った!リバース発動《手札断札》!」

は?このタイミングで?

「(使うかどうか迷ったけど、ここは懸ける!)互いに手札を2枚捨てて、カードを2枚ドローする!」

とりあえず、俺達4人は手札交換をした。何を狙ったのかはわからないけど、ここは攻めるだけだ!

「改めて行くぜ!ライトエンドでワイルドホーンに攻撃!シャイニングサプリメイション!」

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００→２８００

ライトエンドが光の束を吐き出し幻獣にぶつける。

「…ん?」

《幻獣ワイルドホーン》　ＡＴＫ／１９００→２２００

「攻撃力が上がっている?」

「たった今手札から捨てた《幻獣クロスウィング》の効果だ！こいつが墓地にいる時、俺の幻獣は攻撃力が３００ポイントアップする！」

《幻獣クロスウィング》
効果モンスター
星４／光属性／獣戦士族／ＡＴＫ１３００／ＤＥＦ１３００
このカードが墓地に存在する限り、フィールド上に存在する「幻獣」と名のついたモンスターの攻撃力は３００ポイントアップする。

月沙、まさかそれを狙って…。

「そして、もう1枚がこいつだ！《幻獣サンダーペガス》の効果発動！」

勇斗が効果を言う前に攻撃が直撃して爆発が起こった。

「やったか？」

「いや、駄目だな」

砂埃が晴れると、月沙と勇斗のフィールドは特に何も変わってなかった。

「サンダーペガスを墓地から除外する事で、幻獣1体の戦闘破壊を無効にして戦闘ダメージを0にする！」

《幻獣サンダーペガス》
効果モンスター
星４／光属性／獣戦士族／ＡＴＫ　７００／ＤＥＦ２０００

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、自分フィールド上に存在する「幻獣」と名のついたモンスター1体が受ける戦闘ダメージを0にする。
この時そのモンスターは戦闘によって破壊されない。

「墓地肥やしのカードくらいデッキに入れといてよね」

「悪かったな…。いいじゃねえか、結果オーライなんだし」

「仲が良いんだか悪いんだか…。このままターンエンドだ」

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２８００→２６００

紅刃＆綱宗
ＬＰ／２５００
手札（紅刃）／１
手札（綱宗）／４
モンスター／《ライトエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／《勇気の旗印》リバース×２

なかなか攻めづらいな。ワイルドホーンは《神聖なる森》で1ターンに1度まで戦闘じゃ破壊されないし…。

「私のターン！魔法カード《強欲な壺》！カードを2枚ドローする！そしてチューナーモンスター《デブリ・ドラゴン》を召喚！」

《デブリ・ドラゴン》　ＡＴＫ／１０００

《デブリ・ドラゴン》を出したって事は…来るな…！

「《デブリ・ドラゴン》が召喚に成功した時、自分の墓地から攻撃力５００以下のモンスター１体を特殊召喚する！墓地から《氷結界の破術師》を特殊召喚！」

《氷結界の破術師》　ＡＴＫ／　４００

「レベル３《氷結界の破術師》にレベル４《デブリ・ドラゴン》をチューニング！封印されし神の槍が、冷気を携え天を突く！秘めたる力を解き放て！」

☆３＋☆４＝☆７

「シンクロ召喚！貫け！《氷結界の龍　グングニール》！」

光の柱から赤みを帯びた氷龍が現れ、フィールドに冷気を振り撒く。

《氷結界の龍　グングニール》　ＡＴＫ／２５００

「月沙もシンクロモンスターを使うのか！」

「グングニールの効果発動！手札を２枚まで捨て、捨てた枚数分相手のカードを破壊する！」

「何！？」

「手札を２枚墓地に送り、《ライトエンド・ドラゴン》とリバースカード１枚を破壊する！アイス・ウィンド！」

グングニールが起こした吹雪がライトエンドとリバースカードに襲い掛かり、ずたずたに切り裂いた。リバースカードは《トラップ・ジャマー》だ。

「くそ…！」

「バトル！グングニールでダイレクトアタック！フリージング・ジャベリン！」

「カウンター罠《攻撃の無力化》！攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる！」

槍に似た氷の息吹を、異次元の穴が全て吸い込んでいく。

「なら、ここで発動させても大丈夫だよね。リバースカードオープン、《スタイルチェンジ》！墓地のモンスター１体を除外してモンスター１体に装備し、除外したモンスターのレベル１つにつき攻撃力と守備力を２００ポイントアップさせる！」

《スタイルチェンジ》
通常罠（オリジナル）
自分の墓地に存在するモンスター１体を除外して発動する。
発動後このカードは装備カードとなり、自分フィールド上に存在する融合モンスターまたはシンクロモンスター１体に装備する。
装備モンスターの攻撃力・守備力は除外したモンスターのレベル×２００ポイントアップする。
装備モンスターが融合モンスターの場合はシンクロモンスター、シンクロモンスターの場合は融合モンスターとして扱う。

「除外したのはレベル８《氷結界の虎将　ガンターラ》！グングニ

ールに装備し、攻撃力を１６００ポイントアップさせる！」

《氷結界の龍　グングニール》　ＡＴＫ／２５００→４１００

「そして、装備モンスターがシンクロモンスターの場合、装備モンスターを融合モンスターとして扱う！カードを2枚セットしてターンエンド！」

月沙＆勇斗
ＬＰ／３０００
手札（月沙）／０
手札（勇斗）／３
モンスター／《氷結界の軍師》（ＤＥＦ／１６００）《幻獣ワイルドホーン》（ＡＴＫ／２２００）《氷結界の龍　グングニール》（ＡＴＫ／４１００）
魔法・罠／《神聖なる森》《森》《スタイルチェンジ》リバース×２

「それじゃ、綱宗、頼んだ！」

「任せろ！俺のターン！《強欲な壺》を発動！カードを2枚ドロー！」

ここで綱宗も使うのか。この状況をどう覆す？

「よし！魔法カード《ライトニングボルテックス》！手札を1枚捨て、相手の表側表示のモンスターを全て破壊する！」

お、全体除去か！これなら攻撃力が跳ね上がってようが戦闘で破壊されなかろうが、関係なく破壊できる！

「そうはさせない！カウンター罠！自分フィールド上の融合モンスターを除外して、魔法・罠・特殊召喚を無効にして破壊する！」

《パラドックス・フュージョン》
カウンター罠
自分フィールド上に表側表示で存在する融合モンスター1体をゲームから除外して発動する。
魔法・罠の発動、モンスターの特殊召喚のどれかを無効にして破壊する。
発動後2回目の自分のエンドフェイズ時に、このカードを発動するために除外したモンスターを表側攻撃表示でフィールド上に戻す。

「《スタイルチェンジ》で融合モンスター扱いになっているグングニールを除外して、《ライトニング・ボルテックス》を無効にする！」

巨大な雷の渦が氷龍と共に消え去った。《スタイルチェンジ》を使ったのはこのためか…！

「く…仕方ないか。魔法カード《死者蘇生》！墓地から《無敗将軍フリード》を特殊召喚する！」

歴戦を勝ち抜いてきた、貫禄のある将軍が蘇る。

《無敗将軍　フリード》
効果モンスター
星5／地属性／戦士族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ１７００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードを対象にする魔法カードの効果を無効にし破壊する。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分のドロ

ーフェイズ時に通常のドローを行う代わりに、自分のデッキからレベル４以下の戦士族モンスター１体を手札に加える事ができる。

《無敗将軍　フリード》　ＡＴＫ／２３００

「そして、チューナーモンスター《光の騎士（ライト・ナイト）》を召喚！」

ええと…金色の《ミスティック・ソードマン　ＬＶ２》か？盾持ってるけど。

チューナー（効果モンスター・オリジナル）
星２／地属性／戦士族／ＡＴＫ　１５０／ＤＥＦ　０
このカードは戦闘では破壊されない。
このカードが相手に直接攻撃をする場合、攻撃力は２倍になる。

いや、それより気になるのは、俺達の世界にないチューナーだって事だ。にしても、攻撃力１５０なんて変に中途半端だな。

「行くぞ！レベル５《無敗将軍　フリード》にレベル３《光の騎士》をチューニング！聖なる心が集いしとき、邪を浄化する龍となる！聖なる光を今ここに！」

☆５＋☆３＝☆８

「シンクロ召喚！飛翔せよ！《セイントドラゴン》！！」

金色の翼に白銀の体。ライトエンドとはまた違ったタイプの光のドラゴンだ。

《セイントドラゴン》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星８／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ２４００
バトルフェイズ開始時、手札を２枚捨てて発動する事ができる。
このカードはバトルフェイズ終了時まで相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
１ターンに１度、自分の墓地のモンスター１体を除外する事で、相手の魔法・罠カードの発動を無効にして破壊する。

《セイントドラゴン》　ＡＴＫ／２４００

「これが綱宗君のエースモンスター…！」

「《セイント・ドラゴン》の効果発動！手札を２枚捨てる事で、このターン直接攻撃ができる！」

「ええ！？」

「《セイントドラゴン》でダイレクトアタック！セイントブレイカー！」

《セイントドラゴン》　ＡＴＫ／２４００→２６００

《セイントドラゴン》が双翼で銀色のエネルギー弾を作り出し、ビームとしてぶっ放した。それはモンスターを通り越して月沙達に命中する。

「うわぁっ！くぅ…！」

「っきしょぉ…！」

月沙＆勇斗　ＬＰ／３０００→　４００

「無理矢理直接攻撃を決めるとはな…」

「これがこいつの力だ！ターンエンド！」

《セイントドラゴン》　ＡＴＫ／２６００→２４００

紅刃＆綱宗
ＬＰ／２５００
手札（紅刃）／１
手札（綱宗）／０
モンスター／《セイント・ドラゴン》（ＡＴＫ／２４００）
魔法・罠／《勇気の旗印》

「俺のターン！…くそ、生け贄が足りねえ…！」

「…！」

勇斗が何か呟いたように見えた。何を言ったかまでは聞き取れなかったけどな。

「永続罠（リミット・リバース）！墓地の攻撃力１０００以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚する！」

《リミット・リバース》
永続罠
自分の墓地から攻撃力１０００以下のモンスター１体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。

そのモンスターが守備表示になった時、そのモンスターとこのカードを破壊する。
このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「何!?」

「（まずい!）《セイントドラゴン》の効果発動!1ターンに1度、墓地のモンスター1体を除外する事で魔法・罠の効果を無効にして破壊する!《無敗将軍　フリード》を除外して《リミット・リバース》を無効にする!イレイズブレイク!」

翼から放たれた金色の鎌鼬（かまいたち）が、月沙が発動させたばかりの《リミット・リバース》を切り裂いた。

「う…ごめん、勇斗君。モンスターを並べられなくて…」

「お前、俺の狙いがわかって…」

「ぶつぶつ言ってたでしょ?答えは『あれ』しかないよね…?」

「勘がいい奴だな。…だが、《セイントドラゴン》に効果を使わせたんだ。充分やってくれたぜ!魔法カード《死者蘇生》!墓地の《氷結界の破術師》を特殊召喚!」

《氷結界の破術師》　ＡＴＫ／　４００

「どのみち駄目だったか…!」

「そして、ワイルドホーン、軍師、破術師を生け贄に捧げる！」

３体のリリース…俺もやっと理解できた。これってかなりやばくないか…？

「現れろ！《神獣王バルバロス》！！」

赤い槍に青い盾。上半身がライオン型の獣人で、下半身が黒い４足の馬みたいになっているモンスター。予想通りだ。

《神獣王（しんじゅうおう）バルバロス》
効果モンスター
星８／地属性／獣戦士族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ１２００
このカードはリリースなしで通常召喚する事ができる。
この方法で通常召喚したこのカードの元々の攻撃力は１９００になる。
また、このカードはモンスター３体をリリースして召喚する事ができる。
この方法で召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカードを全て破壊する。

《神獣王バルバロス》　ＡＴＫ／３０００→３２００

「バルバロスの効果発動！３体の生け贄で召喚に成功した時、相手フィールド上のカードを全て破壊する！」

バルバロスが咆哮し、《セイントドラゴン》と《勇気の旗印》がそれに耐え切れず崩壊していった。

「これで決めるぜ！《神獣王バルバロス》でダイレクトアタック！

トルネード・シェイパー！！」

暴風を纏った槍が俺達に迫る。くそ、ここまでか…！？

「墓地の《ネクロ・ガードナー》の効果発動！このカードを除外して、相手モンスター1体の攻撃を無効にする！」

モンスターの幻影がバルバロスの幻影を真正面から受け止める。

月沙の《手札断札》で墓地に送っていたのか…。

「このターンはここまでか。ターンエンドだ！」

月沙&勇斗
ＬＰ／４００
手札（月沙）／０
手札（勇斗）／２
モンスター／《神獣王バルバロス》（ＡＴＫ／３２００）
魔法・罠／《神聖なる森》《森》

何とか凌げたけど、フィールドには何もない。バルバロスをどうにかしないとどうしようもない。

ここで逆転のカードを引かないと負ける。頼んだぜ、俺のデッキ…！

「俺のターン！！」

引いたのはこいつか…。駄目だ、これじゃ時間稼ぎにしか…。

…いや、待てよ？確か綱宗が墓地に送ったカードは…。

「紅刃…？」

「どうした？」

「このデュエル…俺達の勝ちだ！」

「え？」

「永続魔法《神の居城－ヴァルハラ》を発動！相手のフィールドにだけモンスターがいる時、1ターンに1度手札から天使族モンスター1体を特殊召喚できる！」

「ここでヴァルハラ！？」

「こいつの効果で手札から《裁きを下す者－ボルテニス》を特殊召喚する！」

『ようやく出番か！』

モンスターの姿に変身したリーシェが現れる。やっぱり相棒はこ1番で頼りになる。

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００

「（モンスターが喋った…？）」

「だが、攻撃力はバルバロスが上だぜ？」

「このままならな」

「…！（なるほど、そういう事か…！）」

「これはタッグデュエル！お前らがやってたように、パートナーとの連携が勝利への鍵だ！綱宗！」

「ああ！墓地から罠カード《スキル・サクセサー》を発動！」

「何！？墓地から罠だと！？」

「あ、それは…！？」

「このカードを墓地から除外する事で、自分のモンスター１体の攻撃力を８００ポイントアップさせる！」

《スキル・サクセサー》
通常罠
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。
このターンのエンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は４００ポイントアップする。
また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、自分

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで８００ポイントアップする。この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動する事ができず、自分のターンのみ発動する事ができる。

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００→３６００

「そんなカード、いつの間に…？」

「…まさか、１１代目の《セイントドラゴン》で！？」

「ああ。直接攻撃の時のコストとして手札から墓地に送った」

あの時、たまたま《スキル・サクセサー》が墓地に送られるのが見えたから、迷いなくリーシェをフィールドに出す事ができた。

「ダメージは４００、私達のライフも丁度４００。伏せカードもないし、墓地から発動するカードもない」

『決まったようだな』

「（それじゃ、締めは頼むぜ！）バトル！《裁きを下す者－ボルテニス》で《神獣王バルバロス》に攻撃！ボルティ・ジャッジライト！！」

『終わりだ！』

リーシェの杖から白い電撃が放たれ、神獣王の盾と土手っ腹を一直線に貫いた。

「うあぁっ！」

「ぐわぁぁっ！」

月沙＆勇斗　ＬＰ／　４００→　０

紅刃＆綱宗　ＷＩＮ

「やったな、紅刃！」

「綱宗もナイスアシスト！」

俺達の勝利が決定した後、俺と綱宗は互いに拳をぶつけて健闘を称えた。

「さすがです、１１代目！」

「まさか《スキル・サクセサー》を墓地に送ってたなんてね…」

月沙と勇斗もこっちに来た。こいつらも何だかんだでチームプレーができてたな。

「墓地肥やしって本当に便利だよね」

「墓地が関係するカードが多いからな。勇斗もデッキを改善する必要がある」

「まあ…帰ったらそれ関係のカードを探しておきますよ」

俺もまたデッキを調整しなくちゃな。【パーミッション】はバラ

ンスが難しいから調整１つでも苦労する。どうすっかな…？

「みんなありがとう。いいデュエルだったよ」

観戦していたフォッタも来た。て事はそろそろだな。

「礼を言うのはこっちの方だ。おかげで楽しい時間を過ごせた」

「どういたしまして」

綱宗が代表して礼を言ってくれた。率先してやるあたり、やっぱりボンゴレのボス候補なんだな。

「さて、そろそろ時間だね。みんなを元の場所に帰すよ」

フォッタが握り拳を開くと、いつぞやの黄色い球体があった。またそれで転送するつもりか。

「そろそろお別れだな」

「時間が経つのは随分早いな」

「それだけ熱中してたって事だよ。本当に楽しかった」

「否定はしねえよ。月沙、もうないだろうが…次に会った時は俺と戦え！当然１ｖｓ１でだ！」

「うん。その時は負けないよ！」

一旦チームメイトになると何かしら親近感が沸くもんだ。勇斗も

例外じゃないみたいだな。

「紅刃、今日は君と一緒にデュエルできてよかった。もしボンゴレを訪れる事になったら、いつでも歓迎するよ」

「リアルファイトはごめんだけどな。ま、次に会ったらまたデュエルしような！」

「ああ！」

視界が真っ白になる。最後の会話はそれで終わりになった。

視界が晴れると…って行く時と同じ表現だな。とにかく、俺と月沙は俺の部屋に無事戻ってきた。

「…戻ってこれたみたいだな」

「うん。…あ！」

「どうした？」

「もう夕食の時間だ」

壁掛けの時計を見ると、針はいつもの夕食の時間１０分前を指していた。

「やばいな。急ぐか！」

「夕食抜きは厳しいからね。たまにはブルーにも行ってみない？」

「それもそうだな。よし、行くか！」

俺と月沙は部屋を出て食堂へと走り出した。

「あら？珍しいわね、あなた達がここに来るなんて」

時間丁度で食堂に入ると、明日香にジュンコ、ももえと会った。

同じブルーなんだし当然か。

「たまにはいいと思ってな」

「今日のメニューは何？スパゲッティみたいだけど」

3人の皿にはスパゲッティが乗っている。俺はミートソースが好きなんだけどな…。

「ボンゴレスパゲッティですわ」

「「え？」」

「どうしたんですか？」

「あはは…何でもないよ」

何ちゅう偶然だ。別れて１０分後にボンゴレに遭遇するとは…。

「苦手なの？」

「いや、１度も食べた事はないな。んじゃ、試しに食ってみるとするか」

俺はトレーと食器を取って生徒の列に並んだ。月沙も俺に続く。

ボンゴレか…。デュエル以外で戦うのは嫌だとは言ったけど、山本と手合わせしてみるのも悪くないな。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

特別編　大空からの来訪者（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「今回のキーカードの時間よ。クロスオーバーという事で特別ゲストを招待してるわ」

フィレス『グルルッ』

勇香「『遊戯王ＧＸ＆amp;リボーン～騎士を従えしマフィアのボス～』から、今回活躍した沢田綱宗と獄寺勇斗、それから…え？何で十代？」

十代「俺だけ疑問形かよ！？」

璃音「２人共お疲れ様。デュエルの感想をどうぞ」

綱宗「感想？そうだな…。デュエルをしていて、素直に楽しめたな。違う世界の人間とやったというのもあるけど、タッグデュエルならではの駆け引きが面白い」

勇斗「月沙は俺の考えをきっちり読み取ってやがった…。生け贄が足りないって言っただけでバルバロスが手札にあるなんて普通わかるか？」

勇香「あいつはカードの知識が豊富だからな。バルバロスを知ってもおかしくないだろ？」

璃音「あなたが使ったのはほとんどが獣戦士族。種族から読み取ったんでしょうね」

勇香「ところで、十代が指にはめてるそれに強烈な違和感を感じるんだが…」

十代「ああ、これか？晴れの守護者のボンゴレリングだ。俺はボンゴレの晴れの守護者なんだ！」

璃音「そういうわけだからゲストとして呼んだのよ」

勇香「なるほどな。確かにイメージはピッタリだし…めんどいからツッコむの止そう」

勇斗「それより、さっさとカード考察ってのを始めようぜ」

璃音「それもそうね。今回紹介するのは、勇斗が切り札として使った《神獣王バルバロス》よ」

《神獣王バルバロス》
効果モンスター
星８／地属性／獣戦士族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ１２００
このカードはリリースなしで通常召喚する事ができる。
この方法で通常召喚したこのカードの元々の攻撃力は１９００になる。
また、このカードはモンスター３体をリリースして召喚する事ができる。
この方法で召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカードを全て破壊する。

璃音「レベル８であるのにも関わらず、攻撃力１９００のモンスターとして召喚できる妥協召喚モンスターよ」

綱宗「このおかげで手札に来ても腐りにくい。《禁じられた聖杯》などで１度効果を無効にすれば、攻撃力は３０００に戻る」

勇斗「そして、３体の生け贄で発動できる相手フィールドのカードを全て破壊する効果は気分爽快だぜ！」

十代「生け贄を揃えるまでが大変だけど、特殊召喚を上手く利用すれば簡単に発動できるな！」

璃音「それはどうかしら？特殊召喚を駆使しても、モンスターを３体揃えるのは骨が折れるわ。『帝』を中心としたデッキのギミックとかなら少しはマシになるでしょうね」

勇香「獣戦士族のサポートがあまり多くないのが惜しいな。それを抜きにしても、《アドバンス・ドロー》や《トレード・イン》に対応してるし、《スキル・ドレイン》があればタダで出せる攻撃力３０００のモンスターとして使える。こうして見るとかなり強力なモンスターだな」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「綱宗、勇斗、十代、今日はありがとな！」

綱宗「こちらこそ。また機会があればよろしく頼む」

十代「俺もデュエルしたかったな…」

勇斗「お前はいろいろと駄目だろ。これを読んでるお前ら、『遊戯王ＧＸ＆ａｍｐ;リボーン～騎士を従えしマフィアのボス～』も読んでくれよ！」

勇香「それじゃ、次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

定期考査の関係で更新がだいぶ遅れてしまいました。次は１週間以内に…更新できたらな…。

今回はクロスオーバーという事で、タッグデュエルにしてみました。おかしな箇所がありましたら遠慮なく言ってください。すぐに修正します。

今回コラボをしてくださったウイングさんの『遊戯王ＧＸ＆ａｍｐ;リボーン～騎士を従えしマフィアのボス～』も是非読んでみてください。

では、また次回！

第３８話　どんな奴でも十人十色（前書き）

ついに第２期突入です。レギュラーが増えるのはもちろん、新キャラも登場します。ただ、今回はデュエルなしです。

後書きには重大発表がありますので、後書きも読んでくださると幸いです。

それではどうぞ！

第３８話　どんな奴でも十人十色

ＳＩＤＥ／？？？

「案外でかい島だな…。学園１つでこんなに広く使う必要あるのか？」

目の前には森やら山やら建物やらがある。私達が今いるのは浜辺だ。

「三幻魔っていう危険な3枚のカードの関係でここに建てたんだよ。そのカードはこの島に封印されてるけどね」

前に立つ白髪の子供が説明してくれた。見た目は子供でも、こいつはとんでもパワーを使う神様だ。ついでに言うと、私達をこの時代に転送したのもこいつだ。

「危険がないなら構わないわよ。自然に囲まれてて、気持ちいい場所じゃない」

茶髪の女が話に入ってきた。ものづくりが得意な、私の大切な友達だ。

「ま、地獄じゃなけりゃ何だっていいか。早く校長室に行かないとな」

私達の入学について話があるのと…まあ、私の要望を聞いてほしいってのが１番だけどな。とにかく、今やるべきなのは校長室に行

く事だ。あいつらに会うのはそれからでもいいだろ。

「それじゃ、早く行きま…？」

「？どうし…あり？」

気になって振り返ると、一緒に来たはずのもう1人がいなかった。

「あいつどこ行った？」

「多分、勝手に行動し始めたわね…」

「転送ミスはないからそれで合ってると思う」

「マジかよ！？校長室に行かなきゃいけねえってのに勝手に消えやがって！」

あいつの性格上仕方ないけど、こういう時くらいまとまってだな…ああもう！

「ったく…私はあっちを探すから、そっちを頼む」

「わかったわ」

「問題はないみたいだね」

「ある意味大ありだけどな…。んじゃ、フォッタ、いろいろありがとな」

「また何かあったら連絡するよ。後はよろしく～！」

ボゥウン！

フォッタは白煙を撒き散らして消えた。天界とやらにでも帰ったんだろ。

「フゥ…。璃音、見つけたら連絡してくれ」

「ええ。また後で会いましょう、勇香」

こうして、私達は二手に分かれてもう1人を捜索する羽目になった。

SIDE／紅刃

いつものように森の中を進んでいく。腰には剣型のデュエルディスクを差してある。今じゃだいぶ手に馴染んできた。

目的地は森の中にある広場。草が芝生みたいになっていて、俺がいつも修行に使っている。日当たりがいいから昼寝も気持ちいいし、ベンチ代わりになる岩もある。俺のお気に入りの場所だ。

何で行くのかっていうと、いつも通り修行をするためだ。怠ると腕が鈍るからな。基本的に毎日やっている。

今日は、そうだな…ひたすら素振りでもやるかな。一撃で相手を沈める事ができればかなり楽だ。あ、そろそろ着くな。

「ん…？」

着いたのはいい。日当たりも良好だ。ただ、先客がいた。

月沙や将人、俊也はアビリティの特訓でたまにここを使うけど、いたのは月沙達じゃなかった。

桃色の髪の奴が岩に腰掛けている。髪が長いから多分女子だろ。丁度真後ろを向いてるから、何をしているかはわからない。服は黒い。

とりあえず話し掛けるか。俺はそいつの傍に歩み寄った。

「いやったあああああああ！！」

「！？」

「サブウェ○マスター撃破ぁああ！これでスー○ーマルチ○レイン解禁よ！」

「は…？」

そいつが高々と振り上げた両手にあったのは、画面が上下に2つあって、下の画面がタッチパネルになっているあれだった。ちなみにカラーはピンクだ。

「この調子でガンガン行くわよ！」

「おい」

「次はどんな組み合わせで行こうかな～♪」

「おい！」

「カ○リューは外せないわね。マルチス○イル取るのに苦労したんだし…」

「人の話を聞け！」

「痛っ！？」

聞こえてないみたいだったから、頭を軽くひっぱたいてやった。

「ちょっと、いきなり何すんのよ！？」

「さっきから呼んでるのに気づいてねえからだろ。お前は何やってんだ？」

「見てわからない？ゲームよ」

「それは見ればわかる。何でここでやってんだよ？」

「適当に散歩してたら丁度日当たりがいいここを見つけたから、ひなたぼっこのついでにゲームをやってたのよ。あんたこそここに何か用？」

「俺は剣の修行だ。普段からここでやってる」

「剣の修行？」

「護身術だけどな。あまりやらないと腕が鈍る。で、お前が先にいたから話し掛けてみたってわけだ」

「ふ～ん…。剣って腰に差してるそれの事？」

「ああ。剣型のデュエルディスクだ。デュエルにもリアルファイトにも使える」

「リアルファイトって…。で、何その制服？私が知ってるのと色が違うんだけど」

「訳ありでな。学園の許可も貰ってる」

改めてこいつを見てみる。桃色の長髪で、背が低い赤目の女の子だ。オベリスク・ブルーの制服を着ている。で、俺が１番気になるのが…。

「お前こそ、何だそのマント？」

「え？」

制服の上に羽織っている黒マントだ。ボタンで止めるタイプの。ボタンには何かの模様が刻まれている。

「お前は皇帝ペン〇ン2号のメンバーでも募集してるのか？」

「いや、私サッカーやらないから」

「あれか？鬼〇に憧れて真似でもしてるのか？そのうち眼帯に出くわしそうだな」

「ゴーグルマントと一緒にするんじゃないわよ！それに私は虎〇派よ！タイ〇ードライブかっこいいじゃない！」

「俺はエクス〇リバーが好きだけどな」

「それはあんたが剣をやってるからでしょ！」

イナズ〇イレブンの話についてこれるのか。俊也とは話が合いそうだな。

「これは九条院家のマントよ。父上に強制的に着させられてるの」

「九条院家が何かは知らないけど、お前の父さんはどんな趣味してんだか…」

「家柄を自慢したいんでしょうね。父上は大企業の社長をやってて資産もあるから」

じゃあ、ボタンの模様は家紋か何かか？

「自慢って…。お前も大変だよな、そんなわがまま押し付けられて」

「平気よ。脱ごうにも父上の目がどこで光ってるかわからないし、もう慣れてるから」

「慣れててもいつも家の看板を背負ってるんじゃ疲れるだろ。休む暇あるのか？」

「案外あるわよ。大抵1人だし」

「1人って…」

「…ねえ」

急に真剣な顔になるそいつ。改まってどうした？

「私を嫌わないの？」

「…は？」

「『私はお金持ちです』っていつもアピールしているようなものなのに、非難したりしないの？」

…何かと思えばそんな事か。

「家柄だけで判断するほど俺は落ちぶれたつもりはねえよ。お前にも友達はいるだろ？そいつらはお前を見下すような真似をするのか？」

「…いない」

「？」

「友達なんて、いないわよ」

周りの温度が一気に下がったような気がした。もしかして、地雷踏んだか？

「みんな私が気に食わないのよ。一歩外に出れば悪口に陰口ばかり。金持ちだって事だけで敵対してくるの。友達になってくれる人なんて、私から頼んでもいなかった」

こいつ…。これってもしかして…。

「小さい頃にいろいろ叩き込まれたから、勉強はそれなりにできたわ。それすら悪口のネタにされるだけ。本当に安心できる場所なんて、自分の部屋ぐらいよ」

「誰かに相談しないのか？」

「事が大きくなると父上が学校を買収してくる。そうなったら都合のいいように変えられちゃうわ。学校はみんなの場所なのに、そんなの不公平でしょ？」

そいつはそう言って、背を向けて歩き出した。

「少し愚痴になっちゃったわね。少し気が楽になったわ」

「どこに行くんだよ？」

「私からは離れなさい」

「？」

「わかったでしょ？私と一緒にいたらあんたまで馬鹿にされるわよ。それが嫌で離れていった人だっているの。…これ以上、私に関わるな」

最後の言葉は、やけに力強かった。誰にも迷惑をかけたくないんだろうな。

「……

断る」

それでも、俺は引き下がるつもりなんてない。

「は…？」

そいつは驚いて振り返った。

「あんた、何言ってんのよ？人に馬鹿にされたいの？」

「そりゃあ、されたらムカつくさ。でも、それだけだろ？」

「それだけって…」

「世の中にはな、自分の事を理解しようとする奴が必ずいるんだ。それがたまたま俺だった、それだけの事だ」

「え…？」

驚きっぱなしのそいつに、俺は右手を差し延べた。

「俺が友達になる。ていうか、なってくれ」

そいつは俺を見て固まったままだ。そこまで驚く事か？

「……」

「……あ、拒否権はなしな」

「…は？え、ちょ、ちょっと！？」

このままじゃ埒が明かないから、俺はそいつの手首を引っ張って歩き出した。

「俺の友達にも会わせてやるよ。あいつらはそんな事でお前を馬鹿にするような奴らじゃない。俺が保証する」

「そんな自信どこから出てくるのよ！？人間なんて誰が信用できるかなんてわかったもんじゃないわ！」

「あいつらは俺の大切な仲間だ」

「？」

「一緒にいろいろやってきた。どんな壁だって乗り越えてきた。だからわかるんだよ。あいつらが、家柄や金なんかで軽蔑するような奴らじゃないって事ぐらいな」

あいつらがそんなくだらない理由で人を侮辱するなんてありえない。もしそうだったらぶん殴ってでも更生させてやる。

「…財産目当てって事もあるじゃない」

「ないな。絶対ない、断言できる」

「即答！？」

特に、月沙は似たような境遇だったんだ。仲良くなれないはずがない。

「そういや、名前まだ聞いてなかったな。俺は真川紅刃だ。お前は？」

「…私は…九条院（くじょういん）…」

「キシャアアアア！！」

そいつが名前を言い切る前に、後ろから奇妙な声がした。

「「！？」」

振り返ると…何だありゃ？

まず、どこからどう見ても人間じゃない。２足歩行の黒い虫みたいな奴。そんなのが大体２０体くらいいた。

「何だあいつら！？」

「いつの間に！？てかどこから沸いて来たのよ！？」

「シャアアア！」

そのうちの1体がこっちに襲い掛かってきた。狙いは…九条院か？

腰のデュエルディスクを抜いてぎりぎりで受け止める。こいつは小型で体重が軽いからか、割と簡単に弾き返せた。

「フゥウゥゥ…」

正体はわからないけど、危険な奴らだという事はわかった。九条院をここに置いとくのは都合が悪いな。

「お前は逃げろ！」

「はあ！？」

「数が多すぎるから護り切れる保障はねえ！早く行け！」

アビリティを他人に見られるのはいろいろとまずい。逃げてもらった方が俺としてもやりやすい。

「シャアアァアア！！」

さっきのと同じ奴が何匹も襲い掛かってくる。これだけの数を相手にどこまでやれる…？

ズバババババン！

「…へ…？」

思わず間抜けな声を出してしまった。

襲い掛かってきた奴らは何かに打たれて全員地に落ちた。そして、ソリッドビジョンでモンスターが破壊されるのと同じ感じで消え去った。

ヒュンッ

空気を切るような音を後ろから聞いて振り返る。

「逃げるのはあんたの方よ」

そこには、右手に茶色の鞭を持った九条院がいた。

「お前、その鞭…」

「私が今『創った』のよ。あんたが友達になろうとしてるのはこんな化け物よ。私が怖いんならさっさと逃げなさい。あいつらは私が片付けとくから。いくら剣が強くても、あいつらになまくら1本で敵うとは思えない。いても邪魔よ」

そう言いながら、九条院はゆっくり俺の横を通り過ぎた。敵はそれを見て警戒を強める。

「……怖い？冗談じゃねえ」

「は…？」

「口はきついけど、お前は俺を助けようとしてんじゃねえか」

「そんなわけないでしょ！邪魔なだけよ！」

「その鞭、たった今『創った』んだろ？いつもその鞭で人を助けて、助けた奴は自分を怖がって逃げていく」

「！？」

「そんな事が何回もあったから、自分を『化け物』だなんて言うんだろ？」

「…わかってんじゃないの。そう、私は化け物。この鞭も普通じゃない。あんたみたいなお人よしの一般人とは違うのよ」

「お人よしってのはよく言われるけどな」

九条院の左に並び、デュエルディスクを抜き放つ。

「最初から隠す必要はなかったみたいだな」

「？」

「その能力を使えるからお前が『化け物』だって言うんなら…」

右手に構えたディスクが黄色く光る。

「俺もその『化け物』の1人だ」

直後、俺のデュエルディスクは両刃の剣に変化した。

「な…！？」

ただ、今まで使ってきた大剣と比べると、長さは同じで幅は細い。いろいろ試した結果、刀身はこれくらいの幅の方が1番使いやすかった。というわけで、剣に変える時はこのサイズにしている。まあ、幅が細くなっただけで長さは木刀よりも長めだけどな。

「あ、あんた…それって…」

「説明は後だ。先にこいつらを片付けるぞ！」

俺は両手で柄を持って、敵の1体に突っ込んでいった。

狙いの奴も攻撃を仕掛けるべく前に出たけど、遅い。横に凪いで胴体を斬り裂くと、すぐにお陀仏した。

敵はまだたくさん残っている。俺が今いるのはそのど真ん中。丁度いい。

「九条院、下がれ！」

俺は一言叫ぶと、刀身に電気を込めた。かなりの量を詰めているから、電気が漏れ出している。

九条院は何かをすると思ったのか、素直に後ろに下がった。それを見てから、膝をつくと同時に剣を切っ先から地面に突き刺した。

雷のような轟音が響く。俺の周りからは白い雷が噴き出して、敵をまとめて焼いていた。

電撃が止むと、敵の数はごっそり減っていた。下がっていて無傷の大将っぽいのが1体と、ダメージを負いつつも立ち上がる中型のが4体。

「あんたはあのボスっぽいのをやりなさい！私は他の奴を引き受けるわ！」

「わかった！そっちは任せる！ロディス、リーシェ！九条院の援護を頼む！」

『わかった』

『気をつけろ、油断するな！』

実体化したロディス、リーシェと九条院に残りを任せて、俺はボスっぽいのに向かっていった。九条院が何か言ってるけど無視だ。

こいつも2足歩行で、蟷螂（かまきり）みたいな奴だ。両手はもちろん、鎌になっている。

「シャアアッ！」

両手を縦に振り下ろしてきたのを、剣を横にして防ぐ。そのまま連続攻撃を仕掛けてくるけど、それを何とか捌いていく。

隙を突いて頭から両断するように剣を振り下ろすと、そいつは鎌を交差させて受け止めてきた。

「ん？」

頭に何か模様がある。何だこれ…角…に見えなくもないけど…。

「ギャシャアッ！」

「くっ！？」

模様に気を取られていると、そいつは俺を押し返して弾き飛ばした。すぐにバックステップで距離を取る。

俺とした事が…隙を見せちまった。何とか大事に至らずに済んだけど。

ギュン！ボシュッ！

「え？」

「グギ…」

俺の横を何かが凄い勢いで通り抜け、真っ直ぐに鎌鼬もどきの腹をぶち抜いた。それはすぐに掃除機のコードみたいに戻っていく。

振り返ると、九条院がそれの取っ手を持って真っ直ぐ鎌鼬もどきに向けていて、さっき腹を貫いたそれは九条院の鞭だという事がわかった。

「腹を貫通したし、麻酔も仕込んでおいたわ！1～2分は動きが鈍るから今のうちよ！」

「いろいろ聞きたい事はあるけど、サンキュな！」

俺は礼を言って、右の手足を後ろに引いて、右手に握った剣の切っ先を敵に向けて左手にも柄を握らせた。剣には電気を込めている。いわゆる『突き』の体制だ。

地面を蹴って、真っ直ぐに突進する。思い切り前に押し出した刀身は、狂いなく鎌鼬もどきの心臓を貫いた。そのまま溜めていた電気をそいつの体に流し込む。

「ギャシャアァアアア！！？」

やがて、鎌鼬もどきは割れるような演出で消えていった。

「全員片付いたようだな」

リーシェの声を聞いて、俺は剣をディスクに戻して鞘に収めた。そっちももう終わったみたいだ。

「九条院、お前のそれ…」

「如意棒知ってるでしょ？西遊記で孫悟空が使ってるあれ。あれと同じ原理よ」

「その時点で鞭の性能超えてるだろ…。麻酔ってのは、鞭に毒の機能でも付いてるのか」

「正解。先端だけね。使う使わないは自由に操作できるわよ」

それって本当に鞭なのか？いや、俺も人の事言えないけど。

「それにしても、驚いたわね。あんた、精霊を連れてたんだ」

九条院はそう言いつつ、鞭を朱色の光に変えて手から消した。

「精霊を知ってるのか？」

「もちろん。あんた達、実体化は解いても大丈夫よ。見えるから」

「そうさせてもらう。人目に付くと厄介だからな」

ロディスとリーシェはすぐに実体化を解いた。

『我はロディス。紅刃の精霊をやっている』

『私はリーシェだ』

「ロディスにリーシェね…。いい名前じゃない」

「お前も精霊がいるのか？」

「ええ。ナージャ！」

『は～い』

間延びした返事で出てきたのは、薄紫の肌を持つ金髪の少女だ。

そこまではいいんだけど、頭から茶色のコブラが生えている。さらに言うと、下半身が茶色の蛇みたくなっている。

『《レプティレス・ナージャ》のナージャよ。よろしくね～』

「あ、ああ、よろしく」

姿形にツッコんだら負けだな、うん。

『さっきは戦闘に参加できなくてごめんなさいね～。出るタイミングを逃しちゃって』

『気にするな。こうして無事に済んだのなら問題ない』

『しかし、奴らはなぜ私達に襲ってきたのだ？そもそも、奴らはどこから出てきた？』

「それが問題なんだよな。俺達を狙ったって事は、ニュートラルの連中かもしれないし…」

「ニュートラル？何それ？」

「え？ああ、こっちの話だ。気にしないでくれ」

もしかしたらニュートラルの討伐に協力してくれるかもしれないけど、今は黙っておくか。大体、いくらアビリティを持っているからって他人を巻き込むのもよくない。

「さてと…トラブルは一応解決したし、月沙達の所に行くか」

「月沙って…あんたの友達？」

「ああ。友達っていうよりは親友だな」

「親友……親友…か…」

友達がいないって言ってたからか、『親友』という言葉にやけに反応している。俺は…俺達は、こいつの親友になる事ができるか？いや、なるんだ。俺達ならできるさ。

「そういや、まだ下の名前を聞いてなかったな。何て言うんだ？」

「あ…そういえばそうだったわね」

『（マスターが心を開きかけてる…。今まであの紅刃とかいう男のような人間とは会った事がなかったからかしらね～）』

九条院は自己紹介が途中で中断された事を思い出し、なぜか目を反らして改めて名乗った。

「…私はルーナ。九条院ルーナよ」

「ルーナか。いい名前じゃねえか。よろしくな」

「それじゃ、私はこれで…」

ルーナは背を向けてどこかに行こうとする。って待て待て待て！

「どこに行く気だ？」

「これ以上関わっていたら、あんたが不幸になるわ。学園生活を平和に過ごしたいなら…」

「悪いけど問答無用だ」

「え、ちょ！？」

俺はさっきやったように、ルーナの手首を掴んで引っ張った。

「離しなさいよ！」

「俺の仲間に会わせるっつったろ？今会っとかねえと後悔するぞ？」

「……わかったわ。会うだけ会うわよ」

ルーナは観念したように抵抗をやめた。

『…お前は止めないのか？』

『あの子は昔の経験で人を遠ざけがちなのよね。今のままじゃ、マスターは将来幸せになんてなれない。仲間ができるのは、私としては大歓迎よ～』

『なら、我らも仲間として認めてくれるのか？』

『当然よ～。これから仲良くやっていきましょう』

精霊の方はすんなりいったみたいだな。アビリティどうこうは抜きでも、こいつとは仲良くしていきたい。

人間で、俺達がこいつの友達にならなかったら誰がなるんだよ？

ＳＩＤＥ／？？？

「ちっ…」

つまらなさそうに舌打ちをして、そいつはデュエルディスクとカードを片付けた。

奇襲を仕掛けて相手の力量を測り、あわよくば抹殺する。そのつもりで来たが、とんだ邪魔が紛れ込んだものだ。

「機嫌悪そうだな」

「当然だ。あの小娘まで能力者だったとはな…やられたぜ」

「奴も『イレギュラー』のリストに入れておくか？」

「その方がいいな。サイコパワーを使った分の成果は上げとかねえとな」

「あまりいい成果とは言えないがな。ユニコール！」

俺が名前を呼ぶと、ユニコールが実体化して出てきた。俺は早速その背中に跨がる。

「乗れ。帰るぞ」

「俺に指図すんなよ。ったく…」

そいつを後ろに乗せて、俺達はユニコールに運ばれてアジトへ戻った。

ＳＩＤＥ／勇香

あちこち捜したけど、全然見つかんねえ…。本当にどこに行きやがったんだ、あいつ？

私が今いる場所からは、遠くに何か黄色っぽい建物が見える。あれが学生寮って奴か？

「勇香」

名前を呼ばれたから振り返ると、いつの間にか璃音がいた。

「璃音！」

「こっちは駄目だったわ。そっちは…そっちも駄目みたいね」

「正解。見ての通りだ」

「見つける前に合流するなんてね。一応、フィレスにも捜してもらってるけど…」

「私もロコナに行かせた。そろそろ戻ってきても…」

…ォォォォ…

ん？何だ今の音？

「…！」

「なっ！？」

ゴォオオオオ！！

何か妙な音が聞こえたかと思うと、後ろから竜巻が真っ直ぐに襲い掛かってきていた。

「…っ！」

璃音は急にその場に片膝をつき、右手を地面につけた。瞬間、目の前が灰色になった。

私達の前の地面からはでかい鋼鉄の板が生えていた。これで風が遮られ、私達は吹っ飛ばされずに済んだ。

風が止むと、璃音はぶ厚い鉄板を引っ込めた。

「いきなり何だって…！？」

今度は目の前に火の球が迫っていた。《サイクロン》の次は《火竜の火炎弾》かよ！？

「らぁっ！」

私は右手を握って炎を灯し、火球を正面から殴り付けた。火球は数mも飛ばずに消え去った。

…この攻撃は、あいつしかいねえよな…？

火球が消えた方向から、1人の男が歩いてくる。捜しに行かせた精霊達も一緒だ。

「おい、秋斗！いきなり攻撃してくんな！」

「それはこっちの台詞だ！」

「？」

「精霊に何つー指示を出してやがんだ！」

私達が捜していた、藍色の髪と青い瞳を持つ同い年の男…星御秋斗（ほしみあきと）は、最高にイライラした調子で文句を言ってきた。

「は…？」

「ロコナは俺を見つけるなり火の球を飛ばしてくるわ、フィレスは空に持ち上げようとするわ、お前らは俺を殺す気か！」

「あ～…言い方がまずったな…悪い」

「何て言ったの？」

「『どんな手を使ってでも連れ戻せ』」

「言いすぎよ…。フィレスは何で空に運ぼうとしたの？」

『あたしがお願いしたんだよ～！』

璃音の疑問に答えたのは、私の精霊のロコナだ。…ただし、秋斗に負ぶさってる。

「お前はいい加減降りろ！」

『アキトのケチ～』

「誰がケチだ！」

ロコナは秋斗の背中から降りて私に駆け寄った。それと同時にフィレスも璃音の頭に止まる。体重とかどうなってんだ？

フード付きのマフラーに青い鱗みたいな服。赤い髪に褐色の肌。カード名は《ラヴァル炎樹海の妖女》だ。…『幼』女じゃなくて『妖』女だからな？勘違いしないように。

ていうかこの時点で私のデッキはわかったようなもんだよな？私がデュエルするのはいつだよ？…っと、メタ発言は自重しとこ。

実体化してないのに何で人間に触れるかって？修練を積んだ精霊

はみんなそういう事ができるんだと。こいつは…あれだ、特異体質って奴?とにかく、初めからできてた。

「秋斗、集団行動を乱してもらっては困るわ。こういう時ぐらい勝手にはぐれないでちょうだい」

「ハァ…わかったよ。ったく、騒がしいのは嫌いだってのに…」

ここで秋斗の紹介でもしておくか。

秋斗はあの自称神様（笑）が新しく選んだ助っ人だ。交流を深めるためって事で、数日間遊星達も入れて一緒に生活していた。その中で1番問題になったのは、秋斗自身が『群れるのは嫌いだ』って言ってコミュニケーションを取ろうとしない事だ。

ロコナが妙に秋斗に懐いてて、よく構ってもらおうとくっついている。そのおかげで完全に孤立しなくて済んでるんだけど…私達もいい加減どうにかしないとな。いつまでもロコナに頼ってるだけじゃ駄目だ。

「そいつはどうにかならないのか?」

「こいつはやんちゃな子供だ。期待しない方がいいぞ」

『そうだそうだ～!』

「……」

「抑えなさい。大人げないわよ?」

『グルル…』

「ロコナ、お前もあまり秋斗を困らせないようにな」

『は～い』

怒りで震える秋斗を見て、私はロコナに一言注意した。

『皆さん、早く校長室に行った方がいいのでは？』

突然、第三者が現れて私達に注意を促した。

「ルリア。…そうだな、行くか」

こいつは秋斗の精霊で、《マジシャンズ・ヴァルキリア》のルリアだ。一言で言えばお淑やかな奴で、同じ敬語を使うスイレンはルリアとは逆に元気が有り余ってる感じだ。

秋斗が唯一傍に置いてて、１番信頼している奴でもある。ルリアも秋斗の人付き合いをよくしようとしてるけど、いかんせん上手くいかないでいる。

「にしても、お前のアビリティはある意味反則級だろ…」

「充電に時間がかかるから一長一短だ」

『最初の頃はもっと燃費が悪かったんですよ？１つの技に５日間の充電期間が必要でしたし』

「よく２日間まで時間を短縮できたわね…」

ついでだから、私達のアビリティについても説明しとくか。

秋斗のアビリティは魔法・罠の具現化だ。使えない奴もあるけど、魔法や罠カードの効果をそのまま撃ち出す事ができる。さっきの《サイクロン》とかがいい例だな。

ただ、1つの技を使うとだいたい2日間くらいの充電期間が必要になる。でないと発動すらしない。連続で戦うのには向いてないけど、技の種類なら1番上だ。

次に璃音。こいつが扱うのは『鉄』だ。

触れた物から鉄柱やら鉄板やらを生やす事ができる。例えば、地面に触れたら地面のどこからでも鉄を生やせる。

後、武器や工具を創る事もできる。璃音はこれを、たまに機械の修理とかに利用している。

璃音は最近アビリティを使えるようになったようなもんだけど、案外使いこなしてるな。

最後に私。さっきのを見てもわかるだろうけど、炎を操る事ができる。

まあ、私は大抵身体強化に使ってるんだけどな。炎を拳に灯して殴ったり、足から炎を噴射して高速移動したり。一応、炎をぶっ放して敵を焼き尽くしたりもできる。

以上、説明終了！カードゲームからだいぶ離れてるけど気にすん

な！

「ここか」

時間は飛んで校長室前。精霊達には1度カードに戻ってもらった。

璃音が率先して扉を叩く。

「入るノーネ」

「「「（ノーネ？）」」」

ノーネ？ノーネて何？新しい語尾か何かか？

「…失礼します」

とりあえず中に入る。部屋にいるのは、でかい机に座る白人の外国人に、背の低い外国人のおっさんだ。

…うん、濃い。顔が凄い。失礼なのはわかってるけど、ギャグかこれは？

「先日連絡をいたしました、篠村璃音です」

「篠村…？ああ、この度我が校に編入する事になった生徒でアールね」

ノーネの次はアールかよ。狙ってんのか？

「こちらは、同じ編入生の天原勇香と星御秋斗です」

「話は確かに聞いているノーネ。私は臨時校長のクロノス・デ・メディチなノーネ」

「臨時？今の校長はどうしたんだ？」

「秋斗、敬語を使いなさい」

「鮫島校長は不在なノーネ。その間だけ、私が校長を勤めさせてもらってるノーネ」

不在ねえ…。理由は知らないけど、どうでもいいか。

「で、我輩が教頭のナポレオンでアール」

「なるほど、ナノーネ臨時校長にナポリタン教頭ね」

「ナノーネじゃなくてクロノスなノーネ」

「人の名前を美味しそうにしないでほしいでアール」

「じゃ、デアール教頭で」

「ナポレオンでアール！」

「勇香、今から依頼をするのに怒らせてどうするのよ？」

璃音が小声で俺に話し掛けてくる。心配すんな、これは作戦だ。

「心配すんなよ。どうにかなるって」

「どうなっても知らないわよ…」

「クラスの配置とかその他諸々の説明を受けに来た。早く話してくれ」

秋斗は口が悪いなオイ。ま、私も人の事は言えないけど。

「グヌヌ…わかったノーネ」

それからクラス表を貰ったりＰＤＡの説明を受けたり、そんなのが数分間続いた。特に難しい事はないな。

「ランクについては、シニョール星御はオシリス・レッドに、シニョーラ篠村とシニョーラ天原にはオベリスク・ブルーに所属してもらうノーネ」

「ナノーネ校長、それについて話がある」

「クロノスなノーネ、でも校長は許可するノーネ。話とは一体何なノーネ？」

ノーネノーネうっさい。だからナノーネなんだよ。

「私をオシリス・レッドに入れてくれ！」

「はい？」

「だから、私をレッドにしてくれって！」

「…自分の言動をわかっているのでアールか？」

「んなもん百も承知だ！私はこの学園で自分を一から鍛え直したいんだ！なら最下級からスタートすんのが１番だろ！？」

「う～む…しカーシ、シニョーラ天原は女子生徒。原則として、女子は全員オベリスク・ブルーに所属する事になっているノーネ」

「そこを何とか！」

「制服なら私が作るから問題ありません」

璃音が助け船を出してくれた。制服に関しては元から協力するっつってたしな。

「こう見えてもものづくりは得意なので」

「むむむ…」

「我輩が許可するでアール」

「ナポレオン教頭！？」

「大人相手に平気でタメ口を使うのが気に入らないでアール。彼女には社会の厳しさというのを知ってもらうでアール」

「サンキュー！話がわかるじゃねえか、ナポリタン、じゃなかった、デアール教頭！」

「両方違うでアール！我輩はナポレオンでアール！」

これで私の最大の目的は果たした。説明も粗方聞いたし、もうここに用はないな。

「寮の部屋割りはこの紙に書いてあるノーネ。シニョーラ天原の部屋は今日中に手配するノーネ。後、制服も渡すノーネ」

ナノーネ校長は璃音と秋斗に部屋割りの紙と制服を渡した。私は急な変更だったから、荷物を置くのはもうちょい後か。

「説明は以上なノーネ。明日は1度職員室に来てもらって、そこから教室に向かうノーネ。では、もう行っていいノーネ」

「わかった」

「ありがとうございました」

話を終えた私達は、揃って部屋から出ていった。

「じゃ、またな！ナノーネ校長と…ええと、カルボナーラ教頭だっけ？」

「クロノスなノーネ！」

「ナポレオンでアール！もはや原形を留めていｎ」

バタンッ

文句を全部聞く前に扉を閉めた。

「これで目的達成だな」

廊下を歩きながら、私は明るくそう言った。

「印象を悪くすれば嫌でもレッドに入れてくれるんじゃないかと思ったけど、狙いが当たったぜ！」

「素の調子でも大して変わらねえだろ…」

「トイレでも探して着替えましょう。いつまでも私服でいるのはまずいわ」

「じゃ、そうすっか」

さっき璃音が制服を作るとか言ってたけど、本当はもう完成していて、今は私のバッグの中にある。ここに来る前に私がレッドがいいって言ったら、璃音が一晩で作ってくれた。

何でも、月沙から月沙が着ている制服の写メを貰ったらしくて、それを元にして作ったんだとか。私も見せてもらったけど、月沙のと比べると上着が赤くて、下が黒い長ズボンだ。ちなみに上着の下のシャツは白にする予定だ。

「着替えたら私と秋斗は寮の部屋に荷物を置く。それから校舎の正面玄関で合流しましょう」

「わかった」

「了解！」

その後は紅刃達との再会か。直接顔を合わせるのは久しぶりだな。

今から楽しみだ。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第３８話　どんな奴でも十人十色（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「ついに私達にも出番ができたな！」

璃音「これからはメインキャラとして活躍するから、応援よろしくね」

フィレス『ガウルルッ』

勇香「そういや、私達がレギュラーになるまでこのコーナーを続けるって話だけど、どうなるんだ？」

璃音「このまま続けるそうよ。このコーナーも、この小説の特色の１つだし」

勇香「そっか。ま、これからもよろしくな！」

ロコナ『ユウカ、私の紹介は？』

勇香「ああ、悪い悪い。私の精霊として登場する事になった、《ラヴァル炎樹海の妖女》のロコナだ」

ロコナ『みんなよろしく～！』

璃音「ようやく使用デッキが決まったみたいね」

勇香「作者は散々悩んでたけどな…」

璃音「まあ、いいわ。今回はカード考察はなしよ。その代わりに重大発表があるわ」

勇香「先に特別編の方を書き上げる予定だったけど、この説明をするためにあえて本編を優先させてもらったんだ。特別編の内容については楽しみにしててくれ」

ロコナ『ちょっと時間がかかるけど、最後まで読んでくれると嬉しいな！』

璃音「もうすぐ年末年始に入るわよね？この際だから、作者はこの小説で何か特別な事をできないかいろいろ考えてみたみたいなの」

勇香「で、１２月３１日と１月１日に番外編を投稿する事に決めたんだ」

璃音「その内容なんだけれど…思い切ってアンケートに挑戦する事になったわ」

勇香「まず、質問コーナーだ。紅刃を始めとするこの小説のメンバーで読者のいろんな質問に答えていこうって奴」

璃音「質問は１人２つまで。小説を書いている方は自分の小説のキャラの発言でも構わないわ。それも含めて２つまでよ」

ロコナ『もう１つは～、え～と、何だっけ？』

勇香「人気投票だよ。ほら、よく雑誌とかでやってるだろ？あれを

うちでもやるんだよ」

璃音「投票形式について説明するわ。自分の好きなこの小説の登場人物を、好きな順に5人まで選びなさい。1位には5票、2位には4票、3位には3票、4位には2票、5位には1票が入るわ。投票は1人1回までよ。同じキャラの名前を複数出すのはなし。選択範囲は第1期まで。ルーナ、秋斗、ナージャ、ルリア、ロコナは選べないから注意してね。…ないとは思うけど、今回の話でサイコパワーを使った謎の男もなしよ」

ロコナ『1位にしたキャラには一言コメントを付けてね！ランキングでそのキャラの順位が発表された時、いくつか選んで公表するよ！もしかしたら、自分のコメントが採用されるかも！』

勇香「締め切りは両方共2010年12月29日までだ。集計とかに時間がかかるだろうからな」

ロコナ『ねえねえ、こんな企画立てて大丈夫？間に合うの？』

フィレス『グルル』

勇香「大丈夫だろ…多分。万が一のために締め切りを30日にしてないんだし。意地でも間に合わせるさ」

璃音「それでは、今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『1度も書き込んだ事がない人も常連さんも、感想やメッセージにどしどし投稿してね！』

勇香「つーわけだ！次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

ようやく勇香と璃音を前線に出す事ができました。勇香のデッキ決めといい、ここまで長かった…。

今回新しく登場した九条院ルーナはＨＩＲＯさんが、星御秋斗は紅さんがそれぞれ投稿してくださったキャラです。レギュラーメンバーはこれ以上増やすつもりはありません。ＨＩＲＯさん、紅さん、投稿ありがとうございます。ルーナと秋斗の今後の活躍にご期待ください。

特別編は現在執筆中です。今年中には投稿しますので、しばらくお待ちください。

重大発表については説明した通りです。不正のないようにお願いします。皆さんの投稿をお待ちしております。

では、また次回！

特別編　闇纏う風からの来訪者（前書き）

クロスオーバー第3弾です。今回は語り部さんの『遊戯王ＧＸ～闇纏う風と盗賊王～』とのコラボです。

それではどうぞ！

特別編　闇纏う風からの来訪者

ＳＩＤＥ／月沙

時間は午後3時半。今日は授業が休みだから、私は適当に島内をぶらついてた。

天気は快晴で、日差しが気持ちいい。どこかで昼寝でもしようかな？

「あ…！」

森から抜け出てきた人影が１つ。紅刃だ。

「紅刃！」

私は自然に名前を呼んで駆け寄った。よく一緒にいるのもあるけど、やっぱり好きな人だからかな？

「あ、月沙か」

「いつもの帰り？」

「ああ。今部屋に戻るところだ」

いつものっていうのは、要するに修行。紅刃は剣の腕が鈍らないように毎日やっている。

「特にやる事はないな…。宿題も全部終わらせたし」

「じゃあ、遊びに行ってもいい？」

「いいぞ。じゃ、行くか」

私は暇な時はいつも紅刃の部屋にお邪魔している。ていうか今までずっとそうだったし。

ボォオオン！

…うん、だいぶ慣れてきた。

「ヤッホ～！」

「最近出番増えてるよね？」

「コラボをしてくれる作者さんのおかげだよ。交流っていいね」

「お前は『小説家になろう』のユーザー全員に土下座してこい」

「2人共、ここでメタ発言はやめなさい」

そんなわけで、自ｓｙ「神様見習いね？」…もとい、神様見習いのフォッタと遭遇した。

「また異世界人どうしでデュエルする事になってね」

「で、俺達を連れていくと？」

「そういう事」

「やっぱりな…。ま、悪い気はしねえけど」

私も紅刃と同じ考えだ。違う世界の人達と会うなんて普通は体験できないし、いろんなデュエルを見れるしね。

「デッキの準備は大丈夫？」

「俺はいつでもいいぞ」

「私も大丈夫」

「ならＯＫだね。ああ、そうそう」

「「？」」

「くれぐれも、砂糖を吐かないように注意してね」

「は？」

「それってどういう…」

「それじゃ、レッツゴー！」

私の言葉を遮って、辺りは白煙に包まれた。

ＳＩＤＥ／紅刃

視界が晴れると、俺達はいつぞやの森の広場に立っていた。…前にも使ったな、このフレーズ。場所は固定かい。

「連れてきたよ～」

また向こうから先に呼び寄せたのか。どんな奴だ？

「お、来たか」

今回の相手は、黒い長髪の男子と同じく黒いショートヘアーの女子だ。２人共オベリスク・ブルーの制服を着ている。

男子の方は上着の前を開けている。こっちじゃ見ないから新鮮に見えるな。

「…っ！？」

「？どうした？」

「いや、何でもないよ（一瞬バクラかと思った…。髪の色以外そっくりだし）」

月沙が男子の方を見て驚いたけど、何かあったのか？

「お前らのその服って…デュエルアカデミアのか？」

今度は女子の方が質問してきた。

「ああ、これか？これは…まあ、あれだ、いろいろあったんだよ」

「いや、その『いろいろ』の部分を聞いてんだけど」

「ぶっちゃけ説明すんの面倒なんだよ。このやり取りもう幾度となくやってるしさ、行数もスペース取るから1話完結しづらいし。かと言って前後編に分けたら今年中に完成するかどうかも…」

「メタ発言全開にしてまで説明したくないのかよ！？こうなったのもそっちの作者が保留にしたからだろ！うちの作者が依頼したの1ヶ月以上前だぞ！？」

「うちの作者だっていろいろあんだよ！つーかもうこれ『かくかくしかじか』とか『～説明中～』とかでいくね！？初めてこの小説を読む読者でいきなり最新話を読む人なんていないだろ！これまでの本編でどういった流れで服が違うとか知ってるはずだし！」

「そこは親切に説明しろよ！読み返す手間が省けるだろ！」

ＳＩＤＥ／月沙

さっきから口喧嘩してるけど…大丈夫かな、あれ？ていうかそろそろツッコんでいい！？

「…まあ、いいや。人払いする手間が省けたし」

「人払い？」

「君達にだけ話しておく必要があってね」

私達にだけ？何だろ？

「君達は同じ転生者だ」

「「！？」」

思わず男の子と顔を見合わせる。この人が私と同じ転生者！？

「この事は、少なくとも君は内密にした方がいいでしょ？紫藤嵐君？」

「…ああ。その方が助かる」

嵐と呼ばれた男の子は、微笑して頷いた。

「で、今回のデュエルは君達にやってもらうよ」

「私と嵐君とで？」

「転生者どうしでのデュエルか」

「そういう事」

なるほど、それでわざわざ私達を…。

そういえば、はっきり転生者だとわかる人と会ったのは嵐君が初めてだ。何か楽しいデュエルになりそう！

「それじゃ、始める前にあの2人を止めないと…」

そうだった。早くあのメタ発言の応酬を止めないといろいろと大変な事に…。

「擬人化か…。そっちの世界にはそんなシステムがあるんだな」

『ガルルッ』

『異世界の我と同じ個体に会うというのも、なかなか興がある』

「まさか、ロディス以外にヴァンダルギオンの精霊がいるなんてな」

『グルルル』

『ヴァンダルギオンに《タイラント・ドラゴン》…ドラゴン使いか』

「お前はヴァンダルギオンとボルテニスだから【パーミッション】だろ？お前とはあまり戦いたくねえ…。てか、ぱっと見じゃその２体だなんてわかんねえし」

「「いつの間にか仲良くなってる！？」」

どんな話の流れになったらそんな会話に変わるの！？ていうかあの女の子、ヴァンダルギオンの精霊を連れてたんだ！？

いや、重要なのはそこじゃない。

「…何か異常なまでの嫉妬感を感じる…」

「奇遇だな、俺もだ。沙耶に手を出したら容赦しねえ」

何かこの人とは別の意味で仲良くなれそう。あ、あの女の子の名前、沙耶って言うんだ。

「初対面で人の彼女と妙に仲良く話してるのは、あまりいい気はしないな」

「え？」

ちょっと待って。今何と？

「え…もしかして、付き合ってたりする？」

「ああ、そうだけど」

「…告白はどっちから？」

「沙耶からだ。最初の月一試験の日の夜だったな…ん？」

「……」

「お、おい、どうした？」

「嵐…地雷踏んだね」

「は？」

「…どうせ…どうせ私なんか…」

ええ、落ち込むよ、落ち込んでやりますよ！何で異世界の人達はこう積極的なの？私なんて全然気持ち伝えられないし…。これって私が駄目なの？私が極端に消極的なの？ああもう、どうせ私なんて…

～数十分後～

「ご迷惑をお掛けしました」

「いや、俺も悪かった。事情も知らずに惚気話をしてしまって…」

腰を９０。に折り曲げて嵐君に謝った。今のは私が悪かったんだし、当然だよね。

「それじゃ、落ち着いた所でデュエルといきますか。準備よろしく」

何か私のせいで無駄に時間食った気分だ…。早く始めよう。

「そんなデッキでちゃんと回るのか？」

「まあ、ただでさえバランスを取るのが難しいし、たまに事故るな。そこは《マシュマロン》とかで時間を稼いで…」

「あ、このチューナーって何だ？」

「デュエル中に説明する」

いつまで話してるの！？何かイライラしてきた！

「嵐君！早く始めるよ！」

「ああ！ええと、名前…」

「波星月沙、よろしく！」

「月沙だな！よし、さっさと準備するぞ！」

嵐君も同じ気持ちみたい。落ち込みはしたけど、２人の仲は壊させない！

「あ、始まるのか」

「じゃあ、場所空けないと…」

ああもう！とにかく集中！気にしない！

「（チューナー…まさか…）」

余計な思考を頭から追い出して、デュエルディスクを展開させる。

「…今更だけど、面白いデュエルディスクを使ってるな」

「それはそっちも同じでしょ？」

私のは拳銃型。嵐君のは緑と黒のカラーリングで鳥の翼をイメージした形で、展開するとソリッドビジョンで緑の羽が舞い散る演出が出た。

「海馬が報酬でくれたんだ。無駄に演出が凝ってるけどな」

「あ～、なるほど。ていうか社長と知り合いなんだ…」

報酬っていうのが気になるけど、どうでもいいや。

「あ、そうだ」

「？」

「そこの女の子の名前って何？」

「オレか？オレは加賀見沙耶だ」

「沙耶ちゃんね。私は波星月沙、よろしく」

「おう」

紅刃と沙耶ちゃんは…もう自己紹介を済ませてるでしょ。嵐君は私が落ち込んでる間にフォッタから紅刃の名前を聞いてたみたい。

それにしても、一人称が『オレ』の女の子って珍しいかも。勇香ですら『私』なのに…。

「え～、それでは、今から波星月沙ｖｓ紫藤嵐のデュエルを始めます。先攻はコイントスで決めるよ」

「私は表で」

「俺は裏だ」

フォッタがコインを投げて手の甲に叩きつける。結果は…。

「…裏だね。よって、嵐君が先攻後攻を決められるよ」

「じゃあ、俺が先攻を取る」

普通はそうだろうね。あえて後攻を選ぶのは…亮さんくらいかな？

「それじゃ、始めるか」

「楽しいデュエルにしよう！」

「嵐、頑張れよ！」

「月沙、負けんな！」

言われなくても！

「「デュエル！」」

月沙ｖｓ嵐

「俺のターン！魔法カード《天使の施し》を発動！３枚ドローし、手札を２枚捨てる！」

すぐに《天使の施し》を使ったけど、墓地肥やしが目的かな？

「そして、墓地の《邪帝ガイウス》と《ハーピィ・クィーン》を除外し、《ダーク・シムルグ》を特殊召喚！」

「ええ！？」

《ハーピィ・クィーン》
効果モンスター
星４／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ１９００／ＤＥＦ１２００
このカードを手札から墓地に捨てる。
デッキから「ハーピィの狩場」１枚を手札に加える。
このカードのカード名は、フィールド上または墓地に存在する限り「ハーピィ・レディ」として扱う。

俊也が使っているシムルグとは違い、全身真っ黒の神鳥がいきなり飛び出してきた。

《ダーク・シムルグ》
効果モンスター
星７／闇属性／鳥獣族／ＡＴＫ２７００／ＤＥＦ１０００

このカードの属性は「風」としても扱う。
自分の墓地の闇属性モンスター1体と風属性モンスター1体をゲームから除外する事で、このカードを手札から特殊召喚する。
手札の闇属性モンスター1体と風属性モンスター1体をゲームから除外する事で、このカードを自分の墓地から特殊召喚する。
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、相手はフィールド上にカードをセットする事ができない。

《ダーク・シムルグ》　ＡＴＫ／２７００

「さらに《シールド・ウィング》を守備表示で召喚！」

緑色の鳥が防御体制を取る。また厄介なモンスターを…。

《シールド・ウィング》　ＤＥＦ／　９００

「カードを2枚セットしてターンエンドだ！」

嵐
ＬＰ／４０００
手札／2
モンスター／《ダーク・シムルグ》（ＡＴＫ／２７００）《シールド・ウィング》（ＤＥＦ　９００）
魔法・罠／リバース×2

いきなり《ダーク・シムルグ》が出てくるとは思わなかったな。
このままじゃ罠は使えない。

「私のターン！」

「永続罠《魔封じの芳香》を発動！」

「！？それは…！」

「効果は知ってるな？お互いに魔法カードはセットしなければならず、次の自分のターンまで発動できない！」

《魔封じの芳香（ほうこう）》
永続罠
このカードがフィールド上に存在する限り、お互いに魔法カードはセットしなければ発動できず、セットしたプレイヤーから見て次の自分のターンが来るまで発動できない。

「《ダーク・シムルグ》って、確か相手が魔法・罠を伏せれなくなるんだっけ？」

「ああ。月沙はモンスターしか使う事ができない。嵐が断然有利だ！」

《ダーク・シムルグ》と《魔封じの芳香》が揃えば、私はモンスター効果しか使えない。でも、この手札ならすぐに解決する！

「相手フィールド上のカードが自分フィールド上のカードより４枚以上多い時、手札から《氷結界の交霊師》を特殊召喚できる！」

この前はフィールドに出せなかったけど、今回はちゃんと出すよ！

《氷結界の交霊師》　ＡＴＫ／２２００

「『氷結界』？何だあのカード？」

「!?（【氷結界】…!）」

「そして、《アビス・ソルジャー》を召喚!」

鯨に人間の手足が生えたようなモンスターが三又の槍を持って現れた。

《アビス・ソルジャー》
効果モンスター
星４／水属性／水族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ１３００
水属性モンスター１体を手札から墓地に捨てる。
フィールド上のカード１枚を持ち主の手札に戻す。
この効果は１ターンに１度だけ自分のメインフェイズに使用する事ができる。

《アビス・ソルジャー》　ＡＴＫ／１８００

「《アビス・ソルジャー》の効果発動!１ターンに１度、手札から水属性モンスター１体を墓地に捨て、相手フィールド上のカード１枚を手札に戻す!手札からチューナーモンスター《氷結界の番犬》を墓地に送り、《魔封じの芳香》を手札に戻す!」

「何!?（俺の知らないカードに、チューナーモンスターだと…!?）」

「アクア・ピラー!」

《アビス・ソルジャー》が槍を地面に突き刺すと、《魔封じの芳香》が真下から噴き出す水柱に飲み込まれた。

《魔封じの芳香》は一時的だけど取り除いた。これで少しは自由に動ける。

「さらに《氷結界の番犬》は、墓地に送られた時に特殊召喚できる！」

４足の足に氷の腕輪を付けた水色の犬が蘇る。

《氷結界の番犬》
チューナー（効果モンスター・オリジナル）
星２／水属性／獣族／ＡＴＫ　５００／ＤＥＦ　３００
このカードが手札から墓地へ捨てられた時、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。
このカードがシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、自分はデッキからカードを１枚ドローする。
このカードをシンクロ素材とする場合、他のシンクロ素材モンスターは全て水属性モンスターでなければならない。

《氷結界の番犬》　ＡＴＫ／　５００

「生け贄要員か？でも知らないカードだし、またチューナー…」

「まあ、見てなって。これから面白いもんが見れるからさ」

あれ、おかしいな？ここまで嫉妬する事ってあったっけ？無性にイライラする。…駄目だ、集中しないと。

「これで魔法カードが使える！魔法カード《強欲な壺》を発動！カードを２枚ドロー！」

よし！これならいける！

「魔法カード《ワン・フォー・ワン》！手札からモンスターを墓地に送り、デッキからレベル１のモンスター１体を特殊召喚する！私が選ぶのは、《氷結界の番人ブリズド》！」

水色の鳥。レベル１だから何かと役に立ってくれる。

《氷結界の番人ブリズド》　ＤＥＦ／　１００

「まだまだ！墓地に送ったチューナーモンスター《フィッシュボーグ－ガンナー》の効果発動！私の場にレベル３以下の水属性モンスターがいる時、手札を１枚捨てる事で特殊召喚できる！」

宇宙服みたいな服とヘルメットを身につけ、銃を手にしたモンスター。最近デッキに入れてみたけど、結構強いんだよね。

《フィッシュボーグ－ガンナー》
チューナー（効果モンスター）
星１／水属性／魚族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　２００
自分フィールド上にレベル３以下の水属性モンスターが表側表示で存在する場合、手札を１枚捨てて発動する事ができる。
墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。
このカードをシンクロ素材とする場合、他のシンクロ素材モンスターは全て水属性モンスターでなければならない。

《フィッシュボーグ－ガンナー》　ＤＥＦ／　２００

「さらに魔法カード《水氷の宝札》を発動！レベル４以下の水属性モンスターを任意の数選択し、その数だけカードをドローする！私

は《アビス・ソルジャー》《氷結界の番犬》《氷結界の番人ブリザード》《フィッシュボーグ－ガンナー》を選択！よって、４枚ドロー！」

「何だそのめちゃくちゃな効果は！？」

「私も１ターンでここまで展開できるとは思ってなかったけどね。選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで０になる」

《アビス・ソルジャー》　ＡＴＫ／１８００↓　０

《氷結界の番犬》　ＡＴＫ／　５００↓　０

《氷結界の番人ブリザード》　ＡＴＫ／　１００↓　０

《フィッシュボーグ－ガンナー》　ＡＴＫ／　１００↓　０

「（シンクロ召喚するから損失０だろうが！）」

後攻１ターン目でモンスターゾーンが全部埋まっちゃったよ。私のデッキってここまで展開力あったっけ？

「魔法カード《地砕き》！《ダーク・シムルグ》を破壊する！」

「う…くそ！」

たった今引いたけど、本当に助かった。

「行くよ！レベル７《氷結界の交霊師》とレベル１《氷結界の番人ブリザード》にレベル１《フィッシュボーグ－ガンナー》をチューニ

ング！」

２つの青い輪に７つの星が共鳴する。

「封印されし綿津見の槍が、氷壁を砕き唸りを上げる！秘めたる力を解き放て！」

☆７＋☆１＋☆１＝☆９

「シンクロ召喚！邁進せよ！《氷結界の龍　トリシューラ》！！」

三つ首に銀の翼を持つ氷結界最強の龍が姿を現した。

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／２７００

「（よりによってそいつかよ…！）」

「シンクロ…召喚？何だよそれ！？それに何だよあのカードは！？」

「チューナーと呼ばれるモンスター１体とそれ以外のモンスターをフィールドから墓地に送り、送ったモンスターのレベルの合計と同じレベルのシンクロモンスターを特殊召喚する。これがシンクロ召喚…俺達の戦い方だ」

「じゃあ、今墓地に送ったのはレベルの合計が９だから…あのモンスターのレベルは９なのか？」

「そういう事だ」

紅刃、説明ありがとう。何も考えずにやっちゃったけど、これで

解決だね。

「俺達の知らない戦法か。驚かせてくれるぜ（ちゃんと合わせとかないとな…）」

嵐君も事情をわかってるみたい。でも、トリシューラの効果は知ってるはず…自分が今どれだけ危険な状況か、わかってるよね？

「《氷結界の番犬》がシンクロ召喚に使用されて墓地に送られた時、カードを1枚ドローする！さあ行くよ、トリシューラ！」

『『『ギャオオォォオオ！！』』』

うん、気合い充分！頼りにしてるよ！

「あのトリシューラも精霊だ」

「え、そうなのか？」

「デュエル以外じゃ滅多に出てこないけどな…」

「トリシューラの効果発動！シンクロ召喚された時、相手のフィールド・墓地・手札からカードを1枚除外する！」

「はあ！？何だそりゃ！？」

沙耶ちゃん、その反応は正しいよ。シンクロモンスターの中でも特に強いからね…。

「フィールドの《シールド・ウィング》、墓地の《ダーク・シムル

グ》、そして手札1枚を除外する！トリニティ・バイス！」

　3つの頭がそれぞれ青い光線を吐き出し、選択したカードを消滅させた。

「ちっ、ピンポイントで《魔封じの芳香》まで持ってきやがった…！」

　あ、ラッキー。これで《ダーク・シムルグ》も復活しないし、一気に追い詰めた。それに、まだ1回シンクロ召喚ができる！

「2回目！レベル4《アビス・ソルジャー》にレベル2《氷結界の番犬》をチューニング！封印されし銀のつぶてが、氷雨となりて降り注ぐ！秘めたる力を解き放て！」

☆4＋☆2＝☆6

「シンクロ召喚！吹雪け！《輝星龍ジークヴルム・デネブ》！」

　締めに私が出したのは、4枚の翼を持つ白い龍だ。

《輝星龍（きせいりゅう）ジークヴルム・デネブ》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星6／水属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１７００
チューナー＋チューナー以外の水属性モンスター1体以上
1ターンに1度、自分フィールド上のモンスター1体を守備表示にする事でこのカードはもう1度だけ攻撃を行う事ができる。

《輝星龍ジークヴルム・デネブ》　ＡＴＫ／２４００

「お、おい…」

「今に始まった事じゃねえよ。俺の知り合いの中でもトップクラスの実力の持ち主だ」

「バトル！ジークヴルム・デネブでダイレクトアタック！フォルス・フリーザー！」

４枚の翼から白い吹雪が放たれ、そのまま嵐に直撃した。

「ぐあぁぁぁぁ！！」

嵐　ＬＰ／４０００→１６００

「嵐！」

これで決まるとは思えないけど…。

「トリシューラでダイレクトアタック！トライデント・ブリザード！！」

３つの息吹がまとめて放たれる。

「速攻魔法《終焉の焔》！黒焔トークンを2体守備表示で特殊召喚する！」

《終焉の焔（ほのお）》
速攻魔法
このカードを発動する場合、自分は発動ターン内に召喚・反転召喚・特殊召喚できない。

自分のフィールド上に「黒焔トークン」（悪魔族・闇・星１・攻／守０）を２体守備表示で特殊召喚する。
（このトークンは闇属性モンスター以外の生け贄召喚のための生け贄にはできない）

一つ目の黒い炎のトークンが２体飛び出す。次のターンで上級モンスターを出すつもりだったみたい。

《黒焔トークン》　ＤＥＦ／　０

《黒焔トークン》　ＤＥＦ／　０

「そのままトークンに攻撃！」

嵐の代わりに黒焔トークンのうちの１体が攻撃を受けて消え去った。

「トークンは残させない！ジークヴルム・デネブの効果発動！自分フィールド上のモンスター…トリシューラを守備表示にする事で、このターンもう１度攻撃できる！」

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／２７００→ＤＥＦ／２０００

「何！？」

「もう１体の黒焔トークンに攻撃！フォルス・フリーザー・セカンド！」

ジークヴルム・デネブがもう１体も破壊した。これで一応大丈夫

なはず。

「カードを3枚セットして、ターンエンド！」

月沙
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《氷結界の龍　トリシューラ》（ＤＥＦ／２０００）
《輝星龍ジークヴルム・デネブ》（ＡＴＫ／２４００）
魔法・罠／リバース×３

「すっげえ…たった1ターンで戦況をひっくり返しやがった…」

「しかもあれだけやっといて伏せカードが3枚って…」

「（俺ですら知らないカードがあるとはいえ、《ダーク・シムルグ》と《魔封じの芳香》のロックをあっさり破るとはな。下手したら1キルだぞ?トークンも残らないし、あいつは相当強い…）」

『相棒、ここでへばったわけじゃねえよな?』

「（バクラ…。誰がこれくらいでへばるかよ!それに…）」

「嵐!まだチャンスはあるぞ!負けんな!」

「（沙耶が応援してくれている以上、負けられないしな!）行くぞ!俺のターン!!」

嵐は少し間をおいた後、沙耶ちゃんを見て少し笑ったように見えた。やっぱり、大切な人の前だともっと『負けられない』って気持

ちが強くなるよね。

「魔法カード《天よりの宝札》！互いに手札が6枚になるようにカードをドローする！」

これで手札は6枚。どう切り返してくるかな？

「（これは…！）魔法カード《天からの落とし物》！互いにカードを3枚ドローし、手札を2枚捨てる！」

《天からの落とし物》
通常魔法（漫画オリジナル）
互いのプレイヤーはデッキからカードを3枚引き、その後手札からカードを2枚捨てる。

次は《天からの落とし物》…。何か来る…！

「（フォッタに『デッキに入れときなよ』って渡されたカードだが、助かった。墓地のモンスターが0じゃ、こいつは出せないからな）
月沙！モンスターを2体残したのは失敗だったな！」

「え？」

「相手の場に同じ属性のモンスターが2体以上いる時、手札から《神禽王アレクトール》を特殊召喚できる！」

赤い翼を生やした銀色の鳥人。私のデッキは水属性1色だから特殊召喚されやすい。

《神禽王アレクトール》　ＡＴＫ／２４００

「さて…月沙、こいつの効果は知ってるよな？」

「え？…！？それって…！」

嵐が手札を１枚私に見せる。あれは最強クラスの除去効果を持つモンスター…！

「相手の場のモンスター２体…トリシューラとジークヴルム・デネブを生け贄に、《溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム》を相手フィールド上に特殊召喚する！」

２体の氷龍がリリースされ、巨大な溶岩の悪魔が私の場に現れた。私は当然、原作の凡骨の如く檻に閉じ込められる。

《溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム》
効果モンスター
星８／炎属性／悪魔族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２５００
このカードは通常召喚できない。
相手フィールド上に存在するモンスター２体をリリースし、手札から相手フィールド上に特殊召喚する。
自分のスタンバイフェイズ毎に、自分は１０００ポイントダメージを受ける。
このカードを特殊召喚するターン、自分は通常召喚できない。

《溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム》　ＡＴＫ／３０００

「実物は初めて見るけど、凄い迫力だな…」

リリースする効果は特殊召喚の『コスト』だから、こればかりは

防ぎようがない。それにしても、異様に暑く感じる。これってソリッドビジョンだよね？

「魔法カード《死者蘇生》！お前の墓地にあるトリシューラを借りるぞ！」

「ええ！？」

トリシューラが奪われた！？攻撃力３０００のラヴァ・ゴーレムがいても笑えない！

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／２７００

「これで準備は整った！フィールドのモンスター２体と墓地のモンスター１体を除外！」

アレクトールとトリシューラが風の渦に包まれる。この召喚条件は…！

「現れろ！《Ｔｈｅ　アトモスフィア》！！」

やっぱり！渦の中から出てきたのは、巨大な球体のカプセルを抱えた鳥獣だった。

《Ｔｈｅ　アトモスフィア》　ＡＴＫ／１０００

『クオォオォォオ！』

「！そのカード、もしかして…」

「ああ。こいつは俺の精霊で俺の切り札だ。アトモスフィアの効果発動！相手モンスター1体を装備カードとしてこいつに装備し、そのモンスターの攻撃力分の数値をこいつの攻撃力に加える！」

カプセルにラヴァ・ゴーレムが吸収され、私は檻から解放された。このためにラヴァ・ゴーレムを…。

《Ｔｈｅ　アトモスフィア》　ＡＴＫ／１０００→４０００

「攻撃力４０００…！これを食らったらお終いだぞ！？」

「行け、嵐！」

「バトル！《Ｔｈｅ　アトモスフィア》でダイレクトアタック！」

「っ、まだやられない！罠カード《メタル・リフレクト・スライム》！このカードを守備力３０００のモンスターとして扱い、私のフィールドに特殊召喚する！」

《メタル・リフレクト・スライム》　ＤＥＦ／３０００

「ならそいつに攻撃だ！テンペスト・サンクションズ！」

私のフィールドから竜巻が巻き起こり、鋼のスライムをばらばらに切り裂いていく。このカードですら一時凌ぎにしかならないなんて…。

「カードを2枚セットしてターンエンドだ！」

嵐

ＬＰ／１６００
手札／０
モンスター／《Ｔｈｅ　アトモスフィア》（ＡＴＫ／４０００）
魔法・罠／《溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム》リバース×２

凄い…。前のターンは私が圧倒的に有利だったはずなのに、今は逆の立場にいる。これが嵐君の実力…！

「…なあ、これってまだ3ターンしか経ってないよな？」

「うん」

「なのに何で1キルの応酬してんだよ？」

「まあ、あの2人はいろいろと特殊だからね」

私の場のモンスターは0。トリシューラは除外された。これを乗り越えるには…。

「私のターン！」

引いたカードを確認する。…よし、行ける！

「《氷結界の舞姫》を召喚！」

青いマフラーと大きな一対のチャクラムを身につけた少女――スイレンがフィールドに現れた。

《氷結界の舞姫》　ＡＴＫ／１７００

「頼んだよ、スイレン！」

『お任せください、姫様！』

「トリシューラの他にも精霊がいるのか？」

『はい！《氷結界の舞姫》のスイレンと申します！』

「続けて行くよ！永続罠（エンジェル・リフト）！墓地のレベル２以下のモンスター１体を特殊召喚する！《氷結界の番犬》を特殊召喚！」

《氷結界の番犬》　ＡＴＫ／　５００

「あいつ、またシンクロ召喚ってのをやる気か！？」

「いや、狙いは他にもある」

「《氷結界の舞姫》の効果発動！私の場に他の氷結界のモンスターがいる時、手札の氷結界のモンスターを任意の数相手に見せ、その数だけ相手のリバースカードを手札に戻す！手札の《氷結界の武士》と《氷結界の封魔団》を公開し、リバースカードを２枚共手札に戻す！風雪の舞！」

『邪魔はさせません！』

チャクラムから雪混じりの突風が放たれ、リバースカードを全て手札に戻した。それを見て嵐君が苦い顔をする。

「スイレン、ありがとう！」

『後はお願いします！』

「うん！レベル４《氷結界の舞姫》にレベル２《氷結界の番犬》をチューニング！封印されし猛虎の誇りが、仲間を導く牙となる！秘めたる力を解き放て！」

☆４＋☆２＝☆６

「シンクロ召喚！咆哮せよ！《氷結界の虎王ドゥローレン》！」

冷気を携える虎王が大地を踏み締める。何だかんだで久々の登場だ。

《氷結界の虎王ドゥローレン》　ＡＴＫ／２０００

「蘇生させた《氷結界の番犬》がフィールドから離れた事で、《エンジェル・リフト》は破壊される。《氷結界の番犬》がシンクロ素材になった事で、カードを１枚ドロー！そしてカードを１枚セットし、ドゥローレンの効果発動！自分フィールド上のカードを任意の数手札に戻し、エンドフェイズ時まで戻したカード１枚につき５００ポイント攻撃力をアップさせる！今伏せたカード１枚を手札に戻す！バウンス・フォース！」

ドゥローレンが吠えると、伏せたカードが水色の光になって取り込まれた。

《氷結界の虎王ドゥローレン》　ＡＴＫ／２０００→２５００

「まだ行くよ！永続罠《氷結転移陣》！私の場の氷結界のモンスター１体を選択し、除外されている氷結界のモンスターを特殊召喚す

る！」

「除外されている…まさか！？」

「そのまさかだよ！ドゥローレンを選択！舞い戻れ、トリシューラ！」

フィールドに魔法陣が展開され、中央にトリシューラが転送されてきた。

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／２７００

「そして、ドゥローレンの攻撃力をトリシューラに与え、ドゥローレンを除外する！」

今度は虎王自身が光になり、トリシューラに力を与えるように吸い込まれる。

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／２７００→５２００

「攻撃力が４０００を超えた！？」

「バトル！トリシューラでアトモスフィアに攻撃！トライデント・ブリザード！」

『『『ガアアァアアアア！！』』』

トリシューラの３つの吹雪がアトモスフィアを狂いなく捕らえた。

『クォオオォオォオォ！』

「ぐぅうう！アトモスフィア…」

嵐　ＬＰ／１６００↓　４００

後１枚カードを戻せたら勝てたんだけど、手札にあるのはモンスターばかりだし、仕方ないか。

「カードを１枚セットし、ターンエンド！」

月沙
ＬＰ／４０００
手札／６
モンスター／《氷結界の龍　トリシューラ》（ＡＴＫ／５２００）
魔法・罠／《氷結転移陣》リバース×１

手札にあるのは全部モンスター。こんなに手札があるのに消費できないのは惜しいな…。一応、手札には《デブリ・ドラゴン》が、墓地には《天からの落とし物》で捨てた《氷結界の破術師》がいる。ライフはまだ減ってないからある程度の攻撃は耐えられるし、何か厄介なモンスターを出されてもグングニールを出せるからすぐに除去できる。嵐君のライフも１０００を切ってるし、私が有利なのは変わらない。

でも、嵐君の事だ。ここで１発逆転を狙ってくるかもしれない。次のドローで全てが決まる…！

「…さすがだな」

「？」

「デュエルの初めからずっとドキドキさせられっぱなしだ。お前は俺が今まで戦ってきた中でも、1番強いデュエリストの1人だ」

「褒めてくれてありがと。でも、嵐君もまだ終わりじゃないでしょ？」

「当たり前だ。逆転の切り札はデッキに眠っている。そいつを引き当てれるかどうかで勝敗が決まる。…行くぜ」

私から見ても、嵐君はとても強い。ただデュエルが強いだけじゃない。アトモスフィアを見てる時の嵐君は、仲間に向けるような信頼に満ちた目をしていた。

「俺の…」

そんな人が使うデッキは必ず…。

「ターン！！」

必ず応えてくれる！

「……よく、来てくれたな」

「！」

「手札から《時を司る神鳥－ユリウス－》の効果発動！」

「ユリウス？」

「来た！嵐のもう１つの切り札だ！」

私はあんなカードを知らない。ここで未知のカードが来るなんて、まずいけどとてもワクワクする。

「手札からこいつ自身を墓地に送り、ライフを半分払う！」

嵐　ＬＰ／　４００→　２００

「ユリウス！」

『ピィイイイ！』

嵐が叫ぶと時計を持った白い小鳥が飛び出した。あれ？もしかしてユリウスも精霊？

「リバース・オブ・タイム！！」

ユリウスの時計の針が逆向きに回り始め、だんだん速度を上げていく。

「直前のターンで俺のフィールドから墓地に送られたモンスターを可能な限り特殊召喚する！」

《時を司る神鳥（つかさど）－ユリウス－》
効果モンスター（オリジナル）
星１／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　１００
この効果は自分のターンのメインフェイズにのみ発動することができる。
手札からこのカードを墓地に送り、ライフポイントを半分支払う。

このターンの前の自分、または相手のターンに自分フィールド上から墓地に送られたモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果で特殊召喚されたモンスターが破壊された時、自分は破壊されたモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。

直前のターン…という事は…！

「蘇れ！アトモスフィア、ラヴァ・ゴーレム！」

鳥獣と悪魔が分離して特殊召喚された。装備カードになってても『自分フィールド上』なら大丈夫みたい。

《Ｔｈｅ　アトモスフィア》　ＡＴＫ／１０００
《溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム》　ＡＴＫ／３０００

「マジかよ！？そんなカードが…！」

私にはまだ伏せカードが1枚ある。でもこれは攻撃を耐え切る事前提のカード。嵐の場のモンスターの攻撃力の合計は４０００ジャスト。

「アトモスフィアの効果発動！トリシューラを装備カードとして吸収する！」

このデュエルは私の負け。でも、これだけは…！

「罠カード《亜空間物質転送装置》！」

「何！？」

「トリシューラをエンドフェイズ時まで除外する！」

カードから赤い光線が真っ直ぐ飛び出し、トリシューラをフィールドから消し去った。

「2回も奪われたくないからね。負けたよ」

「そういう事か…。ラヴァ・ゴーレムとアトモスフィアでダイレクトアタック！ゴーレム・ボルケーノ！テンペスト・サンクションズ！」

即死級のコンボが連続で飛び出したこのデュエルは、溶岩と竜巻の同時攻撃で幕を下ろした。

月沙　ＬＰ／４０００→１０００→　０

嵐　ＷＩＮ

「負けちゃったか…」

「凄いデュエルだったな。お前はよくやったよ」

ソリッドビジョンが消えると、紅刃が慰めてくれた。ちょっと嬉しい。

「嵐！」

で、沙耶ちゃんは…。

「沙耶！おおっと！」

「「！？」」

ええ！？嵐君の腕に抱き付いてる！？

「おめでとう！本当に危なかったな…」

「ユリウスが来てくれなかったら負けてたな。お前も応援サンキュー」

嵐君に頭を撫でてもらって気持ちよさそう。積極的すぎる…。

…ああ、ここに来る前にフォッタが言ってた『砂糖を吐かないように気をつけろ』って言葉の意味がやっとわかった。

あの2人…甘い！甘すぎる！ていうか公然でイチャつくな！

「2人共、ここにとびきり苦いお茶があるけどいる？」

「…くれ」

「…遠慮なく」

私と紅刃はフォッタからお茶を貰って一気に飲み干した。…うん、物凄く苦い。でもこれくらいじゃないとあの空気を中和できない。

「月沙」

あ、嵐君と沙耶ちゃんが来た。さすがにもう抱き付いてないけど。

「今回は俺が勝てたけど、1歩間違えてたら負けていた。本当に強いな」

「そっちこそ。今日はありがとう」

「さて、そろそろ元の場所に帰すよ」

フォッタはまた光の球を取り出した。もうお別れか…。

「紅刃、いろいろ話をしてくれてありがとな。ヴァンダルギオンをもっと生かせるように頑張る」

「ああ、俺だってそうするつもりだ」

…もしかして、紅刃と沙耶ちゃんが仲良く話してたのは、お互いにヴァンダルギオンを使ってるから?…うん、きっとそうだ。沙耶ちゃんが嵐君以外の男子に興味があるわけない。

「月沙、またデュエルしような」

「うん。次は負けないよ!」

「…嵐、沙耶、最後に1つ言っておく」

「何だ?」

「人前でイチャつくのはなるべく控えろよ」

「「は？」」

最後に聞いたのは、嵐君と沙耶ちゃんのハモッた1語だった。

「あ、戻ってきた」

私達が元いた場所に戻ると、もう夕方だった。快晴だから、夕焼けがとても綺麗だ。

「…今回のは、今までで1番疲れたな。俺はデュエルしてねえのに…」

「あはは…。でも、凄く幸せそうだったな」

嵐君、沙耶ちゃん、お幸せにね。

「さてと…晩飯もあるし、早く帰るか」

紅刃はそう言って寮に向かって歩き出した。私も帰らないと…いや…。

「あ、あの！」

「ん？」

「その…」

勇気出せ、私！

「途中まで…その…手…繋いでもいい…？」

「は？」

夕焼けがあってよかった。今絶対顔赤い。

「あ、ああ…いいぞ。ほら」

「…ありがと」

無事に許可を貰って手を繋いだ。よくやった、私。

「行くか」

「うん」

そのままま歩き始めた。そうだね…たまには思い切って行動してみるのもいいかも。

「（…俺、今絶対顔赤いよな？夕焼けでよかった…）」

私達は無言のまま、夕焼けを背負って寮への道を歩んでいった。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

特別編　闇纏う風からの来訪者（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「始める前に1つ聞きたいんだけど…璃音、その大量の液体は何だ？」

璃音「フォッタから貰ったお茶よ。飲みたい時に飲みなさい」

勇香「お茶？まあ、丁度喉渇いてるし、1杯貰うぞ」

璃音「どうぞ」

勇香「……にっが！？何だこれ！？めちゃくちゃ苦いぞ！？」

璃音「砂糖対策よ」

フィレス『グルルル…』

勇香「砂糖！？いやでも、お前苦いの駄目なんじゃ…」

璃音「砂糖を吐くよりはマシよ」

勇香「だから砂糖て何！？」

璃音「今回はゲストとして、『遊戯王ＧＸ～闇纏う風と盗賊王～』で活躍中の紫藤嵐と加賀見沙耶に来てもらったわ」

嵐「どうも」

勇香「あ！よお、お疲れさん」

沙耶「おまけコーナーか…。何か面白そうだな」

ロコナ『アラシとサヤってすっごく仲良いよね？』

嵐「まあ、付き合ってるからな」

沙耶「嵐、そんな事平気で言うなよ…」

嵐「事実だからいいだろ」

璃音「…ん…プハァ。そういえばそうだったわね。幸せそうで何よりよ。紅刃と月沙にも少しだけ見習わせたいわね」

嵐「そういえば、紅刃とは仲良く話してたけど、何でだ？」

沙耶「同じヴァンダルギオンの精霊を連れていたからだよ。…言っとくけど、その…俺は、嵐にしか興味ねえからな…？」

璃音「グビッ…ッハァ。さて、カード考察に入るわよ」

勇香「璃音、顔色悪いぞ？そんな顔色で大丈夫か？」

璃音「大丈夫よ、問題ないわ。今回紹介するのは、嵐の切り札で唯一のオリカ《時を司る神鳥－ユリウス－》よ」

《時を司（つかさど）る神鳥－ユリウス－》

効果モンスター（オリジナル）
星１／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　１００
この効果は自分のターンのメインフェイズにのみ発動することができる。
手札からこのカードを墓地に送り、ライフポイントを半分支払う。
このターンの前の自分、または相手のターンに自分フィールド上から墓地に送られたモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果で特殊召喚されたモンスターが破壊された時、自分は破壊されたモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。

璃音「手札から墓地に送り、ライフを半分払う事で効果を発動するカードよ（耐えなさい…耐えるのよ、私）」

嵐「直前のターンの間に自分フィールド上から墓地に送られたモンスターをまとめて特殊召喚できる」

沙耶「《Ｔｈｅ　アトモスフィア》とかの効果で装備カードになっていたモンスターでも蘇生できるんだ。嵐のデッキとは相性抜群だな」

勇香「相手からモンスターを奪うデッキで最大限に活躍できるな。最近じゃ、【機皇帝】とかか？」

ロコナ『リオン、ペットボトルで一気飲みしてないで解説してよ』

勇香「何やってんだお前！？つーか無理すんな！」

璃音「う…大丈夫よ。蘇生したモンスターが破壊されるとそのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受けるわ。でも、《レインボ

ー・ライフ》で回復したり、《地獄の扉越し銃》で相手へのバーンダメージに変えたりする事もできるわ。《マテリアル・ドラゴン》や《ブラックフェザー・ドラゴン》もいいわね。デメリットも使い方次第よ」

勇香「え～、璃音が何かやばいから今回はここまでにするぞ。嵐、沙耶、来てくれてありがとな」

嵐「俺も楽しかったし、勉強になった。また機会があったらよろしくな」

沙耶「さっきから璃音が飲んでたこれって何なんだ？もう全部飲み干しちゃってるけど」

璃音「何でもないわ。気にしないで」

勇香「全部飲んだのかよ！？１Ｌペットボトル２本分だぞ！？」

ロコナ『あ、そうだ！年末年始企画はまだやってるよ！活動報告にも内容を書いといたから、まだの人は１２月２９日までにどんどん投稿してね！』

嵐「…なあ、これって質問や投票が集まらなかったらどうするんだ？」

璃音「ない知恵絞ってネタを捻り出すしかないわね。最悪誰かがお星様になる可能性も…」

勇香「マジで質問・投票してくださいオ願イシマス」

沙耶「それじゃ、またな！年末年始企画もそうだけど、『遊戯王GX～闇纏う風と盗賊王～』もよろしくな！」

勇香「それじゃ、次回も見てくれよな！」

璃音「気持ち悪…うぇっぷ」

フィレス『ガァッ！？』

勇香「えええええぇえええぇ！！？」

沙耶「璃音、大丈夫か！？」

嵐「おい、トイレはどこだトイレは！？」

――――――――――――――

いかがでしたか？

なぜか毎ターン1ターンキル級の攻撃が出てしまいました。どうしてこうなったんだか…。

年末年始企画のアンケートはまだまだやっています。まだ片方しか投稿していない方や両方投稿していない方も、ご協力お願いします。詳細は活動報告に載せてあります。

というわけで、クロスオーバー第3弾でした。語り部さんの『遊戯王GX～闇纏う風と盗賊王～』も面白い小説ですので、是非ご覧ください。語り部さん、ありがとうございました。

では、また次回！

第３９話　解り合うならまずデュエル（前書き）

第３９話です。今回はルーナがデュエルをします。

それではどうぞ！

第３９話　解り合うならまずデュエル

ＳＩＤＥ／月沙

「……」

「「……」」

ピキィイイン！

「…よし、できた」

私はレッド寮前である事をやっている。見物客は俊也と将人だ。

「凄いね。本当にできちゃったよ」

私が今作ったのはアビリティを利用した氷細工だ。思いつきでやってみたけど、案外難しい。

「まだ形が悪いかな。もっと練習しないと」

「溶ける心配はないのか？」

「アビリティだから簡単には溶けないよ」

試しに作ったのは《Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン》。

細部がごてごてになっちゃってるのがどうもなぁ…。

「これをヘアゴム代わりに使えればいいんだけど…」

「頭冷えないの？」

「耐性あるから大丈夫」

覚醒の練習をする度にヘアゴムが切れるものだから、それにかける金額が一般より断然高い。もう何本駄目にした事か…。

「紅刃、まだかな？」

「もうそろそろ来るだろ」

さっき紅刃から連絡があって、私達の居場所を聞いてきたから教えてあげた。すぐにこっちに来るって言ってたけど…。

「おい」

「？」

誰かに呼ばれてそっちを見た。紅刃じゃない。

「レッド寮はここで合ってるか？」

「うん、そうだけど？」

「そうか。…？」

その人は私達をまじまじと見てきた。え、何？私達がどうかした？

「写真で見た顔だな」

「写真？」

「お前らか、この時代に先に来ているって奴は」

「「「！？」」」

え…『時代』って…！？

「なぜその事を知っている！？」

当の本人は、将人を無視して携帯電話を取り出し誰かにかけ始めた。

「もしもし、俺だ。レッド寮でお前らの仲間に会った。……写真で紹介してくれた奴らだ。……ああ……わかった、待ってりゃいいんだな？……わかった。切るぞ」

それだけ話して電話を切った。気になるワードがいくつかあるんだけど…。

「いろいろ聞きたい事があるけど、まず名前を教えてくれないかな？」

俊也の質問を聞いたその人は、携帯をズボンのポケットに突っ込んでから改めて口を開いた。

「俺は星御秋斗。簡単に言えば、お前らの援軍だ」

ＳＩＤＥ／ルーナ

「もうそろそろだ」

前を進むこの男は、私の手首を掴んだまま目的地へ向かっている。

ていうかいつまで掴んでるのよ？いい加減話しなさいよ。

「…逃げないから手を離しなさい。ナージャがあんた側についてるんだから逃げようがないし」

「ならいいか」

あっさり手を離した。

『一緒にいろいろやってきた。どんな壁だって乗り越えてきた。だからわかるんだよ。あいつらが、家柄や金なんかで軽蔑するような奴らじゃないって事ぐらいな』

『俺もその『化け物』の1人だ』

こいつ…真川紅刃は、今まで会ってきたどんな人間とも違った。私の立場や素性を知った上で私を対等に見ている。言葉の1つ1つに、心のどこかで納得させられるような強さがある。

『そういや、まだ下の名前を聞いてなかったな。何て言うんだ?』

そんなこいつが私には眩しすぎて…。

『…私はルーナ。九条院ルーナよ』

思わず、目を反らしてしまった。

こんないい人なら、なおさら私と関わっちゃいけない。なのに、紅刃は自分の親友と私を会わせようとする。

『俺の仲間に会わせるっつったろ？今会っとかねえと後悔するぞ？』

こう言われると、もう何も抵抗できない。結局ついていく羽目になった。

会ったらすぐに別れよう。腐らせるわけにはいかない。

「悪い、遅くなった！」

紅刃が急に大声を出してはっとする。いつの間にか目的地――レッド寮に着いていた。

「あ、紅刃！」

全員で6人。真っ先にリアクションを取ったのは、白い髪をポニーテールでまとめた女の子だった。この人も服装が特殊だ。男子の制服を半袖短パンにした感じ。

「あら、元気そうね」

「ん？…ああっ！？」

茶髪の女子生徒が声を掛けると、紅刃がなぜか驚いた。

「璃音、勇香！お前ら何でここに…！？」

「援軍だよ。これからは私達もアカデミアの生徒だからよろしくな」

今度はオシリス・レッドの制服を着た黒髪ロングの女子が説明する。半袖の上着のしたに白いシャツを着ていて、長ズボンをはいている。そして、赤いラインが入った青い鍔広（つばびろ）の帽子を被っている。ところで、『援軍』って何？

「お前が真川紅刃か？」

「ん？」

藍色の髪のレッド生が紅刃に話し掛ける。こいつと紅刃は初対面のようね。

「……俺は星御秋斗。一応、お前らの仲間だ」

「一応って…」

「こういう奴だ！仲良くしてやってくれ！」

「お前は俺の保護者か！？」

「…？まあ、よろしく」

黒髪の女子が秋斗の首に片腕を回すと、秋斗がしつこそうに払いのける。

「あれ？その子は？」

「見ない顔だな」

「ああ、こいつは…てかお前が自己紹介しろ」

金髪のレッドの男子と灰色の髪の同じレッド生が私に気づいて、紅刃が私に自己紹介を促した。紅刃…私の事忘れてたんじゃないでしょうね？

「…九条院ルーナよ」

「さっき知り合った友達だ」

「友達になった覚えはないわよ！」

「……」

ポニーテールが私をじっと覗き込んでいる。一体何よ？

「ええと…ハルケ〇ニアのヴァ〇エールさん？」

「違うわよ。確かに黒マントと桃色の長髪だけど、私はストレートヘアーだし瞳も赤いから。見ればわかるでしょ？」

全く、何を言い出すかと思えば…。そういえば、昔お母様に『どこかの侍がうらやましがりそうなくらいサラッサラね』って言われた記憶があるわ。

「あはは、ごめんごめん。私は波星月沙、よろしく」

「あ…ええ…」

…何なの、この人達？

みんな楽しそうにしてる。そんな中に私を引き込もうとしている。友達になろうとしている。

私の事情は紅刃しか知らない。みんなが知ったらどうなる？離れていくに決まっている。

どうせ嫌われるなら…。

「…じゃあ、私はこれで…」

「お、おい、どこに行く気だよ？」

「あんた達には関係ない」

「関係ないって…」

紅刃だけは、信じてあげないでもない。でも、私といたら紅刃は私と同じ嫌われ者になってしまう。それだけは絶対に駄目。

「紅刃はともかく、あんた達は信用できない。紅刃が私といたら、あんた達はいずれ紅刃を嫌うようになる」

「どういう意味？」

「私が嫌われ者だからよ」

「ハァ…まだ言ってんのかよ？お前が金持ちだろうが、そのせいで孤立してようが、俺達がお前を嫌うわけねえだろ」

「さりげなく素性をばらしてんじゃないわよ」

何でそこまで言い切れるのよ？信じたって、どうせ…。

「…じゃあ、こうしましょう」

「璃音？」

「私とあなたでデュエルしましょう。あなたが勝ったら私達は何も言わない。その代わり、私が勝ったら私達の友達になってもらうわ」

デュエル？まあ、ここはデュエルアカデミアだから当然の流れよね。

「…いいわ。その条件で勝負よ」

「なら話は早いわね。誰かデュエルディスクを貸してあげて」

茶髪の女子生徒…璃音がデュエルディスクを貸すように頼む。それを聞いて、灰色の髪の男子が前に出る。

「なら俺のを使え」

「その必要はねえよ。ナージャに預けてんだろ？」

こいついきなり何言ってるのよ！？確かに道中仕方なく話したけど…。

「あんた、精霊の事を人前で…！」

「ああ、大丈夫。こいつら全員精霊見えるから。多分秋斗も」

「はあ！？」

何よそれ！？精霊が見える人間が何でそんなに集まってるのよ！？

『じゃあ、出てきても問題ないわね～』

「ナージャ！？」

ナージャまで勝手に出てきて…ああ、ますますめんどくさい事に…。

「君、精霊がいるのかい？」

「ええ…」

『ナージャよ。よろしくね～』

「（《レプティレス・ナージャ》？あれは確かこの時代にはないはず…）」

『とにかく…マスター、これを』

ナージャから、普段預けているデュエルディスクを受け取って、デッキをシャッフルしてセットする。アカデミアのディスクの色を黒にしたタイプよ。

璃音も同じくデュエルディスクを展開して…え？

「嘘…自動でシャッフルしてる？」

「私のデュエルディスクは手作りよ。こういった機能も付けてみたの」

「なかなか便利ね…」

本当によくわからない人達だ。一体何者なの？

『マスター、私はデッキで待機してますね～』

「わかった」

ナージャがデッキに戻ったところで、準備完了。カードを5枚引く。

「始めましょう」

「ええ。負けないわよ！」

この人達を巻き込むわけにはいかない。このデュエル、絶対に勝つ！

「「デュエル！」」

璃音ｖｓルーナ

「先攻は貰うわよ！私のターン！モンスターをセット！カードを2枚セットしてターンエンド！」

ルーナ
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×２

「（今の時点ではまだデッキ内容はわからないわね）私のターン。魔法カード《天使の施し》。カードを3枚ドローし、手札を2枚捨

てる。さらに魔法カード《手札断殺》を発動。お互いに手札を2枚捨て、カードを2枚ドローする」

墓地肥やし…。何を狙っているかはわからないけどありがたいわね。私も丁度手札のモンスターを墓地に送りたかったのよ。

「そして、手札から《スクラップ・キマイラ》を召喚」

文字通りくず鉄のキマイラが召喚される。あんなモンスター、見た事がない。

《スクラップ・キマイラ》　ＡＴＫ／１７００

「《スクラップ・キマイラ》が召喚された時、墓地からスクラップと名のついたチューナーモンスターを1体特殊召喚できるわ」

「チューナーモンスター？」

「墓地からチューナーモンスター《スクラップ・ビースト》を特殊召喚」

今度は虎だかチーターだかに似たくず鉄のモンスターが現れる。璃音のデッキは『スクラップ』と呼ばれるモンスターで構成されてるようね。

《スクラップ・ビースト》　ＡＴＫ／１６００

それにしても、チューナーモンスター？チューナー…どこかで聞いたような…。

「ルーナ、でしたっけ？あなた、学年はいくつ？」

「学年？１年よ。昨日入学したばかり」

「そう。なら、知らないのも無理はないでしょうね」

「何をよ？」

「私達は特別な種類のモンスターを使っているの。今からそれを見せてあげるわ」

「ま、今のうちに知っといても損はねえな」

特別な種類のモンスター？チューナーモンスターの他にも何かあるの？

「いきなり飛ばす気だね」

「行くわよ。レベル４《スクラップ・キマイラ》にレベル４《スクラップ・ビースト》をチューニング！」

ビーストが黒い４つの輪になり、ビーストがその中に飛び込んで４つの星になる。何なのあれ？生まれて初めてみるわ。

「巡りし想いが、絆を示す証となる！光を導く星となれ！」

☆４＋☆４＝☆８

「シンクロ召喚！鳴動せよ！《スクラップ・ドラゴン》！！」

輪と星が光の柱になり、中からくず鉄の龍が姿を現した。

《スクラップ・ドラゴン》　ＡＴＫ／２８００

「シンクロ…召喚…？」

何あれ？あんなの知らない。歴代のどんなデュエリストもあんな召喚方法を使う事はなかった。

「チューナーモンスターとその他のモンスターのレベルを合計し、その数と同じレベルのシンクロモンスターを融合デッキから特殊召喚する…これがシンクロ召喚よ」

チューナーはそのために必要なモンスターってわけね。シンクロ召喚……シンクロモンスター…生まれて初めて見た。あんな召喚方法、見た事が…。

…え？『シンクロ』？

どこかで聞いたような…気のせい？

「カードを１枚セットし、《スクラップ・ドラゴン》の効果を発動。お互いのフィールド上のカードを１枚ずつ破壊するわ。今伏せたカードとあなたの右側のリバースカードを破壊。スクラップ・コレクション！」

『ゴアァアアァアア！』

ドラゴンが雄叫びを上げると、璃音が伏せたカードが光になって破壊され、私の伏せカードが真下から突き出した鉄柱によってブチ

抜かれた。破壊されたのはブラフで伏せた《アームズ・ホール》ね。

「（《アームズ・ホール》…装備カード主体のデッキかしら？）バトルよ。《スクラップ・ドラゴン》でセットモンスターに攻撃！トラッシュ・バースト！」

銀色のブレスが私のモンスターに当たり、爆発が起こる。

「…残念ね。ハズレよ」

煙が晴れると、フィールドにはナージャが立っていた。

《レプティレス・ナージャ》　ＤＥＦ／　０

「《レプティレス・ナージャ》は戦闘では破壊されないわ！」

『伏せカードを破壊したのは失敗だったわね～』

「なら仕方ないわね」

「それと、そのドラゴンはもう戦闘には使えないわよ」

「？」

『グルル…』

《スクラップ・ドラゴン》　ＡＴＫ／２８００↓　０

「！攻撃力が…！」

「ナージャと戦闘をしたモンスターは、バトルフェイズ終了時に攻撃力が０になるのよ！」

《レプティレス・ナージャ》
効果モンスター
星１／闇属性／爬虫類族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
このカードは戦闘では破壊されない。
このカードと戦闘を行ったモンスターはバトルフェイズ終了時に攻撃力が０になる。
自分のエンドフェイズ時、フィールド上に表側守備表示で存在するこのカードを表側攻撃表示にする。

「厄介な効果だな…」

「攻撃したら攻撃力は０になる。あいつどうするつもりだ？」

裏守備表示なら相手の意表を突く事ができる。表側表示なら相手の攻撃を牽制できる。

「私の精霊はなかなか優秀よ？攻撃力０を甘く見ないでもらいたいわね！」

「最初から甘く見るつもりはないわよ。どんなカードにも活躍できる場所がある。その子ももちろん、例外ではないわ」

「へえ…面白い考え方をするじゃない」

『…マスター、あのドラゴン、精霊みたいですよ～』

「え？」

「そうよ。《スクラップ・ドラゴン》のフィレスよ」

『ガルッ』

あんな精霊を連れてる人もいるのね。会話はできなさそうだけど。

「でも、この程度でフィレスは倒せないわよ？」

『グルッ！』

「私の場にスクラップのモンスターがいる事で、手札から《スクラップ・オルトロス》を特殊召喚！」

２つの頭を持つ犬みたいなモンスター。もちろん、がらくたでできている。

《スクラップ・オルトロス》
チューナー（効果モンスター）
星４／地属性／獣族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ１１００
このカードは通常召喚できない。
自分フィールド上に「スクラップ」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚に成功した時、自分フィールド上に表側表示で存在する「スクラップ」と名のついたモンスター１体を選択して破壊する。
このカードが「スクラップ」と名のついたカードの効果によって破壊され墓地へ送られた場合、「スクラップ・オルトロス」以外の自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついたモンスター１体を

選択して手札に加える事ができる。

《スクラップ・オルトロス》　ＡＴＫ／１７００

「オルトロスが自身の効果で特殊召喚に成功した時、私のスクラップ１体を破壊する。私はオルトロス自身を破壊する」

出てきたばかりのモンスターが光になって破壊される。何を考えてるの…？

「オルトロスがスクラップと名のついたカードの効果で破壊された時、墓地からスクラップ１体を手札に加える事ができる。オルトロスもスクラップだから効果を発動できるわ。墓地から《スクラップ・キマイラ》を手札に加える。そして、スクラップが破壊された時、墓地から《スクラップ・サーチャー》を特殊召喚する」

今度は鳥みたいなモンスター。スクラップのモンスターは見ていて飽きないわね。

《スクラップ・サーチャー》
効果モンスター
星１／地属性／鳥獣族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　３００
このカードが墓地に存在し、自分フィールド上に存在する「スクラップ・サーチャー」以外の「スクラップ」と名のついたモンスターが破壊され、墓地へ送られた時、このカードを墓地から特殊召喚する事ができる。
このカードが特殊召喚に成功した時、「スクラップ」と名のついたモンスター以外の自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。

《スクラップ・サーチャー》　ＤＥＦ／　３００

「そして、スクラップのモンスター1体…《スクラップ・サーチャー》を破壊し、墓地からチューナーモンスター《スクラップ・マインドリーダー》を特殊召喚！」

次から次へと…！今度は何よあの医者もどきは！？

《スクラップ・マインドリーダー》
チューナー（効果モンスター）
星1／地属性／機械族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
1ターンに1度、自分のメインフェイズ2にこのカードが自分の墓地に存在する場合、自分フィールド上に存在する「スクラップ・マインドリーダー」以外の「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択して発動する事ができる。
選択したモンスターを破壊し、このカードを墓地から特殊召喚する。
この効果で特殊召喚されたこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。
このカードをシンクロ素材とする場合、他のシンクロ素材モンスターは全て「スクラップ」と名のついたモンスターでなければならない。

《スクラップ・マインドリーダー》　ＡＴＫ／　０

「この効果で特殊召喚したマインドリーダーは、フィールドから離れた時に除外されるわ。レベル８《スクラップ・ドラゴン》にレベル1《スクラップ・マインドリーダー》をチューニング！」

またシンクロ召喚！？黒い輪が1つと星が８つ…。レベルによって数が変わるのね。

「巡りし想いが、双龍となりて翼を翳す！光を導く星となれ！」

☆８＋☆１＝☆９

「シンクロ召喚！食らいつけ！《スクラップ・ツイン・ドラゴン》！」

フィレスの頭が２つに増えた。そうとしか言いようがない。何？《サイバー・ツイン・ドラゴン》みたいな奴なの？

《スクラップ・ツイン・ドラゴン》　ＡＴＫ／３０００

「カードを１枚セットしてターンエンドよ」

さてと…そろそろ私も行かせてもらうわよ！

「待ちなさい！罠カード《トゥルース・リインフォース》を発動！デッキからレベル２以下の戦士族モンスター１体を特殊召喚する！」

《トゥルース・リインフォース》

通常罠

自分のデッキからレベル２以下の戦士族モンスター１体を特殊召喚する。

このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行う事ができない。

「このカードの発動ターンはバトルフェイズを行えないけど、相手のターンで発動したから問題ないわ！デッキからデュアルモンスター《デュアル・ソルジャー》を特殊召喚！」

緑の忍者っぽい戦士がナージャの隣に現れた。

《デュアル・ソルジャー》
デュアルモンスター
星２／風属性／戦士族／ＡＴＫ　５００／ＤＥＦ　３００
このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。
●このカードは１ターンに１度だけ、戦闘では破壊されない。
このカードが戦闘を行う場合、そのダメージ計算後に自分のデッキから「デュアル・ソルジャー」以外のレベル４以下のデュアルモンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

《デュアル・ソルジャー》　ＡＴＫ／　５００

「デュアルモンスター…？」

「（次は《デュアル・ソルジャー》！？）」

璃音
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《スクラップ・ツイン・ドラゴン》（ＡＴＫ／３０００）
魔法・罠／リバース×１

「私のターン！魔法カード《強欲な壺》を発動！カードを２枚ドロ

ー！そして《デュアル・ソルジャー》を再度召喚！『デュアル』の特徴は知ってるかしら？」

「ええ。説明は不要よ」

デュアルモンスター達は、普段フィールドと墓地では通常モンスターとして扱う。でも、召喚権を使って再度召喚する事で効果モンスターとなり、隠された効果を発揮する。

「《デュアル・ソルジャー》に《デーモンの斧》を装備！攻撃力を１０００ポイントアップさせる！」

斧はそれなりに大きい。その小柄な体でよく振り回せるわね。

《デュアル・ソルジャー》　ＡＴＫ／　５００→１５００

「バトル！《デュアル・ソルジャー》で《スクラップ・ツイン・ドラゴン》に攻撃！」

「あいつ、自爆する気か！？」

「いや、違う！」

ソルジャーが斧を大きく振りかぶって振り下ろすけど、簡単に弾かれてしまった。でも、これでいい。

ルーナ　ＬＰ／４０００→２５００

「これくらい、くれてやるわよ！《デュアル・ソルジャー》は１ターンに１度戦闘では破壊されない！」

「それだけじゃないんでしょう？」

「当然よ！《デュアル・ソルジャー》が戦闘を行った時、デッキからレベル４以下のデュアルモンスターを１体特殊召喚できるわ！来なさい、《エヴォルテクター　シュバリエ》！」

剣と赤い鎧を身につけた炎の騎士がフィールドに呼び出される。

《エヴォルテクター　シュバリエ》
デュアルモンスター
星４／炎属性／戦士族／ＡＴＫ１９００／ＤＥＦ　９００
このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。
●自分フィールド上に表側表示で存在する装備カード１枚を墓地へ送る事で、相手フィールド上に存在するカード１枚を破壊する。

《エヴォルテクター　シュバリエ》　ＡＴＫ／１９００

「そのモンスターにはこのターンで退場してもらうわ！装備魔法（スーペルディス）を《エヴォルテクター　シュバリエ》に装備！」

シュバリエの全身から朱色の光が漏れ始める。

《スーペルヴィス》
装備魔法
デュアルモンスターにのみ装備可能。

装備モンスターは再度召喚した状態になる。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードが墓地へ送られた時、自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択して特殊召喚する。

「装備されたデュアルモンスターは再度召喚された状態になるわ！《エヴォルテクター　シュバリエ》の効果発動！装備カード1枚を墓地に送り、相手フィールド上のカード1枚を破壊する！《スーペルヴィス》を墓地に送り、《スクラップ・ツイン・ドラゴン》を破壊するわ！アームズ・ヒート！」

朱色の光が剣に集中し、シュバリエがそれを衝撃波にして放つ。
くず鉄の双龍は真っ二つに斬られ、爆発した。

「フィレス…！」

「これだけじゃないわよ！《スーペル・ヴィス》が墓地に送られた時、自分の墓地から通常モンスター1体を特殊召喚できる！」

「その前に《スクラップ・ツイン・ドラゴン》の効果を発動するわ。相手によって破壊された時、自分の墓地からシンクロ以外のスクラップを1体特殊召喚できる。《スクラップ・ビースト》を特殊召喚」

《スクラップ・ビースト》　ＡＴＫ／１６００

チューナーを蘇生したって事は、次でまたシンクロ召喚するつもり？…まあ、いいわ。

「私も墓地から通常モンスターを特殊召喚するわ！蘇れ、《フェニックス・ギア・フリード》！」

白を基調とした鎧と大剣を身につけている、鳳凰の名を冠する騎士。私のメインデッキの中で1番攻撃力が高いモンスターよ。

《フェニックス・ギア・フリード》
デュアルモンスター
星８／炎属性／戦士族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２２００
このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。
●相手が魔法カードを発動した場合、自分の墓地に存在するデュアルモンスター1体を選択して特殊召喚する事ができる。
また、自分フィールド上に表側表示で存在する装備カード1枚を墓地へ送る事で、フィールド上に存在するモンスターを対象にする魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

《フェニックス・ギア・フリード》　ＡＴＫ／２８００

「攻撃力２８００!?」

「さらに魔法カード《馬の骨の対価》！効果モンスター以外のモンスター1体を墓地に送り、カードを2枚ドローする！」

《馬の骨の対価》
通常魔法
効果モンスター以外の自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を墓地へ送って発動する。
自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「《エヴォルテクター　シュバリエ》を墓地に送り、カードを2枚ドロー！カードを3枚セットしてターンエンドよ！《レプティレス・ナージャ》は自分のエンドフェイズ時に表側守備表示で存在する時、攻撃表示になるわ！」

《レプティレス・ナージャ》　ＡＴＫ／　０

ルーナ
ＬＰ／２５００
手札／１
モンスター《レプティレス・ナージャ》（ＡＴＫ　０）《デュアル・ソルジャー》（ＡＴＫ／１５００）《フェニックス・ギア・フリード》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／《デーモンの斧》リバース×３

「（この子、予想以上に強いわね。面白くなってきたわ）」

「（おかしい…。ルーナが使っているカードはほとんどがこの時代にない物。どこで手に入れたの…？）」

さあ、攻撃するならしてきなさい！【デュアル・ゼロ】デッキの力を思い知らせてあげるわ！

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第３９話　解り合うならまずデュエル（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「璃音が本編でデュエルするのは久々だな」

璃音「ええ。自分で言うのも何だけど、この先の展開が楽しみね」

フィレス『グルルッ』

勇香「でもよ、《スクラップ・デーモン》と《スクラップ・マインドリーダー》はまだ日本語版が出てないだろ？勝手に名前を和訳してもいいのか？」

璃音「丁度いいカードが他になかったのよ。そのあたりは大目に見てくれる？」

ロコナ『ねえねえ、今回紹介するカードはなあに？』

璃音「そうだったわね。始めましょうか。今回はルーナの精霊よ」

《レプティレス・ナージャ》
効果モンスター
星１／闇属性／爬虫類族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
このカードは戦闘では破壊されない。
このカードと戦闘を行ったモンスターはバトルフェイズ終了時に攻撃力が０になる。
自分のエンドフェイズ時、フィールド上に表側守備表示で存在する

このカードを表側攻撃表示にする。

璃音「戦闘で破壊されず、戦闘を行ったモンスターの攻撃力を0にする効果を持っているわ」

勇香「嫌な効果だな…。次のターンで反撃されるだろうから迂闊に攻撃できないぞ？」

ロコナ『でも、自分のエンドフェイズに勝手に攻撃表示になっちゃうよ？』

璃音「そこは他のカードで補いなさい。《和睦の使者》や《ディメンション・ウォール》とかなら戦闘を行いつつダメージを消して、さらに攻撃力を0にできるから相性がいいわね」

勇香「《立ちはだかる強敵》とかで攻撃を強制する手もあるな。裏守備でセットして、攻撃されたらすぐにリリースやコストに使うのもありだ」

ロコナ『るーなは何で【デュアル】にこのカードを入れてるのかな？』

勇香「さあな。【デュアル・ゼロ】ってのも引っ掛かるし、何か秘密がありそうだな」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『年末年始企画のアンケートはまだやってるよ！まだ投稿し

てない人も、片方だけの人もどんどん投稿してね！』

勇香「人気投票で1位に指定した奴には、何か一言コメントを付けてくれ！それじゃ、次回も見てくれよな！」

――――――――――

いかがでしたか？

ルーナのデッキは【デュアル】ですが、普通の【デュアル】じゃありません。ＯＣＧならまず無理でしょう。次回で全貌が明らかになります。

中途半端だから次回は今年中に投稿したいな…。年末年始企画もありますし、頑張ります。

アンケートはまだまだ受け付けてます。期限は２０１０年１２月２９日までです。まだ投稿していない人もご協力お願いします。

では、また次回！

第４０話　モンスターを基本ステータスだけで判断するな（前書き）

思ったより早く投稿できました。第４０話です。

璃音ｖｓルーナのデュエルは今回で決着がつきます。

それではどうぞ！

第４０話　モンスターを基本ステータスだけで判断するな

ＳＩＤＥ／璃音

ルーナ
ＬＰ／２５００
手札／１
モンスター《レプティレス・ナージャ》（ＡＴＫ　０）《デュアル・ソルジャー》（ＡＴＫ／１５００）《フェニックス・ギア・フリード》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／《デーモンの斧》リバース×３

璃音
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《スクラップ・ビースト》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×１

九条院ルーナ…予想以上の強敵ね。

展開力、除去力、どちらを取っても並のレベルじゃない。攻撃力すら操るその戦術は侮れないわ。

でも、私も簡単にはやられないわ。これでも兄さん達と同じくらいの実力はあるのよ？

「私のターン！」

そうね…あれで行きましょう。

「また《スクラップ・ドラゴン》をシンクロ召喚するつもり？」

「生憎、私のデッキには１枚しか入ってないわ。でも、フィレスだけが私のデッキの強さじゃないわよ？ビーストをリリースし、《スクラップ・ゴーレム》をアドバンス召喚！」

頭は電子レンジ、胴体は冷蔵庫。そんなモンスターが現れた。

《スクラップ・ゴーレム》
効果モンスター
星５／地属性／岩石族／ＡＴＫ２３００／ＡＴＫ１４００
１ターンに１度、自分の墓地に存在するレベル４以下の「スクラップ」と名のついたモンスター１体を選択し、自分または相手フィールド上に特殊召喚する事ができる。

《スクラップ・ゴーレム》　ＡＴＫ／２３００

「《スクラップ・ゴーレム》の効果発動。１ターンに１度、自分の墓地からレベル４以下のスクラップ１体を特殊召喚するわ。墓地から《スクラップ・サーチャー》を相手フィールド上に特殊召喚！」

「え？」

《スクラップ・サーチャー》　ＡＴＫ／　１００

「攻撃対象を増やして安全にダメージを与えるつもり？」

「それだけじゃないわよ。《スクラップ・サーチャー》が特殊召喚

された時、そのフィールド上のスクラップ以外のモンスターを全て破壊する」

「ええ！？何よそれ！？」

これで厄介な2体のモンスターを破壊できる。特にナージャはフィールドに残すわけにはいかないわ。

「く…ナージャだけはやらせないわよ！永続罠《虚無＝無限（ゼロ・インフィニティ）》！私の場の攻撃力０のモンスターはカードの効果では破壊されない！」

《虚無＝無限》
永続罠（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在する元々の攻撃力が０のモンスターは相手のカードの効果で破壊されない。

「なら、《フェニックス・ギア・フリード》を破壊するわ。スクラップ・バーン！」

サーチャーが全身から鈍い光を放つと、《フェニックス・ギア・フリード》が破壊された。

『危なかったわね…』

「…バトルよ。《スクラップ・ゴーレム》で《スクラップ・サーチャー》を攻撃！ジャンク・ツイスター！」

ゴーレムが右腕のプロペラを回転させ、突風をサーチャーにぶつける。

「本当はナージャのために伏せたんだけど…。罠発動！戦闘ダメージを代わりに受けてもらうわよ！」（ディメンション・ウォール）

「！」

ルーナの前に異次元の穴が開き、突風を吸い込む。すると、私の目の前で同じ穴が開き、突風を吐き出した。

「くっ…！」

璃音　ＬＰ／４０００→１８００

「ダメージまでほとんど丸々返しやがった…！」

「あれは戦闘ダメージを肩代わりさせるだけで、戦闘そのものは無効にならない。ナージャに攻撃させてあれでダメージを完全に跳ね返しつつ、《スクラップ・ゴーレム》の攻撃力を０にするつもりだったみたいだな。あの女、かなりの力を持っている」

秋斗の言う通りよ。パートナーの特性をきちんと理解しているわね。

「…カードを１枚セットしてターンエンド」

璃音
ＬＰ／１８００
手札／１
モンスター／《スクラップ・ゴーレム》（ＡＴＫ／２３００）
魔法・罠／リバース×２

一応、私のスクラップが破壊されれば墓地のサーチャーが蘇り、ルーナのモンスターを一掃してくれる。攻撃力０のモンスター以外ならあまり怖くはないわね。

「（あの《スクラップ・サーチャー》は厄介ね。迂闊にスクラップを破壊できないじゃない…。対処できるとすればあのカード。早く来なさいよ！）私のターン！」

どう来るかしら？また玉砕覚悟で攻めるか、守りを固めるか…。

「…来たわね」

「？」

「私の場に元々の攻撃力が０のモンスターがいる時、お互いの墓地のモンスターを１体ずつ除外してこのカードを特殊召喚する！墓地の２体目の《エヴォルテクター　シュバリエ》と《スクラップ・サーチャー》を除外！」

しまった…！除外されてしまっては蘇生できない！

「来なさい、《マジシャン・オブ・ゼロ》！」

長髪、瞳、ローブ、魔法使い族によく見られるとんがり帽子。それらの全てが赤い魔術師が召喚された。右手には朱色の杖が握られている。

《マジシャン・オブ・ゼロ》
効果モンスター（オリジナル）
星１／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０

このカードは通常召喚できない。
自分フィールド上に元々の攻撃力が０のモンスターが表側表示で存在する時、自分及び相手の墓地からモンスターを１体ずつ除外した場合のみ特殊召喚する事ができる。
このカードは戦闘では破壊されない。
１ターンに１度、手札またはデッキから元々の攻撃力が０のモンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
自分の元々の攻撃力が０のモンスターが戦闘を行う時、その戦闘によって自分が受ける戦闘ダメージは代わりに相手が受ける。

《マジシャン・オブ・ゼロ》　ＡＴＫ／　０

「（あのモンスターは私が元いた世界にはなかった…！）」

「私の切り札は3枚あるわ。１つは『デュアル』、《フェニックス・ギア・フリード》。２つは『ゼロ』、《マジシャン・オブ・ゼロ》」

「あなたのそのデッキ、やっぱり純粋な【デュアル】ではないのね」

「ええ！私のデッキは【デュアル・ゼロ】と呼んでるわ！デュアルモンスターと攻撃力が０のモンスター達で戦うデッキよ！」

【デュアル・ゼロ】…。なるほど、《レプティレス・ナージャ》をデッキに入れてるのはこういう事だったのね。

「【デュアル・ゼロ】…」

「【デュアル】にそんなタイプが…」

「凄えな。面白くなってきたぜ！」

上から順に、俊也、月沙、勇香。月沙が知らないという事は、相当珍しいタイプなんでしょうね。それも、ルーナが独自で編み出した全く新しいタイプ…。

勇香じゃないけど、面白いわね。次はどんな戦術を披露してくれるのかしら？

「行くわよ！《マジシャン・オブ・ゼロ》の効果発動！１ターンに１度、手札かデッキから攻撃力０のモンスター１体を特殊召喚できる！デッキから《ゼロ・ガードナー》を特殊召喚！」

虫みたいなモンスターが『０』の形の太い鉄をぶら下げて現れた。

《ゼロ・ガードナー》
効果モンスター
星４／地属性／戦士族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
このカードをリリースして発動する。
このターン自分のモンスターは戦闘では破壊されず、相手モンスターとの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。
この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

《ゼロ・ガードナー》　ＡＴＫ／　０

「念のために使っておこうかしら。装備魔法《二重仕掛けの埋葬》！ライフを５００払い、自分の墓地からデュアルモンスター１体を特殊召喚してこのカードを装備する！」

《二重仕掛けの埋葬》
装備魔法（オリジナル）

ライフを５００ポイント支払い、自分の墓地からデュアルモンスター１体を特殊召喚しこのカードを装備する。
装備モンスターが破壊された時、このカードを破壊する。
このカードが破壊された時、装備モンスターを破壊する。
装備モンスターが相手モンスターを戦闘で破壊した時、自分のデッキからレベル２以下で攻撃力５００以下のモンスター１体を手札に加える事ができる。
このカードは墓地に送られた時、除外する。

ルーナ　ＬＰ／２５００→２０００

「蘇りなさい、《フェニックス・ギア・フリード》！」

さっきの鳳凰の騎士が颯爽と現れる。さすが、鳳凰を名乗るだけの事はあるわね。

《フェニックス・ギア・フリード》　ＡＴＫ／２８００

「不死鳥は何度でも蘇るのよ！バトルよ！《マジシャン・オブ・ゼロ》で《スクラップ・ゴーレム》に攻撃！」

「あいつ、自爆特攻する気か！？」

「《マジシャン・オブ・ゼロ》は戦闘で破壊されないわ！そして、攻撃力０のモンスターとの戦闘で発生するダメージは全て相手が受ける！」

「ええっ！？」

まずいわね。これを通せば２３００の戦闘ダメージを代わりに私

が受けてしまう。そうなれば私の負け。

「マジック・エルプション！」

「罠カード《スクラップ・シールド》！シンクロ以外のスクラップ1体に装備する事で、装備モンスターの攻撃力より低い相手モンスターは攻撃する事ができない！」

ゴーレムの周りの地面からくず鉄の壁が突き出てきて、朱色の光弾の爆発を完全に遮断した。

《スクラップ・シールド》
通常罠（オリジナル）
発動後このカードは装備カードとなって、自分フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター以外の「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択してこのカードを装備する。
装備モンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つ相手モンスターは攻撃宣言をする事ができない。
装備カードとなったこのカードが墓地に送られた時、相手フィールド上の表側表示のカード1枚を破壊する。

「なら、もっと高い攻撃力で押し切るだけよ！《フェニックス・ギア・フリード》で《スクラップ・ゴーレム》を攻撃！鳳凰炎刃！」

膨大な炎を纏った剣がゴーレムを斬り裂く。でも、これも計算の内よ。

璃音　ＬＰ／１８００→１３００

「《二重仕掛けの埋葬》を装備したモンスターが戦闘でモンスター

を破壊した時、デッキからレベル2以下のモンスター1体を手札に加える！私はデッキから《速攻のかかし》を手札に加える！」

《速攻のかかし》
効果モンスター
星1／地属性／機械族／ＡＴＫ　　0／ＤＥＦ　　0
相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から捨てて発動する。
その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

《ゼロ・ガードナー》に《速攻のかかし》…どれも兄さんが使っているカードね。

「罠発動！私のスクラップ・クラッシュが破壊された時、フィールド上に表側表示で存在する魔法・罠を全て破壊する！」

《スクラップ・クラッシュ》
通常罠
自分フィールド上に存在する「スクラップ」と名のついたモンスターが破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。
フィールド上に表側表示で存在する魔法・罠カードを全て破壊する。

「なっ…！」

「当然、《虚無＝無限》と《二重仕掛けの埋葬》が破壊されるわ」

「く…《二重仕掛けの埋葬》が破壊された時、装備モンスターを破壊してこのカードを除外する…」

「まだよ。装備カードとなった《スクラップ・シールド》が墓地に

送られた時、相手の表側表示のカードを1枚破壊するわ。《デュアル・ソルジャー》を破壊」

くず鉄の盾がいくつもの鉄の矢になり緑の忍者に突撃、呆気なく破壊してしまった。

「う…これ以上攻撃しても意味ないわね。ターンエンドよ」

ルーナ
ＬＰ／２０００
手札／１
モンスター《レプティレス・ナージャ》（ＡＴＫ　０）《マジシャン・オブ・ゼロ》（ＡＴＫ　０）《ゼロ・ガードナー》（ＡＴＫ　０）
魔法・罠／リバース×１

相手モンスターは3体…。攻撃すればダメージは全て跳ね返ってくる。

まずいわね。これを切り抜けるには…。

「私のターン。魔法カード《天よりの宝札》。お互いに手札が6枚になるようにカードをドローする」

引いたのは…。

ＳＩＤＥ／ルーナ

「…！」

これは…！

思い出した。チューナーにシンクロ…どこかで聞いたと思ったら…。

何だ。『最初から持っていた』んじゃない。

使い方がわからなかっただけで、今なら私にもできる。

だとすれば、この伏せカードで呼び出すのは…。

ＳＩＤＥ／璃音

！…小説的にこれに頼るのはどうかと思うけど…仕方ないわね。

「魔法カード《ライトニング・ボルテックス》。手札を１枚捨て、相手の表側表示のモンスターを全て破壊する」

『全体除去！？』

「《ゼロ・ガードナー》の効果！このカードをリリース…じゃなくて生け贄にする事で、このターン私のモンスターは戦闘で破壊されず、戦闘ダメージも受けない！」

『きゃあっ！』

「ナージャ！？」

そうなるでしょうね。…でも、《ゼロ・ガードナー》はもちろん、ルーナが使っているのはほとんどが未来のカード。リリースが生け贄だという事は偶然見つけたんでしょうけど、なぜ過去の人間がそんなカードを…？

「モンスターが全滅したか」

「攻撃力２０００以上のモンスターを出せれば勝ちなんだけど」

「いや、あいつはキマイラを手札に回収している。使うなら今だろ」

そのための《ライトニング・ボルテックス》よ。

「《スクラップ・キマイラ》を召喚」

《スクラップ・キマイラ》　ＡＴＫ／１７００

「キマイラが召喚に成功した時、墓地からスクラップのチューナーを特殊召喚する。《ライトニング・ボルテックス》のコストで手札から捨てた《スクラップ・ゴブリン》を特殊召喚」

キマイラが小さながらくたのゴブリンを呼び出す。

《スクラップ・ゴブリン》　ＡＴＫ／　５００

「レベル４《スクラップ・キマイラ》にレベル３《スクラップ・ゴブリン》をチューニング！巡りし想いが、闇を穿つ悪魔となる！光を導く星となれ！」

☆４＋☆３＝☆７

「シンクロ召喚！壊せ！《スクラップ・デスデーモン》！」

巨大なくず鉄の悪魔。効果はないけど攻撃力が高めのモンスターよ。

《スクラップ・デスデーモン》　ＡＴＫ／２７００

「攻撃力２７００…！」

「安心しなさい、このモンスターは効果を持っていないわ。カードを２枚セットしてターンエンド」

「エンドフェイズ時に永続罠《正統なる血統》を発動！墓地の通常モンスター１体を特殊召喚する！」

《正統なる血統》
永続罠
自分の墓地に存在する通常モンスター１体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。
このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターがフィールド上に存在しなくなった時、このカードを破壊する。

なるほど…墓地では通常モンスターとして扱うデュアルモンスターとは相性抜群というわけね。

「また《フェニックス・ギア・フリード》を復活させる気か？」

「私が選ぶのは…《エヴォルテクター　シュバリエ》！」

《エヴォルテクター　シュバリエ》　ＡＴＫ／１９００

《エヴォルテクター　シュバリエ》？伏せカードを警戒して、効果を使って安全に除去を行うつもりかしら？

璃音
ＬＰ／１３００
手札／１
モンスター／《スクラップ・デーモン》（ＡＴＫ／２７００）
魔法・罠／リバース×２

「私のターン！…璃音、感謝するわ」

「？」

「あんたのおかげで、私はこのデッキの力を１００％引き出せるようになったわ」

「どういう意味かしら？」

「物心がついた時から持ってて何となくデッキに入れてるけど、使い方がさっぱりわからなかったのよね。生け贄召喚しようとしても、素材が書いてあるから《融合》で出そうとしても、ディスクは全く反応しなかった。でも、このデュエルで使い方がはっきりわかったわ。あんたが『3回も実演』してくれたおかげでね！」

『3回も』？3回…私がこのデュエルで3回やった事は…。

「デュアルモンスター《チューンド・マジシャン》を召喚！」

緑と白の服を着込み、黄色いとんがり帽子を被った魔法使い。《マジシャン・オブ・ゼロ》とはまた違うタイプね。

《チューンド・マジシャン》　ＡＴＫ／１８００

「《チューンド・マジシャン》！？」

「月沙？」

「何か知ってるの？」

「確かにルーナは私達の時代のカードをよく使ってるけど、あれだけはありえない…！」

『ありえない』？月沙をあそこまで驚かすなんて、一体どんな効果を持ってるの？

「（時代？何の事？）そして装備魔法（スーペルヴィス）を《チューンド・マジシャン》に装備！装備モンスターは再度召喚した状態になる！」

《チューンド・マジシャン》の全身から朱色の光が溢れる。
「《チューンド・マジシャン》が再度召喚されている時…
このモンスターを『チューナーモンスター』として扱う！」
「「「「「「！？」」」」」」
『チューナーモンスター』！？
《チューンド・マジシャン》
デュアルモンスター
星４／風属性／魔法使い族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ１６００
このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。
●このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードをチューナーとして扱う。
「これが、今まで１度も使えなかった第３の切り札！レベル４《エ

ヴォルテクター　シュバリエ》にレベル４《チューンド・マジシャン》をチューニング！」

《チューンド・マジシャン》が４つの朱色の輪になり、《エヴォルテクター　シュバリエ》が４つの星になる。

「虚無と漆黒を重ねし魂、朱の灯火を宿し双炎と為せ！」

☆４＋☆４＝☆８

「シンクロ召喚！轟誕せよ！《ブラック・ブルドラゴ》！！」

黒い巨体に獰猛な赤い瞳。この時代に存在するはずがない龍が、光の柱を突き破って現れた。

《ブラック・ブルドラゴ》
シンクロ・効果モンスター
星８／炎属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２６００
チューナー＋チューナー以外のデュアルモンスター１体以上
１ターンに１度、手札からデュアルモンスター１体を墓地へ送る事で、相手フィールド上に存在する魔法・罠カード１枚を選択して破壊する。

このカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在するデュアルモンスター1体を選択して特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚したデュアルモンスターは再度召喚された状態になる。

《ブラック・ブルドラゴ》　ＡＴＫ／３０００

「馬鹿な！なぜこの時代の人間がシンクロモンスターを持っている！？」

「おいおい…冗談だろ？」

「ルーナが《レプティレス・ナージャ》の精霊を連れてるのがわかった時からおかしいとは思ってたけど、シンクロモンスターまで…！」

これは後で聞いてみる必要があるわね。もしかしたら、私達と同じ未来人かもしれないわ。

「ようやくあんたを召喚できたわね…！思いっ切り暴れてやりなさい！」

『グオォォオオオォオオ！！』

ルーナの声に応えるかのようにブルドラゴが吠えた。こうして見ると迫力があるわね。

キュウウウウウゥゥ…

「「！」」

突然、ブルドラゴが朱色に光り始めた。カードもそれに合わせて朱色の光を発する。

「《ブラック・ブルドラゴ》…？」

黒い何かが視界に入る。私の墓地から光が漏れ出している。

「これは…！」

カードを取り出すと、フィレスのカードが黒い光を放っていた。

「ん…？」

「あ！」

「…！」

紅刃、月沙、将人もそれぞれ黄色、青、紫に光るカードを取り出す。

「何だ？」

「私のまで…！」

秋斗と勇香のカードも光っている。色は、紺と赤。

「これってもしかして…」

「共鳴だな。あいつもアビリティ使えるし」

「ええ！？」

「アビリティを持つ者の特定のカードが互いに光るあれか」

そんな現象が…。なかなか面白いわね。

そんな事を考えていると、光はやがて全て完全に消えてしまった。

「今のって…」

「今は気にする事じゃないわ。続けましょう」

「…ええ！」

果たして、共鳴するカードがどれだけの力を持っているか…。

「……あれ、僕は？」

「まず、《スーペルヴィス》の効果で墓地から《フェニックス・ギア・フリード》を特殊召喚！」

また《フェニックス・ギア・フリード》…。本当に何度でも復活するわね。

《フェニックス・ギア・フリード》　ＡＴＫ／２８００

「そして、《ブラック・ブルドラゴ》の効果発動！１ターンに１度、手札からデュアルモンスター１体を墓地に送り、相手の伏せカード１枚を破壊する！《ダーク・ヴァルキリア》を墓地に送り、左の伏せカードを破壊！リド・ザ・フレイム！」

《ブラック・ブルドラゴ》が地面を殴り付けると、炎が混じった衝撃波が発生した。それに私が伏せたカードが破壊される。

「破壊された《スクラップ・トレジャー》の効果発動。セットされた状態で破壊された時、カードを１枚ドローする」

《スクラップ・トレジャー》
通常罠（オリジナル）
セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分はデッキからカードを１枚ドローする。
このカードを墓地から除外する事で、自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

「ハズレね…。バトル！《フェニックス・ギア・フリード》で《スクラップ・デスデーモン》を攻撃！鳳凰炎刃！」

「罠カード《くず鉄のかかし》。攻撃を１度だけ無効にし、再びこのカードをセットする」

鳳凰の剣をかかしが受け止める。相変わらずの強度ね。

「毎ターン使える防御カードって事ね。でも今は関係ないわ！《ブラック・ブルドラゴ》で《スクラップ・デスデーモン》に攻撃！デュアリング・フレア！！」

ブルドラゴが口から朱色の火球を飛ばしてくる。サイズはかなり大きく、デスデーモンが簡単に飲み込まれてしまった。

璃音　ＬＰ／１３００→１０００

「カードを2枚セットしてターンエンド！」

ルーナ
ＬＰ／２０００
手札／2
モンスター／《ブラック・ブルドラゴ》（ＡＴＫ／３０００）《フェニックス・ギア・フリード》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／《正統なる血統》リバース×２

「どう？これが私の実力よ！」

「シンクロ召喚をした上で最上級モンスターを蘇生するなんて…」

「璃音のモンスターは０。どう切り返す？」

蘇生手段が豊富なデュアルモンスターを、攻撃力０のモンスターでサポートする。これがルーナの戦術…。

「…フフッ」

「何よ？」

「面白いわね、このデュエル」

「面白いって…」

「あなたも何だかんだ言って楽しんでるじゃない」

「っ…！」

時々笑顔でカードを操っていて、本当に楽しそうだった。孤立していたというのなら、こんな風にデュエルする事なんてなかったかもしれない。

あの子にはもっとそんなデュエルをしてほしい。そのためにも、このデュエルは負けられない。

「私のターン！」

…これなら…。

「墓地の《スクラップ・トレジャー》の効果発動！」

「な…墓地から罠！？」

「このカードを除外する事で、自分の墓地からスクラップ1体を特殊召喚する。墓地の《スクラップ・ドラゴン》を特殊召喚！」

『ゴァアアア！』

フィレスが復活する。頼むわよ。

《スクラップ・ドラゴン》　ＡＴＫ／２８００

「この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊されるわ」

「このターン限りってわけね…」

「…これで決めるわよ。《スクラップ・キマイラ》を召喚！」

《スクラップ・キマイラ》　ＡＴＫ／１７００

「効果発動。墓地から《スクラップ・ビースト》を特殊召喚！」

《スクラップ・ビースト》　ＡＴＫ／１７００

これでモンスターは3体。何も妨害されなければいいけど…。

「攻撃はさせないわよ！罠カード《亜空間物質転送装置》！《フェニックス・ギア・フリード》をエンドフェイズ時まで除外する！」

このタイミングで？何を狙っているの？

「そして罠発動！私のモンスターが除外された時、フィールド上のモンスターの攻撃力を全て０にする！」

《ゼロ・フォース》

通常罠
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターがゲームから除外された時に発動する事ができる。
フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力を０にする。

「…！」

《スクラップ・ドラゴン》　ＡＴＫ／２８００→　０
《スクラップ・キマイラ》　ＡＴＫ／１７００→　０
《スクラップ・ビースト》　ＡＴＫ／１６００→　０
《ブラック・ブルドラゴ》　ＡＴＫ／３０００→　０

「モンスターの攻撃力が０に！？」

「あんなカードまで入れてるなんて…」

「（《ブラック・ブルドラゴ》は破壊された時に墓地のデュアルモンスターを再度召喚した状態で特殊召喚する。万が一別のモンスターで直接攻撃をされても、手札の《速攻のかかし》を使えば持ちこたえられる。このターンはまず安心ね）」

攻撃力を全員０にするカード…。かなり強力ね。でも、このデュエルはどのみち私の勝ちよ。

「速攻魔法（スクラップ・ポリッシュ）！スクラップ１体を破壊し、エンドフェイズ時まで私のスクラップ全員の攻撃力を１０００ポイントアップさせる！」

《スクラップ・ポリッシュ》
速攻魔法
自分フィールド上に表側表示で存在する「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択して破壊する。
自分フィールド上に表側表示で存在する全ての「スクラップ」と名のついたモンスターの攻撃力は、このターンのエンドフェイズ時まで1000ポイントアップする。

「《スクラップ・ビースト》を破壊し、ドラゴンとキマイラの攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

《スクラップ・ドラゴン》　ＡＴＫ／　0→1000
《スクラップ・キマイラ》　ＡＴＫ／　0→1000

「それだけじゃ私のライフを0にできないわよ？」

「ええ。だから『もう1枚』使うわ」

「え？」

ルーナの疑問の声をよそに、私は手札の最後の1枚を発動させた。

「2枚目の《スクラップ・ポリッシュ》を発動！」

「なっ…！？」

「キマイラを破壊し、《スクラップ・ドラゴン》の攻撃力をさらに1000ポイントアップさせる！」

《スクラップ・ドラゴン》　ＡＴＫ／１０００→２０００

これでフィレスの攻撃力とルーナのライフは丁度２０００。終わりよ。

「《スクラップ・ドラゴン》で《ブラック・ブルドラゴ》に攻撃！トラッシュ・バースト！」

フィレスの銀色の光線が、黒龍を貫きライフをもぎ取っていった。

ルーナ　ＬＰ／２０００→　０

璃音　ＷＩＮ

「……負け…ちゃった……」

ソリッドビジョンが消えた後、私は半ば放心状態のルーナに近づいた。

「強いわね。楽しかったわよ」

「……ええ、私も。まさか同じカードを2枚も使うなんて思わなかったわ」

「ルーナ、凄いじゃない！」

「璃音は僕らの中でもかなり強い方なのに、互角に渡り合うなんてね」

他のみんなも集まってきた。みんなルーナの実力を認めてるみたいね。

「久々に楽しいデュエルができたわ。あんた達のおかげよ」

「どういたしまして」

「で、どうすんだ？」

「え？…あ！」

紅刃の言葉で、ルーナは何かを思い出したかのように声を上げた。賭けの事をすっかり忘れてたようね。

「……わかったわよ」

「！」

「私もデュエリストの端くれよ。約束は守るわ」

『みんなマスターをよろしくね』

「ちょ、ナージャ！？」

『私としても嬉しいんですよ～。人間の友達なんて1人もいないじゃないですか』

「う…」

『それに、「人間の友達がほしい」ってたまにぼやいてたし、嬉し

いんじゃないですか～？』

「な…！？あんた、何でそれを…あ」

今の言葉で全員静まり返った。みんなきょとんとしてルーナを見ている。

「っ…か、勘違いしないでよね！いつかまた同じ条件でリベンジするわ！」

「泣き顔で言っても説得力ないぞ？」

「え…？」

ナージャに秘密をばらされた後から、ルーナは無意識の内に泣いている。将人はそれを指摘した後に溜息をついた。

「ハァ…。溜め込みすぎだ馬鹿」

「馬鹿って何よ！馬鹿…って…」

強気な言葉とは裏腹に、涙は止まらない。将人の言う通り、この子は背負いすぎ。相棒のナージャにすら、心を開き切ってないのかもしれない。

「あ…れ…？…何で…」

「今は思う存分泣いとけ。笑う奴がいたら片っ端からぶっ飛ばしてやるよ」

「う……ぐす……うぅ…」

紅刃の言葉を皮切りに、ルーナは座り込んで泣き始めた。

「少しは私達にも背負わせろよ？遠慮すんな」

勇香が片膝をついてルーナの頭を撫でていると、ナージャが私の前に来た。

『ごめんなさいね。私、マスターの精霊なのにマスターの力になれてなかったわ』

「そんな事はないわよ。あなたがいなかったら、ルーナは本当に孤独だった。あなたが傍にいてあげるだけでも、救われた場面はたくさんあったはずよ」

『嬉しい事を言ってくれるわね～。私の手が回らない分は、あなた達に任せてもいいかしら？』

「当然よ。これからよろしく頼むわよ」

使命はあるけど、この学園での生活は楽しませてもらうわよ。これから賑やかになりそうね。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第４０話　モンスターを基本ステータスだけで判断するな（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「ルーナのデッキ…【デュアル・ゼロ】だっけ？ビートダウンじゃかなり強いぞ？」

璃音「《マジシャン・オブ・ゼロ》で攻撃力０のモンスターとの戦闘ダメージは跳ね返せるし、それを抜きにしても蘇生しやすいデュアルモンスターでモンスターが切れる事はあまりない。本当に手強かったわ」

フィレス『グルル…』

ロコナ『ねえねえ、るーなは《フェニックス・ギア・フリード》をたくさん蘇らせてるけど、過労死しないの？』

勇香「…私も思ったけど、そこはほっといてやれ…」

璃音「コホン。…それじゃ、カード考察に入りましょう。今回紹介するのは、ルーナの第３の切り札（ブラック・ブルドラゴ）よ」

《ブラック・ブルドラゴ》
シンクロ・効果モンスター
星８／炎属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２６００
チューナー＋チューナー以外のデュアルモンスター１体以上
１ターンに１度、手札からデュアルモンスター１体を墓地へ送る事で、相手フィールド上に存在する魔法・罠カード１枚を選択して破

壊する。
このカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在するデュアルモンスター1体を選択して特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚したデュアルモンスターは再度召喚された状態になる。

璃音「手札からデュアルモンスター1体を墓地に送る事で、相手の伏せカード1枚を破壊できるわ。上級モンスターを墓地に送って蘇生できればベストね」

勇香「破壊されても墓地のデュアルモンスターを特殊召喚できる。おまけに再度召喚された状態で出てくるから、相手にとっちゃ厄介極まりないモンスターだな。自分から破壊しても発動するから、《ジャスティブレイク》とかも相性がいいぞ」

璃音「デュアルモンスターは元々レベル4のモンスターが多いから、《チューンド・マジシャン》や《ナチュラル・チューン》を使えば簡単に出せるわよ」

ロコナ『炎属性だから《火霊術－紅》で3000ダメージ、なんて事もできるよ！』

璃音「今回はここまでよ」

ロコナ『年末年始企画のアンケートはまだやってるよ！片方だけしか投稿してない人も両方投稿してない人も、どんどん投稿してね！』

勇香「何度も言うけど、期限は2010年12月29日までだからな？それじゃ、次回も見てくれよな！」

ーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

紹介が遅れましたが、『特別編　闇纏う風からの来訪者』で月沙が使用した《輝星龍ジークヴルム・デネブ》は紅さんが投稿してくださったオリカです。紅さん、ありがとうございました。

また、今回ルーナが使用した《虚無＝無限》と《マジシャン・オブ・ゼロ》はＨＩＲＯさんが投稿してくださったのですが、デッキと関連性がなかったで《マジシャン・オブ・ゼロ》だけは効果を完全に変更してしまいました。ＨＩＲＯさん、申し訳ございません。

何か書いている内に《フェニックス・ギア・フリード》が何回も墓地から呼び出される羽目になりました。再度召喚の状態にすらなってないのに…。

では、また次回！

番外編　２０１０年年末トーク（前書き）

お待たせしました！年末年始企画前編です。

今回は皆さんに投稿していただいた質問に答えていこうと思います。

後半がめちゃくちゃな事になってますが、ご了承ください。

それではどうぞ！

番外編　２０１０年年末トーク

ルーナ「え～、皆さん、おはようございます、こんにちは、こんばんは！」

秋斗「なぜ３つ言うんだ？」

ルーナ「読者がどの時間帯でこの小説を読むかなんてわからないじゃない。気を取り直して…２０１０年年末トーク～！」

パチパチパチパチ！

ルーナ「司会は私、九条院ルーナと…」

秋斗「星御秋斗でお送りする」

フォッタ「アシスタントはこの僕、フォッタにお任せを！」

秋斗「ところで、なぜテレビ番組みたいな感じになってんだ？」

ルーナ「こっちの方がやりやすいじゃない。本日…ていうか明日も合わせて参加してもらうのはこの方達です！」

真川紅刃・ロディス・リーシェ・波星月沙・スイレン・風嶺俊也・ウィン・銘丈将人・ゴーズ・カイエン・ヒジュラ・篠村璃音・フィレス・天原勇香・ロコナ・ナージャ・ルリア

秋斗「要するにメインメンバー全員だな」

ルーナ「今日は質問コーナー、明日は人気投票の結果発表をします！」

秋斗「最初は質問コーナーだ。読者が投稿した様々に質問に俺達が答える。まあ、小説のキャラがほとんどな上にもはやお悩み相談になってるがな。お前ら、下手な回答はするんじゃねえぞ？」

紅刃「心配すんな。全部きっちり解決するさ」

秋斗「それじゃ、最初の質問だ。ＨＩＲＯさんの『遊戯王～精霊の歌声～』より、氷川という奴からだ。『復讐を願い生き抜くのは愚かな事……？』だそうだ」

全員『……』

将人「いきなり重いな…」

月沙「復讐、か…。私も尾形と対峙した時は似たような感情だったよ」

ゴーズ『復讐の程度にもよるな。仕返しのレベルか、本気で殺すレベルか』

月沙「復讐したいって思うのを完全にやめる事はできないかもしれない。でも、殺すとかそういう話なら、それはいけない事だと思う」

俊也「月沙も、尾形を倒そうとはしたけど殺そうとはしなかったしね」

スイレン『あれは姫様の大切な人を護るための戦いでした』

月沙「私怨も入ってたのは否定しないけどね。怜磨達の仇を取りたいって気持ちもあった。でも、殺したいとは思わなかったし、今もそんなつもりはない。もし誰かが殺されたっていうなら、その人の分まで生きるのが1番だよ。憎んで殺してその繰り返しなんて、望んでないはずだから…」

ルーナ「…それじゃ、次の質問に行くわよ。同じくＨＩＲＯさんの『遊戯王～精霊の歌声～』より《水霊使いエリア》さんからの質問よ。『どうやったら料理を作り過ぎるくせを治せるのか知りたいですわ』」

紅刃「そんな癖を持ってるのはあいつだけだろ…」

カイエン『そうですね…。あらかじめ分量を決めておくのはどうでしょうか？作りすぎなのは材料がたくさんあるからでしょうし、量さえ決めておけばそれ以上作る事はなくなると思いますよ』

フォッタ「それじゃ、次行ってみようか！」

秋斗「ウイングさんの『遊戯王ＧＸ＆ａｍｐ；リボーン～騎士を従えしマフィアのボス～』より遊城十代からだ」

ゴーズ『ん？十代は原作キャラのはずだが…』

紅刃「向こうではボンゴレの晴れの守護者になってるらしいから、原作とはまた別なんだろうな」

秋斗「質問に入るぞ。『アビリティのやり方を少しだけでいいから教えてくれ！こっちで練習していつか会得してやるから！』」

ロディス『向上心は立派だが…アビリティを使うとなるとパクりなどの問題で誰かに叩かれる可能性がある。代わりに笹川了平という者に習うといい。同じ晴れの守護者で似た戦闘スタイルだから、学ぶ事も多いはずだ』

璃音「紅刃達がそちらに出張する予定があるそうだけど、ついでに勇香も連れていきなさい」

勇香「私が？てかついで扱いかよ…」

璃音「炎を使う以外は基本素手なんだし、あなたが適任よ。本編での戦闘シーンはまだ少ないけど」

ルーナ「それじゃ、次の質問よ。同じくウイングさんの『遊戯王GX&リボーン～騎士を従えしマフィアのボス～』より主人公の沢田綱宗さんからよ。『相談みたいなものなんだが獄寺のデッキに墓地肥やしってどんなのがいいかな？色々やってみたんだがどれも意見にあわなくて…』あ、獄寺って隼人の方じゃなくて、オリキャラの獄寺勇斗の方ね」

ナージャ『勇斗のデッキは確か、幻獣入りの【獣戦士族】だったわね～』

璃音「墓地に《幻獣クロスウィング》を3枚送る必要があるわね」

ルリア『墓地肥やしなら、《おろかな埋葬》が定番ですね』

《おろかな埋葬》
通常魔法（制限カード）

自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。

ウィン『この小説の特別編で月沙がやったように、《手札断殺》とかもいいね』

リーシェ『勇斗のデッキには《暗黒のマンティコア》が入っているようだが、それを使うのもいいだろう』

《暗黒のマンティコア》
効果モンスター
星６／炎属性／獣戦士族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ１０００
このカードが墓地に送られたターンのエンドフェイズ時に発動する事ができる。
獣族・獣戦士族・鳥獣族のいずれかのモンスターカード1枚を手札または自分フィールド上から墓地に送る事で、墓地に存在するこのカードを特殊召喚する。

勇香「変わったところじゃ、《連鎖破壊》なんてどうだ？」

《連鎖破壊》（チェーン・デストラクション）
通常罠
攻撃力２０００以下のモンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚されたら発動する事ができる。
そのモンスターのコントローラーの手札とデッキから同名カードを全て破壊する。
その後デッキをシャッフルする。

勇香「フィールドに出したモンスターが残るのがちょっと使いづらいけど、デッキから2体まとめて墓地に送れるぞ」

ロコナ『《幻獣サンダーペガス》を墓地に送るのにも使えるよ！』

俊也「相手のリクルーターを潰す事もできるし、《因果切断》にチェーンして発動すれば3体まとめて除外できるから、採用してみてもいいかな」

ロディス『このカードは少し特殊で、エクストラデッキのカードも墓地に送る事ができる。使うなら頭に入れておけ』

秋斗「次だ。機皇帝プラシド∞さんの『神々が動かす遊戯王ＧＸ～神々が望むもの～』より《極神聖帝オーディン》からだ。…フォッタ」

フォッタ「ＯＫ！この質問の間だけ、月沙の視覚と聴覚を遮断します！」

月沙「ええ！？どういう事！？」

フォッタ「特定の人に聞かれちゃまずい質問の回答中は、その人の視覚と聴覚を遮断する事になってるんだ。視覚を遮断するのはリアクションを見られないため」

月沙「それでアシスタント！？あ、本当に見えなくなった！それに何も聞こえない！」

秋斗「それじゃ、行くぞ。これは紅刃への質問だ」

紅刃「俺？」

「『そなたは…その…その少女との将来（結婚）を望むか？』その

少女ってのは月沙らしいな」

紅刃「は！？」

ヒジュラ『一端の神様が何つー質問してやがんだ…』

ルーナ「ていうかこれ、本編じゃ天上院兄妹とロディスやリーシェくらいしか知らないんじゃないの？」

ナージャ『そこはご都合主義というものですよ～』

秋斗「で、どうなんだ？」

紅刃「どうって…！そ、そりゃあ、月沙は好きだからできる事ならそうしたいと考えなくはないかもしれねえけど…」

リーシェ『何だその曖昧な回答は？』

スイレン『この際ですし、思い切って告白してはいかがですか？』

紅刃「何言ってんだ！片想いしてる奴の永遠の超難問だぞ！？」

ルリア『それ、本気で言ってるんですか？』

将人「こういう奴だ」

紅刃「どういう意味だ！」

ウィン『鈍感なのは相変わらずだね…』

フォッタ「それじゃ、次に行こうか！」

月沙「あ、戻った！」

ルーナ「同じく機皇帝プラシド∞さんの『神々が動かす遊戯王ＧＸ～神々が望むもの～』より《極神皇トール》さんからの質問よ。『そなたたちに、『絆の証』のような存在のカードはあるか？』これは紅刃と月沙に答えてもらうわよ」

紅刃「絆の証か…。俺は《ライトエンド・ドラゴン》だ。鈴佳がくれたカードって事で冥界の奴らと繋がってるし、共鳴するカードって事で月沙達とも繋がってる。俺にとっちゃ大切なカードだ」

月沙「私は《ブリザード・プリンセス》だよ。《ガトリング・ドラゴン》はもうないけど、怜磨が新しくくれたカードだから。現世と冥界でいる場所は離れてるけど、いつも見守ってくれてる…そう思えるの」

秋斗「次の質問だ。ＡＳＡさんの『Ｄｕｅｌ　Ｎｏ　Ｌｉｍｍｉｔ！！』より主人公の侵導黒乃からだ。『「どんなに邪悪な力でも、使い手が正しい心と堅い決意、そして強い覚悟を持っていればその力を正義のために使える」って言ったら、お前等は信じるか？』だそうだ」

ルリア『邪悪な力、ですか…』

紅刃「俺は信じる。その力に振り回される事もあるだろうけど、それに負けない心を持ってれば使いこなせるはずだ」

ヒジュラ『この手の奴はごちゃごちゃ理屈を並べてもどうにもなら

ねえよ。たった一言で自分がどうしたいのか決めて、その通りに生きろ。そうすりゃ、ちったぁマシになんじゃねえか？』

ルーナ「次行くわよ。同じくＡＳＡさんの『Ｄｕｅｌ　Ｎｏ　Ｌｉｍｉｔ！！』より海岸水希さんからの質問よ。この質問はうちの作者に宛てられたものだけど、キャラの会話に直接関与しない事にしてるから代わりに私達が答えるわ。フォッタ」

フォッタ「この質問は俊也と璃音が聞いちゃまずいんだったね」

俊也「え？僕と璃音…ってうわっ！？」

璃音「（本当に遮断された…）」

ルーナ「それじゃ、質問を読み上げるわよ。『この小説のカップリングは俊也×璃音もアリじゃないかと考えていますが、そこの所はどう思いますか？』」

紅刃「凄い質問だな…」

ロコナ『「×」ってどういう意味？』

将人「お前はまだ知らなくていい」

ヒジュラ『で？作者様は何て言ってやがったんだ？』

ルーナ「この組み合わせは割と前から考えてたらしいわね」

ゴーズ『この質問が来てから考えたんじゃないだろうな？』

フォッタ「それは大いなる蟹の味噌汁！」

紅刃「ニコ○コ大百科見てないとわからないようなネタを使うなよ」

将人「この中であいつらと1番付き合いが長いのは紅刃と月沙、勇香だろ。客観的に見てどう思う？」

紅刃「そうだな…。俊也と璃音ってそれなりに仲良いよな」

月沙「冬休みの間は璃音が機械弄りしてる時に俊也が差し入れしてたっけ」

ナージャ『普通逆じゃないの？』

ウィン『その時にいろいろ雑談してて、何かいい雰囲気だったな～』

フィレス『ガウルルッ！』

勇香「その話は1度璃音から聞いてるぞ。『今過去に行ってる人達の中で1番長く話してる気がする』っつってたっけ」

秋斗「一応フラグらしきものは立ってるみたいだな」

カイエン『本人に聞いてみたらどうですか？』

フォッタ「ちゃんとぼかしてよ。それじゃ、解除！」

俊也「あ、戻った！」

璃音「回答は済んだみたいね」

月沙「ねえ、俊也と璃音ってお互いの事をどう思ってる？」

俊也「え？」

璃音「妙な質問をするのね。一言で言えば好青年かしら？話しやすいからよくいろんな話をするし、一緒にいて飽きないわね」

俊也「そうかな？僕から見て璃音は…性格がどこか大人びた感じがするかな。それに、いろんな物を作れるし、素直に凄いって思うよ」

璃音「へえ…嬉しい事を言ってくれるのね」

リーシェ『お互いを恋愛対象として見た事はあるか？』

俊・璃「「え？」」

紅刃「おま、何聞いてんだ!?（ストレートすぎるだろ！）」

ロディス『本人の目の前で聞く事ではなかろう…』

俊也「あはは、まさか…僕じゃ不釣り合いでしょ？」

璃音「俊也は活発だから、私とは合うかはわからないわね。そこが少しうらやましくも思うけど」

リーシェ『そ、そうか…』

紅刃「（こいつら…お互いの事を全く意識してねえ！）」

ウィン『（ていうか、言ってて悲しくならないの？）』

カイエン『（先はかなり長いですね…）』

秋斗「次はTさんからの質問だ。唯一自分のキャラじゃなく本人から来たものだ。『全キャラクターの身長、体重、スリーサイズ、は書けますか？』」

ルーナ「ぶっ！？」

俊也「女子にはかなり厳しい質問だね…」

フォッタ「それじゃ、身長と体重をこぶべらっ！？」

月沙「体重は男子限定ね？」

勇香「私は体重くらいなら気にしないけどな…。私のは公開するぞ」

フォッタ「ぐふぅ…身長はS、体重はWで表記するよ…」

紅刃…S：１６７ｃｍ　W：６１．６ｋｇ

月沙…S：１６２ｃｍ

俊也…S：１６５ｃｍ　W：５９．４ｋｇ

璃音…S：１５８ｃｍ

将人…S：１７１ｃｍ　W：６３．２ｋｇ

勇香…S：１６６ｃｍ　W：５９．５ｋｇ

秋斗…S：１６９ｃｍ　W：６２．７ｋｇ

ルーナ…S：１５３ｃｍ

ルーナ「人が気にしてる事を…！」

ナージャ『よく牛乳飲んでますもんね～』

ルーナ「はいそこ！シャラップ！」

フォッタ「で、スリーサイズはがべごろげっ！？」

月沙「何言ってんの？殺すよ？」

璃音「世の中には言っていい事と悪い事があるのよ？」

勇香「つーか身長体重もそうだけどどうやって調べたんだコラ」

ルーナ「これって何？私への当てつけ？発育が悪い人間に対する嫌がらせ？」

紅刃「あ～あ、何やってんだあの馬鹿」

俊也「それだけは触れちゃいけないよ…」

将人「ほっとけ。自業自得だ」

秋斗「このＴさんって、こうなる事を想定してこの質問をしたんじ

ゃないだろうな？」

フォッタ「あ、あ～…スリーサイズは言えないけど、全員胸は小さめって事だけは言っとくよ…」

ルーナ「誰が貧乳じゃあああぁぁあぁあああああ！！」

フォッタ「ぐぼぉあっ！？」

月・璃・勇「「「……」」」

フォッタ「ちょっと待って！これくらいならまだいいでしょ！？ぎりぎりセーフでしょ！？」

ルーナ「問答無用！逝ねえええぇえぇえええええええ！！！」

フォッタ「ストップ！タンマ！ＭＡ☆ＴＴＥ！ままままぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

秋斗「…質問は以上だ」

ゴーズ『ん？もう終わりか？』

ルーナ「ハァ、ハァ、ほとんど、ゼェ、常連さんからしか来てないのよ…」

秋斗「この小数自体そこまで人気があるわけじゃないからな。ここより人気がある遊戯王の小説なんざいくらでもある」

紅刃「そりゃあそうだけど…かなり尺が余ったな」

月沙「まだ６ページだしね」

勇香「ならこのまま終わりにすりゃいいだろ？」

将人「そういうわけにもいかない。普段１０ページオーバーを１話分として投稿している以上、それぐらいまで引き延ばさなければ気が済まないらしい」

勇香「作者の気分の問題かよ！？」

スイレン『では、後４ページ分どうなさいますか？人気投票の結果発表は明日の予定ですし…』

ウィン『こんな事なら他の方達の小説のキャラを直接招待すればよかった…』

俊也「それはいろいろとまずいでしょ！ていうか承諾する人いるの！？」

フォッタ「まあまあ、ここは１つこの小説の今後について話し合おうじゃないか」

俊也「年末なのに！？」

紅刃「てか復活早っ！？」

フォッタ「それじゃ、１０ページ目指して頑張ろう！」

将人「（何かムカつく…！）」

フォッタ「まず、今後の展開についていくつか案があるんだけど…

1．さっさとニュートラルに本格的に介入してもらう

2．ギャグを増やす

3．時空何とか的な誰かを召喚する」

勇香「いや、最後のは駄目だろ。いくら何でも最後のは駄目だろ」

フォッタ「他の遊戯王の小説でも活躍してるし、ニュートラルも時空間跨いでるんだから出てきてもおかしくないでしょ？」

リーシェ『それは作者殿の好みの問題だろ！うちの作者はリリ〇のはほとんど知らないぞ！？第一デッキと出番の配分を考えるのが面倒だろ！』

紅刃「そっちが本音かよ！？」

ロディス『確かに、ただでさえレギュラーが8人に増えたのだからデュエルの相手を用意するのにも一苦労だ』

ヒジュラ『いい加減俺もメインで暴れたいもんだぜ。デュエルじゃ切り込み役兼ゴーズ達の引き立て役でしか活躍してないぜ？』

将人「う…すまない…」

ナージャ『あんたの場合はシンクロ封じが足引っ張ってるから仕方

ないんじゃない？』

ヒジュラ『ほぉ～、いい度胸してるじゃねえか…』

ゴーズ『落ち着け。まだリアルファイトという選択肢があるだろう。幸い、この小説にはアビリティという特殊能力を発揮できるシステムがある』

フォッタ「でも、多用しすぎると遊戯王から離れちゃうんだよね。これは遊戯王の小説だし、やりすぎはよくないよ。紅刃達のアビリティに覚醒以外の技名が一切ついてないのもこれを気にしてるから」

月沙「あれ技名だったの！？」

フォッタ「あれだよ、ＢＬＥ〇ＣＨで言う〇化みたいなものだよ」

璃音「こうなったら、どんな作品でもいいから作者の知る限りでいろんなキャラを呼び出したりとか…」

紅刃「お前はこの小説を根底からぶっ壊す気か！？」

ウィン『あ、そうだ！前書きで何か新しい事をやるっていうのはどう？』

スイレン『そういえば、前書きだけ何か味気ないですよね』

将人「そうか？別に今のままでもいいと思うが…」

勇香「ていうか、後書きのおまけコーナーは私と璃音が出番を確保するために始めた奴だからな？今レギュラーになれなくて出番に困

ってる奴はいないだろ？」

ルリア『まあ、いいんじゃないですか？前書きで何かをやってる人もいる事ですし』

フィレス『グルル…』

ルーナ「じゃあ、何かアイデアがある人はいる？」

ロコナ『お菓子作りがいいな！』

ルーナ「作者は料理とは無縁だし、この小説とほとんど関係ないわ。それにあんたが食べたいだけでしょ。却下！次！」

璃音「ありとあらゆる作品からキャラを招いてインタビューでもどうかしら？」

ルーナ「だからあんたはこの小説ぶっ壊す気？根本的にやばいでしょうが。却下！次！」

ロディス『冥界での政治経済の講座はどうだ？』

ルーナ「専門の人しかついてこれないわよ。作者にそんな脳なんてないし。却下！次！」

カイエン『中の人ネタを使いましょう！』

ルーナ「うん、前書き関係ないから。私達には中の人なんていないから。却下！つーかまともな意見はないのかあんたらぁあああああああ！！！」

フォッタ「一応、ルーナのCVのイメージは彼の有名な釘〇さんで行ってくれってルーナのキャラの原案を送ってくれた人が」

ルーナ「え、嘘!?」

月沙「じゃあ、私達は?」

フォッタ「全然決まってない。特に紅刃は作者のイメージの声にピッタリ合う人がなかなか見つからないんだって」

紅刃「そこまで特殊なのか…?」

フォッタ「作者も、そんなにたくさんの種類のアニメを見る事はないからね」

秋斗「話を戻すぞ。偉人の名言を1つ載せて、それに一言コメントを入れるってのはどうだ?」

紅刃「銀〇だろ。もろ銀〇だろうがそれ」

秋斗「サブタイトルも毎回あれと同じ法則で付けてるんだし、今更問題はないと思うがな」

紅刃「今までほとんどの人間がスルーしてきた事にバッサリ切り込むなよ!一応『サブタイトルが銀〇っぽくて面白いです』って感想も来てるけどさ!」

ナージャ『誰も言わないだけで内心「さりげなくパクッてんじゃねえよ」とか思ってんじゃない?』

紅刃「言うなぁあああぁああ！！作者もサブタイトルの形式を５Ｄ'ｓ風に変えるか銀〇風のままで行くか散々頭を悩ましてんだよ！他ないか他！？」

スイレン『はい！』

紅刃「何だ！？」

スイレン『レギュラーのデッキ強化イベントを出すといいと思います！』

紅刃「前書き違えぇえぇえええ！！でもナイスアイデア！」

ウィン『強化の余地がある人は誰かな？』

秋斗「璃音の【スクラップ】は下手に弄ったら事故る。ルーナは出てきたばかり。勇香や俺はまだデュエルしてないから論外。月沙は少しずつ改良を加えているし、レギュラーの中で１番強いという描写がある。強化できそうなのは、紅刃と俊也、将人か。特に俊也は早めに強化する必要がある」

俊也「僕が？」

秋斗「切り札の《始祖神鳥シムルグ》は１回しか出てないだろうが。おまけに共鳴するカードはお前だけ持ってない。これだけでも充分な理由だろ？」

俊也「確かに…」

秋斗「将人は…悪魔族で使えそうなカテゴリがないな。ほっとくか」

将人「狩るぞ貴様」

秋斗「紅刃は【エンジェル・パーミッション】をどう派生させるかだな。最低限、ヴァンダルギオンとボルテニスは出せるようにする必要がある。よって、エクストラデッキとヴァンダルギオン以外で天使族以外のモンスターはアウトだ」

紅刃「まさかヴァルハラ軸にしろとか言うんじゃねえだろうな？」

秋斗「いっその事、【終世】にするのもありだがな。それだと《ライトエンド・ドラゴン》が出しづらくなる。【終世】については各自で調べとけ」

フォッタ「ぶっちゃけ俊也と紅刃は改良案があるんだけどね」

紅刃「あるのかよ！？」

フォッタ「どうなるかはお楽しみに～！」

俊也「で、前書きの件はどうする？」

全員『……』

俊也「いや、誰も考えてないの！？」

ロコナ『あ、そうだ！「な～にかな、な～にかな？」はどう？』

勇香「は？」

璃音「龍亞と龍可がダークシグナー編の間冒頭でやってたあれね」

勇香「ああ、その話のキーカードを最初に軽く説明するあれか！」

ゴーズ『それだと後書きの「今回のキーカード」の意味がなくなるだろ？』

ロコナ『そっか～』

紅刃「んじゃ、他に何かいい案ないか？てかいい加減決めないとグダグダ引きずる事になるぞ？」

全員『……』

紅刃「ねえの！？俺もそうだけどねえの！？もうアイデアねえの！？」

勇香「うん、ねえ。これっぽっちもねえ。１ｍｍたりともねえ」

フォッタ「よし、奥の手を使おう」

月沙「奥の手？」

フォッタ「読者からアイデアを募集しよう！」

紅刃「横着するな！そこで読者に頼るなよ！」

フォッタ「というわけで前書きのコーナーの何かいいアイデア常時募集中！待ってるよ～！」

月沙「え、やるの？本当にやっちゃうの？」

フォッタ「よし、前書きの件は解決だね」

紅刃「解決してねえよ！読者に押し付けただけだろ！」

フォッタ「だって、他にいいアイデアが出ないんだから仕方ないじゃん」

紅刃「そりゃそうだけど…」

フォッタ「さて、話し合う事は全部済んだね。今何ページくらい？」

ウィン『ええと、８ページ終盤くらいだね』

全員『……』

勇香「繋げえええ！何としてでも繋げえええ！」

ヒジュラ『とにかく何でもいいから話題を出せ！１０ページ持たせるぞ！』

紅刃「後１～２ページもあるぞ！？」

ヒジュラ『んなもん気合いで何とかしやがれ！』

ルーナ「あの…私達が司会なんだけど…」

秋斗「関係なくなってきたな…」

フォッタ「あ、そうだ！本編でルーナが使った《二重仕掛けの埋葬》があるでしょ？」

ルーナ「それがどうしたのよ？」

フォッタ「あれは言羽・Ｄ・カタストロフィ一さんが投稿してくださったオリカです！言羽・Ｄ・カタストロフィ一さん、ありがとうございました！」

月沙「ついでみたいな感じで言わないでよ！」

フォッタ「紹介忘れてたんだからいいでしょ！」

勇香「謝れ！言羽・Ｄ・カタストロフィ一さんに謝れ！キング一族に謝れ！」

紅刃「いい意味でも悪い意味でもフリーダムだなお前はぁぁあああ！」

ウィン『そうだ！挿絵を入れるとかどう？』

将人「そういえば、たまに他の小説で見かけるな」

月沙「あれは無理だよ。この小説、全部携帯から投稿してるから挿絵を入れる事ができないんだって」

ルリア『第一、携帯で写真を撮ると画質が悪いですからね』

ウィン『そっかぁ…』

秋斗「容姿のイメージが完全に伝わらないのは仕方ない事だ。諦めろ」

勇香「そもそもイラストがいい評価を受けるとは限らないしな。出さない方が無難だろ」

スイレン『おまけコーナーで毎回ゲストを呼んだらどうですか？』

璃音「それはいいわね。原作とこの小説を合わせた範囲から敵味方関係なく1人ずつ呼び出したりとか…検討しましょう」

ゴーズ『選出方法はどうする？』

璃音「アンケートね」

紅刃「それもかよ！？」

俊也「そういえば、僕だけ共鳴するカードを持ってないんだけど…もしかしてハブられてる？」

ロディス『《スターダスト・ドラゴン》やドラグニティ以外に風属性・ドラゴン族の丁度いいシンクロモンスターがいないのだから仕方なかろう』

ルーナ「作者は苦難の末にオリカにする事に決めたそうよ」

ロディス『そんなにオリカに頼って大丈夫か？』

ルーナ「大丈夫よ、問題ないわ。…多分」

俊也「自信ないの！？」

ルーナ「後考えるのは効果だけよ。まあ、楽しみにしてなさい」

フォッタ「ここまで来たら１０ページ限界ぎりぎりまで行くよ！みんな頑張れ！」

ヒジュラ『はあ！？おい、まだ１０ページ行ってねえのか！？』

リーシェ『まだだ！くそ、１０ページがこれほどまでに長いとは…！ヒジュラ、お前からは何かないのか！？』

ヒジュラ『さっきから考えてらぁ！でも思いつかねえんだよ！』

リーシェ『ない知恵絞って捻り出せ！』

ヒジュラ『ああ！？人を馬鹿みてえに言ってんじゃねえよ！てめえこそ捻り出しやがれ！』

リーシェ『何だと貴様！？１度雷に焼かれるか！？』

ロディス『お前達、落ち着け！今は年末トークの最中だぞ！？』

カイエン『何とかして繋がなければ…。やはりここは中の人ネタを…』

ルーナ「だから中の人いないっつってんでしょうが！あんたアニメ化でも狙ってんの！？ゲーム化から始めなさいよ！タッグフォース６でも作りなさいよ！」

勇香「お前がやりたいだけだろうが！タッグフォースにすんならこの小説の名前自体変えなきゃ駄目だろ！『遊戯王Ｉｓ』に改名する必要があるじゃねえか！『イレギュラーズ』を略して『Ｉｓ』にしてさ！つーかもう改名してもいいか！？」

スイレン『小説の改名はともかく、ゲーム化はありえないでしょう！まずは漫画化からこつこつ…』

秋斗「全部ありえねえよ！この小説はそこまで人気ねえってさっき言っただろ！それにアンケートにばかり頼るな！」

ウィン『今はそれ関係ないから！でもアンケートはいい事だと思うよ？』

璃音「読者の意見を取り入れる事で新たに発見できるものもあるのよ？読者参加型の小説としてやっていくのも悪くないんじゃない？」

秋斗「だからってやりすぎは駄目だろ！」

ロコナ『アキトのケチ～』

ルリア『だから頭が固いんですよ』

ナージャ『柔らかくしないと老けるわよ？』

フィレス『ガウッ！グルルッ！』

秋斗「やかましいわ！そんな理由で老けてたまるか！後最後何言ってるかわからねえよ！つーか俺が何か悪い事言ったか！？」

ゴーズ『まあ、そう騒ぐな』

秋斗「騒がずにいられるか出番なし！」

ゴーズ『それを言うか！？確かに最近出番はないが、何もはっきり言う事はないだろ！』

俊也「否定できないのがつらいよね…」

ゴーズ『嫌味か！？嫌味言ってるのか！？一辺斬らせろ！』

俊也「そんなつもりで言ったんじゃ…うわわ！ストップストップ！」

将人「全く…騒がしい連中だ」

フォッタ「いいぞ～もっとやれ～！」

将人「…さっきからお前に対して殺意を覚え始めてきたんだが？」

フォッタ「誰のせいでこうなったんだか…やんなっちゃうよね」

将人「大元の元凶は貴様だろうがあああぁぁぁぁぁぁ！！！」

わいのわいのわーわーぎゃーぎゃーどんちゃんどんちゃんどたんばたんがたんごとん

紅・月「「……」」

紅刃「収拾つかなくなってきたな…」

月沙「うん…。みんな暴れすぎ…」

紅刃「あんな調子で来年もやってけるんだか…」

月沙「元気があっていいんじゃない？あのメンツなら楽しく過ごせそうだし」

紅刃「言えてら。ま、司会があんな状態だし、最後くらい俺達が引き継ぐか」

月沙「そうだね。もう１０ページ行ったし。みんな、今日までこの小説を読んでくれてありがとう！」

紅刃「こんなメンバーだけど、来年も付き合ってくれ。そんで、俺達の活躍を見ててほしい」

月沙「今回質問をしてくださった方々、本当にありがとうございました！おかげで今回の企画を実行に移す事ができました」

紅刃「また似たような機会があったらよろしく頼む。それじゃ、ラストの締め行くか！」

月沙「うん！来年も『Ｖｉｓｉｔｏｒｓ　ｆｒｏｍ　ｔｈｅ　ｆｕｔｕｒｅ』をよろしくね！よいお年を！」

紅刃「次回も見てくれよな！」

…Ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｎｅｘｔ　ｙｅａｒ

番外編　２０１０年年末トーク（後書き）

いかがでしたか？

質問してくださった皆さん、本当にありがとうございました。また似たような機会があればよろしくお願いします。

言羽・Ｄ・カタストロフィー さん、オリカの説明があんな感じになってしまって申し訳ありません。以後、忘れないように気をつけます。

それでは皆さん、よいお年を！

番外編　２０１１年年始トーク（前書き）

明けましておめでとうございます！

今回は人気投票の結果発表になります。後半がやはりカオスですが、ご了承ください。

それではどうぞ！

番外編　２０１１年年始トーク

紅刃「俺は司会じゃないぞ？」

月沙「最初は主人公が１番でしょ？」

紅刃「まあ、いいか。それじゃ行くぞ。え～、皆さん…」

全員『明けましておめでとうございます！』

ルーナ「というわけで始まりました、２０１１年年始トーク～！司会は私、九条院ルーナと…」

秋斗「星御秋斗でお送りする」

フォッタ「アシスタントはこのフォッタにお任せを！」

紅刃「今日は人気投票の結果発表だっけ？」

ルーナ「そう！第１期までに登場したキャラで人気投票をやったんだけど、その結果発表をします！」

秋斗「先に言っておく。リーシェ、ヒジュラ、お前らには票は入ってないぞ」

リーシェ『何！？』

ヒジュラ『はあ！？』

秋斗「投票者自体数が少ないからな。投票数０の奴が出ないように１人５位までの１５票制にしてこの結果だ。諦めろ」

リーシェ『ならば、仕方あるまい…』

ヒジュラ『ちっ、新年早々災難だぜ…』

ナージャ『２人共カードとしては使いづらい部類に入るからね～』

リーシェ『それは嫌味と受け取ってもいいのだな？』

ヒジュラ『今ここで狩ってやろうか？』

ルリア『２人共落ち着いてください！』

ルーナ「…とりあえず、早速始めるわよ。今回は１０位まであるわね」

将人「割と少ないな」

ルーナ「同着もあるし、秋斗が言ったように投票者が少ないのよ。まずは第１０位から！」

第１０位　ロディス・ウィン・不動遊星（１票）

勇香「ちょっと待てぇえええ！！」

ヒジュラ『何で５Ｄ’ｓの主人公がランクインしてやがんだ！あいつは原作キャラだろ！』

璃音「そういえば『原作キャラは投票禁止』と言うのを忘れてたわね」

リーシェ『だからと言って、普通は投票しないだろ…』

ルーナ「それは置いといて、《冥王竜ヴァンダルギオン》のロディスと風霊使いのウィン、そして遊戯王５Ｄ’ｓの主人公こと遊星がランクインしました！では、何か一言どうぞ！」

ロディス『我に投票する者がいるとはな。感謝するぞ』

ウィン『私も同じ気持ちだよ。投票してくれた人に感謝しないとね』

俊也「で、遊星はどうするの？」

フォッタ「今から僕が召喚します！」

紅刃「え？お前何言って…」

フォッタ「口〇せの術！」

月沙「それ前回も使った！」

ボォン！

遊星「う…ここは…？」

璃音「兄さん！？」

紅刃「えええええええ！？本当に呼び出したよ！？」

遊星「璃音、紅刃？それにみんなも…」

月沙「ええと…遊星は今何してたの？何か箸持ってるけど…」

遊星「ジャック達とおせちを食べていたところだ。アキがなぜか俺の口元に食べ物を持ってきたところでここに飛ばされて…」

紅刃「戻せえぇえええええ！フォッタ、タイミング悪すぎるわ！さっさとアキ達の所に帰せ！」

フォッタ「わわ、ちょっと待って！遊星、今人気投票の結果発表をしてるんだけど…」

遊星「人気投票？」

フォッタ「そう！それで、遊星に票が入って１０位にランクインしたから何か一言をって思って…」

遊星「そうか。俺に投票してくれた人に感謝する。これからも仲間達と共に頑張るつもりだ」

フォッタ「はい、ありがとうございます！帰ったらアキさんの機嫌を直してあげてください！転送！」

ボォン！

月沙「アキ、大胆になったなぁ…」

ロコナ『ねえ、次行こうよ次！』

秋斗「そうだな。続いて、第９位の発表だ」

第９位　カイエン（２票）

カイエン『私ですか？』

将人「やったな、カイエン」

秋斗「冥府の使者の１人、カイエンがランクインだ。何か一言を頼む」

カイエン『はい！投票してくれてありがとうございます！これからもゴーズとコンビで頑張ります！』

ルーナ「どんどん行くわよ！第８位！」

第８位　ゴーズ・フォッタ（３票）

フォッタ「う～ん、もう少し上だと思ったんだけどな～…」

ゴーズ『贅沢言うな。票が複数入っただけでもありがたいと思え』

ルーナ「カイエンと同じく冥府の使者の１人、ゴーズと、自称神様（笑）…」

フォッタ「だから僕は神様見習いだって！」

ルーナ「どっちだっていいじゃない。神様見習いのフォッタがランクインしました！では、何か一言どうぞ！」

フォッタ「僕はこれからもちょくちょく出て活躍するよ！応援よろしく！」

ゴーズ『基本的にはカイエンと同じだ。最近出番が少ないが、めげずに努力するつもりでいる』

秋斗「よし、次だ。第7位の発表だ。こいつは単独だな」

第7位　銘丈将人（4票）

将人「俺か」

勇香「お、将人が来たか」

秋斗「鎌の扱いに長けた、どん底から這い上がってきたデュエリスト、将人がランクインだ。一言頼む」

将人「俺もこれから腕に磨きをかけていく。応援頼んだぞ」

ルーナ「さあ、次は第6位よ！」

第6位　風嶺俊也・フィレス（5票）

ウィン『フィレスが6位！？』

俊也「あ、僕だ！」

フィレス『ガウッ！』

ルーナ「風を操るサッカー少年、俊也と《スクラップ・ドラゴン》のフィレスがランクインしました！」

俊也「僕のは設定がほとんど活かされてない気がするんだけど…」

ルーナ「2期はいい事あるわよ。フィレスについてはコメントも付いてます」

『効果が強くて、愛用しているから』（遊疑王）

璃音「確かに《スクラップ・ドラゴン》は効果が使いやすいし、攻撃力も高めよ。普通の【ドラゴン族】でも貴重な除去要員として活躍できるし、遊疑王さんの他にも愛用している人がいるはずよ」

ルーナ「璃音、解説ありがとう。それじゃ、俊也とフィレスに一言いただいちゃいましょう！」

俊也「僕に投票してくれてありがとう。これからも応援よろしく！」

フィレス『ガウッ！グルルルッ、ゴァアアア！』

ルーナ「ええと…フィレスは何言ってるかわからないや…。まあ、とにかく、俊也、フィレス、ありがとうございました！」

スイレン『ここまでで名前を呼ばれてないのは…私と姫様、紅刃様、勇香様、璃音様ですね』

俊也「さすが主人公と女性陣…手堅く残ったね」

将人「順位は大方予想がつくがな…」

秋斗「続けるぞ。第5位の発表だ」

第5位　スイレン（6票）

スイレン『私ですか？』

ウィン『やったね、スイレン！』

ナージャ『これで、スイレンが精霊の中では1番人気だって事が証明されたわね～』

スイレン『そんな…恐縮です』

リーシェ『そう照れるな。もっと胸を張れ』

秋斗「《氷結界の舞姫》ことスイレンがランクインだ。こいつにもコメントが入っている」

『作者の推薦ですわ。欲しいけど当たらないらしいですわ』（言羽・D・カタストロフィー作『遊戯王GX　百合キング、綾風理奈が吹かせる王者の鼓動。』より　朝倉奈桜）

紅刃「《氷結界の舞姫》ってレアリティは普通のレアじゃなかったか？」

月沙「当てるのはそこまで難しくないと思うんだけど…」

秋斗「それじゃ、一言頼むぞ」

スイレン『はい！皆様、投票ありがとうございます！こんな私ですが、これからも頑張りますので応援よろしくお願いします！』

勇香「…スイレンが割と人気な理由がわかった気がする」

璃音「何かしら？」

勇香「丁寧でめっちゃ謙虚だ」

璃音「なるほど…（カード自体も人気あるのよ？）」

ヒジュラ『にしても、票がちまちま1票ずつしか差が開いていかねえのは面白みがねえな』

ルーナ「大丈夫、次からは1票毎じゃないわよ。では、第4位！」

第4位　天原勇香（8票）

ヒジュラ『って、もう1票増えただけじゃねえか！』

勇香「お、私は4位か！」

ルーナ「熱いハートを持つ姉貴分、勇香がランクインです！」

ヒジュラ『何だそりゃ？』

ルーナ「一生懸命考えたんだから文句言わない！」

ロディス『おまけコーナーを創立したのが効を帰したな』

将人「デュエルを1度もせずにこの順位はさすがだな」

ロコナ『おめでとう、ユウカ！』

勇香「ロコナ、ありがとな」

ルーナ「それじゃ、何か一言どうぞ！」

勇香「投票サンキュー！来年は私もデュエルすっから、期待しててくれよな！」

秋斗「もうベスト3か。第3位の発表だ」

第3位　篠村璃音（10票）

璃音「あら、思ったより高いのね」

ルーナ「落ち着いた物腰の頼れるクールビューティ、璃音が3位にランクインよ！」

璃音「言いすぎよ」

俊也「でも、実際そんな感じだよね」

勇香「何かあっても冷静に対処できそうだよな」

璃音「兄さんの受け売りじゃないかしら？」

俊也「その前から性格変わってないでしょ」

ルーナ「それじゃ、何か一言どうぞ！」

璃音「私が3位になれたのは光栄だわ。今年も応援よろしく頼むわよ」

秋斗「残ったのは例の2人か」

ロコナ『どっちが1位かな？』

フィレス『グルル…』

秋斗「行くぞ。第2位の発表だ」

第2位　波星月沙（26票）

月沙「あ、私だ！」

リーシェ『26票…！』

ヒジュラ『何つー票差だ…！』

秋斗「この小説のメインヒロイン、氷の姫君の月沙がランクインだ」

月沙「氷の姫君って…」

秋斗「用意されたメモの通りに読んだだけだ。照れるなアホ」

紅刃「……」

カイエン『氷と言っても、性格は冷たい感じじゃなくて明るいですけどね』

紅刃「それに親しみやすいしな。そういうところが好きだ」

月沙「す…！？」

将人「（対抗したな）」

俊也「（対抗したね）」

秋斗「（こうでもしないといつまでも奥手にしか出ないだろ）」

月沙「あ、あうぅ…」

ヒジュラ『お～い、新年早々自分の世界にトリップしてねえで戻ってこ～い』

紅刃「（あれ？効いた？意外と効果大？）」

スイレン『あの～、姫様…？』

月沙「す、好き…？好きって…」

ナージャ『さっさと戻ってきなさい！』

月沙「いったぁ！？はっ！？私は何を！？」

秋斗「月沙にもコメントが来てるぞ」

『理奈が絶対と言うから』（言羽・D・カタストロフィー作『遊戯王GX　百合キング、綾風理奈が吹かせる王者の鼓動。』より　綾風七乃）

勇香「これ、コメントか…？」

ゴーズ『まあ、あの百合キングが言いそうな事だな』

秋斗「それじゃ、一言頼むぞ」

月沙「あ、うん！みんなありがとう！2位になれて嬉しいよ！今年も応援よろしくね！」

ルーナ「さて、いよいよ第1位の発表よ！」

ヒジュラ『もう1人しか残ってねえけどな』

リーシェ『1位と2位をまとめて発表した方がよかったのではないか？』

ルーナ「そこ！空気読めない発言は慎みなさい！」

秋斗「票が入らなかったから意地でも出番を増やそうとしてるんだろ」

リ・ヒ『『……』』

勇香「めっちゃ落ち込んでるよ…」

璃音「何ていうか…哀れね…」

ロディス『そう悲観するな。人気投票は単なるイベントや指標に過ぎない。お前達は充分活躍している』

ウィン『もはや保護者だね…』

ロディス『言うな…』

ヒジュラ『俺にはリーシェと違って派生カードがねえんだよ！シンクロ召喚はできねえしよぉおおお！』

リーシェ『諦めるな！まだ融合という手がある！』

スイレン『そうですよ！私にも融合の派生オリカが来たんですからまだチャンスはありますよ！』

勇香「さりげなくネタバレすんな！つーか精霊1位のお前が言っても説得力なくね！？」

ルーナ「ああもう！さっさと発表するわよ！記念すべき第1位は！」

第１位　真川紅刃（３０票）

紅刃「俺か！」

ルーナ「現代に生きる電撃の侍！この小説の我らが主人公、真川紅刃が堂々とランクイン！」

秋斗「１位になるだけあって、コメントは最多だ。全部まとめて公開するぞ」

『やっぱ主人公１位は鉄板でしょ！』（ＡＳＡ）

『どこまでも自分に素直なところと、失礼かもしれないけど鈍感なところが気に入っています。これからもがんばってほしいです』（機皇帝プラシド∞）

『これが作者と綾風一族の下した結論だ！』（言羽・Ｄ・カタストロフィー作『遊戯王ＧＸ　百合キング、綾風理奈が吹かせる王者の鼓動。』より　綾風理奈）

『月沙ちゃん幸せにしないと《シューティング・スター・ドラゴン

≫５連打するよ？』（言羽・Ｄ・カタストロフィー作『遊戯王ＧＸ　百合キング、綾風理奈が吹かせる王者の鼓動。』より　綾風七乃）

勇香「多いな綾風一族！？」

カイエン『全投票者の中でも特に協力的でしたからね』

ルリア『コメントはフィレスの時並にまともですね』

璃音「全投票者に謝ってきなさい」

紅刃「鈍感？俺って何か気づいてない事でもあるのか？」

月沙「（馬鹿…）」

秋斗「（いい加減気づけアホ）」

俊也「４つ目のコメントに対して何か一言…」

紅刃「怖えよ！普通に怖えよ！下っ端処刑用ＢＧＭが鳴り響くのが確定してんじゃねえか！」

月沙「幸せにって…！？」

ロコナ『お腹と腰がバイバイしちゃうの？』

紅刃「俺はロボットじゃないからな？Ｄ・ホイールと合体なんてしねえからな？」

ウィン『もしそうなったら夕方６時に放送できないくらいのグロシ

ーンが…』

勇香「今元日ぅぅぅぅ！！初っ端から食欲なくすような話題降ってんじゃねえよ！この小説一応全年齢対象を目指してるからな！？」

フォッタ「月沙の過去話で充分アウトだけどね」

月沙「……」

俊也「あ、落ち込んだ」

ヒジュラ『何の躊躇いもなく禁忌に触れてんじゃねえええぇえぇえ！！』

ルーナ「あんた馬鹿！？一辺輪廻巡ってきなさい！」

勇香「燃やしたろうかてめえはぁあああああああ！！」

フォッタ「ちょっと待がごっ！？がべっ！？ぐほぉっ！？がふぅっ！？」

月沙「真っ二つ…？嫌だよ、そんな…」

俊也「別の意味でも落ち込んでる！？何を想像してるかは大体予想がつくけどすぐに頭から追い払って！」

ナージャ『泣いちゃったわね』

秋斗「プラシドぉおぉおぉおおおお！！！」

リーシェ『潰す！会ったら裁く！塵にしてくれるわ！』

スイレン『木っ端みじんにして差し上げますよ…フフフフ…』

ウィン『いや、みんな元から面識ないでしょ』

ルリア『というかあの人悪くないどころか関係ありませんよね？』

紅刃「ぎゃーぎゃー騒ぐな。真っ二つになんてならねえよ。そう簡単に死んでたまるかっての」

月沙「う…ぐす…」

紅刃「心配すんな」↑月沙の肩を軽く叩き

月沙「？」

紅刃「お前は俺が護る。誰に言われるまでもなく最初っから決めてんだよ」

月沙「紅刃…」

勇香「さりげなくかっこよく決めるなよ。後その名言じみた台詞は本編で使え。何かもったいないだろ」

ルーナ「それじゃ…紅刃、何か一言どうぞ！」

紅刃「おお！投票してくれたみんな、サンキュな！俺の応援もそうだけど、今年もこの小説をよろしく！」

フォッタ「さすが主人公！ちゃんと小説の宣伝もこなしてるね！」

俊也「あ、復活したんだ」

ルーナ「最後に、星御秋斗に総評を伺いたいと思います！」

秋斗「おい待てコラ、そんな項目台本に載ってねえぞ？」

ルーナ「行数稼ぎよ」

紅刃「もろ言った！？」

秋斗「ったく、仕方ねえな。投票数というか、投票者が少ない。他の作者の作品の人気投票では１位で９０票とか行ってるのに、うちのは規模が小さいな」

月沙「まあ、それは仕方ないよ。この小説はそこまで人気があるわけじゃないし」

秋斗「今回の企画はそれを確かめるための指標にもなったわけだ。結果は見ての通りだがな」

カイエン『何というか、これはこれで悲しいですね』

秋斗「だが、小説を書くのは人気を取るためではないだろ。始めは誰でも単純に『書きたい』と思ったから書き始めたはずだ。初心は忘れるべきじゃない」

ルーナ「そうじゃなきゃやってけないわよね」

秋斗「義務感だけで書くのは長続きしないからな。だが、自己満足などであまりにも酷い文章だと、読んでくれる人達に対して失礼だ。そうならない程度に自分で工夫して書いていく。感想などでいい点悪い点を指摘してもらい、それを取り入れ進化させていく。何よりも、読者とネット上でだがコミュニケーションを取れるのは大きな長所だ。中にはキャラどうしを会話させる人達だっているだろ。読者と触れ合いながら書いていく。それが、この『小説家になろう』というものじゃないのか？」

紅刃「…何か話が少しズレてる上に壮大になってきてないか？」

月沙「まだ書き始めて1年も経ってないのに偉そうに語っていいの？」

秋斗「やかましいわ。ここまで小説を書いてきたうちの作者の考えを代弁したまでだ。文句は作者に言え」

ルーナ「ありがとうございました！というわけで、第1回『Ｖｉｔｏｒｓ ｆｒｏｍ ｔｈｅ ｆｕｔｕｒｅ』人気投票の結果発表でした！」

ゴーズ『タイトルついてたのか？』

フィレス『ガウルルッ』

フォッタ「あ、今何ページくらい？」

ルリア『6ページ終盤ですね』

全員『……』

紅刃「え?ちょっと待て、何この空気?繋げってか?また１０ページまで繋げってか?」

フォッタ「もちコース」

月沙「どうするの!?昨日ので話のネタは全部使い切っちゃったよ!?」

将人「まだだ!秋斗の尽力で昨日よりは余りの尺が短い!どうにかなるはずだ!」

フォッタ「まあ、僕も何も考えてないわけじゃないよ」

勇香「本当か!?」

フォッタ「昨日、今後の展開について3択を出したでしょ?早速『2番で夜露死苦』って意見が多数来たんだ」

ロディス『いや、そんな感じでは来てないだろ』

リーシェ『来たと言っても2、3件だろ』

フォッタ「細けぇこたぁいいんだよ!」

勇香「お前がそれやっても似合わねえから」

フォッタ「それは置いといて、新たに選択肢を増やしたらどうなるか検証しようと思ってね」

リーシェ『つまらなかったらシバくぞ？』

フォッタ「大丈夫大丈夫。それじゃ、行きま～す！

４．紅刃と月沙、または俊也と璃音のラブシーンを増やす」

紅・月「「は？」」

俊・璃「「え？」」

ルー・ウ・ゴ・カ「「『アウトぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！』」

フォッタ「がるごふぉっ！？」

スイレン『４人同時の飛び蹴り！？』

ルーナ「あんたはこの小説をラブコメ路線にする気かぁあああ！！」

ウィン『確かに効果的かもしれないけどさ、他に何かないの！？』

ゴーズ『本人達の前で大っぴらに語る事じゃないだろ！』

カイエン『あ、すみません、ノリで蹴飛ばしました』

フォッタ「さすがに怒るよ！？」

俊也「ラ、ラブ…？」

紅刃「おい、ラブシーンってどういう事だ？俺達にどうリアクションを取れと？」

璃音「昨日言った事を覚えてないの？」

月沙「え、ちょ、それって、その、えと、あの、うみゅ～…」

勇香「月沙～、よくわかんねえけどとりあえず戻ってこ～い」

紅刃「あれ？っかしいな～？大丈夫か俺？こんな調子で理性持つかな？」

勇香「ついでにお前も戻ってこ～い」

ヒジュラ『俺としては砂糖の被害さえ出なけりゃいいけどな』

ルリア『そうですね。この小説の読者で、甘い雰囲気に耐え切れずに砂糖を吐き出してしまった人がいますし、それだけは避けなくては…』

スイレン『私は姫様のラブシーンなら砂糖を大さじ１０杯入れたコーヒーでも飲めます！』

リーシェ『糖尿病になるからやめてくれ…』

フォッタ「後は、前書きの件だね。こっちも早速アイデアが届いたよ」

ロディス『ほう。内容はどういったものだ？』

フォッタ「今のところは２つあるね。まず１つ目は、遊星達５Ｄ'ｓのメンバーを使えばいいんじゃないかって事」

璃音「それは一理あるわね」

俊也「一応ルーナ以外は５Ｄ'ｓの時代の人間なのに、同じ時代の遊星達はほとんど絡んできてないよね」

月沙「これは有力候補だね。２つ目は何？」

フォッタ「この小説のＯＰとＥＤを載せる」

ゴーズ『いいのかそれは？』

カイエン『確かに他の作者の人もやってる事がありますけど…』

将人「第一、作者に作詞作曲のセンスはないぞ？」

璃音「イメージソングくらいならいいんじゃないかしら？」

フォッタ「それが無難だろうね。ただ、それには１つ問題がある」

璃音「？」

フォッタ「作者はアニソン以外ほとんど知りません！」

俊也「駄目じゃん！」

フォッタ「仕方ないでしょ！作者は世間の一般常識に疎いんだよ！？自分が住んでる町の知事の名前も顔も知らないんだよ！？あいつらが待ってるはずなんだよ！？あいつらに会いたいんだよ！？ＯＫ！」

俊也「ネタがわかりづらいよ！あいつらって誰！？何がＯＫ！？わかる人いるの！？」

フォッタ「というわけでイメージソングは何か適当に考えとくよ」

俊也「どういうわけ！？」

スイレン『あの…根本的な解決にはなってませんよね？』

ルーナ「誰か他に何かないの？先に言っとくけど私はないわよ」

全員『……』

ルーナ「うん、わかってた。わかってたわよ！こうなる事ぐらいわかってましたよこん畜生！」

ナージャ『というわけでまだまだ募集中よ～』

紅刃「たった１日で解決するわけないだろ…」

ロコナ『ねえねえ、今何ページ？』

秋斗「８ページだ」

月沙「何か他に話題がある人〜！」

全員『……』

月沙「……あ、あれ？何もないの？」

ヒジュラ『おい、どうすんだよこれ？最低でも後1ページ半もあるぜ？』

勇香「ここまでページ数を全力で気にする小説もあんまねえよな…」

ウィン『いっその事ここで切り上げたりとか…』

将人「そんな選択肢は最初からない」

ウィン『ですよね〜』

フォッタ「あ、そうそう」

将人「何だ？」

フォッタ「ある読者から、『僕ら全員のキャラが濃い』っていう認定が…」

ナージャ『素直に喜んでいいかわからないわね〜…』

璃音「昨日の騒動が原因でしょうね」

紅刃「俺と月沙以外全員暴れてたもんな。……」

全員『……』

紅刃「あれ？続きは？」

フォッタ「ないよ」

紅刃「そうか……」

全員『……』

紅刃「すっげえグダグダだなオイ！どうすんだよ！？もう話のネタないのか！？」

将人「昨日でストックを使い果たしてしまったからな…」

ルーナ「え～、新年最初の1日を皆さんいかがお過ごしでしょうか？」

紅刃「最初に言えよ！無理矢理すぎるって！」

璃音「大丈夫、とっておきのがあるわよ」

紅刃「とっておき？」

璃音「フォートレス、来なさい」

月沙「え？」

ズドォン！！

璃音以外『!!?』

璃音「《マシンナーズ・フォートレス》。ようやく完成したのよ」

勇香「感想欄まで読んでる奴しかわかんねえだろ!」

ウィン『壁が見事に粉砕されてるよ…』

璃音「ちゃんと生命体として自分の意思で動くわよ」

勇香「お前本当に何者!?どうやって作ったかさっぱり見当つかねえんだけど!?」

ロコナ『ねえねえ、このロボット喋るの?』

月沙「いや、さすがにそれは…」

璃音「喋るわよ」

月沙「うっそぉ!?喋るの!?」

璃音「何でもいいから話してくれないかしら?」

フォートレス（長いので以下フォート）『皆サン、ゴ機嫌ヨロシュウナァ』

月沙「本当に喋った!?ていうか何で関西弁!?」

フォート『イヤ～、今日ハ皆サンオ揃イデ、ワイモコナイナ日ニオ披露目デキテ嬉シュウゴザイマスワ』

紅刃「めっちゃペラペラ話してんだけど!?本当に作ったのか!?『作った』じゃなくて『創った』じゃね!?」

ロコナ『喋った喋った!』

フォート『オオ、ゴッツメンコイ幼女ガオルナァ!ホンマオ持チ帰リシタイワァ』

紅刃「ただのロリコンじゃねえか!機械なのにロリコンってどういう事!?つーか何で北海道弁!?混在させんなよ!」

フォート『ソコノぴんくノ幼女モメンコイナァ』

ルーナ「え、私?私子供扱いされてんの?小学生よりは背高いんだけど?喧嘩売ってんの?」

フォート『オッサンまじデ嬉シイワァ。今カラワイトエエ事セエヘン?』

ルーナ「ほざけド変態がぁぁぁぁぁぁ!!」

フォート『アダァッ!?』

紅刃「おい、鞭を木刀状にして脳天に打ち付けるな。まだ本編でも披露してねえだろうが」

月沙「まさかの新機能!?」

フォート『デモ、可愛イ幼女エエヤン。グヘヘ』

秋斗「おい、今こいつ『グへへ』って言ったぞ」

ウィン『【マシンナーズ】使いの人達涙目だよ！雑賀さん泣いちゃうよ！』

俊也「カークは気にしないんだ…」

将人「璃音、これはどうなってるんだ？」

璃音「そんな趣味があったなんて私も初めて知ったわよ。…あ」

ロディス『思い当たる節があるのか？』

璃音「…プログラミングを間違えたかもしれないわ」

リーシェ『どこをどう間違えたらああなるんだ！？さっき自分の事を『おっさん』と言ってたぞ！？』

璃音「その時点で気づくべきだったわね。完成したら京哉の世界に送ろうと思ってたのに…」

ヒジュラ『性格を抜きにしても迷惑だろ…』

フォート『向コウノ世界ニハドンナ幼女ガオルンヤロカ？』

紅刃「あのさぁ、全国の幼女趣味の方々に申し訳ないけどお前ちょっと黙っててくれないか？作者もこれ書くのに相当精神的ダメージ負ってるから。そんぐらい話のネタに困ってるから」

月沙「むしろ何でそんなに堂々と豪語できるの？」

フォート『ツレヘンナァ、紅刃ハンニ月沙ハン。幼女ハ…』

紅刃「わかったからお前もう黙れ」

月沙「変な悪影響が出たら困るから。そろそろジャンク市場に売り飛ばすよ？」

ゴーズ『早く精霊界にでも転送しとけ』

フォッタ「そうだね。転送！」

フォート『ホナ、サイナラ～』

ボォン！

勇香「悪夢みたいな奴だったな…」

フォッタ「ついでに壁も修復しといたよ」

ルーナ「あ、本当だ！直ってる！」

璃音「次は気をつけないと…」

勇香「頼むからもうあんな変態戦車だけは作らないでくれよ…？」

フォッタ「まあ、丸々１ページ以上潰せたんだからよしとしようよ」

スイレン『あ、いつの間にか１０ページ目ですね』

将人「いきなり先が不安になってきたな…」

勇香「ま、元気に怪我なく過ごせればいいってもんよ」

秋斗「そろそろ時間だ。最後に主人公から一言貰うぞ」

紅刃「その前に1つ言いたいんだけどさ…この企画の台本どうなってんだ?後半が『適当に話を繋ぐ』って完全にアドリブ頼みじゃねえか」

秋斗「人気投票も質問コーナーも、5~6ページで終わるとは思ってなかったらしいからな。この話なんて年が明けてから夜中にあまり寝ないで書き続けないと間に合う自信がなかったくらいだ。実際そうしたしな」

将人「その気力を勉強に回せばいいだろ」

ナージャ『それは言わない約束よ~』

フィレス『ガウッ!』

カイエン『紅刃、ビシッと一言お願いします!』

紅刃「ビシッとって…。まあ、あれだ。この先いろいろあるだろうけど、俺達の活躍を見ててくれ。応援よろしくな」

ルーナ「はい、ありがとうございました!」

俊也「感想を書いてくれると嬉しいな。自分の小説のキャラで話し

てきた場合は、僕達も応対するよ」

璃音「この際だから次回予告も行くわよ。念のために用意したメモがあるわ。５Ｄ'ｓ風にやりましょう」

紅刃「マジで！？」

璃音「これを読んでるみんなは５Ｄ'ｓの次回予告で流れるあのＢＧＭを用意しなさい」

ウィン『それじゃ、アクション！』

紅刃「新任教師？」

月沙「もう入学式は終わってるよね？何でこのタイミングで？」

ルーナ「私の担任になるらしいわよ」

月沙「もしかしたら、ニュートラルかも…」

勇香「だったら叩き潰すまでだ！どんな奴か、しっかり見極めてやるぜ！」

紅刃「ん？あいつは…！」

ルーナ「次回、遊戯王Ｉｓ『新任教師　冥界からの助っ人』私には

わかる！この人が本気だって事が…！」

ウィン『はい、カット！』

紅刃「タイトル違うだろ！サブタイトルの形式も！」

ルーナ「あの、メモ通りに読んだんだけど…」

璃音「いつもの銀〇風のサブタイトルだとかっこつかないでしょ？タイトルは何となく」

紅刃「何となくで勝手に改名するな！」

秋斗「映像がないのも痛いな」

ロディス『それは仕方なかろう』

ルーナ「こういう時は脳内補完という手を使うのよ！」

ルリア『容姿の想像は人それぞれですけどね』

ロコナ『新任教師って誰？』

リーシェ『それを言ったらネタバレになるだろ。だが、「意外な人物」とだけ言っておこう。楽しみにしておけ』

俊也「あれ？１１ページ目まで行っちゃった」

勇香「…なあ、さっきのフォートレスの下り、いらなくね？」

全員『……』

璃音「ほっときましょう」

将人「多いに越した事はないからな」

勇香「だな…」

ルーナ「というわけで、２０１１年年始トークでした！」

秋斗「投票・投稿してくれた人達、協力感謝する。また機会があったらよろしく頼む」

月沙「今年も『Ｖｉｓｉｔｏｒｓ　ｆｒｏｍ　ｔｈｅ　ｆｕｔｕｒｅ』をよろしくね！」

紅刃「次回も見てくれよな！」

…Ｒｅｇａｒｄｓ　ｔｈｉｓ　ｙｅａｒ

番外編　２０１１年年始トーク（後書き）

いかがでしたか？

投票・投稿してくださった皆さん、本当にありがとうございました！またこのような企画を立てた時も協力していただけると助かります。

最後に、こんな小説ですが、今年もよろしくお願いします。

では、また次回！

第４１話　おじさんが復活した時の世間の反応が気になる（前書き）

第４１話です。でもデュエルはありません。

今回は多分意外な人物が登場します。

それではどうぞ！

第４１話　おじさんが復活した時の世間の反応が気になる

ＳＩＤＥ／？？？

フフフ…。

ソ○モンよ…いや、アキか？違う違う、現世…まあ、どうでもいいか。とにかく！私は帰ってきたぁあああぁあぁあああああああ！！！！！

…おっと、すまない。少し取り乱してしまったね。

冥界でチャンスを与えられて数々の苦難を乗り越え、殺めてしまった人々…特にトビーとの因縁にも決着をつけ、私は遂に現世に戻る事ができたのだ。

アキやミスティと顔を合わせるのはもはや無謀な行いだが、それより過去の時代に送られたのだから大した問題ではない。

真川紅刃、波星月沙、風嶺俊也、天原勇香。まずはこの４人が確実にするであろう誤解を解く必要がある。まあ、無事に済むとは思ってないが、こちらには証人がいるから最終的には上手くいくだろう。

まずは放課後だ。彼らに会うのはそれからでいいだろう。

ＳＩＤＥ／ルーナ

璃音とのデュエルから数日が立つ。

私は不安を残しつつ、念願の人間の友達との時間を過ごしている。

私を対等に見てくれるのは紅刃達だけじゃなかった。オシリス・レッドの遊城十代を始めとするいろんな人が私を受け入れてくれた。

周りの目が相変わらず厳しい中で、十代達も嫌な顔を１つもしない。今までの私の生活じゃ考えられない事だった。

「ルーナちゃん、おはようザウルス！」

「剣山？ああ、おはよう」

今私に挨拶をしてくれたのはティラノ剣山。語尾に『ドン』とか『ザウルス』とかつけるほどの恐竜オタクよ。恐竜にさん付けしてるくらいだから徹底してるわよね。

おはようっていうのは、今が朝のＨＲ前だから。私は教室の席についていて、剣山とは席は隣どうしよ。

「今日はやっと担任の先生が来るって聞いたドン」

「本当にやっとね。どんだけ待たせるのよ…」

私達のクラスの担任は新任で、なぜか入学式より遅れて来る事になっている。それまで代わりの先生が代理を勤めていたわ。

「まあ、誰だろうと関係ないけどね。私を見る目は変わらないだろうし」

「そんな悲しい事は言わないでほしいドン…」

「慣れてるから仕方ないでしょ？あ、来たわよ」

教室に私達の担任となるであろう先生が入ってきた。教室が一旦静まり返る。

「ゴホン。はじめまして。自己紹介の前に号令をしようか。ここの号令係は誰かな？」

「あ、私です。起立！礼！」

号令係の女子の掛け声で礼をする。そしてまた座る。

「では、自己紹介といこう。まず、こちらの事情で顔を出すのが遅れてしまったのは申し訳ない。この度このクラスの担任を勤める事になったディヴァインだ。担当は実技、新しくレッド寮の寮長にも就任した。以後よろしく頼む」

「ディヴァイン先生、ねえ…」

服装はアカデミア特有の物じゃなくて、黒いワイシャツの上に緑のベストを着ている。ズボンも黒。髪は赤くて、前髪が長い。

あの人が私達の担任か。別に誰でも変わらないけど。その後の話はまとめて聞き流した。

「それと、最後に１つ」

まだあるの？ＨＲ終了時間ぎりぎりなんだけど。

「私は差別とかそういった類のものが嫌いだ。どんな生徒でも対等に扱うから、そのつもりでいてほしい」

「は…？」

思わず声を上げた直後に、終了のチャイムが鳴った。

「《サイコ・ウォールド》でダイレクトアタック！スネイル・サンダー！」

「うわあああああ！！」

…強い。

実技の授業でディヴァイン先生が実際にデュエルをする事になったけど、凄く強い。

先生が使ってるのは、『サイキック族』っていう聞いた事のない種族のモンスター。ライフコストが必要な効果を持つモンスターが

多い。その代わり、ライフを回復する手段も多い。

何より驚いたのは、私や璃音達のようなごく一部の人しか持ってないチューナーモンスターとシンクロモンスターを使っている事。《マジカル・アンドロイド》だっけ？あのモンスターがいるだけでガンガンライフが増えてくんだもの、いくら攻撃しても足りないわよ。

「少しプレイングミスがあったね。さっきの《死者蘇生》で《無敗将軍　フリード》じゃなくて《ならず者傭兵部隊》を出せば…」

「あ、そうか…！」

「除去手段は多いけど、全体的に攻撃力が低めだね。攻撃力の高いモンスターを増やすか、防御系のカードを入れてみるといい」

「はい、ありがとうございます！」

先生をやるだけあってカードの知識もあるらしく、いろんな人に適切なアドバイスをしてる。今朝初めて会った時よりも生徒と打ち解けてるわね。

『私は差別とかそういった類のものが嫌いだ。どんな生徒でも対等に扱うから、そのつもりでいてほしい』

今朝のＨＲで最後に言った言葉。あれがもし本当なら…いや、駄目よ。本当に信用できるかなんてわからないじゃない。ただの薄っぺらい言葉だって可能性も否定できない。あの先生は何者なの…？

放課後。私は一旦寮に戻った後、紅刃達に会いに行こうと思って外を歩いていた。私と紅刃が最初に出会った広場に集まってるらしい。

「君」

誰かに呼び止められた。振り返ると、ディヴァイン先生がいた。

「君は確か、九条院ルーナだっけ？」

「そうですけど…何か用ですか？」

つい睨んでしまった。でも、これはいつもの事よ。

「いや何、ちょっと人探しをしていてね。真川紅刃っていう人がどこにいるか知ってるかい？」

「紅刃？知ってるも何も、今から会いに行くところですけど…」

「本当かい？なら、ついていってもいいかな？彼に話があるんだ」

「話？」

紅刃に話って…。新任教師が何の用なの？

「別に構いませんよ。こっちです」

「すまないね」

こうして私はこの新任教師を案内する事になった。

「森の中に入るのかい？」

「この中の広場に集まってますから。…先生」

「何だい？」

「今朝のＨＲで言ったあの言葉…どこまで本気なんですか？」

「ああ、あれかい？最初から最後までだよ」

ずっと気になってたから質問したら、何も迷う事なく答えてきた。

「私は、他の人と違う故に忌み嫌われている人をたくさん見てきた」

「！」

「そして、私もその１人だ。だからだよ」

「同じ境遇だから、ですか？」

「そんなところだ。…私はかつて、そんな人達を集めて組織を作り上げ、彼らの居場所とした事があった」

「組織？」

「そうだ。…しかし、当時の私は、その組織を復讐の道具として作り上げてしまった」

そう言った先生の顔が、少し曇ったように見えた。

「私のような人間を差別してきた世間への復讐だ。そのために、私は数々の悪行に手を染めてしまい、組織に集まった人間すら利用しようとしてしまった」

復讐。悪行。昔に何をしてきたかはわからない。でも、反省の色ははっきり見える。

「だが、計画を実行する前に壊滅してしまったがね」

「壊滅？どうしてですか？」

「別の強大な組織に攻撃されたんだ。その組織の中には私を恨む人物がいてね、おかげでアジトは全壊。私も重症を負って行方をくらませていたから、私の組織は自然解散した」

「…何で、そんな話を私に？」

「君が私の知り合いに似てるからかな」

「似てる？」

「こう言ってしまうのもなんだが…君は周りの多くの人達に嫌われているね？」

「っ…！」

「そして、君も心を開こうとしない。隣の席の剣山って生徒は例外みたいだが」

「……」

「彼女も君と同じだった。君と違うのは、いつも誰彼構わずに傷つけ回り、辺りをめちゃくちゃにしていたところだ。私の説得で何とか私の組織に引き入れる事ができたものの、彼女は私以外の人間に心を開こうとはしなかった」

私が自分の心を見透かされたような気持ちになったのを無視して、先生は話を続ける。

「しかし、私は彼女を裏切った。彼女が他の人達より大きな才能を持っている事に目をつけた私は、組織が壊滅してもなお彼女を利用しようとした。だが、すんでのところで私の目論みは阻止され、それ以降私は彼女と会っていない」

「……」

「私はもう世界に復讐しようなどという愚かな考えは捨てた。しかし、私の罪が消える事はない。償いようのない罪を彼女にも背負わ

せようとしてしまったのだ。私はもう彼女に会わせる顔がない」

そう話したディヴァイン先生の顔は暗く、心の底から後悔していた。私にはわかる。私も他人に嫌われ続けて、そんな世界を憎む事が何度もあったから…。

「私がこのアカデミアで教師をする事にしたのも、せめてもの罪滅ぼしというのが大きい。ここは階級制度のせいか、下の階級の人達を見下すような生徒が多いと聞いたからね。今度は正々堂々、真っ当なやり方で世界と向き合うつもりだ」

真っ当なやり方で世界と向き合う、か…。

先生は私の事情を知らない。でも、この人なら信用できるかもしれない。そう思えた。

「しかし、少し不安がある」

「不安ですか？」

「紅刃達とどう和解すればいいか…」

「は？」

「君は紅刃と知り合いなんだろ？紅刃と仲が良い人は知ってるかい？」

「え？紅刃と仲が良い人って言ったら、月沙に、俊也、勇香と、それから…」

「ストップ。そこまででいい」

「あの…紅刃達と何かあったんですか？」

「実は、その４人は私が組織を経営していた頃に敵対していた者達なんだ」

「あ～…」

「特に俊也と勇香は私の組織に一時期所属していた事があってね、俊也は元から組織の、というか私の目的を知っていたから、それを止めるために潜入していた。勇香は私が才能に目をつけて、その…一種の洗脳術みたいなもので無理矢理組織に入れてたんだ」

「洗脳術って…」

「まあ、洗脳が偶然解けて、俊也と一緒にクーデターを起こされてボコボコにされたがね。だから、まずは彼らと和解しなければこの先アカデミアの一員としてやっていけないと思ってね」

確かに、改心したのにまだ敵対してるようじゃいざこざが絶えないわよね。それだとかなり気まずいでしょうに。

「だったら、私が弁護しますよ」

「本当かい？」

「先生が本気なのはわかります。私も似たような考えをした事が何度もありましたから…。だから、嘘じゃないって思うんです」

「そうか。ありがとう、助かるよ」

「どういたしまして」

私もずいぶん丸くなったわね。紅刃達と交流ができてからかしら？

「あ、そろそろ着きますよ」

「なら、先に行っててくれないか？私としても心の準備が必要でね」

「わかりました」

先生の頼みを聞き入れて、私は一足先に広場に足を踏み入れた。

「あ、ルーナ！」

私が何か言う前に、月沙が私に気づいて声を上げた。

「ごめん。少し遅くなっちゃって…」

「気にすんな」

「で、早速なんだけど…あんた達と話をしたいって人がいるの」

「話？」

「（な！？ちょっと早すぎないか！？）」

「新しく就任してきた私のクラスの担任なんだけど…」

「担任？」

「先生が何か用か？」

「（何勝手に話を進めているんだ！？もう少し猶予というものを…）」

「先生、出てきてください。早く来ないと飛び蹴りかましますよ？」

「なぜ飛び蹴り！？教師に対してそれはないだろう！…あ」

「「「「！？」」」」

先生が私の発言にツッコみながら飛び出してきた。紅刃以下３名は唖然としてる。

「これで出てこれたでしょう？後は話すだけですよ」

「他にやり方はなかったのか！？心の準備をする猶予を取るくらいはしてくれたっていいじゃな　ごぼっ！？」

先生が吹っ飛んだ。

「へ…？」

少し間を置いて、勇香と俊也が飛び蹴りをかました事に気づいた。てか何私が言った事を問答無用で実行してんのよあんたらは。

「てめえ、どの面提げて出てきやがった！？」

「何で生きてるんですか!?あの時地縛神に食べられて死んだんじゃないんですか!?」

え?地縛神?食べられて死んだ?何の事?Ｗｈａｔ?

「いつつ…いきなり乱暴は酷いじゃないか…。まずは話を聞いて…」

「俊也、こいつ燃やしていいか?」

「その前に鎌鼬の切れ味を試させてよ。最近開発したんだ」

「ストップストップ!だから話を聞いてくれと言ってるだろ!」

あの…何か物騒な話になってるんだけど…。ていうかどんだけ嫌われてんのよ。

「お前ら落ち着け。地縛神なんて単語を大っぴらに叫ぶなよ」

「あ、しまった…!」

「てかお前と月沙はあいつを何とも思わねえのかよ!?あいつがどんな事をやってきたかは知ってるだろ!」

「知ってるっちゃ知ってるけどさ…」

「何か今の見てたら怒る気失せてきた…」

「そんな理由で見逃されてるのか私は!?」

ちょっと〜?わかりやすいように説明してくれる〜?私はもちろ

ん、将人達も話についていけてないんだけど～？

『彼については私が説明しましょう』

え？何今の声？

カッ！

「っ！？」

「何だ！？」

突然、ディヴァイン先生の前から強い光が発せられた。光はそのまま発光し続ける事はなく、すぐに収まった。

のはいいんだけど…人が立っていた。白い服を着た金髪の女性と、同じく白い服を着た白い髪の小学生くらいの子供。

「フォッタ！？」

「やっほ～！元気してる？」

「え…あなたは…！？」

「お久しぶりですね、月沙さん」

「え、何？あんた達知り合いなの？ていうか展開についていけないんだけど…」

「おい、フォッタ！ルーナは例の件とは関係ねえだろ！何でこのタイミングで出てきたんだ！？」

「いや、その子にも協力してもらおうと思ってね」

「はあ！？」

協力？例の件って一体何？紅刃と子供の会話はわからない事だらけだ。

「ああ、君…九条院ルーナだよね」

「え？私？」

「はじめまして。僕はフォッタ、神様見習いだよ」

「は？あんた頭沸いてんの？」

「初対面の相手に即答でそれは酷くない！？」

「ルーナ、気にすんな。俺達も最初に会った時は似たような反応したから」

「そういう問題じゃないから！ていうか毎度毎度僕の扱いおかしいよね！？」

なるほど、世間で言ういじられキャラね。把握したわ。

「そんな事はどうでもいい」

「どうでもいい！？今のをどうでもいいで済ませるの！？」

「あんたは知らない顔だな。誰だ？」

フォッタの叫びをスルーして、秋斗は一緒に現れた女性に質問した。

「そうですね、自己紹介が遅れました。私はノルフェナ。神を勤めている者です」

また『神』？どうも信じ難いわね…。まあ、さっきの登場シーンを見せられちゃ、嘘だと決めつけるわけにもいかないけど。

「月沙、あなたはノルフェナさんと知り合いなの？」

「知り合いも何も…あ、ええと…」

璃音の質問に答えるのをなぜか躊躇う月沙。何か言っちゃまずい事でもあるの？

「月沙さんを転生させたのは私です」

「何！？」

「転生？」

「ちょ、ノルフェナさん！？」

「今のうちに話してしまった方が気が楽でしょう？ルーナさん、ちょっと長い話になりますが…聞いてもらえませんか？」

「は、はい…」

その場の流れで、私は思わず返事をした。

それから聞かされたのは、信じられないような話ばかりだった。

月沙が1度別の世界で死んでからノルフェナさんに蘇らされた転生者だという事（これは璃音と秋斗も初耳だった）、紅刃達が未来の人間だという事、そしてニュートラルとかいう謎の組織の事…。

「あ、そうだ！この前ニュートラルと関係ありそうな連中に襲われたんだけど…」

「本当ですか？」

「なぜそれを早く言わなかった！？」

将人が紅刃に問いただすと、紅刃は少し気圧されたのか1歩下が

った。

「言うタイミングを掴めなかったんだよ。ルーナと初めて会った時に何かのモンスターみたいな集団が出てきたんだ。全員返り討ちにしたけどな」

そういえばそうだったわね。

「その時の事は、私達も天界から見ていました」

「特徴は？」

「黒い虫が2足歩行になってるような奴らだったな。蟷螂（かまきり）っぽいのもいた」

「蟷螂？」

「で、そいつの頭に何か模様だかマークだか、そんな感じの奴が描かれてた。何つーか…何かの角みたいなもんだったな」

「角…」

「月沙さん、心当たりはありますか？」

「……いや、ごめんなさい。イマイチ思い出せなくて…」

「そうですか。何か思い出したら連絡してくださいね」

「はい」

あの時、あの連中は真っ先に私を狙った。もしかして、私の力に気づいてたの？それとも、紅刃の実力を試すために？…わからないわ。

「ルーナさん」

「はい？」

「月沙さん達はアビリティと言われる特別な力を持っています。その事については月沙さん達から説明を受けているはずです」

確かに、アビリティについては前に紅刃達から聞いた。それまでは、私の力が何なのかすら知らなかった。

「あなたはなぜかその力を持っている。そして、実力もあるようです。何より、共鳴するカードを持っています」

「《ブラック・ブルドラゴ》の事ですか？」

「はい。先程話したように、シンクロモンスターは未来のカードです。それに、あなたが使う大半のカードがこの時代に存在しない物なのです」

そういえば、紅刃達にも『そのカードをどこで手に入れたんだ？』って聞かれたっけ。

「なぜあなたが未来のカードを所持しているのですか？」

「さあ、何でしょうね？」

「真面目に答えてよ！」

「フォッタ、黙ってなさい」

「物心がついた時から持ってたんです。家の人達は誰も使い方をよく知らなくて、自力でいろいろ試して使い方を覚えました。リリースなんて知らない単語があったけど、生け贄の事だという事は何とかわかりました」

もしかしてって思ってやってみたら、デュエルディスクが正常に反応したのを覚えてるわ。

「なるほど…。私達の方でも、そのカードの出所を調べてみますね。カードはそのまま持ってて結構です」

「わかりました。お願いします。…で、協力っていうのは？」

「お察しの通りだと思いますが…月沙さん達と一緒に、ニュートラルを倒してくれませんか？」

やっぱり。

「ノルフェナ。いくらルーナに力があるとはいえ、こいつは一般人だ」

真っ先に異を唱えたのは、秋斗だった。

「彼女を信用してないのですか？」

「そうじゃない。だが、巻き込むのはあまり好きじゃ…」

「いいですよ」

「何？」

私は秋斗の言葉を遮って返事をした。秋斗は少し目を見開いた。

「気遣ってくれてありがとう。…でも、こんなやばい話を聞かされたら黙って見過ごせないのよ」

「どれだけ厳しい戦いになるかわかって言ってるのか？俺達ですら勝てる保証はないんだぞ？」

「あんた達はそれを承知で戦ってるんでしょ？同じ事よ。それに…やっとできた友達の力になりたいから」

「……」

私が理由を告げても、秋斗は厳しい顔をして私を睨んでいた。だから、私も秋斗に睨み返す。

「いいんじゃねえか？」

「何？」

「俺は1度ルーナが戦うところを見てる。こいつは強い。デュエルでも実際の戦闘でもな」

紅刃は私を認めてくれたみたいだ。私の力を褒めてくれたのは、紅刃が初めてだ。

「私もいいと思うよ」

「僕も」

「異存はないわ」

「仲間が増えるのはありがたいしな！」

「俺も構わない」

月沙達も次々と賛成してくれた。何か嬉しい。秋斗はそれを見て溜息をついた。

「……足手まといにはなるんじゃねえぞ」

「上等！」

秋斗のきつめの言葉に、私は勝ち気な笑みを浮かべて言い返した。

『私もＯＫよ～』

肯定の言葉と一緒に、ナージャもカードから出てきた。

「ナージャさん。あなたも未来のカードですが、未来から過去に来たという記憶はありますか？」

『いえ…気づいたらルーナの傍にいたというだけで、未来がどうのこうのって話はついさっきまで知りませんでしたよ～』

「そうですか…。何か思い出したら報告してください」

『了解よ～』

「…では、決まりですね」

ノルフェナさんは、一旦言葉を切って私とナージャを見た。

「九条院ルーナさん、ナージャさん、あなた達にニュートラル討伐を正式に依頼します」

「はい！」

『はいはい～』

強く返事した私とは反対に、ナージャはのんびりした調子で返した。いつもこんなんだし、私もナージャのパートナーだから真剣だって事はわかるけど。

「あ～…1ついいかい？」

不意に、別の声がした。

「みんな、私の事を忘れてないか？」

「「「「「「あ…」」」」」」

今声を上げたのは、私、紅刃、月沙、俊也、勇香、フォッタ、ノルフェナさん。

「「「……」」」

璃音、将人、秋斗は気まずいのか顔を背けてる。

「あれ？やっぱり忘れられてたのかい？私って影薄いか？」

さっきからずっと黙ってたディヴァイン先生の呟きが、やけによく聞こえた。

『ス〇夫ヘアーは黙ってれば？』

「誰がス〇夫ヘアーだ！話をしに来たのにそれはないだろ！」

「あれ？先生って精霊が見えるんですか？」

「あ、そうだ！それも含めて今から説明します」

「ノルフェナ、今『あ、そうだ！』って言ったか？言ったな！？完全に私を置いてけぼりにしてたな！？」

『黙れ赤髪。銀髪シスターを追いかけて不幸な高校生に殴られたら？』

「貴様ぁぁぁぁ！！赤髪は悪いのか！？貴様の中では劣等種なのか！？全世界の赤髪の人達に謝れ！不良神父をナメるな！ついでに魔女〇りの王に焼かれろ！」

先生、あんた魔術と科学が交差するあれを知ってんの？そう思ったけど声には出さなかった。

「（あれ？ディヴァインってギャグキャラだっけ？私の記憶違い？）」

「コホン。え～、では話しますね」

ノルフェナが1つ咳ばらいをして、ディヴァインについての話を始めた。

「彼は地縛神に捕食された。ここまでは知ってますね？」

「ああ」

何で捕食されたのか、そもそも地縛神が何なのか、聞きたい事はいろいろあるけど、後で紅刃達にまとめて聞く事にした。

「彼はそのまま地縛神に吸収されました。本来なら、紅刃さん達やシグナー達の活躍で冥界の怪物が倒され、吸収された魂が解放された時、彼の魂も解放されるはずでした」

物凄く壮大な話をサラっと言われたんだけど。紅刃達は一体何と戦ってきたの？

「しかし、彼を無理矢理冥界に留めた人がいました。月沙さんの友人の、木下鈴佳さんです」

「鈴佳が！？」

冥界…って事は、その鈴佳って人はもう死んでるの？

「実は、ニュートラルの存在はこの頃から確認されていました。精

霊界と人間界の双方に現れては、何かを探索するような不穏な動きを見せていました」

「探索？何を探してるのかしら？」

「そこまではわかりません。当時は組織の名前すら知りませんでしたし。…しかし、組織は度々精霊界で破壊活動を行っていました。それも、村１つを４～５分で殲滅するくらいの」

「！？」

「これはまずいと私達も対策を取る事にしました。そこで、まず紅刃さん達に白羽の矢が立ちました。ダークシグナーの事件が解決した後、時間を置いてフォッタが依頼をする事になりました。その事を冥界にも報告しに行くと、鈴佳さんは他にも戦力になりそうな人がいると言いました」

「それが、ディヴァインだったんですね」

「はい。彼には勇香さん達の言葉で少なからずとも罪悪感や迷いが生じていました。鈴佳さんは彼を無理矢理冥界に留めた後、迷いを断ち切るために様々な事をしました」

「精霊と触れ合うスキルもそこで身につけた。『実験などで殺してしまった人達に謝れ』なんて無茶苦茶を言われた時は本当に困ったね。何とか和解はできたが、いろいろあったな」

ディヴァイン先生がノルフェナさんの話を引き継ぐ。表情を見る限り、後悔はないみたい。

「鈴佳に合格を貰ったのはつい最近だな。少し修行をした後に、ノルフェナにこの世界に連れてってもらった」

「…つー事はあれか？お前は私達の助っ人として来たのか？」

「そういう事だ」

勇香の予想はピッタリ当たった。ここに来るまでに言ってた和解って、自分が助っ人になるからって事だったのね。

「…イマイチ信用できねえな」

「（だろうな…。この反応は予想できていた。和解にはやはり時間がかかるか…）」

勇香は敵意を向けている。そりゃそうよね。敵だった人間がいきなり助っ人だって言うなんて、普通は信用できない。

「また表面だけ取り繕って、隙を突くつもりじゃねえだろうな？」

「それはないわ」

そう、『普通なら』ね。

「ルーナ？」

「ここに来るまでに聞いたわ。先生がどんな事をやってきたか。これからどう生きるのかも」

でも、生憎私と先生は普通じゃない。

「私と先生は似てるのよ。普通の人と違うからって、世間から差別を受けてきたところが。何度も世界を憎んだりしたところもね。だからかな」

同じような人種だから、同じ辛さを体験してるからこそ、わかる事があるのよ！

「私にはわかる！この人が本気だって事が！自分の罪と真剣に向き合って、逃げないで前に進もうとしてる！この人はもう、1度歩いた間違った道は選ばない！私はそう信じる！」

沈黙。私が言い切った先に待っていたのはそれだった。

みんなびっくりして私を見てる。私、そんなに変な事言った？

「……わかった」

最初に口を開いたのは勇香だ。

「え？」

「ディヴァイン、あんたを信じる」

「「！」」

「ルーナは滅多に心を開こうとしねえ。私達でもかなり骨が折れたってのに、そのルーナにここまで言わせたんだ。あんたの覚悟は本物だよ」

ニッと笑って認めた理由を話してくれた。私だって人を見る目は少なからずあるつもりよ。

「皆さんもいいですね？」

ノルフェナさんの問い掛けに、他のみんなが首を縦に降る。

「信じてくれたみたいだな。礼を言う」

「まあ、もし裏切ったら天界が黙っちゃいないけどね」

「あ、無条件で冥界に連れ戻す気だな」

「彼はこのデュエルアカデミアの教師としてここに滞在する事になります。上手い具合に話を合わせてくださいね」

「了解」

何はともあれ、みんなと和解できてよかった。私も、信用できる人が増えたのは嬉しい。

「それでは、私達はそろそろ帰りますね」

「ああ。いろいろありがとな」

「お師匠様、もう帰るんですか？」

「ええ」

「え？『お師匠様』？」

「あ、言ってませんでしたっけ？フォッタは私の弟子です」

「「え゛！？」」

「それでは、また会いましょう」

「バイバ～イ」

カッ！

また強い光が視界を霞め、気がつくと神様師弟はもういなかった。

「ノルフェナさんが、フォッタの師匠…？」

「あいつ、師匠いたんだ…」

今判明した事実に1番驚いてるのは、月沙と紅刃だった。

「ディヴァイン」

紅刃は気を取り直して先生を呼び、先生に歩み寄った。

「まあ、何だ…よろしくな」

無造作に差し出された手を、先生はきょとんとして見ていた。その後、

「…ああ。精一杯協力させてもらうよ」

固い握手を交わした。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第４１話　おじさんが復活した時の世間の反応が気になる（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「今回紹介するカードは特にないので代わりに紅刃とその他１名を呼びました」

ディヴァイン「あの、その他１名て何？私はついで扱い？」

紅刃「つーか名前長いから台本形式だと見づらいだろ。今後台本形式の時はディヴァで統一な。最大４文字が限度だ」

ディヴァ「勝手に決めないでくれたま…あの、ちょっともう措置が取られてるんだけど？私の意見は聞く気なしか？」

勇香「…なあ、もうツッコミ放棄していいか？ボケに転向していいか？私がボケじみた事をやったの初登場の時しか記憶にねえんだけど？」

紅刃「今回もやったろ。新任教師を再会後１０秒足らずでぶっ飛ばしたろ。お前ツッコミの戦力減らす気か？」

勇香「お前が自分自身を減らしてんじゃねえか！さりげなく転職してんじゃねえよ！」

紅刃「ツッコミにも休息は必要なんだよ。伝説の眼鏡もさすがに疲れてサボってた事があったし」

勇香「お前はそこまで働いてるか怪しいだろうが！つーか私にも休息寄越せやぁぁぁぁぁ！！」

ロコナ『ユウカとクレハってお仕事してるの？』

フィレス『グルゥ？』

ディヴァ「気にしなくていいからね。ていうかあの2人さりげなく私に押し付けようとしてないか？」

璃音「あなた先生なんだからちゃんとまとめなさいよ」

ディヴァ「君もそのまとめる対象にどっぷりはまってるという事になぜ気づかない！？」

璃音「何なら前書きでこういう雑談を書けばいいんじゃないかしら」

ディヴァ「多分3話くらいでネタが切れると思うが…」

紅刃「話は変わるけど、お前冥界で何があったんだ？鈴佳に何をやられた？」

ディヴァ「ああ、あれは…」

璃音「話が長くなるからいつか番外編でも作りましょう。いつやるかはわからないけど」

ディヴァ「初っ端から話の腰を折らないでくれるかな！？」

勇香「後書きでそんなにスペース取れるわけねえだろ」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

紅刃「まあ、また機会があったら後書きにも顔を出すよ」

ロコナ『またね～！』

勇香「それじゃ、次回も見てくれよな！」

ディヴァ「私にも一言言わせろ！」

――――――――――――

いかがでしたか？

はい、というわけでおじさんを蘇生しました。妙な人気あるようなので出す事にしました。デュエルする事はそこそこあると思います。

では、また次回！

第４２話　１ターンキルはデュエリストの夢（前書き）

第４２話です。

今回はデュエルが２連続であります。

それではどうぞ！

第４２話　１ターンキルはデュエリストの夢

ＳＩＤＥ／勇香

私は今、将人と俊也、秋斗、そしてディヴァインと一緒にレッド寮に向かっている。

あの後、私達はそれぞれ解散する事になった。私達８人はブルーとレッドで綺麗に２分割されてるから、必然的に２手に分かれる形になる。男女比率はおかしいけど。『普通紅刃とお前が逆だろ』ってツッコミは受け付けないからな。

「寮長になるとか言っていたが、料理はできるのか？」

「私は年齢＝独身だ。それぐらいできなくてどうする」

「いや、お前アルカディア何たらの総帥なんだろ？使用人とかに作ってもらってる感じがするんだが…」

「最低限の事は自分でしていた。忙しい時以外は、自分の飯は自分で作る」

「でもどうするんですか？うちの冷蔵庫にはいつも味噌汁の材料とか沢庵とかめざしとかめざしとかめざしとかめざしの山しかありませんよ？」

「要はめざしが大量にあるんだね？栄養バランス大丈夫か？」

「うちの馬鹿(じゅうだい)が美味いっつってるから問題ねえだろ」

「いや、馬鹿って書いて『じゅうだい』って何？お前あいつ嫌いなのか？」

さすがに私もツッコんだ。

こんな風に談笑してんのが未だに信じられねえよ。つい最近まで猫かぶりの極悪人だった奴だぜ？普通はこうはならねえよ。なのにもうほぼ完全に打ち解けてるし。俊也は昔の事もあってかボケ倒すつもりらしいけど。あ、アルカディア・ムーヴメントの件はさっき本人が説明したぞ。

「あ、着いたぞ」

で、何だかんだでレッド寮に到着。

「冥界からも覗いた事があったが…こうして見るとやはりボロいな…」

「そこがいいんじゃないですか」

「…ディヴァイン」

「何だ？」

「私とデュエルしてくれ」

私がそう言うと、全員びっくりした様子で私を見た。

「さっきはああ言ったけど、正直あんたの事はまだ信用し切れてねえ。あんたの覚悟、確認させてもらうぜ」

「…いいだろう。デュエルディスクを取ってくるがいい」

私の意思を汲み取ったディヴァインが鞄からデュエルディスクを出してる間に、私は寮の部屋から自分のデュエルディスクを取ってきた。私のは全体が赤く染まってて、カードを置く箇所が朱色になっている。

「では、始めようか」

「ああ」

ディヴァインがデュエルディスクを構えて準備完了。さ〜て、始めっか。

「追跡者退治をな！」

戦闘開始。私は森に向けて、右手から火炎放射をぶっ放した。

何してんだって?さっきから後を付けてる気配がしてんだよ。そ

れだけならまだいいけど、殺気やら悪意やらを向けられてちゃ、私も黙っちゃいられねえってもんだ。

案の定、うじゃうじゃ敵が飛び出してきやがった。まあ、どうにかなんだろ。

「やはり気づいていたか」

「あんたこそよく合わせられたな」

私達も伊達に危険な連中と戦り会ってきたわけじゃねえ。何か異常だって事がすぐにわかった。おまけに『嫌な何か』も感じ取れる。

とにかく、真っ先に向かってきた奴の顔面を素手で殴り飛ばす。そいつは勢いよく吹っ飛んで木にぶつかり、ソリッドビジョンでモンスターが破壊される要領で消えた。

つーか今のって《切り込み隊長》じゃなかったか？よく見たら、敵はデュエルモンスターズのモンスター達だ。て事は、モンスターで見て大体１０体くらいか？今私が倒したのを引いて９体だな。

「はぁっ！」

俊也が足を振り上げ、突風を巻き起こす。それで体勢が崩れたモンスター達を、将人が自分で創り出した鎌で次々に斬り裂いていく。残り５体。

「俺も行くか」

秋斗が右手を突き出すと、紺色の光を出して杖を創った。ルリア

と同じ奴だ。

「《マジック・ブラスト》」

残りの奴らが突っ込んできたのを見て、秋斗は魔力の篭った球体をぶつけて破壊した。残り3体。

「《ファイヤー・ボール》！」

ディヴァインがカードとサイコパワーを発動させ、残りの奴らを炎の球3発同時発射で片付けた。これで全滅。

「あんた、1回の発動で1発しか撃てないんじゃなかったのかよ？」

「今は最大5発だ。君に至ってはアビリティすら使ってないじゃないか」

「ただのウォーミングアップだ」

「ぐ…なぜ気づいた？」

モンスター達が飛び出した場所から人が2人出てきた。格好は2人共同じで、黒いマントと黒いフードを身につけている。左腕には当然デュエルディスク。

「危なっかしい組織に2ヵ所も入ってたんだ。あんたらの妙な殺気くらい感じ取れる」

「仮にも元総帥だ。ナメてもらっては困るね」

チームサティスファクションとアルカディア・ムーヴメントに所属してきた実績をナメんなよ。

「今のあれはモンスターだね？実態化していたが…サイコデュエリストか？」

「違うな。サイコパワーが眠ってるのはこっちの方だ」

連中の1人がディスクを掲げた。

「俺達はこれをサイコディスクと呼んでいる」

「説明ありがとう。べらべら敵に話すべきじゃないけど」

「何？…はっ！？」

俊也の指摘で連中は『しまった！』とでもいうようなリアクションを取った。馬鹿だろ。こいつら馬鹿だろ。

にしても、さっきから感じてる『嫌な何か』の正体はサイコパワーで間違いないみたいだな。あのデュエルディスク、どうやって作ってんだ？

「ええい！貴様らデュエルだ！」

「敵わないと見てデュエルで挑む気か？」

「何、さっきのは小手調べ。本命はこっちだ」

2人がデュエル…じゃなかった、サイコディスクを構える。声か

らして、こいつら男だな。

「貴様らには消えてもらうぞ」

「ディヴァインが自然にデュエルディスクを用意できるように芝居を打ったのはなかなかだが、我らには敵うまい」

「私の名前を知っているのか？」

「君達はニュートラルかい？」

「当たりだ。貴様らは我らの計画の邪魔になるからな。消しに来た」

こうも早く遭遇するとはな。でも、敵から来るなら好都合だ。つーか、何かこいつら下っ端臭いな。下っ端A、Bって呼ぶか。

「ま、こうなるのは読めてたさ。それに、ただ芝居を打ったわけじゃないぜ」

「何？」

「私がデュエルしたいからだ！」

「深く考えてなかったのか！？」

将人に後ろから頭をシパーンと叩かれる。地味に痛い。

「だって私まだこの小説で1度もデュエルしてねえんだぞ？」

「メタ発言は禁止だ！」

「俺も同じだぞ？」

「とにかく、デュエルなら私が相手だ！」

「ここはタッグデュエルといこうじゃないか。私も出よう」

私が応戦しようとすると、ディヴァインが相方宣言をかました。

相手も2人だし、丁度いいか。

「君達には後でじっくり話をしてもらうよ。サイコデュエリストとしても聞いておきたい事があるのでね」

「我らに勝てたらの話だがな。だが、タッグデュエルは断る」

「「は？」」

え？この流れだとタッグデュエルで行くだろ普通？なぜに？

「こいつとは組みたくないからだ」

「単純に仲が悪いだけだろ！何のために2人で出てきたんだ！」

「個人で倒せば幹部に昇進できる可能性が高いからな！」

「我らは相方に頼らずに自力で貴様らを倒す！」

馬鹿だ。ツッコむのがめんどいから、代わりに溜息をついた。

「ディヴァイン、左の奴頼むわ。私は右の奴をやる」

「わかった」

私もデッキをセットしてデュエルディスクを展開させると、デッキが自動でシャッフルされた。

「それじゃ、行くか！」

「同時ではない、１人ずつだ。上に上がるには観察も必要だからな」

下っ端Ａがまた要求してきた。んだよ、注文ばっかしやがって…。

「まずは天原勇香と私からだ」

「はいはい、了解」

「勇香、頑張って！」

「油断するな」

「わかってら！」

俊也と将人の応援も受けて、今度こそ本当に準備完了！秋斗？何も言わないで見守るみたいだな。

「さあ、かかって来るがいい！」

「いや、仕掛けてきたのはお前らだろ」

「「デュエル！」」

将人の言葉を合図に、デュエルが始まった。

勇香ｖｓ下っ端Ａ

「私のターン、ドロー！」

あ、勝手に先攻取りやがった。

「私は《切り込み隊長》を召喚！」

さっき私が殴った奴か。何か私を必要以上に睨んでる気がする。

《切り込み隊長》　ＡＴＫ／１２００

「《切り込み隊長》が召喚に成功した時、手札からレベル４以下のモンスターを１体特殊召喚できる！《コマンド・ナイト》を守備表示で特殊召喚！」

全体的に赤い鎧を来た女騎士が隊長の横に並んだ。確かあいつの効果は…。

《コマンド・ナイト》
効果モンスター
星４／炎属性／戦士族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ１９００
自分のフィールド上に他のモンスターが存在する限り、相手はこのカードを攻撃対象に選択できない。
また、このカードがフィールド上に存在する限り、自分の戦士族モンスターの攻撃力は４００ポイントアップする。

《コマンド・ナイト》　ＤＥＦ／１９００

「《コマンド・ナイト》がフィールド上にいる限り、私の戦士族モンスターの攻撃力は４００ポイントアップする！」

《切り込み隊長》　ＡＴＫ／１２００→１６００

「カードを１枚セットしてターンエンドだ」

下っ端Ａ
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《切り込み隊長》（ＡＴＫ／１６００）《コマンド・ナイト》（ＤＥＦ／１９００）
魔法・罠／リバース×１

「よし、行くか！私のターン！」

ん？待てよ、これをこうしてあれを出してああなると…あ、終わったな。

「速攻魔法（サイクロン）！そのリバースカードにはどいてもらうぜ！」

「ちっ…」

《炸裂装甲》か。危ねえ危ねえ。

「これで安全だな、魔法カード《ワン・フォー・ワン》！手札からモンスターを１枚捨てて、手札かデッキからレベル１のモンスター１体を特殊召喚する！手札から《ラヴァル・ランスロッド》を捨て

て、デッキからチューナーモンスター《紅蓮地帯を飛ぶ鷹》を特殊召喚！」

《ラヴァル・ランスロッド》
効果モンスター
星６／炎属性／戦士族／ＡＴＫ２１００／ＤＥＦ　２００
このカードはリリースなしで召喚する事ができる。
この方法で召喚したこのカードは、エンドフェイズ時に墓地へ送られる。
フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、ゲームから除外されている自分の炎属性モンスター１体を選択して手札に加える事ができる。

燃えるような赤い羽毛に包まれた鷹がデッキから飛び出す。

《紅蓮地帯を飛ぶ鷹（たか）》
チューナー（効果モンスター）
星１／炎属性／鳥獣族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　０
このカードがシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合に自分の墓地に「ラヴァル」と名のついたモンスターが３種類以上存在する場合、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

《紅蓮地帯を飛ぶ鷹》　ＡＴＫ／　１００

「そして魔法カード《おろかな埋葬》！デッキからモンスターを１体墓地に送る！私が選ぶのは《ラヴァル炎火山の侍女》だ！」

《ラヴァル炎火山の侍女》
チューナー（効果モンスター）
星１／炎属性／炎族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　２００
自分の墓地に「ラヴァル炎火山の侍女」以外の「ラヴァル」と名のついたモンスターが存在する場合にこのカードが墓地へ送られた時、自分のデッキから「ラヴァル」と名のついたモンスター１体を墓地へ送る事ができる。

「こいつが墓地に送られた時に墓地にこいつと同名以外のラヴァルがいる時、デッキからラヴァル１体を墓地に送る事ができる！デッキから２枚目の《ラヴァル炎火山の侍女》を墓地に送る！さらに今墓地に送った侍女の効果で３枚目の侍女を墓地へ！３枚目の効果で《ラヴァル・ウォリアー》を墓地に送る！」

《ラヴァル・ウォリアー》
効果モンスター
星４／炎属性／戦士族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ　５００
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合に自分の墓地に「ラヴァル」と名のついたモンスターが４種類以上存在する場合、その戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「一気に４体も墓地に送るだと！？」

私の墓地肥やしは結構早いぞ？こんなのはよくあるこった。

「もう１体の《ラヴァル・ウォリアー》を召喚！」

両手に高熱の斧を１本ずつ持ったモンスターが現れた。基本的に、ラヴァルモンスターは体が冷えた溶岩でできてるような外見になっ

ている。

《ラヴァル・ウォリアー》　ＡＴＫ／１８００

「行くぜ！レベル４《ラヴァル・ウォリアー》にレベル１《紅蓮地帯を飛ぶ鷹》をチューニング！」

紅蓮の鷹が１つの赤い輪になり、ウォリアーが中に飛び込み４つの星になる。

「一対の刃（やいば）が、新たな魂と共鳴する！覚悟の炎よ、燃え上がれ！」

☆４＋☆１＝☆５

「シンクロ召喚！仕留めろ！《ラヴァル・ツインスレイヤー》！」

光の柱から、両肘から刃が伸び脳天に１本の角を頂く戦士が飛び出した。

《ラヴァル・ツインスレイヤー》
シンクロ・効果モンスター
星５／炎属性／戦士族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ　２００
チューナー＋チューナー以外の炎属性モンスター１体以上
自分の墓地に存在する「ラヴァル」と名のついたモンスターの数によって、このカードは以下の効果を得る。
●２体以上：このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、もう１度だけ続けて攻撃する事ができる。
●３体以上：このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

《ラヴァル・ツインスレイヤー》　ＡＴＫ／２４００

「《紅蓮地帯を飛ぶ鷹》の効果発動！こいつがシンクロ召喚に使用されて墓地に送られた時、墓地にラヴァルが３種類以上いるなら墓地から特殊召喚できる！」

《紅蓮地帯を飛ぶ鷹》　ＡＴＫ／　１００

「まだまだ！魔法カード《死者蘇生》！墓地の《ラヴァル・ランスロッド》を特殊召喚！」

灼熱の槍を持つラヴァルの戦士。レベルは６だ。

《ラヴァル・ランスロッド》　ＡＴＫ／２１００

「レベル６《ラヴァル・ランスロッド》にレベル１《紅蓮地帯を飛ぶ鷹》をチューニング！焦熱の大砲が、聖なる魂と共鳴する！覚悟の炎よ、燃え上がれ！」

☆６＋☆１＝☆７

「シンクロ召喚！発射せよ！《ラヴァル・ステライド》！」

全身が青く、左手がキャノン砲になった大型のモンスターが現れた。体には黄色い何かのパーツみたいなのを身につけている。

《ラヴァル・ステライド》
シンクロ・効果モンスター
星７／炎属性／炎族／ＡＴＫ２７００／ＤＥＦ１８００

チューナー＋チューナー以外の炎属性モンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分は手札を１枚墓地へ送る。
このカードがカードの効果の対象になった時、自分の墓地に存在する「ラヴァル」と名のついたモンスター１体をゲームから除外する事で、その発動を無効にし破壊する。

《ラヴァル・ステライド》　ＡＴＫ／２７００

「１ターンで２回のシンクロ召喚だと！？」

「終わったね」

驚く下っ端Ａをよそに、俊也がボソッと呟くのが聞こえた。

「こいつをシンクロ召喚した時に私は手札を１枚墓地に送る必要があるけど、手札はもう使い切ったから関係ないな。んじゃ、バトルだ！《ラヴァル・ステライド》で《切り込み隊長》に攻撃！ボルケーノ・キャノン！」

ステライドが左手のキャノン砲から炎の砲弾をぶっ放し、隊長を焼き尽くした。哀れ隊長。

「ぐぅっ！」

下っ端Ａ　ＬＰ／４０００→２９００

「《ラヴァル・ツインスレイヤー》で《コマンド・ナイト》に攻撃！ファイア・エッジ！」

右肘の刃に炎を纏わせ、女騎士をすれ違い様に斬りつけた。

「ぐおっ！？」

下っ端Ａ　ＬＰ／２９００→２４００

「馬鹿な！？なぜダメージが！？」

「こいつは墓地にラヴァルが３体以上いる時貫通効果を使えるようになる！さらに、墓地にラヴァルが２体以上いる時に守備表示モンスターを攻撃した場合、もう１度だけ続けて攻撃できる！」

「何だと！？」

「ジャストだな！《ラヴァル・ツインスレイヤー》でダイレクトアタック！ファイア・エッジ・セカンド！」

「ぐわあああああ！？」

今度は左肘の炎の刃で下っ端Ａを斬った。攻撃力は２４００、残りライフも２４００。ピッタリ０だ。

下っ端Ａ　ＬＰ／２４００→　０

勇香　ＷＩＮ

「わ、１ターンキルだと…！？この私が１ターンキルでやられただと…！？」

「早いね」

『ユウカ、私の出番なかったよ？』

ロコナが飛び出してきて文句を言ってきた。確かに今回出番がなかったな。

「（悪い悪い、手札がよすぎたからさ。後で飴玉やっから）」

『むぅ～…』

何か菓子をやれば大抵機嫌を治してくれるからな。子供だからか単純なもんだ。

「不様だな！俺がまとめて倒してやるから、見学でもしてろ！」

「ぐ…」

ちゃんと戦った奴にその言い方はねえんじゃねえの？めんどいから言わないけど。

「よし、後は頼んだぜ、おっさん」

「おっさんじゃない、おじさんと呼べ。あ、やっぱり先生と呼べ」

「大して変わんねえだろ」

「先生は変わるからな？おじさんと先生は意味合いが違うからな？」

「まあいいや。ぱっぱと決めてこい。できれば1ターンキルで」

「私のデッキに君みたいな爆発力を求めないでくれ」

ディヴァインは私の要求をやんわり断ってからデュエルディスクを展開し直した。

「気になっていたが…なぜ貴様がここにいる？行方不明ないし死亡しているはずだが？」

それもそうか。いきなり半分死亡確定してる奴を見つけたら、そりゃびっくりするよな。

「さて、なぜだろうな？何なら幽霊と見なしても構わない。１つだけ確かなのは、私は勇香達の味方だという事だ」

ディヴァインは澄ました顔でけろりと答えた。

「ふざけやがって…！行くぞ！」

「お手柔らかに頼むよ」

「「デュエル！」」

ディヴァインｖｓ下っ端Ｂ

「俺のターン！永続魔法《次元の裂け目》を発動！モンスターが墓地に行く時、代わりに除外される！」

《次元の裂け目》
永続魔法
墓地へ送られるモンスターは墓地へは行かずゲームから除外される。

「モンスターをセット！カードを１枚セットしてターンエンドだ！」

下っ端Ｂ
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／リバース×１
魔法・罠／《次元の裂け目》リバース×１

除外デッキか…。厄介だな。あいつ大丈夫か？

「私のターン！…１つ言っておくが、今の私は教師だ。この時代に合わせてデッキを調整している」

「だからどうした？」

「魔法カード《強欲な壺》！カードを２枚ドローする！そして魔法カード《大嵐》を発動！魔法・罠を全て破壊する！」

「なっ！？」

あ～、そういや、過去と未来じゃ制限リストが違うんだったな。なら仕方ない。

「手札から《サイコ・ウォールド》を召喚！」

かたつむりみたいなサイキック族のモンスター。何気に攻撃力が高い奴だ。

《サイコ・ウォールド》　ＡＴＫ／１９００

「そして速攻魔法《緊急テレポート》を発動！手札かデッキからレベル３以下のサイキック族１体を特殊召喚する！デッキから《クレボンス》を特殊召喚！」

何か道化師みたいなのが出てきた。壁として使われると地味にうざったいんだよな…。

《クレボンス》
チューナー（効果モンスター）
星２／闇属性／サイキック族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ　４００
このカードが攻撃対象に選択された時、８００ライフポイントを払う事でそのモンスターの攻撃を無効にする。

《クレボンス》　ＡＴＫ／１２００

「では、行こうか！レベル４《サイコ・ウォールド》にレベル２《クレボンス》をチューニング！見抜け、我が静寂の心眼！」

☆４＋☆２＝☆６

「シンクロ召喚！透視せよ！《サイコ・メトラー》！」

シンクロ召喚されたのは、かつてのアルカディアムーヴメントの団員服を着た、黒い短髪の若い女だった。手には弓が握られている。

《サイコ・メトラー》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星６／水属性／サイキック族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ１６００
チューナー＋チューナー以外のサイキック族モンスター１体以上

1ターンに1度、ライフを８００支払い相手に自分の手札のサイキック族モンスターを1枚見せる事で発動する事ができる。
相手の手札を全て確認し、その中からモンスターカードを1枚選び墓地に送る。
この効果を発動するターン、このモンスターは攻撃宣言できない。
このモンスターは墓地にサイキック族モンスターがいない場合除外される。

《サイコ・メトラー》　ＡＴＫ／２５００

「《サイコ・メトラー》の効果発動！まず、ライフを８００支払い、手札のサイキック族を1枚公開する。私が見せるのは《ライフ・コーディネーター》だ」

ディヴァイン　ＬＰ／４０００→３２００

「その後、相手の手札を確認してモンスターを1枚墓地に送る。ファインド・アウト！」

《サイコ・メトラー》の青い瞳が緑色に光ると、下っ端Ｂの手札が瞳の光で照らされて、内容がソリッドビジョンでかでかと公開された。あ、あの野郎を持ってやがる。

「《バトルフェーダー》を墓地に送ってもらおうか」

「ぐ…」

「この効果を使用したターン、このモンスターは攻撃できない。だが、このカードがあるなら話は別だ。魔法カード《ミラクルシンクロフュージョン》！フィールドと墓地の融合素材を除外し、シンク

ロモンスターを融合素材とする融合モンスターを融合召喚する！」

ん？あいつあんなカード使ってたっけ？

「フィールドの《サイコ・メトラー》と墓地の《サイコ・ウォールド》を除外！融合召喚！《アルティメットサイキッカー》！！」

下半身は蛇、上半身は《メンタルスフィア・デーモン》。そんな感じの、何かめちゃくちゃ凄そうなモンスターが出やがった。

《アルティメットサイキッカー》
融合・効果モンスター
星１０／光属性／サイキック族／ＡＴＫ２９００／ＤＥＦ１７００
サイキック族シンクロモンスター＋サイキック族モンスター
このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。
このカードはカードの効果では破壊されない。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
また、このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復する。

《アルティメットサイキッカー》　ＡＴＫ／２９００

「何だこれは！？」

「こんなモンスター、情報にないぞ！？」

「なかなか面白い奴が出たな」

「めっちゃ凄そうなモンスターだな」

「これがディヴァインの新しい切り札…！」

「名前通りの働きをしてくれるんだろうな？」

上から下っ端Ｂ、Ａ、将人、私、俊也、秋斗。秋斗は相変わらず辛口だな。

「安心したまえ。このモンスターは究極のサイキック族の名に恥じない力を持っている。その前に準備をしようか。装備魔法《Ｄ・Ｄ・Ｒ》を発動！手札を１枚捨てる事で、除外されているモンスター１体を特殊召喚してこのカードを装備する！」

《Ｄ・Ｄ・Ｒ（ディファレント・ディメンション・リバイバル）》
装備魔法
手札を１枚捨てる。
ゲームから除外されている自分のモンスター１体を選択して攻撃表示でフィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。
このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。

「この効果で《サイコ・メトラー》を特殊召喚！」

《サイコ・メトラー》　ＡＴＫ／２５００

「上手いな。攻撃制約をリセットしちまった」

思わずそう呟いた。１度フィールドから離れてるから問題なく攻撃可能だ。

「では、バトルだ！《アルティメットサイキッカー》で守備モンスターに攻撃！ウルティマ・サイコバースト！」

《アルティメットサイキッカー》が手から黄緑の極太レーザー砲をぶっ放して、守備モンスターを跡形もなく消し去ってしまった。つーか凄っ！？攻撃がド派手だな、オイ！

「うぉぉぉぉ！？」

下っ端Ｂ　ＬＰ／４０００→２９００

「ぐっ、なぜダメージが！？それに、この衝撃は…」

「君達だけサイコパワーを使うのは対等でないと思ってね。それと、言い忘れていたが貫通効果付きだ。そして、戦闘破壊したモンスターの元々の攻撃力分ライフを回復する」

「何だと！？」

ディヴァイン　ＬＰ／３２００→４４００

何だよその《メンタルスフィア・デーモン》と《ハイパーサイコガンナー》を足したような性能は！？

「それにしても、《ネクロフェイス》か。《ミラクルシンクロフュージョン》もそうだが、《次元の裂け目》を何とかしておいて正解だったな」

《ネクロフェイス》
効果モンスター（制限カード）
星４／闇属性／アンデット族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ１８００
このカードが召喚に成功した時、ゲームから除外されているカード全てをデッキに戻してシャッフルする。
このカードの攻撃力は、この効果でデッキに戻したカードの枚数×１００ポイントアップする。
このカードがゲームから除外された時、お互いはデッキの上からカードを5枚ゲームから除外する。

出たよ除外の鬼…。上手く使えば大抵のデッキは倒せるよな、あれ。

「まだ攻撃は残っている。《サイコ・メトラー》でダイレクトアタック！ディテクト・アロー！」

「ごはぁっ！」

サイコパワーで創った緑光の矢が下っ端Ｂを貫いた。

下っ端Ｂ　ＬＰ／２９００→　４００

「ぐう…貴様…！」

「これでも加減はしている」

「何！？これほどの威力で加減しているだと！？」

「これが本物と偽物の違いだ」

なるほどな…。サイコパワーが量産なんてされてたまるかって話だな。あんなのが世間に出回ったらとんでもない事になっちまうのは目に見えてるし。

「ちっ…。いい気になるなよ！次のターンで逆転してやる！」

「残念だが、次のターンはない」

「はあ！？馬鹿言ってんじゃ…」

「魔法カード《ファイヤー・ボール》。相手に５００ポイントのダメージを与える」

「「「「「「「「「は？」」」」」」」」」

《ファイヤー・ボール》
通常魔法
相手ライフに５００ポイントダメージを与える。

「運がなかったな」

使った本人以外の全員が唖然とする中、火球が1発発射されて下っ端Bを燃やした。

「ぐぉおぉおおお！！？」

下っ端Ｂ　ＬＰ／　４００→　０

ディヴァイン　ＷＩＮ

黒焦げになって倒れる下っ端B。シンと静まり返る私達。

「…よし」

「ちょっと待てやコラぁぁぁぁぁ！！何でまだ《ファイヤー・ボール》をデッキに入れてんだ！？」

「サイコパワー用に用意したサイドデッキがあるのだが、さっき《ファイヤー・ボール》を使った時に間違ってデュエル用のデッキに入れてしまって…」

「それでちゃっかり1ターンキルを決めるとはな…」

「何が『私のデッキに君みたいな爆発力を求めないでくれ』だ！普通に1キルしてんじゃねえか！」

「たまたま手札がよかっただけだ。運がよかったんだよ」

『おじさん凄～い！』

ったく…まあ、いいや。決着はついたんだ。後は情報を聞き出す

とするか。

「で、お前らは何企んでやがんだ?洗いざらい吐いてもらうぜ」

指をボキボキ鳴らしつつ下っ端共に近づくと、下っ端共も反射的に後退った。

「悪いが、俺の部下に手を出さないでもらおうか」

上から声が聞こえた。

と思うと、何か白い馬っぽいのに乗った黒マントが、私達と下っ端共の間に降ってきた。

何変な事言ってんだって?私はありのままの状況を伝えただけだ。つーかあいつ誰?怪しさ全開なんだけど。フードで顔は見えないし。

「貴様は…!?」

「何でここに!?」

将人と俊也は知ってるような様子を見せる。知り合いかこいつら?

「知ってるのか？」

「前に月沙が尾形という奴と戦った時に現れた奴だ」

秋斗の質問に将人が答える。私や秋斗が来る前の話は大体聞かせてもらってる。じゃあ、あいつが外道野郎を回収したって奴か。

「しゅ、シュルク様…！？」

「勝手な行動は慎めと言ったはずだ」

「ですが…！」

「言い訳は許さん」

「く…」

有無を言わせないといった態度で叱るシュルクとかいう奴。やっぱあいつらは下っ端か。

『あの人誰？』

「さあな。今見てわかるのは、あの馬っぽいのが精霊だって事だ」

この世界に、デュエルモンスターズの精霊以外であんな神話にでも出てきそうな生物がいてたまるかっての。

「天原勇香」

シュルクは次に私に話し掛けてきた。

「やっぱ私の名前も知ってんのか」

「当然だ。お前達は我々の強大な敵となりえる存在…『イレギュラー』なのだからな」

「『イレギュラー』？」

それってあいつらの組織の古い呼び名だよな？いや、神界の連中が勝手にそう呼んでただけだけど。

「それはいい。…お前、まだ切り札を出してないな？」

「何！？」

「へえ…何でもお見通しってわけかい」

「あれで切り札を出してないだと！？ナメてるのか！？」

「見苦しいぞ」

「ぐ…」

どの組織も上司にゃ逆らえねえってか。そこら辺の社会制度はしっかりしてんのな。

「次はこう上手くいくとは思わない事だ。乗れ！」

「「は、はい！」」

下っ端2人が馬に乗り込む。って逃げる気か！？

「ユニコール！」

カッ！

「っ！？」

ユニコールと呼ばれた馬っぽいのは、角から強い光を放った。ちっ、目晦ましか！？

光が収まると、奴らはもういなかった。

「くそ、逃げられたか！」

「そうカリカリしないでよ。少しだけでも情報を掴めたんだから」

情報か。さっきのユニコールってモンスターに乗ってた奴の名前がシュルクだって事、連中がサイコディスクなるもんを使ってる事、連中が私達を『イレギュラー』と呼んでるって事…。

「我々の過去の情報は調べられてると考えた方がいい。でなければ、勇香の切り札の事を知ってるはずがない」

「厄介な野郎共だな」

確かに、私はさっきのデュエルで切り札を出してない。つーか出そうと思えば出せた。そうしなかったのは、あんな下っ端共相手にわざわざ使ってられないって気持ちがあったからだ。見くびってる

わけじゃねえけど、いちいちこいつに頼ってばっかじゃいられねえんだよ。

とにかく、紅刃達にも報告しねえと…。

…ん？ちょっと待て。

「将人、ディヴァイン」

「ん？」

「何だ？」

「お前ら、何で鎌と《ファイヤー・ボール》のカードを持ってんだ？」

SIDE／シュルク

あの場から抜け出した俺達は、ユニコールに乗って空を駆けていた。

「あの…シュルク様、大丈夫ですか？」

「平気だ。気にするな」

あのディヴァインと将人とかいう男…目晦ましをしたにも関わらず、俺に攻撃を当ててきやがった。

右腕を少し斬られ、ユニコールもほんの少し火傷を負ってしまった。移動に支障はないが、正直驚いた。予想以上に侮れない連中だ。

「で…我々の処分はいかに…」

「俺が命令で向かわせた事にする」

「「え？」」

「『敵の実力を確かめるために刺客をぶつけた』と言えば話が通るだろう。今後は無断で敵地に向かうような真似はするなよ」

「は、はい！」

「ありがとうございます！」

まあ、俺は尾形のように完全に外道に堕ちたわけではない。こいつらは、動機は些か不純であったとはいえ、組織に尽くしてくれたのだ。部下を助けてやるのは上司の役目だ。

たった今でっち上げた言い訳の働きはきっちり果たしてくれているから、嘘にはならない。ディヴァインが強くなって蘇り我々に敵対した事を報告するだけでもかなりの収穫だ。それに、天原勇香を始めとする他の奴らの実力も少し把握できた。

「さて、奴らがどの程度の力をつけてくるか…」

呟いた言葉は、おそらく誰にも聞こえていないだろう。

…To be continued

第４２話　１ターンキルはデュエリストの夢（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「ようやく私もデュエルできたな」

璃音「いきなり1ターンキルを決めなくてもいいでしょうに…」

フィレス『ガルルッ』

勇香「いいじゃねえか、手札がよかったんだし」

ロコナ『ねえ、私の出番まだ～？』

勇香「次にデュエルする時は出してやるよ。もちろん切り札もな」

璃音「それじゃ、カード考察に入りましょう。今回紹介するのは、ディヴァインの新たな切り札（アルティメットサイキッカー）よ」

《アルティメットサイキッカー》
融合・効果モンスター
星１０／光属性／サイキック族／ＡＴＫ２９００／ＤＥＦ１７００
サイキック族シンクロモンスター＋サイキック族モンスター
このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。
このカードはカードの効果では破壊されない。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与え

る。
また、このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復する。

勇香「やたらと迫力があるんだよな、こいつ…」

璃音「サイキック族のシンクロモンスターとサイキック族のモンスターを融合すれば出す事ができるわ」

勇香「貫通効果を使えるし、戦闘破壊すればそのモンスターの元々の攻撃力分だけ回復する。戦闘だとかなり頼もしいな」

ロコナ『それに、カードの効果で破壊されないんだよ！』

勇香「全く、どんな怪物モンスターだよ…」

璃音「ただ、除外やバウンスには耐性がないから注意しなさい」

勇香「ま、《ミラクルシンクロフュージョン》で出すのが一般的だろ。除外軸の【サイキック族】なら最大限に活躍できるんじゃねえか？」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『次はどんな内容なの？』

勇香「それはお楽しみだ。それじゃ、次回も見てくれよな！」

ーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

今回は勇香とディヴァインに1ターンキルを決めてもらいました。前後編に分けるのも何かあれなので、手っ取り早く終わらせました。

おじさんの切り札は《アルティメットサイキッカー》です。勇香の切り札は今回単純に出す必要がなかっただけですが、出るのはもう少し先になるでしょう。

では、また次回！

第４３話　容姿を馬鹿にされると誰でもキレる（前書き）

今回はあるキャラがブチギレます。いつもより少し長めです。

それではどうぞ！

第４３話　容姿を馬鹿にされると誰でもキレる

ＳＩＤＥ／勇香

え～、皆さん、こんにちは。あれ、おはようか？いや待て、こんばんはって可能性も…まあ、いいか。天原勇香です。

今回は、私達未来組＋αの中でもキレたら最も恐ろしい人物の話をしようと思います。

誰かって？んなもん、この話を読めばわかるだろ。

つーわけで、皆さん覚悟はいいですか？できてなくても待ちません。それじゃ、途中までは紅刃にナレーションを頼むんでよろしく～。

ＳＩＤＥ／紅刃

それはいつもの放課後の事だった。

俺は月沙、璃音、ルーナと一緒に廊下を歩いていた。傍にはスイレンとナージャもいる。要するに未来組＋αのブルー全員だ。

「今から何か食べてく？」

「いいわね。そうしましょうか」

「私はメロンパンでも買おうかな？」

「結構腹持ちするだろ。晩飯食えんのか？」

「うっさいわね。子供扱いするつもり？」

「そんなんじゃねえよ」

「私はアイスにしよっかな？」

ルーナも今じゃすっかり打ち解けてる。初めて会った時に粘ったかいがあったな。

『あんた男つくる気はないの？』

『え！？いや、今はあまり興味ありませんけど…。そういうナージャ様は？』

『ないわよ。最近の世の中は情けない男ばかりで嫌になるわね～』

「おい、その『情けない男』には俺も入ってんじゃねえだろうな？」

つーか何つー話してんだこいつら。どっかのＯＬかよ。

『そういえば、ルーナ様の髪って地毛ですか？』

「私？地毛だけどどうして？」

『いえ、桃色の髪って案外目立つと思いまして…』

「そう？ま、そうだとしても染める気はないけどね。親から貰った色は死ぬまで変えないつもりよ」

髪ねえ…。やっぱり女子高生ってのはそういうの気にするもんなのか？…俺達男子高生も少し気にした方がいいな。

『月沙は真っ白よね～。学園じゃなかなか見れないわよ？』

「確かに、髪が白銀って人はこの学園には滅多にいないわね」

「やっぱり珍しいのかな？」

俺は気に入ってるけどな。そういや、転生前は茶髪で髪も下ろしてたって話があったっけ。昔の自分との決別の証って奴か？でも、昔の月沙がどんな髪だったのかは1度見てみたいな。

『ん～…。でも、あんたそれしｒ』

ガシィッ！

『むぐっ！？』

速攻で口を塞いだ。俺はもちろん、スイレンもだ。考えるよりも先に本能で動いたような感じがする。

『（何とんでもない事を言おうとしてるんですか！？）』

「（そのワードを口にするなぁぁぁ！エグゾディアが降臨するぞ！）」

『（何言ってんのあんた達？エグゾディア？）』

「何か言った？」

月沙が話し掛けて、俺はナージャに小声で伝えた。

「（おい、何か適当に取り繕え！）」

『（あ～はいはい、わかったわよ）いや、白いと汚れとか目立つんじゃない？洗うの大変でしょ？』

「案外目立たないよ？それに、いつも洗ってるから大丈夫」

何とか逆鱗に触れずに済んだか…。俺とスイレンはホッと息をついた。

『（今言おうとした事は、姫様の前では絶対に言わないでくださいよ？殺されますから）』

『（？…ああ、なるほどね…。確かに怒っても仕方ないわね～）』

事情を察してくれて何よりだ。言ったら最後、地獄を見る羽目になるからな。

ＳＩＤＥ／勇香

こっからは私がナレーションをやる。準備はいいか？

私は将人、俊也、秋斗と一緒にいた。購買で何か買ってこうって事になって、今は廊下を歩いてる。

「ドローパンでも買うか…」

「お、挑戦すんのか？」

「引き運を試すのに丁度いい」

秋斗はドローパンを買うらしい。私も買うかな？あ～、キムチパン食いて～。

「僕はどうしようかな？」

「向こうで決めればいい話だろ。…ん？」

「どうした？」

「何か揉めてるな」

将人の視線の先では、柄の悪そうなブルー生に十代が突っ掛かっていた。近くには翔もいる。

「今すぐ翔に謝れ！」

「謝る必要なんてどこにある？」

とりあえず翔に事情を聞くか。

「翔」

「あ、勇香さん！他のみんなも！」

「どうなってんだこれ？」

「それが…あのブルーの人が僕に喝上げしてきたんスよ。暴力まで振るってきたのを偶然兄貴が見つけて…」

「こうなったってか…」

「ごめん、僕のせいで…」

「お前が気に病む事じゃねえよ。あの野郎は私達が何とかしてやっから」

肩を軽く叩いてから、私は十代と喝上げ野郎に近づいた。

「あんな落ちこぼれなんてどうなったっていいんだよ！」

「何…！」

「どうしてそう偏見しか持たねえんだか…」

「勇香!?あ、俊也達も!」

やっぱ気づいてなかったのかこいつ。

「話は聞いたぜ。こいつが他人を見下す馬鹿なんだってな?」

「ああ!?誰に向かって馬鹿だと言ってんだ!」

「お前だ馬鹿。お前みてえな奴がいるから世の中犯罪ばかり起きんだよ」

「レッドとイエローは落ちこぼれが集まる豚小屋だ!てめえらもカスのレッドのくせにブルーに盾突いてんじゃねえよ!」

「「っ!」」

今のでかなりイラッと来た。ここまで酷い野郎は1度デュエルか何かでぶっ飛ばす必要があるかもな。

「階級で人をけなしてんじゃねえ!レッドとイエローは落ちこぼれの集まりなんかじゃない!」

「落ちこぼれにカスだ?てめえは人を何だと思ってやがんだ!」

「お前ら、何やってんだ?」

十代と私の後に別の声が聞こえた。あ、紅刃達だ。

「紅刃?」

「こいつが喝上げやってたんだよ」

「喝上げ？」

「んで、階級で人を決めつける馬鹿野郎ときたもんだ」

「てめえごときが馬鹿呼ばわりするなカスレッドが！」

今の言葉で全員が顔をしかめた。こいつらは階級で人を見下すような真似は絶対にしない。

「まだそんな考えを持ってる奴がいるとはな」

紅刃が鋭い視線をブルー生に向ける。どう見てもキレてる。

「カスをカスと呼んで何が悪い？レッドもイエローも全員カスだ」

「あなた、自分が言ってる事が恥ずかしくないの？人を何だと思ってるの！？」

月沙も口を出す。こいつの考えが気に入らないのはみんな同じだ。

「あ？女が男に口答えすんじゃねえよ」

「…どういう事？」

「女なんて劣等種が男の俺様に逆らうんなっつってんだよ！」

バキィッ！

「なっ！？」

…最悪だこいつ。

月沙は倒れずに突っ立ったままだ。何があったかって？殴ったんだよ、この喝上げ野郎が月沙を！

「何しやがる！」

「馬鹿、落ち着きなさい！」

「離せ！」

紅刃が逆上して殴り掛かるのをルーナが引き止める。今お前が殴っても学園に告げ口されるだけだ。下手したら教師陣のほとんどを敵に回す事になる。ディヴァインはないと思うけど。それがなかったら私だって遠慮なくぶん殴ってる。

「紅刃、いいよ」

「！」

「ん？」

「私とデュエルしろ。女が本当に劣等種かどうか、確かめさせてやる」

月沙の宣戦布告。さすがに今のでブチギれたみたいだ。

「はっ、てめえじゃ相手にならねえだろうが…いい機会だ。女は男

に敵わねえという事を教えてやるよ！」

完全にナメてやがる。月沙の実力を知らないからそんな事が言えんだ。

「今から1時間後にデュエル場でデュエルだ！」

喝上げ野郎はそう言ってこの場を離れた。

…ここで私は、後先考えずにぶん殴ればよかったんだ。あの野郎は去り際に…

「逃げるなよ、『白髪』女！」

超弩級の地雷を全力で踏みつけやがったんだからな。

「くそ！何なんだあいつは！」

十代が怒りを顕わにしている。これはレッドと女子、そして私達全員が喧嘩を売られたも同然だ。かくいう私も抑え切れてない。

「あの馬鹿…！」

『あわわわ…』

この時、前からこの『地雷』を知ってる紅刃とスイレンが既に青ざめてい事を私は無視していた。

「あの野郎、ただじゃ…」

ズンッ!!

「おか…ねえ…?」

え?何今の殺気?

バキグシャッ

…何か嫌な音が聞こえたぞ?

音の発信源を見ると、誰かの手にあるＰＤＡが見るも無惨に握り潰されていた。

じゃあ、その便利な機械を握り潰したのは誰か?答えはすぐにわ

かった。

「え…あの…月沙……？」

重すぎる殺気を放つ月沙だ。

「……れ……て……」

「え？」

「…れが……誰が『白髪』だって……？」

直後、どす黒い殺気を放つ月沙に私はもちろんこの場にいた全員が青ざめた。

「あの…え…？」

「終わった…」

『姫様が…姫様がお怒りになられた…！』

紅刃が何かを諦めてんだけど！？スイレンもがたがた震えてるぞ！？何！？一体月沙に何が…

ゾワッ！

「「「「「「「「「『……』」」」」」」」」」

おいいいいいいいいいい！！？何か一瞬エグゾディアが見えたぞ！？封印されし魔王様が解き放たれかけたんだけどぉぉぉぉぉ！？

「そっかぁ…あの人、地獄に堕ちたいんだ…」

めっちゃ物騒な言葉を吐いてるよこいつ！？そんなに白髪っつわれたのが気に食わなかったのかよ！？

『ちょ、ちょっと…紅刃、スイレン、何よあれ！？』

ナージャ、いい質問だ！ちゃんと説明してくれ！

「月沙にはな…月沙にだけは絶対に言っちゃいけない禁句があるんだよ」

「禁句？」

『姫様の髪は白銀ですよね？それを「白髪」と言われたり、「お婆さん」と言われたりするのが物凄く嫌いなんです…』

「それは…髪が白いから年寄り呼ばわりされるのが嫌いという事か？」

『秋斗様、正解です…』

気持ちはわかるけどさ…この殺気はどう考えても異常だろ？

「俺達はこれを『魔神モード』と呼んでいる」

「魔神モード！？」

「標的は…１００％確実に生き地獄を見る！」

ええええぇえぇえええええええ！？

「あははは…いいよ…二度と日の目を拝めないようにしてあげるよ…」

普段の月沙じゃ言わない事を平然と言ってるぞ！？俊也とルーナはもう腰を抜かしてるし！

「私、ちょっと準備してくるから…」

準備！？ああ、そうか、デッキの調整を…

「どんな風に処刑しよっかなぁ…」

する気あんのかこいつぅぅぅぅぅ！？？今『処刑』っつったよな！？『処刑』ってはっきり言ったよな！？何を準備する気だよ！？

とにかく、月沙はそのまま行っちまった。スイレンは震えながら涙目でついてったけど。

重苦しい殺気が遠ざかったからか、私達は全員腰が抜けてへたり

込んだ。

「…何あれ？」

「…月沙…」

「いや、それはわかる。月沙ってあそこまでブチギレるような奴だったっけ？」

「俺もあんな一面は知らんぞ？」

「将人が知らないのも無理ねえよ。あいつが今みたいになったのを初めて見たのは、お前が引っ越した後だからな」

今のあいつに勝てる奴いるのか！？少なくともここにいるメンバーは絶対勝てません！

「…デュエル場に行くか。あの地雷踏んだ馬鹿がムカつくし」

というわけで試合開始5分前。私達は充分に心を落ち着けてからデュエル場に向かった。

「ん？みんな揃ってどうした？」

デュエル場には万丈目、明日香、剣山、吹雪さん、三沢がいた。

さっきいなくてよかったな、こいつら。

「よお」

「おや？みんな顔色が悪いけど何かあったのかな？」

吹雪さんが呑気に質問する。今のあんたの平常心を私達に分けてくれ。1時間じゃ回復し切れねえよ。

とにかく、紅刃と十代が訳を説明した。月沙のあれはまだ言ってないけど。

「波星君を殴るとは、何て酷い事を！」

「丸藤先輩の事もそうだけど、馬鹿にされたのも許せないザウルス！」

「最低ね。月沙には絶対に勝ってもらいたいわ」

「ああ、心配すんな。今のあいつが負けるなんて想像できねえから」

今の台詞私な。あの状態の月沙が負ける？そう考える奴がいたら教えてほしいわ。

「あ、あいつじゃないか？」

三沢が指差したのは、紛れもなく喝上げ野郎だ。

「はっ、雑魚共がうじゃうじゃいやがるな」

はい、イメージがた落ち決定。満場一致で最低の人間にカテゴラ

イズされたそいつには、私達が冷たい視線をプレゼントした。

ズズズズズ…

…来たか。

「…え？何これ？」

「殺気です」

「誰の？」

「月沙の」

「「「「「……」」」」」

事情を知らない５人はだんだん青ざめていく。それが正しい反応だ。

あ、ちなみに精霊は例外なくカードに閉じこもって出てこない。ロコナなんて軽く泣いてたし。ロディス達まで怯えさせるなんて、どんだけ凄いのあいつ？

そして、遂に奴が来た。

「…え…？」

喝上げ野郎の顔から余裕が消える。私達はゆっくり出入口に視線を移した。

はい、波星月沙さん（魔神モード）がおいでなさいました。

「「「「「「（えええええええええええええええ！！？）」」」」」」

あれ？何か…殺気が2倍くらいになってないか？つーかあいつ髪下ろしてるよ。ブチギレた証拠だよなあれ？

「月沙！？え、どうしたのあれ！？」

「あの馬鹿に白髪女と言われてああなったのよ」

璃音、わかりやすい説明ありがとう！

「それでか!?それだけであああなったのか!?」

「万丈目君?」

やば!?怒りの矛先が万丈目に向いた!

「え…?」

「それだけってなぁに?」

やべえよ、万丈目が早速涙目になってるよ!怖すぎるだろあいつ!

「私ね、白髪とかババアとかって言われるのってすっごく嫌いなんだ。私にとっては『それだけ』で済む問題じゃないんだよ?」

「申し訳ございませんでしたぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

万丈目は命の危険を感じて全力で土下座した。賢明な判断だ。

「なのに、1番言われたくない事を言っちゃうんだもんね。ねえ、ブルー生さん?」

「!?」

あ、ターゲットを修正した。

「お、俺様には阿淵(あぶち)って名前があんだよ!」

「阿淵、ねえ…。教えてくれてありがとう。葬る人の名前くらいは知っとかないとね」

葬るってどこに!?地獄か!?地獄なのか!?それより酷いどこかなのか!?

「い、いつもの波星先輩じゃないザウルス…」

「相当嫌だったのね…」

「レディーの怒りは恐ろしいとは言うけど、ここまでとは…」

「ターゲットが俺達じゃなくて、本当によかった…」

他の4人もそれぞれの感想を宣う。みんな顔が引き攣ってるよ。

「…甘いぜ」

「え?」

と、ここで紅刃がとんでもない事実を暴露しやがった。

「あいつ、まだ本気じゃないぞ」

『……』↑全員

…え、マジで?嘘、マジで?ちょ、マジで!?

「あれで本気じゃないだと!?」↑秋斗

「あの殺気、最初の2倍はあるわよね!?」↑ルーナ

「ええ！？あいつそんなに凄えのか！？」↑十代

「殺してぇぇぇぇぇ！誰か一思いに楽にさせてぇぇぇぇぇ！」↑翔

「まだだ！まだ希望はある！今は耐えるんだ！」↑私

これで本気じゃねえとかありえねえだろ！？そこまで嫌だったのか！？

「俺と月沙が中3の頃な…月沙は虐められてたんだよ。ある時、俺が止めようとしたら、虐めっ子の1人が『白髪』とかの禁句を使ってべらべら悪口を言ったんだ。そしたら月沙がブチギレて…気の弱い奴は殺気だけで気絶するわ、悪口言った奴は地獄を見るわで、1クラスが全滅しちまったんだよ。机や黒板も破壊されてたっけな…。教師もあの時の月沙を止める事はできなかったし、俺も死にかけ「それ以上言うなぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」」

ストォォォォップ！マジでストップ！いや本当にやめてくれぇぇぇぇぇ！これ以上私達に恐怖を植え付けないでぇぇぇ！

「みんな！」

出入口を見ると、ディヴァインがこっちに走ってきていた。

「ディヴァイン！？」

「これは一体どうなってるんだ！？月沙が物凄い殺気を放ってるみたいだが…」

「白髪って言われてキレました」

「は！？それだ…」

「言うな！殺されたいのか！？」

万丈目が素早くストップをかける。先に実証したからな。

「私はまだ１６歳なんだよ？この髪は白銀なんだよ？地毛なんだよ？なのに白髪？そんなに私をおばさん扱いしたいのかな？かな？」

「キャラ違うぅぅぅ！それ別の作品の奴だから！」

「落ち着け！頼むから落ち着いてくれ！いや、落ち着いてくださいお願いします！」

「とにかく静まれ！主に俺達が耐えられないから！」

「うふふ…だぁ～め♪」

怖えぇぇぇよ！すこぶる怖えぇぇぇよ！三沢と将人の要求を可愛く一蹴しやがったよあいつ！いや、やっぱり怖いって！

「さてと…阿淵だっけ？処刑の時間だよ」

のわぁ！？さらに殺気が増幅しやがった！？どこまで増幅するんだよ！つーかどんだけムカついてんのあいつ！？

「兄貴ぃぃぃぃ！月沙さんを止めてぇぇぇぇ！」↑翔

「いくら俺でもできる事とできない事があるって！無理だから！今

回ばかりはさすがに無理だから！」↑十代

「ディヴァイン、あなた何とかできないの！？」↑璃音

「生徒を鎮めるのも教師の役目だろ！責任持って止めろ！」↑将人

「何理不尽な責任を押し付けようとしてるんだ！あの悪魔を止めろと！？無理だ！返り討ちに遭うぞ！？」↑ディヴァ

「羊が１匹、ライオンが２頭、ケルベロスが３体…」↑ルーナ

「寝るなぁぁぁ！僕らを置いてかないで！」↑俊也

「ていうか段々危険な生き物になってるドン！？それじゃ眠れないザウルス！こういう時は落ち着いてティラノザウルスさんを…」↑剣山

「お前が落ち着けぇぇぇぇ！！」↑万丈目

何このパニック状態！あ、阿淵顔真っ青だよ！後退ってるよ！

「私に勝てたら今回は見逃してあげる」

「何！？」

「ただし、負けたら…ふふふ…楽しみで笑えちゃうなぁ…♪」

言えええええええええええええ！！！はっきり言ってくれよ！こっちの方がもっと怖いからさぁぁぁぁぁ！！

2008

「ぐ…要は勝てばいいんだろ！てめえみたいな下衆（げす）女に俺様が負けるわけねえだろ！」

「下衆はてめえだろ」

…あ、気温が１０度くらい下がったっぽい。

「月沙ぁぁぁぁぁ！！？」↑明日香

「正気に戻ってくれ！君はそんな言葉遣いで話す人間じゃなかったはずだ！」↑三沢

「君が『てめえ』って言うのはさすがに駄目だって！」↑吹雪

「何かあいつを止める術はないのか！？」↑秋斗

「あったら苦労しねえよ！」↑紅刃

どうすんのこれ！？月沙が今までにないくらい暴走しちまってんだけど！？笑顔で声を低めて凄い暴言を吐いたんだけど！？つーか今にもエグゾディアが飛び出してきそうなくらいやばい殺気を放ってんだけど！？これなら超サ○ヤ人４になれんじゃね！？ス○ーライトブレ○カーぶっ放せんじゃね！？

「それじゃ、始めよっか」

「お、おう！」

阿淵いいいいい！やっぱあんた逃げてぇぇぇぇぇぇ！！

「「デュエル！」」

月沙ｖｓ阿淵

「私のターン」

月沙が先攻を取ったけど、誰も文句を言わない。いや、言えない。つーかデュエル中ぐらいその殺気しまってもらえませんか！？泣きたくなってきたんですけど！？

「モンスターをセット。カードを3枚セットしてターンエンド」

月沙
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×３

「お、俺達のターン！《ヒゲアンコウ》を召喚！」

阿淵のデッキは【魚族】か？【水属性】って事も考えられるけど…。

《ヒゲアンコウ》
効果モンスター
星４／水属性／魚族／ＡＴＫ１５００／ＤＥＦ１６００
水属性モンスターを生け贄召喚する場合、このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

《ヒゲアンコウ》　ＡＴＫ／１５００

「魔法カード《二重召喚》！このターン、俺様は2回通常召喚できる！そして、《ヒゲアンコウ》は水属性モンスターを生け贄召喚する時2体分の生け贄となる！《ヒゲアンコウ》を生け贄に、《超古深海王シーラカンス》を召喚！」

めっちゃどでかい魚を出しやがった。やっぱ【魚族】か。あいつは厄介だぞ。

《超古深海王（ちょうこしんかいおう）シーラカンス》
効果モンスター
星7／水属性／魚族／ＡＴＫ２８００／ＡＴＫ２２００
手札を1枚捨てる。
1ターンに1度だけ、デッキからレベル4以下の魚族モンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
このカードの効果で特殊召喚されたモンスターは攻撃宣言をする事ができず、効果は無効化される。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードが魔法・罠・効果モンスターの効果の対象になった場合、自分フィールド上の魚族モンスター1体を生け贄に捧げる事でその効果を無効にし破壊する。

《超古深海王シーラカンス》　ＡＴＫ／２８００

「効果発動！手札を1枚捨てる事で、デッキからレベル4以下の魚族モンスターを可能な限り特殊召喚する！この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できず、効果も無効になる！《レインボー・フィッシュ》3体と《スペースマンボウ》を特殊召喚！」

うわ～、何かたくさん出てきたよ。シンクロ召喚がないだけマシか。

《レインボー・フィッシュ》
通常モンスター
星４／水属性／魚族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ　８００
世にも珍しい七色の魚。捕まえるのはかなり難しい。

《スペースマンボウ》
通常モンスター
星４／水属性／魚族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ１０００
広大な銀河を漂う宇宙マンボウ。
アルファード４の超文明遺跡から発見されたという生きた化石。

《レインボー・フィッシュ》　ＡＴＫ／１８００

《レインボー・フィッシュ》　ＡＴＫ／１８００

《レインボー・フィッシュ》　ＡＴＫ／１８００

《スペースマンボウ》　ＡＴＫ／１７００

「《超古深海王シーラカンス》で伏せモンスターに攻撃！」

「罠カード《攻撃の無力化》。バトルフェイズを終了させる」

「ぐぐ…カードを2枚セットしてターンエンドだ！」

阿淵
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《超古深海王シーラカンス》（ＡＴＫ／２８００）《

レインボー・フィッシュ》（ＡＴＫ／１８００）《レインボー・フィッシュ》（ＡＴＫ／１８００）《レインボー・フィッシュ》（ＡＴＫ／１８００）《スペースマンボウ》（ＡＴＫ／１７００）
魔法・罠／リバース×２

「モンスターゾーンを１ターンで埋めるとはね」

「でも、月沙が負けるとは思えないんだよな…」

おまけに、月沙から笑顔が消えてるし、目が影が濃くて見えないし。見てる私達も笑えねえよ。

「これで俺様の勝ちは決まった！今から大人しくサレンダーするなら見逃してやってもいいぜ！」

おいいいいいいいいぃ！？何挑発してんだぁぁぁぁ！？絶対命知らずだろあいつ！

「私のターン…」

あれ？段々殺気が強くなってくぞ？まだ上がるの？まだ上がるのか！？

「《強欲な壺》を発動。２枚ドロー。…へえ…」

『へえ…』って何『へえ…』って！？何引いたんだよ！？

「１ターンでよくできたね…。でも…終わりだよ」

ぎゃあああああ！！死刑宣告しやがった！あいつこのターンで終

わらせる気だ！

「魔法カード《壺の中の魔術書》。お互いにカードを3枚ドローする。そして、《氷結界の舞姫》を召喚」

スイレンだ！でもめっちゃがたがた震えてる！1番近くにいるから被害がでかいぞあれ！

《氷結界の舞姫》　ＡＴＫ／１７００

「チューナーモンスター《氷結界の番犬》を反転召喚」

《氷結界の番犬》　ＡＴＫ／　５００

「舞姫の効果発動。手札の《氷結界の虎将　グルナード》と《氷結界の虎将　ガンターラ》を公開してセットカード2枚を手札に戻す。氷雪の舞」

『姫様を鎮めるために生け贄になってください！』

『生け贄』っつったぞあいつ！？相当参ってるぞ！？

「ちっ！？女のくせに！」

「あ　ぇ？」

「ひぃっ！？」

やめろぉぉぉぉ！これ以上刺激するな！月沙が言っちゃやばい発言をガンガンかましてるから！つーかてめえは学習能力ないのか！？

「レベル４《氷結界の舞姫》にレベル２《氷結界の番犬》をチューニング！封印されし雷槍が、青き光で雲海を突く！秘めたる力を解き放て！」

☆４＋☆２＝☆６

「シンクロ召喚！浮上せよ！《氷結界の龍　ブリューナク》！」

出てきたのは青い氷龍だ。グングニールが赤みがかってるのに対して、こいつは青みがかってる。

《氷結界の龍　ブリューナク》
シンクロ・効果モンスター（制限カード）
星６／水属性／海竜族／ＡＴＫ２３００／ＡＴＫ１４００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
自分の手札を任意の枚数墓地に捨てて発動する。
その後、フィールド上に存在するカードを、墓地に送った枚数分だけ持ち主の手札に戻す。

《氷結界の龍　ブリューナク》　ＡＴＫ／２３００

「出やがった…！」

「紅刃、月沙はあんなカードを持ってたか？」

「あれは魔神状態でしか使わねえんだよ。普段は『強すぎるから』って使ってないんだけど…」

魔神状態でしか使わないカードって、どんだけ強力なカードなん

だよ！？

「番犬がシンクロ素材となった時、カードを1枚ドローする。罠カード《氷結界の本陣》。レベル４以下の氷結界のモンスターがフィールドから離れた時、手札からそのモンスターのレベル以上のモンスターを特殊召喚する」

《氷結界の本陣》
通常罠（オリジナル）
レベル４以下の「氷結界」と名のついたモンスターが自分フィールド上から離れた時に発動する事ができる。
手札からそのモンスターよりレベルが上のモンスターを特殊召喚する。
その後、レベル１の水属性モンスターをデッキから墓地に送る事ができる。
セットされたこのカードが破壊された時、「氷結界」と名のついたモンスター１体をデッキから墓地に送る。

「レベル７の《氷結界の虎将　ガンターラ》を特殊召喚」

《氷結界の虎将　ガンターラ》　ＡＴＫ／２７００

「その後、デッキからレベル１の水属性モンスター１体を墓地に送る。《フィッシュボーグ－ガンナー》を墓地へ。永続魔法《縮退回路》を発動。フィールド上から手札に戻るモンスターは、代わりに除外される」

《縮退回路（しゅくたい）》
永続魔法
このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に５０

0ライフポイントを払う。
フィールド上から手札に戻るモンスターカードは、手札に戻らずゲームから除外される。

「来たよ、凶悪コンボ…」

「ブリューナクの効果発動。手札を捨て、捨てた枚数分フィールド上のカードを手札に戻す」

え？それってつまり…。

「手札を3枚捨てて《レインボー・フィッシュ》3体を手札に戻す。《縮退回路》の効果で手札に戻るモンスターは全て除外される」

「何ぃ！？」

うっわ～、確かに凶悪だなあれ。手札を捨てるだけでモンスターを除外できるようになっちまった。

「ぐ…だが、シーラカンスは効果の対象になった時、自分フィールド上の魚族モンスター1体を生け贄に捧げる事でその効果を無効にして破壊する効果を持っている！手札は残り1枚！そのモンスターじゃシーラカンスは倒せねえ！」

「魔法カード《天よりの宝札》。お互いに手札が6枚になるようにカードをドローする」

「おい！無視かゴラ！」

淡々とカードを動かす月沙。やっぱりめちゃくちゃ怖い。

「勘違いしてるようだけど…

この効果、『回数制限なんてない』から」

「……え……？」

え、何？て事は…手札1枚が《邪帝ガイウス》みたいな感じになってんの？

「手札を1枚捨てる事で《スペースマンボウ》を除外。もう1枚捨ててシーラカンスを除外する」

酷っ！？何だよあのモンスター！？凶悪すぎるだろ！？バウンスだけでも充分強いだろ！

「嘘だろ！？この俺様が、女ごときに負けるなんて…！？」

「まだ終わってないよ？」

え？

「魔法カード《ワン・フォー・ワン》。手札からモンスター1体を墓地に送り、デッキからレベル1のモンスター1体を特殊召喚する。デッキから《氷結界の番人ブリザード》を特殊召喚」

《氷結界の番人ブリザード》　ＡＴＫ／　１００

「あいつまだやる気か！？」

「よく見とけよ。あいつのオーバーキルを」

阿淵の奴精神的に耐えられんの！？

「レベル3以下の水属性モンスターがフィールドにいる時、手札を1枚捨てる事で墓地の《フィッシュボーグ－ガンナー》を特殊召喚する」

《フィッシュボーグ－ガンナー》　ＡＴＫ／　１００

「今捨てたのは《氷結界の番犬》。手札から捨てられた時、特殊召喚する」

《氷結界の番犬》　ＡＴＫ／　５００

「レベル7《氷結界の虎将　ガンターラ》とレベル1《氷結界の番人ブリザード》にレベル1《フィッシュボーグ－ガンナー》をチューニング！封印されし綿津見の槍が、氷壁を砕き唸りを上げる！秘めたる力を解き放て！」

☆7＋☆1＋☆1＝☆9

「シンクロ召喚！邁進せよ！《氷結界の龍　トリシューラ》！」

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／２７００

「トリシューラがシンクロ召喚に成功した時、相手のフィールド、墓地、手札からカードを１枚ずつ除外する。墓地の《二重召喚》と手札１枚を除外する。トリニティ・バイス！」

青い光線がカードを２枚除外した。さすがにこれ以上はないだろ。

「魔法カード《命削りの宝札》。手札が５枚になるようにカードをドローする。魔法カード《シンクロキャンセル》。シンクロモンスターのトリシューラをエクストラデッキに戻し、シンクロ素材になったモンスターを墓地から特殊召喚する。魔法カード《水氷の宝札》。水属性モンスターのガンターラ、ブリズド、ガンナーの攻撃力を０にしてカードを３枚ドロー」

そう思ってた私が馬鹿だったよ畜生！最低でも殺気はしまってくれ！段々強くなってきてるから翔が失神しかけてんだよ！

「さらにもう１度トリシューラをシンクロ召喚。墓地の最後のカードと手札１枚を除外する。２枚目の《シンクロキャンセル》と《水氷の宝札》を発動、３枚ドローしてトリシューラをシンクロ召喚、相手の手札を１枚除外する。３枚目の《シンクロキャンセル》と《水氷の宝札》を発動、３枚ドローしてトリシューラをシンクロ召喚、相手の手札を１枚除外する」

《シンクロキャンセル》と《水氷の宝札》３連発！？しかも手札がなぜか８枚に増えてるし！

「魔法カード《死者蘇生》。墓地の《氷結界のロイヤル・ナイト》を特殊召喚」

《氷結界のロイヤル・ナイト》　ＡＴＫ／２０００

「レベル５《氷結界のロイヤル・ナイト》にレベル２《氷結界の番犬》をチューニング！封印されし神の槍が、冷気を携え天を突く！秘めたる力を解き放て！」

☆５＋☆２＝☆７

「シンクロ召喚！貫け！《氷結界の龍　グングニール》！」

《氷結界の龍　グングニール》　ＡＴＫ／２５００

「番犬の効果で１枚ドロー。ブリューナクの効果で手札を２枚捨て、トリシューラ、グングニールを除外。今捨てた《グレイブ・ドロー》と《グレイブ・バイス》の効果発動。《グレイブ・ドロー》でカードを２枚ドローし、《グレイブ・バイス》で相手の手札を２枚墓地に送る」

《グレイブ・ドロー》
通常魔法（オリジナル）
このカードが手札から墓地に送られた時、自分はカードを２枚ドローする。

《グレイブ・バイス》
通常魔法（オリジナル）
このカードが手札から墓地に送られた時、相手の手札を２枚墓地に送る。

「相手の手札と月沙のデッキが０になったぞ！？」

「どこまでやる気なのよ！？」

「手札を１枚伏せる。手札を全て捨てて罠カード《アクア・オーバードライブ》を発動。墓地の水属性モンスターを全て除外し、除外したモンスターの攻撃力の合計分の数値を自分フィールド上の水属性モンスター１体に加える」

「墓地の水属性モンスターを全部？」

「ちょっと待ちなさいよ」

ここでルーナが何かに気づいた。てか何に？

「月沙のデッキにはもうカードはないわよね？手札を全部捨てるから墓地にはデッキのカードが全部あるって事よね？」

「あ…」

「て事は…」

「トリシューラの攻撃力を２９３００アップ」

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／５０００→３４３００

おかしいだろぉぉぉぉ！！攻撃力３００００超えたぞ！？どういう構造してんだあのデッキ！？しかもまだ１ターン終わってないんだけど！？

「このカードの対象になったモンスターの戦闘では、戦闘ダメージは発生しない」

「え？」

「は…はは…はははははは！何をやっている！オーバーキルをしようとしてとんだミスを「今伏せた魔法カード《ダメージ・チェンジ》を発動」…は？」

「このターン、モンスターの戦闘ダメージは全て効果ダメージになる」

《ダメージ・チェンジ》
通常魔法（オリジナル）
このターンのエンドフェイズ時まで、戦闘ダメージは全て効果ダメージとして扱い、効果ダメージは戦闘ダメージとして扱う。

て事は何？効果ダメージになるから『戦闘ダメージが発生しない』ってデメリットは帳消し同然になったのか？

攻撃するのか！？攻撃力３４３００のトリシューラで！？

「あ…ああ…」

「で…何か言った？」

怖いから！マジで怖いから落ち着いてくれ！

「バトル。《氷結界の龍　トリシューラ》でダイレクトアタック。

トライデント・ブリザード！」

「ちょっと待て！待て待てまぎゃあああああああああああ！！！」

阿淵　ＬＰ／４０００↓　０

月沙　ＷＩＮ

えげつねえ…。メインデッキのカードを全部使ってオーバーキルを決めやがった…。

「さてと…」

月沙がゆっくり阿淵に向かっていく。あの…空間が歪んでるように見えるのは気のせいですか？

「わかった？女だろうと誰だろうと、誰が勝つかなんてわからないんだよ？」

いや、このデュエルはお前の勝ちが決定してたろ！

「それじゃ、お仕置きの時間だね…」

「も、もういいだろ！？もうわかったから！」

「ペナルティの話、忘れ　た　わ　け　ジ

ャ

ナ

イ

ヨ

ネ

？」

…私としては、この時の月沙が1番怖かった。真正面から見たら幻覚見えんじゃないか？

月沙は阿淵の手首を握り、阿淵のペースを無視して出口へと向かった。

「痛い痛い痛い痛い！力緩めてくれ！」

「やだ」

「…月沙って握力強かったっけ？」

「魔神モードにそんな常識は通用しねえよ」

やがて、月沙と阿淵はデュエル場から出て行った。殺気が遠ざかっていく。

「助けなくていいの？」

「できるわけないでしょ」

「逆らったら僕ら死ぬよ？」

「それにしても、今のデュエルは凄かったね」

「別の意味でな。普段のあいつはあそこまでやらない」

みんなまだ顔色が悪い。インパクトありすぎだっての…。

「そういや、ディヴァインは何でここに？」

「いや、月沙を目撃した生徒に涙目で報告されてね…。目撃しただけでも充分トラウマの領域に入るレベルらしい。おそらく４分の１の生徒と教師が恐怖心を植え付けられただろう」

被害は思ったよりでかいみたいだな。あんなの誰だって敵に回したくな…

ああああああぁぁぁああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！

『！？』↑全員

突然、出入口の無効から異常な叫び声が聞こえた。

「…今のって…」

「やられたな、あいつ…」

みんなして黙ったまま動かなかった。いや、動けなかったって言った方が正しいな。重苦しい殺気から解放されてるだけマシだけど。

しばらくして、月沙が戻ってきた。髪はいつものポニーテールに戻してる。

「気は済んだか？」

1番最初に話し掛けたのは紅刃だ。1度経験してるからある程度耐性できてんのな。私達の中で1番騒がなかった奴だし。

「うん、すっきりしたよ♪」

…ああ、こういうのを『天使』って言うんだろうな。今日1番の最っ高にいい笑顔だよ。

「レッドやイエローの事もちゃんと解ってくれたみたいだし、よかったよかった♪」

無理矢理解らせたんだろうが！いや、今回の件は嫌でもトラウマになるだろうし、もう見下す真似はしないだろ。これはこれでよかった…のか？

「そうか。まあ、ほどほどにしとけよ」

「わかってるよ」　絶対わかってねえだろ！紅刃も何であっさり順応できてんだよ！？

「今日は疲れただろうから、早めに休んだらどうだ？」

「そうするよ。それじゃあね！」

月沙はすっげえにこやかな表情で走り去っていった。さっきとは大違いだな。

「……先生」

「何だ？」

「片付け、手伝ってもらえませんか？」

「喜んで協力しよう」

俊也とディヴァインは後始末をするらしい。私も手伝った方がいいか？２人にだけやらせるってのもかわいそうだ。

「紅刃、あなたよく話せたわね。私はまだ怖くて仕方ないっていうのに…」

明日香だけじゃなく全員そうだろ。

「耐性でもできてんじゃねえか？１度経験してんだし」

私もだいぶマシになってきたから首を突っ込む。こいつも内心びくびくしてただろうしな。実際、顔色悪いし。

「ああ…そりゃあ、あいつを止めるために死闘を繰り広げたからな。嫌でも少しは慣れるぞ？」

「…はい？」

「あれはマジで死ぬかと思った。ハァ…何で俺が命懸けで虐めっ子共の尻拭いをしなきゃいけねえんだか…」

めんどくさそうに溜息をつく紅刃が、今の私には勇者に見えました。

阿淵は、さすがに骨を折られたりとか目潰しされたとか、そんなえぐい事はされてなかったけど、文字通り完膚なきまでにボコボコにされていた。アビリティが解禁されてたら、確実にその場で極太レーザー砲をぶっ放してただろうな。回復した後は改心したっちゃ

した。ただ、月沙どころか女そのものがトラウマになっちまったけどな。試しに私が声を掛けたら、悲鳴を上げて全速力で逃げてったな。

事件から1週間の間は目撃した一般生徒と教師全員から距離を置かれてた。でも本人は全く気にしてないみたいだ。あいつが『魔神』って言われるのもわかる気がする。

とりあえず、私は根本的な質問をしてみる事にした。

「なあ、月沙」

「何？」

「髪が白いからって馬鹿にされんのが嫌なら、何で髪を別の色に染めないんだ？」

「え？ああ、これ？私も染めようかなって考えてたんだけど、紅刃に褒められたからさ」

「…何て言ってたか覚えてるか？」

「はっきり覚えてるよ」

『う～ん…やっぱり髪染めようかな？』

『無理にやる必要はないだろ。それに、俺は…白銀ってのか？その髪の色好きだぞ』

『え？』

『前から思ってたけど、綺麗な髪してんじゃねえか。似合ってるぞ』

「…あの馬鹿、対抗策を1つ潰しやがって…」

「何か言った？」

「いや、何でもねえよ」

月沙って紅刃と仲良いからな…。まあ、私も月沙は白がいいと思ってるけど。いつも通りが1番だ。

つーわけで教訓だ。

『月沙を髪または歳をネタにして馬鹿にするのは禁止』！白髪でも反応するからな、生き地獄を体感したくなけりゃ守れ！

...To be continued

第４３話　容姿を馬鹿にされると誰でもキレる（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「……」

璃音「……」

勇香「怖すぎだろ、あれ…」

璃音「間違っても白髪なんて言ったらお終いね…」

ロコナ『うう、怖かったよ～…』

フィレス『グルゥ…』

勇香「とにかく、あいつが怒らせると１番怖い奴だって事はよくわかった」

璃音「気を取り直して…カード考察に入りましょうか。今回は月沙が普段は使わない強力モンスター《氷結界の龍　ブリューナク》よ」

《氷結界の龍　ブリューナク》
シンクロ・効果モンスター（制限カード）
星６／水属性／海竜族／ＡＴＫ２３００／ＡＴＫ１４００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
自分の手札を任意の枚数墓地に捨てて発動する。
その後、フィールド上に存在するカードを、墓地に送った枚数分だ

け持ち主の手札に戻す。

璃音「手札を捨てる事でフィールド上のカードを手札に戻す効果を持っているわ」

ロコナ『みんなよく使ってるよね！』

勇香「《奈落の落とし穴》の対策に一辺に捨てるもよし、１枚ずつコストに使うのもよし、しかも回数制限ないし、制限カードになるのもわかるな」

璃音「月沙がやったように、《縮退回路》を使ってバウンスを除外に変えるのも悪くないわね」

勇香「ただ、手札を確実に墓地に送れないと効果は発動できない。《マクロコスモス》がいい例だな。直接除外されちまうからアウトだ」

璃音「今回はここまでよ」

勇香「ここで１つお知らせがある。この小説を読んでくれてる人の中には、オリカを投稿してくれる人がいる。そこで、正式にオリカを常時募集する事にした。ただ、１つだけ決まりがある。璃音、うちの作者がオリカを作る時に決めてる事は何かわかるか？」

璃音「強すぎず弱すぎず、じゃないの？」

勇香「それもあるけどな…『他作品のキャラはカード化しない』事にしてんだ。今まで《月光龍ストライク・ジークヴルム》とか《冬の忘れ物　レティ・ホワイトロック》みたいに、バト〇ピや東〇の

キャラがオリカになった奴が出てきたろ？あれは全部投稿してくれた人が考えたもんだ」

璃音「あ、そういえばそうだったわね…」

勇香「別にそういうのを全否定したいわけじゃない。こういうタイプのオリカをメインで取り扱ってる人もいるからな。でも、そういうのが嫌いな人も多分いるわけだ。作者もどっちかというとあまり気が進まない方だし」

璃音「そのあたりを規制するというわけね」

勇香「そういう事。今までに投稿してくれたオリカは全部出す予定だけど、今後は他作品のキャラをカード化したような奴はなるべく控えてほしい。もし投稿してくれる人がいたとしたら、そこんとこは頭に入れといてくれ。まあ、会話中のネタとしてはそんなのお構いなしだけどな」

璃音「それを堂々と言ってもいいの…？まあ、いいわ。今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『今言ったルールは忘れないでね』

勇香「わがままにしか見えないかもしれないけど、理解してくれると助かる。それじゃ、次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

計算が物凄く面倒でした。多分、こんなオーバーキルはもうしないと思います。

ここに記した通り、オリカは常時募集中です。ただ、他作品のキャラをカード化したものは控えてください。また、多すぎると登場するのが遅れてしまう可能性があります。そして、場合によっては採用できない可能性がありますのでご了承ください。

前回ディヴァインが使用した《サイコ・メトラー》と今回月沙が使用した《氷結界の本陣》は言羽・D・カタストロフィ一さんが投稿してくださったオリカです。言羽・D・カタストロフィ一さん、ありがとうございました。

では、また次回！

第４４話　迷っていては戦はできない（前書き）

今回はようやく秋斗が活躍します。リアルファイトもありです。

それではどうぞ！

第４４話　迷っていては戦はできない

ＳＩＤＥ／秋斗

「こんなものか」

俺は自分の部屋でデッキ調整をしていた。今終わったところだ。

『マスター』

デッキをしまった後、ルリアが帰ってきた。

「ルリアか。どうだった？」

「例の広場で修行中です」

「そうか。…行くぞ」

『はい』

デュエルディスクを装着してから、部屋を出た。

キィン、キィン…ドォン…

夜の森の中を進んでいくと、金属がぶつかり合う音や何かの轟音が聞こえてくる。

広場の近くまで行くと、そいつらはいた。

『どうした？最近動きが鈍いぞ』

「そうか？悪い…」

紅刃、ロディス、リーシェ。さっきルリアに頼んで探してもらった奴らだ。今は紅刃とロディスで１ｖｓ１の勝負をしているようだ。紅刃はデュエルディスクを剣に変えた武器を持っている。

「ルリア、預かってくれ」

『はい』

ルリアにデュエルディスクを預ける。今は邪魔になるだけだ。

『少し休むか？』

「いや、まだやる」

そろそろ行くか。

「やってるな」

「『『！』』」

「夜中までご苦労なこったな」

「秋斗！？」

『ルリアもか。こんな時間にどうした？』

「模擬戦だ。制限時間は2分。ロディスとリーシェは手を出すな」

俺はルリアの杖を創り出し、紅刃に向けて紺色の光弾を放った。

「！」

紅刃は剣を盾代わりにしてそれを防いだ。俺は続けて攻撃を放つ。

「《デス・メテオ》」

人1人飲み込めるくらいの大きさを持つ火球を放つ。

「くっ！」

紅刃はそれを横に跳んで躱し、俺に向かって突進してきた。俺は正面から紺色の光弾を撃ってやる。

それを剣で斬り伏せ、目の前まで迫ってきた。当然、剣を横凪ぎに振るわれ、俺は杖で受け止めた。

そのまま連続で攻撃してくるが、杖で何とか捌いていく。こいつ…剣の型が所々でたらめだ。だが隙は少ない。我流が混じってるのか？

「らぁっ！」

「!?」

紅刃が思い切り縦に剣を振り下ろすと、空振って地面に減り込んた。俺はその隙に下がって距離を取る。

何だ今のは?今の一撃は明らかに威力が違う。防いだ感じでは、地面に減り込むほどの威力はないはずだ。なぜ今だけ威力が上がった?

「…《大寒波》!」

冷気を広範囲に放ち、一帯をまとめて凍らせた。俺が使える技の中でも威力は高めだ。

『紅刃!』

終わったか?

ビシッ、バリィ

「!」

ドオオォォォン！

巨大な氷塊に輝（ひび）が入り、そこから電流が出たかと思うと、氷塊が爆発して四散した。ついでに大量の電流も走る。

「…それがお前の本気か」

「ああ」

紅刃の上着がロディスと同じ、ヴァンダルギオンの模様が入った黒いコートに変わっている。あれが紅刃の本気か。

「行くぜ」

紅刃が一気に間合いを詰める。さっきとはスピードが段違いだ。

「っ！」

辛うじて《ホーリーライフバリヤー》を張り、攻撃を防いだ。紅刃はそれを破るべく連続で剣を振るう。

剣は速くなった。だが、下手に力んで決定的なダメージはない。無理矢理突破する気か？ここは下がるべきじゃないのか？

すると、連撃で壊すのを諦めたのか居合いの構えを取り、一気に振り抜いた。

ガガガッ！

バリヤーを4分の1まで斬ったものの、俺には届かない。このまま0距離で攻撃を当てるか。

「《火竜の火炎弾》！」

威力は《デス・メテオ》より低いが、この距離ならダメージは大きいだろ。そう考えて攻撃をした。

フッ

「何！？」

『消えた』？火球を放つ直前に紅刃が消え、火球は対象を失い素通りした。

「がっ！」

右を見ると、紅刃が木に体を打ちつけていた。距離はそれなりにある。一瞬であそこまで移動したというのか？だが、制御はできてないようだ。

バリリッ

剣が白い電気を帯びる。さらにどんどん電気を溜め込んでいく。あれをぶっ放すつもりか？

予想は正解だった。奴から見て左下から右上にかけて地面を擦るように剣を振り上げ、白い電撃を衝撃波のように撃ち出した。電気だからか、速い。

「ちぃっ！」

これは避けるのは無理だな。圧縮した《大熱波》をぶつけ、何とか相殺した。

「！」

紅刃は次の攻撃体勢に入っていた。両手で剣を持ち、右足と両腕を後ろに引いて切っ先を俺に向ける。刀身には膨大な電気が込められている。あれは…突きの構えか？

その構えから、一気に突っ込んできた。瞬時に悟った。あれを食らったらまずい！

地面に《サイクロン》を撃ち込み、ぎりぎりで上空へ回避した。攻撃も兼ねていたか、紅刃は風圧で吹っ飛ばされた。しかし、空中で体勢を立て直して着地には成功している。

『時間です！』

俺が着地したのは、ルリアが模擬戦の終了を告げた後だった。

「いきなり何の真似だよ！」

「お前の実力が知りたくなった。それだけだ」

「何だそりゃ…」

紅刃はアビリティを全部解いて、デュエルディスクを鞘に納めた。

「さっきのあれは何だ？」

「は？」

「空振ったもののいきなり威力が上がったり、の《ホーリーライフバリヤー》を途中まで斬ったり、一瞬で大きく回避したり…不可解な点が多い」

「ああ、あれか？磁力だ」

「磁力？」

「磁石って引きつけ合ったり反発し合ったりするだろ？あれを戦闘でも上手い具合に利用できないかなって考えて…」

要するに剣や自分、そして周りを磁石にしちまうってわけか。攻撃が重くなったのは剣と地面を磁力で引きつけたから。一瞬で移動できたのは磁力で木に吸いついたから。

「まだ制御はできないけどな」

「だから空振ったり木にぶつかったりしたのか…」

面白い発想をしやがるな。

しかし、少し派手にやっちまったな。火球や電撃が当たった箇所が黒焦げてる。ウィンやカイエンあたりが修復できるから、後で頼むか。

「さてと、今日はもう帰っかな…」

「紅刃、まだだ」

「ん？」

「俺とデュエルしろ」

「デュエル？」

紅刃は俺の要求を聞いた時、一瞬躊躇うような表情を見せた。

「いいけど…何でだ？」

「同じ事だ。お前の実力が知りたい」

『マスター、これを』

「悪いな」

ルリアからさっき預けたデュエルディスクを受け取り、そのまま展開させる。ルリアはカードに戻った。

『紅刃、やるぞ』

「ああ」

ロディスとリーシェもカードに戻り、紅刃はディスクを抜いて装着、展開させた。互いのデッキが自動でシャッフルされる。

…さっきの模擬戦もそうだが、こいつは何かを迷っている。何か

は知らないが、それを探るのが今日の１番の目的だ。

「行くぞ」

「ああ、さっさと始めようぜ」

「「デュエル！」」

紅刃ｖｓ秋斗

「先攻は譲る」

「なら先に行くぜ！俺のターン！《智天使ハーヴェスト》を召喚！」

《智天使ハーヴェスト》　ＡＴＫ／１８００

「カードを２枚セットし、ターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《智天使ハーヴェスト》（ＡＴＫ／１８００）
魔法・罠／リバース×２

攻撃力１８００に伏せが１枚…対処できるな。

「俺のターン！《魔導戦士ブレイカー》を召喚！」

赤い魔法使いの鎧を着た騎士を呼び出す。汎用性が高い奴だ。

《魔導戦士ブレイカー》　ＡＴＫ／１６００

「ブレイカーが召喚された時、自信に魔力カウンターを１つ乗せ、乗っている魔力カウンター１つにつき攻撃力が３００ポイントアップする」

《魔導戦士ブレイカー》　ＡＴＫ／１６００→１９００　Ｍ／０→１

「効果発動！魔力カウンターを１つ取り除き、魔法・罠カード１枚を破壊する！マナ・ブレイク！」

《魔導戦士ブレイカー》　ＡＴＫ／１９００→１６００　Ｍ／１→０

ブレイカーが剣から魔力を放ち、リバースカードを破壊した。中身は《魔宮の賄賂》か。

「速攻魔法（ディメンション・マジック）！俺の場に魔法使い族モンスターがいる時、自分のモンスター１体をリリースして手札の魔法使い族１体を特殊召喚する！ブレイカーをリリースし、《魔法の操り人形》を特殊召喚！」

刃を持った人形を操る、赤い布を被った魔法使い。我ながら不気味なモンスターだ。

《魔法の操り人形（マジカル・マリオネット）》
効果モンスター
星５／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ１０００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分または相手が魔法カードを発動する度に、このカードに魔力カウンターを１つ置く。
このカードに乗っている魔力カウンター１つにつき、このカードの

攻撃力は２００ポイントアップする。
また、このカードに乗っている魔力カウンターを２つ取り除く事で、フィールド上に存在するモンスター１体を破壊する。

《魔法の操り人形》　ＡＴＫ／２０００

「そして、表側表示のモンスター１体を破壊する」

「く…」

人形が魔力の光線で智天使を葬る。これで完全にがら空きだな。

「バトルだ。《魔法の操り人形》でダイレクトアタック！ドール・ブレード！」

操り人形が刃を振り回し、紅刃に斬りつけた。

「つぅっ…！」

紅刃　ＬＰ／４０００→２０００

「カードを２枚セットしてターンエンドだ」

秋斗
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《魔法の操り人形》（ＡＴＫ／２０００）
魔法・罠／リバース×２

状況は俺が有利。だが、俺が聞いた通りの奴なら、このままじゃ

終わらないはずだ。

「俺のターン！…よし！手札から《ヘカテリス》を捨てて効果発動！デッキから《神の居城－ヴァルハラ》を手札に加える！そしてそのまま発動！」

効果は知っている。上級モンスターを出すつもりか。天使族のは厄介な奴が多いが…。

「《魔法の操り人形》の効果発動！魔法カードが発動する度に、こいつ自身に魔力カウンターを1つ乗せる。さらに、こいつの攻撃力は自分に乗っている魔力カウンター1つにつき２００ポイントアップする！」

《魔法の操り人形》　ＡＴＫ／２０００→２２００　Ｍ／０→１

「関係ねえ！ヴァルハラの効果発動！俺の場にモンスターがいない時、手札から天使族モンスター1体を特殊召喚できる！《天空勇士ネオパーシアス》を特殊召喚！」

下半身が結晶の塊となった、青い鎧の聖騎士が現れた。

《天空勇士ネオパーシアス》　ＡＴＫ／２３００

攻撃力はぎりぎり１００ポイント上回るか…。

「バトル！ネオパーシアスで《魔法の操り人形》に攻撃！ネオパーシヴァル・セイバー！」

手と一体化した剣が《魔法の操り人形》に迫る。まあ、構わない

がな。

「罠カード《魔法の筒》！相手モンスターの攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「！」

本来ならこれで終わりだ。だが、あの伏せカードはおそらく…。

「カウンター罠（トラップ・ジャマー）！バトルフェイズ中の罠の発動を無効にして破壊する！」

「……」

やはりな。さあ、お前の本領を見せてもらおうか！

「カウンター罠で効果を無効にした事で、手札から《冥王竜ヴァンダルギオン》を特殊召喚する！」

『行くぞ！』

フィールドに黒い穴が開き、赤い模様と青い宝玉を体に持つ冥界の王が飛び出した。

《冥王竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／２８００

「ロディスか…」

「ヴァンダルギオンの効果発動！罠をカウンターして特殊召喚した時、相手フィールド上のカードを１枚破壊する！リバースカードを

破壊！カーディナル・フレア！」

『（攻撃を確実に通すつもりか）』

赤い模様が光り、龍の姿になったロディスが赤い炎を吐く。

「ハズレだ。罠カード《和睦の使者》！このターンの自分のモンスターの戦闘破壊、戦闘ダメージを無効にする！」

「何！？」

結局、炎が破壊したのは発動済みの罠だった。

「…モンスターをセットしてターンエンド」

紅刃
ＬＰ／２０００
手札／０
モンスター／《天空勇士ネオパーシアス》（ＡＴＫ／２３００）《冥王竜ヴァンダルギオン》（ＡＴＫ／２８００）リバース×１
魔法・罠／《神の居城－ヴァルハラ》

今は腑抜けているとはいえ、ここまで持ち直すとはな。神に選ばれただけの事はある。並のデュエリストなら簡単に倒せるだろう。

「俺のターン」

だが、俺はそこまで甘くはない。

「魔法カード《強欲な壺》！カードを２枚ドローする。魔法カード

が発動した事で、《魔法の操り人形》に魔力カウンターが１つ乗る」

《魔法の操り人形》　ＡＴＫ／２２００→２４００　Ｍ／１→２

「そして、《魔法の操り人形》の効果発動。このモンスターに乗っている魔力カウンターを２つ取り除き、相手モンスター１体を破壊する！ヴァンダルギオンを破壊だ！ドーリー・ボム！」

《魔法の操り人形》　ＡＴＫ／２４００→２０００　Ｍ／２→０

『ぐおっ！』

「ロディス！」

人形が魔力弾を撃ち込み、破壊対象になった龍を爆破した。

「俺の場に魔法使い族モンスターがいる時、手札から《キッズ・ソーサラー》を特殊召喚する！」

紺色の服を着た小さな子供の魔法使いが元気に飛び出す。

《キッズ・ソーサラー》
チューナー（効果モンスター・オリジナル）
星１／光属性／魔法使い族／攻　３００／守　３００
自分フィールド上に魔法使い族モンスターが表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

《キッズ・ソーサラー》　ＡＴＫ／　３００

「レベル５《魔法の操り人形》にレベル１《キッズ・ソーサラー》

をチューニング！」

子供の魔法使いが１つの紺色の輪になり、操り人形を持つ魔法使いが５つの星になる。

「魔の書に記されし夜天の章よ、希望をその手に蒐集（しゅうしゅう）せよ！」

☆５＋☆１＝☆６

「シンクロ召喚！《祝福の風　リインフォース》！」

光の柱から現れたのは、黒い服を着た銀髪の女魔導師だった。

《祝福の風　リインフォース》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星６／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ１７００
チューナー＋チューナー以外の魔法使い族モンスター１体以上
このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する魔法使い族モンスター１体につき２００ポイントアップする。
１ターンに１度、このカードの攻撃力エンドフェイズ時まで０にする事で、自分フィールド上に表側表示で存在する魔法使い族モンスター１体の攻撃力はこのカードの元々の攻撃力分アップする。

《祝福の風　リインフォース》　ＡＴＫ／２０００

「リインフォースの攻撃力は、墓地の魔法使い族１体につき２００ポイントアップする。墓地の魔法使い族は３体。よって、攻撃力は６００ポイントアップする！」

《祝福の風　リインフォース》　ＡＴＫ／２０００→２６００

「そして、《マジシャンズ・ヴァルキリア》を召喚！」

『出番ですね』

まだ召喚権が残っているから、相棒のルリアも出しておいた。

《マジシャンズ・ヴァルキリア》　ＤＥＦ／１８００

「装備魔法《夜天の魔導書》をリインフォースに装備！装備モンスターは１ターンに１度、相手モンスター１体の効果を得る事ができる！」

《夜天の魔導書》
装備魔法（オリジナル）
「祝福の風　リインフォース」にのみ装備可能。
このカードを装備したモンスターは、１ターンに１度、エンドフェイズ時まで相手モンスター１体の効果を得る事ができる。

「効果をコピーする装備魔法…！」

「《夜天の魔導書》の効果でネオパーシアスの効果をコピーする。バトル！リインフォースでネオパーシアスを攻撃！ラグナロク・ブレイカー！」

女魔導師が放つ白い魔導砲が聖騎士を貫く。だが、ライフへのダメージはそこまで大きくない。

紅刃　ＬＰ／２０００→１７００

「コピーしたネオパーシアスの効果発動。戦闘ダメージを与えた時、カードを1枚ドローする」

ほぉ…。いいカードを引いたな。これならルリアがやられずに済む。

「装備魔法（ミスト・ボディ）を《マジシャンズ・ヴァルキリア》に装備！装備モンスターは戦闘では破壊されない」

《ミスト・ボディ》
装備魔法
装備モンスターは戦闘では破壊されない。

「ターンエンドだ」

秋斗
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《祝福の風　リインフォース》（ＡＴＫ／２６００）
《マジシャンズ・ヴァルキリア》（ＤＥＦ／１８００）
魔法・罠／《夜天の魔導書》《ミスト・ボディ》

さあ、どうする？お前の力はそんなものか？俺に傷の１つや２つぐらいつけてみろ！

「（ネオパーシアスを逆に利用してきた…。おまけに隙がほとんどない。どうする…？）俺のターン！…！魔法カード《壺の中の魔術書》！お互いにカードを３枚ドローする！」

運はそれなりにいいみたいだな。紅刃の目はまだ死んでない。ど

う出てくる？

「魔法カード《強欲な壺》！カードを２枚ドロー！速攻魔法（サイクロン）を発動！《夜天の魔導書》を破壊する！」

ちっ、コピーはできなくなったか。

「（今はこれしかない！）墓地の光属性モンスター２体…《智天使ハーヴェスト》と《天空勇士ネオパーシアス》を除外して、《神聖なる魂》を特殊召喚する！」

紅刃のフィールドに純白の天使が現れ、夜の広場を白く照らす。

《神聖なる魂》　ＡＴＫ／２０００

「そしてチューナーモンスター《朱光の宣告者》を召喚！」

朱色の羽を持つ小さな宣告者が《神聖なる魂》の横に並ぶ。

《朱光の宣告者》　ＡＴＫ／　３００

レベルの合計は８か…。紅刃が使うレベル８のシンクロモンスターといえば、《ライトエンド・ドラゴン》。戦闘時に攻撃力を下げる効果を利用して、攻撃を躊躇させる魂胆だろう。

「レベル６《神聖なる魂》にレベル２《朱光の宣告者》をチューニング！気高き誇りが、青天の下（もと）に現世に降り立つ！希望の光を降り翳せ！」

☆６＋☆２＝☆８

「シンクロ召喚！誓え！《神聖騎士パーシアス》！」

《神聖騎士（ホーリーナイト）パーシアス》
シンクロ・効果モンスター
星８／光属性／天使族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ２１００
チューナー＋チューナー以外の光属性モンスター１体以上
１ターンに１度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体の表示形式を変更する事ができる。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

《神聖騎士パーシアス》　ＡＴＫ／２６００

「何！？ライトエンドじゃないだと！？」

光の柱から飛び出したのは、俺の予想に反して更なる進化を遂げたパーシアスだった。下半身は馬のような形になったが、全身が結晶化されている。

「俺のレベル８のシンクロモンスターはライトエンドだけじゃねえ！パーシアスの効果発動！１ターンに１度、相手の表側表示のモンスター１体の表示形式を変更する！」

「何…！」

「リインフォースを何とかしたいけど、《マジシャンズ・ヴァルキリア》にしか攻撃できない。ヴァルキリアを攻撃表示に変更する！アヴェンジ・スパーク！」

『くぅ…！』

パーシアスが盾から光を放つと、ルリアが体勢を崩されてしまった。

《マジシャンズ・ヴァルキリア》　ＤＥＦ／１８００→ＡＴＫ／１６００

《マジシャンズ・ヴァルキリア》が場にいる限り、他の魔法使い族には攻撃できない。だが、ダメージはこっちの方が上だ。

「バトル！《神聖騎士パーシアス》で《マジシャンズ・ヴァルキリア》に攻撃！さらにダメージステップで手札から《オネスト》を捨てて効果発動！エンドフェイズ時まで《マジシャンズ・ヴァルキリア》の攻撃力をパーシアスに加える！」

《神聖騎士パーシアス》　ＡＴＫ／２６００→４２００

このタイミングで《オネスト》だと？

「オネスティ・パーシヴァル・セイバー！！」

《オネスト》の翼で強化されたパーシアスが縦に振り下ろした剣を、ルリアが杖で受け止める。攻撃表示だから当然戦闘ダメージが出る。

「ちぃっ！」

秋斗　ＬＰ／４０００→１４００

「大丈夫か、ルリア！」

『はい、問題ありません』

「ターン、エンド…」

紅刃が苦い顔でターンの終了を告げると、《オネスト》の翼も消滅した。

《神聖騎士パーシアス》　ＡＴＫ／４２００→２６００

紅刃
ＬＰ／１７００
手札／０
モンスター／《神聖騎士パーシアス》（ＡＴＫ／２６００）リバース×１
魔法・罠／《神の居城－ヴァルハラ》

「俺のターン！」

あいつは何を焦っている？しかも何かの迷いから力を出し切れてない。こんな状態で俺に勝つのは…はっきり言って無理だ。

「《祝福の風　リインフォース》の効果発動。攻撃力を０にする事で、エンドフェイズ時まで味方のモンスターに元々の攻撃力を託す」

《祝福の風　リインフォース》　ＡＴＫ／２６００→　０

《マジシャンズ・ヴァルキリア》　ＡＴＫ／１６００→３６００

「（攻撃力を渡した…？）」

「チューナーモンスター《ナイトエンド・ソーサラー》を召喚！」

俺はこのターンで決着をつけるために、鎌を持った少年の魔術師を召喚した。

《ナイトエンド・ソーサラー》
チューナー（効果モンスター）
星２／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ１３００／ＤＥＦ　４００
このカードが特殊召喚に成功した時、相手の墓地に存在するカードを２枚までゲームから除外する事ができる。

《ナイトエンド・ソーサラー》　ＡＴＫ／１３００

「レベル６《祝福の風　リインフォース》にレベル２《ナイトエンド・ソーサラー》をチューニング！」

せめて、俺の切り札で引導を渡してやろう。

「魔の書に記されし龍の章よ、銀の霊槍で闇夜を突け！」

☆６＋☆２＝☆８

「シンクロ召喚！湧出（ゆうしゅつ）せよ！《魔導竜　レイヴェルト》！！」

右手には黒い魔力で象られた槍が生えた銀色の柄を、左手には円形の西洋盾を持ち、２対の翼を広げた紺色の龍が現れた。

《魔導竜　レイヴェルト》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星８／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２７００／ＤＥＦ２４００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードは魔法カードの効果では破壊されない。
通常魔法が発動した時、自分はライフを５００ポイント回復する。
１ターンに１度、以下の効果から１つを選択して発動する事ができる。
●手札のモンスター１体を墓地に送る事で、相手モンスター１体を破壊する。
●手札の魔法または罠カード１枚を墓地に送る事で、相手フィールド上に存在する魔法または罠カード１枚を破壊する。

《魔導竜　レイヴェルト》　ＡＴＫ／２７００

「こいつが俺の切り札だ」

「魔導竜…　レイヴェルト…」

「レイヴェルトの効果発動！手札からモンスターカードを１枚墓地に送り、相手モンスター１体を破壊する！」

「何！？」

「手札から《魔導戦士ブレイカー》を墓地に送り、伏せモンスターを破壊する！黒焔葬破！」

　レイヴェルトが黒い炎を吐き出し、伏せモンスターを破壊する。
伏せていたのは《マシュマロン》か…。

「バトル！《マジシャンズ・ヴァルキリア》で《神聖騎士パーシアス》に攻撃！マジック・イリュージョン！」

『消えなさい！』

強化され巨大になった桜色の光弾が、神聖騎士を爆破し破壊した。

「ぐぅっ…！」

紅刃　ＬＰ／１７００→　７００

「終わりだ。《魔導竜　レイヴェルト》でダイレクトアタック！ラグナ・エンド・フェンサー！！」

魔力で創られた槍が消え、銀色の柄から漆黒の砲撃が放たれた。

悪いが、これで終わりだ。

「ぐあああぁぁぁぁ！！」

紅刃　ＬＰ／　７００→　０

秋斗　ＷＩＮ

ソリッドビジョンが消えた後、俺はさっさとカードをしまいディスクを待機状態に戻した。精霊達は全員カードから出てきた。紅刃はそれを見て、その場に腰を下ろした。

「俺の負けか…」

「当然だ。何だ今の腑抜けたデュエルは？」

「は？」

「なぜパーシアスの攻撃時に《オネスト》を使った？パーシアスの攻撃力はルリアより上、さらにライフを０にできないのに無理に使う意味はないだろ」

「…！」

「反撃用に温存するべきだったんだよ。それができていたらお前の勝ちだった」

紅刃は何も言わない。ただ黙って俺の話を聞いている。

『ロディスさんとリーシェさんも気づいてるはずですよ。今の紅刃さんが不安定な事に』

『…ああ。動きが消極的になったと思ったら、急に無理矢理突っ込んでくる。その繰り返しだ』

『休憩を促した時も似たような事がよくある。あえて黙っていたが…紅刃、私から見れば、ゴドウィンと戦ってからのお前はどこかおかしい』

「そうか…」

さすがにロディスとリーシェが気づいてないはずはなかったか。

「…わかってるさ。今の俺が駄目だって事ぐらい」

「……」

「この時代に来て、ルドガーやゴドウィンと戦って…みんなに置いてかれてるような気がしてきたんだ。月沙も俊也も将人も、みんな俺よりずっと強くなってって、正直自分が力になれてるかどうかわからなくなってきた」

ゴドウィン兄弟の話は聞いている。ニュートラルに蘇らされて、紅刃達と死闘を繰り広げたらしいな。

「月沙とタッグを組んでゴドウィンと戦った時、俺は他人から借りた力しか使えなくて…ロディスとリーシェの力も最大限生かせなかった。《フェアリー・アーチャー》も《セイヴァー・ライト・ドラゴン》も、誰かから借りた力だ。それがなけりゃ、どうなってたか…」

セイヴァーか。実際に見た事はないが、遊星は『赤き竜の力』だと言ってたな。

「さっきの磁力の奴も、ゴドウィンを倒す前から考えてたんだ。でも、倒した後からはなおさら上手くいかなくて…簡単に修得できないってのはわかってる。でも、いくらやっても制御できねえ」

「…今の自分が力不足だと考えてるのか？」

「ああ。かといって、力を求めすぎるのも抵抗がある。だから、どうしていいかわからねえんだ…」

これでようやく謎が解けた。初めて会った時から妙な違和感があったが…本調子じゃないからだったみたいだな。自分は力不足。だが、力を求めすぎてもいけない。そんな考えに板挟みにされてる。

実際、力に固執しすぎてもろくな目に遭わないが…どうりで伸びないわけだ。

「今のお前じゃ戦えない。何も護れねえよ」

「…ああ…」

「少し頭を冷やせ」

紅刃の表情は見えない。別に見えないからどうというわけじゃないがな。そんな状態じゃ、いくら鍛えても意味がない。

「私も話に混ぜてくれないか？」

急に別の声が聞こえた。

振り向くと、深緑のマントとのターバンを身につけた金髪の男が歩いてきていた。腰には剣を差している。

『お前は…！』

「クヴァシル！？」

ロディスと紅刃が驚きの声を上げる。知り合いか？

「誰だお前は？」

『こいつはクヴァシル。私とロディスの真名を教えてくれた者だ』

「何でお前がここに…」

紅刃は立ち上がりながら疑問を投げ掛ける。

「君の事が気になって会いに来た。冥界を拠点として精霊界を旅する事にしてから時々君達を見ていたんだが…紅刃、中途半端に攻撃的になったな。【パーミッション】の特性を生かし切れてない」

「……」

「さっきの戦闘やデュエルを見ていたが、デュエルは攻める事に目が行きすぎて、どちらも半端になってしまっている。戦闘はまだ少しマシだが、攻撃が成っていない。さっき自白した迷いを断ち切らなければ、この先君は戦えないだろう」

全くだ。クヴァシルと言ったか…見る目はあるようだな。

「わかってる。けど…」

「…少しゆっくり考える必要があるな。それも兼ねて、君には行ってほしい所がある」

「行ってほしい所？」

「君達の時代の精霊界にある、《天空の聖域》だ」

「《天空の聖域》？」

『私の故郷か』

『リーシェさんの故郷ですか？』

『ああ。賑やかでいい所だ』

リーシェの故郷か。紅刃が使うカードはほとんどが光属性の天使族。紅刃だからこそ見つかる事もあるかもしれない。

「見てもらいたい物があってね」

『見てもらいたい物？…！まさか「あれ」か？』

「多分君が考えている物で正解だろう」

《天空の聖域》に何か特別な物でもあるのか？カードだけで考えても、めぼしい物は特にないと思うが…。

「『あれ』って何だよ？」

「来てからのお楽しみだ。明日の朝出発するが…いいか？」

「わかった。行くにしても、月沙達に黙って行ったらまた迷惑かけちまうからな」

「尾形の件か」

「ああ」

話によると、尾形とかいう奴の策略で危うく闇に葬られかけて、仕方なく連絡手段のない冥界にワープしたらしい。尾形はそれを殺害したと思い込んで、それをネタに月沙を精神的に追い詰めた。その後、月沙は尾形を倒して紅刃も無事に戻ってきたから解決になったと聞いている。

「決まりだな。今日は紅刃の部屋に泊めさせてくれ」

「わかった」

《天空の聖域》に何があるかは知らないが、紅刃が調子を戻してくれればそれでいい。

次に戦う時は、もっと面白いデュエルにしてくれよ。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第４４話　迷っていては戦はできない（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「紅刃の奴、どうりで調子悪いと思ったら…」

璃音「ちゃんと気づいてあげられなかった私達にも非があるわね」

勇香「あいつには、何か悪い事しちまったな…」

フィレス『グルルル…』

ロコナ『クレハもそうだけど、アキトも強いね！』

勇香「まあ、紅刃の調子が悪いとはいっても圧倒してたからな」

璃音「それじゃ、カード考察に入りましょうか。今回紹介するのは、秋斗のパートナーのルリアのカード、《マジシャンズ・ヴァルキリア》よ」

《マジシャンズ・ヴァルキリア》
効果モンスター
星４／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１８００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は表側表示で存在する他の魔法使い族モンスターを攻撃対象に選択する事はできない。

璃音「他の魔法使い族への攻撃を防ぐ効果を持っているわ」

勇香「2体並べば攻撃は一切できなくなる。複数体展開してくると厄介だな」

ロコナ『秋斗は2枚以上入れてるの？』

勇香「精霊のカードだから1枚しか入ってねえよ。ただ、似た効果を持つ《ミラクル・フリッパー》を使えば同じ事ができるぞ」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『次は《天空の聖域》でのお話だよ！』

勇香「次回も見てくれよな！」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

今回秋斗が使用した《祝福の風　リインフォース》《夜天の魔導書》《魔導竜　レイヴェルト》は紅さんが投稿してくださったオリカです。紅さん、ありがとうございました。

次回からは《天空の聖域》での話になります。また長くなりそうですが、大切な部分ですので…。

では、また次回！

第４５話　いくら悩んでも答えが出ないなら相談しろ（前書き）

今回は《天空の聖域》での話です。デュエルはなしです。

それではどうぞ！

第４５話　いくら悩んでも答えが出ないなら相談しろ

ＳＩＤＥ／紅刃

クヴァシルと再会した翌朝、俺達は未来組＋α全員を集めて事情を説明した。

「そうか、《天空の聖域》に…。気をつけてよ？」

「了解」

心配する俊也に、俺は軽い返事を返した。

「紅刃、その…」

月沙が俺に話し掛けてきたけど、口ごもってしまう。まあ、何考えてるかはわかるけどな。

「心配すんなって。尾形の件みたいな事にはならないし、死にやしないから問題ねえよ」

今思えば、月沙には結構迷惑かけちまったな。泣かせたりもしちまったし…。それを考えるとこの場を離れるのは少し抵抗がある。

「…私も行く」

「え？」

「私も連れてって！」

月沙のいきなりの頼みに全員が目を丸くする。

「お前何言って…」

「何ていうか…紅刃が遠くに行っちゃうような気がして…」

やっぱり尾形のあれか。軽いトラウマじみたもんになってるみたいだな。

「クヴァシル、どうする？」

「まあ、いいだろう」

「本当！？」

「ニュートラルの襲撃が入る可能性もある。戦力は必要だ」

「ありがとう！」

そこまでは考えてなかったな。まあ、俺としても月沙が傍にいてくれるのは嬉しいけど。

「この際だ。後2人までなら連れていける」

「なら私が行ってもいい？」

「俺も行こう」

立候補したのはルーナと秋斗だ。

「少しでも力になりたいのよ」

「精霊界には前から興味があった。丁度いい機会だ」

「決まりだな」

「出席については私が何とかしておこう」

ディヴァインは俺の心配事の1つを解決してくれるらしい。単位がどうのこうのって話になるのはごめんだ。

「ディヴァイン、悪いな」

「そう思うなら早く立ち直ってこい」

「簡単にできれば苦労しねえよ…」

「こっちは私達がいるから心配すんな！」

「あまり遅くなるなよ」

「まあ、用件は早く済ませてきなさいよ」

勇香、将人、璃音もそれぞれ言葉をかけてくれた。俺達がアカデミアにいない間に何かあっても、こいつらがいるなら大丈夫だろ。

「では、月沙、ルーナ、秋斗は準備を済ませてこい。全員集まり次第出発する」

というわけで《天空の聖域》に到着した。あれから準備を済ませた俺達は、クヴァシルの魔法陣で精霊界に飛んだ。

「ここが《天空の聖域》だ」

「…でかいな」

俺の第一印象がこれだ。

カードのイラストよりも断然でかくて広い。それこそ町1つ分くらいだ。天使族のモンスターもあちこちにいて、聖域っていうよりは城下街みたいな感じだ。

「カードのイラストとずいぶん違うようだが？」

「あんな面積で大勢のモンスターの生活など支えられまい。先に宿に案内する」

俺達はクヴァシルを先頭に、聖域の中に入っていった。

宿に荷物を置いた後、俺達はクヴァシルに連れられて一際でかい

神殿に行った。精霊は全員カードから出ている。

入口近くまで行くと、前にはモンスターが2人立っていた。

「おお、クヴァシル殿！」

「マーキュリー、マーズ、例の人物を連れてきた」

マーキュリーと呼ばれたそいつは、全身が青くて翼が生えてて、手には本を持っていた。

マーズは全身が赤く、ハンマーみたいな杖を持っている。あ、こいつも翼あるからな。

「真川紅刃とは、この中の誰だ？」

「あ、俺だけど…」

マーズの質問に俺が直接答える。

「こんな子供が継承者とは思えんが…」

「あの…俺高校生なんだけど…」

「とにかく、案内しましょう。こちらです」

マーキュリーの先導で、俺達は神殿の奥へ進んだ。

「…マーキュリー、でしたっけ」

「何でしょうか？」

「育毛剤買わないの？」

『……』

ナージャの一言で、一瞬全員がフリーズした。

「…はい？」

「いや、つるっパゲの頭に短い被り物をしてるのが哀れに見えてね～」

「余計なお世話です。後、この頭は元からです」

まあ、マーキュリーの頭の様子はナージャが行った通りなわけで、誰も否定できない。

「まあ、頑張ってね～まっパゲさん」

「マーキュリーです！誰がまっパゲですか！？」

「まっパゲさん…ブフッ」

「マーズ、何笑ってるんですか？同じ代行者でも容赦しませんよ？」

「いや、あんた攻撃力０でしょ」

「ナージャ、失礼な事を言うんじゃないわよ！いい？あれはスキンヘッドって言うの」

「むしろ端から毛根が死滅してるんだろ」

「丸聞こえですから！虐めですか！？」

ルーナ、秋斗、お前らナージャに毒されてきてんじゃねえか？

「あだっ！？」

「痛っ！？」

「ぐっ！？」

「はいはい、みんなしてそんな事言わないの」

3人を軽く叩いて叱る月沙。まあ、マーキュリーの気持ちがよくわかるんだろ。

「失礼します」

「入れ」

あ、もう奥まで来たのか。俺達は扉の向こうへと進んだ。

何か王室を狭くして机を置いたような感じの部屋だな。中央にはモンスターが椅子に腰掛けている。

「ヒュペリオン、連れてきたぞ」

「クヴァシルか。すまないな。初めて会う者達よ、私は《マスター・

ヒュペリオン≫だ」

ヒュペリオンは俺達を見て、当然のように自己紹介をした。

「久しぶりだな、ヒュペリオン」

「リーシェ。元気にやっているか？」

「当然だ」

リーシェとヒュペリオンは知り合いらしい。リーシェの故郷がここなんだし、当然か。

「そこの黒髪の少年。お主が真川紅刃だな？」

「ああ、そうだけど…」

しばらく俺をじっと見つめてくる。いきなり何だ？

「……マーキュリー、マーズ、もう下がってもよい」

「「はっ！」」

「ついて来るがいい」

マーキュリーとマーズが退室した後、ヒュペリオンは椅子から立ち上がった。

俺達が案内されたのは、神殿のさらに奥の部屋だった。ヒュペリオンが扉を開けて、そのまま全員入った。

部屋はそこまで広くない。その中央には、黄色の宝箱があった。ヒュペリオンはそれを開き、宝箱の中身を取り出した。

「何だそれは？」

「光の龍の石版だ」

秋斗が宝箱の中に入ってたそれを見て質問すると、すぐに答えが返ってきた。そこら辺の本より少し大きいくらいのサイズで、何かの模様が刻まれている。

「この神殿に古より祀(まつ)られている物だ。言い伝えと共にな」

「言い伝え…ですか？」

ルリアが言葉を繰り返し、ヒュペリオンがそれに頷く。

「今から５０００年前…人間界でシグナーの龍とダークシグナーが戦っていた時の事だ」

「５０００年前？」

ダークシグナーと同時期の言い伝え…？

「地縛神の影響かどうかはわからないが、精霊界に巨大な闇の魔物

が現れた。魔物は所構わずに暴れ回り、精霊界は破壊し尽くされた。しかし、闇の魔物を倒すべく、龍の群れが立ち上がった」

「龍？」

「炎、水、風、地、闇、光、そして虚無と魔導。それぞれの力を宿した8体の龍は、闇の魔物から精霊界を護るために戦った。だが、闇の魔物の強大な力の前に、敗れ去る寸前まで追い詰められた」

ヒュペリオン以外に話す奴は誰もいない。みんな黙って話を聞いている。

「しかし、8体の龍は己の中に眠る力を解放し姿を変え、再び闇の魔物に立ち向かっていった。この聖域の言い伝えでは光の龍の力しか克明されてないが…光の龍は数多の精霊の力を受け継ぎ、無限の進化を遂げながら戦ったそうだ」

無限の進化…？

「かくして、8体の龍は闇の魔物を打ち破り、精霊界には平和が戻った。しかし、龍達は厳しい戦いの後で酷く消耗していて、真の力が体から抜け出してしまった。己の体に取り込む力が残されていなかった龍達は、真の力を石版に変えて各地に封印し、自らも眠りについたのだ」

「その石版というのが…その8体の龍のどれかの力だという事か？」

「当たりだ。この神殿に祀られている石版は、光の龍の力だ」

ロディスの疑問に答えたのは、ヒュペリオンじゃなくてリーシェ

だった。

「それで、その石版と紅刃様にはどんな関係があるんですか？」

スイレンの疑問も最もだ。この石版が俺に関係ある物とは思えない。

「残念ながら、今話せる事はここまでだ」

「は？」

「クヴァシルから話は聞いておる。今のお主では、この先の話は聞くだけ無駄だろう」

クヴァシル、いつの間にそんな連絡をしたんだ？

「ヒュペリオン、この者達はしばらくこの聖域に泊める。紅刃にはじっくり考える時間が必要だ」

「他の者は？」

「単なる護衛みたいなものだ。もう宿は確保した」

「そうか…。何かあったら私の所に来るがいい」

ヒュペリオンはそう言って、石版を元のようにしまった。

ＳＩＤＥ／クヴァシル

私は先に紅刃達を帰して、ヒュペリオンと一緒に神殿に残った。
今はヒュペリオンの部屋にいる。

「…クヴァシル、今話さなくてもよかったのでは？もし紅刃が石版の力を執拗に求めたらどうする気だ？」

ヒュペリオンが当然とも思える質問をぶつけてくる。

「紅刃に限って、そうはならないだろう。もしなったとしても、周りの人間や精霊が正しい道へ導いてくれる」

「信頼しているのだな」

「そうでなければ、石版を見せるつもりはない。力の誘惑に負けない強い意思がなければ、石版の力を使いこなす事はできないだろう。それを試すためだ」

紅刃は光の龍を従えている可能性がある。となると、光の龍の石版は紅刃が所有するべきだ。しかし、今の紅刃は迷いのせいで思うように力を発揮できないでいる。これは誤算だった。

石版の模様から考えても、紅刃が継承者で間違いないと思う。だが、今の紅刃には石版を託す事ができない。この《天空の聖域》で迷いを断ち切る事ができればいいのだが…。

ＳＩＤＥ／紅刃

俺はあれから夜中まで、ベッドに寝っ転がっていろいろ考えていた。飯はちゃんと食った。

最初は、ニュートラルを倒すために過去に行った。セブンスターズとかが出てきても、それなりに戦えた。

でも、月沙達はもっと強くなってって…。最近知り合ったルーナや秋斗も強い。俺よりもずっと…。

ゴドウィンと戦った時に至っては、借りた力に頼ってばかりだった。それに、月沙はゴドウィンの主力モンスターを全部倒した。俺は赤き竜の力で地縛神を倒しただけ。

みんなに迷惑なんてかけてられねえ。もっと強く、何でも自分の力で打ち倒せるくらいに…。

…駄目だ！貪欲になるな。敵に付け入られたらどうすんだ。

結局、俺はどうすればいいんだ？何がしたいんだ？…わからない。答えなんて、見つからねえよ…。

次の日、俺は気晴らしに辺りをぶらつく事にした。しばらくは自由行動にするらしい。ロディスとリーシェにはついて来ないように言っといた。リーシェは久々の故郷だからゆっくりさせてやりたいし、俺も今は1人でいたい。

適当に進んでくと、市場みたいな通りを見つけた。俺は何となくそこを通る事にした。

にしても、結構賑やかだな。イラストのイメージとは違うな。一昔前の人間界と対して変わらないんじゃないか？

「あの、もしもし？」

不意に、後ろから声を掛けられた。振り向くと、金髪の女性の天使がいた。

「もしかして、真川紅刃さんですか？」

「はい、そうですけど…」

「やっぱり…。私はヴィーナスと言います。以後、お見知置きを」

「は、はあ…」

ヴィーナスに、やけに丁寧に自己紹介された。てか、何で俺の事知ってんだ？

「マーキュリーとマーズからあなたがこちらに来ている事を聞きましたので…。少し、お時間をいただけますか？」

俺は半分成り行きに任せてヴィーナスについていく事にした。歩いて１０分くらい経っている。

さっき聞いた話だと、俺に会いたいって奴らがいるから俺を探してたらしい。誰だろうと、正直今は会いたくないけどしゃあないか…。

「あ、いました」

思考を現実に引き戻されて前を見ると、ヴィーナスが何かの広場にいる連中を指差していた。３人いる。

「アース、ジュピター、見つけましたよ！」

ヴィーナスが呼び掛けると、３人の内白い髪と緑の翼を持つ天使が駆け寄ってきた。手には先端に緑の宝玉がついた杖を持っている。

「ヴィーナスさん、ありがとうございます！あの…真川紅刃さんですよね？」

「ああ、そうだけど…」

「私、アースって言います！お会いできて光栄です！」

「へ…？」

アースがやたら元気に話し掛けてくるもんだから、俺は思わず返答に困ってしまった。

「そいつは、お前さんに会うのを楽しみにしとったんだよ」

次に口を開いたのは、赤っぽい褐色の肌の天使。何かおっさんみたいだ。

「儂も自己紹介しとくか。儂はジュピターというもんだ。よろしくな。サターンも自己紹介しとけ！」

ジュピターは紫の翼を持つ青年の天使を前に押し出した。面倒見のいい性格みたいだ。

「俺はサターンだ。……」

なぜかじっと俺を睨んでくる。俺って何かしたか？

「…フン、気に入らない目をしているな」

気に入らないって…。原因がわかってるだけに言い返せない。

「まあ、そう言うな！」

「ところで、何で俺の事を知ってんだ？」

「実は、この《天空の聖域》には人間界を覗くテレビみたいな物があるんです」

人間界を覗くって…。何か冥界と似たような感じだな。

「それで、紅刃さんの活躍を見てかっこいいなって思って…。私にとって、紅刃さんは憧れの人なんです！」

アースに正面からはっきり言われた。え？憧れ？俺はそんな大それた奴じゃ…。何ていうか、対処に困る。

「ただ、最近悩んでるそうですね…？」

「…ああ…。やっぱわかるか？」

「それについて、丁度お前さんに会ってちょっくら話がしたかっただが、いいか？」

「話？別に構わないけど…」

俺は今度はジュピターについていく事になった。

「そうか…。苦労しとるのぉ」

広場にある幅が広い階段に並んで腰掛けている。ジュピターは俺の悩みについて詳しく聞きたかったらしく、俺はそれに付き合った。

さっき聞いた話だと、ここはトレーニングによく使われる場所らしい。３人でトレーニングしてたところだったんだとか。

「いつの間にか、あいつらと肩を並べて戦ってる気がしなくなってさ。ただ護られるだけの存在になるのが怖いんだろうな…」

「…アースがなぜお前さんに憧れたかわかるか？」

「え？」

「あれを見てみろ」

俺は言われるがままに前を向いた。

「はあああああ！」

「どうした、その程度か？」

「まだです！」

サターンが空中で手から光の弾を連続で放ち、アースがそれを斬り伏せる。『斬り伏せる』っていうのは、アースの杖から緑の光の刀身が伸びて、剣として使ってるからだ。

「真っ直ぐな目をしとるだろ？」

確かに、アースの目はひたすら真っ直ぐにサターンを見据えている。

「慣れもしとらんのに剣を使うようになってのぉ。お前さんを目標に日々精進しとるんじゃ」

「俺を目標に？」

「この聖域にいる間、アースと一緒に行動してもらえんかのぉ？」

「は？」

ジュピターの突然の申請に、俺は間抜けな声を上げた。

「今のお前さんには何かが欠けとる。お前さんに憧れるアースと一緒にいれば、その欠けた何かを取り戻せるかもしれん。それに、なぜお前さんに憧れたかもわかるだろう」

欠けた何か、か…。今の俺にはなくて、アースにあるものか？何が欠けてるんだ？今の俺には何が足りないんだ？

「…わかった。それで何かがわかる可能性があるなら」

「そうか。がっはっは！そりゃよかったわい！」

ジュピターは俺の答えを聞くと、豪快に笑い出した。

「というわけで、しばらく一緒に行動する事になった」

「よろしくお願いします！」

俺は一応アースの事を伝えるために、晩飯の時にみんなに説明し

た。

「へ～、あんたに憧れる精霊がいるなんてね～」

「どういう意味だ」

ナージャは相変わらず口が悪い。どうにかならねえのかこれ？

「……」

「な、何でしょうか？」

何か月沙がアースをじっと睨んでんだけど、どうしたんだ？何か気に入らない事でもあるのか？

「（私もついてきたいな…。でも、これは紅刃が答えを見つけるための策だし、私がいたらまずいかな？さっき秋斗には『お前が強くなりすぎたのを見て自身なくしたって事もあるんじゃないか』って言われたし、私だと今は悪影響しか出ないよね。ここは我慢よ。…ハァ…）」

しばらく睨んだ後、溜息をついて顔を反らした。本当にどうした？

「あの…私、何かしましたか？」

「え！？あ、ううん、何もないよ。睨んだりしてごめんね」

「はあ…」

「（姫様、今は耐えましょう）」

「（スイレン、ありがとう…）」

「「？」」

それから数日間、俺は基本的にアースと一緒に行動した。俺がひたすら考えて、気晴らしに外を歩く時はアースにいろいろ案内してもらった。

たまたま出くわしたジュピターの話だと、この聖域には聖域を守護する役職の中でも取り分け強い『代行者』という部隊があって、アースはその中でも新米らしい。でも、少しずつ力をつけてきてんだと。

他にもいろんな奴とばったり会う事も多い。リアクションとしては大体こんな感じだ。

「また会ったか。気に入らん奴だ」

これはサターン。今の俺が気に入らないらしく、あまり仲良くはしてくれない。

「あ、紅刃、アース！」

「月沙？」

「月沙さん、こんにちは！」

「ああ、うん、こんにちは。……」

「？」

これは月沙との会話だ。軽く睨んできたり少し落ち込んだり、その日によって反応が変わる。

「浮気は駄目ですよ？」

「は？」

これはスイレン。全くもって意味不明だ。なぜ浮気？そんな言葉、どっから出てくるんだ？

リーシェを見つけた時は、なるべくそっとしといてやってる。昔の知り合いと楽しそうに話してんだ。今の俺は悩みの対象にしかならないし、話に混ざるわけにはいかないだろ。

でも、俺の悩みは未だ解決しないままだ。いくら考えても答えが出ない。俺はどうすればいいんだ…？

ＳＩＤＥ／アース

憧れの紅刃さんと一緒に行動するようになってから、数日が経った。

紅刃さんは前にテレビで見た時は真っ直ぐに生きてたけど、今の紅刃さんは思い詰めている。ぼんやり考えてて私の話を聞き流してしまう事もある。

迷いのせいか、普段から悲しい目をしている。今までの印象とは全然違う。

朝食を取って少し時間が経った後、私は鍛練でもしようかと思って宿屋の裏庭に向かった。

「…！」

誰かいる。私以外の人は見かけないのに…。

「…ふぅ…」

その人は、一息つくとその場に座り込んでしまった。紅刃さんだ。

「紅刃さん？」

私は紅刃さんの名前を呼んで近寄った。

「ん？アースか…。どうした？」

「鍛練しようと思いまして…」

「そうか。俺もだ」

「紅刃さんもですか？」

「しばらくやってなかったからな。何か見つかるかと思ったけど…やっぱ駄目だ」

まただ。また悲しい目をして話をする。

「他人の力を借りずに何でも倒せるくらいに強くならなきゃいけないのに…上手く行かなくてさ…」

「……」

「これ以上頼ってられねえんだ。俺1人だけでも戦える力を…」

「いませんよ」

「え？」

「たった1人で本当に強い人なんて、いませんよ」

自分の声が、嫌にはっきり響いた。

「私は、サターンさん達に修行に付き合ってもらって、やっと強くなってきてる事を実感できるんです。剣術も、紅刃さんに憧れてやっと始めようと思ったんです。私じゃなくても、他の人だって同じはずです」

頭の中で、自然に言葉が組み立てられる。それが次々と口から飛び出す。

「カードだって同じですよ。どんなカードも、単体だけじゃ駄目。他のカードの助けを借りてこそ、１００％の力を発揮できるんです」

「…！」

「…紅刃さん、私が何であなたに憧れているか、わかりますか？」

「…いや…」

多分、この答えが、私が紅刃さんに憧れる理由こそが、今の紅刃さんに欠けているもの。一緒に過ごして、紅刃さんが悩んでいるのを見続けて私なりに考えた、紅刃さんが探している答え。

「…私は…！」

ドォン！

「！？」

「何だ！？」

私が言いかけた瞬間、爆音が聞こえた。

ドドド…ズゥン…バゴォ…

遠くのあちこちからも音が聞こえる。何の音？

『アース、紅刃、聞こえるか？』

「！」

突然、ヒュペリオン様からテレパシーで連絡が入った。

「ヒュペリオン様？」

「これって…テレパシーか？」

『緊急事態だ』

ＳＩＤＥ／ルーナ

「ありがとうございました」

私はパン屋で菓子パンをいくつか買って外に出た。

「ルーナ！」

大きな袋を両手で抱えて宿屋に持ち込もう歩き始めると、偶然月沙に出会った。

「月沙？」

「何買ったの？」

「菓子パンよ。ストックが尽きたから」

「そういえば、ルーナって菓子パン好きだよね？」

「そりゃあもう！毎日食べても飽きないわよ！」

大好物だからよく買い溜めしてるのよね。帰ったらメロンパン食べよ…

ドパァン！

「「きゃっ！？」」

突然、横から何かが飛んできて、私達は爆発に吹っ飛ばされて尻

餅をついた。

「つぅ…！危ないじゃないの！」

誰よこんな事した奴は！？そう思って振り向いたら、

「ギシシ…」

どっかで見た事ある奴がいた。

「何あれ？」

「ん…？あれって確か…あ！」

「知ってるの？」

「知ってるも何も、初めて紅刃と会った時に襲ってきた奴よ！」

「え！？」

昆虫が2足歩行になったような黒いモンスターが3体。間違いなくあの時襲ってきたモンスターと同じだ。

「…あ、思い出した！あれは『インヴェルズ』だよ！」

「『インヴェルズ』？」

「闇属性・悪魔族で、アドバンス召喚で強力な効果を発揮するカテゴリだよ。そして、カブトムシの角みたいなのが一族のシンボルマーク！」

「紅刃が言ってた角ってそういう事!?」

「で、あのモンスターは…スズムシっぽいから《インヴェルズを呼ぶ者》だったはず!」

「名前が役割なんだ…」

まあ、正体がわかったのはいいとして、何であいつらがここに?闇属性と悪魔族ならなおさらここにいる意味がわからない。

「キシャアア!」

《インヴェルズを呼ぶ者》…長いからスズムシもどきでいいや。スズムシもどきの内の1体が黒っぽい光弾を投げつけてきた。さっきのも多分それね。私達が難なくそれを避けると爆音が鳴る。

「何よ今の?シャドー○ール?」

「とにかく、あいつらを倒すよ!」

「ええ!…あれ?」

私は鞭を創って戦闘体勢に入り、月沙も銃型のデュエルディスクを構えたところで、私はある事に気がついた。

「どうしたの?」

「私の菓子パンはどこ?」

「え？最初の攻撃で手放して…あ」

「？何よ…あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

私の菓子パンがたくさん入った袋が地面に転がってた…のはいいけど！

「私の菓子パンがぁぁぁぁぁ！？」

見るも無惨にボロボロになってるぅぅぅぅ！？

思わず駆け寄って生存確認。…ああ、駄目だ！あんパンもクリームパンもチョココロネもメロンパンも全部ぐちゃぐちゃに吹き飛んでる！食べれる箇所なんて一欠片もない！

「今の攻撃が丁度当たって、全部吹き飛んじゃったんだ…」

そんな、そんな…！大好物なのに、特にイチゴメロンパンは食べた事ないから楽しみにしてたのに！

「シャアア…」

「ギシシ…」

「集まってきた！？」

そこら中からインヴェルズのモンスターが沸いて出てくる。姿形は様々。私達は大量のモンスターに囲まれる形になってる。

「行くよ、ルーナ！…ルーナ？」

「やってくれたわね…よくも…よくも私の菓子パンをぉぉぉぉぉぉ！！！」

私はゆっくり立ち上がってから思いっ切り叫び、鞭を伸ばして敵をまとめて薙ぎ払った。攻撃した連中はデュエルでモンスターが破壊される感じで次々消えていった。

「あの…ルーナ？」

「月沙、こいつら1匹残らず狩るわよ！」

月沙が少し顔を青くしてるけど気にしたら負けよ。食べ物の恨みを思い知るがいいわ！

「菓子パン返せぇぇぇぇぇぇぇ！！」

さあ、悪魔狩りじゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！

ＳＩＤＥ／リーシェ

「……」

「あの…リーシェさん？どうなされました？」

私は今非常に頭に来ている。

久々の故郷だからここ数日気分がいい。今日はヴィーナスと雑談をしていた。途中からスイレンも混ざって、思い出話に花を咲かせていた。

なのに、ルーナと出会った時に襲ってきた連中がうじゃうじゃ現れて聖域を破壊し始めたのだ。

そいつらはすぐに私の雷で塵にした。だが、また大勢が沸いて出てくる。

「紅刃の件もあるとはいえ里帰りだというのに、よくも私の故郷を荒らしてくれたな…」

「リーシェ様、まずは落ち着いて…」

「落ち着けるかぁぁぁぁぁぁぁ！！」

力任せに杖から電撃を全方位に放ち、私達を囲む大半の敵を破壊した。

しかし、あちこちで戦乱が起きてるようだ。悲鳴と破壊音がそこかしこから聞こえてくる。

「ヴィーナス！スイレン！」

「「は、はい！」」

「裁き…いや、狩りの時間だ！」

「「狩り！？」」

「1匹たりとも生きて帰すな！行くぞ！」

「「は、はい！」」

私はスイレンとヴィーナスを引き連れて敵の殲滅にあたった。

「リーシェ様、何か怖いです…」

「気持ちはわからなくはないですが…」

さあ、愚かな悪魔共よ！この聖域を襲撃した事を後悔させてくれるわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！

ＳＩＤＥ／紅刃

「黒い昆虫型の悪魔の襲撃？」

『うむ。集団で各地を攻撃している。君達も討伐にあたってくれ』

「わかった！」

「了解です！」

黒い昆虫型の悪魔って、ルーナと初めて会った時に襲ってきた奴じゃねえか。何でここに？

「行きましょう！」

「ああ！」

細かい事は抜きだ。今は奴らを倒す！

俺達は宿屋から出て、適当の方向に走った。すると、少し開けた交差点で昆虫もどきが集団で破壊活動をしてるのを見つけた。

「あれですね」

「ああ。行くぞ！」

俺はデュエルディスクを抜いていつもの長めの剣に変え、アースは杖の宝玉から緑の光の刀身を出して構えて空中に飛び立ち、敵陣に突っ込んでいった。

とにかく、敵なら全員ぶった斬る！

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第４５話　いくら悩んでも答えが出ないなら相談しろ（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「今回は紹介するカードがないからゲストとして俊也と将人を呼んだわ」

フィレス『グルルルッ』

勇香「要するに《天空の聖域》に行かなかった奴が集まったってわけか」

将人「１つ不満があるんだが…」

璃音「何かしら？」

将人「第２期に入ってから俺の見せ場が全然ないんだが？」

俊也「僕もそうだよ！いつになったら僕らがデュエルする話になるの！？」

璃音「俊也はある程度考えてるそうよ」

俊也「本当！？」

ロコナ『マサトは？』

璃音「今のところネタがないわね」

将人「何だと!?」

璃音「どの辺りで誰を相手にするかがさっぱり決まってないのよ。必死に考えてるところだから待ってなさい」

将人「くっ…仕方ないか…」

勇香「私やルーナ、秋斗はどうすんだ?まだ1回しかやってないぞ?」

璃音「勇香は案外早いわよ。切り札がまだ出てないから最優先したいらしいし」

将人「なぜ俺や俊也が最優先じゃないんだ…」

ロコナ『私も出番ある?』

勇香「ないとおかしいだろ」

ロコナ『やったぁ!』

璃音「後の2人はまだ未定ね」

俊也「レギュラーが8人もいると出番の配分が難しいね」

将人「そこは作者次第だな」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――――

いかがでしたか？

代行者のメンバーを全員まとめて出しました。今《天空の聖域》っていったらこのモンスター達も有名ですよね？

では、また次回！

第４６話　他人でなければ気づかない事もある（前書き）

第４６話です。今回はアースが活躍します。そして遂に紅刃が…。

それではどうぞ！

第４６話　他人でなければ気づかない事もある

ＳＩＤＥ／???

ククク…この聖域に伝説の光の龍の石版があるから取ってこいと言われてきてみれば、なかなか壊しがいがある場所じゃねえか。

だが、イレギュラーの連絡まで来ていたのは予想外だったな。おかげで少し様子見する必要ができちまった。わざわざ作業を遅らせやがって…。

紅刃とかいう野郎はかなりぐらついてるようだな。穴があれば充分だ。今の紅刃なら簡単に殺せるだろ。そこからさらに混乱が広がり、破滅する。

せいぜい足掻いてみせるんだな…！

ＳＩＤＥ／秋斗

「《デス・メテオ》！」

巨大な火球を飛ばして5体くらいまとめて焼き払った。

「これでどお？」

「はぁっ！」

「ふっ！」

ナージャが頭の蛇の口から毒針を吐いて敵を弱らせ、ルリアは魔力弾で1体ずつ確実に潰していき、ロディスは刀で次々と敵を斬っていく。

この《天空の聖域》に謎の集団が侵攻してきてから、俺はルリアやロディス、ナージャと一緒に敵の討伐をしている。代行者や他の部隊も各地で鎮圧しているらしい。

「また出てきた…！」

「しつこいわね！」

「ちっ、これじゃ切りがねえな」

いくら倒してもうじゃうじゃ出てきやがる。うっとうしい…！

ズドォォォン！

「「「「!?」」」」

何かの爆音と共に敵の群れが吹っ飛んだ。

「「悪魔狩りじゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」」

そう叫んで飛び出したのは、ブチキレたルーナとリーシェだった。

「ルーナ?」

「リーシェさん!?」

「菓子パンの仇だぁぁぁぁぁぁぁ!!」

ルーナは鞭を木刀のような形状に固定して敵を薙ぎ払っていく。

「灰燼に帰せぇ!!」

リーシェは電撃を連発して敵をまとめて塵にしやがった。

「「おおおおおおおおおお!!」」

修羅と化した2人はそのまま敵を倒しながらどこかに行っちまった。俺達はというと、いきなりの出来事に呆然としている。

「どうしたんだ、あいつら…?」

「あ〜…、行っちゃいましたね…」

ルーナとリーシェが来た方向から、月沙とスイレン、ヴィーナスがやってきた。さっきまであの2人と一緒に行動してたみたいだ。

「月沙！スイレン！」

「ヴィーナス…一体何があったのだ？」

「久々の里帰りを満喫していたのを邪魔されて怒りました」

「まあ、無理はないが…」

「ルーナはどうした？菓子パンがどうとか言ってたが…」

「菓子パンを大量に買ったのに全部おじゃんにされて怒っちゃったんだよね…」

「は？」

「やっぱりか…。マスターは菓子パンが大好きだからね～…」

それであんな戦闘力を発揮してるのか。女の怒りは恐ろしいもんだな。

「まあ、今のでこの辺りは制圧できただろ。手分けして他の群れも潰すぞ」

俺はこの場を取り仕切りながら、杖を持つ手に少し力を込めた。

ＳＩＤＥ／紅刃

「おおおおおおおお！」

「はあああああああああ！」

敵陣を駆け、剣を縦横無尽に振り回し、敵を次々と斬り捨てる。

俺とアースはうじゃうじゃ沸いてくる悪魔達を相手に立ち回っていた。

だが、数が多い。斬った側から沸いてきやがる。

「らぁっ！」

まとめて消すために、俺は白い電撃を剣に込めてぶっ放した。剣を振るって刀身から電撃を叩きつけるように放つと、一気に１０体もの昆虫もどきを飲み込んだ。

それでも、失った分を補うかのように敵が集まってくる。

「これじゃ切りがない！」

しゃあねえ、あれで行くか。

「アース、下がってろ！」

「！？…はい！」

アースに下がるように指示を出してから、俺は交差点の中央に立って剣に電気を込めた。その切っ先を地面に向ける。

「おおおっ！」

片膝をつきながら剣を地面に突き立て、周囲の地面から白い電撃を青空に向けて放出した。全方位＋広範囲の電撃で、敵が全員揃って破壊されていく。

「凄い…あれだけの敵を1発で…」

「ギシシ…」

今度はスズムシっぽいのが3体出てきた。後は出てこない。

「あれでラストか？」

「早く片付けましょう！」

俺達は剣を構え直して斬り掛かろうとした。

「ギシャアアアア！」

「「！？」」

何だあれ？突然、スズムシもどき3体が紫色に光り出した。そして、姿がめきめき変わっていく。

「グォォォォ！」

光が収まると、スズムシもどきは全く違う姿に変わっていた。長い尻尾が生えた蛾みたいな奴と、右手がキャノン砲になっているクワガタみたいな奴、前に戦った事がある蟷螂もどきの3体だ。

「変化しやがった…！」

「まずいかもしれませんね…」

「「ガァァアアア！」」

蟷螂もどきが俺に、蛾もどきがアースにそれぞれ吠えながら襲い掛かる。俺達は鎌と尻尾を剣で受け止めた。

「ギシャアアア！」

蟷螂もどきの連続攻撃を剣で防ぎ続ける。攻撃が激しくて反撃の隙がない。こいつ、前より強くなってるのか？それとも、俺の動きが鈍ってるのか？

1度わざと吹っ飛ばされてから、ロディスのアビリティを発動して一気に斬り掛かった。上着が前を開けたコートに変わる。

「ギギッ…！」

「すっ込んでろ！」

鎌を交差させて防いだ蟷螂を力任せに押しやり、思い切り吹っ飛ばした。

ドォンッ！

「！」

何か後ろから音が聞こえ、俺は嫌な予感がして右に跳んだ。

ズドォン！

「ぐあっ！」

直後、俺がさっきいた場所が爆発した。俺は躱し切る事ができず、吹っ飛ばされて地面に倒れた。

クワガタもどきがキャノン砲をぶっ放したのか。右手のキャノン砲から煙が出ているのを確認して立ち上がる。左腕と左足がやられたけど、ロディスのアビリティを発動してるおかげで軽傷で済んだ。

他の2体で接近戦に持ち込み、あのクワガタもどきが後方から援護してるらしい。無駄にチームワークがいい連中だ。

「うぁっ！」

と、目の前にアースが飛ばされて地面に叩きつけられた。

「アース！？ぐぁっ！？」

アースに声を掛けたら、俺も何かに吹っ飛ばされて建物の壁にぶつかった。

ズドォッ！

「がはっ…！」

立ち上がろうとしたら、腹に何かがぶち込まれた。蛾もどきの尻尾だ。さっき俺を攻撃したのもそれだろ。尻尾を武器にしてるみたいだ。

「ぐっ…！ハァ、ハ…」

苦しくて、荒い息をつく。そして、剣を杖代わりにして立とうとする。こいつらを倒すんだ。休んでなんかいられねえだろ…！

「ギシャアアアア！」

「！？」

立ち上がる前に蛾もどきが尻尾を縦に振り下ろし、蟷螂もどきが両手の鎌を突き出してきた。駄目だ、避け切れねえ…！

ガキィッドッ

「ぐっ…！」

俺には攻撃は当たらなかった。ただ、目の前の光景を見て時間が止まった気がした。

俺の前にはアースがいた。剣代わりの杖で尻尾を受け止めている。

そして、一対の鎌に腹を貫かれていた。

「アー…ス…？」

「ギギッ！」

「うがっ…！」

蛾もどきが尻尾を引っ込めて、蟷螂もどきが根本まで突き刺さった鎌を抜いて後退した後、アースは剣の切っ先を地面に立てて支えにし、刺された箇所を左手で押さえた。服に血が滲んで滴る。

「怪我は…ないみたいですね…」

「お前…何で俺を…」

「決まってるじゃないですか。あなたを護るためですよ」

アースは当然だとでも言うように俺に笑い掛けて、敵に向き直って剣を両手で構えた。

「さっき、言いそびれましたよね。私があなたに憧れる理由」

蟷螂もどきが飛び掛かるのと同時に、光の刀身が輝きを増す。そして、両手と右足を後ろに下げて切っ先を空中の蟷螂もどきに向けた。

これはよく知っている。俺が一撃で決めるために使う『突き』の体勢だ。

「私は、今のようにただ敵を倒すために独りで力を求めるあなたに憧れたんじゃありません」

緑の翼が今にも飛び立とうとするかのように広がる。

「大切な何かのために戦う『護る力』を目指すあなたに憧れたんです！！」

「…！」

頭を思い切り殴られたような衝撃を感じた後、緑の閃光が蟷螂もどきを貫いた。

ＳＩＤＥ／アース

「ギギャ…」

地面を思い切り蹴り、蟷螂の悪魔を突き刺し貫いた。後ろで破壊音が聞こえたのを聞いて、倒したと確信した。そのまま重力に任せて着地する。

「つっ！」

お腹に激痛が走り、両膝をついてしまう。杖の刀身も消えてしまった。思ったよりも傷が深いみたい。赤い液体が少しずつ抜けていく。

まだだ…！私はこの聖域を、今は何より紅刃さんを護りたいんだ！頭の中で自分に喝を入れて、無理矢理立ち上がると、またお腹が痛んだ。それを何とか堪えて杖の刀身を生成する。

「ギシャアアア！」

クワガタの悪魔が右手のキャノン砲を私に向けてエネルギーを溜める。先に私から仕留める気だ。

すると、蛾の悪魔が私に殴り掛かってきた。私はそれを杖の宝玉から伸びる剣で受け止める。

ゴッ

「うぁっ！？」

蛾の悪魔は右から尻尾で私の脇腹を殴って吹き飛ばした。ただでさえ怪我をしているのにそこを攻撃されて、私は地面に転がってうずくまってしまった。そこにまた尻尾が振り下ろされ、今度は背中の傷口を叩かれる。

「がはっ！うぐあっ…ぐぅぅ…」

駄目だ。痛すぎて起き上がれない。杖の刀身もまた消えてしまい、もう戦える状態じゃなかった。

「ガァァアァ！」

巨大な黒い光弾が私に迫る。覚悟を決めて目を閉じた。

ごめんなさい…護り切れなくて…。

ドゴォオォオン！！

…衝撃が来ない。

確かに何かに当たって爆発した音は聞こえた。なのに、私は無事だ。遮る物もないのに、何で？

不思議に思って目を開けて顔を上げた。すると、すぐにわかった。

紅刃さんが、自分の剣を盾にして攻撃を防いでくれていた。

「紅…刃…さん…？」

剣を下ろすと、黒いコートがそよ風に揺れた。それを着た後ろ姿からは、この数日間では見えなかった何かを感じる。

「アース…ありがとな」

「え…？」

いきなりお礼を言われたから、私はきょとんとしてしまった。

「どうかしてたな、俺。難しく考えすぎてたんだ」

クワガタの悪魔がまたエネルギーを溜めて、蛾の悪魔が紅刃さんに襲い掛かる。

「おかげで吹っ切れた」

次の瞬間、紅刃さんは一瞬で蛾の悪魔をすれ違い様に真っ二つにし、クワガタの悪魔も同じように斬り裂いた。

斬られた2体は割れるような音と一緒に消滅した。あっという間の出来事だった。

素直に思った。『強い』って。

「アース、大丈夫か？」

紅刃さんはすぐに私に駆け寄って、私を抱き抱えた。もう悲しい目はしていない。

「大丈夫…じゃありませんね…。もう戦闘不能です…」

「無茶しやがって…。いや、俺のせいでもあるな。ごめんな」

「気にしないでください。私が勝手にやった事ですから」

「アース！」

「紅刃様！」

声のした方を見ると、ヴィーナスさんとスイレンさん、ナージャさんが走ってくるのが見えた。

「ヴィーナス、スイレン！？ナージャも！？」

「ご無事ですか！？」

「いや、アースがやばい」

「！アース様…！」

「手当てできるか？」

「私がやりましょう」

「あんたがついていながら…」

「う、悪い…」

ヴィーナスさんが私の治療をしてくれる事になった。紅刃さんはナージャさんに責められている。

そうだ、あれを渡さないと…！

「紅刃さん…これを…」

私が自分の手に向けて杖から光を放つと、デュエルモンスターズのカードの束が現れた。

「それって…」

「あなたの迷いが晴れたら渡すようにと、ヒュペリオン様から預かった物です」

「俺に…？」

「『迷いが晴れたら』って…あんたまさか…！」

「受け取ってくれますか？」

さっきまでの紅刃さんなら、『自分の力で戦う』と言って受け取らなかったと思う。でも、今の紅刃さんは違う。

「…わかった」

私が差し出したカードを受け取ってくれた。

「どんなカードですか？」

「…！これは…！」

紅刃さんは驚いている。なぜなら、そのカードは…。

「きっとあなたなら使いこなせると、ヒュペリオン様が言ってました」

「…ありがとな。絶対に使いこなしてみせる」

「そうと決まったら、早くそれを使ってデッキを作っちゃいなさいよ」

「ナージャ、今はそんな時間ねえだろ…」

「この襲撃の首謀者はニュートラルかもしれないのよ～」

「ニュートラル！？」

確か、紅刃さん達が戦っている敵の組織名だったような…？

「モンスターの消滅の仕方が、デュエルディスクのソリッドビジョンと全く同じなんです。血も出ませんし。以前勇香様達が話していた、サイコディスクを使う人間か本物のサイコデュエリストが侵入して、どこかから操っている可能性が高いです」

ニュートラルの話は大方聞いている。だとしたら、人間がここを襲ったって事…？

「目的は？」

「わかったら苦労しないわよ～。万が一の時のためにちゃっちゃとデッキを作っちゃいなさいな」

「その方がいいな。月沙達もいるから今は任せるか」

「それでは治療を始めますので紅刃さんはアースを下ろしてください」

「わかった」

紅刃さんは私を地面に仰向けに寝かせると、アビリティを全部解いてデュエルディスクを鞘に納めてから、ディスクに入れてあるデッキを取り出した。

SIDE／クヴァシル

月沙達は各自事件の処理に向かっている。ヒュペリオンも代行者などの部隊に指示を出した。

完全に判明していないのは、この襲撃の目的だ。特に恨まれるような事はやっていないらしいし、モンスターの消滅がソリッドビジョンと酷似してるところを見ると人間が裏から操っている可能性が高い。

となると、私の予想だが、襲撃者はニュートラル。目的はおそらく…。

「ハッ、がら空きじゃなかったみてえだな」

私とヒュペリオンは神殿の前にいる。そこに、黒マントとフードを身につけた男が現れた。半袖の左腕にはデュエルディスクを装備している。

「首謀者は貴様か？」

「おうよ。どうだ、ド派手なショーだろ？」

「虫取り大会ならよそでやってもらいたいものだな」

私の言葉に男が冗談めいた答えを返すと、ヒュペリオンも負けじと言い返す。

「名前と目的は？」

「今更隠しても仕方ねえな…」

男はフードを脱いで素顔を曝した。

赤茶色の髪と瞳で目つきは悪い方。右目から右の頬に黄色いマーカーが一直線に付けられている。

「俺はニュートラル幹部、ギュラ・メチュート！光の龍の石版を貰いに来たぜ！」

「やはり、石版が目的か」

「インヴェルズ共に探させたが、どうも見つからなくてよ。俺が直々にこの神殿に目を付けたってわけだ」

「インヴェルズというのは、サイコディスクで召喚したモンスターの事か？」

「それ以外に何があるよ？」

隠し場所まではわからないからまとめて破壊活動をする事で探すつもりか。

「ま、通してくれそうにねえから、力ずくで行かせてもらうぜ！《インヴェルズ・マディス》、《インヴェルズ・モース》、《インヴェルズ・ギラファ》、《インヴェルズ・ホーン》！」

ギュラがサイコディスクにカードを４枚セットすると、両手が鎌になった蟷螂を模したモンスターと、蛾を人型にして太く長い尾をつけたモンスター、右手がキャノン砲になったクワガタを模したモンスター、触角が長いカミキリムシのようなモンスターが現れる。

「幹部という事は…貴様を倒せばこの騒動は解決すると見ていいようだな」

「ああ、そうさ。このディスクには特殊な電源があってだな、自動でデッキのモンスターを召喚して無限に供給できるんだよ。わざわざ大将が出向いてやったんだ、ありがたく思えよ！」

剣を抜きながら聞いた予想は当たりのようだ。ここで待機して正解だったな。

「準備はいいか、ヒュペリオン？」

「当然だ」

「やれ！奴らをぶちのめせ！」

ギュラの命令でマディスとモースが駆け出す。さて、どう始末するか…。

ズドォォォッ！

「何！？」

「「！？」」

突然、私達から見て左側から黄色の電撃が地面を伝って走り、マディスとモースが一撃で消し飛ばされた。

「見つけたぜ」

電撃が飛んできた方向を見ると、攻撃の主がすぐにわかった。真川紅刃だ。ヴァンダルギオンの模様が入った黒いコートを着て、大剣と太刀を足して2で割ったような白刃の剣を持っている。

「紅刃！？」

「ほぉ、真川紅刃か。うじうじしてる割にはいい攻撃をするじゃねえか」

「ああ、してたさ。さっきまではな」

紅刃が返事を返した直後、紅刃はギラファの懐に潜り込んで一閃。驚くほどの速さで破壊してしまった。

「お？」

「ジャシャアアア！」

ホーンが両手の鋏（はさみ）で紅刃を切ろうと襲い掛かるが、

「遅え」

一瞬で背後に回り込んだ紅刃に、右腕だけで薙いだ剣で胴を斬り裂かれ、破壊された。

何だこれは？明らかにパワーアップしている。

いくらロディスのアビリティを発動して身体強化をしているとはいえ、一瞬で懐や背後に移動できるほどの移動速度は出ないはずだ。それに、ホーンを斬った時の剣速が異常だ。これもアビリティ使用時の限界を超えている。

しかも、紅刃は覚醒を使っていない。瞳は黄色ではなくいつもの黒。それなのに、なぜここまでの戦闘能力を発揮できる？さっきの電撃もそうだ。本来はリーシェと同じ白のはずなのに、さっきのはなぜか黄色だった。なぜ急に色が変わったのだ？

紅刃の目を見れば、迷いは断ち切れた事はわかる。だが、いきな

りここまでの成長を遂げるとは…。彼は一体何をしたのだ？

「ホーンを後ろから斬って一撃で綺麗に切断する奴を見るのは初めてだ。かなり硬いんだぜ？」

「だろうな。そんな気はしていた」

「ケッ、そのうち潰れると思ってたが、意外と面白え野郎じゃねえか」

「体張って護ってくれて、道を示してくれた奴がいるんだ。今度は俺が護る番だ」

言葉の１つ１つが力強く、迷いなど微塵も感じさせない。どうやら吹っ切れたようだ。

「目的は何だ？」

「光の龍の石版だ」

「石版？」

「だが、もう１つやりてえ事ができちまった」

「？」

「真川紅刃、俺とデュエルしろ！」

「はあ？」

ギュラのいきなりの宣戦布告に紅刃が疑問符で返す。

「アカデミアで攻撃を仕掛けた時は大した事ねえって思ったが、今はいい目をしてるじゃねえか。強え奴と戦うのは大好きなんでな」

「やっぱりあの時襲ってきたのはお前だったか…！」

「ただでとは言わねえ。てめえが勝ったらここは手を引いてやるよ」

「…事情聴取のおまけ付きでな」

紅刃は私達の前まで歩き、剣をデュエルディスクに戻して装備して展開させた。お互いのデッキが自動でシャッフルされる。

「話がわかるじゃねえか」

「紅刃、大丈夫なのか？」

「心配すんな。あ、ヒュペリオン、カードサンキュな」

「！…アースから受け取ったみたいだな」

「ああ。まあ、見てろ。絶対勝つ」

…任せてみるのもありだな。言っている場合ではないが、面白いものが見れそうだ。そう考えて、私は剣を鞘に納めた。

「紅刃！」

丁度いいタイミングでロディスとリーシェも来た。デュエル直前

で合流するとはな。

「ロディス、リーシェ！」

「奴は？」

「首謀者だ。デュエルで倒せば万事解決だってよ」

「何？」

「貴様か！私の故郷を荒した馬鹿者は！」

リーシェは杖に電気を溜めて、今にも攻撃しそうだ。ヴィーナスの報告で暴走してると聞いていたが、すぐに攻撃しないあたり幾分か落ち着いたようだ。

「ああ、そうだ。憎かったらデュエルで倒してみろよ！」

「デュエルだと！？」

リーシェはもちろん、ロディスも心配そうに紅刃を見る。まだ吹っ切れた事は知らないから当然だろう。

「俺なら心配ねえよ」

「「！」」

「自分勝手な悩みに付き合わせて悪かったな。もう1度、力を貸してくれないか？」

「…フ、当然だ」

「我らは紅刃のパートナーだ。共に戦うのは当然の事」

「悪いな」

「気にするな。行くぞ！」

ロディスとリーシェがカードに戻り、今度こそ準備完了だ。紅刃、お前の覚悟を見せてもらおうか！

「もう準備はよさそうだな。さあ、楽しもうじゃねえか！」

「ああ。全力で行くぜ！」

「「デュエル！」」

紅刃ｖｓギュラ

「先攻は俺からだ！俺のターン！」

先攻は紅刃か。アースを通してヒュペリオンからあのカードを渡されたという事は、紅刃のデッキはおそらく…。

「永続魔法《神の居城－ヴァルハラ》を発動！俺の場にモンスターがいない時、１ターンに１度手札から天使族モンスター１体を特殊召喚できる！《裁きの代行者　サターン》を特殊召喚！」

紫の翼を背負う代行者が呼び出される。今まで紅刃が使わなかったモンスターだ。

《裁きの代行者　サターン》
効果モンスター
星６／光属性／天使族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ　０
自分のライフポイントが相手を超えている場合、自分フィールド上に存在するこのカードをリリースして発動する事ができる。超えているライフポイントの数値分のダメージを相手ライフに与える。
この効果は自分フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在していなければ適用できない。
この効果を発動するターン、自分はバトルフェイズを行う事ができない。

《裁きの代行者　サターン》　ＡＴＫ／２４００
「さらに、俺の場に天使族かドラゴン族のモンスターがいる時、手札から《クリア・シンクロン》を特殊召喚できる！」

続いて、機械のような体から天使の翼を生やしたモンスターが現れる。

《クリア・シンクロン》
チューナー（効果モンスター・オリジナル）
星２／光属性／天使族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ　８００
このカードは自分フィールド上に天使族モンスターまたはドラゴン族モンスターが表側表示で存在する時手札から特殊召喚する事ができる。
このカードの特殊召喚に成功した場合、自分の墓地からカードを１枚手札に加える。

《クリア・シンクロン》　ＡＴＫ／１０００

「レベル６《裁きの代行者　サターン》にレベル２《クリア・シンクロン》をチューニング！舞い散る白羽が、天空を翔け現世を照らす！希望の光を振り翳せ！」

☆６＋☆２＝☆８

「シンクロ召喚！飛来せよ！《ライトエンド・ドラゴン》！」

白い天使の翼を持つ純白の聖龍がフィールドに降り立つ。１ターン目から召喚するとは…。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「モンスターをセット！カードを２枚セットしてターンエンドだ！」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《ライトエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２６００）リバース×１
魔法・罠／《神の居城－ヴァルハラ》リバース×２

「俺のターン、ドロー！俺のフィールドにモンスターがいない時、手札から《インヴェルズの魔細胞》を特殊召喚できる！」

大きなマークがついた、黒いテントウムシのようなモンスターが現れる。

《インヴェルズの魔細胞》
効果モンスター
星１／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
このカードは「インヴェルズ」と名のついたモンスターのアドバンス召喚以外のためにはリリースできず、シンクロ素材とする事もできない。

《インヴェルズの魔細胞》　ＡＴＫ／　０

「そして、魔細胞をリリースして《インヴェルズ・ギラファ》をアドバンス召喚！」

さっきも召喚されたクワガタを模したモンスターが入れ違いで呼び出された。

《インヴェルズ・ギラファ》
効果モンスター
星７／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ　０
このカードは「インヴェルズ」と名のついたモンスター１体をリリースして表側攻撃表示でアドバンス召喚する事ができる。
「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースしてこのカードのアドバンス召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカード１枚を選択して墓地へ送り、自分は１０００ライフポイント回復する事ができる。

《インヴェルズ・ギラファ》　ＡＴＫ／２６００

「レベル７？」

「こいつはインヴェルズ1体のリリースでアドバンス召喚できるモンスターだ！そして、インヴェルズをリリースしてアドバンス召喚した時、相手のカード1枚を墓地に送ってライフを１０００回復する！対象は《ライトエンド・ドラゴン》だ！スタッグ・カノン！」

ギラファがライトエンドに向けて、右手のキャノン砲から闇色の砲弾を撃ち出す。

「罠カード《亜空間物質転送装置》！エンドフェイズ時までライトエンドを除外する！」

カードから桃色の光線が発射され、ライトエンドは異次元に飛ぶ事で間一髪砲弾を躱す事ができた。

「ちっ。対象を失っちまったらライフの回復はできねえな…。なら、《インヴェルズ・ギラファ》で伏せモンスターに攻撃だ！スタッグ・レーザー！」

次はレーザー砲か。だが、破壊されたのはリクルーターだ。

「《コーリング・ノヴァ》の効果発動！戦闘破壊された時、デッキから攻撃力１５００以下の光属性・天使族モンスター1体を特殊召喚する！《英知の代行者　マーキュリー》！」

《コーリング・ノヴァ》がいた箇所から、1冊の本を持つ青い天使が現れた。

《英知の代行者　マーキュリー》
効果モンスター

星４／光属性／天使族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ１７００
相手のエンドフェイズ時に、このカードが自分フィールド上に表側表示で存在し、自分の手札が０枚だった場合、次の自分のスタンバイフェイズ時に発動する。
自分のデッキからカードを１枚ドローする。

《英知の代行者　マーキュリー》　ＤＥＦ／１７００

「リクルーターか。しぶてえ野郎だ。カードを２枚セットしてターンエンドだ！」

「エンドフェイズ時にライトエンドが帰還する！」

カードからまた桃色の光線が放たれ、ライトエンドがフィールドに戻された。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

ギュラ
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《インヴェルズ・ギラファ》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／リバース×１

「いきなり最上級モンスターか…」

「敵とはいえ、やるな」

ヒュペリオンの感嘆の声に、私も言葉を返す。

戦況はよくも悪くもないが、敵はニュートラルの幹部だ。一筋縄ではいかないのは明らかだ。

紅刃。迷いを断ち切り成長したその力、見せてもらうぞ…！

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第４６話　他人でなければ気づかない事もある（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「お、紅刃が復活したみたいだな」

璃音「アースのおかげね」

フィレス『ガルルッ！』

ロコナ『ひゅぺりおんのおじさんから貰ったカードって何だろう？』

勇香「もう言うまでもないと思うけどな…」

璃音「敵の幹部もようやく正体を見せたわね。紅刃がどう対抗するか見物ね」

勇香「新デッキでの初デュエルだ。思いっ切り暴れてこいよ！」

璃音「さて、カード考察に入りましょうか。今回紹介するのは、ギュラが使用したインヴェルズの最上級モンスター、《インヴェルズ・ギラファ》よ」

《インヴェルズ・ギラファ》
効果モンスター
星７／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ　０
このカードは「インヴェルズ」と名のついたモンスター１体をリリースして表側攻撃表示でアドバンス召喚する事ができる。

「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースしてこのカードのアドバンス召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して墓地へ送り、自分は１０００ライフポイント回復する事ができる。

璃音「リリースをインヴェルズ1体で済ませられるのは助かるわね」

勇香「アドバンス召喚が主体だからな。リリースを軽くできるのはでかいだろ」

ロコナ『アドバンス召喚したら、モンスターを破壊してライフを１０００回復できるんだね』

勇香「『破壊』じゃなくて『墓地に送る』な。《スターダスト・ドラゴン》みたいに破壊に対抗する効果じゃ無効にできないのがミソだ」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『感想待ってま～す！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

今回紅刃が使用した《クリア・シンクロン》はTさんが投稿してくださったオリカです。Tさん、ありがとうございました。

ようやく紅刃復活です。次回も大活躍しますよ。

では、また次回！

第４７話　理由や答えは簡潔に（前書き）

紅刃ｖｓギュラです。今回で決着がつきます。

それではどうぞ！

第４７話　理由や答えは簡潔に

ＳＩＤＥ／アース

「これで大丈夫です」

ヴィーナスさんの治療が終わって、私はようやく体を起こす事ができた。

「治療とはいえ応急処置ですので、あまり無理はしないでください」

「はい。ありがとうございます」

試しに立ち上がると、痛みはだいぶ引いていた。傷口も塞がっている。

「アース様、大丈夫ですか？」

「スイレンさん…。はい、もう平気ですよ」

「それなら、さっさと私達も戦闘を再開した方がよさそうね～」

「はい、急ぎましょう！」

ナージャさんの言う通りだ。これ以上休んでなんかいられない。

『皆さん、聞こえますか？』

「マーキュリーさん？」

マーキュリーさんのテレパシーだ。何かあったのかな？

『私はマーズと一緒に行動しているのですが、妙なロボットを見つけまして…』

「ロボット？」

ＳＩＤＥ／紅刃

ギュラ
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《インヴェルズ・ギラファ》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／リバース×１

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《ライトエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２６００）《英知の代行者　マーキュリー》（ＤＥＦ／１７００）
魔法・罠／《神の居城－ヴァルハラ》リバース×１

何とかライトエンドを破壊されずに済んだな。そして、マーキュ

リーを出せたのは予定通りだ。

「ちったぁやるみてえだな。そうでねえと面白くねえ！」

「俺はそう簡単にやられねえよ！俺のターン！《英知の代行者　マーキュリー》の効果発動！前のターンのエンドフェイズ時にこいつがフィールドにいて手札が０枚だった場合、スタンバイフェイズでカードを１枚ドローする！さらに魔法カード《強欲な壺》を発動！カードを２枚ドロー！」

手札は３枚。キーカードも来たし、何とかなるか。

「フィールド魔法《天空の聖域》を発動！天使族モンスターの戦闘でコントローラーが受けるダメージは０になる！」

と言っても、ここ自体が《天空の聖域》だからかソリッドビジョンは発動しない。どんだけ高性能なんだよ…。

「そして、《豊穣のアルテミス》を召喚！」

毎回毎回、世話になってるな。このデュエルも頼んだぜ。

《豊穣のアルテミス》　ＡＴＫ／１６００

「バトル！《ライトエンド・ドラゴン》で《インヴェルズ・ギラファ》を攻撃！」

「罠発動《侵略の波動》！アドバンス召喚に成功したインヴェルズを手札に戻し、相手のカード１枚を破壊する！」

《侵略の波動》
通常罠
自分フィールド上に表側表示で存在する、アドバンス召喚に成功した「インヴェルズ」と名のついたモンスター1体を手札に戻して発動する。
相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。

「ギラファを手札に戻して効果発動！《ライトエンド・ドラゴン》を破壊だ！」

しつこいな。厄介なのは認めるけど、通すわけにはいかねえ！

「させるかよ！カウンター罠《神罰》！《天空の聖域》が場にある時、魔法・罠・モンスター効果を無効にして破壊する！」

「何！？」

《神罰》
カウンター罠
フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合に発動する事ができる。
効果モンスターの効果・魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

神殿の頂点にそびえ立つ塔から赤い雷が落ちて、たった今発動されたカードを破壊する。ギラファはもう手札に戻ったからがら空きだ。

「さらに、カウンター罠で効果を無効にした事で、手札から《冥王竜ヴァンダルギオン》を特殊召喚する！」

『我も続くぞ！』

黒い大穴から冥王竜の姿になったロディスが飛び出す。ここまで早く出番が来るとはな。

《冥王竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／２８００

「アルテミスの効果で、カウンター罠が発動する度にカードを１枚ドローする！そしてヴァンダルギオンの効果発動！罠カードを無効にして特殊召喚した時、相手のカード１枚を破壊する！カーディナル・フレア！」

『邪魔だ。失せろ！』

ロディスが吐き出した赤い炎が、残りのリバースカードに向かう。

「ちぃっ！罠カード《和睦の使者》！このターンの俺のモンスターの戦闘破壊と戦闘ダメージを無効にする！」

秋斗の時と同じ結果か。でも、相手のフィールドが空かどうかって違いはあるな。

「永続魔法《代行者の条約》を発動！ターンエンドだ！」

《代行者の条約》
永続魔法（オリジナル）
自分の墓地に「代行者」と名のつくモンスターが存在する場合に効果を使用する事ができる。１ターンに１度、自分のスタンバイフェイス時に手札の天使族モンスター１体をデッキに戻す事で、自分のデッキまたは除外されている「代行者」と名のついたモンスター１

体を手札に加える事ができる。
フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、代わりにレベル８の天使族モンスター１体を手札に加える事ができる。

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《ライトエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２６００）《英知の代行者　マーキュリー》（ＤＥＦ／１７００）《豊穣のアルテミス》（ＤＥＦ／１６００）《冥王竜ヴァンダルギオン》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／《天空の聖域》《神の居城－ヴァルハラ》《代行者の条約》

「モンスターを一気に並べたか！これなら行けるかもしれん！」

「いや、その代わりに紅刃の伏せカードは０だ。反撃が来ても対応できない」

モンスターは粗方展開できたけど、リバースカードも手札も０。
何も起きなきゃいいけどな…。

「やってくれるじゃねえか…！俺のターン！俺も《強欲な壺》を発動するぜ！カードを２枚ドローする！そして魔法カード《天使の施し》を発動！カードを３枚ドローし、手札を２枚捨てる！さらに魔法カード《悪夢再び》！墓地から守備力が０の闇属性モンスター２体を手札に加える！」

《悪夢再び》
通常魔法

自分の墓地に存在する守備力０の闇属性モンスター２体を選択し手札に加える。

「インヴェルズはほとんどの奴が守備力０なんでな。《インヴェルズ・マディス》と《インヴェルズの魔細胞》を手札に加える！」

カテゴリの特徴を利用してきたか…！

「俺のフィールドにモンスターがいない事で、手札から魔細胞を特殊召喚！」

《インヴェルズの魔細胞》　ＡＴＫ／　０

「そして魔細胞をリリースし、《インヴェルズ・マディス》をアドバンス召喚！」

今度は、アカデミアと聖域で３回も対峙した蟷螂もどきが召喚された。

《インヴェルズ・マディス》
効果モンスター
星５／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ２２００／ＤＥＦ　０
「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースしてこのカードのアドバンス召喚に成功した時、１０００ライフポイントを払う事で、自分の墓地に存在する「インヴェルズ」と名のついたモンスター１体を選択して特殊召喚する。

《インヴェルズ・マディス》　ＡＴＫ／２２００

「マディスがアドバンス召喚に成功した時、ライフを１０００払う

事で墓地のインヴェルズ1体を特殊召喚する！《インヴェルズ・ギラファ》を特殊召喚！」

「何！？」

さっき手札に戻した奴を《天使の施し》で墓地に送ったのか！？

《インヴェルズ・ギラファ》　ＡＴＫ／２６００

「バトル！ギラファでアルテミスを攻撃！スタッグ・レーザー！」

ギラファのレーザー砲がアルテミスを貫き破壊する。今は守る事ができねえ…！

「《天空の聖域》の効果でダメージはなしだ！」

「ちっ、面倒なカードだな…。カードを1枚伏せて、魔法カード《天よりの宝札》を発動！」

「！」

攻撃しない…？

「互いに手札が6枚になるようにカードをドローする！カードを4枚セットしてターンエンドだ！」

ギュラ
ＬＰ／３０００
手札／２
モンスター／《インヴェルズ・マディス》（ＡＴＫ／２２００）《

インヴェルズ・ギラファ》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／リバース×５

何でマーキュリーに攻撃しなかった？マディスの攻撃力なら簡単に戦闘破壊できたはずだ。《天よりの宝札》を発動する前に伏せたあのカードに意味があるのか？

「俺のターン！スタンバイフェイズ時に《代行者の条約》の効果発動！俺の墓地に代行者がいる時、手札から天使族モンスター１体をデッキに戻す事でデッキか除外されているカードの中から代行者１体を手札に加える事ができる！俺の墓地には《裁きの代行者　サタン》がいるから効果を発動できる！」

「その前にこいつを使わせてもらうぜ永続罠《群雄割拠》！お互いに種族が１種類になるようにフィールド上のモンスターを墓地に送る！」

「なっ！？」

《群雄割拠》
永続罠
お互いのプレイヤーはそれぞれ種族が１種類になるように、フィールド上の自分モンスターを墓地へ送る。
このカードがフィールド上で存在する限り、お互いに自分のフィールド上に出せるモンスターの種族はそれぞれ１種類だけになる。

「そして、お互いに自分フィールド上に出せるモンスターの種族は１種類だけになる！さあ、好きな方を選べ！」

「このためにわざわざ違う種族のマーキュリーを墓地に送ったのか」

「インヴェルズは見た限りでは悪魔族のみのカテゴリ。損失は０だ」

『紅刃。どちらを選ぶべきかわかっているな？』

「ああ。悪い…！俺は天使族を選択してヴァンダルギオンとライトエンドを墓地に送る」

ロディスとライトエンドは光の粒子になって消えてしまった。

「ここからは天使ｖｓ悪魔の全面戦争だ！派手に行こうぜ！」

「…ああ。そのつもりだ！《代行者の条約》の効果で手札の《勝利の導き手フレイヤ》をデッキに戻し、デッキから《神秘の代行者アース》を手札に加える！」

手札には逆転に必要なカードが充分にある。アース、俺に力を貸してくれ！

「魔法カード《天使の施し》を発動！カードを3枚ドローして手札を2枚捨てる！そして《神秘の代行者　アース》を召喚！」

《神秘の代行者　アース》
チューナー（効果モンスター）
星２／光属性／天使族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ　８００
このカードが召喚に成功した時、自分のデッキから「神秘の代行者アース」以外の「代行者」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。
フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、代わりに「マスター・ヒュペリオン」１体を手札に加える事ができる。

《神秘の代行者　アース》　ＡＴＫ／１０００

「アースが召喚に成功した時、デッキから代行者１体を手札に加える事ができる！そして、《天空の聖域》がフィールド上にある場合は代わりに《マスター・ヒュペリオン》を手札に加える事ができる！俺は《マスター・ヒュペリオン》を手札に加える！そして、こいつは手札・フィールド・墓地のどれかから代行者１体を除外する事で手札から特殊召喚できる！墓地の《裁きの代行者　サターン》を除外して《マスター・ヒュペリオン》を特殊召喚！」

黒い体に金・銀・朱色の服。炎の翼を広げた、太陽を司る代行者の長が姿を現した。

《マスター・ヒュペリオン》
効果モンスター
星８／光属性／天使族／ＡＴＫ２７００／ＡＴＫ２１００
このカードは、自分の手札・フィールド上・墓地に存在する「代行者」と名のついたモンスター１体をゲームから除外し、手札から特殊召喚する事ができる。
１ターンに１度、自分の墓地に存在する天使族・光属性モンスター１体をゲームから除外する事で、フィールド上に存在するカード１枚を選択して破壊する。
フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、この効果は１ターンに２度まで使用できる。

《マスター・ヒュペリオン》　ＡＴＫ／２７００

「私のカードか…！」

「《マスター・ヒュペリオン》の効果発動！墓地から光属性・天使族のモンスターを除外して相手のカード１枚を破壊する！墓地から《裁きを下す者－ボルテニス》を除外してリバースカードを破壊する！ソーラー・プロミネンス！」

ヒュペリオンが右手から炎の柱を放ち、リバースカードを燃やし尽くす。

「ちっ、《次元幽閉》がやられたか…」

「まだだ！《天空の聖域》がある場合、この効果は１ターンに２回使える！」

「何だと！？」

「《ブレード・トラディショナー》を除外してリバースカードをもう１枚破壊！ソーラー・プロミネンス・セカンド！」

今度は左手から炎の柱を繰り出し、もう１枚のリバースカードを焼き払いにかかった。

「罠カード《侵略の手段》！デッキからインヴェルズ１体を墓地に送り、フィールド上のインヴェルズ１体の攻撃力をエンドフェイズ時まで８００ポイントアップさせる」

《侵略の手段》
通常罠
自分のデッキから「インヴェルズ」と名のついたモンスター１体を墓地へ送り、自分フィールド上に表側表示で存在する「インヴェルズ」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。

選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで８００ポイントアップする。

「デッキから《インヴェルズ・ホーン》を墓地に送り、《インヴェルズ・ギラファ》の攻撃力を上げるぜ！」

《インヴェルズ・ギラファ》　ＡＴＫ／２６００→３４００

攻撃力を上げられた…。このターンでギラファを片付けるのは無理だな。

「魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動！手札からモンスターを１体墓地に送り、手札かデッキからレベル１のモンスター１体を特殊召喚する！《勝利の導き手フレイヤ》を特殊召喚！」

チアガールみたいな女天使。全体強化のために入れといたけど、今回は意味なさそうだな。

《勝利の導き手フレイヤ》　ＡＴＫ／　１００

「レベル４《英知の代行者　マーキュリー》とレベル１《勝利の導き手フレイヤ》にレベル２《神秘の代行者　アース》をチューニング！」

アースが２つの黄色の輪になり、マーキュリーとフレイヤが合計５つの星になる。

「白銀の飛竜が、古の輝きで現世を染める！希望の光を振り翳せ！」

☆４＋☆１＋☆２＝☆７

「シンクロ召喚！煌めけ！《エンシェント・ホーリー・ワイバーン》！」

光の柱から、全身が銀色に輝く飛竜が飛び出し青天に舞い上がった。

《エンシェント・ホーリー・ワイバーン》
シンクロ・効果モンスター
星７／光属性／天使族／ＡＴＫ２１００／ＤＥＦ２０００
光属性チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
自分のライフポイントが相手より上の場合、その数値だけこのカードの攻撃力はアップする。
自分のライフポイントが相手より下の場合、その数値だけこのカードの攻撃力がダウンする。
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、１０００ライフポイントを払う事でこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

《エンシェント・ホーリー・ワイバーン》　ＡＴＫ／２１００

「こいつは俺のライフがお前のライフを上回ってる分だけ攻撃力が上がるモンスターだ。俺のライフは４０００でお前のライフは３０００。よって、攻撃力は１０００アップする！」

《エンシェント・ホーリー・ワイバーン》　ＡＴＫ／２１００→３１００

「攻撃力が３０００を超えやがった…！」

「バトル！《エンシェント・ホーリー・ワイバーン》で《インヴェルズ・マディス》を攻撃！セイント・レイ・バースト！」

飛竜が白銀のブレスをマディスに向けて放出する。これが決まれば大ダメージを与えられる！

「罠発動（ヘイト・バスター）！」

「なっ！？」

やばい！あれは…！

「攻撃された悪魔族モンスターと攻撃してきた相手モンスター1体を破壊して、破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

マディスが闇色に光って爆発し、ワイバーンも巻き込まれて破壊される。それだけじゃ飽き足りずに、爆風が俺を襲った。

「ぐぅっ！」

実際の衝撃が体に負荷をかける。爆風だけだからまだマシだけどな。

紅刃　ＬＰ／４０００→１９００

「やっぱりサイコパワーは使ってんだな…」

「当然だ！それに、これだけじゃ終わらねえぜ！罠カード《侵略の遂行》！アドバンス召喚されたインヴェルズが破壊された時、そい

つのアドバンス召喚でリリースしたモンスターを特殊召喚する！」

《侵略の遂行》
通常罠（オリジナル）
バトルフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するアドバンス召喚された「インヴェルズ」と名のついたモンスターが破壊された時に発動する事ができる。
自分の墓地から破壊されたモンスターをアドバンス召喚した時にリリースしたモンスターを全て特殊召喚してバトルフェイズを終了する。

「マディスのアドバンス召喚でリリースした《インヴェルズの魔細胞》を特殊召喚する！」

《インヴェルズの魔細胞》　ＡＴＫ／　０

「そしてバトルフェイズは終了される！」

「リリース要員を残しちまったか…。カードを3枚セットしてターンエンドだ！」

《インヴェルズ・ギラファ》　ＡＴＫ／３４００→２６００

紅刃
ＬＰ／１９００
手札／１
モンスター／《マスター・ヒュペリオン》（ＡＴＫ／２７００）
魔法・罠／《天空の聖域》《神の居城－ヴァルハラ》《代行者の条約》リバース×３

「ククク…」

俺がターンの終了を宣言すると、ギュラが急に笑い出した。何がおかしいんだよ？

「予想以上の強さだ。ここまで強くなるとはな…」

「そりゃどうも」

「最高だぜ！俺のターン！」

何だこいつ？純粋に…デュエルを楽しんでいる？

「魔細胞とギラファをリリース！」

「2体のリリースだと？」

「紅刃、気をつけろ！」

クヴァシルに言われなくても、これから来る奴がやばいのは何となく想像できる。

「出でよ！《インヴェルズ・ガザス》！！」

頭から3本の角を生やし、巨体に見合うほどの羽と尻尾を持つインヴェルズ。今までのインヴェルズとは迫力が違う…！

《インヴェルズ・ガザス》
効果モンスター
星８／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ　０

「インヴェルズ」と名のついたモンスター2体をリリースしてこのカードのアドバンス召喚に成功した時、以下の効果から1つを選択して発動する。
●このカード以外のフィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。
●フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て破壊する。

《インヴェルズ・ガザス》　ＡＴＫ／２８００

「こいつをアドバンス召喚した時、2つの効果から1つを選んで発動する事ができる！こいつ以外のモンスターを全て破壊するか、魔法・罠を全て破壊するかだ！」

「全体除去だと！？」

「させるか！罠カード《スキル・スタン》！このターンの間、フィールド上のモンスターの効果を全て無効にする！」

《スキル・スタン》
通常罠（オリジナル）
このターンフィールド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化される。

「ほぉ…ガザスの効果を躱すとはな。カードを1枚伏せて魔法カード《命削りの宝札》を発動！手札が5枚になるようにカードをドローする！さらに、魔法カード《ライトニング・ボルテックス》を発動！手札を1枚捨てて、相手の表側表示のモンスターを全て破壊する！」

「何！？」

雷の渦がソリッドビジョンのヒュペリオンを破壊してしまう。どのみちヒュペリオンは守り切れなかったか…。

「紅刃のライフは１９００でガザスの攻撃力は２８００…！このままだと紅刃が負けてしまうぞ！？」

「慌てるな、ヒュペリオン」

「バトルだ！《インヴェルズ・ガザス》でダイレクトアタック！インロード・ブレイク！」

ガザスが放った闇の波動が地面をえぐりながら迫る。だが、まだ終わらねえ！

「紅刃はこの程度で終わるデュエリストではない！」

「通すかよ！カウンター罠《攻撃の無力化》！攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる！」

俺の前に時空の渦が現れ、ガザスの攻撃を全部飲み込んだ。俺へのダメージは０だ。

「しぶてえ野郎だぜ。魔法カード《死者蘇生》！墓地の《インヴェルズ・ホーン》を特殊召喚する！」

《インヴェルズ・ホーン》
効果モンスター
星９／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ　０
「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースしてこのカー

ドのアドバンス召喚に成功した場合、以下の効果を得る。
１０００ライフポイントを払う事で、フィールド上に存在するモンスター１体を選択して破壊する。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

《インヴェルズ・ホーン》　ＡＴＫ／３０００

さっき斬ったカミキリムシもどきか！しかも攻撃力が無駄に高い！

「《ライトニング・ボルテックス》のコストにしたカードか…」

「カードを１枚セットしてターンエンドだ！」

ギュラ
ＬＰ／３０００
手札／１
モンスター／《インヴェルズ・ガザス》（ＡＴＫ／２８００）《インヴェルズ・ホーン》（ＡＴＫ／３０００）
魔法・罠／《群雄割拠》リバース×２

「攻撃力２８００と３０００か…」

「紅刃のフィールドにはモンスターがいない。どうする気だ？」

手札にはモンスターがいない。次のドローで勝負が決まる。

「まさか、これで終わりじゃねえよな？」

「当たり前だ。ここで倒れるわけにはいかねえんだ」

ギュラの挑発に答えつつ、デッキトップに手をかけた。まだ逆転のチャンスがあるのに、逃げる必要はないし、逃げるつもりもない。

「俺はいつの間にか、ただ敵を倒す事だけ考えて周りが見えなくなってたんだな」

「？」

「本当に護りたい大切な奴らがいるから強くなれるっていうのに、それを忘れていた。難しく考えすぎていたんだ。でも、やっと答えが出た」

脳裏には、月沙やロディス、リーシェを始めとしたたくさんの仲間の姿が浮かぶ。あいつらを護りたい。それが、俺が強さを求める理由。

「俺は大切な奴らを護りたい！だからどこまでも強くなる！それだけだ！！」

これが、この意思が俺の答えだ！

「俺の、ターン！！」

まだだ。このカードに懸ける！

「魔法カード《同調の宝札》を発動！墓地のシンクロモンスターをエクストラデッキに戻し、カードを2枚ドローする！」

《同調の宝札》
通常魔法（オリジナル）
自分の墓地に存在するシンクロモンスター1体をエクストラデッキに戻し、カードを2枚ドローする。

「《ライトエンド・ドラゴン》をエクストラデッキに戻す！そして2枚ドロー！」

…引いたのは両方モンスターじゃない。でも、デッキは応えてくれた！

「魔法カード《天使の導き》！墓地の光属性・天使族モンスター1体を除外して、同じレベルの光属性・天使族モンスター1体を手札に加える！」

《天使の導き》
通常魔法（オリジナル）
自分の墓地からシンクロ・融合モンスター以外の光属性・天使族モンスター1体を除外して発動する。
デッキから同じレベルの光属性・天使族モンスター1体を手札に加える。

「墓地から《勝利の導き手フレイヤ》を除外して、デッキから《ハネワタ》を手札に加える！」

「《ハネワタ》？」

「血迷ったか？今更そんなモンスターを呼んでどうする？」

「要は除外できればいいんだ」

「は？」

そう、このカードは『シンクロ素材が除外されている事』が絶対条件だ！

「手札を1枚捨てて、速攻魔法（トラップ・ブースター）を発動！このターン、1度だけ手札から罠カードを発動できる！」

俺が捨てたのは、たった今手札に加えた《ハネワタ》だ。

「そして、これが逆転への一手だ！手札から罠カード《ディメンション・シンクロ》を発動！除外されているシンクロ素材をデッキに戻してシンクロ召喚を行う！」

《ディメンション・シンクロ》
通常罠（オリジナル）
ゲームから除外されている、シンクロモンスターカードによって決められた自分のシンクロ素材モンスターをデッキに戻し、シンクロモンスター1体をシンクロ召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

「除外されたモンスターでのシンクロ召喚だと！？」

「除外されているレベル８《裁きを下す者－ボルテニス》レベル１《勝利の導き手フレイヤ》レベル１《ブレード・トラディショナー》をデッキに戻してチューニング！」

除外されていた《ブレード・トラディショナー》が１つの黄色の輪になり、リーシェとフレイヤが９つの輪になり列を成す。

「裁きの剣が、白雷を下し現世に轟く！希望の光を振り翳せ！」

☆８＋☆１＋☆１＝☆１０

「シンクロ召喚！裁け！《雷光断罪－ボルテニス》！」

天使の翼を広げ、大剣を持つ人の姿のリーシェがフィールドに降り立った。

《雷光断罪－ボルテニス》　ＡＴＫ／３６００

『紅刃、本当に迷いを断ち切れたみたいだな』

「信用してなかったのかよ…？」

『まさか。何年お前と共にいると思っている？さっさとあの不届き者を始末するぞ！』

「ずいぶんと勇ましい女じゃねえか。勝つ算段はあんのか？」

『あるから私を出した。それ以外に何がある？』

リーシェも信頼してくれてるんだ。このターンで決める！

「行くぜ！ボルテニスをシンクロ召喚した時、デッキからカウンター罠を1枚墓地に送る！俺が選ぶのは《魔宮の賄賂》だ！そしてバトル！《雷光断罪－ボルテニス》で《インヴェルズ・ホーン》を攻撃！」

「罠カード《侵略の波動》！アドバンス召喚に成功した《インヴェルズ・ガザス》を手札に戻し、ボルテニスを破壊する！」

2枚目か。こいつ自身の効果で破壊はされない。でも、このターンで終わらせるには…。

「カウンター罠《天空の幻術》！光属性・天使族モンスターが相手のカード効果の対象になった時、そのカードの発動を無効にして破壊する！」

《天空の幻術》
カウンター罠（オリジナル）
相手が光属性・天使族モンスターを対象とする魔法・罠・効果モンスターの効果を発動した時に発動する事ができる。
その効果の発動と効果を無効にし、そのカードをゲームから除外する。

《天空の幻術》は1ターンに1枚しか発動できない。
また、自分フィールド上に《天空の聖域》が存在している時に発動した場合、以下の効果を選択して使用することができる。
●自分の墓地に存在するカウンター罠を2枚までセットする。
●自分の墓地に存在する光属性・天使族モンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚する。

「何だと！？」

ガザスが紫の光になってリーシェに突撃するも、カードから放たれる光に掻き消された。

「そして、《天空の聖域》がある時に発動した場合、墓地から光属性・天使族モンスター1体を特殊召喚できる！蘇れ！《マスター・ヒュペリオン》！」

フィールドから火柱が上がり、中からヒュペリオンが姿を現した。

《マスター・ヒュペリオン》　ＡＴＫ／２７００

「そして、ボルテニスの効果発動！カウンター罠が発動する度に、相手のカード1枚を除外する！リバースカードを除外！パニッシュメント・リムーヴ！」

『失せろ！』

リーシェが地面に剣を突き刺すと、リバースカードの真下から白い電流の柱が噴き出す。リバースカードは跡形もなく浄化された。

「《リビングデッドの呼び声》がやられたか…」

「そのままボルテニスでホーンに攻撃！レイジング・ジャッジライト！」

『はぁあああああ！！』

リーシェが剣を振り回して特大の電撃を繰り出し、カミキリムシもどきを葬り去る。

「ちぃっ！」

ギュラ　ＬＰ／３０００→２４００

「がら空きになった！」

「これでフィニッシュだ！てめえを裁く！《マスター・ヒュペリオン》でダイレクトアタック！アポロヌス・デプティー！！」

ヒュペリオンが光の輪を描いてエネルギーを溜め、極太の炎の束を放出してギュラを攻撃した。

「ぐぉぉぉぉぉぉ！」

ギュラ　ＬＰ／２４００→　０

紅刃　ＷＩＮ

「…ちっ、機能が止まっちまったか…」

何とか勝てたな…。デッキからはロディスとリーシェが出てきた。

「これで襲撃は止むんだろうな？」

「ああ。このディスクはライディングロイドのコントローラーだ」

「ライディングロイド？」

前に遊星が戦ったロボットか？何でこいつが…？

「この聖域には何体かライディングロイドを送り込んだ。もちろんサイコディスク付きでな。俺がデュエルで負けるかこのディスクが破壊されちまったら、全機まとめて機能が停止する仕組みになっている」

「無限に召喚できるディスクじゃなかったのか？」

「うっせえな。ちったぁ見栄張ってもいいじゃねえか」

「そういう問題か…？」

クヴァシルが問題点を追求していく。無限に召喚って…何の話だ？

「それより、負けは負けだ。約束通り、ここは手を引いてやるよ」

「それだけじゃねえ。他にもいろいろ話を聞かせてもらうぞ」

俺はカードを手早くしまってディスクを解除し、剣に変換した。いつでも動ける体勢だ。

「ま、楽しかったぜ」

「は…？」

「あばよ！」

俺が虚をつかれて少し気が抜けた隙に、ギュラはカードを1枚ディスクに差し込み起動させて一瞬で消えてしまった。

「な…！？あいつどこに行った！？」

「やられたな。《緊急テレポート》で脱出されたか」

ロディスが冷静に分析する。せっかく情報を聞き出せるチャンスだったのに…惜しい事をしたな。

「まだライディングロイドがある。それを回収して調べれば…」

「そうか！何か手掛かりを掴めるかもしれない！」

「残念ながらそれは無理だ。たった今代行者達から連絡が入ったが、謎のロボットを発見したはいいものの、全部突然爆発して跡形もなく消えてしまったそうだ」

「ちっ、アフターケアも万全だったか…」

「その代わり、敵は完全に消え失せたらしいがな」

リーシェの案も駄目か。案外抜目ないんだな。

「紅刃！」

「ん？」

名前を呼ばれて振り返ると、月沙とアースがこっちに走ってきていた。

「月沙、アース！」

「ご無事で何よりです！」

「アース、体は大丈夫なのか？」

「一応、ヴィーナスさんに応急処置をしてもらったので」

「そうか。よかった」

大丈夫みたいだな。俺が怪我させたようなもんだし、正直罪悪感がある。

「ああ、そうだ。さっき敵の親玉と戦った」

「え！？」

「逃げられちまったけどな。デュエルに勝つ事はできた」

「勝ったの！？て事は…本当に？」

「ああ。もう大丈夫だ。迷惑かけて悪かったな」

「ううん、全然。紅刃が元気になったんだから嬉しいよ」

月沙は俺を責める事なく笑顔で答えてくれた。

キュオオォォォ…

「「「「「「「「！」」」」」」」」」

突然、神殿の入口から光が漏れ始めた。そして、何かが飛び出した。そのまま俺の目の前まで飛んでくる。

「これは…石版？」

「石版が浮いてる！？」

アースがそれの正体を確認すると、月沙が驚きの声を上げる。

黄色い光を出しながら神殿から出てきたのは、光の龍の石版だった。

キュウウゥゥゥ…

「！ライトエンド…？」

俺のディスクからも黄色の光が出る。まさかと思ってライトエンドのカードを取り出すと、案の定そのカードが光っていた。

ん？待てよ？この石版の模様…。どこかで見た事あると思ったら、ライトエンドの頭の宝飾品と同じだ！

「やはりな」

「クヴァシル…どういう事だ?」

「前に龍の伝説の話をしただろう?伝説の龍は、自らの力を受け継ぎ巨悪に立ち向かう継承者を見つけた時に力の封印を解くらしい」

「継承者?」

「その継承者が君かもしれないと思ってここに呼んだ。その石版の模様がライトエンドの宝飾品にそっくりだからもしやと思ったが…」

「ちょっと待て!て事は…」

「そう。《ライトエンド・ドラゴン》こそが、伝説の光の龍だ」

ライトエンドが…伝説の龍…?

「でも、ライトエンドは鈴佳から貰ったカードだ。それもカードケースの中から俺がたまたま見つけた奴だぞ?」

「カードケースに入れるように頼んだのは私だ。お前はライトエンドの可能性を信じて使う事を誓った。カードの可能性を信じない者が継承者になれるはずがない。そのカードは元々この聖域に昔から保管してあったカードだ」

「て事は何か?俺を継承者に仕立てるためにここまで仕組んだってのか?」

「勝手に事を運んでしまった事は詫びよう。だが、ニュートラルと戦うには必要な力だ。わかってくれ」

ハァ…。他人に敷かれたレールを歩いたのは癪だけど、こればかりはしゃあないか。

ピシッ

クヴァシルの話が終わると、石版に輝が入った。輝はそのまま広がっていく。

「輝が…！」

パキィン！

石版が割れた。破片は粉々になって消えてしまった。

中から現れたのは1枚のカードだ。まばゆい光を放つそれはゆっくり俺に向かっていき、俺の手の中に収まった。そして、石版から現れたカードとライトエンドのカードの光がぱたりと止んだ。

「これが、石版の力？」

「何も…書いてませんね…」

石版のカードには何も書かれていない。イラストは白1色で、文字も何1つ書かれていない。枠は白だから、シンクロモンスターなのか？

「ん？もう1枚ある」

何も書かれていないカードの下に、もう1枚のカードが重なって

いた。同じシンクロモンスターで、こっちはちゃんとしたイラストと文字がある。

「《エンジェル・コンダクター》？何だこれ？」

「シンクロモンスターなのにレベルが2しかない…。極端に低いですね」

「これでは使い方がわからぬな」

俺の後に、アースとヒュペリオンも各々の感想を告げる。イラストもテキストもないカードにレベルが低すぎるシンクロモンスター…。こんなのどう使えってんだ？

「紅刃、ちょっとそのカード貸して！」

「ああ、いいけど？」

俺は月沙に2枚のカードを渡した。月沙はそれをまじまじと見つめる。

「これって…！」

「何か知っているのか？」

絶句した月沙にリーシェが問い掛ける。

「…うん。まだ効果はわからないけど、確かにこれならかなりの戦力になるはず」

「そんなに凄いカードなのか？」

「この何も書かれてないカード。これはアクセルシンクロモンスターだよ」

「アクセルシンクロモンスター？」

何だそれ？聞いた事すらないぞ？

「シンクロモンスターどうしでシンクロ召喚をする事で初めて召喚できるモンスターなの」

「シンクロモンスターどうしで？」

「うん。この事をアクセルシンクロっていうの。そして、それに必要なのがこのシンクロチューナー」

確かに、《エンジェル・コンダクター》のテキストには『シンクロ』の他に『チューナー』の表記がある。

「この2枚は光の龍の石版のカードだから…《ライトエンド・ドラゴン》と《エンジェル・コンダクター》の組み合わせで召喚できるはず」

「そんな召喚方法があるとは…」

クヴァシルもアクセルシンクロは初耳みたいだ。クヴァシルすら知らない召喚方法…。どんなとんでもモンスターが飛び出すんだ？

「月沙はなぜアクセルシンクロを知っている？」

「原作では遊星が修得する事になってるからだよ。素材になるのは《スターダスト・ドラゴン》」

遊星もいずれ修得するのか…。そして、俺もアクセルシンクロを修得する必要がある。

「紅刃、ありがとう。返すよ」

「ああ。月沙、アクセルシンクロってどうやるんだ？普通に2体を出してシンクロすれば、イラストと文字が自動で浮かび上がるのか？」

「いや、原作ではライディングデュエルでしか使われてないから、スタンディングで出せるかはわからない」

「実質ライディング専用かよ…」

「ライディングだと、限界まで加速して『クリア・マインド』の境地に至って初めて召喚できるの」

「『クリア・マインド』？」

「善悪を超えた境地だったっけ？その時に、敵やスピードに対する恐怖があると、失敗する」

面倒な力だな、アクセルシンクロって。使いこなすには時間がかかりそうだ。

「そうか…。とにかく、今後の俺の目標はアクセルシンクロの修得

に決定だな」

「紅刃さんならきっとできますよ」

「まずはスピードに慣れるために走り込みをしたらどうかな？」

「いいな、それ。それで行くか」

見てろよ。絶対にアクセルシンクロを修得してみせる！

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第４７話　理由や答えは簡潔に（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「代行者の次はアクセルシンクロか…」

璃音「他に人の出番もあるから、修得はまだ先の話になりそうね」

フィレス『ガルル…』

ロコナ『どんなモンスターなのかな？』

勇香「わからねえよ。召喚してからのお楽しみってわけだ」

璃音「それじゃ、カード考察に入りましょうか。今回紹介するのは、天使族の新たな切り札（マスター・ヒュペリオン）よ」

《マスター・ヒュペリオン》
効果モンスター
星８／光属性／天使族／ＡＴＫ２７００／ＤＥＦ２１００
このカードは、自分の手札・フィールド上・墓地に存在する「代行者」と名のついたモンスター１体をゲームから除外し、手札から特殊召喚する事ができる。
１ターンに１度、自分の墓地に存在する天使族・光属性モンスター１体をゲームから除外する事で、フィールド上に存在するカード１枚を選択して破壊する。
フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、この効果は１ターンに２度まで使用できる。

璃音「手札・フィールド・墓地から代行者を除外すれば特殊召喚できるわ」

勇香「わざわざ代行者を移動させる必要がないから、特殊召喚は案外楽だな」

ロコナ『墓地の光属性・天使族モンスターを除外すれば、どんなカードでも破壊できるよ！』

勇香「《天空の聖域》があれば2回も使える。除外した天使族は《奇跡の光臨》とかで特殊召喚すればいい話だし、かなり強力なモンスターだな」

璃音「今まで能動的にカードを破壊できるモンスターがいなかった天使族にとって、このカードの登場は朗報よ。【代行者】はもちろん、他の【天使族】でも使用できるわ」

勇香「攻撃力は《ゴヨウ・ガーディアン》がいるから少し物足りない気がするけど、それを差し引いても充分活躍できるな」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『感想待ってま～す！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

今回紅刃が使用した《代行者の条約》《天使の導き》とギュラが使用した《侵略の遂行》は言羽・Ｄ・カタストロフィ一さんが、紅刃が使用した《天空の幻術》はＡＳＡさんが投稿してくださったオリカです。言羽・Ｄ・カタストロフィ一さん、ＡＳＡさん、ありがとうございました。

というわけで、紅刃の新デッキは【代行者パーミッション】です。アクセルシンクロはまだ先になりそうです。

では、また次回！

第４８話　復讐だけが人生じゃない（前書き）

今回はアカデミアでの話です。勇香が活躍します。

それではどうぞ！

第４８話　復讐だけが人生じゃない

ＳＩＤＥ／勇香

「ふあっ…」

欠伸１つ。私はついさっきまで昼寝をしていた。

何つーか、暇だ。そんなわけで、私はそこら辺を適当にぶらついてる。紅刃達はどうしてっかなぁ？早いとこ紅刃が吹っ切れてくれりゃいいんだけど…。

「…ん？」

デュエル場まで来ると、中から音が聞こえてきた。中でデュエルでもやってんのか？暇だし、見てくか。

で、デュエル場に入ると、十代がデュエルをしていた。相手は銀髪でスーツを着込んでる奴。

「表の世界で裁けぬのなら、僕が『Ｄ－ＨＥＲＯ』の力を使い、裏の世界で裁いて見せると！」

…え？何この状況？

「けど、せっかくお前の父さんが残してくれたカードを、復讐の道具に使うなんて…！」

「わかったような口を利くな、十代！ムカつくんだよ！お前のように、憧れだけでヒーローを使う奴が！」

「？」

「僕には必要なんだ！奴に罰を与えるために、僕に力を与える本当のヒーローが！」

本当のヒーロー？復讐のためのヒーローが？

「僕のターン！これで最後だ！行け、ドレッドガイ！サンダー・ジャイアントを攻撃！プレデター・オブ・ドレッドノート！！」

ドレッドガイと呼ばれた馬鹿でかいモンスターが十代のサンダー・ジャイアントをぶっ飛ばして破壊した。そして、十代のライフも０。

「消えろ、雑魚が」

「…！」

そいつはそれだけ吐き捨てると、さっさとデュエル場を出ていっちまった。

「「「十代！？」」」

明日香と万丈目と三沢が同時に叫ぶ。銀髪から目を離すと、十代が倒れているのが見え…ってはぁ！？

「十代！」

「勇香？」

私も慌てて十代に駆け寄って抱き起こした。気絶してるだけみたいだけど、急にどうしたんだ？今のデュエルが原因か？

「…誰か十代を保健室に運んでくれ」

「僕が行くよ。三沢君も手伝って」

「わかった」

俊也達も観戦してたみたいだな。俊也と三沢が十代を運んでいった。

「何があったか知らねえけど、誰だあの銀髪スーツ？」

「プロデュエリストのエド・フェニックス。一応ここのオベリスク・ブルーの生徒だけど、プロの仕事があるから授業はほとんど受けてないそうよ」

璃音が簡潔かつ丁寧に教えてくれた。十代を倒した上にプロっていうくらいだし、実力はあるんだろうな。

「そうか。ありがとな」

私は踵を返して出口に向かった。

「どこに行く気だ？」

「別に」

将人の質問には、曖昧な返事しかしなかった。

ええと、あいつは…お、いたいた。

エドを見つけたのは夕方の浜辺だった。とりあえず声を掛けるか。

「よぉ」

「？…君はさっきすれ違った…」

「へぇ、覚えててくれたみてえだな」

「女性がそんな荒っぽい話し方をするんじゃない」

「生憎ごろつき共がうじゃうじゃいるような世界で育ったもんでな。気を強く持たなきゃやってけねえよ」

物心がついた時からサテライトで生活してたんだ。口調も周りに影響されらぁ。

「そうかい。で、僕に何か用かな？」

「私とデュエルしてくれないか？」

「デュエル？」

「さっき聞いたけど、お前プロなんだってな。十代も倒したくらいだし、どんだけ強いのか気になってよ」

「…いいだろう。どうせ今日は非番だ」

案外あっさり受けてくれたな。断られるかと思ってたけど。

「デッキは…『Ｄ－ＨＥＲＯ』だっけ？それで行ってくれよ」

「何？」

「復讐だの何だの言ってたけど、要するにそのデッキがお前の本気なんだろ？お互い本気でぶつかり合うのが１番だ」

「また熱い奴に絡まれたな…。…君はシンクロ召喚は使うのか？」

「シンクロ？ああ、使うけどそれがどうかしたか？」

「僕からも指名するよ。君はシンクロ召喚のデッキを使ってくれ。シンクロモンスターの噂はこの学園でちらほら聞いている。１度この目で確かめたいと思っていた」

「指名も何も、私のデッキはこれ１つしかないけどな。言われなくても使うつもりだ！」

私はデュエルディスクを展開させて、デッキを自動でシャッフルした。エドもデュエルの準備をしている。

「先に言っとくけど、手を抜くんじゃねえぞ」

「当たり前だ」

「「デュエル！」」

勇香ｖｓエド

「先攻は譲ろう」

「なら、遠慮なく行くぜ！ドロー！私はレベル６の《ラヴァル・ランスロッド》を召喚！」

私が最初に召喚したのは、灼熱の槍を持ったモンスターだ。

《ラヴァル・ランスロッド》　ＡＴＫ／２１００

「レベル６のモンスターを生け贄なしで召喚しただと？」

「こいつはエンドフェイズ時に破壊される代わりにリリースなしで召喚できる！そして、レベル５以上の炎属性モンスターの召喚に成功した時、ライフを５００払う事で手札からチューナーモンスター《地獄鴉》を特殊召喚できる！」

勇香　ＬＰ／４０００→３５００

烏の羽を背負った女の小人が現れる。人だけど鳥獣族だ。

《地獄鴉》

チューナー（効果モンスター・オリジナル）

星２／炎属性／鳥獣族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ１０００

自分がレベル5以上の炎属性モンスターの召喚に成功したとき、ライフを５００ポイント払うことで手札から特殊召喚できる。

《地獄鴉》　ＡＴＫ／１０００

「チューナーモンスター…早速来るか」

「レベル６《ラヴァル・ランスロッド》にレベル２《地獄鴉》をチューニング！蠢く核が、鴉の魂と共鳴する！覚悟の炎よ、燃え上がれ！」

☆６＋☆２＝☆８

「シンクロ召喚！吹き飛ばせ！《神の火―霊烏路》！」

右手がオレンジの制御棒になり、一般人並の大きさになった《地獄鴉》が黒い翼を広げる。

《神の火―霊烏路》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星８／炎属性／鳥獣族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ１０００
「地獄鴉」＋チューナー以外の炎属性モンスター１体以上
このカードの攻撃力・守備力は自分の墓地の炎属性モンスターの数×５００ポイントアップする。
また、このカードが戦闘によってモンスターを破壊した時、コイントスを１回行い以下の効果を発動する。
●表：相手ライフに自分の墓地の炎属性モンスターの数×２００ポイントダメージを与える。
●裏：自分は自分の墓地の炎属性モンスターの数×２００ポイントダメージを受ける。

《神の火ー霊烏路》　ＡＴＫ／１０００

「これがシンクロ召喚…！」

「こいつの攻撃力と守備力は私の墓地の炎属性モンスター1体につき５００ポイントアップする！墓地の炎属性モンスターは2体！１０００ポイントアップだ！」

《神の火ー霊烏路》　ＡＴＫ／１０００→２０００

「カードを2枚セットしてターンエンド！」

勇香
ＬＰ／３５００
手札／2
モンスター／《神の火ー霊烏路》（ＡＴＫ／２０００）
魔法・罠／リバース×2

「僕のターン！フィールド魔法《幽獄の時計塔》を発動！」

周りがソリッドビジョンで夜の町に変わった。でかい時計塔がそびえ立つ。

《幽獄の時計塔》
フィールド魔法
相手ターンのスタンバイフェイズ時に、このカードに時計カウンターを1個乗せる。
時計カウンターの合計が4個以上になった場合、このカードのコントローラーは戦闘ダメージを受けない。

時計カウンターが４個以上乗ったこのカードが破壊され墓地へ送られた時、手札またはデッキから「Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドガイ」１体を特殊召喚する。

「そして魔法カード《Ｄ－スピリッツ》を発動！自分フィールド上にＤ－ＨＥＲＯが存在しない時、手札からレベル４以下のＤ－ＨＥＲＯ１体を特殊召喚できる！」

《Ｄ－スピリッツ（ディー）》
通常魔法
自分フィールド上に「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターが存在しない場合、手札からレベル４以下の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

「カモン！《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ》！」

体中に水晶をくっつけたマントの男が現れた。Ｄ－ＨＥＲＯって…ＨＥＲＯにも種類があるのか？

《Ｄ－ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）　ダイヤモンドガイ》
効果モンスター
星４／闇属性／戦士族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ１６００
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。
それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、次の自分のターンのメインフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動する事ができる。
通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ》　ＤＥＦ／１６００

「ダイヤモンドガイのエフェクト発動！デッキの上からカードを１枚めくり、それが通常魔法だった場合セメタリーに送る事で、次の僕のターンのメインフェイズ時にセメタリーに送ったカードのエフェクトを発動できる！」

エフェクトにセメタリーって…奇妙な言い回しをする奴だな。

「めくったのは通常魔法（デスティニー・ドロー）！よって、このカードのエフェクトが次の僕のターンで発動する事が決定した！」

《デスティニー・ドロー》
通常魔法（制限カード）
手札から「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード１枚を捨てて発動する。
自分のデッキからカードを２枚ドローする。

「そして、《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイハードガイ》を召喚！」

今度は両腕に巨大な装甲を身につけた半裸の男が現れた。

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイハードガイ》
効果モンスター
星３／闇属性／戦士族／ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ　８００
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、このカードを除く自分フィールド上の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた場合、そのモンスター１体を次の自分のスタンバイフェイズ時に自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイハードガイ》　ＡＴＫ／　８００

「カードを2枚セットしてターンエンドだ」

エド
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ》（ＤＥＦ／１６００）《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイハードガイ》（ＡＴＫ／　８００）
魔法・罠／《幽獄の時計塔》リバース×２

いきなり手札を全部消費しやがった…。Ｄ－ＨＥＲＯってどんなカテゴリなんだ？

「私のターン！」

「《幽獄の時計塔》のエフェクト発動！相手のスタンバイフェイズ毎に時計カウンターを1つ乗せる！」

《幽獄の時計塔》　Ｔ／０→１

時計塔の針が『3』の文字を差す。私のスタンバイフェイズでカウンターが乗る…あまり居座らせたくねえけど、今はフィールド魔法を破壊できるカードはない。

「魔法カード《おろかな埋葬》！デッキからモンスターを1体墓地に送る！私は《ラヴァル炎火山の侍女》を墓地に送る！そして、《ラヴァル炎火山の侍女》が墓地に送られた時に墓地にこいつと同名

以外のラヴァルがいる時、デッキからラヴァル１体を墓地に送る事ができる！デッキから２枚目の《ラヴァル炎火山の侍女》を墓地へ！さらに今墓地に送った侍女の効果で３枚目の侍女を墓地へ！そして、３枚目の効果で《ラヴァルバーナー》を墓地に送る！」

《ラヴァルバーナー》
効果モンスター
星５／炎属性／炎族／ＡＴＫ２１００／ＤＥＦ１０００
自分の墓地に「ラヴァル」と名のついたモンスターが３種類以上存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

「そんなに墓地にモンスターを溜めてどうするつもりだ？」

「さっき言ったろ？霊烏路の攻撃力は墓地の炎属性モンスターの数だけ攻撃力と守備力が上がるって！」

《神の火ー霊烏路》　ＡＴＫ／２０００→４０００

「攻撃力４０００だと！？」

墓地肥やしのスピードが早い分、こいつの攻撃力も上がりやすい。除外とかのやりくりもあるから高いままでの維持はしづらいけどな。

「バトル！《神の火ー霊烏路》でダイハード・ガイを攻撃！爆符『ギガフレア』！」

霊烏路が右腕の制御棒から炎をレーザー光線のごとくぶっ放す。

「罠カードオープン《Ｄ－シールド》！攻撃表示のＤ－ＨＥＲＯが攻撃対象になった時、そのモンスターを守備表示にしてこのカード

を装備する！」

《Ｄ－シールド》
通常罠
自分フィールド上に攻撃表示で存在する「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターが攻撃対象になった時に発動する事ができる。
このカードは装備カードとなり、攻撃対象になったモンスターを守備表示にしてこのカードを装備する。
装備モンスターは戦闘によっては破壊されない。

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイハードガイ》　ＡＴＫ／　８００→ＤＥＦ／８００

「そして、装備モンスターは戦闘で破壊されない！」

ダイハードガイを青い岩が取り囲み、炎の砲撃を全部受け切った。
戦闘破壊できてないからダメージ効果はなしか…。

「攻撃はこれで終わりじゃないぜ！罠カード《溶岩の奇跡》！このカードは手札のラヴァル１体を除外して発動する！《ラヴァル・ウォリアー》を除外して効果発動！２つの効果から１つを選択して発動する！」

《溶岩の奇跡》
通常罠（オリジナル）
手札から「ラヴァル」と名のついたモンスター１体を除外して発動する。
以下の効果から１つを選択して発動する。
●墓地の決められたモンスターを除外し、「ラヴァル」と名のついたシンクロモンスターをシンクロ召喚する。

●自分のデッキから「ラヴァル」と名のついたモンスターを2体除外する事で、墓地から「ラヴァル」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

「私は1つ目の効果を発動！墓地のモンスターを除外してシンクロ召喚を行う！」

「まるで《ミラクル・フュージョン》だな。罠カードだから余計たちが悪い…！」

まあ、罠だからバトルフェイズ中に使って追撃できるわけだしな。

「墓地のレベル5《ラヴァル・バーナー》とレベル1《ラヴァル炎火山の侍女》を除外してチューニング！紅（あか）と蒼（あお）の双炎が、戦士の魂と共鳴する！覚悟の炎よ、燃え上がれ！」

☆5＋☆1＝☆6

「シンクロ召喚！焼き払え！《ラヴァル・グレイター》！」

右手に紅、左手に蒼。2つの炎を体に宿した戦士が光の柱から飛び出した。

《ラヴァル・グレイター》
シンクロ・効果モンスター
星6／炎属性／戦士族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ　８００
チューナー＋チューナー以外の炎属性モンスター1体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分は手札を1枚墓地へ送る。
このカードがカードの効果によって破壊される場合、代わりに自分

の墓地に存在する「ラヴァル」と名のついたモンスター1体をゲームから除外する事ができる。

《ラヴァル・グレイター》　ＡＴＫ／２４００

「墓地の炎属性モンスターが減った事で、霊烏路の攻撃力も下がる」

《神の火ー霊烏路》　ＡＴＫ／４０００→３０００

「《ラヴァル・グレイター》がシンクロ召喚に成功した時、手札を1枚墓地に送る！さらに墓地に送った魔法カード《グレイブ・ドロー》の効果発動！カードを2枚ドロー！」

これで損失は0だ。さっさと水晶男を潰す！

「《ラヴァル・グレイター》でダイヤモンド・ガイに攻撃！ダブルアーム・ファイア！」

グレイターが両手から2色の炎を放ち、水晶男を焼き払った。守備表示なのが惜しいな。

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

「エンドフェイズ時に罠カード《エターナル・ドレッド》を発動！《幽獄の時計塔》に時計カウンターを2つ乗せる！」

《エターナル・ドレッド》
通常罠
「幽獄の時計塔」に時計カウンターを2個乗せる。

《幽獄の時計塔》　Ｔ／1→3

針が１８０°回転して『9』の文字を差す。何か嫌な予感がするな…。

勇香
ＬＰ／３５００
手札／１
モンスター／《神の火ー霊烏路》（ＡＴＫ／３０００）《ラヴァル・グレイター》（ＡＴＫ／２４００）
魔法・罠／リバース×２

「僕のターン、ドロー！ダイヤモンドガイのエフェクトで墓地に送った《デステニー・ドロー》のエフェクト発動！カードを2枚ドローする！」

手札が3枚に増えたか。どう出る？

「そして、ダイハードガイのエフェクト発動！前のターンで戦闘破壊されたＤ－ＨＥＲＯをスタンバイフェイズで特殊召喚する！カモン、ダイヤモンドガイ！」

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ》　ＡＴＫ／１４００

蘇生効果かよ…。戦闘破壊もできないし、厄介なモンスターだな。

「ダイヤモンドガイのエフェクト発動！デッキのカードを1枚めくる！…めくったのは通常魔法！セメタリーに送る！次の僕のスタンバイフェイズでの発動が決定した！」

また引き当てやがった。運のいい奴だな。しかも《ライトニング・ボルテックス》って…私のモンスターがほぼ確実に全滅しちまうじゃねえか…。

「魔法カード《天使の施し》を発動！カードを3枚ドローして手札を2枚捨てる！そして、《Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドサーヴァント》を召喚！」

杖とマントを身につけた、文字通りドレッドヘアーの男が召喚された。

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドサーヴァント》
効果モンスター
星３／闇属性／戦士族／ＡＴＫ　４００／ＤＥＦ　７００
このカードが召喚に成功した時、「幽獄の時計塔」に時計カウンターを１つ置く。
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分フィールド上の魔法・罠カード１枚を破壊する事ができる。

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドサーヴァント》　ＡＴＫ／　４００

「このモンスターの召喚に成功した時、《幽獄の時計塔》に時計カウンターを１つ乗せる！」

またそれかよ…。針は１周して『１２』を差した。

《幽獄の時計塔》　Ｔ／３→４

「これで運命は決した。君は敗北という運命から逃れる事はできない！」

「運命？」

「バトル！ドレッドサーヴァントで《神の火ー霊烏路》に攻撃！」

「は？」

ドレッドサーヴァントが霊烏路に向かっていったけど、制御棒で薙ぎ払われて破壊された。

「《幽獄の時計塔》に時計カウンターが４つ以上乗っている時、僕は戦闘ダメージを受けない！」

「何を狙ってるかは知らねえけど、攻撃する相手を間違えたな！霊烏路がモンスターを戦闘破壊した時にコイントスをして、表なら相手に私の墓地の炎属性モンスター１体につき２００ポイントのダメージを与え、裏なら代わりに私がダメージを受ける！」

「何？」

ソリッドビジョンのコインが現れ宙を舞う。結果は…。

「…表だ！墓地の炎属性モンスター４体分、８００ポイントのダメージを受けてもらうぜ！焔星『十凶星』！」

霊烏路がフィールド全体から炎を発生させ、エドにダメージを与えた。

「くぅっ！」

エド　ＬＰ／４０００→３２００

「そんな効果があったとは…。だが、ドレッドサーヴァントのエフェクトが発動する！戦闘破壊された時、自分の魔法・罠カードを１枚破壊できる！《幽獄の時計塔》を破壊する！」

周りの建物が音を立てて崩れていく。カウンターを４つ乗せないと効果を発動できないのに、戦闘ダメージ無効だけじゃ割に合わない。何か来るな…！

「時計カウンターが４つ乗った《幽獄の時計塔》が破壊された時、手札かデッキから特定のモンスターを特殊召喚できる！カモン！《Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドガイ》！！」

時計塔が破壊され、中から巨人が飛び出した。半裸で手首足首に鎖付きの鉄の輪が付けられていて、頭には鉄仮面を被っている。そして、景色が浜辺に戻った。

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドガイ》
効果モンスター
星８／闇属性／戦士族／ＡＴＫ　？／ＤＥＦ　？
「幽獄の時計塔」の効果で特殊召喚した場合、自分フィールド上の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター以外の自分のモンスターを全て破壊する。
その後、自分の墓地から「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターを２体まで特殊召喚する事ができる。
このカードが特殊召喚されたターン、自分フィールド上の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターは破壊されず、コントローラーへの戦闘ダメージは０になる。
このカードの攻撃力・守備力は、自分フィールド上のこのカードを

除く「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドガイ》　ＡＴＫ／　？

「こいつは、さっき十代にとどめを刺した…！」

「ドレッドガイのエフェクト発動！《幽獄の時計塔》のエフェクトで特殊召喚された時、自分フィールド上のＤ－ＨＥＲＯ以外のモンスターを全て破壊し、セメタリーからＤ－ＨＥＲＯを2体特殊召喚する！カモン、《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ》！《Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドサーヴァント》！」

体にいくつか車輪が付いた1本足のモンスターが現れ、ドレッドサーヴァントが蘇る。

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ》
効果モンスター
星６／闇属性／戦士族／ＡＴＫ２１００／ＤＥＦ１０００
自分フィールド上のモンスター1体を生け贄に捧げる事で、このターンのエンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。
この効果は1ターンに1度しか使用できない。
このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。
このカードが墓地に存在する場合、1度だけドローフェイズ時にドローしたモンスターカードをお互いに確認し特殊召喚する事ができる。

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ》　ＡＴＫ／２１００

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドサーヴァント》　ＡＴＫ／　４００

「そして、ドレッドガイの攻撃力と守備力は自分フィールド上のＤ－ＨＥＲＯの元々の攻撃力を合計した数値になる！」

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドガイ》　ＡＴＫ／　？→４７００

「攻撃力４７００！？」

Ｄ－ＨＥＲＯの攻撃力の合計がドレッドガイの攻撃力と守備力になる。何とかしてＤ－ＨＥＲＯの数を減らせれば…！

「ダッシュガイのエフェクト発動！Ｄ－ＨＥＲＯ１体を生け贄にして、エンドフェイズ時まで攻撃力を１０００ポイントアップさせる！ドレッドサーヴァントを生け贄にする！」

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドガイ》　ＡＴＫ／４７００→４３００

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ》　ＡＴＫ／２１００→３１００

「バトル！ドレッドガイで《神の火－霊烏路》を攻撃！プレデター・オブ・ドレッドノート！」

ドレッドガイがでかい図体を利用して平手打ちをかます。攻撃名がそれなりに長いのにただの平手打ちって…。

「ちぃっ！」

勇香　ＬＰ／３５００→２２００

「永続罠（フレイム・チェンジ）！炎属性のシンクロモンスターが破壊された時、デッキから破壊されたモンスターのレベル以下のモンスターを特殊召喚する！」

《フレイム・チェンジ》
永続罠（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在する炎属性のシンクロモンスターが戦闘によって破壊された時、デッキから破壊されたモンスターのレベル以下の炎属性モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果で特殊召喚されたモンスターはエンドフェイズまで戦闘では破壊されない。

「デッキから《灼熱工の巨匠カエン》を特殊召喚！」

霊烏路と入れ代わりで、赤いグラサンを掛けて高熱を宿す槌を持ったごついおっさんが現れた。

《灼熱工（しゃくねつこう）の巨匠カエン》
効果モンスター
星3／炎属性／岩石族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ　２００
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。
自分フィールド上に表側表示で存在する「ラヴァル」と名のついたモンスターの攻撃力は４００ポイントアップする。

《灼熱工の巨匠カエン》　ＤＥＦ／　２００

「この効果で特殊召喚したモンスターは、このターンの間だけ戦闘では破壊されない！」

「ちっ…今は無視しておくか。ダッシュガイで《ラヴァル・グレイター》を攻撃！ライトニング・ストライク！」

ダッシュガイが加速してグレイターに突撃し、破壊してしまった。

「うぁっ…！」

勇香　ＬＰ／２２００→１５００

「く…もう１度の効果（フレイム・チェンジ）を発動…！」

「次はどのモンスターを出すんだい？今更何を出しても無駄だろうけど」

「言ってくれるじゃねえか…！」

出すのはこいつだ。頼んだぜ、相棒！

「チューナーモンスター《ラヴァル炎樹海（えんじゅかい）の妖女（ようじょ）》を特殊召喚！」

呼び出したのは、フード付きのマフラーを首に巻いた赤い髪の少女ことロコナだ。

《ラヴァル炎樹海の妖女》
チューナー（効果モンスター）
星２／炎属性／炎族／ＡＴＫ　３００／ＤＥＦ　２００
このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分フィールド上に表側表示で存在する「ラヴァル」と名のついたモンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで、自分の墓地に存在する「ラヴァル」

と名のついたモンスターの数×２００ポイントアップする。

《ラヴァル炎樹海の妖女》　ＤＥＦ／　２００

『あ、おじさん達がたくさんいる～！』

「（相変わらず呑気だな、おい）」

あんなごつくて怪しいヒーロー共を『おじさん』の一言で片付けるなんて、やっぱ純粋な子供だな。

「チューナー…またシンクロ召喚をする気か…。攻撃したダッシュガイは、バトルフェイズ終了時に守備表示になる」

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ》　ＡＴＫ／３１００→ＤＥＦ／１０００

「カードを1枚セットしてターンエンドだ」

エド

ＬＰ／２８００

手札／１

モンスター／《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ》（ＡＴＫ／１４００）《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイハードガイ》（ＤＥＦ／　８００）《Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドガイ》（ＡＴＫ／４３００）《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ》（ＤＥＦ／１０００）

魔法・罠／《Ｄ－シールド》リバース×１

モンスターがうじゃうじゃいやがる…。抜け道はドレッドガイだな。ダッシュガイとダイヤモンドガイをどかせば簡単に戦闘破壊で

きる。問題はそれをどうやるか…。

「（手札にはダガーガイがいる。万が一ダイヤモンドガイを攻撃してきたとしても大丈夫だ）」

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ダガーガイ》
効果モンスター
星３／闇属性／戦士族／ＡＴＫ　３００／ＤＥＦ　６００
手札からこのカードを捨てる。
自分フィールド上に表側表示で存在する「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターは、このターンのエンドフェイズ時まで攻撃力が８００ポイントアップする。
この効果は相手ターンのバトルフェイズ中のみ使用する事ができる。

ただ、気になる事がある。

「…なあ、復讐だの何だの言ってたけど、一体何の話だ？」

「何だ急に？」

「十代との会話…どうもお前のヒーローに対するこだわりに違和感があってな。気になってたんだ」

「…僕の父さんは、ペガサス会長の元でカードデザイナーとして活躍していた」

エドは私を訝しげに睨んだ後、私の質問に答えてくれた。

「だが、父さんは何者かに殺された」

「…！」

「父さんはＤ－ＨＥＲＯのカードを作成していて、その中には『究極のＤのカード』があった」

「『究極のＤ』？」

「そいつは、父さんを殺した揚げ句、その究極のＤのカードを奪っていった。警察も行方を追っているが、犯人は未だに見つからない」

「それで、自分の手で探し出して復讐するってか」

「そうだ！僕は復讐を誓った！このＤ－ＨＥＲＯで、父さんを殺し究極のＤのカードを盗んだ奴を裁く！」

「なるほどな…。で、十代がムカつくってのは…」

「十代のヒーローに対する想いは軽い。憧れだけで使うなんて反吐が出る。父さんを殺した犯人に復讐を誓う運命のヒーロー…このＤ－ＨＥＲＯこそが真のヒーローだ！」

言いたい事はわかった。親父を殺した犯人に復讐するためにＤ－ＨＥＲＯを使っていると。そして、軽々しくヒーローを使うなって事か…。

「…復讐が１００％悪い事だとは言わねえ。復讐自体は私は止めねえよ。けどな…そのＤ－ＨＥＲＯは、復讐のため『だけ』に作られたわけじゃねえだろ？」

「！」

「ヒーローってのも難儀だよな。『復讐』っていう重い運命を背負って、そのためだけに戦わなきゃいけねえなんてよ…」

「何が言いたい！？」

「復讐にこだわりすぎなんだよ。周りが見えてねえ。そのうち大事なもんまで捨てちまうぞ？」

「何…？」

「『憧れだけでヒーローを使う奴がムカつく』だ？ヒーローはいつ復讐や運命と＝で繋がるようになったよ？復讐のためだけに戦って他人をけなす奴はもうヒーローじゃねえ。ただの復讐鬼だ」

「っ！」

「私の友人に、復讐を成し遂げた奴がいる。確かに、あいつは相手を恨んでた。でもな、恨みに完全に飲み込まれはしなかった。大事なもんははっきり見えてたぜ？」

私はその場にいなかったけど、月沙と尾形って奴の話は聞いてる。悲しみに負けかけはしたけど、恨みに負ける事はなかった。あいつは復讐はもちろん、『仲間を護るため』にも戦ったんだ。そして、スイレンやトリシューラ達を1度も『復讐の道具』として見なかった。

「お前はＤ－ＨＥＲＯを『復讐の道具』にしかけてる！そんなんじゃ、犯人どころか私も倒せない！」

「復讐の道具…だと…？」

「Ｄ－ＨＥＲＯを道具として見る事は、お前とＤ－ＨＥＲＯの間にある絆を否定する事と同じだ！そんな真似は、私が許さねえ！」

「絆…」

「行くぜ…！私のターン！！」

次のエドのターンで《ライトニング・ボルテックス》が発動して私のモンスターは一掃されちまう。このターンで終わらせる！

「魔法カード《強欲な壺》！カードを2枚ドロー！そして、速攻魔法（サイクロン）を発動！リバースカードを破壊する！」

破壊したのは…《Ｄ－カウンター》か。

《Ｄ－カウンター》
通常罠
自分フィールド上に表側表示で存在する「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターが攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。攻撃モンスターを破壊する。

「《灼熱工の巨匠カエン》をリリースして、《輪禍－火焔猫》をアドバンス召喚！」

まず手始めに、赤い髪で猫耳が生えた少女のモンスターを召喚する。

《輪禍－火焔猫（かえんびょう）》

効果モンスター（オリジナル）
星６／炎属性／炎族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１５００
このカードがアドバンス召喚に成功した時、自分の墓地からレベル４以下の炎属性モンスター１体を自分フィールド上に守備表示で特殊召喚できる。
このカードが戦闘によってモンスターを破壊する度に自分フィールド上に怨霊トークン（炎族・炎属性・星１・攻／守０）１体を守備表示で特殊召喚する。

《輪禍ー火焔猫》　ＡＴＫ／２４００

「火焔猫がアドバンス召喚に成功した時、墓地のレベル４以下の炎属性モンスター１体を守備表示で特殊召喚する！レベル２の《地獄鴉》を特殊召喚！」

《地獄鴉》　ＤＥＦ／１０００

「そして、墓地にラヴァルが３種類以上いる事で手札から《ラヴァルバーナー》を特殊召喚する！」

両手に灼熱の篭手を装備した屈強なモンスターが現れる。

《ラヴァルバーナー》　ＡＴＫ／２１００

「レベル５《ラヴァルバーナー》にレベル２《地獄鴉》をチューニング！焦熱の大砲が、聖なる魂と共鳴する！覚悟の炎よ、燃え上がれ！」

☆５＋☆２＝☆７

「シンクロ召喚！発射せよ！《ラヴァル・ステライド》！」

左手がキャノン砲になり、黄色の鎧を纏った青い巨人が現れた。

《ラヴァル・ステライド》　ＡＴＫ／２７００

「ステライドがシンクロ召喚に成功した時、私は手札を１枚捨てる。最も、手札はないけどな」

「だが、そのモンスターだけじゃ僕を倒す事はできない！」

「こいつだけじゃな。お前がこんな馬鹿でかいモンスターを出したんだ、私も切り札を見せないと失礼だよな？」

「切り札？」

「レベル６《輪禍ー火焔猫》にレベル２《ラヴァル炎樹海の妖女》をチューニング！」

『後はよろしく！』

ロコナが２つの赤い輪に、火焔猫が６つの星になって同調する。

「真紅の烈火が、火竜の魂と共鳴する！覚悟の炎よ、燃え上がれ！」

☆６＋☆２＝☆８

「シンクロ召喚！焼き尽くせ！《ラヴァルフレイム・ドラゴン》！！」

赤い模様が刻まれ赤みを帯びた茶色の体に、炎を思わせる赤い翼。胸には青い宝玉が埋め込まれている。そして、青い瞳がエドを見据える。溶岩から生まれたような火竜（サラマンダー）。こいつが私の切り札だ！

《ラヴァルフレイム・ドラゴン》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星８／炎属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２２００
チューナー＋チューナー以外の炎属性モンスター１体以上
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
１ターンに１度、自分の墓地に存在する炎属性モンスター１体につき２００ポイントのダメージを相手に与える。
この効果を使用したターン、このカードは攻撃する事ができない。
このカードが相手によって破壊され墓地に送られた時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体につき４００ポイントダメージを相手に与える事ができる。

《ラヴァルフレイム・ドラゴン》　ＡＴＫ／３０００

『グオォォォォォォォ！！』

ラヴァルフレイムが雄叫びを上げる。戦闘準備は済んでるみたいだな。

「《ラヴァルフレイム・ドラゴン》…！」

「墓地の《ラヴァル炎樹海の妖女》の効果発動！フィールド上から墓地に送られたターンの間、私の場のラヴァルは墓地のラヴァル１体につき２００ポイント攻撃力がアップする！墓地のラヴァルは６

体！攻撃力は１２００ポイントアップする！」

《ラヴァル・ステライド》　ＡＴＫ／２７００→３９００

《ラヴァルフレイム・ドラゴン》　ＡＴＫ／３０００→４２００

「１２００ポイントだと！？」

「まだだ！墓地の《灼熱工の巨匠カエン》の効果発動！こいつを墓地から除外する事で、私の場のラヴァルの攻撃力を４００ポイントアップさせる！」

《ラヴァル・ステライド》　ＡＴＫ／３９００→４３００

《ラヴァルフレイム・ドラゴン》　ＡＴＫ／４２００→４６００

「攻撃力４０００オーバーが…２体…！？」

「バトル！《ラヴァル・ステライド》でダイヤモンドガイを攻撃！ボルケーノ・キャノン！」

ステライドの左手のキャノン砲から巨大な火球が発射され、水晶男を燃やし尽くす。

「ぐわぁっ！」

エド　ＬＰ／３２００→　３００

「Ｄ－ＨＥＲＯが減った事で、ドレッドガイの攻撃力も下がる！」

《Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドガイ》　ＡＴＫ／４３００→２９００

「馬鹿な…！（手札のダガーガイを使ったとしても、ライフが持たない…）」

「これでとどめだ！《ラヴァルフレイム・ドラゴン》でドレッドガイを攻撃！バーニング・ブレイザー！！」

火竜が吐き出す真紅の炎が、幽獄の巨人を貫き焼き尽くす。巨人は地獄に堕ちるかのように灰となった。

「うわぁあぁあぁあぁあぁ！！」

エド　ＬＰ／　３００→　０

勇香　ＷＩＮ

「そんな…この僕が、負けるなんて…」

デュエルが終わると、エドはこの世の絶望を見たかのような顔で膝をついた。プロが一般人に負けたってのもあるけど、こいつのＤ－ＨＥＲＯに懸ける想いはもっと別にある。

「復讐復讐って…悪かねえけど、憎しみに捕われてばかりじゃ、勝てるもんも勝てなくなるんじゃねえか？」

「…っ！」

そんなに睨むなよ。少し話しにくいじゃねえか。

「さっき、十代を憧れだけでヒーローを使うからムカつくとか、終いには雑魚扱いしただろ?復讐は他人を見下す理由にはならねえよ。悪い事でもしない限り、誰がヒーローを使うかなんて人の勝手だろ?早い話が、『ヒーローナメんな』ってわけだ」

「お前に僕の何がわかる!?ＨＥＲＯを1枚も使わないお前に、父さんを殺され復讐を誓った僕の何が!?」

「ならお前は、ヒーローの気持ちを考えた事があるのかよ?」

私は少し声を低めて問い掛けた。一瞬、音が消える。

「何…?」

「私の知ってるヒーローはな、親父の復讐どころかもっと馬鹿でかいもんを背負って、押し潰されそうになりながらも大切な奴らを護るために戦ってたんだ。カードを盗まれようが、裏切られたと勘違いされて仲間に牙を向けられようが、家族の仇に追い詰められようが、諦めずに立ち向かい打ち破って、そして救い出した。それでいて、他人を思いやる気持ちを忘れなかった」

あいつの心の叫びは今でも忘れられねえ。それでも、あいつは憎しみに捕われる事はなかった。

「お前が使うＤ－ＨＥＲＯも、重いもんを背負わされて押し潰されかけてんじゃねえか?そのうちついてこれなくなっちまう」

「Ｄ－ＨＥＲＯが…?」

「ヒーローってのは、希望を与えるもんだろ?その先に大切なもん

を捨てるような絶望があっちゃ駄目だろ。運命に押し潰されるか、乗り越えて真正面から向き合えるかは使い手次第だ。今のお前だと前者になっちまうかもしれねえけどな」

「…僕は、Ｄ－ＨＥＲＯと真正面から向き合えてないと言うのか…？」

「復讐にしか目がいってない内はな。復讐だけが人生の全てじゃねえんだ。Ｄ－ＨＥＲＯ（そいつら）も復讐は望んでるだろうけど、いつも復讐だけ考えて顔をしかめてるだけの主を見たくはないと思うぜ？」

相当な思い入れがあるんだ、これで絆がないなんてのは嘘だろ。もしこいつらが精霊だったら、エドに何て声を掛けるんだろうな？

「今は私の言ってる事はわからないかもしれねえけど、いつかわかる日が来るさ。それじゃ、またな」

言いたい事は全部言い切った。後はあいつ次第だ。そう考えて、私は背を向けて歩き出した。

「…1つだけ聞かせてほしい」

エドの質問で、私は一旦足を止める。

「何だ？」

「お前にとってのヒーローとは、一体何だ？」

「私にとっての、ねえ…。こういう奴が好きってのじゃ、駄目か？」

「構わない」

なら、答えは決まりだな。私は振り返って答えを告げた。

「大切なもんを見失わないで、自分の意思を貫き通す。そんな奴が好きだ！」

「…そうか」

「またな。次にやる時は、もっと楽しいデュエルにしようぜ」

そして、私は今度こそ浜辺を後にした。

『ユウカ、お菓子ちょうだい！』

「寮に戻ったらな」

菓子を催促するロコナを適当にあしらいながら、私は夕方の森の中を歩いている。

「勇香」

「！」

後ろから声を掛けられた。将人だ。

『マサト！』

「やはり、お前らは強いな」

「何だ、さっきのデュエル見てたのか？」

「お前が何をやらかすか、気になったからな」

「だったら一言言ってくれりゃいいのに…」

まあ、いいか。さっさと帰って飯だ飯。

「…勇香、お前が言ってた諦めないで立ち向かったヒーローって、誰の事だ？」

「ん？ああ、あれか？」

あいつは…周りから見ればヒーローで、私から見れば大切な仲間だ。そんで、元チームメイト。

「ネオ童実野シティの希望の星だ」

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第４８話　復讐だけが人生じゃない（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「勇香、お疲れ様」

フィレス『ガウルッ』

勇香「ああ、サンキュー。ようやく切り札を出せたぜ」

ロコナ『私も活躍したよ！』

璃音「エド・フェニックス…復讐のせいで完全に堕ちなければいいけど…」

勇香「そうならないようにいろいろ言ったんだろうが。後はあいつ次第だ。ま、間違った道に行くようなら止めるけどな」

璃音「それじゃ、カード考察に入りましょうか。今回紹介するのは、勇香のパートナー、ロコナのカード《ラヴァル炎樹海の妖女》よ」

《ラヴァル炎樹海の妖女》
チューナー（効果モンスター）
星２／炎属性／炎族／ＡＴＫ　３００／ＤＥＦ　２００
このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分フィールド上に表側表示で存在する「ラヴァル」と名のついたモンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで、自分の墓地に存在する「ラヴァル」と名のついたモンスターの数×２００ポイントアップする。

ロコナ『あ、私だ！』

璃音「フィールド上から墓地に送られた時に、一時的にラヴァルの攻撃力を上げる効果を持っているわ」

勇香「墓地にラヴァルが溜まってれば、上昇値も馬鹿にならない。エンドフェイズまでしか持たないけど、フィニッシュでも一役買ってくれるな」

ロコナ『守備力が２００の炎属性だから、《真炎の爆発》にも対応してるよ！』

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『感想待ってま～す！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

今回勇香が使用した《地獄鴉》《神の火ー霊烏路》《輪禍ー火焔猫》はＨＩＲＯさんが、《溶岩の奇跡》は言羽・Ｄ・カタストロフィーさんが投稿してくださったオリカです。そして、《ラヴァルフレイム・ドラゴン》は紅煌蒼さんが投稿してくださったオリカを元にして考案しました。皆さん、ありがとうございました。

デュエル後の会話で1番苦労しました。何か変になってなければいいんですが…。

では、また次回！

第４９話　大切な人を傷つける運命は打ち破るもの（前書き）

今回は俊也がデュエルをします。相手は運命力ＭＡＸなあの人です。

それではどうぞ！

第４９話　大切な人を傷つける運命は打ち破るもの

ＳＩＤＥ／ノルフェナ

「ここだ」

緑豊かな集落の中を進み、私は男性に連れられて集落の奥まで来た。

目の前には石で造られた祠（ほこら）があり、半径１０ｍに薄い緑の結界がドーム状に張られている。

「待ってろ。今結界を開ける」

男性が結界に触れて何かを念じると、触れた手を中心に丸い穴が空いた。大きさは丁度人が通れるくらい。

男性はそのまま中に入っていき、私もそれに続く。祠の前に立つと、男性は扉を開いて祀られている物を取り出した。

「ほらよ。風の龍のカードだ」

「ありがとうございます」

私は男性からそれを受け取った。カードの種類はシンクロモンスター。イラストの箇所には伝説の風の龍が描かれている。

「確かに受け取りました」

「継承者が見つかったら、その風の龍の扱いに慣れた後でもう1度来い。石版は今一緒に渡すにはちと早いからな」

「わかりました」

「神の中でも上位に入るお前が見当をつけたんだ。継承者はそいつで間違いないだろ」

「そうだといいのですが…」

「もう少し自信持てよ。まあ、どのみちもうこの祠に戻すつもりはないがな。継承者探しはお前に任せる。そいつもこの小さな祠の中で大人しく寝ているより、外の世界で元気に飛び回る方が幸せだろうからな」

男性はニッと笑いながら言って、結界の出口へと歩き出した。

ＳＩＤＥ／俊也

サッカーボールが宙に浮いては沈み、それを何度も蹴り返す。放課後、僕は特にやる事がないから、いつもの広場でリフティングをしている。

「よっ！」

ボレーシュートを数十木本ある木の内の1本に打ち込み、跳ね返ってきたバウンドしているボールを足で受け止めた。そろそろ休憩しようか。

「やっているわね」

額の汗を拭うと、森の中から璃音が出てきた。

「璃音！」

「喉渇いたでしょ？これ、あげるわよ」

「え？ああ、ありがとう」

璃音から手渡されたペットボトルのキャップを開けて、2、3口飲んだ。中身はスポーツドリンクだ。

「サッカー、上手なのね。部活には入らないの？」

「ニュートラルとの戦いがあるのに、部活に入ってる暇なんてないよ。こうして自由にボールを蹴ってるだけでも充分さ」

なるべくサッカー部員の前でボールを蹴らないようにしてるのはこのためだ。驕ってるわけじゃないけど、万が一勧誘されたら困るからね。この広場の存在を知ってるのは、僕達未来人を始めとするごく一部の人間だけだ。

「そこのお2人さん、ちょっといいですか？」

「「！」」

聞き慣れない声が僕達を呼んだ。

青い長髪の男性で、頭の真ん中にトサカみたいな白い髪がある。

一応、ここの制服を着ている。

「君は…？」

「私は斎王琢磨と申します」

「その斎王さんが何の用かしら？」

璃音は少し警戒している。それもそのはず、この場所はさっきも言ったように一部の人しか知らないからだ。この人と会うのは初めて。なのにここを知ってるなんて、何かある。

「そこの金髪のお方は、風嶺俊也さんですよね？」

「僕を知ってるのか？」

「アカデミアでの噂は聞いています。そこで、私とデュエルしても

らえませんか？」

「デュエル？」

「あなたの実力が知りたいものでして…こういう時は、実際にデュエルするのが１番でしょう？」

どうも胡散臭いな…。でも、せっかくわざわざ来てくれたのに、このまま追い返すのは気が引けるし…。

「…わかった。やろうか」

「ありがとうございます」

僕は岩の傍に置いてあるデュエルディスクを拾って起動させた。

「先攻は譲りますよ」

「わかった。それじゃ、始めようか」

「「デュエル！」」

俊也ｖｓ斎王

「僕のターン！《ランス・リンドブルム》を召喚！」

大きめの槍を持った龍のモンスター。攻撃力はそこそこある。

《ランス・リンドブルム》　ＡＴＫ／１８００

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

俊也
ＬＰ／４０００
手札／４
モンスター／《ランス・リンドブルム》（ＡＴＫ／１８００）
魔法・罠／リバース×１

「私のターン。《アルカナフォースＩＶ－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ》を召喚します」

斎王が召喚したのは、下半身がない黒くて奇妙なモンスターだ。

《アルカナフォースＩＶ（フォー）－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ（ジ・エンペラー）》
効果モンスター
星４／光属性／天使族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ１４００
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、コイントスを1回行い以下の効果を得る。
●表：自分フィールド上に表側表示で存在する「アルカナフォース」と名のついたモンスターの攻撃力は５００ポイントアップする。
●裏：自分フィールド上に表側表示で存在する「アルカナフォース」と名のついたモンスターの攻撃力は５００ポイントダウンする。

《アルカナフォースＩＶ－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ》　ＡＴＫ／１４００

「ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲの効果発動！」

斎王が効果の発動を宣言すると、ソリッドビジョンでＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲのカードが現れ回転を始めた。

「アルカナフォースは召喚時、正位置か逆位置かでその能力が決定します。さあ、ストップの宣言を」

「…ストップ」

カードの回転が止まる。結果は…。

「…正位置です。私のアルカナフォースの攻撃力は５００ポイントアップします」

《アルカナフォースⅣ－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ》　ＡＴＫ／１４００→１９００

「外したか…」

「バトルです。ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲで《ランス・リンドブルム》に攻撃！」

まあ、これくらいは計算済みだけどね。

「罠カード《風霊術－「雅」》！風属性モンスター１体をリリースし、相手モンスター１体をデッキの１番下に戻す！《ランス・リンドブルム》をリリースし、ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲをデッキの１番下へ！」

リンドブルムが風のエネルギーになり、ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲをフィールドから吹き飛ばした。

「む…カードを２枚伏せてターンエンド」

斎王
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／なし
魔法・罠／リバース×２

「僕のターン！」

これは…大ダメージを与えるチャンス！

「《暴風小僧》を召喚！」

風を操る少年。２体分のリリースになってくれるのは、今は特に助かる。

《暴風小僧》
効果モンスター
星４／風属性／天使族／ＡＴＫ１５００／ＤＥＦ１６００
風属性モンスターを生け贄召喚する場合、このモンスター１体で２体分の生け贄とする事ができる。

「このモンスターは風属性モンスター２体分のリリースになる！そして、魔法カード《二重召喚》を発動！このターン、通常召喚を２回まで行える！《暴風小僧》をリリースし、《始祖神鳥シムルグ》をアドバンス召喚！」

突風が巻き起こり、金色に輝く神鳥がフィールドに舞い降りた。

《始祖神鳥シムルグ》　ＡＴＫ／２９００

「シムルグの効果発動！風属性モンスターのみのリリースでアドバンス召喚に成功した時、相手フィールド上のカードを2枚まで手札に戻す！リバースカード2枚を手札へ！アゲインスト・ブラスト！」

暴風がリバースカードを全て吹き飛ばす。これで完全にがら空きだ。

「少々まずいですね…」

「バトル！《始祖神鳥シムルグ》でダイレクトアタック！アンセスター・トルネード！」

シムルグが起こした金色の竜巻が斎王を打ちつける。さすがにこれは効いたはずだ。

「ぬぅぅぅぅっ！」

斎王　ＬＰ／４０００→１１００

「ライフを一気に削った…！」

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

俊也
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《始祖神鳥シムルグ》（ＡＴＫ／２９００）
魔法・罠／リバース×１

「私のターン。魔法カード《天使の施し》。カードを3枚ドローし、手札を2枚捨てます。そして魔法カード《カップ・オブ・エース》。正位置ならカードを2枚ドローし、逆位置なら相手が2枚ドローします」

《カップ・オブ・エース》
通常魔法
コイントスを1回行い、表が出た場合は自分のデッキからカードを2枚ドローし、裏が出た場合は相手はデッキからカードを2枚ドローする。

またカードが回り出す。

「ストップ」

「…正位置です。私はカードを2枚ドロー」

また正位置。扱いづらそうなカードをこうもたやすく操るなんて…。

「魔法カード《死者蘇生》。墓地の《アルカナフォースⅥ－ＴＨＥ　ＬＯＶＥＲＳ》を特殊召喚します」

…一応人型って事以外は形容しづらい。説明に困るな、アルカナフォースって。

《アルカナフォースⅥ－ＴＨＥ　ＬＯＶＥＲＳ（シックス・ザ・ラバーズ）》
効果モンスター
星４／光属性／天使族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１６００
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、コイントス

を1回行い以下の効果を得る。
●表：「アルカナフォース」と名のついたモンスターを生け贄召喚する場合、このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。
●裏：「アルカナフォース」と名のついたモンスターを生け贄召喚する事はできない。

《アルカナフォースＶＩ－ＴＨＥ　ＬＯＶＥＲＳ》　ＡＴＫ／１６００

「さあ、ストップの宣言を」

「ストップ」

「…正位置。アルカナフォースの生け贄2体分になります」

「また！？」

「そして、ＴＨＥ　ＬＯＶＥＲＳを生け贄に《アルカナフォースＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ》を召喚！」

黒光りする巨大な何か。僕にはそうとしか表現できない。ていうか、本当に天使族？

《アルカナフォースＸＸＩ（トゥエンティーワン）－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ（ザ・ワールド）》
効果モンスター
星８／光属性／天使族／ＡＴＫ３１００／ＤＥＦ３１００
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、コイントスを1回行い以下の効果を得る。
●表：自分のエンドフェイズ時に自分フィールド上に存在するモンスター2体を墓地へ送る事で次の相手ターンをスキップする。

●裏：相手のドローフェイズ時に相手の墓地の一番上のカード1枚を相手の手札に加える。

《アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ》　ＡＴＫ／３１００

「攻撃力３１００！？」

「コイントスです。ストップの宣言をお願いします」

「…ストップ」

「…正位置。エンドフェイズ時に自分のモンスター2体を墓地に送る事で、相手のターンをスキップします」

「なっ…！？」

「ターンを飛ばす効果…！？」

そんな無茶苦茶な効果、聞いた事ないよ！しかも攻撃力高いし！

「ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤで《始祖神鳥シムルグ》を攻撃します。オーバー・カタストロフ！」

ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤが放つ光線が、金色の神鳥を掻き消し破壊した。

「ぐぅ…！」

俊也　ＬＰ／４０００→３８００

「カードを3枚セットしてターンエンドです」

斎王
ＬＰ／１１００
手札／２
モンスター／《アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ》（ＡＴＫ／３１００）
魔法・罠／リバース×３

「僕のターン！」

まずいな…。今の手札じゃＴＨＥ　ＷＯＲＬＤを倒す事はできない。ここは凌ぐしか…。

「モンスターをセット！カードを1枚セットしてターンエンド！」

「エンドフェイズ時に永続罠《リビングデッドの呼び声》を発動。墓地の《アルカナフォースＸＶＩＩＩ－ＴＨＥ　ＭＯＯＮ》を特殊召喚します」

腹に球体のカプセルを埋め込まれた奇怪なモンスターが墓地から蘇った。

《アルカナフォースＸＶＩＩＩ（エイティーン）－ＴＨＥ　ＭＯＯＮ（ザ・ムーン）》
効果モンスター
星7／光属性／天使族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２８００
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、コイントスを1回行い以下の効果を得る。
●表：自分のスタンバイフェイズ時に自分フィールド上に「ムーン

トークン」（天使族・光・星１・攻／守０）を１体特殊召喚する事ができる。
●裏：自分のエンドフェイズ時に１度だけ、自分フィールド上のモンスター１体を選択し、そのモンスターのコントロールを相手に移す。

《アルカナフォースＸＶＩＩＩ－ＴＨＥ　ＭＯＯＮ》　ＡＴＫ／２８００

「もちろん、このモンスターもコイントスがありますよ」

「ストップ！」

「…正位置ですね。私のターンのスタンバイフェイズ毎に、私のフィールドに《ムーントークン》を１体特殊召喚できます」

また正位置…！？

俊也
ＬＰ／３８００
手札／０
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×２

「私のターン。スタンバイフェイズでＴＨＥ　ＭＯＯＮの効果を発動し、《ムーントークン》を１体特殊召喚します」

ＴＨＥ　ＭＯＯＮの腹のカプセルが開き、中からエイリアンのようなモンスターが飛び出した。

《ムーントークン》　ＤＥＦ／　０

「そして、手札から《アルカナフォースＩＶ－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ》を召喚します」

《アルカナフォースＩＶ－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ》　ＡＴＫ／１４００

２体目のＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ。しかも効果は全体強化…！

「ストップの宣言をお願いします」

何か、ストップって言う必要性が感じられなくなってきた…。

「ストップ…」

「…正位置。アルカナフォースの攻撃力は５００ポイントアップします」

《アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ》　ＡＴＫ／３１００→３６００

《アルカナフォースＸＶＩＩＩ－ＴＨＥ　ＭＯＯＮ》　ＡＴＫ／２８００→３３００

《アルカナフォースＩＶ－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ》　ＡＴＫ／１４００→１９００

「まずいわね…。ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤの効果に必要なコストが揃った以上、このターンを凌いだとしても次のターンは確実に飛ばされ

てしまうわ」

何でこうも正位置ばかり出るんだ？運にしては当たりすぎる。デュエルディスクに細工でもしてあるのか？

「私がイカサマをしていると考えていますか？」

「「！」」

「安心してください。これは私の驚異的な運命力が成せる業です。運命は常に私に味方しているのですよ」

「運命力？」

待てよ？運命力ってどこかで聞いた事が…。

確か、月沙にこの世界での要注意人物を聞いた時に…。その時いたのは、僕と月沙と、後璃音。

『要注意人物ねえ…。今の時期なら、斎王琢磨かな？』

『斎王琢磨？』

『コイントスで効果を決めるカテゴリがあるんだけど、必ず決まった効果を当てられるの』

『怪しいわね。イカサマじゃないかしら？』

『いや、それはないよ。そんな事する奴じゃないし。だって、運命力がありえないもん…』

『運命力？』

『で、斎王は今「破滅の光」に人格を乗っ取られてるの』

『「破滅の光」？』

『簡単に言えば悪い人格ってところ。仲間を集めるために、有能な人物を片っ端からデュエルで倒して洗脳しちゃうんだよ』

『洗脳って…』

『とにかく、しばらくは斎王に関わっちゃ駄目だよ。万が一負けたりしたら洗脳される上に、間違いなく黒歴史確定だから』

「！？」

まさか…！？いや、間違いない！現状とあからさまに一致してる！

「君は…僕をスカウトしに来たって事？」

「ほぉ…なぜそう思うのですか？」

「破滅の光」

「！」

答えたのは僕じゃない。璃音だ。

「ようやく思い出したわ。もう布教活動を始めていたとはね」

「…なぜ知っている？」

「私達の仲間の情報網をナメないでもらいたいわね」

「ククク…どこから情報を仕入れたかはわからないが、知っているなら話は早い。風嶺俊也よ、私の配下になるがいい！」

正体がばれた途端、斎王が一変した。口調が変わり、表情も残忍なものになった。さらに全身を白いオーラが包み、青い髪が一気に伸びた。

「化けの皮を剥がしたようね…！」

「誰が君の部下になるもんか！」

「いや、なる！それが貴様の運命だからだ！《アルカナフォースⅠＶ－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ》で伏せモンスターを攻撃！」

ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲが手のハサミから電撃を放ち、伏せモンスターがそれを受けて爆発に巻き込まれる。

「さらに、《アルカナフォースＸＶＩＩＩ－ＴＨＥ　ＭＯＯＮ》でダイレクトアタック！」

「できるのかな？」

「何？」

爆発で舞い上がった煙が晴れると、緑色の鳥が防御体勢で佇んでいた。

「《シールド・ウィング》は1ターンに2度まで戦闘では破壊されない！」

「小癪な…！ＴＨＥ　ＭＯＯＮとＴＨＥ　ＷＯＲＬＤで続けて攻撃だ！」

光線が続けて発射され、《シールド・ウィング》は耐え切れずに破壊されてしまった。よく耐えてくれたね、ありがとう…。

「カードを1枚セットし、エンドフェイズ時に《アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ》の効果発動！ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲとＴＨＥ　ＭＯＯＮを墓地に送り、次の相手のターンをスキップする！」

《アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ》　ＡＴＫ／３６００↓３１００

「そして私のターン！」

くそ…ターンを飛ばされた！耐え切れるか…！？

「《ムーントークン》を生け贄に、《アルカナフォースＸＩＶ－ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥ》を召喚！」

また説明しづらいモンスターが出てきた！誰か上手い説明の仕方を教えて！

《アルカナフォースＸＩＶ－ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥ》（フォーティーン　テンパランス）
効果モンスター
星６／光属性／天使族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ２４００
手札からこのカードを捨てる事で、自分が受ける戦闘ダメージを１度だけ０にする。
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、コイントスを１回行い以下の効果を得る。
●表：自分が受ける戦闘ダメージは半分になる。
●裏：相手が受ける戦闘ダメージは半分になる。

《アルカナフォースＸＩＶ－ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥ》　ＡＴＫ／２４００

「ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥの効果発動！当然正位置ぃ！」

ええええぇぇぇ！？せめてストップの宣言くらいさせてよ！

「私が受ける戦闘ダメージは半分になる！バトル！《アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ》でダイレクトアタック！オーバー・カタストロフ！」

「ぐ…罠発動（ガード・ブロック）！戦闘ダメージを無効にしてカードを１枚ドローする！」

目の前に透明な障壁が展開され、ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤの光線を全て受け切った。それを見届けてから1枚ドローする。

「続けてＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥで攻撃！」

ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥが回転しながら僕にぶつかってきた。正直、少し気持ち悪い。

「うわぁっ！」

俊也　ＬＰ／３８００→１４００

「俊也！」

「ククク…ターンエンドだ！」

斎王
ＬＰ／１１００
手札／１
モンスター／《アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ》（ＡＴＫ／３１００）《アルカナフォースＸＩＶ－ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥ》（ＡＴＫ／２４００）
魔法・罠／リバース×３

やっとターンが回ってくる。でも、状況は最悪。戦闘ダメージは半分だし…どうする？

「諦めて私の元に来い。そうすればまだ楽だ」

「サレンダーなんてしないよ。カードはまだ残ってる」

「では、この状況をどう切り抜けると言うのだ！？攻撃力３１００と２４００のモンスターに伏せカードが３枚！さらに戦闘ダメージは半分！もう運命は決しているのだ！貴様の敗北という絶対的な運命がな！」

さっきから運命運命うるさい。相当自信があるみたいだ。

『俊也、大丈夫？』

「（ウィン！）」

デッキから急にウィンが出てきた。心配そうな表情をしている。

『どうしよう…。こんな状況でどうやって逆転すれば…』

「（大丈夫だよ。何としてでも勝つ。仲間に牙を向けるなんて真似はしたくないからね）」

「安心しろ！貴様を倒した後は、篠村璃音！貴様も私の配下に引き入れてやる！貴様ら２人を手に入れるためにここに来たのだからな！」

「『！？』」

「っ…！」

配下に引き入れる？璃音を？

今の斎王の言葉を聞いた瞬間、どうしようもない感情が渦巻いた。
璃音を配下になんて…冗談じゃない…！

「ふざけるな…」

「む？」

「僕だけならまだしも璃音まで？何調子に乗ってるんだ？」

「俊也…？」

「元々負けるつもりはなかったけど…このデュエル、絶対に勝つ！
璃音には手を出させない！！」

今のは最高にイラッて来た。絶対に負けられない！負けてたまるか！

「行くぞ！僕の…」

「俊也さん、璃音さん！」

僕がカードを引こうとすると、璃音でもウィンでも斎王でもない誰かの声がした。

「え…ノルフェナさん！？」

森の中から現れたのは、前に会ったノルフェナさんだった。

「何でここに…」

「俊也さんに見せたい物があって来たのですが…今はそのような状況じゃなさそうですね…」

「見せたいもの？」

「何だ貴様は？」

斎王は勝負に水を差された事で少し不機嫌になっていた。まあ、無理もないけど…。

「私はこの人達の、ただの知り合いですよ」

ただじゃないけどね。神様だし。

キュオォォォォ…

「「「「『！？』」」」」

突然、ノルフェナさんの懐から緑の光が漏れ始めた。

「まさか…！」

ノルフェナさんが懐から取り出したのは、緑に光る1枚のカードだった。光の発信源はあのカードのようだ。

そのカードは、緑の光をさらに強く発して光の球体になり、ノルフェナさんの手を離れて僕の前まで飛んできた。

「これは…？」

思わず呟いた途端、緑の球体が巨大化して僕とウィンを飲み込んだ。

周りは見渡す限り緑1色。まるで別の空間に投げ出されたような感じだ。

『何だろう、ここ…？』

「わからない。あのカードは一体…」

『キュォオォオォ！』

「『？』」

上から何かの鳴き声が聞こえた。羽音も聞こえてくる。それが気になって、上を見上げた。

「あれは…！？」

1体の巨大なモンスターがいた。ドラゴンだ。

全身は緑に染まり、腕がない代わりに鳥のような巨大な翼が生えている。額には風車のようなマークがあり、赤い目にも同じマークが映っている。その緑の龍が僕達の前に舞い降りた。

『この龍って…!?』

「ウィン?何か知ってるの?」

『知ってるも何も…私の故郷で祀られてる伝説の風の龍だよ!』

「伝説?」

ウィンの故郷の龍?しかも伝説って…?

『キュルル…』

風の龍が唸り声を上げる。すると、僕の脳に直接意思が伝わってきた。

「…一緒に、戦ってくれるのかい?」

『キュォォォ!』

風の龍は緑の光になると、一気に縮んでカードの形になって僕の手元に飛んできた。受け取ると、光が消えてちゃんとした1枚のカードになった。

「…わかったよ。君の力を貸してくれ」

呟くと、緑の景色が消し飛んだ。

視界は元に戻り、目の前には璃音とノルフェナさんがいた。

「俊也、ウィン！」

「何があったんですか！？」

「…ちょっと、対談をね…」

振り返り、斎王とアルカナフォース達と向き合う。もちろん、フィールドはさっきのままだ。

「光の球の中で何があったかは知らないが…いかなる手段を選ぼうが運命を変える事はできない！」

「変えるよ」

「何？」

「変えてみせる！僕のターン！カードを1枚伏せて、罠カード《マインドクラッシュ》を発動！カード名を1つ宣言し、宣言したカードがあれば手札にある同名カードを全て墓地へ捨てる！なければ僕はランダムに手札を1枚捨てなければならない！」

《マインドクラッシュ》
通常罠（制限カード）
カード名を1つ宣言する。
相手は手札に宣言したカードを持っていた場合、そのカードを全て墓地へ捨てる。
持っていなかった場合、自分はランダムに手札を1枚捨てる。

「僕が宣言するのは、《アルカナフォースXIV－TEMPERANCE》！」

「む…当たりだ…」

斎王が手札からTEMPERANCEのカードを墓地に送る。コイントスの時にソリッドビジョンで表示されたカードのテキストには、コイントスの効果の他に『手札からこのカードを捨てる事で、自分が受ける戦闘ダメージを1度だけ0にする』とも書かれていた。一応を発動したけどドンピシャだ。これでダメージを無効にされる心配はない。

「そして、今伏せたカードを発動！魔法カード《命削りの宝札》！手札が5枚になるようにカードをドローする！」

『あ、私のカード！』

手札に来た自分のカードを見て、ウィンが思わず声を上げる。この手札なら…風の龍を出せる！

「魔法カード発動！《ワン・フォー・ワン》！手札からモンスター1体を墓地に送り、手札かデッキからレベル1のモンスターを1体

特殊召喚する！デッキから《アタック・バード》を特殊召喚！」

手札を1枚墓地に送ると、デッキから小さな茶色の鳥が飛び出した。

《アタック・バード》
効果モンスター（オリジナル）
星1／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　１００
このカードが風属性シンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地に送られた時、このカードをシンクロ素材としたシンクロモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする。

《アタック・バード》　ＡＴＫ／　１００

「そして、チューナーモンスター《デブリ・ドラゴン》を召喚！」

一回り小さくて白い龍。今までシンクロ召喚には使わなかったけど、今回は違う。

《デブリ・ドラゴン》　ＡＴＫ／１０００

「《デブリ・ドラゴン》が召喚に成功した時、自分の墓地から攻撃力５００以下のモンスターを特殊召喚する！《風霊使いウィン》を特殊召喚！」

『よし、行くよ！』

さっきまで隣で待機してたウィンがフィールドに足を踏み出した。

《風霊使いウィン》　ＡＴＫ／　５００

「そんな雑魚モンスターを並べてどうする！私を倒すなどできぬわ！」

「雑魚じゃない！！」

即答で思い切り怒鳴りつけると、斎王が少し目を見開いた。

「このモンスター達は、僕のパートナーは決して雑魚なんかじゃない！レベル３《風霊使いウィン》とレベル１《アタック・バード》にレベル４《デブリ・ドラゴン》をチューニング！」

《デブリ・ドラゴン》が４つの緑の輪になり、ウィンと《アタック・バード》が中に飛び込み合計４つの星になる。

「シンクロ召喚！？今まで１度も使った事なんてないのに…！？」

「翡翠の薫風よ！晴天に羽ばたき想いを紡げ！」

☆３＋☆１＋☆４＝☆８

「シンクロ召喚！飛び立て！《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》！！」

緑の翼、赤い目、鳥のような巨大な翼に額には風車のようなマーク。緑の羽根を散らし、風の龍がフィールドに舞い降りた。

《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星８／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ１８００
チューナー＋チューナー以外の風属性モンスター１体以上
このカードは対象を指定しないカードの効果では破壊されない。
１ターンに１度、自分の墓地に存在する魔法または罠カード１枚を除外する事で、フィールド上の魔法または罠カード１枚を破壊する。フィールド上または墓地に存在するカードが手札またはデッキに戻った時、このカードの攻撃力・守備力はエンドフェイズ時まで１００ポイントアップする。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「何だこのモンスターは!?」

「これは…！」

「出ましたね」

『キュォォォォ!!』

このモンスターなら、ダイガスタ・ウルなら、このデュエルに勝てる！運命を打ち破れる！

「《アタック・バード》の効果発動！風属性モンスターのシンクロ素材になった時、そのモンスターの攻撃力を１０００ポイントアップさせる！」

《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００→３６００

「そして、魔法カード《ハリケーン》を発動！フィールド上の魔法・罠を全て手札に戻す！」

「ちぃっ！」

フィールドに嵐が吹き荒れ、伏せカードを全て吹き飛ばす。

「さらにダイガスタ・ウルの効果発動！フィールドか墓地からカードが手札かデッキに戻った時、エンドフェイズ時まで攻撃力を１００ポイントアップさせる！」

《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》　ＡＴＫ／３６００→４６００

「攻撃力４６００だと！？」

「戦闘ダメージは半分ですが…《アルカナフォースＸＩＶ－ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥ》の攻撃力は２４００。対して、《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》の攻撃力は４６００」

「攻撃すれば、ダメージは２２００！半分にして１１００…！」

「私のライフを丁度削り切れるだと！？」

「これが運命を打ち破る力だ！《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》で

《アルカナフォースＸＩＶ－ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥ》に攻撃！エアロ・ジャード・ストーム！！」

風の龍が口から翡翠色の嵐を吐き出す。嵐は一直線にＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥに向けて放たれ、粉々に切り裂いていった。

「ぐわぁぁあぁぁあぁぁぁぁぁ！！？」

斎王　ＬＰ／１１００→　０

俊也　ＷＩＮ

「よし！」

『キュオォォォォォォォ！！』

ダイガスタ・ウルは勝利の雄叫びを上げた後に消えていった。よかった、何とか勝てたみたいだ。

「馬鹿な…！？運命が変えられたというのか…！？」

斎王は自分の敗北が信じられないといった風で、かなり動揺している。

「斎王。確かに運命はあるのかもしれない。でも、それが大切な仲間を傷つけるなら、僕は何度でも運命を打ち破る！僕だけじゃない！璃音はもちろん、紅刃達だって運命に屈したりはしない！」

今は紅刃はいないけど、必ず復活して戻ってくる。破滅の光が届かないくらいの高みを手にして、必ず…！

「ぐぅ…！今回は貴様らを我が配下にする事は敵わなかったが、いずれ我が計画の礎としてくれる！それまで首を洗って待っていろ…」

斎王はよろけた調子で広場を出ていった。相手は危険な存在だ。深追いは禁物と考えて、誰も追いかける人はいなかった。

『終わった…』

「やりましたね、俊也さん、ウィンさん」

ウィンがカードから出てきて一息つくと、ノルフェナさんと璃音が近づいてきた。それを見て、僕は《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》のカードを取り出す。

「《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》…何でたった今会ったばかりの僕に力を貸してくれたんだろう？」

「それは、《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》がガスタの里の神龍だからです」

「ガスタの里？」

『私の故郷だよ。ガスタっていうのは私の一族の名前』

璃音の疑問の呟きにウィンが答えた。ガスタ…聞いた事ないな。

「その風の龍は、長い間里で祀られ、里と里に住むモンスター達を見守っていました。当然、ウィンさんの事も。その中で、ウィンさんが正しい心の持ち主だという事を見抜いたのでしょう」

「という事は、そのウィンがパートナーとして慕っている人間が邪悪なわけがないと考えて、何の躊躇もなく俊也に力を貸したと見ていいのかしら？」

「間違いありませんね。里や仲間を重んじる龍だと伝えられていますから」

となると、里の人間に絶対の信頼を置いてるって事？いい事だけど、ある意味単純な龍なのかも…。

「ニュートラルは精霊界でも脅威となっています。組織を食い止める力になってくれると考えて、その龍の主を探す事にしました。そして、始めに見当をつけたのが同じ風属性の使い手の俊也さんなのですが、予想は大当りでした」

「という事は、僕がこの龍の主なの？」

「そうです。どうか、その龍を任されてもらえませんでしょうか？」

このドラゴン…。初めて使ったというのに、やけに馴染んでいた。まるで、前から切り札として使っていたかのような…。

「わかったよ。僕はダイガスタ・ウルとも一緒に戦う。僕を選んでくれたのなら、光栄だよ」

『私も、神龍に認められてるのは嬉しいよ』

「ありがとうございます」

数十億人の中から僕を選んでくれたんだ。この龍に相応しいデュエリストになってみせる！

『…俊也。紅刃達が戻ってきたら、ガスタの里に来てくれない？』

「ガスタの里に？」

『その神龍の効果…最大限に使いこなすなら、私の一族に伝わる力を手に入れるのが１番だと思うの。いいかな？』

一族に伝わる力、か…。この龍はガスタの龍だ。同じガスタの一族の力と合わせて使うのが１番いいはずだ。

「…うん、わかったよ」

「なら、その時は私も同伴します。ダールさんに報告をする必要もありますし」

「ところで、俊也？」

「何？」

「斎王が私を配下にするって言った時に、あなたは『私に手を出さないで』って言ったけど、さっき『私はもちろん、紅刃達も運命に屈しない』って言ったわよね？どうも矛盾してるんだけど…私の実力は信用できないのかしら？」

「ええっ！？」

璃音がジト目で僕を睨んでくる。あ、言われてみれば確かにちょ

っと変だぞ？やばい！機嫌損ねた！？

「いや、あれはついカッとなって言ったっていうか、斎王が君まで狙ってるのにムカついただけで…！」

「でも、それだけ私の事を考えててくれてたのね」

「え？」

「ありがとう」

慌てて弁解しようとする僕の話を遮って、璃音は柔らかく微笑んでお礼を言ってきた。

「…どう、いたしまして…」

無性に照れ臭くなって、それ以外のよくわからない何かもあってか、思わず目を逸らしてしまった。

「フハハハハハ！」

次の朝、食堂に行くと万丈目君の高笑いが出迎えた。

なぜかオベリスク・ブルーの制服を真っ白にした感じの服を着ている。吹雪さんが着ている服よりは、服のラインの色が薄い。そんな万丈目君を、十代君達が呆気にとられながら見ていた。

「万丈目君…その制服、どうしたの？」

「やあ、天上院君！俺は生まれ変わったんだ！デュエルアカデミアは光の結社によって、やがて白に変わるのだ！」

言ってる事がもはやおかしい。理解できない。光の結社って何？

とりあえず、たまたまその場にいた璃音に話を聞く事にした。

「璃音、どうなってるの？」

「月沙の話の通りだとすると…多分、斎王に負けて操られているんだと思うわ」

「て事は…あれが破滅の光に洗脳された人の末路？」

「そうなるわね」

うわぁ…。冗談じゃない。あんな風になるなんて死んでもごめんだ。

「勝てて本当によかった…」

僕は改めて《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》に心の中で感謝した。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第４９話　大切な人を傷つける運命は打ち破るもの（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「私や秋斗だけじゃなく、俊也もオリカがエースになったか」

璃音「勇香と俊也の場合は最終手段よ。いつまでも条件に合うモンスターがＯＣＧで登場するのを待ってなんていられないのよ」

フィレス『グルル…』

ロコナ『シュンヤってデッキ変わるの？』

勇香「流れ的にそうなるな。まあ、どんなデッキになるかは１００％予想的中するだろうけどな…」

璃音「それじゃ、カード考察に入りましょうか。今回紹介するのは、斎王が使用した驚異的な効果を持つモンスター、《アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ》よ」

《アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ》
効果モンスター
星８／光属性／天使族／ＡＴＫ３１００／ＤＥＦ３１００
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、コイントスを１回行い以下の効果を得る。
●表：自分のエンドフェイズ時に自分フィールド上に存在するモンスター２体を墓地へ送る事で次の相手ターンをスキップする。
●裏：相手のドローフェイズ時に相手の墓地の一番上のカード１枚

を相手の手札に加える。

璃音「アルカナフォース共通のコイントス効果を持っているわ」

勇香「表ならエンドフェイズ時に自分のモンスター2体と引き換えに相手のターンをスキップするぶっ飛び能力だ。《黄泉ガエル》みたいな自己再生するモンスターなら、コストを確保するのはそう難しくはないな」

ロコナ『裏だと相手の墓地のカードを強制的に手札に戻しちゃうんだね。《逆転する運命》とかで効果を変えてあげようよ』

璃音「通常召喚できる天使族の中で1番攻撃力と守備力が高いモンスターでもあるのよ。ぶっちゃけ、《神の居城－ヴァルハラ》で特殊召喚したり、《創造の代行者　ヴィーナス》の効果でコストを簡単に確保できる紅刃のデッキでも一応活躍できるわ」

勇香「おいおい…これで正位置が出まくったら、相手のターンを正当に飛ばしまくる外道主人公が完成しちまうぞ？」

璃音「作者もカードショップでこのカードを見る度に買うかどうか迷ってるらしいわ。まあ、試してみる価値はありそうね」

勇香「できれば使ってほしくねえ…」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『感想待ってま～す！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

アルカナフォースの容姿は本当に説明しづらいです。上手い具合に説明できる人っていませんかね？

俊也の新たなエースが決まった事で、近いうちにデッキも大幅に変更されます。もう大体予想がつくでしょうけど…。

では、また次回！

第５０話　スピードの出しすぎには注意（前書き）

第５０話です。今回はまた《天空の聖域》での話になります。

それではどうぞ！

第５０話　スピードの出しすぎには注意

ＳＩＤＥ／紅刃

スピードに乗りながらＤ・ホイールを左に倒す。カーブはぎりぎり曲がれた。

アクセルシンクロが課題になってから、俺はフォッタにＤ・ホイールに送ってもらってスピードに慣れる特訓をしている。コースは《天空の聖域》の力で空中に光の道ができていて、その上を走っている。

アクセルシンクロするためには限界以上まで加速する必要があって、恐怖心とかがあったら失敗してしまう。それをなくして確実に決めるための特訓だ。

『紅刃、そろそろ休憩しよう』

「了解」

フォッタから通信が入ると、コースの先に下へ降りる道ができた。俺はその道へ進み、地上へ降りた。道の先は丁度みんなが集まってる広場で、俺はすぐにＤ・ホイールを止めてバイザーをしまい、ヘルメットを脱いだ。

「紅刃、お疲れ様」

「よかったらどうぞ」

「お、サンキュな」

D・ホイールから降りると月沙とアースが出迎えてくれた。アースから飲み物を渡され、礼を言ってから喉を潤す。

「調子はどう？」

「だいぶ慣れてきた。まだ少し不安はあるけどな」

他のみんなは各々休憩をとっていた。と言うのも、俺以外は全員聖域の修復作業に駆り出されてるからだ。まあ、フォッタがいるおかげで結構捗ってるらしいな。さすが神様見習いだ。

…って、ん…？

「…なあ、月沙、アース。1つ いいか？」

「え？」

「何でしょうか？」

「何だあれ？」

俺が指が差したのは、ベンチに座ってる秋斗とルーナだ。ここまではいい。

「…なあ、そろそろ離してくれないか？」

「駄目よ。ほっといたらあんたいつも1人でどっか行っちゃうでし

ょ？私が言えた事じゃないけど、コミュニケーションは大切なのよ？」

問題なのは、ルーナが自分と秋斗の腕をがっちり組んでいるところだ。

「ああ、あれですか…」

「秋斗ってそのままだと大抵1人でどこか離れた所にいるでしょ？ルーナが『それは許さない』って言い出して、ああして逃げられないようにしてるの」

確かに、秋斗は集団の中にいるのがあまり好きじゃない。将人達の話だと、昼飯も人目につかない所で食ってるらしい。でもな…。

「だからって、あれはねえだろ…」

「自覚してるんでしょうか…？」

おまけに2人して菓子パン食ってるし。端から見たら、どう考えても恋人どうしにしか見えない。確かにあれなら逃がす事はないけど、あれでいいのか…？

「私もあんな風にできたらな…」

「月沙、何か言ったか？」

「え！？いや、何でもないよ！」

月沙は何か呟いてたけど、慌てて否定した。急にどうした？

キュイィィィィン…

ふと、遠くから何かの音が聞こえてきた。

「ん…？」

これは…D・ホイールか？

音がする方を見ると、確かにD・ホイールが1台こっちに向かってきてた。そして、広場の中央で停止した。

D・ホイールは白に緑のラインが入ったカラーリングで、乗っている奴は白と緑のライディングスーツを着ている。ヘルメットは白で、バイザーは薄い緑だ。

「人間…？」

「誰だお前は？」

秋斗が立ち上がって謎のD・ホイーラーを問い質した。ルーナはさすがに腕を解いてる。

「ちょっと用事があってね」

そいつはD・ホイールから降りながら答えて、バイザーをしまってヘルメットを…って…！？

「久しぶりね。紅刃、月沙」

いや、待て待て。これはない。ありえない。おかしすぎる。

「え…？」

「鈴佳！？」

木下鈴佳。月沙の親友で、今は冥界の住人だ。

「何でお前がここに！？冥界にいるんじゃなかったのかよ！？」

「私が連れてきました」

俺の質問に答えて後から出てきたのは、ノルフェナさんだった。

「あ、お師匠様！」

「あなたがアクセルシンクロの修得に励んでいると聞いて、特別講師に会わせる事にしたんです」

「特別講師って…」

「そ。私は冥界でアクセルシンクロの練習をして修得できたからね。先輩として特訓してあげようって事でここに連れてこられたってわけ」

「だが、お前はもう死んでいる。死人は基本的に冥界から出る事を禁止されているはずだが？」

ロディスの言う事は最もだ。だから俺もありえないと思ってんだよ。

「アテムさんとは話をつけてあります。今は緊急事態のようなものですから」

「そうか。アテムが許可を出したのなら、心配はいらないな」

ロディスとアテムは同じ王って事で仲が良かったりする。互いに信頼してるんだろうな。

「う…そ…」

一方で、月沙は驚きのあまり言葉を失っている。死別した親友がいきなり目の前に元気な姿で出てきたんだから、そりゃびっくりするよな。

「月沙」

鈴佳は目を見開いたまま呆然としている月沙に近づいて、にっこり笑った。

「こんな形だけど…本当に久しぶりね。あんたの事は冥界からちゃんと見てたわ」

「……あ…」

「強くなったわね」

「…う…うあぁあああぁあああぁあああああ！！」

月沙は耐え切れなくなったのか、鈴佳に抱きついて思い切り泣き始めた。

「鈴佳…鈴佳ぁ…あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「会えて嬉しいわ。本当に…」

ま、無理もないか。お互いに死んで、別々の世界で改めて生き続けて、やっと会えたんだ。俺は月沙が泣き止むまで見守っていた。

数十分後、俺と鈴佳はそれぞれD・ホイールに乗ってスタンバイ

した。月沙もフォッタにD・ホイールを転送してもらい、俺達についてく事にした。

「お前ら、いいのか？もうちょいゆっくり話したっていいのに…」

「後でいくらでもできるよ。今は紅刃の特訓が先決でしょ？」

「それじゃ、行くわよ。私にしっかりついてきなさい！」

鈴佳がD・ホイールを走らせ、俺達もそれに続く。光の道を突き進み、空中のコースに踊り出た。

鈴佳はぐんぐんスピードを上げていく。遅れないようにこっちもスピードを上げ、後ろにピッタリついていった。

やがて、最初のコーナーまで来た。すると、鈴佳はさらにスピードを上げた。

「あれじゃ、コースアウトしちまうぞ？」

「いや…！」

鈴佳は馬鹿みたいに上げたスピードのまま、綺麗にコーナーを曲がった。あんな事ができるのかよ…。

「このスピードで曲がってみなさい！」

俺もアクセルを全開にしてコーナーに突っ込む。視界が桜色になったかのような錯覚に陥りながらも、D・ホイールを横に倒す。

「くっ…！」

一瞬無意識にブレーキに手をかけたけど、それをやめてハンドルを強く握り締める。今までの修行に加え、アビリティを使った戦闘でスピードには一応慣れていた。

鈴佳ほど綺麗にはいかなかったけど、何とか曲がり切る事ができた。そのまま鈴佳に追いつく。月沙も、アクセルシンクロを使わないにも関わらずに、同じようにしてコーナーを曲がってきた。

「ＯＫ！合格よ！スピードには慣れてるみたいね！」

「俺もただ走り込みをしてたわけじゃないからな」

「月沙もよくできたわね。紅刃より筋がいいんじゃない？」

「えへへ…」

そういや、こいつ何の練習もしないで成功させてたな。俺より飲み込みが早いみたいだ。

「それじゃ、ライディングデュエルよ。先攻は譲るわ」

「わかった。全力で行くぜ！」

「「デュエル！」」

紅刃ｖｓ鈴佳

「俺のターン！《豊穣のアルテミス》を召喚！」

俺が最初に召喚したのはアルテミスだ。とりあえず攻撃表示。

《豊穣のアルテミス》　ＡＴＫ／１６００

「カードを2枚セットしてターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／４０００
ＳＰＣ／０
手札／３
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×２

「私のターン！」

紅刃　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／０→１

鈴佳　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／０→１

鈴佳はどんなデッキを使うんだ？あいつがデュエルしてるところは見た事がない。

「《Ｓｐ－インター・アクセル》を発動！スピードカウンターが相手と同じ時、デッキからモンスターを1体墓地に送る事でスピードカウンターを1つ増やす！」

《Ｓｐ－インター・アクセル》
通常魔法（オリジナル）
自分用スピードカウンターと相手用スピードカウンターが同じ数の

場合発動する事ができる。
デッキからモンスター1体を墓地に送り、自分用スピードカウンターを1個増やす。

鈴佳　ＳＰＣ／1↓2

「《Ｓｐ－エンジェル・バトン》を発動！スピードカウンターが2つ以上ある時、カードを2枚ドローして手札を1枚捨てる！そして、《ドラグニティ－ドゥクス》を召喚！」

全体的に白い服を着て、背中に大きな翼を持った人型のモンスターが現れた。

《ドラグニティ－ドゥクス》
効果モンスター
星４／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ１５００／ＤＥＦ１０００
このカードの攻撃力は、自分フィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついたカードの数×２００ポイントアップする。
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。

《ドラグニティ－ドゥクス》　ＡＴＫ／１５００

「やっぱり【ドラグニティ】だ！」

「ドゥクスの効果発動！召喚に成功した時、墓地のレベル3以下のドラゴン族ドラグニティを自身に装備する！墓地の《ドラグニティ－ファランクス》を装備！」

モンスターを装備？ドラグニティってどんなカテゴリなんだ？

「装備されているファランクスの効果！装備されている時、フィールドに特殊召喚できる！」

ドゥクスから光が飛び出し、その光が金と青の小柄な龍に変わった。

《ドラグニティ－ファランクス》
チューナー（効果モンスター）
星２／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ　５００／ＤＥＦ１１００
このカードがカードの効果によって装備カード扱いとして装備されている場合に発動する事ができる。
装備されているこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

《ドラグニティ－ファランクス》　ＡＴＫ／　５００

「装備モンスターを特殊召喚…」

「モンスターを装備する事で力を発揮するのがドラグニティよ！レベル４《ドラグニティ－ドゥクス》にレベル２《ドラグニティ－ファランクス》をチューニング！疾風の龍騎士よ、雷（いかずち）の槍で敵を貫け！」

☆４＋☆２＝☆６

「シンクロ召喚！推参！《ドラグニティナイト－ヴァジュランダ》！」

光の柱から出てきたのは、槍を持った朱色の鳥人が乗っている巨大な朱色の龍だ。

《ドラグニティナイト－ヴァジュランダ》
シンクロ・効果モンスター
星６／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ１９００／ＤＥＦ１２００
ドラゴン族チューナー＋チューナー以外の鳥獣族モンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル３以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター１体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。
１ターンに１度、このカードに装備された装備カード１枚を墓地へ送る事で、このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで倍になる。

《ドラグニティナイト－ヴァジュランダ》　ＡＴＫ／１９００

「何だこいつ!?」

「見ての通り龍騎士よ!龍とそれを駆る騎士の絆こそがドラグニティの象徴!それを見せてあげるわ!ヴァジュランダがシンクロ召喚に成功した時、墓地のドラゴン族ドラグニティを１体装備できる!墓地の《ドラグニティ－ブランディストック》を装備!」

水色の龍の幻影が現れ、光になってヴァジュランダに吸い込まれた。

《ドラグニティ－ブランディストック》
チューナー（効果モンスター）
星１／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ　６００／ＤＥＦ　４００

このカードがカードの効果によって装備カード扱いとして装備されている場合、装備モンスターは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

「ブランディストックを装備しているモンスターは、1度のバトルフェイズで2回攻撃できる！」

「何！？」

「バトル！ヴァジュランダでアルテミスを攻撃！ボルティック・ランス！」

ヴァジュランダが口から槍のような雷を放った。攻撃力は１９００なのにやたら迫力があるな。

「カウンター罠《攻撃の無力化》！攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる！」

アルテミスの前に時空の渦が現れ、電撃を全て吸い込んだ。

「アルテミスの効果で、カウンター罠が発動する度にカードを1枚ドローする！」

「さすが【パーミッション】、守りは固いわね！カードを2枚セットしてターンエンドよ！」

鈴佳
ＬＰ／４０００
ＳＰＣ／２
手札／２

モンスター／《ドラグニティナイト－ヴァジュランダ》（ＡＴＫ／１９００）
魔法・罠／《ドラグニティ－ブランディストック》リバース×２

装備するドラグニティ自体も装備限定の効果を持ってるのか。面白い動きをするな。

「鈴佳、確かドラグニティにアクセルシンクロモンスターはいなかったはずだけど…」

「ＯＣＧとこの世界は違うのよ。ライトエンドのアクセルシンクロモンスターだってＯＣＧにはなかったでしょ？」

「あ、そっか。でも、どんなモンスターが出てくるか楽しみだよ」

「それじゃ、続けるぜ。俺のターン！」

紅刃　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／１→２

鈴佳　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／２→３

これならシンクロ召喚できるな。よし、行くか！

「俺も《Ｓｐ－エンジェル・バトン》を発動するぜ！スピードカウンターが２つ以上ある時、カードを２枚ドローして手札を１枚捨てる！そして、《英知の代行者　マーキュリー》を召喚！」

全身が青い代行者。何気に役に立つ奴だ。

《英知の代行者　マーキュリー》　ＡＴＫ／　０

「墓地の《ブーテン》の効果発動！こいつを除外する事で、俺の場のレベル４以下の光属性・天使族のモンスター１体をチューナーにする！」

《ブーテン》
チューナー（効果モンスター）
星１／光属性／天使族／ＡＴＫ　２００／ＤＥＦ　３００
自分のメインフェイズ時に、墓地に存在するこのカードをゲームから除外し、自分フィールド上に表側表示で存在するレベル４以下の天使族・光属性モンスター１体を選択して発動する事ができる。選択したモンスターはフィールド上に表側表示で存在する限りチューナーとして扱う。

「そのモンスターを入れてるとはね…！」

「俺はマーキュリーをチューナーにする！行くぜ！レベル４《豊穣のアルテミス》にレベル４《英知の代行者　マーキュリー》をチューニング！」

チューナーとなったマーキュリーが４つの黄色の輪になり、アルテミスがその中を潜る。

「舞い散る白羽が、天空を翔け現世を照らす！希望の光を振り翳せ！」

☆４＋☆４＝☆８

「シンクロ召喚！飛来せよ！《ライトエンド・ドラゴン》！」

純白の体を持ち、４枚の天使の翼を広げた聖龍が俺の頭上を飛ぶ。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「来たわね、《ライトエンド・ドラゴン》！」

「バトル！ライトエンドでヴァジュランダを攻撃！シャイニング・サプリメイション！」

ライトエンドが光のブレスを龍騎士にぶつける。このまま簡単にやられるとは思えないが…。

「罠カード《龍の礎》！装備カードのドラグニティを墓地に送る事で、ドラグニティの戦闘破壊を無効にする！」

《龍の礎》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついたモンスターが攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。カードの効果によって装備カード扱いとして装備されている「ドラグニティ」と名のついたモンスター１体を墓地に送る事で、攻撃対象に選択されたモンスターはエンドフェイズ時まで戦闘で破壊されず、そのモンスターの戦闘で自分が受ける戦闘ダメージは無効になり、その数値分ライフポイントを回復する。

ヴァジュランダから光が飛び出してブランディストックの幻影になり、ライトエンドの攻撃を代わりに受け止めた。

「そして、戦闘ダメージはライフの回復に変わる！」

鈴佳　ＬＰ／４０００→４７００

「くそ、回復されたか…。カードを1枚セットしてターンエンドだ！」

紅刃
ＬＰ／４０００
ＳＰＣ／２
手札／２
モンスター／《ライトエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／リバース×２

「私のターン！」

紅刃　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／２→３

鈴佳　ＬＰ／４７００　ＳＰＣ／３→４

「さあ、行くわよ！《ドラグニティ－ピルム》を召喚！」

鈴佳が召喚したのは、細長い角を1本生やした黄緑の龍だ。

《ドラグニティ－ピルム》
チューナー（効果モンスター）
星３／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ１０００
このカードが召喚に成功した時、手札から「ドラグニティ」と名のついた鳥獣族モンスター1体を特殊召喚し、このカードを装備カード扱いとして装備する事ができる。
このカードがカードの効果によって装備カード扱いとして装備されている場合、装備モンスターは相手プレイヤーに直接攻撃する事が

できる。
この時、装備モンスターが相手ライフに与える戦闘ダメージは半分になる。

《ドラグニティ－ピルム》　ＡＴＫ／１４００

「ピルムが召喚に成功した時、手札から鳥獣族ドラグニティを特殊召喚してピルム自身を装備する！《ドラグニティ－トリブル》を特殊召喚！」

白い鳥人が現れ、ピルムの背中に跨がる。

《ドラグニティ－トリブル》
効果モンスター
星１／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ　５００／ＤＥＦ　３００
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、自分のデッキからレベル３以下のドラゴン族モンスター１体を墓地へ送る事ができる。

《ドラグニティ－トリブル》　ＡＴＫ／　５００

「そして、罠カード《ドラグニティ・ゲットライド！》！墓地のドラゴン族ドラグニティを装備させるか、装備されているドラグニティを特殊召喚する！」

《ドラグニティ・ゲットライド！》
通常罠（オリジナル）
以下の効果から１つを選択して行う。
●自分の墓地に存在するレベル３以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター１体を選択し、装備カード扱いとして自分フィールド上の「ドラグニティ」と名のついたモンスター１体に

装備する。
●装備カード扱いとして装備されている「ドラグニティ」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。
「装備されているピルムを特殊召喚！」
トリブルが背中から飛び降りて、ピルムと並んで飛び始めた。
《ドラグニティ－ピルム》　ＡＴＫ／１４００
「レベル1《ドラグニティ－トリブル》にレベル3《ドラグニティ－ピルム》をチューニング！」
「レベル４…？」
「疾風の龍騎士よ！英雄の槍で敵を貫け！」
☆１＋☆３＝☆４
「シンクロ召喚！推参！シンクロチューナー《ドラグニティナイト－ロンゴミアント》！」
光の柱から黄色の巨竜が出てきた。背中には同じ黄色に染まったトリブルが乗っている。
《ドラグニティナイト－ロンゴミアント》
シンクロ・チューナー（効果モンスター・オリジナル）
星４／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ１９００
ドラゴン族チューナー＋チューナー以外の鳥獣族モンスター1体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、デッキから「ドラグニテ

ィ」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。
このカードが「ドラグニティ」と名のついたシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用される時、このカードのレベルを任意の数値にする事ができる。
また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚する事ができる。

《ドラグニティナイト－ロンゴミアント》　ＡＴＫ／２０００

「黄色い龍騎士…！」

「ロンゴミアントがシンクロ召喚に成功した時、デッキからドラグニティ1体を手札に加える事ができる！《ドラグニティ－アングス》を手札に！」

召喚しただけでアドバンテージが取れるのかよ…。

「ロンゴミアントはドラグニティのシンクロ素材になる時、自分のレベルを自由に変更できる効果を持っているわ！まあ、これから出すのは丁度レベルがピッタリだからあまり関係ないけどね。ターンエンドよ！」

「は？」

鈴佳
ＬＰ／４７００
ＳＰＣ／４
手札／２
モンスター／《ドラグニティナイト－ヴァジュランダ》（ＡＴＫ／

１９００）《ドラグニティナイト－ロンゴミアント》（ＡＴＫ／２０００）
魔法・罠／なし

「何でシンクロ召喚しないんだよ！？」

「相手ターンにやった方がいいと思ってね。あんたのシンクロチューナーのテキストは普通に読めるんでしょ？ならわかるはずよ」

あ、そうか。アクセルシンクロは相手ターンでも使えるんだった…。これは教えるためのデュエル。なら、鈴佳の判断は間違っちゃいないな。

「ならいいか。俺のターン！」

紅刃　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／３→４

鈴佳　ＬＰ／４７００　ＳＰＣ／４→５

「《Ｓｐ－ハーフ・シーズ》を発動！スピードカウンターが３つ以上ある時、相手モンスター１体の攻撃力を半分にしてその数値分ライフを回復する！」

《Ｓｐ－ハーフ・シーズ》
通常魔法
自分用スピードカウンターが３つ以上ある場合に発動する事ができる。
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体の攻撃力を半分にし、ダウンした攻撃力の数値だけ自分のライフポイントを回復する。

これできっかけは作った。しっかり拝見させてもらうぜ！

「それじゃ、ちゃんと見てなさいよ。これがアクセルシンクロよ！」

鈴佳が一気に加速し、前に進んでいく。俺達が辛うじてついていけるくらいだ。

「レベル６、シンクロモンスター《ドラグニティナイト－ヴァジュランダ》にレベル４、シンクロチューナー《ドラグニティナイト－ロンゴミアント》をチューニング！」

ロンゴミアントが４つの星になり、桜色の逆風に回転しながら溶け込んでいく。

「疾風の龍騎士よ！風の世界より、不屈の槍で逆風を貫け！」

さらに加速する。鈴佳もヴァジュランダも衝撃波に隠れてしまっている。それくらい速い。

「アクセルシンクロ！」

限界以上まで加速した鈴佳とヴァジュランダが、一瞬にしてコースから消えた。

「消えた…？」

「後ろから来るよ！」

「は？」

月沙が忠告した直後、後ろから時空の穴が開き、コースの先へ消えたはずの鈴佳と見知らぬ1体のモンスターが飛び出した。

「推参！《ドラグニティナイト－ロンギヌス》！！」

漆黒の体に緑の鎧を着た武装龍に、同じく黒い鳥人が白く光る槍を持って乗っている。漆黒の龍騎士が、俺達の前で飛んでいる。

《ドラグニティナイト－ロンギヌス》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星１０／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３２００／ＤＥＦ２４００
シンクロモンスターのチューナー１体＋チューナー以外の「ドラグニティ」と名のついたシンクロモンスター１体以上
１ターンに１度、自分の墓地に存在する「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター１体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。
このカードの攻撃力は、このカードに装備された「ドラグニティ」と名のついたカードの枚数×５００ポイントアップする。
また、相手ターンに１度、自分の墓地に存在する「ドラグニティ」と名のついた鳥獣族モンスター１体をゲームから除外する事で、フィールド上に表側表示で存在するこのカードをゲームから除外する。
次のスタンバイフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。
このカードが相手によって破壊された時、このカードに装備されていたモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。

《ドラグニティナイト－ロンギヌス》　ＡＴＫ／３２００

「凄え…！」

「これが、ドラグニティのアクセルシンクロモンスター…！」

「どう？これがアクセルシンクロよ！」

今までのモンスターとは迫力が違う。これが、シンクロ召喚を超えるシンクロ召喚…！

「とりあえず、続けるぞ！ライトエンドでロンギヌスに攻撃！」

「ロンギヌスの効果発動！墓地の鳥獣族ドラグニティを除外する事で、ロンギヌスをエンドフェイズ時まで除外する！トリブルを除外！」

ロンギヌスがコースから消え、ライトエンドが攻撃をやめてしまう。これじゃ、攻撃が当たらねえ…！

「く…ターンエンド」

「エンドフェイズ時にロンギヌスが帰還する！」

《ドラグニティナイト－ロンギヌス》　ＡＴＫ／３２００

紅刃
ＬＰ／４０００
ＳＰＣ／４
手札／２
モンスター／《ライトエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／リバース×２

「私のターン！」

紅刃　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／４→５

鈴佳　ＬＰ／４７００　ＳＰＣ／５→６

「ロンギヌスの効果発動！１ターンに１度、墓地のドラゴン族ドラグニティ１体を装備する！《ドラグニティ－ピルム》を装備！」

今度はピルムが光になってロンギヌスに吸収される。

「そして、装備しているドラグニティの数だけ攻撃力が５００ポイントずつアップする！」

《ドラグニティナイト－ロンギヌス》　ＡＴＫ／３２００→３７００

「攻撃力３７００！？」

「ライトエンドでも倒せねえ…！」

効果を使っても１００ポイントの差で破壊されちまう。どうする…？

「狙いはライトエンドじゃないわよ！ピルムを装備したモンスターは、戦闘ダメージが半分になる代わりに直接攻撃ができるのよ！」

「何！？」

「《ドラグニティナイト－ロンギヌス》でダイレクトアタック！カラミティ・ブラスト！」

ロンギヌスが口から槍に似た突風を吐き出し、俺に真っ直ぐぶつけてきた。

「ぐあぁぁぁぁぁ！！」

紅刃　ＬＰ／４０００→２１５０

「紅刃！」

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

鈴佳
ＬＰ／４７００
ＳＰＣ／６
手札／１
モンスター／《ドラグニティナイト－ロンギヌス》（ＡＴＫ／３７００）
魔法・罠／リバース×１

やっぱり強い。除去しようにも除外で回避されちまうし、攻撃力もライトエンドで殺し切れない。こんな奴にどうやって対抗すればいいんだ？

「ライトエンドはあえて残しておいたわよ！あんたもやってみなさいよ！」

「！」

「あんただけのアクセルシンクロ、ここで私達に見せてみなさい！」

俺だけの…アクセルシンクロ…。

「紅刃、私は信じてるから！」

「月沙？」

「絶対できる！」

月沙は真っ直ぐに俺を見ている。疑いなんて一切ない。

『紅刃、何も迷う事はなかろう』

『敵が強大なら、さらに強大な力で超えるのみだ。可能性はあるだろう？』

ロディスとリーシェも、一時的にカードから出てきて励ましてくれた。

「ロディス、リーシェ…」

そうだな。迷ってちゃ道は開けない。これだけ期待されてんだ。やれなかったら嘘だよな！

「サンキュな。それじゃ、決めてやろうじゃねえか！アクセルシンクロを！」

ロディスとリーシェは満足そうな表情でデッキに戻っていった。

「行くぜ！俺のターン！」

紅刃　ＬＰ／２１５０　ＳＰＣ／５→６
鈴佳　ＬＰ／４７００　ＳＰＣ／６→７

「俺の場に天使族かドラゴン族のモンスターがいる時、手札から《クリア・シンクロン》を特殊召喚する！」

白い翼を生やした天使のシンクロンが現れる。

《クリア・シンクロン》　ＡＴＫ／１０００

「この方法で特殊召喚に成功した時、墓地からカードを1枚手札に加える！《Ｓｐ－エンジェル・バトン》を手札へ！そして、そのまま発動！スピードカウンターが2つ以上ある時、カードを2枚ドローして手札を1枚捨てる！」

引いたのは…よし！これなら行ける！

「さらに、チューナーモンスター《ブレード・トラディショナー》を召喚！」

次に召喚したのは、マントとターバンを身につけた剣士だ。

《ブレード・トラディショナー》　ＡＴＫ／　５００

「チューナーを2体並べただけじゃ、シンクロ召喚はできないわよ？」

「…鈴佳、紅刃のシンクロチューナーはちょっと特殊なの」

「特殊？」

ああ。俺のシンクロチューナーは、こういう出し方もできるんだよ！

「《ブレード・トラディショナー》の効果発動！モンスターのレベルを合計２つまで下げる事ができる！この効果で、《クリア・シンクロン》のレベルを１つ下げる！」

《クリア・シンクロン》　Ｌｖ，２→１

「レベル１《クリア・シンクロン》にレベル１《ブレード・トラディショナー》をチューニング！」

１つの黄色の輪と１つの星が空中に浮かび同調する。

「チューナーどうしでのシンクロ召喚！？」

「恵みの波動が、疾風を織り成し現世を仰ぐ！希望の光を振り翳せ！」

☆１＋☆１＝☆２

「シンクロ召喚！齎（もたら）せ！シンクロチューナー《エンジェル・コンダクター》！」

ライトエンドの頭を象った帽子を被った長い銀髪の少女の天使が、白い翼を広げてライトエンドの横に並んだ。

《エンジェル・コンダクター》
シンクロ・チューナー（効果モンスター・オリジナル）
星２／光属性／天使族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ１４００
チューナー＋光属性モンスター１体
このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター１体の攻撃力の半分の数値分、自分のライフポイントを回復する事ができる。
また、相手のターン中、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚をする事ができる。

《エンジェル・コンダクター》　ＡＴＫ／１０００

「こいつはチューナーどうしでもシンクロ召喚できる！」

「なるほど…。石版から出てきただけあって規格外ね」

「《エンジェル・コンダクター》がシンクロ召喚に成功した時、俺の場のシンクロモンスター１体の攻撃力の半分だけ俺ライフを回復する！ライトエンドの攻撃力の半分、１３００ポイントのライフを回復する！シャイン・グローリー！」

コンダクターが両手を組むと全身が光り、ライトエンドもそれに会わせて光り出した。暖かい光が俺を照らす。

紅刃　ＬＰ／２１５０→３４５０

「これで準備は整った！ここからが本番だ！」

俺は鈴佳がやったように加速し、徐々に速度を上げていった。次第に世界が桜色になる。

迷いなんてもう吹っ切れてんだ。後必要なのは、敵を、スピードを恐れない強い心！

俺の中の力が、自然に引き出されていく。何だ？アクセルシンクロを使うと自動で覚醒するのか？

…まあ、いいか。今やるべき事は１つだ！

「レベル８、シンクロモンスター《ライトエンド・ドラゴン》にレベル２、シンクロチューナー《エンジェル・コンダクター》をチューニング！」

《エンジェル・コンダクター》が２つの星になって風に吸い込まれていき、黄色の輪になる。それを潜り抜けると、世界が黄色になった。

「天空に昇る輝きが、無限の進化で現世を救う！希望の光を振り翳せ！」

さらに加速、限界を超える。

ビキィッ！

ん？何だ今の？

ビシィッバギッバキャアッ！！

「「！？」」

「なっ！？」

D・ホイールが…ぶっ壊れた！？

「ぐあっ！？」

「「紅刃！？」」

突然、俺のD・ホイールに亀裂が入り、ばらばらに砕けてしまった。俺はそのままコースに投げ出され、思い切りコースに叩きつけられて1回バウンドしてコースの外に落ちた。

「ぐぅっ…！」

痛みを堪えてロディスのアビリティを発動させ、何とか地面に着地できた。その後、コースから落ちてきた俺のD・ホイールの残骸がまとめて地面にぶつかって、さらに粉々に砕け散ってしまった。

「ハァ、ハァ…」

「紅刃！」

コースの上からは月沙と鈴佳が、残骸からはカードから飛び出したロディスとリーシェが駆けつけた。

「大丈夫か！？」

「ああ、アクセルシンクロに入る途中で自動で覚醒したからな。それより…」

俺は無惨に大破したD・ホイールの一部に目をやった。デュエルディスクも破損しているけど、幸いカードは無事だ。ソリッドビジョンは当然消えていた。

「アクセルシンクロにD・ホイールがついてこれなかったみたいね…」

「冗談だろ…？」

「何にせよ、これではデュエルの続行は不可能だ」

クラッシュしたから、俺の負けか…。

紅刃　ＣＲＡＳＨ

鈴佳　ＷＩＮ

「う～ん…」

鈴佳は残骸の一欠片を手に取ってまじまじと見つめた。

「どうした？」

「…このＤ・ホイールって、スピード重視の設計だったりする？」

「ん？ああ、それを買った時にそんな説明を受けたけど…」

「スピードを上げる事にこだわりすぎて、耐久性が低くなっちゃってたのかも」

「はあ！？」

「おまけに、メンテしてるとはいえ地縛神の攻撃も受けてるし、余計に負担がかかってたんでしょうね。今までよく壊れなかったもんだわ」

「くそ…あの馬鹿店員、騙しやがったな…！何が『スピードと耐久性の両立』だ！」

昔にＤ・ホイールを店で買った時の記憶が蘇る。機械にそこまで詳しくないのを利用しやがって…！

「ま、新調するまではアクセルシンクロはお預けね」

「ハァ…。しゃあない、璃音に頼んでみるか…」

俺は肩を落としてカードを回収した。

「本当に大丈夫なのか？」

「だいぶ直ってきたからな。後は我々で何とかする」

翌日の午後。クヴァシルは秋斗の質問にあっさり答えた。

フォッタの協力があってか、《天空の聖域》の修復は大方済んだらしい。俺達の手を借りる必要がなくなったから、俺達はこれから人間界に帰るところだ。

「《天空の聖域》を護ってくれた事、感謝する。この聖域の代表として、礼を言おう」

ヒュペリオンが感謝の言葉を述べる。見送りに来たのは、クヴァシル、ヒュペリオン、鈴佳、アースだ。

「俺達は大した事はしてねえよ。あんな数、聖域のモンスター達がいないと対処できなかっただろうし」

「何かあっという間だったわね」

「仕方あるまい。我々はここに長く留まるわけにはいかん」

ルーナの率直な感想にロディスが指摘する。まあ、襲撃やら修復やらいろいろあったからな。

「鈴佳は、もう冥界に帰るの？」

「ゆくゆくはね。もう少し修復の手伝いをしてからよ」

「そっか…」

月沙は淋しそうに笑う。せっかく会えたのに、たった1日しか一緒にいられなかったからな。それに、もう死ぬまで二度と会えないだろうし…。

「そんな湿っぽい顔しないで！私は冥界からちゃんと見守ってるよ。私が作った服を着てるんだし、形見には困らないでしょ？」

「鈴佳…」

「しっかりね！」

「…うん。ありがとう」

今度は、明るい笑顔で答えた。

「紅刃さん」

俺には、さっきまで黙ってたアースが話し掛けてきた。

「私、紅刃さんに会えてよかったです。最初は心配でしたけど、今

はもう、私の知っている紅刃さんですよ」

「アース…。お前に会ってなけりゃ、俺はまだ迷ってばかりだったかもしれない。大切な事を思い出させてくれて、ありがとな」

「そんな…。私は別に…」

「実際、お前が紅刃の目を覚まさせたのだ。紅刃に憧れるお前だからこそ、できた事なのかもな」

謙遜するアースをリーシェが褒めた。全く、こいつに助けてもらってなかったら、俺は今頃どうなってたんだか…。

「俺もお前に会えて本当によかった。次に会う時は、１つ手合わせでもするか？」

「え？それって…」

「もう二度とここに来ないとでも思ってたか？時間があれば遊びに行くさ」

「…はい！その時までに、紅刃さんに負けないくらい強くなります！」

アースはまた俺に会えるとわかって嬉しいのか、笑顔で宣言した。

「そろそろ時間だよ！」

「皆さん、転移しますよ」

俺達の足元が光り出した。もう時間か…。

「月沙、ちゃんと長生きしなさい！早死にしたら承知しないわよ！」

「わかってるわよ！」

「紅刃さん！」

「ああ…」

「「「「また（な）（ね）」」」」

最後に俺、月沙、鈴佳、アースの言葉が重なり、目の前が真っ白になった。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第５０話　スピードの出しすぎには注意（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「Ｄ・ホイールがぶっ壊れちまったよ…」

璃音「あんな猛スピードを出してる状態で事故を起こして、よく無事でいられたわね…」

フィレス『ガルル…』

ロコナ『リオン、新しいＤ・ホイール作るの？』

璃音「ええ。壊れた物よりもいい物を作ってみせるわ」

勇香「やっぱお前や遊星の家系は凄えな…」

璃音「それじゃ、カード考察に入りましょうか。今回紹介するのは、鈴佳が使用するドラグニティのチューナー《ドラグニティ－ファランクス》よ」

《ドラグニティ－ファランクス》
チューナー（効果モンスター）
星２／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ　５００／ＤＥＦ１１００
このカードがカードの効果によって装備カード扱いとして装備されている場合に発動する事ができる。
装備されているこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

璃音「装備されていればいつでも特殊召喚できるわ。ドラグニティはモンスターを装備するギミックが多いから、案外簡単にシンクロ召喚に繋げられるわね」

勇香「今回鈴佳は使わなかったけど、ヴァジュランダの効果でファランクスを装備してレベル８のシンクロモンスターをシンクロ召喚する事もできるぞ」

ロコナ『サイバー・ダークとも相性がいいから、機会があったら試してみてね！』

勇香「問題なのは、ストラクに収録されてないから値段が馬鹿高い事だ。１枚集めるだけでも苦労するぜ…」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『感想待ってま～す！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

紅刃のアクセルシンクロモンスターはまだ出せません。いつになるかはお楽しみに…。

鈴佳はアクセルシンクロの特訓のために出しました。冥界で暮らしているので、当分出番はありません。

今回で天空の聖域編は終了です。次回からは再びアカデミアでの話になります。

では、また次回！

第５１話　父は娘に酷い扱いをされる事が多いと思う（前書き）

今回はデュエルなしです。後半が軽く超展開になってますが、ご了承ください…。

それではどうぞ！

第５１話　父は娘に酷い扱いをされる事が多いと思う

ＳＩＤＥ／紅刃

視界が晴れると、レッド寮の前に立っていた。時間は夕方だ。

「帰ってきたんだな…」

「それじゃ、レッド寮に行こうか」

「そうね。留守番組は璃音以外全員レッドだし」

フォッタの提案にルーナが賛同して、俺達はまず食堂に向かった。

「…？騒がしいな」

秋斗の言う通り、食堂が何やら賑わっている。大方、十代や万丈目あたりが騒いでんだろ。

俺は全員を代表して中に入った。

「が…かはっ…」

「ぐおぉ…」

「先生ぇぇぇぇぇぇ！！？」

「万丈目！」

「大変ザウルス！ディヴァイン先生と万丈目先輩が倒れたザウルス！」

「早く保健室に連れていくッス！」

「「「「「……」」」」」

…え？何この状況？

食堂では、なぜかディヴァインと万丈目が撃沈していた。２人共体をぴくぴくと痙攣させている。

「…将人、どうなってんだこれ？」

「ん？…！紅刃！？お前達いつの間に…」

「たった今帰ってきたんだよ。それより、何があったんだ？」

俺は将人に状況を聞く事にした。

「ああ、あれか…。俊也が料理をして…」

「ＯＫ、大体把握できた」

「早いな！？」

テーブルを見ると、食べかけの料理が２人前が置いてあり、俊也が頭を悩ませていた。

「ちゃんと改良したのにな…」

「俊也、これ全部食べていいかしら？」

「あ、いいよ」

そして、璃音がそれを平気な顔で平らげていく。俊也の料理を食って平気なのは、璃音やウィンくらいだもんな…。

「俊也の料理は殺人級だよ。見た目は平気でもああなるくらいまずい。私と紅刃も1度入院しかけたし」

「そこまで酷いのか…？」

「あれはもう暗黒物質（ダークマター）なんてもんじゃねえよ。混沌物質（カオスマター）だよ。見た目が普通だから余計質悪いよ」

俺と月沙は経験者だからわかる。あの時は冗談抜きで生死をさ迷った。何か三途の川が見えたし。

「なら、何で璃音は平気なのよ？2人前食べた上におかわりまでしてるんだけど」

「あいつとウィンは特別だ」

ルーナの疑問に答えたのは、後から食堂に入ってきた勇香だった。

「勇香！？」

「事情はここに来る途中で翔達から聞いたぜ。ディヴァインと万丈

目が運ばれてるから何事かと思ったけど…」

「特別っていうのはどういう事だ？」

「あいつら、なぜか俊也の料理を食っても平気なんだよな…」

「勇香は知ってたの？」

「アルカディアムーヴメントにいた時に、私もやられたんだよ。私の他にも沖田やリキッド、セリアも被害に遭ったな…。『俊也には料理を作らせるな』っていう暗黙の了解までできたってのに、ディヴァインの奴忘れてやがったな？」

ルーナは完全に青ざめてるし、将人と秋斗も心なしか顔色が悪いように見える。それだけ破壊力があるんだよ、俊也の料理は！

「そういえば、さっきの万丈目君、服が白かったけど…」

「その事も含めていろいろ話がある。まあ、お互いに報告と行こうじゃねえか」

ＳＩＤＥ／月沙

夕食を済ませて、私達は紅刃の部屋に集まった。それで、今情報交換を終えたところ。

アカデミアでは、もう万丈目君が光の結社に入ったところまで進んでるみたい。十代はまだ帰ってきてないけど、そろそろエドとの再戦があるはず。

何より驚いたのは、俊也が新しいドラゴン《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》を手に入れたという事。ノルフェナさんの話だと、ダイガスタ・ウルにも石版があって、ライトエンドに並ぶ伝説の風の龍らしい。まだ手に入れて日が浅いから石版は反応しないだろうけど、ガスタの里の力が1番ダイガスタ・ウルの力を引き出せるって事で、俊也はこれからガスタの里に行く予定を立ててた。

で、私達遠征組の間で発生した問題はというと…。

「D・ホイールが大破…」

「ああ。元々耐久性が低かったみたいで、アクセルシンクロに耐え切れずに粉々になっちまったんだ」

「わかったわ。私が何とかする」

「いいのか？」

「ええ。ただ、この過去の時代の物質では限界があるわ。1度未来に戻らないと…」

璃音は紅刃のD・ホイールの制作をあっさり引き受けてくれた。

一応、問題はあるけど…。

「それでは、今後の予定を立てましょう」

そう言って進行役を買って出たのは、ノルフェナさんだ。

「紅刃さんと璃音さん、後フォッタは1度未来に戻ってください。D・ホイールを一から造るのは未来の方が都合がいいようなので」

「了解！」

「わかったわ」

「俊也さんはガスタの里へ。私が同伴します」

「はい！」

「それと、将人さんにもついてきてほしいのです」

「俺が？」

将人まで？ガスタの里とは特に関係ないと思うけど…。

「《ダークエンド・ドラゴン》のものと思われる石版があるのです」

「ダークエンドの石版だと！？」

「元々、《ライトエンド・ドラゴン》と《ダークエンド・ドラゴン》は対になる龍です。ライトエンドが伝説の龍なので…」

「対になるダークエンドもそうだという可能性が高い、という事か？」

「はい」

そっか…。それなら理解できる。ダークエンドの派生モンスターって、どんなのだろう？

「残りの人達はアカデミアで待機しててください」

「わかりました」

「ノルフェナさん、月沙も連れていっていいかしら？」

「え？私？」

話がまとまったと思ったら、璃音が私を連れていく依頼をした。

「会わせたい人がいるのよ。それに、月沙の言う原作でどこまで進んだかを把握させる機会にもなるわ」

「そうですね…。わかりました。いいでしょう。では、アカデミアはルーナさん、勇香さん、秋斗さんに任せます」

「わかったわ」

「任せとけ！」

「別に、どこに駆り出されようが関係ない」

「フフ…ありがとう」

三者三様の受け答えを聞いて、璃音は満足そうに笑った。

確かに、遊星達の方が原作でどこまで進んだか気になるなぁ。でも、『会わせたい人』って誰だろう？

というわけで翌日。私と紅刃、璃音、フォッタはネオ童実野シティに帰ってきた。

出発のシーンは悪いけどカットで。文章がグダグタになるのは避けたいからね。さてと、メタ発言はここまでにして…。

「ここに来るのも久しぶりだな」

「ええ。兄さん達、元気にしてるかしら？」

今いるのは噴水広場の入口。遊星達が暮らしてる借家はすぐそこだ。

「またてめえはコーヒー飲んできたのか！？３０００円がどんだけ価値があるかわかってんのかよ！」

「貴様こそブルーアイズマウンテンの素晴らしさをわかっていないからそんな事を言えるのだ！」

「まあまあ、２人共落ち着いて…」

借家から聞き慣れた内容の怒鳴り声が２つと、それを宥める声が

聞こえてくる。クロウとジャック、ブルーノだ。

「ハァ…またやってるのね…」

璃音は溜息をつくと、部屋に入って壁に手をついた。

ズドドドドドドド！！

「ぬぉおおおおおお！？」

「おわぁぁぁぁぁぁぁ！？」

「うわぁぁぁぁぁぁぁ！？」

すると、壁や床に天井と四方八方から鉄柱が勢いよく生えて、ジャック達にぎりぎり当たらない位置に激突した。

「「「……」」」

「全く…いい加減バイトできるくらいに成長しなさいよ」

「いや何やってんだお前ぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？」

鉄柱を全部引っ込めてから璃音が口を開いた後、いち早くフリーズ状態から立ち直った紅刃が大声でツッコんだ。

「喧嘩を止めるにはこれが手っ取り早いでしょ？」

「だからってアビリティで鉄柱を何本も伸ばす必要ねえだろ！青髪の奴も巻き添え食ってるし！」

「本当ならジャックの脳天に1本でもよかったんだけど、ノリでやってみたのよ」

「ノリ！？ノリで俺達死にかけたのか！？」

「安心なさい、かする程度で済ましてるから」

「むしろ当たるより怖えよ！心臓止まるかと思ったぞ！俺達そんなに悪い事したか！？喧嘩してたのがそんなに気に食わなかったか！？」

途中からツッコミ役がクロウに切り替わる。でも、璃音はジャック達を傷つける事なく鉄柱を生やした。その上、鉄柱が当たった箇所は皹1つ入ってない。あれだけの数の鉄柱を完璧にコントロールできるなんて、璃音は凄いよ。

「あ、ええと…とりあえず、お帰り璃音」

「ええ、ただいま」

「ん？お前達は過去の世界に行っているのではなかったのか？」

「ちょっとここでしかできない用事ができたのよ」

いきなり衝撃的な出来事があったからうやむやになってたけど、ジャックがようやくそこを指摘した。

「で、そっちの人達は？」

「先に過去に行ってた人達よ。真川紅刃に波星月沙」

「ああ、璃音達がたまに話してた人達だね？」

あ、そっか。私と紅刃はまだブルーノと会った事がなかったんだっけ。

「僕はブルーノ。ここで遊星達にお世話になってるんだ」

「へえ、居候みたいなもんか。俺は真川紅刃」

「私は波星月沙だよ。よろしく」

「うん、こちらこそ」

私達は軽く自己紹介を済ませた。…ブルーノって、やっぱり背が高いなぁ…。

「事情は勇香や璃音達から大体聞いてるよ。謎の組織を倒すために過去に行ってたんだって？」

「うん。今日はちょっとトラブルがあって戻ってきたんだけど…」

「トラブル？」

「その事について、今からゆっくり話すよ」

「…あれ？君は誰だい？」

「あり？フォッタ、お前も来てたのか？」

「うん、やっぱり空気になってたね…」

あ…フォッタの事、忘れてた…。ここに来てから全然話してなかったから…。

「璃音！？紅刃に月沙、フォッタも…！」

後ろから声がして振り返ると、さっきまでいなかった遊星が立っていた。

「兄さん！」

「遊星、久しぶりだな」

「ちょっと用事ができてね。今から話すよ」

とりあえず、私達は《天空の聖域》での出来事を一通り話した。

龍可の事もあって、精霊界の事は普通に信じてくれてる。

「で、石版から出てきたのがこの2枚だ」

紅刃はそう言って、《エンジェル・コンダクター》と枠だけのカードを取り出した。

「これは…！」

「シンクロチューナー！？」

「で、月沙が言うにはこの白紙同然のカードがアクセルシンクロモンスターらしい」

「だが、何も描かれてないぞ？」

「アクセルシンクロに成功した時に絵柄が浮かび上がるの。普段は白紙のまま」

「で、俺もアクセルシンクロを修得するために練習してたわけだけど…」

「できるようになったの？」

「それ以前の問題だ。加速したはいいけど、スピードに耐え切れずにぶっ壊れちまった」

「「「「！？」」」」

「何とか怪我はしないで済んだけどな…。元々スピード重視の脆い

設計だったらしい」

「購入の時に店員に騙されたのが運の尽きだったね」

「黙っとけ」

紅刃が不機嫌そうに呟く。やっぱりショックだったんだ…。

「コースが空中だったから、そこから落ちて地面に叩きつけられてD・ホイールは粉々。もう修復不可能よ。そこで一からD・ホイールを造る事にしたんだけど、過去の物質だけでは不十分。だからこっちに戻って造る事にしたの」

「そうか…。なら俺も手伝おう」

事情を話し終えると、遊星が助太刀を申告してきた。

「いいのか？」

「仲間のためだ。1人で造るよりはいい」

「僕もやるよ。メカは得意だからね」

「ブルーノ！」

「こいつはメカに関しちゃ、遊星並のやり手だ。メカニックが3人もいるんだ、絶対いい奴ができるぜ」

遊星とブルーノも手伝ってくれるなら心強いね。私は…手伝える事なさそう…。

璃音が言ってた『会わせたい人』がブルーノだという事がわかったのは、それから少しした後だった。

ＳＩＤＥ／俊也

「懐かしいなぁ。ほとんど里帰りなんてしてなかったっけ」

僕と将人、ノルフェナさんは転移でガスタの里に着いた。ウィン達は既に実体化している。

山に近い草原にできた群落って言ったらわかるかな？そんな感じの村だ。

「のどかな所だな。のんびり過ごせそうだ」

「精霊界はどこもこんな感じなのか？」

「いや、全部が全部そういうわけじゃない」

ゴーズと将人が言葉を交わした後、僕達は早速奥へ進んでいった。

しばらくすると、１軒の建物に辿り着いた。他の建物より一回り大きい。

「ここが私の家だよ」

「ガウッ！」

ウィンが自分の家を紹介して扉に手を掛けると、何かが吠えてこっちに走ってきた。黄緑の狼みたいなモンスターで、角が1本生えている。

「サンボルト！」

ウィンはしゃがんでサンボルトと読んだ狼を抱きしめた。サンボルトは嬉しそうに尻尾を振っている。

「久しぶり！元気にしてた？」

「ガウルルッ！」

「ウィン、その子は…？」

「サンボルト。私の家で暮らしてるんだ。お父さん達いる？」

カイエンの質問に答えたウィンがサンボルトに家族の事を聞くと、サンボルトは1回首を縦に振った。

「ありがとう。それじゃ、行こっか。ただいま～」

僕達はウィンの先導で家の中に入った。

「さ、上がって」

「お邪魔しま～す」

「主、人数が多いから俺達はカードに戻ってるぜ？」

「わかった」

ヒジュラ、ゴーズ、カイエンはデッキに戻り、僕達はずんずん奥に進んでいく。

すると、開け放してあるドアから声が聞こえてきた。

「ハァ…」

「どうしたの、父さん？」

「いや、ウィンの事を思い出してな…」

部屋を覗くと、そこは居間だった。緑の髪の大人の男性と同じく緑の髪を頭の下の位置でまとめた女性がテーブルを囲っていて、大皿に盛られたグラタンを食べている。

「ウィンがこの里を出てからどれだけ時間が経った事か…」

「そういえば、１度も帰ってきていないわね」

「前までは時々連絡してくれたのに、今じゃすっかり連絡も途絶えてしまってる。お父さん嫌われちゃってるよ」

「そんな事はないと思うけど…」

「はっ！まさか、何者かに捕われているのか！？最悪の場合殺されていたりして…！」

「…！…それはない。今あなたの後ろにいる」

「わかりやすい嘘つくな。どうせ『あ、ＵＦＯだ！』みたいな感じの奴だろ？見え見えなんだよ。ああもう！ウィィィィィィン！！カムバァァァァァァァァァアック！！！」

ガッ↑右手で父の頭を鷲掴みにした音

ガバシャッ！↑グラタンにダイブさせた音

「あ゛っぢゃあ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛！！！ぐ、グラタンがぁぁぁぁ！！？出来立てほやほやのが俺の顔面にぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！？？」

「「「…………」」」

…ええと、今の状況をわかりやすく説明すると…。

ウィンが背後にスタンバイ↓頭鷲掴み↓そのままグラタンに顔面

からＧＯ！

…ていう感じで、男性は顔面を両手で押さえてのた打ち回っている。

「いい加減気づいてよ馬鹿親父」

「はっ！その声はまさか…！」

「ウィン…！」

「お父さん、カーム姉、ただいま」

「ウィンなのか！？本当にウィンなのか！？」

「だからそうだって。ちょっと用事があって帰ってきたの」

「ウィィィィィン！お帰りいいいいい！！」

ガシッゴシャアッ！

男性が感極まってウィンに抱きつこうとすると、ウィンは情け容赦なしでバックドロップをお見舞いした。

「親馬鹿なのは相変わらずね」

「あ、愛情表現が激しい…さすが我が娘…」

「今のどこに愛情を感じたのか１０字以内で説明して」

あれ？ウィンってここまでバイオレンスな性格だったっけ？何か普段とは別人なんだけど…。

「…俊也、ウィンはああいう奴だったか？」

「いや…違う、と思う…」

「いやぁ、お見苦しいところを見せてしまったな。俺はダール。で、こっちが娘のカームだ」

「よろしく」

事態が一通り収束した後、ダールさんとカームは軽い自己紹介をした。

「俺は銘丈将人だ」

「僕は風嶺俊也。ウィンのパートナーやってます」

「俊也？おお、ウィンから話は聞いてるよ。俺の娘が世話になってるな。将人もよろしくな」

「あの、連絡って…？」

「過去の世界に行く前までは、定期的に文通してたの。ただ、過去に行った後は連絡手段が全部使えなくなったから…」

「過去？…話して」

カームが説明を促し、僕達は今までのいきさつを掻い摘んで話した。

「なるほど…。まさかウィンのパートナーであるお前が、伝説の風の龍の継承者だったとはな」

「それで、ガスタの龍の力を最大限に引き出して戦うには、同じガスタの力を使うのが1番だと考えて帰ってきたの」

「そうか。確かにウィンの言う通りだ。それに、俊也は元々【風属性】の使い手。俺達ガスタの一族に伝わる力を十二分に引き出せるだろう」

「ただ、私はしばらくの間魔術しか使ってなかったから、超能力の感を取り戻さなくちゃいけない」

「わかった。そういう事なら好きにしな。修行は俺も手伝おう」

「本当！？」

「それに、いい機会だ。テレポートを修得してみるのはどうだ？」

「テレポート？」

テレポートって、超能力者の漫画とかでよくあるあれ？

「覚えとけば何かと役に立つだろう。やってみるか？」

「…うん、わかった。やるよ」

「いい返事だ」

ダールさんは満足そうに頷いて立ち上がった。

「その前に、ちょっと付き合ってほしい事があるんだが、ついてきてくれるか？」

「え？」

「ダールさん、もしやあれですか？」

「ああ、あれだ」

あれって何だろう？今の時点じゃわからないな。とにかく、僕達はダールさんを先頭にして家を出た。

僕達が来たのは、小さな小屋だ。ゴーズ達は外に出たから実体化して、既に自己紹介を済ましてある。

「ああもう！少しは落ち着けよ！」

小屋に入ると、何かに悪戦苦闘している人を見つけた。髪は緑のツインテールで、髪の先が朱色になっている。

「リーズ、どうだ？」

「ん？あ、親父！駄目だ、これっぽっちも言う事を聞いてくれない」

「リーズ姉！」

ウィンはツインテールの人に駆け寄った。『姉』って、この人もウィンの姉さん？

「へ？…な！？ウィン！？」

「ただいま！」

「うっは～、久しぶりだな！ここに帰ってくるなんて何年ぶりだ！？」

「ウィンのパートナーが風の龍の継承者になってな。同じガスタの力を手に入れに来たって話だ。超能力の感を取り戻すのに少し時間をかけるけどな」

「そっかぁ。あ、その人達がお客さん？あたいはリーズ、ウィンの長女だ」

「僕は風嶺俊也。ウィンのパートナーをやってるんだ。よろしく」

僕を始めとして、一通り自己紹介を終えた。リーズって、何か勇香に似てるな。

「さて、自己紹介も済んだところで…リーズ、ウィンをガルドに会

わせてやってくれ」

「はあ？おいおい、大丈夫なのか？」

「ガルド？誰だそれは？」

「ガスタの鳥だ。こいつがなかなかの利かん坊でな、一族の誰にも懐かないんだよ。おかげで餌をやるのも一苦労だ」

ゴーズの質問にダールさんが少しうんざりした様子で答えた。何か参ってるみたいだ。

「で、そのガルドがこいつだ」

リーズがその場から避けると、緑色の鳥が目に入った。目は赤くて、刺がついた緑の鎧みたいな帽子を被り、風車のようなマークが入った首飾りをしている。

「キュルル…」

「可愛い！この子がガルド？」

「ああ。気をつけろよ。いきなり暴れ出すからな」

ダールさんの忠告を聞いた後、ウィンはガルドにゆっくり近づいた。ガルドはじっとウィンを見つめている。

「こんにちは。私はウィン。よろしく」

「……」

沈黙。ガルドはただ見つめ続けるだけだ。

「……キュー」

ガルドは何を思ったのか、いきなり飛び立ってウィンの左肩に止まった。

「ガルドが肩に止まったぞ！」

「意外ね」

「すっげぇな。今までそんな事1度もなかったのに」

「そいつがウィンの肩に止まったっつー事は、ウィンに懐いたんじゃねえか？」

「え？そうなの？」

「キュルッ！」

ウィンがガルドに尋ねると、ガルドは目を細めて縦に頷いた。ヒジュラの予想大当りだ。

「思った通りだ。もしかしたらウィンになら任せられると思って会わせたんだが、正解だったな」

「え？という事は…」

「ガルドのパートナーとして、これから面倒を見てやってくれない

か？」

「私が！？」

…これって、世話が大変だから相性のいい人に体よく押しつけてるようにも見えるんだけど…。気にしない方がいいな、うん。ダールさんの判断は正しいと思う。嫌な相手より好きな相手といた方が幸せなのは当たり前だしね。

「それじゃ、早速訓練だ。ガルドはもちろん、俊也も受けとけ」

「僕も？」

「アビリティの特訓には持ってこいじゃないですか？」

「…うん、そうだね。わかりました」

少し考えてから、僕も訓練を受ける事にした。相手の力量が測れない以上、できるだけ強くならなくちゃいけないし。

「よし！それじゃ、俺についてこい！」

こうして、ウィンとガルド、そして僕は、ガスタの力をものにするための訓練をする事になった。

ＳＩＤＥ／将人

俊也達が訓練する事になったのはいいが…さすがに訓練の間の時間がもったいない。

「ノルフェナ、石版の方はどうするんだ？そう長く待機しているわけにもいかないだろ」

「そうですね…。皆さん、ちょっといいですか？」

訓練をする場所に向かう途中で、ノルフェナが他のみんなに声を掛けた。

「訓練の間の待ち時間がもったいないので、私と将人さんは先に石版の件を済ませたいのですが、よろしいでしょうか？」

「ああ、そうか。将人がついてきたのはそのためだったね」

「いいぞ。そっちの方が効率がいいだろう」

「わかりました。では、私達はこれで…」

「俊也、ウィン、訓練頑張れよ」

「ありがとう。それじゃ、また後でね」

俺とノルフェナは一端別行動する事を告げて集まりから離れていった。当然、ヒジュラ達もついてくる。

「目的地はどこですか？」

「万魔殿（パンディモニウム）という所です」

「万魔殿？カードでいう《万魔殿ー悪魔の巣窟》の事か？」

「はい」

ライトエンドの石版が見つかった《天空の聖域》とは正反対の場所か。石版の在り処まで対になっているとはな。

「ここまで来ればいいでしょう。転移します」

俺達は立ち止まった後、ノルフェナの力で転移した。

着いた先の光景は、カードの《万魔殿ー悪魔の巣窟》のイラストと同じ所だ。違うと言えば、四方に都市が広がっているくらいだ。空は赤く、いかにも悪魔がうじゃうじゃいそうな感じだ。

「ここが万魔殿か…」

「俺達は冥界の生まれだが、大抵の悪魔族のモンスターはここに住んでいる。《天空の聖域》に天使族が集まっているのと同じだ」

「だがよぉ…少し様子がおかしいぜ？」

「どういう事だ？」

「俺達3人は何度かここに来てるんだけどよ…ここまで荒れてはいなかったはずだ」

確かに、所々に何かの攻撃の爪痕がある。柱も真っ二つに折れているのがいくつもあり、何かの騒動の後のようだ。

「悪魔族の都市とはいえ、これは妙です。まるで、戦争の後のよう…」

「戦争…」

カイエンの言葉にあった単語を繰り返す。戦争か…。この光景にピッタリな言葉だな。

「…！あれは…！」

「どうした、ノルフェナ？」

「あのモンスター…」

ノルフェナの視線の先には、1体のモンスターがいた。体中に包帯を万遍なく巻きつけた大柄の男といった風貌で、傷だらけで倒れている。

「おい！大丈夫か！」

俺は真っ先にそのモンスターに駆け寄った。ノルフェナ達も後に続く。

「気を失ってるのか…？」

「私が回復させます！」

ノルフェナが両膝をついてモンスターに両手を翳すと、手から発する光が傷を癒していった。

「こいつ…《グレイブ・スクワーマー》じゃねえか」

「知り合いか？」

「一応な。何だってこんな事に…」

「う〝…」

ヒジュラが疑問に思っていると、《グレイブ・スクワーマー》が意識を取り戻した。

「おい、大丈夫か？しっかりしろ」

「だ、誰だ…？」

「俺の主だ。他はダチ公」

「む…ヒジュラ…？」

「野暮用ができてここに来たんだが、ずいぶん派手にやられてんな、おい。何があったんだよ？」

「…魔王だ…」

「あ？」

「今、この都市では魔王が暴れている」

スクワーマーの口から飛び出したのは、不可解な事実だった。

「魔王だと…？」

「この都市から少し離れた所にある森の奥地には…かつて万魔殿を混乱に陥れた凶悪な魔王が封印されていた…」

「その話なら知っている。確か、ガーランドルフと言ったか？」

ゴーズもその魔王の話は知っているようだ。ガーランドルフ…《破滅の魔王ガーランドルフ》か…。

「おい待てコラ。まさか、そいつの封印が解けたってんじゃねえだろうな？」

「正確には…『意図的に解かれた』んだがな…」

「意図的に…ですか？」

「魔王が配下として…儀式魔人を引き連れていたのは知っているな…」

「そんな話もありましたね」

「魔王が封印される時に…何万体もの儀式魔人が、巻き添えになっ

たんだが…たった3体、運よく逃げおおせた奴がいたらしい…」

「そいつらが封印を解いたというのか？」

「ああ…。ただ、封印を解くために力を蓄えていたから、今まで姿を現さなかったのだ…」

要するに、当時の生き残りの仕業か。都市を混乱させるほどの力を持つ魔王がいきなり復活したら、すぐには対応できないだろう。

「だったら、魔王を封印した奴にもう1度封印してもらうよう頼めばいいだろ？ノースウェムコと言ったか…そいつなら何とかできるはずだ」

ゴーズの提案は、普通なら無理な話だ。封印と言っても、かなり前の話のはず。人間なら死んでいるだろうし、そうじゃなくても老いて当時の頃の力は出せないだろう。だが、ここは精霊界。住むのは精霊だ。何百年生きていようが不思議ではない。

「救世の美神か…。それなら、もうとっくに来て戦っている…だが…」

「だが、何だ？」

「儀式魔人は魔王に分け与える力まで蓄えていたらしい。そして、魔王はそれを全て受け継いだ」

「おいおい…するってーと、何だ？ノースウェムコですら歯が立たねえってか？」

「私達悪魔族も共に戦ったのだが、私はもちろん、他の者も次々と敗れていった…。最後に見たのは、この都市を治めているスカルデーモン様とノースウェムコが共闘するも、押されているところだった」

全員に戦慄が走る。この都市の王と伝説の美神が2人掛かりで戦っても魔王の方が強いというのか…？

「お前達は早く逃げろ…。今この都市は危険すぎる。封印されていた儀式魔人も暴れている以上、勝ち目はないかもしれん…」

「…スクワーマー。てめえ、俺がどんな奴かわかって言ってんのか？」

「？」

「王と美神を超える魔王たぁ、大した大物じゃねえか。なあ、てめえら！」

「そう楽観的に考えているのはあなただけよ。でも、引くつもりはないわ」

「俺も、目の前でこの都市が滅びていくのを放っておけるほど馬鹿ではない」

「私も、神として引くわけにはいきません」

「主、てめえはどうだ？」

みんな考える事は同じか。誰も逃げるなんて選択肢は最初から捨

ている。

「わざわざ聞くまでもないだろ？2人じゃ足りないなら、俺達の力も足せばいい」

「本気なのか…？」

「本気以外の何があるよ？てめえも治療されたんだから動けるだろ。援軍呼ぶなり何なりしやがれ。まあ、その前に俺達が片付けてるだろうけどな」

ヒジュラは元々好戦的な奴だ。この程度の騒ぎ、こいつにとってはただの祭りでしかない。

「行くぞ。魔王を倒す！」

「…わかった。俺も行こう」

「スクワーマー？」

「この中で、この都市に1番詳しいのは俺だ。おそらく、魔王が向かったのはこの都市の中心部。近道があるから案内する」

「近道とか言って、都市の出口に案内すんじゃねえぞ？」

「まさか。こっちだ」

スクワーマーが走り出し、俺達もそれに続いた。

「ブルルッ！」

「！」

少し進むと、紫や黄緑の太った悪魔の集団に出くわした。

「あのモンスター達が儀式魔人ですか？」

「ああ。気をつけ…」

「っしゃあ！行くぜ！」

「立ち止まっている暇はない！」

「っておい！人の話を最後まで聞け！」

俺とヒジュラは大鎌を出して儀式魔人に斬り掛かった。

「おらぁっ！」

ヒジュラが慣れた手つきで次々と儀式魔人を斬り裂いていく。俺も鎖付きハンマーやレイピアでの攻撃をかい潜って斬り払う。

２０秒後には、儀式魔人は全滅していた。斬られた儀式魔人は全て消滅した。

「な…！」

「腕を上げたな、主」

「俺もただのんびり過ごしていたわけじゃないのは知っているだろ

？」

「あの数をたった2人で…！？」

「どうだ？これなら希望があるんじゃないか？」

ゴーズはいつでも戦闘に入れるように剣を取り出し、カイエンもそれに倣った。

中心部には、ものの２０分程度で着いた。途中で何十体もの儀式魔人に襲われたが、例外なく返り討ちにした。この程度の敵に引けを取る俺達ではない。

「さっきからやばい魔力を感じるぜ…」

「もうすぐだ！」

やがて、俺達は目的地に辿り着いた。そこそこ広い広場で、少し不気味だが豪勢な塔が立っている。この都市の政治機関なのだろう。だが…。

「これは…！」

どうやら、スクワーマーの話は本当らしい。カードで見た事があるモンスターが3体対峙していた。

「グカカ…どうした？もう終わりか？」

「ぐ…まさかここまでとは…」

「少々、まずいですね…」

《迅雷の魔王ースカル・デーモン》と《救世の美神ノースウェムコ》が手負いの状態で片膝をついていて、《破滅の魔王ガーランドルフ》が立ちはだかっている。そして、その周囲を取り囲むように儀式魔人の軍団がいる。

「もはや貴様らでもどうする事もできまい」

「何を言うのです！私達はここで屈するわけにはいかない！」

「ならば、この状況をどう打開するというのだ？数も力も我が有利。大人しく我に滅されるが…」

ズドドドドドドド！！

「「「！？」」」

ガーランドルフが言い切る前に、ノルフェナが両手から光の矢を無数に放ち、大量の儀式魔人を消滅させた。

「何事だ？」

「事態はあまりよろしくないようですね…」

「よぉ、スカルのおっさん。遊撃部隊の到着だぜ」

「ヒジュラ…!?お主がなぜここに…!?」

「あなたは…ノルフェナ様!?」

王を『おっさん』呼ばわりするとは…。ノースウェムコもノルフェナの事は知っているようだ。

「派手にやられてんじゃねえか。定年間近かよ?」

「フ…お主に心配されるほど老いてはおらぬわ…!」

スカル・デーモンはヒジュラの悪口じみた励ましを受けて何とか立ち上がった。

「スカル・デーモン、ノースウェムコ。後は俺達に任せてくれ」

「任せる?貴様らが我を倒すというのか?」

「それ以外に何がある?」

「見たところ人間のようだが…人間風情に何ができる?」

ガーランドルフは明らかに人間を見下している。人間がどれだけの力を持っているか知らないようだな。

「何を考えているのですか!?奴は今や私達でも倒せないほどに力をつけています!なのに…」

「ゴーズ、カイエン、ヒジュラ。残りの敵を任せられるか?」

「わかった。俺達で片付けておく」

「気をつけてくださいね」

「いいぜ。丁度血が騒いできやがったところだ！」

「俺も戦う。ただ見ているなんてできはしない…！」

「スクワーマー…。頼む。ノルフェナはスカル・デーモンとノースウェムコの治療を頼む」

「わかりました」

話が進まないから無視だ。ゴーズ達は下っ端を倒すべく飛び出し、ノルフェナはノースウェムコとスカル・デーモンの所に向かった。

「人の話を…！」

「ノースウェムコさん、ここは彼らに任せておきましょう」

「ノルフェナ様…！」

「彼らなら大丈夫です。私や弟子が見込んだ者ですから」

「フン…まあ、少し遊ぶのもいいだろう。その方が長く楽しめる。だが、貴様1人で我の相手が務まると思っているのか？」

「精霊でもデュエルができると聞いた事がある。魔王ならデュエルにもさぞかし自信があるんだろ？」

「人間ごときが我を挑発するか。…面白い。あえて乗ってやろう。負ければ破滅する闇のデュエルで葬ってくれるわ！」

ガーランドルフの左腕から闇が噴き出し、デュエルディスクに変わった。

簡単に乗ってくれたな。そうでなければ、俺以外の全員を下っ端の退治やら治療やらに割いた意味がない。

「だが、例え我が負けるような事があったとしても、我の膨大な魔力を持ってすれば軽傷で済むだろう」

「…！」

「どうやら、封印の準備もしなければならないようですね。急いで治療しなければ…」

「封印の準備などさせぬ。貴様をすぐに葬って、ノースウェムコと女もあの世に送りつけてやろう」

少し面倒な事になったな。なるべくデュエルを長引かせるか。デュエルに勝つ時、覚醒を使えば少なからずダメージを与える事ができるだろう。

だが、こいつの目的がはっきり読めない。何のためにこの都市を襲った？ただの腹いせか？

「さあ、行くぞ！我が力の前に平伏すがいい！」

「貴様に屈するつもりはない！必ず勝つ！」

「「デュエル！」」

将人ｖｓガーランドルフ

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第５１話　父は娘に酷い扱いをされる事が多いと思う（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「今回はデュエルがなかったからカード考察はなしね」

勇香「…なあ、後半ちょっと無理矢理じゃねえのか？」

璃音「文句言わない。これでもかなり重要な話なのよ？」

フィレス『ガルルルッ！』

勇香「魔王討伐がか？」

璃音「ええ。何せ、【ピーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー】」

勇香「おい…今『ピー』って入ったぞ？」

ロコナ『ユウカ、「ピー」って何？』

勇香「放送しちゃやばい事を話した時にそれを隠すために流す音だ。今盛大なネタバレを話しやがったから入ったわけ」

璃音「まあ、これは次回のお楽しみという事で」

勇香「ところでよ…お前とウィンってあんなバイオレンスな一面あったっけ？」

璃音「さあ？私はノリだけど」

勇香「後でクロウとブルーノに謝っとけ。ジャックは喧嘩の発端だからいい」

璃音「ウィンみたいなのはよくある事じゃないかしら？親馬鹿な父親が娘に煙たがれるみたいなパターンでしょ？」

勇香「その内パイルドライバーでもぶちかましそうだな…」

ロコナ『ねえねえ、シュンヤのお料理食べたいな』

勇香「食うなぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！それだけは駄目だぁぁぁ！間違いなくお花畑にトリップするって！渡っちゃいけない綺麗な川が流れてるからぁぁぁ！！」

璃音「そう？あんなに美味しいのに…」

勇香「お前の舌と胃袋はどんな構造してんだよ！？お前以外だとあいつの女房の魂が遥か彼方にファーラウェイしちまうぞ！？もうこの際お前と俊也が結婚した方が世の中平和になるんじゃねえ！？」

璃音「何言ってるのよ。私が俊也に釣り合うわけないでしょ？」

勇香「そういうんじゃなくてだな…もういいや…」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『感想待ってま～す！』

勇香「次回も見てくれよな！…今回は何か疲れた…」

――――――――――――

いかがでしたか？

いきなり魔王と戦うという超展開になってしまいました。戦うまでの展開がちょっと自信ありません…。

アカデミアでの話とか言っておきながらまた精霊界がメインに…。不確定な予告は軽々しくするものではないですね。

ダールは第４９話の冒頭でノルフェナと一緒に出てきた男性です。何か親馬鹿なイメージがあったのでああなりました。

次回は久々に将人がデュエルをします。これは確実です。

では、また次回！

第５２話　上に立つ者にはそれ相応の責任がある（前書き）

将人ｖｓガーランドルフです。

今回は本編の中でもかなり特別な回なので、一部にＢＧＭの指定を入れてあります。ご了承ください。

それではどうぞ！

第５２話　上に立つ者にはそれ相応の責任がある

ＳＩＤＥ／将人

「俺から行くぞ。ドロー！」

さて、ガーランドルフとデュエルする事になったが…奴は儀式モンスター。ほぼ確実に自身を中心とした儀式デッキを使うはずだ。奴の効果は厄介だ。何とかして召喚を阻止しなければ…。

「モンスターをセット！カードを１枚セットしてターンエンド！」

将人
ＬＰ／４０００
手札／４
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×１

「我のターン！《儀式魔人プレサイダー》を召喚！」

ガーランドルフが最初に呼び出したのは、レイピアと盾を持つ太った黄緑の悪魔だ。

《儀式魔人プレサイダー》
効果モンスター
星４／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ１４００
儀式モンスターの儀式召喚を行う場合、その儀式召喚に必要なレベル分のモンスター１体として、墓地に存在するこのカードをゲーム

から除外する事ができる。
このカードを儀式召喚に使用した儀式モンスターが戦闘によってモンスターを破壊した場合、その儀式モンスターのコントローラーはデッキからカードを１枚ドローする。

《儀式魔人プレサイダー》　ＡＴＫ／１８００

「プレサイダーで伏せモンスターに攻撃！デビルズ・ソード！」

プレサイダーがレイピアを振り下ろす。しかし、伏せモンスターが破壊される事はなかった。

「伏せモンスターは《ダーク・リゾネーター》だ。１ターンに１度戦闘では破壊されない」

「時間稼ぎか…。カードを２枚セットしてターンエンドだ」

ガーランドルフ
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《儀式魔人プレサイダー》（ＡＴＫ／１８００）
魔法・罠／リバース×２

儀式魔人は、確か墓地にいても儀式モンスターのリリースになり、自らを糧とした儀式モンスターに効果を与えるカテゴリだったはずだ。

「俺のターン！」

…ちっ。さすがにそう都合よくあのカードを引く事はできないか。

儀式召喚は覚悟しておくべきだな。

「俺のフィールドに悪魔族のチューナーが存在する時、手札から《シールド・デーモン》を特殊召喚できる！」

巨大な盾を持った悪魔がフィールドに姿を現す。

《シールド・デーモン》　ＡＴＫ／１０００

「さらに、《キングゴブリン》を召喚！」

小さな王冠を被り、赤いローブを着こなした小さい黄緑のゴブリンが現れた。

《キングゴブリン》
効果モンスター
星１／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
自分フィールド上にこのカード以外の悪魔族モンスターが存在する場合、このカードを攻撃する事はできない。
このカードの攻撃力・守備力は、フィールド上のこのカード以外の悪魔族モンスターの数×１０００ポイントになる。

《キングゴブリン》　ＡＴＫ／　０

「レベル４《シールド・デーモン》とレベル１《キング・ゴブリン》にレベル３《ダーク・リゾネーター》をチューニング！」

紫の輪が３つ展開され、５つの星が内側に潜る。

「闇より出でし悪魔の双翼、濃霧を払い終焉を誘え！」

☆４＋☆１＋☆３＝☆８

「シンクロ召喚！呼応せよ！《ダークエンド・ドラゴン》！」

腹に悪魔の顔を持つ漆黒の龍が赤い空の下に舞い降りた。

《ダークエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「来ましたね…。将人さんのエースモンスター、《ダークエンド・ドラゴン》」

「ダークエンドの効果発動！攻撃力と守備力を５００下げる事で、相手モンスター１体を墓地に送る！プレサイダーを闇に墜とせ！ダーク・イヴァポレイション！」

《ダークエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００→２１００

ダークエンドの腹から闇が吐き出されて地を這い、儀式魔人を地の底に引きずり込んだ。

「ぬ…」

「ライフを１０００払い、魔法カード《リカバリー・トレード》を発動！エクストラデッキとデッキトップからカードを１枚ずつ墓地に送り、カードを１枚ドローして墓地からモンスター１体を手札に加える！」

《リカバリー・トレード》
通常魔法（オリジナル）

ライフを１０００ポイント払って発動する。
自分のエクストラデッキとデッキの一番上からカードを１枚墓地に送り、デッキから１枚ドローして墓地からモンスター１体を手札に加える。

将人　ＬＰ／４０００→３０００

「エクストラデッキの《天刑王　ブラック・ハイランダー》とデッキトップを墓地に送り、１枚ドロー！そして、墓地から《ダーク・リゾネーター》を手札に加える！バトル！《ダークエンド・ドラゴン》でダイレクトアタック！ダーク・フォッグ！」

今度は本来の龍の頭が闇の霧を放射状にして放ち、ガーランドルフを正確に捕らえた。

「ぐうぅぅっ！」

ガーランドルフ　ＬＰ／４０００→１９００

何とかライフを半分以上も削れた。その調子だ。気を抜くな。

「カードを２枚セットしてターンエンド！」

将人
ＬＰ／３０００
手札／２
モンスター／《ダークエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２１００）
魔法・罠／リバース×３

「我のターン！…グククク…来たか」

「…！」

「我は《ソニックバード》を召喚する！」

ゴーグルを掛けて２つのロケットを背負った鷲が召喚された。

《ソニックバード》
効果モンスター
星４／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ１０００
このカードが召喚・反転召喚に成功した時、自分のデッキから儀式魔法カード１枚を手札に加える事ができる。

《ソニックバード》　ＡＴＫ／１４００

「《ソニックバード》が召喚に成功した時、デッキから儀式魔法１枚を手札に加える事ができる。我はデッキから《破滅の儀式》を手札に加える」

儀式魔法が手札に…。いよいよ来るな…！

「そして儀式魔法発動《破滅の儀式》！レベルの合計が７以上になるように我の手札とフィールドからモンスターをリリースする！」

《破滅の儀式》
儀式魔法
「破滅の魔王ガーランドルフ」の降臨に必要。
手札・自分フィールド上から、レベルの合計が７以上になるようにモンスターをリリースしなければならない。
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、この

ターン自分フィールド上に表側表示で存在する儀式モンスターが戦闘によって破壊したモンスターは墓地へ送られずデッキの一番上に戻る。

「手札の《儀式の供物》をリリースする。闇属性モンスターを儀式召喚する時はこのモンスター1体だけを必要なリリースとして扱う事ができる」

《儀式の供物(くもつ)》
効果モンスター
星1／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　３００／ＤＥＦ　３００
闇属性の儀式モンスターを特殊召喚する場合、このカード1枚で儀式召喚のための生け贄として使用する事ができる。

「そして、我自身を儀式召喚する！」

全身が紺色の悪魔。体のあちこちに金色の装飾品を身につけ、後頭部に黒い髪を生やした白い顔面には残忍な赤い眼が光る。魔王の名に恥じない風格だ。

《破滅の魔王ガーランドルフ》
儀式・効果モンスター
星７／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ１４００
「破滅の儀式」により降臨。
このカードが儀式召喚に成功した時、このカードの攻撃力以下の守備力を持つ、このカード以外のフィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊し、破壊したモンスター1体につきこのカードの攻撃力は１００ポイントアップする。

《破滅の魔王ガーランドルフ》　ＡＴＫ／２５００

「やはり、己の分身を使うか…」

「当然だ！我の効果を発動！儀式召喚に成功した時、我の攻撃力以下の守備力を持つモンスターを全て破壊し、破壊したモンスターの数だけ１００ポイントずつ攻撃力を上げる！サタン・デストロイ！」

フィールドのガーランドルフが全身から黒い波動を放ち、フィールドを蹂躙する。《ソニックバード》は破壊されたが、ダークエンドは何とか耐え切った。

《破滅の魔王ガーランドルフ》　ＡＴＫ／２５００→２６００

「何！？なぜドラゴンが破壊されない！？」

「《シールド・デーモン》の効果だ。シンクロ素材として使ったシンクロモンスターは、１度だけカードの効果で破壊されない」

「小癪な…！まあいい。我で《ダークエンド・ドラゴン》に攻撃！デストラクト・シャドー！」

ガーランドルフが両手で巨大な闇の球体を創り出し、それをぶつけてダークエンドを打ちのめした。

「ぐっ！」

将人　ＬＰ／３０００→２５００

「ターンエンドだ」

「主！全部片付けたぜ！」

下っ端を全て倒したヒジュラ達が戻ってきた。やはり仕事が早いな。

「そうか。済まないな」

「どうやら、苦戦しているようだな…」

「苦戦しない方がおかしい」

「それもそうですね。私達はカードに戻ります」

「ああ。ゴーズとカイエンは早速出番がある。頼んだぞ」

「わかった」

「はい！」

カイエン達はデュエルディスクに戻っていった。俺はそれを確認した後、伏せカードを発動させた。

「エンドフェイズ時にリバースカード発動！《コール・エミサリー》！墓地の《冥府の使者ゴーズ》を除外し、《冥府の使者カイエントークン》を特殊召喚する！」

《コール・エミサリー》
通常罠（オリジナル）
自分の墓地に存在する「冥府の使者ゴーズ」を除外し、自分フィールド上に「冥府の使者カイエントークン」（天使族・光・星7・攻

２５００／守２７００）を１体特殊召喚する。
このターン、自分は通常召喚・特殊召喚する事ができない。

「ゴーズだと？そんなカードは貴様の墓地にはないはずだが？」

「《リカバリー・トレード》の効果で墓地に送られたカードだ！現れろ、カイエン！」

『行きます！』

フィールドに黒い穴が空き、中からカイエンが飛び出した。

《冥府の使者カイエントークン》　ＡＴＫ／２５００

ガーランドルフ
ＬＰ／１９００
手札／１
モンスター／《破滅の魔王ガーランドルフ》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／リバース×２

さて、ターンを進める前に１つ聞いておくか。

「ガーランドルフ、お前の目的は何だ？」

「目的？決まっている。破壊だ」

「破壊？」

「我が封印されたこの忌まわしき地を破壊し尽くし、我を封印したその憎たらしい女を葬る。そして、ありとあらゆる者に我の力、存

在を示し、我が精霊界の王となる！」

「何を馬鹿な事を…！王とは民の幸福のために先を行く者の事だ！ただ破壊を繰り返そうと、ついてくる民などおるまい！」

「ついてこないのならば葬るのみだ！我に逆らう者は万死に値する！」

スカル・デーモンの言葉など聞く耳も持たないか。どうやら力づくでもわからせるしかないようだな。

「言うだけ無駄か…。俺のターン！速攻魔法（サイクロン）を発動！リバースカード1枚を破壊する！」

小規模の竜巻がリバースカードを切り裂いていく。正体は…ミラーフォースか。

「そして永続罠《闇次元の解放》！除外されている闇属性モンスターを1体特殊召喚する！《冥府の使者ゴーズ》を特殊召喚！」

『俺も戦おう！』

もう1度黒い穴が開き、今度はゴーズが飛び出してきた。冥府の使者2体が揃ったな。

《冥府の使者ゴーズ》　ＡＴＫ／２７００

「バトル！《冥府の使者ゴーズ》でガーランドルフに攻撃！エミサリー・ブラッシュ！」

『ぜやぁっ！』

ゴーズが空中に飛び上がり、魔王を脳天から真っ二つにした。

「ぬおっ！」

ガーランドルフ　ＬＰ／１９００→１８００

「とどめだ！カイエンでダイレクトアタック！レイジング・ブラッシュ！」

「覚悟！」

カイエンが喉元に斬り掛かる。しかし、ガーランドルフは動じずに伏せカードを発動させた。

「永続罠《六芒星の呪縛》！相手モンスター１体の攻撃と表示形式の変更を封じる！」

《六芒星（ろくぼうせい）の呪縛》
永続罠
相手フィールド上に存在するモンスター１体を選択して発動する。選択した相手モンスターは攻撃する事はできず、表示形式を変更する事もできない。
選択した相手モンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

『うぐっ！』

「カイエン！？」

六芒星の魔法陣が現れ、カイエンの動きを止めてしまった。そのまま元の位置に戻されていく。

「く…モンスターをセットしてターンエンドだ」

将人
ＬＰ／２５００
手札／１
モンスター／《冥府の使者ゴーズ》（ＡＴＫ／２７００）《冥府の使者カイエントークン》（ＡＴＫ／２５００）リバース×１
魔法・罠／《闇次元の解放》リバース×１

「我のターン！魔法カード《壺の中の魔術書》を発動！互いにカードを３枚ドローする！」

ここで手札補強か。何を出すつもりだ？

「魔法カード《儀式の準備》！デッキからレベル７以下の儀式モンスターを手札に加え、墓地から儀式魔法を１枚手札に加える！」

《儀式の準備》
通常魔法
自分のデッキからレベル７以下の儀式モンスター１体を手札に加える。
その後、自分の墓地から儀式魔法カード１枚を手札に加える事ができる。

「儀式モンスターと儀式魔法を同時に呼び込むだと…！？」

「デッキから我自身を、墓地から《破滅の儀式》を手札に加える！

そして《破滅の儀式》を発動！手札にある2枚目の《儀式の供物》をリリースし、我自身を儀式召喚する！」

儀式魔人を使われないだけマシか。手札はそこまでよくないようだな。

《破滅の魔王ガーランドルフ》　ＡＴＫ／２５００

『しかし、私の守備力は２７００！そのモンスターの効果では破壊されない！』

「ならば、攻撃力を上げればいいだけの話だ！手札から速攻魔法《突進》を発動！我の攻撃力をエンドフェイズ時まで７００ポイントアップさせる！」

「何！？」

『そんな…！？』

《破滅の魔王ガーランドルフ》　ＡＴＫ／２５００→３２００

「我の効果を発動！我の攻撃力以下の守備力を持つモンスターを全て破壊し、破壊したモンスター1体につき１００ポイント攻撃力をアップさせる！さあ、破滅させよ！サタン・デストロイ！」

フィールドのガーランドルフがまた黒いエネルギーを放ち、ゴーズとカイエンが破壊されてしまった。

『ぐわぁっ！』

『うぅっ！』

《破滅の魔王ガーランドルフ》　ＡＴＫ／３２００→３４００

「く…何て奴だ…」

「これで終わりではないぞ！魔法カード《命削りの宝札》！カードを5枚ドローする！」

「また手札増強！？」

「さらに、《デーモン・ソルジャー》を召喚！」

マントを身につけた、紫の悪魔の剣士が呼び出された。

《デーモン・ソルジャー》
通常モンスター
星４／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ１９００／ＤＥＦ１５００
デーモンの中でも精鋭だけを集めた部隊に所属する戦闘のエキスパート。
与えられた任務を確実にこなす事で有名。

《デーモン・ソルジャー》　ＡＴＫ／１９００

「永続魔法（リング・オブ・デビルパワー）を発動！悪魔族モンスターが戦闘でモンスターを破壊した時、そのモンスターの守備力分のダメージを与える！」

《リング・オブ・デビルパワー》
永続魔法（アニメオリジナル）
相手は自分フィールド上に存在する元々の攻撃力が一番高い悪魔族

モンスターにしか攻撃できない。
悪魔族モンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、そのモンスターの守備力分のダメージを相手に与える。
自分フィールド上に悪魔族モンスターが存在しない時、このカードを破壊する。

確実にダメージを与えに来たか…！

「《デーモン・ソルジャー》で伏せモンスターを攻撃！」

「伏せモンスターは《ダーク・リゾネーター》だ！」

悪魔の剣士が縦に剣を振り下ろし、リゾネーターが音叉で何とか受け止める。

「またそのモンスターか…。我でその悪魔を攻撃する！デストラクト・シャドー！」

しかし、さしものリゾネーターも魔王の巨大なエネルギー弾には耐え切れなかった。

「《ダーク・リゾネーター》の守備力は３００！３００ポイントのダメージを受けるがいい！」

「ぐあっ！」

フィールドの魔王が黒い小さめのエネルギー弾を俺に撃ち込んだ。
地味に威力が高い。

将人　ＬＰ／２２００→１９００

「永続魔法《儀式の檻》を発動！儀式モンスターの戦闘で我が受けるダメージは０になり、儀式モンスターはモンスター効果の対象にならず、効果モンスターの効果では破壊されない！」

《儀式の檻（おり）》
永続魔法
このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する儀式モンスターの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。
また、自分フィールド上に表側表示で存在する儀式モンスターは効果モンスターの効果の対象にならず、効果モンスターの効果では破壊されない。

「さらに永続魔法（リチュアル・バーン）を発動！我のフィールドに儀式モンスターがいる時、我のエンドフェイズ毎に相手に８００ポイントのダメージを与える！」

《リチュアル・バーン》
永続魔法（オリジナル）
自分のターンのエンドフェイズ時、相手に８００ポイントのダメージを与える。
自分フィールド上に儀式モンスターが存在しない時、このカードを破壊する。

「カードを２枚セットしてターンエンドだ！８００ポイントのダメージを食らうがいい！」

ソリッドビジョンのカードからレーザーが放たれ、俺はそれをまともに食らった。

「ぐあぁぁぁぁ！」

将人　ＬＰ／１９００→１１００

「将人さん！」

「ぐ…！」

激痛に顔を歪め、片膝をつく。バーンダメージとはいえかなり効くな…。

《破滅の魔王ガーランドルフ》　ＡＴＫ／３４００→２７００

ガーランドルフ
ＬＰ／１８００
手札／０
モンスター／《破滅の魔王ガーランドルフ》（ＡＴＫ／２７００）
《デーモン・ソルジャー》（ＡＴＫ／１９００）
魔法・罠／《リング・オブ・デビルパワー》《儀式の檻》《リチュアル・バーン》リバース×２

「まずいですね…。《リング・オブ・デビルパワー》には自分フィールド上に存在する元々の攻撃力が一番高い悪魔族モンスター以外への攻撃を封じる効果を持っています」

「という事は、ガーランドルフにしか攻撃できないのか！？」

「そういう事になります…」

「しかも、《儀式の檻》で戦闘ダメージはなし。その上、モンスター効果では倒せません。さらに、《リチュアル・バーン》の効果で相手のエンドフェイズ毎にライフを削られてしまいます」

「そんな…」

スクワーマーが、ノースウェムコとノルフェナから告げられた事実に絶望して両膝をついた。

「ノースウェムコやスカル・デーモン様が戦っても敵わないというのに、将人のモンスターは0…。しかも相手は強力な布陣を構えている…。駄目だ…勝てるわけがない…」

「そのミイラ男の言う通りよ！貴様らでは我に勝つ事などできぬ！いや、この世に生きる全ての者は、我を崇め讃える他に道はないのだ！我に歯向かう魂など、粉々に打ち砕いてやるわ！貴様も諦めてサレンダーするがいい！」

ガーランドルフはもはや勝利を信じて疑わない。だが、抜け道はある。

「…諦める？そんな選択肢、俺にはない」

「何？」

もう十分休んだ。俺はゆっくり立ち上がった。

「昔の俺なら諦めていただろう…。だが、今は違う！今までに出会い、戦ってきた者から、カードを引かずに諦める事がどれだけ愚かな事かを学んだ！貴様は俺の手札を増やした！それは俺の可能性が

増えた事と同じだ！」

紅刃にゴーズとカイエンを預け、引っ越した先で様々な奴と戦い、学んだ事はたくさんある。そして、紅刃達と再会してニュートラルと戦う中で、それは間違いではないと確信した。

「そして、俺にはまだドローが残されている！これで諦めるなどと戯れ言をほざく事がなぜできる！？俺がここで倒れれば、ここに住む者は全て貴様の毒牙にかかる！そんな事は、俺の魂がさせはしない！」

俺は自信を裏付けるかのように、右手の握り拳で左胸を叩き押さえつけた。

「貴様が何と言おうと、俺の魂は決して折れはしない！この心臓が動く限り、諦めるなどありえない！俺の魂全てを懸けて、貴様を倒す！！」

キュウウゥゥゥゥゥ…

「！」

突然、墓地から紫の光が漏れた。

「これは…！」

前に何度か似た現象があったのを思い出してカードを取り出すと、案の定ダークエンドのカードが光っていた。

「…！何だあれは…！」

スクワーマーが上を見上げて、驚きの声を上げる。上を見ると、塔の最上階あたりから同じく紫色の光が漏れていた。

「塔が光っている？」

「いや、これはまさか…！」

すると、塔から光の塊が飛び出し、こっちに向かって飛んできた。そして、俺の目の前で空中に浮かんだまま制止した。

「これは…石版…？」

光の正体は石版だった。紫の光を放つそれには、何かの模様が刻まれている。

「あれは伝説の龍の石版！？塔に厳重に保管してあるはずなのに、なぜ…！？」

いや、『何か』じゃない。見覚えがある。これは…ダークエンドの腹にある悪魔の顔と同じ模様だ。

「おそらく、《ダークエンド・ドラゴン》が伝説の闇の龍なのでしょう」

「何と…！？」

「そして、将人さんこそが闇の龍の継承者…！」

ビシッ

ふと、石版に皹が入った。次第に全体に広がっている。

パキィィィン！

そして、砕け散った。

中から出てきたのは、紫色に輝く1枚のカードだった。

「カードだと…！？」

そのカードはひとりでに俺のエクストラデッキに入っていった。

「…っ！」

すると、頭の中に何かが流れ込んできた。このカードの使い方の情報だ。さらに、アビリティが自動的に引き出されて覚醒する。俺の瞳の色は、いつもの緑から紫に変わっているだろう。

「そうか…。そういう事か…」

使い方を理解した俺は、ダークエンドのカードを墓地に戻してデ

ッキトップを軽くめくった。

「どんなカードを手に入れたかは知らぬが、この布陣を崩す事などできぬわ！」

「ガーランドルフ、さっき言ったはずだ。『俺の魂全てを懸けて、貴様を倒す』と！」

「フン！ならば、やってみるがいい！貴様のその魂をへし折ってくれるわ！」

時間を稼ぐ必要もない。このターンで決着をつける！

「俺の魂は決して折れはしない！俺のターン！」

「魔法カード《ミラクルシンクロフュージョン》を発動！フィールドと墓地から融合素材を除外し、シンクロモンスターを融合素材とする融合モンスター1体を融合召喚する！」

「融合召喚だと？」

「墓地の《天刑王　ブラック・ハイランダー》と《シールド・デーモン》を除外！融合召喚！《極刑帝　ブラッディ・エンペラー》！」

龍を象った大鎌を持つ、普段の人間タイプのヒジュラが現れた。鎧は軽く鋭くなり、額には黒い宝石が埋め込まれた装飾品を付けている。

《極刑帝　ブラッディ・エンペラー》
融合・効果モンスター（オリジナル）

星１０／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ３３００／ＤＥＦ２２００
「天刑王　ブラック・ハイランダー」＋悪魔族モンスター
このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、相手は融合召喚・儀式召喚・シンクロ召喚する事ができない。
１ターンに１度、フィールド上に表側表示で存在する魔法・罠カードを全て破壊し、その数×４００ポイントのダメージを相手に与える。

《極刑帝　ブラッディ・エンペラー》　ＡＴＫ／３３００

『っしゃあ！こっからは俺も本気で行くぜ！』

「ブラッディ・エンペラーの効果発動！１ターンに１度、表側表示の魔法・罠を全て破壊し、破壊したカード１枚につき相手に４００ポイントのダメージを与える！」

「何！？」

「破壊するのは３枚！１２００のダメージだ！ヘルサイズ・スレイ！」

『食らいやがれ！』

ヒジュラが鎌を振るって紫のエネルギーを飛ばし、永続魔法３枚を全て破壊した。さらにそれは貫通し、ガーランドルフをも食らおうとする。

「ぬぅ！罠カード《エネルギー吸収板》！効果ダメージは回復に変

わる！」

《エネルギー吸収板》
通常罠
相手がコントロールするカードの効果によって自分がダメージを受ける場合、そのダメージを無効にし、無効にした数値分だけ自分はライフポイントを回復する。

ガーランドルフの目の前に灰色の板が現れ、ヒジュラの攻撃を吸収してしまった。

ガーランドルフ　ＬＰ／１８００→３０００

『ちっ、しくじったか！』

「いや、永続魔法を全て破壊できただけでも充分だ」

これで下準備は済んだ。ここからが本番だ！

（ＢＧＭ：ジャックバトル）

「永続罠（ウィキッド・リボーン）を発動！ライフを８００払い、墓地からシンクロモンスター１体を効果を無効にして特殊召喚する！」

《ウィキッド・リボーン》
永続罠
８００ライフポイントを払い、自分の墓地に存在するシンクロモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターを表側攻撃表示で特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、このター

ン攻撃宣言をする事ができない。
このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

将人　ＬＰ／１１００↓　３００

「蘇れ、《ダークエンド・ドラゴン》！」

地面から闇が噴き出し、中からダークエンドが這い上がった。

《ダークエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「この効果で特殊召喚したモンスターは、このターン攻撃する事はできない」

「馬鹿め！何のために呼び出したのだ！？」

「まだ終わりじゃない！魔法カード《死者転生》！手札を１枚捨てて、墓地からモンスターを１体手札に加える！そして、今墓地に送った《ヘルウェイ・パトロール》の効果発動！墓地から除外する事で、手札から攻撃力２０００以下の悪魔族を１体特殊召喚できる！手札から《ダーク・リゾネーター》を特殊召喚！」

《ダーク・リゾネーター》　ＡＴＫ／１３００

「さらに、手札から《バーンド・デーモン》を召喚！」

翼を背負う、赤いコミカルで小さな悪魔が現れた。

《バーンド・デーモン》
チューナー（効果モンスター・オリジナル）
星１／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　２００／ＤＥＦ　５００
このカードが闇属性シンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、相手に１０００ポイントダメージを与える。

《バーンド・デーモン》　ＡＴＫ／　２００

俺はもう１度右の拳を左胸に当てがった。

「貴様が魂を打ち砕くと言うのなら、俺はより強靭な魂で貴様を倒す！荒ぶる魂は、貴様に破滅させられなどしない！」

全身から紫のオーラが噴き出した。魂が燃え滾るようなこの熱い感覚は、今までに感じた事がない。己の全身全霊の力をぶつけるべく、俺はさっきカードから流れてきた言葉を叫んだ。

「『バーニング・ソウル』！！レベル８《ダークエンド・ドラゴン》にレベル３《ダーク・リゾネーター》とレベル１《バーンド・デーモン》を、２体のチューナーモンスターをダブルチューニング！」

「２体のチューナーを使うだと！？」

「レベル１２のシンクロモンスター…！？」

「こいつぁ、面白えもんが見れそうだぜ！」

《ダーク・リゾネーター》と《バーンド・デーモン》が合計４つの紫の炎の輪になり、ダークエンドがその中に飛び込む。そして、輪が球状になるように回転し、紫の炎がダークエンドを包んだ。

「終焉の黒龍と炎獄の魔王が、気高き闇で魂を交える！漆黒の悪魔よ、咆哮せよ！」

☆８＋☆３＋☆１＝☆１２

「シンクロ召喚！具現せよ！《ディアボロス・サタン・ドラゴン》！！！」

炎を吹き飛ばし、漆黒の体が顔を出した。角が悪魔のごときそれに変わり、翼が４枚に増え、腹の悪魔の顔も含めて禍々しいまでの変貌を遂げたその姿は、さながら漆黒の悪魔のようだ。

《ディアボロス・サタン・ドラゴン》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星１２／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３５００／ＤＥＦ２９００
チューナー２体＋「ダークエンド・ドラゴン」
１ターンに１度、自分の墓地に存在するモンスターを１体除外する事でフィールド上のカード１枚を破壊し、相手に５００ポイントダメージを与える。
このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果では破壊されない。

また、相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

《ディアボロス・サタン・ドラゴン》　ＡＴＫ／３５００

『ゴォォオォオォォォォォォォ！！！』

「何だ…このモンスターは…！？」

ディアボロス・サタンが咆哮する姿に、ガーランドルフも戦慄する。

「これが、伝説の闇の龍だというのか…！？」

「伝説によると、闇の龍は、その悪魔のごとき力を振るい、立ちはだかるもの全てを破壊し尽くしたとされている。その龍が、今現実に蘇ったのだ」

スクワーマーが感嘆の声を上げ、スカル・デーモンが伝説を語った。ライトエンドが天使の龍なら、ダークエンドは悪魔の龍。『ディアボロス』の名に相応しい進化だ。

「《バーンド・デーモン》が闇属性のシンクロ素材に使用された時、相手に１０００ポイントのダメージを与える！」

赤い子悪魔の幻影がそこそこ大きい火球を飛ばし、ガーランドルフにぶつけた。

「ぐおぉっ！」

ガーランドルフ　ＬＰ／３０００→２０００

「《ディアボロス・サタン・ドラゴン》の効果発動！１ターンに１度、墓地のモンスター１体を除外し、フィールドのカードを１枚破壊して相手に５００ポイントのダメージを与える！」

「何だと！？」

「墓地の《ヘル・セキュリティ》を除外し、《破滅の魔王ガーランドルフ》を破壊する！エビル・ダークフレイム！」

腹にある悪魔の顔の口が紫の炎を吐き出し、魔王の分身を焼き尽くした。

「ぬおぉぉおっ！？」

ガーランドルフ　ＬＰ／２０００→１５００

「せめて安らかに眠れ…。《ディアボロス・サタン・ドラゴン》で《デーモン・ソルジャー》を攻撃！」

「我は…我は負けぬ！罠カード《カオス・バースト》！我のモンスターをリリースし、相手の攻撃モンスターを破壊して１０００ポイントのダメージを与える！」

《カオス・バースト》
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
自分フィールド上のモンスター１体を生け贄に捧げる事で、その攻

撃モンスター1体を破壊する。
その後、相手ライフに１０００ポイントダメージを与える。

「これで貴様のライフは0！我の勝ちだ！」

《デーモン・ソルジャー》が光になって突っ込んでくるが、ディアボロス・サタンは片腕でそれを払いのけた。

「何！？」

「残念だが、《ディアボロス・サタン・ドラゴン》はカードの効果では破壊されない」

「何だと！？馬鹿な…我が、破滅の魔王たる我が負けると言うのか！？」

「貴様の敗因は、己の私欲のためだけに王を目指した事だ！行け、《ディアボロス・サタン・ドラゴン》！ディアブロ・ストライク！！」

空中に舞い上がり、紫の炎を纏ってガーランドルフに突撃する。

「ぐわあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

攻撃をもろに食らい、破滅の魔王は紫の炎に焼かれて消滅した。

ガーランドルフ　ＬＰ／１３００→　０

将人　ＷＩＮ

（ＢＧＭ：終了）

ソリッドビジョンが消えると、ガーランドルフがいた場所には何も残っていなかった。

「消滅した…！？」

「封印の時間稼ぎどころか、封印するまでもなく倒す事ができたようですね」

「さすが伝説の闇の龍。恐ろしいまでの破壊力だ…」

ガーランドルフ…哀れな奴だったな。その力をもっと別の事に使えば、こんな結末にはならなかったかもしれないというのに…。

「やったな、将人」

「お見事です」

「とんでもねえ力を手に入れちまったもんだな」

ゴーズ達がデッキから出てきた。ヒジュラは極刑帝の姿から元に戻っている。

「ああ…《ディアボロス・サタン・ドラゴン》…」

新たに手に入れたカードは、紅刃の石版のカードのように白紙ではなく、イラストもテキストも付いている。『バーニング・ソウル』、か…。月沙なら詳しく知っているだろうか？

「石版の力を完全に目覚めさせたようですね」

「ノルフェナ！」

「その力はこの先の戦いで大きな力になるでしょう」

「私では封印するのがやっとだったというのに…さすがです」

「礼を言うぞ。お主のおかげで最悪の事態にならずに済んだ」

確かに、俺は石版の力を手に入れた。だが、完全に使いこなせているかとなると、話は別だ。もっと強くならないとな…。

「将人」

スクワーマーが声を掛けてきた。

「俺は諦めないという事を忘れていたようだ」

「スクワーマー…」

「おかげで目が覚めた。ありがとう」

「…ああ」

差し出された大きめの手を、俺はしっかり握った。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第５２話　上に立つ者にはそれ相応の責任がある（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「遂に魂が荒ぶったよ。燃え滾っちまったよ…。あいつ2期に入ってからデュエルするの今回が初めてだろ。いきなりバーニング・ソウルしちまってもいいのか？」

璃音「その前に入れる将人のデュエルのネタが思い浮かばなかったのよ」

フィレス『ガルル…』

勇香「酷えなオイ！？…ところで、ＢＧＭまで入れていいのかよ？」

ロコナ『だってかっこいいじゃん！』

勇香「いや、そういうんじゃなくて…」

璃音「アクセルシンクロでも付ける予定だからこっちでもやった方がいいと思ってね」

勇香「それでいいのか…？」

璃音「さて、カード考察に入りましょうか。今回紹介するのは、悪魔族の儀式モンスター《破滅の魔王ガーランドルフ》よ」

《破滅の魔王ガーランドルフ》

儀式・効果モンスター
星７／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ１４００
「破滅の儀式」により降臨。
このカードが儀式召喚に成功した時、このカードの攻撃力以下の守備力を持つ、このカード以外のフィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊し、破壊したモンスター１体につきこのカードの攻撃力は１００ポイントアップする。

璃音「儀式召喚された時、このモンスターの攻撃力以下の守備力を持つモンスターを全て破壊するわ」

勇香「守備力が２５００を超えるモンスターってのはそうそういねえからな。大抵のモンスターは破壊できる」

ロコナ『攻撃力は１００ポイントずつしか上がらないけど、地味に効いてくるんだよね』

璃音「破壊効果は強制的に発動するから、本編でやったみたいに儀式召喚した瞬間に攻撃力を上げれば、破壊できるモンスターの幅を広げる事ができるわ」

勇香「反対に、《収縮》とかで攻撃力を下げられたら、破壊できるモンスターの対象も狭まるから注意だ」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『感想待ってま～す！』

勇香「次回も見てくれよな！」

ーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

今回将人が使用した《リカバリー・トレード》は機皇帝プラシド∞さんが、《極刑帝　ブラッディ・エンペラー》は通りすがりのデュエリストさんが投稿してくださったオリカです（一部カード名や召喚条件は変更してしまいましたが…）。機皇帝プラシド∞さん、通りすがりのデュエリストさん、ありがとうございました。

将人には早めにバーニング・ソウルを修得してもらいました。タイミングがなかったのと、ライトエンドでアクセルシンクロを使うならダークエンドにダブルチューニングをしてもいいんじゃないかと考えてこうしました。

次回は番外編を入れます。内容は、2月の一大イベントの予定です。

では、また次回！

番外編　カオス・バレンタイン（前編）（前書き）

長くなったので分割します。番外編です。ネタ満載なのでご注意ください。

それではどうぞ！

番外編　カオス・バレンタイン（前編）

ＳＩＤＥ／ルーナ

昼休み。私は月沙、勇香、璃音と一緒に昼食を食べている。要するに、女子組全員だ。

何でこの組み合わせかというと、ある話し合いをするためだ。

私は購買で買ったあんパンやらメロンパンやらクリームパンやらを、月沙は鮭定食を食べている。で、勇香は親子丼に…あれ…？

「勇香、あんた何かけてんの？」

勇香は親子丼に、ソースの容器に入ってる何やら赤い液体をかけている。ケチャップじゃなさそうだけど…。

「これか？私特製のドレッシングだ」

「へえ、そんなの作ってるんだ。材料何使ってんの？」

「ええと…辛子、山葵、タバスコ、胡椒、七味唐辛子、後マスタードだな」

「かっらぁっ！？何メジャーな辛い調味料をまとめてミックスしてんのよ！？」

「あれだよ、辛いもんは何にでも合うようにできてんだよ」

「そうインプットされてんのはあんたの舌だけよ！」

「まだマシな方だよ。私が会ったばかりの頃はお茶漬けのお湯の代わりにタバスコを使ってたくらいだし」

「何それ食に対する冒涜？」

もうお茶漬けじゃないじゃん、タバスコ漬けじゃん。そのうち脳細胞死滅するわよ？

「今はもうやらねえよ。月沙や紅刃に止められたからな」

「あれは信じられないよ。どれだけ必死に説得した事か…」

「で、妥協案で生まれたのがこのドレッシングってわけだ」

「どこら辺が妥協されてるのかさっぱり理解できないけど、あんたが筋金入りの辛党だって事はよ～くわかったわ」

本当にいるのね、こういう奴…。罰ゲームで辛子入りシュークリームを食べたとしても、勇香にとってはただの当たりなんでしょうね…。

「ん…？璃音は何かけてんだ？」

璃音は黙々とスパゲッティを食べてるけど、緑の液体がかかってる。正直、危険な臭いしかしない。

「この前俊也が自作のドレッシングを作ったんだけど、美味しかっ

たから注文したのよ。ルーナも使う？」

「全力で遠慮します」

俊也が作ったっていう時点で私達は食べれないから。ていうか仲良いわねあんた達。

「それじゃ、本題に入ろうぜ。集めたのは月沙だろ？」

「うん。みんな、明後日が何の日かわかる？」

「明後日？」

明後日って…何かあったっけ？ええと、確か…。

「バレンタインデー」

私が思い出す前に璃音が答えた。あ、今日は２月１２日だ。

「そう！璃音正解！」

「バレンタイン？ああ、『トップスの人間が舞い上がってサテライトの男共が血涙を流す日』だろ？」

「違うわよ！微妙に合ってるけど間違ってるわよ！トップスにサテライトって何！？つーか誰から聞いた情報よ！？」

「私の知り合いに鬼柳って奴がいるんだけどさ、２月１４日になる度にそんな事を叫んで暴れてんだよ。その日限定で戦闘力５倍だし」

「いや、確かにサテライトは女性の人口少なかったけど…」

その鬼柳って奴は何情報を捩曲げてんのよ。僻みすぎでしょ。

「勇香、違うわよ。昔、キリスト教司祭だったウァレンティヌスという人がいて、ローマでの兵士の婚姻の禁止を無視して秘密で兵士を結婚させたけど、それがばれて捕らえられたのよ。そのウァレンティヌスが処刑されたのが2月14日。つまりバレンタインデーよ」

「違ぁぁぁぁぁぁぁう!!!いや、確かにそういう説はあるけども！何聞いてて欝になるような情報を公開してんのよ!?女が男に日頃の感謝やら何やらの気持ちを込めてチョコを送る日よ！」

「あはは…。それで、私達もチョコを作って紅刃達に贈ろうと思うんだけど、どうかな?」

ああ、なるほど。要するに義理チョコね。それもあるけど、みんなでお菓子作りっていうのも面白そう。

「お、いいじゃねえか」

「異論はないわ」

「私も」

「それじゃ、丁度4人ずつだし、それぞれ誰か1人に渡すって事にしようぜ」

「ナイスアイデア!じゃあ、まず月沙は紅刃に渡すって事で。はい次〜」

「早っ!?私まだ何も言ってないよ!?」

「あんた以上の適任がどこにいるのよ?本命チョコ、しっかり渡しなさいよ!」

私が問答無用で月沙の担当を決めると、月沙は顔を赤くして黙り込んだ。あんたが紅刃に恋心を抱いてるのはみんな知ってるのよ。

「私は俊也に渡すわ。1番お世話になってるしね」

「じゃあ、私は秋斗で。あいつを上手く捕まえられるのは私くらいだしね」

ほっといたら本当にどっかに行っちゃうんだから。最近は何とか居場所を見つけるのが早くなってきたわ。

「んじゃ、私は将人にでも渡すか」

「それじゃ、材料を集めて明日作ろうよ」

それから昼休みが終わるまで、私達は明日のチョコ制作の打ち合わせを続けた。

そして次の日の放課後。学園の人に頼んで調理室の使用の許可を貰った私達は、調理室に材料を持ち寄って集合していた。作るのは

チョコレートケーキだ。

「それじゃ、早速始めよっか」

月沙が全体の指揮を執る。月沙は青、勇香は赤、璃音は黒、そして私はオレンジのエプロンを付けている。普段羽織っているマントは脱いだ。だってさすがに料理の時は邪魔くさいもん。

「ん？何かいい臭いしないか？」

「え？…！ああ、あれね」

私が臭いの正体を見つけるのは、ほとんど時間がかからなかった。

「芳香剤よ。この学園の調理室って、こんな物も置いてあるのね」

流しの隅に、桃色の芳香剤が置いてあった。へえ、なかなか可愛らしいじゃない。

「さ、やるよ。まずはチョコを刻んで溶かさないと」

「私が切っとくわ」

私は包丁を手に取って、板チョコを細かく刻んだ。

「手慣れているわね」

「家で習った事があるからね。これくらい朝飯前よ」

「湯は私が用意する」

勇香は大きめのボウルに水道水を汲んでからそれに手を突っ込んで…

ボゥッ！

「…勇香、何やってるの？」

「え？湯を沸かしてんだけど」

「アビリティ使わなくても…」

月沙が苦笑いしながら言う。勇香はボウルの水に手を突っ込んで、アビリティでその手に炎を灯していた。水の中でも消える事はなく、すぐに沸騰した。

「こうした方が早いだろ？」

「まあ、そうだけど…」

ま、いっか。次々。

「オーブンは２００℃に予熱しておくわ」

「ＯＫ。卵は白身と黄身に分けるんだっけ」

「そ。あ、薄力粉振るっとかないと」

着々と下準備を進めていく私達。ここまでは予定通りね。

「下準備はいいわね。次に行きましょうか」

「ええと、次は…『ボウルに卵黄を入れてほぐし、溶かしたチョコレートを加えて泡立て器でよく混ぜる』だって」

月沙が料理本の文章を読み上げる。一応、この本に沿って作る事になっている。

「ん～…全部レシピ通りにやるのは何かつまんねえな」

「え？」

「こういうのは私達なりのアレンジってもんも大事じゃねえか？料理本(それ)はあくまで目安だろ？」

「なるほど、隠し味みたいなものね。じゃあ、勇香は何か考えてるの？」

「ああ、これを入れるとか…」

月沙の質問の答えとして勇香が出したのは…ソースの容器に入った赤いあれだった。

「却下！辛い！辛すぎる！そんなもの混ぜたら食べた人が全員ゴジ〇になるじゃないの！」

「いや、どっちかっつうとリザー〇ンじゃね？」

「リ〇レウスでもいいんじゃない？それかイグ〇ールとかバー〇ラモンとか」

「どうでもいいわよ！月沙までボケないで！」

あれ？このままだと私1人でツッコミをする事になるんじゃ…。

「これならどうかしら？」

璃音が取り出したのは、同じ容器に入った褐色の溶液だ。

「何それ？ソース？」

「ドレッシングよ。俊也が作った」

「使えるかぁぁぁぁぁぁぁ！！全員病院送りにする気！？何か昨日使ってたのと色が違うんだけど！？」

「改良版よ。あ、ディヴァイン先生と十代が間違って食べて体調不良になったけど」

「学習能力ないのあの馬鹿教師！？十代はいなかったから無理ないけど！今日休んでたのはそれが原因！？」

「何か『向こうで闇魔様が手招きしてる』とか呟いてたけど」

「逝きかけてるぅぅぅ！？地獄に招待されちゃってる！？こんなの食材として認められないわよ！そもそも何でチョコの隠し味にドレッシング！？」

本当に3人揃ってボケてんだけど！？誰か援軍呼んできて！助けて新〇！ツッコミのエキスパートのあんたなら私の分もツッコめる

はずよ！

「あああもう！念のために用意しといたイチゴ牛乳があるからこれを使いましょう！」

「もっと奇抜なもんでもいいんじゃねえか？」

「うるさいうるさいうるさい！あんたらが考えたらろくな物が出ないでしょうが！これで決定！異論は認めない！」

私は問答無用でメスカップに入れたイチゴ牛乳を含めた材料をボウルに突っ込んだ。ていうか『奇抜なもん』って何！？

とりあえず、私は泡立て器でボウルの中身を掻き混ぜた。

ＳＩＤＥ／紅刃

俺は今将人、俊也、秋斗と一緒に校舎の傍に集まっていた。理由？適当だよ適当。

「そういえば、月沙達はどうした？」

「『用事がある』とか言ってたけど、内容まではわからねえな」

この様子だと将人も知らないみたいだな。なぜか女子全員が用事

でここにいない。

「昨日も女子だけで集まってお昼ご飯を食べてたし、何やってるんだろう？」

「さあな。別に大した事じゃないだろ」

「ばっかおめぇ、２月の中頃で女が総出で用事っつったら、チョコの準備に決まってんだろうが」

「は？何のためにチョコを準備するんだよ？…って…」

あれ？俺達って４人のはずだよな？何で１人増えてんだ？てかこいつどっかで見た事が…。

「うおおぉおおぉおおぉおおぉい！！？」

俺達は一斉に後退った。俺ははっきり知ってる。精霊界でデュエルしたんだし間違いないって！

「ギュラ！？何でお前がここにいるんだよ！？」

無駄に自然に話に入ってきたこいつはギュラ・メチュート。俺が《天空の聖域》で戦ったニュートラルの幹部だ。

「ギュラ？こいつが例の…？」

「別にいいじゃねえか」

「いくねえよ！俺達敵どうしだろ！？何で普段から世間話をしてる

友人みたいなノリでここに来てんだよ!?」

「んな固ぇ事言うなよ。俺は敵サイドだから、こうして無理矢理番外編に出るなりしねえと出番ねえんだよ」

「さりげなくメタ発言してんじゃねえ!何!?出番がほしいから敵陣に突っ込んできたのか!?」

「そういうこった。ま、今日は何もしねえから安心しな」

「軽いなオイ!?」

いくら出番がほしいからってなぁ…。まあ、無理はないかもしれねえけど…。

「で、話の続きだが…お前ら明日が何の日か知ってるか?」

「明日?月一試験だっけ?」

「いや、それは…いつだったか?」

「違えよ。試験の日を覚えてねえとか、学生なのに不真面目だな」

「見た目と性格が不真面目そうな君に言われたくないよ」

「あんなの余裕だ。過去の学園の筆記試験は軽い見直しだけで済む」

「嫌味かこの秀才共」

俊也や秋斗だけじゃなく、俺達は全員そんなレベルだからな。十

代や翔あたりに勉強を教えてやってるくらいだ。

「とにかく、試験じゃねえよ。あれだよあれ」

「節分か？」↑将人

「もう過ぎてるだろ」

「あ、雛祭りとか？」↑俊也

「まだ先だ」

「じゃあ、海開きか？」↑紅刃

「違う違う！確かにここは暖けえけど季節ボケしてんじゃねえよ！」

「綿〇し」↑秋斗

「違ぇぇぇぇよ！！１番ありえねぇぇぇぇよ！！やるにしても季節違うしここ雛〇沢じゃねえだろうが！バレンタインだよバレンタイン！男なら誰でも知ってるだろ！」

「ああ、そんなのあったな」↑将人

「特に興味ないから忘れてたな」↑秋斗

「どんだけ関心ねえんだよてめえら！？」

ああ、思い出した思い出した。毎年月沙が義理チョコくれたっけ。

「バレンタインっつったら女が惚れた男にチョコを渡す一大イベントじゃねえか！モテたい男は全員血眼になって今か今かと獲物を狙う大蛇のようにチョコを待ってんだよ！」

「もう少し綺麗な表現できないの？僕らは別にそんな事してないけど…」

「あの女の連中もチョコを作ってるに違いねえ！大方渡す相手はてめえらだろ！うらやましいぜ畜生！」

「好きだから渡すのが１００％ってわけじゃねえだろ。世話になってる奴に渡す義理チョコってのがあってだな…」

「関心ねえくせにそれなりの知識はあるんだな…」

まあ、この時期になると学生が騒がしくなるし。それくらいの事は知ってるさ。

「ニュートラルにも女の団員くらいいるだろ？そいつに貰えばいいじゃねえか」

秋斗が言うのも最もだ。幹部なら義理くらい貰ってそうなもんだけど…。

「俺の部下に女はいねえんだよ！一応、女幹部はいるけど曲者揃いだしよぉぉぉ！あいつらがチョコを渡すところ自体想像つかねえよ！」

「どんだけ個性的な幹部なんだよ？つーか、これからそんな奴らと戦わなくちゃいけねえのか…」

一応、情報は引き出せたな。役に立つかどうかは別としてだけど…。

ピリリリ、ピリリリ

「あ？んだよこんな時に…」

突然、ギュラのズボンのポケットから着信音が鳴った。ギュラはめんどくさそうに携帯を取り出した。

「はい、もしもし」

『俺だ。すぐに戻ってこい』

「シュルクか？」

『ああ。何仕事サボってるんだ？早く戻ってこい。それじゃあな』

ピッ、ツー、ツー…

「…何だって？」

「仕事サボってんのがばれたからそろそろ帰るわ」

「サボってまで出番ほしいのかよ！？」

何やってんだこいつ…。つーかニュートラルの仕事って何だよ？

「それじゃ、俺はこれで…」

「待てコラ。せっかくここに来たんだ、情報を知ってる分だけ教えてもらうぜ」

「番外編でんな事できっかよ！あばよ！《緊急テレポート》！」

ギュラは俺達から素早く離れてサイコディスクを展開し、《緊急テレポート》を発動させようとする。

「逃がすか！」

俺は咄嗟にデュエルディスクを抜いて剣に変え、思い切り黄色の電撃を飛ばした。秋斗も杖を創り出して《波動キャノン》をぶっ放す。将人は鎌で衝撃波を出し、俊也も足を振り上げて風の弾丸を蹴り飛ばした。

ズドォォォォン！！

４つの攻撃が１ヶ所に集まり、地面を揺るがすほどの爆発が起きた。

「どうだ？」

煙が晴れると、えぐれた地面以外は何も残っていなかった。

「ちっ、逃がしたか…」

「聞き出せるチャンスだったが…仕方ないか」

「…でも、ギュラは敵としてじゃなくて単なる話し相手としてここ

に来たんだよね。何かフェアじゃなくて後味悪いよ…」

「う…確かに…」

あいつには悪い事しちまったな…。次からは、こういう時ぐらいは普通に話す事にするか。

「しゃあねえか。でも、次に会う時は敵どうしだ。その時はとっ捕まえる！」

俺は空を見上げた。いつ来ようが、返り討ちにしてや…

「どうすんだこれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？」

…はい？

「「「「？」」」」

どこかで聞いた声色の絶叫が聞こえた。

「何だ今の？」

「校舎からだ」

俺達は校舎の窓からこっそり中を覗いてみた。

SIDE／ルーナ

さてと、だいぶ混ざってきたわね。そろそろ次の作業に…。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

「きゃあっ！？」

「な、何だ！？地震か！？」

突然、なぜか地震が起きて、私は体勢を崩して横に倒れてしまった。何とかボウルの中身だけはこぼさないで済んだ。

「収まった…」

「今のは何だったのかしら？」

「まあ、材料は無事だしいいでしょ。ほら、この通り」

私は手に持っていたボウルをテーブルの上に置いた。

ボウルのチョコにはソースの容器が2つ突き刺さっていた。

…って、え…？

「「「「……」」」」

赤い中身と褐色の中身がドクドクと音を立てて溶けたチョコに注がれていく。悪い事にキャップをするのを忘れてて、口は全開だった。あ、全部出し切った。

要するに、勇香と璃音のドレッシングが全部チョコに混ざっちゃったってわけ。

「…どこら辺が無事？」↑月沙

「…どこだろ？」↑ルーナ

「…あれ？これやばくね？」↑勇香

「やばいわね。レッドゾーンに突入してるわね」↑璃音

「何か最凶の食材がダブルチューニングしちゃってるんだけど」↑ルーナ

「いや、ここはデルタアクセルじゃない？」↑月沙

「何それ？私初めて聞いたんだけど」↑ルーナ

「って、現実逃避してる場合じゃねえ！どうすんだこれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？」↑勇香

…私が聞きたいわよ。

「やばいわよこれ。どうすんのよこれ。どうすんのよ私達！？」

「落ち着きなさい。まずは落ち着いて睡眠薬を…」

「あんたが落ち着けぇぇぇぇぇぇ！！根本的な解決になってないでしょうが！」

これってかなりやばいわよ！誰かヘルプ！この状況を何とかしてぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！

ＳＩＤＥ／紅刃

窓の向こうは調理室で、月沙達が何かを作ってた。何かかなり慌ててるけど…。

「そもそも何でこうなったのよ！？」

「多分、さっきの地震でテーブルの端に置いといたドレッシングが落ちて、たまたまボウルに真っ逆さまに…」

「どんな確率！？」

確かに、ボウルの中に空の容器が2本突き刺さってる。地震って、さっき俺達が攻撃したあれか？

「最悪だぁぁぁぁ！！混ぜちゃ駄目なもんが2つも混ざっちまったよ！」

「まずいわね。勇香の激辛ドレッシングがチョコに混ざったら、紅刃達が全員〇ジラになるわよ」

…え？何で俺達？ていうかチョコ？何か嫌な予感しかしないんだけど…。

「お前の俊也特製ドレッシングだって破壊力高いじゃねえか！あいつら魂がオゾンより上に飛んじまうぞ！？」

え？あの…。

「もう板チョコ残ってないよ！？紅刃達に渡す大切なチョコなのに！」

『あの女の連中もチョコを作ってるに違いねえ！大方渡す相手はてめえらだろ！うらやましいぜ畜生！』

さっきのギュラの言葉が脳裏をよぎる。て事は…。

「どうすんのよこれ！？バレンタインデーは明日よ！？」

「最悪、この混沌（カオス）チョコを渡す羽目になるわね…」

「もうバレンタインデーじゃねえよ！デッドオアアライブデーになっちまうだろうが！このままだとあいつら確実に闇魔大王様とこんにちはする事になるぞ！？」

「「「「（え〝え〝え〝え〝え〝え〝え〝え〝え〝え〝え〝！！？？）」」」」

本当にあれ俺達のバレンタインチョコなのか！？それにさっき俺達が起こした地震もどきのせいでドレッシングじゃないドレッシングがチューニングされたのか！？

「（何かめちゃくちゃやばい事になってるぞ！？）」

「（あれを僕達が食べるの！？）」

「（あんな物を食べたら勇香の言う通り闇魔大王と知り合いになるぞ！？いや、それよりも俺達は地獄行き確定なのか！？）」

「（落ち着け！まずは落ち着いて脱出ポッドを…）」

「（ねえよんなもん！お前が落ち着け！）」

秋斗すらテンパってボケる始末だ。俺達は今生死の境目に立たさ

れている！半分自業自得で！

「何か中和できる物を探すわよ！この際何でもいいわ！」

「冷蔵庫に何かねえか！？」

「私も何か探してくるわ！」

勇香と璃音が冷蔵庫やら何やらを漁り、ルーナが部屋を出ている間に、月沙は容器を取り除いた。

「よし、これならどうだ！」

勇香はそう言うなりボウルに中身をぶちまけた。

「（ってそれ麦茶じゃねえか！？何で麦茶！？）」

「麦茶もドレッシングも多分水溶液の一種だ！水溶液どうしを混ぜれば中和反応が…」

起きないって！これはいくら何でも起きないから！中学に戻ってやり直せ！

「これを使いましょう！」

今度は璃音が鉄の小さい容器の中身をぶち込んだ。

「（塩！？何で塩なんだ！？しかも容器の中身丸ごと！？）」

「辛いのなら甘い物を合わせて相殺させるべき！そのための塩よ！」

「（それは砂糖だろうが！逆だ逆！さらに酷い事になるぞ！？）」

将人が必死に小声でツッコむも、璃音達には届かない。

「ならこれで！」

月沙が取り出して逆さにしたのは…何だあれ？袋？

「パン粉で揚げ物にしちゃえば…！」

「おお、逆転の発想！」

「（どこが逆転んんんんん！？チョコは普通揚げないよね！？チョコじゃなくなってるよね！？）」

俊也のツッコミもやっぱり届かない。いや、俺達が飛び出したらいろいろとまずいけど。

「みんな！いい物持ってきたわよ！」

と、ここでルーナが帰ってきた。早速ビーカーの中身を全部ぶち込んだ。

ってあれ？ビーカー？

「何だそれ！？」

「塩酸よ！」

「「「「（何入れてんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？）」」」」

ルーナの奴、親指を立てて爽やかにとんでもない単語を吐き出しやがった！

「（もはや食材ですらねえだろ！何でんなもんチョイスしてんだよ！？）」

「これでチョコの毒素を全部溶かして消滅させるのよ！」

「（おい、毒物って認めてるぞ！？）」

「（塩酸は食えねえから！食べ物的にそれが毒物だから！）」

「（何でルーナが１番テンパってるの！？）」

「（おそらく、こうして年の近い女子と仲良く料理をする経験が今までなかったんだろ。だから、こういうパニックが起きた時に誰よりも思考がショートしやすいのかもしれない）」

秋斗、解説ご苦労！

「あ、ディヴァインやフォッタにもあげようよ！」

「ラジャー！こんだけありゃ、６人分作るなんてわけないぜ！」

「（おいいいいいいい！？ディヴァインとフォッタにも死亡フラグが立ったぞ！？）」

「（生け贄が増えたな…）」

「後何かないか何か！」↑勇香

「マヨネーズは！？」↑月沙

「ＯＫ！」↑勇香

「ケチャップ！」↑璃音

「ＯＫ！」↑勇香

「水酸化カリウム！」↑ルーナ

「ＯＫ！」↑勇香

どこがＯＫだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？テンパりすぎてチョコの状態に気づいてねえ！しかも最後は食材じゃねえし！

とりあえず、俺達は一旦窓から離れた。

「どうすんだよあれ？あんなのもう料理じゃねえよ」

「本当にあれを俺達に渡す気か？」

「無理無理無理！あんなの食べたら心臓止まる！」

「俊也の料理よりもたちが悪い。このままだと俺達全員あの世行きだぞ？」

全員顔が真っ青だ。ていうかあいつらいい加減落ち着けよ！

「おや？どうしたんだい？」

顔を上げると、ディヴァインとフォッタが来ていた。

「ディヴァイン？お前俊也のドレッシングで倒れてたんじゃ…」

「それなら何とか回復したよ」

「僕はここの様子を見にね。で、みんな顔色が悪いけどどうしたの？」

「実は…」

俺達は例の惨劇を簡潔に説明した。

「そ、それは…」

「大変なんてレベルじゃないね…。僕らが当事者じゃなくてよかった…」

「あ、お前らの分も作るらしいぞ」

俺がすっぱり事実を告げると、２人の顔がみるみる青ざめていった。うん、わかるわその気持ち。

「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！また三途の川の花畑にトリップする惨劇がぁぁぁぁぁぁ！！」

「いくら神様見習いでもそんなの食べたらぽっくり逝っちゃうって！」

ディヴァインは頭を抱えてしゃがみ込み、フォッタも顔を真っ青にして叫んだ。神でもあれはやっぱ駄目なんだな。

「あいつらは多分直に正気に戻るだろうが、肝心な材料の板チョコが全て駄目になっている。あれは半分俺達の責任だ。惨劇を回避するには、俺達がチョコを調達してこっそり届けるしかない」

「そうか！代わりのチョコさえあれば、月沙達もそれに手をつけるはず！」

「そして、それを使って安全にチョコを作ってくれれば、俺達はまともなチョコを受け取る事ができてハッピーエンドだ」

「よし！それで行こうぜ！」

将人のシナリオ通りに事が運べば、誰にも被害が出なくて済む。このままだと危険すぎる。

「そもそも、月沙達にとって君達は大切で特別な人だ。だからこそ、必死になりすぎてああなったんじゃないかな？」

「なるほど…」

フォッタの言う事にも一理ある。自惚れじゃねえけど、俺達は固い絆で繋がってる。でも、だからってああなるか？

「だとしても、あれは異常だろ。何か別の影響があったような感じ

だが…」

「別の影響？…あ」

秋斗の言葉を繰り返したフォッタが、何かに気づいたように声を上げた。

「どうした？」

「…ごめん。これ、僕のせいだ」

「は？」

「昨日、お師匠様以外の上司の依頼でいろんな薬品を運んでたら、1つだけ『現世の泉』に落としちゃったんだ…」

「『現世の泉』？」

「物を突っ込めば現世の指定した時代と場所に送られるっていう泉だよ。ただ、ちゃんと指定しないと転送先がランダムになるんだ。で、当然指定してるわけもなく、行方不明になっちゃって…。多分、たまたまこの時代の調理室に転送されたんだと思う」

「…その薬品の効果は…？」

「『興奮剤』。人がテンパってる時にしか効果がなくて、焦りの感情を何倍にも増幅させるっていう何で作ったのかさっぱりわからない代物だよ」

「何だそのご都合主義なアイテムは？」

「しかも芳香剤タイプだから…」

「芳香剤？…はっ！？」

今度はディヴァインが何かに気づく。ディヴァインは何をしたって…ん…？

「おい、お前まさか…」

「たまたま調理室の点検を頼まれて入ったら洒落た芳香剤があったから…そのまま調理室にセットしたんだっけ…」

「「「「「……」」」」」

…すると、何だ？こうなったのって、俺達全員のせい？

「…フォッタ、興奮剤の効果が効く時間は？」

「原液だったはずだから、確か丸1日。僕らも焦ってるから、芳香剤そのものを取り除くのは無理だと考えた方がいい。しかも、服にも臭いが染みついてるはずだから近づくだけでも危険だよ。静めるためには、焦りの原因を取り除けばいい」

「今回の焦りの原因は、料理の失敗による板チョコの不足。なら、さっき俺が言ったように板チョコを用意すればいい話だ」

「購買になら、チョコなんていくらでも売ってるだろ。しかも収集できそうなのは購買くらいしかない」

「決まりだな。俊也と秋斗はここであいつらを見張っててくれ。何か動きがあったら報告を頼む」

「わかった」

「いいだろう」

「そして、残りの４人でチョコを調達する！」

俺は右手を開き、手の甲を表にして突き出した。

「俺達は何としてでもチョコを手に入れなくちゃいけない。チョコには俺達の未来がかかってる」

「…その未来をもぎ取るには、俺達自身が動くべきだな」

「これは僕達全員の責任。僕達で解決するんだ」

「群れるのはあまり好きじゃないが…今回ばかりは譲ってやる」

「もはや、我々に後戻りは許されない。確実にこのミッションを遂行しなければ死あるのみだ」

「まだ希望はあるんだ。絶望するには早い」

将人、俊也、秋斗、ディヴァイン、フォッタの順で手を重ねていく。みんなの目的、気持ちはただ１つだ。

「行くぜ！未来は俺達の手で切り開くんだ！」

「「「「「おお！」」」」」

俺と将人、フォッタ、ディヴァインは購買に向かって走り出した。
こうして、俺達の未来をかけた闘いが始まった。

「あれ？何でまともなバトル物みたくなってるの？」↑俊也

「駄目だ、緊急事態で俺達もテンションがおかしくなってきたらしい…」↑秋斗

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

番外編　カオス・バレンタイン（前編）（後書き）

☆今回のキーカード☆

俊也「璃音達がとんでもない事になってるから、今回は僕と秋斗、ウィン、ルリアでお送りするよ」

秋斗「何で俺がこんな事を…」

ルリア『紅刃さん達は購買に行ってしまいましたし、仕方ないですよ』

ウィン『今回紹介するカードはなしだよ。それにしても、何かとんでもない事になっちゃったね…』

俊也「このままだと僕らはあの食べ物じゃない食べ物を食べる羽目に…」

秋斗「普通ならありえないだろうが、興奮剤のせいで正常な判断ができなくなっている。食べたら俊也の料理よりも高い確率で死ぬ。間接的だが、止められるのは俺達しかいない」

俊也「そういえば、ウィン達は全く出てこなかったけど…」

ルリア『全員精霊界に行ってるんですよ』

秋斗「精霊界に？」

ウィン『いろいろ用事なり何なりがあるの。私達女子組はチョコ作ってるし』

秋斗「お前らもか…」

俊也「君達、平和だね…」

ウィン『大丈夫だよ！絶対解決するって！』

ルリア『とりあえず、今回はここまでです！』

秋斗「ハァ…生きた心地がしないな…」

俊也「次回が不安だ…」

ウィン『あはは…とにかく、次回もお楽しみに！』

――――――――――――

いかがでしたか？

書いてる内に段々おかしな事になってきました。何でこうなったんだか…。しかもバレンタインなのに男子陣が活躍してるし…。

では、また次回！

番外編　カオス・バレンタイン（中編）（前書き）

すみません、1日遅れました。しかもまだ続きます。今回は特別ゲストを4人呼びました。

それではどうぞ！

番外編　カオス・バレンタイン（中編）

ＳＩＤＥ／秋斗

「納豆！」

「片栗粉！」

「キムチ！」

「烏龍茶！」

校舎の中からは、次々と本来チョコに入れるべきでない物が放り込まれていくのが聞こえてくる。もう料理じゃないな。

「逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ…」

「俊也、それは他人の台詞だ」

俊也は頭を抱えてしゃがみ込み、何やらぶつぶつ呟いている。

くそ、何とかして興奮剤を駆除できればいいんだが…。

…ん？待てよ？もしかしてあれなら…。試す価値はあるな。成功すればいいが…。

俺は杖を創り、両手で構えて魔力を練り始めた。

SIDE／紅刃

「「「「売り切れ！？」」」」

「ごめんなさいねぇ。前に買い占めていった人がいてねぇ」

購買に着くなりチョコを注文すると、購買のトメさんから衝撃の事実を告げられた。

「くそ！よりによってこんな時に…！」

「いや、まだだ！あれを見ろ！」

ディヴァインが指を差した先には、大量のドローパンがあった。

「ドローパン？」

「ドローパンには様々な種類がある。当然、チョコパンも入っているはずだ」

「そっか！チョコパンを引き当てて中身を取り出せば…！」

「数は必要になるが、試す価値はある」

なるほどな。いい考えじゃねえか。ただ、問題もある。

「だが、これだけの数からチョコパンを、しかも大量に引き当てる事はできるのか？」

「今更迷っていても仕方ない。まずは私から引こう。トメさん、ドローパンを１つ」

「あいよ」

ディヴァインは早速トメさんに料金を渡し、大量のパンの内の１つに手を掛けた。

「ドロー！」

そして、すぐに袋を開けてパンを２つにちぎった。中身は何だ？

「これは…柿？」

「ハズレだね…」

何でパンに柿が入ってるんだよ…。ディヴァインは試しに一口食べると、苦い顔をした。

「う…しかもただの柿じゃない。これは渋柿パンだ」

「チョコどころか甘くもないのが出ちまったよ。つーか何で渋柿？」

「次は俺が引く」

今度は将人が料金を払い、どれを引くか少し迷った後にパンを１

つ掴んだ。

「ドロー！」

「どうだ？」

「…？何だこれは？」

将人が引いたパンの中には、緑の何かが入っていた。キュウリに似てるけど…。

「これはゴーヤだな。沖縄料理でよく使われるそうだが、かなり苦い」

「ちっ、使い物にならないな」

「よし、次は僕が行くよ！」

フォッタも料金を払い、迷わずにパンを手に取った。

「ドロー！」

「中身は！？」

「…うわ…イナゴの佃煮だ…」

フォッタのパンにはイナゴの佃煮がぎっしり詰まっていた。それを見て、俺達は全員顔をしかめる。

「…確かにこういうのを食べる人もいるけど…」

「次だ次！俺が行く！」

俺もみんなと同じように料金を払い、無数にあるパンの内の1つに触れた。

「行くぜ。俺の…ターン！！」

勢いよく引いた。これだけ気合いを入れたんだ。当たりが入ってるはずだ。

さて、中身は…。

「…何だこれ？具なしパンじゃねえか」

「またハズレ…」

具なしパンってのは、代わりにカードが5枚入ってるんだ。一応内容を確認しとくか…。

《ウィジャ盤》

《死のメッセージ「E」》

《死のメッセージ「A」》

《死のメッセージ「T」》
《死のメッセージ「H」》

「ふざけんなぁぁぁぁぁぁ！！！」

カードを確認した直後、俺はありったけの大声で叫んだ。

「何で死のメッセージが一式揃ってんだよ！？ちっとも嬉しくねえよ！死ねってか！？俺に死ねっつってんのか！？」

「まあまあ、落ち着いて…」

「落ち着けるかぁぁぁ！何なんだよこれ！？今日という日に限って全員ドロー力がマイナス方向にメーター振り切ってんじゃねえか！こんなんでチョコパンを引けるかよ！」

くそ、何だってこんな時に…！？俺達何か悪い事したか！？天界の方々の気に障るような事したっけ！？

「こうなったら、別の人に頼むしかない！２４時間いつでもドロー力がＭＡＸみたいな奴を探すんだ！」

「将人、私達はさっき私達の手で解決しようと誓ったはずだが…」

将人が最もな提案を出したけど、ディヴァインは渋っている。ま

あ、それはそうだけど、あれは半分くらいノリでやったから…。

「考えてみろ。今俺達はドロー力が最低クラスだ。このままやり続けても、不吉なカードの組み合わせか最悪下手物しか出てこないぞ？」

「む…確かに…」

「なら、十代だ！ほぼ毎ターンディスティニードロー状態のあいつなら引ける！」

「ナイスアイデア！じゃあ、早速呼びに行こう！」

俺達は十代を呼ぶべく購買から走り出した。あ、今まで引いた奴は後でちゃんと食う。だってもったいないだろ？残してゴミ箱に投入なんてしたら、トメさんが『お残しは許しまへんでぇ！』って某忍者アニメの食堂のおばちゃんのごとく怒鳴り散らす事になりかねないだろうが。頑張れよ、フォッタ！お前ならイナゴパンを完食できる！

「あああああああああ！！！」

と、突然ディヴァインが人気のない廊下のど真ん中で、大声を出して立ち止まった。何だ？何があった？

「どうした？」

「十代は璃音のドレッシングを食べて保健室で療養中だった…！」

「「「あ…」」」

ああ…そんな話もあったな…。

「でも、お前が回復してんだから十代ももう回復してんじゃねえか？」

「いや…ディヴァインは1口だけだが、十代はがっついていた。あれでは今日中の回復は到底望めない」

「そうか…」

まさか十代がダウンしてるとは…。今日は何だってこんなにツイてねえんだ？

「よし、こうなったら僕がドロー力が高い人を召喚する！」

「そんな事ができるのか？」

「大丈夫！伝説のデュエリストあたりを呼び出せば何とかなるはず！」

「でも、相手の機嫌が悪かったり都合が合わなかったりしたらどうすんだ？」

「今更四の五の言ってられないって。それじゃ、行くよ！召喚！」

ボゥン！

フォッタが両手を翳すと、いつぞやの白い煙が爆発した。さて、誰が出てくる…？

「どうだ…？」

煙が晴れてきた。出てきたのは…。

「……ハァ……ハァ……」

ボロボロで見るからに満身創痍の金髪の青年と黒い鎧を着込んだモンスターだった。

「「「「……」」」」

左腕には展開されたデュエルディスクがあり、《鉄の騎士　ギア・フリード》のカードが攻撃表示でセットされている。このモンスターはギア・フリードだ。

「……勝ったぜ……」

「「「「！？」」」」

「ギア・フリードで……ダイレクト…アタ……」

バタッ　バリィン！

「……」

ボゥン！

金髪の青年が倒れて、それと同時にギア・フリードが自動で破壊されるのを見届けた後、フォッタは無言で元の場所に転送した。

「…どうやら、『バトルシティ準決勝で《ラーの翼神竜》の攻撃をまともに食らった後の城之内君』を呼び出しちゃったみたいだね」

「何つータイミングで召喚してんだよ！確かにギャンブル強いけど！あんな状態でドローパン引かせるとかお前鬼！？」

「治療もしないで送り返してよかったのか？」

「大丈夫。原作通りならちゃんと回復するから」

まさかこいつ、焦ってるせいでコントロールが乱れてんじゃねえだろうな？何か不安になってきたぞ？

「今度こそ！召喚！」

ボゥン！

気を取り直して、フォッタはもう1度召喚した。白い煙の中から今度は誰が…。

「我が生涯に一片の悔いｎ」

ボゥン！

台詞を最後まで言わせる事なく送り返した。

「いろんな意味でやばい奴を呼び出してんじゃねぇぇぇぇぇぇぇ！！何で天に昇る寸前の拳王を召喚してんだよ！デュエリストですらねえだろうが！北〇神拳がドローの世界で通用するかぁぁぁ！しか

も何でまた死にかけの奴!?」

「知らないよ!おっかしいなぁ…普段なら1発で成功するのに…」

一気にまくし立てる俺をよそに、フォッタは失敗の原因が何かを考えている。駄目だ、ツッコミは疲れる…。

「フォッタ、次こそは行ける!」

「そうだ!君には私達の未来がかかっている!自分を信じるんだ!」

「…うん、わかった。次こそは成功させる!」

将人とディヴァインに励まされ、フォッタは三度召喚の準備を整えた。今度こそ成功させてくれよ…?

「召喚!」

ボゥン!

前の2回よりも断然でかい煙が爆発した。次は誰を呼び出したんだ?

「「「「……」」」」

全員が固唾を飲んで見守る中、煙が晴れていく。そこには…。

「う、煙っ…！」

「何が起きた…？」

「あれ？ここ学園の廊下だよね？」

「一体誰だ？我らを転移させたのは？」

金髪ロングで首の辺りでヘアゴムでを束ねて下ろしてジャックみたいな服を着た背の高い女子と、遊星の服をロングコートにした奴を着た首の辺りまでのショートの黒髪で眼鏡を掛けた女子と、白いフードとマントを身につけた赤い長髪の少年と、黄色と黒の髪で大柄の男がいた。

「誰だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？」

俺は力の限り叫んだ。これはもう叫んでもいいよな？いや、さっきから叫んでばかりな気がするけど。

「誰だこいつら！？もう名前すら出てこねえよ！ジャックみたいな女子と遊星っぽい眼鏡の女子とよくわからない奴約2名じゃねえか

！」

「最後の僕らの説明はもう少しまともにならない？『よくわからない奴』って何？この状況の方がよっぽどよくわからないんだけど？」

白フードの少年が切り返してきた。やっぱりいきなり呼び出したらわけわからねえよな。

「む！？ルチアーノにドラガン！？なぜここにいる！？」

「いや、僕らはその名前の奴とは見た目がそっくりなだけで別人だから。僕はロキでこいつがトール」

「何で名前が三極神？」

少年…じゃねえや、ロキは金髪の女子の勘違いを正して自己紹介をした。眼鏡の女子が言う三極神って何だ？

「ロキ様にトール様だ…」

「え？何で様づけ？」

「お前か？我を呼び出したのは？」

「あ、はい。僕はフォッタ。ノルフェナ様の弟子って言ったらわかるかな？」

「ノルフェナ？…ああ、神界で何度か会った事があるな」

「ちょっと待て。神界とは何の事だ？」

金髪の女子が神界の説明を求める。俺も神界なんて初耳だぞ？

「文字通り神の世界だ。我とロキはその中でも特に強い力を持つ最高神の１人だ」

「僕は神様見習いだけどね」

「「は？」」

女子２人の疑問の声が綺麗に重なった。そりゃ、いきなり『自分は神です』なんて言われたら誰だって『こいつ頭大丈夫か？』って思うだろ。神については俺達もいくらか知ってるから、ちゃんと説明するか。

「ああ、まあ…ちゃんと説明するから。名前教えてくれないか？」

「ん？誰だお前は？…まあ、いいだろう。私は綾風理奈。デュエルアカデミアのキングだ。覚えておけ」

「キング？クイーンじゃないのか？」

「いや、あくまでキングだ」

「私は綾風七乃。理奈の双子の妹だ」

「ところで、１つ聞きたい事があるんだが…」

「何だ？」

「そこのディヴァインは敵と見なしていいか？」

「私を知ってるのか？それと、何か勘違いされているようだが…」

～説明中～

「なるほど…事情は大体わかった」

「あまり驚かないんだな」

「私や七乃も奇跡的な異常現象は体験済みだからな。今更騒ぐほどの事ではない」

金髪の女子…綾風理奈は、案外簡単に信じてくれた。奇跡的な異常現象ってのは…大体予想つくな。あ、自己紹介は済ましといたぞ。

「で、ルチアーノだか何だか言ってたけど、理奈と七乃はまさかトリッパーや転生者の類か？」

「！？」

「なぜわかった！？」

「俺の知り合いにもいるんだよ」

「何!?」

「事が済んだら会ってやってくれ。同じ転生者なんてこっちじゃ見かけないからな」

「そいつの性別は!?」

理奈は俺にずいっと顔を近づけてきた。なぜか気迫が痛い。そんなに性別が重要なのか？

「お、女だ。今調理室で混沌チョコを作ってる奴の1人だけど…」

「よし!」

そしてガッツポーズ。初対面の俺から見れば意味不明のリアクションだ。

「いいだろう。お前達に協力してやる!」

「本当か!?」

「男には興味などないが、こうして飛ばされたのも何かの縁だ。そして何よりも!」

「？」

「女の子と出会える！」

「…は？」

「女の子の転生者だというのなら大抵は可愛いだろう！そんな可愛い、しかも似た境遇の異世界の女の子と出会い話ができるのは素晴らしいではないか！」

綾風姉妹以外の全員の目が点になる。ロキとトールまで呆気にとられてるよ。

「ハァ…また始まった…」

「どういう事だ？」

「理奈は真性のレズビアンガールだ。女性どうしの恋愛とか…つまり百合を何よりも好む」

「何…？」

将人の疑問に対して、七乃がとんでもない答えを出した。て事は何だ。こいつは同性愛主義者か？

「今チョコを作っているのは4人なのだろう?私がチョコを届けて料理を教え、あわよくばハーレムを…」

「させるかぁぁぁ!!何月沙達を禁断の世界に引きずり込もうとしてんだ!俺の仲間に手出しはさせねえ!」

「理奈、さすがに異世界では自重しろ。会う機会なんて滅多にないし、デーモンズ・レッド寮の生徒がいるからいいだろ?」

「そうか…なら仕方あるまい…」

「何だその妙な名前の寮は?お前達はアカデミアの生徒なのか?」

「ああ。ぱっと見じゃわからないだろうがな。デーモンズ・レッド寮は理奈が作った男子禁制の寮だ」

「どこまで女性好きなんだ…」

将人は呆れて溜息をついた。何かとんでもない奴を呼び出したみたいだな…。

「…許さん…」

「ん?」

振り返ると、トールがわなわなと震えていた。何か爆発寸前だ。

「許さんぞぉぉぉぉ!!貴様ら我とデュエルしろぉぉぉぉ!!」

「いや、その話はどっから出てきた!?」

「バレンタインにチョコを貰えるなどとうらやましい自慢をしおって！我に対する嫌味か！？」

「知らねえよお前の事情なんて！」

「これだから男は…」

「うぐっ！？やめろ！我をそんな目で見るなぁぁぁ！！」

しょうもない理由でキレるトールに冷めた視線をぶつける理奈。女とは逆に男はあまり好きじゃないみたいだ。

「馬鹿やってないで、さっさと購買に行くよ。僕達も手伝ってやるよ。何か面白くなってきたじゃん。キッヒャッヒャッ」

ロキはずいぶんと特徴的な笑い方をするんだな。ま、何だかんだで協力を得られたからよしとするか。

ＳＩＤＥ／将人

何やかんやである意味最強の助っ人を得た俺達は、早速購買に向かった。

「ところで、紅刃は見慣れない制服を着ているのだな？」

「ああ、これか？ちょっとわけありでな」

「その腰のは…デュエルディスクか？」

「当たりだ。剣型のデュエルディスクで、専ら護身用だな。昔から剣術をやってっから」

紅刃の制服はレッドやイエローの上着の黒バージョンだ。話じゃ冥界で作ってもらったらしいから、正真正銘世界で1着の制服という事になる。

「剣術？へえ、人間のデュエルディスクにも面白い物があるんだね」

「知り合いに腕利きのメカニックがいて、そいつに作ってもらったんだ」

「着いたよ」

購買で店番をしているトメさんは昼寝中だ。説明の手間が省けるから一応助かる。

「昼寝か？」

「代金は置いとけばいいだろ。まずは俺が引こう」

最初に名乗り出たのは理奈だ。一人称が変わったのは気のせいか？

「行くぞ！ドロー！」

躊躇う事なく引いたな。中身はどうだ？

「…ちっ、具なしパンか…」

理奈でも駄目か…。一体どうなっているんだ、この購買は？

「まあいい。カードだけでも貰っておこう…」

《魔女狩り》

《因果切断》

《衰弱の霧》

《強制接収》

《シモッチによる副作用》

「業者ぁぁぁぁぁぁ！！！なぜ女性が虐げられているイラストのカードばかりなのだ！？キングをナメているのか！？」

「とりあえず落ち着こうか…」

「いや、我慢ならん！業者はどこだ！？圧倒的パワーで粉砕してくれるわ！」

まさかのレパートリーに激昂する理奈をディヴァインが宥める。
具なしパンですらこの有様とは…。

「理奈、気持ちはよくわかる。俺なんてウィジャ盤一式だぞ？」

「それは…今日はお互い運が悪いようだな…」

「理奈、ここは俺に任せてくれ」

今度は七乃が代金を払う。どうやら綾風姉妹はデュエルに関する事になると一人称が変わるようだ。

「信じなければ、ものにできぬカード（パン）がある…！ドロー！」

理奈に負けず劣らず力強いドローだな。これならいけるか…？

「…くそ、しくじったか…」

「何が当たった？」

「ピーマンが生で丸ごと入っている…」

「何かの嫌がらせか？」

子供が苦手な野菜の中でもトップクラスの物が出てきたか。しかし、なぜ生で丸ごと？

「トール、次はお前が行ってきなよ」

「我がか？」

「チョコに飢えてる今のお前なら引けるはず…」

「一遍本気で戦り合うか？」

「まあまあ、落ち着いて…」

フォッタに宥められ、渋々代金を払ってパンを選び始めた。

「むぅ…しかし、やるからには必ず引き当てる。フラグのない者の力を思い知れ！」

「誰に言ってんの？」

「ドロォォォォ！」

ロキのツッコミを無視して引いたそれを早速確認する。次こそは…。

「ぐ…具なしパンか…。カードは何だ？」

《戦士ダイ・グレファー》

《戦士ダイ・グレファー》

《戦士ダイ・グレファー》

《戦士ダイ・グレファー》

《戦士ダイ・グレファー》

「サンダーパイルうううううううううう！！！！」

「「「待たんかいいいいいいいいいいい！！」」」

ガキィン！！

あんまりな内容にブチギレたトールが巨大なハンマーを創り出してカードを粉砕しようと振り下ろし、それを紅刃がディスクを剣に変化させて真正面から受け止め、理奈と七乃が両サイドから羽交い締めにした。

「何ハンマーでカードをぶっ叩こうとしてんだよお前は！？」

「邪魔をするな！なぜ変態紳士のカードが5枚も入っているのだ！？我への嫌がらせでしかないだろうが！我がミョルニルで粉々に消し飛ばしてくれるわぁぁぁぁぁ！！」

「馬鹿を言うな！確かに5人も同じ顔でこっちを見ていたらイラッとするが、こんな事をしても何の意味もないわ！」

「カードには1枚1枚魂が宿っている！それを壊すような真似だけはさせるか！引いたのなら何か引き合うものがあるはずだ！」

「変態紳士の魂を5つも引き寄せた我は一体何なのだ！？我も変態紳士だと言うのか！？」

「いや、変態紳士ってのはただの偏見だから！」

数分後、3人は何とかトールを落ち着かせた。トールはミョルニルをしまい、紅刃も剣をディスクに戻して鞘に納めた。

「気持ちはわかるけど、何も壊す事はねえだろ…」

「今思ったんだが、神は武器も生成できるんだな。紅刃のそれは何だ？」

「アビリティっていう特殊能力だ。サイコパワーみたいな感じだと思えば大体合ってる」

「やはり、遊戯王ではよくある事なのだな…」

「それじゃ、次は僕が行くよ」

最後はロキか。何かまた失敗するような気がしてきたんだが…。

「ドロー！さぁてと、中身は…」

「どうだ？」

「何だ、具なしパンか…」

「珍しいな。強運のロキが外すなんて」

トールが強運だと言っているロキまで外してしまうとは…。ますます不可解だ。

「あれ？カードじゃなくてメモが入ってる」

「メモ？」

ロキが取り出したのは1枚のメモだ。俺達は全員そのメモを覗き込んだ。

『残念だったな、大凶野郎（笑）』

「そうかそうか、そんなに僕を怒らせたいか…」

ロキはメモを読み取るなり握り潰した。これは誰でもキレる。俺もイラッと来た。

「だったら引いてやるよ！お前の思い通りになると思ったら大間違いだという事を教えてやる！」

「誰に言っているのだ？」

「とにかく、もはやドロー力云々は関係ない！全員引けるだけ引くぞ！」

俺の提案に異議を唱える奴はいなかった。

～１０分後～

「くそ、駄目だ！」

あれから散々引いたが、結果は変わらなかった。下手物や嫌なカードレパートリーの具なしパンのみ。途中でミョルニルが振り下ろされかけたり《極神皇ロキ》が召喚されかけたり《ファイヤー・ボール》が発動されかけたり俺が鎌を振り上げたりしたが、そこは紅刃、理奈、七乃、フォッタが止めた。それくらい散々な結果だった。

「ここまで引いて１個もチョコパンが出ないとは…」

「よし、もう1回…！」

さらに引こうとする紅刃に至っては、さっきから眉間に寄った皺が取れる気配が全くない。

「紅刃、大丈夫か？かなりストレスが溜まってるようだけど…」

「大丈夫だ、問題ない」

七乃が心配して声を掛けるも、紅刃のイライラが晴れる事はない。無理もないか。今の紅刃は、命の危機はもちろん、俺達と違いツッコミのしすぎも重なって疲れている。さらにこのドローパンの結果だ。ストレスがかなり溜まっている。この中で1番イライラしているだろう。

「俺の…タァァァン！！！」

今日1番の気迫が篭ったドローだ。いい加減当たらなければモチベーションが…。

「…また具なしパンか…！」

「紅刃、落ち着け！…ん？またメモか？」

理奈がメモが付いてる事に気づいた。紅刃はすぐにそれを取り出して広げた。

『リア充爆発しろ。マジで消えろ。バレンタインでチョコとか浮かれてんじゃねえよ。俺なんて生まれてこのかた1度もチョコ貰った事ねえんだよ。マスコミや町中でキャーキャー騒ぎやがって。このメモを読んでるお前がリア充ならさぞかしいい気になって浮かれてるだろうよ。チョコを全く貰えない奴なら俺の気持ちわかるだろ？うらやましいんだよ、可愛い女の子からそういった贈り物を貰えるのが！今じゃチョコを他人に送る奴すら俺の憎悪が向けられる対象だけどな！あ〜、リア充マジ消えろよ』

ブチッ

「だあ゛！！！！！」

「「「「「「「！？」」」」」」」

突然、紅刃が思い切り吠えた。そして、そのメモを前方の地面に叩きつけ、連続で踏みつけ始めた。どうやら今のメモの文章でストレスが限界を超えてしまったようだ。

「それはただのてめえの愚痴じゃねえかぁぁぁ！！知らねえんだよ、歪んだ欲望に塗れたてめえの私情なんて！こっちはチョコを貰う行為で生死の狭間に立たされてんだよ！そもそもチョコを貰うようになったらてめえもてめえみたいな考えの連中に恨まれる立場になるのをわかってんのか！？大体、チョコを貰う側の苦労を考えた事があんのか！？俺は中学に入学して月沙と知り合ってからは毎年月沙から義理チョコ貰ってるけどな、月沙を虐める奴らのせいで毎年ろくな事がねえんだよ！中１の時は月沙が作ったチョコを辛子入りチョコにすり替えられるわ、中２の時は中身を開けた直後にバケツ１杯の水をぶっかけられるわ！中３の時なんてな、受け取ろうとしたらドブ川にチョコを捨てられたんだぞ！？例外なく月沙と２人で半殺しにしてやったけどな！チョコを渡す奴貰う奴の苦悩も知らねえで偉そうな事ほざいてんじゃねえ！」

溜まりに溜まったストレスを言葉に変えて外に吐き出しながら踏みまくる紅刃を止めようとする奴は誰もいない。あまりのブチギレっぷりに手を出せないからだ。おまけに、無意識に磁力を使っているからか、床に輝が入ってきた。下手したら床が抜けるんじゃないか？

「リア充だか何だか知らねえけど、社会の悪にのし上げてんじゃねえよ！『異性と仲良くしてたりしてリアルで充実してる奴』がリア充だって話は聞いた事があるけどな、それの何が悪いんだよ！？てめえの勝手な都合で差別してんじゃねえ！人生の先にある無限のルートの中の１つの結果に他人より早く辿り着いただけだろうが！それごと人と人の間にある絆を否定するな！それでも『リア充消えろ』とかほざくんなら…」

紅刃は散々踏み荒らしたメモを前方に放り投げ、リーシェとロデ

ィスのアビリティを同時に発動させ…ん？

「てめえが消えろやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

ズドォォォォォォォン！！

剣に電撃を込めて叩きつけた。壁一面は跡形もなく吹き飛び、外の地面は広範囲に渡って焼け野原と化した。その光景と行動に俺はもちろん他の人も唖然としている。

「ハァ、ハァ、ハァ……あ、あれ？俺今何つった？」

「覚えてないのかお前は？」

「なぁ、俺今何て言ってた？」

紅刃が疲れた顔で振り返ると、トールと七乃に肩を叩かれた。

「その…何だ、すまなかった…」

「は？」

「苦労してるんだな、お前も…」

「いや、俺何て言ったんだよ？」

「紅刃、半殺しにしたのはよくやった」

「だから何の話だよ？」

「ロキ様、悪いけど修復手伝ってくれない？」
「いいよ。すぐに終わらせるよ」
「お～い、無視か？俺の話無視か？」
まあ、何だ…今のはいろいろとあれだったからな…。
「しかし、妙だな」
「何がだ？」
「ロキは相当な強運の持ち主だ。ここまで外すとは思えん」
「今日はたまたま調子が悪いのではないか？」
「いや、おそらくそれはない。まるで、最初からチョコパンどころかまともな奴が入っていないような…」
トールの予想はありえない話ではない。誰かが中身を操作していたのなら、この結果も頷ける。
「ほう？ならば、業者が犯人だとでも？」
「可能性は高い」
「そうか…ならそいつを引っ張り出して地獄を見せてくれるわ！」
「まだ決まったわけじゃないから落ち着こうか」

またディヴァインが理奈を宥めにかかる。だいぶ教職が板についてきたようだ。

「業者が犯人だとしても、一体何のためにこんな事を？」

「さあね。大方、バレンタインでチョコのやり取りをしている連中への報復なんじゃない？」

フォッタとロキはもう修復を終えたようだ。さすがに最高神がいると作業が早いな。

「だからと言って、こんな大掛かりな事を…ん？」

俺は意見を述べようとしたが、途中で止めてしまった。こっちに向かって誰かが来ている。

茶髪のいかにもチャラチャラした男が、携帯を片手にべらべら喋っている。どこから見ても印象はかなり悪い。

「え？パンが大量に余ってるって？ああ、それ俺がやったあれだよ。バレンタインに向けて俺が特別なレパートリーにしてやったの。チョコはもちろん、美味い奴なんて１つも入ってねえよ」

…こいつ、今何と？

「まずい奴ばっかにして、カードの組み合わせもいじってやったのよ。俺が直々に書いたメモが入った奴もあるしな。あっひゃっひゃっ」

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

そいつは…面倒だからチャラ男でいいか。チャラ男は俺達に一切気づく事なく購買まで来た。

「え？怒られる？知った事かよ。どいつもこいつもバレンタインで浮かれてんだしよぉ。あ？…はあ？あれ今日の分だったの？まあいいや。あ、そうそう、チョコも全部買い占めてやったよ。リア充共は爆発してりゃいいんだよ。あ、そろそろ切るな。バイビー」

ピッ

「さあて、仕事だ仕事。リア充マジで爆発しろよ」

「ちょっと待て」

紅刃がチャラ男を呼び止めた。殺気が痛いのは気のせいじゃないな。

「あ？何だてめえ…ひっ！？」

チャラ男が振り向くと同時に、紅刃がディスクの切っ先を向けた。

「てめえか、チョコを買い占めたりドローパンの中身を弄ったりしたのは？」

「今すぐ寄越せ。チョコがなければ女の子達に料理教室を開く事ができんだろうが」

紅刃と理奈がチャラ男に詰め寄る。あれだ、漫画やアニメで表す

なら効果音で『ゴゴゴゴ』と付いてきそうな感じだ。

「はい…？」

「さっきの携帯での会話、全部丸聞こえなんだよ」

「こんな事をして許されると思っているのか？覚悟はできているのだろうな？」

「ひっ！？」

いい加減身の危険を感じたのか、チャラ男は一目散に逃げ出した。

「あ、逃げた！」

「逃がすか！」

紅刃はデュエルディスクをチャラ男目掛けて思い切り投げつけた。

「がぶっ！？」

案の定後頭部にクリーンヒットし、もがき苦しむチャラ男を紅刃と理奈が取り押さえた。

「さっさとチョコを寄越せ！」

「どこにしまっている！？よもや全て食べたとは言わんだろうな！？」

「あ、あれか！？むしゃくしゃしたから、全部捨てちまったよ！」

「「…は？」」

「もういいだろ！？わかったならもう許して…」

「「許すかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」」

「くごっ！？」

チョコが全て廃棄された後だとわかるや、紅刃と理奈はチャラ男を連続で踏みつけ始めた。

「食べ物を粗末にする事はこの俺が許さん！食べ物をナメているのか！？」

「こっちは命が懸かってんだよ！どうしてくれんだぁぁぁ！」

「あべしっ！？がっ！ごっ！べっ！ぎゃふっ！」

まあ、手出しは無用だろう。あいつらはほっとくか。

「どうする？チョコが廃棄された以上、もう宛てがないぞ？」

「くそ、ここまでか…？」

「…あ、1番手っ取り早い方法があるじゃん」

「？」

と、ここでロキがいい考えを思いついたようだ。何かはわからん

が、チョコが手に入るなら何だっていい。

「その方法は何だ？」

「僕とトールが僕達が暮らしてる世界からチョコを買って来ればいいんだよ。僕ら神だから時空間移動なんて自由自在だし」

「そうか、その手があったか！」

トールは納得して指を鳴らすが、俺はもちろん七乃達も複雑な気分で2人の最高神を見つめる。

「これで解決だな！なら早速…ん？どうした？」

「…そんなに簡単な方法があるなら、私達の今までの苦労は一体何だったんだ？」

「行こうか、トール」

「そうだな、早くチョコを取りに行くか」

「おい、ちょっと待て！」

カッ！

七乃が制止する間もなく、2人は強い光を放って消えてしまった。

逃げたな…。

「行っちゃったよ…。あ、そろそろ紅刃達止めないと」

「いい加減あの業者がかわいそうだ。チョコの件なら何とかなりそうだし、行ってくるとするか」

フォッタとディヴァインは未だにリンチという名の制裁を続けている紅刃と理奈を止めるべく行ってしまった。

今思ったんだが、ここまで騒いでいるのにトメさんはよく起きないな。そこまで疲れが溜まっているのか？…今度何か贈り物でもするか。

「ハァ…私達は呼び出された意味があるのか？」

「…七乃、転生者に会った経験はあるか？」

「転生者に？」

溜息をつく七乃に、俺はふと頭に浮かんだ疑問をぶつけた。

「いや、身内以外にはないが…」

「波星月沙」

「？」

「同じ転生者で、紅刃が惚れた奴だ。白い髪のポニーテールだからすぐにわかる。理奈が料理を教えるついでにでも話をしとけ。同じ境遇の奴と出会えるだけでも、収穫にはなるだろ」

「…フッ、そうだな…。それに、なおさら理奈が暴走するのを止める必要が出てきた事だしな」

七乃は小さく笑った。どことなく期待しているように見えたのは、きっと目の錯覚じゃないだろう。

「月沙自身も紅刃にベタ惚れだが、お互いに気づいてないのが現状だ。だから…」

「わかった。理奈が月沙を落とさないよう見張っておく。もちろん、他の奴にも手出しはさせない」

「すまないな」

理奈の妹だけあって、何をするかはお見通しのようだ。あの様子じゃ簡単に口説きにかかりかねないし、仲間の俺としてはこの上ない助力だ。

そうだ、これだけは注意しておく必要があるな。

「七乃、これだけは気をつけろ」

「何だ？」

「月沙に『白髪』は禁句だ。この言葉でブチギレたら白い悪魔が降臨する」

「は…？」

「髪が純白のせいで、それをネタにして老人扱いされるのが死ぬほど嫌いだ。紅刃の話じゃ、教室が崩壊して当事者が死にかけたらしい」

「！？」

「しかし、それは紅刃が死ぬ気になって止めて何とか被害を押し止めたからの話だ。それがなかったらこの学園が消滅しかねない」

アビリティまで使ったら十分あり得る話だ。前に初めて見た時は、紅刃曰く「あれでかなりマシな方」らしいからな…。

「そういうわけだ。そこも考慮した上で頼む。もしそっち方面でブチギレたら、正直お前達の命も保障できない」

「……理奈なら大丈夫だとは思うが……善処する……」

そういう七乃の顔は、幾分か引き攣っていた。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

番外編　カオス・バレンタイン（中編）（後書き）

☆今回のキーカード☆

ウィン『更新遅い！もうバレンタインすぎたよ！？（２０１１年２月１５日現在）』

ルリア『作者がインフルエンザで倒れたから仕方ないですよ。しかもまだ回復し切ってないですし』

俊也「おまけにまだ完結してないし。まだ悪夢が…」

秋斗「チョコの宛てができたからいいだろ。問題は後編がいつになるかだ。インフルの上に期末考査が近いからいつ完成するかわからないぞ？」

俊也「何そのダブルパンチ…？」

ルリア『考査１週間前なのに医者に「１週間休め」って言われた時は、顔を引き攣らせるしかなかったそうですよ』

ウィン『こっちも悪夢だ…』

秋斗「そもそも、今まで短いテンポで更新し続けられたのが奇跡みたいなものだ。というわけで、次回がいつになるかはわからない。わざわざゲストまで呼んだのに申し訳ない」

ウィン『何か大変な事になっちゃったね…。それじゃ、次回をお楽

しみに！』

――――――――――

いかがでしたか？

はい、インフルエンザにかかってしまいました。今まで皆勤だったのに…。これと考査の関係上、次回の更新がいつになるかわかりません。本当に申し訳ありません…。

今回は言羽・D・カタストロフィーさんの『遊戯王ＧＸ　百合キング、綾風理奈が吹かせる王者の鼓動。』より主人公の綾風理奈とレギュラーの綾風七乃に、機皇帝プラシド∞さんの『遊戯王　～絶望と希望の神々の物語～』よりレギュラーのロキとトールにゲスト出演していただきました。次回も登場します。

バレンタインはもう終わってるのに後編がまだとか…。できるだけ早く更新できるように頑張ります…。

では、また次回！

番外編　カオス・バレンタイン（後編）（前書き）

ようやく更新できました。番外編後編です。今回はネタは少し控えめです。

それではどうぞ！

番外編　カオス・バレンタイン（後編）

ＳＩＤＥ／紅刃

紆余曲折を経て遂にチョコを手に入れた俺達は、早速待機中の俊也と秋斗の所に向かった。

業者？ディヴァインとフォッタが止めに入るまで理奈と一緒にスタンピングしまくってたけど何か？さすがに俺も頭に来たからな、今までのストレスを全部まとめて発散させてもらったぜ。

「俊也、秋斗！」

「あ、戻ってきた」

とりあえず、俊也と秋斗とは無事合流できた。ただ、途端に２人の目が点になった。

「あの…何か増えてんだけど」

「元からだ」

「嘘つけ。ジャックっぽい女と遊星っぽい眼鏡の女とよくわからない奴約２名が増えてるじゃねえか」

「だから僕らのその評価は何？」

「ところでその杖はどうした？」

俺はロキをスルーして、俺と同じ評価をした秋斗に問い掛けた。

「ああ、興奮剤を駆除した」

「本当か！？」

「俺が成分を丸ごとアンモニウムに変えて、俊也が換気をした」

「お前、そんな事もできんのな…」

「骨の折れる作業だったがな。後は俺があいつらに《女神の加護》と《レインボー・ライフ》をかけたからもう回復済みだ」

《女神の加護》はライフを３０００に変える永続罠。その代わり、破壊されれば逆に３０００のダメージを受ける。それを利用して、ダメージを回復に変える《レインボー・ライフ》も使って状態異常を一気に回復させたのか。ていうか何で怪我じゃねえのに遊戯王の常識が通用するんだよ…？

「そうか。魔法と罠の力を使う事ができるお前ならではの方法だな」

「いや、将人お前そこで納得していいのか…？」

「その代わり、調理室の状況がとんでもない事になってるけどね…」

俊也は調理室の方を向いて遠い目をしている。何かあったのか？

「とんでもない事とは何だい？」

「見ればわかるよ」

ディヴァインは先陣を切って窓を覗き…顔を真っ青にして離れた。

「どうした？」

「あ、あれはない…酷すぎる…」

「は…？」

気になって、俺達も覗いてみる事にした。

そして、絶句した。

月沙達は、ただ黙ってテーブルの上に置かれた『それ』を見ていた。

「…どうしてこうなった…？」

「…私が知りたいわよ…」

１番最初に口を開いたのは勇香だ。それに対して返事を返したのは璃音。この２人に限らず、全員生気が抜けかかってる。

「途中からパニックになって何でもかんでも入れてったら…これができたと…」

月沙も会話に参加した。あ～、『それ』について説明する必要があるな…。

ボウルの中に入ってる『それ』は、何かやばそうな黒っぽい湯気を出してて全体が黒ずんでいる。一口でも食べたら快速であの世に搬送されそうな感じの奴。

とにかく、これだけは言える。『あれは食べ物じゃない』。

「私のせいだ…私がなぜか薬物を入れ始めたりしなければ…」

ルーナは両手両膝を床について責任に押し潰されそうになってる。いや、いくら薬物入れたっつってもあそこまでなるか普通？

「ルーナのせいじゃないよ…。私達もなぜか不思議に思わなかったし…」

「さっきまでの私達を全力でぶん殴りてえ…。今なら万象一切灰燼と為せそうだ…」

それ何て総隊長？

「私なら氷河時代撃てそう」

それ何て世界政府？

「馬鹿な事言ってる場合？もうこれ使い物にならないわよ？」

「確かにな…。もうチョコですらねえよこれ。Ｃｈｏｃｏだよ。い

や、猪虎霊塗（ちょこれいと）だよ」

「活字でしかわからないから。でも、チョコは全部使い切っちゃったしなぁ…」

思いっ切り絶望しまくってる女性陣。正直見てられねえな…。

「あれがお前達の言っていた連中か？」

「ああ。普段はもっと明るいけどな」

トールにもいつものあいつらを見せてやりたいもんだ。個性が剥き出しになってるような奴らだからな。

「ここは1つ私が料理を教えて…」

「七乃～、理奈を見張ってくれ。月沙達が禁断の世界に行かないようにしてくれ頼むから」

「私も一応そっちの世界の住人なんだが…。元からそのつもりだ」

「ロキ、チョコを寄越せ。私が持っていく」

「はいはい」

ロキは半分めんどくさそうに、板チョコが大量に入ったレジ袋を理奈に手渡した。

「でも、タイミングとかはどうする？いきなり出てきても怪しまれるよ？」

「安心しろ、フォッタ。我にいい考えがある」

トールは自信満々の調子で全員に作戦を伝えた。

「なるほど、それならいけるかもな」

「でも、もしチョコを買いに行かなかったら？」

「大丈夫だ、必ず行く！」

俊也の疑問にも揺らがないトール。その自信はどこから出てくるんだ…？

「…いや、まだよ。まだ希望はあるわ」

一方、窓の向こうではさっきまで燃え尽きかけてたルーナが立ち上がった。

「今から購買に買いに行けば、チョコなんていくらでも売ってるはず！」

売り切れてるけどな、チャラい業者のせいで。そのせいで俺達がどれだけ苦労したか…。

「お、その手があったか！」

「私達、何で今の今まで気づかなかったんだろ…」

「…と、とにかく行ってくるわ！」

「待ちなさい。この猪虎霊塗はどうするの？」

確かに、あれは処理に困るよな…。このままチョコの形にするのも考え物だし…。

「これはもはや食べ物じゃないわ。兵器として考えるのよ」

「「「兵器？」」」

「そう！兵器！これは兵器として保管しておきましょう！」

もはや兵器にまで昇格しちまってるよ。あくまで有効利用する気か？お嬢様にはあまり見られないある意味庶民的な発想だな。

「ニュートラルの連中が出てきた時にこの猪虎霊塗を食べさせてやれば、どんな奴もイチコロよ！」

「（何言ってんだあの馬鹿！？）」

「ああ、なるほど」

「（璃音も納得しないでよ！）」

秋斗と俊也は2人してツッコんだ。この時ばかりはニュートラルに同情した。てかしてもいいよな？

「それじゃ、行ってくるわ！」

ルーナはエプロンを脱いでいつもの黒マントを身につけ、ダッシ

ュで調理室を抜け出した。

「なぜマント？」

「家の決まりだとさ」

「ほぉ…。とにかく、予想通りチョコを買いに行ったな。理奈、七乃、行くぞ」

「月沙ちゃん達とチョコを作るためだ」

「よし」

「念のためだ、俺もついてく」

トールと理奈、七乃、そして俺は先回りして購買に…

「あの…僕が転移させるから。それなら確実に先回りできるでしょ？」

…行く前にフォッタに呼び止められた。

フォッタに購買まで転移させてもらった俺達は、早速所定の位置についた。理奈と七乃は購買のレジ前、トールと俺は廊下の見張りだ。

「あ、来た」

しばらくしたら、ルーナが走ってくるのが見えた。マントを羽織ってるからすぐわかる。

「おい、来たぞ」

「そうか」

俺は一言女子2人に告げると、トールと一緒に適当な所に隠れた。それから少しした後にルーナが到着した。

「すみません！チョコくださ…ってあれ？寝てる…」

トメさんはまだ昼寝中だ。どんだけ疲れてんだよ？今度マジで何か贈るか。

「どうしたのだ？」

「いや、チョコを買おうとしたら…って、あんた達誰？見慣れない服着てるけど」

理奈が話し掛けると、ルーナは訝しげな視線を向けてきた。そりゃ、あんなデザインの白コートと青コートはこの学園にはないからな。

「私は綾風理奈。このアカむがっ！？」

「…綾風七乃。理奈の妹だ」

理奈が何かを言いかけたところを七乃が片手で抑えた。あいつ今絶対『アカデミアのキングだ』って言おうとしたよな？

「ふぅん。私は九条院ルーナよ」

「ルーナちゃんか、よろしく。ところで、チョコなら私達が買ったこれで売り切れだが…」

「えええぇえぇえぇえ！！？そんな…」

まるで七乃の言葉が死刑宣告だとでも言わんばかりに落ち込んだルーナ。前以て用意したチョコがあんな状態じゃあな…。俺達も絶望しかけたし。

「チョコでも作るつもりだったのか？」

「え？何でそれを…」

「明日はバレンタインデーだ。その前日に女子がチョコを買う理由など1つしかなかろう」

「確かにそうだけど…」

「ここで会ったのも何かの縁だ。一緒にチョコを作らないか？」

「え？」

理奈の突然の誘いに、ルーナはきょとんとした表情を浮かべた。

「どうせ暇潰しみたいなノリで買ったのだ。やるなら大人数の方が

盛り上がる。これだけ板チョコがあれば、3人分作ったところで大量にお釣りが来る」

まあ、一気に20枚も買ったからな。あれで足りないわけがない。

「でも…」

「板チョコなら気にするな。どこでやる？」

「…それじゃ、お願いするわよ。案内するわ。こっちよ」

ようやく承諾したルーナは、綾風姉妹を連れて調理室に向かった。

「あ、私の他にも後3人いるんだけどいい？」

「構わん。むしろそれがいい」

「…行ったみたいだな」

「作戦成功だ。戻るぞ」

ルーナ達が見えなくなったのを確認した後、俺達はこっそり購買を後にした。

トールの作戦はこうだ。

まず、月沙達が板チョコを買いに購買に行くのを見計らって理奈と七乃が板チョコを持って購買で待機する。次に、月沙達が来てチョコが売り切れだという事を確認したところで『たった今板チョコを買い占めた客』のふりをして話し掛ける。そして、『チョコはたくさんあるから一緒に料理しない？』と提案すれば、月沙達は最終的にＯＫを出すはず。こうすれば、月沙達にごく自然に板チョコを提供できるという寸法だ。

料理が天才的に得意な女子の理奈がいるからこそできる作戦だ。にしても、本当に上手くいくとはな…。

そんなこんなで作戦を振り返りつつ、俺とトールは将人達の所に到着した。

「戻ったぜ」

「紅刃、トール！どうだった？」

「成功だ」

真っ先に俊也に出迎えられ、トールは一言そう告げた。

「本当！？」

「そろそろ来るんじゃないか？」

俺達も窓を覗いて…お、丁度ルーナが来た。

「お待たせ！」

「どうだ？買えたか？」

「買えたっていうか…一緒に料理してくれるって人達がいて、その人達が用意してくれたのよ」

「一緒に？」

「さ、入って入って」

ルーナに声を掛けられ、調理室に理奈と七乃が入ってきた。

「え！？」

「な！？」

「…！？」

と、綾風姉妹を見るなり月沙達3人の表情が一変した。そこまで驚く事か？

「綾風理奈だ、よろしく頼む」

「綾風七乃…理奈の妹だ…」

「…ジャックと遊星…？」

月沙が思わず呟き、それに反応して理奈と七乃が一瞬ギクッと…あ。

「やば…服着替えさせときゃよかった…」

「どういう意味だい？」

ロキが俺に質問を投げ掛ける。やっぱ気づいてないか…。

「俺達は未来出身で遊星達の知り合いだって事は、ディヴァインの説明で話したよな？」

「それがどうかした？」

「あんなジャックと遊星もどきのコートを着て、事情を知らないあいつらの前に出たらどうなるよ？ルーナ以外未来出身だぞ？」

「あ…」

ロキ達もようやく気づいたみたいだ。何とかなるか…？せっかく解決したと思ったのに、また不安要素が…。

「…誰だそれは？私達はジャックと遊星などという名前は知らないぞ？」

「あ、何だ…」

「いや、服が私達の知り合いに似てたもんでな。気にしないでくれ」

あ、何とか理奈がごまかしてくれたみたいだ。危ない危ない…。

一瞬ヒヤッとしたじゃねえか。

「…で、あなた達は一体？この学園じゃ見ない顔だけど…」

う…さすが璃音、鋭い。まあ、七乃が従兄妹の遊星が着てる服と似たコートを着てるからな。おまけに理奈はジャックっぽいコートを着てるし、目立たないわけがない。

「海馬コーポレーションの使いだ。仕事はもう済んだ」

「海馬コーポレーション？」

「私服での仕事ってありなのかよ…？」

「非番なのに急に仕事が入ったのだ。仕方あるまい」

「そう…」

だいぶ苦しい言い訳だな。一応信じてはくれてるみたいだけど…。

「そこで、明日がバレンタインだからチョコでも作ろうかと思って購買で買ったら、ルーナちゃんに会ったというわけだ」

「ま、何にせよ、助っ人が入るなら願ったり叶ったりだ。ちょっと失敗してチョコが足りなくなってたところだし」

「失敗？」

「いろいろあって、用意した分のチョコを全部駄目にしちゃってね…」

「だからチョコを買いに来たのか…」

「そういう事だ。さ、早くチョコ作ろうぜ」

「日が暮れるし、話なら料理しながらでもできるでしょう？」

七乃は正体がばれやしないかとヒヤヒヤしっぱなしだったけど、やがて小さく笑った。

「…ああ、そうだな」

「よし、この私が料理を教えてやろう！私にかかれば、そこら辺の店のクオリティより上の物を作り上げる事などたやすい事だ！」

「やけに自信あるな…」

「理奈の料理の腕前は天下一品だ。私が保障する」

「そりゃ頼もしいわね。じゃ、早速始めましょ！」

…何とか収まったみたいだな。後はあの2人に任せとくか。これ以上は俺達が手を出すまでもないな。

「…トール、帰るよ」

「ロキ？」

ロキは自分の役目は終わったとでも言わんばかりに背を向けた。

「何だ、もう帰るのか？」

「これ以上は僕らの出番もなさそうだからね。転移ならフォッタだけでも十分だろ？」

「まあ、確かにそうだけど…」

「ま、ちょっとは楽しめたけどね。キッヒャッヒャッ」

「むぅ…これ以上向こうの仲間を待たせるわけにもいかんし…仕方あるまい…」

トールは渋々といった様子で承諾した。まさかこいつ、義理チョコ狙ってたんじゃねえだろうな？

ロキはどこからか剣を取り出すと、その場で縦に1回振った。すると、斬った空間が開き、丁度人が入れるくらいの穴に変わった。

「それじゃ、僕らはもう行くよ」

「ロキ、トール…ありがとな。お前らがいなかったら、この件は解決できなかった」

「勝手に呼び出したりしてごめんね」

チョコを手に入れられたのも、月沙達に自然にチョコを渡せたのも、ロキとトールがいたからこそだ。命が懸かってた分、本当に感謝してる。

「そうか。いや、気に病むな。ドローパンの結果は酷いものだったが、楽しかったぞ。また会おう」

「あの2人にもよろしく言っといてよ。それじゃ、バイバ～イ」

２人の最高神は穴の中に入っていき、それを見計らってか穴はひとりでに閉じた。

「行ってしまったな…」

「会う機会ならきっとあるだろ。どうする？見張りは続けるか？」

秋斗は感傷に浸るディヴァインに一言だけ返し、俺達に意見を求めた。

「理奈と七乃には連絡先を教えといた。あいつらから連絡が来るまでは、別の場所で待機しようや」

購買で作戦に入る前に、あの２人には俺の携帯のメアドを教えといたから、何かあっても連絡が来るだろ。とりあえず、俺達はばれないようにその場を離れた。

ＳＩＤＥ／璃音

私達は今、ひょんな事から知り合いになった綾風姉妹と一緒にチョコケーキを作っている。

それにしても、理奈の料理の実力は大したものだわ。伊達に自信を持っているわけじゃないみたいね。

2人がそれぞれジャックと兄さんの普段着に似たコートを着ているのには驚いたけど、深い詮索はなしにしましょう。今やるべき事は別にあるわ。

「ところで、このチョコは誰に渡すんだ?」

不意に、七乃が私達に問い掛けてきた。そういえば、まだ誰に渡すかは言ってなかったわね。

「普段私達と交流のある男子5人よ。後、教師に1人」

「6人…。やっぱり義理か?」

「いえ、1人だけ本命を渡す気の人がいるわよ」

私がそう言うと、月沙の手が少しだけ止まった。相変わらずわかりやすいわね。

それを理奈が見逃すはずがない。

「ん? 月沙は好きな人がいるのか?」

「え!? いや、その…ええと…」

「何よ、煮え切らないわね。そんなんだからいつ間に経っても奥手なのよ。もっと紅刃に対して積極的になったらどう?」

「なっ…ルーナ、無茶言わないでよ!」

顔を真っ赤にして抗議する月沙。紅刃は隠してるつもりかもしれ

ないけど、気があるのは何となくわかるわ。紅刃が見たらどんな反応をするかしらね？

「ルーナちゃん、そう言うな。恋愛なんてそんなものだ」

「ちょっとした冗談よ。私も同じ立場なら月沙と同じになってるだろうしね」

「もう…！」

「…なあ、ちょっといいか？」

ここで勇香が話に入ってきた。恋愛に関しては…って、何か嫌な予感が…。

「どうした？」

「いや、気になってたんだけどさ…。

恋愛って何だ？」

「「「「「……」」」」」

沈黙。やっぱり言ったわね…。

「…あの…ごめん、よく聞こえなかった。もっかい言ってくれる？」

「いや、だから恋愛って何だ？」

月沙が聞き直しても質問は同じ。私は呆れて指2本で額を押さえた。

「やっぱり、全然理解してないのね…」

「んな事言ったってしゃあねえだろ、わかんねえもんはわかんねえんだから」

「あの…どういう事だ？」

理奈の問い掛けに、私は溜息混じりに説明を始めた。

「勇香は恋愛に関してはほぼ完全に無知のレベルよ。いくら説明しても歯が立たなかったわ」

そうね…あの日の話をすればわかりやすいかしら？記憶を掘り返しながら、私は説明を始めた。

ある日、私は勇香、アキ、龍可の４人で、近くのカフェでお茶を

していた。その途中で、女子の間ではよくある（？）恋愛話に発展していった。

『アキは兄さんの事好きなんでしょう？もっと積極的にいったら？』

『ちょ…！？何言ってるのよ。私は別に…』

『みんなで集まってる時、視線がよく兄さんに行ってるわよ』

『！？』

一言指摘してあげると、アキはみるみる顔を赤く染めた。面白いわね…。

『璃音さんはどうなの？遊星の事恋愛対象として見てたりする？』

『兄さんと私は従兄妹。血は繋がってないけど兄妹みたいのものよ？兄に恋なんてしないわよ』

龍可、そういう事はアキの前で言わないものよ。もし私が兄さんの事が恋愛対象として好きだったらどうするのよ？

『じゃあ、俊也とは？あなた達、見た限りじゃ他の人より仲良さそうだけど』

『確かに、俊也は男性の中ではよく話す方ね。でも、活発に動く彼にはインドア派の私なんて釣り合わないわよ』

『そう…』

アキは少し残念そうにむっとした調子で呟いた。私をからかい返すつもりだったのかしら？

『…なあ、前々から気になってたんだけどさ…』

『何？』

『恋愛って何だ？』

ここよ。ここで勇香が問題発言をぶつけたのよ。当然、初めて聞いた当時の私達は思考が止まった。

『…勇香さん…今、何て…？』

『いや、だから恋愛って何だ？』

『冗談よね？』

『私はマジだぞ？』

『本当にマジ？』

『本気と書いてマジだ』

龍可、アキ、私の3段重ねの質問にも真顔で返す勇香。この時ばかりは自分の耳を疑ったわ。

『チームサティスファクションの時代に鬼柳達に聞いてもさっぱりわかんなくてさ…。アルカディアムーヴメントで俊也達に聞いてもやっぱりよく理解できねえんだよ。結局例外なくみんな疲れて諦め

ちまうし…』

兄さん達、ご愁傷様ね。そこまで酷いのかしら…？ちょっと試してみましょう。

『じゃあ、いくつか質問するわね。恋人って何かわかる？』

『ん？男女の間で割と仲が良い奴らの事を言うんじゃねえのか？』

『それだと、私達と兄さん達はまとめて恋人になるじゃない。違うわよ』

『何つーか、友達とどう違うのかイマイチわかんねえんだよな…』

『私からも聞くわね。その…キスって何か、わかる…？』

アキも意外と大胆な事を聞くのね。よくやったわ。

『キスか？ただの親友の間でのスキンシップだろ？何なら今やるか？』

『…いや、いいわ…』

アキは顔を引き攣らせて遠慮した。整った顔して何言ってるのこの人？

『私からも質問！結婚の事をどう思ってるの？』

『結婚か？血の繋がってない異性と一緒の家に住む事じゃないのか？つーか、わざわざ式を立てるほどの事じゃない気がするんだけど

…っておい、どうした龍可？急に目頭押さえて』

『いえ…何でもないから気にしないで…』

勇香、年下に哀れまれてるわよ。ていうかどういう解釈してるのよ？これは重症ね。

…？結婚ですらこの有様だという事は…。

『…勇香、子供ってどうやってつくられるか知ってる？』

『璃音！？』

アキが慌てて声を上げる。アキ、止めないで。龍可がいるのはわかるけど、あえての敢行よ。

『子供？ええと…ああ、コウノトリをバズーカで撃ち落として鍋にして食えば産めるんだっけ？』

『何そのオリジナル設定？私達は子供を授かるのにわざわざハンターにならなくちゃいけないわけ？』

『へ～、そうなんだ』

『龍可、違うからね？コウノトリ関係ないからね？今は説明できないけど』

『ていうか、勇香の言った方法だとコウノトリはとっくの昔に絶滅してると思うんだけど』

その後も3人で説明したけど、勇香はちっとも理解できなかったわ。勇香の中ではどうしても愛が友情に変換されてしまうみたいで、最終的に私達の方が疲れ切って諦めたのよ。

「「「「……」」」」

私が話し終わると、私と勇香以外全員ポカンとしていた。

「これは…」

「鈍いっていうか…」

「確かに、無知に等しいな…」

「いや、どうも考えが行き違っちまうみたいでさ…」

これで悪気が一切ないから困りものね。将来どうするつもりかしら?高校生でそのレベルは少しまずいわよ?

「フフフ…いいだろう…」

「?」

「ならば、この私が恋愛について手取り足取り教えて…」

「やめろ!理奈が教えると大変な事になる!勇香を百合の世界に招

待する気か！？」

「無論、そのつもりだ！」

「堂々と言うな！」

突然、理奈が勢いよく名乗り出ると、七乃が慌てて止めに入った。何でかしら？いや、それより百合って…。

「百合？花畑にでも連れてってくれんのか？」

「いや、違う。決してそういう意味じゃない…」

「あの…七乃？これって一体…？」

「…理奈は筋金入りのレズビアンガールだ。女性どうしのいろいろを何よりも好む」

「「「……」」」

ああ、なるほど、女性限定の同性愛主義者ね。人の勝手だし、それはそれでいいと思うわよ？ただ、そこに勇香を巻き込むとなると…。

「理奈、心配はいらないわ」

「そうそう！私達が時間をかけてゆっくり話すから！」

「わざわざ頼らなくても私達で何とかするわ！というわけで勇香、覚悟しときなさいよ！」

「何を！？」

私達の考える事は一緒のようね。とにかく全力で理奈を止めにかかった。いくら何でも勇香がレズっ子になるのは、それなりに長い付き合いとして抵抗があるわ…。

「む…なら仕方ないか…」

「そこであからさまに残念そうな顔しない！」

理奈が残念そうに呟くと、ルーナがビシッと一言ツッコんだ。

それから、ラッピングまで完了するのにもう少し時間がかかった。

ＳＩＤＥ／月沙

「では、そろそろ帰るか」

外はもう夕暮れ。チョコの制作を全部終えた私達は、一緒に作ってくれた理奈と七乃を玄関から見送る事にした。

「今日は本当にありがとう。理奈と七乃がいなかったら、私達どうなってたか…」

「そんな大袈裟な…」

「いや、マジで危なかったから。洒落になんねえって」

「一緒に料理できて楽しかったわよ。また会いましょう」

「ああ。…そろそろ行くか。ではな。また会おう」

2人は背中を向けて歩き出した。そこに勇香とルーナが声を掛ける。

「また来いよ！」

「いつでも待ってるわよ！」

理奈は片手を上げて答えただけで、振り返らない。私達は、2人の姿が見えなくなるまで見送った。

「何だかんだでいい奴らだったな」

「何だかんだって…」

「さてと…私達も寮に帰りましょう」

ルーナは真っ先にブルー寮に向けて歩いていった。私は…寮に戻る前に確かめたい事がある。

「月沙」

前に進もうとすると、勇香に呼び止められた。

「『正体暴き』、任せたぜ」

「後でちゃんと報告しなさいよ」

「勇香、璃音…」

そっか…。2人共、何となく気づいてるんだ。だから私に…。

「…うん、後でね」

私は一言返して、夕暮れに溶けたばかりの姉妹を追いかけて走った。

理奈と七乃に追いつくのに、時間はそこまでかからなかった。声を上げて呼び止める。

「待って！」

「「？」」

2人が振り向くと、私は立ち止まって息を整えた。

「月沙ちゃん？」

「どうした？」

「ちょっと変な事を聞くようで悪いけど…あなた達、この世界の人間じゃなかったりする？」

「「！」」

私が指摘すると、２人の表情が驚きのそれに変わった。でも、理奈はすぐにニヤリと笑った。

「ほぅ…なぜわかった？」

「そのコート。どうも怪しいと思ってね。最初に会った時に私がジャックと遊星の名前を出した時、一瞬ギクッてなったでしょ？」

「…！」

「それだけならジャックと遊星が女になったって線もあるけど、ジャックはあんなに料理が得意じゃないし。ジャックと遊星がこの時代にいないのに知ってるなんて、どう考えても怪しいよ」

「なるほどな…。正解だ。確かに私達はこの世界の人間じゃない」

理奈はあっさり自分達が異世界人だと認めた。でも、多分それだけじゃない。

「…理奈、七乃、デッキを見せてくれる？」

「デッキ？なぜだ？」

「もしかしたら、『ありえないカード』を持ってるかもしれないか

ら」

2人はまたさっきみたいに表情を変えた。少し沈黙した後、理奈はカードを2枚、七乃は1枚取り出した。

「見せるなら、これだけでも十分だろ」

…予想通り。

理奈が見せたのは《レッド・デーモンズ・ドラゴン》と《スターダスト・ドラゴン》、七乃が見せたのは2枚目の《スターダスト・ドラゴン》だった。

「やっぱりね。レッド・デーモンズはジャックしか、スターダストは遊星しか持ってないはず。そして、スターダストは1枚しか存在しない。…もしかして、転生者？」

「！？」

「何でそこまで…！？」

「私も転生者だから」

3回目の驚きの表情。どうもおかしいと思ってたけど、案の定予想は大当りだった。

「…驚いたな。まさか、身内以外で同じ転生者に出会う事になるとは…」

「私は初めてじゃないけどね。でも、元の世界とはカードの勝手が

違うから、割と苦労するんだよなぁ。スターダストとかは使う以前に手に入らないし、レア度が跳ね上がってるカードがあったりするし…。私は今のデッキ1本で行くから前者はあまり関係ないけど」

「そうなのか？私達の場合は元の世界のＯＣＧのカードが丸ごと支給されてたがな」

「嘘！？私そんな手当て全くないよ！？」

最初からカードを完全コンプしてるパターンか…。ちょっとうらやましいな。

「その話はいいとして…いい仲間を持ったな」

「え？」

七乃が急に話題を変えて持ち出した話に、私は思わず疑問の声を上げた。

「転生してからはいろいろ大変じゃなかったか？ああいった仲間に巡り会うまでは苦労しただろ」

「…うん。死に方も最悪だったし、転生した後は虐められたりもした。でも…」

家族はもちろん、助けを求めた人はみんな殺されて、自分も殺されて…転生した後も、虐めに会って嫌な思いをした。それでも、前を向いていられる。

「私を助けてくれた人がいたから。いつも傍で護ってくれて、私も

たくさん勇気を貰った。それに、勇香達とも会えた。だから、もう大丈夫」

私1人じゃ、どこかで立ち止まってそれきりだったかもしれない。でも、紅刃がいてくれたから、勇香達と一緒にいれるから、私は今笑って生きていられる。

「今日はもう時間がないけど、もしまた会ったらデュエルしようよ」

「…フッ、その時は全力で相手をしよう！」

「当然でしょ？」

やっぱり、みんな『もう二度と会えない』とは考えてないみたいだ。きっといつかまた会える。そんな気がする。

「それじゃ、私はもう帰るね」

「待て、最後に1つ聞かせてくれ」

踵を返して帰ろうとすると、理奈に呼び止められた。何事かと思って振り返る。

「お前は今、幸せか？」

…何だ、そんな事か。答えなんて、決まってる。

「うん、幸せだよ！」

「…そうか」

理奈は満足そうににっこり笑って、背を向けて歩き出した。七乃もそれに続く。

「また会おう」

「うん、またね」

会話はそこで途切れ、私達はもう振り返らなかった。

さてと、勇香と璃音に報告しないと。後、ルーナにも。

ＳＩＤＥ／紅刃

俺達は灯台を待ち合わせの場所にする事にした。そろそろ暗くなってきたな…。あ、来た。

「すまない。少し遅くなった」

「大丈夫だって！全然気にしてないから」

「で、どうだった？」

「異世界人だというのはばれたけど、仲良く接する事ができた」

七乃からの報告は悪い知らせじゃなかった。何とか丸く収まりそうだな。

「ん？ロキとトールはどうした？」

「先に帰ったよ。もうやる事はないって言ってね」

「そうか？…ま、いいや」

「ずいぶん軽いな…」

「男に興味はない！」

「あの…一応ロキは性別ないという話だけど…？」

理奈のあまりの堂々っぷりにディヴァインもたじろぎっぱなしだ。堂々のベクトルが違う気もするけど、気にしたら負けか？

「それは置いといて…チョコは完成したから安心しろ」

「よかった…。あんなのを食べたら間違いなく地獄を見てた…」

「だったらお前も少しは上達しろ。璃音とウィン以外でも食えるく

らいにはマシな料理を作れるようになれ」

「う…善処するよ…」

秋斗の言葉に俊也がばつの悪い顔をした。ま、あれよりは多分マシとはいえ、俊也の料理も十分破壊力があるからな…。

「何の話だ？」

「こっちの話だ」

「？」

理奈は将人の台詞に対して疑問の表情を浮かべる。今は別に知らなくていいだろ…。

「フォッタ、これを」

七乃は理奈に気づかれないように、綺麗にラッピングされた箱を2つフォッタに渡した。

「ロキとトールに渡しておいてくれ。共に行動した縁だ。お前くらいしか渡せそうな奴はいないからな」

「ＯＫ。ちゃんと渡しとくよ」

時空間を越えてあの2人に渡しに行けるのは、この中じゃフォッタくらいだ。人選は間違っちゃいない。

「さて…それじゃ、2人を元の世界に送り返すよ」

「もうそんな時間か」

「時間が経つのは早いな…」

全くだ。フォッタが間違えて呼び出してから、もう数時間経っている。やるべき事も済んだし、あまり長居しても、向こうの世界で理奈と七乃の帰りを待っている人達がたくさんいるはずだ。

「そうしんみりすんな。住む世界は違っても、俺達が出会ったって事実は変わらないだろ?そのうちまた会えるさ」

別世界にいたって、繋がりは簡単には切れない。冥界やら精霊界やらと行き来してわかった事だ。

理奈と七乃はきょとんとしてたけど、やがて小さく笑った。

「…ああ、そうだな」

「私達や月沙ちゃん達が転生して、目の前に自称神様（笑）もいる。また異世界に赴く事になる日もいつかあるかもしれんな」

「あ、やっぱりそのあだ名で呼ぶんだ…」

フォッタ、悪いけど諦めろ。俺にはどうする事もできない。

「ではな。また会おう」

「いつか再会できる日を楽しみにしている」

「ああ。今度は月沙達も入れて、ゆっくり世間話でもしようや」

「それじゃ、行くよ！はいっ！」

ボゥン！

フォッタの合図と共に理奈と七乃が白い煙に包まれ、晴れた跡には誰もいなかった。

どたばたしたけど、結局はいい奴らに会えたな。次に会えるのはいつになるか、今から楽しみだ。

また会おうな。そう心の中で呟いて、暗くなり始めた夕焼け空を見上げた。

「今日はバレンタインって事で、みんなにチョコケーキを作ってきました！」

次の日の放課後、俺達男子陣は月沙達女子陣にレッド寮の食堂に呼び集められた。月沙達は、綺麗にラッピングされた箱を…この表現1度使ったな。まあ、いいや。とにかく、チョコケーキが入ってるだろう箱を持っている。箱は合計6つ。勇香とルーナが2つずつ持っている。

「バレンタイン？…ああ、そういえば今日はそんな日だったな」

「作んのにかなり苦労したんだぜ？味は保障する！」

将人と勇香はそう言うけど、どことなくぎこちない。昨日は本当にいろいろあったからな。おまけに、俺達はチョコケーキの存在を知ってるだけに、無知を装うのに疲れる。

あ、余談だけど、フォッタはもうロキとトールにチョコを渡したらしい。トールがハイテンションになったのをロキがシバいたっつってたな。

「紅刃…はい、これ」

全員が渡す中、月沙が少し顔を赤くして俺に箱を渡してきた。

「ああ、ありがとな」

ちゃんとポーカーフェイス保ってるよな、俺？あまり自信ねえな。好きな奴からバレンタインチョコを貰うんだ、赤面しても無理ないって事にしといてくれ。

「フォーク入れといたから、今食べて感想を聞かせてほしいな」

「準備いいな。じゃあ、早速食うか」

リボンと包みを取り除いて箱を開けると、立派なチョコケーキが小さめのサイズで入っていた。ご丁寧に、店で買うケーキでよく見るクリームの飾りまであるよ。花とかよく作れるよな。多分理奈から習ったな。

「いただきます」

同封されてたフォークを手に取り、一口食べた。

「どう…かな…？」

「……うん」

理奈直伝ってのもあるけど、月沙が一生懸命作ってくれたケーキだ。

「美味い」

不味いわけねえだろ？

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

番外編　カオス・バレンタイン（後編）（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「復活したから、今回からはまた私達がこのコーナーを担当するわ」

勇香「いや～、我ながらあれはないな。途中から何入れたか覚えてないし」

フィレス『グルルルル…』

ロコナ『ねえ、あの猪虎霊塗って武器になるの？』

璃音「食べさせる事ができれば、おそらく一撃必殺ね」

勇香「使う事前提かよ！？もう捨てようぜ！あれはマジでやばいから！」

璃音「でも、あそこまでやったんだからただ捨てるのももったいないわね…」

勇香「もったいなくねえよ！」

璃音「それは置いといて、新しい召喚方法の情報が正式に出たわね」

勇香「ああ、エクシーズ召喚の事か？同じレベルのモンスターを2体重ねて召喚するって奴だろ？レベルがランクに変わるからシンク

ロ素材にできねえのがな…」

ロコナ『へ～。どんなモンスターが出てくるのかな？』

璃音「まだそんなに多くは発表されてないわよ。まあ、もしかしたら私達の内の誰かがエクシーズ召喚を使えるようになるかもしれないわね」

勇香「え、マジで…？」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『感想待ってま～す！』

勇香「次回も見てくれよな！…何か久しぶりだな、これ…」

――――――――――――――

いかがでしたか？

前回に引き続き、言羽・D・カタストロフィーさんの『遊戯王GX　百合キング、綾風理奈が吹かせる王者の鼓動。』より主人公の綾風理奈とレギュラーの綾風七乃に、機皇帝プラシド∞さんの『遊戯王　～絶望と希望の神々の物語～』よりレギュラーのロキとトールにゲスト出演していただきました。言羽・D・カタストロフィーさん、機皇帝プラシド∞さん、ありがとうございました。

やっと番外編を終わらせる事ができました（２０１１年２月２４

日）。インフルエンザにかかるとろくな事がありませんね…。

体調は回復しましたが、まだ試験が残っているので次回の更新も遅くなりそうです。とりあえず、次回からは本編に入ります。

最後に、言羽・D・カタストロフィー さんの『遊戯王GX　百合キング、綾風理奈が吹かせる王者の鼓動。』と機皇帝プラシド∞さんの『遊戯王　～絶望と希望の神々の物語～』も是非読んでみてください。

では、また次回！

第５３話　怪しい団体の勧誘は断れ（前書き）

今回はデュエルが２回入ります。内容は少し鬼かもしれませんが……。

それではどうぞ！

第５３話　怪しい団体の勧誘は断れ

ＳＩＤＥ／ルーナ

「これで終わりね」

「おぅ、お疲れ」

やる事を全部終えた私は、床にそのまま腰を下ろした。

いや、何か破滅の光に洗脳された生徒が増えてきて、寮が丸々真っ白になっちゃったのよ。女子寮も同じ現象が出てきたし、『一緒に暮らしてたら洗脳されかねない』っていう秋斗の助言で、私は一時的に引っ越しをする事になった。

引っ越し先はレッド寮にある勇香の部屋。元々レッドには女子が勇香１人しかいないって事で、泊まる場所がない私は自動的に勇香の部屋に引っ越す事が決まった。

で、今荷物を全部運んで整理を終わらせたところ。勇香も手伝ってくれたから、案外早く終わったわ。

「お前も災難だな。破滅の光の侵食のせいで引っ越さなきゃいけねえなんて」

「気にしてないわよ。複数人で過ごした方が楽しいし」

昔だったらこんなの夢のまた夢よ。勇香達と出会って、私もずい

ぶん変わったわね。

「言えてら。よし、購買にジュースでも買いに行こうぜ。喉渇いたろ？」

「そうね。じゃ、行きましょっか」

私達は整理したばかりの部屋を出て、ゆっくり購買に向かった。

購買に到着。ジュースのついでに菓子パンでも買おうかしら？ストックも減ってきたし。

「ん？あいつら…」

購買には既に先客がいた。秋斗と十代だ。意外な組み合わせね。

「秋斗、十代！」

「ん？あ、ルーナ、勇香！」

「…お前らか」

「珍しいわね、あんた達が一緒にいるなんて」

「たまたま会っただけだ」

秋斗は相変わらずぶっきらぼうな態度を取って、オレンジジュース入りのペットボトルに口をつける。全く、少しはコミュニケーションを大事にしなさいよ。

「あ、そうだ！秋斗、せっかく会ったんだし、デュエルしようぜ！」

「断る。めんどくさい」

「そんな事言うなよ…」

あ、言い忘れてたけど、十代はこの通り戻ってきたわよ。新しくネオスペーシアンと《Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス》を手に入れてね。レッド寮の取り壊しを賭けたデュエルをするって話があって、その時に戻って早々エドと再戦してリベンジを果たしたわ。それにしても…あのネオスってモンスター、私の《フェニックス・ギア・フリード》と似た感じがしたんだけど気のせいかしら？

とにかく、クロノス先生もレッド側についた事もあって、レッド寮はこれからも存続する事になったわ。勇香達が気に入ってる寮がなくなるのは私としても嫌だし、解決してよかったわ。

でも、いい事ばかりじゃない。あの鳥頭（万丈目）が明日香に喧嘩吹っ掛けたせいで、明日香まで光の結社に入っちゃったのよ。そのせいで女子寮まで制圧しに来たし、鳥頭が元に戻ったら１発お灸を据えてやらなきゃならないわね。悪いのは破滅の光だけど。

「だったら、丁度４人いる事だし、タッグデュエルにしないか？」

「あ、いいわねそれ！」

「おい、俺はやらないと…」

「それじゃ、早速デュエル場に行こうぜ！」

「ちょっと待って。先に飲み物買わせてくれない？私達本来はそれが目的で来たから」

「いいぜ。早くしろよ」

秋斗は無視して、勇香の提案を強引に実行するわよ。こうでもしないと孤立したままになるじゃない。あ、りんごジュース買おっと。

「ハァ…どうしてこう毎回毎回…」

「バーロー、いつまでも独りでいようとすんな。ほら、これやるよ」

「全く…」

先に買い物を済ませた勇香がついでに買った豆パンを投げ、秋斗は何だかんだ言いつつもそれを受け取った。

「トメさん、これお願いします」

「あいよ」

私はレジにりんごジュースと合わせて大量の菓子パンを置いた。それを見て秋斗が若干顔を引き攣らせる。

「お前…そんなに食うのか？」

「買い溜めよ。毎日食べるから一遍に買った方が楽でしょ？はい、代金」

「はい、毎度。ちゃんと野菜も取らなきゃ駄目よ？」

「平気ですよ、これはおやつみたいな物なんで。ありがとうございました」

「お前、結構食うんだな…」

勇香が苦笑いして菓子パンが大量に入ったレジ袋を見つめた。美味しいんだから別にいいでしょ？

「さ、行きましょっか」

私は秋斗が逃げないように腕をしっかり掴んだ。

「またか…」

「ほっといたら逃げるでしょ？」

秋斗はうんざりしてるみたいだけど、私達は構いすぎなのかな？嫌われるのは私達も嫌だし、人付き合いってやっぱり難しいわね。

「待て！」

廊下に入った途端、後ろから誰かに呼び止められた。

振り返ると、いつの間にか白い集団が立っていた。

「万丈目、明日香！」

「ホワイトサンダーと呼べ！」

白い制服を着た生徒をぞろぞろ連れてきたのは、洗脳された万丈目と明日香だった。

「そんなに大勢で来て何の用？」

「斎王様の命令だ。九条院ルーナ、星御秋斗、貴様らを光の結社に引き入れに来た」

「パスで」

「断る」

私と秋斗は即答で断った。断る以外に答えなんてあるの？

「そう言うと思ったわ。もちろん問答無用で引き入れるわけじゃないわ。私と万丈目君とあなた達でデュエルして、あなた達が勝ったら見逃してあげる」

「相手は私じゃねえのかよ？」

「何だ、つまんねえ」

「あんた達、楽観的でいいわね…」

勇香と十代は熱血の部類だからそんな考えができるのよ。私からしたらいい迷惑だわ。

「どうせ後々も勧誘に来るだろうが…いいだろう、受けてやるよ」

「俺の時は散々渋ってたくせに…」

「事情が事情だ」

「決まりだな。デュエル場に行くぞ」

「仕方ないわね…」

この様子じゃ、逃がしてくれそうにないわね。私達は仕方なく万丈目達に連れられてデュエル場に向かった。

デュエル場に着くと、今じゃよく見慣れた人がいた。

「あ、ディヴァイン先生！」

「おや？どうしたんだい？そんなに大勢で来て」

そう、私の担任のディヴァイン先生だ。

「私と秋斗が明日香と万丈目とデュエルする事になって…」

「そういうわけだ、ここは使わせてもらうぞ」

万丈目達はそれだけ言って先に行ってしまった。フィールドには明日香が上がった。

「デュエルって…彼らは破滅の光に洗脳されているんだろう？伝染したらどうする？」

「心配するな、赤骨川。いくら明日香と万丈目が相手でも、洗脳されている奴に負けるほど俺達は甘くない」

「誰が赤骨川だ。髪か？私の髪の事を言っているのか？」

「最初に私とルーナ、次に秋斗と万丈目君でデュエルするわよ」

静かにキレる先生を余所に、明日香がルール説明をした。ていうか、秋斗って案外ボケるのね。

「タッグじゃないの？」

「そう焦るな。楽しみはできるだけ長引かせるものだ」

「そういう問題？」

「さあ、早く準備しなさい」

明日香はもうフィールドに立っている。仕方ない、やるしかないわね。

「勇香、これ持ってて」

「ＯＫ。行ってこい！」

「全く…負けたら承知しないからな」

「大丈夫よ、スネちゃま先生。じゃ、行ってきます！」

「何でスネちゃま!?どれだけスネ〇ネタを出すつもりだ!?」

私は勇香に菓子パン入りの袋とりんごジュースのペットボトルを預けて、ツッコむ先生を無視してフィールドに上がった。月沙は『洗脳を解除するのは十代に任せた方がいい』って言ってたけど、ここで私がやっても別にいいわよね？

デュエルディスクを展開させると、デッキが自動でシャッフルされた。璃音が改造してくれたけど、結構便利よね。

「それじゃ、行くわよ！」

「ええ、始めましょう」

「「デュエル！」」

ルーナｖｓ明日香

「先攻は貰うわ！私のターン！儀式魔法《機械天使の儀式》を発動！」

「儀式魔法…！」

「サイバー・エンジェルの儀式召喚に必要なカードよ」

《機械天使の儀式》
儀式魔法（ＴＦ２オリジナル）
「サイバー・エンジェル」と名のついた儀式モンスターの降臨に必要。
手札・自分フィールド上から、レベルの合計が儀式召喚するモンスターと同じになるようにモンスターをリリースしなければならない。

「手札から《サイバー・プリマ》を生け贄に捧げ、《サイバー・エンジェル－韋駄天－》を儀式召喚！」

《サイバー・プリマ》
効果モンスター
星６／光属性／戦士族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ１６００
このカードの生け贄召喚に成功した時、
フィールド上に表側表示で存在する魔法カードを全て破壊する。

早速サイバーエンジェルが出てきたわね。確か、魔法カードを回収する効果を持っていたはず…。

《サイバー・エンジェル－韋駄天－》
儀式モンスター（ＴＦ２オリジナル）
星６／光属性／天使族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ２０００

「機械天使の儀式」により降臨。
このカードが特殊召喚に成功した時、自分の墓地から魔法カード１枚を手札に加える。

《サイバー・エンジェル－韋駄天－》　ＤＥＦ／２０００

「韋駄天が特殊召喚に成功した時、自分の墓地から魔法カードを１枚手札に加える！《機械天使の儀式》を手札に！カードを１枚セットしてターンエンド！」

明日香
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《サイバー・エンジェル－韋駄天－》（ＤＥＦ／２０００）
魔法・罠／リバース×１

「なるほど…使用済みの儀式魔法を回収して次に繋げるつもりか」

「行くわよ！私のターン！」

守備力２０００か…。これなら何とかなりそうね。

「魔法カード《強欲な壺》！カードを２枚ドローする！そして魔法カード《天使の施し》を発動！カードを３枚ドローし、手札を２枚捨てる！さらに永続魔法《未来融合－フューチャー・フュージョン－》を発動！エクストラデッキの融合モンスター１体を選択し、その融合素材をデッキから墓地に送る！」

《未来融合－フューチャー・フュージョン》

永続魔法（制限カード）
自分のエクストラデッキに存在する融合モンスター1体をお互いに確認し、決められた融合素材モンスターを自分のデッキから墓地へ送る。
発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時に、確認した融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。
このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「私は《超合魔獣ラプテノス》を選択！」

《超合魔獣ラプテノス》
融合・効果モンスター
星8／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２２００／ＤＥＦ２２００
デュアルモンスター×2
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する通常モンスター扱いのデュアルモンスターは再度召喚された状態になる。

「融合素材はデュアルモンスター2体！デッキからデュアルモンスターの《フェニックス・ギア・フリード》と《チューンド・マジシャン》を墓地に送るわ！」

【デュアル】なら《おろかな埋葬》よりこっちを使った方がお得よね。ラプテノスはフィールドに出ても強いけど。

「そして、魔法カード《思い出のブランコ》！」

「そのカードは…！」

「墓地から通常モンスター1体を特殊召喚する！」

《思い出のブランコ》
通常魔法
自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズ時に破壊される。

デュアルモンスターは墓地で通常モンスターとして扱われるカテゴリ。通常モンスターのサポートとは相性抜群よ。

「現れろ！《フェニックス・ギア・フリード》！」

白い甲冑を身につけた鳳凰の騎士が颯爽と現れる。今回も頼んだわよ！

《フェニックス・ギア・フリード》　ＡＴＫ／２８００

「そして装備魔法（スーペルヴィス）を装備！これで《フェニックス・ギア・フリード》は再度召喚された状態になるわ！」

「《スーペルヴィス》の蘇生効果で、擬似的に破壊耐性をつけたわけね…」

それがこのカードの強みの1つだけどね。今回はそんな使い方しないけど。

「わざわざ破壊されるのを待つ必要なんてないわよ」

「え？」

「墓地の攻撃力０のモンスター《ゼロ・ガードナー》と《速攻のかかし》を除外し、チューナーモンスター《無から生まれし者》を特殊召喚！」

体の所々が塵になっている桃色の妖精が現れた。このモンスターの力を今から見せてあげる！

《無から生まれし者》
効果モンスター（チューナー・オリジナル）
星１／光属性／天使族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
このモンスターは通常召喚することができない。
自分の墓地に存在する攻撃力０のモンスター２体を除外する事で手札、または墓地から特殊召喚することができる。
このカードがシンクロ召喚に使用される時、他のシンクロ素材１体のレベルを１つ下げる。
このモンスターをシンクロ素材としたシンクロ召喚に成功した時、フィールド上の表側表示モンスター１体の攻撃力・守備力をエンドフェイズ時まで０にする。

《無から生まれし者》　ＡＴＫ／　０

「ここでチューナーなんか出してどうするつもり？この状況からレベル７のモンスターは出せるのかしら？」

「お生憎様。この子はシンクロ素材になる時に他のシンクロ素材のレベルを１つ下げるのよ！」

「え！？」

「レベルを下げるだと！？」

明日香も万丈目もあんなに驚いちゃって。周りも騒がしくなってきたわね。

「続けるわよ！レベル７《フェニックス・ギア・フリード》にレベル１《無から生まれし者》をチューニング！」《フェニックス・ギア・フリード》　☆８→７

朱色の輪が１つと星が７つ。空中で共鳴して光の柱になる。

「虚無と漆黒を重ねし魂、朱の灯火を宿し双炎と為せ！」

☆７＋☆１＝☆８

「シンクロ召喚！轟誕せよ！《ブラック・ブルドラゴ》！」

黒い巨体がフィールドを揺らす。私のドラゴンが赤い瞳で韋駄天を睨みつけた。

《ブラック・ブルドラゴ》　ＡＴＫ／３０００

「攻撃力３０００…！」

「《無から生まれし者》の効果発動！シンクロ素材になった時、フィールド上のモンスター１体の攻撃力と守備力を０にする！」

「え！？」

韋駄天が桃色の光に包まれ、体が塵になり始めた。

《サイバー・エンジェル－韋駄天－》　ＤＥＦ／２０００↓　０

「さらに、《スーペルヴィス》の効果発動！フィールドから墓地に送られた時、墓地から通常モンスターを特殊召喚する！蘇れ、《フェニックス・ギア・フリード》！」

床から朱色の炎が噴き出し、中からフリードが姿を現した。これで完全蘇生ね。

《フェニックス・ギア・フリード》　ＡＴＫ／２８００

「《思い出のブランコ》で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊されちまう。上手くデメリットを回避したな」

「よっしゃ！行け、ルーナ！」

「そして、《ブラック・ブルドラゴ》の効果発動！１ターンに１度、手札からデュアルモンスター１体を墓地に送り、相手の裏側の魔法・罠１枚を破壊する！《エヴォルテクター　シュバリエ》を墓地に送り、伏せカードを破壊！リド・ザ・フレイム！」

《ブラック・ブルドラゴ》が地面を殴りつけ、炎の衝撃波で伏せカードを破壊した。《魔法の筒》か…危ない危ない。

「く…でも、このターンは…」

「まだよ！装備魔法（ビッグバン・シュート）を《フェニックス・ギア・フリード》に装備！攻撃力を４００ポイントアップさせ、貫通効果を与える！」

《フェニックス・ギア・フリード》　ＡＴＫ／２８００→３２００

「そんな！？」

「バトル！《フェニックス・ギア・フリード》で《サイバー・エンジェル－韋駄天－》を攻撃！鳳凰炎刃！」

フリードが大剣に炎を纏わせ、韋駄天を縦に斬り裂いた。

「ぐぅっ！」

明日香　ＬＰ／４０００→　８００

「《ブラック・ブルドラゴ》でダイレクトアタック！デュアリング・フレア！」

ブルドラゴが口から巨大な朱色の火球を飛ばし、明日香の残りライフを根こそぎ焼き尽くした。

「きゃあぁぁぁぁぁぁ！！」

明日香　ＬＰ／　８００→　０

ルーナ　ＷＩＮ

よし、勝った！…って…あれ？これって…。

「……あ、あれ…？」

もしかして…1ターンキル？

「そんな…この私が、1ターンキルで負けるなんて…」

明日香はもちろん、この場にいる全員が唖然としている。

…いや、ないない。これはない。だってあの明日香よ？アカデミアの女王と呼ばれるほどの女子生徒のエースよ？そんな人相手に私なんかが1ターンキルなんてありえないでしょ？

「天上院君、大丈夫か！？」

「え、ええ…。迂闊だったわ。あれほどの実力を持っているなんて…」

万丈目がフィールドに上がって明日香に話し掛ける。あ、そうだ、明日香は洗脳されてるんだっけ。だから本来の力を出せないのよ。そうよ、そうに決まってる！漫画とかでもたまにあるでしょ、そういう展開！そうじゃなきゃ私が明日香相手に1ターンキルなんてできないって！よし、そういう事にしよう！ていうかそうであってお願いだから！

「あ…明日香、何ていうか…ごめん」

私はとりあえず明日香に一言謝ってからフィールドを下りた。

「ルーナ…確かに私は『行ってこい』っつったよ？言ったけど…早

すぎね？」

「や、洗脳されてるから本来の力を出せないのよ。きっとそう。それ以外ありえないって」

「どんだけ消極的なんだよ…」

「すっげえな、ルーナ！明日香を1ターンで倒すなんて」

「十代、あんたは純粋でいいわね…」

全く…その純粋さを分けてほしいわ…。

「ルーナ、ほら」

「あ、ありがと」

とりあえず、私は勇香から菓子パン入りの袋を返してもらった。

ＳＩＤＥ／秋斗

ルーナは難なく明日香を倒したようだ。洗脳されている以上、あれぐらいやっても構わないだろ。

「しかし、デュエルに勝ったとはいえ洗脳が解ける様子はないな。

1ターンで終わらせてしまったのが駄目だったか？」

ディヴァインは冷静に状況を分析している。なら何か？デュエルを長引かせて勝てとでも言うのか？

「まあいい。洗脳が解けようが解けまいが、俺はただ倒すだけだ。行ってくる」

「へまやらかすなよ」

「誰がするか」

勇香に一言で返事を返し、俺はフィールドに上がろうとした。…が、何となく振り返った。

「ルーナ」

「何よ？」

ルーナは少し顔をしかめて俺を見ている。少し不機嫌そうな口調は、本人に悪気はない。こいつのただの癖だ。

「さっきのデュエル、1ターンキルをしたのは１００％お前の実力だ。あまり後ろ向きに考えるな」

「え？…そ、そう…」

俺がそんな事を言うと思ってなかったのか、ルーナは目を丸くして短く返事をした。

…どうも、こいつは『あいつ』に似ている。消えてからもう数年になる。どこで何をしてるんだか…。

昔を思い返すなら後でもいいか。俺はフィールドに上がり、既に準備を終えた万丈目と対峙した。明日香はフィールドから下りている。

「天上院君の仇は取らせてもらうぞ」

「俺がやったわけじゃないだろ。だが…」

俺は一旦言葉を切って、ディスクを展開させた。デッキが自動でシャッフルされる。

「今のお前達は気に入らねえ。叩き潰してやるよ」

「ちっ、減らず口を…！始めるぞ！」

「「デュエル！」」

秋斗ｖｓ万丈目

「お前らから押し掛けてきたんだ。先攻は貰うぞ」

「勝手にしろ！」

「俺のターン。モンスターをセット。カードを1枚セットしてターンエンド」

秋斗

ＬＰ／４０００
手札／４
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×１

「俺のターン！《アームド・ドラゴン　ＬＶ３》を召喚！」

淡い色の小さな龍。レベルモンスターか…。

《アームド・ドラゴン　ＬＶ３》　ＡＴＫ／１２００

「そして魔法カード《レベルアップ！》を発動！アームド・ドラゴンをＬＶ５へと進化させる！」

アームド・ドラゴンが成長し、ずんぐりとした体型になった。

《アームド・ドラゴン　ＬＶ５》　ＡＴＫ／２４００

「まだだ！もう１枚《レベルアップ！》を発動！」

「２枚目か…」

「アームド・ドラゴンをさらに成長させる！出でよ、《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》！」

さらなる成長を果たし、銀の鎧を着た武装龍へと姿を変えた。１ターンで２段階成長させるとはな。

《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》　ＡＴＫ／２８００

「さらに装備魔法《白のヴェール》を《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》に装備！」

アームド・ドラゴンに白いオーラが纏わりつく。光の結社に入ってから使うようになったカードか…。

《白のヴェール》
装備魔法（アニメオリジナル）
装備モンスターが攻撃する場合、相手フィールド上に存在する全ての魔法・罠カードの効果を無効にし、破壊する。
装備モンスターが破壊された時、自分は装備モンスターの攻撃力分のダメージを受ける。

「効果は知っているな？これでお前も白く染まるがいい！《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》で伏せモンスターに攻撃！この時、《白のヴェール》の効果で相手の魔法・罠の効果を無効にして破壊する！アームド・ヴァニッシャー！」

武装龍の一撃で伏せモンスターが破壊され、伏せカードも道連れになった。この程度、くれてやる。

「破壊されたのは《見習い魔術師》だ。戦闘で破壊された時、デッキからレベル２以下の魔法使い族モンスターをセットする」

《見習い魔術師》
効果モンスター
星２／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ　４００／ＤＥＦ　８００
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上に表側表示で存在する魔力カウンターを置く事ができるカード１枚に魔力カウンターを１つ置く。

このカードが戦闘によって破壊された場合、自分のデッキからレベル２以下の魔法使い族モンスター１体を自分フィールド上にセットする事ができる。

「《ナイトエンド・ソーサラー》をセット」

「リクルーターにチューナーか…面倒な…！カードを２枚セットしてターンエンドだ！」

万丈目
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／リバース×２

「（伏せたのはミラーフォースと《魔宮の賄賂》。抜かりはない）」

「いきなり大物が出たわね…」

「な～に、秋斗なら突破できるさ！あいつがそう簡単にやられるかっての！」

「私達はただ信じて見守るのみだ。まあ、勇香の言う通り、あれしきで押し切られるとは思えないが…」

「俺のターン」

…なるほど、そう来たか。なら、勇香とディヴァインの期待に応えて…このターンで終わらせる。

「手札から、《マジカル・コンダクター》を召喚」

水色の長い服を着た、黒い長髪の魔術師が現れる。

《マジカル・コンダクター》
効果モンスター
星４／地属性／魔法使い族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ１４００
自分または相手が魔法カードを発動する度に、このカードに魔力カウンターを２つ置く。
このカードに乗っている魔力カウンターを任意の個数取り除く事で、取り除いた数と同じレベルの魔法使い族モンスター１体を、手札または自分の墓地から特殊召喚する。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

《マジカル・コンダクター》　ＡＴＫ／１７００

「そんなモンスターを出して何になる？」

「侮るな。魔法カード《強欲な壺》を発動。カードを２枚ドローする。そして、《マジカル・コンダクター》の効果発動。魔法カードが発動する度に、自身に魔力カウンターを２つ乗せる」

《マジカル・コンダクター》　Ｍ／０→２

「速攻魔法（サイクロン）。魔法・罠を１枚破壊する。右の伏せカードを破壊」

「（ミラーフォースが…！）カウンター罠《魔宮の賄賂》を発動！魔法・罠を無効にして破壊する！《サイクロン》は無効だ！代わりに１枚ドローするがいい」

わざわざ守ったという事は、重要なカードだという事か。だが、召喚が無効にされなければ終わりだ。

引いたカードは…丁度いい。

「魔法カード《魔力掌握》。《マジカル・コンダクター》に魔力カウンターを1つ乗せ、さらに同名カードをデッキから手札に加える。《マジカル・コンダクター》自身の効果も合わせて、合計3つだ」

《マジカル・コンダクター》　M／2→3→5

「どんなに魔力カウンターを溜めても雑魚は雑魚だ！」

「その雑魚がこのデュエルの決め手になる。意味もなく溜めたとでも思っているのか？」

「何？」

「魔法カード《マジック・スタンプ》。魔力カウンターを任意の数取り除き、その分だけ手札の魔法使い族モンスター1体のレベルを下げる」

《マジック・スタンプ》
通常魔法（オリジナル）
手札の魔法使い族モンスター1体を選択して発動する。
自分フィールド上の魔力カウンターを任意の数取り除き、取り除いた魔力カウンター1つにつき選択したモンスターのレベルを1つ下げる。

「《マジカル・コンダクター》に乗せられている魔力カウンターを

3つ取り除く事で、手札の《神聖魔導王　エンディミオン》のレベルを3つ下げる」

《マジカル・コンダクター》　M／5→2

《神聖魔導王　エンディミオン》　☆7→4

「手札の最上級モンスターのレベルを下げるだと！？」

「そして、魔法カードが発動した事でコンダクターに魔力カウンターが2つ乗る」

《マジカル・コンダクター》　M／2→4

「魔法カード《二重召喚》。このターン、俺は2回通常召喚できる。コンダクターには、さらに魔力カウンターが2つ乗る」

《マジカル・コンダクター》　M／4→6

「レベル4になった《神聖魔導王　エンディミオン》を召喚！」

俺が召喚したのは、黒い法衣を身に纏った魔術師の王だ。

《神聖魔導王　エンディミオン》　ＡＴＫ／２７００

「効果発動。手札の魔法カードを1枚捨てる事で、フィールド上のカード1枚を破壊する」

「何！？」

「手札の《魔力掌握》を捨て、《アームド・ドラゴン　ＬＶ７》を破壊する。ロード・ブレイク！」

エンディミオンが杖から紫の光線を放ち、アームド・ドラゴンを貫き破壊した。

「《白のヴェール》を装備したモンスターが破壊された時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを受けるんだったよな？」

「しまった…！ぐあぁっ！」

武装龍に纏わりついていた白いオーラが主を包み、反逆のダメージを浴びせる。この手のカードにあるデメリットは相手に利用されがちだ。使うタイミングを間違えたな。

万丈目　ＬＰ／４０００→１２００

「ライフを一気に削りやがった！」

「念のためだ。《マジカル・コンダクター》の効果発動。１ターンに１度、自身の魔力カウンターを任意の数取り除く事で、その分と同じレベルの魔法使い族を手札か墓地から特殊召喚できる」

「そんな効果まで持っているのか！？」

「魔力カウンターを２つ取り除き、墓地の《見習い魔術師》を特殊召喚する」

《マジカル・コンダクター》　Ｍ／６→４

紫の服を着た金髪の魔術師が蘇る。リクルーターとしてなかなか使える奴だ。

《見習い魔術師》　ＡＴＫ／　４００

「《見習い魔術師》は召喚・反転召喚・特殊召喚された時に魔力カウンターを１つ作り出す。乗せるのは《マジカル・コンダクター》だ」

《マジカル・コンダクター》　Ｍ／４→５

「そして《ナイトエンド・ソーサラー》を反転召喚」

さっきまで伏せられていた大鎌使いの少年が飛び出した。

《ナイトエンド・ソーサラー》　ＡＴＫ／１２００

「レベル４《神聖魔導王　エンディミオン》とレベル２《見習い魔術師》にレベル２《ナイトエンド・ソーサラー》をチューニング」

２つの紺色の輪を王と見習いが潜り、合計６つの星になる。

「魔の書に記されし龍の章よ、漆黒の霊槍で闇夜を突け！」

☆６＋☆２＝☆８

「シンクロ召喚！湧出せよ！《魔導竜　レイヴェルト》！！」

黒い魔力の槍と丸い盾を持つ紺色の龍が現れた。俺のエースモンスターだ。

《魔導竜　レイヴェルト》　ＡＴＫ／２７００

「な…まさか！？」

「そのまさかだ。レイヴェルトの効果発動！手札から魔法・罠を１枚墓地に送り、相手の魔法・罠１枚を破壊する！手札から《ミスト・ボディ》を墓地に送り、伏せカードを破壊する！黒焔葬破！」

レイヴェルトが吐き出す黒い炎が、最後の伏せカードを焼き尽くした。ミラーフォース…ありきたりな…。

万丈目のフィールドはがら空き。終わったな。

「運がなかったな。《魔導竜　レイヴェルト》でダイレクトアタック！ラグナ・エンド・フェンサー！」

槍の選択に魔力が集まり、漆黒の砲撃が放たれた。防ぐ術はない。

「ぐわあぁあぁぁ！！」

万丈目　ＬＰ／１８００→　０

秋斗　ＷＩＮ

終わりか。俺も案外早かったな。

「もういいだろ？俺もルーナも勝った。勧誘の話はなしにしてもらう」

「ぐ…！今日のところは見逃してやる！次は必ず勝つ！」

「もう来るな。めんどくさい」

俺の言葉を無視し、万丈目はずかずかとフィールドを下りていった。俺も気にせずにフィールドを下りた。

「すまない。負けてしまった…」

「仕方ないわね。まさか、私と万丈目君がこうもあっさり負けるとは思わなかったわ」

「お前達！引き上げるぞ！」

万丈目と明日香達はさっさとデュエル場から出ていった。光の結社に入っている内は二度と来るな。リベンジしたけりゃ正気に戻ってからにしろ。

俺はどうも腑抜けや洗脳された奴と戦う事が多いようだ。授業はあるものの、作者ももう少しまともなデュエルをさせてくれ…。

「終わったぞ」

「お前も十分早えなオイ」

「万丈目相手によくあっさり勝てるわね…」

「人の事は言えないだろ？秋斗、よく無事で帰ってきたな」

「やっぱ凄えな、お前ら！ガッチャ！２人共いいデュエルだったぜ

！」

俺を迎えた４人は別々の反応を見せた。十代が底抜けに明るい。

「まあ、ありがと…」

「手札がよかっただけだ」

「しかし、洗脳は解けなかったな…。先攻２ターン目で決めても駄目なようだ」

「ま、いつ来ても返り討ちにしてやるだけだ！光の結社なんざぶちのめしてやらぁ！」

「その意気だぜ！」

訂正。勇香も底抜けに明るい。似た者どうしが…。

『あの～…』

『マスター達、ちょっといいですか～？』

突然、ルリアとナージャがカードから出てきた。何の用だ？

「ナージャ、ルリア？」

「どうした？」

『私達の出番って、なしですか…？』

「「……」」

ああ、そういえば今回は出番がなかったな…。２人の視線が地味に痛い。そんなに出たかったのか？

「出る幕なかったわね…」

「わざわざお前達の力を借りる必要もなかった。それだけの話だ」

「いや、明日香と万丈目に失礼じゃね？」

『ですが…』

「あ、私荷物置きに行かないと。先に帰ってるわね」

「疲れた。帰る」

『ええ！？マスター！？』

『私達出番なし？あれ？ちょっと～、マスター～！？』

俺とルーナは気まずい空気から逃れるために、さっさと寮に帰る事にした。ルリアには後で何かやるか。

「行っちまったな…」

「あ、タッグデュエルしないのかよ！？」

『うぅ…せっかくのマスター達の本編２回目のデュエルなのに…』

『な～んか腑に落ちないわね～…』

「まあまあ、次があるじゃないか。後メタ発言は止した方が…」

『うっさい。アカデミアの正面玄関で箒持って「レレレのレ～」でもやってれば？』

「それは違うだろ！？確かにおじさんだけれども！」

『ナージャさんは相変わらず毒舌ですね…』

「…十代、今からシングルでデュエルしねえか？」

「お、いいな！ルーナと秋斗はもう帰っちまったけど、早速やろうぜ！」

「君達は本当に元気だな…」

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第５３話　怪しい団体の勧誘は断れ（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「今回のデュエルは早かったわね」

勇香「ルーナは1キルするし、秋斗も2ターンで終わらせたもんな…」

フィレス『ガウルルッ』

ロコナ『るりあとなーじゃは出番なかったね…』

勇香「うん、出る間もなく終わったもんな…。デュエルが2回まとめて1話分に収まるとなぜか1キルかそれに近い内容になっちまうな…。どうにかなんねえのか、あれ？」

璃音「まあ、仕方ないわよ。さ、久々にカード考察をしましょうか。今回紹介するのは、秋斗が使用した魔法使い族モンスター《マジカル・コンダクター》よ」

《マジカル・コンダクター》
効果モンスター
星４／地属性／魔法使い族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ１４００
自分または相手が魔法カードを発動する度に、このカードに魔力カウンターを２つ置く。
このカードに乗っている魔力カウンターを任意の個数取り除く事で、取り除いた数と同じレベルの魔法使い族モンスター１体を、手札ま

たは自分の墓地から特殊召喚する。
この効果は1ターンに1度しか使用できない。

璃音「魔法カードが発動する度に魔力カウンターを2つ溜める効果を持っているわ」

勇香「相手の魔法でも発動するってのが便利だよな」

ロコナ『アキトみたいに、溜まった魔力カウンターを別の効果のために使うのもいいかも！』

璃音「魔力カウンターを取り除けば、取り除いた数と同じレベルの魔法使い族を手札か墓地から特殊召喚できるわよ。チューナーを呼び出せば、速攻でシンクロ召喚できるわ」

勇香「レベル4の魔法使い族を呼び出してエクシーズ召喚ってのもありだな。レベル4までなら割と出しやすいし、《魔法都市エンディミオン》を使って肩代わりもいいんじゃないか？こいつ自身が破壊されないように、対策は立てとけよ。魔法都市がなけりゃ、全部パアになっちまうからな」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『感想待ってま～す！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

今回ルーナが使用した《無から生まれし者》はＢＲＡＶＥさんが、《マジック・スタンプ》は湊クレナイさんが投稿してくださったオリカです。ＢＲＡＶＥさん、湊クレナイさん、ありがとうございました。

あれ？更新遅くなるって言ったのに案外早く更新できた…？ペースってよくわからないものですね。とりあえず、明後日の定期考査を乗り切れば完全復活という事で…。

相手が明日香と万丈目なのに速攻で終わってしまいました。書いてる内になぜかこんな事に…。

では、また次回！

第５４話　Ｄ・ホイールはデザインしにくい（前書き）

ようやく完全復活しました。第５４話です。

サブタイトルはこんな感じですけど、Ｄ・ホイールメインの話ではありません。今回は後輩ラストがシリアスです。

それではどうぞ！

第５４話　Ｄ・ホイールはデザインしにくい

ＳＩＤＥ／月沙

「紅刃！」

「ん？月沙？」

私は、たった今遊星達のガレージから出てきた紅刃に声を掛けた。

「制作の調子はどう？」

「ああ、順調だ。今遊星とブルーノと璃音が造ってるところで、そろそろ完成するってさ」

「そっか」

紅刃達はこの際だからという事でデザインも一新するって決めたから、デザインは紅刃や私、他のみんなも一緒になって設計したの。設計が終わった後は紅刃達４人で造ってるんだけど、紅刃は途中からついていけなくなったみたいで、今は遊星、ブルーノ、璃音が造ってる。遊星達３人はメカのエキスパートだからね。

「で、これからどうするの？」

「そうだな…やる事ねえし…いつも通り剣の修行か？」

「毎日やってるもんね」

紅刃は毎日剣術の鍛練をしている。『しばらくやらないと腕が落ちる』っていうのが本人の持論だけど、確かにそうだよね。

「あ、そうだ！」

「何だ？」

「今から加奈美に会いに行かない？」

「そろそろ時間だな」

私達は噴水広場で加奈美を待っている。さっき電話したら、ここで会う事になったの。

「そういや、しばらくあいつには会ってねえな」

「冬休みは家族で旅行に行ってたから会えなかったもんね」

最後に会ったのは過去に行く前だっけ。懐かしいな…。

「月沙ちゃん！真川君！」

紅刃と話をしていると、突然後ろから声を掛けられた。

「お、来たか！」

若草色のセミロングの髪な緑の瞳。アカデミアの制服を着ている。
私と紅刃、将人とは旧知の仲。

「加奈美！」

檜山加奈美（ひやまかなみ）。中学からの友達が時間通りにやってきた。

「久しぶり！もう少し早く連絡入れてくれたってよかったのに…」

「悪い悪い、D・ホイールでちょっといろいろあったもんだから…」

「D・ホイール？」

「紅刃のD・ホイールが粉々に壊れちゃったから、遊星達が新しく造ってくれる事になったの」

「え！？何で壊れちゃったの！？」

まあ、バイクが粉々になるなんて状況はあまり考えられないよね。

「スピードの出しすぎでD・ホイールが耐えられなくなっちまって

…」

「え、それって運転中に壊れたって事だよね！？怪我しなかったの！？」

「ああ、大丈夫。軽傷で済んだしすぐに治ったから」

「よくないよ！ちゃんと安全運転しないと！」

「いや、これには理由があるんだよ！」

心配性なのは相変わらずだね。紅刃が困ってるし、助け船を出してあげよ。

「とりあえず、立ち話もあれだから、どこか適当な所に寄ってこうよ」

「あ、ああ、そうだな」

「だったらあそこにしない？」

加奈美が指差したのは、遊星達の家の向かい側にある『ＣＡＦＥ　ＬＡ　ＧＥＥＮ』だった。

「あ、アクセルシンクロの練習だったんだ…」

「知ってるのか？」

「不動君から聞いてるから。私にはスピードを限界以上まで出すなんて無理だよ…」

「あはは…」

私達は『ＣＡＦＥ　ＬＡ　ＧＥＥＮ』で屋外の席に座って話をしている。いつもはジャックがここでコーヒーを飲んでるんだけど、今日はいないみたい。

ちなみに、私達が注文したのは、私がミルクティー、紅刃がコーヒー牛乳、加奈美がアイスコーヒーだよ。

「でも、怪我しないように気をつけてよ？」

「わかってら。にしても、こうして話すのも久しぶりだな」

「本当。私達、ずっとアカデミアを休んでるから」

「銘丈君もいればよかったのに…」

俺と月沙、将人、加奈美は中学時代からの付き合いだ。当時虐められてた月沙に対等に接する事ができたメンバーで、今じゃ４人全員親友だ。

将人は引っ越していなかったけど、高校も同じクラスだ。まあ、俺と月沙は過去に行ったから、一緒に過ごした期間は短めだったけどな。

「そ、そうだな。あいつは今頃何してんだか…」

将人に会ったとは言えないよね。私達が過去に行ってる事は内緒なんだし。

「きっと元気でやってるよ」

「うん、そうだよね。早く会いたいな～」

本当に、将人もいたらもっとよかったのに。将人は私達以上に加奈美と会ってないんだし。

「あ、月沙ちゃん、ちょっとお願いがあるんだけど…」

「お願い？」

「久しぶりに、私とデュエルしてくれないかな？」

「デュエル？」

「お互い強くなったはずだし、久しぶりに会った記念って事で…」

「あ、いいね。やろうよ」

会ってないって事は、当然デュエルするのも久しぶり。加奈美がどこまで強くなったか気になるし、何より純粋に勝負したい。

「んじゃ、早いとこ勘定を済ませるか」

紅刃は飲みかけのコーヒー牛乳を一気に飲み干した。

私達は代金を払った後、広場に出てデュエルの準備をした。

「そういえば、月沙ちゃんと真川君のそれって何？」

加奈美の言う『それ』は私達のデュエルディスク。過去に行く直前に遊星から渡されたから、加奈美はこのディスクを知らない。

「私達のデュエルディスクだよ。休みを取る前に遊星が作ってくれたの」

私は簡単に説明した後に、銃型のデュエルディスクをホルダーから抜いて、左腕に装着して展開させた。

「へ～、かっこいいね」

「ありがと。それじゃ、始めよっか」

「うん、行くよ！」

「「デュエル！」」

月沙ｖｓ加奈美

「先攻は加奈美に譲るよ」

「ありがとう。それじゃ、私のターン！モンスターをセット！カードを2枚セットしてターンエンドだよ！」

加奈美
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×２

「私のターン！」

加奈美のデッキのカテゴリは多分変わってない。多分、あの伏せモンスターは…。

「永続魔法《氷結界に咲く百合》を発動！私の氷結界のモンスターの攻撃力は３００ポイントアップする！」

私のフィールドに、葉と茎が水色で花びらが真っ白な百合が一輪咲いた。

《氷結界に咲く百合》
永続(オリジナル)魔法
このカードが存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する「氷結界」と名のついたモンスターの攻撃力は３００ポイントアップする。
「氷結界」と名のついたモンスターが破壊される度に氷結界カウンターを２つこのカードに乗せる。
氷結界カウンターを任意の数取り除く事で以下の効果を得る。
●１つ：自分フィールド上の「氷結界」と名のついたモンスターはエンドフェイズ時まで相手の罠・モンスター効果を受けつけない。
●２つ：自分の場に「アイスリィトークン（水属性、植物族、レ

ベル1、攻／守３００）」を自分フィールド上に特殊召喚する。
このトークンは「氷結界」と名のついたモンスター以外のアドバンス召喚のためにリリースできず、「氷結界」と名のついたモンスター以外のシンクロ素材に使用する事ができない。
●５つ：「氷結界」と名のついたモンスターをリリースしこのカードを墓地に送る事で、相手フィールド上に存在するモンスターまたは魔法・罠を全て除外し、除外した数×３００ポイント自分のライフを回復する。

「それにチェーンして永続罠（エンペラー・オーダー）を発動！」

「《エンペラー・オーダー》？」

「召喚時に発動するモンスター効果を無効にできるよ！そして、無効にした場合はそのモンスターの持ち主がカードを１枚ドローする！」

《エンペラー・オーダー》
永続罠
召喚成功時に発動される効果モンスターの効果の発動を無効にする事ができる。
その時、そのモンスターのコントローラーはデッキからカードを１枚ドローする。

《エンペラー・オーダー》？そんなカード、今まで使わなかったはずだけど…。

「ま、いっか。《氷結界の軍師》を召喚！」

水色の笠を被った老人が召喚された。百合の効果でパワーアップ

したから、攻撃力の心配はほとんどなくなった。

《氷結界の軍師》　ＡＴＫ／１６００→１９００

「手札の《ナチュル・コスモスビート》の効果発動！相手が通常召喚した時、このモンスターを特殊召喚できる！」

《ナチュル・コスモスビート》
チューナー（効果モンスター）
星２／地属性／植物族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ　７００
相手がモンスターの通常召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

「これは召喚時に発動する効果だよ！よって、《エンペラー・オーダー》の効果発動！コスモスビートの効果を無効にして、カードを１枚ドローするよ！」

あれ？《エンペラー・オーダー》って、効果を無効にしても破壊はしないんだよね？だとすると…。

「おい、ちょっと待て！て事は、コスモスビートが手札に残るから、月沙が通常召喚する度に１枚ドローできるのかよ！？」

「フフフ、当たりだよ♪」

「嘘！？」

そんなコンボがあったなんて…。通常召喚は全くしないわけにはいかないから、加奈美は手札に困らないって事？

「う…ちょっとまずいかな…。軍師の効果発動！手札の氷結界のモンスターを1体墓地に送り、カードを1枚ドローする！バトル！軍師で伏せモンスターを攻撃！」

軍師が水色の光弾を放ち、伏せモンスターを攻撃する。破壊されたのは、岩の壁みたいなモンスターだった。

「《ナチュル・クリフ》の効果を発動するよ！フィールドから離れた時、デッキからレベル４以下のナチュル１体を攻撃表示で特殊召喚できる！」

《ナチュル・クリフ》
効果モンスター
星４／地属性／岩石族／ＡＴＫ１５００／ＤＥＦ１０００
このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキからレベル４以下の「ナチュル」と名のついたモンスター１体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

やっぱり【ナチュル】だ！そして伏せモンスターも《ナチュル・クリフ》。ちょっとだけ安心した。

「デッキから《ナチュル・ストロベリー》を特殊召喚！」

クリフがいた場所から、イチゴのモンスターが飛び出した。

《ナチュル・ストロベリー》
効果モンスター
星４／地属性／植物族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１２００
相手がモンスターの召喚・特殊召喚に成功した時、このターンのエンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は、召喚・特殊召喚したモ

ンスター1体のレベル×１００ポイントアップする。
この効果は1ターンに1度しか使用できない。

《ナチュル・ストロベリー》　ＡＴＫ／１６００

「やっぱりデッキは【ナチュル】なんだね」

「うん！私のお気に入りだから！」

「お気に入りのカードでデュエルするのが1番だよね。カードを1枚セットしてターンエンド！」

月沙
ＬＰ／４０００
手札／3
モンスター／《氷結界の軍師》（ＡＴＫ／１８００）
魔法・罠／《氷結界に咲く百合》リバース×１

「私のターン！チューナーモンスター《ナチュル・ナーブ》を召喚！」

ストロベリーの隣に、葉っぱに顔が付いたようなモンスターが現れた。

《ナチュル・ナーブ》
チューナー（効果モンスター）
星1／地属性／植物族／ＡＴＫ　２００／ＤＥＦ　３００
自分フィールド上に存在する、このカードと「ナチュル」と名のついたモンスター1体をリリースして発動する。
相手の魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

《ナチュル・ナーブ》　ＡＴＫ／　２００
チューナーって事は…シンクロ召喚…！
「行くよ！レベル４《ナチュル・ストロベリー》にレベル１《ナチュル・ナーブ》をチューニング！大自然の守り神よ、魔を裂く獣に恵みを与えよ！」
☆４＋☆１＝☆５
「シンクロ召喚！祈れ！《ナチュル・ビースト》！」
加奈美が召喚したのは、四肢が木になった緑の虎だ。魔法カードを封じる力を持つ獣…！
《ナチュル・ビースト》
シンクロ・効果モンスター
星５／地属性／獣族／ＡＴＫ２２００／ＤＥＦ１７００
地属性チューナー＋チューナー以外の地属性モンスター１体以上
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分のデッキの上からカードを２枚墓地に送る事で、魔法カードの発動を無効にし破壊する。
《ナチュル・ビースト》　ＡＴＫ／２２００
「バトル！《ナチュル・ビースト》で《氷結界の軍師》に攻撃！ガイア・アース・クロー！」
緑の虎が軍師に飛び掛かり、鋭い爪で切り裂こうとする。

「させない！罠カード《氷結界の召喚術》！私のフィールドの氷結界のモンスター1体のレベルより低いレベルを持つ氷結界のモンスター1体をデッキから特殊召喚する！」

《氷結界の召喚術》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在する「氷結界」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。
自分のデッキから選択したモンスターより低いレベルの「氷結界」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

「私は軍師を選択！軍師のレベルは4！レベル2のチューナーモンスター《氷結界の術者》を特殊召喚！」

短めの氷の杖を持った氷結界の住人が現れた。このモンスターの効果はこういう時に便利なんだよね。

《氷結界の術者》
チューナー（効果モンスター）
星2／水属性／水族／ＡＴＫ１３００／ＤＥＦ　０
このカード以外の「氷結界」と名のついたモンスターが自分フィールド上に存在する限り、全てのレベル4以上のモンスターは攻撃宣言をする事ができない。

《氷結界の術者》　ＡＴＫ／１３００→１６００

「術者の効果で、術者以外の氷結界のモンスターがいる間、レベル4以上のモンスターは攻撃できない！」

術者がフィールド全体に結界を張ると、ビーストは念力みたいなもので強制的に加奈美のフィールドに戻された。

「ああ…残念…。カードを1枚セットしてターンエンドだよ」

加奈美
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《ナチュル・ビースト》（ＡＴＫ／２２００）
魔法・罠／《エンペラー・オーダー》リバース×２

「私のターン！」

《ナチュル・ビースト》はデッキからカードを2枚墓地に送る事で魔法カードを無効にする効果を持ってる。要するに、魔法カードは使えない。でも、これなら…！

「《Ｅ・ＨＥＲＯ　アイスエッジ》を召喚！」

氷をイメージした小さな戦士を召喚した。氷結界じゃないけど、アブソルートＺｅｒｏを出すためにデッキに入れてる。今回はシンクロ素材にするけど…。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　アイスエッジ》　ＡＴＫ／　８００

「手札の《ナチュル・コスモスビート》の効果発動！この効果を《エンペラー・オーダー》で無効にして、カードを1枚ドローするよ」

相手のドロー補助はきついけど、ここは仕方ない。

「レベルの合計は9。来るか…！」

「軍師の効果で手札の氷結界のモンスターを墓地に送り、カードを1枚ドローする！そして、レベル4《氷結界の軍師》とレベル3《E・HERO　アイスエッジ》にレベル2《氷結界の術者》をチューニング！」

2つの青い輪と7つの星が展開され、術者の結界が消えていった。

「封印されし綿津見の槍が、氷壁を砕き唸りを上げる！秘めたる力を解き放て！」

☆4＋☆3＋☆2＝☆9

「シンクロ召喚！邁進せよ！《氷結界の龍　トリシューラ》！」

銀の翼を広げ、三つ首の巨龍がフィールドに舞い降りた。

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／２７００→３０００

「出た…月沙ちゃんの切り札…！」

「トリシューラの効果発動！シンクロ召喚に成功した時、相手の墓地・フィールド・手札からカードを1枚ずつ除外する！墓地の《ナチュル・クリフ》、フィールドの《ナチュル・ビースト》、手札1枚を除外！トリニティ・バイス！」

3つの青い光線が、クリフとビーストと手札1枚を綺麗さっぱり消してしまった。

「あ…コスモスビートが除外されちゃった…」

「これで《エンペラー・オーダー》とのコンボはできない！バトル！トリシューラでダイレクトアタック！」

「それは駄目だよ！罠カード《大地の叫び》！相手が直接攻撃をする時、デッキトップからカードを1枚墓地に送って、デッキからレベル4以下の地属性モンスターを特殊召喚する！」

《大地の叫び》
通常罠（オリジナル）
相手が直接攻撃を宣言した時に、自分のデッキの1番上のカード1枚を墓地に送る事で発動する事ができる。
自分のデッキからレベル4以下の地属性モンスター1体を特殊召喚する。

「デッキから《融合呪印生物－地》を特殊召喚！」

幾つもの岩をまとめたような岩石の球体が呼び出された。

《融合呪印生物－地》
効果モンスター
星3／地属性／岩石族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ１６００
このカードを融合素材モンスター1体の代わりにする事ができる。
その際、他の融合素材モンスターは正規のものでなければならない。
フィールド上のこのカードを含む融合素材モンスターを生け贄に捧げる事で、地属性の融合モンスター1体を特殊召喚する。

《融合呪印生物－地》　ＤＥＦ／１６００

「攻撃は続行するよ！トライデント・ブリザード！」

３つの口から放たれる吹雪が融合呪印生物を襲う。

「罠カード《Ｄ２シールド》！守備モンスターの守備力を２倍にする！」

《融合呪印生物－地》　ＤＥＦ／１６００→３２００

「え！？」

融合呪印生物が青いエネルギーを纏い、トリシューラの吹雪を跳ね返し、私はその余波を受けた。

「くっ！」

月沙　ＬＰ／４０００→３８００

「仕方ないか…。カードを１枚セットしてターンエンドだよ」

月沙
ＬＰ／３８００
手札／２
モンスター／《氷結界の龍　トリシューラ》（ＡＴＫ／３０００）
魔法・罠／《氷結界に咲く百合》（Ｈ／０）リバース×１

《氷結界に咲く百合》の効果を上手くかい潜って攻撃を防いだ…。
しかも融合呪印生物を出したって事は、融合モンスターを出してくるはず。

「私のターン！《ナチュル・パンプキン》を召喚！」

眠そうな表情をした、緑のカボチャのモンスターが現れた。

《ナチュル・パンプキン》
効果モンスター
星４／地属性／植物族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ　８００
相手フィールド上にモンスターが存在する場合にこのカードが召喚に成功した時、手札から「ナチュル」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

《ナチュル・パンプキン》　ＡＴＫ／１４００

「相手フィールドにモンスターがいる時にパンプキンを召喚した事で効果発動！手札のナチュル１体を特殊召喚するよ！チューナーモンスター《ナチュル・トライアンフ》を特殊召喚！」

今度はチューリップのモンスター。レベルの合計は６。となると出すのは…。

《ナチュル・トライアンフ》
チューナー（効果モンスター）
星２／地属性／植物族／ＡＴＫ　６００／ＤＥＦ１５００
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、相手が魔法・罠カードを発動する度に、自分フィールド上に表側表示で存在する「ナチュル」と名のついたモンスターの攻撃力はそのターンのエンドフェイズ時まで５００ポイントアップする。

《ナチュル・トライアンフ》　ＡＴＫ／　６００

「レベル４《ナチュル・パンプキン》にレベル２《ナチュル・トライアンフ》をチューニング！大自然の守り神よ、大地の龍に恵みを与えよ！」

☆４＋☆２＝☆６

「シンクロ召喚！振り払え！《ナチュル・パルキオン》！」

灰色の岩のような鱗を持つ東洋の龍が姿を現した。罠を封じる、ビーストとは正反対のモンスター。

《ナチュル・パルキオン》
シンクロ・効果モンスター
星６／地属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ１８００
地属性チューナー＋チューナー以外の地属性モンスター１体以上
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分の墓地のカード２枚をゲームから除外する事で、罠カードの発動を無効にし破壊する。

《ナチュル・パルキオン》　ＡＴＫ／２５００

パルキオンと《融合呪印生物－地》。この２体が揃ったという事は…そろそろ切り札が来る…！

「墓地の《ナチュル・レディバグ》の効果発動！」

「え？」

「ナチュルのモンスターをシンクロ召喚した時、墓地のこのモンスターを特殊召喚する！」

加奈美は切り札を出す前に、苔のむした花柄のてんとう虫を呼び出した。

《ナチュル・レディバグ》
効果モンスター
星１／地属性／昆虫族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　１００
自分が「ナチュル」と名のついたシンクロモンスターのシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
また、自分のメインフェイズ時にこのカードをリリースし、自分フィールド上に表側表示で存在する「ナチュル」と名のついたモンスター１体を選択して発動する事ができる。
選択したモンスターの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで１０００ポイントアップする。

《ナチュル・レディバグ》　ＡＴＫ／　１００

「そんなモンスター、いつの間に…？」

「《大地の叫び》のコストで墓地に送られたカードか！」

「当たりだよ♪でもこれだけじゃないよ。手札から速攻魔法《地獄の暴走召喚》を発動！攻撃力１５００以下のモンスターを特殊召喚した時、同名カードをデッキ・手札・墓地から可能な限り特殊召喚するよ！」

「うえっ！？」

「デッキからレディバグをもう２体特殊召喚！」

《ナチュル・レディバグ》　ＡＴＫ／　１００
《ナチュル・レディバグ》　ＡＴＫ／　１００

「この後、相手は自分のモンスター1体を選択して同名カードを特殊召喚できるけど…」

「私のフィールドにはトリシューラのみ。トリシューラは1枚しかないから、特殊召喚できない…」

ちゃんと考えてるんだ。レディバグの効果って、確か味方を強化するんだっけ…？

「《融合呪印生物－地》の効果発動！このモンスターと融合素材をリリースして、地属性の融合モンスターを特殊召喚するよ！来て！《ナチュル・エクストリオ》！」

融合呪印生物とパルキオンが1つの光になり、パルキオンの着ぐるみを着たような感じの《ナチュル・ビースト》へと姿を変えた。

《ナチュル・エクストリオ》
融合・効果モンスター
星１０／地属性／獣族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２４００
「ナチュル・ビースト」＋「ナチュル・パルキオン」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分の墓地に存在するカード1枚をゲームから除外し、自分のデッキの上からカード1枚を墓地へ送る事で、魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

《ナチュル・エクストリオ》　ＡＴＫ／２８００

「出たな。加奈美の切り札、《ナチュル・エクストリオ》」

「う、やばいかも…」

《ナチュル・エクストリオ》は、墓地のカードを除外してデッキトップを墓地に送る事で魔法・罠を無効にする効果を持っている。つまり、魔法と罠は完全に封じられた…！

「《ナチュル・レディバグ》の効果発動！このモンスターをリリースして、ナチュル１体の攻撃力をエンドフェイズ時まで１０００ポイントアップさせる！同じく他の２体もリリースして、エクストリオの攻撃力を３０００ポイントアップさせる！」

《ナチュル・エクストリオ》　ＡＴＫ／２８００→３８００→４８００→５８００

「攻撃力５８００！？」

「バトル！《ナチュル・エクストリオ》で《氷結界の龍　トリシューラ》を攻撃！ガイア・エナジー・バースト！」

エクストリオが地面からエネルギーを吸収して緑の光線を放ち、トリシューラはそれに飲み込まれて消えてしまった。

「うぅっ、く…！」

月沙　ＬＰ／４０００→１２００

「氷結界のモンスターが破壊された事で、《氷結界に咲く百合》に氷結界カウンターが２つ乗る…！」

《氷結界に咲く百合》　Ｈ／０→２

「カードを１枚セットしてターンエンドだよ！」

《ナチュル・エクストリオ》　ＡＴＫ／３８００→２８００

加奈美
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《ナチュル・エクストリオ》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／《エンペラー・オーダー》リバース×１

まずい…。魔法と罠は封じられた上に、モンスターは全滅。モンスター効果でエクストリオをどうにかしないと負ける…！

「（一応《次元幽閉》を伏せておいたけど…月沙ちゃんならこれくらいじゃ止まらないかもしれない。でも、どうやって逆転してくるか楽しみだよ）」

あのカードさえ引ければ勝てる。応えて、私のデッキ…！

「私のターン！！」

……！来た！

「まず、《氷結界に咲く百合》の効果発動！氷結界カウンターを１

つ取り除く事で、氷結界のモンスターはエンドフェイズ時まで相手の罠・モンスター効果を受けつけない！」

「え！？」

《氷結界に咲く百合》　Ｈ／２↓１

「なるほどな。エクストリオの効果で防げるのは魔法・罠の『発動自体』だけ。既に表側表示で存在する永続魔法や永続罠などの効果の発動は無効にできない」

「チューナーモンスター《デブリ・ドラゴン》を召喚！」

中くらいの大きさの風の龍が現れた。このモンスターが逆転への一手！

《デブリ・ドラゴン》　ＡＴＫ／１２００

「《デブリ・ドラゴン》の効果発動！墓地の攻撃力５００以下のモンスター１体を、効果を無効にして攻撃表示で特殊召喚する！《氷結界の破術師》を特殊召喚！」

青い法衣を身につけた少年が呼び出される。私のデッキでカードとカードを繋ぐ重要な役割を果たしている。

《氷結界の破術師》　ＡＴＫ／　４００

「え！？いつ墓地に送ったの！？」

「最初の軍師の効果でね！レベル３《氷結界の破術師》にレベル４

《デブリ・ドラゴン》をチューニング！封印されし神の槍が、冷気を携え天を突く！秘めたる力を解き放て！」

☆３＋☆４＝☆７

「シンクロ召喚！貫け！《氷結界の龍　グングニール》！」

輪と星が光の柱になり、中から赤みがかった青い氷龍が飛び出した。

《氷結界の龍　グングニール》　ＡＴＫ／２５００→２８００

「グングニールの効果発動！手札を２枚まで捨て、捨てた枚数分だけ相手フィールド上のカードを破壊する！私は《ナチュル・エクストリオ》と伏せカードを破壊する！アイス・ウィンド！」

手札を全部捨てると、グングニールが翼を勢いよく広げて吹雪を巻き起こし、エクストリオと伏せカードを吹き飛ばして破壊した。

「エクストリオ！？」

「バトル！グングニールでダイレクトアタック！フリージング・ジャベリン！」

グングニールが槍のような冷気のブレスを吐き出し、加奈美のライフを一気に削った。

「きゃあっ！？」

加奈美　ＬＰ／４０００→１２００

「ライフが並んだ！」

「まだまだ！罠カード《氷結界の召喚術》！」

「嘘！？２枚目！？」

「グングニールより低いレベルの氷結界のモンスター１体をデッキから特殊召喚する！グングニールのレベルは７！レベル４の《氷結界の舞姫》を特殊召喚！」

『最後の最後ですが、参ります！』

やっぱり最後はパートナーで決めると気持ちいいよね！

《氷結界の舞姫》　ＡＴＫ／１７００→２０００

「《氷結界の舞姫》でダイレクトアタック！雪月花！」

『これで終わりです！』

スイレンが投げた冷気を纏う２つのチャクラムが加奈美を斬り裂いた。

「きゃあぁぁっ！？」

加奈美　ＬＰ／１２００→　０

月沙　ＷＩＮ

「負けちゃった…。やっぱり月沙ちゃんは強いよ」

「そう？加奈美も十分強いじゃん。《デブリ・ドラゴン》を引けてなかったら負けてたかもしれないし」

「どっちも強いだろ。２人共いいデュエルだったじゃねえか」

《エンペラー・オーダー》とコスモスビートのコンボに《地獄の暴走召喚》とレディバグでの攻撃力強化…。どっちも昔はやらなかった戦術。エクストリオも自然に出してくるし、並大抵の実力じゃないと思う。

「３人でお楽しみのようね」

「あれ？璃音ちゃん？」

健闘を称え合ってると、いつの間にか璃音が来ていた。

「途中からだけど見させてもらったわよ。面白いデュエルだったわ」

「えへへ、どうも…」

「で、本題に入るけど…。紅刃、Ｄ・ホイール完成したわよ」

「本当か！？」

ＳＩＤＥ／紅刃

璃音に連れられてガレージに入ると、作業を終えた遊星とブルーノが休憩してるところだった。

「連れてきたわよ」

「そうか。すまないな」

「遊星、ブルーノ！」

「紅刃！遂に完成したよ！ほら！」

「お、本当だ！」

部屋のど真ん中に1台のＤ・ホイールが置いてある。カラーリングは黄色と黒と朱色。

「わ～、かっこいい！」

「ボルガー&カンパニー社にも協力してもらって、新型エンジンも搭載したんだ」

ボルガー&カンパニー社って、クロウの友人が経営してる会社だよな？クロウの話じゃ、友人本人が殺人罪を自主して、今は社長がいない状態なんだっけ？で、遊星達チーム５Ｄ' ｓのバックアップ担当だって話だったな。

「あの新型エンジンって、チーム５Ｄ' ｓのバックアップって事で

会社が取りつけるんだろ?俺が使ってもいいのか?」

「問題ない。月沙、打ち合わせ通り、お前のD・ホイールにもやってもらった」

「あ、ありがとう!」

「いつの間にそんな話を…」

「早速試してみてよ!」

「了解!それじゃ、行くか!」

俺は新しくできたD・ホイールを外に運び出した。月沙も自分のD・ホイールを引っ張り出してきた。

D・ホイールに乗ってヘルメットを被り、黒いバイザーを下ろす。そして、試しに2人同時に走り出した。

「!」

「速い…!」

今までとは段違いの性能だ。前のD・ホイールを軽く超えている。

『調子はどうだ?』

遊星から通信が入った。自分のD・ホイールから入れてんだろ。

「ああ、最高だ!」

「文句なしだよ！ちょっとそこら辺を走ってくるね！」

俺達は新しいD・ホイールと強化されたD・ホイールの性能を堪能するために街中を走り回る事にした。

翌日。俺と月沙、璃音はD・ホイールに乗って、ある程度離れてからフォッタに転移してもらう事にした。加奈美が見送りに来てるから、目の前で直接転移するわけにはいかないからな。フォッタはもう待ち合わせ場所で待機してる。

あ、璃音もD・ホイールを持ってるぞ。黒いカラーで、屋根っぽいのはないけどどことなく遊星のに似てる気がする。ちなみに新型エンジンも搭載済みだ。

「遊星、ブルーノ、本当にありがとな」

「気にするな。困った時はお互い様だ。気をつけてな」

「ああ」

「ブルーノもチーム５D's の一員として頑張ってね」

「うん、ありがとう」

月沙はブルーノと話している。ブルーノとは短い期間しか会えな

かったけど、次に帰った時はいろいろ話をしたいな。

「それと…」

「？」

「記憶をなくしてても関係ない。私達はいつまでも仲間だからね？」

「何だい、急に改まって…？…でも、ありがとう。その言葉、忘れないよ」

ブルーノは一瞬面食らった後、笑って返事を返した。

「うん…（伝える事は伝えた。もう二度と会えないかもしれないから…）」

…心なしか、月沙が寂しそうに笑ってるように見える。ブルーノにこの先何が起こるっていうんだ…？

「真川君達、もう行っちゃうんだね…」

「ああ。D・ホイールの件で1度戻っただけだからな。解決したんだし、用事があるからもう行かねえと」

「用事が全部終わったらまた来るわね。何かあったら途中で抜け出してくるかもしれないけど…」

加奈美ともまたしばらくお別れだな。今度は将人も連れてこねえと…。

「それじゃ…兄さん、ブルーノ、加奈美、行ってくるわね」

「ああ、頑張れよ」

「行ってらっしゃい」

「またデュエルしようね！」

「うん！」

「ＷＲＧＰ、頑張れよ！それじゃあな！」

俺達は一斉に出発して待ち合わせ場所に向かった。

全部終わらせたら、またこの時代で暮らすんだ。いつか必ず…！

ＳＩＤＥ／加奈美

「行っちゃったね…」

「うん…」

私達は月沙ちゃん達が見えなくなるまで見送っていた。一緒にいた短かったけど、楽しかったよ。

「璃音達なら大丈夫だ。俺達は俺達のやるべき事をやろう」

「うん、そうだね」

「それじゃ、私はもう行くね」

「ああ」

「またね、加奈美さん！」

「うん！バイバイ！」

私は不動君とブルーノ君に別れを告げて、一旦家に戻った。

確か、この辺りだったはず…。

私がアカデミアに行かずに来たのは、サテライトの『B．A．D．エリア』。昔に起きたゼロ・リバースの被害が大きくて、セキュリティですら入らないサテライトの危険地帯。私はそこにある待ち合わせ場所に向かっていた。

「よぉ、時間通りに来たな」

「！」

待ち合わせ場所に着くと、これからお世話になる人達が待ってい

た。

ギュラ君と、シュルク君だ。

「お待たせ」

「お別れは済んだか？」

「うん」

「申し訳ない。俺達の途方もない馬鹿に付き合わせる事になってしまって…」

シュルク君はばつの悪い顔をして謝ってきた。この事はあまりよく思ってないみたい。

「大丈夫だよ。もう、覚悟は決めたから」

「シュルクは最後の最後まで反対してたもんな」

「いくら目的のためとはいえ、イレギュラーの親友を仲間に引き入れるのは気が引ける。例え『精霊を連れた、力のある者』だとして

もな」

「ナフラも了解済みだよ。ね？」

『ガルルァッ！』

私が声を掛けると、デッキから《ナチュル・ビースト》の精霊のナフラが出てきた。自分も覚悟を決めたというように首を縦に振る。

この子と出会ったのは月沙ちゃん達が用事で休んだ…いや、『過去に行った』後。月沙ちゃん達の敵になるのが嫌で嫌で、でも『ニュートラルに入らなくちゃいけない』という事実と板挟みになって何度も落ち込み泣きじゃくった私の傍に、ナフラはいつもいてくれた。そして、どこまでも私についていく気でいる。

月沙ちゃんの精霊が出てきた時も、私は見えないふりをしていた。そうじゃなきゃ、また別れるのが辛くなるから…。

「それならいいが…」

「ったく、煮え切らねえな。ま、向こうの幹部共は基本的に仲間を大切にする奴らだ。新参だからって虐めにはならねえから安心しろ。部下はどうかはわからねえが、そん時は俺達が黙らせりゃいい話だ」

「うん、ありがとう」

「人目につくとまずい。そろそろ行くぞ」

「わぁったよ」

ギュラ君はデュエルディスクを展開させて、《緊急テレポート》のカードを取り出した。ナフラはそれを見届けてデッキに戻った。

「俺に捕まってろ。こいつは使用者に触れてねえと一緒に転移できねえからな」

「うん」

シュルク君はギュラ君の肩に手を乗せて、私はギュラ君の左腕を掴んだ。

「んじゃ、行くぜ」

ギュラ君がカードを発動させると、私達はその場から消え去った。

月沙ちゃん、真川君、銘丈君、みんな…ごめんなさい。

私…今から悪い人になるね…。

...To be continued

第５４話　Ｄ・ホイールはデザインしにくい（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「おいおい、どうすんだよこれ？紅刃達の親友が敵に回ったぞ？」

フィレス『グルゥ…』

璃音「やりづらいわね…。あの子にどういった変化があったかはわからないけど、今後の戦いはさらに厳しいものになりそうね」

ロコナ『リオンってカナミと知り合いだよね？ここで敵になった事を知ってもいいの？』

璃音「本編と後書きは別物よ。いわばここは楽屋裏みたいなものよ」

勇香「楽屋裏って…」

璃音「それじゃ、カード考察に入りましょうか。今回紹介するのは、加奈美が使用する切り札（ナチュル・エクストリオ）よ」

《ナチュル・エクストリオ》
融合・効果モンスター
星１０／地属性／獣族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２４００
「ナチュル・ビースト」＋「ナチュル・パルキオン」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分の墓地

に存在するカード1枚をゲームから除外し、自分のデッキの上からカード1枚を墓地へ送る事で、魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

璃音「墓地のカードを除外してデッキを削る事で、魔法と罠を無効にする効果を持っているわ」

勇香「実質ほぼノーコストじゃねえか…。モンスター効果に弱い事や召喚条件が重い事を差し引いても、こいつはなかなか馬鹿にできねえぞ？」

ロコナ『最初からフィールドに出てる永続魔法とかの効果は無効にできないよ！』

璃音「融合召喚は代用モンスターを使えないのが辛いわね。ただ、《融合呪印生物－地》の起動効果での特殊召喚は可能よ」

勇香「今は《ミラクルシンクロフュージョン》が出たからだいぶ出しやすくはなったろ。似た効果を持つ《ナチュル・バンブーシュート》に負けないように、上手く使えよ」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『感想待ってま～す！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

今回月沙が使用した《氷結界に咲く百合》は言羽・D・カタストロフィ―さんが、《氷結界の召喚術》はユタさんが投稿してくださったオリカです。言羽・D・カタストロフィ―さん、ユタさん、ありがとうございました。

加奈美は以前にも紅刃の回想で2回ほど登場しましたが、このままモブキャラで終わらせるのももったいないので今後も活躍させる事にしました。ただし、ニュートラルに入団してしまいましたが…。他の幹部も合わせて後何話か更新した後に登場しますので、加奈美達の活躍も楽しみにしててください。

では、また次回！

第５５話　主人公どうしの対決は無茶苦茶が飛び交う（前書き）

今回はサブタイトル通り、紅刃ｖｓ十代です。大増量でお送りします。

特に十代が凄い事になってるので注意してください。

それではどうぞ！

第５５話　主人公どうしの対決は無茶苦茶が飛び交う

ＳＩＤＥ／翔

「ハァ…」

放課後、僕は溜息をつきながら寮に戻っている。ここは校舎の外だ。

「翔！」

「ルーナちゃん？剣山君に先生も…」

振り返ると、ルーナちゃんと剣山君、ディヴァイン先生が後を追ってきていた。

「寮に帰るんでしょ？一緒に行きましょうよ」

「うん、そうだね」

とりあえず、僕とルーナちゃんは並んで寮に向かって歩き出した。

「丸藤先輩、どうしたドン？そんなに浮かない顔をして…」

「え？」

「最近元気がないな。何かあったのかい？」

確かに元気はないけど…。別に話してもいいかな？

「ちょっとね。最近なかなかデュエルで勝てなくて…」

「デュエル？」

「よく押し切られるようになって…調子悪いのかな…？」

僕にはアニキみたいなめちゃくちゃな引き運もないし、実力もそこまでであるわけじゃない。アニキや紅刃君を始め、僕の周りには強い人がたくさんいる。その中で僕だけ弱すぎるような気がして…。

「調子が悪いならいつか回復するわよ。十代や紅刃もそうだったんだし、あんたに当て嵌まらない道理はないでしょ？」

「それはそうだけど…」

「要は気持ちの持ちようだ。あ、着いたぞ」

「え？」

あ、本当だ。いつの間に寮の前にいるや。

とりあえず、部屋でゆっくり考えよう。僕には何か足りないものがあるのかな…？

「あ！翔、剣山！」

「ルーナ、ディヴァイン！」

すると、丁度別方向から帰ってきたアニキと勇香さん、秋斗君が僕達に気づいてやってきた。

「アニキ！」

「あ、勇香に秋斗じゃない」

「お前らも今帰ってきたとこか？」

「ああ。私も今日は特に仕事がないんでね」

今ここにいる人達はみんな強い。でも僕は弱い。一体、僕に何が足りないんだろう…？

ボゥン！

「うわっ！？」

突然、近くの地面から白い煙が噴き出したせいで、僕は思わず悲鳴を上げてしまった。

「…あれ？みんな集まってる」

煙が晴れると、そこにはいつの間にか紅刃君、月沙さん、璃音さん、フォッタ君がいて、バイクも3台置いてあった。

「紅刃、月沙！？」

「璃音、フォッタも！？」

「よぉ、ただいま」

「D・ホイールの件は済んだのか？」

「ああ。これがそうだ」

秋斗がみんなを代表して質問し、紅刃がそれに答えてバイク…じゃなかった、D・ホイールを見せてくれた。黄色、黒、朱色のカラーリングだ。

「お、これがそうか。前のとは全然違うな」

「すっげえ！かっこいいじゃねえか！」

勇香さんの後にアニキが目を輝かせて感想を言った。いつも思うけど、純粋っていうか…。

「この際だからって事で、デザインも一新したんだ」

「自信作よ。後は練習して乗りこなす事ね」

そういえば、璃音さんってメカに強いんだっけ。このD・ホイー

ルも造ったみたいだ。

「ああ。必ず乗りこなしてみせる」

「そうだ！紅刃、俺とデュエルしようぜ！」

「デュエル？」

突然、アニキが藪から棒にデュエルを申し込んだ。急にどうしたの？まあ、いつもの事だけど…。

「ルーナから聞いたぜ？デッキ変わったんだってな！」

「ああ、デッキは一応新しくなったけど…」

「俺も新しいＨＥＲＯを手に入れたんだ！お互いにここで試そうぜ！」

「新しいＨＥＲＯか…」

「いいんじゃない？やったら？」

「お互いに新しい力を試すいい機会だよ」

「そうだな…。よし、やるか！」

「そう来なくっちゃ！」

月沙さんとフォッタ君に後押しされて、紅刃君はデュエルを受ける事にした。２人共ある程度離れてデュエルディスクを展開させる。

「アニキと真川先輩のデュエル…面白い事になりそうザウルス！」

「2人共かなりの実力の持ち主だ。どうなるか楽しみだな」

剣山君や先生を始め、みんなこのデュエルに期待している。

…アニキも紅刃君も、物凄く強い。このデュエルに、僕の足りないものがあるかもしれない…！

「それじゃ、楽しいデュエルにしようぜ！」

「ああ！全力で行くぜ！」

「「デュエル！」」

紅刃ｖｓ十代

ＳＩＤＥ／紅刃

「先攻は紅刃からでいいぜ！」

「なら、遠慮なく行かせてもらうか。俺のターン！」

お、早速来てくれたか。いきなりだけど頼んだぜ、アース！

「《神秘の代行者　アース》を召喚！」

始めに召喚したのは、緑の翼を生やした白い代行者、アースだ。

《神秘の代行者　アース》　ＡＴＫ／１０００

「何だそのモンスター？初めて見るぜ」

「まあ、見てろ。アースが召喚に成功した時、デッキから代行者を１体手札に加える事ができる！《奇跡の代行者　ジュピター》を手札に！カードを３枚セットしてターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《神秘の代行者　アース》（ＡＴＫ／１０００）
魔法・罠／リバース×３

「俺のターン！魔法カード《融合》を発動！」

後攻１ターン目でいきなり《融合》かよ！？

「手札の《Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン》とバーストレディを手札融合！」

《Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン》
通常モンスター
星３／風属性／戦士族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＥ１０００
風を操り空を舞う翼をもったＥ・ＨＥＲＯ。
天空からの一撃、フェザーブレイクで悪を裁く。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ》

通常モンスター
星３／炎属性／戦士族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ　８００
炎を操るＥ・ＨＥＲＯの紅一点。
紅蓮の炎、バーストファイヤーが悪を焼き尽くす。

「マイフェイバリットモンスター《Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン》！」

　右腕が赤い龍の頭で、左だけの白い翼が生えた緑のＨＥＲＯ。十代のお気に入りのモンスターだ。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン》
融合・効果モンスター
星６／風属性／戦士族／ＡＴＫ２１００／ＤＥＦ１２００
「Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ」
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。
このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン》　ＡＴＫ／２１００

「そして、《Ｎ・フレア・スカラベ》を召喚！」

　カブトムシを人型にしたようなモンスターが現れた。ＨＥＲＯじゃない…？

《Ｎ（ネオスペーシアン）・フレア・スカラベ》
効果モンスター
星３／炎属性／昆虫族／ＡＴＫ　５００／ＤＥＦ　５００

このカードの攻撃力は、相手フィールド上の魔法・罠カードの枚数×４００ポイントアップする。

《Ｎ・フレア・スカラベ》　ＡＴＫ／　５００

「『ネオスペーシアン』？ＨＥＲＯじゃないのか？」

「ネオスペーシアンも俺の立派な相棒だ！フレア・スカラベの攻撃力は、相手フィールド上の魔法・罠１枚につき４００ポイントアップする！」

《Ｎ・フレア・スカラベ》　ＡＴＫ／　５００→１７００

「バトル！フレイム・ウィングマンで《神秘の代行者　アース》を攻撃！フレイム・シュート！」

フレイム・ウィングマンが右腕を前に突き出し、炎を纏って突っ込んできた。

「カウンター罠《攻撃の無力化》！攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる！」

アースの前に透明な障壁が張られ、攻撃は完全に防ぐ事ができた。

「防がれたか…」

《Ｎ・フレア・スカラベ》　ＡＴＫ／１７００→１３００

「これだけじゃねえぜ！カウンター罠が発動した時、自分フィールド上の天使族を全てリリースする事で、手札から《裁きを下す者ー

ボルテニス》を特殊召喚する！」

アースが光の球体になって巨大化し、中からモンスターの姿になったリーシェが現れた。

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００

『今回は割と出番が早いな』

「もう来たのかよ！？」

「出し惜しみはなしだ！ボルテニスの効果発動！特殊召喚する時にリリースした天使族の数だけ相手フィールド上のカードを破壊する！リリースした天使族はアース１体のみ。フレイム・ウィングマンを破壊だ！ジャッジメント・パニッシュ！」

『悪いが、退場の時間だ！』

リーシェが杖から電撃を放ち、フレイム・ウィングマンにぶち当て破壊した。

「フレイム・ウィングマン…！へへ、やるな、紅刃！カードを１枚セットしてターンエンドだ！」

十代
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《Ｎ・フレア・スカラベ》（ＡＴＫ／１３００）
魔法・罠／リバース×１

「俺のターン！フィールド魔法《天空の聖域》を発動！」

フィールドが天空に浮かぶ神殿に変わる。実際に行ってきた事もあって、馴染み深い場所だ。

「天使族モンスターの戦闘でコントローラーが受けるダメージは０になる！そして、《奇跡の代行者　ジュピター》を召喚！」

全身が赤茶色の代行者。代行者の下級モンスターの中じゃ、攻撃力は１番高い。

《奇跡の代行者　ジュピター》
効果モンスター
星４／光属性／天使族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ１０００
１ターンに１度、自分の墓地に存在する「代行者」と名のついたモンスター１体をゲームから除外して発動する事ができる。
自分フィールド上に表側表示で存在する天使族・光属性モンスター１体の攻撃力は、エンドフェイズ時まで８００ポイントアップする。
また、フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、１ターンに１度、手札から天使族モンスター１体を捨てる事で、ゲームから除外されている自分の天使族・光属性モンスター１体を選択して特殊召喚する。

《奇跡の代行者　ジュピター》　ＡＴＫ／１８００

「また新しいモンスターだ！」

「こいつらが俺の新しいモンスター『代行者』だ！ジュピターの効果発動！墓地の代行者を除外し、天使族１体の攻撃力をエンドフェイズ時まで８００ポイントアップさせる！」

「８００も！？」

翔はやけに驚いてるけど、これがこいつの効果だ。この効果を使えば、大抵のモンスターは戦闘破壊できる。

「墓地からアースを除外し、ジュピターの攻撃力を上げる！」

《奇跡の代行者　ジュピター》　ＡＴＫ／１８００→２６００

もう１つの効果も使いたいけど、手札に天使族モンスターがいないから発動できない。こればかりはしゃあないか…。

「バトル！ジュピターでフレア・スカラベを攻撃！ミラクロス・ナックル！」

ジュピターが拳を振るって赤茶色の光弾を発射し、フレア・スカラベを打ち砕いた。

「ぐぅっ！」

十代　ＬＰ／４０００→２７００

「ボルテニスでダイレクトアタック！ボルティ・ジャッジライト！」

『このまま終わるとは思えないが…』

リーシェが杖に雷を溜める。あの伏せカードを防ぐ術は俺の伏せカードにはない。どう出る…？

「これが通ったらアニキの負けザウルス！」

「それはどうかしら？十代がこの程度でやられるとは思えないわ」

「その通りだぜ、璃音！罠カード《ヒーロー見参》！相手が攻撃してきた時、相手は俺の手札を１枚選択し、それがモンスターなら特殊召喚できる！」

《ヒーロー見参》
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
自分の手札から相手はカードをランダムに１枚選択する。
選択したカードがモンスターカードだった場合、自分フィールド上に特殊召喚する。
違う場合は墓地へ送る。

「おい、選ぶっつったって…お前の手札はそれ１枚だけだろうが！」

「というわけで、手札のこいつを特殊召喚だ！来い！《Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス》！」

俺が知らないＨＥＲＯがフィールドに呼び出された。白い人型で、胸元には青い宝玉が埋まっている。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス》
通常モンスター
星７／光属性／戦士族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ２０００
ネオスペースからやってきた新たなるＥ・ＨＥＲＯ。
ネオスペーシアンとコンタクト融合することで、未知なる力を発揮する！

《Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス》　ＤＥＦ／２０００

「新しいＨＥＲＯってそいつの事か？」

「ああ！俺の理想のＨＥＲＯだ！」

ネオス自身は何の変哲もない通常モンスター。て事は、他に何か秘密があるのか？どちらにしろ、早めに除去した方がよさそうだな。

「どんなカラクリがあるかはわからねえけど、フィールドには残させねえ！そのままボルテニスで攻撃だ！」

リーシェは杖から白い電撃の槍を繰り出してネオスを貫いた。

『一応倒しはしたが…ネオスは通常モンスター。特殊召喚する機会はいくらでもあるだろう』

「（除外でもしない限り何度でも復活すると考えた方がいいって事か…）カードを1枚セットしてターンエンドだ」

《奇跡の代行者　ジュピター》　ＡＴＫ／２６００→１８００

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《裁きを下す者－ボルテニス》（ＡＴＫ／２８００）
《奇跡の代行者　ジュピター》（ＡＴＫ／１８００）
魔法・罠／《天空の聖域》リバース×３

「十代の手札とフィールドのカードは0。一気にピンチになったね」

「でも、十代のドロー力を甘く見ちゃ駄目だよ」

フォッタと月沙がいろいろ話してる。まあ、十代のドロー力は異常だからな…。

「俺のターン！…魔法カード《強欲な壺》！カードを2枚ドロー！さらに魔法カード《コンバート・コンタクト》を発動！自分フィールド上にモンスターがいない時、手札とデッキからネオスペーシアンを墓地に送り、カードを2枚ドローする！」

《コンバート・コンタクト》
通常魔法
このカードは自分フィールド上にモンスターが存在しない場合のみ発動する事ができる。
自分の手札及びデッキから1枚ずつ「N（ネオスペーシアン）」と名のついたカードを墓地に送り、デッキをシャッフルする。
その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「手札からグラン・モール、デッキからアクア・ドルフィンを墓地に送り、2枚ドロー！」

《N・グラン・モール》
効果モンスター（制限カード）
星3／地属性／岩石族／ＡＴＫ　９００／ＤＥＦ　３００
このカードが相手モンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わず相手モンスターとこのカードを持ち主の手札に戻す事ができる。

《N・アクア・ドルフィン》

効果モンスター
星３／水属性／戦士族／ＡＴＫ　６００／ＤＥＦ　８００
手札を１枚捨てる。相手の手札を確認してモンスターカード１枚を選択する。
選択したモンスターの攻撃力以上のモンスターが自分フィールド上に存在する場合、選択したモンスターカードを破壊して相手ライフに５００ポイントダメージを与える。
選択したモンスターの攻撃力以上のモンスターが自分フィールド上に存在しない場合、自分は５００ポイントダメージを受ける。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

「よし！《Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン》を特殊召喚！」

やっぱそいつも出てくるのかよ！？青い水属性のＨＥＲＯが現れた。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン》
効果モンスター（アニメ効果）
星４／水属性／戦士族／ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ１２００
手札がこのカード１枚だけの場合、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に自分のフィールド上に他のカードが無い場合、デッキからカードを２枚ドローする事ができる。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン》　ＤＥＦ／１２００

「このモンスターは手札が１枚だけの時に手札から特殊召喚できる！さらに、自分フィールド上に他のカードが存在しない時、カードを２枚ドローする！まだまだ行くぜ！魔法カード《ＨＥＲＯの遺産

》！墓地にレベル４以上のＨＥＲＯが２体以上いる時、カードを３枚ドローする！」

《ＨＥＲＯの遺産》
通常魔法（漫画オリジナル）
墓地にレベル４以上の「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターが２体以上存在する時、自分のデッキからカードを３枚ドローする。

「手札が０枚から一気に５枚に！？」

「あんなのありかよ！？」

ルーナと勇香が驚きの声を上げる。全く、何つー強運だ…。

「待っといて正解だったな…」

「え？」

「その引き運、利用させてもらうぜ！罠カード《逆転の明札》！相手がドローフェイズ以外でカードを引いた時、相手と自分の手札が同じ枚数になるようにドローする！」

《逆転の明札》
通常罠（アニメオリジナル）
相手がドローフェイズ以外にカードを手札に加えた時自分の手札が相手の手札と同じ枚数になるようにドローする。

「俺の手札は０！よって、５枚ドロー！」

「あいつ、十代の引きを逆に利用しやがった…！」

秋斗もこれは予想外だったみたいだな。遊星が餞別に1枚くれたカードだけど、入れといて正解だった。

「面白くなってきたな！魔法カード《融合回収》！墓地から《融合》と融合素材に使ったカードを1枚ずつ手札に戻す！」

《融合回収（フュージョン・リカバリー）》
通常魔法
自分の墓地に存在する「融合」魔法カード1枚と、融合に使用した融合素材モンスター1体を手札に加える。

「この効果で墓地から《融合》とフェザーマンを手札に加える！そして、《融合》を発動！手札のフェザーマン、スパークマン、フィールドのバブルマンを融合！」

《Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン》
通常モンスター
星４／光属性／戦士族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１４００
様々な武器を使いこなす、光の戦士のＥ・ＨＥＲＯ。
聖なる輝きスパークフラッシュが悪の退路を断つ。

この組み合わせは…！

「融合召喚！《Ｅ・ＨＥＲＯ　テンペスター》！」

背中にフェザーマンの翼を持ち、青い服を着たＨＥＲＯがフィールドに現れた。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　テンペスター》

融合・効果モンスター
星８／風属性／戦士族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２８００
「Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン」
このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。
このカード以外の自分フィールド上のカード１枚を墓地に送り、自分フィールド上のモンスター１体を選択する。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、選択したモンスターは戦闘によっては破壊されない。（ダメージ計算は適用する）

《Ｅ・ＨＥＲＯ　テンペスター》　ＡＴＫ／２８００

「まだだ！魔法カード《ミラクル・フュージョン》！墓地の融合素材を除外して、Ｅ・ＨＥＲＯを融合召喚する！」

《ミラクル・フュージョン》
通常魔法
自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「Ｅ・ＨＥＲＯ」という名のついた融合モンスター１体を融合デッキから特殊召喚する。
（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「２回目の融合…！」

「墓地からフレイム・ウィングマンとスパークマンを除外！現れろ！《Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン》！！」

墓地から２体のＨＥＲＯが消え、銀の鎧を着た光のＨＥＲＯがフィールドに舞い降りた。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン》
融合・効果モンスター
星８／光属性／戦士族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ２１００
「Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン」
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。
このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたカード１枚につき３００ポイントアップする。
このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン》　ＡＴＫ／２５００

「こいつを出すためにスパークマンを融合素材にして墓地に送ったのか…！」

「ああ！シャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力は、墓地のＥ・ＨＥＲＯ１体につき３００ポイントアップする！」

《Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン》　ＡＴＫ／２５００→３７００

「紅刃！今からネオスの力を見せてやるぜ！」

「ネオスの力？何をする気だよ？」

「魔法カード発動！フィールド・墓地から融合素材をデッキに戻し、ネオスを融合素材とするＥ・ＨＥＲＯ１体を召喚条件を無視して特
（ミラクル・コンタクト）

殊召喚する！」

《ミラクル・コンタクト》
通常魔法（アニメオリジナル）
自分のフィールド上・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをデッキに戻し、「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」を融合素材とする「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついた融合モンスター１体を召喚条件を無視してエクストラデッキから特殊召喚する。

「墓地のネオス、グランモール、フレア・スカラベをデッキに戻す！行くぜ！トリプルコンタクト融合！」

上空に宇宙みたいな渦が発生し、墓地から十代が宣言した３体のモンスターが渦に飛び込んでいく。

「現れろ！《Ｅ・ＨＥＲＯ　マグマ・ネオス》！！」

そして、渦の中からフレア・スカラベの羽と深緑の岩石の鎧を身につけたネオスが降りてきた。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　マグマ・ネオス》
融合・効果モンスター
星９／炎属性／戦士族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２５００
「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」＋「Ｎ・フレア・スカラベ」＋「Ｎ・グラン・モール」
自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻した場合のみ、融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは必要としない）。
このカードの攻撃力は、フィールド上のカードの枚数×４００ポイントアップする。

エンドフェイズ時にこのカードは融合デッキに戻る。
この効果によって融合デッキに戻った時、フィールド上に存在する全てのカードは持ち主の手札に戻る。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　マグマ・ネオス》　ＡＴＫ／３０００
《Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン》　ＡＴＫ／３７００→３４００

「コンタクト融合…！？」

「ネオスとＮをデッキに戻して、《融合》のカードなしで融合召喚をするのがコンタクト融合！これはさらにＮをもう１体加えたトリプルコンタクト融合だ！」

そんな融合方法があるのか…。て事は、《ミラクル・コンタクト》はコンタクト融合版か？（ミラクル・フュージョン）

「最上級のＥ・ＨＥＲＯが３体も…！？」

「トリプルコンタクト融合…初めて見るザウルス！」

「まだ終わりじゃないぜ！魔法カード《命削りの宝札》！手札が５枚になるようにカードをドローする！」

またドローかよ…。いくら十代でもこれは異常だろ…。

「魔法カード《テイク・オーバー・ファイブ》を発動！デッキの上からカードを５枚墓地に送る！」

《テイク・オーバー・ファイブ》
通常魔法（アニメオリジナル）
自分のデッキの上からカードを5枚墓地に送る。
自分のドローフェイズにこのカードが墓地に存在する場合、このカードをゲームから除外する事でデッキからカードを1枚ドローする。
「テイク・オーバー・ファイブ」の効果は1ターンに1度しか発動できない。

一気に5枚も墓地を肥やしたか。何かとてつもなく嫌な予感が…。

「…よし、これなら行ける！2枚目の《ミラクル・フュージョン》を発動！墓地のワイルドマンとエッジマンを除外して融合！」

《E・HERO　ワイルドマン》
効果モンスター
星4／地属性／戦士族／ＡＴＫ１５００／ＤＥＦ１６００
このカードは罠の効果を受けない。

《E・HERO　エッジマン》
効果モンスター
星7／地属性／戦士族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ１８００
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「来い！《E・HERO　ワイルドジャギーマン》！」

体に刃を装着した筋肉質なHEROが出てきた。全体攻撃ができる効果を持つモンスターだ。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドジャギーマン》
融合・効果モンスター
星８／地属性／戦士族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ２３００
「Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン」
このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。
相手フィールド上の全てのモンスターに１回ずつ攻撃をする事ができる。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドジャギーマン》　ＡＴＫ／２６００

「さらに、２枚目の《ミラクル・コンタクト》を発動！」

は？

「墓地のネオス、アクア・ドルフィン、エア・ハミングバードをデッキに戻す！」

《Ｎ・エア・ハミングバード》
効果モンスター
星３／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ　６００
相手の手札１枚につき、自分は５００ライフポイント回復する。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

おい、ちょっと待て…！

「３つの力が１つとなった時、遥か大宇宙の彼方から、最強の戦士を呼び覚ます！トリプルコンタクト融合！銀河の渦の中より現れよ！《Ｅ・ＨＥＲＯ　ストーム・ネオス》！！」

上半身が青くてメカっぽい鳥みたくなったネオスが宇宙の渦から

飛び出してきた。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　ストーム・ネオス》
融合・効果モンスター
星９／風属性／戦士族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２５００
「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」＋「Ｎ・エア・ハミングバード」＋「Ｎ・アクア・ドルフィン」
自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻した場合のみ、融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは必要としない）。
１ターンに１度だけ自分のメインフェイズ時にフィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する事ができる。
エンドフェイズ時にこのカードは融合デッキに戻る。
この効果によって融合デッキに戻った時、フィールド上に存在する全てのカードをデッキに戻しシャッフルする。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　ストーム・ネオス》　ＡＴＫ／３０００

…待て。いや、マジで待て。待て待て待て待て！！

「はぁぁあぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

「１ターンで融合モンスターを５体も揃えた！？」

「無茶苦茶凄いザウルス！」

「嘘でしょ！？」

「何て奴だ…」

「ハァ…凄いや馬鹿を通り越して呆れるわ…デッキ回りすぎよ…」

「ア、アニキ…」

「ただでさえ融合モンスターは召喚条件が厳しいというのに…」

「あれ？十代って…ここまでやる人だっけ…？」

『ここまでやるとは…』

上から順に、勇香、フォッタ、剣山、ルーナ、秋斗、璃音、翔、ディヴァイン、月沙、リーシェな。こいつらの反応は正しいよな？これはどう考えても異常だよな？

「いや、何か張り切ったらこうなっちまって…」

「十代…俺、何かしたか？」

「え？何の事だ？」

「…やっぱ何でもない…」

素でこんな事やるか普通？綾風一族の影響受けてんじゃねえだろうな？

「ストーム・ネオスの効果発動！1ターンに1度、フィールド上の魔法・罠を全て破壊する！アルティメット・タイフーン！」

「通すかよ！手札の《エフェクト・エンジェル》の効果発動！こいつとデッキトップを墓地に送る事で、相手モンスター1体の効果を

エンドフェイズ時まで無効にする！」

《エフェクト・エンジェル》
効果モンスター（オリジナル）
星１／光属性／天使族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
自分フィールド上に天使族モンスターが表側表示で存在する場合、手札からこのカードを墓地に送り発動する。
自分のデッキの１番上のカードを墓地に送り、相手モンスター１体の効果をエンドフェイズ時まで無効にする。
このカードを墓地から除外する事で、１度だけ自分への戦闘ダメージを０にする。

「駄目だったか…。ま、いっか！フィールド魔法（ネオスペース）を発動！」

「何！？」

《天空の聖域》が入れ代わりで破壊され、フィールドが虹色の宇宙に変わった。

《ネオスペース》
フィールド魔法
「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」及び「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」を融合素材とする融合モンスターの攻撃力を５００ポイントアップする。
「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」を融合素材とする融合モンスターは、エンドフェイズ時にデッキに戻る効果を発動しなくてもよい。

「ネオスとネオスの融合体の攻撃力は５００ポイントアップする！」

マジかよ…。ええと、今の十代のモンスターは…。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　テンペスター》　ＡＴＫ／２８００

《Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン》　ＡＴＫ／３７００

《Ｅ・ＨＥＲＯ　マグマ・ネオス》　ＡＴＫ／７５００

《Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドジャギーマン》　ＡＴＫ／２６００

《Ｅ・ＨＥＲＯ　ストーム・ネオス》　ＡＴＫ／３５００

「７５００!?何でマグマ・ネオスだけ…!?」

「マグマ・ネオスの攻撃力は、フィールド上のカード１枚につき４００ポイントアップするんだ!」

「て事は、今フィールドにあるカード…１０枚分パワーアップしてるのかよ…おまけに《ネオスペース》の補助付きで…」

鬼かこいつは?融合モンスターはここまで展開力はないはずだけど…。ＨＥＲＯなのに、戦ってる俺から見たら悪夢みたいな光景だ。

「紅刃ならこれくらいやらないと突破できなさそうだからな!」

「いや、これはいくら何でもやりすぎじゃ…」

「そろそろ行くぜ!バトル!マグマ・ネオスでボルテニスに攻撃!スーパーヒートメテオ!」

マグマ・ネオスが超特大の火球を投げつけてきた。ダメージ食ら

ったら即死だな…。

『紅刃、この程度なら防げるはずだ！』

「（わかってら！）墓地の《エフェクト・エンジェル》の効果発動！」

「まだ効果があるのか！？」

「墓地からこいつを除外して、戦闘ダメージを０にする！」

『それでいい。ぐあぁっ！』

「（リーシェ！）」

リーシェはそのまま火球に飲み込まれてしまった。かなりやばいな…。

「シャイニング・フレア・ウィングマンでジュピターに攻撃！シャイニング・フレア・ウィングマンの効果で戦闘破壊したモンスターの攻撃力分のダメージも受けてもらうぜ！シャイニング・シュート！」

光の戦士が光を纏ってジュピターに突っ込み、思い切りぶっ飛ばした。こいつの攻撃は、攻撃力を上げて補強しても戦闘破壊されたら意味がない。

「ぐぅっ！」

紅刃　ＬＰ／４０００→２１００→　３００

「続いて、ストーム・ネオスでダイレクトアタック！」

「これが通ったらアニキの勝ちザウルス！」

「紅刃！」

このまま食らうわけにはいかない。俺は月沙の声に応えるかのようにリバースカードを発動させた。

「まだ終わらねえ！永続罠《リビングデッドの呼び声》！墓地の《冥王竜ヴァンダルギオン》を特殊召喚する！」

『紅刃に攻撃はさせん！』

《冥王竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／２８００

「ヴァンダルギオン！？いつの間に…！？」

「《エフェクト・エンジェル》の効果でデッキトップから墓地に送られたモンスターだ！そして、手札の《精霊の姫巫女》の効果発動！俺の場にレベル７以上のモンスターが墓地から特殊召喚された時、こいつを手札から特殊召喚する！」

龍の姿になったロディスが現れてストーム・ネオスの前に立ちはだかり、白と緑の服を着た天使がロディスの隣に現れた。

《精霊の姫巫女》　ＡＴＫ／１７００

「この効果で特殊召喚した《精霊の姫巫女》がフィールドにいる限り、相手のバトルフェイズの間こいつ以外の俺のモンスターの攻撃

力は１０００ポイントアップする！」

《冥王竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／２８００→３８００

「そして、俺のフィールドにレベル7以上のモンスターがいる限り、《精霊の姫巫女》は攻撃対象にされない！」

「なら、もう攻撃できないか…。コンタクト融合で融合召喚したモンスターはエンドフェイズ時に融合デッキに戻るけど、《ネオスペース》の効果で無効にできる。カードを1枚セットしてターンエンドだ」

《冥王竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／３８００→２８００

十代
ＬＰ／２７００
手札／０
モンスター／《Ｅ・ＨＥＲＯ　テンペスター》（ＡＴＫ／２８００）《Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン》（ＡＴＫ／３７００）《Ｅ・ＨＥＲＯ　マグマ・ネオス》（ＡＴＫ／７５００）《Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドジャギーマン》（ＡＴＫ／２６００）《Ｅ・ＨＥＲＯ　ストーム・ネオス》（ＡＴＫ／３５００）
魔法・罠／《ネオスペース》リバース×１

くそ、無茶苦茶すぎる…！融合モンスターを5体も出してフィールドに維持するなんてありかよ！？理奈よりはマシかもしれないけど！

手札は3枚。どうやって切り抜ける…？

ＳＩＤＥ／翔

凄い…。

アニキは１度劣勢になったけど、すぐに切り返して紅刃君を一気に追い詰めた。

何よりも凄いのは、融合モンスターを５体も揃えた事だ。そのうち２体は、ただでさえ出すのが難しいトリプルコンタクト融合体。しかも、《ネオスペース》の効果でフィールドに留めている。

これはもうアニキの勝ちだ。いくら紅刃君でも、勝てるわけがない…！

「紅刃君にはもう勝ち目がないよ。アニキの勝ちで決まりだ」

「それはどうだろうな？」

「え？」

僕の言葉を否定したのは、他でもないアニキだった。

「何で！？アニキのフィールドには融合モンスターが５体もいるんスよ！？それをどうやって倒すんスか！？」

「紅刃にはまだ手札もドローも最後の伏せカードもあるだろ？まだまだ油断なんてできないじゃねえか」

「油断…？」

油断…。

そういえば…アニキはずっと前に、僕の悪い癖は油断する事だと言っていた。自分が有利な時や逆転の伏せカードがある時、言葉や表情にそれが出てしまう。

「ま、誰が相手でも油断はいけねえけど…紅刃なら、戦況を一気にひっくり返せるかもな」

勇香さんまでそんな事を言う。僕にはなくて、みんなにはあるものは…油断しない心…？

「紅刃！まだ諦めちゃいないだろ！？どんな手を使ってくるか、今から楽しみで仕方ないぜ！」

アニキは自分が有利な時でも、相手がどんなカードを使ってくるかを楽しみにしている。僕は…最近、楽しんでデュエルをしてるのかな…？

「…ああ。誰が諦めるかよ。まだ可能性は残されている！ここで諦めるわけにはいかねえんだ！俺はカード達（こいつら）を信じる！」

「…！」

諦めない。諦めない心…。信じる。信じる心…。

『油断しない』心。『楽しむ』心。『諦めない』心。『信じる』心。

…！そうか…！そういう事だったんだ！

これこそが、今の僕に足りないもの…！

「俺の…ターン！！」

紅刃君は、一息にカードを引いた。とても力強くて、迷いのない…。

「手札から速攻魔法（サイクロン）を発動！フィールド上の魔法・罠を1枚破壊する！《ネオスペース》を破壊！」

フィールドに嵐が吹き荒れ、景色が元に戻った。当然、ネオスの融合体もパワーダウンする。

《E・HERO　マグマ・ネオス》　ATK／7500→7000→6600

《E・HERO　ストーム・ネオス》　ATK／3500→3000

「魔法カード《強欲な壺》を発動！カードを2枚ドロー！続けて魔法カード《天使の施し》！カードを3枚ドローし、手札を2枚捨てる！そして、チューナーモンスター《ブレード・トラディショナー》を召喚！」

紅刃君だけが持っている、剣を持つ天使がフィールドに呼び出さ

れる。

《ブレード・トラディショナー》　ＡＴＫ／　５００

「効果発動！１ターンに２回までモンスターのレベルを１つ下げる事ができる！俺は《精霊の姫巫女》のレベルを２つ下げる！」

《精霊の姫巫女》　☆４↓３↓２

「魔法カード《チューナーズ・コール》！俺の場のモンスターのレベルを１つ下げ、手札からチューナーを１体特殊召喚する！《精霊の姫巫女》のレベルを１つ下げ、手札から《パラレル・ソーサラー》を特殊召喚！」

《精霊の姫巫女》　☆２↓１

《死者蘇生》のイラストにある十字架を持つ、神のような服装をした金髪と銀の瞳の少女が現れた。

《パラレル・ソーサラー》
効果モンスター（チューナー・オリジナル）
星１／光属性／天使族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
このカードの召喚・特殊召喚に成功したとき、自分の手札または墓地に存在するレベル７以上のモンスター１体を召喚条件を無視して守備表示で特殊召喚する事ができる。
この効果によって特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、表示形式の変更ができず、レベルが１つ下がる。

《パラレル・ソーサラー》　ＡＴＫ／　０

「《パラレル・ソーサラー》が召喚か特殊召喚された時、手札か墓地のレベル7以上のモンスターを守備表示で特殊召喚できる！墓地のボルテニスを特殊召喚！」

《パラレル・ソーサラー》が手に持っている十字架を掲げて輝きを放つと、十字架から光が飛び出してリーシェの姿になった。

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＤＥＦ／１０００↓　０

『また出番か！』

「この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効になり、表示形式の変更もできず、さらにレベルが１つ下がる！」

《裁きを下す者－ボルテニス》　☆８↓☆７

「モンスターが5体出揃ったな」

「チューナーが2体にレベル調整…。紅刃も大型モンスターを並べて対抗するつもりだろう」

秋斗君と先生の解説を頭のどこかに入れておき、ただデュエルを見守る。何でだろう。これから紅刃君が何をやるのか、楽しみだ。

「行くぜ！十代！俺もお前に対抗できるだけのモンスター達を呼び出す！」

「ああ！来い！」

「レベル８《冥王竜ヴァンダルギオン》とレベル１《精霊の姫巫女》にレベル１《ブレード・トラディショナー》をチューニング！」

剣士が１つの黄色い輪になり、冥界の龍と姫巫女が中に飛び込み９つの星になる。

「武の魂が、冥王に宿りて現世に閃く！希望の光を振り翳せ！」

☆８＋☆１＋☆１＝☆１０

「シンクロ召喚！斬り拓け！《エミサリー・セイバー・ドラゴン》！！」

１本の日本刀を手に持ち、戦国時代の鎧みたいな物を着たヴァンダルギオンが姿を現した。

《エミサリー・セイバー・ドラゴン》　ＡＴＫ／３８００

『さて…我も本気で行くか』

「こいつがシンクロ召喚された時、墓地からカウンター罠を５枚まで手札に戻し、その数×３００ポイント攻撃力を上げる！墓地の《攻撃の無力化》《トラップ・ジャマー》《デストラクション・ジャマー》を手札に戻し、攻撃力を９００ポイントアップさせる！」

《エミサリー・セイバー・ドラゴン》　ＡＴＫ／３８００→４７００

あのドラゴンは、カウンター罠を手札から発動できるようにする効果を持っている。《トラップ・ジャマー》で罠カードは防がれる

し、モンスターを破壊しようにも《デストラクション・ジャマー》で妨害される…！

「もう1回だ！レベル7《裁きを下す者－ボルテニス》にレベル1《パラレル・ソーサラー》をチューニング！」

『後は任せたぞ』

また黄色い輪が出現し、今度は7つの星が輪の中で光り出す。

「舞い散る白羽が、天空を翔け現世を照らす！希望の光を振り翳せ！」

☆7＋☆1＝☆8

「シンクロ召喚！飛来せよ！《ライトエンド・ドラゴン》！」

天使の翼を4枚生やし、金の装飾品を身につけた純白の聖龍がフィールドに降り立つ。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「まだだ！墓地の代行者…ジュピターを除外し、手札から《マスター・ヒュペリオン》を特殊召喚する！」

太陽を司る代行者のリーダーが、炎の翼を生やして現れた。

《マスター・ヒュペリオン》　ＡＴＫ／２７００

凄い…！強いモンスターを一気に3体も呼び出した！

「バトル！エミサリー・セイバー・ドラゴンでシャイニング・フレア・ウィングマンを攻撃！紫電冥閃！」

『斬らせてもらう！ハァッ！』

今度はロディスが日本刀に紫の電撃を込めてシャイニング・フレア・ウィングマンを斬りつける。まず1体目…！

「ぐっ！」

十代　ＬＰ／２７００→１７００

「《ライトエンド・ドラゴン》の効果発動！戦闘を行う時、攻撃力と守備力を５００ポイントずつ下げる事で、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力を１５００ポイントダウンさせる！対象はストーム・ネオスだ！ライト・イクスパンション！」

ライトエンドが胴体の装飾品に嵌め込まれた宝玉から光を放ち、ストーム・ネオスの力を封じた。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００→２１００

《Ｅ・ＨＥＲＯ　ストーム・ネオス》　ＡＴＫ／３０００→１５００

「ライトエンドでストーム・ネオスに攻撃！シャイニングサプリメイション！」

ライトエンドが吐き出す光のブレスがストーム・ネオスを掻き消す。2体目…！

「ぐあぁっ！」

十代　ＬＰ／１７００→１１００

「《マスター・ヒュペリオン》でワイルドジャギーマンに攻撃！アポロヌス・デプティー！」

ヒュペリオンが両手で太陽の炎をビーム状にして飛ばし、ワイルドジャギーマンも焼き払った。　ヒュペリオンが両手で太陽の炎をビーム状にして飛ばし、ワイルドジャギーマンを焼き払った。３体目…！

十代　ＬＰ／１１００→１０００

「罠カード《レリーフ・バーナー》！除外されている代行者を墓地に戻し、１０００ポイントのダメージを与える！」

「何！？」

《レリーフ・バーナー》
通常罠（オリジナル）
ゲームから除外されている自分の「代行者」と名のついたモンスター１体を墓地に戻して発動する。
相手ライフに１０００ポイントダメージを与える。
その後、相手の墓地に存在するカード１枚を除外する。

「除外されている《神秘の代行者　アース》を墓地に戻し、効果発動！」

アースの幻影が現れて、杖から火炎放射を発射した。これが通っ

たらアニキの負けだ…！

「まだだ！速攻魔法（アタック・ギフト）！効果ダメージを受ける時、デッキの１番上のカードを墓地に送り、それがモンスターならその攻撃力分ライフを回復する！」

「！（魔法カード…！破壊効果でもないから防げない…！）」

《アタック・ギフト》
速攻魔法（オリジナル）
自分が効果ダメージを受ける時に発動する。
自分のデッキの１番上からカードを１枚墓地に送り、そのカードがモンスターだった場合、そのモンスターの攻撃力分のライフを回復する。

ここでモンスターを引けなかったらアニキの負けだ。でも、アニキなら…！

「ドロー！」

アニキがカードを引いた直後、火炎放射が直撃して爆発した。

「アニキ！」

「どうだ…？」

煙が晴れると、アニキはしっかり立っていた。ライフは…。

十代　ＬＰ／　３００

「３００…！」

「俺が引いて墓地に送ったのは、《ハネクリボー》だ！」

《ハネクリボー》
効果モンスター
星１／光属性／天使族／ＡＴＫ　３００／ＤＥＦ　２００
フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時に発動する。
発動後、このターンこのカードのコントローラーが受ける戦闘ダメージは全て０になる。

『クリクリ～！』

「ありがとな、相棒！」

凄い…！土壇場でモンスターを引き当てた…！これも諦めなかったからできた事なのかな？

「ライフが並んだ…！」

「まさか耐え切るとはな…。《レリーフ・バーナー》のもう１つの効果で、相手の墓地からカードを１枚除外する！《テイク・オーバー・ファイブ》を除外！」

《テイク・オーバー・ファイブ》には、ドローフェイズ時に墓地から除外する事でカードを１枚ドローする効果もある。アニキがドローする機会を少しでも多く潰すつもりだ。

「《マスター・ヒュペリオン》の効果発動！墓地の天使族モンスタ

ーを除外し、相手フィールド上のカードを1枚破壊する！墓地からボルテニスを除外し、テンペスターを破壊！ソーラー・プロミネンス！」

ヒュペリオンが右手から炎の束を放ち、テンペスターも焼き尽くした。これで4体目…！

「十代もそうだが、紅刃もとんでもない力の持ち主だ。もし《サイクロン》ではなく《天空の聖域》を引いていたら、《マスター・ヒュペリオン》の効果が2回使用可能になり、十代のモンスターは全滅していた…」

先生は冷静にデュエルを分析している。これは、紙一重のぎりぎりの戦いなんだ…。

「残りはマグマ・ネオス1体だけだ。でも、コンタクト融合したモンスターはエンドフェイズ時にデッキに戻るんだったよな？どのみちこれで全滅だ！」

「妙だ…」

「妙って…何がよ？」

「十代はなぜテンペスターの効果を使わなかった？伏せていた《アタック・ギフト》を墓地に送り、シャイニング・フレア・ウィングマンを戦闘破壊から守る事もできたはずだ。そうすれば、墓地にＥ・ＨＥＲＯが増えてさらに強化されたシャイニング・フレア・ウィングマンを次のターンに繋げられた。結果的にこの手段を取っていれば負けていたが、さすがに《レリーフ・バーナー》までは予想できないだろ」

「あ、言われてみれば…」

秋斗君の説明にルーナちゃんが納得する。確かに、紅刃君が《攻撃の無力化》《トラップ・ジャマー》《デストラクション・ジャマー》を持っていても、モンスターを1体でも残しておけば逆転できる確率は上がる。アニキは何でそうしなかったんだろ？

「ターンエンド！」

「……くく…」

「ん？」

「あっはははは！」

紅刃君がターンを終わらせると、突然アニキが笑い出した。

「最っ高に楽しいぜ！やっぱ紅刃はめちゃくちゃ強いな！」

「そ、そうか…？」

「だから俺もそれに応える！トリプルコンタクト融合には、まだ隠された力があるんだぜ？」

「隠された力？」

「さっき言った通り、マグマ・ネオスはエンドフェイズ時にデッキに戻る。この効果で融合デッキに戻った時、フィールド上のカードを全ては持ち主の手札に戻す！」

「何！？」

『くそ…やむを得ない、退却だ…！』

マグマ・ネオスがフィールドから消えて、道連れと言わんばかりに紅刃君のカードも全部手札に戻った。これでお互いのフィールドはがら空きだ。

紅刃
ＬＰ／　３００
手札／４
モンスター／なし
魔法・罠／なし

「（そういえばそんな効果だったっけ…）」

「フィールドがリセットされちゃった…」

「でも、手札がある分紅刃が有利じゃねえか。まあ、十代なら何かやらかしそうだけどな…」

勇香さんは次にアニキが何を引くか楽しみにしてるように見える。どことなくアニキに似てるんスよね…。

「十代！」

「？」

「俺の手札にある《マスター・ヒュペリオン》は、手札・フィール

ド・墓地から代行者を除外する事で手札から特殊召喚できる。墓地には、さっき《レリーフ・バーナー》のコストで戻したアースがいる。つまり…」

「俺がモンスターを引いたら俺の勝ち。引かなかったら紅刃の勝ち。このドローで勝負が決まる！」

このドローが勝負の分かれ目。でも、アニキなら…アニキならきっと引ける！

「俺の、ターン！！」

最高のカードを！

「……よっしゃあ！」

「！」

「墓地の《Ｅ・ＨＥＲＯ　ネクロダークマン》の効果発動！１度だけ、レベル５以上のＥ・ＨＥＲＯを生け贄なしで召喚できる！」

《Ｅ・ＨＥＲＯ　ネクロダークマン》
効果モンスター
星５／闇属性／戦士族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１８００
このカードが墓地に存在する限り１度だけ、自分はレベル５以上の「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体をリリースなしで召喚する事ができる。

「まさか…《テイク・オーバー・ファイブ》で墓地に送られた５枚目のカードか！？」

「へへ、当たりだ！」

道理でシャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力の計算が合わなかったわけッス…。５枚全部モンスターって、どこまで強運なんスか？

「召喚！《Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス》！！」

アニキの新たな切り札、ネオスが再びフィールドに現れた。

《Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス》　ＡＴＫ／２５００

「やっぱ引いたか…。俺の負けだな」

「楽しかったぜ、紅刃！ネオスでダイレクトアタック！ラス・オブ・ネオス！！」

ネオスが右手にエネルギーを溜めて、上から紅刃君に飛び掛かって殴りつけた。

「ぐあああっ！」

紅刃　ＬＰ／　３００→　０

十代　ＷＩＮ

「ったく、今まで以上に無茶苦茶なデュエルをしやがって…」

「そうか？ま、いいや。ガッチャ！最高に楽しいデュエルだったぜ

！」

「あんなとんでもドローを何度も見せられたらな…。でも、楽しかったのは否定しねえよ」

本当に凄いデュエルだった。２人共１歩も引かない限界のデュエル。見てるこっちもワクワクしてた。

「アニキ、お疲れ様ザウルス！」

「剣山！」

「紅刃、お疲れ様」

「月沙！ああ、サンキュな」

「私達じゃ、あの攻防にはついていけなかったでしょうね」

「紅刃、お前も十分無茶苦茶だろうが。よくあの状況からライフぎりぎりまで追い詰められたよな」

「たまたま手札がよかっただけだ。《天空の聖域》を引けてたら勝ってたかもしれないけどな…。惜しかった」

「私も負けてられないわね！もっと強くならないと！」

「十代、お前はどうやったらあんな戦術を実行できるんだ？ただでさえ融合とコンタクト融合を混ぜたデッキは事故率が高いというのに…」

「俺は自分が使いたいカードを使ってるだけだぞ？いつだってこいつらを信じてるからな」

「何はともあれ、２人共よくやった。私も学ぶところが数多くあったよ」

「紅刃も十代も予想以上に成長してるや。これからの活躍も楽しみだよ」

みんながいろいろ話している中、僕はデュエル中に考えた事を頭の中で整理した。

僕に足りないのは、『油断しない』『楽しむ』『諦めない』…この３つの精神。それがどれだけの力を持ってるかは、今のデュエルで実証された。

アニキや紅刃君はもちろん、他のみんなにもこれが備わっている。ちょっと油断する時もあるけど、基本的な姿勢は変わらない。

そして、『信じる』心もある。アニキも紅刃君も、自分のデッキのカードをとことん信じていた。だから、あんな凄いデュエルができた。

気づかせてくれたのは、他でもないアニキと紅刃君だ。

「アニキ、紅刃君！」

「ん？」

「どうした、翔？」

「ありがとうっス！」

僕は2人にお礼を言って頭を下げた。

「「は？」」

「それじゃ、僕は先に帰るっス！また明日！」

「あ、おい、ちょっと！」

アニキの制止を無視して、僕は急いでイエロー寮に向かった。

「ど、どうしたんだ、あいつ？」

「いきなり『ありがとう』っつわれても…」

「君達のデュエルで、何か学んだ事があったんだろう」

「ディヴァイン？」

「おじさん、もしくは先生と呼べ。その証拠に、さっきの翔の目が生き生きしていた」

「そういえばそうね。ま、元気は出たみたいね」

「よかったドン！」

「「？？？」」

帰ったらデッキを見直そう。1枚1枚が力を発揮できるように組み立てるんだ。今ならできそうな気がする。

『油断しない』『楽しむ』『諦めない』『信じる』！忘れないでいよう！さあ、やるぞ！

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第５５話　主人公どうしの対決は無茶苦茶が飛び交う（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「久々にかなりの長さになったわね」

フィレス『グルル、ガウルッ』

勇香「今までこの小説で十代のデュエルがなかった分、十代の使用カードがほぼ全部初登場だからな。カードの説明文だけで軽く３ページくらいは使ってんじゃねえか？」

ロコナ『ずっとデュエルさせてくれなかったから、ちょっと怒ってたのかな？』

勇香「いや、それは…ないとは言い切れねえな…」

璃音「カード考察に入りましょうか。今回紹介するのは、十代の代表的なモンスター《Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス》よ」

《Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス》
通常モンスター
星７／光属性／戦士族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ２０００
ネオスペースからやってきた新たなるＥ・ＨＥＲＯ。
ネオスペーシアンとコンタクト融合することで、未知なる力を発揮する！

璃音「ぱっと見は何の変哲もない通常モンスターだけど、様々な可

能性を秘めているわ」

勇香「E・HEROで通常モンスターで最上級モンスターだから、特殊召喚の手段がたくさんあるんだよな。《O－オーバーソウル》《思い出のブランコ》《正統なる血統》《E・HERO ネクロダークマン》《古のルール》…他にもあるだろ」

ロコナ『コンタクト融合に必要なモンスターなんだっけ？』

璃音「そうよ。フィールドにN（ネオスペーシアン）がいれば、ネオスとNをデッキに戻す事でコンタクト融合ができるわ。《融合》が必要ない代わりにエンドフェイズ時にデッキに戻ってしまうデメリットがついてるけど、《ネオスペース》や《インスタント・ネオスペース》を使えばフィールドに留める事ができるわよ」

勇香「《ネオス・フォース》とかのサポートカードもいろいろあるな。カテゴリや通常モンスターって事に恵まれてるからか、いろんな使い方ができるモンスターだ。上手くデッキを組めば面白いくらいポンポン出せるから試してみてくれ」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『感想待ってま～す！』

勇香「次回も見てくれよな！」

――――――――――――

いかがでしたか？

今回紅刃が使用した《パラレル・ソーサラー》は機皇帝プラシド∞さんが投稿してくださったオリカです。機皇帝プラシド∞さん、ありがとうございました。

はい、十代にやりたい放題させすぎました。書いてる内に、いつの間にか融合ＨＥＲＯが１ターンで５体も出されてました。一応紅刃もついていけてはいましたけど…。

では、また次回！

第５６話　レギュラーキャラはやっぱり強い（前書き）

第５６話です。今回は翔が活躍します。前回よりは短めですが…。

それではどうぞ！

第５６話　レギュラーキャラはやっぱり強い

ＳＩＤＥ／翔

「…できた」

あれから１週間経った。今日は休日で、僕は１週間前からずっと部屋に籠ってデッキを作っていた。１週間前のアニキと紅刃君のデュエルで学んだ事を生かすために。あ、授業にはちゃんと出てたよ？

そして、そのデッキは今完成した。

デッキは１から作り直した。後は、僕の力量次第だ。

僕はデュエルの相手を探すために、寮の部屋を飛び出した。

ＳＩＤＥ／ルーナ

私は今、十代や勇香と一緒にある特訓を見ている。

あ、丁度戻ってきた。

「お疲れ」

「ルーナ！うん、ありがとう」

月沙と紅刃が強化やら新調やらしたＤ・ホイールの試運転をしてたのよ。エンジンが強化されたらしくて、それに少しでも慣れる必要があるって紅刃が言ってたわ。

「Ｄ・ホイールの調子はよさそうだな」

「ああ。だいぶ馴染んできた」

「俺もライディングデュエルしてみてえな。もっと面白いデュエルができそうじゃん！」

「十代は厳しいんじゃねえか？ライディングデュエルは『Ｓｐｌ』って名前がついた魔法カードじゃないと使用できねえんだ。いろんな融合に関する魔法カードを使うＨＥＲＯデッキだと、それが軒並み使用禁止だから上手く戦えねえだろ」

「マジかよ！？参ったな…」

勇香がルールの一部を説明すると、十代は残念そうな顔をした。融合をほぼ完全に封じらちゃ、いくら十代でもどうしょうもないわよね。

「あれ？みんな何やってるんスか？」

急に誰かに声を掛けられて、そっちに振り返った。

「翔？」

「あ、みんなおはようっス」

たった今来た翔は、私達に遅れて挨拶した。

「おはよう。D・ホイールの練習をしてたの」

「新調したばかりだし、早いとこ慣れとかないとな」

「ああ、なるほど。ここなら迷惑になりにくいっスよね」

ここはレッド寮の外れにある広場。広いし建物も遠くにレッド寮が見えるくらいで人気は少ない。いつもの広場はD・ホイールを乗り回すには狭いから、結果的にここを使う事になったのよ。

「あ、そうだ！誰か僕とデュエルしてくれないっスか？」

「デュエル？」

「デッキを組み直したんだけど、早速試したくて…」

多分、1週間前のデュエルが原因かしら？翔って気弱な割には意外と行動力があるのよね…。

「本当か！？だったら俺と…」

「ちょっと待ちなさい」

デュエルと聞いて早速やる気満々の十代を、私はいち早く制した。

「ここは私がやらせてもらうわよ」

「え？俺だってやりたいのに…」

「あんたはこの前紅刃とデュエルしたでしょうが。あんな凄いデュエルをを見せられちゃ、私だってじっとしてられないわよ」

「…まあ、いいか！楽しいデュエルを見せてくれよ！」

「そのつもりっス！」

私と翔はある程度離れてデュエルディスクの準備をした。紅刃達は邪魔にならないようにフィールドになる場所から離れた。

「準備はいいっスか？」

「ええ！どこからでもかかってきなさい！」

さてと、１週間前のデュエルを見てどれだけ変わったか、確かめさせてもらうわよ！

「「デュエル！」」

ルーナｖｓ翔

「先攻は貰うわよ！」

「どうぞ」

「私のターン！《デュアル・ランサー》を召喚！」

槍を構えた赤い人型の海竜が現れる。攻撃力はそこそこあるわ。

《デュアル・ランサー》
デュアルモンスター
星４／水属性／海竜族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ１４００
このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。
●このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

《デュアル・ランサー》　ＡＴＫ／１８００

「カードを2枚セットしてターンエンドよ！」

ルーナ
ＬＰ／４０００
手札／3
モンスター／《デュアル・ランサー》（ＡＴＫ／１８００）
魔法・罠／リバース×2

「僕のターン！《サブマリンロイド》を召喚！」

潜水艦をデフォルメしたようなモンスターが現れた。あのモンスターって確か…。

《サブマリンロイド》
効果モンスター
星４／水属性／機械族／ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ１８００
このカードは相手プレイヤーに直接攻撃することができる。
この時、相手プレイヤーに与える戦闘ダメージはこのカードの元々の攻撃力となる。
また、ダメージステップ終了時にこのカードの表示形式を守備表示にする事ができる。

《サブマリンロイド》　ＡＴＫ／　８００

「このモンスターは相手モンスターを無視して直接攻撃できるっス！《サブマリンロイド》でダイレクトアタック！ディープ・デス・インパクト！」

《サブマリンロイド》が地中に潜ってランサーを通り越し、私の目の前で浮上して私に体当たりを仕掛けてきた。

「ぐっ！」

ルーナ　ＬＰ／４０００→３２００

「お、先制したか」

勇香が感嘆の言葉を呟くと、《サブマリンロイド》はまた地中に潜って翔のフィールドで浮上した。

「攻撃した《サブマリンロイド》は守備表示に変更できるっス！」

《サブマリンロイド》　ＡＴＫ／　８００→ＤＥＦ／１８００

「メイン2で永続魔法《未来融合ーフューチャー・フュージョン》を発動！融合モンスターを1体選択してそのモンスターの融合素材をデッキから墓地に送り、2ターン後に選択した融合モンスターを特殊召喚する！」

未来融合…。翔の事だから、大方スーパービークロイドあたりでしょうね。

「僕が選ぶのは、《極戦機王ヴァルバロイド》！」

「え？」

《極戦機王ヴァルバロイド》？そんなモンスター使ってたっけ？

「あれって…！？」

「月沙、何か知ってるのか？」

「え？あ、あれは、ロイドと名のついたモンスターを5体融合させる事で初めて出せるモンスターだよ」

「5体融合！？」

「その通りっス！僕が墓地に送るのは、《カイトロイド》3体と《ドリルロイド》《ジャイロイド》だ！」

《ドリルロイド》
効果モンスター
星4／地属性／機械族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１６００

このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算前にそのモンスターを破壊する。

《ジャイロイド》
効果モンスター
星３／風属性／機械族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ１０００
このカードは１ターンに１度だけ、戦闘によっては破壊されない。
（ダメージ計算は適用する）

５体融合って、どんだけやばい効果を持ってるのよ…？未来融合は早めに除去した方がよさそうね。さすがに正規融合ははできないでしょ。

「（でも、あのカードは漫画版でしか使ってなかったはず…。私達が介入した事で原作が少し変わったのかな？）」

「カードを３枚セットしてターンエンド！」

翔
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《サブマリンロイド》（ＤＥＦ／１８００）
魔法・罠／《未来融合ーフューチャー・フュージョン》リバース×３

伏せカードが一気に３枚…。迂闊に動けないわね。

「私のターン！」

でも、未来融合はさっさと掃除しないと！

「速攻魔法（サイクロン）を発動！未来融合を破壊するわ！」

「そう来ると思ったっス！罠カード《悪魔の手鏡》！魔法・罠を対象に発動した魔法カードの対象を、別の魔法・罠に移し替える！」

《悪魔の手鏡》
通常罠
フィールド上の魔法・罠カード1枚を対象に発動した相手の魔法を、別の正しい対象に移し替える。

「この効果で《サイクロン》の対象を別の伏せカードに変更するよ！」

「未来融合を守る手段も考えてあるみたいね…！」

「それだけじゃないよ！破壊された《ワンダーガレージ》の効果発動！セットされたこのカードが破壊された時、手札のレベル4以下のロイドを特殊召喚する！」

《ワンダーガレージ》
通常罠
セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、手札からレベル4以下の「ロイド」と名のついた機械族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

「破壊された時に発動する罠…！？」

「手札の《エクスプレスロイド》を特殊召喚！」

今度は新幹線をコミカルにしたモンスターが現れた。ロイドって、

乗り物をマスコットっぽくしたモンスターばかりなのよね。

《エクスプレスロイド》
効果モンスター
星４／地属性／機械族／ＡＴＫ　４００／ＤＥＦ１６００
このカードの召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「エクスプレスロイド」以外の「ロイド」と名のついたモンスター２体を手札に加える事ができる。

《エクスプレスロイド》　ＤＥＦ／１６００

「《エクスプレスロイド》がフィールドに出た時、自分の墓地のロイド２体を手札に加える！《ドリルロイド》と《ジャイロイド》を手札に加えるっス！」

《サイクロン》をかわしただけじゃなくて、フィールドのモンスターと手札を同時に増やした…。私が真っ先に未来融合を破壊しに行く事を読んで、あえて《エクスプレスロイド》を温存させたのね。

「ここは押し切るわよ！《エヴォルテクター　シュバリエ》を召喚！」

騎士の名を冠する赤い戦士が現れた。再度召喚しなくても十分戦えるわ。

《エヴォルテクター　シュバリエ》　ＡＴＫ／１９００

「装備魔法（スーペルヴィス）を《デュアル・ランサー》に装備！装備モンスターは再度召喚された状態になるわ！」

ランサーが朱色のオーラを纏い始める。ここは少しでも多くダメージを与えないと…！

「バトル！《デュアル・ランサー》で《エクスプレスロイド》を攻撃！リバイス・スピア！」

ランサーが水を纏った鋼鉄の槍で新幹線もどきを貫く。

「うわっ！？」

翔　ＬＰ／４０００→３８００

「あれ？何でライフが…？」

「再度召喚された《デュアル・ランサー》は貫通効果持ってるのよ！」

効果の説明をした後に、私は伏せカードを１枚発動させた。

「リバースカード発動！速攻魔法（デュアルスパーク）！レベル４のデュアルモンスターをリリースし、フィールド上のカード１枚を破壊し、カードを１枚ドローする！」

《デュアルスパーク》
速攻魔法
自分フィールド上に表側表示で存在するレベル４のデュアルモンスター１体をリリースし、フィールド上に存在するカード１枚を選択して発動する。
選択したカードを破壊し、自分のデッキからカードを１枚ドローする。

「《デュアル・ランサー》をリリースして《サブマリンロイド》を破壊！」

ランサーが青白い電撃になって潜水艦もどきに向かって飛んでいき、貫通して爆発。互いに消滅した。

「《デュアル・ランサー》と《エヴォルテクター　シュバリエ》でダイレクトアタック！リバイス・スピア！フレイム・エッジ！」

水を纏う槍と炎を纏う剣が翔を襲い、爆発が起こる。これでライフは一気に…。

「…これくらいじゃやられないよ」

翔　ＬＰ／３８００

あれ？

「ライフが減ってない？」

「墓地の《カイトロイド》を除外する事で、直接攻撃のダメージを０にできる！２体除外して２回分ダメージを帳消しにしたっス！」

《カイトロイド》
効果モンスター（ＴＦ３オリジナル）
星１／風属性／機械族／ＡＴＫ　２００／ＤＥＦ　４００
相手の直接攻撃による戦闘ダメージ計算時、このカードを手札から捨てて発動する。
その直接攻撃によって発生する自分への戦闘ダメージを０にする。

また、自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、相手の直接攻撃によって発生する自分への戦闘ダメージを1度だけ0にする。

「なるほど…。未来融合で3体まとめて墓地に送ったのはそういうわけね」

墓地にはまだ《カイトロイド》が1体残ってる。後1回は直接攻撃を防がれるわね。

「ちゃんと考えてんじゃない！カードを1枚セットしてターンエンドよ！」

ルーナ
ＬＰ／３８００
手札／２
モンスター／《エヴォルテクター　シュバリエ》（ＡＴＫ／１９００）《デュアル・ランサー》（ＡＴＫ／１８００）
魔法・罠／リバース×２

「僕のターン！…よし！リバースカードオープン！」

このタイミングで伏せカード？何をするつもりなの？

「罠カード《チェーン・マテリアル》！このターン、融合召喚をする時は必要な融合素材を手札・デッキ・フィールド・墓地から除外して行う事ができる！」

《チェーン・マテリアル》
通常罠

このカードの発動ターンに融合召喚を行う場合、融合モンスターカードによって決められたモンスターを自分の手札・デッキ・フィールド・墓地から選択してゲームから除外し、これらを融合素材とする事ができる。
このカードを発動したターン攻撃する事はできず、この効果で融合召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

要するに、デッキからも融合できるって事ね。そして、今引いたのは間違いなく融合関連のカード…！

「魔法カード《ビークロイド・コネクション・ゾーン》！ビークロイドを融合召喚する！」

《ビークロイド・コネクション・ゾーン》
通常魔法
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、「ビークロイド」と名のついた融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。
このカードによって特殊召喚したモンスターは、魔法・罠・効果モンスターの効果によっては破壊されず、効果を無効化されない。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「デッキから《トラックロイド》《エクスプレスロイド》《ドリルロイド》《ステルスロイド》を除外！」

《トラックロイド》
効果モンスター
星４／地属性／機械族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ２０００
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備する。

このカードの攻撃力は、装備したモンスターカードの攻撃力分だけアップする。

《ステルスロイド》
効果モンスター
星４／闇属性／機械族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ　０
自分フィールド上にこのカード以外の「ロイド」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードが戦闘を行った自分ターンのバトルフェイズ終了時に、フィールド上の魔法または罠カード１枚を破壊する。

「融合召喚！《スーパービークロイド－ステルス・ユニオン》！」

両肩が新幹線、両足がドリル、背中にステルス戦闘機が変形・合体してるようなロボットが現れた。

《スーパービークロイド－ステルス・ユニオン》
融合・効果モンスター
星９／地属性／機械族／ＡＴＫ３６００／ＤＥＦ３０００
「トラックロイド」＋「エクスプレスロイド」＋「ドリルロイド」＋「ステルスロイド」
１ターンに１度、自分のメインフェイズ時にフィールド上に存在する機械族以外のモンスター１体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。
この効果によってモンスターを装備している場合、相手フィールド上の全てのモンスターに１回ずつ攻撃をする事ができる。
このカードが攻撃をする場合、このカードの元々の攻撃力は半分になる。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与え

る。

《スーパービークロイド－ステルス・ユニオン》　ＡＴＫ／３６００

「厄介なモンスターが出てきたわね…」

「ステルス・ユニオンの効果発動！１ターンに１度、フィールド上の機械族以外のモンスター１体を、装備カード扱いとしてこのカードに装備する！《エヴォルテクター　シュバリエ》を装備！」

シュバリエが光になってステルス・ユニオンに吸収された。装備されたんじゃ、墓地利用のカードも使えないじゃない…！

「《チェーン・マテリアル》を発動したターンは攻撃できず、この効果で融合召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。でも、《ビークロイド・コネクション・ゾーン》で特殊召喚したモンスターは、魔法・罠・効果モンスターの効果によっては破壊されず、効果を無効化されない！もちろん、《チェーン・マテリアル》の効果でも破壊される事はないっス！」

「カード効果で破壊されないんじゃ、対処方法も限られてくるな…」

「さらに、《ジャイロイド》を守備表示で召喚！」

ヘリコプターの姿をした、青い機械族が召喚された。

《ジャイロイド》　ＤＥＦ／１０００

「カードを１枚セットしてターンエンド！」

翔
ＬＰ／３８００
手札／１
モンスター／《スーパービークロイドーステルス・ユニオン》（ＡＴＫ／３６００）《ジャイロイド》（ＤＥＦ／１０００）
魔法・罠／《未来融合ーフューチャー・フュージョン》リバース×１

翔の残りの手札は守備モンスターを問答無用で破壊する《ドリルロイド》。フィールドにはモンスターを吸収するステルス・ユニオン。モンスターをどんな表示形式にしても、ほぼ確実に除去されてしまう。

翔は間違いなく強くなってる。下手したら足元掬われるかもしれないわね…！

ＳＩＤＥ／翔

何とか《チェーン・マテリアル》と《ビークロイド・コネクション・ゾーン》のコンボで有利になった。普段の僕ならここで気を抜いていたはず。

でも、もうそれはない。相手が何をしてくるかなんてわからないから。だからこそ、デュエルは面白いんだ。

「私のターン！魔法カード《強欲な壺》を発動！カードを2枚ドロ

ー！私も永続魔法《未来融合ーフューチャー・フュージョン》を発動するわ！」

ルーナちゃんも未来融合を…？

「《超合魔獣ラプテノス》を選択！素材となるデュアルモンスター2体…《フェニックス・ギア・フリード》と《チューンド・マジシャン》をデッキから墓地に送るわ！」

両方、ルーナちゃんのデッキで重要なモンスターだ。まさかこのターンですぐに使うつもりじゃ…。

「魔法カード《イーティング・ドロー》を発動！相手フィールド上の表側表示の魔法・罠を墓地に送り、カードを2枚ドローする！」

《イーティング・ドロー》
通常魔法（オリジナル）
相手フィールド上に表側表示で存在する魔法・罠カード1枚を墓地に送り、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「墓地に送るのは当然未来融合よ！」

ソリッドビジョンで表示されている未来融合のカードが消えていく。これでヴァルバロイドは出せなくなった。

「魔法カード《零の誘惑》！手札から攻撃力0のモンスターを捨てて、カードを2枚ドローする！」

《零の誘惑》
通常魔法（オリジナル）

手札から攻撃力０のモンスター１体を捨てて発動する。
自分のデッキからカードを２枚ドローする。

「デュアルモンスター《炎妖蝶ウィルプス》を召喚！」

少し大きめの蝶が現れた。羽は朱色の炎でできている。

《炎妖蝶（えんようちょう）ウィルプス》
デュアルモンスター
星４／炎属性／昆虫族／ＡＴＫ１５００／ＤＥＦ１５００
このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。
●このカードをリリースする事で、自分の墓地に存在する「炎妖蝶ウィルプス」以外のデュアルモンスター１体を特殊召喚する。
この効果によって特殊召喚されたデュアルモンスターは再度召喚された状態になる。

《炎妖蝶ウィルプス》　ＡＴＫ／１５００

「そして、装備魔法（スーペルヴィス）をウィルプスに装備！」

「２枚目！？」

「これでウィルプスは効果モンスターになったわ！ウィルプスの効果発動！このモンスターをリリースする事で、墓地のデュアルモンスター１体を再度召喚した状態で特殊召喚する！《チューンド・マジシャン》を特殊召喚！」

ウィルプスが炎に包まれる球状のまま巨大化し、炎の中から緑の魔法使いが飛び出した。

《チューンド・マジシャン》　ＡＴＫ／１８００

「あれって確か、再度召喚されたらチューナーになるんだっけ？」

「ああ。あいつ、シンクロを狙ってるな？」

「まだよ！墓地に送られた《スーペルヴィス》の効果で、墓地から《フェニックス・ギア・フリード》を特殊召喚！」

白と赤の鎧を着込んだ炎の騎士が《チューンド・マジシャン》の横に並んだ。

《フェニックス・ギア・フリード》　ＡＴＫ／２８００

「レベル４《デュアル・ランサー》にレベル４《チューンド・マジシャン》をチューニング！」

マジシャンが４つの朱色の輪になり、その中にランサーが飛び込んで４つの星になる。

「虚無と漆黒を重ねし魂、朱の灯火を宿し双炎と為せ！」

☆４＋☆４＝☆８

「シンクロ召喚！轟誕せよ！《ブラック・ブルドラゴ》！」

全身が黒い巨大なドラゴン。ルーナちゃんの切り札だ。

《ブラック・ブルドラゴ》　ＡＴＫ／３０００

「魔法カード《死者蘇生》！墓地からモンスターを特殊召喚する！《レプティレス・ナージャ》を特殊召喚！」

『はいは～い。やっと出番が来たわね～』

下半身が蛇の胴体になっていて、頭からコブラの上半身を生やした金髪の女の子が墓地から蘇った。

《レプティレス・ナージャ》　ＡＴＫ／　０

「さらに装備魔法（ゼロ・サポート）をナージャに装備！装備モンスターの攻撃力は、自分の他の１番攻撃力が高いモンスター１体の攻撃力と同じになる！」

《ゼロ・サポート》
装備魔法（オリジナル）
攻撃力０のモンスターにのみ装備可能。
装備モンスターの攻撃力は、自分フィールド上に表側表示で存在する攻撃力が１番高いモンスター１体の攻撃力と同じ数値になる。
装備モンスターが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードを墓地に送る事でもう１度バトルフェイズを行う事ができる。

「今の私のフィールドで攻撃力が１番高いのは、攻撃力３０００の《ブラック・ブルドラゴ》！よって、ナージャの攻撃力も３０００よ！」

《レプティレス・ナージャ》　ＡＴＫ／　０→３０００

「攻撃力が一気に３０００に！？」

いや、それだけじゃない！《レプティレス・ナージャ》の効果って確か…！

「バトル！《レプティレス・ナージャ》でステルス・ユニオンに攻撃！ゼロ・ポイズン！」

ナージャが紫の球体を創り出してステルス・ユニオンに投げつけると、ステルス・ユニオンは片腕で弾こうとした。すると、球体は弾かれずに体内に入り込んでしまった。

ルーナ　ＬＰ／３２００→２６００

「ナージャは戦闘では破壊されないわ！そして、ナージャと戦闘をした相手モンスターの攻撃力はバトルフェイズ終了時に０になる！《ブラック・ブルドラゴ》と《フェニックス・ギア・フリード》で《ジャイロイド》に攻撃！デュアリング・フレア！鳳凰炎刃！」

巨大な火球と炎の刃が連続で決まり、《ジャイロイド》が破壊されてしまった。１ターンに１度だけ戦闘で破壊されない効果も、これじゃあまり意味がない。

「そして、《ゼロ・サポート》のもう１つの効果を発動するわ！このカードを墓地に送る事で、もう１度バトルフェイズを行う！」

「えっ！？」

《レプティレス・ナージャ》　ＡＴＫ／　０

「当然、ステルス・ユニオンの攻撃力も０よ！」

《スーパービークロイド－ステルス・ユニオン》　ＡＴＫ／３６００↓　０

「もう１度バトル！《ブラック・ブルドラゴ》でステルス・ユニオンを攻撃！デュアリング・フレア！」

朱色の火球が今度はステルス・ユニオンを焼き尽くす。ほぼそのままの衝撃が僕を襲った。

「うわぁぁぁっ！」

翔　ＬＰ／３８００↓　８００

「翔！？」

「直接攻撃とほとんど変わらないダメージだ…！」

「《フェニックス・ギア・フリード》でダイレクトアタック！鳳凰炎刃！」

「く…墓地の《カイトロイド》を除外して、直接攻撃のダメージを０にする！」

《カイトロイド》の幻影が僕を攻撃から守ってくれた。でも、もうこれで…。

「《カイトロイド》…使い切ったわね」

「く…！」

「次は逃げられないわよ！ターンエンド！」

ルーナ
ＬＰ／２６００
手札／０
モンスター／《ブラック・ブルドラゴ》（ＡＴＫ／３０００）《フェニックス・ギア・フリード》（ＡＴＫ／２８００）《レプティレス・ナージャ》（ＡＴＫ／　０）
魔法・罠／《未来融合ーフューチャー・フュージョン》リバース×２

やっぱりルーナちゃんは強い…！未来融合で《カイトロイド》を墓地に送ってなかったら負けてた。

「翔は何とか凌いだとはいえ、一気に不利になったな」

「まだ勝負はわからないぜ？翔にはまだドローが残ってる！何を引くんだろうな？」

アニキはこのデュエルを純粋に楽しんでる。そうだ、もっと楽しまないと！それに、まだ終わってない！

「僕のターン！ドロー！」

…これは賭けだ。最終的にロイド５体と『あれ』が揃えば行ける…！

「魔法カード《命削りの宝札》！5ターン後に手札を全て捨てる代わりに、手札が5枚になるようにカードをドローする！」

祈るような気持ちでカードを4枚引く。結果は…。

「…来た！」

「…！」

「手札から《エクスプレスロイド》を召喚！」

3体目の《エクスプレスロイド》。まずはこのモンスター！

《エクスプレスロイド》　DEF／1600

「《エクスプレスロイド》が召喚された時、墓地のロイド2体を手札に加える！選ぶのは《サブマリンロイド》と《ジャイロイド》！」

これで、切り札を出す準備が整った！

「魔法カード発動！《パワー・ボンド》！」

「《パワー・ボンド》！？」

「おい、あれって…！」

「手札とフィールドから素材を墓地に送り、機械族の融合モンスターを攻撃力を2倍にして融合召喚する！フィールドの《エクスプレスロイド》と、手札の《サブマリンロイド》《ジャイロイド》《ドリルロイド》《デコイロイド》を融合！」

《デコイロイド》
効果モンスター
星２／風属性／機械族／ＡＴＫ　３００／ＤＥＦ　５００
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、相手は「デコイロイド」以外の表側表示のモンスターを攻撃対象に選択できない。

「融合素材が５体！？」

「あいつまさか…！？」

「融合召喚！《極戦機王ヴァルバロイド》！！」

赤い機体が地面を揺るがす。見上げるほど巨大なロイドの最強モンスターが今、フィールドに降り立った。

《極戦機王（きょくせんきおう）ヴァルバロイド》
融合・効果モンスター
星１２／地属性／機械族／ＡＴＫ４０００／ＤＥＦ４０００
「ロイド」と名のついた機械族モンスター×５
このカードは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる。

このカードが攻撃した相手の効果モンスターの効果をダメージ計算後に無効化する。
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、相手ライフに１０００ポイントダメージを与える。
このカードは相手プレイヤーに直接攻撃をする事はできない。

《極戦機王ヴァルバロイド》　ＡＴＫ／４０００→８０００

「攻撃力８０００!?」

「本当に出しやがった…！」

「まさか正規融合で出すなんて…！?」

「攻撃力が８０００だから…元々の攻撃力は４０００か?」

「すっげえ!行け、翔!」

上から順に、ルーナちゃん、勇香さん、月沙さん、紅刃君、アニキ。僕も正規融合で出せるとは思わなかったよ。

「これはかなりやばいわね…」

「バトル!ヴァルバロイドで《ブラック・ブルドラゴ》に攻撃!オメガ・ロイド・ブラスター!」

ヴァルバロイドが極太のレーザー砲を発射した。このまま決まれば僕の勝ちだ!

「罠カード《ゼロ・シャット》!私のフィールドの攻撃力０のモン

スターを次のスタンバイフェイズ時まで除外して、このターンの戦闘ダメージを０にする！」

《ゼロ・シャット》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在する攻撃力０のモンスター１体を除外する事で、エンドフェイズ時まで自分が受ける戦闘ダメージを０にする。
次のターンのスタンバイフェイズ時、この効果で除外したモンスターをフィールドに戻す。

「《レプティレス・ナージャ》を除外！」

『私が戻ってくるまで持ちこたえてくださいよ～』

「（わかってるわよ！）」

《レプティレス・ナージャ》が除外されると同時に、ブルドラゴにレーザー砲が炸裂した。このターンで決めるのは無理でも、できる限り追い詰める！

「《ブラック・ブルドラゴ》の効果…」

「ヴァルバロイドが戦闘破壊したモンスターの効果は無効化されるっス！」

「え！？そんな…！？」

「さらに、戦闘破壊した時に相手に１０００ポイントのダメージを与える！アフター・ボム！」

ヴァルバロイドが今度は爆弾を1発撃ち出し、爆発させてルーナちゃんにダメージを与えた。

「きゃあっ！？」

ルーナ　ＬＰ／２６００→１６００

「まだまだ！ヴァルバロイドは１ターンに2回攻撃できるっス！」

「何だそりゃ！？」

「《パワー・ボンド》で攻撃力が2倍になってるだけでも厄介だってのに…！」

「あんな強いモンスターがいたんだな！」

「その代わり、ヴァルバロイドは直接攻撃ができないデメリットを持ってる。それでも十分強いけどね」

「次は《フェニックス・ギア・フリード》を攻撃だ！オメガ・ロイド・ブラスター2連打！」

ヴァルバロイドは今度は《フェニックス・ギア・フリード》を撃ち抜き、破壊した直後に爆弾を発射する体勢に入った。

「戦闘破壊した事で効果発動！相手に１０００ポイントのダメージを与える！アフター・ボム！」

また爆弾が発射され、ルーナちゃんの手前で爆発した。

「うぅっ！つぅ…！」

ルーナ　ＬＰ／１６００→　６００

「手札を1枚捨てて、罠カード《レインボー・ライフ》を発動！このターン、僕へのダメージを全てライフの回復に変える！」

《レインボー・ライフ》
通常罠
手札を1枚捨てる。
このターンのエンドフェイズ時まで、自分が受けるダメージは無効になり、その数値分ライフポイントを回復する。

《パワー・ボンド》を発動したターンの終わりに、僕はこの効果で融合召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受けてしまう。でも、効果ダメージさえ受けなくなればこのデメリットを回避できる。

「エンドフェイズ時、《パワー・ボンド》の効果で融合召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受けるけど、《レインボー・ライフ》の効果で代わりにその数値分ライフを回復する！」

翔　ＬＰ／　８００→４８００

「あいつ、《パワー・ボンド》のリスクを逆に利用しやがった！」

「一気に４０００も回復かよ…」

「ターンエンド！」

翔
ＬＰ／４８００
手札／０
モンスター／《極戦機王ヴァルバロイド》（ＡＴＫ／８０００）
魔法・罠／なし

手札から捨てたのは《ダンプロイド》。墓地から除外すればロイドを破壊から守る事ができる。

《ダンプロイド》
効果モンスター（オリジナル）
星２／地属性／機械族／ＡＴＫ　９００／ＤＥＦ１５００
このカードを墓地から除外する事で、自分フィールド上に表側表示で存在する「ロイド」と名のついたモンスターはエンドフェイズ時まで破壊されない。

これでヴァルバロイドはまず破壊されない。ライフも大幅に回復したし、僕が断然有利だ。

「（かなりやばいわね…。《ダンプロイド》が墓地にいるから破壊はできない。まだナージャがいるけど、エンドフェイズになれば攻撃表示になる。おまけに、《フェニックス・ギア・フリード》は『通常モンスターとして扱う効果』も無効にされてて蘇生させづらくなってる。これでいいカードが来なきゃ私の負け…）」

「おいおい、翔の奴めちゃくちゃ強くなってねえか？」

「それだけ紅刃と十代のデュエルが強い影響を与えてるって事だよ」

「でも、ルーナもまだ負けちゃいない。どっちが勝ってもおかしくねえよ」

「わくわくするな！これだからデュエルは面白いんだ！」

僕は負けないよ。ルーナちゃんはどうする…？

「（何でもいい。この伏せカードを発動させるカードさえ引ければ…！）私のターン！！」

ルーナちゃんは引いたカードをゆっくり確認して…

「…上出来よ」

ニヤリと口を歪めた。

「翔！この勝負、貰ったわ！」

「え？」

「スタンバイフェイズに、《ゼロ・シャット》の効果で除外した《レプティレス・ナージャ》がフィールドに戻る！」

空間に穴が空き、中からさっき除外された《レプティレス・ナージャ》が出てきた。

《レプティレス・ナージャ》　ＡＴＫ／　０

『あらら…すっかり更地になっちゃってるわね～』

「（あの規格外マシンのせいでね。でも、このターンで決めるわよ！）罠カード《ゼロ・リロード》！手札の攻撃力０のモンスターをデッキに戻し、デッキから攻撃力０のモンスターを手札に加える！」

《ゼロ・リロード》
通常罠（オリジナル）
手札の攻撃力０のモンスターを任意の数だけデッキに戻す。
その後、戻した数だけ自分のデッキから攻撃力０のモンスターを選択し、手札に加える。

「手札の《ゼロ・ガードナー》をデッキに戻し、デッキから《マジシャン・オブ・ゼロ》を手札に加える！」

「《マジシャン・オブ・ゼロ》！？」

しまった！あのモンスターは…！

「私の場に元々の攻撃力が０のモンスターがいる時、お互いの墓地のモンスター…《フェニックス・ギア・フリード》と《ダンプロイド》を１体ずつ除外して、《マジシャン・オブ・ゼロ》を特殊召喚！」

朱色の杖を握った緋色の魔術師。攻撃力０の、ルーナちゃんのもう１つの切り札…！

《マジシャン・オブ・ゼロ》　ＡＴＫ／　０

「《マジシャン・オブ・ゼロ》は戦闘で破壊されず、攻撃力０のモンスターの戦闘ダメージは全て相手が受ける！」

「ヴァルバロイドの攻撃力は８０００…」

「たった一撃で８０００ダメージ…！」

て事は…僕の負けか…。

「倒せないなら倒さなきゃいいのよ！《マジシャン・オブ・ゼロ》で《極戦機王ヴァルバロイド》に攻撃！マジック・エルプション！！」

緋色の魔術師が放つ朱色の光弾がヴァルバロイドに命中し、大爆発を引き起こした。

「うわぁあぁあぁぁぁ！！」

翔　ＬＰ／４８００→　０

ルーナ　ＷＩＮ

「負けた…」

「ふぅ！間一髪だったわね…」

そう簡単には勝てないか…。デュエルには負けたし、悔しい。でも、何か清々しい気分だ。アニキも、負けた時はこんな気持ちなのかな？

カードとデュエルディスクを片付けると、ルーナちゃん達が近づいてきた。

「一気に強くなったわね。《マジシャン・オブ・ゼロ》がなかったら負けてたわ」

「見違えたよ。まさかヴァルバロイドを使うなんてね」

「ルーナちゃん、月沙さん…」

「大したもんだぜ！成長したな！」

「うわっ！？」

勇香さんが少し乱暴に頭を撫でてきた。何ていうか、勇香さんって姉御肌みたいな感じだよね。

「ヴァルバロイドを正規融合しただけでも驚きだってのに、《パワー・ボンド》のリスクまで利用するなんてな。十代もそのうち足元掬われるぞ？」

「掬われたら掬い返すだけさ！でも、今の翔ならもっといいデュエルができそうだ」

「紅刃君、アニキ…」

「よし！翔、俺とデュエルしようぜ！」

「アニキと？」

突然、アニキが直接僕にデュエルを申し込んできた。

「もう我慢なんてしてられねえ！お前やヴァルバロイドと勝負してみたいんだ！」

「…うん！やろう！」

僕は笑顔でそれに応じた。アニキ達が改めて僕を認めてくれたようで、嬉しかった。

「あ、そうそう！忘れるところだった」

デュエルの準備をしようとしたアニキは、手を止めて僕とルーナちゃんに向き直り、

「ガッチャ！２人共いいデュエルだったぜ！」

お決まりのポーズで僕達の健闘を称えてくれた。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第５６話　レギュラーキャラはやっぱり強い（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「翔も強くなったもんだな」

璃音「なかなかいいデュエルだったわね。《レインボー・ライフ》の使い方も無駄がなくて好印象よ」

フィレス『ガルルッ』

ロコナ『【ロイド】って意外と強いんだね！』

勇香「『意外と』は余計だ。にしても、《チェーン・マテリアル》とヴァルバロイドが入るだけであそこまで戦えるようになるんだな」

璃音「それじゃ、カード考察に入りましょうか。今回紹介するのは、翔の新たな切り札《極戦機王ヴァルバロイド》よ」

《極戦機王ヴァルバロイド》
融合・効果モンスター
星１２／地属性／機械族／ＡＴＫ４０００／ＤＥＦ４０００
「ロイド」と名のついた機械族モンスター×５
このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。
このカードが攻撃した相手の効果モンスターの効果をダメージ計算後に無効化する。
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、相手ライフに１０００ポイントダメージを与える。

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃をする事はできない。

璃音「ロイド5体で融合召喚できるモンスターよ。さすがに出しにくさが目立つわね」

ロコナ『融合系のカードとロイド5体が揃う事ってなかなかないよね』

勇香「《幻想召喚師》で一時的に呼び出す手はあるけどな。基本的には《未来融合ーフューチャー・フュージョン》で好きなロイド5体を墓地に送るのに使われるだろ」

璃音「もし召喚できれば、戦闘で強力な効果を発揮できるわ」

勇香「攻撃力４０００なのに2回攻撃できるし、戦闘破壊したモンスターの効果は無効になるからリクルーターとかの効果も使えない。おまけに戦闘破壊したら１０００ダメージって、どんな化け物だよ…」

ロコナ『その代わり、直接攻撃はできないよ！破壊効果にも弱いから注意してね！』

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『感想待ってま～す！』

勇香「次回も見てくれよな！」

ーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

今回ルーナが使用した《零の誘惑》は言羽・D・カタストロフィーさんが投稿してくださったオリカです。言羽・D・カタストロフィーさん、ありがとうございます。

最近、小説を読んでると翔の扱いが悲惨な事になってるので、この小説では強化してみました。書いててわかったんですが、【ロイド】って案外強いですね。作中みたいにヴァルバロイドを《パワー・ボンド》で正規融合なんて光景は滅多にお目にかかれませんけど…。

ホワイトデーの番外編も書く予定でしたが、ネタが切れたので諦めました。カオス・バレンタインで力尽きたので、このまま本編を続行します…。

では、また次回！

第５７話　何だかんだ言っても家族は家族（前書き）

今回は俊也のデュエルです。新たなデッキが活躍します。

それではどうぞ！

第57話　何だかんだ言っても家族は家族

ＳＩＤＥ／将人

ガーランドルフを倒してから数日後、俺達は万魔殿の復旧作業を手伝っていた。

やはり魔王と言うだけあって損壊は酷い。ガーランドルフは真っ直ぐ都市の中央に向かっていたらしく、被害はそこだけだというのがせめてもの救いだな。

それで、ようやく落ち着いてきたから、俺達はガスタの里に戻る事になった。俊也達には、『数日間万魔殿に泊まる』と既に連絡を入れてある。

「いろいろすまなかったな」

「我々の都市を救い、さらに復旧作業にまで手を貸してくれた事、万魔殿を代表して礼を言う」

「別に大した事はしていない。ただ手を貸しただけだ。石板のカードも力になってくれたしな」

スクワーマーとスカル・デーモンが礼を言ってきたが、俺は俺なりの言葉で返した。石板のカードが手に入ったから、礼を言うのはむしろこっちの方だ。

「ノースウェムコはどうするのですか？」

「私はもう少しここに残ります。復旧作業は人手がいるし、丁度非番なので」

「非番って…お前も大変だな…」

カイエンとゴーズはノースウェムコといろいろ話をしている。ヒジュラはというと…。

「スカルのおっさん。もう年なんだし、さっさと引退しちまったらどうだ？」

「儂はまだ十分働けるわ！」

「あんま無理すんじゃねえぞ？」

…まあ、こいつはこいつなりにスカル・デーモンを心配しているんだな。

「それでは、そろそろ出発しますよ」

ノルフェナが右手に光を溜めた。もう時間か…。

「また来る事があったらよろしくな。歓迎するよ」

「ああ。またな」

スクワーマーに笑って返事をすると、視界が真っ白になった。

視界が元に戻ると、俺達はガスタの里に到着していた。

「ようやく戻ってきたな」

「んじゃ、とっとと俊也達と合流しごっ！？」

「！？」

突然、ヒジュラに何か大きなものが勢いよくぶつかってきた。

「いきなり何しや…ん…？」

「ぐふぅ…また一段とたくましくなったな、我が娘よ…」

飛んできたのはダールだった。…事情は大体予想がつくが…。

「あ！ヒジュラごめん！」

ヒジュラに謝りながら走ってきたのは、おそらくダールを吹っ飛ばした張本人であろうウィンだ。

「ウィン？てか何やってんだてめえは？」

「いや、『修行を完遂したご褒美だ』って抱きついてくるものだから、ちょっぴりうざったくなってつい投げ飛ばしちゃった♪」

にこやかだがはっきり『うざったい』と言ったぞこいつ。どれだけ親馬鹿なんだこの親父は…？

「相変わらず手厳しいな、ウィン…。だがそれもまたよし…」

「てめえは少し黙ってろ」

「あべしっ！？」

ヒジュラは仕返しとでも言うように、倒れながらも親馬鹿発言をするダールを踏みつけた。こいつもこいつで厳しいな…。

「みんなお帰り」

「俊也！」

ウィンが来た方向から俊也が歩いてきた。一緒にガルドも飛んできて、すぐにウィンの左肩に止まった。

「あ、そういえばいつの間に帰ってきたの？」

「たった今な。修行はどうだ？ダールは完遂したと言っているそうだが」

「まあ、一応終わったけど…」

ゴーズの質問に、俊也は苦笑しながら少し曖昧な返事を返した。

「何かあったのですか？」

「実際に見てもらった方が早いね」

ノルフェナが疑問をぶつけると、俊也は俺達からある程度離れた。

すると、俊也の両足が緑色に光り、靴の形状が変化した。

「何だそれは？」

靴は黄色のブーツのような物になっていた。刺々しい風貌で、所々に装飾が施されている。

「脚力と風の出力を上げられないかって考えた結果だよ」

「俊也、気をつけて」

「うん」

俊也は足を屈めて跳躍の体勢を取った。そして…

ゴゥオッ！！

「！？」

「うおっ！？」

ブーツから暴風を放出して一瞬で跳び上がった。風が吹き荒れ、向かい風が俺達に正面からぶつかってくる。なるほど、出力はかなり上がったようだな。

そのまま俊也はブーツから風を何度も出して空中を飛び回ってい

る。だが、風の出力がありすぎて上手く制御できていない。

やがて、何とか丁度いい位置に到達すると、重力に任せて落下して着地に成功した。

「ふぅ…危なかった…」

「それが原因か」

「うん。まだ出力を制御できないんだ」

それだと移動に使うのは少し難しいな。攻撃なら申し分ないだろうが…。

「これ以上の特訓は人間界でやるといい。いつまでもアカデミアを休むわけにはいかないだろ？」

「それもそうですね」

ダールに言われて、自分がアカデミアの生徒だという事を思い出す。確かに、あまり長く勇香達を待たせるのはよくない。

「今日は泊まる事にして、明日出発しましょう」

「そうするか」

「あ、そうだ！将人、僕とデュエルしてくれないかい？」

「デュエルか？」

カイエンの提案が決まった後、俊也が俺にデュエルの依頼をしてきた。

「新しいデッキを試したいんだ」

「そうか。元々ガスタの力を手に入れるために来たんだったな」

その様子だと、ガスタのカードはもう手に入れたようだな。俺もどんな戦い方をするか興味がある。

「いいだろう。なら早速始めるか」

「主、俺達はカードで待機してるぜ」

ヒジュラ達がカードに戻り、俺達は互いに距離を取ってデュエルディスクを構えた。

「さて、どれだけ使いこなせるかお手並み拝見といくか」

「面白い事になってきましたね」

「手加減はいらないよ。いいデュエルにしよう」

「元からそのつもりだ」

「「デュエル！」」

将人ｖｓ俊也

「先攻は譲る」

「じゃあお言葉に甘えて…。ドロー！モンスターをセット！カードを2枚セットしてターンエンド！」

俊也
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×２

最初は守りを固めるか…。これだけだとどんなデッキかわからないな。

「俺のターン！魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動！手札のモンスターを１体墓地に送り、手札かデッキからレベル１のモンスターを特殊召喚する！デッキから《キングゴブリン》を特殊召喚！」

王の格好をした小さなゴブリンが現れる。今回は攻撃にも使うつもりだ。

《キングゴブリン》　ＡＴＫ／　０

「墓地に送った《ヘルウェイ・パトロール》の効果発動！自分の墓地に存在するこのモンスターを墓地から除外する事で、手札から攻撃力２０００以下の悪魔族モンスター１体を特殊召喚する！《地獄将軍・メフィスト》を特殊召喚！」

次に繰り出したのは、銀の鎧を身につけた馬に乗り、柄が長い斧を持った悪魔だ。

《地獄将軍（ヘルジェネラル）・メフィスト》
効果モンスター
星５／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ１７００
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。
相手に戦闘ダメージを与えた時、相手の手札からカードを１枚ランダムに捨てる。

《地獄将軍・メフィスト》　ＡＴＫ／１８００

「そして、《デーモン・ソルジャー》を召喚！」

マントを羽織った悪魔の精鋭。ガーランドルフとのデュエルの後で入れてみたが、案外使いやすい。

《デーモン・ソルジャー》　ＡＴＫ／１９００

「一気に3体も展開したか」

「《キングゴブリン》の攻撃力は、フィールドにいる他の悪魔族の数だけ１０００ポイントずつ上がる。他の悪魔族は2体。攻撃力は２０００だ」

《キングゴブリン》　ＡＴＫ／　０→２０００

「バトル！メフィストで伏せモンスターを攻撃！ジェネラル・アックス！」

メフィストが馬を駆り、斧でモンスターを斬り裂く。破壊されたモンスターは、頭が白く、羽のついた首飾りを身につけた緑色の小

鳥だった。

「うっ！？」

俊也　ＬＰ／４０００→２６００

「メフィストは貫通効果を持つモンスターだ。そして、戦闘ダメージを与えた時に相手の手札を１枚捨てる」

「……」

俊也の手札の内１枚が光り、俊也はそれを墓地に送った。

「なら、こっちもモンスター効果を発動するよ！今破壊されたのは《ガスタ・イグル》！戦闘破壊された時、デッキからレベル４以下のガスタを特殊召喚する！」

《ガスタ・イグル》
チューナー（効果モンスター）
星１／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ　２００／ＤＥＦ　４００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからチューナー以外のレベル４以下の「ガスタ」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

「デッキから《ガスタの巫女　ウィンダ》を特殊召喚！」

デッキから呼び出されたのはウィンだった。今気づいたが、俺が万魔殿に行く前と服装が少し違う。特に目立つのは、黄色の首飾りだ。

《ガスタの巫女　ウィンダ》
効果モンスター
星２／風属性／サイキック族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ　４００
このカードが相手モンスターの攻撃によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから「ガスタ」と名のついたチューナー１体を特殊召喚する事ができる。

《ガスタの巫女　ウィンダ》　ＤＥＦ／　４００

見た感じ、精霊は宿っていないようだ。《風霊使いウィン》もデッキに入っているのか？

「続けて《デーモン・ソルジャー》でウィンダを攻撃！デビルズ・ブレード！」

悪魔の剣士がウィンダを斬りつける。あっさり撃破できたが、あのモンスターにも何か効果があるはずだ。

「ウィンダが戦闘で破壊された時、デッキからガスタのチューナーを特殊召喚できる！《ガスタ・ガルド》を特殊召喚！」

今度はガルドが呼び出された。またリクルートか…。

《ガスタ・ガルド》
チューナー（効果モンスター）
星３／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ　５００／ＤＥＦ　５００
このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキからレベル２以下の「ガスタ」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

《ガスタ・ガルド》　ＤＥＦ／　５００

「《キングゴブリン》で《ガスタ・ガルド》に攻撃！ダーク・ブレイク！」

《キングゴブリン》が紫の光を纏って猛スピードでガルドに突進し、思い切り吹き飛ばした。あの小さな体のどこにそんな力があるんだ…？

「ガルドがフィールドから墓地に送られた時、デッキからレベル２以下のガスタを特殊召喚する！」

「またリクルーター…！？」

「《ガスタの巫女　ウィンダ》を特殊召喚！」

２体目のウィンダが呼び出された。結局直接攻撃はできず終いか…。

《ガスタの巫女　ウィンダ》　ＤＥＦ／　４００

「…カードを１枚セットしてターンエンドだ」

将人
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《キングゴブリン》（ＡＴＫ／２０００）《地獄将軍・メフィスト》（ＡＴＫ／１８００）《デーモン・ソルジャー》（ＡＴＫ／１９００）
魔法・罠／リバース×１

「ガスタのモンスターは互いをリクルートし合う効果を持っているのですね」

「それだけじゃないがな」

互いが互いを呼び合って戦線を維持している。ダメージを与えるのは難しいな。

「僕のターン！チューナーモンスター《ガスタ・ガルド》を召喚！」

またガルド…。チューナーという事は、シンクロ召喚か？

「レベル２《ガスタの巫女　ウィンダ》にレベル３《ガスタ・ガルド》をチューニング！」

ガルドが３つの緑の輪になり、ウィンダが２つの星になる。

「巫女の春風（しゅんぷう）よ！朝日に羽ばたき希望を掴め！」

☆２＋☆３＝☆５

「シンクロ召喚！吹き渡れ！《ダイガスタ・ガルドス》！」

光の柱から出てきたのは、巨大化したガルドに乗ったウィンだった。

《ダイガスタ・ガルドス》
シンクロ・効果モンスター
星５／風属性／サイキック族／ＡＴＫ２２００／ＤＥＦ　８００

チューナー＋チューナー以外の「ガスタ」と名のついたモンスター1体以上
1ターンに1度、自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたモンスター2体をデッキに戻す事で、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して破壊する。

《ダイガスタ・ガルドス》　ＡＴＫ／２２００

「行くよ！ウィン、ガルド！」

『うん！』

『ピィーッ！』

「なるほど。そのカード1枚にウィンとガルドが宿っているのか」

『正解！』

ゴーズとカイエンに似ているな。1枚のカードに2体の精霊が宿るのは、ゴーズ達に限った事ではないようだ。

「《ダイガスタ・ガルドス》の効果発動！墓地のガスタ2体をデッキに戻し、相手の表側表示のモンスターを1体破壊する！」

「何！？」

「墓地のウィンダとガルドをデッキに戻し、《デーモン・ソルジャー》を破壊する！ガルーダ・テンペスト！」

『ガルド！』

『ピィー！』

ガルドが眼前に魔力を溜め、そこから嵐を撃ち出しソルジャーを切り刻んだ。

「悪魔族のモンスターが減った事で、《キングゴブリン》の攻撃力が下がる…」

《キングゴブリン》　ＡＴＫ／２０００→１０００

『バトル！《ダイガスタ・ガルドス》で《地獄将軍・メフィスト》を攻撃！緑風念波！』

『次は私の番だね。ハァッ！』

今度はウィンが杖から緑の光線と突風を同時に繰り出し、メフィストを一撃で粉砕した。

「ぐうっ！」

将人　ＬＰ／４０００→３６００

《キングゴブリン》　ＡＴＫ／１０００→　０

「（攻撃反応型の罠が来ない。なら…！）罠カード《ガスタへの祈り》！墓地のガスタを2体デッキに戻し、墓地からガスタを1体特殊召喚する！」

《ガスタへの祈り》

通常罠
自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたモンスター2体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。
その後、自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する。

「2体目のウィンダとガルドをデッキに戻し、墓地から《ガスタの賢者　ウィンダール》を特殊召喚！」

ダールにそっくりのモンスターが現れた。くそ！メフィストの効果で墓地に送られたカードか…！

《ガスタの賢者　ウィンダール》
効果モンスター
星6／風属性／サイキック族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ１０００
このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、自分の墓地に存在するレベル3以下の「ガスタ」と名のついたモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

《ガスタの賢者　ウィンダール》　ＡＴＫ／２０００

「お、俺が出たか」

「ウィンダールで《キングゴブリン》を攻撃！緑光弾！」

ウィンダールが杖から緑の魔弾を放ち、《キングゴブリン》をいとも簡単に葬った。

「ぐあっ！」

将人　ＬＰ／３６００→１６００

「ウィンダールの効果発動！このモンスターが相手モンスターの戦闘破壊に成功した時、墓地からレベル３以下のガスタを１体守備表示で特殊召喚できる！《ガスタ・イグル》を特殊召喚！」

《ガスタ・イグル》　ＤＥＦ／　４００

「レベル６《ガスタの賢者　ウィンダール》にレベル１《ガスタ・イグル》をチューニング！」

何？またシンクロ召喚だと？

「賢者の旋風よ！曇天に羽ばたき暗雲を薙げ！」

☆６＋☆１＝☆７

「シンクロ召喚！吹き抜けろ！《ダイガスタ・イグルス》！」

次に出てきたのは、巨大化したイグルに乗ったウィンダールだ。ガスタのシンクロモンスターはこの手のモンスターが多いようだな。

《ダイガスタ・イグルス》
シンクロ・効果モンスター
星７／風属性／サイキック族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ１８００
チューナー＋チューナー以外の「ガスタ」と名のついたモンスター１体以上
１ターンに１度、自分のエンドフェイズ時に自分の墓地から風属性モンスター１体をゲームから除外する事で、相手フィールド上に裏側表示で存在するカード１枚を選択して破壊する。

《ダイガスタ・イグルス》　ＡＴＫ／２６００

「カードを１枚セットして、《ダイガスタ・イグルス》の効果発動！エンドフェイズ時に墓地から風属性モンスターを除外する事で、相手の裏側表示のカード１枚を破壊する！墓地からウィンダールを除外して右側の伏せカードを破壊！イーグル・テンペスト！」

イグルがガルドと同じように嵐をぶつけ、俺の伏せカードを破壊した。だが…。

「残念だがハズレだ。セットした《デモンズ・コール》が破壊された時、デッキから悪魔族のチューナーを特殊召喚できる！」

《デモンズ・コール》
通常罠（オリジナル）
セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから悪魔族のチューナー１体を特殊召喚する。

「デッキから《ダーク・リゾネーター》を特殊召喚する！」

音叉を持った小さな悪魔が呼び出された。これで一応反撃はできる。

「モンスターが残っちゃったか…。ターンエンド」

俊也
ＬＰ／２６００
手札／１
モンスター／《ダイガスタ・ガルドス》（ＡＴＫ／２２００）《ダ

イガスタ・イグルス》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／リバース×２

ガスタの力は上手く扱えているようだな。リクルーターで墓地を肥やし、それをコストにして効果を発揮するカテゴリか…。

面白い。その力をさらに探るためにも、全力で行かせてもらう！

ＳＩＤＥ／俊也

フィールドの状況は悪くはない。でも、将人のフィールドにはチューナーがいる。多分、このターンも攻めてくる…！

「俺のターン！魔法カード《強欲な壺》を発動！カードを2枚ドローする！そして、《ランサー・デーモン》を召喚！」

両腕が槍になっている悪魔が召喚された。やっぱり、シンクロ召喚が来る！

《ランサー・デーモン》　ＡＴＫ／１６００

「レベル４《ランサー・デーモン》にレベル３《ダーク・リゾネーター》をチューニング！」

リゾネーターが音叉を鳴らして３つの紫の輪になり、その中にラ

ンサーが飛び込み４つの星になる。

「天頂に輝く死の星よ！地上に舞い降り生者を裁け！」

☆４＋☆３＝☆７

「シンクロ召喚！狩れ！《天刑王　ブラック・ハイランダー》！」

光の柱からモンスターの姿になったヒジュラが飛び出した。

《天刑王　ブラック・ハイランダー》　ＡＴＫ／２８００

『なかなかいい攻撃をするようになったじゃねえか！それでこそ倒しがいがあるってもんよ！』

『あはは…お手柔らかにね…』

ヒジュラは好戦的だからな…。僕らとはちょっぴり相性が悪いかもね。

「行くぞ！ブラック・ハイランダーで《ダイガスタ・イグルス》に攻撃！死兆星斬！」

『攻撃力は俺の方が少し上だな！』

ヒジュラが大鎌を振りかぶってイグルスを斬り裂いた。でも、ここはただじゃ通さない！

俊也　ＬＰ／２６００→２４００

「罠カード発動！《念動力》！サイキック族モンスターが戦闘破壊された時、攻撃をした相手モンスターを破壊してその攻撃力分ライフを回復する！」

《念導力》
通常罠
自分フィールド上に表側表示で存在するサイキック族モンスターが、相手モンスターの攻撃によって破壊された場合に発動する事ができる。
その時に攻撃を行った相手モンスター1体を破壊し、その攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復する。
ソリッドビジョンのカードから光線が飛び出し、ヒジュラに当たって爆発した。爆煙が将人のフィールドを覆う。

「ヒジュラをあっさり打ち破ったか」

「サイキック族のサポートカードも入れているのですね」

「よし、これでライフは…」

俊也　ＬＰ／２４００

「あれ？回復しない？」

何で？ディスクの故障…は考えづらいし、一体何が…。

『今のは少し危なかったぜ…。意外なカードを入れてるもんだな』

煙が晴れると、いつの間にか血のような赤の鎧を身につけたヒジュラがフィールドに立っていた。

「お前の《念動力》にチェーンして《バスター・モード》を発動させた。自分のシンクロモンスターをリリースし、同名の／バスターをデッキから特殊召喚する」

《バスター・モード》
通常罠
自分フィールド上に存在するシンクロモンスター１体をリリースして発動する。
リリースしたシンクロモンスターのカード名が含まれる「／バスター」と名のついたモンスター１体を自分のデッキから攻撃表示で特殊召喚する。

《天刑王　ブラック・ハイランダー／バスター》
効果モンスター（オリジナル）
星１０／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ３２００／ＤＥＦ２５００
このカードは通常召喚できない。
「バスター・モード」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。
１ターンに１度、相手フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター１体を除外し、相手に１０００ポイントダメージを与える事ができる。
また、フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、自分の墓地に存在する「天刑王　ブラック・ハイランダー」１体を特殊召喚する事ができる。

《天刑王　ブラック・ハイランダー／バスター》　ＡＴＫ／３２００

「《バスター・モード》！？」

『最初からこれを狙ってたの！？』

「攻撃はせずにメイン2で効果を発動する。相手のシンクロモンスターを除外し、１０００ポイントのダメージを与える！死次元穴（デス・ディメンション・ホール）！」

『悪いが、ここで退場してもらうぜ！』

ヒジュラが地面に大鎌の切っ先を突き立てると、ウィンとガルドの下にブラックホールが開き、ウィン達を吸い込んでいった。

『きゃあっ！？』

『ピィー！？』

「ウィン！ガルド！」

『ダメージを忘れちゃいねえよな！うらぁっ！』

今度は鎌をもう1度降り下ろして紫の衝撃波を繰り出し、直接僕に攻撃してきた。

「うわぁあっ！？」

俊也　ＬＰ／２４００→１４００

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

将人
ＬＰ／１６００
手札／１
モンスター／《天刑王　ブラック・ハイランダー／バスター》（Ａ

ＴＫ／３２００）
魔法・罠／リバース×１

まさか《バスター・モード》を使ってくるなんて…。除外も痛いし、これはきついかな…？

「生憎、／バスターのブラック・ハイランダーはシンクロ召喚を封じる効果を持ち合わせていない」

「あ、そうなの？」

「最も、破壊されれば墓地のブラック・ハイランダーが蘇るがな」

「なるほど。手順を間違えたらアウトって事だね」

厄介なモンスターだな…。どうやって逆転しようか？

「僕のターン！魔法カード《強欲な壺》を発動！カードを２枚ドローする！さらに魔法カード《薫風の宝札》！墓地のガスタのカードをデッキに戻し、カードを２枚ドローする！」

《薫風の宝札》
通常魔法（オリジナル）
自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたカード１枚をデッキに戻し、自分のデッキからカードを２枚ドローする。
その後、自分のデッキの１番上からカード１枚を墓地に送る。
「薫風の宝札」は１ターンに１枚しか発動できない。

「墓地の《ガスタへの祈り》をデッキに戻し、２枚ドロー！」

…よし！これならいける！

「魔法カード《風の導き》を発動！墓地の風属性のシンクロモンスターを特殊召喚する！」

《風の導き》
通常魔法（オリジナル）
自分の墓地に存在する風属性のシンクロモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できず、効果が無効になり、エンドフェイズ時に破壊される。

「《ダイガスタ・イグルス》を特殊召喚！」

ウィンダールが乗った巨大なイグルが再び姿を現した。

《ダイガスタ・イグルス》　ＡＴＫ／２６００

「ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃と効果の使用ができず、エンドフェイズ時に破壊される」

「となると、狙いはシンクロ召喚ですね」

「そして、手札から《ガスタ・イグル》を召喚！」

《ガスタ・イグル》　ＡＴＫ／　２００

レベルの合計は８。これで準備は整った！

「レベル７《ダイガスタ・イグルス》にレベル１《ガスタ・イグル

≫をチューニング！」

１つの緑の輪にイグルスが飛び込み、７つの星になって共鳴する。

「翡翠の薫風よ！晴天に羽ばたき想いを紡げ！」

☆７＋☆１＝☆８

「シンクロ召喚！飛び立て！《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》！」

鳥のような姿を持つ緑の翼竜がフィールドに舞い降りた。このデッキの、そして僕の新たな切り札だ。

《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「来たか。《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》…！」

「勝負はまだわからないですね」

手札には、墓地のガスタ２体をデッキに戻して相手のカードを破壊する《ガスタの交信》がある。

《ガスタの交信》
通常魔法
自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたモンスター２体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。
その後、相手フィールド上に存在するカード１枚を選択して破壊する。

これを使って／バスターを破壊すれば、元のブラック・ハイラン

ダーが出てくる。でもダイガスタ・ウルには、カードがデッキか手札に戻ると攻撃力が１０００ポイントアップする効果がある。つまり、最終的な攻撃力はダイガスタ・ウルが上だ！

「…せっかく出てきたところで悪いが、すぐに消えてもらう」

「え？」

「罠カード《インターセプト・サンダー》！相手が融合召喚・儀式召喚・シンクロ召喚に成功した時、手札を１枚捨ててそのモンスターを破壊し、元々の攻撃力の半分のダメージを与える！」

《インターセプト・サンダー》
通常罠（オリジナル）
相手が融合召喚・儀式召喚・シンクロ召喚に成功した時、手札を１枚捨てて発動する事ができる。そのモンスターを破壊し、相手にその元々の攻撃力の半分のダメージを与える。

「え！？」

「《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》を破壊し、攻撃力の半分…１３００ダメージを受けてもらう！」

カードから放たれる雷がダイガスタ・ウルに直撃し、さらに貫通して僕にも当たった。

「ぐあぁぁぁぁっ！」

俊也　ＬＰ／１４００→　１００

「ライフが１００に！？」

「これは将人の勝ちか？」

「切り札は封じた。どうする？」

「……」

…つくづく運がいいや。

「ダイガスタ・ウル！！」

『キュオオォオオォオ！！』

僕が呼び掛けると、ダイガスタ・ウルが翼を広げて雷を振り払い、同時にフィールド中に嵐を巻き起こした。

「くっ！？」

「うおっ!?」

「うぅっ!?これは…!?」

『ちっ、一体何だってんだ?』

「罠カード《烈風嵐(れっぷうらん)》!風属性のシンクロモンスターが破壊された時、ライフを半分払う事でフィールド上のカードを全てデッキに戻す!」

《烈風嵐(れっぷうらん)》
通常(オリジナル)罠
自分フィールド上に表側表示で存在する風属性のシンクロモンスターが破壊された時、ライフポイントを半分払って発動する事ができる。
フィールド上に存在する全てのカードをデッキに戻しシャッフルする。

「何だと!?」

『ぐおっ!?』

吹き荒れる烈風がヒジュラを吹き飛ばし、強制的にデッキに戻した。破壊さえしなければ、／バスターの『進化前のモンスターを蘇生する効果』が発動する事はない!

やがて、ダイガスタ・ウルが光になってフィールドから消滅し、嵐も収まった。

「まさかデッキに戻されるとはな…」

「そして、これで僕の勝ちだ」

「何？」

将人がダイガスタ・ウルを破壊したからこそ、このカードが発動できる！

「魔法カード《星屑のきらめき》！」

「な！？それは…！？」

「墓地のドラゴン族のシンクロモンスター1体と同じレベルになるように墓地のモンスターを除外して、そのシンクロモンスターを特殊召喚する！」

《星屑のきらめき》
通常魔法
自分の墓地に存在するドラゴン族のシンクロモンスター1体を選択して発動する。
そのモンスターのレベルと同じレベルになるように、選択したモンスター以外の自分の墓地に存在するモンスターをゲームから除外し、選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。

「墓地のレベル7《ダイガスタ・イグルス》とレベル1《ガスタ・イグル》を除外！蘇れ！《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》！！」

フィールドに星屑のような光が集まり、ダイガスタ・ウルの姿に変化した。

《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「バトル！《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》でダイレクトアタック！エアロ・ジャード・ストーム！！」

ダイガスタ・ウルの翡翠色の嵐が将人にぶつかり、ライフを０まで削り切った。

将人　ＬＰ／１６００→　０

「よし！」

「やるな。まさかデッキに戻されるとは思わなかった」

ダイガスタ・ウルが破壊されてなかったら、まだ勝負はついてなかったね。それでも危なかった。ライフは１００まで削られるし、将人はかなり強い。

「僕も危なかったよ。でも、ゴーズやカイエン、ダークエンドも出してないでしょ？」

「たまたま出せなかっただけだ」

将人は苦笑して答えた。主力エースで出したのはヒジュラのみ。他のモンスターを引きずり出せなかったのはちょっと悔しいな。

「ったく、もうちょい暴れられると思ったんだがな」

「出番がなかった俺達よりはマシだろ」

「ウィン、強くなったわね」

「カイエン！ありがとう！」

「ピィッ！」

ヒジュラ達もカードから出てきた。みんな思い思いの言葉を口にしている。

「2人共お疲れさん！」

「いいデュエルでしたよ。俊也さんもガスタの力を上手く使いこなしているようですね」

「ダール！」

「ノルフェナさん！まだまだですよ。ここで満足するわけにはいきませんから」

みんな高みを目指してるんだ。僕も立ち止まるつもりはない。

「よし！今日はもうゆっくりしてくといい！ウィン達もよく頑張ったな！今夜はご馳走だ！」

ダールさんはテンションを上げたまま自宅に戻っていった。普段は愛情表現が少し過剰だけど、やっぱり根はいいお父さんなんだね。

そして翌日。僕達は人間界に帰る事になった。見送りにはダールさん、カーム、リーズが来てくれた。

「世話になったな」

「皆さん、ありがとうございます」

「いや、こっちも家族に会えて嬉しかったよ。我が一族の力、是非とも役立ててくれ」

「ウィン、元気で」

「向こうでもしっかりな！」

「カーム姉、リーズ姉…！ありがとう！」

やっぱり姉妹なんだね、この3人。僕には兄弟はいないけど、いたらこんな感じなのかな？

「それじゃ、ウィン！愛しの父から見送りの抱擁を…」

ドゴスッ！

「おぅふっ！？」

抱きつこうとするダールさんに対して、ウィンは綺麗な後ろ回し蹴りで鳩尾に一撃を加えた。

「父さんはしつこい」

「ぐ…ぐふぅ…それでこそ我が娘よ…」

「アホかこいつ」

「自分の娘が大切なのはわかるけど、もう少し節度を持った方がいいのでは…？」

「さすが親馬鹿だな」

ヒジュラとカイエン、ゴーズも散々言ってるよ。これさえなければいいお父さんなのにな…。

「それでは、行きましょうか」

「う…結構腹に来る…健闘を祈るぞ」

「ははは…それでは、お元気で」

「ノルフェナさんの弟子に頼んで、連絡は定期的にするからね、馬鹿親父」

「馬鹿親父って…」

お父さんには厳しいけど、何だかんだで大切に思っているんだね。

そんなこんなで僕達は人間界に転移した。また来る時も、いろんな話をしたいな。

...To be continued

第５７話　何だかんだ言っても家族は家族（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「ようやく俊也のデッキが【ガスタ】に切り替わったわね」

フィレス『ガルルッ』

勇香「リクルーターが多いからダメージを与えづらいよな。除外に弱いのが難点だけど…」

ロコナ『うぃんのパパってうぃんが大好きなんだね！』

勇香「ウィンに限らず自分の娘が可愛いんだろ。ウィンが実際どう思ってるかはわからねえけどな」

璃音「それじゃ、カード考察に入りましょうか。今回紹介するのは、ウィンとガルドが宿った俊也の新たなパートナー《ダイガスタ・ガルドス》よ」

《ダイガスタ・ガルドス》
シンクロ・効果モンスター
星５／風属性／サイキック族／ＡＴＫ２２００／ＤＥＦ　８００
チューナー＋チューナー以外の「ガスタ」と名のついたモンスター１体以上
１ターンに１度、自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたモンスター２体をデッキに戻す事で、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して破壊する。

璃音「墓地のガスタ2体をデッキに戻す事で、相手の表側モンスターを破壊する効果を持っているわ」

勇香「ガスタのチューナーを使ってシンクロ召喚すれば、最低でも1回は使えるな」

ロコナ『墓地のカードをデッキに戻すから、デッキ切れを防ぐ事もできるよ！』

勇香「《ジャンク・シンクロン》も合わせれば、1ターンで《ダイガスタ・スフィアード》に繋げられるぞ。１００％純粋な【ガスタ】じゃないなら、入れといても損はねえな」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『感想待ってま～す！』

勇香「次回も見てくれよな！」

ーーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

今回将人が使用した《天刑王　ブラック・ハイランダー／バスター》はユタさんが投稿してくださったオリカです。ユタさん、ありがとうございます。

というわけで、俊也は今後【ガスタ】を使用します。ウィンはガルドと一緒に《ダイガスタ・ガルドス》のカードに引っ越しました。

では、また次回！

第５８話　勘違いはさらに勘違いを呼ぶ（前書き）

今回は紅さんのリクエストを元に話を構成しました。秋斗がデュエルをします。

それではどうぞ！

第５８話　勘違いはさらに勘違いを呼ぶ

ＳＩＤＥ／ナージャ

夜。みんなが寝静まった頃に、マスターの携帯に１本の電話が入った。マスターは今その電話に応対してるけど、何やら揉めてる様子ね～。

「とにかく！私は絶っ対に嫌だからね！」

マスターは寝ている人達の事も考えてか、控え目に怒鳴って電話を切った。

『マスター、電話の内容は何だったんですか～？』

「何でもないわよ。さ、早く寝ましょ」

マスターはそれだけ言うと、さっさとベッドに潜り込んでしまった。

『マスター…？』

ＳＩＤＥ／将人

視界が見慣れた風景に切り替わる。転移先は校舎内の購買だった。

「戻ってきたな」

「では、私は天界へ戻りますね」

「はい。ありがとうございます」

「またお会いしましょう」

カッ！

ノルフェナは強い光を発して消えた。天界に転移したんだろう。

「んじゃ、俺達もカードに戻ってるぜ」

「また後でね」

「ああ」

ヒジュラやウィン達もカードに戻っていった。

「今日は休日か…。紅刃達に状況報告だけしてゆっくりしようよ」

「そうだな」

向こうで一晩休んだとはいえ、休日くらいはのんびりしたいものだ。

「ん？将人と俊也じゃねえか」

急に誰かに呼ばれて振り返ると、勇香とトメさんが…ん…？

「…勇香、何を持っている？」

「何って…購買に運ぶ荷物だよ。結構量があるから手伝いでここまで運んできたってわけだ」

勇香は片手に5個ずつ、合計１０個の段ボール箱を積み重ねて持っている。中身も考えると、重量はかなりあるはずだ。

「いや～、助かるよ。勇香ちゃんは力持ちだね」

「これは力持ちで済むのか？大の男でもこんな芸当できないぞ？」

「勇香は身体能力がかなり高いんだよ。コンクリートの扉を軽く蹴破るし、自分の身長より高い岩やコンテナも平気な顔して投げ飛ばせるし」

「どんな鍛え方をしたらそんな事が可能になるんだ…？」

それはもはや超人の域だぞ？勇香は一体何をやってきたんだ？

「とにかく、さっさと運ぶか。トメさん、どこら辺に置いときゃいい？」

「案内するよ。ついておいで」

勇香とトメさんが購買に向かっていくのを、俺はただ呆然と見送

るしかなかった。

ＳＩＤＥ／秋斗

「《スクラップ・ドラゴン》で《サイコ・ウォールド》を攻撃！トラッシュ・バースト！」

「ぐぅっ！」

ディヴァイン　ＬＰ／　７００→　０

璃音　ＷＩＮ

「ふぅ…負けたよ。また一段と強くなってるな」

「それはどうも」

俺はレッド寮前で璃音とディヴァインのデュエルを見ている。今璃音が勝って終わったがな。俺の他には紅刃、月沙、ルーナがいる。

「いいデュエルだったね」

「あそこで《スクラップ・ドラゴン》が召喚されてなかったら、勝負はまだわからなかったな」

「《サイコ・ヒーリング》で回復したんだが…まだ精進が必要だな」

ルーナに引き止められて見ていたが、割と見応えがあったな。…もういいだろ。天気もいいし、日当たりのいい所で昼寝でも…。

「見つけたぞ、ルーナ」

「？」

俺がこの場を離れようとした時、誰かがルーナを呼んだ。

声のした方を見ると、初老の男と青年が立っていた。初老の男は金髪で髭を生やし、ルーナと同じマントを羽織っている。青年も金髪でいかにも気障っぽい奴だ。

「誰だお前らは？」

「…お父様…！？」

ルーナは驚愕で目を見開いている。あれがルーナの親父？

「ルーナの父さん？」

「何でお父様がここにいるの!?」

「昨日の話をつけにな」

「昨日のって…!?それはもう断ったはずでしょ!?」

断った?何の話だ?

「ふ～ん。あの子が僕のフィアンセになる子か。麗しい子じゃないか」

「フィアンセ?」

気障男がわけのわからない事をほざく。一体どういう意味だ?

「どういう事か説明してもらえませんか?私達には何の事やらさっぱりわかりませんから」

見かねたディヴァインがルーナの親父に質問をした。説明が必要だ。助かる。

「この男は睦野爽弥(むつのそうや)。睦野財閥の1人息子で、私の娘…ルーナの婚約相手だ」

「婚約相手!?」

「ルーナはいずれ私の会社の跡継ぎとなる者。その足がけだ」

「私は跡継ぎになる気なんてないわよ!」

「話は最後まで聞くものだ」

親父の言葉に反論しようとしたルーナをディヴァインが手と一言で制した。

「そっか。ルーナは大企業の生まれだっけ」

「我が社と手を組み利益を上げようとする企業は少なくない。その中で、私は睦野財閥と手を組む事が最善の一手と考えた。この判断は、我が社と睦野財閥、両方に多大な利益をもたらすはずだ」

「それで会社どうしの結託の証として、互いの跡継ぎどうしを結婚させる事で、他の会社に諦めさせるという手立てね」

「そこの生徒は話がわかるようだな」

ルーナの親父の話の後に、璃音が自分の推測を確認した。案の定正解らしい。要するに政略結婚か…。

「会社の都合で結婚なんて冗談じゃないわ！」

「まあ、そうカリカリしないでくれ。せっかくの美しい顔が台無しだよ？」

「あんたみたいな気障男に言われても、これっぽっちもときめかないわよ！」

ルーナは睦野の事は気に入らないようだ。当然だな。あの気障男とは相性が合わないだろ。

「拒否権はなしだ。お前にはこの学園を退学して跡継ぎになるための勉強をしてもらう」

「な…！？」

退学？自分の勝手な都合で何を言ってるんだこいつは？

「何よそれ！？退学なんて横暴すぎるわよ！」

「ふざけんな！そんな理由で自分の娘を退学させるのかよ！？」

「お前に意見を求めた覚えはない」

「お言葉ですが、本人の意志を無視して退学にさせるというのは、見過ごすわけにはいきません。お引き取り願えませんでしょうか？」

「一介の教師風情が私の仕事に口を出すな」

紅刃とディヴァインの反抗にも顔色1つ変えずに一蹴した。面倒な奴だ。

「厄介ね…。てこでも動きそうにないわ」

「どうしよう…。このままじゃルーナが…」

叩きのめせば早いが、現実はそう甘くはない。どうする…？

「どうせ恋人もいないだろ。お前にとっても悪い話ではないはずだが？」

馬鹿が。俺達に会うまでナージャを除いて独りだったルーナが、そんな気障男との未来のためにやっとできた仲間を捨てるわけないだろ。

「（恋人…？…そうだ！いや、でも…。ああもう！なりふり構ってられないわ！）…恋人ならいるわよ」

「何？」

ルーナはそう言うと、何を思ったのか俺の左腕に抱きついてきた。

「この人が私の恋人よ！」

……は？

「は？」

「え？」

「何！？」

「（奥の手に出たわね…）」

※上から順に紅刃→月沙→ディヴァイン→璃音

ちょっと待て！いきなり何大ホラふいてんだこいつは！？

「（てめっ、何言って…）」

「（話合わせなさいよ！）というわけで、そんな奴との婚約なんて願い下げよ！」

かなり必死だな。俺まで厄介事に巻き込みやがって…。…ちっ、今回だけだぞ。

「な、な…君がルーナの恋人だというのか！？」

睦野は仰天しながら俺に確認を求めてきた。黙ってるだけじゃ駄目か…。

「ああ、そうだ。文句あるか？」

「！？」

さらに驚く睦野。わかったらさっさと失せろ。いつまでも芝居をうたせるな。

「（嘘だな）」

「（嘘だね）」

「いつの間にそこまでの関係に…！？」

「ディヴァイン、あなた何か勘違いしてない？」

「おじさんか先生と呼べ」

※上から順に紅刃→月沙→ディヴァイン→璃音→ディヴァイン

「ならば、チャンスをやろう。その男もここの生徒ならデュエルをするのだろう？」

「デュエルで話の決着をつけるというのか？」

「その通りだ。お前と爽弥でデュエルをし、もしお前が勝ったら、退学の件はなしにしよう。当然、爽弥との婚約も永遠になしだ。負けた場合は…わかるな？」

わかりやすい方法だな。こっちの方が手っ取り早い。…面白い。

「わかった。その条件でデュエルだ。デュエルディスクを取ってくる。…その前に、いい加減離せ。動きづらい」

「あ、ごめん…」

ルーナが腕を離すと、俺は一旦寮の部屋に戻った。

「秋斗」

デュエルディスクを装着して戻ると、いつの間にか将人と俊也、勇香が来ていた。

「お前らか。いつ帰ってきた？」

「ルーナが恋人発言したところからだよ」

「話はディヴァインから聞いたぜ。絶対負けんじゃねえぞ」

「そのつもりだ」

俺は所定の位置についてデュエルの準備をした。睦野は既に準備を終えている。

「ルーナ、このデュエルに勝って、君のハートを射止めてみせるよ」

「御託はいい。さっさと始めるぞ」

「おや？もしかして嫉妬かい？」

「お前には嫉妬する価値もないだろ」

「ふ～ん。強がりだね」

ハァ…こいつと話をしてると疲れる。すぐに片付けるか。

「では、始めようか」

「ああ」

「「デュエル！」」

秋斗ｖｓ睦野

「先攻は貰う。俺のターン」

俺は問答無用で先攻を取った。厄介事を運んだのは向こうだ。これくらいはやらせてもらう。

「魔法カード《天使の施し》。カードを3枚ドローし、手札を2枚捨てる。そして、《マジシャンズ・ヴァルキリア》を召喚」

先攻1ターン目でルリアをフィールドに出した。早速出番だ。

《マジシャンズ・ヴァルキリア》　ＡＴＫ／１６００

「カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

秋斗
ＬＰ／４０００
手札／3
モンスター／《マジシャンズ・ヴァルキリア》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×2

「僕のターン、ドロー。…フフフ、どうやら僕の勝利が決まったようだ」

「何？」

いきなり勝利宣言か。少しは骨のある戦術を見せてくれるんだろうな？

「永続魔法《未来融合ーフューチャー・フュージョン》を発動！融合デッキから融合モンスターを1体選択して、その融合素材をデッキから墓地に送り、2ターン後のスタンバイフェイズ時に選択した融合モンスターを特殊召喚する！僕は《Ｆ・Ｇ・Ｄ》を選択！」

「《Ｆ・Ｇ・Ｄ》！？」

「あの人のデッキは【ドラゴン族】みたいだね」

「融合素材はドラゴン族5体！デッキから《タイラント・ドラゴン》《青氷の白夜龍》《マテリアルドラゴン》《ホルスの黒炎竜　ＬＶ６》《ダーク・ホルス・ドラゴン》を墓地に送るよ」

《タイラント・ドラゴン》
効果モンスター
星８／炎属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２９００／ＤＥＦ２５００
相手フィールドにモンスターが存在する場合、このカードはバトルフェイズ中にもう1度だけ攻撃する事ができる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードを対象にする罠カードの効果を無効にし破壊する。
このカードを他のカードの効果によって墓地から特殊召喚する場合、そのプレイヤーは自分フィールド上に存在するドラゴン族モンスター1体をリリースしなければならない。

《青氷の白夜龍（ブルーアイス・ホワイトナイツ・ドラゴン）》
効果モンスター

星８／水属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２５００
このカードを対象にする魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、自分フィールド上に存在する魔法または罠カード１枚を墓地に送る事で、このカードに攻撃対象を変更する事ができる。

《マテリアルドラゴン》
効果モンスター
星６／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ２０００
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、ライフポイントにダメージを与える効果は、ライフポイントを回復する効果になる。
また、「フィールド上のモンスターを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、手札を１枚墓地へ送る事でその発動を無効にし破壊する。

《ホルスの黒炎竜　ＬＶ６》
効果モンスター
星６／炎属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ１６００
このカードは自分フィールド上に表側表示で存在する限り、魔法の効果を受けない。
このカードがモンスターを戦闘によって破壊したターンのエンドフェイズ時、このカードを墓地に送る事で「ホルスの黒炎竜　ＬＶ８」１体を手札またはデッキから特殊召喚する。

《ダーク・ホルス・ドラゴン》
効果モンスター
星８／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ１８００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手のメインフェイズ時に魔法カードが発動された場合、自分の墓地からレベ

ル４の闇属性モンスター１体を特殊召喚する事ができる。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

なかなか強力なモンスターを選んだな。どうせ《龍の鏡》と帰還系のカードを使うつもりだろ。

「華麗に行くよ。魔法カード《龍の鏡》！墓地の融合素材を除外して、ドラゴン族の融合モンスターを融合召喚する！」

《龍の鏡》（ドラゴンズ・ミラー）
通常魔法
自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、ドラゴン族の融合モンスター１体を融合デッキから特殊召喚する。
（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「今墓地に送った５体のドラゴン族を除外して、《Ｆ・Ｇ・Ｄ》を融合召喚！」

５つの首を持つ、最強クラスの融合モンスターが即座に召喚された。やはり使ってきたか…。

《Ｆ・Ｇ・Ｄ》（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）
融合・効果モンスター
星１２／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ５０００／ＤＥＦ５０００
このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。
ドラゴン族モンスター５体を融合素材として融合召喚する。
このカードは地・水・炎・風・闇属性モンスターとの戦闘によっては破壊されない。
（ダメージ計算は適用する）

《Ｆ・Ｇ・Ｄ》　ＡＴＫ／５０００

「いきなり出してきやがった！」

「まだだよ。魔法カード《次元融合》！ライフを２０００払い、お互いに除外されたモンスターを可能な限り特殊召喚する！最も、君は１体も除外してないけどね」

こっちの世界では禁止カードだったな。デュエルで使われるところは初めて見た。

「僕は除外されている《タイラント・ドラゴン》《青氷の白夜龍》《マテリアルドラゴン》《ホルスの黒炎竜　ＬＶ６》を特殊召喚！」

睦野　ＬＰ／４０００→２０００

まとめて４体のドラゴン族が現れた。…容姿を説明するのも面倒だ。知りたければ自分で調べろ。

《タイラント・ドラゴン》　ＡＴＫ／２９００

《青氷の白夜龍》　ＡＴＫ／３０００

《マテリアルドラゴン》　ＡＴＫ／２４００

《ホルスの黒炎竜　ＬＶ６》　ＡＴＫ／２３００

「上級のドラゴン族を一気に５体も並べた…！」

「意外とやるわね」

目を丸くするルーナとは反対に、璃音は冷静に睦野を評価している。まあ、予想通りの展開だな。

『マスター、どうしますか？大型がいろいろ出てきましたけど…』

「（別にどうもしない。丁度いいハンデだ）」

ルリアも、質問こそすれど落ち着き払っている。対策はもう手中にあるからな。

「ずいぶんと落ち着いてるね。負けを認めたのかい？」

「まだ後攻１ターン目だろ？ハンデには丁度いい」

「強がりは止した方がいいよ。惨めだからね。《Ｆ・Ｇ・Ｄ》で《マジシャンズ・ヴァルキリア》に攻撃！」

「罠カード《リミット・リバース》！墓地の攻撃力１０００以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚する！」

《リミット・リバース》
永続罠
自分の墓地から攻撃力１０００以下のモンスター１体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。
そのモンスターが守備表示になった時、そのモンスターとこのカードを破壊する。
このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「墓地から《ミラクル・フリッパー》を特殊召喚する！」

少年の魔法使いが墓地から蘇る。最初の《天使の施し》で墓地に送ったモンスターだ。

《ミラクル・フリッパー》
効果モンスター
星２／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ　３００／ＤＥＦ　５００
「ミラクル・フリッパー」が自分フィールド上に表側表示で存在する場合、このカードは召喚・反転召喚・特殊召喚できない。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は他の表側表示のモンスターを攻撃対象に選択できない。
このカードが戦闘によって破壊された場合、このカードを相手フィールド上に特殊召喚する。
このカードが魔法・罠の効果によって破壊された場合、相手フィールド上のモンスター１体を破壊する。

《ミラクル・フリッパー》　ＡＴＫ／　３００

「今更そんなモンスターを出したところで意味はないよ。攻撃は続行！」

睦野は攻撃を宣言したが、《Ｆ・Ｇ・Ｄ》は動かずにただ俺達を睨みつけている。

「どうした、《Ｆ・Ｇ・Ｄ》！？早く攻撃しろ！」

「無駄だ。お前のモンスターは攻撃できない」

「何！？」

「《ミラクル・フリッパー》がいる限り、相手は他の表側表示のモンスターに攻撃できない。そして、《マジシャンズ・ヴァルキリア》がいる限り、相手は他の魔法使い族に攻撃できない。《ミラクル・フリッパー》は魔法使い族だ。つまり、どちらにも攻撃できないわけだ。この2体がいる限り、お前は攻撃する事ができない」

「攻撃を丸々封じた！」

「一先ず安心だな…」

「小癪な…！カードを2枚セットしてターンエンドだ！」

睦野
ＬＰ／２０００
手札／１
モンスター／《Ｆ・Ｇ・Ｄ》（ＡＴＫ／５０００）《タイラント・ドラゴン》（ＡＴＫ／２９００）《青氷の白夜龍》（ＡＴＫ／３０００）《マテリアルドラゴン》（ＡＴＫ／２４００）《ホルスの黒炎竜　ＬＶ６》（ＡＴＫ／２３００）
魔法・罠／《未来融合ーフューチャー・フュージョン》リバース×２

全員が何らかの耐性を持っているな。《マテリアルドラゴン》は、フィールド上のモンスターを破壊する効果を手札を1枚墓地へ送る事で無効にし破壊できる。睦野の手札は1枚だから効果は1度きりだ。

「まずいわよ。攻撃は封じてるけど、どれも破壊耐性を持つモンス

ターばかりだし、あんな布陣簡単には突破できないじゃない…」

「いずれ破壊系のカードを引けば僕が勝つ。僕のモンスターを効果で破壊し尽くす事はできない。もうサレンダーしたらどうだい？」

ルーナはネガティブ思考になるわ、睦野は調子に乗るわ…。呆れる。

「俺のターン。魔法カード《旧神の印》を発動。ライフを１０００払い、相手の裏側のカードを全て確認する」

《旧神の印》

通常魔法

１０００ライフポイントを払う。

相手の裏側カードを全てめくった後、元に戻す。

（この時カードの効果は発動しない）

秋斗　ＬＰ／４０００→３０００

ソリッドビジョンの伏せカードの裏側全てに表側の絵柄が表示された。ミラーフォースと《竜の逆鱗》か…。

《竜の逆鱗》

永続罠

自分フィールド上に存在するドラゴン族モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「…睦野と言ったな？」

「？」

「お前の言葉、そっくりそのまま返す。俺の勝ちだ」

「はい？」

睦野は間抜け面で俺を見ている。そんなに今の言葉が信じられないか？

「何寝ぼけた事を言ってるんだい？僕のドラゴン軍団を前によくそんな事が言えるね」

「今にわかる。チューナーモンスター《サニー・ピクシー》を召喚」

桃色の髪の小さな妖精がルリアの側に現れた。

《サニー・ピクシー》
チューナー（効果モンスター）
星１／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ　３００／ＤＥＦ　４００
このカードが光属性シンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、自分は１０００ライフポイント回復する。

《サニー・ピクシー》　ＡＴＫ／　３００

「チューナーモンスター？」

『では、後はよろしくお願いします』

「（ああ）レベル４《マジシャンズ・ヴァルキリア》とレベル２《ミラクル・フリッパー》にレベル１《サニー・ピクシー》をチューニング！」

たった1つの紺色の輪にルリアとフリッパーが飛び込み6つの星になる。

「魔の書に記されし秘術の章よ、内なる力の封印を解け！」

☆4＋☆2＋☆1＝☆7

「シンクロ召喚！解放せよ！《アーカナイト・マジシャン》！」

魔術師独特の青と朱色の鎧の上から薄い水色のローブを着た魔法使いが姿を現した。

《アーカナイト・マジシャン》
シンクロ・効果モンスター
星7／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ　４００／ＤＥＦ１８００
チューナー＋チューナー以外の魔法使い族モンスター1体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを2つ置く。
このカードに乗っている魔力カウンター1つにつき、このカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。
また、自分フィールド上に存在する魔力カウンターを1つ取り除く事で、相手フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

《アーカナイト・マジシャン》　ＡＴＫ／　４００

「シンクロ召喚！？何だそれは！？」

「チューナーとそれ以外のモンスターを墓地に送り、墓地に送ったモンスターの合計レベルと同じレベルのシンクロモンスターを融合

デッキから特殊召喚する。これがシンクロ召喚だ」

一応説明してやったが、これからもシンクロを知らない奴らに教える必要があるのか。正直、面倒だ…。

「続けるぞ。《サニー・ピクシー》が光属性のシンクロモンスターのシンクロ素材になった時、俺はライフを１０００回復する」

秋斗　ＬＰ／３０００→４０００

「上手いな。《旧神の印》のライフコストを帳消しにした」

「《アーカナイト・マジシャン》がシンクロ召喚された時、魔力カウンターを２つ乗せる。攻撃力は自身の魔力カウンター１つにつき１０００ポイントアップする」

《アーカナイト・マジシャン》　ＡＴＫ／　４００→２４００　Ｍ／０→２

「そして、魔力カウンターを１つ取り除く事で、相手フィールド上のカードを１枚破壊する。《マテリアルドラゴン》を破壊だ」

《アーカナイト・マジシャン》　ＡＴＫ／２４００→１４００　Ｍ／２→１

「忘れたわけじゃないよね？《マテリアルドラゴン》の効果発動！手札を１枚捨てる事で、モンスターを破壊する効果を無効にして破壊する！」

《マテリアルドラゴン》が口から黄色の光線を吐いて《アーカナ

イト・マジシャン》を破壊しにかかる。

そうだ。《マテリアルドラゴン》を選んだ時点で、お前は手札を消費して効果を使い切るか黙って破壊されるかのどちらかを選ぶしかない。そして、結果は変わらない。

「罠カード《バスター・モード》！シンクロモンスターをリリースし、デッキから同名の／バスターを特殊召喚する！」

「／バスター？」

「出でよ！《アーカナイト・マジシャン／バスター》！」

《アーカナイト・マジシャン》が全身から強い光を放ち、《マテリアルドラゴン》の光線が掻き消される。光が止むと、ローブをマントのように羽織り、鎧を露わにした《アーカナイト・マジシャン》が立っていた。

《アーカナイト・マジシャン／（スラッシュ）バスター》
効果モンスター
星９／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ　９００／ＤＥＦ２３００
このカードは通常召喚できない。
「バスター・モード」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。
このカードが特殊召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを２つ置く。
このカードに乗っている魔力カウンター１つにつき、このカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。
このカードに乗っている魔力カウンターを２つ取り除く事で、相手フィールド上に存在するカードを全て破壊する。
また、フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、自分の

墓地に存在する「アーカナイト・マジシャン」1体を特殊召喚する事ができる。

《アーカナイト・マジシャン／バスター》　ＡＴＫ／　９００

「こいつが特殊召喚に成功した時、自身に魔力カウンターを2つ乗せる。攻撃力も魔力カウンターの数だけ１０００ポイントずつ上がる」

《アーカナイト・マジシャン／バスター》　ＡＴＫ／　９００→２９００　Ｍ／０→２

「そして、自身の魔力カウンターを2つ取り除く事で、相手フィールド上のカードを全て破壊する」

「何だと！？」

「手札がない以上、《マテリアルドラゴン》の効果で防ぐ事はできない。効果発動！バスター・エクスプロージョン！」

《アーカナイト・マジシャン／バスター》　ＡＴＫ／２９００→９００　Ｍ／２→０

《アーカナイト・マジシャン》が杖から莫大な魔力を放出し、ドラゴン達と伏せカードがそれに飲み込まれ消滅していく。光が消えた後、睦野のフィールドには何も残っていなかった。

「そんな…僕のドラゴン軍団が一撃で…」

「よっしゃ！全滅だ！」

「後は２０００ダメージで秋斗の勝ちだね」

「魔法カード《死者蘇生》。墓地の《マジシャンズ・ヴァルキリア》を特殊召喚する」

『あれ？また出番ですか？』

墓地からルリアを呼び出した。これで総ダメージ量は２０００を越える。

《マジシャンズ・ヴァルキリア》　ＡＴＫ／１６００

「あ…ああ…」

「この際だ。魔法カード《マジシャンズ・クロス》。自分のフィールドに魔法使い族が2体以上いる時、その内1体の攻撃力をエンドフェイズ時まで３０００にする」

《マジシャンズ・クロス》
通常魔法
自分フィールド上に表側攻撃表示の魔法使い族モンスターが2体以上存在する場合、その内1体を選択して発動する。
選択した魔法使い族モンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで３０００になる。
このターン、選択したモンスター以外の魔法使い族モンスターは攻撃する事ができない。

「《マジシャンズ・ヴァルキリア》の攻撃力を３０００にする」

《マジシャンズ・ヴァルキリア》　ＡＴＫ／１６００→３０００

「なっ…た、タンマ！待ってくれ！」

「見苦しい。誰が待つか。《マジシャンズ・ヴァルキリア》でダイレクトアタック！マジック・イリュージョン！」

『終わりですね』

ルリアが巨大な紺色の魔力弾を放ち、睦野にとどめの一撃を加えた。

睦野　ＬＰ／２０００→　０

秋斗　ＷＩＮ

「オーバーキル…」

「容赦ねえな、あいつ」

俊也が呆然と呟き、勇香は苦笑している。しかし、案外早く終わったな。

「そんな…この僕がこうもあっさりと…」

「呆れたな。お前の実力はその程度のものだったのか」

「九条院さん…くっ…」

悔しがる睦野にルーナの親父が追い討ちをかけている。あれが『

その程度』か…。

「お父様。そんな言い方ないんじゃないの？この人、実力はあるわよ？」

「ルーナ…？」

「…負ける者に価値はない」

「な…！？」

「…？」

一瞬苦い顔をしたように見えたが…気のせいか。これだから頭の固い大人は嫌いだ。

「負ける者に価値はない、か…。なら、賭けに負けたあんたも価値はないわけだ」

「何？」

「社会じゃ『結果』が全てかもしれないが、少しは『内容』にまで目を向けたらどうだ？少なくとも、この気障男は割と強い方だ」

「同情は止したまえ。僕は負けたんだ」

「敗北から学ぶ事もある」

「敗北から…？」

「負けて悔しいと思うなら這い上がれ。世の中にはそうして強くなった奴もいる」

将人にジャック、万丈目、翔、少し違うかもしれないが、紅刃と十代、亮もそうだ。最初から強い奴はいない。絶対に負けない奴は尚更だ。

「まあいい。約束通り、この件はなしにしよう」

「本当!?」

「だが、お前は私の跡を継ぐ者だ。それだけは忘れるな」

「…っ!」

ルーナの親父は、跡継ぎの話だけは諦めるつもりはないらしい。強情な奴だ。

「今回は退学はなしにしたが、いずれその時が来る事を忘れるな」

「お父様…」

「…やってみろよ」

「何?」

いい加減、跡継ぎに拘るこいつの考えに嫌気がさしてきた。大方、他の奴らも同じ考えだろ。

「その時は俺達があんたを潰してでも止める。俺達はそういった集

まりだ」

「秋斗…」

「ルーナを無理矢理連れていくと言うなら、俺達を殺すつもりで来い」

群れるのはあまり好きじゃないが、俺達は仲間だ。誰か1人でも危機に陥ったら総出で助けに行くはずだ。特に紅刃や勇香あたりは相手が大企業の社長だろうが総理大臣だろうが迷わず殴り飛ばすだろ。無論、俺もそのつもりだ。

「……覚えておこう。またここに来る」

ルーナの親父は踵を返して歩き出した。できれば二度と来るな。

「まさか、敵である君に教えられるとはね」

睦野はここを去る前に、俺に話を持ち掛けてきた。

「単に思った事を言っただけだ。お前は不満じゃないのか？親の目論みに利用されて」

「抵抗がないと言えば嘘になるね。上に合わせてはいたけど、互いに望まぬ結婚で偽りの愛を育むのはおかしいと思う」

「なら、何でお父様達に合わせようとしたのよ？」

「言う通りにしなければ家を追放すると言われてしまっては、従わざるを得ないよ」

「何よそれ…！？」

「路頭に迷ってしまう羽目になるのはさすがにね…」

結局、どっちも大人の勝手な都合に振り回されていただけか。金持ちの子供というのも悲運なものだ。

「でも、こうして解決したから君達には感謝してるよ。僕も追放はされないだろうし。秋斗、もし再び会う事があったらまたデュエルしてくれないかい？」

「気が向いたらな」

「それでは、また会おう」

睦野はとっくに見えなくなったルーナの親父を追って走っていった。

「何だかんだ言って、あいつも利用されてたんだな」

「同じ家族なのに、何でそんな事しかできないんだろう…」

睦野が去った後、紅刃が真っ先に感想を述べた。月沙もルーナの親父達のやり方が納得いかないらしく、暗い表情で疑問を口にする。

「社会にはそんな世界もある。利用できるものは最大限利用しなければやっていけない、そんな世界が」

「現実は残酷ね…」

ディヴァインの発言に対して璃音が苦い顔をする。間違いじゃないが、少なくともそんな世界で生きていきたいとは思わないな。

「ま、問題は解決したし、もうそんな暗い雰囲気出さなくてもいいだろ？」

「またルーナの親父がルーナを連れ戻しに来るかもしれないぞ？」

「その時は私達がまた返り討ちにしてやるだけだ！ボクサーでも軍隊でも呼んできやがれってんだ！」

将人の言葉に勇香が強気な返事をした。こいつにボクサーはまず通用しないだろ。軍隊は…アビリティはなるべく使わない方がいいな。

「ルーナ」

「？」

「お前は退学する気はないんだな？」

「当然よ！せっかくあんた達と仲良くなれたのに、なりたくもない跡継ぎなんかで別れるなんて冗談じゃないわ！」

「なら、お前が退学しかけたら俺達が食い止める。お前の親父を殴り飛ばしてでもな」

これが俺の決意だ。他の奴らも違うとは言わせない。仲間なら当然の事だ。

「…うん。ありがと」

ルーナは少しの間呆然とした後、笑って礼を言ってきた。

「でも、まさか秋斗とルーナが付き合ってるなんてね。全然気づかなかったよ」

「「は？」」

俊也の突然の発言に、俺とルーナは声を揃えて反応した。こいつ今何て言った？

「本当に意外だな。秋斗は普段1人でいがちだというのに…」

「恋人ってのはよくわかんねえけど、お前ら案外仲良いんだな」

「ち、ちょっと待って！あれはその場凌ぎの嘘で…」

「別にもう隠す必要はないだろう？いやぁ、秋斗は自分から進んでコミュニケーションを取ろうとしないからね。先生も嬉しいよ」

何だこいつら！？とんでもない勘違いをしてやがる！

そういえば、ディヴァインは最初から勘違いしていたな…。…待てよ？確か…。

『お前らか。いつ帰ってきた？』

『ルーナが恋人発言したところからだよ』

『話はディヴァインから聞いたぜ。絶対負けんじゃねえぞ』

という事はつまり…。

俊也達が来たところで丁度ルーナが恋人発言

←

勘違いしたままのディヴァインに事情を聞く

←

俊也、将人、勇香も勘違い

あのアホ教師…！いや、まずは誤解を解くのが先決だ！

「とりあえず、俺達は部屋で休んでくる」

「報告はやっぱり後って事で。それじゃ！」

「おい、待て！俺達は…」

将人と俊也は止める間もなく部屋に帰ってしまった。くそ、後々面倒だぞ？

「ああ、行っちゃった…。勇香、先生、本当に違うから！あれはただの嘘だから！」

ルーナは顔を赤くして勇香とディヴァインを説得しにかかる。勇香はともかく、ディヴァインは時間がかかりそうだな…。

「秋斗、あいつらには俺から話しとく」

「当事者以外から話をした方がわかってくれるだろうからね」

「紅刃、月沙…。…頼む」

「任せとけ」

紅刃と月沙は早速将人と俊也の部屋に向かった。璃音はルーナと一緒に説明している。俺も加勢に行くか…。

『マスター』

俺が歩こうとすると、ルリアがカードから出てきて俺を呼び止めた。

「何だ？」

『デュエルの最後に出した《マジシャンズ・クロス》ですけど…別に使わなくても勝てましたよね？』

「だからどうした？」

『もしかして、本当に妬いてました？』

「…さあな」

悪戯っぽい笑みで問い掛けてくるルリアに適当に返事を返し、俺はルーナと璃音の加勢に向かった。

ＳＩＤＥ／ルーナ父

開けた道を港に向かい進んでいく。ヘリは港に置いて、操縦士も待機させてある。爽弥はすぐに後から追ってくるだろう。

興味本意で試してみたが…あのルーナの仲間は相当な実力の持ち主だ。それに、強い目をしている。あれなら…。

…いや、最終的に必要なのは個人の力だ。ルーナは強くなければいけない。

そう、誰よりも強く…。

…To be continued

第５８話　勘違いはさらに勘違いを呼ぶ（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「秋斗のデュエルは決着が早いな…」

璃音「本編では、紅刃を除けば全て先攻２ターン目での１ターンキル…３回しかやってないけど、かなりの実力ね」

フィレス『グルルル…』

ロコナ『私達はまだ２回だけだよね？』

勇香「それは言うな…」

璃音「コホン…カード考察に入るわよ。今回紹介するのは、秋斗が使用したシンクロモンスター《アーカナイト・マジシャン》よ」

《アーカナイト・マジシャン》
シンクロ・効果モンスター
星７／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ　４００／ＤＥＦ１８００
チューナー＋チューナー以外の魔法使い族モンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを２つ置く。
このカードに乗っている魔力カウンター１つにつき、このカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。
また、自分フィールド上に存在する魔力カウンターを１つ取り除く事で、相手フィールド上に存在するカード１枚を破壊する。

璃音「召喚時に、自身に魔力カウンターを2つ乗せる効果を持っているわ」

勇香「自身の魔力カウンターの数だけ攻撃力も１０００ポイントずつ上がる効果もある。《魔力掌握》とかで攻撃力をガンガン上げるのもありだ」

ロコナ『魔力カウンターを取り除けば、相手フィールド上のカードを破壊できるよ！』

璃音「自分フィールド上のなら何でもコストにできるから、【魔力カウンター】なら攻撃力を維持しながら戦う事も可能よ。自身の魔力カウンターが空になったら、リリースやシンクロ素材、カード効果の発動コストにすると無駄がないわ」

勇香「／バスターや融合モンスターといった派生もあるぞ。魔法使い族のシンクロモンスターの顔とも言えるモンスターだな」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『ここでお知らせだよ！次回からは長編に入るんだって！』

勇香「え、マジで！？」

璃音「その前にキャラ設定の整理をするから、本編の更新は遅くなる可能性が高いわね」

勇香「ようやく私の設定が公開されるのか…」

ロコナ『それじゃ、感想待ってま～す！』

勇香「次回も見てくれよな！」

ーーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

前書きにも書きましたが、今回の話は紅さんのリクエストを元に構成しました。紅さん、ありがとうございます。

秋斗のデュエルを書くとなぜかあっさり終了してしまいます…。なぜこうなるんだか…。

次回からは長編に入ります。どんな内容になるかはお楽しみに…。

では、また次回！

キャラ設定（メインキャラ）（前書き）

第５８話時点でのメインキャラの設定です。

キャラ設定（メインキャラ）

［真川（さながわ）紅刃（くれは）］

年齢／１７歳（第５８話時点）

身長／１６７ｃｍ

容姿／黒髪黒眼　腰にデュエルディスクを納めたホルダーを付けている

デュエルディスク／片刃の剣　色は赤と黒

特技／剣術・刃物の扱いほぼ全般

趣味／散歩

好きな物・事／デュエル・カレー・チョコ

嫌いな物・事／漬け物・他人を傷つける奴

詳細／本編の主人公。『自分の信念を貫き通す』『大切なものを護るためにどこまでも強くなる』事を信条としており、どこまでも真っ直ぐに生きるその姿勢に惹かれる人も多い。

　ネオ童実野シティにある剣の道場の生まれで、小さい頃から剣を習ってきた。そのため剣の腕は相当なもので、鍛練は毎日欠かさずやっている。

中学時代、虐めに遭っている月沙を助けてからはよく一緒にいるようになり、将人や加奈美とも知り合い共に親友になる。その後、将人が引っ越す際に将人から《冥府の使者ゴーズ》のカードを預かり、以後本人に返却するまでデッキに入れ続けてきた。

ニュートラルと戦うために月沙と共に過去に行ってからは精霊が見えるようになり、アビリティも修得した。度重なる修行や戦闘の中で道場で習った剣の型も変化し、半分我流と化している。

過去の世界から1度冥界に行った後からは月沙に対して恋心を抱くようになり、意地でも護り抜くと決意した。しかし、依然として親友より先には進めず、この事を知っているのはごくわずかの人物のみである。

過去の世界で戦い続ける内に自分の力を無意識に他の仲間と比べるようになり、他人から借りた力に頼ってばかりいる自分に嫌気がさして次第に自信を失くしていった。しかし、《天空の聖域》にニュートラルが襲撃を仕掛けてきた時に、自分に憧れているアースの言葉『大切なものを護るために強くなる』覚悟を思い出し、新たなデッキ【代行者パーミッション】と共に襲撃者を一掃した。

その後、《天空の聖域》に伝わる石板から白紙のカードと《エンジェル・コンダクター》のカードを手に入れ、現在はアクセルシンクロの修得に励んでいる。1度D・ホイールがスピードに耐えきれずに大破してしまったが、璃音・遊星・ブルーノに新しいD・ホイールを作成してもらった。

リーシェの電撃のアビリティを持ち、刀身に込める事で剣の威力を上げたり衝撃波として放つ事ができる。応用で磁力を操る事もでき、移動速度や攻撃速度を上げたり、未完成だが飛行もできる。ま

た、自分のデュエルディスクを細長い両刃の大剣に変化させる事もできる。もう1つ、ロディスのアビリティも会得していて、発動中は上着が《冥王竜ヴァンダルギオン》の体の模様が入った前を開けているコートに変化し、身体能力が大幅に上昇する。覚醒時の瞳の色は黄。

デッキは【エンジェル・パーミッション】を使用。《天空の聖域》でアースからカードを受け取った後は【代行者パーミッション】に切り替えている。どちらも《冥王竜ヴァンダルギオン》と《裁きを下す者ーボルテニス》を投入している。エースモンスターは《ライトエンド・ドラゴン》。サブデッキとして【Xーセイバー】も所持しているが、これは父親に無理矢理持たされた物で、本人は滅多に使わない。

デッキ／【エンジェルパーミッション】（～第４５話）【代行者パーミッション】（第４６話～）【Xーセイバー】（サブデッキ）

精霊／ロディス（冥王竜ヴァンダルギオン／♂）・リーシェ（裁きを下す者ーボルテニス／♀）

D・ホイール／フロウ・バイオレット（赤いラインが入った紫・～第５０話）　アポロ・トラスト（《マスター・ヒュペリオン》をイメージしたデザイン・第５４話～）

［波星月沙（なみぼしつきさ）］

年齢／１７歳（第５８話時点）

身長／１６２ｃｍ

容姿／白銀の髪をポニーテールにしている　目の色は紫　腰にデュエルディスクを納めたホルダーを付けている

デュエルディスク／銃口付きのガンマンズディスク（サティスファクションタウンのあれ）　色は青と黒

特技／射撃

趣味／料理

好きな物・事／デュエル・甘い物

嫌いな物・事／虫・虐め・虐待・髪や年齢で馬鹿にされる事

詳細／本編のメインヒロイン。白い髪が目立つ女子高生。そして、『遊戯王』がアニメになっている世界からの転生者でもある。

明るい性格で、いろんな人に優しく接する事ができる。それに加え実際の経験もあるためか虐めが嫌いで、その時の行動力は高い。

本気で怒るとヘアゴムを外して髪を下ろす。特に『白髪』など髪や年齢に関する事で馬鹿にされるとこれ以上ないくらいに激怒し、驚異的な戦闘力を発揮して相手を生き地獄に墜とす（紅刃曰く『魔神モード』）。

紅刃に想いを寄せているが、なかなか告白できずにいる。おまけに恋愛に耐性がないため消極的になりがちである。最近は積極的に

動く人を見て軽く落ち込む事もある。

転生前は茶髪茶眼で髪を下ろしていて、弟の怜磨や親友の鈴佳などと一緒に暮らしていた。しかし、とある理由で尾形の恨みを買って殺害されてしまい、ノルフェナの依頼で精霊界にある氷結界の里に転生させられた。

氷結界の里で大事件を解決した後、里の精霊からは『姫』と呼ばれ慕われるようになった。

その後、ノルフェナに人間界に転生し直してもらい、０歳から人生をやり直す事になった。この時、スイレンも一緒についてきて、以後行動を共にしている。

人間界に転生してからの小学時代はデュエルの実力がずば抜けている事から虐めを受けていたが、中学の始めに同じクラスになった紅刃が助けて以来は紅刃とよく一緒にいるようになる。後に将人や加奈美とも出会い、４人で親友関係を築いた。

高校時代は紅刃や加奈美（将人は引っ越したため不在）と共に、フォーチュン・カップ編以降の５Ｄ'ｓ本編に介入。転生前にテレビで見た原作知識を駆使して、ダークシグナーとの対決に臨む遊星達の手助けをした。

アビリティは冷気を操るもので、銃型のデュエルディスクを通して冷気を込めた弾丸やレーザーを撃つ事ができる。また、自分の手で直接冷気を操る事も可能。覚醒時の瞳の色は青。覚醒するとエネルギーでヘアゴムが切れてしまうため、ヘアゴムはよく買い足ししている。

使用デッキは【氷結界】。転生前は【機械族】を使用していて、

その時の切り札だった《ガトリング・ドラゴン》を【氷結界】に投入していた。尾形に《ガトリング・ドラゴン》一式を燃やされてからは、怜磨から送られた《ブリザード・プリンセス》を代わりに使用している。また、《Ｅ・ＨＥＲＯ　アイスエッジ》と《Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ》も使用しているため、何かと手札消費が激しい。エースモンスターは《氷結界の龍　トリシューラ》。

デッキ／【氷結界】（転生後）【機械族】（転生前）

精霊／スイレン（氷結界の舞姫／♀）・トリシューラ（氷結界の龍　トリシューラ／♂）

Ｄ・ホイール／フロスト・ポセイディア（トリシューラをイメージしたデザイン。三つ首ではない）

［銘丈将人（めいじょうまさと）］

年齢／１７歳（第５８話時点）

身長／１７１ｃｍ

容姿／肩まで伸ばした灰色の髪　瞳の色は黄緑

デュエルディスク／５Ｄ's汎用型ディスク　色は紫

特技／暗記

趣味／音楽鑑賞

好きな物・事／デュエル・唐揚げ

嫌いな物・事／デュエル以外の賭け事

詳細／割と冷静な性格だが、時々熱い一面も見せる。喝を入れるためなら女子を殴る事もいとわない（本人に悪気はない）。戦意喪失状態の月沙を殴り飛ばして立ち直らせた事もある。

運はあまりよくない方で、くじ引きでも大抵ついてない事が多い。そのため、基本的に賭け事は遠慮している。

元々はネオ童実野シティ出身で、中学時代は紅刃・月沙・加奈美とよく一緒に行動していた。当時はデュエルでなかなか勝つ事ができず、親の都合で引っ越す際に「強くなったら引き取りに行く」と言って、紅刃に《冥府の使者ゴーズ》のカードを預けた。

引っ越した先でヒジュラと出会い、デュエルも次第に強くなっていった。しかし、ニュートラルに捕縛・洗脳され、尾形によって紅刃と闇のデュエルをする事になった。結果は引き分けになったものの、紅刃が犠牲になってしまった事に負い目を感じるようになった。その後、紅刃が無事に戻ってきた事で元気を取り戻した。紅刃との闇のデュエルの後、《冥府の使者ゴーズ》は将人の手元に戻っている。

今ではデュエルの実力もかなり上がり、紅刃達と並ぶほどにまでなった。運の悪さもドロー力だけは解決した。

アビリティは《天刑王　ブラック・ハイランダー》の大鎌を使用。紫の衝撃波も出せる。ゴーズとカイエンのアビリティも使用できるかは不明。覚醒時の瞳の色は紫。

洗脳中は【ダークモンスター】を使用していたが、本来の使用デッキは闇属性軸の【悪魔族】。あらゆる方法でゴーズとカイエンを呼び出し、時にはヒジュラでシンクロ召喚を封じる事もある。エースモンスターは《ダークエンド・ドラゴン》。切り札は石板のカード《ディアボロス・サタン・ドラゴン》。

デッキ／【悪魔族】【ダークモンスター】（第１９話～第２０話のみ）

精霊／ゴーズ（冥府の使者ゴーズ／♂）・カイエン（冥府の使者カイエン／♀）・ヒジュラ（天刑王　ブラック・ハイランダー／♂）

Ｄ・ホイール／不明

［天原勇香（あまばらゆうか）］

年齢／１７歳（第５８話時点）

身長／１６６ｃｍ

容姿／黒髪黒眼の長髪　青地に赤いラインが入ったテンガロンハットを被っている

デュエルディスク／５Ｄ's汎用型ディスク　色は赤

特技／怪力（？）・演技・観察

趣味／運動

好きな物・事／デュエル・辛い物

嫌いな物・事／卑怯な行為

詳細／「～だろ」などの男口調で話す姉御肌で、その辺の男性よりも男らしい。熱い性格で、ピンチの時ほど燃えるタイプ。

身体能力がかなり高く、異常なまでの怪力の持ち主。岩石・コンテナ・鉄骨くらいなら素手で砕くほど。

とにかく辛い物が好物で、辛子や山葵などを混ぜた自作のドレッシングをよく使用している。アルカディアムーヴメントにいた頃は辛子などを直接食べ物に大量にかけていたが、紅刃と月沙に止められてドレッシングで妥協した。

恋愛に関しては非常に疎いというか無知に等しく、どうしても脳内で友情に変換されてしまう。璃音・アキ・龍可が説明した事があるが、結局理解できずに終わっている。

本編ではまだ出ていないが、演技力が異様に高い。そのため観察力にも長けており、相手の演技も簡単に見抜く事ができる。

サテライト出身で、昔は遊星・ジャック・クロウ・鬼柳と共にチ

ーム・サティスファクションとして活動していた。チームの解散後は精霊と通じている事に興味を持ったディヴァインに洗脳され、アルカディアムーヴメントに所属していた。俊也はその時の同僚である。

ダークシグナーが本部を襲撃する直前に洗脳が解け、俊也と一緒にクーデターを起こし、ダークシグナー襲撃での本部崩壊に乗じて組織を脱退した。紅刃・月沙・加奈美とはその時出会った。

ダークシグナーの事件が解決した後は1年以上世界中を旅していて、ネオ童実野シティでしばらく暮らした後に紅刃達の援軍として璃音・秋斗と共に過去の世界に向かった。

アビリティは炎を操る能力で、手足に灯して破壊力を上げるために使用している。本気で殴ればクレーターができる。手から火炎放射も出せるが、コントロールは不安定。

使用デッキは【ラヴァル】。クロウにも引けを取らない展開力でガンガン攻めていく。炎属性のためかバーンも使う事がある。エースモンスターは《ラヴァルフレイム・ドラゴン》。

デッキ／【ラヴァル】

精霊／ロコナ（ラヴァル炎樹海の妖女／♀）

D・ホイール／フレイム・バーニア（カラーリングは朱色。側面にウィング、後ろにブースターを装備している）

［風嶺俊也（かざみねしゅんや）］

年齢／１７歳（第５８話時点）

身長／１６５ｃｍ

容姿／金髪青眼

デュエルディスク／５Ｄ'ｓ汎用型ディスク　色は白と緑

特技／サッカー・走る事

趣味／料理

好きな物・事／デュエル・蕎麦・風

嫌いな物・事／お茶漬け

詳細／真面目で素直な性格。穏やかな好青年で、困った人を見ると放っておけない。努力家の一面もある。

　小さい頃からサッカーをやっているからか足がかなり速く、走力なら勇香にも負けない。もちろんサッカーの実力も備わっており、現在も暇があれば自前のボールを蹴っている。

　ルックスや性格がいいためか、異性に好意を持たれる事が多い。過去の世界のデュエルアカデミアではファンクラブまで設立されているが、本人は全く気にしていない。

料理が趣味だが、外見はまともでも味がどうしても壊滅的になってしまう。紅刃曰く『混沌物質（カオス・マター）』で、過去に紅刃や月沙、勇香達が入院しかけたほどである。ただし、ウィンと璃音だけは俊也の料理を食べても平気で、特に璃音はよく作ってもらっている。

精霊との繋がりに目をつけたディヴァインの勧誘でアルカディアムーヴメントに入団するが、時が経つにつれ次第に組織のやり方を疑問に思うようになっていった。やがて、勇香の誘いでクーデターを起こす事を決意し、本部崩壊に乗じて組織を脱退した。その後、ダークシグナーの事件が解決するまでの間、勇香や紅刃達と一緒に行動した。

ダークシグナーの事件が解決した後は、勇香とは別ルートで世界中を旅していた。ネオ童実野シティに帰郷した後は、1～2週間後に紅刃や月沙と一緒に過去の世界に向かった。

璃音とは旅の途中で1度出会っており、ネオ童実野シティでのわずかな期間や現在もよく一緒にいる事が多い。璃音には少し気があるようだが、自分は璃音に釣り合わないと思っている。

風のアビリティを修得しており、足にエネルギーを溜めて蹴り出す事で暴風をぶつける事ができる。黄色の特殊なブーツを生成して風の出力と脚力を上げる事もできるが、出力が高すぎて制御し切れていない。

使用デッキは元々シンクロ召喚なしの【鳥獣族】だったが、旅の中でチューナーと《イージーチューニング》を入れた【風属性】に、さらに過去の世界で《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》を手に入れてからは【ガスタ】に変化していった。リクルーターが多いため、防

御面に優れている。エースモンスターは《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》。

デッキ／【鳥獣族】（～ダークシグナー編）【風属性】（第１１話～）【ガスタ】（第５７話～）

精霊／ウィン（ガスタの巫女　ウィンダ／♀）・ガルド（ガスタ・ガルド／♂）

Ｄ・ホイール／不明

［篠村璃音（しのむらりおん）］

年齢／１７歳（第５８話時点）

身長／１５８ｃｍ

容姿／茶髪で瞳は空色　髪型は遊星の蟹の部分を取った感じ　後ろ髪は遊星より少し長い

デュエルディスク／遊星とほぼ同じ

特技／修理・機械の作成

趣味／機械弄り・発明・ジョギング

好きな物・事／デュエル・りんご・コーヒー（砂糖多め）
嫌いな物・事／苦い物・物を粗末にする事
詳細／物静かで落ち着いた性格。怒鳴り散らす事は滅多にない。ものづくりに関しては時たま燃える事もある。

この世のあらゆるものは全てどこかで活躍できる場面があると考えている。故に、差別などは一切許さない。

親が不動博士の親戚で、遊星とは従兄妹の関係に当たる。両親は他界しており、遊星を本当の家族のように慕って『兄さん』と呼んでいる。

遊星同様機械に詳しく、ブルーノとも仲が良い。開発に夢中になって3人揃って連日徹夜する事も珍しくなく、よく勇香やクロウに注意されていた。

遊星達が住んでいるガレージの地下に作業部屋を建設しており（許可は取ってある）、遊星達もたまに使用している。そこで奇妙な物を開発する事もよくある。

俊也とも案外仲が良く、俊也の料理を平気で『美味しい』と言える数少ない人物の1人である。俊也の事をどう思っているかは不明だが、自分は俊也に釣り合わないと思っている。

他の人に比べて体力が少ない事を気にしており、日課として毎朝ジョギングをしている。たまに俊也や勇香が付き合う事もある。

遊星の事を知った後、遊星に会うために各地を探し回っていたが、

途中で出会った俊也の話やフォーチュンカップの情報で遊星がネオ童実野シティにいる事を突き止め、ようやく会う事ができた。その後はしばらくネオ童実野シティに滞在し、勇香や秋斗と共に過去の世界へ向かった。

最近はアカデミアのどこかに作業部屋を建設しようと考えているが、場所によっては周りに迷惑がかかる可能性もあるため実行するかどうか迷っている。

アビリティは鉄を扱うもので、手の触れた物から鉄柱や鉄の壁を生やしたり、様々な武器を生成する事ができる。その気になればモーションなしでも使用できるが、通常より体力を消耗するためあまり使用しない。

使用デッキは【スクラップ】。破壊効果をも利用し、カードを1枚も無駄にせずに戦う。実力はかなり高い。遊星が使っている《くず鉄のかかし》などもデッキに投入している。エースモンスターは《スクラップ・ドラゴン》。

デッキ／【スクラップ】

精霊／フィレス（スクラップ・ドラゴン／♂）

D・ホイール／鎧羅（がいら）（黒のカラーリング。屋根の部分を取った遊星号に似ている）

［九条院ルーナ（くじょういん　るーな）］

年齢／１６歳（第５８話時点）

身長／１５３ｃｍ

容姿／膝まである桃色の長髪に赤い瞳　黒いマントを羽織っている

デュエルディスク／ＧＸ初期のアカデミアディスク　色は黒　機能は５Ｄ'ｓ基準（璃音が改造した）

特技／武術全般

趣味／ゲーム

好きな物・事／デュエル・菓子パン

嫌いな物・事／差別・孤独・背丈で馬鹿にされる事

詳細／気が強く、よくしかめっ面でいる。他人に迷惑をかけまいと強がりを見せる事が多い。紅刃達の中で唯一の年下で、同時に過去の世界の人間である。

　菓子パンが大好物で、大量にまとめ買いしては『間食』として食べている。意外と大食いな一面があるが、運動をするから太る事はない。

　背が低い事を気にしており、その事を指摘されると怒る。子供扱いされるほど背が低いわけではないが、もし子供扱いされようものなら容赦なく叩きのめす。

父が大企業の社長の資産家で、故に家は大金持ちだが、本人は全く鼻にかけない。しかし、家の決まりとしてマントの着用を義務づけられている事もあって、周りによく勘違いされてしまう。

昔から金持ちだという理由だけで差別をされ続け、ナージャ以外は話し相手がいなかった。いつも1人で友達と遊びに行くという事もなかったため、護身術としていろんな武術を独学で会得したり、いろんなゲームをやったりして気を紛らわせていた。また、アビリティを使って人助けをした事で化け物扱いまでされるようになってしまい、ますます孤独になってしまう。

デュエルアカデミアに入学した後に紅刃と出会い、半ば無理矢理月沙達の所に連れていかれる。そこで璃音とデュエルをして敗北した事で、紅刃達の仲間になった。自分を対等に見てくれる紅刃達に対しては、今では完全に心を開いている。

父からは会社の跡継ぎになるように言われているが、本人は嫌がっている。また、普段着用しているマントも差別の一因のため脱ぎたがっているが、家の決まりで仕方なく着ている。

アビリティは伸縮自在の鞭を生成する能力がある。先端には麻痺性の毒が仕込んであり、食らった相手は一定時間動きが鈍る。鞭を木刀や如意棒のように変形させて攻撃する事もできる。

使用デッキは【デュアル・ゼロ】。蘇生しやすいデュアルモンスターと攻撃力0のモンスターを駆使して戦う。攻撃力0のモンスターを使い続けるのは、攻撃力でカードの価値を決める世の中に『力のない者にも価値がある』事を知らしめるという意気込みがあるからである。また、物心がついた時から《レプティレス・ナージャ》

を始めとする未来の世界のカードを数多く所持しているが、どこから出てきたのかは不明。エースモンスターは《ブラック・ブルドラゴ》。

デッキ／【デュアル・ゼロ】

精霊／ナージャ（レプティレス・ナージャ／♀）

D・ホイール／なし

［星御秋斗（ほしみ あきと）］

年齢／１７歳（第５８話時点）

身長／１６９ｃｍ

容姿／藍色の髪と青い瞳

デュエルディスク／５Ｄ'ｓ汎用型ディスク

特技／菓子作り

趣味／昼寝

好きな物・事／デュエル・天ぷら

嫌いな物・事／雑炊物・群れる事・調子に乗った奴・面倒事

詳細／レギュラーメンバーの中で1番冷めた性格。熱くなりすぎない静かな不良といった感じで、誰に対してもタメ口を使う。

大勢の人間と群れるのがあまり好きではなく、大抵は1人でいる事が多い。日当たりがいい場所を見つけては、主に昼寝をして時間を過ごす。

面倒事が嫌いだが、どうしようもない時はきっちりと片付ける。仲間を大切にしているような発言も垣間見せるあたり、何だかんだ言っても仲間意識ははっきりある。

フォッタに依頼されて、新たに紅刃達と共に戦う仲間になった。しかし過去は一切不明で、レギュラーメンバーの中でも1番謎の多い人物である。

アビリティは魔法・罠の力を具現化する能力で、《マジシャンズ・ヴァルキリア》の杖を生成して使用する。1つの技を使用すると、その技は充電期間として2日間使用不能になるが、紺色の魔力弾は無制限で使用できる。

使用デッキは【魔法使い族】。《ブラック・マジシャン》などは当然投入されておらず、フィールド魔法にも滅多に頼らない。どちらかというとシンクロ召喚に特化したタイプで、通常魔法を多めに投入してある。デュエルの実力はかなりのもので、不調とはいえ紅刃の旧【エンジェル・パーミッション】では太刀打ちできないほど。フィールドの状況把握にも長けており、そこら辺のデュエリストではまず相手にならない。エースモンスターは《魔導竜　レイヴェルト》。

デッキ／【魔法使い族】

精霊／ルリア（マジシャンズ・ヴァルキリア／♀）

D・ホイール／不明

キャラ設定（メインキャラ）（後書き）

大体こんな感じです。次は精霊とサブキャラの設定を載せます。

キャラ設定（精霊・サブ）（前書き）

精霊とサブキャラの設定です。サブキャラは現在活躍中の人物の他に、今後再登場する可能性が高い人物のみを載せました。

キャラ設定（精霊・サブ）

〔精霊〕

［ロディス］

カード／《冥王竜ヴァンダルギオン》

性別／♂

擬人化時の容姿／赤紫の髪　瞳の色は黄　ヴァンダルギオンの模様が入ったコートを着ている（紅刃と違い、前は閉めている）　見た目は２０歳前後

詳細／紅刃の精霊。普段は擬人化している。一人称が『我』だったりと、王族の貫禄がある。元々冥界で王をやっていたが、紅刃に興味を持ってついていく事にした。紅刃と正式に出会った時に『オーディン』と名付けられたが、《エミサリー・セイバー・ドラゴン》の力を手に入れた時から真名の『ロディス』を名乗るようになった。以前は冥界に時々帰って自分の溜まった仕事をまとめて片付けていたが、アテムに説得されてからは全面的に任せる事にした。

［リーシェ］

カード／《裁きを下す者ーボルテニス》

性別／♀

擬人化時の容姿／紫の髪に紫の瞳　ボルテニスの頭を模した帽子と体を模したコートのような長い服を身につけている　見た目は１０代後半

詳細／紅刃の精霊。《天空の聖域》出身。普段は擬人化している。正義感が強く、悪人は迷わず裁く。鈍感な一面を見せる紅刃を杖で殴るなど、強気で少し乱暴な性格。『～のだ』『～だろう』などといった口調で話す。紅刃と正式に出会った時に『ゼウス』と名付けられたが、《雷光断罪ーボルテニス》の力を手に入れた時から真名の『リーシェ』を名乗るようになった。ヒジュラとは仲が良いのか悪いのか、昔からよく喧嘩をしている。たこ焼きが好物。

［スイレン］

カード／《氷結界の舞姫》

性別／♀

詳細／月沙の精霊。誰にでも様付けで敬語を使う、元気一杯な性格。月沙とは2度目の転生前からの付き合いで、月沙の事を『姫様』と呼び慕っている。月沙至上主義予備軍で、月沙を傷つける相手は誰だろうと容赦しない。月沙の恋を密かに応援しており、ロディスや

リーシェと一緒に見守っている。

［ヒジュラ］

カード／《天刑王　ブラック・ハイランダー》

性別／♂

擬人化時の容姿／茶髪のツンツン頭　目付きは悪い　カードのイラストをもう少しスリムにした感じの服装　見た目は１０代後半

詳細／将人の精霊。普段は擬人化している。荒っぽい性格で、正に不良といった感じ。万魔殿を治める王にすらタメ口で話すところは、ある意味大物かもしれない。好戦的で、笑いながら大鎌を振り回すその姿は死神そのもの。リーシェとは仲が良いのか悪いのか、昔からよく喧嘩をしている。

［ゴーズ］

カード／《冥府の使者ゴーズ》

性別／♂

詳細／将人の精霊。メインキャラの精霊の中では1番の常識人で、裏では何かと苦労している。よくカイエンと一緒に行動する。カイエン、ヒジュラ、ロディス、リーシェとは将人や紅刃と出会う前からの仲で、血の気が多いヒジュラのストッパーを担っている。一時期は将人の希望で紅刃の下にいたが、今は将人と共に過ごしている。

［カイエン］

カード／《冥府の使者カイエン》

性別／♀

詳細／将人の精霊。真面目な性格で、与えられた仕事は途中で投げ出さずにきっちりこなす。基本的に、精霊にはタメ口で人間には敬語を使う。よくゴーズと一緒に行動する。よく喧嘩をするヒジュラとリーシェについては半ば諦めかけている。一時期は将人の希望で紅刃の下にいたが、今は将人と共に過ごしている。

［ロコナ］

カード／《ラヴァル炎樹海の妖女》

性別／♀

詳細／勇香の精霊。一言で言うと元気一杯で純粋無垢な子供。菓子が大好きで、勇香にねだる事がよくある。菓子作りが得意な秋斗にもなついており、たまに頼んでは作ってもらっている（秋斗は非常にめんどくさがっている）。勇香が子供の扱いに長けているのは大体ロコナとクロウが原因。後、意外と怪力である。

［ウィン］

カード／《風霊使いウィン》（～第５１話）《ガスタの巫女　ウィンダ（ダイガスタ・ガルドス）》（第５７話～）

性別／♀

詳細／俊也の精霊。面倒見がいい性格で、よくロコナと一緒に遊んであげている。ガルドがなついている数少ない人物の１人。ガスタの里出身で、魔法に興味を持って一時期《魔法都市エンディミオン》の学校に通っていた。卒業後に出会った俊也とは、今では家族のような仲になっている。親馬鹿な父親のダール限定でバイオレンスになる。璃音と同じく俊也の料理を平気で食べる事ができる。現在はガルドと一緒に《ダイガスタ・ガルドス》のカードに宿っている。

［ガルド］

カード／《ガスタ・ガルド（ダイガスタ・ガルドス）》

性別／♂

詳細／俊也の精霊。人見知りが激しく、ガスタの里ではよく反発しては里の精霊を困らせていた。ウィンには非常になついており、初めて心を開いた相手でもある。また、ウィンのパートナーである俊也の事も少なからず認めている。フィレスとは同じ動物どうしだからか割と仲が良い。現在はウィンと一緒に《ダイガスタ・ガルドス》のカードに宿っている。

［フィレス］

カード／《スクラップ・ドラゴン》

性別／♂

詳細／璃音の精霊。体の大きさを自由に変える事ができ、普段は仔犬くらいのサイズで行動している。ただし、元の大きさより巨大化する事はできない。璃音に忠実で、言い付けは必ず守る。元々全身がくず鉄で構成されているので、毒物は一切効かない。ガルドとは同じ動物どうしだからか割と仲が良い。

［ナージャ］

カード／《レプティレス・ナージャ》

性別／♀

詳細／ルーナの精霊。かなりの毒舌で、よく相手の痛いところを突く。ルーナは例外で、敬語を使ったり何だかんだで気にかけていたりする。また、語尾を伸ばす癖がある。アカデミアに入るまではルーナの唯一の理解者だったが、紅刃達と出会った事でルーナが孤独ではなくなったため、紅刃達には感謝している。

［ルリア］

カード／《マジシャンズ・ヴァルキリア》

性別／♀

詳細／秋斗の精霊。誰にでも敬語を使うお淑やかな性格で、スイレンよりも落ち着いている。魔法は様々な種類のものを会得しており、攻撃・防御・回復など大抵の事は何でもこなす。秋斗が唯一傍にいても気にしない人物で、時間になったら昼寝中の秋斗を起こしてい

る。同じ魔法使い族という事で、スイレンやウィン（現在はサイキック族だが）と仲が良い。

〔サブ〕

［フォッタ］

年齢／不明

身長／龍亞・龍可と同じくらい

容姿／グレーの髪と黒い瞳　少し大きめの白いローブを着ている
見た目は小学生くらいの子供

デュエルディスク／不明

特技／転移術

趣味／人間界の散歩

好きな物・事／オムライス

嫌いな物・事／自称神様（笑）と呼ばれる事（バージョンアップ版も然り）

詳細／本編第1話から度々登場している神様見習い。お気楽な性格で、時々ドジな一面を見せる。

ニュートラルの危険性を察知した天界が紅刃達に目を付け、協力を申請する使いとして紅刃達の下に送り込まれた。紅刃達を過去に送り届けた後もバックアップとして時々会いに来ている。

実はノルフェナの弟子で神様見習い。転移術が得意だが、パニックに陥るとコントロールが乱れてしまい、異世界のとんでもない人まで呼び寄せてしまう事もある。

何かと不遇な扱いで有名な人物。第1話でいきなり神様発言をして以来、『自称神様（笑）』というレッテルを張られてしまった。本人は特に悪い事をしたわけではない。このあだ名が果てには異世界にまで広がってしまい、さらにドジな面が拍車をかけている事もあり、現在ではもはや撤回不能な状況に陥ってしまった。本人の名誉のために言っておくが、あくまで『神様見習い』である。また、異世界のどこかには『自称神様（笑）』の呼び名をさらにバージョンアップさせているデュエリストがいるとかいないとか。

一応デッキは所持しているが、内容・実力共に一切不明である。

デッキ／不明

D・ホイール／不明

［ノルフェナ］

年齢／不明

身長／１７４ｃｍ

容姿／金髪のロングヘアー　瞳の色は緑　白いローブを着ている
見た目は２０代後半

デュエルディスク／不明

特技／防御・回復系の術

趣味／弟子の成長を見守る事

好きな物・事／お茶全般

嫌いな物・事／悪人・力の乱用

詳細／フォッタの師匠で、神の１人。常に敬語で話す。穏やかな優しい性格で、どちらかというと母親気質。月沙を２回も転生させた張本人でもある。

神としての地位は最高神の１つ下くらいで、防御・回復の術のレベルは下手をすれば最高神すら上回るほど。攻撃もそれなりに強い。しかし、本人は無闇矢鱈に力を使う事を嫌っている。

紅刃達の前に現れルーナにニュートラル討伐の依頼をしてからは、フォッタほどではないが度々人間界に赴きバックアップをしている。その一方で、紅刃達を巻き込んだ事に罪悪感を抱いている。

デュエルはフォッタと同じくデッキの内容・実力共に不明。

デッキ／不明

D・ホイール／不明

［ディヴァイン］

※基本的なステータスは５D' sと同じ

詳細／かつてアルカディアムーヴメントの総帥として、サイコデュエリスト達を軍隊として世界に送り込む計画のために動いていた。その過程で俊也や勇香を引き入れたが、クーデターを引き起こされ訣別した。

《地縛神　Ｃｃａｒａｙｈｕａ》に取り込まれた後は冥界に飛ばされた。ダークシグナーの事件が解決した時に地縛神から解放される際に、ニュートラルとの対決の戦力になると見込んだ鈴佳に無理矢理引き止められたせいで、結果的に冥界に残る事になった。

鈴佳によって、トビーを始めとする自らの実験の過程で殺してしまった人達に認められるくらいの真人間になるように散々しごかれ、最終的にトビー達と和解する事に成功した。その後、ノルフェナに過去の現世に送ってもらい紅刃達に協力する事になった。

現在はデュエルアカデミアの実技担当の教師として生活している。懇切丁寧に指導する姿勢で生徒達の間で人気になっている。ルーナや剣山のクラスの担任で、同時にレッド寮の寮長も勤めている。

教師になってからは何かとコミカルな面も見せており、無意識にネタキャラの道を突っ走っている。紅刃達など事情を知る人間からは呼び捨てにされている事を気にしており、最近は『おじさんか先生と呼べ』が口癖になりつつある。

サイコデュエリストとしての能力は健在で、リアルファイト専用のサイドデッキを持ち歩いている。また、鈴佳のしごきの結果として精霊も見えるようになった。

使用デッキはもちろん【サイキック族】。強力な効果に必要なライフコストをシンクロモンスターなどの回復効果で補いつつ戦う。総帥の頃より数段強くなっており、除外にも対応できるほどの力をつけている。切り札は《アルティメットサイキッカー》。

デッキ／【サイキック族】

D・ホイール／なし

［木下鈴佳（きのしたすずか）］

年齢／１７歳

身長／１７４ｃｍ

容姿／黒髪のショートカット　瞳の色は黒　白いジャンパーと黒いスカート

デュエルディスク／５Ｄ's汎用型ディスク

特技／裁縫

趣味／裁縫

好きな物・事／デュエル・ケーキ

嫌いな物・事／納豆

詳細／月沙の親友。前向きな生活で、いつも積極的に行動している。生前はテキスタイルデザイナーを目指していた。

月沙の死後、悲しみに暮れている時に尾形に遭遇し、殺害されてしまう。その後は冥界に飛ばされ、そこでアテムや先に死んだ怜磨達と出会った。冥界から月沙が氷結界の里で戦っているところを見て元気を取り戻し、冥界で前向きに暮らしていく事を決意した。

冥界が意外としっかりした社会体制な事もあってか、テキスタイルデザイナーの夢も叶えて結構充実した生活を送っている。他にもアテムの補佐もやっている。

裏で紅刃達のバックアップをしており、ディヴァインを味方につけたり紅刃にアクセルシンクロの修行をつけるために一時的に生き返ったりなどといった荒業（？）も成し遂げている。

使用デッキは【ドラグニティ】。鳥獣族にドラゴン族のチューナーを装備、または解除を繰り返しつつ戦う。また、自力でアクセルシンクロを修得しており、ライディングデュエルでも相当な実力を誇る。切り札はアクセルシンクロモンスター《ドラグニティナイトーロンギヌス》。

デッキ／【ドラグニティ】

D・ホイール／ドラグーン・フェザー（白と緑のカラーリング。鳥の翼と龍をイメージしたデザイン）

［波星怜磨（なみぼしれいま）］

年齢／１３歳

身長／１４８ｃｍ

容姿／茶髪紫眼　髪型は月沙に少し似ている　灰色のパーカーを着ている

デュエルディスク／不明

特技／投球

趣味／野球

好きな物・事／デュエル・ハンバーガー

嫌いな物・事／みかん

詳細／月沙の弟。いつも明るく、性格・容姿共にどことなく月沙に似ている。生前は野球をやっており、ポジションはピッチャーだった。

尾形に殺害された後は冥界に飛ばされた。死んでしまった事で半ば自棄になっていたが、冥界から月沙が氷結界の里で戦っているところを見て元気を取り戻し、冥界で前向きに暮らしていく事を決意した。

現在は仲間内で野球やデュエルをやりながら暮らしている。鈴佳とは生前からの仲で、アテムとも知り合いである。

紅刃の事は認めており、鈴佳と共に紅刃の月沙に対する想いを知る数少ない1人である。月沙の恋も応援していて、どちらかが告白する日を心待ちにしている。

デッキ／不明

D・ホイール／なし

［アテム］

※基本的なステータスはＤＭと同じ

詳細／ご存じ遊戯王の元祖主人公。闘いの儀を終えて冥界に帰った後にロディスと出会い、様々な住人の推薦もあってロディスが不在の間冥界の王を勤める事になった。冥界では現世で着用していた学ランと同じ物を着ている。

　ロディスに自分に全部任せるように言ってからは冥界の王をほぼ完全に引き継いでいる。住人の事を第一に考えた王政に拘り、現世での活躍もあってか周囲の信頼は非常に厚い。

　使用デッキが現在どうなっているのかは一切不明。

デッキ／不明

Ｄ・ホイール／不明

［クヴァシル］

カード／《ブレード・トラディショナー》

性別／♂

容姿／金髪茶眼　深緑のターバン・マント　腰に剣を差している

詳細／精霊界を放浪する旅人。ふらりと紅刃の前に現れては、ロディスやリーシェの新たな力を授けたり光の龍の石板の下に導いたりしてきた。紅刃に《ブレード・トラディショナー》のカードを渡した人物でもあるが、紅刃の精霊ではない。紅刃が窮地に立たされたり深い悩みを抱えた時に現れるが、その真意は不明。目的も一切明かされておらず、ニュートラルを除けば1番謎に包まれている人物である。

［ダール］

カード／《ガスタの賢者　ウィンダール》

性別／♂

詳細／ウィン・カーム・リーズの父。ガスタの里で暮らしている。里の中のリーダー的な存在で、里の平和のために日々問題に取り組んでいる。自分の娘達を大切にしているが、非常に親馬鹿なため愛情表現がよく過剰になる。カームはよほどの事がない限りされるがまま、リーズは軽くあしらっているが、ウィンには様々な格闘技で返り討ちに遭っている。しかし、本質はいい父親である。

［アース］

カード／《神秘の代行者　アース》

性別／♀

詳細／《天空の聖域》で暮らす精霊。聖域を守護する部隊『代行者』のメンバーで、所属日数は浅い。

人間界を覗いている時に紅刃の活躍を目撃し、『護る力』を目指す姿勢に惹かれる。それから紅刃に強く憧れるようになり、剣術も学び始めた。他の代行者達に修行をつけてもらっていて、未熟な面はあるものの確実に力をつけてきている。

戦闘時は杖の先端から緑色の光の刀身を発生させて、杖を剣のように扱う。また、魔力弾を放つ事もできる。

自身を見失い迷っている紅刃と共に行動し、最終的に自分が紅刃に憧れた理由を告げる事で、紅刃に自信を取り戻させ、《マスター・ヒュペリオン》から預かっていた『代行者』に関するカードを紅刃に託した。

現在は《天空の聖域》に残り、代行者の業務を果たす毎日を送っている。

キャラ設定（精霊・サブ）（後書き）

やっと書き終わった…。次回からは本当に長編スタートです。お楽しみに！

第５９話　会議は夜中に開くべからず（前書き）

☆精霊の呟き☆

ゴーズ『は？おい、何だこのコーナーは？』

ロディス『前書きだけ味気ないと思ったからな。新年度に突入した事だし（２０１１年４月１日）、この通り新コーナーを設立した』

リーシェ『最近デュエル以外の出番が減りつつある私達精霊の救済措置でもあるのだが…』

ゴーズ『早速ぶっちゃけてるな…。むしろそっちが本音だろ…』

カイエン『で、どんな事をするコーナーなの？』

ロディス『今回の話の見どころとかその他もろもろとか、そんな感じだな』

ゴーズ『要するに適当に話すだけかい…』

カイエン『私達精霊が見えない人には意味のないコーナーじゃ…』

リーシェ『それはあれだ、何かフィルター的な物が発動するに違いない。いや、発動したらいいのだが…』

カイエン『不確定なの！？』

ロディス『時間がないから今回はここまでにしよう。修学旅行編、スタートだ』

ゴーズ『そんな名前だったのか…？』

第５９話　会議は夜中に開くべからず

ＳＩＤＥ／ギュラ

「ほぁっ…」

欠伸をしながら廊下を歩く。電気が点いてるから明るいが、今は午後１１時過ぎ。今日は疲れてっから早く寝たいんだけどよ…。

と、着いたな。会議室だ。俺は早速ドアを開けて中に入った。

「う～っす」

「遅いわよ、ギュラ！１１時集合って聞いてるでしょ！」

「しゃあねえだろ。今日は重労働だったんだからよ」

やっぱもう全員集まってるか。茶色のショートヘアーの女に軽く返事をして席に着いた。

「そうカリカリしないでください。遅刻と言っても５～６分くらいですし、特に支障もないでしょう？」

「話がわかるじゃねえか、弥一」

今俺の弁護をしてくれたのは富岡弥一。紫の髪と青い瞳で、いつもスーツ姿でニコニコしている奴だ。馬鹿丁寧なところも相変わらずだな。

「全員集まった事だし、ミーティングに入るぞ」

シュルクがこの場を仕切っているのも、こいつが俺達の中でのリーダーみたいな奴だからだ。フード付きマントは脱いでいて、鈍色（にびいろ）のボサボサ頭が晒されている。

今いるのは俺も入れて幹部の5人…あり？7人いやがる。俺の数え間違いか？そんなはずは…って…。

「ちょっと待て」

「何だ？」

「何で芽依と加奈美がここにいるんだよ？幹部じゃねえだろ」

数え間違いかと思ったが、別にそんな事はなかった。なぜか幹部じゃない芽依と加奈美までいた。

「あたいは千景先輩に呼ばれたんですよ！」

「そうなのか？」

俺が千景に確認を取ると、千景はただ黙って頷いた。

「えと…シュルク君が『お前も来い』って言うから…」

「芽依と加奈美の実力は最早俺達と同格だ。お前も知ってるだろ？」

あ…芽依は元から知ってるけど、そういや、加奈美は入団直後に

実力テストを受けたんだったな。で、俺達とも互角に渡り合うほどのレベルだってわかったっけか。

「今回のミッションには芽依と加奈美にもメインで動いてもらう。そのために連れてきた」

「そういう事かい…」

まあ、芽依は今に始まった事じゃねえし、加奈美も含めて今更気にする事じゃねえか。

ここらでここにいるメンツの紹介でもしとくか。後々めんどくせえ。

一人称が『あたい』なのが鬼灯芽依（ほおずきめい）。青髪と短めのツインテールで、元気が取り柄の１２歳だ。千景の部隊に所属していて、実力は幹部クラス。ただ、幹部になるには年齢が低いから自分の部隊は持っていない。

千景ってのは、うちの女幹部の安藤千景（あんどうちかげ）の事だ。赤髪のショートヘアーで、いつも黒いキャスケットっつー帽子を被っている。無口な奴で、何考えてるかはさっぱりわからねえ。その割には妙に鋭いところもある。

で、開口一番で俺に注意してきた茶髪の女が葉鳶早苗（はとびさなえ）。滅茶苦茶気の強い奴で、男勝りって言葉がよく似合う。考え方も時たまアグレッシブになるっつーか…まあ、そんなところだ。

学生で考えると、芽依は小学生、弥一・千景・早苗・加奈美が高校生、俺とシュルクが大学生あたりだ。よくもまあ、こんな年齢で

お偉いさんになれるもんだな。さて、そろそろ話を戻すか。

「話を止めて悪かったな。で、そのミッションってのは？」

「石板の採取だ」

シュルクの簡潔な一言に、全員気を引き締めた。

「石板って、伝説の龍の石板か？」

「ああ。弥一」

「はい。先日、僕が非番で過去の世界に出かけていた時に、レーダーに石板の反応が引っ掛かったんです。かなり微弱なものでしたが、間違いありません」

「場所はどこよ？」

「ＧＸ時代の童実野町です」

伝説のデュエリスト武藤遊戯が暮らしていた町か。ＧＸ時代っつうと、遊城十代が活躍してる時期だな。真川紅刃達イレギュラーもいやがる。

「僕の部隊を向かわせましたが、どこにあるかまではわかりませんでした」

弥一の部隊は探索専門だったな。俺達の部隊は大体２０人ずつ割り振られている。そんだけいても見つからねえのかよ…。

「それで、あたし達も手伝えって事？部隊はどんぐらいいるの？」

「いえ…僕達が直接回収します」

「あ？俺達が直接？」

「まさか、海馬瀬人が持ってるなんてオチじゃないでしょうね？」

「それでも、あたい達が全員出動する意味は薄いと思います！海馬瀬人とは戦いたいけど！」

「まだそうと決まったわけじゃない。話は最後まで聞け」

俺達が次々に口出しをすると、シュルクが変わらない調子で制してきた。

「明日、イレギュラーや遊城十代達を含めたデュエルアカデミアの生徒達が、修学旅行で童実野町に来訪します」

「「「！」」」

「真川紅刃は既に光の龍の石板を手にしてカードを取り出しています。石板とカードが共鳴すれば、イレギュラー達が石板の元に導かれるはずです」

「そこを横取りするって事か」

「はい。あなたが《天空の聖域》からの去り際に小型の盗聴器を落としておいたからこそ辿り着いた結論です」

確かに、俺はあの時《緊急テレポート》を使う直前に盗聴器を落としといた。こっちから遠隔操作をすれば、自爆して綺麗さっぱり消える優れもんだ。おかげで紅刃が石板のカードを手にする一部始終を聞かせてもらったぜ。

「最も、石板に対応したカードがあれば探索ももっと楽なのですが…」

「じゃあ、共鳴しなかったらどうするわけ？」

「その時は根気よく探すしかありませんね」

「そんな適当な…」

早苗は肩を落とすが、現時点じゃこれが限界なんだからしゃあねえだろ。

「ま、石板なんて『ゲットできればラッキー』みたいなもんだ。本当に必要なのはもっと別にある」

「イレギュラーはどいつも強者揃い！デュエルすればエナジーもガンガン溜まる事間違いなし！今からデュエルするのが楽しみです！」

「熱いなオイ。小学から飛ばしてると燃料切れるぞ？」

「特製ジュースを飲めば元気回復です！」

「それはお前だけだアホ！辛子だの何だのをごちゃ混ぜにした激辛ジュースなんてお前しか飲めねえよ！」

「（勇香ちゃんなら平気そう…）」

元気がありすぎる熱血系ってのも考えもんだな。あ、言っとくけど芽依はロボットとかじゃねえからな？れっきとした人間だから間違えんなよ？

「ま、気持ちはわかるけどな。楽しみなのは俺も同じだ。何せ、俺が『殺す気で』戦っても倒せなかった奴がいるんだからな」

「紅刃の事か。本当に殺すつもりじゃなかっただろうな？」

「当然だろ？それが俺達の方針だ」

シュルクは俺の返答に満足したのか薄く笑った。

紅刃へのリベンジもいいけど、他にも強そうな連中がいやがる。片っ端から戦ってみてえもんだ。

「どのみち、僕達とイレギュラーとの衝突は避けられません。ここは1つ、足止め役と採取役に分けませんか？」

弥一が分業を提案してきた。いい考えじゃねえか。だったら俺は当然足止め役希望だ。

「ならあたいが足止め役をします！」

「俺もそっちに回らせてもらうぜ！」

「あんた達はただデュエルしたいだけでしょうが、バトルマニア共」

「早苗はどうする？」

「あたしは兄貴を治せればそれでいい。何だってやってやるわ。千景はどうすんの？」

早苗が問い掛けると、千景は顔を上げて俺達を見回した。

「……」

「「「「「……」」」」」

「……眠い」

「「散々待たせといてそれかい！？」」

しょうもないたった一言だけにやたらと時間をかけた千景に、俺と早苗が同時にツッコんだ。

「眠いのは俺も同じなんだよ！もうちょい何かあるだろ！」

「どんだけマイペースなのよあんたは！？こんなのただの2択問題

でしょうが！」

「千景先輩、貴重な意見をありがとうございます！」

「いや、それ意見じゃなくてただの私欲！」

「馬鹿か！？馬鹿なのかてめえは！？」

「ていうかぶっちゃけあたいも眠いです！」

「おや、奇遇ですね。僕もここ最近少し寝不足気味で…」

「だから俺も眠いっつってんだろうがぁぁぁぁ！！全然眠そうに見えねえんだよ！弥一も芽依も２４時間ずっとその調子のイメージしかねえよ！」

毎回思うが、何で俺が神経すり減らしてまでツッコミ入れなくちゃいけねえんだよ？どうなってんだこのメンツは？

「ああもう！だったらサイコディスクで実体化させたモンスターを大量に送ればいいのよ！町民全員を人質にしちゃえば…」

「何でそんなアグレッシブな考えに辿り着くんだよ！？いくら何でも無理があるだろ！」

「あ…そうね。何か疲れて頭が回ってないみたい。人質なんてらしくない」

「なら、僕がコーヒーでも入れてきましょうか？」

「そんな時間あるならさっさと終わらせるわよ！」

「そうですか？これは時間短縮のために、会議室に給油ポッドを設置する事を検討しなければ…」

「今はそんな事どうでもいいだろうが！早く続けるぞ！」

「皆さん、疲れているなら今からあたいが特製ジュースを持ってきて…」

「「いるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」」

イライラがピークに達して、俺と早苗はまた同時に叫んだ。

「し、シュルク君…」

「……ハァ……続きは明日にするか……」

ＳＩＤＥ／ディヴァイン

わたしは将人の部屋に行くべく廊下を歩いていた。部屋と言って

も寮じゃない。船の方だ。

今は童実野町に船で向かっている。所謂修学旅行だ。

「おや、ムッシュディヴァインではないかでアール」

「あ、ナポリタン教頭」

「ナポレオンでアール」

「あ…すみません」

部屋の目の前まで来た時、丁度通りかかったナポリ…じゃなかった、ナポレオン教頭と会った。

「見回りでアールか？」

「ええ、まあ。将人にも用事がありまして」

教頭に答えつつ、ドアを軽くノックした。部屋にいれば探す手間が省けるのだが…。

「は～い。あ、ディヴァインじゃない」

「おじさんか先生と呼べ」

ドアを開けたのは将人ではなく璃音だった。手にはＰ〇Ｐがある。

「ん？何でムッシュ璃音がここに？」

「私だけじゃないですよ。ほら」

璃音が1歩引くと、部屋の全貌が見えた。のはいいんだが…。

「おい、ティ○レックスがこっちに来たぞ!?」

「だぁぁぁぁ!鬱陶しい!勇香、そっち頼んだわよ!」

「私1人かよ!?ちょ、危なっ!?」

「ちょっと待ってろ!俺も援護に行くから!」

「ジ○オウガは殺ったか…」

「後1体、頑張ろう!」

「「……」」

ええと…上から順に、将人→ルーナ→勇香→紅刃→秋斗→俊也。
なぜか全員P○Pを操作していた。そして改めて言うが、璃音の手にもP○Pがある。

「…何をやっているんだ?」

「モ○ハンよ。将人・ルーナ・勇香・紅刃のチームと秋斗・俊也・私のチームに分かれてやってるわ。あ、私は今拠点で道具を取った直後だからポーズしなくても大丈夫よ」

「あれ、先生じゃない」

わたしと教頭が呆然としていると、ルーナがわたし達に気づいた。

「後…え～っと…誰だっけ？」

「名前すら出てこないでアールか！？」

「あ、思い出した！ナポリタン教頭！」↑ルーナ

「え？カルボナーラ教頭じゃなかった？」↑俊也

「いや、ペペロンチーノだった気が…」↑将人

「何でスパゲッティの名前しか出てこないでアールか！？」↑ナポレオン

「味噌ラーメンじゃないか？」↑紅刃

「私は醤油味が好きだけど」↑璃音

「誰もラーメンの好みなんて聞いてないでアール！どこからラーメンが出てきたでアールか！？」↑ナポレ（ｒｙ

全然名前を覚えられていない…。ナポリタ…違う違う、ナポ…何だっけ？あれ？…もういいや。教頭ってそんなに影薄いか？

「確かヤキソバ教頭だったはず…」↑勇香

「違うでアール！何で麺類オンリーでアールか！？」↑ナポ（ｒｙ

「雪舟教頭だろ」↑秋斗

「それは日本の偉人でアール！」↑ナ（ｒｙ

「ナポペリザベス教頭じゃなかったかしら？」↑璃音

「何でアールかその意味不明な名前は！？」↑（ｒｙ

おそらく、全員素で忘れているんだろう。無意識ほど恐ろしいものはない。

「まあまあ…彼らもわざとじゃないんだし、許してあげましょうよ、パイナップル教頭」

「だからナポレオンでアール！ハァ…疲れたから部屋で休んでくるのでアール…」

パイナ…じゃない、ナポリタ…あ、間違った、ナポペリザベス…違う違う、ナッポー教頭…だから違うって！ナポレオン教頭はいろいろと諦めた顔で…あ、見えなくなった。もういいや、ナレーション諦めよう。グダグダだし。

説明が遅れたが、一応部屋は寮毎に分かれていて、別の寮のエリアには侵入禁止になっている。だが、今は光の結社の関係で、洗脳済みの生徒の巣窟にいるのは危険だ。そこで、わたしがまだ洗脳されていない…と言っても紅刃や吹雪達くらいしかいないが、彼らに別の寮に侵入ＯＫの許可を出したのだ。

「ところで、何の用事かしら？」

「落とし物だ。将人、しおり落としただろ？」

「しおり？…ああ、確かに俺のだ。すまないな」

わたしは本人の名前入りの修学旅行のしおりを将人に手渡した。

これで目的達成だな。

「ん？月沙はどうした？見当たらないが…」

「甲板に言ってくるってさ」

わたしの唐突な疑問には、紅刃が代表して答えてくれた。

ＳＩＤＥ／月沙

…遠くだけど、見えてきた。童実野町だ。

私は甲板からただ海の向こうを見続けている。手すりに寄りかかってぼんやりと。

『姫様。紅刃様達のところに行かなくてもいいのですか？』

「スイレン？…いいの。ちょっと気持ちを静めていたいから」

カードから出てきて問いかけてきたスイレンに、私は少しだけ振り返って、顔を海の向きに戻して答えた。

『気持ち…ですか？』

「不安なんだ」

『？』

「尾形を倒した後の事、覚えてる？」

『…！』

「あの後、ニュートラルに連れてかれたんだってね」

私は気を失ってたから話を聞いただけなんだけど、ユニコールに乗ったニュートラルの一員が連れて帰ったらしいんだ。

「多分、尾形はニュートラルと繋がってる。そしたら、必ずまた私を殺しに来る。それだけじゃない。私に関わる人達まで憎んでるんだ。スイレンも、紅刃も、他のみんなだって尾形の殺害対象になる。また来たら、みんなを護れるか不安で…また勝てるかも不安で…怖くて…」

『姫様…』

あの時は何とか倒せたけど、また倒せる保証はない。『1度勝ったから大丈夫』だなんて気休めにしかならない。同じデッキで挑んでくるなんて誰が決めたの？メタデッキを組んでくる可能性だって十分あり得る。どうしたら…。

『悩み事か？』

「え？」

ふと、どこかで聞いたような声がした。振り返ると、やっぱり知り合いだった。

「リンドウ！？」

『リンドウ様！？』

いつの間にか後ろにいたのは、《氷結界の御庭番》ことリンドウだった。

『久しぶりだな』

「うん、本当に。どうしてここに？」

『グルナード様から預かっている物がある。それを届けにな』

『預かっている物？』

『これだ』

リンドウが取り出したのは、赤い数珠付きの小さな黄色いメダルみたいな物だった。氷結界の一族のマークが掘られている。

「これって…《氷結界の紋章》？」

それは、魔法カード《氷結界の紋章》のイラストにあるメダルそのものだ。

『遠い地から離れて見守る事を段々もどかしく思うようになってきたらしくてな。せめて御守りでもというわけで、これを届けてほしいと頼まれたのだ』

『心配性ですね、グルナード様…』

あの人らしいや。…今度、氷結界の里に行ってみるのも悪くないよね。

「ありがとう。大切にするよ」

私はお礼を言ってから、リンドウから紋章を受け取った。

『それで…何か悩み事でもあるのか？』

「悩み事？……大丈夫。だいぶ気が楽になったから」

目一杯の笑顔をリンドウに向ける。嬉しい贈り物をしてくれたおかげで元気になった。今悩んでたって仕方ない。

『そうか？ならいいが…。では、私は里に戻るとしよう』

『リンドウ様、ありがとうございました！』

「グルナードにもありがとうって伝えといてね」

『承知した。また会おう』

リンドウはそう言って姿を消した。精霊界に転移したんだと思う。

ふと海を見ると、童実野町がすぐそこまで迫っていた。そろそろ到着かな。

「もうすぐ着くみたい」

『行きましょう、姫様！』

「うん！」

私とスイレンは降りる準備をするために、甲板を後にした。

ＳＩＤＥ／ルーナ

童実野町に到着した後、私達は港で並んで先生達の話を聞く事になった。まあ、学校ならよくある光景よね。

「全員揃ったアールか？ゴホン…それでは、今日のスケジュールを発表するのでアール」

「待ってください、教頭」

ナポリタ…あれ？何か違う…まあ、いいわ。教頭の話を早速遮ったのは、光の結社の信者をわんさか引き連れた斎王だった。

「何でアールか、ムッシュ斎王？」

「大変申し訳ないが、我々はこれから大事な用があるため、別行動を取らせていただきたいのです」

いや、別行動ってあんた達は何するつもり？怪しすぎるんだけど…。

「そうなノーネ？」

「はい、それでは失礼します」

斎王は光の結社の生徒をを連れてどこかに行ってしまった。何なのあの連中…？

とにかく、残ったのはレッドとイエロー、鮎川先生率いる別行動予定の女子生徒達だけね。最も、レッドの勇香はもちろん、私や月沙、璃音も男子生徒と行動する許可が出ているけど。

「彼等だけのお守りをしてもしょうがないアール」

「それもそうなノーネ。今日は自由行動にするノーネ！」

「ちょ、先生！？」

慌てるディヴァイン先生を放置して、クロノス臨時校長とアポロ教頭…やっぱり違うような…とにかく教頭はどこかに行ってしまった。

「先生達ってば、自分勝手っスね…」

「本当だドン！」

「いいじゃないか。俺も行きたい所あるし、自由行動大歓迎だぜ！」

翔と剣山が呆れた表情をする中、十代は嬉しそうな顔をしている。

確かに自由行動なら肩も凝らずに済むわね。

コォォォォ…

「？」

急に、ポケットの中に違和感を感じた。

気になってポケットから取り出したのは、いつも私が使ってるデッキだ。その1番前にある《ブラック・ブルドラゴ》のカードが朱色に薄く光っている。

「《ブラック・ブルドラゴ》…？」

思わず小声で名前を呼んだ直後、光が消えて元通りになった。まるで何もなかったかのように。

今のは何かしら？一瞬、何か不思議な力を感じたけど…。

「ルーナ！」

「え？」

「一緒に回ろう！みんな待ってるよ！」

急に月沙が私を誘ってきた。奥に紅刃達が待ってるのが見える。

「そうね。わかった、行きましょうか！」

たった今浮かんだ疑問を頭の片隅に追いやって、私は月沙と一緒に紅刃達のところに走っていった。

ＳＩＤＥ／シュルク

「…大体決まったな」

翌日、全員昨夜よりも落ち着いた精神状態で会議を進め、今大体終わったところだ。後はいつ動くか…。

「…？ちょっと失礼」

弥一がマナーモードの携帯を取り出し通話ボタンを押した。誰が何の用だ？

「はい、もしもし。……はい……本当ですか？反応は？……わかりました。このまま様子を見ていてください。何か変化があったら連絡をお願いします。……はい、それでは」

「何だって？」

「一瞬ですが、石板と同じ反応をしたカードを発見したようです」

ギュラの質問に、弥一は真剣な顔つきで答えた。

「マジか！？」

「そのカードの名前はわかんの？」

「カードの特定まではできませんが、持ち主は判明しています」

「で、誰なのよ？」

「イレギュラーの一員、『九条院ルーナ』です」

九条院ルーナ…。あの桃色の髪の鞭使いか…。

「九条院…。《レプティレス・ナージャ》を連れてる奴じゃねえか。レプティレスにドラゴンはいないぜ？」

「それは波星月沙が元いた世界での話です。シュルクさんの切り札がそうであるように、次元を越えた世界には我々の知らないカードが数え切れないほど存在します。レプティレスのドラゴンが存在しないとは言い切れません」

説明は弥一に任せるのが1番だな。こういう時はよく話す。

しかし、【レプティレス】と決めつけるにはまだ早いかもしれないな。デュエルをするとしたらメタカードは入れない方がいい。

「シュルク君、出撃はいつにするの？」

「あたいはいつでも行けますよ！」

「どうすんのよ？」

千景を除く女子陣に答えを求められ、俺は少し考えてから結論を出した。

「修学旅行は3泊4日。今日は1日目。明日まで様子を見る。それでも反応が出ないなら…

俺達から仕掛ける」

ＳＩＤＥ／紅刃

俺達は十代達とは別のルートで童実野町を巡っていたけど…やはりというか何というか、事件が起きた。

突然、町を囲むように《炎帝テスタロス》《氷帝メビウス》《雷帝ザボルグ》《地帝グランマーグ》が現れたから何事かと思ったら、どうやら翔と剣山が誘拐されたらしい。俺達が十代達と合流した後に聞いた話だと、『２人を返してほしかったら明日の正午に十代とエドの２人だけで海馬ランドのバーチャルドームに来い』って事だそうだ。

後で月沙に『原作知識で事前に防止できたんじゃねえか』って聞いたけど、『今回は下手に原作介入しない方がいい』って言ってた。この件は十代とエドに任せる事にして、今日はホテルに泊まる事にしたんだけど…。

「ブルー…ていうか光の結社は高級ホテル。イエローは老舗旅館。…で、何でレッドは河原でキャンプ？」

「何だこの格差社会は…」

河原に設置されたテントを見て、俺と将人は愚痴をこぼすしかなかった。

「すまないね。予算配分についてはどうしても聞いてもらえなくて…」

「ディヴァインはちゃんと抗議してくれたんでしょ？それだけでも十分だよ」

「俊也、ありがとう。それとわたしの事はおじさんか先生と呼ぶように」

上の人も頭が固いよな。未来じゃ格差なんてついてねえぞ？

「紅刃と吹雪はブルーだろ？光の結社関係でホテルに入れなくて災難だな」

秋斗が俺と吹雪さんに同情の言葉をかけてくる。まあ、ホテルだろうとキャンプだろうと関係ないけどな。

「気遣いサンキュな。でも、これくらい気にしねえよ」

「それに、オベリスク・ブルーの生徒として光の結社と一緒に行動はしたくないしね」

「いや、あんた思い切りホテルに侵入してたろ。明日香と一緒に修学旅行を過ごそうとして他の生徒達に撃退されてたろ」

思わずタメ口でツッコんじまった。この人のやりそうな事だよな。少しは自重しろよ…。

「いや～、可愛い妹と素敵で素晴らしい修学旅行の思い出を作ろうと思ったんだけどね～！見事に追い出されたよ！」

「本当に毎回毎回フリーダムだなあんたは！」

自重どころか全く反省してない吹雪さん。俺は呆れ半分で叫んだ。

「先生、飯はどうなるんだ？」

と、ここで十代がディヴァインに晩飯の話を聞きに来た。

「生憎用意されていないものでね。自炊するしかないんだよ」

「げっ！？自分で作るのかよ！？」

十代が嫌そうな表情をして、それに合わせてレッドの生徒達が溜め息やら悲鳴やらを吐き出した。

「あはは…これも学生時代のいい思い出になるさ」

「ポジティブですね、吹雪さん…」

「でも、食えるものができるのか？俺は料理はできないぜ？」

「その点は心配無用だ。既に手を打ってある」

「は？」

「先生～！買ってきたわよ～！」

十代の疑問の声の後に、買い物袋をたくさん持ったルーナ達が戻ってきた。後、後ろから三沢も来てる。

「ルーナ！勇香と月沙に璃音、双六さんも！」

「勇香ちゃんはともかく、女子は高級ホテルでのディナーなんじゃ…？」

「そうだけど、私達はレッド生と一緒に行動するって正式に許可を貰ってるんです」

吹雪さんの疑問には月沙が答えた。鮎川先生も話がわかる人だな。

「なるほど。ところで、こちらのご老人は？」

「儂は武藤双六じゃ。よろしく頼むぞ、若いの」

「武藤双六？確か、決闘王の祖父も同じ名前だったような？」

「三沢君、いつの間に！？」

自然に話の輪に入ってきた三沢に、吹雪さんはなぜかびっくりしていた。

「修学旅行は気の知れた友と一緒に過ごそうと思って来たんだが…俺はまた空気化してたのか…」

「自覚してたんかい…」

「それで、俺の記憶違いじゃなければ決闘王の武藤遊戯の祖父とこちらのご老人は同じ名前な気がするんだが？」

「僕もその点は気になってるんだけど？」

「気がするも何も本人だぞ？」

「「ええっ！？」」

勇香の発言に三沢と吹雪さんが驚き、その場にいたレッド生達も騒がしくなった。俺達は十代と合流した時に自己紹介を済ませてある。

「それはいいとして…ディヴァイン、材料は全部買ってきたわよ。これから料理するわ」

「うん、ご苦労様。すぐに器具を準備しよう。後、おじさんか先生と呼びなさい」

ディヴァインはそう言って、料理に必要な器具を用意するためにその場を離れた。

「俺は手伝ってくる。秋斗も来てくれ」

「ハァ…仕方ない」

ディヴァインだけじゃなかったな。将人と秋斗も手伝いに行った。

「料理って…璃音達が作ってくれるのか？」

「そうよ。今夜はカレーを作る予定よ」

璃音達は俺達がテントとかの準備をしてる間に、ディヴァインの依頼でカレーの材料の買い出しに行ってたんだ。ディヴァインもこれを見越して器具を持ってきてたらしい。

「本当か！？」

「私は趣味でたまに料理してるくらいだし、これくらい何て事ないよ！」

「私達も手伝うし、人数は心配いらねえよ！」

「じゃあ、僕も手伝…」

「いや、俊也は見てるだけにして」

「お前が作ったら俺達がほぼ全滅するっての…」

「儂の差し入れを食べて待ってるといい。料理ができるまでの腹の足しにはなるじゃろう！」

双六さんがシートの上に、紙袋から取り出した大量のハンバーガーの包みを置いた。それを見て十代達が目を輝かせた。

「ありがとう双六さん！」

こうして、十代達がハンバーガーに群がってる間に月沙主導でカ

レーの調理が行われた。

ガッカカカッ

ガキッガッガッ

ザザッ…

「ふぅ…」

何度かの打ち合いの後、俺と将人は互いに距離を取った。

何してんのかって？手合わせだよ手合わせ。待ってるのも暇だからな。さすがにアビリティを使うわけにはいかないから、丁度いい棒切れでやってるけど。

「強いな。昔から剣を習っているだけはあるか」

「伊達に剣術やってねえよ。でも、お前もなかなかやるじゃねえか」

「やってるね」

少し休憩でもしようかと考えてると、月沙と勇香がやってきた。

「月沙、勇香！」

「飯できたぜ。早く来いよ」

「呼びに来てくれたのか。すまないな」

「気にすんなって！」

４人で戻ると、もうみんな食べ始めていた。もう暗いけど、いくつかある焚き火が明るい。

「はい、どうぞ」

「サンキュな」

俺は月沙から、将人は勇香からそれぞれカレーが盛られた皿とスプーンを受け取って、空いてる椅子に座った。これもディヴァインが用意した物だ。だいぶ亭主の仕事か教職が板についてきたな。月沙と勇香も自分の分を用意して俺達に倣った。

「んじゃ、食うか。いただきます」

「「「いただきます」」」

俺を筆頭に恒例の挨拶をしてから食べた。これ食べる前の常識な。1人暮らししてる人って、ちゃんと言ってんのか？疑問だ。

「どうかな？自信はあるんだけど…」

「…美味い！」

「いい味だな」

「本当!?よかった!」

「気合い入れて作ったかいがあったな」

これは素直に美味い。そこら辺の奴よりも全然いい。

「…?珍しいな。自前のドレッシングをかけないなんて」

「これは協力して作ったもんだ。味をごちゃごちゃにするなんて野暮な真似はしねえよ」

勇香が例の激辛ドレッシングを使ってないのを将人が指摘したけど、なるほど、そういう事か。

「ま、こういったアウトドアも悪くねえよな」

「今度みんなでキャンプに行こうよ!」

「いい考えだな!どっか山でも行かねえか?」

「川辺が丁度いい。そこを探そう」

上から紅刃→月沙→勇香→将人の順だ。未来に帰った後の楽しみが増えたな。遊星達も誘おうか?

そんなこんなで平和な一時を過ごした。それこそこの時代に来た目的も忘れるくらいに平和な…。

だからってわけじゃないけど…この時はまだ、近い内にとんでもない戦いが待ち受けているなんて誰も知らなかった。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第５９話　会議は夜中に開くべからず（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「今回のキーカード…つっても、今回は特に紹介するカードがねえな…」

ロコナ『誰もデュエルしてないもんね』

璃音「たまにはこんな時もあるわよ」

フィレス『ガルルッ』

ロコナ『そういえば、５Ｄ’ｓ終わっちゃったね』

勇香「そうだな。最終回も面白かったけど、何か寂しくなるな…」

璃音「でも、私達の物語はまだ終わってないわ。これからは兄さん達の分まで頑張っていきましょう」

勇香「ま、それもそうか。よっしゃ！今年も気合い入れて行くぜ！」

璃音「それと、水を差すようで悪いけど…修学旅行編が終わるまでは別の人達にこのコーナーを代行してもらうわ」

勇香「は！？何でだよ！？」

璃音「今回は私達も総動員で活躍するからよ。１話完結ならともか

く、1回のデュエルが2~3話跨ぐ事だって十分あり得るわ。正直、このコーナーに出る暇がないわよ」

勇香「マジかい…。ま、しゃあねえか。だったら本編で暴れてやるだけだ！」

璃音「後、代役は2人よ。毎回交代するから、誰が来るかお楽しみにね」

ロコナ『私とふぃれすは前書きのコーナーに遊びに行ってるね！』

フィレス『ガウルルッ！』

勇香「お前らは地味に出番増やせるのな…」

璃音「今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『感想待ってま~す！』

勇香「次回も見てくれよな！」

ーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

今回から始まる修学旅行編は、ニュートラルとの全面対決を予定しています。というわけで、ニュートラル側の新キャラを一斉に登

場させました。

次回は修学旅行2日目を飛ばして3日目からの話です。戦闘は次回からですね。

では、また次回！

第６０話　足が速いと何かと便利（前書き）

☆精霊の呟き☆

ウィン『第６０話だよ！今回はどんな話？』

ルリア『７割くらいリアルファイトですね』

ゴーズ『割合高いな！？』

ウィン『せっかくアビリティなんて設定があるんだから活用しないと！』

ガルド『キュルルッ』

ゴーズ『遊戯王って、カードゲームだよな…？』

ウィン『「おい、デュエルしろよ」とか思ってるそこの君！ちゃんとデュエルもあるから最後まで読んでね！』

ゴーズ『むしろそっちをメインにするべきじゃ…』

ガルド『ピィーッ！』

ゴーズ『いたたっ！？何でつつく！？』

ルリア『それではどうぞ！』

第６０話　足が速いと何かと便利

ＳＩＤＥ／シュルク

あれから様子を見る事にしたのはいいが…修学旅行３日目の朝になったというのに、弥一の部隊からの連絡はなし。特に異変はないという事だ。

自室から携帯電話で連絡をする。メールを打って６人全員にまとめて送った。

『様子見はここまでだ。出撃する。会議室に集合だ』

それだけ伝えれば十分だ。俺は準備を手早く済ませて自室を出た。

ＳＩＤＥ／ルーナ

修学旅行２日目…今日は３日目だからつまり昨日。十代とエドは何とか翔と剣山を救出できた。

同じＨＥＲＯ使いだから相性いいみたいなのよね。こんな組み合わせにしたのが相手の敗因かしら？いくら犯人が斎王の妹とは言ってもね…。

まあ、斎王の妹のミズチって人も、本質は悪い人じゃないみたい。後は月沙の言う原作の流れに任せるしかないわね。月沙がいいって言わない限りは、無闇に掻き回すのはまずいっぽいし。

で、今日の日程は自由行動。町中で解散した。元々この予定だったしね。ていうか、今回の修学旅行は自由行動ばかりね。3日もあれば童実野町制覇できるんじゃない？

今日は町中でデュエル大会が行われるらしくて、私達はそれを観に行く予定よ。事前エントリー制だから大会には参加できないけど、フリーデュエルくらいならできるでしょ。というわけで、全員デュエルディスク常備よ。

「それじゃ、行くか！」

「どんな奴が出てんだろうな？今から楽しみだぜ！」

「あまり遅くなるなよ」

「わかってら！」

ディヴァインの軽い忠告に勇香が受け答えをした。夕飯の料理もあるし、あまり遅くなるのはまずいわね。

「…妙だ…」

「どうしたの、秋斗？」

私はなぜか考え込んでいる秋斗に話し掛けた。

「いくら朝早くとは言っても、全く人の気配がないのはおかしい」

「あ、そういえば…」

言われてみれば、確かに私達以外誰も見当たらない。町中の交差点で車1台走ってないのはどう考えても変ね。

「どうなってるの…？」

「簡単な人払いだ」

「！？」

「部外者に用はないからな」

上から誰かの声が聞こえたかと思うと、巨大な影が目の前に降りた。

見上げると…何あれ？巨大な…鳥？

「何だあいつ！？」

「モンスター…なのか？」

紅刃と将人が驚きの声を上げる中、その鳥は私達から少し離れた所に降り立った。全身黄色のかなり大きな巨鳥。あれってデュエルモンスターズのモンスター？でも、あんなモンスター知らないし…。

「あれは…《霞の谷の巨神鳥》？」

月沙が真っ先に正体を言い当てた。て事は、あれって未来のモンスター？

「さすがですね。正解です」

すると、その巨神鳥とやらから人が４人飛び降りてきた。

１人目は紫の髪で、灰色のスーツと青いネクタイを着こなしている優男みたいな感じの青年。２人目は黒いキャスケットと黒いジャンパー、青いジーパンを身につけている赤い髪の…女の子かしら？ボーイッシュな身なりね。３人目はオレンジのシャツと黄色いパーカー、青い短パンに黒いニーソックスの、短めの青いツインテールの小さな女の子。そして４人目は、黒いポロシャツと藍色の上着、灰色のズボンを身につけた鈍色のボサボサ頭だ。

「誰だお前ら？」

「覚えていないか？俺とは１度会ったはずだがな」

秋斗の質問に対して、グレーの髪の男が１枚のカードを見せてきた。

「《魔轟神獣ユニコール》…？何あれ？」

「な…！？てめえまさか、あの時の！？」

「俺はシュルク・ディグレイ。ニュートラルの者だ」

勇香がいち早く気づき、その後に男が自己紹介をしてきた。ニュートラルって事は、私達の敵！？

「何の用だ？返答次第じゃ、俺達も黙っちゃいないぜ」

紅刃がデュエルディスクの柄に手を掛ける。戦闘準備は万全みたいね。

「恨みはないが、少し用事に付き合ってもらう」

シュルクがそう言った直後、キャスケットの女の子が走り出した。

右手から黄色い光が出たかと思うと、鍔（つば）のない包丁みたいな感じの大剣に変化した。それを右手だけで逆手に握って、紅刃に斬りかかる。

ガキィン！

紅刃もディスクを両刃の太刀に変化させながら鞘から抜き放ち、大剣を受け止めた。金属がぶつかる音が綺麗に響く。

紅刃が力を入れて吹っ飛ばしたけど、女の子はその勢いを利用して一旦距離を取り、剣を普通の向きに持ち変えた。そして互いに突

っ込み、また刃を交える。そこから激しい打ち合いが始まった。

「（何だこいつ？型が俺と似ている…？）」

お互いに文字通り1歩も引かない。足の位置を変えずにただ斬りつけまくる。あの女の子、紅刃と互角の戦いをしてる…？

「ミフロス、お願いします」

「キュオォォォ！！」

スーツの男が巨神鳥に指示を出すと、巨神鳥…ていうかミフロスが翼を振るって強風を叩きつけてきた。

「それならこっちだって！」

俊也も対抗するように暴風を蹴り出した。嵐と嵐がぶつかり、相殺される。

…と思ったけど違った。力負けしたのか俊也の風が破られた。ただ、威力はだいぶ削がれてるから私達を吹き飛ばす事はなかった。

「（パワーアップなしは無理があったか…！）」

すると、今度はミフロスの頭からいつの間にか登っていたシュルクが跳躍し、私達に向けて両手を翳した。そして、緑の光を溜めて雨のように光弾を連射した。

「全体攻撃か…！？」

「なるべく撃ち落とす！」

「私も付き合うわよ！」

月沙が銃型のディスクを抜いて青い光弾を連射して攻撃を撃ち落とし、私も鞭を創って振り回して防ぐ。大多数は消したけど完全というわけじゃなく、残りの分は全員かわした。

シュルクは着地した後私に右手を向けて、黒い光線を一直線に放った。

「やば…！」

ゴウッバチィッ！

でも、私に届く事はなかった。杖を持った秋斗が間に割って入り、《ホーリーライフバリアー》を張って防いでくれたからよ。

「この攻撃を防ぐか…」

「ほざいてる場合か？《デス・メテオ》！」

秋斗が巨大な火球を飛ばし、シュルクも応戦するように同じサイズの黄色い光弾を放った。２つの攻撃がぶつかり爆発する。

そして爆煙の中からオレンジと青の大きな生き物が飛び出し突進してきた。

「何！？」

秋斗と私は咄嗟に左右に避けた。爆発を活かした奇襲攻撃…！？
よく見たら何あれ？トリケラトプス？

「アウロ、次！チェンジ・グアイバ！」

ツインテールの女の子が指示を出すと、トリケラトプスが赤く光り、頭が青くて背中や手首足首に炎を纏っている恐竜っぽい生き物に変化した。

「（『まずは撹乱しろ』だったよね！）帽子の女を狙って！ファイア！」

カラフルな恐竜が勇香に向けて火炎放射を放つ。でも、勇香は両手に炎を灯して、両肘を曲げて真正面から受け止めた。そして、両腕を横に広げて引き裂くように炎を消し去った。

「私に炎は効かねえ！」

「お～！」

「感心している場合ではないのですが…」

「（とりあえず、あの恐竜を仕留めるか…！）」

ツインテールの女の子が感心してる間に、将人が大鎌を創って恐竜に斬りかかった。

ガキィッ！

「何！？」

でも、いきなり現れた誰かによって攻撃を阻まれた。桃色の髪に忍者みたいな赤いマスク、鍔のない大剣…。あれって《D・D・アサイラント》！？しかもあのキャスケットの女の子が使ってるのと同じ剣って事は、あの女の子の精霊で間違いないわね。

「わたしも行こう！《サイコ・ソード》！」

将人はそのままアサイラントとの戦闘に入り、代わりにディヴァイン先生が《サイコ・ソード》を発動させて恐竜に斬りかかった。今度こそ…！

「チェンジ・ノーマル！」

すると、ツインテールの女の子の指示に合わせて小さな赤ちゃんの恐竜に変化した。先生は横凪ぎに《サイコ・ソード》を振ったから空振ってしまった。

「縮んだ！？」

「チェンジ・プロトプス！」

「何！？ぐわぁっ！」

さらにまたトリケラトプスに変化して、先生を真下から空高く突き上げた。

「ぐ…《ファイヤー・ボール》！」

先生は空中で《ファイヤー・ボール》を発動して、それを恐竜…

じゃなくてアサイラントに向けて放った。将人は先に察知して飛び退いた。

「！」

アサイラントはそれをバックステップを使ってギリギリでかわした。そこに勇香が炎の拳で殴りかかる。

「らぁっ！」

ゴッ！

「…っ！？」

アサイラントは大剣で受け止めたけど、相手はあの馬鹿力。ガードしたとは思えないくらいの勢いで吹っ飛んだ。

その間に先生が空中から《サイコ・ソード》を恐竜目掛けて降り下ろす。

「チェンジ・モノロフ！」

でも、今度は頭が黄色で胴体が青の小さな肉食恐竜に変化して素早く飛び退いた。

私と秋斗と俊也はさっきからシュルクに応戦してる。ただ、いろんなタイプの遠距離攻撃で牽制されて迂闊に近づけない。鞭や風、魔法・罠で防いでも、間を縫うように攻撃が来る。

紅刃はずっとキャスケットの女の子と戦っている。何か2人共型

が少し似てる気がするけど、気のせいかしら?

璃音と月沙はスーツの男と戦っていた。璃音が地面に片手を付いて地面から鉄柱を次々生やし、月沙が冷気の銃弾を撃つのに対して、スーツの男は白い…何かしら?霧?とにかくそれをビーム状やら球体やらにして自在に飛ばしてくる。ミフロスはカードに戻ったのか、既に姿を消している。

「これならどうですか?」

スーツの男が掌サイズの太さの…霧でいいや。霧を竜巻状にして一直線に放った。璃音は鉄の壁を生やして防いだけど…。

バキャアッ!

「…!」

貫通性なのか壁を貫いた。璃音は左に素早く飛び退いてかわし、右手にキャノン砲みたいなのを生成。そのまま灰色の光弾を撃ち出した。それに合わせて月沙も一際大きな青い光弾を撃つ。

対して、スーツの男は霧をドーム状に展開して盾にした。2つの弾丸が当たるも、風力か何かで後ろに受け流されてしまった。

「受け流した…!」

「これなら!」

月沙は今度はレーザー光線を撃ち出した。スーツの男もこれはまずいと思ったのか、右に飛んでギリギリで避ける。そしてすぐさま

霧の弾丸を3発発射した。

不規則に飛び交う弾にも慌てずに、月沙は2発撃ち落とした。残りの1発が背後から迫ったけど、それは璃音が鉄の壁で防いだ。

「（少々、押され気味ですね…）」

「（やはり人数的に少し不利か…。だが、そろそろだな）千景！」

シュルクが叫びながら一旦後ろに下がると、キャスケットの女の子も紅刃の攻撃をかわしてシュルクの傍まで戻った。あの女の子、千景って言うんだ…。

「…簡易のものが最適」

「だろうな。どれくらいかかる？」

「15秒」

「少し不安だが…まあいい。準備してくれ」

千景は最低限の言葉だけを話してから大剣を消して、右手に機械付きの黒い手袋をはめた。それから左手を口元に持っていった。そこに黄色い光が集まる。

「何をする気だ…？」

左手を払うように退けると、《D．D．アサイラント》と同じ赤いマスクが装着されていた。

「何あれ？」

「身体強化か何かだろ。放っておくのは危険だな」

秋斗の言う通りなら、これってちょっとやばくない？

「下がれ！」

「…！了解です」

「はい！」

シュルクは叫びながら両手を翳し、緑色の光を溜め始めた。それに伴ってスーツの男とツインテールの女の子、恐竜、アサイラントが後退する。

そして、緑の光弾を広範囲に乱射してきた。

「うわっ！？」

「くっ！」

「《次元幽閉》！」

俊也と将人、勇香はかわして、秋斗と璃音はバリアと鉄の壁で防御、先生は《次元幽閉》を発動させて攻撃を吸い込み、月沙と私は銃弾と鞭で潰し、紅刃は剣を振り上げて電撃を繰り出しまとめて消し飛ばした。それでもまた弾が飛んでくるし、何でこう無駄に範囲広くて連射数多いのよこの技！？

「（長時間の連射はさすがに疲れる…）」

「…準備完了」

「！…よし」

やがて攻撃が止むと、ある異変が目に入った。

千景が右の手首を掴んでいて、右手には白い光が込められている。

何か攻撃を仕掛けるべきかと考えて1歩踏み出そうとしたその時、

千景が一瞬で私の目の前まで移動した。

「！？」

「速…」

ドッ

そして、紅刃が何か言い切る前に、白く光る右手が私のお腹に埋まっていた。

「ルーナ!?」

…あれ?これって、穴空けられた?でも血なんて出ないし、何より痛くない。

「っのやろっ!!」

「邪魔はさせないぞ」

勇香が飛び出すけど、シュルクの黒い光線で後退せざるを得なくなる。それが視界の隅で見えた。それから何か騒がしいけど、みんな足止めを食らってるんだろう。

それより、何これ?痛くはないけど、力が抜けて…。

「マスターに何するのよ!」

「!?」

突然、目の前の千景が吹っ飛んで、右手も抜けた。何事かと思ったけど、見慣れた姿が目に映った。

「ナージャ…!?」

ナージャが実体化して、不意討ちで体当たりを仕掛けたみたい。

「う…」

と、力が入らなくて片膝をついてしまった。

「マスター、大丈夫ですか!?」

「大丈夫…。力が抜けただけだし、怪我はないみたい」

自分のお腹に手をやるけど、特に異常はない。ただ、自力で立っていられないほど疲れたけど…。

千景の方を見ると、右手には朱色に光る何かがあった。それを持ったまま佇(たたず)んでいる。

「私のマスターに何を…!」

「!?」

ガキィッ!

ナージャが台詞を言い終わる前に、千景は左手から大剣を出して

誰かの攻撃を受け止めた。それと同時に、朱色の光も消えてしまった。

「ルーナに何しやがった！？」

紅刃だった。ロディスのアビリティを発動させているらしく、上着が模様入りの黒いコートに変わっている。

「…大丈夫。怪我はない。少し休めば全快する」

「何…？」

キュウウウウ…

「え…？」

不意に、スカートのポケットから朱色の光が漏れた。まさかと思ってデッキを取り出す。

「これって…！？」

案の定、《ブラック・ブルドラゴ》のカードが光っていた。修学

旅行初日よりも強く輝いている。

ピピピピピピ！

すると、どこかから電子音が聞こえた。音のした方を見ると、スーツの男が何かの機械を取り出していた。

「石板の反応が出ました」

「（石板だと…？）」

「場所はどこだ？」

「これは…海馬コーポレーションですね。現地に行ってみなければより詳しい場所はわかりませんが…」

「十分だ。足止めは任せた。１人でも多く頼む」

「わかりました。では、これを」

スーツの男はシュルクにその機械を手渡した。

「石板って…お前らの狙いはそれか！？」

「当たりだ。反応が薄くて探索が困難だったから、その女を少し追い込む必要があった」

そんな理由で…。でも、何で石板を？そもそも、私達はニュートラルの明確な目的を知らない。

「石板が欲しければ追ってこい。競争だ」

「競争だと？」

「弥一、ここは任せた」

「お気をつけて」

弥一と呼ばれたスーツの男は、両手から霧を噴射して辺り一面を包んだ。真っ白で周りが見えない。

「目眩ましかよ…！？」

「僕が吹き飛ばす！」

俊也が足を振り上げたのか、暴風が霧をまとめて吹き飛ばした。こういう時は風って便利よね。

霧は晴れたけど、シュルク達はユニコールと何かの恐竜に乗って先に行ってしまってるのが見えた。アサイラントはカードに戻ったのか姿が見えない。そして、弥一だけが残っていた。

「さて…我々の作戦を無事に遂行するために、僕はあなた達を足止めしなくてはなりません」

「この人数を相手にするつもり？」

「それは難しいでしょう。紅刃さんや俊也さんの機動力も考えると、一時的に体力が尽きたルーナさんを人質に取る事すらままなりません。そんな事をしたくはありませんけどね」

「（…勇香、ルーナをおぶって先に行って。さっきので体力を吸い取られたみたい）」

「（月沙？…わかった。紅刃と俊也を先に行かせるべきだけど、身軽な方がいいってか）」

この中で1番速いのは、俊也とアビリティ発動中の紅刃。この2人を先に行かせて、残りのメンバーで弥一を倒せばいい。私は…悔しいけど戦闘不能ね。

「ですが、我々が4人だけで来たとお思いですか？」

「え！？」

「何！？」

「後3人、我々の仲間がこの町に来ています。当然、精霊を連れた人もいます。シュルクさん達も含めて一斉にかかれば…」

「ウィン達の力を借りたとしても、僕や紅刃だけじゃ厳しいね…」

だったら全員で追うしかないじゃない…！でもこいつが後から追ってきたら追撃を受けるし…。

ガガガッ！

「…！？」

すると、突然弥一の周囲から鉄柱が何本も飛び出し、檻の形状に

なって弥一を閉じ込めた。

「下手な真似をしたら打つわよ」

璃音がいつの間にか地面に右手をついていた。璃音は生やした鉄柱からさらに鉄柱を生やす事もできる。あれなら、少しでも怪しい動きをすれば、地面はもちろん檻からも鉄柱を生やして３６０。全方位から同時攻撃できる。

「ほぉ…」

「ここは私に任せて、あなた達は先に行きなさい」

「璃音…悪い！」

「後から追ってきてよ！」

紅刃と俊也はそれぞれ磁力と風力も使って高速移動し、シュルク達の後を追いかけた。それを見て、勇香が私に近づいておぶり出した。

「勇香！？」

「《ブラック・ブルドラゴ》が反応したんなら、お前の石板だろ？お前が行かなきゃ誰が行くんだよ？ナージャはカードに戻れ！行くぞ！」

「はいはい。マスターは頼んだわよ～」

ナージャがカードに戻るのと同時に、勇香達も走り出した。

「璃音、そっちは頼んだよ！」

「ええ！」

月沙の呼び掛けを最後に、私達は振り返らなかった。

ＳＩＤＥ／璃音

月沙達が見えなくなったのを見計らって、私は地面から手を離して立ち上がった。それと同時に檻も消滅した。

「なぜ攻撃しなかったのですか？あのまま全方位から攻撃した方がよかったと思うのですが…」

「生憎、檻はコントロールが難しくてね。距離もあるし、そこまでの余裕はないわよ」

「先程までの戦闘で鉄を自由自在に操る事ができると思ったのですが…完璧というわけではないようですね」

「他の人に比べたら経験が浅いだけよ」

そう…私のアビリティは距離が開くほどコントロールしにくい。檻といった複雑な構造物なら尚更。そう美味しい話はないって事よ。

「あなたのアビリティは精度が高そうね。見た感じでは、霧を自在に操る能力みたいだけど」

「正解です。僕のアビリティは霧を操る能力です。ここまでコントロールをよくするのには苦労しましたよ。慢心するわけにはいきませんけどね」

やはり霧だったのね。霧の弾丸とかを縦横無尽に操作しているところを見ると、かなり精度が高いわね。私も見習いたいわ。

「それはいいとして…あなたが残ってくれて幸いです」

「どういう事？」

「あなたのデュエルには以前から興味がありました。１つ手合わせしてもらえませんか？」

弥一はデュエルディスクを展開させた。私のデュエルに興味がある…？

「私の事を知っているの？」

「我々の情報網を甘く見ない方がいいですよ。何１つ無駄にしないバトルスタイル、この目で確かめたいのです」

「なるほど…。いいわ。そのデュエル、受けましょう」

私もデュエルディスクを起動させた。あ…始める前に、聞いておく事があるわ。

「あなたの名前、まだはっきり聞いてなかったわね」

「これは失礼。僕は富岡弥一。ニュートラルの幹部を勤めています」

「そう…」

幹部ともなると、簡単に突破できそうにないわね…。

「それじゃ、始めましょうか」

「お手柔らかにお願いしますよ」

「「デュエル！」」

璃音ｖｓ弥一

「先攻は貰うわよ。私のターン！速攻魔法《手札断殺》！互いに手札を2枚墓地に送り、カードを2枚ドローする！」

「いきなり《手札断殺》を使用しますか…」

「そして、《スクラップ・キマイラ》を召喚！」

がらくたで作られた幻想の怪物が姿を現す。このデッキのキーカードよ。

《スクラップ・キマイラ》　ＡＴＫ／１７００

「《スクラップ・キマイラ》が召喚に成功した時、自分の墓地から

スクラップのチューナー1体を特殊召喚できる！《スクラップ・ソルジャー》を特殊召喚！」

たった今墓地に送ったがらくたの兵士がキマイラの横に召喚された。

《スクラップ・ソルジャー》　ＡＴＫ／２１００

「レベル４《スクラップ・キマイラ》にレベル５《スクラップ・ソルジャー》をチューニング！」

ソルジャーが５つの黒い輪になり、キマイラが中に飛び込む。

「巡りし想いが、双龍となりて翼を翳す！光を導く星となれ！」

☆４＋☆５＝☆９

「シンクロ召喚！食らいつけ！《スクラップ・ツイン・ドラゴン》！」

双頭の《スクラップ・ドラゴン》。攻撃力は申し分ないわ。

《スクラップ・ツイン・ドラゴン》　ＡＴＫ／３０００

「カードを2枚セットしてターン終了よ」

璃音
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《スクラップ・ツイン・ドラゴン》（ＡＴＫ／３００

0）
魔法・罠／リバース×2

「先攻1ターン目から攻撃力3000…やりますね」

弥一はニコニコしながら感心している。何か調子狂うわね…。

「では、僕のターン、ドロー。フィールド魔法《霞の谷の神風》を発動します」

辺りを白と緑にキラキラ光る風が漂い始める。

《霞の谷の神風（ミスト・バレルふう）》
フィールド魔法
自分フィールド上に表側表示で存在する風属性モンスターが手札に戻った場合、自分のデッキからレベル4以下の風属性モンスター1体を特殊召喚する事ができる。
この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「魔法カード《マジック・ガードナー》を発動。フィールド上の魔法カードにカウンターを1つ乗せ、そのカードが破壊される時に乗せられたカウンターを身代わりにできます」

《マジック・ガードナー》
通常魔法
自分のフィールド上に表側表示で存在する魔法カード1枚を選択し、カウンターを1個乗せる。
選択したカードが破壊される場合、代わりにカウンターを1個取り除く。

「《霞の谷の神風》にカウンターを乗せます」

《霞の谷の神風》　Ｃ／０→１

「破壊耐性…」

「そして、《霞の谷の雷鳥》を召喚します」

オレンジの尾を持つ黄色の鳥が出てきた。チューナー…とかじゃないみたいね。

《霞の谷の雷鳥（ミスト・バレー）》
効果モンスター
星３／風属性／雷族／ＡＴＫ１１００／ＤＥＦ　７００
フィールド上に表側表示で存在するこのカードが手札に戻った時、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果で特殊召喚に成功したターン、このカードは攻撃を行う事ができない。

《霞の谷の雷鳥》　ＡＴＫ／１１００

「続いて、手札の《Ａ・ジェネクス・バードマン》の効果を発動します。自分フィールド上のモンスター…雷鳥を手札に戻し、このモンスターを手札から特殊召喚します」

体は緑で嘴（くちばし）は黄色の、鳥を模した機械が現れた。

《Ａ（アーリー）・ジェネクス・バードマン》
チューナー（効果モンスター）
星３／闇属性／機械族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ　４００

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を手札に戻して発動する。
このカードを手札から特殊召喚する。
この効果を発動するために手札に戻したモンスターが風属性モンスターだった場合、このカードの攻撃力は５００ポイントアップする。
この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

《Ａ・ジェネクス・バードマン》　ＡＴＫ／１４００→１９００

「この時手札に戻したモンスターが風属性だった場合、攻撃力は５００ポイントアップします。最も、このターンは意味がありませんが…」

「…？」

「《霞の谷の雷鳥》は、手札に戻った時に特殊召喚されます」

《霞の谷の雷鳥》　ＡＴＫ／１１００

「そして《霞の谷の神風》の効果発動。風属性モンスターが手札に戻った時、デッキからレベル４以下の風属性モンスターを特殊召喚する事ができます。デッキから2体目の《霞の谷の雷鳥》を特殊召喚します」

《霞の谷の雷鳥》　ＡＴＫ／１１００

バウンスをトリガーにして発動する効果…。レベル４以下なら何でもいいみたいだし、厄介ね。

「こちらも行きますよ。レベル３《霞の谷の雷鳥》２体にレベル３《Ａ・ジェネクス・バードマン》をチューニング」

機械鳥が３つの緑の輪になり、２羽の雷鳥が合計６つの星になる。

「霞の谷より出でし者よ、領域を侵す邪(よこしま)を祓(はら)え！」

☆３＋☆３＋☆３＝☆９

「シンクロ召喚！追い払え！《ミスト・ウォーム》！」

背中のいくつもの突起から紫の霧を噴き出している、青い芋虫のようなモンスターが現れた。

《ミスト・ウォーム》
シンクロ・効果モンスター
星９／風属性／雷族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ１５００
チューナー＋チューナー以外のモンスター２体以上
このカードのシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカードを３枚まで持ち主の手札に戻す。

《ミスト・ウォーム》　ＡＴＫ／２５００

「《ミスト・ウォーム》がシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上のカードを３枚まで手札に戻します」

「バウンス効果…！？」

「あなたのフィールドに存在するカードは丁度３枚。全て戻してもらいますよ。ミスト・トライ・ガスト！」

《ミスト・ウォーム》が口から紫の霧を吐き出し、私のフィールドを覆い尽くした。霧が晴れた後のフィールドには、何も残っていない。

「これで安全に攻撃できますね。バトル！《ミスト・ウォーム》でダイレクトアタック！ミスト・ブレス！」

今度は白い霧を一直線に吐き出す。確かに、普通なら大ダメージね。

でも、突然私の前に緑の輪が現れて、輪の中が緑の光で埋め尽くされた。そして、霧の攻撃を完全に防ぎ切った。

「おや…？」

「《シンクロ・バリアー》を発動させてもらったわ。自分のシンクロモンスターをリリースする事で、次のターンのエンドフェイズ時まで私が受ける全てのダメージを0にする。リリースしたのは当然よ」

《シンクロ・バリアー》
通常罠
自分フィールド上に存在するシンクロモンスター1体をリリースして発動する。
次のターンのエンドフェイズ時まで、自分が受ける全てのダメージを0にする。

「なるほど…。今の攻撃を防ぐとは…。カードを1枚セットしてターンエンドです」

スクラップ・ツイン・ドラゴン

弥一
ＬＰ／４０００
手札／１
フィールド／《ミスト・ウォーム》（ＡＴＫ／２５００）
魔法・罠／《霞の谷の神風》（Ｃ／１）リバース×１

「攻撃は防いだとはいえ、あなたのフィールドには何もありません。その上、《スクラップ・ツイン・ドラゴン》も失いました。さて、どうしますか？」

この弥一とかいう男…足止めとはいえ、純粋に私とのデュエルを楽しんでいるのかしら？やけにニコニコしているし…。

ニュートラルはわからない事だらけだわ。規模も、目的も、本当に悪人ばかりかどうかさえ…。その答えはどこにあるのかしら？

とにかく、彼が実力者だというのは間違いないわ。破壊はされてもバウンスをされるとは思ってなかった。一応入れておいた《シンクロ・バリアー》を使う羽目になるなんてね…。

さて…次はどう動こうかしら…？

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第６０話　足が速いと何かと便利（後書き）

☆今回のキーカード☆

龍亞「みんなお待ちかね！『今回のキーカード』の時間だよ！今回はこの俺、龍亞と…」

龍可「龍可でお送りします。ていうか、このコーナーを待ってる人っているの…？」

龍亞「ノリだよノリ！本編では、紅刃達がニュートラルと戦ったよね」

龍可「リアルファイトだけど…。読者から苦情来ないの？」

龍亞「大丈夫だって！かっこいいじゃん！俺も使ってみたいな～！」

龍可「龍亞は精霊がいないから無理でしょ？」

龍亞「う…そりゃそうだけど…。じゃあ、龍可はどんなのが使いたいんだ？」

龍可「私？使うとしたら…みんなを癒すような、回復系の能力かな？」

龍亞「へ～。龍可らしいや。それじゃ、カード考察をやろうよ！」

龍可「そうね。今回紹介するのは、ニュートラルの幹部、富岡弥一

が使用したシンクロモンスター《ミスト・ウォーム》よ」

《ミスト・ウォーム》
シンクロ・効果モンスター
星9／風属性／雷族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ１５００
チューナー＋チューナー以外のモンスター2体以上
このカードのシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカードを3枚まで持ち主の手札に戻す。

龍可「シンクロ召喚に成功した時に、相手フィールド上のカードを3枚まで手札に戻す効果を持っているわ」

龍亞「《ハリケーン》じゃ戻せないモンスターカードも手札に戻せるよ！シンクロモンスターや融合モンスターはエクストラデッキに戻すんだったよね？」

龍可「そうよ。特に融合モンスターは再利用が難しくなるわね。シンクロ素材は最低でも3体必要だけど、そこはプレイングでカバーよ」

龍亞「でも、月沙姉ちゃんが使ってる《氷結界の龍　トリシューラ》の方が強い気がするな…」

龍可「そうとも言い切れないわ。トリシューラの場合、フィールドからは1枚しか取り除けないけど、《ミスト・ウォーム》はフィールドから一気に3枚もどかす事ができるのよ？」

龍亞「あ、そうか！とどめを刺す時に邪魔なカードが2枚以上あったら、《ミスト・ウォーム》を使った方が安全だ！」

龍可「《シンクロキャンセル》を使えば両方の効果を使う事もできるし、効果を2回使う事もできるわよ。両方シンクロ素材は同じ指定だし、上手く使い分けるとさらに強力な味方になってくれるわ」

龍亞「シンクロ素材に属性や種族の指定がないから、大抵どんなデッキにも入るよね。余裕があるなら1枚入れといても損はないよ！」

龍可「今回はここまでよ」

龍亞「勇香姉ちゃんと璃音姉ちゃんって、いっつもこんな事やってたんだね」

龍可「出番確保のためって言ってたけど、案外面白いわね。あ、次回は別の人達が担当するわよ」

龍亞「またやりたいな！今度勇香姉ちゃん達に頼んでみようっと！」

龍可「それじゃ、最後の言葉行きましょう！」

龍亞「よし！せ～の、」

亞・可「「感想お待ちしてます！次回も見てね！」」

ーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

はい、7割くらいリアルファイトが入りました。人数が多いから大変でした。変なところはありませんでしたよね…？

次回も璃音と弥一のデュエルがあります。弥一のデッキは【霞の谷】です。《A・ジェネクス・バードマン》が入ってますけど…。

では、また次回！

第６１話　バウンスをナメてはいけない（前書き）

☆精霊の呟き☆

ロコナ『今回はりおんとやいちのデュエルの決着がつくよ！』

カイエン『そして、とうとうあの人が紅刃達と遭遇します』

ゴーズ『後書きの代役も別の奴が来てるから、最後まで読んでくれ』

カイエン『それでは、第６１話をどうぞ！』

第６１話　バウンスをナメてはいけない

ＳＩＤＥ／シュルク

俺はユニコールに、芽依と千景は《ジュラック・ヴェルヒプト》の姿になったアウロに乗って先を急いでいた。

アウロというのは、芽依の精霊、《ジュラック・アウロ》のアウロの事だ。上級までのジュラックならどれにでも姿を変える事ができる。

「千景、ルーナが回復するまでどれくらい時間がかかる？」

「…１５分」

「そうか」

千景のあれは、組織で作った特殊グローブの効果だ。次元関係の技術の応用で、対象の体力を光に変換して一時的に抜き取る。抜き取ったそれはエネルギーとして保管するつもりだったが、紅刃が邪魔をしたせいで消滅してしまった。しかもこのグローブはエネルギーチャージが必要な上に使い捨てだから、若干使い勝手が悪い。

「シュルク君！」

横から誰かが合流した。ナフラに乗った加奈美だ。

「加奈美！」

「加奈美先輩！」

「月沙ちゃん達はこの道を通るんだよね？」

「真っ直ぐ追いかけてきたらな」

加奈美はもちろん、ギュラと早苗にも既に連絡を入れている。ただ、早苗は丁度海馬コーポレーションから離れた位置にいるため、足止めに駆けつけるのが精一杯らしい。ギュラは《緊急テレポート》で本社ビルにワープして探索中だ。

「足止めは私がやる」

「いいのか？知り合いがたくさんいるはずだが…」

「覚悟はできてるから」

…悲しみはあるが、強い目をしている。崩れる可能性は低いだろう。加奈美が出れば、奴らは嫌でも足を止める事になる。時間はそれなりに稼ぐ事ができる。

我ながら悪どい考えだ。できればなるべく会わせたくないが…仕方あるまい。

「…頼んだぞ」

「うん」

加奈美を乗せたナフラは後ろに向きを変えて走り出した。俺達は

俺達で急ぐか。

ＳＩＤＥ／璃音

弥一
ＬＰ／４０００
手札／１
フィールド／《ミスト・ウォーム》（ＡＴＫ／２５００）
魔法・罠／《霞の谷の神風》（Ｃ／１）リバース×１

璃音
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／なし
魔法・罠／なし

私のフィールドはがら空き、相手には《ミスト・ウォーム》と破壊耐性持ちのフィールド魔法、それと伏せカードが１枚ある。序盤からなかなか厳しい戦況ね…。

「私のターン！」

…いいカードを引いたわ。

「永続魔法（スクラップ・オイルゾーン）を発動！自分の墓地からスクラップ１体を、効果を無効

にして特殊召喚する！」

《スクラップ・オイルゾーン》
永続魔法
自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。
このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターがフィールド上から離れた時このカードを破壊する。
このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行う事ができない。

「《スクラップ・ソルジャー》を特殊召喚！」

私のフィールドに赤く丸い穴が空き、中からソルジャーが飛び出してきた。

《スクラップ・ソルジャー》　ＡＴＫ／２１００

「そして手札から《スクラップ・ハンター》を召喚！」

隣にはタイヤで動くがらくたの猟師。これで準備が整ったわ。

《スクラップ・ハンター》
効果モンスター
星３／地属性／機械族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ　４００
１ターンに１度、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する「スクラップ」と名のついたモンスター１体を選択して破

壊し、自分のデッキからチューナー1体を墓地へ送る事ができる。

《スクラップ・ハンター》　ＡＴＫ／１６００

「レベル3《スクラップ・ハンター》にレベル5《スクラップ・ソルジャー》をチューニング！巡りし想いが、絆を示す証となる！光を導く星となれ！」

☆3＋☆5＝☆8

「シンクロ召喚！鳴動せよ！《スクラップ・ドラゴン》！」

くず鉄の翼を広げ、最も信頼している龍がフィールドに舞い降りた。

《スクラップ・ドラゴン》　ＡＴＫ／２８００

「璃音さんのエースモンスター…！」

「効果対象のモンスターがフィールドから離れた事で、《スクラップ・オイルゾーン》は破壊されるわ。カードを1枚セットし、《スクラップ・ドラゴン》の効果を発動！お互いのフィールド上のカードを1枚ずつ破壊する！対象は、今伏せたカードとあなたのリバースカード！スクラップ・コレムン！」

『ゴアァアアア！』

フィレスが雄叫びを上げ、このターン引いて伏せたカードが光になり、相手の伏せカードが真下から鉄柱が突き出た。当然、その伏せカードは破壊される。

「《次元幽閉》がやられましたか…」

「破壊された《荒野の大竜巻》の効果発動！セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、表側表示のカード1枚を破壊する！《ミスト・ウォーム》を破壊！」

茶色の巨大な竜巻が《ミスト・ウォーム》を破壊する。《霞の谷の神風》は《マジック・ガードナー》の効果で破壊耐性を得ている。無理に破壊しに行くよりは、モンスターを減らす方を優先した方がいい。

「《スクラップ・オイルゾーン》を発動したターンはバトルフェイズを行えないわ。カードを1枚セットしてターンエンドよ」

璃音
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《スクラップ・ドラゴン》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／リバース×１

「さて、どうしましょうか…。僕のターン」

バウンスされるのはまずいわね。フィレスが味方のスクラップを蘇生できるのは破壊された時。効果の発動は難しそうね。

「いいカードを引きましたね。まずは《霞の谷のファルコン》を召喚します」

剣と盾を持った青年の戦士。彼のデッキは【霞の谷】で合ってる

みたいね。

《霞の谷のファルコン（ミスト・バレー）》
効果モンスター
星４／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ１２００
このカードは、自分フィールド上に存在するカード１枚を手札に戻さなければ攻撃宣言をする事ができない。

《霞の谷のファルコン》　ＡＴＫ／２０００

「お互い手札が尽きてしまっては、満足に戦えないでしょう。魔法カード《天よりの宝札》を発動。お互いに手札が６枚になるようにカードをドローします」

ここで《天よりの宝札》…。まあ、私も丁度手札を切らしてたから助かるわ。問題はこのターンどう出るか…。

「装備魔法（ビッグバン・シュート）を《スクラップ・ドラゴン》に装備します」

《ビッグバン・シュート》。貫通効果と４００の攻撃力を得る代わりに、フィールドから離れれば装備モンスターが除外されてしまうカード。という事は…！

「速攻魔法（スクラップ・スコール）を発動！デッキからスクラップを１体墓地に送り、カードを１枚ドロー！さらに私の場のスクラップ１体を破壊する！デッキから《スクラップ・ビースト》を墓地に送り、《スクラップ・ドラゴン》を破壊！」

フィレスが光の粒子になって消えていく。危うく除外されるところだったわ…。自分からの破壊だからフィレスの効果は発動しない

けど、仕方ない。

「察しがいいですね。魔法カード《チューナーズ・コール》を発動。自分フィールド上のモンスターのレベルを１つ下げ、手札からチューナーを１体特殊召喚します。《霞の谷のファルコン》のレベルを１つ下げ、《霞の谷の戦士》を特殊召喚します」

《霞の谷のファルコン》　☆４→３

青い服を纏い、白い翼を背中に生やした男が現れた。

《霞の谷の戦士（ミスト・バレー）》
チューナー（効果モンスター）
星４／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ　３００
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、このカードとの戦闘で破壊されなかった相手モンスターは、ダメージステップ終了時に持ち主の手札に戻る。

《霞の谷の戦士》　ＡＴＫ／１７００

「レベル３となった《霞の谷のファルコン》にレベル４《霞の谷の戦士》をチューニング。霞の谷より出でし者よ、雷神の怒りを大地に墜とせ！」

☆３＋☆４＝☆７

「シンクロ召喚！風雷の化身、《霞の谷の雷神鬼》！」

緑の巨体に黒い翼を生やした巨人が姿を現した。その風貌は、正に鬼のよう。

《霞の谷の雷神鬼（ミスト・バレーしんき）》
シンクロ・効果モンスター
星７／風属性／雷族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ２４００
チューナー＋チューナー以外の「ミスト・バレー」と名のついたモンスター１体以上
１ターンに１度、自分フィールド上に存在するカード１枚を手札に戻し、このカードの攻撃力をエンドフェイズ時まで５００ポイントアップする事ができる。
この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

《霞の谷の雷神鬼》　ＡＴＫ／２６００

「カードを１枚伏せて、永続魔法《エレメントの泉》を発動します。フィールド上のカードが手札に戻る度に、１回につき５００ポイントライフを回復します」

《エレメントの泉》
永続魔法
フィールド上のモンスターが持ち主の手札に戻る場合、１回につき自分は５００ライフポイント回復する。

「雷神鬼の効果発動。自分フィールド上のカードを１枚手札に戻す事で、エンドフェイズ時まで攻撃力を５００ポイントアップさせます。今伏せたカードを手札に戻します」

《霞の谷の雷神鬼》　ＡＴＫ／２６００→３１００

「攻撃力３１００…！？」

「さらに、《エレメントの泉》の効果でライフを５００ポイント回復します」

弥一　ＬＰ／４０００→４５００

「今のあなたのフィールドには何もない。確実に通りますね。《霞の谷の雷神鬼》でダイレクトアタック」

まずい…！でも、防ぐ手立ては、ない。

「ミスト・インパクト！」

霧を纏った巨人の拳が、私を殴りつける。ソリッドビジョンだというのに、体が吹っ飛んだような気がした。

「うぁあっ！？」

璃音　ＬＰ／４０００→　９００

「く…！」

「先手は貰いましたよ。カードを１枚セットしてターンエンドです」

《霞の谷の雷神鬼》　ＡＴＫ／３１００→２６００

弥一
ＬＰ／４５００
手札／１
モンスター／《霞の谷の雷神鬼》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／《霞の谷の神風》（Ｃ／１）《エレメントの泉》リバー

ス×１

「雷神鬼の効果は相手のターンでも使用可能です。お忘れなく」

一気にライフを削られた。その上戦闘破壊が困難な雷神鬼…。

この男、強い…！

ＳＩＤＥ／紅刃

俺と俊也はビル街の道路を低空飛行している。磁力も風力も長時間使用はできないから時々地面に足をついてるけどな。長時間ジャンプしているようなもんだ。

「紅刃。ニュートラルって、何で石板を狙ってるのかな？」

「さあな。何かに利用しようとしてんじゃねえか？追いついたら目的も聞き出す必要があるな」

未だに目的すらわかったもんじゃねえ。絶対聞き出してやる。

「そうだね。なら、尚更早く…ん？」

「？」

前方から何かが走ってくる。何だあれ？…緑の獣？

「グルァッ！」

「！？」

そいつはそのまま俺に突進して爪を向けてきた。俺はそれを剣で受け止める。

「紅刃！？」

一旦下がって距離を取る。俊也も俺の横に並んだ。

にしても、何だあのモンスター？最近どこかで見たような…。

「久しぶりだね、風嶺君」

「え？」

「真川君は…最近会ったっけ」

獣の背中には人が乗っていた。声の主はそいつだ。そいつは獣から降りて俺達に向き直った。

「「！？」」

…いや、待て。これはおかしい。『あいつ』がここにいるはずがない。

「…どうして君がここに…！？」

桜色の上着と水色のジーパン。若草色のセミロングの髪。

中学からの仲間で、俺は最近会った。『あいつ』は確かにあの時代にいた。

なのに…。

「加奈美…!?」

何で、加奈美がこの時代にいるんだよ…?

「驚くよね。私がこの時代にいるなんて、考えもしなかったよね」

「時代…?」

「何でお前がここにいるんだよ!?」

「私が、真川君達の敵だから」

「は…？」

その言葉に頭の理解が追いつく前に、加奈美は続けてとんでもない爆弾発言を繰り出した。

「私が…ニュートラルの一員だから」

ＳＩＤＥ／加奈美

「……嘘だろ……？」

「本当だよ」

ただ驚いてばかりの真川君と風嶺君に、私は静かにそう告げた。

「この子…ナフラと出会ったのは、真川君と月沙ちゃんがこの時代に初めて出掛けた後くらいかな？可愛いでしょ？」

ナフラの頭を撫でつつ、なるべくいつもの口調で話す。声…震え

てないよね？

「その時に、ニュートラルの人達が来たの。『お前の力が必要だから、仲間になってくれ』って」

「それで…入ったの…？」

「うん」

取り乱したら駄目だ。泣いたら駄目だ。弱気になったら駄目だ。

「紅刃、俊也！」

真川君と風嶺君の後ろから、他の人達が走ってきた。

「何ボケッと突っ立ってやがる！？早く先に行け！」

あ、あの人…星御君だ。過去に行く前に1度会った事がある。

「…今は行けそうにねえ…」

「何！？…ん？あいつは…？」

星御君が私に気づく。それに連なって、他の人達も私を見た。

「なっ…！？加奈美！？」

「あれは…！」

「加奈美！？」

「え…？」

「え？誰あれ？」

勇香ちゃん、ディヴァインさん、銘丈君、そして月沙ちゃんの順でリアクションをされた。ルーナちゃんは私との面識がないからわけがわからないといった顔をしている。

「みんな、久しぶり。月沙ちゃんは最近会ったよね」

「な、何で加奈美がここに…？」

「私がニュートラルの一員だから」

「え…？」

「私は、あなた達を足止めするためにここにいる。私はあなた達の敵だよ」

「「「「「！？」」」」」

驚くよね。ちょっと前まで仲良くしてた相手が、今は敵として目の前にいるんだから…。

「て……き……？」

「お、おい…冗談だろ？」

「本当だよ」

「そ、そうだ！ニュートラルに脅されて入ってるんでしょ？何か弱味を握られて、不本意に…」

「違う！私は自分の意思でニュートラルにいる！」

勇香ちゃんと風嶺君の問い掛けにもはっきり答えた。月沙ちゃんはただ呆然として私を見ている。やがて、口を開いた。

「……なの……？」

「？」

「本当なの…？本気でそんな事言ってるの！？」

「私が嘘をついてるように見える？」

「…見えねえよ。お前、昔っから嘘が下手だもんな」

真川君には、私の本気が伝わったみたい。静かに告げて、剣の柄を強く握り締めている。

「…誰がこいつの相手をする？」

「秋斗？」

「時間の無駄だ。誰か残して先を急ぐぞ」

「な…てめえ、本気で言ってんのかよ！？加奈美は私達の…！」

「甘いんだよ、お前らは！」

「！」

「今は戦いの真っ只中だ。俺達の今の目的は、連中より先に石板を取りに行く事。あいつを連れ戻す事じゃない」

星御君は凄いや。相手が私でもぶれてない。私と関わった時間が少ないからかもしれないけど…。

「けどよ…！」

「将人」

「？」

「加奈美は頼んだ。俺達は先に行く」

「何！？」

真川君は私を見たまま銘丈君に頼み事をした。当然、みんな驚く。

「お前…！」

「紅刃、てめえまで…！」

「頼む」

今度は振り返った。その真川君を見て、反論しかけた銘丈君と勇香ちゃんは押し黙っちゃった。

理由はわかるよ。今の真川君、とても悲しい目をしてるから…。

「…わかった。行け」

「…畜生…！」

私の相手は銘丈君で決まりみたいだね。勇香ちゃんは、本当に渋々だけど、納得したっぽい。

「ディヴァイン、お前は《緊急テレポート》で先行ってろ。連中の中にもそれで直接向かってる奴がいるはずだ」

「は、その手があったか！何で今まで気づかなかったんだ…！すぐに行く！」

星御君に指摘されたディヴァインさんは少し後悔した後、《緊急テレポート》を発動させて消えた。ギュラ君が先に石板を回収できればいいんだけど…。

「行くぞ、俊也」

「う、うん…」

真川君と風嶺君は物凄いスピードで私とナフラを追い越していった。

「くそ…！将人、任せたぜ！」

「ああ」

勇香ちゃん達も走っていったけど、私は止めなかった。これだけの人数は相手にできない。

残ったのは銘丈君だけ…いや、もう1人いた。

「……」

月沙ちゃんだ。私の、女の子の中での1番の親友。

「月沙…？」

「加奈美…」

「月沙…ちゃん…」

「……っ……」

月沙ちゃんは何も言う事なく、走り去った。とても辛い顔をして…。

「…ごめんね」

すれ違う時、私は掠れた声で呟いた。月沙ちゃんはただ走る。私は振り返らない。

呟いた言葉は、届いてるかなんてわからない。

ＳＩＤＥ／璃音

私のフィールドはがら空き。対して、相手は耐性持ちのフィールド魔法に戦闘破壊しにくいシンクロモンスター。ライフも１０００を切ったし、厳しいわね。

「私のターン！」

でも、私の手札はこれで８枚。動くには十分な枚数よ。

「魔法カード《おろかな埋葬》！《スクラップ・コング》を墓地に送る！そして、《スクラップ・キマイラ》を召喚！」

２体目のキマイラ。このモンスターの効果は本当に便利よね。

《スクラップ・キマイラ》　ＡＴＫ／１７００

「効果発動！墓地からチューナーを特殊召喚するわ！《スクラップ・ワーム》を特殊召喚！」

大きな口を開けたがらくたの芋虫が現れた。キマイラと比べたらだいぶ小さい。

《スクラップ・ワーム》
チューナー（効果モンスター）
星２／地属性／昆虫族／ＡＴＫ　５００／ＤＥＦ　１００
このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に破壊される。
このカードが「スクラップ」と名のついたカードの効果によって破壊され墓地へ送られた場合、「スクラップ・ワーム」以外の自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択して手札に加える事ができる。

《スクラップ・ワーム》　ＡＴＫ／　５００

「最初のターンの《手札断殺》で、《スクラップ・ソルジャー》と一緒に墓地に送ったモンスターですか」

「レベル４《スクラップ・キマイラ》にレベル２《スクラップ・ワーム》をチューニング！巡りし想いが、銀の魔杖（まじょう）を錬成する！光を導く星となれ！」

☆４＋☆２＝☆６

「シンクロ召喚！唱えよ！《スクラップ・ソーサラー》！」

ボロボロのローブを纏い左目に眼帯をつけた、くず鉄の少年魔術師が現れた。

《スクラップ・ソーサラー》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星６／地属性／魔法使い族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１４００
「スクラップ」と名の付くチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
１ターンに１度、以下の効果から１つ選択して発動する事ができる。
●自分フィールド上に表側表示で存在する「スクラップ」と名のついたモンスター１体を破壊する事で、自分の除外されている「スク

ラップ」と名のついたカードを2枚まで手札に加える事ができる。
●自分のデッキから「スクラップ」と名のついたチューナー1体を墓地に送る事で、自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついたレベル4以下のチューナー以外のモンスター1体を特殊召喚する事ができる。
このカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、シンクロモンスター以外の自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する。

《スクラップ・ソーサラー》　ＡＴＫ／２４００

「早いですね。またシンクロ召喚してくるとは…」

「これだけじゃないわよ？《スクラップ・ソーサラー》の効果発動！デッキからスクラップのチューナーを墓地に送り、墓地からレベル4以下でチューナー以外のスクラップを特殊召喚する！デッキから《スクラップ・マインドリーダー》を墓地に送り、《スクラップ・コング》を特殊召喚！」

がらくたのゴリラって言った方が早いわね。そんな感じのモンスターが現れた。

《スクラップ・コング》
効果モンスター
星４／地属性／獣族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ１０００
このカードが召喚に成功した時、このカードを破壊する。
このカードが「スクラップ」と名のついたカードの効果によって破壊され墓地へ送られた場合、「スクラップ・コング」以外の自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択して手札に加える事ができる。

《スクラップ・コング》　ＡＴＫ／２０００

「速攻魔法（スクラップ・バトン）を発動！フィールドのスクラップを破壊して、手札のスクラップを特殊召喚する！」

《スクラップ・バトン》　速攻魔法（オリジナル）

自分フィールド上に表側表示で存在する「スクラップ」と名のついたモンスター１体を破壊し、手札から「スクラップ」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する。

「《スクラップ・コング》を破壊し、《スクラップ・ゴーレム》を特殊召喚！」

コングが破壊され、冷蔵庫の体を持つゴーレムが入れ代わりで現れた。

《スクラップ・ゴーレム》　ＡＴＫ／２３００

「《スクラップ・コング》がスクラップと名のついたカードの効果によって破壊された時、自分の墓地からスクラップ１体を手札に加える事ができる！《スクラップ・キマイラ》を手札に！そして、《スクラップ・ゴーレム》の効果発動！１ターンに１度、墓地からレベル４以下のスクラップを特殊召喚できる！《スクラップ・ワーム》を特殊召喚！」

ワームが再び呼び出される。直接攻撃はしないけど、もう１度働いてもらうわよ。

《スクラップ・ワーム》　ＡＴＫ／　５００

「レベル５《スクラップ・ゴーレム》にレベル２《スクラップ・ワーム》をチューニング！巡りし想いが、闇を穿つ悪魔となる！光を導く星となれ！」

☆５＋☆２＝☆７

「シンクロ召喚！壊せ！《スクラップ・デスデーモン》！」

くず鉄の巨大な悪魔が地面を揺るがす。効果はないけど、十分活躍できるわ。

《スクラップ・デスデーモン》　ＡＴＫ／２７００

「１ターンに２回もシンクロ召喚をするとは…。ですが、それだけでは雷神鬼を倒す事はできませんよ？」

「ええ、だからこうするのよ。《スクラップ・ソーサラー》で《霞の谷の雷神鬼》に攻撃！」

ソーサラーが雷神鬼に杖を向け、先端に魔力を溜める。

「自滅する気ですか…？雷神鬼の効果でリバースカードを手札に戻し、攻撃力を５００ポイントアップさせます」

《霞の谷の雷神鬼》　ＡＴＫ／２６００→３１００

「さらに《エレメントの泉》の効果でライフを５００回復」

弥一　ＬＰ／４５００→５０００

「ダメージステップ時に、手札から速攻魔法《禁じられた聖槍》を発動！」

「それは…！？」

「モンスター１体の攻撃力を８００ポイント下げる代わりに、そのモンスターはこのカード以外の魔法・罠の効果を受けなくなる！」

《禁じられた聖槍》
速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。
エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は８００ポイントダウンしこのカード以外の魔法・罠カードの効果を受けない。

「選択するのはもちろん雷神鬼よ！」

ソリッドビジョンのカードから金色の槍が飛び出し、そのまま雷神鬼に突き刺さった。

《霞の谷の雷神鬼》　ＡＴＫ／３１００→２３００

「これで戦闘破壊できるわ！トラッシュ・マジック！」

杖から銀色の魔力弾が放たれ、雷神鬼に当たり爆散。雷神鬼は派手に爆発して姿を消した。

「…！」

弥一　ＡＴＫ／５０００→４９００

「《スクラップ・デスデーモン》でダイレクトアタック！デビルズ・フィスト！」

今度は《スクラップ・デスデーモン》が、さっき雷神鬼が私に攻撃したのと同じように弥一を殴った。

「ぐうぅっ！」

弥一　ＬＰ／４９００→２２００

「はは…殴り返されるとは思いませんでした」

「さっきのお返しよ。カードを3枚セットしてターンエンド」

璃音
ＬＰ／　９００
手札／2
モンスター／《スクラップ・ソーサラー》（ＡＴＫ／２４００）《スクラップ・デスデーモン》（ＡＴＫ／２７００）
魔法・罠／リバース×3

何とか巻き返せたわね…。一応シンクロモンスターを2体並べたから、大丈夫だとは思うけど…。

「僕のターン。…なるほど…」

「？」

「行きましょうか。魔法カード《死者蘇生》を発動。墓地からモンスターを特殊召喚します。《霞の谷の巨神鳥》を特殊召喚！」

《霞の谷の雷鳥》に似た巨大な鳥が現れた。《手札断殺》で墓地に送られたみたいね。

《霞の谷の巨神鳥（ミスト・バレー）》
効果モンスター
星７／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ２７００／ＤＥＦ２０００
魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時に発動する事ができる。
自分フィールド上に表側表示で存在する「ミスト・バレー」と名のついたカード１枚を手札に戻し、その発動を無効にし破壊する。

《霞の谷の雷鳥》　ＡＴＫ／２７００

「頼みますよ、ミフロス」

『キュオォォォ！』

さっき弥一達を乗せてきたモンスターね。こっちにはフィレスがいるし、もし敵どうしじゃなかったら気が合ったかもしれないのに…。

「続いて、《霞の谷の雷鳥》を召喚します」

ミフロスよりもずっと小さい鳥が現れる。これで3体目…。

《霞の谷の雷鳥》　ＡＴＫ／１１００

「そして、永続罠《疾風の巻き添え》を発動。1ターンに1度、僕が自分のモンスターを手札に戻した場合、あなたはあなた自身のフィールドのカードを2枚手札に戻さなければなりません」

「またバウンス効果…」

「そして、戻せない場合は1000ポイントのダメージを受けてもらいます」

「…！？」

《疾風の巻き添え》
永続罠（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターがカードの効果により手札に戻った場合、相手は自分フィールド上のカードを2枚まで選択して手札に戻す。
戻せない場合、相手は1000ポイントダメージを受ける。
この効果は1ターンに1度しか使用できない。
自分のスタンバイフェイズ毎に500ライフポイントを払う。
払わなければ、このカードを除外する。

これで私が2枚手札に戻せなかったら、その時点で私の負け。おそらく、ミフロスにもバウンス効果があるはず…。

「バトルです。《霞の谷の巨神鳥》で《スクラップ・ソーサラー》を攻撃。ミスト・ストーム！」

ミフロスが霧の竜巻を起こしてソーサラーにぶつけてくる。ここは防ぐしかないわね。

「罠カード《くず鉄のかかし》！モンスター1体の攻撃を無効にする！」

「無駄です。《霞の谷の巨神鳥》の効果を発動。自分の霞の谷のカードを1枚手札に戻し、魔法・罠・モンスター効果を無効にして破壊します」

「な…！？」

「《霞の谷の雷鳥》を手札に戻し…」

このままだと負ける…！瞬時に計算した私は、直感を頼りにもう1枚の伏せカードに手を掛けた。

「罠カード《ホーリーライフバリアー》！手札を1枚捨てる事で、このターンの間相手からのダメージを全て0にする！」

《ホーリーライフバリアー》
通常罠
手札を1枚捨てる。
このカードを発動したターン、相手から受ける全てのダメージを0にする。

「さらに罠カード《スクラップ・リミックス》！自分のライフが相手のライフよりも少ない時、墓地のスクラップ3体をデッキに戻し、カードを3枚ドローする！」

《スクラップ・リミックス》
通常罠（オリジナル）
自分のライフポイントが相手のライフポイントよりも少ない場合の

み発動する事ができる。
自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついたモンスター3体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。
その後、自分のデッキからカードを3枚ドローする。

「墓地の《スクラップ・キマイラ》《スクラップ・コング》《スクラップ・ゴーレム》をデッキに戻す！そして3枚ドロー！」

「（ほぉ…）では、《くず鉄のかかし》は無効にします。フローラル・バイス！」

ミフロスが霧を吐き、《くず鉄のかかし》を包んで破壊する。代わりに竜巻は消滅した。

「《エレメントの泉》でライフを５００回復。さらに手札に戻った雷鳥の効果発動。手札に戻った時に特殊召喚します」

弥一　ＬＰ／２２００→２７００

《霞の谷の雷鳥》　ＤＥＦ／　７００

「《疾風の巻き添え》の効果を発動。あなたのカードを2枚選択して手札に戻してください」

「戻せるのは…《スクラップ・ソーサラー》と《スクラップ・デスデーモン》だけね…」

魔術師と悪魔がフィールドから消えていく。これで私のフィールドががら空きになってしまった。

「《エレメントの泉》の効果でライフを５００回復します」

弥一　ＬＰ／２７００→３２００

「《霞の谷の神風》の効果発動。自分の風属性モンスターが手札に戻った時、のデッキからレベル４以下の風属性モンスターを特殊召喚できます。《霞の谷のファルコン》を特殊召喚」

《霞の谷のファルコン》　ＡＴＫ／２０００

「ターンエンドです」

弥一
ＬＰ／３２００
手札／０
モンスター／《霞の谷の巨神鳥》（ＡＴＫ／２７００）《霞の谷の雷鳥》（ＤＥＦ／７００）《霞の谷のファルコン》（ＡＴＫ／２０００）
魔法・罠／《霞の谷の神風》（Ｃ／１）《疾風の巻き添え》《エレメントの泉》

「さあ、どうしますか？単純に効果を使うだけでは、ミフロスに防がれるだけですよ？ちなみに、この効果は回数制限がありません」

「…っ！」

雷鳥を使えばそれこそ無限に効果を封じる。仮に雷鳥を破壊できたとしても、ファルコンや神風、最悪ミフロス自身を手札に戻せばいい。

自分のフィールドにカードが2枚以上なければ、ミフロスの効果が発動したら《疾風の巻き添え》の効果で1000ダメージ。残りライフ900では耐えられない。それを掻い潜っても、《エレメントの泉》でさらにライフを回復される。

今の手札は悪くない。でも、効果を無効にされるなら全く役に立たない。どう発動しても、完璧に無効化されてしまう。

…駄目。どう考えても勝てる見込みがない。ここまでなの？私じゃ、ニュートラルに敵わないっていうの…？

――――信じなければ、ものにできぬカードがある――――

「！」

兄さん…？

…そうだ。兄さんはいつだって諦めずに戦っている。どんな壁に当たっても乗り越えてきた。

こんな状況でも、兄さんは諦めないのかしら…？

いつでも自分のカードを信じて戦う。そんな兄さんが、私は好きだ。だったら、私も…！

自分のデッキの内容を思い出す。この状況を打ち破るカードがないか、考えを巡らす。何回も何回も。わずかな光を求めて…。

「……は……！」

…あった。たった1枚だけ。

デッキトップを軽くめくり目を瞑る。引けたら勝ち。引けなかったら負け。それでも私は、私のデッキを信じる。

「私のターン……信じなければ……」

「？」

「信じなければ、ものにできぬカードがある…！ドロー！！」

勢いよく引き、目を開き、ゆっくりカードを確認する。

…青緑の縁が見えた。引いたのは…。

「……よく来てくれたわね」

「…！」

「魔法カード《地砕き》を発動！相手の守備力が１番高いモンスターを破壊する！《霞の谷の巨神鳥》を破壊！」

「何をしても無駄ですよ。巨神鳥の効果発動。《霞の谷の雷鳥》を手札に戻し、カード効果を無効にして破壊します」

やるなら今しかない…！私はたった今引いたカードをデュエルディスクに差し込んだ。

「速攻魔法発動！《禁じられた聖杯》！」

「何！？」

「モンスター１体の攻撃力を４００ポイントアップさせる代わりに、効果を無効にする！対象は当然、《霞の谷の巨神鳥》！」

《霞の谷の巨神鳥》　ＡＴＫ／２７００→３１００

ミフロスが効果を上手く発動できないまま破壊された。狙い通りね。

「前のターンで、ミフロスの効果に慌ててチェーンをして罠を2枚発動させたけど、あなたは《霞の谷の神風》を手札に戻して無効化しようとしなかった。その効果は、おそらく同じチェーンでは1度しか発動できない」

「く…！」

「つまり、ミフロスの効果にチェーンしたカードは無効化されない！」

さて…厄介な巨神鳥は退場させた。効果が封じられなければこっちのものよ！

「魔法カード《死者蘇生》！墓地から《スクラップ・ドラゴン》を特殊召喚！戻ってきなさい、フィレス！」

『グオォオォォォ！！』

雄叫びを上げながら、墓地からフィレスが蘇った。最後はあなたで決めるわよ！

《スクラップ・ドラゴン》　ＡＴＫ／２８００

「カードを1枚セットし、《スクラップ・ドラゴン》の効果発動！互いのカードを1枚ずつ破壊する！私の伏せカードとあなたの《霞の谷の雷鳥》を破壊！スクラップ・コレムン！」

もう1度鉄柱が出現し、今度は雷鳥を撃ち抜く。でも、これだけじゃ終わらない。

「破壊した罠カード《スクラップ・トレジャー》の効果発動！伏せたこのカードが破壊された時、カードを1枚ドローする！そして、墓地から《スクラップ・トレジャー》を除外する事で、墓地からスクラップ1体を特殊召喚する！」

「墓地から罠！？」

「蘇れ！《スクラップ・ツイン・ドラゴン》！」

くず鉄の双龍がフィレスの横に並ぶ。合計3つの頭が弥一とファルコンを睨みつける。エンドフェイズ時に自壊するデメリットがあるけど、今は関係ないわ。

《スクラップ・ツイン・ドラゴン》　ＡＴＫ／３０００

「バトル！《スクラップ・ツイン・ドラゴン》で《霞の谷のファルコン》を攻撃！トラッシュ・ツイン・バースト！」

銀色の光が2本飛び、ファルコンを瞬く間に掻き消す。余波も弥一のライフを削る。

「うっ…！」

弥一　ＬＰ／３２００→２２００

「終わりよ。《スクラップ・ドラゴン》でダイレクトアタック！ト

ラッシュ・バースト！！」

『ゴオォォォォォ！！』

阻むものは何もない。銀色の光線はぶれる事なく弥一に直撃した。

「うわぁぁぁぁっ！」

弥一　ＬＰ／２２００→　０

璃音　ＷＩＮ

ふぅ…何とか勝てたわね…。ソリッドビジョンが消えていくのを見て、軽く息を吐いた。

「お見事です。まさかこちらの効果が無効にされてしまうとは…」

「《禁じられた聖杯》を引けてなかったら私が負けてたわね。【霞の谷】がここまで厄介なデッキだなんて…」

「誉め言葉として受け取っておきますよ」

全く…バウンスの恐ろしさを改めて思い知らされたわ。１歩間違えていたら、本当にどうなっていたか…。

「しかし、僕もまだ詰めが甘いですね…。いいデュエルでした。ありがとうございます」

「こちらこそ。勉強になったわ。…さて」

「？」

「ここからどうしようかしらね？本当ならこのまま海馬コーポレーションに向かうところだけど…」

ついさっきまで忘れてたけど、私達の目的の物は海馬コーポレーションにある。さっさと向かうべきでしょうけど、素直に通してくれるかどうか…。

ブワァァァァァ！

「「！？」」

え…？

どう動くか考えていると、私達の周囲を囲むように何かが噴き出した。

思考が追いつかない内に、黒い半透明の『それ』は巨大なドーム状になって天井を閉じた。日光は届くらしく、暗くても中の状況は一応確認できる。

「何なの、これ…！？弥一、あなたの仕業なの！？」

「いえ…違います。こんな罠みたいなものの存在は聞かされていませんし、何よりこんな事ができる能力を持つ人は、僕の記憶にはいません」

「じゃあ、第三者がいるって事？」

「そうなりますね」

弥一がニコニコ顔をしまって険しい表情を浮かべているところを見る限り、どうやら嘘はついてないみたいね。じゃあ、一体誰が…？

「とにかく、この謎の壁を破りましょう」

「そうね」

私は地面に右手をついて目の前に鉄の壁を生やし、その壁から鉄柱を2本生やして壁に打ちつけた。でも、傷1つつかない。

今度は弥一が霧を細いドリル状にして放った。しばらく火花を散らしたけど、結局変化はなかった。

「効いてない…！？」

「僕達のアビリティではびくともしないようですね…」

「精霊なら…！フィレス！」

「グルルァッ！」

「なるほど。ミフロス！」

「キュオォォォ！」

フィレスとミフロスが元の大きさで実体化して出てきた。最上級モンスター2体の攻撃なら破壊できるはず…！

「あの壁に穴を空けて！トラッシュ・バースト！」

「ミフロスもお願いします！ミスト・ストーム！」

銀色の光線と霧の竜巻が黒い半透明の壁に直撃して爆発を起こす。さすがにこれなら破壊できるはず…。

「…！？」

「これは…！？」

…いや、できなかった。爆煙が晴れた跡の壁には、皹や傷どころか何も変化がなかった。全くの無傷。

「ミフロスとフィレスの同時攻撃でも全く通用しないとは…」

「どうやら、閉じ込められたようね…」

一体誰がこんな事を？私達がいると何か都合が悪いのかしら？私達の知らないところで、何が起きているというの…？

...To be continued

第６１話　バウンスをナメてはいけない（後書き）

☆今回のキーカード☆

ジャック「待たせたな！『今回のキーカード』の時間だ！今回はこのジャック・アトラスと…」

クロウ「クロウ・ホーガンでお送りするぜ！しっかし、本編は段々雲行きが怪しくなってきたな…」

ジャック「加奈美が敵側にいるのは予想外だな。だが、迷っていては何も始まらない！道を阻む者は、例え仲間であろうとも蹴散らすまで！そこから見える希望もある！」

クロウ「すっげえポジティブだな、お前…。まあ、迷うなってのは少し難しいかもしれねえけど、躊躇したままやられるわけにはいかねえよな」

ジャック「それと、璃音と弥一とかいう男を閉じ込めた物体が気になるな」

クロウ「協力してもぶっ壊せないなんて、何か裏がありそうだな。また別の敵でも介入してくるのか？」

ジャック「余談はここまでだ。カード考察に入るぞ」

クロウ「よっしゃ！今回紹介するのは、弥一の相棒《霞の谷の巨神鳥》だ！」

《霞の谷の巨神鳥（ミスト・バレー）》
効果モンスター
星７／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ２７００／ＤＥＦ２０００
魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時に発動する事ができる。
自分フィールド上に表側表示で存在する「ミスト・バレー」と名のついたカード１枚を手札に戻し、その発動を無効にし破壊する。

クロウ「自分フィールド上の霞の谷を手札に戻す事で、どんな効果も無効にして破壊しちまう強力な効果を備えてるぜ」

ジャック「ただし、この効果はスペルスピード２。スペルスピード３のカウンター罠には対応できないから注意しろ」

クロウ「後、同一チェーン上じゃ１回しか発動できない。この効果にチェーンされたらこいつじゃ対処できねえんだ。璃音はこれを利用して、こいつの効果に《ホーリーライフバリアー》や《禁じられた聖杯》をチェーンする事で発動に成功してるな」

ジャック「似たような効果と裁定で、《光と闇の竜》のようなカードも存在する。遭遇した時は今の説明を思い出せ」

クロウ「効果を発動する時に霞の谷のカードを手札に戻す必要があるけど、手札に戻った瞬間にそのまま特殊召喚できる《霞の谷の雷鳥》を使えば何回でも発動できるぜ」

ジャック「戻せるのはモンスターだけではない。時にはフィールド魔法の《霞の谷の神風》を手札に戻す事も重要だ」

クロウ「大体こんなとこか？」

ジャック「そうだな。カードの力を深く理解する事も勝利へ繋がる。存在しているカードの効果を全て覚えるくらいの気迫で挑め」

クロウ「それは少し大袈裟じゃねえか…？まあ、間違ってはないけどな」

ジャック「次回はまた別の奴らが担当する。お前達の感想を待っているぞ」

クロウ「それじゃ、次回もよろしくな！」

ーーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

今回璃音が使用した《スクラップ・ソーサラー》と弥一が使用した《疾風の巻き添え》は言羽・D・カタストロフィ一さんが投稿してくださったオリカです。言羽・D・カタストロフィ一さん、ありがとうございました。

今回は結構苦労しました。弥一が予想以上に強くなって、璃音にどうやって逆転させるかで悩みました…。

次回は将人と加奈美が激突します。楽しみにしててください。

では、また次回！

第６２話　敵対しようが仲間は仲間（前書き）

☆精霊の呟き☆

スイレン『今回は将人様と加奈美様のデュエルです！でも…大丈夫でしょうか…？』

リーシェ『敵対関係になってしまった以上、衝突は避けられない。覚悟を決めるしかないな』

ロディス『今回はＢＧＭの指定も入れてある。５Ｄ’ｓを見ていた者は、脳内再生しながら読むと一層楽しめるだろう』

スイレン『それでは、デュエルスタンバイ！』

ロディス『何だその掛け声は？』

スイレン『いえ、何か決め台詞的なものを用意した方がいいと思いまして…』

第６２話　敵対しようが仲間は仲間

ＳＩＤＥ／紅刃

将人に加奈美の事を任せて、俺と俊也は先を急いでいる。

信じられねえ。加奈美が敵であるニュートラルにつくなんて…。

でも、俺以上にお人好しなあいつがそう簡単に悪事に走るとは考えづらい。

そもそも、あいつらは本当に敵なのか？まだ目的も知らない以上、一概に決めつけるわけにはいかないな。何か、フォッタやノルフェナですら見通せない裏があるかもしれない。

いや…そうだとしても、石板をあいつらに渡すわけにはいかない。早く回収しねえと…！

「俊也、先に行ってるぞ！」

「え？…ああ、なるほど。うん、わかった！」

体力の消耗が早くなるけど、構ってる場合じゃねえ！俺は覚醒してから地面を蹴って低空ジャンプをした。

ＳＩＤＥ／将人

全員行ったか…。俺はそれだけ確認した後、真っ直ぐ加奈美を見た。

「久しぶりだな。できれば、こういう形で再会したくはなかったが…」

「私もだよ。…でも、私達はもう敵どうし。こうなった以上、戦うしかない」

《ナチュル・ビースト》の精霊がデッキに戻り、加奈美はデュエルディスクを構えた。どうあっても引く気はないようだ。

「…やるしかないのか…」

やるせない気持ちを抑え、俺もデュエルディスクを展開させた。加奈美の言う通り、今は戦うしかないか…。

「行くよ」

「…ああ」

「「デュエル！」」

将人ｖｓ加奈美

「先攻は貰うよ」

「構わない」

「それじゃ、私のターン！モンスターをセット！カードを1枚セットしてターンエンド！」

加奈美
ＬＰ／４０００
手札／４
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×１

まずは様子見か。《ナチュル・ビースト》の精霊がいるとなると、デッキの根本的な内容は変わってないはずだが…。

「俺のターン！《ヘルウェイ・パトロール》を召喚！」

俺のフィールドにバイクに乗った悪魔が現れた。

《ヘルウェイ・パトロール》　ＡＴＫ／１６００

「バトル！《ヘルウェイ・パトロール》で裏守備モンスターに攻撃！ヘル・チェイス！」

《ヘルウェイ・パトロール》がバイクで突っ込み弾き飛ばした。
裏守備モンスターの正体は…さくらんぼ？

「《ナチュル・チェリー》の効果発動！相手によってフィールドから離れた時、デッキから《ナチュル・チェリー》２体を裏守備表示で特殊召喚するよ！」

《ナチュル・チェリー》
チューナー（効果モンスター）
星１／地属性／植物族／ＡＴＫ　２００／ＤＥＦ　２００
このカードが相手によってフィールド上から墓地へ送られた場合、自分のデッキから「ナチュル・チェリー」を２体まで裏側守備表示で特殊召喚する事ができる。

同じモンスターを一気に２体も呼び出したか。次で攻めてくるな。

「だが、ダメージは少しでも受けてもらう！《ヘルウェイ・パトロール》が戦闘でモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターのレベル１つにつき１００ポイントのダメージを相手に与える！《ナチュル・チェリー》のレベルは１だから、１００ダメージだ！」

バイクのライトからビームが放たれた。しかし、威力が１００しかないためか全く迫力がない。

「う…」

加奈美　ＬＰ／４０００→３９００

「カードを２枚セットしてターンエンド！」

将人
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《ヘルウェイ・パトロール》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×２

「私のターン！《ナチュル・パンプキン》を召喚！」

カボチャに目と鼻、口がついたようなモンスター。あれは確か、手札から仲間を呼び出す効果を持っていたはずだ。

《ナチュル・パンプキン》　ＡＴＫ／１４００

「パンプキンの効果発動！相手フィールドにモンスターがいる時に召喚した場合、手札のナチュル１体を特殊召喚できる！手札から《ナチュル・ハイドランジー》を特殊召喚！」

今度はアジサイの花のようなモンスターが出てきた。地味に可愛らしい絵柄なのは、ナチュルのお約束だ。

《ナチュル・ハイドランジー》
効果モンスター
星５／地属性／植物族／ＡＴＫ１９００／ＤＥＦ２０００
自分フィールド上の「ナチュル」と名のついたモンスターの効果が発動したターン、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

《ナチュル・ハイドランジー》　ＡＴＫ／１９００

「さらに、《ナチュル・チェリー》２体を反転召喚！」

《ナチュル・チェリー》　ＡＴＫ／　２００

《ナチュル・チェリー》　ＡＴＫ／　２００

「行くよ！レベル４《ナチュル・ハイドランジー》にレベル１《ナチュル・チェリー》をチューニング！」

４つの輪と１つの星。レベル５であいつが出すシンクロモンスターは…！

「大自然の守り神よ、魔を裂く獣に恵みを与えよ！」

☆４＋☆１＝☆５

「シンクロ召喚！祈れ！《ナチュル・ビースト》！」

やはりな…。木のような四肢を持つ緑の虎が現れた。

《ナチュル・ビースト》　ＡＴＫ／２２００

「そして、レベル５《ナチュル・ハイドランジー》にレベル１《ナチュル・チェリー》をチューニング！大自然の守り神よ、樹海の竜に恵みを与えよ！」

☆５＋☆１＝☆６

「シンクロ召喚！凪ぎ払え！《ナチュル・パルキオン》！」

体の所々が苔むした灰色の東洋の竜が、ビーストの横に並んだ。

《ナチュル・パルキオン》
シンクロ・効果モンスター
星６／地属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ１８００
地属性チューナー＋チューナー以外の地属性モンスター１体以上
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分の墓地のカード２枚をゲームから除外する事で、罠カードの発動を無効に

し破壊する。

《ナチュル・パルキオン》　ＡＴＫ／２５００

「１ターンでビーストとパルキオンを同時に呼び出したか…！」

「これで私に魔法と罠は効かないよ。でも念のために…魔法カード《ランドオルスのヒカリゴケ》を発動！これは私のフィールドにナチュルがいる時に発動できるカード。発動したターンの間、相手はモンスター効果を発動する事ができない！」

《ランドオルスのヒカリゴケ》
通常魔法
自分フィールド上に「ナチュル」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。
このターン、相手の効果モンスターは効果を発動する事ができない。

カード効果を全て封じられただと…！？これだと手札の《バトルフェーダー》も出す事ができない…！

「行くよ、ナフラ」

『ガルルルッ』

「バトル！《ナチュル・ビースト》で《ヘルウェイ・パトロール》を攻撃！ガイア・アース・クロー！」

ナフラと呼ばれた《ナチュル・ビースト》が悪魔をバイク毎引き裂いた。当然、俺のライフも削られる。

「く…」

将人　ＬＰ／４０００→３４００

「《ナチュル・パルキオン》でダイレクトアタック！エナジー・ブレス！」

パルキオンが緑色のブレスを吐き出した。《バトルフェーダー》の効果を発動できない以上、受けるしかない。

「ぐあぁっ！」

将人　ＬＰ／３４００→　９００

「ターンエンド！」

加奈美
ＬＰ／３９００
手札／２
モンスター／《ナチュル・ビースト》（ＡＴＫ／２２００）《ナチュル・パルキオン》（ＡＴＫ／２５００）
魔法・罠／リバース×１

「前よりも容赦ないな…」

「当たり前だよ。敵だもの」

言っている事は合っている。だが、なぜ加奈美はニュートラルに入った？何がそこまでお前を変えたんだ？

「俺のターン！」

…半分賭けだが、いい手だ。

「俺は《スナイプストーカー》を召喚する！」

銃を持った小さな悪魔　。なかなか強い除去効果を持ち合わせている。

《スナイプストーカー》　ＡＴＫ／１５００

「そのモンスターは…！？」

「《ランドオルスのヒカリゴケ》の効果は既に切れている。魔法も罠も使えないならモンスター効果で対処するだけだ。《スナイプストーカー》の効果発動！手札を１枚捨ててサイコロを１回降り、１と６以外が出た場合相手のカード１枚を破壊する！俺が選択するのは《ナチュル・ビースト》だ！」

《スナイプストーカー》が銃を構えると、前に１から６までの数字が現れルーレットのように回り始める。やがて勢いが弱まり、ある数字が銃口に重なった。

「…２だ。《ナチュル・ビースト》を破壊する！スナイプ・シュート！」

３の数字が撃ち抜かれ、そのままナフラも貫通した。これで魔法カードは使えるようになったな。

「ナフラ！？」

「これで魔法カードは無効化されない！魔法カード《闇の誘惑》を発動！カードを2枚ドローし、手札から闇属性モンスターを1体除外する！」

…チューナーを引いたか。ここは《バトルフェーダー》を除外するのが無難だな。

「そして、俺の悪魔族モンスターが除外されている時、チューナーモンスター《デビル・シンクロン》を特殊召喚できる！」

悪魔の翼を生やした、紫と黒の体を持つ小さなシンクロンが現れた。

《デビル・シンクロン》
効果モンスター（チューナー・オリジナル）
星1／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　４００／ＤＥＦ　２００
除外されている自分の悪魔族モンスターが存在する場合、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
このカードが特殊召喚に成功した時、手札または墓地からレベル４以下の悪魔族モンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。
このカードをシンクロ素材とする場合、闇属性モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。
このカードをシンクロ素材としたシンクロモンスターの攻撃力または守備力が下がった時、そのモンスターの攻撃力と守備力を元々の数値に戻す。

《デビル・シンクロン》　ＡＴＫ／　４００

「《デビル・シンクロン》が特殊召喚に成功した時、手札か墓地からレベル４以下の悪魔族モンスターを特殊召喚できる！手札からレベル３の《クリッター》を特殊召喚！」

３つの目を持つ小さな悪魔が現れた。これで準備は整った。

《クリッター》　ＡＴＫ／１０００

「次は俺の番だ！レベル４《スナイプストーカー》とレベル３《クリッター》にレベル１《デビル・シンクロン》をチューニング！」

《デビル・シンクロン》が１つの紫の輪になり、２体の悪魔が合計７つの星になり、やがて光の柱に変わる。

「闇より出でし悪魔の双翼、濃霧を払い終焉を誘え！」

☆４＋☆３＋☆１＝☆８

「シンクロ召喚！呼応せよ！《ダークエンド・ドラゴン》！」

光の柱から、腹に悪魔の顔を持つ黒い龍が飛び出した。俺のエースモンスターだ。

《ダークエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「銘丈君のエースモンスター…！？」

「《クリッター》がフィールド上から墓地に送られた時、デッキから攻撃力１５００以下のモンスターを手札に加える！俺が選ぶのは

《デビル・バット》だ！そして《デビル・バット》の効果発動！俺のフィールドに闇属性のシンクロモンスターが存在する時、このカードを墓地に送る事でカードを２枚ドローする！」

《デビル・バット》
効果モンスター（オリジナル）
星１／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　１００
自分フィールド上に闇属性のシンクロモンスターが表側表示で存在する時、このカードを手札から墓地に送って発動する。
自分のデッキからカードを２枚ドローする。

「さらにダークエンドの効果発動！攻撃力と守備力を５００ポイントずつ下げる事で、相手モンスターを１体墓地に送る！ダーク・イヴァポレイション！」

《ダークエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００→２１００

ダークエンドの腹の口から吐き出された闇が地を這うように突き進み、《ナチュル・パルキオン》を闇の中に引きずり込んだ。

「たった１ターンで、ナフラとパルキオンがやられるなんて…！？」

「まだだ！《デビル・シンクロン》をシンクロ素材としたシンクロモンスターの攻撃力か守備力が下がった時、元々の数値に戻す！」

《ダークエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２１００→２６００

「攻撃力が戻った！？」

「バトル！《ダークエンド・ドラゴン》でダイレクトアタック！ダ

ーク・フォッグ！」

今度は本来の口から闇の霧を吐き出し加奈美を攻撃しようとする。
通るか…？

「罠カード《ナチュル・マジック》！相手が直接攻撃をしてきた時、その攻撃を無効にして、デッキからナチュルと名のついた魔法カードを1枚発動できる！」

「デッキから魔法カードだと！？」

《ナチュル・マジック》
通常罠（オリジナル）
相手が直接攻撃を宣言した場合発動する事ができる。
その攻撃を無効にし、自分のデッキから発動条件を満たした「ナチュル」と名のついた魔法カード1枚を選択して発動する。

「私が選ぶのは《ナチュルの雄叫び》！私のフィールドか墓地からレベルの合計が9になるようにナチュルのモンスターを除外し、《ナチュル・ガオドレイク》をシンクロ召喚する！」

《ナチュルの雄叫び》
通常魔法（オリジナル）
このカードを発動するターン、自分は「ナチュル・ガオドレイク」以外のモンスターを特殊召喚することはできない。
自分のフィールド・墓地から合計レベルが9になるように「ナチュル」と名のついたモンスターをゲームから除外し、自分のエクストラデッキから「ナチュル・ガオドレイク」1体をシンクロ召喚扱いで特殊召喚する。
この効果で特殊召喚されたモンスターは、フィールド上に表側表示

で存在する限り以下の効果を得る。
●1度だけ相手の魔法・罠・効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する事ができる。

「墓地のレベル4《ナチュル・パンプキン》とレベル5《ナチュル・ハイドランジー》を除外してチューニング！」

ダークエンドが攻撃を中止すると、ソリッドビジョンのカードから緑色の球体が飛び出した。そして、パンプキンとハイドランジーが合計9つの星になって球体に吸収されていく。

「大自然の守り神よ、百獣の王に恵みを与えよ！」

☆4＋☆5＝☆9

「シンクロ召喚！吼(ほ)えろ！《ナチュル・ガオドレイク》！」

緑色の球体が巨大化して破裂し、中からたてがみが赤い花びらになったライオンのようなモンスターが現れた。

《ナチュル・ガオドレイク》
シンクロモンスター
星9／地属性／獣族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ１８００
地属性チューナー＋チューナー以外の地属性モンスター1体以上

《ナチュル・ガオドレイク》　ＡＴＫ／３０００

カウンターで大型モンスターを繰り出してきたか。追撃は無理だな…。

「銘丈君は、前よりも強くなってるみたいだね…」

「ああ。俺もただだらけて日々を過ごしていたわけじゃない。少しずつでも力をつけてきたつもりだ」

「そう…。でも、私は負けない」

「…カードを1枚セットしてターンエンド」

将人
ＬＰ／　９００
手札／１
モンスター／《ダークエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／リバース×３

どうも理解できない。加奈美は自分の意志でニュートラルに入ったと言った。脅迫もなしに、なぜニュートラルに入ったんだ?俺達と敵対してまでニュートラルの下で戦っているのはなぜだ?

「…加奈美。お前はなぜニュートラルに入った?」

ＳＩＤＥ／加奈美

「…加奈美。お前はなぜニュートラルに入った?」

銘丈君は自分のターンを終えた後、私にそんな事を聞いてきた。

『俺達の目的については誰にも話すな』

『…うん』

『これは極秘だ。少しでも成功率を上げるためには、外部に情報を漏らさない方がいい。例え相手が親友だとしても、話すわけにはいかない』

シュルク君は、あらかじめ私に目的を話さないよう注意した。私が入った理由も、その目的の達成のため。だから、話せない。

「…言えない」

「なら、ニュートラルの目的は何だ?」

「それも…言えない」

何があっても、これだけは言えない。言った瞬間から、全部崩れちゃう。だから…。

「俺は何も知らないまま、仲間のお前と戦いたくは…」

「馴れ馴れしくしないで！」

「！？」

だから、嫌われちゃえばいい。突き放せばいい。私からそうすれば未練なんて消える。甘さも消える。

「私とあなたは敵なんだよ？何で仲良さそうに話し掛けてくるの？」

「加奈美…？」

「私はもうあなた達とつるむ気なんてない！仲間なんてふざけた事言わないで！」

「な…何を…」

「私のターン！」

銘丈君が何かを言いかけたけど、それを遮るようにターンを始めた。

「《融合呪印生物－地》を召喚！」

数種類の岩から創られた岩石の球体が現れ、ガオドレイクの横に並んだ。

《融合呪印生物－地》　ＡＴＫ／１０００

「加奈美！」

「《融合呪印生物－地》の効果発動！このモンスターと融合素材をリリースして、エクストラデッキから地属性の融合モンスターを特殊召喚する！」

「おい！」

「来て！《ナチュル・レオグランド》！」

２体のモンスターが光になって重なり姿を変える。光が収まると、《ナチュル・ランドオルス》をイメージした岩の鎧と巨大なハンマーを身につけて、２足歩行になったガオドレイクになっていた。

《ナチュル・レオグランド》
融合・効果モンスター（オリジナル）
星１１／地属性／獣戦士族／ＡＴＫ３５００／ＤＥＦ２５００
「ナチュル・ランドオルス」＋「ナチュル・ガオドレイク」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。
「ナチュル」と名の付いたモンスターが魔法・罠・効果モンスターの効果を受ける場合、手札を１枚捨てて発動と効果を無効にし破壊する事ができる。
このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

《ナチュル・レオグランド》　ＡＴＫ／３５００

「効果は知ってるよね？レオグランドが攻撃する時、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠を発動できない！…私はニュートラルに入った！そして、銘丈君達はニュートラルの邪魔をする！」

「加奈美！」

そう、私達は敵どうし。馴れ合う事なんてできない。笑いかける事もない。

「私達は敵どうしなんだ！敵はただ倒すだけ！」

「おい、加奈美！」

だから、仲良くしちゃいけない。もう昔みたいな楽しい日々は戻ってこない。

「銘丈君だけじゃない！真川君も、風嶺君も、星御君も…」

絶交したも同然なんだ。

「璃音ちゃんも、勇香ちゃんも、月沙ちゃんも…」

だから、銘丈君達もわかってよ…！

「もう友達でも仲間でも、何でもない！！！！」

そう願って、目を瞑って力の限り叫んだ。そして、とどめを刺しに行く。

「《ナチュル・レオグランド》で《ダークエンド・ドラゴン》に攻撃!!ガイア・ヘビー・ハンマー!!!」

レオグランドが駆け出し、ハンマーを振り上げた。ダメージは９００で、銘丈君のライフは丁度０になる。これで…。

「話を聞けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!!」

「っ!?」

すると、銘丈君がありったけの声で叫んできた。あまりの剣幕に寒気が走り、一瞬息が止まる。

（ＢＧＭ：絆のテーマ）

「手札の《リカバリー・デーモン》の効果発動！手札からこのモンスターを墓地に送り、除外されている自分のモンスターを3体まで選択！選択したモンスターのレベル1つにつき１００ポイントライフを回復する！」

《リカバリー・デーモン》
効果モンスター（チューナー・オリジナル）
星１／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　１００
このカードを手札から墓地に送り、ゲームから除外されている自分のモンスターを3体まで選択して発動する。
自分のライフを選択したモンスターのレベルの合計×１００ポイント回復する。
この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

「除外されている俺のモンスターはレベル1の《バトルフェーダー》のみ！よって、ライフを１００だけ回復する！」

将人　ＬＰ／　９００→１０００

銘丈君のライフが回復した瞬間、レオグランドのハンマーがダークエンドを叩き潰した。

「くっ！」

将人　ＬＰ／１０００→　１００

ライフが１００ポイント残った…！？

「加奈美！確かに今の俺達は敵どうしの立場だ！それは認める！だが、『敵だからもう仲間じゃない』と誰が決めた！？」

「？」

「例えお前が敵の組織に入ろうが、お前が俺達の仲間である事に変わりはない！」

「…っ！？」

その一言が、私の心に重くのしかかった。何でそんな言葉をかけてくるのか、理解できなかった。

「その事になぜ気づかない！？お前がありったけの声で叫ぶ前から泣いているのに、なぜ仲間である事を否定するんだ！？」

「え…？」

思わず右の目元を右の人差し指で拭うと、濡れている事に気づいた。これって…涙…？私、いつの間に…？

「お前は俺達を否定する事で自分の甘さを捨てようとしているが、心のどこかでは願っているはずだ！昔みたいに、みんなで集まって同じ時間を過ごす事を！」

そんな事…そんな事は、もうできっこない…。叶わないから諦めてるのに…。

「…う、うるさい！勝手な事言わないでよ！私にデュエルで全然勝てないくせに！今だってたったの１００ポイントしか私のライフを削れてないくせに！カードを１枚セットしてターンエンド！」

加奈美
ＬＰ／３９００
手札／１
モンスター／《ナチュル・レオグランド》（ＡＴＫ／３５００）
魔法・罠／リバース×１

「私のナチュルがカード効果を受ける時、レオグランドの効果で手札を１枚捨てれば、発動と効果を無効にして破壊できる！これでも私を倒せるなら倒してみてよ！」

私が伏せたカードは《ナチュルの加護》。ナチュルのモンスターを１度だけフィールドに留(とど)める事ができる。

《ナチュルの加護》
通常罠
発動後このカードは攻撃力５００ポイントアップの装備カードとなり、自分フィールドに存在する「ナチュル」と名のついたモンスター１体に装備する。
装備モンスターがフィールド上から離れる場合、代わりにこのカードを墓地に送る事ができる。

レオグランドの効果に必要な手札コストもあるし、レオグランドがやられる事は絶対にない。でも…。

「…ああ」

どうしてだろう？

「倒してみせる」

銘丈君から、とてつもない力を感じる。

「必ず！」

暖かくて、なのに熱い力を…。

「俺のターン！！罠カード《ロスト・スター・ディセント》を発動！墓地からシンクロモンスターを、守備力を０にして守備表示で特殊召喚する！」

《ロスト・スター・ディセント》
通常罠
自分の墓地に存在するシンクロモンスター１体を選択し、自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、レベルは１つ下がり守備力は０になる。
また、表示形式を変更する事はできない。

「甦れ！《ダークエンド・ドラゴン》！」

《ダークエンド・ドラゴン》　ＤＥＦ／２１００↓　０

「この効果で呼び出されたモンスターは効果が無効になり、レベルが１つ下がる！」

《ダークエンド・ドラゴン》　☆８↓７

《ダークエンド・ドラゴン》。昔からずっと銘丈君を傍で支えてきたモンスター。そのモンスターが、ただじっと私を見据えている。

「そして、手札から《デビル・バット》の効果発動！」

「2枚目！？」

「俺のフィールドに闇属性のシンクロモンスターが存在する時、このカードを墓地に送り、カードを2枚ドローする！」

今更2枚引いたって…。でも、今の銘丈君ならこの状況をひっくり返せると思うのは何で…？

「ドロー！！」

何を…引いたんだろ…？

「（……

…来たか）」

（ＢＧＭ：ジャックバトル）

「チューナーモンスター《ダーク・スプロケッター》を召喚！」

まず、歯車がたくさん重なったモンスターが飛び出した。

《ダーク・スプロケッター》　ＡＴＫ／　４００

「さらに、墓地の《ヘルウェイ・パトロール》の効果発動！墓地からこのカードを除外する事で、手札から攻撃力２０００以下の悪魔族モンスターを特殊召喚する！チューナーモンスター《バリア・デーモン》を特殊召喚！」

次に、紫色の球状のバリアの中に入った悪魔が現れた。

《バリア・デーモン》
効果モンスター（チューナー・オリジナル）
星４／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ１８００
このカードが闇属性のシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地に送られた場合、そのシンクロモンスターは１度だけ戦闘で破壊されない。

《バリア・デーモン》　ＡＴＫ／１０００

「チューナーを2体も並べて、何をする気なの！？」

「今にわかる！」

私の疑問に一言だけで答えると、銘丈君は右の握り拳を自分の左胸に宛がった。

「お前が自分の意志で俺達と敵対する事には何か重い理由があるはずだ！だが、俺や紅刃、月沙達にとって、お前はかけがえのない大

切な仲間だ！この想いは、決して譲らない！」

銘丈君の体から紫のオーラが溢れ出て、さっきまで感じていた力が一層強まるのがわかった。そして、銘丈君の瞳の色が、黄緑から紫に変わった。

「荒ぶる魂、『バーニング・ソウル』！！レベル7となった《ダークエンド・ドラゴン》にレベル１《ダーク・スプロケッター》とレベル４《バリア・デーモン》をダブルチューニング！」

２体のチューナーが４つの紫の炎の輪になり、ダークエンドを包み込んで球状になるように回転し始める。やがて、紫の炎がダークエンドを完全に隠した。

「２体のチューナーを使ったシンクロ召喚…！？」

「終焉の黒龍と炎獄の魔王が、気高き闇で魂を交える！漆黒の悪魔よ、咆哮せよ！」

☆７＋☆１＋☆４＝☆１２

「シンクロ召喚！具現せよ！《ディアボロス・サタン・ドラゴン》！！」

銘丈君の声を合図に炎が吹き飛んだ。現れたのは、翼が４枚に増えて禍々しい悪魔のような姿になった漆黒の魔龍。

《ディアボロス・サタン・ドラゴン》　ＡＴＫ／３５００

『ゴァァァアアァァ！！』

凶悪な姿に変貌を遂げたダークエンドが吼えて、私は少し怖くなった。でも、邪悪な気配は全然ない。

「な…何なの？そのモンスターは…？」

「こいつが俺の新たな切り札、《ディアボロス・サタン・ドラゴン》だ！」

ディアボロス・サタン…『悪魔の魔王』…。

「罠カードオープン！《燃え上がる魂（レイジング・ソウル）》！シンクロ召喚に成功した時、俺の墓地のチューナーの数だけ５００ポイントずつ攻撃力と守備力をアップさせる！」

《燃え上がる魂（レイジング・ソウル）》
通常罠
自分がシンクロ召喚に成功した場合発動する事ができる。
そのモンスターの攻撃力・守備力はエンドフェイズまで自分の墓地に存在するチューナー１体につき５００ポイントアップする。
またこのカードの対象となったモンスターは、発動ターンのエンドフェイズまで相手のカード効果の対象にならない。
このカードを発動したターンのエンドフェイズ時、対象となったモンスターの攻撃力・守備力は０になる。

「俺の墓地に存在するチューナーは４体！よって、攻撃力を２０００ポイントアップさせる！」

《ディアボロス・サタン・ドラゴン》　ＡＴＫ／３５００→５５００

「攻撃力５５００！？」

「そして、《ディアボロス・サタン・ドラゴン》の効果発動！１ターンに１度、墓地のモンスター１体を除外し、フィールドのカードを１枚破壊して相手に５００ポイントのダメージを与える！」

「破壊効果を持ってるの！？」

「墓地の《冥府の使者ゴーズ》を除外し、お前のリバースカードを破壊する！」

「え！？」

今…何て…？

「エビル・ダークフレイム！」

お腹の悪魔の顔の口から紫の炎が吐き出されて、私が伏せた《ナチュルの加護》が焼き払われた。そして、炎の一部が私を襲う。

「うぅっ！」

加奈美　ＡＴＫ／３９００↓３４００

「何で銘丈君がゴーズのカードを持ってるの！？あれは真川君に預けたはず…！？」

「返してもらった。紅刃達に認められたからな」

いつの間に返してもらってたの！？という事は、銘丈君はゴーズ

を使いこなせるくらいに成長したって事！？

「でも、墓地に送るタイミングなんて…」

「《スナイプストーカー》の効果で墓地に送った」

「は…っ！」

そうだ。銘丈君は《スナイプストーカー》の効果で手札を捨てていた。それが、ゴーズだったんだ…！

「バトル！《ディアボロス・サタン・ドラゴン》で《ナチュル・レオグランド》を攻撃！ディアブロ・ストライク！」

漆黒の龍が紫の炎を纏ってレオグランドに上空から体当たりをした。レオグランドはハンマーで防御したけど、耐え切れずに焼き尽くされてしまった。

「きゃあぁぁぁっ！？」

加奈美　ＬＰ／３４００→１４００

「う…でも、まだ次のターンが…」

「いや、このターンで終わらせる！永続罠オープン！《闇次元の解放》！」

「え…！？」

そのカードって…！？

「除外されている闇属性モンスターを特殊召喚する！現れろ、《冥府の使者ゴーズ》！！」

空中に異次元の穴が開き、中からゴーズがフィールドに降りてきた。

《冥府の使者ゴーズ》　ＡＴＫ／２７００

『はじめまして…になるか？加奈美』

「ゴーズの、精霊…！？」

本当に、いたんだ。ゴーズの精霊が…。

『悪いが、この勝負は貰うぞ』

「これで決める！《冥府の使者ゴーズ》でダイレクトアタック！エミサリー・ブラッシュ！！」

ゴーズは剣に紫の光をたくさん込めて私に突進して、

『おおぉぉぉぉぉぉ！！！』

「きゃあっ！」

私を横に一閃した。

加奈美　ＬＰ／１４００→　０

将人　ＷＩＮ

（ＢＧＭ：終了）

ソリッドビジョンが消えるのと同時に、私は力が抜けてへたり込んだ。

「そんな…負けた…」

「お前は嘘をつくのが下手だ」

前を見ると、銘丈君がこっちに向かって歩いてきて、目の前で立ち止まったのがわかった。瞳はいつもの黄緑に戻っていて、傍らにはゴーズもいる。

「そんな辛そうな顔でデュエルして、泣きながら『仲間じゃない』って言ってきても、無理しているようにしか見えないだろ」

銘丈君は、私に優しい眼差しを向けている。今はそれが嬉しいのか辛いのか、わからない。

「全く…困った奴だ」

「…何で…？」

「？」

「何で私に優しくしてくれるの？何でそこまで私が仲間だと言い切れるの？私は、みんなを裏切ったんだよ？銘丈君に、あんなに酷い事を言ったんだよ？なのに、何で…」

『それだけお前を信じているという事だ』

私の長い問い掛けに答えたのは、銘丈君じゃなくてゴーズだった。

『心を通わせて繋がった絆は、簡単に切れるほど脆くはない。将人だけじゃなく、他の奴らもお前を信じて、同じ事を言うはずだ。紅刃や月沙なら尚更だろ。無論俺達もそうだ。なあ？カイエン、ヒジュラ』

ゴーズが呼び掛けると、カイエンの精霊と茶髪で黒いマントと鎧を身につけた茶髪の男の人が現れた。

『ええ。私も長い間加奈美を見てきたけど、マスター達といる時は本当に楽しそうでした。そして、今は敵対しているのに辛い思いをしている。それで仲間じゃないなんて、とんだ嘘っぱちですよ』

『俺はてめえの事を初めて見たから深い事は言えねえけどよ、主達がこれくらいでてめえを見限るような生ぬるい連中じゃねえって事くらいはわかるぜ？それに、てめえは敵に成り切れてねえ。心の奥底で、主達とずっと仲間でいたいと思ってるからだ』

「…っ！」

茶髪の男の人…ヒジュラ君の言葉にはっとする。私は…銘丈君達の敵だ。敵だけど、私だって…。

『グルル…』

「ナフラ？」

ナフラまでカードから出てきた。ただ私を見つめている。言葉はわからないけど…ナフラも、銘丈君達と仲間でいたいのかな…？

私だって…私だって、銘丈君達と仲間でいたい。一緒に喫茶店でパフェを食べたり、学校に通ってデュエルしたり、帰り道でお喋りしたり…。

だけど、それはもうできない。諦めたんだ。諦めたはずなのに…それなのに…。

「…わからない……わからないよ……。私はニュートラルにいなくちゃいけない。でも、銘丈君達とも一緒にいたい。でも……でも……」

一言喋る度に、涙がポロポロ零れていく。ニュートラルに協力したくて、でも銘丈君達とは仲間でいたくて…。私は…どうすれば…。

ポンッ

「！」

不意に、俯く私の頭に手が置かれた。涙で滲んだ視界に、銘丈君の足下が映る。

「何でお前がニュートラルに入ったのかはわからない。敵どうしになった以上、戦うしか道はないのかもしれない。だが、例えどんなに離れていようと、俺達が仲間だという事は変わらない。全ての枷がなくなって笑顔で向き合えるその日まで、俺達は待っている」

さらに視界がねじ曲がって、まともにものを見れなくなった。

「そしたら、どこか適当な喫茶店にでも行っていろいろ話をしよう。俺も引っ越した後の事を話したり聞いたりしたいからな」

「……うっ…！」

限界だった。私は顔を両手で包み、声を押し殺して泣き出した。

「うぅ……ぐすっ……ぅぇえ……ぇぇ……うっ……」

暖かくて…優しくて…それが、何よりも嬉しくて…私は、ただ泣き続けた。

シュルク君…みんな…ごめんね。

ニュートラルにはこれからも所属する。シュルク君達も、私にとって大切な仲間だから。

でも…銘丈君達とも仲間でいたって…いいよね…？

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第６２話　敵対しようが仲間は仲間（後書き）

☆今回のキーカード☆

ブルーノ「はい、みんな注目！『今回のキーカード』の時間だよ！今回代役を勤めるのは、僕、ブルーノと…」

シェリー「シェリー・ルブランよ。…何で私がこんな事を…」

ブルーノ「まあまあ…もう５Ｄ’ｓも終了したんだし、僕達は表立っての活躍がなくなってるでしょ？」

シェリー「あなたはそれ以前に死人でしょ？」

ブルーノ「う…それはそうだけど…」

シェリー「まあ、いいわ。本編では親友どうしの対決に決着がついたようね」

ブルーノ「加奈美ちゃんは今後もニュートラルにいるみたいだけど、絶交しなくてよかったよ」

シェリー「ニュートラルの目的も気になるわね。イリアステルのように未来を変えようとしているのか、単に破壊を押し進めるだけなのか…」

ブルーノ「とにかく、もっと話が進まないとわからないね。いつになったら判明するんだろう…？」

シェリー「雑談はここまでよ。カード考察を始めるわ」

ブルーノ「そうだね。今回紹介するのは、将人の大切なパートナー《冥府の使者ゴーズ》だよ」

《冥府の使者ゴーズ》
効果モンスター（制限カード）
星７／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ２７００／ＤＥＦ２５００
自分フィールド上にカードが存在しない場合、相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
この方法で特殊召喚に成功した時、受けたダメージの種類により以下の効果を発動する。
●戦闘ダメージの場合、自分フィールド上に「冥府の使者カイエントークン」（天使族・光・星７・攻／守？）を１体特殊召喚する。このトークンの攻撃力・守備力は、この時受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。
●カードの効果によるダメージの場合、受けたダメージと同じダメージを相手ライフに与える。

ブルーノ「自分フィールド上にカードが１枚もない状態でダメージを受けた時、手札から特殊召喚できるよ」

シェリー「ダメージの種類によって、特殊召喚時に発動する効果が変化するわ。直接攻撃による戦闘ダメージだった場合、その時に受けたダメージと同じ攻撃力と守備力を持つ《冥府の使者カイエントークン》を特殊召喚できる」

ブルーノ「守備力も同じ数値になるから、ダメージ量によっては守

備表示でも十分活躍できるよ。ゴーズより高い攻撃力のモンスターで直接攻撃された場合でも、カイエントークンと相討ちさせる事だって可能だし、使い勝手は悪くないよ」

シェリー「ただし、闇属性悪魔族のゴーズとは違って、カイエントークンは光属性天使族。闇属性や悪魔族でデッキを固めている場合は注意する必要があるかもしれないわね」

ブルーノ「効果ダメージだったら、受けたダメージと同じ数値のダメージを相手に与えるよ。ただ、こっちの効果は滅多に使われないけどね」

シェリー「先攻1ターン目で効果ダメージを受けた時くらいかしら？少なくとも、直接攻撃で効果が発動するパターンが一般的ね」

ブルーノ「効果を発動できなくても、ゴーズのステータスは元々高いからいろんな運用ができるよ。普通にアドバンス召喚や別の方法での特殊召喚もできるしね」

シェリー「上手く効果を発動させたいなら、自分のフィールドをがら空きにする工夫が必要よ。召喚したターン内に手札に戻るスピリットモンスターを多用する【スピリット】。あまりモンスターに頼らない【フルバーン】。フリーチェーンのカードを多めに採用して、相手の攻撃に合わせてフィールドを空ける戦法もあるわね」

ブルーノ「よし、今回はここまで！」

シェリー「こんなものでよかったかしら？」

ブルーノ「うん、十分だよ。ありがとう」

シェリー「次回は誰がデュエルするのかしらね？私としてはライディングデュエルが見たいけど」

ブルーノ「Ｄ・ホイールをどうやって持ってくるかが問題だね…。次回もまた別の人達が代役をやるよ」

シェリー「感想はいつでも受けつけているわ。何か思う事があったら書いていきなさい」

ブルーノ「少し言葉に棘があるような…。それじゃ、次回も見てね！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

今回加奈美が使用した《ナチュルの雄叫び》はＴＮＴ　ＮＴＴさんが、《ナチュル・レオグランド》はＢＲＡＶＥさんが、《燃え上がる魂》は湊クレナイさんが投稿してくださったオリカです。皆さん、ありがとうございました。

デュエルの途中に挟んだ会話は割とすんなり書けました。とりあえず、友情は壊れません。

《ナチュル・チェリー》と《ナチュル・パンプキン》、レベル５のナチュルのコンボって強力ですね。上手くいけばビーストとパルキオンを同時に展開できるし、万が一やられても《ミラクルシンクロフュージョン》があるし…。

では、また次回！

第６３話　理性的な敵キャラのリーダーはかなり強い（前書き）

☆精霊の呟き☆

ヒジュラ『今回はリーダー格どうしが激突だぜ！』

ロコナ『どっちもファイトだよ！』

ヒジュラ『敵も応援してどうすんだアホガキ』

ロコナ『むっ！　ふぃれす、ゴー！』

フィレス『ガウッ！』

ヒジュラ『あ？　っていただだだ！　頭噛むなコラ！』

スイレン『本編に入る前にお知らせです！　ある読者の方のアドバイスで、『。』『！』『？』の後を１文字空ける事にしました！　ただ、読みやすいかは読者の方々の判断によりますので、感想を書いていただく際に今までの書き方と今回の書き方のどちらが読みやすいか教えてくださると助かります。　ご協力お願いします！』

ヒジュラ『今のやり取り全部無視か！？　いだだ！？　だ～、わかったわかった！　俺が悪かったから！』

ロコナ『わかればよろしい♪』

フィレス『ガウッ♪』

ヒジュラ『いつつ…ったく、誰に似たんだよ…？』

スイレン『それでは、ライディングデュエル、アクセラレーション！』

ヒジュラ『だから無視かよ！？　しかも前回と決め台詞違うじゃねえか！』

第６３話　理性的な敵キャラのリーダーはかなり強い

ＳＩＤＥ／シュルク

イレギュラー達に奇襲を仕掛けてから、そろそろ１５分が経とうとしている。

「近いな」

海馬コーポレーションの本社ビルにはだいぶ近づいてきた。　加奈美が格好の時間稼ぎになったのだろうか、追っ手は見えない。

「順調ですね！　このまま本社ビルに突入です！」

芽依が元気よく突入を宣言する。　顔を知られても大した損害はない。　無理矢理中央突破も可能だが…。

「…！」

俺が今後の行動について模索していると、後ろから何かの気配を感じた。

「止まれ！」

ほぼ直感で声を上げ、ヴェルヒプトとなったアウロとユニコールはすぐさま立ち止まった。

そして、俺達の前に『奴』が現れた。

地表から2mくらいだろうか。　それくらいの高さから、右手に握った剣を左から横凪ぎに振るい電撃を放ってきた。

攻撃範囲がかなり広い。　それなりに広い車道の幅を丸々埋め尽くすほどの量の電撃に対して、ユニコールが自己判断で金色のバリアを張った。

バキャアッ!!

しかし、2秒も持たずに破壊された。　威力は削がれた事もあり、幸いほぼ無傷で済んだ。

「さすがだな。　ユニコールのバリアをこうもあっさり破るとは」

地面に足をつけたそいつの正体は、真川紅刃だ。　赤と青の模様入りの黒いコートと、白刃の大剣を身につけているあたり、あれからアビリティは解いていないようだ。

瞳の色が黒から黄色に変化しているという事は、覚醒もしているな。　そう分析した直後、紅刃の瞳は元の黒に戻った。

「ユニコール、戻って休んでいてくれ」

「ブルルッ」

ユニコールはデッキに戻った。　これから使うアイテムは精霊に悪影響が出てしまう。　外には出ない方がいい。

「お前らの目的は何だ?」

「石板の採取だ」

「その先は？　最終目標を聞いてんだよ」

「そこまで教える義理はない」

紅刃の質問を軽くあしらう。　これに関しては他人に話すわけにはいかない。

「千景、芽依、先に行け。　紅刃の相手は俺がやる」

「了解です！　アウロ、もうひとっ走りよろしく！」

「ガァァッ！」

芽依と千景を乗せたアウロはまた海馬コーポレーションに向かって走り出した。　それを見て、俺は紅刃が動く前に黒い光線を放った。

「ちっ！」

紅刃は一瞬でそれをかわした後、また高速で動いて俺に斬りかかってきた。　刀身には電撃が込められている。　俺は右腕に青い光を纏わせ、迫りくる雷の刃を受け止めた。

「目的を言わねえと何もわからねえだろうが！　もしかしたら、無駄に争ってるだけかもしれねえんだぞ！？」

「何と言われようと、全貌を話すつもりはない！」

受け止めたまま左手から黒い光線を放ち、紅刃は咄嗟に避けつつ後ろに下がった。　その隙に右腕の光を消し、懐から小さな球を取り出す。

そして、スイッチを入れて軽く放り投げた。

カッ！

「うっ！？」

球は地面に触れた瞬間、破裂して強い光を放った。　それが紅刃の目を眩ましているうちに、俺はデッキと同じ形で灰色の機械を取り出した。　短い方の側面にはライトがある。

スイッチを入れると、ライトから灰色の光が飛び出した。　それは地面にぶつかり素早く肥大化し、やがてＤ・ホイールになった。

Ｄ・ホイールを携帯できるようにと、組織の研究者達が開発した物だ。俺は白と灰色のカラーリングのＤ・ホイールに乗り、ヘルメットを被りバイザーを下ろした。

…光が収まったな。

「何だ今のは…？」

バシュウウッ！

「なっ！？」

突然、紅刃のコートと剣が元の上着と剣型のデュエルディスクに戻った。　一応説明してやるか。

「アビリティが勝手に解けた…！？」

「今のは『封霊球』。　光を浴びた者は一時的に精霊の力を封じられる。　アビリティは元々精霊の力だ」

俺はそれだけ伝えてからD・ホイールを走らせ、驚いている紅刃を置いていった。

俺も光を浴びたから、今は互いにアビリティを使えない状況だ。アビリティを封じられた以上、D・ホイールのスピードには追いつけまい。

上手く巻く事ができたな。　後は千景達と合流して石板の回収を…。

「シュルク！」

…ん？誰だ、俺を呼んだのは？

俺は後ろに振り向くと、驚きで目を見開いた。

紅刃が、Ｄ・ホイールで俺のすぐ後を追ってきていたからだ。

ＳＩＤＥ／紅刃

「馬鹿な!?　なぜお前がＤ・ホイールに乗っている!?　どこから持ってきた!?」

…だよな。　普通驚くよな。　溜め息をつきそうになるのを抑えて、驚愕に表情を歪めるシュルクの横に並んだ。

「お前がどうやってＤ・ホイールを呼び出したのかはわからねえけど、俺も似たような事ができるんでな」

とりあえず、説明が必要だな。　俺が何でＤ・ホイールを超短時間で呼び出せたかというと…。

ボゥン！

『やあ、元気でやってるかい？』

『フォッタ？』

修学旅行前日。　俺と月沙、璃音が荷物の準備をしているところに、何の前触れもなくフォッタが現れた。

『急にどうした？』

『いや、君達に渡したい物があってね。　D・ホイール関連の物なんだけど…』

光の結社の関係でブルー寮に止まれない俺と月沙、璃音は、レッド寮の外れにあるD・ホイールの倉庫を寝床にしている。この時代に置場所がないからって事で、璃音達がこの時代に来た後にフォッタが勝手に用意した奴だ。　整備とかの作業ができる広いスペースはもちろん、なぜか必要最低限の家具やいくつかの部屋まであるから、普段は璃音がよく徹夜で籠ってる事が多い。

『じゃじゃ～ん！』

フォッタが取り出したのは、デッキと同じサイズと形を持つ灰色の機械だ。　中央に黄色の印が入っている。

『何それ？』

『D・ガレージって言って、D・ホイールを中に収納できるんだよ』

『収納って…どう見てもサイズが合わないよ?』

月沙が言うのも最もだ。　デッキくらいの大きさの機械にD・ホイールが入るとは考えにくい。

『まあ、見ててよ』

フォッタはそう言ってD・ガレージをD・ホイールに向けてスイッチを押した。

すると、側面のライトだか銃口だかみたいな穴から黄色の光が発射され、それが俺のD・ホイールに命中。　D・ホイールは光と同化してD・ガレージに吸い込まれていった。

『な…吸収した!?』

『で、もう1度スイッチを押せば…』

フォッタがもう1度スイッチを押すと、また光が放たれ、地面についてから元のD・ホイールになった。

『面白い機械ね』

『これを使えば、D・ホイールで行けない所にも簡単にD・ホイールを持ち込めるし、いつでもD・ホイールを呼び出す事ができるよ。
ただ、作るのに結構時間がかかるから、とりあえず紅刃の分だけ持ってきたんだ。　他の人は待っててね』

というわけで、一応修学旅行に持ってきたけど…まさか、早速役に立つとは思わなかったな。　段々一般人から離れてる気がするけど…。

「あくまで俺達の邪魔をする気か…！」

「ああ！」

「…いいだろう。　ならば、ライディングデュエルで勝負だ！」

「ライディングデュエル！？」

シュルクの突然の提案に、俺は驚きながらその言葉を繰り返した。

「邪魔をすると言うのなら、この手で完膚なきまで叩きのめしてやる！」

今の俺はアビリティが使えない。　かといって、振り切るのも無理そうだ。　だったら…。

「ああ。　それでいいぜ」

「なら話は早い！　…だが、この時代の童実野町はライディングデュエルをやるには少し狭い」

シュルクがD・ホイールのモニターを操作すると、遠くに白い光の道が現れた。　光の道は空中に上り、単純なサーキットを形成した。

「これなら思い切りやれる」

「なるほどな」

『『《スピード・ワールド　２》セット・オン』』

モニターを操作すると、《スピード・ワールド　２》が機械音声と共に発動した。　そして、白い光の道に乗り上げる。

「「ライディングデュエル、アクセラレーション！」」

ライディングデュエルお決まりの掛け声を同時に叫び、空のコースへ続く道を登り切った。

コースはちゃんと光の壁が張ってあり、コースアウトの心配はなさそうだ。　とりあえず、２人揃って直進する。

「第１コーナーを先に曲がり切った方が先攻だ！」

「わかった！」

一気にスピードを上げ、光の道を進む。　シュルクも同じスピードで、互いに１歩も譲らない。

そして、コーナーの直前まできた。　普通ならスピードを落とさないと危険だけど、あえてこのまま突っ込む。　でも、シュルクも同じように突っ込んできた。

「おおおおおおおっ！！」

そして、わずかな差で俺が先に曲がり切った。

「（俺と同じでスピードを落とさないとはな…）」

「俺からの先攻だ！」

「いいだろう」

先攻は取った。　後はただ戦うだけだ！

「全力で行くぜ！」

「来い！」

「「デュエル！」」

紅刃ｖｓシュルク

「俺のターン！《豊穣のアルテミス》を召喚！」

毎度お馴染みのアルテミスだ。　今でもデッキに入れている。

《豊穣のアルテミス》　ＡＴＫ／１６００

「カードを3枚セットしてターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／４０００
ＳＰＣ／０

手札／２
モンスター／《豊穣のアルテミス》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×３

「俺のターン！」

紅刃　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／０→１

シュルク　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／０→１

「チューナーモンスター《魔轟神オルトロ》を召喚！」

シュルクが最初に出してきたのは、白いぬいぐるみを持った薄紫の赤ん坊だ。

《魔轟神（まごうしん）オルトロ》
チューナー（効果モンスター）
星２／光属性／悪魔族／ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ　５００
手札を１枚墓地へ送って発動する。
手札からレベル３の「魔轟神」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

《魔轟神オルトロ》　ＡＴＫ／　８００

「オルトロの効果発動！　手札を１枚墓地に送り、手札からレベル３の魔轟神を特殊召喚する！」

「その前にリバースカードを使うぜ！　カウンター罠（フラッシュ・バック）！　相手が通常召喚をした時、デッキからそのモンスターと同じレベルのモンス

ターを1体特殊召喚する！」

《フラッシュ・バック》
カウンター罠（オリジナル）
相手が通常召喚に成功した時に発動する事ができる。自分のデッキから召喚されたモンスターと同じレベルのモンスター1体を特殊召喚する。

「…オルトロのレベルは2だ」

レベル2か…。　だったらあいつを出すか。

「デッキからレベル2のチューナーモンスター《天空奏者フォルテ》を特殊召喚！」

羽付きの闘牛士の帽子を被り、銀色の翼を生やした天使が現れた。
手にはガラスでできたヴァイオリンを持っている。

《天空奏者フォルテ（エンジェルプレイヤー）》
効果モンスター（チューナー・オリジナル）
星2／光属性／天使族／ＡＴＫ　２００／ＤＥＦ　２００
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、カウンター罠が発動される度にデッキからレベル4以下の天使族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。
「天空の聖域」がフィールドに存在している時、このカードは戦闘では破壊されない。

《天空奏者フォルテ》　ＤＥＦ／　２００

「チューナーか…」

「《豊穣のアルテミス》の効果発動！　カウンター罠が発動する度に、俺はカードを1枚ドローする！」

「フン…まあいい。　オルトロの効果で、手札から《魔轟神ディフ》を特殊召喚する！」

シュルクのフィールドでは、緑の翼を持つ白い長髪の悪魔が現れオルトロの隣に並んだ。

《魔轟神ディフ》
効果モンスター
星3／光属性／悪魔族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ１７００
「魔轟神」と名のついたモンスターが手札から自分の墓地へ送られた時、自分フィールド上に存在するこのカードをリリースし、そのモンスター1体を選択して発動する事ができる。
選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

《魔轟神ディフ》　ＡＴＫ／１４００

「そして、手札から捨てた《魔轟神獣ガナシア》の効果発動！　このモンスターが手札から捨てられた時、俺のフィールドに特殊召喚する！」

さらに、2足歩行の白い象まで飛び出した。

《魔轟神獣（まごうしんじゅう）ガナシア》
効果モンスター
星3／光属性／獣族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１０００
このカードが手札から墓地へ捨てられた時、このカードを自分フィ

ールド上に特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したこのカードの攻撃力は２００ポイントアップし、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

《魔轟神獣ガナシア》　ＡＴＫ／１６００

「一気にモンスターを3体も展開した！？」

「ガナシアはこの効果で特殊召喚された時、攻撃力が２００ポイントアップする！」

《魔轟神獣ガナシア》　ＡＴＫ／１６００→１８００

「そして、カードを2枚伏せる！　レベル3《魔轟神ディフ》にレベル2《魔轟神オルトロ》をチューニング！」

オルトロが灰色の輪になり、ディフが3つの星になって共鳴する。

「目覚めし神が、勝利の栄光へ歩を進める！　永久（とわ）の果てに蘇れ！」

☆３＋☆２＝☆５

「シンクロ召喚！　復活せよ！　《魔轟神レイジオン》！」

黒い翼を持つ、黒と黄色の悪魔。姿自体は人型だ。あれがシンクロモンスターの魔轟神か…！

《魔轟神レイジオン》
シンクロ・効果モンスター
星５／光属性／悪魔族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ１８００

「魔轟神」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上
自分の手札が1枚以下の場合、このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の手札が2枚になるまでデッキからカードをドローする事ができる。

《魔轟神レイジオン》　ＡＴＫ／２３００

「自分の手札が1枚以下の時にレイジオンがシンクロ召喚に成功した時、手札が2枚になるようにカードをドローする！　そしてバトル！　《魔轟神レイジオン》で《豊穣のアルテミス》を攻撃！　イービル・ナックル！」

レイジオンが拳に黄色と黒の光を纏わせ、アルテミスに殴りかかってきた。　このまま破壊はさせねえ！

「カウンター罠《攻撃の無力化》！　攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる！」

アルテミスの前に透明な障壁が展開され、レイジオンの拳が標的を捕らえる事はなかった。

「カウンター罠が発動した事で、アルテミスの効果で1枚ドロー！　そして、《天空奏者フォルテ》の効果発動！　天空の交響曲（ヘブンズ・シンフォニア）！」

フォルテがガラスのヴァイオリンで音楽を奏で始め、周りにいくつかの楽譜が流れてきた。

「これは…？」

「俺の場にフォルテがいる時にカウンター罠を発動した場合、デッキからレベル４以下の天使族モンスターを特殊召喚できる！　《調和の代行者　ネプチューン》を特殊召喚！」

楽譜が球体の袋になるよう集まり、やがて楽譜が拡散して消えた。
中から出てきたのは、青いセミロングの髪に、全体的に青い服と翼といった風貌の、赤い瞳を持つ青年の天使だ。

《調和の代行者　ネプチューン》
効果モンスター（オリジナル）
星３／光属性／天使族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ　９００
自分フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する時、手札を１枚捨てて発動する。
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を、エンドフェイズまでチューナーとして扱う。
この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

《調和の代行者　ネプチューン》　ＡＴＫ／１４００

「ちっ…。　ターンエンドだ」

「エンドフェイズ時に永続罠《隠された聖域》を発動！　このカードは《天空の聖域》としても扱う！」

《隠された聖域》
永続罠（オリジナル）
このカードがフィールド上に存在する限り、　このカードのカード名を「天空の聖域」として扱う。
手札を１枚捨てる事で、自分の墓地に存在するレベル４以下の光属性・天使族モンスター１体を特殊召喚する事ができる。

この効果は1ターンに1度、自分のメインフェイズにのみ使用する事ができる。

「フィールド魔法の代わりか…！」

シュルク
ＬＰ／４０００
ＳＰＣ／１
手札／２
モンスター／《魔轟神獣ガナシア》（ＡＴＫ／１８００）《魔轟神レイジオン》（ＡＴＫ／２３００）
魔法・罠／リバース×２

「俺のターン！」

紅刃　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／１→２

シュルク　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／１→２

手札は5枚…十分増えた。　ここは一気に攻めるか。

「《創造の代行者　ヴィーナス》を召喚！」

全体的に金色の代行者が現れた。　周りには紫・青・赤の3つの球体を引き連れている。

《創造の代行者　ヴィーナス》
効果モンスター
星３／光属性／天使族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ　０
５００ライフポイントを払って発動する。

自分の手札またはデッキから「神聖なる球体」1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

《創造の代行者　ヴィーナス》　ＡＴＫ／１６００

「ヴィーナスの効果発動！　ライフを５００払う事で、手札かデッキから《神聖なる球体》を特殊召喚できる！」

紅刃　ＬＰ／４０００→３５００

紫の球体から光が飛び出し、その光が白く輝く半透明の球体になった。

《神聖なる球体（ホーリーシャイン・ボール）》
通常モンスター
星２／光属性／天使族／ＡＴＫ　５００／ＤＥＦ　５００
聖なる輝きに包まれた天使の魂。
その美しい姿を見た者は、願い事がかなうと言われている。

《神聖なる球体》　ＡＴＫ／　５００

「レベル４《豊穣のアルテミス》とレベル２《神聖なる球体》にレベル２《天空奏者フォルテ》をチューニング！」

フォルテがガラスのヴァイオリンを引いて２つの黄色の輪になり、２体の天使が６つの星になる。

「舞い散る白羽が、天空を翔け現世を照らす！　希望の光を振り翳せ！」

☆４＋☆２＋☆２＝☆８

「シンクロ召喚！　飛来せよ！　《ライトエンド・ドラゴン》！」

４枚の天使の翼を広げ、金の装飾品を身につけた純白の聖龍が空に飛び立った。。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「《ライトエンド・ドラゴン》…石板を司る龍の１体か…」

「ヴィーナスの効果をもう２回発動！　ライフを合計１０００ポイント払い、デッキから《神聖なる球体》を２体特殊召喚する！」

紅刃　ＬＰ／３５００→３０００→２５００

今度は青と赤の球体からそれぞれ《神聖なる球体》が飛び出した。

《神聖なる球体》　ＤＥＦ／　５００

《神聖なる球体》　ＤＥＦ／　５００

「《調和の代行者　ネプチューン》の効果発動！　手札を１枚捨てる事で、フィールド上のモンスター１体をエンドフェイズまでチューナーにする！　俺はネプチューン自身をチューナーにする！」

「またシンクロ召喚をするつもりか…！？」

「レベル３《創造の代行者　ヴィーナス》にレベル３《調和の代行

者　ネプチューン》をチューニング！」

次は青い代行者が３つの輪になり、金色の代行者が３つの星になった。

「天空の使者が、恵みの欠片を現世に齎（もたら）す！　希望の光を振り翳せ！」

☆３＋☆３＝☆６

「シンクロ召喚！　贈与せよ！　《セラフィム・ギフター》！」

白い翼を持つ水色の鎧天使。ここはこいつで繋ぐ。

《セラフィム・ギフター》シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星６／光属性／天使族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ／２２００
光属性チューナー＋チューナー以外の光属性モンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分は１０００ライフポイント回復する。
このカードが破壊された場合、このカードのシンクロ素材としたモンスターの数まで自分のデッキからカードをドローする。

《セラフィム・ギフター》　ＡＴＫ／２４００

「《セラフィム・ギフター》がシンクロ召喚に成功した時、俺はライフを１０００回復する！」

紅刃　ＬＰ／２５００→３５００

ヴィーナスのライフコストは完全じゃないけど軽減できた。後は

攻める！

「バトル！　《セラフィム・ギフター》で…」

「悪いがそれは通さない！　罠カード《サンダー・ブレイク》を発動する！」

「なっ！？」

「手札を1枚捨て、フィールド上のカードを1枚破壊する！」

《サンダー・ブレイク》
通常罠
手札を1枚捨て、フィールド上に存在するカード1枚を選択して発動する。
選択したカードを破壊する。

「《セラフィム・ギフター》を破壊する！」

《セラフィム・ギフター》が雷に打たれて消滅した。いきなり退場かよ…。

「く…ただではやられない！　《セラフィム・ギフター》が破壊された時、こいつに使ったシンクロ素材の数だけカードをドローする！　シンクロ素材はヴィーナスとネプチューンの2体！　よって、2枚ドローだ！」

「無駄がないな…。　ついでにもう1体退場してもらおうか。　《サンダー・ブレイク》のコストで墓地に捨てた《魔轟神獣キャシー》の効果発動！　このモンスターが手札から墓地へ捨てられた時、

フィールド上に存在する表側表示のカードを1枚破壊する！」

《魔轟神獣キャシー》
チューナー（効果モンスター）
星1／光属性／獣族／ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ　６００
このカードが手札から墓地へ捨てられた時、フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を破壊する。

「対象は《ライトエンド・ドラゴン》だ！」

黒猫の幻影が紫の光になり、ライトエンドに突っ込んできた。
2段構えで破壊しにかかってきたか…！

「手札の《ブライト・ガードナー》の効果発動！　俺の光属性のシンクロモンスターが破壊される時、こいつを手札から墓地に送る事で、このターン俺の光属性のシンクロモンスターは破壊されない！」

《ブライト・ガードナー》
効果モンスター（オリジナル）
星1／光属性／天使族／ＡＴＫ　４００／ＤＥＦ／　３００
自分フィールド上に表側表示で存在する光属性シンクロモンスターが破壊される場合、このカードを手札から墓地に送り発動する。
このターンのエンドフェイズ時まで、自分フィールド上の光属性シンクロモンスターは破壊されず、光属性シンクロモンスターの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

《セラフィム・ギフター》の効果で引いたばかりの、騎士の兜を被った球状のモンスターが幻影になってライトエンドの前に現れた。
そして、自分を包むように緑のバリアを張って紫の光弾を防いだ後に消え去った。

「ちっ…《セラフィム・ギフター》の効果で引いたカードか…」

「バトル！　《ライトエンド・ドラゴン》で《魔轟神レイジオン》に攻撃！　シャイニングサプリメイション！」

ライトエンドが口から光のブレスを放つ。　破壊はされないから安全に攻撃できるけど、あのリバースカードは何かありそうだな…。

「罠カード《ホーリーライフバリアー》！　手札を1枚捨てる事で、このターンの間相手から受ける全てのダメージを0にする！」

白い半透明の障壁がライトエンドの攻撃を防いだ。　破壊系のカードじゃなかったのかよ…。

「戦闘ダメージには『自分への戦闘ダメージ』と『モンスターへの戦闘ダメージ』の2種類がある。　《ホーリーライフバリアー》はありとあらゆるダメージを0にするカード。　よって、俺のモンスターは戦闘破壊されない」

「で、コストで捨てたカードにも何かあるんだろ?」

「当たりだ。　捨てたのは《魔轟神ラグリス》！　手札から捨てられた時、カードを2枚ドローする！」

《魔轟神ラグリス》
効果モンスター（オリジナル）
星1／光属性／悪魔族／ＡＴＫ　６００／ＤＥＦ　５００
このカードが手札から墓地へ捨てられた時、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「そして、手札から速攻魔法《Ｓｐ－クイック・ドロー》を発動！
カードの効果でこのカードがデッキから手札に加わった時、カードを２枚ドローする！」

《Ｓｐ－クイック・ドロー》
速攻魔法（オリジナル）
このカードが魔法・罠・効果モンスターの効果によって自分のデッキから手札に加わった場合発動する事ができる。
自分のデッキからカードを２枚ドローする。
自分用スピードカウンターが取り除かれた場合、自分の墓地に存在するこのカードを除外して自分のデッキからカードを１枚ドローする。

「結局損失なしかよ…。《隠された聖域》の効果発動！　１ターンに１度手札を１枚捨てる事で、自分の墓地からレベル４以下の光属性・天使族モンスター１体を特殊召喚できる！　この効果で墓地のアルテミスを特殊召喚する！」

《豊穣のアルテミス》　ＤＥＦ／１７００

「カードを２枚セットしてターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／３５００
ＳＰＣ／２
手札／１
モンスター／《ライトエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２６００）《豊穣のアルテミス》（ＤＥＦ／１７００）《神聖なる球体》（ＤＥＦ／　５００）《神聖なる球体》（ＤＥＦ／　５００）

魔法・罠／《隠された聖域》リバース×２

強い…。　手札コストに使うのは全部手札から捨てられた時に発動する強制効果を持ったモンスター。　コストがまるでコストになってねえ。

「俺のターン！」

紅刃　ＬＰ／３５００　ＳＰＣ／２→３

シュルク　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／２→３

「《Ｓｐｌフェア・アクセル》を発動！　自分用スピードカウンターが２つ以上ある時、互いにスピードカウンターを１つ増やし、俺はカードを２枚、お前はカードを１枚ドローする！」

《Ｓｐｌフェア・アクセル》
通常魔法（オリジナル）
自分用スピードカウンターが２つ以上ある場合に発動する事ができる。
互いのプレイヤーは自分用スピードカウンターを１つ増やす。
その後、自分はカードを２枚ドローし、相手はカードを１枚ドローする。

「お互いにスピードカウンターと手札を増やす効果…？」

紅刃　ＳＰＣ／３→４

シュルク　ＳＰＣ／３→４

「そして《Ｓｐ一魔轟神の召集》を発動！　スピードカウンターを４つ取り除き、手札から魔轟神３体を捨て、その後デッキから魔轟神２体を手札に加える！」

《Ｓｐ一魔轟神の召集》
通常魔法
自分のスピードカウンターを４つ取り除いて発動する。
手札から「魔轟神」と名のついたモンスター３体を捨て、その後デッキから「魔轟神」と名のついたモンスター２体を手札に加える。

シュルク　ＳＰＣ／４↓０

「俺はデッキから《魔轟神ミーズトージ》と《魔轟神獣ルビィラーダ》を手札に加える」

「手札をまとめて捨てた…！　て事は…」

「その前に《Ｓｐ一クイック・ドロー》の効果を使う！　自分用スピードカウンターが減った時、墓地からこのカードを除外してカードを１枚ドローする！」

手札がまた１枚増えたか…。　そして、さっき手札から捨てたのは多分…。

「手札から捨てた《魔轟神ルリー》と《魔轟神獣ケルベラル》の効果発動！　手札から捨てられた時、俺のフィールド上に特殊召喚する！」

シュルクの横から、赤と緑の仮面を被った翼のでかい悪魔と、３つの頭を持つ赤い犬っぽいモンスターが同時に飛び出してきた。

《魔轟神ルリー》
効果モンスター
星１／光属性／悪魔族／ＡＴＫ　２００／ＤＥＦ　４００
このカードが手札から墓地へ捨てられた時、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

《魔轟神獣ケルベラル》
チューナー（効果モンスター）
星２／光属性／獣族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ　４００
このカードが手札から墓地へ捨てられた時、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

《魔轟神ルリー》　ＡＴＫ／　２００

《魔轟神獣ケルベラル》　ＡＴＫ／１０００

「さらに《魔轟神クルス》の効果発動！　このモンスターが手札から捨てられた時、墓地からレベル４以下の魔轟神を特殊召喚する！」

《魔轟神クルス》
効果モンスター
星２／光属性／悪魔族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ　８００
このカードが手札から墓地へ捨てられた時、自分の墓地に存在するこのカード以外のレベル４以下の「魔轟神」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する。

「墓地からレベル１の《魔轟神ラグリス》を特殊召喚！」

復活したのは、赤い体に黒い翼を生やした悪魔だ。

《魔轟神ラグリス》　ＡＴＫ／　６００

「一気に3体も特殊召喚しやがった…！？」

「手札から捨てる行為で最大限の力を発揮する！　これが魔轟神の力だ！　レベル１《魔轟神ルリー》とレベル１《魔轟神ラグリス》にレベル２《魔轟神獣ケルベラル》をチューニング！」

レベルの合計は４。　レベル４で何を出すつもりだ？

「目覚めし神獣、眩き尖角（せんかく）、光と闇の狭間を穿つ！　永久（とわ）の果てに蘇れ！」

☆１＋☆１＋☆２＝☆４

「シンクロ召喚！　復活せよ！　《魔轟神獣ユニコール》！」

金色のたてがみに黒い尻尾、銀色の角を持つ白馬が現れ、シュルクの近くを走り始めた。

《魔轟神獣ユニコール》
シンクロ・効果モンスター
星４／光属性／獣族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ１０００
「魔轟神」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
自分の手札の枚数と相手の手札の枚数が同じ場合、相手が発動した魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にし破壊する。

《魔轟神獣ユニコール》　ＡＴＫ／２３００

「こいつは…！？」

「頼んだぞ、ユニコール」

『ブルルッ』

ユニコールに一言をかけたシュルクは優しく笑っていた。　目もやたらと澄んでいる。　１発で信頼している事がわかった。

「シュルク…。　お前は…いや、お前らニュートラルは、本当に俺達の敵なのか？　れっきとした悪なのか？　加奈美が入ったのを抜きにしても、お前らが敵だとは思えない」

「…だからどうした？　所詮、俺達とお前達は相容れない存在。ならば、戦う事に躊躇いを見せる道理はない。　チューナーモンスター《魔轟神獣ルビィラーダ》を召喚！」

白い翼を持つ鳥に似た体型のモンスターが現れた。　チューナーって事は、またシンクロ召喚か…！？

《魔轟神獣ルビィラーダ》
チューナー（効果モンスター）
星４／光属性／獣族／ＡＴＫ１１００／ＤＥＦ　８００
自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードが攻撃対象に選択された時、手札から「魔轟神」と名のついたモンスター１体を捨てる事でその攻撃を無効にする。

《魔轟神獣ルビィラーダ》　ＡＴＫ／１１００

「レベル４《魔轟神獣ガナシア》にレベル４《魔轟神獣ルビィラーダ》をチューニング！」

ルビィラーダが４つの輪に、ガナシアが４つの星それぞれ変化して共鳴する。

「目覚めし神が、剛を以て我が敵を砕く！　永久（とわ）の果てに蘇れ！」

☆４＋☆４＝☆８

「シンクロ召喚！　復活せよ！　《魔轟神ヴァルキュルス》！」

赤・黒・金に彩られた鎧を身につけ、黒い翼を生やした人型の悪魔が現れ、飛行を始めた。

《魔轟神ヴァルキュルス》
シンクロ・効果モンスター
星８／光属性／悪魔族／ＡＴＫ２９００／ＤＥＦ１７００
「魔轟神」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
手札から悪魔族モンスター１体を捨てて発動する。
自分のデッキからカードを１枚ドローする。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

《魔轟神ヴァルキュルス》　ＡＴＫ／２９００

「シンクロモンスターが３体も…！」

レイジオン。　ユニコール。　ヴァルキュルス。　魔轟神のシンクロモンスターが３体も揃った。

「ヴァルキュルスの効果発動！　１ターンに１度、手札の悪魔族を捨てる事で、カードを１枚ドローする！　そして、今手札から捨てた２体目の《魔轟神クルス》の効果発動！　墓地からレベル４以下の魔轟神、《魔轟神獣ケルベラル》を特殊召喚する！」

《魔轟神獣ケルベラル》　ＡＴＫ／１０００

「レベル８《魔轟神ヴァルキュルス》にレベル２《魔轟神獣ケルベラル》をチューニング！」

「またシンクロ召喚かよ！？」

「目覚めし神が、魔轟の玉座より威光を放つ！　永久（とわ）の果てに蘇れ！」

☆８＋☆２＝☆１０

「シンクロ召喚！　復活せよ！　《魔轟神レヴュアタン》！」

空を飛ぶ玉座に乗った巨大な悪魔が現れた。　赤い挑発と赤い翼を持ち、金色の鎧を着ている。

《魔轟神レヴュアタン》
シンクロ・効果モンスター
星１０／光属性／悪魔族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２０００
「魔轟神」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在する「魔轟神」と名のついたモンスターを３体ま

で選択して発動する事ができる。
選択したモンスターを手札に加える。

《魔轟神レヴュアタン》　ＡＴＫ／３０００

「攻撃力３０００…！？」

「そして、カードを１枚セット。　これで俺の手札は２枚。　お前の手札も２枚。　条件は整った」

「条件？」

「ユニコールの永続効果の事だ。　互いの手札が同じ枚数の時、相手のカウンター罠を含む全てのカードは効果を発動した瞬間に無効化され破壊される！」

「何！？」

カウンター罠まで全部封じるモンスター！？　そんなモンスターがいるのかよ！？　これじゃ、ライトエンドの効果も発動できない！

「戦闘に強い《ライトエンド・ドラゴン》も、効果を封じられてしまっては十分な力を発揮できまい！　バトルだ！　《魔轟神レヴュアタン》で《ライトエンド・ドラゴン》に攻撃！　クリムゾン・フラッシュ！」

レヴュアタンが翼から赤い光線を放ち、ライトエンドを狙い撃つ。
対して、ライトエンドは為す術もなく破壊された。

「く…ライトエンド…」

紅刃　ＡＴＫ／３５００→３１００

「《魔轟神レイジオン》で《豊穣のアルテミス》を攻撃！　イービル・ナックル！」

今度はレイジオンが、光を纏った拳でアルテミスを殴り倒す。

「最後だ！　《魔轟神獣ユニコール》で《神聖なる球体》に攻撃！　コラージュ・スパーク！」

さらに、ユニコールが灰色の光を全身に纏って《神聖なる球体》に突進し、俺の後ろに吹っ飛ばして破壊した。

「《Ｓｐ－ヴァニティ・ドロー》を発動！スピードカウンターが０の時、カードを3枚ドローする！カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

シュルク
ＬＰ／４０００
ＳＰＣ／０
手札／２
モンスター／《魔轟神レイジオン》（ＡＴＫ／２３００）《魔轟神獣ユニコール》（ＡＴＫ／２３００）《魔轟神レヴュアタン》（ＡＴＫ／３０００）
魔法・罠／リバース×２

残ったモンスターは《神聖なる球体》だけか…。　何て強さだ。
全く半減できねえ。　これがニュートラルの実力なのか？

「お前とは戦いに対する覚悟が違う」

「覚悟…？」

「そうだ。　俺には負けられない理由がある。　そして、俺がニュートラルにいる理由も…」

理由？　それが負けられない理由に繋がっているのか？

…いや、どうであれ、俺も勝って先に進まないといけない。

「負けられないのは俺も同じだ！　ここで止まってなんかいられねえんだよ！」

「なら、この状況をどうやって切り抜ける！？お前にそれができるのか！？」

「やってやるさ！必ずな！」

まだ手は残っている。　ここで諦めてたまるかよ！

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第６３話　理性的な敵キャラのリーダーはかなり強い（後書き）

☆今回のキーカード☆

鈴佳「さあ、始まりました！　『今回のキーカード』の時間よ！
今回は木下鈴佳と…」

怜磨「波星怜磨でお送りします！　…って、鈴佳姉ちゃんはこの前本編で登場したし今回はリクエストでこのコーナーに出演したけど、俺の事を覚えてる人っているのか？」

鈴佳「いるとは言い切れないわね。　最後に登場したのは結構前だし…」

怜磨「う…まあ、それは置いといて、紅刃兄ちゃんがいきなりピンチだね」

鈴佳「さすが【魔轟神】、オリカがあるとはいえガンガン回るわね。
でも、紅刃にはアクセルシンクロがあるわ！　勝負はこれからよ！」

怜磨「まだ未完成だし、肝心のライトエンドがやられちゃったんだけど…」

鈴佳「気合いで何とかしなさい！」

怜磨「解決方法になってるのかなってないのか…」

鈴佳「それじゃ、カード考察に入るわよ！　今回紹介するのは、ニュートラルの幹部、シュルクのパートナー《魔轟神獣ユニコール》よ！」

《魔轟神獣ユニコール》
シンクロ・効果モンスター
星４／光属性／獣族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ１０００
「魔轟神」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
自分の手札の枚数と相手の手札の枚数が同じ場合、相手が発動した魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にし破壊する。

鈴佳「お互いの手札の枚数が同じ時、相手が発動したカード効果を無効にして破壊する事ができるわ」

怜磨「永続効果だから《スターダスト・ドラゴン》や《死霊騎士デスカリバー・ナイト》《光と闇の竜》でも対処できない。　おまけにカウンター罠まで無効にできるんだ」

鈴佳「ただし、同じ永続効果の《Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ》が相手のフィールドにいたら魔法・罠は無効にできないから注意しなさい」

怜磨「手札調整は魔轟神の効果や《サンダー・ブレイク》とかの手札を減らすカードを使うといいな。　相手ターンにタイミングを合わせて手札の枚数を合わせると、相手の反撃を封じれるよ」

鈴佳「レベル４にしては結構高い攻撃力も特徴よ。　それに、いざという時はシンクロ素材にもできるから相当強いモンスターね」

怜磨「フィールドにいるだけで厄介なモンスターだから、魔轟神のチューナーを使うならエクストラデッキに入れとくといいかもな」

鈴佳「はい、今回はここまで！」

怜磨「本編でも出番ほしいな…。　冥界暮らしだから全然出番が回ってこないし」

鈴佳「そのうち冥界編とかやるわよ！　…多分」

怜磨「自信ないのかよ！？」

鈴佳「話のネタならいくつかあるしね。　でも、無理矢理にでも出れないかしら…？」

怜磨「結局、気長に待つしかないか…。　それじゃ、そろそろ締めって事で！」

鈴佳「感想待ってるわよ！　次回もよろしく！」

ーーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

今回紅刃が使用した《フラッシュ・バック》《天空奏者フォルテ》は湊クレナイさん、《調和の代行者　ネプチューン》はクレセントさん、《隠された聖域》はＯＮＥさん、《Ｓｐ｜魔轟神の召集》は機皇帝プラシド∞さんがそれぞれ投稿してくださったオリカです。

皆さん、ありがとうございました。

魔轟神…面白いくらい回りますね。　Ｓｐの補助があるとはいえ、自分でもびっくりです。　何あの展開力…？

次回は紅刃ｖｓシュルクの続きと第三者の正体暴露のどちらかになります。　多分後者だと思いますけど…。

では、また次回！

第６４話　復讐者はかなりしつこい奴もいる（前書き）

☆精霊の呟き☆

ロディス『今回は紅刃のデュエルの続きではなく、別の者達のデュエルをお送りする』

リーシェ『あの腹立たしいでは済まされない奴が再び立ち塞がる。私が直々に裁きを下してやろうか…！』

ゴーズ『落ち着け！…ああ、前回の書き方の件だが、周りの反応があまりよくないため今まで通りの書き方で行く事にした。アドバイスをしてくれた人にはここで謝罪する』

ロディス『では、第６４話、解禁だ。おい、デュエルしろよ』

ゴーズ『また変わった！？しかもそれは他人の台詞だろ！』

リーシェ『細かい事は気にするな』

第６４話　復讐者はかなりしつこい奴もいる

ＳＩＤＥ／ルーナ

何か空に楕円形っぽい白い何かが現れた。その上を2台のＤ・ホイールが走っていく。

「あれって、紅刃じゃない？」

「あの色…確かにそうだな」

月沙が2台の内の1台を言い当て、秋斗もそれを確信した。どういう経緯かはわからないけど、紅刃が誰かとライディングデュエルをやる事になったみたいね。

「紅刃なら大丈夫だ。あいつの強さは半端ねえからな」

「そうね。…勇香、そろそろ降ろして」

「ん？体はもういいのか？」

「大丈夫。だいぶ回復したから」

全員一旦立ち止まって、勇香はおぶられてる私を降ろした。…うん、もう大丈夫。

「このまま走るんじゃ、いつ間に経っても追いつかないわね…」

「マスター！」

私が愚痴っていると、ナージャが実体化して出てきた。

「ナージャ？」

「マスターの石板っぽいし、ちんたら進んでられないでしょう？」

「え？…ああ、なるほど。『あれ』をやる気？」

「ご名答！」

「『あれ』って、何の事だよ？」

「まあ、見てなさいよ～」

ナージャは勇香にそれだけ伝えると、全身を朱色に光らせた。

「な、何だ！？」

そして、急速に形を変えた後に光を消した。ちゃんと変身したのを確認して、私はナージャの上に乗った。

「…え？何それ？」

『見てわからない？スケボーよ～』

そう。今のナージャの姿は、全身茶色で蛇みたいなデザインのスケボー。下から風が吹き出し始め、いつでも発進可能になっている。

「えぇぇえぇぇえぇぇ！？お前そんな事できんの！？」

『スペックは、大体某少年探偵のあれ並と思って結構よ～。スピードはあんた達のバイクぐらいなら出せるしね～』

「それって危なくないの！？」

「大丈夫！スパッツはいてるから！」

「そういう問題じゃないんだけど…」

アカデミアに入学するまでにいろんな事をやったからね。スケボーもお手のものよ。

「…ナージャ、２人乗りはできるか？」

『え？まあ、２人までならいけるけど…』

「俺も乗せてくれ」

「秋斗も？」

意外にも、秋斗が同行を求めてきた。珍しいわね、秋斗からそういう提案をするなんて…。

「石板に対応するカードを持っている以上、いつ狙われるかわからない。単なる護衛だ」

「護衛…」

『OK！ちゃっちゃと乗りなさい！』

ナージャが体を文字通り伸ばし、秋斗はその上に乗って私の肩を掴んだ。

「お前らは後から着いてこい」

「わかった！」

「気をつけて！」

「ナージャ、行くわよ！」

『それじゃ、出発進行～！』

足が茶色い金具みたいな物で固定され、ナージャは猛スピードで走り出した。２人乗りでも一応問題ないみたいね。

「急ぐぞ。お前が石板からカードを取り出せば、連中が手出しできなくなる可能性がある。カードじゃなく石板そのものが目的だとすればの話だがな」

「どのみち、私が直接石板と対面しないとどうにも…？」

私は言葉を切った。前方に何かが見えたからよ。

いや、『誰か』って言った方がいいわね。男が１人、道路のど真ん中に突っ立っている。短めの金髪で、ベージュ色のスーツを気崩している。

無視して通り過ぎようと考えた時、異変が起きた。

ブワッ！

「「『！？』」」

男が『右腕を黒い何かに変化させて、私達に向けて勢いよく伸ばしてきた』。

「きゃっ！？」

辛うじて右にかわしたけど、今度は左腕を同じように変化させて伸ばしてきた。右腕の方もそうだけど、先端が鋭く尖っていて、まともに食らったら間違いなく串刺しになりそう。

「ちっ！」

秋斗は空いてる左手から杖を創り、私達を覆うように結界を張った。私達自身もかわして、結界で黒い何かを受け流しつつ前に進む。

そして、男を追い越して一気に距離を離した。

男はそれ以上動く気はないらしく、両腕を元に戻してまた棒立ちの状態になった。振り向く気配すらない。

「何なのよ、あいつ！？」

「気になるが、月沙と勇香に任せるしかないな。ナージャ、急げ」

『何で命令口調？言われなくてもそのつもりよ～』

私達はそのまま海馬コーポレーションに向かった。

…何かしら？あの男とすれ違った時、物凄く邪悪な気配を感じた。ナージャと秋斗もそれに気づいてるはず。

嫌な予感がする。とてつもなく、嫌な予感が…。

ＳＩＤＥ／将人

「落ち着いたか？」

「うん…ぐす、ありがとう…」

俺は先には行かず、加奈美が泣き止むまでずっと傍にいた。今、ようやく泣き止んだところだ。

「さて、これからどうするか…」

「私は海馬コーポレーションに行くよ。シュルク君達と合流しないと」

『私達を止めなくてもいいのですか？』

「デュエルで負けちゃったから。今更止める権利はないよ」

『へえ…話がわかるじゃねえか』

『ヒジュラ、お前な…』

ヒジュラの言葉を聞いてゴーズが軽くたしなめる。ヒジュラのこの性格は今に始まった事ではないが…。

「俺達も行くか。いつまでもここにとどまっては…」

ブワァァァァァ！

「「！？」」

俺が話し終える前に、異常事態に出くわした。

俺達の周囲から黒い何かが噴き出し、巨大なドーム状になり俺達を閉じ込めた。

「え！？」

「何だこれは！？」

「私達の誰か…じゃない！シュルク君達の中にこんな事ができる人はいないよ」

『おいおい…て事は、俺達の仲間以外の誰かがちょっかいをかけてきたって事か？』

『まさか、第三者の介入…！？』

カイエンの予想通りで間違いなさそうだな。紅刃達もこんな事はできない。

一体誰の仕業だ？別の誰かが石板を狙っているのか？

ＳＩＤＥ／月沙

「璃音と将人を抜いたら私達が最後尾かよ…」

「文句言わない！」

私と勇香はダッシュで海馬コーポレーションに向かっている。

確かに、これじゃあとても追いつけないよね。何か乗り物でもあればいいんだけど…。

D・ガレージは紅刃しか持ってないし、D・ホイールは使えない。
せめて自転車を借りれれば…。

「…ん？何だあいつ？」

勇香が前を見て何かに気づいた。つられて私も前を見て…

「え…？」

思わず立ち止まった。

「おい、どうした？急がねえと…」

勇香がそう言いかけた瞬間、『あいつ』の右腕が黒く染まった。

「…！？勇香、前！」

「は？」

ブワッ！

「なっ！？うわっつ！」

「くっ！」

黒い右腕が伸びて槍のように私達に襲いかかる。私達が何とか飛び退いて回避すると、右腕は引っ込んで元に戻った。

「何だてめえは!?ニュートラルの差し金か！」

「ああ、そうさ。とはいえ、半分私用だがな」

そいつは私を見て憎たらしく笑った。私にとって忘れられない、邪悪な笑み。

「私用だ?」

「お前の連れは１００％言い当てられるんじゃないか?なあ、波星月沙?」

…わかるよ。わざわざ言わなくても、嫌なほどはっきりわかる。

「…いつかまたこうなるとは思ってたけど、できれば二度と会いたくなかったよ。

尾形…！」

尾形駿河（おがた　するが）。私の人生の中で最悪の敵が立ち塞がっていた。

「やはり覚えていたか。そうでなければやりがいがない」

「尾形…って、転生前の月沙を殺したって奴か!?」

「それだけじゃない。私の大切な人達や町までも葬った」

あの惨劇は今でも忘れられない。決して許せない相手が再び目の前にいる。

「私を殺しに来たの？」

「当然。それだけじゃない。そこの小娘はもちろん、他の仲間も全て皆殺しだ！」

「な…正気かてめえは!?」

「正気さ。俺は月沙が憎い。月沙に関わる全ての生命体が憎い。そして殺しの快感を知っている。そこから出る答えは1つしかないだろ？」

「マジかよ…。人間の感性じゃねえ…！」

そう。私に少しでも関わる人間全てを憎み、私に復讐するためなら殺人だろうと何だってやる。それが、あの男…！

「貴様らの後に仲間が2人いるだろ？」

「璃音と将人の事？」

「後から追いついて下手に邪魔をされたら厄介だからな。弥一と加奈美ごと閉じ込めさせてもらった」

「閉じ込めた？」

「こんな風にな」

ブワァァァァァ！

尾形の言葉に応じるように、周囲から黒い何かが噴き出して私達を閉じ込めた。

「これは…！？」

「この闇は簡単に破れない。追ってくる事はできないぞ」

「面倒な事を…！」

「てめえもニュートラルの一員なんだろ！？仲間ごと閉じ込めて何とも思わねえのかよ！？」

「思わんな」

「こいつ…！」

やがて、闇が引っ込んで元に戻った。薄い黒が晴れて、青空の下のビル街がはっきり色づく。

「さあ、デュエルだ！月沙、貴様にありったけの絶望を与えてやる！」

尾形はデュエルディスクを展開させた。私は逃げるわけにはいかない。私が戦わないと、みんなが…。

「…勇香、先に行って」

私はヘアゴムを外して髪を下ろした。これは昔と同じ髪型。転生前はずっと髪を下ろしていた。

「月沙？」

「これは私の戦い。勇香を巻き込んで傷つけるわけにはいかない」

「…そうかい。でも、今回は引き受けられねえな」

「え？」

勇香は私の頼みを無視してデュエルディスクを展開させた。

「あの尾形って野郎、雰囲気がやばすぎる。いくらお前が強くても、1人でどうにかなる相手じゃねえ」

「でも…！」

「あ～、ごちゃごちゃ言うな！協力してあいつをぶっ飛ばすぞ！第一、簡単に逃がしてくれそうにもねえからな」

言われてみれば…。

「…わかった」

私は銃型のデュエルディスクを抜いて装着、展開した。こうなったら、私が傍で勇香を護る！

「やる気になったか。最初のターンは全員攻撃不能、フィールドとライフは共有なし。俺はライフ８０００でデュエル開始し、先攻は貰う」

「構わねえ」

「行くよ」

私が勇香を、みんなを護るんだ！

「さあ、復讐劇の本番だ！」

「「「デュエル！」」」

月沙＆勇香ｖｓ尾形

「俺のターン！モンスターをセット！カードを2枚セットしてターンエンドだ！」

尾形
ＬＰ／８０００
手札／２
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×３

全部リバース…この時点じゃ、どんなデッキかわからない。前と同じ【カオス】だとは限らないし…。

「私のターン！…！（これは…！）」

勇香がはっとした表情を見せる。何を引いたんだろう…？

「（早速使ってみるか！）《ラヴァルのマグマ砲兵》を召喚！」

勇香は引いたカードをそのまま召喚した。両肩に大きなキャノン砲を取りつけた青いモンスターだ。

《ラヴァルのマグマ砲兵》
効果モンスター
星４／炎属性／炎族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ　２００
手札から炎属性モンスター１体を墓地へ送って発動する。
相手ライフに５００ポイントダメージを与える。
この効果は１ターンに２度まで使用できる。

《ラヴァルのマグマ砲兵》　ＡＴＫ／１７００

あれは、フォッタがＤ・ガレージと一緒にくれたカード…！

『ああ、そうそう！これも渡しておくよ』

ボゥン！

フォッタは紅刃にD・ガレージを渡した後、どこからか大きな段ボールを転送してきた。

『君達が使えそうなカードを持ってきたよ』

『カード？』

私は試しに段ボールを開けて、カードの束を取り出してみた。

『！？これって…！』

『とりあえず、天界の方で見つけた分だけ持ってきたよ。他の人の分もあるから、是非とも有効活用してね』

フォッタが持ってきたのは、ネオ童実野シティにすら存在しないカードだった。《ラヴァルのマグマ砲兵》はその内の1枚。

「マグマ砲兵の効果発動！手札の炎属性モンスターを墓地に送る事

で、相手に５００ポイントのダメージを与える！《灼熱工の巨匠カエン》を墓地に送るぜ！マグマ・ショット！」

マグマ砲兵が左肩の砲台から火球を飛ばし、伏せモンスターを通り越して尾形に命中させた。

「ぐぅっ！」

尾形　ＬＰ／８０００→７５００

「この効果は1ターンに2回まで発動できる！《ラヴァルロード・ジャッジメント》を墓地に送り、もう1度５００ポイントのダメージを与える！」

今度は右肩の砲台から火球が発射され、これも尾形に直撃した。

「ぐおっ！」

尾形　ＬＰ／７５００→７０００

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

勇香
ＬＰ／４０００
手札／2
モンスター／《ラヴァルのマグマ砲兵》（ＡＴＫ／１７００）
魔法・罠／リバース×1

最初のターンからダメージを与えられた。幸先はいい。

「私のターン！魔法カード《ワン・フォー・ワン》！手札からモンスターを1体墓地に送り、手札かデッキからレベル1のモンスターを特殊召喚する！デッキから《氷結界の番人ブリズド》を特殊召喚！」

私のフィールドには水色の猛禽類が降り立った。

《氷結界の番人ブリズド》　ＡＴＫ／　３００

「そして永続魔法（アイスカーペット）を発動！1ターンに1度、墓地からレベル4以下の氷結界のモンスターを1体特殊召喚できる！」

《アイスカーペット》
永続魔法（オリジナル）
1ターンに1度、自分の墓地に存在するレベル4以下の「氷結界」と名のついたモンスター1体を特殊召喚できる。

「この効果で、墓地からレベル3の《氷結界の破術師》を特殊召喚！」

青い法衣を着た白い長髪の魔法使い。私のデッキの中でも重要なモンスターだ。

《氷結界の破術師》　ＡＴＫ／　４００

「さらに、《アイス・シンクロン》を召喚！」

氷の体を持つシンクロンが現れる。これで準備が整った。

《アイス・シンクロン》

効果モンスター（チューナー・オリジナル）
星４／水属性／機械族／ＡＴＫ１３００／ＤＥＦ１２００
このモンスターをシンクロ素材としたシンクロモンスターのシンクロ召喚を無効にする事はできない。
このモンスターをシンクロ素材としたシンクロモンスターがカードの効果で破壊され墓地に送られた場合、自分の墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
このカードをシンクロ素材とする場合、水属性モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

《アイス・シンクロン》　ＡＴＫ／１３００

「レベル１《氷結界の番人ブリズド》とレベル３《氷結界の破術師》にレベル４《アイス・シンクロン》をチューニング！」

《アイス・シンクロン》が４つの青い輪になり、その中にブリズドと破術師が飛び込む。

「封印されし英雄の刃（やいば）が、憑き神を従え諸悪を斬る！秘めたる力を解き放て！」

☆１＋☆３＋☆４＝☆８

「シンクロ召喚！振るえ！《氷結界の龍　クトネシル》！」

現れたのは、全身が緑がかった龍だった。下半身は狐のような尾が数本生えている。

《氷結界の龍　クトネシル》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）

星８／水属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ１８５０
水属性チューナー＋「氷結界」と名のついたモンスター２体以上
このカードのシンクロ召喚に成功した時に自分のライフが相手より２０００ポイント以上少ない場合、手札の「氷結界」と名のついたモンスターカードを任意の枚数お互いに確認してからデッキに戻して発動する事ができる。
戻したモンスターの合計レベルと等しくなるように自分の墓地の「氷結界」と名のついたモンスターを任意の枚数表側守備表示で特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターが次の相手ターンのエンドフェイズ時に自分フィールドに表側表示で存在していた場合、自分はこのカードの元々の攻撃力分のダメージを受ける。

《氷結界の龍　クトネシル》　ＡＴＫ／２６００

「クトネシルの効果発動！ライフが相手より２０００以上少ない時にこのモンスターのシンクロ召喚に成功した場合、手札の氷結界のモンスターを任意の枚数デッキに戻す事で、そのモンスターの合計レベルと同じになるように墓地の氷結界のモンスターを特殊召喚できる！」

普通なら発動は難しいけど、今回は相手のライフが８０００、こっちのライフが４０００の状態での変則デュエル。簡単に発動できる。

「レベル７の《氷結界の交霊師》をデッキに戻し、墓地の《アイス・シンクロン》と《氷結界の破術師》を特殊召喚！」

《アイス・シンクロン》　ＡＴＫ／１３００

《氷結界の破術師》　ＡＴＫ／　４００

「レベル３《氷結界の破術師》にレベル４《アイス・シンクロン》をチューニング！封印されし氷の魔銃が、次元の彼方へ想いを放つ！秘めたる力を解き放て！」

☆３＋☆４＝☆７

「シンクロ召喚！銃撃せよ！《氷結界の銃師　リール》！」

猟銃を持った、紅い瞳と青いロングヘアーの女性がクトネシルの横に並んだ。

《氷結界の銃師　リール》
シンクロモンスター
星７／水属性／戦士族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ２２００
水属性チューナー１体＋チューナー以外の水属性モンスター１体以上
相手フィールド上に存在するモンスター１体を選択して発動する。
コイントスを３回行い、その内２回以上が表だった場合、そのモンスターを除外する。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

《氷結界の銃師　リール》　ＡＴＫ／２６００

「リールの効果発動！コイントスを３回行い、その内２回以上が表だった場合、相手モンスター１体を除外する！」

「ほぉ…」

ソリッドビジョンのコインが３つ現れ宙を舞う。結果は…。

「…表は2つ！よって効果発動！その伏せモンスターを除外する！ディメンション・キャノン！」

リールが猟銃を構え、紫色の弾丸を放つ。着弾した相手モンスターはそのまま除外された。除外されたのは…《ダブルコストン》。

《ダブルコストン》
効果モンスター
星４／闇属性／アンデット族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ１６５０
闇属性モンスターを生け贄召喚する場合、このモンスター１体で２体分の生け贄とする事ができる。

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

「その前に俺も伏せカードを使おう！」

「「！」」

「速攻魔法発動！《終焉の焔》！黒焔トークンを2体守備表示で特殊召喚する！」

一つ目の黒い炎のトークンが2体現れた。このタイミングで発動って事は、狙いは上級モンスター？

《黒焔トークン》　ＤＥＦ／　０

《黒焔トークン》　ＤＥＦ／　０

月沙

ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《氷結界の龍　クトネシル》（ＡＴＫ／２６００）《氷結界の銃師　リール》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／《アイスカーペット》リバース×１

《ダブルコストン》は闇属性モンスター2体分のリリースになれる。それに、《黒焔トークン》をリリースしてアドバンス召喚できるのは闇属性モンスターのみ。あいつのデッキは闇属性中心の【アドバンス召喚】？

「俺のターン！罠カード《メタル・リフレクト・スライム》を発動！このカードを守備力３０００のモンスターとして扱い、自分フィールド上に特殊召喚する！所謂罠モンスターだ！」

全身が鋼のスライムが現れた。日光を浴びて嫌にぎらついている。

《メタル・リフレクト・スライム》　ＤＥＦ／３０００

「ククク…さて、貴様らに面白いものを見せてやろう」

「面白いもの？」

「俺は《黒焔トークン》2体と《メタル・リフレクト・スライム》をリリースする！」

3体のモンスターの下に巨大な黒い穴が発生し、モンスター達が光になって中に入り込んでいく。

「3体のリリース！？」

「何だよ、あの不気味な光景は…？」

闇属性で3体のリリースを必要とするモンスターは…確か…。

「……っ！？まさか…！？」

「気づいたようだな！だが、もう遅い！」

尾形が手札から抜き取ったカードはどす黒い闇を纏い始め、そのままデュエルディスクに叩きつけられた。

「現れよ！《邪神イレイザー》！！」

穴の中から銀色の頭が見え、徐々に這い出てくる。黒い翼が広がる。龍のような姿の悪魔が、私達の前に現れた。

《邪神イレイザー》
効果モンスター
星１０／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　？／ＤＥＦ　？
このカードは特殊召喚できない。
自分フィールド上に存在するモンスター3体を生け贄に捧げた場合

のみ通常召喚する事ができる。
このカードの攻撃力・守備力は、相手フィールド上に存在するカードの枚数×１０００ポイントの数値になる。
このカードが破壊され墓地へ送られた時、フィールド上のカードを全て破壊する。
自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを破壊する事ができる。

《邪神イレイザー》　ＡＴＫ／　？

「な…何だこのモンスターは…！？」

禍々しいオーラを全身から発している邪神を目の前に、私達は思わず戦慄した。

「『三邪神』…」

「『三邪神』？何か知ってるのか？」

「この世界じゃないけど…こことは違う平行世界で、三幻神の抑止力として作られたカードだよ」

「三幻神って…オシリス・オベリスク・ラーの事か？」

「そう。そして、あまりに強大で邪悪な力を持つせいで、ペガサスさんがカードを作成しなかったモンスター達でもあるの」

「デュエルモンスターズの生みの親が作成を躊躇うカード…！？しかも三邪神って事は、後２体も別の邪神がいるのかよ！？」

「その通り！どうだ、貴様らを滅ぼすのに相応しいモンスターだろう？」

まさか邪神を使ってくるなんて…！？でも、何で尾形がそのカードを…？

「どうして貴様がそのカードを…？」

「原作などの知識を元にして作り上げたカードだ。最も、イレイザーとドレッド・ルートは少々不完全だがな。だが、俺にはサイコデュエリストとしての力がある！これだけのモンスターだ、攻撃を食らったらただでは済まないぞ！」

確かに、邪神の攻撃が実体化されたら相当な威力になる。直接攻撃なんてされたら…。

「お喋りが過ぎたな。イレイザーの攻撃力と守備力は、相手フィールド上のカード１枚につき１０００ポイントアップする！」

《邪神イレイザー》　ＡＴＫ／　？↓６０００

「攻撃力６０００…！？」

「バトルだ！《邪神イレイザー》で《氷結界の銃師　リール》を攻撃！ダイジェスティブ・ブレス！」

イレイザーが闇の息吹きを放つ。やっぱり、狙いは私…！

「カウンター罠《氷結界の防御壁》！私の氷結界のモンスターが攻撃された時、その攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる！」

《氷結界の防御壁》
カウンター罠（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在する「氷結界」と名のついたモンスターが攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。
相手モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。
その後、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

雪の結晶のような巨大な盾が現れて、イレイザーの攻撃を全部受け切った。それと同時にひび割れ崩れ去っていく。

「…そして、私はカードを1枚ドローする。私の場のカードが1枚減った事で、イレイザーの攻撃力も下がる」

《邪神イレイザー》　ＬＰ／６０００→５０００

「一時凌ぎか…。だが、それがいつまで持つかな？ターンエンドだ」

尾形
ＬＰ／７０００
手札／２
モンスター／《邪神イレイザー》（ＡＴＫ／５０００）
魔法・罠／なし

「とんでもねえモンスターを呼び出しやがって…。私のターン！」

「勇香、気をつけて。イレイザーは破壊されて墓地に送られた時にフィールド上のカードを全て破壊する効果を持ってるよ」

「マジかよ…！？」

「でも、このターンで破壊できるなら私に構わずにやって！」

《アイス・シンクロン》には、まだ隠された効果がある。それがあれば何とか立て直せる。

「わぁったよ。しゃあねえ、緊急事態だ。チューナーモンスター《ラヴァル炎樹海の妖女》を召喚！」

『きゃっほぉい！』

勇香のパートナー、ロコナが元気よく飛び出した。場違いな明るさに少し頬が緩んだ。

《ラヴァル炎樹海の妖女》　ＡＴＫ／　３００

『ユウカ、私の出番来たの？』

「（ああ。早速働いてもらうぜ）レベル４《ラヴァルのマグマ砲兵》にレベル２《ラヴァル炎樹海の妖女》をチューニング！」

『たぁ～！』

ロコナが２つの赤い輪になり、マグマ砲兵が４つの星になり、共鳴して光の柱になる。

「紅（あか）と蒼（あお）の双炎が、戦士の魂と共鳴する！覚悟の炎よ、燃え上がれ！」

☆４＋☆２＝☆６

「シンクロ召喚！焼き払え！《ラヴァル・グレイター》！」

光の柱の中から、両手に赤と青の炎を灯したラヴァルの戦士が飛び出した。

《ラヴァル・グレイター》　ＡＴＫ／２４００

「《ラヴァル・グレイター》がシンクロ召喚に成功した時、手札を１枚墓地に送る！さらに墓地の《ラヴァル炎樹海の妖女》の効果発動！フィールド上から墓地に送られたターンの間、私の場のラヴァルはエンドフェイズ時まで墓地のラヴァル１体につき攻撃力が２００ポイントアップする！墓地のラヴァルは４体！８００ポイントアップだ！」

《ラヴァル・グレイター》　ＡＴＫ／２４００→３２００

「そしてリバースカードオープン！罠カード《ファイア・クラッシュ》！炎属性のシンクロモンスターがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上のカードを１枚破壊する！」

《ファイア・クラッシュ》
通常罠（オリジナル）
自分が炎属性シンクロモンスターのシンクロ召喚に成功した場合発動する事ができる。
相手フィールド上のカード１枚を破壊する。
その後、自分のデッキの上からカードを１枚墓地へ送る。

「対象は当然《邪神イレイザー》だ！」

ソリッドビジョンのカードから大量の炎が発射され、イレイザーを焼き尽くす。すると、イレイザーは苦悶の声を上げながら力を溜め始めた。

「馬鹿め！忠告を忘れたか！《邪神イレイザー》が破壊された時、フィールド上のカードを全て破壊する！」

イレイザーが全身から闇の波動を放ち、フィールドを蹂躙した。コンクリートが抉れ、木が折れ、効果ダメージはないのに私達までダメージを受けているような気さえする。

「う…っ！」

「（くっ…何つーエネルギーだ…！）んなこたわかってら！《ラヴァル・グレイター》がカードの効果で破壊される時、代わりに墓地のラヴァルを1体除外できんだよ！《ラヴァル炎樹海の妖女》を除外するぜ！」

グレイターは2色の炎を盾のように展開して闇の波動を防いだ。そして、グレイター以外のカードが全て消え去った。

「墓地のラヴァルが減った事で攻撃力は下がっちまうが、フィールドに残れりゃ十分だ！」

《ラヴァル・グレイター》　ＡＴＫ／３２００→３０００

「そして、《ファイア・クラッシュ》のもう1つの効果でデッキトップからカードを1枚墓地に送る！」

「こっちも行くよ！墓地の《アイス・シンクロン》の効果発動！こ

のモンスターを素材にしたシンクロモンスターがカードの効果で破壊された時、墓地からこのモンスターを特殊召喚する！」

再び氷のシンクロンが私のフィールドに現れた。これで被害は軽減できた。

《アイス・シンクロン》　ＡＴＫ／１３００

「小癪な…！」

「バトル！《ラヴァル・グレイター》でダイレクトアタック！ダブルアーム・ファイア！」

ロコナの力で強化された2色の炎が尾形を襲う。特に妨害される事なく直撃した。

「ぐわぁぁぁぁ！」

尾形　ＬＰ／７０００→４０００

「よし！大ダメージを与えられた！」

「どうだ！邪神なんて目じゃねえぜ！」

「ちぃぃぃ！貴様ぁぁ！！」

「言ってろ！カードを1枚セットしてターンエンド！エンドフェイズ時に《ラヴァル・グレイター》の攻撃力は元に戻る！」

《ラヴァル・グレイター》　ＡＴＫ／３０００→２４００

勇香
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《ラヴァル・グレイター》（ＡＴＫ／２４００）
魔法・罠／リバース×１

おかしい…。何か妙に上手く行きすぎてる。このまま終わるとは思えない。

「私のターン！」

引いたのは…丁度いい。

「カードを1枚伏せ、魔法カード《オーロラ・ドロー》を発動！手札がこのカードだけの時、カードを2枚ドローする！」

《オーロラ・ドロー》
通常魔法（アニメオリジナル）
手札がこのカードしかない場合に発動する事ができる。
デッキからカードを2枚ドローする。

「そして、《氷結界の御庭番》を召喚！」

長剣を2本携えた青い装束の戦士。リンドウと同じ姿だ。

《氷結界の御庭番》　ＡＴＫ／　１００

「レベル2《氷結界の御庭番》にレベル4《アイス・シンクロン》をチューニング！封印されし氷の魔銃が、冷気を纏いし魔弾を放つ

！秘めたる力を解き放て！」

☆２＋☆４＝☆６

「シンクロ召喚！銃撃せよ！《氷結界の銃師　ブロック》！」

猟銃を持った、青い髪の寡黙な男が現れる。リールとは別の銃師だ。

《氷結界の銃師　ブロック》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星６／水属性／戦士族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１２００
水属性チューナー１体＋チューナー以外の水属性モンスター１体以上
コイントスを３回行う。
その内２回以上が表だった場合、相手フィールド上に表側表示で存在するカード１枚を選択して裏側表示でセットする。
この効果は１ターンに１度だけ自分のメインフェイズに使用する事ができる。

《氷結界の銃師　ブロック》　ＡＴＫ／２４００

「バトル！《氷結界の銃師　ブロック》でダイレクトアタック！アイスウィンド・ショット！」

ブロックが放った弾丸が吹雪を纏い直進する。これが通れば…！

「手札の《バトルフェーダー》の効果発動！直接攻撃をされた時、手札のこのカードを特殊召喚してバトルフェイズを終了させる！」

尾形の前に振り子のようなモンスターが現れて鐘を鳴らし、ブロ

ックの弾丸を消滅させた。

《バトルフェーダー》　ＡＴＫ／　０

「《バトルフェーダー》が手札にあったのか…」

「さらに手札の《ダーク・アリゲーター》の効果発動！自分のレベル４以下の闇属性モンスターが特殊召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚する！」

真っ黒で小さなワニが現れた。赤い目が私達を睨む。

《ダーク・アリゲーター》
効果モンスター（オリジナル）
星２／闇属性／爬虫類族／ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ１２００
自分がレベル４以下の闇属性モンスターの特殊召喚に成功した場合、このカードを特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚に成功した時、デッキからカードを３枚ドローし、その後手札からカードを２枚捨てる。

《ダーク・アリゲーター》　ＤＥＦ／１２００

「この効果で特殊召喚に成功した時、カードを３枚ドローして２枚捨てる！」

「…カードを１枚セットしてターンエンド」

月沙
ＬＰ／４０００
手札／１

モンスター／《氷結界の銃師　ブロック》（ＡＴＫ／２４００）
魔法・罠／リバース×１

「ククク…おかげでモンスターを2体もフィールドに出せた。感謝するよ」

「少しでも多くリリース要員を揃えるために、あえて《ラヴァル・グレイター》の攻撃を止めなかったってわけか？」

「当たりだ。邪神は3体のリリースを必要とする貪欲なモンスター。効率よくリリースに必要なモンスターを呼び出す戦術が必要不可欠なんだよ」

どうりで簡単に攻撃が通ったわけだ。おまけに手札と墓地のカードも増えた。多分次のターンで…。

「俺のターン！墓地の《黄泉ガエル》の効果発動！」

「何！？」

「《黄泉ガエル》！？」

「スタンバイフェイズ時，自分フィールド上に魔法・罠カードが存在しない場合、このカードを墓地から特殊召喚できる！」

天使の輪と翼、黒い斑模様を持つ黄色のカエルが復活した。あれはリリースやシンクロで無限コストとして活用されてきたモンスター…！

《黄泉ガエル》

効果モンスター
星１／水属性／水族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　１００
自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、自分フィールド上に魔法・罠カードが存在しない場合、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
この効果は自分フィールド上に「黄泉ガエル」が表側表示で存在する場合は発動できない。

《黄泉ガエル》　ＡＴＫ／　１００

「3体のリリースが揃った…」

「《ダーク・アリゲーター》の効果で墓地に送ってやがったのか。おまけにまだ通常召喚をしてねえ…」

「さあ、2体目の邪神を見せてやろう！《バトルフェーダー》《ダーク・アリゲーター》《黄泉ガエル》の3体をリリース！」

また黒い大穴が出現し、3体のモンスターが強い重力に引かれて沈んでいく。

「出でよ！《邪神ドレッド・ルート》！！」

穴から片腕が伸びて地面に手をつき、片腕の腕力に任せて穴から這い上がる。現れたのは、白い髑髏の鎧を身につけた緑色の巨大な悪魔だ。

《邪神ドレッド・ルート》
効果モンスター
星１０／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ４０００／ＤＥＦ４０００
このカードは特殊召喚できない。
自分フィールド上に存在するモンスター3体を生け贄に捧げた場合のみ通常召喚する事ができる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカード以外のフィールド上のモンスターの攻撃力・守備力は半分になる。

《邪神ドレッド・ルート》　ＡＴＫ／４０００

「ドレッド・ルート…！？」

「余計邪悪っぽいモンスターだな…」

「まずい…」

「は？」

「月沙は知っているようだな。ドレッド・ルートがフィールド上に存在する限り、ドレッド・ルート以外のモンスターの攻撃力と守備力は全て半分になる！」

「はあ！？」

《ラヴァル・グレイター》　ＡＴＫ／２４００→１２００
《氷結界の銃師　ブロック》　ＡＴＫ／２４００→１２００

攻撃力と守備力が半分。対して、ドレッド・ルートの攻撃力と守備力は４０００。戦闘破壊はまずできない。

「魔法カード《邪神の憤怒》を発動！このターンの間、邪神は全てのモンスターを攻撃する事ができる！」

「え！？」

「何！？」

《邪神の憤怒》
通常魔法（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在する「邪神」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。
このターンのエンドフェイズ時まで、選択したモンスターは相手フィールド上の全てのモンスターに１回ずつ攻撃をする事ができる。
このターンのバトルフェイズ終了時、選択したモンスターが戦闘破壊したモンスター１体につき１枚デッキからカードをドローする。

攻撃力４０００の全体攻撃！？邪神でそんな事が…！？

「行け！ドレッド・ルートで《氷結界の銃師　ブロック》と《ラヴァル・グレイター》に攻撃！フィアーズノックダウン！」

ドレッド・ルートがブロックとグレイターを、黒い闇の波動を込めた拳で間髪入れずに殴り飛ばす。それだけじゃなく、闇の波動が

2体を貫通して私達まで飲み込んだ。

「うあぁあぁぁぁぁぁぁ！！？」

「がああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

月沙　ＬＰ／４０００→１２００

勇香　ＬＰ／４０００→１２００

「うぅ…」

「ぐ…つぅ…」

予想外の出来事に反応できず、ろくに防御もできないままもろに食らってしまった。私は尻餅をつき、勇香は片膝をついて激痛を堪える。

「バトルフェイズ終了時、邪神が戦闘破壊したモンスターの数までドローする。２枚ドローだ。カードを２枚セットしてターンエンド」

尾形
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《邪神ドレッド・ルート》（ＡＴＫ／４０００）
魔法・罠／リバース×２

「超過ダメージでさえこの威力かよ…」

「紛い物とはいえ、ここまでの力を持ってるなんて…」

勇香はふらつきながらも立ち上がった。さすが打たれ強いだけの事はある。私も何とか立ち上がる。

「どうだ!?痛いか!?恐怖しろ!己の無力さを噛み締めろ!俺の復讐をもっと楽しいものにしろ!邪神の前ではただひれ伏す他に道はない!恐怖と絶望と後悔を味わうがいい!ハハハハハハハハハ!!」

勝ち誇って高笑いする残忍な復讐者を、私達はただ睨みつけた。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第６４話　復讐者はかなりしつこい奴もいる（後書き）

☆今回のキーカード☆

鬼柳「よお、みんな！『今回のキーカード』の時間だ！司会は３人！この俺、鬼柳京介と…」

ニコ「ニコとウェストでお送りします」

ウェスト「あ、台詞取らないでよ！」

ニコ「しょうがないでしょ？私達は名前が短いんだから」

鬼柳「さて、本編では転生前の月沙を殺した野郎がまた出てきやがったな」

ウェスト「三邪神なんていうやばいカードを使うなんて…」

ニコ「しかもまだ１体がデッキに残っているわ。大丈夫かしら…？」

ウェスト「大丈夫だよ！月沙姉ちゃんは１度あいつに勝ってるし、勇香姉ちゃんはチーム・サティスファクションの一員だ！絶対勝つよ！」

鬼柳「そうだな。ここで負けたら勇香と月沙はもちろん、紅刃達まで危険に晒されちまう！勝って満足させてくれよ！」

ニコ「今は２人を信じましょう。それでは、カード考察に入りまし

ょうか」

鬼柳「よし！今回紹介するのは、尾形が使った三邪神の１体《邪神イレイザー》だ！」

《邪神イレイザー》
効果モンスター
星１０／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　？／ＤＥＦ　？
このカードは特殊召喚できない。
自分フィールド上に存在するモンスター3体を生け贄に捧げた場合のみ通常召喚する事ができる。
このカードの攻撃力・守備力は、相手フィールド上に存在するカードの枚数×１０００ポイントの数値になる。
このカードが破壊され墓地へ送られた時、フィールド上のカードを全て破壊する。
自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを破壊する事ができる。

鬼柳「どんなにレベルを下げようと、必ず3体のリリースが必要になるモンスターだ。特殊召喚もできないから出すのは少し難しいな」

ニコ「攻撃力と守備力は相手フィールド上に存在するカードの枚数で決まります。１枚につき１０００ポイントアップします」

ウェスト「相手のカードを増やすように動けば、高い攻撃力でガンガン攻めていけるよ！」

鬼柳「もう１つ厄介なのが、全体除去だ。破壊されて墓地に送られるだけで、敵味方問わずフィールド上のカードを全て道連れにしちまう」

ウェスト「しかも、自分自身を破壊する効果を持ってるから自分からも発動できちゃうんだ」

ニコ「自分のモンスターを破壊して『フィールド上での攻撃力』分ライフを回復する《デストラクト・ポーション》とも相性がいいですよ。ライフを大幅に回復した上でフィールド上のカードを一掃できます」

鬼柳「破壊を恐れる心配がないから、安心して攻撃ができるぜ。ただ、《次元幽閉》とかの除外系のカードには気をつけろよ」

ニコ「墓地に送られずに除外されたら除去効果を発動できませんからね。墓地に送られるカードを墓地に置かずに直接除外する《次元の裂け目》や《マクロコスモス》にも注意してください」

鬼柳「こんなところだな。今回はここまでだ」

ニコ「これからどうなるのかしら？強大な敵にみんな苦戦しているようだし…」

ウェスト「勇香姉ちゃん達が負けるもんか！みんな頑張れ！」

鬼柳「感想はいつでも待ってるぜ！次回もよろしくな！俺達の満足はこれからだ！」

ーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

今回月沙が使用した《アイスカーペット》はアストラルさん、《アイス・シンクロン》はＢＲＡＶＥさん、《氷結界の龍　クトネシル》は戎鴛さん、《氷結界の銃師　リール》《氷結界の銃師　ブロック》はＯＮＥさん、《氷結界の防御壁》はユタさんが投稿してくださったオリカです。皆さん、ありがとうございました。

最近、自作のオリカでドロー関係の物が激増してきているような気が…。手札の配分って難しいです。

次回は紅刃ｖｓシュルクの続きです。楽しみにしててください。

では、また次回！

第６５話　『捨てる覚悟』と『護る覚悟』はまた別のもの（前書き）

☆精霊の呟き☆

ヒジュラ『月沙達のデュエルが気になるだろうが、今回は紅刃ｖｓシュルクの続きだ』

スイレン『不利な状況に追い込まれた紅刃様は、一体どんな戦術で対抗するのでしょうか？』

ウィン『それは見てからのお楽しみだよ』

ガルド『ピィーッ』

ヒジュラ『んじゃ、第６５話スタートだ！』

スイレン『あ、この台詞で始めてください！』←メモ渡し

ヒジュラ『は？…って、また違う台詞じゃねえか。ったく…。ゴホン！…俺とデュエルしろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！』

ウィン『はい！それじゃ、始まるよ！』

ガルド『ピィーッ！』

ヒジュラ『これってわかる奴いるのか…？』

第６５話　『捨てる覚悟』と『護る覚悟』はまた別のもの

ＳＩＤＥ／ディヴァイン

…よし、誰もいないな…。廊下の角の壁に背中から張りつき、社員の有無を確認した。

わたしは現在、海馬コーポレーション本社ビルの内部にいる。≪緊急テレポート≫で潜入したはいいが、石板の在処がわからず探索しているところだ。

一応、顔をグラサンとマスクで隠してフード付きのコートを着ている。もちろんフードもきちんと被っている。某油女一族の忍っぽい格好だと思ってもらって構わない。ここに来る前に１度レッドの仮設キャンプ場に戻って取ってきた。

これでもわたしはアカデミア本校の教師だ。オーナーが社長を勤めるこんな超有名な会社の本部に不法侵入した事がばれたら、ほぼ間違いなく首が飛ぶ。故に変装は絶対条件なのだ。しかし…。

「さすがは海馬コーポレーション。監視カメラを掻い潜るだけでも一苦労だ」

「他にも防犯機能がついている可能性があるな。面倒なこった」

「赤外線が張られていたらたまったものではないな…。石板はどこにある？」

「さっさと石板を探し出して脱出しねえと…」

「「ん？」」

後ろから聞こえる言葉と普通に会話している違和感に気づき、振り返った。すると…。

「「……誰だ？」」

わたしとほとんど同じ格好をした人物がいた。フードの中から赤茶色の髪が見える。

「…あ、そちらから自己紹介をどうぞ」

「お、おう。俺はギュラ・メチュート。ニュートラルの幹部やってんだ。お前は？」

「わたしはディヴァイン。デュエルアカデミアの教師だ。お宅はなぜこんな所に？」

「いや、石板を探してんだが、どうも見つからなくてよ…」

「おや、奇遇だね。わたしも石板を…ん？」

ここで違和感に気づいた。この人今何て言った？石板？

あれ？待てよ？ギュラってどこかで聞いたような…。

「（ん？ディヴァイン？確かどっかで…）…って！？」

「「よく考えたら敵じゃない（ねえ）か！？」」

敵と認識するや否や、お互いに後ろへ飛び退いた。いつの間に敵と普通に話していたとは…。

「俺の方はまがいもんとはいえ、同じサイコパワーを使う奴どうしだ。《緊急テレポート》を使うって発想は同じらしいな」

「石板も大切だが、こうして出くわしたからには争わざるを得ない…」

「まあいい。デュエルだ！ここでてめえを倒して…」

「ん？誰だ君達は？」

今にも戦闘が勃発しそうなこの状況で、水を差す者がいた。

黒いグラサンと黒いスーツ…この会社の社員らしい。

「「……」」

ギュラもわたしも大いに焦った。冷や汗だくだくの状態だ。考えてもみたまえ。グラサンマスクにフード付きコートの男2人が一流会社の廊下で戦闘体勢のまま対峙している。これで怪しいと思わない一般社員がいるだろうか？

グラサン以外共通点を見出だせない我々に向けられるのは、怪しむ視線のみ。とにかくまずい。非常にまずい。

「ど、どうも～…」

「…とりあえず、不法侵入と見なしてもいいよな?」

「レッツ、エスケェェエェエエエェェェェェェェプ!!!!」

「うおぉっ!?」

反射的に回れ右をして、ギュラの腕を掴んで全力疾走を始めた。気が動転しておかしな言葉を叫んでしまったが、気にしている場合ではない。

「いきなり引っ張んじゃねえ!」

「すまない!だが一時休戦だ!まずは追っ手を振り切る!話はそれからだ!」

「ちっ、事態が事態だ!話は乗らせてもらうぜ!」

ビーッ、ビーッ

《我が社に不法侵入者が出現!直ちに捕獲せよ!我が社に不法侵入者が出現!直ちに捕獲せよ!》

「「うおおぉぉぉぉぉぉぉぉ!!?」」

社内アナウンスへの情報伝達早っ!?さすが海馬コーポレーション!

いきなりの展開に慌てていたせいで、《緊急テレポート》で一旦脱出するべきだという事に気づいたのは、それからしばらくした後

だった。

ＳＩＤＥ／紅刃

２台のＤ・ホイールが、空中に浮かぶ白い光のサーキットを走る。フィールドの状況は…俺が不利。

シュルク
ＬＰ／４０００
ＳＰＣ／０
手札／２
モンスター／《魔轟神レイジオン》（ＡＴＫ／２３００）《魔轟神獣ユニコール》（ＡＴＫ／２３００）《魔轟神レヴュアタン》（ＡＴＫ／３０００）
魔法・罠／リバース×２

紅刃
ＬＰ／３１００
ＳＰＣ／３
手札／２
モンスター／《神聖なる球体》（ＤＥＦ／　５００）
魔法・罠／《隠された聖域》リバース×２

手札が同じにならなければ、ユニコールの効果が適用される事はない。真っ先にあいつを倒す！

「俺のターン！」

紅刃　ＬＰ／３１００　ＳＰＣ／３→４

シュルク　ＬＰ／４０００　ＳＰＣ／０→１

「手札・フィールド上・墓地から代行者を除外する事で、こいつを手札から特殊召喚できる！《創造の代行者　ヴィーナス》を除外して、《マスター・ヒュペリオン》を特殊召喚！」

炎の翼を広げ、代行者を束ねる者が空に羽ばたいた。俺のエースの１体だ。

《マスター・ヒュペリオン》　ＡＴＫ／２７００

「カードを１枚セット！これで俺の手札は１枚、お前の手札は２枚！ユニコールの効果は適用されない！」

「ちっ…！」

「《マスター・ヒュペリオン》の効果発動！墓地の天使族モンスターを除外する事で、相手フィールド上のカードを１枚破壊する！《感情の代行者　ウラヌス》を除外して、ユニコールを破壊！ソーラー・プロミネンス！」

『ブルッ！？』

ヒュペリオンが左手から光線を放ち、ユニコールを焼き尽くして破壊した。これで一先ず安心だな。

「く…ユニコール…」

「除外された《感情の代行者　ウラヌス》の効果発動！こいつが除外された時、俺のフィールドに特殊召喚する！」

白銀の長髪と黄色の瞳を持つ、全体的に白い少女の代行者が現れた。

《感情の代行者　ウラヌス》
効果モンスター（チューナー・オリジナル）
星１／光属性／天使族／ＡＴＫ　５００／ＤＥＦ１０００
このカードが自分の手札・フィールド上・墓地から除外された時、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果で特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「代行者」と名のついたモンスター１体を手札に加える事ができる。
フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、代わりに「マスター・ヒュペリオン」１体を手札に加える事ができる。

《感情の代行者　ウラヌス》　ＤＥＦ／１０００

「この効果でウラヌスが特殊召喚された時、墓地の代行者を手札に戻す事ができる！《調和の代行者　ネプチューン》を手札に！さらに、俺のフィールド上に《天空の聖域》がある時、《マスター・ヒュペリオン》は効果を２回発動できる！」

《隠された聖域》は《天空の聖域》としても扱う。条件は満たしているから大丈夫だ。

「《神聖なる球体》を除外して、《魔轟神レヴュアタン》を破壊す

る！ソーラー・プロミネンス・セカンド！」

今度は右手から火炎放射を放ち、レヴュアタンを玉座ごと焼き払う。

「レヴュアタンの効果発動！破壊され墓地に送られた時、墓地の魔轟神を3体まで手札に加える！」

なっ…3体も回収！？また手札コストで厄介な効果を使われるのはまずい！魔轟神相手に使うのは少し危険だけど、やるしかねえ！

「させるか！カウンター罠《神の忠告》！俺のフィールドに天使族モンスターのみが存在する時、ライフを８００払う事で魔法かモンスター効果を無効にして破壊する！」

《神の忠告》
カウンター罠（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが天使族のみの場合発動する事ができる。
ライフを８００支払い魔法・モンスター効果の発動を無効にし破壊する。
その後、お互いのプレイヤーはカードを2枚ドローし手札を1枚捨てる。
また、墓地のこのカードを除外する事で1度だけカウンター罠を手札から発動する事ができる。

紅刃　ＬＰ／３１００→２３００

「ちっ…」

「そして、互いにカードを2枚ドローして手札を1枚捨てる！」

「…発動させる効果はない。続けろ」

何もなかったか。賭けて正解だったみたいだな。

「そうか。なら、行くぜ！手札の《冥王竜ヴァンダルギオン》の効果発動！」

「ヴァンダルギオンだと！？」

「カウンター罠で効果を無効にした時、こいつを手札から特殊召喚する！」

上空に黒い大穴が出現し、中から龍の姿になったロディスが飛び出した。

《冥王竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／２８００

「ヴァンダルギオンの効果発動！モンスター効果を無効にして特殊召喚された時、自分の墓地からモンスターを1体特殊召喚する！《ライトエンド・ドラゴン》を蘇生させる！リボーン・オブ・ザ・ビヨンド！」

大穴から光が溢れ、穴が閉じる前にロディスに続けてライトエンドも出てきた。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

『今は我らが有利だが…油断はするな』

「わかってら！バトル！《マスター・ヒュペリオン》で《魔轟神レイジオン》を攻撃！アポロヌス・デプティー！」

ヒュペリオンが両手で極太の火炎を放出し、レイジオンを焼き払った。

「っ…！」

シュルク　ＬＰ／４０００→３６００

「《ライトエンド・ドラゴン》でダイレクトアタック！シャイニング・サプリメイション！」

ライトエンドが光のブレスを放ち、シュルクに命中。今度こそ確実にダメージを与えた。

「ぐあぁぁっ！く…！」

シュルク　ＬＰ／３６００→１０００

「《冥王竜ヴァンダルギオン》でダイレクトアタック！冥王葬送！」

『食らうがいい！』

ロディスが口から黒い光線をぶっ放す。いけるか…？

「これ以上は好きにさせない！罠カード《轟きの呼び声》！墓地の魔轟神を１体特殊召喚する！」

《轟きの呼び声》
通常罠（オリジナル）
自分の墓地に存在する「魔轟神」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターは、このターンのエンドフェイズ時まで破壊されない。
このカードを発動した次の自分のドローフェイズをスキップする。

「《魔轟神レイジオン》を守備表示で特殊召喚！」

《魔轟神レイジオン》　ＤＥＦ／１８００

「この効果で特殊召喚したモンスターは、このターンの間破壊されない。ただし、俺は次のドローフェイズをスキップしなければならないがな」

「要するに、攻撃するだけ無駄か…」

ロディスの光線はレイジオンに届く前に消滅した。

『妙だな。なぜレヴュアタンを蘇生させなかった？我らを上回る攻撃力と破壊された時の回収効果を持つモンスターと、攻撃力が《セラフィム・ギフター》にも届かない通常モンスター同然のレイジオンでは、比べるまでもないはずだが…』

言われてみればそうだ。レヴュアタンじゃなくても、ユニコールを蘇生させた方がまだ反撃しやすい。何でレイジオンを…？

「今にわかる」

「…？ターンエンドだ」

紅刃
ＬＰ／２３００
ＳＰＣ／４
手札／２
モンスター／《神聖なる球体》（ＤＥＦ／　５００）《マスター・ヒュペリオン》（ＡＴＫ／２７００）《感情の代行者　ウラヌス》（ＤＥＦ／１０００）《冥王竜ヴァンダルギオン》（ＡＴＫ／２８００）《ライトエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／《隠された聖域》リバース×３

「俺のターン！《轟きの呼び声》の効果でドローフェイズはスキップされる」

紅刃　ＬＰ／２３００　ＳＰＣ／４→５

シュルク　ＬＰ／１０００　ＳＰＣ／１→２

「永続罠《強化蘇生》を発動！レベル４以下のモンスターを１体墓地から特殊召喚してこのカードを装備し、攻撃力を１００ポイント、レベルを１つアップさせる！」

《強化蘇生》
永続罠　（ＴＦ５オリジナル）
自分の墓地に存在するレベル４以下のモンスター１体を選択して特殊召喚する。
この効果で特殊召喚されたモンスターのレベルは１つ上がり、効果は無効化される。
このカードがフィールド上に存在しなくなったとき、そのモンスタ

ーを破壊する。
そのモンスターがフィールドから離れた時このカードを破壊する。
自分のスタンバイフェイズ毎に自分は１０００ポイントのダメージを受ける。

「俺が選ぶのは、《魔轟神獣ユニコール》だ！」

ユニコールがまたコースに現れ、シュルクと並走し始めた。

《魔轟神獣ユニコール》　ＡＴＫ／２３００→２４００　☆４→５

「ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。そして、手札の《魔轟神ミーズトージ》の効果発動！このモンスターを手札から墓地へ送る事で、フィールド上の魔轟神１体をチューナーにする！」

《魔轟神ミーズトージ》
チューナー（効果モンスター）
星２／光属性／悪魔族／ＡＴＫ　４００／ＤＥＦ　２００
このカードを手札から墓地へ送り、自分フィールド上に表側表示で存在する「魔轟神」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターはフィールド上に表側表示で存在する限りチューナーとして扱う。

「俺はレイジオンをチューナーにする！」

レイジオンをチューナーに？一体何を…？

「紅刃。お前は俺の予想を超えた強さを持っている。それは認めよ

う」

「…そりゃどうも」

「故に、そろそろ見せてやろう。俺の切り札を」

「切り札？」

そう宣言した後、シュルクのD・ホイールのスピードが上がった。どんどん俺達を突き放し加速していく。

…待てよ？加速？それにあいつのフィールドは…。

「……っ！あいつまさか…！？」

「気づいたか！レベル5となったシンクロモンスター《魔轟神獣ユニコール》にレベル5、シンクロチューナー《魔轟神レイジオン》をチューニング！」

レイジオンが変化した5つの巨大な輪を潜り、さらに加速する。

「目覚めし神龍、神話の欠片、光の世にて暗天に翔ぶ！永久（とわ）の果てに蘇れ！」

☆5＋☆5＝☆10

「アクセルシンクロ！」

瞬間、シュルクとユニコールがコースから消えた。

「マジかよ…」

そして、後ろから異空間の穴が開き、シュルクと1体のモンスターが飛び出した。

「復活せよ！《魔轟神龍ウロボロス》！！」

かなり長くでかい体が空を飛ぶ。金と黒の混じった6枚の翼が天に晒される。四肢の関節部分に棘のついた鎧を装備し、頭に赤と黒の冠を戴いた龍が、ユニコールに代わってコースを前進している。

《魔轟神龍ウロボロス》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星10／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３６００／ＤＥＦ２４００
「魔轟神」と名のついたシンクロモンスターのチューナー＋「魔轟神」と名のついたチューナー以外のシンクロモンスター
以下の効果をそれぞれ1ターンに1度ずつ使用できる。
●手札を任意の枚数捨てる事で、デッキから「魔轟神」と名のついたモンスターを捨てた枚数分だけ手札に加える。
●自分の墓地に存在する「魔轟神」と名のついたモンスター3体をデッキに戻す事で、このカードはエンドフェイズ時まで相手のモンスター効果を受けない。
この効果は相手ターンでも発動する事ができる。
●相手ターンに1度、自分の墓地に存在する「魔轟神」と名のついたモンスター1体をゲームから除外する事で、フィールド上に表側表示で存在するこのカードをゲームから除外する。
次のスタンバイフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

《魔轟神龍ウロボロス》　ＡＴＫ／３６００

『これがシュルクのアクセルシンクロモンスターか…！』

「お前、アクセルシンクロを使えるのか！？」

「見ての通りだ。ウロボロスの効果発動！手札を任意の枚数捨てる事で、その分だけデッキから魔轟神を手札に加える事ができる！俺は手札を1枚捨て、《魔轟神グリムロ》を手札に加える！そしてグリムロの効果発動！フィールド上に魔轟神が存在する時、手札からこのモンスターを墓地に捨てる事でデッキから魔轟神を1体手札に加える！」

《魔轟神グリムロ》
効果モンスター
星４／光属性／悪魔族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ１０００
自分フィールド上に「魔轟神」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、手札からこのカードを墓地へ送る事で自分のデッキから「魔轟神グリムロ」以外の「魔轟神」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

「俺は3体目の《魔轟神クルス》を手札に！そして墓地の《魔轟神クシャノ》の効果発動！手札の魔轟神を1体墓地に捨てる事で、墓地からこのモンスターを手札に戻す！」

《魔轟神クシャノ》
チューナー（効果モンスター）
星３／光属性／悪魔族／ＡＴＫ１１００／ＤＥＦ　８００
手札から「魔轟神クシャノ」以外の「魔轟神」と名のついたモンスター1体を墓地へ捨てて発動する。
自分の墓地に存在するこのカードを手札に加える。

「《神の忠告》で墓地に送ったモンスターか…！」

「当たりだ。《魔轟神クルス》を捨てる！そして、クルスが墓地に捨てられた時、墓地からレベル４以下の魔轟神を特殊召喚する！蘇れ！《魔轟神獣ユニコール》！」

ユニコールがまた現れて走り始めた。くそ、また出てきたか…！

《魔轟神獣ユニコール》　ＡＴＫ／２３００

「さらにウロボロスの効果発動！墓地の魔轟神を3体デッキに戻す事で、発動ターンの間ウロボロスは相手のモンスター効果を受けない！」

「何！？」

て事は、ライトエンドの効果が効かない…！？

「クルス、ケルベラル、レイジオンをデッキに戻す！今は互いの手札は2枚。ユニコールの効果でお前のカード効果は全て封じている。バトルだ！」

「…生憎関係ねえな」

「何？」

「バトルフェイズに入る前に、罠カード《冥王の威圧》を発動！このカードの発動と効果は無効化されない！」

「無効化されないカードだと！？」

「ヴァンダルギオンがいる時に発動でき、このターン俺のカード効果と効果の発動は無効化されない！」

《冥王の威圧》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に「冥王竜ヴァンダルギオン」が表側表示で存在する場合に発動する事ができる。
このカードの発動と効果は無効化されない。
このターンのエンドフェイズ時まで、自分がコントロールするカードの発動と効果は無効化されない。

「なるほど…。上手くユニコールの効果を防いだな」

とりあえず、効果が無効になるのは防いだ。これでこのターンは何とかなりそうだ。

「まあいい。《魔轟神龍ウロボロス》で《ライトエンド・ドラゴン》に攻撃！」

「ライトエンドは破壊させねえ！罠カード《亜空間物質転送装置》！自分フィールド上のモンスター1体をエンドフェイズ時まで除外する！《ライトエンド・ドラゴン》を除外！」

カードから出る光線がライトエンドを異次元へ飛ばす。

「なら、《マスター・ヒュペリオン》を攻撃する！インフェルノ・ノヴァ！」

ウロボロスが口から極大の火球を吐き出す。それが大爆発を起こし、ヒュペリオンは耐え切れずに破壊された。

「ぐあぁっ！」

『ぬっ…！』

紅刃　ＡＴＫ／２３００→１４００

「罠カード《アドバンス・テイク》！レベル７以上の効果モンスターが相手によって破壊された時、デッキトップを１枚墓地に送り、カードを１枚ドローする！」

《アドバンス・テイク》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在するレベル７以上の効果モンスターが相手によって破壊された時に発動する事ができる。
自分のデッキの１番上のカードを墓地に送り、カードを１枚ドローする。

「無駄だ！速攻魔法《Ｓｐｌーブレイク・フォース》を発動！スピードカウンターが２つ以上ある時、自分のシンクロモンスターが相手モンスターを戦闘破壊した後にもう１度だけ続けて攻撃ができる！」

「なっ！？」

《Ｓｐｌーブレイク・フォース》
速攻魔法（オリジナル）
自分用スピードカウンターが２つ以上ある時、自分フィールド上のシンクロモンスターが相手モンスターを戦闘破壊した場合発動する

事ができる。
そのモンスターはもう1度だけ続けて攻撃する事ができる。

「ウロボロスで《冥王竜ヴァンダルギオン》に攻撃！インフェルノ・ノヴァ！」

また吐き出された巨大な火球は、今度はロディスに命中した。

『ぐおおぉっ！』

「ぐぅっ！ロディス…！」

紅刃　ＬＰ／１４００→　６００

「ユニコールで《感情の代行者　ウラヌス》を攻撃！コラージュ・スパーク！」

ユニコールが光を纏い、ウラヌスに突進して吹き飛ばした。

「ターンエンドだ」

「エンドフェイズ時に、《亜空間物質転送装置》の効果で除外された《ライトエンド・ドラゴン》が帰還する！」

ソリッドビジョンのカードが再び現れ光線を放ち、それがライトエンドへと変化した。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

シュルク

ＬＰ／１０００
ＳＰＣ／２
手札／１
モンスター／《魔轟神龍ウロボロス》（ＡＴＫ／３６００）《魔轟神獣ユニコール》（ＡＴＫ／２３００）
魔法・罠／なし

「セーフティーラインを超えたな」

「……」

「次の俺のターンで、俺のスピードカウンターは４つになる。俺の手札は《魔轟神クシャノ》１枚のみ。だが、次のドローでスピードスペルを引き当てる事ができれば、《スピードワールド　２》の効果でお前に８００ポイントのダメージを与えて終わりだ」

確かに、このターンでライフを回復するかとどめを刺すかしないと負ける確率は高い。だが、ここで諦めるわけにはいかねえ。

「『できれば』の話だろ？まだ勝負はわからないぜ？」

「よく言う。ウロボロスにはライトエンドの効果は通用しないぞ？」

「百も承知だ！俺のターン！」

紅刃　ＬＰ／　６００　ＳＰＣ／５→６

シュルク　ＬＰ／１０００　ＳＰＣ／２→３

ウロボロスに効果が効かなくても、ユニコールにライトエンドの

効果を使えばライフを削り切れる。だが、そんな事はシュルクもわかり切ってるはずだ。伏せカードがないとはいえ、油断はできない。

…よし、念のためだ。直接決める！

「《隠された聖域》の効果発動！手札を１枚捨てる事で、墓地からレベル４以下の天使族モンスターを特殊召喚する！《感情の代行者　ウラヌス》を特殊召喚！」

白い少女の代行者が再び宙に浮く。もう１回力を貸してくれ！

《感情の代行者　ウラヌス》　ＡＴＫ／　５００

「そして、《調和の代行者　ネプチューン》を召喚！」

今度は青い代行者が姿を現した。こいつにももう少し頑張ってもらう。

《調和の代行者　ネプチューン》　ＡＴＫ／１４００

「レベル２《神聖なる球体》とレベル３《調和の代行者　ネプチューン》にレベル１《感情の代行者　ウラヌス》をチューニング！」

ウラヌスが１つの黄色い輪に、２体の天使が合計５つの星にそれぞれ変化する。

「光の魔弾が、闇夜に沈む現世を撃ち抜く！希望の光を降り翳せ！」

☆２＋☆３＋☆１＝☆６

「シンクロ召喚！狙い撃て！《セラフィム・スナイパー》！」

天使の翼を背負い、スナイパーライフルを構えた灰色の人型モンスターが現れた。

《セラフィム・スナイパー》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星６／光属性／天使族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ２４００
このカードがシンクロ召喚に成功した時、デッキから天使族チューナー１体を手札に加える。
このカードは守備表示の状態で攻撃を行う事ができる。
守備表示で攻撃する場合は攻撃力の数値を適用してダメージ計算を行う。
このカードはは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
この時、このカードが相手ライフに与える戦闘ダメージは半分になる。

《セラフィム・スナイパー》　ＤＥＦ／２４００

「《セラフィム・スナイパー》がシンクロ召喚に成功した時、デッキから天使族のチューナーを手札に加える！《ハネワタ》を手札に！」

「ちっ、効果ダメージを防ぐモンスターか…」

生憎、《セラフィム・ギフター》は１枚しかないからな。とりあえず、これで効果ダメージは何とかなる。

「そして、こいつは守備表示の状態で攻撃でき、戦闘ダメージが半分になる代わりに直接攻撃ができる！」

「守備表示で直接攻撃だと…！？」

「バトル！《セラフィム・スナイパー》でダイレクトアタック！シャイン・スナイプ！」

《セラフィム・スナイパー》が照準を定め、光の弾丸を放つ。これが決まれば丁度１０００ダメージだが…。

「墓地の《魔轟神バギラム》の効果発動！俺のフィールドに魔轟神が存在する時、墓地のこのカードを除外して攻撃モンスターを手札に戻し、バトルフェイズを終了させる！」

《魔轟神バギラム》
効果モンスター（オリジナル）
星２／光属性／悪魔族／ＡＴＫ／　９００／ＤＥＦ１１００
自分フィールド上に「魔轟神」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して相手モンスター１体を手札に戻し、バトルフェイズを終了する。
「魔轟神バギラム」の効果はデュエル中１度しか使用できない。

朱色の悪魔の幻影が現れ、《セラフィム・スナイパー》の攻撃を防ぐ。さらにそのまま突撃して共に消滅した。

「この手も駄目か…。カードを１枚セットしてターンエンドだ」

紅刃
ＬＰ／　６００

ＳＰＣ／６
手札／２
モンスター／《ライトエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／《隠された聖域》リバース×１

「ライトエンドを守備表示にもしないとは、万策尽きたか？」

「さあな」

「（ウロボロスには確実に戦闘破壊される。手札調整をすればユニコールの効果で《ハネワタ》を無効化できる。それに気づかないほど紅刃は馬鹿じゃない。何かあるな…）俺のターン！」

紅刃　ＬＰ／　６００　ＳＰＣ／６→７
シュルク　ＬＰ／１０００　ＳＰＣ／３→４

これで何とか凌げるはずだ。さあ、どう来る…？

「（スピードスペル…！ここでクシャノを召喚すればユニコールの効果が発動する。だが、あいつはそれすら防ぐ何かを隠し持っている可能性が高い。…ここは、あえて《スピードワールド　２》の効果は使わない！）《Ｓｐｌエンジェル・バトン》を発動！スピードカウンターが２つ以上ある時、カードを２枚ドローして手札を１枚捨てる！今捨てた《魔轟神ラグリス》の効果発動！このカードが手札から捨てられた時、カードを２枚ドローする！」

手札がさらに増えた。全く、よくあんなにガンガンデッキが回るよな。

「そして《Ｓｐ一絶対轟》を発動！スピードカウンターが２つ以上ある時、墓地から《Ｓｐ一魔轟神の召集》を除外する事で墓地の魔轟神を２体まで特殊召喚する！」

《Ｓｐ一絶対轟》
通常魔法（オリジナル）
自分用スピードカウンターが２つ以上あるときに発動する事ができる。
自分の墓地に存在する「Ｓｐ一魔轟神の召集」を除外し、自分の墓地から「魔轟神」と名のついたモンスターを２体まで自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果によって特殊召喚されたモンスターの効果は無効化されリリースできず、攻撃もできない。

「墓地から２体も特殊召喚…！？」

「我が下に戻れ！ヴァルキュルス！レヴュアタン！」

今までに出てきた２体の魔轟神が再び呼び出された。

《魔轟神ヴァルキュルス》　ＡＴＫ／２９００

《魔轟神レヴュアタン》　ＡＴＫ／３０００

「この効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効化されリリースする事も攻撃する事もできないが、今は関係ない。さらに《Ｓｐ一魔轟粉砕波》を発動！スピードカウンターが４つ取り除く事で、自分フィールド上のレベル８以上の魔轟神２体を除外し、相手フィールド上の表側表示のカードを全て破壊する！」

《Ｓｐ┐魔轟粉砕波》
通常魔法（オリジナル）
スピードカウンターを４つ取り除いて発動する。
自分フィールド上に表側表示で存在するレベル８以上の「魔轟神」と名のついたモンスター２体を発動ターンのエンドフェイズ時までゲームから除外し、相手フィールド上に表側表示で存在するカードを全て破壊する。

シュルク　ＳＰＣ／４→０

全体除去か。このタイミングで来るなんてな…。

「ヴァルキュルスとレヴュアタンを除外する！《ライトエンド・ドラゴン》と《隠された聖域》を破壊だ！」

２体の魔轟神が光になって突撃してきた。そして、爆発を巻き起こし大量の煙が発生した。

「後は直接攻撃を決めれば…」

『…！ブルルッ！』

「どうした、ユニコール？」

『ギャオォオォォォ！』

「なっ！？」

俺は煙の中から勢いよく飛び出した。ライトエンドと一緒に。

「馬鹿な!?なぜライトエンドが破壊されていない!?」

「こいつを発動させたんだよ!罠カード《光の加護》!《天空の聖域》がフィールド上に存在する時、エンドフェイズ時まで光属性シンクロモンスターは戦闘で破壊されず、相手のカード効果を受けない!」

「だが、今お互いの手札は両方2枚!ユニコールの効果で無効になるはずだ!」

「このカードは相手のターンにしか発動できない代わりに発動と効果を無効にされない!」

「何!?」

《光の加護》
通常罠(オリジナル)
フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する時、相手ターンにのみ発動する事ができる。
このカードを発動したターン、相手から受けるダメージは全て0になり、自分フィールド上に表側表示で存在する光属性シンクロモンスターは戦闘で破壊されず、相手のカード効果を受けない。
このカードの発動と効果は無効化されない。

「そしてダメージも全て0になる。《隠された聖域》は破壊されちまったけどな」

「厄介な…。ウロボロスの効果発動!手札を2枚捨て、デッキから魔轟神2体を手札に加える!《魔轟神クルス》と《魔轟神ディアネイラ》を手札に!そして、墓地の《魔轟神クシャノ》の効果発動!

手札の魔轟神を捨てる事で、このモンスターを手札に戻す！さらに今捨てた《魔轟神クルス》の効果発動！手札から墓地に捨てられた時、墓地からレベル４以下の魔轟神を特殊召喚する！このターンにウロボロスの効果で手札から捨てた《魔轟神ヴェルモス》を特殊召喚！」

今度は青い小さな悪魔だ。何回特殊召喚する気だよ…？

《魔轟神ヴェルモス》
効果モンスター（オリジナル）
星３／光属性／悪魔族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ１０００
このカードが特殊召喚に成功した時、自分は手札を１枚捨てる。
このカードがリリースまたはシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた次のターンの間、相手はバトルフェイズを行う事ができない。

《魔轟神ヴェルモス》　ＡＴＫ／１０００

「ヴェルモスが特殊召喚された時、俺は手札を１枚捨てる！さらに、このモンスターは魔轟神１体のリリースでアドバンス召喚する事ができる！出でよ、《魔轟神ディアネイラ》！」

たった今呼び出されたヴェルモスと入れ代わり、上半身が桃色で下半身が黒い巨大な悪魔が現れた。

《魔轟神ディアネイラ》
効果モンスター
星８／光属性／悪魔族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ　１００
このカードは「魔轟神」と名のついたモンスター１体をリリースして表側攻撃表示でアドバンス召喚する事ができる。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、相手が発動した通常魔法カードの効果は「相手は手札を1枚選択して捨てる」になる。
この効果は1ターンに1度しか適用できない。

《魔轟神ディアネイラ》　ＡＴＫ／２８００

「ディアネイラがいる限り、1ターンに1度お前の通常魔法の効果を『俺が自分の手札を1枚選択して捨てる』効果に変更できる！そして、ヴェルモスが魔轟神のリリースかシンクロ素材になった次のターン、相手はバトルフェイズを行えない！さらにエンドフェイズ時、ヴァルキュルスとレヴュアタンがフィールドに戻る！」

また2体のシンクロモンスターが戻ってきて、ウロボロス達の横に並んだ。

《魔轟神ヴァルキュルス》　ＡＴＫ／２９００

《魔轟神レヴュアタン》　ＡＴＫ／３０００

「1度フィールドから離れた事で、《Ｓｐ－絶対轟》の制約は解除される！ターンエンドだ！」

シュルク
ＬＰ／１０００
ＳＰＣ／０
手札／０
モンスター／《魔轟神龍ウロボロス》（ＡＴＫ／３６００）《魔轟神獣ユニコール》（ＡＴＫ／２３００）《魔轟神ディアネイラ》（ＡＴＫ／２８００）《魔轟神ヴァルキュルス》（ＡＴＫ／２９００）

《魔轟神レヴュアタン》（ＡＴＫ／３０００）
魔法・罠／なし

でかいモンスターを5体も展開しやがった。おまけに、ディアネイラの効果でスピードスペルはほとんど役に立たない上に次のターンは攻撃できないし、俺のフィールドにはライトエンドしかいない。正直、勝つ見込みはかなり薄い。

「……はは…」

笑えない状況なのに、思わず苦笑した。

「？」

「強いな、お前。仲間内以外でこんなに強い奴と戦うのは久しぶりだ」

「言っただろ？お前とは覚悟が違うと。…だが、俺はどこかでお前とのデュエルを楽しんでいる」

「俺もだ」

「別の形で出会う事があれば、お互いいいライバルになっていたかもしれないな」

ウロボロス達を引き連れ俺の斜め前を走るシュルクは、寂しげに笑っていた。

「シュルク。お前は何でニュートラルに入ったんだ？お前ほどのデュエリストが、何でこんな事を…」

「…俺は…いや、俺達はある目的を達成するために集まった。それが危険な道のりだろうと、世間や神にまで悪として扱われようとも、立ちはだかる者を傷つけようとも、必ず成し遂げる」

その言葉を聞いた後、俺は小さく溜め息をついた。

「…やっぱり、お前らは敵に見えねえな」

「何？」

「前にギュラと戦った時、あいつは純粋に楽しんでデュエルをしていた。加奈美も、俺達とこんな形で敵対するような事は死んでもしたがらない奴なのに、お前らのところについている。赤髪で帽子を被ってるあいつと剣を交えた時だって、殺意が変にぐらついてた」

「…！」

「俺達は、本当に戦うべきなのか？俺達が倒さなきゃいけない敵は、もっと別の奴じゃねえのか？」

俺はただ、真実を知りたい。本当の敵が誰なのか、そいつが何をしようとしているか。そして、俺達が何をするべきなのかを。

「…敵に手を差し伸べるか。愚かな事だ」

でも、返ってきたのは突き放すような言葉だった。

「俺達は目的のために深い闇へと足を踏み入れた。お前達表の世界の住人を敵と見なしてな」

「……」

「大切なものや時間を捨て、裏の世界を生きると決めた！例え目的を果たそうとも、元の暮らしに戻れる保証も、他人を傷つけないという保証もない！俺達とお前達は真の意味では相容れない存在だ！」

そして、俺に左の人差し指を突き出し叫んだ。

「俺達は、目的のためなら世界をも敵に回す！それだけの覚悟がお前にあるのか！？」

…本気だ。

シュルクは強い目で俺を見据えている。目的はわからないけど…こいつは、こいつらは本気で何もかも敵に回すつもりだ。

俺の覚悟。世界を背負うくらいの覚悟は…。

「…ないかもな」

「！」

「世界を敵に回すとか背負うとか、そんな大それた事は、俺にはできない」

シュルクは左腕をハンドルに戻して前を向いた。

「…なら、お前は俺に勝つ事は…」

「でもな…」

「？」

（ＢＧＭ：『Ｃｌｅａｒ　Ｍｉｎｄ（遠藤正明）』）

「お前らのやってる事が俺の仲間を傷つけるようなら、俺はいくらでも食らいつく」

「何？」

俺の返答に驚いたのか、シュルクはもう１度俺を見た。

「大切な奴らを傷つける奴がいるなら、俺はそいつと戦う！その相手がどんな奴でも関係ない！」

封霊球だったっけか？それの効果がだいぶ切れているのを実感しながら、デッキトップに手をつけた。

「大切な奴らを護るためなら、どこまでも強くなって打ち倒す！どんな奴だって超えていく！」

そして、前を見据え、力強く叫ぶ。自信を裏付けるように。自分の背中を押すように。

「それが俺の信じる道！俺の覚悟だ！！」

「…！（こいつは…）」

「俺のターン！！」

紅刃　ＬＰ／　６００　ＳＰＣ／７→８

シュルク　ＬＰ／１０００　ＳＰＣ／０→１

状況は絶望的。だが、俺にはまだ希望がある。まだ名前も知らない石板のカード。それに懸ける！

「《スピードワールド　２》の効果発動！スピードカウンターを７つ取り除き、カードを１枚ドローする！」

紅刃　ＳＰＣ／８→１

「このモンスターは、自分フィールド上のモンスターを１体除外する事で特殊召喚できる！《ライトエンド・ドラゴン》を除外して、チューナーモンスター《異次元の精霊》を特殊召喚！」

ライトエンドが一旦消滅し、赤い服を着た緑の髪の小さな妖精が現れた。

《異次元の精霊》　ＡＴＫ／　１００

「さらに、チューナーモンスター《エフェクト・ガードナー》を召喚！」

続いて、緑の服を着た青い髪と白い翼の天使が現れた。

《エフェクト・ガードナー》
効果モンスター（チューナー・オリジナル）
星１／光属性／天使族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
このカードをシンクロ素材としたシンクロモンスターの効果は無効化されない。

《エフェクト・ガードナー》　ＡＴＫ／　０

「チューナーを２体も並べてどうするつもりだ？」

「こうするんだよ！レベル１《異次元の精霊》にレベル１《エフェクト・ガードナー》をチューニング！」

「何！？」

緑の衣の天使が１つの黄色い輪になり、人型の妖精が１つの星になってそれを潜り共鳴する。

「恵みの波動が、疾風を織り成し現世を仰ぐ！希望の光を振り翳せ！」

☆１＋☆１＝☆２

「シンクロ召喚！齎（もたら）せ！シンクロチューナー《エンジェル・コンダクター》！」

白い翼を羽ばたかせ、ライトエンドの頭のような帽子を被った長い銀髪の少女の天使が空を飛んだ。

《エンジェル・コンダクター》　ＡＴＫ／１０００

「チューナーどうしでシンクロ召喚をするだと！？」

「こいつはチューナーどうしでもシンクロ召喚できるモンスターだ！そして、《エフェクト・ガードナー》をシンクロ素材としたシンクロモンスターの効果は無効化されない！さらに、墓地から罠カード《ライト・リバース》を発動！」

「墓地から罠だと！？それに、そんなカードをいつの間に…！？」

「《アドバンス・テイク》で墓地に送られたカードだ！墓地からこのカードを除外する事で、手札の光属性モンスターを１体墓地に送り、除外されている光属性モンスターを１体特殊召喚できる！」

《ライト・リバース》
通常罠（オリジナル）
墓地に存在するこのカードを除外して発動する。
手札の光属性モンスター１体を墓地に送り、ゲームから除外されている自分の光属性モンスター１体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果で特殊召喚されたモンスターは、このターンのエンドフェイズ時までリリースまたはシンクロ素材にする事ができない。

「手札から光属性モンスター《ハネワタ》を墓地に送り、除外されている光属性モンスター《ライトエンド・ドラゴン》を帰還させる

！」

空中に黄色い小さな光の球が発生し、それが一気に巨大化して破裂すると、中からライトエンドが現れた。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「この効果で特殊召喚したモンスターは、エンドフェイズ時までリリースとシンクロ素材にできない！カードを１枚セットしてターンエンド！」

紅刃
ＬＰ／　６００
ＳＰＣ／１
手札／０
モンスター／《エンジェル・コンダクター》（ＡＴＫ／１０００）
《ライトエンド・ドラゴン》（ＡＴＫ／２６００）
魔法・罠／リバース×１

「（《エンジェル・コンダクター》はシンクロチューナーだと言っていた。という事は、石板のカードを使うつもりか？）俺のターン！」

紅刃　ＬＰ／　６００　ＳＰＣ／１→２

シュルク　ＬＰ／１０００　ＳＰＣ／１→２

「（この手札を伏せれば互いの手札は丁度０枚。ユニコールの効果が発動するが、《エフェクト・ガードナー》の効果を受けた《エンジェル・コンダクター》は効果を無効化されない。防ぐ術はなし、

か…）いいだろう！ならば、お前の覚悟を見せてみろ！」

「…！」

「カードを1枚セット！そして、《魔轟神龍ウロボロス》の効果発動！墓地の魔轟神3体をデッキに戻す事で、エンドフェイズ時までモンスター効果を受けない！《魔轟神クルス》《魔轟神獣キャシー》《魔轟神グリムロ》をデッキに戻す！バトルだ！ウロボロスで《ライトエンド・ドラゴン》に攻撃！インフェルノ・ノヴァ！」

ウロボロスが特大の火球を吐き出しライトエンドを襲う。

準備はできた。後はただ…走るだけだ！

『ギャオォォォォォォ！！』

「っ！？」

ライトエンドが思い切り咆哮し、火球を掻き消す。それを合図に、俺は加速した。

シュルクを追い抜き、さらにスピードを上げた。アクセルを全開にして、1度目を閉じる。すると、ひとりでに覚醒するのがわかった。

シュルクが選んだのが『捨てる覚悟』なら、俺が選ぶのは『護る覚悟』。それと共に強くなる。

どこまでも強く、どこまでも速く。どんな壁が立ちはだかっても、打ち砕いてさらに前へ…！

心が、澄み渡る。

「『クリアマインド』！レベル８、シンクロモンスター《ライトエンド・ドラゴン》にレベル２、シンクロチューナー《エンジェル・コンダクター》をチューニング！」

目を開けると、いつの間にか桜色になっていた景色が映った。《エンジェル・コンダクター》が２つの星になって前に飛び、風の中に消えていく。

そして、巨大な黄色い輪が２つ発生し、俺とライトエンドはそれをスピードのままに潜った。背景が桜色から黄色に変わり、桜色の衝撃波がＤ・ホイールに纏わりつく。

「天空に昇る輝きが、無限の進化で現世を救う！希望の光を振り翳せ！」

☆８＋☆２＝☆１０

衝撃波がさらに強くなる。ただ強く…叫べ！

「アクセルシンクロ！！！」

石板のカードをデュエルディスクに叩きつけるようにしてセットした。真っ白だった絵柄とテキストが浮かび上がり、黄色い光を放つ。

そして、コースから文字通り消えた。

「消えた…！」

シュルクが呟いた直後、後ろに時空の穴が現れて、俺と全身に体の細部がわからないくらいの強い光を纏った『そいつ』が中から飛び出す。俺はそのまま空へと昇る『そいつ』の名を叫んだ。

「継承せよ！！《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》！！！」

空に昇るにつれて、光が剥がれていく。やがて、全身がはっきりわかるようになると、１回転して静止した。

四肢が発達して、東洋風から西洋風へと姿を変えている。背中から生えているのは、４枚の巨大な天使の翼。金色の鎧と緑の宝玉は、ライトエンドの面影を残している。そして、全身から黄色の淡い光

を放っている。

スピードの世界で進化した、金色と純白の聖龍。こいつが、俺のアクセルシンクロモンスターだ。

《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》　ＡＴＫ／３４００

「あれが、伝説の光の龍が持つ真の力…！？」

アルヴェルグ・エヴォルトが降下して、俺の上を飛行する。

こいつと共に、さらに前へ進む！必ず勝つんだ！

「シュルク！勝負はこれからだ！」

『ギャオオォオォォォォ！！』

俺の言葉に合わせるように、《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》が大きく吠えた。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第６５話　『捨てる覚悟』と『護る覚悟』はまた別のもの（後書き）

☆今回のキーカード☆

牛尾「よお、元気か？『今回のキーカード』の時間だ。今回の司会は、牛尾哲と…」

深影「狭霧深影が勤めます。本編は紅刃ｖｓシュルクの続きだったわね」

牛尾「お互いとんでもないタクティクスを見せてきやがる。特にシュルクはデカブツを5体も出してるし、内1体はアクセルシンクロモンスターだ。こりゃ、かなり厳しいな…」

深影「でも、紅刃もついにアクセルシンクロモンスターを出す事ができたわ。勝負はこれからよ！」

牛尾「まあ、《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》の効果に期待するとしますか。んじゃ、そろそろカード考察に入るぜ」

深影「今回紹介するのは、シュルクの切り札であるアクセルシンクロモンスター《魔轟神龍ウロボロス》よ」

牛尾「ウロボロス？オリカは紹介しない方針じゃなかったんですか？」

深影「そうも言ってられないのよ。今回はＯＣＧのカードがどれも紹介するには中途半端な活躍しかしてないから、１番活躍したウロ

ボロスにしたわけなの」

牛尾「中途半端って…」

深影「ステータスと効果は以下の通りよ」

《魔轟神龍ウロボロス》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星１０／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３６００／ＤＥＦ２４００
「魔轟神」と名のついたシンクロモンスターのチューナー＋「魔轟神」と名のついたチューナー以外のシンクロモンスター
以下の効果をそれぞれ1ターンに1度ずつ使用できる。
●手札を任意の枚数捨てる事で、デッキから「魔轟神」と名のついたモンスターを捨てた枚数分だけ手札に加える。
●自分の墓地に存在する「魔轟神」と名のついたモンスター3体をデッキに戻す事で、このカードはエンドフェイズ時まで相手のモンスター効果を受けない。
この効果は相手ターンでも発動する事ができる。
●相手ターンに1度、自分の墓地に存在する「魔轟神」と名のついたモンスター1体をゲームから除外する事で、フィールド上に表側表示で存在するこのカードをゲームから除外する。
次のスタンバイフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

深影「素材となるシンクロモンスターとシンクロチューナーが両方魔轟神でなければ出せないわよ。今回正式な魔轟神のシンクロチューナーは登場しなかったけど、そこは仕方ないわね」

牛尾「効果は3つある。1つ目は、手札を任意の枚数捨てる事でその分だけデッキから魔轟神を手札に加える効果だ。何でも自由にサ

ーチできるのは頼もしいな」

深影「手札から捨てる事で効果を発動する魔轟神とも相性がいいし、なかなか便利ね」

牛尾「2つ目は、墓地の魔轟神を3体デッキに戻す事で、エンドフェイズ時まで相手のモンスター効果を受けなくなる効果だ。相手ターンでも使えるから、モンスター効果には滅法強いのが特徴だ」

深影「ただし、墓地のカードを大量に消費するから油断は禁物よ。足りないなら3つ目の効果を使うといいわ」

牛尾「墓地の魔轟神を1体除外する事で次のスタンバイフェイズ時まで自身を除外できる。相手ターンなら大抵これでやり過ごせるが、相手の攻撃を防ぐ事はできない。タイミングを選ぶ必要があるぞ」

深影「【魔轟神】にとっては強力な切り札だけど、その反面墓地の魔轟神の消費が激しいわ。1つ目の効果で自分から墓地を肥やせるけど、墓地の魔轟神の使い時を考えるべきね」

牛尾「お～し、今回はここまでだ」

深影「たまには解説も悪くないわね」

牛尾「深影さん…。も、もしよかったら、今度また一緒に…」

深影「よし！また機会があったら、今度はアトラス様と一緒に申請しましょう！あ～、今から楽しみ！」

牛尾「み、深影さん…ハァ…」

深影「感想はいつでも受けつけてます！何かあったら書き込んでいってください！」

牛尾「ま、次回も楽しみにしててくれよ」

ーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

今回紅刃が使用した《感情の代行者　ウラヌス》はクレセントさん、《神の忠告》とシュルクが使用した《轟きの呼び声》は言羽・D・カタストロフィ―さん、《魔轟神龍ウロボロス》《Ｓｐ―絶対轟》は機皇帝プラシド∞さんが投稿してくださったオリカです。話の都合で《轟きの呼び声》は強化し、《魔轟神龍ウロボロス》はアクセルシンクロ仕様にしてしまいましたが…。皆さん、ありがとうございました。

シュルクのフィールドもなかなかとんでもない事になってきました。シンクロ４体とディアネイラの計５体も揃っている上に軽くロックもかかってますし…。

何かラストが遊星ｖｓプラシドっぽくなりましたが、あえてここで切りました。《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》の効果は次回で判明します。見た目は大体と同じタイプです。ちなみに、《ディアボロス・サタン・ドラゴン》の見た目は大体と同じタイプです。

後、蛇足かもしれませんが、『クリアマインド』発動時の紅刃の瞳は黒から黄色に変化しています。

では、また次回！

第６６話　敵にも内部事情がある（前書き）

☆精霊の呟き☆

ゴーズ『待たせたな。第６６話だ』

ウィン『今回は紅刃の新たな切り札の効果が明らかに！』

ガルド『ピィーッ！』

ルリア『そして、ニュートラルの内部事情も一部判明します』

ゴーズ『それじゃ、第６６話…』

ウィン『あ、待って！その前にお知らせがあるから』

ゴーズ『お知らせ？』

ウィン『このコーナーって、毎回「締めの言葉」が違うでしょ？』

ゴーズ『その度にツッコミ入れてるがな…』

ウィン『それを読者から募集します！』

ゴーズ『はあ！？』

ルリア『遊戯王シリーズはもちろん、別の漫画やアニメの名言でも何でもＯＫです。ただし、下ネタなどは厳禁ですから注意してくだ

さい』

ウィン『お1人様1つまで！小説のキャラを使っての複数提案はなしでお願いします！で、期限は5月31日（2011年5月11日現在）！使ってほしい言葉と言ってほしい精霊を教えてください！』

ガルド『キュルルッ！』

ゴーズ『このコーナー、まだ日が浅いのにそんな事やってもいいのか…？』

ルリア『細かい事は気にしないでください』

ゴーズ『まあ、いいか…。名言待ってるぞ。それじゃ、第66話スタートだ。俺の答えは、スピードの中にある！』

ウィン『遊星の言葉ばかりじゃレパートリーがね…』

ルリア『他に何を使うべきかかなり迷いますし…』

ゴーズ『それが本音か！？』

第６６話　敵にも内部事情がある

ＳＩＤＥ／紅刃

（ＢＧＭ：遊星のテーマ）

５体の魔轟神が、空を飛び光の道を走る。それを追うように飛ぶのは、スピードの世界で進化した光の龍。

紅刃
ＬＰ／　６００
ＳＰＣ／２
手札／０
モンスター／《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》（ＡＴＫ／３４００）
魔法・罠／リバース×１

シュルク
ＬＰ／１０００
ＳＰＣ／２
手札／０
モンスター／《魔轟神龍ウロボロス》（ＡＴＫ／３６００）《魔轟神獣ユニコール》（ＡＴＫ／２３００）《魔轟神ディアネイラ》（ＡＴＫ／２８００）《魔轟神ヴァルキュルス》（ＡＴＫ／２９００）《魔轟神レヴュアタン》（ＡＴＫ／３０００）
魔法・罠／リバース×１

『ギャオオォオオオオ！』

「やっとできたぜ…アクセルシンクロを！」

「それがお前の新たな力、伝説の光の龍の真の力か…！」

「ああ！こいつが俺の新しい切り札！《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》だ！」

カードには絵柄もテキストもはっきり浮かび上がっている。これなら…負けない！

「だが、そんなモンスターを出したところで、ユニコールが効果を封じている！さらに、俺のモンスターは5体！耐え切れるはずがない！」

「悪いが、ユニコールの効果はもう通用しないぜ」

「…？どういう意味だ？」

「《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》がフィールド上にいる限り、俺のカードの発動と効果は全て無効化されない！」

「何だと！？」

「そして、《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》がシンクロ召喚に成功した時、自分のエクストラデッキからカードを5枚まで選択して墓地に送る！選択するのは、《天空冥王ーボルテニス》《天空騎士パーシアス》《雷光断罪ーボルテニス》《エミサリー・セイバー・ドラゴン》《セラフィム・スナイパー》だ！」

宣言した5枚を墓地に送る。《セラフィム・スナイパー》だけでも十分だけど、念のためだ。

「代償は大きいようだな…。だが、そんなものは悪あがきに過ぎない！攻撃を巻き戻し、バトル続行！《魔轟神龍ウロボロス》で《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》に攻撃！インフェルノ・ノヴァ！」

ウロボロスがまた巨大な火球を吐き出した。俺はそれに合わせて伏せカードを発動させる。

「カウンター罠！墓地のカウンター罠（コピー・カウンター）を1枚除外し、その効果を使用する！」

《コピー・カウンター》
カウンター罠（オリジナル）
自分の墓地に存在するカウンター罠1枚を除外して発動する。
このカードの効果は、そのカウンター罠の効果と同じになる。

「墓地の《攻撃の無力化》を除外！相手モンスターの攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる！」

巨大な時空の穴が開き、火球を丸ごと吸い込み消滅した。シュルクはそれを見て、眉間に皺を寄せた。

「ちっ…。ユニコールを守備表示に変更してターンエンドだ」

《魔轟神獣ユニコール》　ＡＴＫ／２３００→ＤＥＦ／１０００

シュルク

ＬＰ／１０００
ＳＰＣ／２
手札／０
モンスター／《魔轟神龍ウロボロス》（ＡＴＫ／３６００）《魔轟神獣ユニコール》（ＤＥＦ／１０００）《魔轟神ディアネイラ》（ＡＴＫ／２８００）《魔轟神ヴァルキュルス》（ＡＴＫ／２９００）《魔轟神レヴュアタン》（ＡＴＫ／３０００）
魔法・罠／リバース×１

このターンは凌いだ。後はあのカードを引くだけだ。

（ＢＧＭ：『Ｃｌｅａｒ　Ｍｉｎｄ（遠藤正明）』）

「だが、この状況をどうする？そんなモンスター１体で、俺の魔轟神に対抗できるのか？」

「やってやるさ！そして、このドローが俺の未来を決める！」

俺は俺のデッキを信じる！応えてくれ！

「俺の……ターン！！！」

紅刃　ＬＰ／　６００　ＳＰＣ／２→３

シュルク　ＬＰ／１０００　ＳＰＣ／２→３

引いたカードは…。

「…シュルク」

「？」

「このデュエル、俺の勝ちだ！」

「何？」

「《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》の効果発動！１ターンに１度、墓地にいるか除外されているモンスターを１体デッキに戻し、次のターンのエンドフェイズ時までそのモンスターの効果を得る！」

「モンスター効果のコピーか…！」

《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星１０／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３４００／ＤＥＦ２４００
シンクロモンスターのチューナー１体＋「ライトエンド・ドラゴン」
このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のエクストラデッキからカードを５枚まで選択して墓地に送る事ができる。
１ターンに１度、自分の墓地に存在または除外されているモンスター１体をデッキに戻して発動する。
このカードは次のターンのエンドフェイズ時まで、この効果を発動するためにデッキに戻したモンスターと同じ効果を得る。
また、相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター１体の攻撃を無効にする事ができる。
エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。
この効果でこのカードが除外されている間、またはこのカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分がコントロールするカードの発動と効果は無効化されず、「発動できない」という効

果も受けない。

「墓地の《セラフィム・スナイパー》をデッキに戻す！」

「《セラフィム・スナイパー》？…っ！まさか！？」

「そのまさかだ！《セラフィム・スナイパー》の効果は、戦闘ダメージが半分になる代わりに直接攻撃ができる！与えられるダメージは１７００！お前の残りライフ１０００を十分削り切れる！」

エクストラデッキのカードを墓地に送る効果はこのためにある。

そろそろフィニッシュだ！

「これで決める！バトル！《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》でダイレクトアタック！」

「させん！罠カード《魔轟反射》！魔轟神のシンクロモンスターが存在する時に相手が攻撃宣言をした場合、そのモンスターを除外して元々の攻撃力の半分のダメージを相手に与える！」

《魔轟反射》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に「魔轟神」と名のついたシンクロモンスターが表側表示で存在する場合、相手の攻撃宣言時に発動する事ができる。その攻撃モンスター1体をゲームから除外し、そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える。

「これで《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》を除外し、その攻撃力の半分…１２００ダメージをお前に与える！」

「言っただろ？俺の勝ちだと！墓地からカウンター罠《神の忠告》の効果発動！」

「何！？墓地からも発動できるカウンター罠だと！？」

「墓地からこのカードを除外する事で、手札のカウンター罠を１枚発動する！俺が発動するのは…」

宣言しつつ公開した最後の手札は、１番見覚えがあるカウンター罠。

「《神の宣告》！！」

「そのカードは…！？」

「ライフを半分払い、モンスターの召喚全般か魔法・罠の発動を無効にして破壊する！」

紅刃　ＬＰ／　６００→　３００

「馬鹿な…！？この局面で、ほぼ万能のカウンター罠を引き当てたというのか！？」

「終わりだぜ。行け、《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》！インヘリシャイン・ドライブ！！」

アルヴェルグ・エヴォルトが黄色い光を纏って突撃する。ウロボロス達が道を阻むも、勢いのまま全員撥ね飛ばす。そして、コースすれすれを通り抜け、光の衝撃波でシュルクのライフを削り切った。

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

シュルク　ＬＰ／１０００↓　０

紅刃　ＷＩＮ

（ＢＧＭ：終了）

ＳＩＤＥ／シュルク

俺のＤ・ホイールがデュエルに負けた事で自動的に停止し、紅刃もそれに合わせてＤ・ホイールを止めた。そして、ソリッドビジョンは全て消滅した。

「…まさか、負けるとは…」

ベストは尽くした。調子も悪くなかった。ギリギリの戦いの中で、俺の方が少しでも優位に立てていた。だが、負けてしまった。

「俺だって正直危なかったぜ？アクセルシンクロまで持っていけなかったら負けていたかもしれない」

紅刃の言葉が聞こえ、俺はそいつの方に顔を向けた。

「強いな、お前」

笑みを浮かべてそう言った。ただ純粋に微笑んで。

「…なぜ…そんな顔で話し掛ける？」

「？」

「なぜ、そんな優しい顔で俺に語り掛ける？俺達は敵どうしのはず…」

こいつには前から興味があった。日頃から面白い奴だと思っていた。だが…それでもこいつの事はよくわからない。

「さっきも言ったろ？お前らは敵に見えないって。それに、心のどこかで俺は、このデュエルを楽しんでた」

紅刃はＤ・ホイールを降りて俺に近づいてきながら話を続けた。俺も一旦Ｄ・ホイールから降りた。

「確かに俺達は敵どうしだ。お前らのやる事が俺の仲間を傷つける事に繋がるなら、俺は何度でも止める。でも…」

そして、右手を差し出してくる。

「また機会があったらデュエルしようぜ。敵だのニュートラルだのに縛られずにさ」

まただ。また微笑んだ。俺は目を見開いて、バイザー越しに優しく微笑む紅刃を見つめた。

どうしようもなく眩しい。光のようだ。時たま曲がる事はあれど、どこまでも真っ直ぐ突き進んでいく。デュエルが終わってからか黄色から黒に戻った瞳も、真っ直ぐで強い。

…全く…つくづく面白い奴だ。

俺は一瞬組織の事を忘れて右手を伸ばした。

ブワァァァァァ！

「「！？」」

すると、握手する寸前で急に辺りが暗くなった。

上から黒い何かが発生して球状に展開し、俺達を閉じ込めた。

ＳＩＤＥ／紅刃

突然俺達を閉じ込めた黒い半透明で球状の壁に、俺はただ驚くばかりだった。

「な、何だよこれ！？」

「これは…！？」

「シュルク、これってお前が仕掛けたのか！？」

「いや、俺じゃない。そもそも、こんな能力が使える奴は俺の仲間にはいない」

シュルクにも心当たりがないらしい。じゃあ、一体これは何なんだ…？

『紅刃！』

『ブルルッ』

「ロディス！リーシェ！」

「ユニコール？」

と、ここでロディスとリーシェが出てきた。シュルクの方はユニコールが飛び出した。

「どうした？」

『この壁の事なんだが…妙な雰囲気を感じないか？』

「妙な雰囲気？」

『ああ。闇のデュエルで発生する闇という見方もあるが、それにしては邪悪すぎる何かを感じる』

リーシェの言うような何かは、俺にはよくわからない。精霊だからこその感覚かもしれない。

「邪悪？……っ！まさか…！？」

「シュルク？」

「…1つだけ心当たりがある」

『心当たり？』

シュルクの言葉にロディスが反応する。やっぱり、ニュートラルの誰かなのか？

「ニュートラルには、尾形駿河という男がいる」

「尾形…？」

尾形って、どこかで聞いたような……って、尾形！？

「おい、ちょっと待て！尾形って、転生前の月沙を殺した奴か！？」

「何だ、知っているのか？」

『私達は以前、闇に飲み込まれかけた時に冥界にワープして、そこから月沙と尾形のデュエルを見ていた』

「まさか、混沌帝龍の力を使ってこれを作ったんじゃねえだろうな…？」

尾形が禁止制限を無視して繰り出したドラゴンを思い出す。精霊でもないのに、実体化しただけで強制的に周りの精霊を実体化させたくらいのモンスターだ。これくらいできてもおかしくない。

「いや、ある意味それよりも厄介なモンスターだ」

『あれ以上のモンスターが存在すると言うのか？』

ロディスの問い掛けにシュルクは無言で頷いた。あれよりもやばいモンスターって、一体どんな奴なんだ…？

「どういう原理かは知らないが、尾形はあるカードを作った。それも3種類だ」

「あるカード？」

「『邪神』だ」

『「邪神」…？』

『邪神』…聞いた事ないな。少なくとも、俺は知らない。ロディスとリーシェも同じらしい。

「文字通り神に匹敵する力を持つ。デュエルモンスターズの生みの

親、ペガサス・J・クロフォードが、三幻神の抑制力として作成したカードだ」

『三幻神の抑制力だと？』

『我らはそんな話を聞いた事がないが…』

「当然だ。これはここと は違う平行世界での話。この世界には元から存在しないカードだ」

『…1つ気になる事がある』

「何だ？」

「その邪神とは、名前の通り闇の力を持つのか？」

リーシェが話の区切りがいいところで質問を投げ掛けた。話の流れからして、そう考えるのが普通だな。

「ああ。それも、並大抵のレベルではない。三幻神の抑制力となり得るほどのカードだ。あまりの危険性に、ペガサスが作成を躊躇ったくらいの力を秘めている」

「そこまで危険なのかよ…！？」

「それだけではない。三邪神は三幻神とほぼ同じ性質を持つ。尾形は内2体は不完全だが、残りの1体は完全のものを作り上げる事に成功したと言っていた」

『その、残りの1体とは…？』

「三幻神の最高位、《ラーの翼神竜》と対をなす邪神だ」

三幻神の最高位と対をなす、闇のモンスター…！？

「だが、奴は『過激派』の一員のはず。そもそも、今回の作戦のメンバーは『穏健派』の、それも幹部と一部の実力者のみだ。運悪く嗅ぎつけられたか…！」

「は…？」

シュルクは何か1人で納得してるけど、俺達にはさっぱり理解できない。初めて聞く単語まで混じってる。

「あの…『過激派』に『穏健派』って何だ？」

「ニュートラルにも派閥が存在する」

『派閥だと？』

「ああ。『穏健派』と『過激派』の2種類だ。最終目標は同じだが、『穏健派』は他人に被害を与えずに行動する集団だ。対して、『過激派』は目的のためなら手段を選ばない。それこそ、殺人だろうが何だろうがな」

初めて聞くな。ニュートラルに派閥があったなんて…。

「なら、ギュラは過激派なのか？《天空の聖域》の破壊活動をやってたし」

「いや、あいつは穏健派だ。ただ…」

「ただ？」

シュルクは少し気まずそうな表情を浮かべて話を続けた。

『シュルク、石板の在処を特定できたんだって？』

『ああ。後は誰を送り込むかだが…』

『俺だけで行ってもいいか？』

『何？』

『部下は連れてかねえ。ライディングロイドを何体か持ってくぜ？』

『単独行動か？』

『それと、建物くらいならぶっ壊してもいいよな？どうせ悪役サイドだし』

『何を馬鹿な事を…。一体どういうつもりだ？』

『憂さ晴らしだよ』↑青筋立ててる

『……は？』

『最近周りがボケをかましまくるせいで、ツッコミやら後始末やらをまとめて引き受けてんだよ。俺と早苗だけで全部捌き切れるかよ。どんだけストレス溜めてると思ってんだ？あ？俺はいつから苦労人ポジションになったんだ？ざけんなバッキャロが。このイライラをどこにぶつけろってんだよ？答えろよ、答えてみろよルドガーさんよぉ。部下共はどいつもこいつも俺に面倒事押しつけやがって。てめえのケツくらいてめえで拭けっての。俺が一体何徹したと思ってｎ（ｒｙ』

『わ、わかった、行ってこい。部下には俺からも言っておく。それと、何かすまなかった…』

「という事があってだな…」

「ちゃんと指導しろよ…」

俺は目頭を押さえてツッコんだ。何だよそのどうしようもない裏

事情…？

「戻ってきた時は、石板を取り損ねたにも関わらずやけにすっきりした顔をしていたな…」

「苦労してんだな、あいつ…」

俺達は遠い目で言葉を連ねた。何か憂さ晴らしで聖域を攻撃されたアース達が不憫に思えてきた…。恨むぞ、ギュラの部下共…！

「部下は元々何とか言いくるめた者達の集まりだから、治安が少し悪いのは仕方ない。ちゃんと賛同してくれた者は数えるほどしか…」

『その言いくるめたという話術が凄まじいレベルに聞こえるんだが…』

ロディスの言い分に、俺とリーシェは無言で頷いた。一体何なんだよ、ニュートラルの穏健派って…。

「とにかく、人間や精霊には直接的なダメージを与えていないはずだ。ギュラが連れていったライディングロイドは、全て建造物のみを破壊して石板を探す事しかしないようプログラミングしてある」

「アホ言え。俺自身が攻撃を受けてる。おまけに、知り合いの精霊が1人、そのライディングロイドが操るモンスターの攻撃で怪我を負った」

俺を庇ったせいでアースが怪我したとはいえ、あれは明らかに俺達を殺しにきていた。どうも信用が薄い。

「馬鹿な!?あいつは確かに派手な事が好きだが、そこまでやる奴じゃないはずだ!」

『となると、過激派とやらの誰かが知らぬ間に細工を施していたと考えられるな』

「そうか…。ちっ、余計な事を…!」

ロディスの推測を聞いて、シュルクは悔しそうに舌打ちをする。穏健派と過激派は仲が悪いみたいだな。

『要するに、お前達は穏健派で尾形は過激派か。派閥どうしは仲が悪いようだが…』

「それぞれやり方が違うからな。そして、今回俺が連れてきたのは俺も含めて穏健派のメンバーのみだ。当然、尾形は連れてきていない。盗み聞きして、勝手にこっそり着いてきたに違いない」

『だが、お前達と協力するつもりはないと見ていいだろう。こうして派閥は違えど味方であるはずのお前を、こうした罠に嵌めたのだからな』

「あの馬鹿が…。手柄を独り占めする気か?」

手柄…違う。あいつの狙いは石板じゃない。リーシェとシュルクの会話を聞いて、ある結論に辿り着いた。それも、最悪な…。

「…いや、あいつの目的は別にある」

「別に…?」

「尾形は月沙に対して異常なくらいの復讐心を持っている。となると、狙いは当然…」

『…！まさか…！？』

『ちっ！』

「おそらく、それで間違いないだろうな」

『ブルル…』

俺は全員の反応を見た後、続きを言い放った。

「月沙の殺害…！」

ＳＩＤＥ／月沙

目の前には強大な力を持つ邪神がいる。対して、私達のフィールドにモンスターはいない。

尾形
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《邪神ドレッド・ルート》（ＡＴＫ／４０００）

魔法・罠／リバース×２

勇香
ＬＰ／１２００
手札／０
モンスター／なし
魔法・罠／リバース×１

月沙
ＬＰ／１２００
手札／１
モンスター／なし
魔法・罠／リバース×１

おまけに手札をだいぶ消費した。リバースカードは１枚ずつのみ。どう反撃すれば…。

「さあ、天原勇香！貴様のターンだ！最も、伏せカード１枚だけでは何もできないだろうがな！」

「ほざいてろ！私のターン！」

勇香は引いたカードを見ると、小さく笑ってそのカードを使った。

「《ラヴァル・キャノン》を召喚！」

出てきたのは、左腕が大砲になってる青い巨漢だ。

《ラヴァル・キャノン》
効果モンスター

星４／炎属性／戦士族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ　９００
このカードが召喚・反転召喚に成功した時、ゲームから除外されている自分の「ラヴァル」と名のついたモンスター１体を選択して特殊召喚する事ができる。

《ラヴァル・キャノン》　ＡＴＫ／１６００↓　８００

「《ラヴァル・キャノン》が召喚か特殊召喚された時、除外されているラヴァルを１体特殊召喚できる！《ラヴァル炎樹海の妖女》を特殊召喚！」

さっき《ラヴァル・グレイター》の効果で除外されたロコナがフィールドに戻ってきた。

《ラヴァル炎樹海の妖女》　ＡＴＫ／　３００↓　１５０

『ユウカ、大丈夫？凄い攻撃だったけど…』

「心配すんな。これくらいでやられるような柔な体質じゃねえよ。レベル４《ラヴァル・キャノン》にレベル２《ラヴァル炎樹海の妖女》をチューニング！」

ロコナがもう１度２つの赤い輪に変化し、《ラヴァル・キャノン》を内側に呼び込む。

「鉄壁の盾が、守護の魂と共鳴する！覚悟の炎よ、燃え上がれ！」

☆４＋☆２＝☆６

「シンクロ召喚！防御せよ！《ラヴァル・ガーディアン》！」

炎のマークが入った真っ赤な盾を構え、炎のような長髪を持つ茶色い体のモンスターが、片膝をついて守備の体勢に入った。

《ラヴァル・ガーディアン》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星６／炎属性／戦士族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ２８００
チューナー＋チューナー以外の炎属性モンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分は手札を１枚墓地へ送る。
このカードは戦闘では破壊されず、このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。
このカードがフィールド上から離れた時、このカードのシンクロ召喚に使用したモンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、この一組を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

《ラヴァル・ガーディアン》　ＤＥＦ／２８００→１４００

「こいつのシンクロ召喚に成功した時に手札を１枚墓地に送る必要があるけど、生憎手札はすっからかんだ。そして、守備表示だから《ラヴァル炎樹海の妖女》の攻撃力上昇効果も意味がない。ターンエンドだ」

勇香
ＬＰ／１２００
手札／０
モンスター／《ラヴァル・ガーディアン》（ＤＥＦ／１４００）
魔法・罠／リバース×１

《ラヴァル・ガーディアン》は戦闘破壊されない上に、戦闘ダメ

ージも0になる。貫通効果とかは効かないから一応安心だ。

勇香は今身動きが取れない。私が突破口を見つけないと…！

「私のターン！魔法カード《埋葬呪文の宝札》！墓地の魔法カードを3枚除外して、カードを2枚ドローする！」

《埋葬呪文の宝札》
通常魔法（アニメオリジナル）
自分の墓地に存在する魔法カード3枚をゲームから除外して、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「墓地から《アイスカーペット》《ワン・フォー・ワン》《オーロラ・ドロー》を除外！そして、カードを2枚ドローする！」

よし、これならいける…！

「フィールド魔法《海龍の神殿》を発動！」

フィールドが青く染まり、私達の後ろに神殿が現れた。

《海龍の神殿》
フィールド魔法（オリジナル）
このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上のモンスターは全て水属性として扱う。
また、互いのプレイヤーはライフを支払うことができない。

「このカードがある限り、フィールド上のモンスターは全て水属性になり、お互いにライフを払う事ができない！そして、《氷結界の駿馬》を召喚！」

水色のたてがみを生やした立派な白馬が現れた。４本の足にもそれぞれ氷が付いている。

《氷結界の駿馬（しゅんめ）》
効果モンスター（オリジナル）
星４／水属性／水族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１２００
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、手札から「氷結界」と名のついたチューナー１体を特殊召喚する事ができる。
その後、この効果で特殊召喚したモンスターのレベルを１つ上げる事ができる。

《氷結界の駿馬》　ＡＴＫ／１６００→　８００

「《氷結界の駿馬》が召喚か特殊召喚に成功した時、手札から氷結界のチューナーを特殊召喚できる！《氷結界の守護陣》を特殊召喚！」

体のあちこちに氷を纏った狐のようなモンスターが飛び出した。

《氷結界の守護陣》
チューナー（効果モンスター）
星３／水属性／水族／ＡＴＫ　２００／ＤＥＦ１６００
自分フィールド上にこのカード以外の「氷結界」と名のついたモンスターが表側表示で存在する限り、このカードの守備力以上の攻撃力を持つ相手モンスターは攻撃宣言をする事ができない。

《氷結界の守護陣》　ＡＴＫ／　２００→　１００

「そして、この効果で特殊召喚したモンスターのレベルを１つ上げ

る事ができる！」

《氷結界の守護陣》　☆３→４

「レベル４《氷結界の駿馬》にレベル４となった《氷結界の守護陣》をチューニング！」

守護陣が４つの青い輪になり、駿馬がそれを潜って４つの星になる。

「封印されし青龍が、龍皇の血を継ぎ極東に昇る！秘めたる力を解き放て！」

☆４＋☆４＝☆８

「シンクロ召喚！出でよ！《海龍皇一リヴァイア》！」

全身が青い東洋の龍。氷結界じゃないけど、私のデッキでも十分通用する。

《海龍皇一リヴァイア》

シンクロ・効果モンスター（オリジナル）

星８／水属性／ドラゴン族／ＡＴＫ　？／ＤＥＦ　？

水属性チューナー＋チューナー以外の水属性モンスター１体以上

相手はこのカードを特殊召喚する事ができない。

このカードの攻撃力と守備力は、フィールド上に存在する水属性モンスターのレベルの合計×２００ポイントとなる。

フィールド上に存在する水属性モンスターのレベルを１つ下げる事で、相手フィールド上に存在するカードを１枚破壊する。

この効果はフィールド上に「海龍の神殿」が存在しない場合、１タ

ーンに1度しか使用する事ができない。

《海龍皇ーリヴァイア》　ＡＴＫ／　？

「リヴァイアの攻撃力と守備力は、フィールド上の水属性モンスターのレベルの合計×２００の数値になる！《海龍の神殿》の効果でフィールド上のモンスターは全て水属性！レベルの合計は２４！よって、攻撃力は４８００！」

「だが、ドレッド・ルートの効果で攻撃力は半分になる！」

《海龍皇ーリヴァイア》　ＡＴＫ／　？→４８００→２４００

「それでもいい！リヴァイアの効果発動！レベルを１つ下げる事で、相手フィールド上のカードを１枚破壊する！」

「何！？」

「《邪神ドレッド・ルート》を破壊！タイダル・ウェーブ！」

《海龍皇ーリヴァイア》　ＡＴＫ／２４００→２３００　☆８→７

リヴァイアが津波を起こし、ドレッド・ルートをフィールドから流そうとする。

「邪神はやらせん！罠カード《亜空間物質転送装置》！」

「それは…！？」

「自分のモンスターをエンドフェイズ時まで除外する！ドレッド・

ルートを除外！」

津波が当たる直前でドレッド・ルートが消滅した。仕止め損ねた…。

「一応、攻撃力と守備力は変化する…」

《海龍皇－リヴァイア》　ＡＴＫ／２３００→２６００

《ラヴァル・ガーディアン》　ＤＥＦ／１４００→２８００

「そして、リヴァイアの破壊効果はフィールド上に《海龍の神殿》がある場合、回数無制限で発動できる！」

「…！」

「レベルをもう１つ下げてリバースカードを破壊する！タイダル・ウェーブ！」

《海龍皇－リヴァイア》　ＡＴＫ／２６００→２４００　☆７→６

リヴァイアがもう１度津波を引き起こす。これで安全に攻撃できるはず…。

「罠カード《和睦の使者》を発動！戦闘破壊と戦闘ダメージを無効にする！」

う…駄目だったか…。このターンはもうダメージを与えられない…。

「罠カード《フィールド・プランター》を発動！フィールド魔法を墓地に送り、カードを2枚ドローする！」

《フィールド・プランター》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在するフィールド魔法カード1枚を墓地へ送って発動する。
自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「《海龍の神殿》を墓地に送って、2枚ドロー！」

景色が元のビル街に戻る。勇香のシンクロモンスターに必要なシンクロ素材には大抵炎属性モンスターがいる。全て水属性にする《海龍の神殿》が残ると足を引っ張る羽目になる。なら、自分のターンの終わりにどかすしかない。

「《ラヴァル・ガーディアン》が炎属性に戻った事で、リヴァイアの攻撃力が変化する」

《海龍皇ーリヴァイア》　ＡＴＫ／２４００→１２００

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

「エンドフェイズ時にドレッド・ルートがフィールドに戻る！」

さっきまで消えていたドレッド・ルートがまた姿を現した。そして、リヴァイアと《ラヴァル・ガーディアン》の攻撃力と守備力も半減する。

《海龍皇ーリヴァイア》　ＡＴＫ／１２００→　６００

《ラヴァル・ガーディアン》　ＤＥＦ／２８００→１４００

月沙
ＬＰ／１２００
手札／１
モンスター／《海龍皇－リヴァイア》（ＡＴＫ／　６００）
魔法・罠／リバース×１

「海龍皇も随分貧弱になったな。ドレッド・ルートの攻撃を受けてからならダメージを減らせるものを…」

「（いや、月沙の事だ。何か上手い手を考えてるに違いねえ…）」

大丈夫。《海龍の神殿》をフィールドから離すタイミングは間違ってない。手札のこのモンスターがいればまだいける。

「俺のターン！スタンバイフェイズ時、自分フィールド上に魔法・罠が存在しない場合、墓地の《黄泉ガエル》の効果発動！墓地からこのカードを特殊召喚する！」

丁度魔法・罠が１枚もないせいで、また《黄泉ガエル》が復活した。

《黄泉ガエル》　ＡＴＫ／　１００→　５０

「また出やがったか…！」

「魔法カード《天よりの宝札》を発動！全員手札が６枚になるようにドローする！」

「《天よりの宝札》…！？」

「てめえと私が6枚、月沙が5枚ドローする事になるな」

ここで《天よりの宝札》を引くなんて…。ありがたいけど、必ず何か仕掛けてくる…！

「ククク…手札から《ジェスター・コンフィ》を攻撃表示で特殊召喚する！」

尾形のフィールドに、小さなピエロが現れた。あれは次のターンのエンドフェイズ時に手札に戻る代わりに、手札からほぼ無条件で特殊召喚できるモンスター…！

《ジェスター・コンフィ》
効果モンスター
星1／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ　0／ＤＥＦ　0
このカードは手札から表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この方法で特殊召喚した場合、次の相手のエンドフェイズ時にこのカードと相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を手札に戻す。
「ジェスター・コンフィ」は自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

《ジェスター・コンフィ》　ＡＴＫ／　0

「そして、魔法カード《デビルズ・サンクチュアリ》を発動！《メタルデビル・トークン》を1体特殊召喚する！」

《デビルズ・サンクチュアリ》
通常魔法
「メタルデビル・トークン」（悪魔族・闇・星１・攻／守０）を自分のフィールド上に１体特殊召喚する。
このトークンは攻撃をする事ができない。
「メタルデビル・トークン」の戦闘によるコントローラーへの超過ダメージは、かわりに相手プレイヤーが受ける。
自分のスタンバイフェイズ毎に１０００ライフポイントを払う。
払わなければ、「メタルデビル・トークン」を破壊する。

続いて、鉄の球を数珠繋ぎにして人型に似た姿をしているトークンが呼び出された。

《メタルデビル・トークン》
トークン
星１／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
このトークンは攻撃する事ができない。
「メタルデビル・トークン」の戦闘によるコントローラーへの超過ダメージは、かわりに相手プレイヤーが受ける。
自分のスタンバイフェイズ毎に１０００ライフポイントを払う。
払わなければ、「メタルデビル・トークン」を破壊する。

《メタルデビル・トークン》　ＡＴＫ／　０

「ドレッド・ルート以外にモンスターが３体…」

「まさか、残りの邪神を出すつもりか！？」

「ククク…その通り！その目に焼きつけるがいい！《黄泉ガエル》《ジェスター・コンフィ》《メタルデビル・トークン》をリリース

！」

地面にまた黒い大穴が開き、３体のモンスターが沈んでいった。

「さあ、姿を現せ！《邪神アバター》！！」

黒い大穴から、ゆっくりと浮かび上がってくる。

「来た…！」

大穴から離れて空中で静止した『それ』は、どこまでも黒い巨大な球体だった。

《邪神アバター》　ＡＴＫ／　？

「あれが…３体目の邪神…！？」

最悪だ…。ドレッド・ルートとアバターが並んだ…。

でも、対抗策がないわけじゃない。必ずこの状況を打開するんだ…！

...To be continued

第６６話　敵にも内部事情がある（後書き）

☆今回のキーカード☆

遊星「『今回のキーカード』の時間だ。司会は俺、不動遊星と…」

アキ「十六夜アキよ。よろしくね」

遊星「本編では、ついに紅刃がアクセルシンクロモンスターで勝利したな」

アキ「あの状況からよく逆転できたわね。凄いわ」

遊星「一方で、月沙と勇香は邪神に苦戦しているようだ」

アキ「しかも2体同時に並ぶなんて…。月沙には対抗策があるらしいけど、何をするつもりかしら？」

遊星「尾形の話だと、他の2体とは違ってアバターは完全体らしい。一体どんな力を持っているんだ…？」

アキ「今は2人を信じましょう。あんなデュエリストに敗れるほど月沙と勇香の実力は低いものではないわ」

遊星「そうだな。よし、カード考察に入るか。今回は特例として、紅刃の新たな切り札（アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン）を紹介する」

《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星１０／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３４００／ＤＥＦ２４００
シンクロモンスターのチューナー１体＋「ライトエンド・ドラゴン」
このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のエクストラデッキからカードを５枚まで選択して墓地に送る事ができる。
１ターンに１度、自分の墓地に存在または除外されているモンスター１体をデッキに戻して発動する。
このカードは次のターンのエンドフェイズ時まで、この効果を発動するためにデッキに戻したモンスターと同じ効果を得る。
また、相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター１体の攻撃を無効にする事ができる。
エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。
この効果でこのカードが除外されている間、またはこのカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分がコントロールするカードの発動と効果は無効化されず、「発動できない」という効果も受けない。

遊星「《ライトエンド・ドラゴン》とシンクロチューナーでのシンクロ召喚でのみ呼び出せるモンスターだ。《ライトエンド・ドラゴン》は戦闘に強い反面、カード効果に弱い。上手く守り切る必要がある」

アキ「シンクロ召喚に成功した時、エクストラデッキからカードを５枚まで墓地に送る事ができるわ。一見デメリットにしか見えないけど、《ミラクルシンクロフュージョン》や《貪欲な壺》、その他墓地のコストを溜めるのに便利な効果よ」

遊星「相手が攻撃してきた場合は、自身をエンドフェイズ時まで除外する事でその攻撃を無効にできる。この効果は《シューティング・スター・ドラゴン》などと同じだな」

アキ「そして、この効果で除外されているかフィールド上にいる間は、自分のカード効果は全て無効にされないわ。カードの発動自体を封じられても問題なく発動できるから、安全に効果を使う事ができるわ」

遊星「さらに、このモンスターの真価はもう1つの効果にある。墓地にいるか除外されているモンスターをデッキに戻す事で、次のターンのエンドフェイズ時までそのモンスターの効果を得る事ができる」

アキ「除外されているモンスターも効果の対象にできるから、除外系のデッキが相手でも存分に力を発揮できるわ。ただし、召喚時に発動する効果は使えないから注意よ」

遊星「最初の効果でエクストラデッキから墓地に送ったモンスターの効果もコピーできる。シンクロモンスターや融合モンスターの強力な効果も簡単に使用できるのが強みだ」

アキ「仲間の力を受け継ぎ無限に進化する、様々な可能性を秘めたモンスターよ。これからの活躍に期待してるてね」

遊星「今回はここまでだ」

アキ「紅刃は一応勝利できたけど、尾形のせいでシュルクもろとも閉じ込められてしまったわね。それに、ニュートラルにはまだ戦っていない人もいる。激しい戦いが続きそうね…」

遊星「だが、仲間とカード達を信じていれば必ず突破口を見つける事ができる。俺達も信じよう」

アキ「ええ。それじゃ、そろそろ締めましょう。遊星、最後はあの言葉でお願いね」

遊星「わかっている」

アキ「感想はいつでも待っているわ。気が向いたら書き込んでいってね」

遊星「次回も楽しみにしていてくれ。ライディングデュエル、アクセラレーション！」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

今回月沙が使用した《海龍の神殿》と《海龍皇－リヴァイア》はクレセントさんが投稿してくださったオリカです。クレセントさん、ありがとうございました。

《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》は、『こんなモンスターが活躍するところを見てみたい』という一心から考え出したモンスターです。これから紅刃の新たな切り札として活躍させていきますので、よろしくお願いします。

次回は月沙＆勇香ｖｓ尾形の続きです。楽しみにしててください。

では、また次回！

第６７話　冒頭で手に入れた謎のアイテムは大抵の場合伏線だったりする（前書

☆精霊の呟き☆

ウィン『ついに3体目の邪神が登場！』

ナージャ『あんなやばそうな奴相手にどう戦うか見物ね～』

ゴーズ『そして、最近話題になっているあの召喚方法も登場するぞ』

ロディス『今回の締めの言葉はＨＩＲＯさんのリクエストだ。第６７話、始まるぞ。

命は投げ捨てるモノではない…』

ゴーズ『どこかで聞いたな、それ…』

第６７話　冒頭で手に入れた謎のアイテムは大抵の場合伏線だったりする

ＳＩＤＥ／月沙

尾形
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《邪神ドレッド・ルート》（ＡＴＫ／４０００）《邪神アバター》（ＡＴＫ／　？）
魔法・罠／なし

勇香
ＬＰ／１２００
手札／６
モンスター／《ラヴァル・ガーディアン》（ＤＥＦ／１４００）
魔法・罠／リバース×１

月沙
ＬＰ／１２００
手札／６
モンスター／《海龍皇－リヴァイア》（ＡＴＫ／　６００）
魔法・罠／リバース×１

「何だあれ…ボール？」

尾形が呼び出した３体目の邪神は、巨大な黒い球体の姿をしている。初めて見る勇香はそれが妙に見えたみたいで、少し唖然とした呟いていた。

「もっとやばい姿を想像してたんだけどな…」

「やばいのは効果の方だよ」

「効果？」

「ククク…アバターの攻撃力と守備力は、フィールド上の１番攻撃力が高いモンスターの攻撃力に１００ポイントを加えた数値になる」

「なっ！？」

「１番攻撃力が高いモンスターはドレッド・ルート！よって、攻守は４０００＋１００！」

アバターが形を変え、ドレッド・ルートと同じ姿になった。全身は本体とは違って真っ黒だ。

《邪神アバター》　ＡＴＫ／　？→４１００

「最初が球体なのはそういうわけかい…」

「本来ならドレッド・ルートの効果でアバターの攻守も半分になるけど、邪神は先にフィールドに出ている方から効果を適用する。つまり、アバターの攻守は先に出ていたドレッド・ルートの効果で半分になってから、後から召喚されたアバター自身の効果でドレッド・ルートの攻守＋１００の数値になる」

「その通り！邪神だけの特殊裁定というわけだ！」

「ちっ、面倒な…！」

ただでさえドレッド・ルートの効果で攻守が半減しているのに、戦闘では無敵のアバターまで…。しかも、アバターは完全体だと言っていた。もしかして、罠とモンスター効果が効かない原作効果…？

「《邪神アバター》の効果発動！アバターが召喚に成功した場合、相手ターンで数えて2ターンの間、相手は魔法・罠を発動できない！」

「何！？」

「ＯＣＧ効果…！」

なら、モンスター効果を使えば倒せる。魔法・罠はしばらく発動できないけど、何とかなりそう。

「そして、アバターは『罠とモンスター効果を受けず、魔法カードの効果は1ターンのみ受け付ける』」

「え…？」

少し安心しかけたところで、尾形の説明を最後まで聞いて耳を疑った。

「て事は、2ターンの間アバターを倒す手段はねえのかよ…！？」

「ちょっと待って！それは原作効果で、魔法・罠を封じるＯＣＧ効果にはなかったはず…！」

「お、ＯＣＧ？何だよそれ？」

「あ、えっと…私の元いた世界での効果は、魔法・罠を封じる効果はあったけど罠とモンスター効果の耐性はなかったの。反対に、ペガサスさんが作るのをやめた方の効果は、効果の耐性はあったけど魔法・罠を封じる効果はなかった」

戸惑う勇香に、私は簡単に説明した。つまり、耐性と封印効果を両方持つのはあり得ないって事。

「て事は…あの野郎、２種類の同名カードを『混ぜた』のか？」

「『混ぜた』？」

「当たりだ。このアバターは、ＯＣＧと原作の２つの効果を混ぜて作り出したカード！『完全体』とはそういう意味だ！」

「な…！？」

嘘でしょ！？２つの世界の効果を同時に持つなんて…！？

《邪神アバター》
効果モンスター（原作・ＯＣＧ複合）
星１０／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　？／守　？
このカードを通常召喚する場合、自分フィールド上のモンスター３体をリリースして召喚しなければならない。
このカードの召喚は無効化されない。
このカードが召喚に成功した時、魔法・罠・効果モンスターの効果は発動できない。
このカードは罠・効果モンスターの効果を受けず、魔法カードの効

果は１ターンのみ受け付ける。
このカードは特殊召喚した場合エンドフェイズ時に墓地へ送られる。
このカードのコントロールを変更する事はできない。
このカードが召喚に成功した場合、相手ターンで数えて２ターンの間、相手は魔法・罠カードを発動できない。
このカードの攻撃力・守備力は、フィールド上に表側表示で存在する「邪神アバター」を除く、攻撃力が一番高いモンスターの攻撃力＋１００ポイントの数値になる。

「さあ、バトルだ！《邪神アバター》で《海龍皇－リヴァイア》に攻撃！フィアーズノックダウン！」

真っ黒なドレッド・ルートの姿になったアバターが、闇を纏った拳を振り上げる。

「月沙！」

「死ねぇ！！」

「まだ死ねない！手札の《氷結界の宣教師》の効果発動！水属性モンスターの戦闘破壊を無効にして、戦闘ダメージをライフの回復に変える！」

私が《天よりの宝札》を使われる前から手札に温存しておいたカードを突き出すと、白と青の法衣を着た男性のモンスターが現れて青い結界を張ってくれた。結界はアバターの拳を受け止め、闇のエネルギーを水色のエネルギーに変換して吸収していった。

月沙　ＬＰ／１２００↓４６００

「逆に回復しただと！？」

「このためにあえて《海龍の神殿》を早めにフィールドから離したのか！」

少しでも多くライフを回復するべきだからね。そして、効果はこれだけじゃない。

「そして、攻撃を受けたモンスターと手札のこのモンスターを墓地に送り、合計レベルと同じレベルを持つ氷結界のシンクロモンスターをシンクロ召喚扱いで特殊召喚する！」

《氷結界の宣教師》
効果モンスター（チューナー・オリジナル）
星３／水属性／魔法使い族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ１３００
自分フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターが相手モンスターに攻撃された場合、手札にあるこのカードを相手に見せて発動する事ができる。
その戦闘ダメージとモンスターの戦闘破壊を無効にし、無効にした数値分だけ自分のライフポイントを回復する。
その後、攻撃されたモンスターと手札のこのカードを墓地に送り、そのレベルの合計と同じレベルの「氷結界」と名のついたシンクロモンスター１体をエクストラデッキからシンクロ召喚扱いで特殊召喚する。

「レベル６《海龍皇－リヴァイア》にレベル３《氷結界の宣教師》をチューニング！」

宣教師が３つの青い輪になり、リヴァイアが中を潜り６つの星に変化する。そして、光の柱となった。

「封印されし綿津見の槍が、氷壁を砕き唸りを上げる！秘めたる力を解き放て！」

☆６＋☆３＝☆９

「シンクロ召喚！邁進せよ！《氷結界の龍　トリシューラ》！」

光の柱から、銀色の鎧を纏う三つ首の氷龍が飛び出した。私の切り札だ。

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＤＥＦ／２０００→１０００

『『『ゴギャアアァァァ！』』』

「そのモンスターは…！？」

「頼むよ、トリシューラ！トリシューラがシンクロ召喚に成功した時、相手のフィールド・墓地・手札からカードを１枚ずつ除外する！選択するのは、フィールド上の《邪神ドレッド・ルート》、墓地の《黄泉ガエル》、１番右の手札の３枚！トリニティ・バイス！」

『『『ギャオオォォォォォォ！！』』』

トリシューラが３つの口から青い光線を放ち、邪神もろともカードを次元の彼方に飛ばした。ＯＣＧの邪神は特殊召喚できないから、これでもうドレッド・ルートはフィールドに戻れない。

「よし！これで攻撃力と守備力は元通りだぜ！」

《ラヴァル・ガーディアン》　ＤＥＦ／１４００→２８００
《氷結界の龍　トリシューラ》　ＤＥＦ／１０００→２０００
「おのれ…！だが、アバターの攻撃力と守備力はフィールド上で１番攻撃力が高いモンスターの攻撃力＋１００になる！」
ドレッド・ルートの形を変化させて、アバターは真っ黒なトリシューラの姿に変化した。
《邪神アバター》　ＡＴＫ／４１００→２８００
「また姿を変えやがった…！」
「カードを2枚セットしてターンエンドだ！」
尾形
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《邪神アバター》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／リバース×２
「私のターン！」
私達は2ターンの間魔法と罠を使えない。そして、アバターにモンスター効果は効かない。2ターンの間何とか耐えなくちゃいけない。
「（2ターンも待つ必要はねえ。2ターンで終わらせる！）こいつはエンドフェイズ時に破壊される代わりにリリースなしで召喚でき

る！《ラヴァル・ランスロッド》を召喚！」

炎の原始的な槍を持つラヴァルの戦士が現れた。シンクロ召喚を狙うつもり？

《ラヴァル・ランスロッド》　ＡＴＫ／２１００

「そして、墓地のラヴァルが３種類以上の時、チューナーモンスター《ラヴァル・コアトル》を手札から特殊召喚できる！」

続いて、赤い翼と細くて小さな黄色い体を持つ、頭の大きい翼竜が現れた。

《ラヴァル・コアトル》
チューナー（効果モンスター）
星２／炎属性／炎族／ＡＴＫ１３００／ＤＥＦ　７００
自分の墓地に「ラヴァル」と名のついたモンスターが３種類以上存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

《ラヴァル・コアトル》　ＡＴＫ／１３００

「レベルの合計は８か…」

「行くぜ！レベル６《ラヴァル・ランスロッド》にレベル２《ラヴァル・コアトル》をチューニング！」

コアトルが２つの赤い輪に、ランスロッドが６つの星にそれぞれ変化し、光の柱へと姿を変える。

「真紅の烈火が、火竜の魂と共鳴する！覚悟の炎よ、燃え上がれ！」

☆６＋☆２＝☆８

「シンクロ召喚！焼き尽くせ！《ラヴァルフレイム・ドラゴン》！」

青い宝玉を胸に埋め込み、赤い模様が刻まれた赤茶色の火竜が、赤い翼を広げて光の柱から飛び出した。

《ラヴァルフレイム・ドラゴン》　ＤＥＦ／２２００

すると、アバターがそれに反応して黒い《ラヴァルフレイム・ドラゴン》へと姿を変えた。

《邪神アバター》　ＡＴＫ／２８００→３１００

「いちいち姿を真似やがって…いけ好かねえモンスターだ。《ラヴァルフレイム・ドラゴン》の効果発動！１ターンに１度攻撃を放棄する代わりに、墓地の炎属性モンスター１体につき２００ポイントのダメージを与える！墓地の炎属性モンスターは１０体！２０００ポイントのダメージを受けてもらうぜ！」

２０００ポイント…。【ラヴァル】は墓地肥やしが早いから一気に火力を上げられる。これならラヴァルフレイムさえ守り切れば…！

「行け、ラヴァルフレイム！バーンド・フレア！」

ラヴァルフレイムが赤い火球を吐き出す。これで尾形のライフはさらに半分に…。

「永続罠（シャドー・リフレクト）を発動！闇属性モンスターが存在する時に発動でき、効果

ダメージを全て相手に反射する！」

《シャドー・リフレクト》
永続罠（オリジナル）
自分フィールド上に闇属性モンスターが表側表示で存在する場合に発動する事ができる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分への効果ダメージは代わりに相手が受ける。

「何！？」

「そんな！？」

地面から黒い壁が伸びて、赤い火球を受け止めた。そして、火球が黒く染まっていく。

勇香の残りライフは１２００。２０００ダメージなんて受け止められない…！

「これでまずは1人！くたばれ！」

やがて、真っ黒に染まった火球が打ち返された。その先には勇香がいる。

「（しまった！対抗策がねえ…！）」

このままじゃ勇香が…！私が護るんだ！

「そうはさせない！手札の《氷結界の異能者》の効果発動！カードの効果でライフが変動する時、このモンスターを手札から捨てる事

でその対象を変更できる！」

《氷結界の異能者》
効果モンスター（オリジナル）
星２／水属性／サイキック族／ＡＴＫ　７００／ＤＥＦ　６００
カード効果によって自分または相手のライフが変化する場合、このカードを手札から捨てて発動する事ができる。
その効果の対象を自分が選択する。

「勇香に手出しなんてさせない！その効果ダメージは私が受ける！」

「月沙！？」

黒い火球が方向を変え、私に向かってくる。ライフは私が断然多い。勇香を護れるなら、それくらい安いもの。

私は迫りくる衝撃に備えて、腕を交差させた。

カアアアアアアアアアア！

「「「！？」」」

私に攻撃が届く事はなかった。

突然ズボンの右ポケットが強く光り出し、その光が黒い火球の威力をみるみる弱めていったからだ。そして、私に届く前に完全に消滅した。

月沙　ＬＰ／４６００→２６００

「攻撃が消えた…？」

「な、何だその光は！？」

「これって……っ！もしかして…」

私は右ポケットに手を突っ込んで、ある物を取り出して確認した。

「やっぱり…リンドウから貰った紋章だ！」

案の定、光っているのは氷結界の紋章だった。この町に着く直前に、リンドウから貰った物だ。

キュウゥゥウ…

「え？」

今度は、手札にあるスイレンのカードが青く輝き始めた。

『姫様、これは一体…！？』

変化に気づいてスイレンも一時的にカードから飛び出してきた。

驚くのも無理ないよね。

『スイレン！いや、私にもさっぱり…』

キュイィィィ…

今度は、紋章の中心から光の粒子が飛び出した。それが段々形になっていき、やがて2枚のカードに変化した。

「これは…！？」

『え！？これって…私…！？』

片方のイラストにはスイレンらしき人物が描かれている。そして、もう1枚は見るのも懐かしい種類のカード。

2枚のカードは独りでにエクストラデッキに入っていった。それを見届けたかのように、スイレンのカードと紋章の光も途絶えた。

「よ、よくわかんねえけど…とりあえず、ターンエンドだ！」

勇香
ＬＰ／１２００
手札／５
モンスター／《ラヴァル・ガーディアン》（ＤＥＦ／２８００）《ラヴァルフレイム・ドラゴン》（ＤＥＦ／２２００）
魔法・罠／リバース×１

「月沙、その…悪い。余計な手間かけちまった」

勇香が申し訳なさそうに謝ってきた。攻撃をまともに受けていてもいなくても、責めるつもりは全然ないけど。

「気にする必要ないよ。それに…」

紋章から出てきた2枚のカード。この状況を凌ぐには丁度いい。

「おかげでまだ戦える！私のターン！チューナーモンスター《氷結界の風水師》を召喚！」

薄紫と青の服を着て、鏡を持った茶髪の女性がフィールドに現れた。

《氷結界の風水師》　ＡＴＫ／　８００

「そして、私のフィールドに氷結界のチューナーが存在する時、手札から《氷結界の白猫》を特殊召喚できる！」

尻尾の先と４つの足首に氷を纏った白猫が飛び出した。首には氷結界の紋章を掛けている。

《氷結界の白猫》
効果モンスター（オリジナル）
星３／水属性／水族／ＡＴＫ１３００／ＤＥＦ１４００
自分フィールド上に「氷結界」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
このカードが儀式・融合・シンクロ・エクシーズ召喚に使用された場合、自分はデッキからカードを１枚ドローする。

《氷結界の白猫》　ＡＴＫ／１３００

これはフォッタから貰ったカードの内の1枚。そして、これで準備は整った。

「また性懲りもなくシンクロ召喚か？どんなカードを手に入れたかは知らないが、この最強の邪神を倒す事は不可能だ！」

「確かに、魔法・罠が使えない上にモンスター効果も効かないんじゃ、常に1番攻撃力が高いアバターを倒すのは無理だ…」

そう、これだけだと勝てない。例えブリューナクを出したところで、邪神には対抗できない。でも…。

「…誰も『シンクロ召喚する』なんて言ってないよ」

「は？」

「何？」

私が今から出すのは、シンクロモンスターじゃない。融合モンスターでも、儀式モンスターでもない。

「行くよ。レベル3の《氷結界の白猫》と《氷結界の風水師》を…

『オーバーレイ』！」

「『オーバーレイ』？」

フィールドの中央に時空の穴が開き、白猫が白、風水師が水色の光になって中に飛び込んでいく。

「これはまさか…！？」

尾形は知ってるみたい。私と同じ世界の出身だから当然か。

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆3×☆3＝★3

エクストラデッキから1枚のカードを引き抜いて翳した。枠の色は紫でも白でもなく、『黒』。

「『エクシーズ召喚』！現れよ！《氷結界の虎将　メイディス》！」

時空の渦から、氷の装飾が入った水色の杖を持つ、青と水色の服を着た銀髪の女性が飛び出した。周りには2つの青く光る球体が飛び交っている。

《氷結界の虎将　メイディス》
エクシーズ・効果モンスター（オリジナル）
ランク3／水属性／魔法使い族族／ＡＴＫ１９００／ＤＥＦ１０００
レベル3モンスター×2
1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で、手札の魔法・罠カード1枚を墓地に送り、そのカードの効果をこのカードの効果として発動する。
この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

《氷結界の虎将　メイディス》　ＤＥＦ／１０００　ＯＵ／２

「やはりエクシーズ召喚か…！」

「エクシーズ召喚…？」

「同じレベルのモンスター2体の上に重ねて出す、私の元いた世界での召喚方法だよ。素材になったモンスターは、オーバーレイ・ユニットとしてエクシーズモンスターの下に重なって残る。そして、レベルの代わりにランクを持っていて、レベルに関する効果は受けない」

「そんなモンスターがいるのか…！？」

転生してからは、エクシーズモンスターは1度も目にしていない。
私にとっては随分懐かしい種類だ。

「行くよ！《氷結界の白猫》が儀式・融合・シンクロ・エクシーズ素材になった時、カードを1枚ドローする！そして、《氷結界の虎将　メイディス》の効果発動！オーバーレイ・ユニットを1つ取り除く事で、手札の魔法か罠を墓地に送り、そのカードの効果をこのモンスターの効果として発動する！」

《氷結界の虎将　メイディス》　OU／2→1

「何！？」

「そうか！モンスター効果として発動するならアバターの効果に邪魔されねえ！」

「手札から魔法カード《融合》を墓地に送り、効果発動！手札の《氷結界の舞姫》とフィールド上の《氷結界の龍　トリシューラ》を融合！スイレン！」

『はい！参ります！』

フィールド上にスイレンが飛び出し、メイディスの周りの青い球体が1つトリシューラに入り込んだ。すると、トリシューラが青い光になってスイレンを囲み、激しく輝き出した。

これが、2枚目の紋章のカード！

「融合召喚！《氷結界の竜天女　セイブ・クイーン》！」

光が弾け飛ぶと、白い羽衣を纏ったスイレンが宙に浮いていた。
背中からはトリシューラの翼が生えていて、左手は青い柄を付けた両刃の長剣が、右手には白と青にカラーリングされた銃がそれぞれ握られている。

《氷結界の竜天女（りゅうてんにょ）　セイブ・クイーン》
融合・効果モンスター（オリジナル）
星１２／水属性／魔法使い族／ＡＴＫ４０００／ＤＥＦ２８００
「氷結界の舞姫」＋「氷結界の龍　トリシューラ」
このモンスターは融合召喚以外の方法では特殊召喚できない。
このカードは相手の魔法・罠カードの対象にならない。
１ターンに１度、以下の効果から１つ選択して発動する事ができる。
●手札を任意の枚数墓地へ捨て、捨てた数だけ相手フィールド上に存在するカードを選択して破壊する。
●自分の墓地に存在する「氷結界」と名のついたモンスター１体を除外し、自分の墓地に存在する水属性または光属性モンスター１体を特殊召喚する。

《氷結界の竜天女　セイブ・クイーン》　ＤＥＦ／２８００

「《氷結界の舞姫》の進化形態だと！？」

「こいつはまた凄えのが出てきたな…！」

『これが紋章のカードの力…！』

勇香が笑みを浮かべて呟き、スイレンは自分の姿を見回している。

「だが、邪神を超える事はできない！」

すると、またアバターが姿を変えた。黒いセイブ・クイーンだ。

《邪神アバター》　ＡＴＫ／３１００→４１００

『う…自分の姿を真似されるのはいい気持ちがしませんね…』

「気にしてたら切りがないよ。とにかく、戦おう！」

『はい！』

アバターは倒せないけど、スイレンの効果は十分通用する！

「セイブ・クイーンの効果発動！手札を任意の枚数捨てる事で、その枚数分だけ相手フィールド上のカードを破壊する！手札を1枚捨てて、《シャドー・リフレクト》を破壊！ブルーレイ・スラッシュ！」

『ハァッ！』

スイレンが刀身に青いエネルギーを込めて、剣を縦に降って青い光を叩きつける。青い斬撃はそのままソリッドビジョンの《シャドー・リフレクト》のカードに命中して、跡形もなく破壊した。

「ちっ、こうも早く破壊されるとは…」

「ターンエンド！」

月沙
ＬＰ／２６００
手札／１
モンスター／《氷結界の虎将　メイディス》（ＤＥＦ／１０００）
ＯＵ／１）《氷結界の竜天女　セイブ・クイーン》（ＤＥＦ／２８００）
魔法・罠／リバース×１

エクシーズモンスターのメイディス、新たな力を手に入れたスイレン、戦闘では無敵の《ラヴァル・ガーディアン》、勇香のエースモンスターの《ラヴァルフレイム・ドラゴン》。まだ勝負は終わってない。私達はまだ戦える！

「ちぃぃぃっ！俺のターン！《邪神アバター》で《ラヴァルフレイム・ドラゴン》を攻撃！」

スイレンの姿をしたアバターが、右手の銃から黒い闇の光線を放った。ここでラヴァルフレイムが破壊されるとダメージ源が…！

「悪いが、簡単に破壊させるつもりはねえよ！墓地の《ラヴァル・ガードナー》の効果発動！こいつを除外する事で、私の場のラヴァル１体はこのターン戦闘では破壊されない！」

「何だと！？」

《ラヴァル・ガードナー》
効果モンスター（オリジナル）
星３／炎属性／戦士族／ＡＴＫ　６００／ＤＥＦ１３００

戦闘ダメージ計算時、自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する事ができる。
自分フィールド上に存在する「ラヴァル」と名のついたモンスター1体はエンドフェイズ時まで戦闘では破壊されない。
その後、自分のデッキの上からカードを1枚墓地へ送る。

「何!?」

赤い盾を持つ茶色のモンスターの幻影が現れ、ラヴァルフレイムへの攻撃を防ぎ切った。

「いつの間にそんなカードを…!?」

「《ラヴァル・グレイター》の効果で墓地に送っといたんだよ!そして、デッキトップからカードを1枚墓地に送る!」

勇香は効果を宣言してからめくったカードを確認した。すると、いいカードが来たのか口元を少し緩めた。

「来たぜ!墓地に送られた《ラヴァル炎火山の侍女》の効果発動!こいつが墓地に送られた時に墓地にこいつと同名以外のラヴァルがいる場合、デッキからラヴァル1体を墓地に送る事ができる!デッキから2枚目の《ラヴァル炎火山の侍女》を墓地へ!そして、今墓地に送った侍女の効果で3枚目の侍女を墓地へ!さらに、3枚目の効果で《ラヴァル・タートル》を墓地に送る!」

勇香の墓地に次々とモンスターが溜まっていく。墓地肥やしのスピードが私達の中で1番早いだけの事はある。これで、ラヴァルフレイムの火力がさらに上がった。

「運のいい奴め…。カードを1枚セットしてターンエンドだ！」

尾形
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《邪神アバター》（ＡＴＫ／４１００）
魔法・罠／リバース×２

「私のターン！《ラヴァルフレイム・ドラゴン》の効果発動！1ターンに1度、墓地の炎属性モンスター1体につき２００ポイントのダメージを与える！私の墓地にいる炎属性モンスターは全部で１３体！よって、２６００ポイントのダメージを与える！バーンド・フレア！」

ラヴァルフレイムがさっきよりも巨大な火球を吐き出した。決まれば大ダメージ。どうなる…？

「罠カード《ハーフ・ゲイン》！効果ダメージを半分にする！」

《ハーフ・ゲイン》
通常罠（オリジナル）
自分が効果ダメージを受ける時に発動する事ができる。
その効果ダメージを半分にする。
その後、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

「ぐおぉっ！」

赤い火球が半分くらいのサイズになり、尾形に命中した。半分でも威力は十分だ。

尾形　ＬＰ／４０００→２７００

「ぐぅ…その後、カードを１枚ドローする！」

「ダメージが減っちまったか…。カードを２枚セットしてターンエンド！」

勇香
ＬＰ／１２００
手札／３
モンスター／《ラヴァル・ガーディアン》（ＤＥＦ／１４００）《ラヴァルフレイム・ドラゴン》（ＤＥＦ／２２００）
魔法・罠／リバース×３

「これで私は２ターン経った！ようやく自由に戦えるぜ！」

勇香の方はアバターの制約が切れたから、もう自由に魔法・罠を使う事ができる。そして、このターンが終われば私も…！

「私のターン！《氷結界の虎将　メイディス》の効果発動！オーバーレイ・ユニットを１つ取り除き、手札の魔法・罠を墓地に送ってメイディスの効果として発動する！」

《氷結界の虎将　メイディス》　ＯＵ／１→０

メイディスの周りを飛んでいるもう１つの球体が消滅したのを確認してから、今引いたカードを表にした。

「手札の魔法カード《マジック・プランター》を墓地に送って効果発動！カードを２枚ドローする！効果の発動だけだから、永続罠を

墓地に送る『発動コスト』は必要ない！」

「（エドのダイヤモンドガイみたいな効果だな…）」

「そして、セイブ・クイーンの効果発動！手札を手札を1枚捨てて、残りのリバースカードを破壊する！ブルーレイ・スラッシュ！」

『他のカードに邪魔はさせません！』

スイレンがもう1度青い斬撃を放つ。リバースカードは破壊できたけど、その瞬間尾形の口角がつり上がった。

「破壊された《黄金の邪神像》の効果発動！セットされた状態で破壊された時、《邪神トークン》を1体特殊召喚する！」

《黄金の邪神像》
通常罠
セットされたこのカードが破壊され墓地に送られた時、自分フィールド上に「邪神トークン」（悪魔族・闇・星４・攻／守１０００）を1体特殊召喚する。

尾形のフィールドに、金色の蛇に似た悪魔が現れた。う…ダミーだったか…！

《邪神トークン》
トークン
星４／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ１０００

《邪神トークン》　ＤＥＦ／１０００

「リリース用のトークン…。カードを1枚セットしてターンエンド！」

月沙
ＬＰ／２６００
手札／１
モンスター／《氷結界の虎将　メイディス》（ＤＥＦ／１０００）《氷結界の竜天女　セイブ・クイーン》（ＤＥＦ／２８００）
魔法・罠／リバース×２

私もアバターの制約が切れて、魔法と罠を自由に使えるようになった。後は上手くダメージを与えれば…！

「俺のターン！カードを1枚伏せ、魔法カード《命削りの宝札》を発動！手札が5枚になるようにカードをドローする！」

「ここで一気に5枚のドローかよ…」

「…ククク…」

「「？」」

尾形は引いたカードを確認すると、不気味に笑い始め…

「ハハハハハハハ！！」

狂ったように笑い出した。

「な、何がおかしいんだよ…？」

「なぁに、貴様らに地獄を見せるのに格好のカードが来たのさ」

「何…？」

「魔法カード《邪神闇撃（じゃしんあんげき）》！邪神１体の攻撃力の半分のダメージを相手に与える！」

《邪神闇撃》
通常魔法（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在する「邪神」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える。

「《邪神アバター》の攻撃力は４１００！２０５０のダメージだ！」

「２０５０！？」

相手は闇の力を使っている。そんなダメージを食らったら…。

「効果ダメージは邪魔だな。天原勇香、貴様に２０５０のダメージを与える！」

「何！？」

「そんな！？」

勇香のライフは１２００しかないのに…！それに、効果ダメージを防ぐ手段がもうない！

「貴様が死ぬ事で月沙に絶望を与える事ができる！復讐の礎となるがいい！」

スイレンの姿をしたアバターが、右手の銃から漆黒の砲撃を撃ち出す。そんな…勇香が…！

「勇香！！」

「ちっ…！罠発動！」

3枚のリバースカードの内の1枚が表になったけど、確認する前に勇香とモンスターもろとも砲撃に飲み込まれた。

「ぐあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「勇香ぁぁぁぁ！！」

『勇香様！！』

「ククク…まずは1人…！」

そ…んな…勇香が…勇香が死…

「……ざっ…けんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「「『！？』」」

ゴォオォオォオォ！！

未だに続いている砲撃から赤い何かが噴き出したかと思うと、みるみる砲撃を覆っていった。あれは…炎だ。

すると、炎が砲撃を全部焼き尽くして、その後内側から吹き飛んだ。中心には、炎を灯した右手で砲撃を振り払った勇香がいる。

勇香　ＬＰ／２１５０

「勇香！？」

『勇香様！？』

「馬鹿な！なぜライフが増えている！？」

「さっき発動させた《デストラクト・ポーション》の効果だ…。自分のモンスターを破壊して、そのモンスターの攻撃力分のライフを回復する…」

《デストラクト・ポーション》
通常罠
自分フィールド上に存在するモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターを破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分だけ

自分のライフポイントを回復する。

「ハァ、ハァ…《ラヴァルフレイム・ドラゴン》を破壊して、先にライフを３０００ポイント回復させたんだよ…」

確かに、ラヴァルフレイムがフィールドにいない。助かってよかった…。

「今のは結構きつかったな…。ライフは半分以上あるってのに、おかげでぼろぼろだ…」

『ユウカ、大丈夫!?怪我痛くない!?』

「ロコナ…。心配すんなっつったろ?ライフが残ってりゃ、後はどうにでもなる」

心配して墓地から飛び出したロコナを、勇香は炎を消した右手で軽く撫でてあげた。今の勇香はさっきの一撃でぼろぼろだ。服も所々破れていて、特に上着の損傷が酷い。

「勇香…よかった…」

『ご無事で何よりです…!』

「そう簡単にくたばってられねえしな」

「フン…まあいい。《邪神アバター》で《氷結界の虎将　メイディス》に攻撃!」

漆黒の砲撃が、今度はメイディスを捕らえる。守備表示だから、

一応ダメージはない。

「カードを3枚セットしてターンエンドだ！」

尾形
ＬＰ／２７００
手札／１
モンスター／《邪神アバター》（ＡＴＫ／４１００）
魔法・罠／リバース×４

「貴様は闇の一撃を受けたはず！なのになぜ倒れない！なぜ立っていられる！」

「私は鍛えてあるからな。タフなんだよ」

そう言って、勇香はぼろぼろになった自分の上着を右手で破り捨てた。ノースリーブの白いシャツが日の光に晒される。

「たった2発食らったくらいじゃ倒れやしねえ！」

「ちっ…」

「行くぜ！私のターン！」

ラヴァルフレイムを蘇生できれば、大ダメージを与える事ができる。勇香、どうするの…？

「まあいい。罠発動ぉ！《ダークネス・マジック》！」

『《ダークネス・マジック》？』

「俺のフィールド上に邪神が存在する時、自分のモンスターを1体リリースして効果発動！墓地の魔法カードを除外して、その効果を発動する！」

《ダークネス・マジック》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に「邪神」と名のついたモンスターが表側表示で存在する時、自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースして発動する事ができる。
自分の墓地に存在する魔法カード1枚を発動する。

「《邪神トークン》をリリースし、墓地の《邪神闇撃》を選択！アバターの攻撃力の半分、２０５０ダメージを、波星月沙！貴様に与える！」

「！」

『姫様に！？』

「今度は月沙かよ…！」

『ツキサ！』

防げないけど、大丈夫。私のライフは２６００。デュエルには負けない。後は、私自身が攻撃に耐え切れるかどうか…！

「2回だ…」

「？」

「月沙にダメージを与えるのは、これがやっと2回目…ククク…」

尾形はまた不気味に笑い出した。正直、気味が悪い。

「だから…何だって言うの？」

「嬉しいんだよ。貴様を痛ぶれるのが」

「え…？」

「追跡…殺害…どれも快感だが、貴様を痛ぶるのが何よりの至福だ。もう1度ここまで来るのが長かった…。だが、ようやくまたこの機会が訪れた。なのに、全然ダメージを与えられない」

そして、私に邪悪な笑みを向ける。残忍で、凶悪な…。

「もっと楽しませろよ…！」

ゾクッ

「…っ！」

全身に寒気がが走った。一瞬体が固まる。

「何なんだよ、あいつ…」

『イカれてる…』

『あの人怖い…』

すると、私の周囲から闇色の光が、私を囲むように地面から伸びてきた。下から私を攻撃するつもりだ。

「これは邪神の力をふんだんに織り混ぜた一撃だ。もっといい悲鳴を聞かせてくれ」

体が上手く言う事を聞かない。手札を持つ手が震える。冷や汗が流れる。

――――『怖い』――――――

はっきり感情を認識すると、震えが強まった。なぜかはわからないけど…怖い。怖いのに…視線を逸らせない。

「月沙…！？」

「そうだ！もっとだ！もっといい顔を見せろ！恐怖に歪んだその顔を！」

これ以上、動けない。まばたきしかできない。ただ怖くて、怖くて仕方ない。

『姫様、しっかりしてください！』

『ツキサ、大丈夫！？』

「（駄目だ、完全に怯えてやがる！無理もねえ。あんなキチガイに好き放題言われたんじゃ、誰だって身が持たねえはずだ…！）おい、月沙！とりあえず落ち着け！」

「う……あぁ……」

「くそ、まるで耳に入ってねえ！」

言葉も満足に話せない。辛うじて、へたり込むのだけは耐えているけど…それ以外は何もできない。

怖い。怖くて動けない。話せない。何もできない…。

「さあ、《邪神の闇撃》を受けるがいい！」

そして、光の内側…私の足元から黒い闇が一斉に噴き出した。

「あぁあぁぁぁぁあぁあぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

月沙　ＬＰ／２６００→　５５０

「月沙ぁ！！」

『姫様！！』

『ツキサ！！』

「がぁ…ああ…うあぁぁ…ぁ…ぐ…！」

立っている事もできなくなって、両膝をついた。それでも、激痛と恐怖は止まない。

「おい、てめえ！さっさと攻撃を止めろ！いくら何でも長すぎるだろ！」

『ツキサが死んじゃうよ！』

『そうですよ！このままだと姫様が…！』

「指図をするな！ギリギリまで痛ぶってこそ意味がある！気が済んだらやめてやるよ！」

『そんな…！？』

「……っ！！」

何も聞こえない。怖くて痛くて苦しくて、もう何が何だかわから

ない。

「あぁぁ…が…ぐあ……ぁ…！」

だ…めだ……もう……意識…が……。

…みん……な……ご……め……。

「……う……」

目が覚めた。私はいつの間にか横になって気を失ってたみたい。

「ここ…は……」

痛みで軋む体を持ち上げて座り込む。辺り一面灰色で、それ以外は何もない。

「そうだ…私、尾形からダメージを受けて……っ！」

思い出した瞬間また寒気が走って、思わず両腕で自分の体を抱きしめた。

怖い…怖いよ…。今の私じゃ…とても、戦えない…。

『月沙』

私が怯えていると、突然誰かの声が聞こえた。

「……誰…？」

『我だ』

もう1度聞こえた。すると、目の前に青い光の粒子が集まってきた。それは三つ首の龍を象っていく。

やがて、完全に具現化した。その姿は、私もよく知っている。

「トリ…シューラ…？」

私のエースモンスター、トリシューラだ。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第67話　冒頭で手に入れた謎のアイテムは大抵の場合伏線だったりする（後書

☆今回のキーカード☆

ハラルド「よくここまで読んでくれたな。『今回のキーカード』の時間だ。今回はチーム・ラグナロクがお送りする」

ブレイブ「一纏めかよ！？あ、メンバーはハラルド、ドラガン、そしてこの俺、ブレイブな！」

ドラガン「本編では、完全体の邪神なるものが現れたな」

ハラルド「我らの星界の三極神にも勝るとも劣らない力を持っているようだ。月沙達はどう打ち破る？」

ブレイブ「でも、肝心の月沙が怯えちゃってんだけど…」

ドラガン「恐怖など誰にでもある！それを乗り越える事で更なる高みに到達する事ができるのだ！」

ハラルド「言わば、これは月沙に課せられた試練。乗り越えなければ明日はない」

ブレイブ「何そのデッド・オア・アライブ…？まあ、状況からして間違っちゃいないけど…」

ハラルド「それでは、カード考察に入るとしよう。今回紹介するのは、三邪神の最高位《邪神アバター》だ。ここではＯＣＧ版を紹介

する」

《邪神アバター》
効果モンスター
星１０／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　？／ＤＥＦ　？
このカードは特殊召喚できない。
自分フィールド上に存在するモンスター3体を生け贄に捧げた場合のみ通常召喚する事ができる。
このカードが召喚に成功した場合、相手ターンで数えて2ターンの間、相手は魔法・罠カードを発動できない。
このカードの攻撃力・守備力は、フィールド上に表側表示で存在する「邪神アバター」を除く、攻撃力が一番高いモンスターの攻撃力＋１００ポイントの数値になる。

ハラルド「モンスター3体のリリースでのみ召喚する事ができるモンスターだ。レベルを下げてもリリースに必要な数は変化しないので注意だ」

ブレイブ「召喚してから相手の方で数えて2ターンの間は魔法・罠を封じる事ができる。相手はモンスター効果だけで戦うしかなくなるってわけだ。ただ、召喚前から発動してある永続魔法と永続罠は無効化できないけどな」

ドラガン「そして、最大の特徴が攻撃力と守備力の変化だ。常にフィールド上の1番攻撃力が高いモンスターより１００ポイント高い数値になる」

ハラルド「効果自体を無効化されない限り、戦闘では無敵だ。この効果は常に1番最後に適用されるため、《オネスト》などを使用してもすぐにそれを上回る」

ドラガン「ただ、常に自身以外の攻撃力と守備力を半分に《邪神ドレッド・ルート》だけは別だ。後にフィールドに出た方が最後に効果を適用されるから、ドレッド・ルートをアバターより後に出せば、アバターの攻撃力はドレッド・ルートの効果で半分になる」

ブレイブ「まあ、モンスター効果と永続魔法、永続罠にさえ気をつけていれば、こんだけ頼もしいモンスターもなかなかいないな！」

ハラルド「今回はここまでにしよう」

ドラガン「強大な力を持つ邪神に対して月沙達がどう立ち向かうのか、見届けさせてもらうぞ」

ブレイブ「…なあ、今思ったんだけどさ、今回俺達が呼ばれたのって『神』関連だからじゃないだろうな？」

ハラルド「……」

ドラガン「……」

ブレイブ「あれ？まさか図星か？」

ドラガン「感想はいつでも受け付けているぞ。暇があったら書き込んでいってくれ」

ブレイブ「おい、ちょっと！無視かよ！？質問に答えてくれたって…」

ハラルド「次回も楽しみにしていてくれ」

ブレイブ「勝手に終わらせるなぁぁぁぁ！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

今回月沙が使用した《氷結界の竜天女　セイブ・クイーン》は言羽・D・カタストロフィ一さんが投稿してくださったオリカです。言羽・D・カタストロフィ一さん、ありがとうございました。

はい、エクシーズ召喚出しました。次回で重要になってくるので、ここで出しておいた方がいいと思ってやりました。現時点では、エクシーズモンスターを持っているのは月沙のみです。まだデュエルしていない穏健派のメンバーも使うかもしれませんが…。

では、また次回！

第６８話　仲間を頼る勇気も大切（前書き）

☆精霊の呟き☆

リーシェ『恐怖で戦意を失った月沙の前に現れたトリシューラ。パートナーの言葉に月沙は何を思う？』

ウィン『ｖｓ尾形戦、ついに決着！』

ヒジュラ『んじゃ、今回の締めの言葉はＴＮＴ　ＮＴＴさんのリクエストで行くぜ。ここだけの話だが、他にも紅刃に「俺は生きて、月沙と添いとｇ』

紅刃「言わせるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ヒジュラ『ごはぁっ！？』

リーシェ『紅刃！？なぜここに…！？』

ウィン『このコーナーの登場人物は精霊限定なんだけど…』

紅刃「んなこたどうでもいい！何没案暴露しようとしてんだ！つーか、ＴＮＴ　ＮＴＴさんに限らず何で俺へのリクエストが多いんだよ！？しかもほとんど月沙関連じゃねえか！」

ヒジュラ『いつつ…さっさと月沙にコクれって事だろ』

紅刃「できたら苦労しねえよ！」

ヒジュラ『とりあえず、紅刃に宛てられた没案をここで一挙公かごっ！？』

紅刃「させるかボケが。さあ、てめえの罪を数えろ。今すぐぶった斬るぞコラ」

ヒジュラ『冗談だっての…』

ウィン『とにかく、第６８話スタートだよ！

ガチの力を思い知れ！』

紅刃「…セイブ・クイーンと今回出てくるキーカードって、ガチなのか…？」

リーシェ『さあな…』

第６８話　仲間を頼る勇気も大切

ＳＩＤＥ／月沙

辺り一面灰色だけの世界に、私とトリシューラだけがいる。トリシューラはテレパシーみたいなもので話し掛けてきた。

『ここはお主の精神世界。我が意識を一時的にここへ飛ばした』

「精神世界…。ここが、私の…」

灰色だけで何もない、殺風景な場所。でも、特に何も思わない。

トリシューラは人の言葉を話せるけど、普段はあまり人前で話さない。

『…怖いか？』

「え…？」

『尾形が怖いかと聞いている』

「……怖いよ…。怖くて怖くて、どうしようもない。勇香が正面から立ち向かってるのに、スイレンとロコナもちゃんと戦ってるのに…。私、何やってるんだろう…」

あれだけみんなを護りたいとか思っておきながら、怖くなって…何もできなくなった。あの中で、怖いとしか考えられなくなった。

『そうか…』

「私は……もう、戦えない。怖くて、動けないよ…」

『…恐怖は、恥ずべき事ではない』

「え？」

トリシューラから返ってきた言葉は、意外なものだった。

『恐怖するという事は、己の弱さを知るという事だ。それが自らの経験となり、成長の糧となる』

「弱さを知る…」

『だが、引くわけにはいかない時もある。今がその時ではないのか？』

「…でも、私じゃもう尾形を倒せない。私なんかじゃ…」

「「「ゴギャアアアアアア！！！」」」

「っ！？」

口ごもる私の言葉を遮るように、トリシューラが思い切り吠えた。いきなりの咆哮に、心臓がはね上がりそうだった。

『お主は恐怖というものを知った。己の弱さを知った。だが、それで終わりではあるまい。お主の望みは何だ？地面に這いつくばって

いるだけでは叶わぬものではないのか？』

望み…願い…。私の願いは…。

「……護りたい……」

『…！』

「護りたい。恨みとかそんなんじゃない。このままだと、尾形は私の大切な人達を殺そうとする。そんな事はさせたくない。でも、こんな私じゃ…」

私は1度、勝負を投げ出しかけた。今でもまだ怖い。そんな私に、護る事なんて…。

『…以前、暴走する我を止めた事を覚えているか？』

「え？」

『あの時の我は封印を解かれたばかりで、破壊しか頭になかった。倒すべき敵を倒した後も、氷結界の里を荒らし回った。また封印されるかもしれないという可能性に恐怖を感じていたからだ』

「……」

『そこに、お主が現れた。お主は我に正面から向き合って宥めようとした。周りに危険だと言われても、暴れ回る我の攻撃を受けようとも、決して諦めずに我を受け入れようとした。その姿に、我はようやく落ち着く事ができたのだ。そして、封印するでもなく、兵器のように扱うでもなく、友人として接してくるお主こそが、我を恐

怖の底から救ってくれた』

トリシューラの話で、私は昔の事を思い出す。あの時はただ、トリシューラと解り合いたくて必死だった。何もかも破壊するなんて事をさせたくなかった。

『我1体では、恐怖から抜け出し恐怖を糧とする事ができなかった。それだけの「勇気」を持てなかった。それを助けてくれたのは、他でもないお主だ。お主にもいるはずだ。お主を想ってくれる者が…』

私を想ってくれる人…。傍にいてくれる人…一緒に戦ってくれる人…。

『お主は独りではない。お主を想い、共に戦う者がいる。お主は恐怖のあまり、それを忘れている』

「…！」

『友に背中を預ける事も、また「勇気」というものだ。時には独りで戦わなければならない。だが、今はその時ではないはずだ』

…そうだ。私は『私じゃ』倒せないと思ってた。でも、『私達』なら…？

『お主にはスイレン、勇香、ロコナ、そして我もついている。誰しも独りで戦っているわけではない。誰1人欠けても、尾形に勝つ事はできない。もう1度、共に戦おうではないか』

「共に…」

目を閉じて、考える。

私は何で尾形が怖いんだろう?答えは…すぐに出た。

私は、心のどこかで罪悪感を感じていたんだ。

尾形があんな風になってしまったのは、間接的にだけど私が原因。私が1人の人間をあそこまで変えてしまった事が怖いんだ。そして、そのせいで大切な人達をたくさん失った。

だから、私がどうにかしなくちゃいけない。私だけで尾形を何とかするべきだ。いつの間にか、無意識にそう思うようになっていた。

でも、私は独りで戦ってなかった。

いつもスイレンとトリシューラが傍にいる。たくさんの仲間がいる。この前尾形と戦った時だって、将人に殴られてなかったら勝てなかった。

私に復讐したいなら、いくらでも向かってくればいい。でも、尾形の復讐の対象には私と関わる全ての人達も入っている。なら、私は絶対に許さない。

今はスイレンが、トリシューラが、勇香が、ロコナが、一緒に戦ってくれている。

護りたい人達がいるから、支えてくれる人達がいるから、私は戦えるんだ…!

目をゆっくり開けて、立ち上がる。まだ痛いけど、関係ない。

「トリシューラ、ありがとう。もう大丈夫」

『そうか。…いい目になったな。これならいいだろう』

「どういう事？」

私が問い掛けると、トリシューラの体から青い光が飛び出した。
光は素早く形を変えて、ある物に変化した。

「これって…！」

『我は伝説の水の龍。これは我の力を封じた石板だ』

それは、《ライトエンド・ドラゴン》の力を封じた石板とほとんど同じ物だった。違うのは、石板の模様がトリシューラに似ているところくらい。

『我は伝説の通りに他の龍達と共に戦っていた。それは最初に深い眠りについた時から隠し持っていた物だ。その後1度目覚めたものの、我の力を恐れた者達によって氷結界に封印された。当然、石板と共にな。故に、氷結界には我の伝説は伝えられていないのだ』

確かに、元々《天空の聖域》にライトエンドと石板があったなら、氷結界の里にトリシューラと一緒に石板があってもおかしくない。
でも、氷結界には石板も伝説もなかった。

『お主は我を救ってくれた。今度は我がお主を救う番だ』

ピシシッバキャアッ！

石板に亀裂が入り、砕け散る。青く光る2枚のカードを手に取ると、光が収まった。

一方はチューナー。もう一方はテキストもイラストもない枠だけの白いカード。初めて見るのに、自然と使い方が理解できた。

『共に戦おう、月沙』

「…うん、ありがとう。一緒に勝とう！」

「「「ギャオオォォォォォ！！」」」

トリシューラがまた吠えたところで視界が真っ白になり、感覚が一旦消えた。そして目を閉じた。

視界が真っ黒になり、また激痛が走り始める。精神世界から戻ってきたんだ。

「声が聞こえないな…。もう死んだのか？」

私は真っ直ぐ立ち上がり、目を閉じたまま自分の中の力を一思いに解き放った。

バシュウウゥゥゥ！！

「「『！？』」」

全身から発した青い光が闇を掻き消し吹き飛ばす。

「月沙！」

『姫様！』

『ツキサ！』

光を止めたところで、私は目を開いた。瞳の色は紫から青に変わっている。

『姫様、大丈夫ですか！？』

『服ぼろぼろだよ？痛い所とかない？』

「うん、大丈夫。それに、もう怖くないよ」

「ったく、心配掛けさせやがって…」

そういう勇香は、安心したように笑っている。…うん、やっぱり

私はまだ終われない。

「…フン、まあいい。楽しみが後になっただけだ」

尾形
ＬＰ／２７００
手札／１
モンスター／《邪神アバター》（ＡＴＫ／４１００）
魔法・罠／リバース×３

勇香
ＬＰ／２１５０
手札／４
モンスター／《ラヴァル・ガーディアン》（ＤＥＦ／２８００）
魔法・罠／リバース×２

月沙
ＬＰ／　５５０
手札／１
モンスター／《氷結界の竜天女　セイブ・クイーン》（ＤＥＦ／２８００）
魔法・罠／リバース×２

「罠カード《邪神の憎悪》！邪神がいる時のみ発動でき、このターン貴様はカード効果を発動できない！」

《邪神の憎悪》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に「邪神」と名のついたモンスターが表側表示で存在する時、スタンバイフェイズ時に発動する事ができる。

このターンのエンドフェイズ時まで、相手は魔法・罠カードの効果を発動する事ができない。

また魔法と罠が封じられた。使えるのはモンスター効果だけ…。

「面倒な…。《ラヴァル・ドッグ》を召喚！」

黄色い体に灰色の岩石みたいなのを纏った子犬が飛び出した。

《ラヴァル・ドッグ》
効果モンスター（オリジナル）
星２／炎属性／炎族／ＡＴＫ　６００／ＤＥＦ　２００
自分フィールド上に存在するこのカードをリリースして発動する。
自分の墓地に存在するレベル４以下の炎属性モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する。

《ラヴァル・ドッグ》　ＡＴＫ／　６００

「《ラヴァル・ドッグ》の効果発動！こいつをリリースする事で、墓地のレベル４以下の炎属性モンスターを特殊召喚する！《ラヴァル・タートル》を特殊召喚！」

今度は《ラヴァル・ドッグ》と入れ代わりで、灰色の甲羅に入った赤い亀が現れた。

《ラヴァル・タートル》
効果モンスター（オリジナル）
星３／炎属性／炎族／ＡＴＫ　４００／ＤＥＦ１６００
１ターンに１度、自分フィールド上に裏側表示で存在するカードを任意の枚数破壊し、その数だけ自分のデッキからカードをドローす

る。

《ラヴァル・タートル》　ＤＥＦ／１６００

「続いて《ラヴァル・タートル》の効果発動！自分の裏側表示のカードを破壊する事で、その分だけカードをドローする！伏せカード１枚を破壊して、１枚ドロー！」

多分、勇香の伏せカードは両方アバターには聞かない。これは賭けになる。

「…！（来た！…いや、今このカードは使えない。月沙に託すしかねえ！）カードを１枚セットしてターンエンド！」

「エンドフェイズ時に罠カード《邪神の恩恵》を発動！邪神の攻撃力分ライフを回復する！」

《邪神の恩恵》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在する「邪神」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターの攻撃力分の数値だけ自分のライフポイントを回復する。

「アバターの攻撃力分、４１００ポイントのライフを回復する！」

尾形　ＬＰ／２７００→６８００

「４１００ポイントも！？」

「回復量多すぎだろ！」

勇香
ＬＰ／２１５０
手札／３
モンスター／《ラヴァル・ガーディアン》（ＤＥＦ／２８００）《ラヴァル・タートル》（ＤＥＦ／１６００）
魔法・罠／リバース×２

ライフは６８００。フィールドにはアバターと2枚の伏せカード。どうやって突破すれば…。

「月沙。何でもいいからシンクロモンスターで攻撃しろ」

「え？でも、そんな事したら…」

「私がサポートしてやる。私達の力を全部合わせてアバターをぶっ倒そうぜ！」

「勇香…」

勇香は私を真っ直ぐ見て笑い掛けている。私も…私もそれに応えたい。

『姫様、やりましょう！』

『私も手伝う！』

「スイレン、ロコナ…」

みんな私を信じてくれてるんだ。私もみんなを信じる。みんなでアバターを、尾形を倒す！

「…うん！やろう、みんな！」

「ククク…どんなカードを使おうと、アバターを倒す事はできない！」

「『できない』んじゃない！『やる』んだ！」

さっきトリシューラが託してくれた石板のカード。あれを呼び出す！

「私の…ターン！！！」

引いたのは…モンスター。レベルは…。

『1』！

「メインフェイズ開始時に私のフィールドに氷結界のモンスターがいる事で、罠カード《氷結界の吹雪》を発動！相手はエンドフェイズ時まで魔法・罠を発動する事ができない！」

《氷結界の吹雪》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に「氷結界」と名のついたモンスターが存在する場合、自分のメインフェイズ1開始時に発動する事ができる。
このターンのエンドフェイズ時まで、相手は魔法・罠カードを発動する事ができない。

「ちぃっ！永続罠《邪神の威圧》！互いに直接攻撃はできず、1番攻撃力が高いモンスターしか攻撃宣言はできない！」

《邪神の威圧》
永続罠（オリジナル）
自分フィールド上に「邪神」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合に発動する事ができる。
お互いのプレイヤーは直接攻撃する事ができず、バトルフェイズに1番攻撃力が高いモンスター1体でしか攻撃する事ができない。
自分フィールド上に「邪神」と名のついたモンスターが表側表示で存在する限り、このカードは破壊されない。
自分フィールド上に「邪神」と名のついたモンスターが存在しなくなった時、このカードを破壊する。

「そして、攻撃できるのは1回のみ！さらに、邪神がいる限りこのカードは破壊されない！」

『直接攻撃や総攻撃もやりづらくなりましたね…』

大丈夫。一応魔法と罠は封じた。これで少しは安心して動ける。

「チューナーモンスター《フィッシュボーグーガンナー》を召喚！」

体の巨大な透明カプセルの中に魚を入れた、2丁拳銃のロボットが現れた。

《フィッシュボーグーガンナー》　ＡＴＫ／　１００

「《氷結界の竜天女　セイブ・クイーン》の効果発動！墓地の氷結界のモンスターを除外する事で、水属性か光属性のモンスターを墓地から特殊召喚する！《氷結界の風水師》を除外して、《氷結界の番人ブリズド》を特殊召喚する！ショット・リバース！」

『もう1度フィールドに戻ってきてください！』

スイレンが銃から青いの弾丸を地面に放つと、着弾点に青い穴が開き、中からブリズドが飛び出した。

《氷結界の番人ブリズド》　ＡＴＫ／　３００

「（トリシューラじゃない…？）」

「そして、レベル1の《フィッシュボーグーガンナー》と《氷結界の番人ブリズド》をオーバーレイ！」

「またエクシーズ召喚か！？」

２体が水色の光になって空を飛び、フィールド上に現れた時空の穴に急降下して飛び込む！

「２体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆１×☆１＝★１

「エクシーズ召喚！同調せよ！『エクシーズチューナー』《フリーズ・ガンナー》！」

時空の穴から、白と水色の服を着た黒髪の少年が、青い球体を２つ従えて飛び出した。右手には白い銃を持っている。

《フリーズ・ガンナー》
エクシーズ・効果モンスター（チューナー・オリジナル）
ランク１／水属性／魔法使い族／ＡＴＫ　５００／ＤＥＦ　５００
レベル１モンスター×２
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールド上に存在するエクシーズモンスターのランクはレベルとして扱う。
１ターンに１度、このカードのエクシーズ素材を１つ取り除いて発動する事ができる。
自分の墓地に存在する水属性シンクロモンスター１体を特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、このターン攻撃宣言をする事ができない。

《フリーズ・ガンナー》　ＡＴＫ／　５００

「エクシーズ…チューナー？」

「馬鹿な！？エクシーズモンスターのチューナーなど聞いた事がないぞ！？それ以前に、レベルの代わりにランクを持つエクシーズモンスターはシンクロ素材にできないはずだ！」

「できるよ。《フリーズ・ガンナー》がフィールド上にいる限り、エクシーズモンスターのランクは全てレベルとして扱う。つまり、エクシーズモンスターもシンクロ素材にする事ができる」

「何！？」

《フリーズ・ガンナー》　★1→☆1

私だってエクシーズチューナーなんて初めて見るよ。これは石板から出てきたチューナーだ。

「《フリーズ・ガンナー》の効果発動！オーバーレイ・ユニットを1つ取り除く事で、墓地から水属性のシンクロモンスターを特殊召喚する！《氷結界の龍　トリシューラ》を蘇生！シュート・リボーン！」

《フリーズ・ガンナー》が周りを飛び交う球体の1つを白い銃に装填し、スイレンと同じように地面に向けて撃ち出す。すると、着弾点から巨大な青い穴が開き、中からトリシューラが飛び出してきた。

《氷結界の龍　トリシューラ》　ＡＴＫ／２７００

「ただし、この効果で特殊召喚されたモンスターは効果が無効になり、攻撃もできない」

『シンクロモンスターとレベル１のエクシーズチューナー…』

「おい、お前まさか…！？」

「そのまさかだよ」

１度目を閉じて心を落ち着ける。

私には仲間がついている。護りたい仲間が。共に戦う仲間が。

だからこそ、私は戦える…！

「レベル９、シンクロモンスター《氷結界の龍　トリシューラ》にレベル１、エクシーズチューナー《フリーズ・ガンナー》をチューニング！」

《フリーズ・ガンナー》が１つの青い小さな球体になり、残っていたもう１つの青い球体と一緒にトリシューラの周りを、輪を描くように縦横無尽に飛び回り始めた。内側にはトリシューラを包むように青く巨大な球体が形成され、無数の青い輪が回転する。

「封印されし氷龍の意志が、未知なる進化へ想いを導く！秘めたる力を解き放て！」

☆９＋☆１＝☆１０

もう１度、私に立ち向かう勇気を…！

「『トランスシンクロ』！！」

枠以外真っ白のカードを勢いよく引き抜くと、テキストとイラストが浮かび上がった。その直後に、無数の輪が巨大化しつつ拡散し、巨大な青い球体が強く輝き弾け飛ぶ。

「ぬぅっ！？」

「っ！？」

『わっ！？』

『うっ！？』

青い光が広がる中、私はカードに浮かび上がった名前を叫んだ。

「砲撃せよ！《トライデント・ネヴァーダ・ドラゴン》！！」

光が弾け飛んだ中央には、首が１つにまで減ったトリシューラが浮かんでいた。左右の首があった箇所からは銀色の大砲が伸びていて、青い全身には氷柱（つらら）のように鋭い水色の鎧と淡い青の光を纏っている。日光を反射する澄んだ鎧が、とても綺麗だ。

《トライデント・ネヴァーダ・ドラゴン》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
シンクロ・効果モンスター
星１０／水属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３２００／ＤＥＦ２８００
エクシーズモンスターのチューナー１体＋「氷結界の龍　トリシューラ」
このカードは「氷結界」と名のついたモンスターとして扱う。
相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター１体の攻撃を無効にする事ができる。
エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。
１ターンに２度まで、自分の墓地に存在するカード１枚を除外して発動する事ができる。
除外したカードの種類により以下の効果を使用する。
●魔法：カード効果を発動する時、１度だけ発動条件を無視する事ができる。
●罠：相手はこのターンのエンドフェイズ時まで魔法・罠カードを発動する事ができない。
●効果モンスター：このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで除外したモンスターの攻撃力分アップする。

《トライデント・ネヴァーダ・ドラゴン》　ＡＴＫ／３２００

『ゴギャアアアアアアアアアアアア！！！』

「トランスシンクロ…だと…！？」

「また初めて見る召喚方法だ…！」

「シンクロモンスターとエクシーズチューナーでのシンクロ召喚！これがトランスシンクロ！」

『すっご～い！』

『そんなカード、いつの間に…？』

石板云々の説明は後回しにしよう。今は尾形を倒す！

「《トライデント・ネヴァーダ・ドラゴン》の効果発動！墓地からカードを2枚まで除外する事で、除外したカードの種類によってそれぞれ違う効果を発動する！魔法カードなら1度だけカード効果をコストなしで発動でき、罠カードならエンドフェイズ時まで相手の魔法・罠の封印。モンスターなら、そのモンスターの攻撃力をエンドフェイズ時まで受け継ぐ！」

「自由に好きな効果を2つまで選べるってわけか…！」

「墓地からモンスターカード《氷結界の龍　トリシューラ》と《氷結界の龍　クトネシル》を除外して、攻撃力を２７００ポイントと２６００ポイント分アップさせる！」

《トライデント・ネヴァーダ・ドラゴン》　ＡＴＫ／３２００→５９００→８５００

『攻撃力８５００！？』

「だが、アバターの攻守は常に１番高い数値より１００ポイント上回る！」

アバターがさらに姿を変え、トライデント・ネヴァーダと同じ姿になる。色は相変わらず真っ黒だ。

《邪神アバター》　ＡＴＫ／４１００→８５００

「関係ない！バトル！《トライデント・ネヴァーダ・ドラゴン》で《邪神アバター》に攻撃！」

トライデント・ネヴァーダが大砲の銃口の前と自分の口の前に青いエネルギーを溜め始めた。エネルギーは球状になって、少しずつ巨大化していく。

「馬鹿め！返り討ちだ！」

「…尾形、教えてやるよ」

油断している尾形に、勇香は静かに切り出した。

「『チームワーク』ってのが、どれだけの力を生み出すかをな！リバースカードオープン！速攻魔法（チューン・リセット）！」

「速攻魔法…？」

「シンクロモンスターが攻撃宣言した時、墓地のチューナーを除外する事で、相手モンスター1体の攻撃力を元々の攻撃力に戻す！」

《チューン・リセット》
速攻魔法（オリジナル）
フィールド上のシンクロモンスター1体が攻撃宣言をした時、自分の墓地のチューナー1体を除外して発動する。
フィールド上のモンスター1体の攻撃力をそのモンスターの元々の攻撃力に戻す。
このターンのエンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は変化しない。

「そして、選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで変化しない！」

「何だと！？」

「罠とモンスター効果は効かなくても、『魔法カードは1ターンだけ受け付ける』んだったよな？」

「そうか！という事は…！」

「ああ！《ラヴァル炎樹海の妖女》を除外して効果発動！」

『それじゃ、行くよ！』

ロコナが飛び出して、白い光の球体をアバターに投げつける。球体がアバターに入り込むと、アバターは元の黒い球体の姿に戻っていった。

《邪神アバター》　ＡＴＫ／８６００↓　０

「邪神の攻撃力が０に！？」

「いくら邪神でも、戦闘破壊されちゃ一溜りもねえだろ。邪神を倒せりゃ上出来だと思ってたけど…どうやら一撃だけで終わりみてえだな」

攻撃力０のモンスターに攻撃力８５００のモンスターで攻撃。どうなるかは言うまでもない。

「ぐ…ダメージは受けん！手札から《クリボー》を捨てて効果発動！戦闘ダメージを１度だけ０にする！」

《クリボー》！？そんなモンスターを手札に温存してたの！？モンスター効果じゃ対処できない！

「…取っといて正解だったな」

「何？」

「カウンター罠発動！《威風堂々》！バトルフェイズ中に発動したモンスター効果を無効にして、そのモンスターを破壊する！」

《威風堂々》
カウンター罠
バトルフェイズ中のみ発動する事ができる。
相手が発動した効果モンスターの効果を無効にし破壊する。

「な…！？」

「よって、《クリボー》の効果は無効だ！」

「勇香…！」

「言ったろ？『サポートする』ってよ！」

勇香が笑ってウィンクした。それに対して私も微笑みを見せる。本当に、頼りになるよ。

「馬鹿な…！またしても、月沙に負けるというのか…！？」

「『私』じゃない！『私達』の勝ちだ！行くよ、《トライデント・ネヴァーダ・ドラゴン》！」

３つの青い球体のエネルギーは極限まで溜まり、１つに合わさっている。発射準備は万端だ。

「一撃で終わらせる！フリーズ・チャージ・ブレイカー！！」

最大限の青い砲撃が一気に放たれる。極大の一撃は、黒い球体に戻ったアバターを飲み込み、尾形をも捕らえライフを奪い去った。

「ぐわぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁ！！！」

尾形　ＬＰ／６８００→　０

月沙＆勇香　ＷＩＮ

「終わった…」

「っしゃあ！」

『勝った勝った～！』

『やりましたね、姫様！』

「うん」

ソリッドビジョンが全て消滅し、私達は喜びを露わにした。スイレンは元の姿に戻った。

「みんなのおかげだよ。ありがとう」

「おう！そういや、《トライデント・ネヴァーダ・ドラゴン》にエクシーズチューナーなんて、いつの間に持ってたんだ？」

「実は、トリシューラがずっと石板のカードを隠し持ってたみたいなの」

「トリシューラが？」

「うん。トリシューラは伝説の水の龍。この2枚は、水の龍の石板から出てきたカードだよ」

『トリシューラ様が、伝説の水の龍！？』

そりゃ、驚くよね。私もトリシューラの進化形態があるってだけでもびっくりなのに、伝説やらトランスシンクロやらまであるんだ

もの。

「とにかく、私達が持ってる石板のカードは、月沙のトライデント・ネヴァーダ、将人のディアボロス・サタン、後紅刃のカードで3枚だな。ルーナの分も、ニュートラルに横取りされる前にさっさと回収しねえと…！」

「そうだね。私達も急ごう！」

ダメージが少しきついけど、他のみんなに任せっきりってわけにもいかない。早く海馬コーポレーションに行かないと…！

「グククク…カカ…」

「「『『！？』』」」

私達が走り出そうとすると、不気味な笑い声が聞こえた。

前を見ると、尾形がふらついた調子で立ち上がっていた。

「デュエルで倒すのは、少し無理があったか…」

「てめえ、まだやるってのか…？」

「グクク…」

ズズズズズ…

尾形の体から突然黒い瘴気が噴き出し始めた。そして、地面に巨大な黒い穴が3つ現れる。

ズズズ…ゴゴゴゴ…

「あれは…！？」

「マジかよ…！？」

それぞれの穴から這い出てきたのは、さっきのデュエルで倒した3体の邪神だった。

『私達が倒した邪神が…！？』

「邪神よ、俺に力を！」

すると、アバターから黒い瘴気が漏れ始め、それを尾形が吸収し出した。アバターの瘴気を余す事なく取り込んでいく。

「…ロコナ、カードに戻ってろ」

『え！？でも…』

「いいから早く！」

『う、うん…』

勇香はロコナを半ば無理矢理カードに戻させた。そして、私達はデュエルディスクとカードを片付ける。この状況は…まずい。

「初めからこうすればよかったんだ…」

やがて、瘴気を全て吸収し終えた尾形は邪悪な笑みを私達に向けた。

「せいぜい足掻いてみせろ!!」

尾形はそう言って、全身から黒いエネルギーを触手状にして伸ばしてきた。先端は鋭く尖っているのを見ると、私達を串刺しにでもする気なんだろう。

「っ!」

『きゃあっ!』

「くっ!」

私達は間一髪でそれをかわした。私はデュエルの途中からずっと覚醒してるから、ある程度は楽にかわせる。

「ちっ、直接殺しに来たか…!」

さっきのデュエルのダメージが残ってるせいか体が少し重い。いつまで避け切れるか…。

『っ！来ますよ！』

次はドレッド・ルートが殴りかかってきた。私達はそれを後ろに下がってかわす。

「三邪神まで相手にしなくちゃいけないのかよ…！」

「かなりきつ…！？」

私は言いかけた言葉を飲み込んだ。イレイザーとアバターが攻撃体勢に入っていたからだ。

「食らえ！」

黒い光線が2発同時に放たれる。ドレッド・ルートの攻撃の隙に溜めていたのか、ドレッド・ルートが拳を避けた直後に攻撃してきた。

「なっ！？」

『！？』

まずい、避けられない…！

ズドォォォォォ！！

「え…？」

黒い光線が届く前に、黄色と紫が視界を染めた。

黄色は私とスイレンに向かうアバターの光線を、紫は勇香に向かうイレイザーの光線をそれぞれ受け止め、相殺された。

「何！？」

そして、私の前には黒いコートを着て細い大剣を持った人物が、勇香の前には赤い上着を着て大鎌を持った人物がいる。

両方、見覚えがある。

紅刃と将人が間一髪で攻撃の前に割って入り、電撃と紫の衝撃波で攻撃を打ち消したんだ。

「紅刃！？」

「将人…！？」

「よお」

「一応、間に合ったみたいだな」

紅刃と将人は振り返って笑みを見せた。２人共、瞳の色がそれぞれ黄色と紫に変わっている。

『なぜあなた方がここに…！？』

「俺達だけじゃない」

「月沙ちゃん、勇香ちゃん！」

将人の言葉の後に、後ろから《ナチュル・ビースト》に乗った加奈美がやってきた。ゴーズとカイエン、ヒジュラもいる。加奈美は私達の傍まで来てから《ナチュル・ビースト》の背中から降りた。

「加奈美！？それに他のみんなも…！？」

『よお！随分ぼろぼろじゃねえか！』

「２人共大丈夫！？」

「あ、ああ、何とか…」

『何だあのモンスター達は…？』

『禍々しい力を感じるわ…』

「それより、またお前が来るとはな…尾形！」

「尾形…あの人が、月沙ちゃんを殺した…」

将人と加奈美は尾形に敵対の視線を向けた。何で加奈美が私の過去を知ってるのか気になったけど、ニュートラルで聞いたんだと自己完結した。

「馬鹿な…！？貴様らは邪神の力で作った闇の結界に閉じ込めたはずだ！なのになぜここにいる！」

「簡単な事だ」

驚愕する尾形への返事は上から聞こえた。

答えたのはユニコールに乗っているシュルクだった。ロディスとリーシェも降りてきた。

「シュルク君！」

「ガルルッ！」

シュルクはユニコールの足が地面についてから飛び降りた。そして、真っ直ぐ尾形を睨みつける。

「総攻撃で結界を破った。それ以外に何がある？」

「ふざけるな！そう簡単に破る事など…！」

「精霊と覚醒ナメんな。それにシュルクとユニコールも手伝ってくれたしな」

「俺達も加奈美達と協力して結界を破った。少し骨が折れたがな…」

シュルクのアビリティもかなり強力だったし、紅刃や将人達なら結界を破壊できてもおかしくない。何にしても、来てくれて助かった…。

『しかし、我らと将人達が同時に到着したのは好都合だな。人数は多い方がいい』

「人数？」

「一時休戦だ。尾形はニュートラルの一員だが、俺達とは敵対関係にある上今回の件とは無関係だ。あいつは月沙どころかこの町をも破滅させかねない。邪神を操るならなおさらだ」

シュルクの話を聞いて、私と勇香、スイレンは息を飲んだ。そんな事になったら町の人達が…！

「俺達としても、童実野町が死滅するのを黙って見ているわけにはいかない」

『私達にとってもシュルク達にとっても、尾形は敵だ。おまけに邪神の力を持っているとなると、共闘して奴を止めるしかない』

シュルクの説明をリーシェが引き継いだ。つまり、この場にいる

全員で尾形を戦闘不能にするって事か…。まさか共闘する事になるなんて、思ってもみなかった。

「…何でだろうな…」

「？」

「あいつを見てると…」

ゴウッ！

紅刃が一旦言葉を止めると、構えた剣の刀身から莫大な量の電気が溢れ出た。ここまで大きいのは見た事がない。

「むしゃくしゃして仕方ねえ…！」

静かに、それでいて激しく言葉を紡ぎ、目の前の敵を睨んだ。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第６８話　仲間を頼る勇気も大切（後書き）

☆今回のキーカード☆

ゾーン「本編を楽しんでいただけましたか？ここで、『今回のキーカード』の時間に入ろうと思います。司会はわたし、ゾーンと…」

アポリア「アポリアだ。ところでゾーン、パラドックスはどうした？アンチノミー（ブルーノ）は既に出演しているからまだいいが…」

ゾーン「作者が映画を見ていないせいでキャラや口調がいまいちわからないため、彼は出演できないのですよ」

アポリア「パラドックス…」

ゾーン「彼の分まで頑張りましょう。本編では、月沙が立ち直ったようですね」

アポリア「護りたい仲間と支えてくれる仲間、２つの希望で見事復活する事ができたな。そして、新たな切り札で仲間と共についに勝利できた」

ゾーン「ですが、尾形は直接月沙達を殺害しようとしています。紅刃達が助太刀に入ったとはいえ、まだ一波乱起きそうですね」

アポリア「希望がある限り彼らは決して負けない。わたしはそう信じる」

ゾーン「そうですね。それでは、カード考察に入りましょうか。今回活躍したカードはほとんどオリカなので、月沙の新たな切り札を紹介しましょう」

《トライデント・ネヴァーダ・ドラゴン》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
シンクロ・効果モンスター
星１０／水属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３２００／ＤＥＦ２８００
エクシーズモンスターのチューナー１体＋「氷結界の龍　トリシューラ」
このカードは「氷結界」と名のついたモンスターとして扱う。
相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター１体の攻撃を無効にする事ができる。
エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。
１ターンに２度まで、自分の墓地に存在するカード１枚を除外して発動する事ができる。
除外したカードの種類により以下の効果を使用する。
●魔法：カード効果を発動する時、１度だけ発動条件を無視する事ができる。
●罠：相手はこのターンのエンドフェイズ時まで魔法・罠カードを発動する事ができない。
●効果モンスター：このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで除外したモンスターの攻撃力分アップする。

ゾーン「エクシーズモンスターのチューナーとシンクロモンスターとでの新たな召喚方法、『トランスシンクロ』で呼び出す事ができるモンスターです。シンクロモンスターの方は《氷結界の龍　トリシューラ》が必要です」

アポリア「エンドフェイズ時まで自身を除外する事で相手の攻撃を

無効にする効果はもはやお馴染みだな。わたしもこの効果に手を焼いたものだ」

ゾーン「そして、墓地のカードを除外する事で様々な効果を得る事ができます。除外したのが魔法カードなら、カード効果を1度だけコストなしで発動できます。この点は《ＤｰＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ》と似ていますね」

アポリア「罠なら、相手の魔法・罠を封じる事ができる。モンスター効果にさえ気をつければ、安全に攻撃を通せる」

ゾーン「モンスターカードであれば、そのモンスターの攻撃力を自身の攻撃力に加えます。高攻撃力のモンスターを除外して、帰還系のカードとのコンボを狙うといいでしょう」

アポリア「これらの効果は全てエンドフェイズ時までしか持続しない事に注意だ。また、これらの効果は1ターンに2度使用できる。2つの効果を併用するもよし、攻撃力を2体分上げたりカード効果をコストなしで2回使用したりするのもよしだ。さらに氷結界のモンスターとしても扱うから、氷結界の各種サポートを受ける事もできるぞ」

ゾーン「今回は以上です」

アポリア「長編もようやく後半戦突入だ。まだ戦っていないメンバーの活躍を楽しみにしていてくれ」

ゾーン「わたし達も、彼らを陰ながら応援する事にしましょう」

アポリア「感想は大歓迎だ。いつでも待っているぞ」

ゾーン「それでは、次回もこの小説をよろしくお願いします」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

オリジナルの召喚方法をやってしまいました…。賛否両論でしょうが、大目に見てください。

この長編は多分ここまでで半分だと思います。ここからは秋斗や早苗達の出番です。いつになったら完結するのやら…。

では、また次回！

第69話　容赦のない奴は強い（前書き）

☆精霊の呟き☆

ヒジュラ『復活じゃあぁぁぁぁぁぁぁ！！！』

リーシェ『やかましい！騒ぐな馬鹿者！』

ヒジュラ『これが騒がずにいられるか！ただでさえ長編のデュエルで出番がなかったってのに、半月くらい更新ストップしてんだぞ！？』

リーシェ『出番がなかったのは私とて同じだ！もう少し落ち着きを持てと言うのがわからないか！？』

ヒジュラ『けっ、わあったよ。ま、てめえよりは活躍してるからまだいいけどな』

リーシェ『何だと貴様！？総合では私の方が断然デュエルでの使用回数が多いではないか！』

ヒジュラ『だが、俺の方が断然目立ってら！てめえは黙って俺の活躍を見てろってんだ！』

リーシェ『貴様こそ、この私の活躍を指をくわえて見ているがいい！』

ヒジュラ『あぁ！？喧嘩売ってんのかコラ！』

リーシェ『先に仕掛けたのは貴様であろう！』

スイレン『…ロディス様…あれ、どうにかできませんか？』

ロディス『ハァ…仕方あるまい…』

ヒジュラ『いいぜ！だったら今すぐてめえを狩ってやんよ！』

リーシェ『ならば、私が貴様を我が雷で黒焦げにしてくれるわ！』

ヒジュラ『覚悟しやが…』

ロディス『冥王権限により、今回の「精霊の呟き」を中止とする！』

リ・ヒ『『…は…？』』

スイレン『終了！？このコーナーそのものを終了ですか！？』

リーシェ『しかもなぜ中止だ！？いや、それよりなぜ止める！？』

ロディス『時間がない。今回の締めの言葉は戎鴛さんのリクエストを使用させてもらった』

ヒジュラ『待てコラ！まだリーシェとのケリが着いてねえ！それに「冥王権限」って明らかに職権濫よ…』

ロディス『第６９話、始まるぞ』

スイレン『どうぞご覧ください！』

ヒジュラ『話聞けやぁぁぁぁぁぁ！！』

第６９話　容赦のない奴は強い

紅刃達が尾形と交戦する数十分前…

ＳＩＤＥ／早苗

パキッ…バリ…

あたしは千景の連絡通り、ビル街の道路のど真ん中で待機している。

今の音は何かって？ビスケット食べてるのよ。好物なんだからいいでしょ？いつも小さい袋に入れて持ち歩いてるし。

「早苗先ぱ～い！」

あ、来た。

前から走ってくるのは、ヴェルヒプトの姿になったアウロ。背中

には、あたしを呼ぶ芽依と相変わらず無表情の千景を乗せている。

「足止めお願いします！」

「はいはい。行ってらっしゃい」

あたしが返事をし終わると同時に、芽依と千景を乗せたアウロはあたしを通り越して走り去っていった。

すると、前方に物凄い勢いで向かってくる奴が1人。これでも目はいい方なのよ。

あたしは食べかけの最後のビスケットを口に含み、噛み砕きながら右手に武器を創った。

あたしの武器は杖だ。先端に付いてるのはそれなりに大きな鏡。あたしの相棒と同じ物だ。

…さて、一仕事ね。

あたしは噛み砕いたビスケットを飲み込み、杖に力を込めた。

ズバァァァァ！！

「なっ！？」

あたしの後ろから、水の壁が噴き出した。当然、道路の幅を端から端まで埋め尽くすくらい面積が広い奴。

突っ込んできたそいつはいきなりの妨害に驚いて、1度ほぼ直角

に急上昇した。そして、両足から出てるっぽい風を操って衝撃を和らげつつ着地した。

「正面衝突で事故らなかった事は褒めてやるわ、風嶺俊也」

あたしが最初に足止めしたのは、風嶺俊也だった。

「君は…もしかして、ニュートラルの一員かい？」

「そ。あたしは葉鳶早苗。ニュートラルの幹部をやってるわ」

「僕の自己紹介は必要ないかな？通してくれそうには…ないね」

「当然。通りたきゃ、あたしを倒す事ね」

デュエルに持ち込めば、嫌でも時間は稼げる。後は千景達に任せとけばいい。

「…！」

「どうしたの？」

「もう1人…いや、もう2人来たわね」

「え？」

俊也の後ろから、これも猛スピードで走ってくる奴らが2人。1人は桃色の髪の小柄な女。もう1人は…。

随分と、『久しぶり』ね…。

ＳＩＤＥ／秋斗

「何あれ…？」

俺とルーナはスケボーに変身したナージャに乗って先を急いでいるが、前方に巨大な水の壁を見つけた。よく見たら俊也が足止めを食らっているようだ。

「ちっ、タイムロスか…」

『仕方ないわね、一旦ストップしましょう』

ナージャは俊也の近くでブレーキをかけ、俺は一旦降りる事にした。

「ルーナ、秋斗！」

「また足止めか？」

「うん。しかも幹部らしいよ」

「幹部？」

俺はどんな輩かと思い前に顔を向け…

「…っ！？」

思わず目を見開いた。

「報告にはあったけど、本当にこんな形で出くわすなんてね」

黒いベルト付きの白いチュニックと黒いズボンを身に付けた茶髪でショートヘアーの女。右手には鏡を取り付けた長い杖を持っている。それだけならいいが、その顔はどう見ても見覚えがあった。

「『久しぶり』ね、秋斗」

「…なぜ、お前がここにいる…？」

葉鳶早苗。俺のよく知る人物だ。

「え？知り合い？」

「ああ。ちょっとな」

まさか、こんな所で会うとはな。正直、驚いた。

「今まで行方不明になってまで何やってるのかと思えば…得体の知れない組織で石板探しか？」

「そんなところ。でも、1番の目的は兄貴を治すため。そのためなら、例えあんたが敵だろうが容赦しない」

「取り引きでもしているのか？」

「当たりよ」

「…なら、納得できるな」

こいつらしい、大した行動だ。どれだけあいつを大切に想っているかが改めて感じ取れる。

「あ、あの…勝手に話進んじゃってるけど、どういう関係なの？」

「わかるように説明しなさいよ！」

俊也と秋斗は話についていけず、俺に説明を求めてきた。まあ、当然だ。

「早苗は昔の知り合いだ。だが、急に行方不明になってからは会っていない」

「行方不明？」

「ニュートラルについていったからだろ。探してはいたが、ここで会うとは思わなかった」

「でしょうね。あれからあの町には行ってないし」

とりあえず、ここ数年の謎は１つ解けた。だが、今は敵どうしか…。

「俊也、ルーナ、先に行け。早苗は俺がやる」

「え？でも…」

「ルーナは石板の回収が最優先。俊也はあいつと相性が悪すぎる」

「…わかったよ」

「ハァ…それじゃ、任せたわよ」

俊也とルーナは渋々ながら納得してくれた。…さて、先に行けるように少し手伝う必要があるな。

「早苗、俺が相手だ。１ｖｓ１でどうだ？」

「…ＯＫよ」

早苗は少し考え込んだ後、水の壁を消滅させた。

「秋斗、頼んだよ」

「すぐに追ってきなさいよ！」

2人は猛スピードで先に行く。石板は向こうに任せるか。

「…時間がもったいない。さっさと始めるぞ」

俺はデュエルディスクを展開して手早く準備し、早苗も杖を消してデュエルの準備をした。

「昔馴染みだからって手を抜くような甘ったれた真似はするんじゃないわよ！」

「誰がするか」

随分久々だな。デッキが変わってなければ少しはやりやすいんだが…。

「「デュエル！」」

秋斗ｖｓ早苗

「先攻は貰うわ！あたしのターン！モンスターをセット！カードを2枚セットしてターンエンド！」

早苗

ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×２

最初は様子見か。ならこっちは…。

「俺のターン！《魔導戦士ブレイカー》を召喚！」

赤い鎧を着た魔法使いの騎士。まずはこいつで小手調べだ。

《魔導戦士ブレイカー》　ＡＴＫ／１６００

「ブレイカーが召喚に成功した時、自身に魔力カウンターを１つ乗せる。自身の魔力カウンター１つにつき、こいつの攻撃力は３００ポイントアップする」

《魔導戦士ブレイカー》　ＡＴＫ／１６００→１９００　Ｍ／０→１

「そして、自身の魔力カウンターを１つ取り除く事で、相手の魔法・罠１枚を破壊する！」

《魔導戦士ブレイカー》　ＡＴＫ／１９００→１６００　Ｍ／１→０

「右側のカードを破壊だ！マナ・ブレイク！」

ブレイカーが剣から紫の魔力を解き放つ。しかし、狙いのカードは破壊される前に表になり、そのまま破壊された。

「残念だけどハズレよ！罠カード《和睦の使者》！このターン、あ

たしへの戦闘ダメージとあたしのモンスターの戦闘破壊を無効にする！」

ちっ、狙いを間違えたか…。

「攻撃するだけ無駄か…。カードを2枚セットしてターンエンドだ」

秋斗
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《魔導戦士ブレイカー》（ＡＴＫ／１６００）
魔法・罠／リバース×２

「あたしのターン！モンスターを反転召喚！」

「反転召喚？」

「《リチュア・エリアル》！」

裏側のカードが表になり、黒と金の魔法使いのような法衣を着て杖を持った水色の長髪の女が現れた。杖のデザインは、早苗が持っていた物と同じだ。

《リチュア・エリアル》
効果モンスター
星４／水属性／魔法使い族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ１８００
リバース：自分のデッキから「リチュア」と名のついたモンスター１体を手札に加える事ができる。

《リチュア・エリアル》　ＡＴＫ／１０００

「お前にも久々に会うな。エリア」

『そうね。しばらく町には戻ってないし』

《リチュア・エリアル》…いや、エリアは早苗の精霊だ。俺も早苗も、幼い頃から精霊が見えたからな。

『俊也を先に行かせてくれてありがとう。おかげでまだ悲しませずに済むわ』

「ウィンの事か。お前らは魔法学院での同期だったな」

エリアとウィンが鉢合わせしたら、必ず俊也とウィンは自分達も戦うと言い出すだろう。だが、あいつらの使う【ガスタ】はこいつのデッキとは相性が悪い。

「だが、一時的にだろ？」

『わかってる。いつかはバレるって事くらい。まだ心の準備ができていないだけ』

「心の準備、か…」

無理もないか。魔法学院での話は昔よく話していた。聞いた話じゃ、相当仲が良いみたいだからな。自分がやっている事の自覚がある分、罪悪感があるんだろう。

『でも、曲げるつもりはないわ。和馬（かずま）さんを治すためなら何だってやる。例えあなたと敵対しようとも』

「…それだけの覚悟がないなら、最初から出てくるなと言っていたところだ」

口元に小さい笑みを浮かべて言ってやった。躊躇いがあってはつまらない。

「ま、あんたなら端っから容赦しないと思ってたわよ。《リチュア・エリアル》のリバース効果発動！」

早苗は最初からわかっていたとでも言うように笑うと、エリアの効果発動を宣言した。

「デッキからリチュアのモンスター1体を手札に加える！《シャドウ・リチュア》を手札に！そして、永続魔法《儀式の宝札》を発動！儀式召喚に成功する度に、あたしはカードを2枚ドローする！」

《儀式の宝札》
永続魔法（オリジナル）
儀式召喚に成功した時、デッキからカードを2枚ドローする。

《シャドウ・リチュア》に《儀式の宝札》…。早速仕掛けてくるな。

「それじゃ、行くわよ！儀式魔法《リチュアの儀水鏡》を発動！手札とフィールドからモンスターをリリースし、合計レベルと同じレベルを持つリチュアの儀式モンスターを手札から特殊召喚する！」

《リチュアの儀水鏡（ぎすいきょう）》
儀式魔法

「リチュア」と名のついた儀式モンスターの降臨に必要。
手札・自分フィールド上から、儀式召喚するモンスターと同じレベルになるようにモンスターをリリースしなければならない。
また、墓地に存在するこのカードをデッキに戻す事で、自分の墓地に存在する「リチュア」と名のついた儀式モンスター1体を選択して手札に戻す。

「手札の《シャドウ・リチュア》をリリース！水属性のモンスターを儀式召喚する時、このモンスター1体で必要なリリースとして使用できる！」

《シャドウ・リチュア》
効果モンスター
星4／水属性／海竜族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ１０００
水属性の儀式モンスターを特殊召喚する場合、このカード1枚で儀式召喚のためのリリースとして使用する事ができる。
また、手札からこのカードを捨てる事で、自分のデッキから「リチュア」と名のついた儀式魔法カード1枚を手札に加える。

フィールドに丸い鏡が現れ、黒と金の法衣を着た青い人型の海竜が鏡に吸い込まれる。

「儀式召喚！《イビリチュア・ソウルオーガ》！」

宣言と共に鏡が光を放つ。すると、中から進化した《シャドウ・リチュア》が現れた。法衣は消えていて、体格は巨大化している。

《イビリチュア・ソウルオーガ》
儀式・効果モンスター
星８／水属性／水族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２８００

「リチュア」と名のついた儀式魔法カードにより降臨。
1ターンに1度、手札から「リチュア」と名のついたモンスター1体を捨てる事で、相手フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して持ち主のデッキに戻す。

《イビリチュア・ソウルオーガ》　ＡＴＫ／２８００

「【リチュア】…お前のデッキは今でも変わらないみたいだな」

「カテゴリはね。儀式召喚に成功した事で、《儀式の宝札》の効果でカードを2枚ドローする！」

早苗は引いたカードを確認すると、口角を吊り上げて1枚のカードを手に取った。

「もう1枚、《リチュアの儀水鏡》を発動！」

「2枚目…？」

「手札の《ヴィジョン・リチュア》をリリース！このモンスターも水属性モンスターの儀式召喚に必要なレベル分のリリースとして使用できるわ！」

《ヴィジョン・リチュア》
効果モンスター
星2／水属性／海竜族／ＡＴＫ　７００／ＤＥＦ　５００
水属性の儀式モンスターを特殊召喚する場合、このカード1枚で儀式召喚のためのリリースとして使用する事ができる。
また、手札からこのカードを捨てる事で、自分のデッキから「リチュア」と名のついた儀式モンスター1体を手札に加える。

またフィールドに丸い鏡が現れ、今度は小柄な青い海竜が鏡に吸い込まれていく。

「儀式召喚！《イビリチュア・ガストクラーケ》！」

鏡から飛び出したのは、黒・金・青・赤に彩られたタコだかイカだかの怪物を下半身とした赤い長髪の女だ。

《イビリチュア・ガストクラーケ》
儀式・効果モンスター
星６／水属性／水族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１０００
「リチュア」と名のついた儀式魔法カードにより降臨。
このカードが儀式召喚に成功した時、相手の手札をランダムに２枚まで確認し、その中から１枚を選択して持ち主のデッキに戻す。

《イビリチュア・ガストクラーケ》　ＡＴＫ／２４００

《ヴィジョン・リチュア》と《イビリチュア・ガストクラーケ》…見た事のないモンスターだ。それに連続での儀式召喚。この数年でさらに強くなっているようだな。

「ガストクラーケが儀式召喚に成功した時、相手の手札を２枚確認してその内の１枚をデッキに戻す！」

「手札を？」

ソリッドビジョンで俺の手札にあるカードが２枚公開される。

「《神聖魔導王　エンディミオン》に《ナイトエンド・ソーサラー

≫ねえ…。エンディミオンをデッキに戻しなさい。《ディメンション・マジック》で呼び出されたら堪ったもんじゃないわ」

言われた通り、エンディミオンをデッキに戻す。言い読みをしてやがるな。

「そして、《儀式の宝札》で2枚ドロー！さらに、スピリットモンスター《リチュア・エミリア》を召喚！」

今度はエリアと似たような服装で赤い長髪の女が出てきた。…スピリットなんて、リチュアにいたか…？

《リチュア・エミリア》
スピリットモンスター
星４／水属性／魔法使い族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ　８００
このカードは特殊召喚できない。
召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。
このカードが召喚・リバースした時、自分フィールド上にこのカード以外の「リチュア」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、このターンのエンドフェイズ時までフィールド上の罠カードの効果を無効にする。

《リチュア・エミリア》　ＡＴＫ／１６００

「エミリアを召喚したターンの間、フィールド上の罠の効果は全て無効になる！」

「確実に攻撃を通すつもりか…」

「これで終わりじゃないわよ！レベル４の《リチュア・エリアル》と《リチュア・エミリア》をオーバーレイ！」

「オーバーレイ？」

『後は頼むわよ！』

エリアとエミリアが青い光になり、フィールドに現れた時空の渦に飛び込んでいく。

「２体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆４＋☆４＝★４

「エクシーズ召喚！《イビリチュア・メロウガイスト》！」

時空の渦から、緑の魚人のような体を持つエミリアが飛び出した。周りには２つの青い球体が飛び交っている。

《イビリチュア・メロウガイスト》
エクシーズ・効果モンスター
ランク４／水属性／水族／ＡＴＫ２１００／ＤＥＦ１６００
レベル４モンスター×２
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、そのダメージ計算後にこのカードのエクシーズ素材を１つ取り除く事で、破壊したそのモンスターを墓地へ送らず持ち主のデッキに戻す。

《イビリチュア・メロウガイスト》　ＡＴＫ／２１００

「エクシーズ召喚…？何だそれは？」

そんな召喚方法は見た事も聞いた事もない。レベルが関係しているらしいのは予想できるが…。

「同じレベルのモンスター2体の上に重ねて、エクシーズモンスターをエクストラデッキから呼び出す！これがエクシーズ召喚よ！」

「『重ねて』…という事は、素材は墓地には行かないんだな？」

「ご名答。素材となったモンスターはオーバーレイ・ユニットとしてフィールドに残るわ！それと、エクシーズモンスターはレベルの代わりにランクが設けられてるわ！レベルに関する制限は一切受けないわよ！」

「なるほどな…。十分だ。続けろ」

エクシーズモンスターについては大体理解した。レベルの代わりにランク…つまりレベルを持たないという事は、レベルを合計するシンクロ召喚の素材にも使えないようだ。

「…わかってたけど、相変わらず冷めてるわね。もう少し驚いてくれないと張り合いがないんだけど」

「元を辿ればシンクロと同じエクストラデッキに眠るモンスターだろ。召喚方法が違うだけだ」

「つまんないわね…」

昔からこういう性分だから仕方ないだろ。これでも十分驚いている。あからさまに驚く事なんて滅多にないからな。

「まあ、いいわ。バトル！《イビリチュア・メロウガイスト》で《魔導戦士ブレイカー》に攻撃！アクア・ジェル・バレット！」

メロウガイストが杖からそこそこでかい水の弾丸を放つ。エミリアの効果で罠は使えないが…。

「…運がなかったな。速攻魔法（ディメンション・マジック）！」

「なっ！？」

「自分フィールド上に魔法使い族がいる時、自分のモンスターをリリースして手札の魔法使い族を特殊召喚。そして相手のモンスターを1体破壊する。ブレイカーをリリース」

黒と金の棺が現れ、ブレイカーが素早く中に入り込むと自動的に蓋が閉まった。ターゲットを追って水の弾丸が当たるも、傷1つついた様子はない。

「手札から《ネオアクア・マドール》を特殊召喚！」

棺の蓋が開き、中から緑のマントを身に付けた白い仮面の魔法使いが現れた。

《ネオアクア・マドール》
通常モンスター
星６／水属性／魔法使い族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ３０００
水を支配する魔法使いの真の姿。
絶対に破る事のできないと言われる巨大な氷の壁をつくり攻撃を防ぐ。

《ネオアクア・マドール》　ＤＥＦ／３０００

「そして、《イビリチュア・ソウルオーガ》を破壊する」

《ネオアクア・マドール》が手から光線を放ち、ソウルオーガを破壊した。これでこのターンは大丈夫か。

「ちっ、これ以上の攻撃は無理ね…。墓地から《リチュアの儀水鏡》の効果発動！墓地にあるこのカードをデッキに戻す事で、自分の墓地からリチュアの儀式モンスター１体を手札に戻す！《イビリチュア・ソウルオーガ》を手札に戻すわ！カードを１枚セットしてターンエンドよ！」

早苗
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《イビリチュア・ガストクラーケ》（ＡＴＫ／２４００）《イビリチュア・メロウガイスト》（ＡＴＫ／２１００）
魔法・罠／《儀式の宝札》リバース×２

１ターンで２回の儀式召喚に加え、エクシーズ召喚か…。かなり飛ばしてきているな。

「俺のターン！チューナーモンスター《ナイトエンド・ソーサラー》を召喚！」

鎌を持った少年の魔法使いが現れる。さっき手札から公開されたモンスターだ。

《ナイトエンド・ソーサラー》　ＡＴＫ／１２００

「レベル６《ネオアクア・マドール》にレベル２《ナイトエンド・ソーサラー》をチューニング！」

《ナイトエンド・ソーサラー》が２つの紺色の輪に変化し、《ネオアクア・マドール》が中を潜り６つの星になる。

「魔の書に記されし龍の章よ、漆黒の霊槍で闇夜を突け！」

☆６＋☆２＝☆８

「シンクロ召喚！湧出せよ！《魔導竜　レイヴェルト》！」

魔力で錬成された黒い槍と丸い盾を持つ紺色の龍。今出すならこいつしかいない。

《魔導竜　レイヴェルト》　ＡＴＫ／２７００

「レイヴェルト…。久々に見たわね。あんたのエースモンスター」

「魔法カード《天よりの宝札》。互いに手札が６枚になるようにカードをドローする」

「ここでそのカード…」

「レイヴェルトの効果発動。通常魔法が発動した時、俺はライフを５００回復する」

秋斗　ＬＰ／４０００→４５００

…手札は悪くないな。攻めるか。

「魔法カード《魔術師の宝札》！手札の魔法使い族を1体除外する事で、カードを2枚ドローする！」

《魔術師の宝札》
通常魔法
手札から魔法使い族モンスター1体をゲームから除外して発動する。自分のデッキからカードを2枚ドローする。
「魔術師の宝札」は1ターンに1枚しか発動できない。

「そして、レイヴェルトの効果でライフを５００回復する！」

秋斗　ＬＰ／４５００→５０００

「さらに、レイヴェルトの効果発動！手札の魔法・罠を墓地に送り、相手の魔法・罠を1枚破壊する！手札から《スキル・サクセサー》を墓地に送り、左の伏せカードを破壊する！黒焔葬破！」

レイヴェルトが黒い炎を吐き出し、伏せカードを1枚焼き払った。

「手札の《ディメンション・ソーサラー》の効果発動！このモンスターと除外されている魔法使い族1体をデッキに戻してシンクロ召喚を行う！」

《ディメンション・ソーサラー》
効果モンスター（チューナー・オリジナル）
星1／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　１００
手札に存在するこのカードとゲームから除外されている自分の魔法

使い族モンスター1体を墓地に送り発動する。
そのレベルの合計と同じレベルのシンクロモンスター1体をエクストラデッキからシンクロ召喚扱いで特殊召喚する。

「手札と除外ゾーンからのシンクロ召喚!?」

「《魔術師の宝札》で除外したレベル5《ＴＨＥ　トリッキー》と手札のレベル1《ディメンション・ソーサラー》を墓地に送りチューニング!」

《ＴＨＥ　トリッキー》
効果モンスター
星5／風属性／魔法使い族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ１２００
このカードは手札を1枚捨てて、手札から特殊召喚する事ができる。
緑の法衣を来た小さな魔術師が1つの紺色の輪になり、顔面に赤い『?』のマークが書かれた奇妙な魔法使いが5つの星になる。

「魔の書に記されし爆の章よ、白き衣(ころも)に覚悟を示せ!」

☆５＋☆１＝☆６

「シンクロ召喚!爆破せよ!《エクスプローシブ・マジシャン》!」

現れたのは、金のラインが入った白い法衣を着ている魔術師だ。

《エクスプローシブ・マジシャン》
シンクロ・効果モンスター
星６／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ１８００
チューナー＋チューナー以外の魔法使い族モンスター1体以上

自分フィールド上に存在する魔力カウンター2つを取り除く事で、相手フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

《エクスプローシブ・マジシャン》　ＡＴＫ／２５００

「永続罠《漆黒のパワーストーン》を発動！このカードに魔力カウンターを3つ置く！」

逆さの黄色い三角形が3つ合わさった模様が入った黒い球体が現れた。周りには同じ模様の小さな黒い球体が3つ旋回し続けている。

《漆黒のパワーストーン》　Ｍ／0→3

「そして、《エクスプローシブ・マジシャン》の効果発動！自分フィールド上から魔力カウンターを2つ取り除く事で、相手の魔法・罠を1枚破壊できる！《漆黒のパワーストーン》から魔力カウンターを2つ取り除き、残りの伏せカードを破壊する！」

《エクスプローシブ・マジシャン》が右手を突き出すと、パワーストーンの周りを飛び交う魔力カウンターが2つ右手に吸い込まれる。

《漆黒のパワーストーン》　Ｍ／3→1

「マジック・スプレッド！」

そして、白い光の弾丸を撃ち出した。伏せカードに当たり爆発し、粉々にする。

「伏せカードが全滅…！」

「バトル！《エクスプローシブ・マジシャン》で《イビリチュア・メロウガイスト》に攻撃！エクスプロード・ブレイク！」

今度は両手で白い光の弾丸を創り、発射した。これなら安全か…？

「甘いわね！手札から《リチュア・ヘルパー》の効果発動！ダメージ計算時に手札からこのカードを除外する事で、戦闘を行うリチュアの攻撃力を相手モンスターの攻撃力より１０００ポイント高い数値にする！」

「何…！？」

《リチュア・ヘルパー》
効果モンスター（オリジナル）
星２／水属性／海竜族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ１０００
自分フィールド上に表側表示で存在する「リチュア」と名のついたモンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から除外する事で、エンドフェイズ時までそのモンスターの攻撃力は、相手モンスターとの攻撃力の差の数値＋１０００ポイントアップする。

《イビリチュア・メロウガイスト》　ＡＴＫ／２１００→３５００

「返り討ちよ！アクア・ジェル・バレット！」

さっきよりも巨大な水の弾丸が攻撃を打ち消し、《エクスプローシブ・マジシャン》をも飲み込んだ。

「ちぃっ！」

秋斗　ＬＰ／５０００→４０００

「さらに《イビリチュア・メロウガイスト》の効果発動！このモンスターが相手モンスターを戦闘破壊した時、そのダメージ計算後にオーバーレイ・ユニットを１つ取り除く事で、破壊したモンスターを持ち主のデッキに戻す！」

《イビリチュア・メロウガイスト》　ＯＵ／２→１

メロウガイストの周りの球体が１つ飛び出して《エクスプローシブ・マジシャン》の体内に入り込む。すると、《エクスプローシブ・マジシャン》は青い光になって水の弾丸ごと消滅した。

「蘇生されたら厄介だから、デッキに戻させてもらったわよ。シンクロ召喚の方が手間がかかるでしょ？」

あいつの言う通り、蘇生させてシンクロ素材にでもできればいいと思っていたが、そう都合よくはいかないか。

「ちっ。《魔導竜　レイヴェルト》で《イビリチュア・ガストクラーケ》に攻撃！ラグナ・エンド・フェンサー！」

レイヴェルトが槍の先端から漆黒の砲撃を放ち、ガストクラーケを撃ち貫き破壊した。

「っ！」

早苗　ＬＰ／４０００→３７００

「カードを2枚セットしてターンエンドだ」

秋斗
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《魔導竜　レイヴェルト》（ＡＴＫ／２７００）
魔法・罠／《漆黒のパワーストーン》（Ｍ／１）リバース×２

「やるわね。《リチュア・ヘルパー》がなかったらあっさり全滅してたところよ」

「こっちも回復した分が台無しだ。手こずらせやがって…」

「そうじゃないと面白くないでしょ？久々に戦り合うんだから、簡単に終わったらつまらないわ」

早苗は不敵な笑みを俺に向けた。こういう変に強気なところがルーナと少し似ている。最も、早苗の方が断然強気だが。

「まあいい。最終目的は、今はこの際どうでもいい。最近歯応えのある奴が少なくて退屈していたところだ」

俺も笑みを浮かべて目の前の相手を見据える。少し人相が悪く見えるかもしれない。

「楽しませてくれよ…！」

「上等！」

この世界では1番『楽しい』と思えるデュエルになりそうだ…！

…To be continued

第69話　容赦のない奴は強い（後書き）

☆今回のキーカード☆

十代「よ、みんな！『今回のキーカード』の時間だぜ！今回は遊城十代と…」

翔「丸藤翔が司会役っス！」

十代「紅刃達の話からは少し離れて、今回は秋斗と早苗のデュエルだったな」

翔「まさか2人が知り合いだったなんて…。でも、敵同士になったのに躊躇いとかないのかな？」

十代「あいつら、このデュエルを楽しんでるじゃねえか。そこに善悪は関係ないぜ！」

翔「いや、全体的に見て石板とかいろいろ懸かってるんスけど…」

十代「それにしても、穏健派のメンバーは何でニュートラルに入ってんだろうな？」

翔「そういえばそうっスね。みんな悪い人には見えないし…」

十代「紅刃達が突き止めるのを待つしかないか…」

翔「それじゃ、カード考察に入るっス！」

十代「おう！今回紹介するのは、早苗が使うエクシーズモンスター《イビリチュア・メロウガイスト》だ！」

《イビリチュア・メロウガイスト》
エクシーズ・効果モンスター
ランク４／水属性／水族／ＡＴＫ２１００／ＤＥＦ１６００
レベル４モンスター×２
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、そのダメージ計算後にこのカードのエクシーズ素材を１つ取り除く事で、破壊したそのモンスターを墓地へ送らず持ち主のデッキに戻す。

十代「レベル４のモンスター２体でエクシーズ召喚できるモンスターだ」

翔「相手モンスターをこのモンスターで戦闘破壊した時、エクシーズ素材を１つ取り除く事で、戦闘破壊したモンスターをデッキに戻す効果を持ってるっス。直接デッキに戻すから、『墓地に送られた時』に発動する効果は発動しないんだ」

十代「墓地利用が多い今の環境なら、墓地じゃなくて手札やデッキに戻す効果は案外強力なんだよな。メロウガイストの場合はデッキに戻すから、再利用がかなりしづらくなるぞ」

翔「ただ、メロウガイスト自身の攻撃力が少し低めだから上級モンスターは対処しづらいのが弱点かな。戦闘補助系のカードで上手くサポートする必要があるよ」

十代「よし！今回はここまでだ！」

翔「まさかここでカード考察をやる日が来るとは思ってなかったっスよ」

十代「実際にデュエルするのもいいけど、たまには詳しく解説するのも楽しいよな！」

翔「ええと、次回は秋斗君と早苗さんの過去が明らかになるらしいっス」

十代「お！もしかしたらニュートラルについても何かわかるかもしれないな！」

翔「感想はいつでも受け付けてるっス！気が向いたら書き込んでってください！」

十代「次回もよろしく頼むぜ！」

ーーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

デュエルの展開が全然思い浮かばなくて、更新が大変遅くなってしまいました。まだ長編は後半戦に突入したばかりだっていうのに…。

更新速度はしばらくがた落ちになるかもしれませんが、今後もこの小説をよろしくお願いします。

では、また次回！

第７０話　楽しむ心に善悪なし（前書き）

☆精霊の呟き☆

ゴ・カ・ウ『『ハァァァァァァァァ…←←←』』

ヒジュラ『おいおい、どうした？そんなお通夜みたいな雰囲気醸し出して』

スイレン『そうですよ！元気を出してください！』

カイエン『元気を出せと言われても…』

ウィン『今までで１番遅い更新だよ？活動報告で「？」付きとはいえ「復活」なんて書いといて、これはないでしょ…』

ガルド『キュルル…』

ゴーズ『何で活動報告に書き込んだ後に、執筆どころかサイトに行く暇すらなくなるくらい忙しくなるんだ…』

ヒジュラ『あれは仕方ねえだろ！大体作者は今受験生なんだし！』

カイエン『だとしても、これはあんまりでしょう…？』

ウィン『下手したら読者が離れてるかもしれないし、そうなっても弁解のしようがないし…』

ヒジュラ『だぁぁぁぁもう！悪い方向に考えんじゃねえ！もっとポジティブに生きやがれ！』

スイレン『と、とりあえず早く始めましょう！今回の締めの言葉はクレセント様からのリクエストです！それでは、更新が遅れた分増量した第７０話、スタートです！

もう少しだけ、あなたといてもいいですか？』

ヒジュラ『そういう台詞は恋人にいうのが…』

スイレン『雪月花！』

ヒジュラ『ぐはっ！？』

第７０話　楽しむ心に善悪なし

ＳＩＤＥ／秋斗

秋斗
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《魔導竜　レイヴェルト》（ＡＴＫ／２７００）
魔法・罠／《漆黒のパワーストーン》（Ｍ／１）リバース×２

早苗
ＬＰ／３７００
手札／５
モンスター／《イビリチュア・メロウガイスト》（ＡＴＫ／２１００・ＯＵ／１）
魔法・罠／《儀式の宝札》

追い込みはしたが、有利ではない。早苗の手札を《天よりの宝札》で増やした以上、儀式召喚はほぼ確実。連発してくる可能性も高い。さあ、どう出る？

「あたしのターン！礼を言うわよ！あんたの《天よりの宝札》のおかげで儀式のお膳立てが済んだわ！」

「来るか…！」

「魔法カード《サルベージ》を発動！墓地から攻撃力１５００以下の水属性モンスターを２体まで手札に戻す！《シャドウ・リチュア

》と《ヴィジョン・リチュア》を手札に！」

儀式素材の代用モンスターを2体も回収したか。《儀式の宝札》の効果も合わせれば、儀式召喚で生じる激しいカード消費はあってないようなものだ。

今の早苗の手札は7枚。…発動するなら今だな。

「罠カード発動！《逆転の明札》！」

「それは…！？」

「効果は知っているようだな。相手がドローフェイズ以外のタイミングでカードを手札に加えた時、自分の手札が相手の手札と同じ枚数になるようにカードをドローする。5枚ドローさせてもらうぞ」

連続で儀式召喚しても、これ以上手札の枚数が増える事はないはずだ。万一ガストクラーケで手札を1～2枚持っていかれても立て直しが利く。

「まさか、一気にハンドアドバンテージを巻き返されるとはね…。儀式魔法《リチュアの儀水鏡》を発動！説明は省くわよ！必要なレベル分のリリースとして《シャドウ・リチュア》をリリース！儀式召喚！《イビリチュア・ソウルオーガ》！」

儀水鏡が出現し、再び2足歩行の巨大な海竜を投影し実体化させた。

《イビリチュア・ソウルオーガ》　ＡＴＫ／２８００

「《儀式の宝札》の効果発動！儀式召喚に成功した時、カードを２枚ドローする！さらに魔法カード《儀式の準備》！デッキからレベル７以下の儀式モンスター１体を手札に加え、墓地から儀式魔法１枚を手札に加える！デッキからは《イビリチュア・マインドオーガス》を、墓地からは《リチュアの儀水鏡》を選ぶわ！」

マインドオーガス…。ちっ、そういう事か。

「今手札に加えた《リチュアの儀水鏡》を発動！手札の《ヴィジョン・リチュア》をリリース！儀式召喚！《イビリチュア・マインドオーガス》！」

続いて現れたのは、さらに鋭い法衣を着ていて下半身が巨大なヒレと昆虫のような脚を持つ魚の怪物と化したエリアだ。左右の頬には赤い刺青のような線が刻まれている。

《イビリチュア・マインドオーガス》
儀式・効果モンスター
星６／水属性／水族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ２０００
「リチュア」と名のついた儀式魔法カードにより降臨。
このカードが儀式召喚に成功した時、お互いの墓地に存在するカードを合計５枚まで選択し、持ち主のデッキに戻す。

《イビリチュア・マインドオーガス》　ＡＴＫ／２５００

『ここからは私も本気で行く！』

「頼んだわよ、エリア！マインドオーガスが儀式召喚に成功した時、互いの墓地からカードを５枚までデッキに戻す！あんたの《魔導戦士ブレイカー》《ナイトエンド・ソーサラー》《ネオアクア・マド

ール》《ＴＨＥ　トリッキー》《スキル・サクセサー》を戻しなさい！セメタリー・ウェーブ！」

『大人しくデッキで眠っていなさい！』

下半身の魚の化け物の口から広範囲に水のブレスが波のように放たれる。選択された5枚のカードが幻影として姿を表し、波に飲み込まれた際に溶けて消滅した。

《スキル・サクセサー》を墓地に送ったのはいいが、こうしてデッキに戻されたら話にならん。

「さらに《儀式の宝札》の効果で2枚ドロー！《イビリチュア・ソウルオーガ》の効果発動！1ターンに1度、手札からリチュアのモンスター1体を捨てる事で、相手フィールド上にある表側表示のカード1枚をデッキに戻す！手札から《リチュア・アビス》を墓地に捨てて、《魔導竜　レイヴェルト》をデッキに戻すわよ！オーガ・ストリーム！」

ソウルオーガが口から水流を吐き出す。レイヴェルトがそれを食らい爆発が起こり、俺のフィールドが爆煙で覆われる。

「これで切り札は…」

ズギャアァァァ！

早苗が何か呟くが、言い切る前に爆煙から紫の光線が飛び出しソウルオーガを貫く。そのまま爆発して破壊された。

「なっ！？ソウルオーガが…！？」

「甘いな」

煙が晴れるとレイヴェルトの姿はなく、黒い法衣に身を包んだ魔導の王が杖を掲げて俺のフィールドに立っているのが明らかになった。

《神聖魔導王　エンディミオン》　ＡＴＫ／２７００

「エンディミオン!?何でフィールドに!?」

「罠カード《エスケープ・マジック》を発動した。レイヴェルトがフィールドから離れる時、レイヴェルトを除外してデッキから魔法使い族モンスターを1体特殊召喚し、相手の表側表示のモンスターを1体破壊する」

《エスケープ・マジック》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在する「魔導竜　レイヴェルト」が相手によってフィールド上から離れる時に発動する事ができる。
そのモンスターを除外し、自分のデッキから魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する。
その後、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して破壊する。

「ちっ、対策は万全ってわけね…。もう1枚《儀式の準備》を発動！」

「2枚目だと?」

「デッキから《イビリチュア・ガストクラーケ》を、墓地から《リチュアの儀水鏡》を手札に加える！そして《リチュアの儀水鏡》を発動！手札から2体目の《ヴィジョン・リチュア》をリリース！儀式召喚！《イビリチュア・ガストクラーケ》！」

また鏡が現れ、タコもどきかイカもどきの怪物が下半身になっている女を呼び出した。

《イビリチュア・ガストクラーケ》　ＡＴＫ／２４００

「ガストクラーケの効果発動！儀式魔法で特殊召喚された時、相手の手札を2枚確認してその内の1枚をデッキに戻す！さあ、見せなさい！」

「……」

ソリッドビジョンで俺の手札がランダムに2枚公開された。

「（《魔導帰還》に…《融合》？融合モンスターなんて持ってたかしら？でも、《魔導帰還》も危険だし…。《魔導帰還》は、フィールド上にレベル7以上の魔法使い族モンスターがいる時に魔力カウンターを任意の数取り除き、取り除いた数2つにつき1体除外されたモンスターをフィールドに呼び戻すカード…）」

《魔導帰還》
通常魔法（オリジナル）
自分フィールド上にレベル7以上の魔法使い族モンスターが表側表示で存在する場合発動する事ができる。
自分フィールド上に存在する魔力カウンターを任意の数取り除く。
その後、取り除いた魔力カウンター2つにつき1体ゲームから除外

されている自分のモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

「（フィールドには既に魔力カウンターが１つ乗った《漆黒のパワーストーン》がある。秋斗の事だから、すぐに発動させてレイヴェルトを出すに違いない。ここは…）…《魔導帰還》を戻しなさい」

少し悩んだ後に選択されたカードを、俺は淡々とデッキに戻した。

「《儀式の宝札》の効果で２枚ドロー！カードを２枚セットしてターンエンド！」

早苗
ＬＰ／３７００
手札／３
モンスター／《イビリチュア・メロウガイスト》（ＡＴＫ／２１００・ＯＵ／１）《イビリチュア・マインドオーガス》（ＡＴＫ／２５００）《イビリチュア・ガストクラーケ》（ＡＴＫ／２４００）
魔法・罠／《儀式の宝札》リバース×２

メロウガイストとガストクラーケを守備表示にしないのは何かの罠か？こっちはどう動くか…。

「俺のターン！」

…ほぉ…丁度いい。

「魔法カード《魔導師の導き》を発動！ライフを１０００払い、デッキからレベル４以下の魔法使い族２体を特殊召喚する！」

《魔導師の導き》

通常魔法（オリジナル）
１０００ライフポイントを払って発動する。
自分のデッキからレベル４以下の魔法使い族モンスター２体を特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃する事ができず、シンクロ素材とする事もできない。

秋斗　ＬＰ／４０００→３０００

「《魔導戦士　ブレイカー》と《マジシャンズ・ヴァルキリア》を特殊召喚！」

１度デッキに戻されたブレイカーが現れ、それに続いてルリアも飛び出した。

《魔導戦士　ブレイカー》　ＡＴＫ／１６００

《マジシャンズ・ヴァルキリア》　ＡＴＫ／１６００

『早苗さん、エリアさん…』

「久しぶりね、ルリア。言っとくけど加減はしないし戻るつもりもないわよ？」

『今はあなた達を倒すだけよ』

『……』

ルリアは少し躊躇いがちな表情を浮かべている。旧知の仲だ、こいつみたいな性格ならそれが当然だろ。そして、早苗とエリアの覚

悟も揺らがない。

「ルリア」

『！』

「まずは倒す。話はそれからだ」

『…はい！』

覚悟は決まったようだな。行くか。

「《魔導師の導き》で呼び出したモンスターは攻撃できず、シンクロ素材にも使えない」

「なら何のために呼び出したのよ？」

「さっき覗いただろ。魔法カード《融合》！ブレイカーとヴァルキリアを墓地に送る！」

２体が光になって交わり、渦を巻いて回転する。そして、強い輝きを放つ。

「融合召喚！《魔導戦姫　ヴァルキリア》！」

光が晴れると、女風にした薄紫のブレイカーの鎧を身につけたルリアが立っていた。ブレイカーの剣と盾も持っていて、これも薄紫だ。

《魔導戦姫（まどうせんき）　ヴァルキリア》

融合・効果モンスター（オリジナル）
星７／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ１４００
「魔導戦士ブレイカー」＋「マジシャンズ・ヴァルキリア」
このモンスターは融合召喚以外の方法では特殊召喚できない。
このカードはカードの効果では破壊されない。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算前にそのモンスターを破壊する。
１ターンに１度、以下の効果から１つを選択して発動する事ができる。
●このカードのレベルを１つ下げる事で、相手フィールド上に存在する魔法・罠カード１枚を選択して破壊する。
●自分の墓地の魔法カードを任意の枚数ゲームから除外することで、エンドフェイズまでこのカードの攻撃力を除外したカード１枚につき５００ポイントアップする。

《魔導戦姫　ヴァルキリア》　ＡＴＫ／２５００

「魔導戦姫？聞いた事ない…」

『あなたにも進化形態があるとはね…』

『これが私の進化した姿です。行きますよ！』

「ヴァルキリアの効果発動！このモンスターのレベルを１つ下げる事で、相手の魔法・罠を１枚破壊する！左側のリバースカードを狙う！スター・ブレイク！」

《魔導戦姫　ヴァルキリア》　☆７→６

『障害は取り除くまでです！』

ルリアの剣の切っ先から紺色の電撃が放たれ、リバースカードを1枚貫き破壊した。

「魔法カード《魔力掌握》を発動！フィールド上のカードに魔力カウンターを1つ乗せる！乗せるのは《漆黒のパワーストーン》だ！」

黒い球体の周りを飛び交う魔力カウンターが1つだけ復活する。

《漆黒のパワーストーン》　M／1→2

「その後、デッキから同名カードを1枚手札に加える！そしてエンディミオンの効果発動！手札の魔法カードを墓地に送る事で、フィールド上のカードを破壊する！今手札に加えた《魔力掌握》を墓地に送り、もう1枚のリバースカードを破壊する！ロード・マジック！」

エンディミオンが杖から紫の魔力弾を飛ばす。これで魔法と罠の心配はないか…？

「っ！罠カード《威嚇する咆哮》！このターン相手は攻撃できない！」

直前でカードが表になり、そのまま魔力弾が命中し爆破された。

「このターンの攻撃はなしか…。墓地の光属性モンスター《マジシャンズ・ヴァルキリア》と闇属性モンスター《魔導戦士　ブレイカー》を除外し、手札から《カオス・ソーサラー》を特殊召喚する！」

さらに追い込むべく呼び出したのは、黒い法衣を着た魔法使いだ。

杖は持っていない。

《カオス・ソーサラー》　ＤＥＦ／２０００

『《カオス・ソーサラー》…！？』

「効果発動！表側表示のモンスターを１体除外する！選ぶのは《イビリチュア・ガストクラーケ》だ！カオス・ディメンション！」

《カオス・ソーサラー》が放つ光と闇の混ざった球体が、ガストクラーケを飲み込み跡形もなく消し去った。除外までは対応できないはずだ。

「ガストクラーケが…！？」

「自身の効果を使った《カオス・ソーサラー》はこのターン攻撃できないが、元から攻撃を封じられている今は関係ない。カードを１枚セットしてターンエンドだ」

秋斗
ＬＰ／３０００
手札／３
モンスター／《神聖魔導王　エンディミオン》（ＡＴＫ／２７００）
《魔導戦姫　ヴァルキリア》（ＡＴＫ／２５００）《カオス・ソーサラー》（ＤＥＦ／２０００）
魔法・罠／《漆黒のパワーストーン》（Ｍ／２）リバース×１

「これだけやって、お互いにほとんどダメージを与えられてないなんてね」

「お互いそれだけの実力だというだけの事だろ」

俺はライフコストで１０００ポイントを失い、早苗が受けた戦闘ダメージはごくわずか。俺はライフを１０００回復して今のライフが３０００だから、失ったライフは俺が上か。

「思い出すわね。昔はこうしてよくデュエルしてたっけ」

「ああ」

昔か。あの頃は悪くなかったな。

俺が生まれたのは寂れた町だ。いるのはごろつき共ばかりで、世間で言う非人道的な出来事は日常茶飯事。物心がついた時には、母親は既にいなかった。父親も酒や賭け事に明け暮れる始末。そんな日常に嫌気が差して、俺はただ1人町を出た。

始めは町からかっぱらった金と飯でどうにか食い繋いだが、やがて双方尽きた。7歳の子供を雇う所は当然あるわけもなく、盗人になる他に生きる術は残されていなかった。

町に居座って食べ物や服などを盗み、1週間経ったら町を出る。そして、また別の町を探す。そんな日々が続いた。

別に寂しいとは思わなかった。旅に出る前にかっぱらった物の中に偶然2枚のデュエルモンスターズのカードがあって、その内の1

枚に精霊が宿っていたからだ。そいつがルリアで、もう片方が《魔導竜　レイヴェルト》のカードだ。

1人旅でもよかったが、ルリアがいなければ上手くばれずに盗んで逃げ切る事もそう何度もできなかっただろ。何だかんだで、ルリアには感謝している。

他のカードは、旅先で拾ったりして調達した。デッキが完成してからは、食べ物を賭けてデュエルを挑んだりした。ルールやカードの効果をじっくり研究したからか、アンティルールで負ける事はなかった。

そんな生活を続けて3年が経った頃、とある町で相変わらず俺とルリアは食い物を盗んでいた。ベンチに座って盗んだリンゴをかじっている時の事だ。空は一点の曇りもない夕焼けだった。

『ねえ』

呼ばれたから顔を向けると、茶髪の女が立っていた。大体俺と同じくらいの年齢に見える。

『そのリンゴ、盗んだ奴でしょ？』

『…見てたのか？』

『たまたまね。そんなにお金ないわけ？』

『ああ。俺みたいな家も家族もない奴は、こうして生きるしかないんだよ』

淡々と答えてまたリンゴをかじる。茶髪の女は驚いて声も出ないようだった。当然だ。俺とこいつとじゃ、住む世界が違う。

『…何で家がないかはわからないけどさ、家族がいないってのは嘘でしょ？』

『何でそう言える？』

『一緒にいるそこの精霊は、あんたのパートナーじゃないの？』

『「！？」』

今度は俺が驚く番だった。ルリアは丁度カードから出て俺の傍にいる。精霊は普通の奴には見えない。俺以外に見える奴に会うとは思わなかったからだ。

「…私が見えるのですか？」

『まあね。その点じゃ、あんた達と同類だし』

「そうね」

突然、女の横に別の女が現れた。髪は水色の長髪で、黒と黄色の魔法使いのような服を着ている。

『お前は…？』

「私はエリア。この子…早苗の精霊よ。あなたは？」

「私はルリアです。よろしくお願いします」

「よろしく」

同じ精霊だからか、ルリアとエリアは初対面にも関わらず親しいような雰囲気が出ていた。

『あんた達、家ないんでしょ？ウチに来なさいよ』

『何？』

突然の提案に、俺は少しだけ目を見開いた。

「いいわね。両親もそれくらいなら許してくれるわよ」

『いいのか？見ず知らずの盗人を誘ったりして』

『同じ精霊が見える人間同士だし、赤の他人とは思えないのよ』

「マスター、行ってみましょうよ」

『…ああ』

ルリアもせっかく他の精霊に会ったからいろいろ話したい事もあるだろ。俺はそう考えて、ついていく事にした。

『あ、自己紹介まだだった。あたしは葉鳶早苗。あんたは？』

『…星御秋斗だ』

笑って名乗るそいつは、横から降り注ぐ夕日の日射しもあってか

やけに眩しく見えた。

これが俺と早苗の出会いだった。

『ただいま！』

早苗に連れられて辿り着いたのは、ごく普通の一軒家だった。玄関を開けるなり、早苗は俺に『ちょっと待っててて』と言い、靴を脱いで居間に駆け込んだ。

少し経つと、早苗は大人の女を連れてきた。同じ茶髪で、すぐに母親だとわかった。

『あなたが早苗の言ってた男の子ね。さ、上がって上がって』

言われるがままに靴を脱ぎ、居間で夕飯を振る舞われた。父親の帰りが遅くなるらしく、俺は父親の分の夕飯を食べる事になった。父親の分は後で作るそうだ。

夕飯を食べている間に、俺は早苗の母親にせがまれて自分のこれまでの境遇を話した。話が終わる頃には、既に完食していた。

『そんな歳で…大変だったわね』

『別に。慣れれば大した事じゃない』

『でも、いつまでもそんな生活していられるわけないでしょ？』

『バイトができる年齢になれば、それで稼ぐ』

身分証明書の偽造くらい、ルリアの魔法でどうとでもなる。セキュリティが無駄に厳しい街ではそれで乗り切ったくらいだしな。

『…あなた、この家に住みなさい』

『は…？』

長くても一晩泊まってからここを出るつもりだったから、早苗の母親が出した提案には一瞬耳を疑った。

『母さん？』

『そんな生活で生き続けても、後々後ろめたいだけよ。まだ中学生ですらないのに、悲しいじゃない』

『…そうするとして、俺を養うほどの余裕はあるのか？』

『全然大丈夫よ。このままほっとけないの。お願い』

何てお人好しだ。当時はそう思った。だが、いつまでも盗みばかりやっていられないのも事実。

『…余裕がなくなったらここを出るつもりだ。それまでは…世話になる』

こうして、俺は葉鳶家の居候になった。

父親が海馬コーポレーションの重役で、居候1人分の飯を増やす金は確かにあった。それどころか、これは後の話になるが俺を中学に入れるまでしてくれた。ルリアもエリアという俺以外の話し相手ができて嬉しそうだった。

みんな本当の家族のように接してくれて、表面は自分でもわかるほど冷めているが、これが家族といる幸せなのかと痛感できた。

居候になって大体1週間経った頃だ。

『ちょっと出掛けてくる』

『どこにだ?』

『兄貴のお見舞い』

『兄貴?お前、兄がいるのか?』

その時、俺はまだ早苗に兄がいる事を知らなかった。この1週間、母親と同じくお人好しな父親とは会っても兄らしき人物はまだ見かけていないからだ。

『うん。和馬(かずま)っていうんだ。あたしの双子の兄貴。今は入院してるけどね』

『入院？』

そして、入院しているというのも当然初耳だった。

『…俺も行っていいか？』

だから、単純に興味本意で聞いてみた。

『え？』

『その和馬って奴と1度会ってみたい』

『…いいよ。ついてきて』

そう言った早苗は表面では笑っていたものの、それはどこか寂しいものだった。

着いたのは町一番の総合病院だった。症状は行けばわかると踏んでいたが、ほんの少しだけ不安に思った。

早苗が受付を済ませて、俺はただ早苗についていった。ルリアとエリアもカードから出てきている。そして、和馬がいる病室に着いた。

『ここだよ』

早苗は一言俺に告げてから、ドアを軽く2回ノックした。

『入るよ』

返事を待たずに病室に入る早苗。それはどうかと一瞬気にしたが、無視して俺も入る事にした。

そして、目に入ったのは驚くべき光景だった。

『「…！？」』

和馬はいる。早苗の前髪が左に流れているのに対して、和馬の前髪は右に流れている。それ以外は双子と言うだけあってほとんどそっくりだ。その和馬は今、ベッドに横たわっている。それはわかる。

だが、口には人工呼吸器が装着されていて、体のあちこちに管が取り付けられている。

「…これは…？」

ルリアはもちろん、俺もさすがに驚いた。入院と言ってもせいぜい骨折程度で、見舞いの奴が来たら笑顔で迎える。そんな光景を想像していただけに、普段ではあり得ないほど表情が驚愕に歪むのがわかった。

『…兄貴、植物状態なんだ』

やたらと静かに、呟くように飛び出した小さな声は、やけに通って聞こえた。

「植物状態…？生きてても、目を覚まさないという事ですか？」

「そうよ…」

エリアは辛そうな顔で目を伏せた。早苗のパートナーとしてか、個人としてかはわからないが、和馬を慕っているのはわかった。

『もう1年くらい経つかな？朝早く起こしに行ったら全然起きなくて。学校に行く時間になっても起きなくてさ。いくら揺すっても、いくら呼び掛けても反応なんて帰ってこない。病院に運んだら、すぐに入院が決まった』

早苗の口から、最初の静かな調子のまま語られていく。俺とルリアは半分呆然とした頭で一字一句逃さず聞き取る。

『原因は医者でもわからないんだって。今でもまだわかってない。それから、1週間に1度お見舞いに行ってるんだ。秋斗と初めて会ったのも、お見舞いの帰りだった』

医者でもわからない、現代医学で解決できない症状。そんなものがあるとは信じられないが、現に今こうして機械に繋がれて、身動き1つしていない。

『不思議だよね。昨日まではあんなに元気だったのに、明日またデュエルしようって言ってたのに、今はもう寝たきりだなんて…』

背を向けていて、表情は見えない。だが、悲しみや寂しさでその背中がやけに小さく見えたのを覚えている。

『兄貴、聞こえる？早苗だよ。最近ね、あたし達の家に居候ができ

たんだ』

俺への説明が終わったのか、早苗は和馬に話し掛け始めた。別におかしいとは思わないから、俺はただ黙っている。

『星御秋斗っていうんだ。あたし達と同い年の男の子。父さんや母さんがいなくて、ずっと1人で生きてきたんだって。ちょっと冷めてて雰囲気は怖いかもしれないけど、デュエルがとっても強いんだ。いつか兄貴とも戦ってほしいなぁ』

それからしばらく、早苗の話を黙って聞いて過ごした。終わった頃には、病室に入ってから15分近く経っていた。

『それじゃ、そろそろ帰るから。また来るからね。エリア、秋斗、ルリア、行こう』

『ああ』

早苗は俺の返事を聞いて、すぐに病室を出た。エリアも黙って病室を出る。俺とルリアも出ようとしたが、俺は一旦振り返ってベッドに近寄った。

「マスター？」

ルリアの声も無視して、和馬を見る。

無表情で、ただ静かに眠っている。…家族をほっといて、こいつは何をやっているんだ。

『…聞いてるか？星御秋斗。早苗の言ってた居候だ』

何を思ったのか、俺も早苗と同じように和馬に話し掛けた。意識があるかすらわからないのにだ。

『1つだけ言わせろ』

届くかはわからないが、おそらく届かないだろうが、これだけは言っておく。

『さっさと起きてこい。自分の妹に、いつまでもあんな泣きそうな顔をさせるな』

早苗が病室を出る時に見えた表情。今まで見てきたどんな奴よりも悲しい顔だった。これ以上の辛い表情を、俺は今でも見た事はない。

『行くぞ』

「…はい」

『早く起きろ』。ただそれだけ一方的に伝えて、俺はルリアを引き連れて病室を出た。

その後も、俺は葉鳶家の居候として暮らした。デュエルしたり、勉強したり、たまに和馬の見舞いに行ったりもした。両親の事は、いつからか親父や御袋と呼ぶようになった。

和馬ともデュエルしたいと思ったが、デッキは1度も覗いていない。どうせなら、互いに相手の力量を知らないまま戦った方が面白いと考えての事だ。

何だかんだ言っても、俺は正直この生活を楽しんでいた。居候にならなければ得られなかったものがたくさんあった。いつか大きくなったら、仕送りでもして恩返しをしたいとさえ思えた。

「昔っからよく競ってたわね。勝敗はほぼ互角で、いつからか数えるのも億劫になったっけ」

「ああ。あの頃は悪くなかったな。…だが、いつまでも長くは続かなかった」

平和な日常が突然壊れたのは、中学時代の時だ。

朝、いつものように起きて、中学の制服に着替えて居間に行くと、両親が何やらバタバタしていた。

『どうした？朝から騒々しい』

『秋斗！た、大変だ！』

『大変って何がだ？』

『早苗がいないんだ！』

『いない？』

いない、とはどういう事だ？始めは親父の言葉の意味を理解しかねた。

『家にいないんだよ！靴も消えてる！』

『何…？』

それからは慌ただしかった。俺や両親はもちろん、警察でもついに見つける事はできなかった。痕跡すら掴めないから当然と言えば当然だが。

家出はまずない。早苗はそれをするには家族と親しくなりすぎている。第一、和馬を置いて家出などあり得ない。

それだけでは終わらなかった。病院から和馬まで消えた。意識を取り戻したのか、誰かに連れ去られたのかはわからない。だが、両親が悲しむには十分すぎる要素だ。

俺は今でも暇を見つけては早苗と和馬を探すべくあちこちに出掛けている。ニュートラルに対抗する戦力を集めているフォッタに出会ったのは、高校にも入らずに長期の捜索に出掛けている時だった。

俺は力を貸す代わりに、早苗と和馬の捜索を手伝う事を要求した。交渉はすぐに成立。捜索はきちんとしているらしく、時々報告をしてくれている。

だが、まさか過去（こっち）で早苗を見つける事になるとは思わなかった。

「親父も御袋も心配していたぞ。お前ら双子が消えた時は、まともじゃいられなかった」

「…悪いとは思ってるわよ。何も言わずに家を出た事は、帰る事ができたら謝る」

早苗は少し顔を逸らして表情を曇らせた。反省はしているらしい。

「『二度と帰れないかもしれない』と言っているようにも聞こえるぞ」

「そうよ。兄貴が目を覚ましたとしても、帰れる保証なんてどこに

もない。それだけ危険な取り引きなのよ」

こいつは和馬をとても慕っていた。それだけに、喪失感は俺みたいな他人の比じゃない。だから、早苗の選んだ行動をおかしいとは思わない。人間なんてのは、元々弱い生き物だ。早苗も、俺も。

「間違いだなんてわかってる。でも、立ち止まるわけにはいかない。褒められた行為じゃなくても、周りに認められなくても、あたしは兄貴に帰ってきてほしいから」

『早苗さん…』

その目に迷いは見えない。目的のために、ただ貪欲に。そんな姿勢だ。

…悪いな、親父、御袋。この馬鹿を連れ戻すのは、もう少し先の話になりそうだ。

「全く、どうしようもないブラコンだな」

「何とでも言いなさい」

「まあいい。それだけ本気なら、互いに全力を出すのに躊躇いはないんだろうな？」

「当たり前でしょ？少しでも手を抜いたら許さないわよ」

「そんな心配は無用だ」

こんなに昂るデュエルはいつ以来だろうか。紅刃とですら不調で

満足のいくデュエルはできなかった。この時間は貴重だ。

「…フ…」

「ふふ…」

『（笑ってる…。ただ全力の相手を全力で倒す事しか頭にない。経緯や善悪などとうに越えた所に、マスターと早苗さんはいるのですね…）』

思わず笑う。向こうもだ。考える事は同じか。

「「（全力で叩き潰すから、全力で耐えてみせろ！）」」

今俺達が互いに要求するのは、これだけだ。

「お喋りタイムは終了よ！あたしのターン！魔法カード《サルベージ》！墓地から攻撃力１５００以下の水属性モンスターを２体手札に加える！選ぶのは《シャドウ・リチュア》と《ヴィジョン・リチュア》よ！」

また《サルベージ》か。確実に儀式召喚されるな。

「今手札に加えた《シャドウ・リチュア》の効果発動！このモンスターを手札から墓地に送る事で、デッキからリチュアの儀式魔法１枚を手札に加える！」

『また《リチュアの儀水鏡》ですか…？』

「ハズレ。《リチュアに伝わりし禁断の秘術》よ！」

『！？』

「…！」

あのカードには見覚えがある。何度もモンスターを取られた事があるが、久々で頭から抜けていた。《カオス・ソーサラー》をすぐにフィールドから離さなかったのは愚策だったか…？

「まだよ！手札から《リチュア・ビースト》を召喚！」

首から儀水鏡をぶら下げた、青緑の獣が現れた。あのモンスターは知らないな。

《リチュア・ビースト》
効果モンスター
星４／水属性／獣族／ＡＴＫ１５００／ＤＥＦ１３００
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル４以下の「リチュア」と名のついたモンスター１体を選択して表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

《リチュア・ビースト》　ＡＴＫ／１５００

「《リチュア・ビースト》の効果発動！召喚された時、墓地からレベル４以下のリチュア１体を守備表示で特殊召喚する事ができる！墓地から《リチュア・アビス》を特殊召喚！」

青紫の鮫から胴体が生えたようなモンスターが呼び出される。また厄介なサーチモンスターを…。

《リチュア・アビス》
効果モンスター
星２／水属性／魚族／ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ　５００
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分のデッキから「リチュア・アビス」以外の守備力１０００以下の「リチュア」と名のついたモンスター１体を手札に加える事ができる。

《リチュア・アビス》　ＤＥＦ／　５００

「《リチュア・アビス》がフィールド上に出た時、デッキから守備力１０００以下のリチュアを手札に加える事ができる！《リチュア・ヘルパー》を手札に加えるわ！そして、儀式魔法《リチュアに伝わりし禁断の秘術》を発動！自分と相手フィールド上のモンスターをリリースして儀式召喚を行う！」

《リチュアに伝わりし禁断の秘術》
儀式魔法
「リチュア」と名のついた儀式モンスターの降臨に必要。
自分フィールド上及び相手フィールド上から、儀式召喚するモンスターと同じレベルになるように表側表示で存在するモンスターをリリースしなければならない。
この効果で儀式召喚したモンスターの攻撃力は半分になる。

このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行う事ができない。

「必要なレベルは8！レベル2のあたしの《リチュア・アビス》と、レベル6のあんたの《カオス・ソーサラー》をリリースさせてもらうわ！」

また現れた儀水鏡に、アビスはもちろん《カオス・ソーサラー》までもが吸い込まれる。

「儀式召喚！《イビリチュア・ソウルオーガ》！」

代わりに吐き出されたのは、このデュエルで3回目の登場となるソウルオーガだった。

《イビリチュア・ソウルオーガ》　ＤＥＦ／２８００

「ただし、この効果で出した儀式モンスターの攻撃力は半分になり、あたしはこのターンの間バトルフェイズを行えない。儀式召喚に成功した事で、《儀式の宝札》の効果でカードを2枚ドローするわ」

「またソウルオーガの効果を使うつもりか？」

「狙いは他にあるわ！魔法カード《使い古された儀水鏡》！墓地の《リチュアの儀水鏡》を除外する事で発動できる、１回のデュエルで1度きりしか使えないカードよ！」

「1度きりだと？」

やはり、今の早苗のデッキには俺ですら知らないカードがいくつ

か入っているようだ。あのカードは1度しか発動できないと言うくらいだ、よほど強力なカードなんだろ。

「効果は3つの内から1つを選べるわ。1つ目は相手の手札をランダムに2枚除外。2つ目は相手モンスターを2体手札に戻す。3つ目は墓地にいるリチュアの儀式・エクシーズモンスター1体につき700ポイントのダメージを与える」

《使い古された儀水鏡》
通常魔法（オリジナル）
自分の墓地に存在する「リチュアの儀水鏡」1枚を除外して発動する。
以下から効果を1つ選び発動する。
「使い古された儀水鏡」はデュエル中1度しか使用できない。
●相手の手札をランダムに2枚選択して除外する。
●相手フィールド上に存在するモンスター2体を手札に戻す。
●自分の墓地に存在する「リチュア」と名のついた儀式・エクシーズモンスターの数×700ポイントダメージを相手に与える。

「あたしが選ぶのは2つ目の効果よ！ヴァルキリアとエンディミオンを手札に戻す！」

少し古びた儀水鏡が現れ、水色の光を放つ。バウンスは痛いな。なら…。

「罠カード《トランスファー・キャノン》！魔法使い族をエンドフェイズ時まで除外し、除外したモンスターの攻撃力の半分の数値分だけダメージを与える！」

《トランスファー・キャノン》

通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在する魔法使い族モンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターを発動ターンのエンドフェイズ時までゲームから除外し、そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える。

「《魔導戦姫　ヴァルキリア》を除外する。ダメージは１２５０だ」

《亜空間物質転送装置》から大砲が生えたような機械が現れ、赤い球体から光線を放ちルリアを異次元へと転送する。その後、大砲から紺色の光弾が発射され、早苗に当たり爆発した。

「きゃあぁぁぁぁっ！」

早苗　ＬＰ／３７００→２４５０

「ぐぅ…！手札から速攻魔法発動（リチュア・ミラージュ）！ダメージを受けた時、自分フィールド上のリチュアをリリースする事で同じ数値のダメージを相手に与える！」

《リチュア・ミラージュ》
速攻魔法（オリジナル）
自分がダメージを受けた場合発動する事ができる。
自分フィールド上に表側表示で存在する「リチュア」と名のついたモンスター1体をリリースし、受けたダメージと同じ数値のダメージを相手ライフに与える。
その後、デッキからカードを1枚ドローする。

「《リチュア・ビースト》をリリースするわ！お返しよ！」

《リチュア・ビースト》が光って鏡に変化し、中から《トランスファー・キャノン》と同じ紺色の光弾が飛び出した。再び着弾・爆発し、今度は俺のライフを削る。

「ぐぅっ！」

秋斗　ＬＰ／３０００→１７５０

「その後、カードを１枚ドローする！さらに、魔法カード《リチュア・レインアロー》を発動！フィールド上のリチュアの儀式・エクシーズモンスター１体につき５００ポイントのダメージを与える！」

《リチュア・レインアロー》
通常魔法（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在する「リチュア」と名のついた儀式・エクシーズモンスター１体につき５００ポイントダメージを相手ライフに与える。

「今フィールドにいるリチュアの儀式モンスターとエクシーズモンスターは３体！ダメージは１５００よ！」

３体のリチュアのモンスターから水色の光が飛び出し、上空に集まり巨大な儀水鏡に変化した。すると、儀水鏡から雨のように水色に輝く光の槍が真下の俺に降り注いだ。俺は反射で両腕を盾にする。

「ちぃっ…！」

秋斗　ＬＰ／１７５０→　２５０

「カードを2枚セットしてターンエンドよ！」

「…エンドフェイズ時に、《トランスファー・キャノン》の効果で除外されたルリアは帰還する」

光の粒子が集まり、人の形を象る。光が消えると、魔導戦姫の姿になったルリアが佇んでいた。

《魔導戦姫　ヴァルキリア》　ＡＴＫ／２５００

早苗
ＬＰ／２４５０
手札／１
モンスター／《イビリチュア・メロウガイスト》（ＡＴＫ／２１００・ＯＵ／１）《イビリチュア・マインドオーガス》（ＡＴＫ／２５００）《イビリチュア・ソウルオーガ》（ＤＥＦ／２８００）
魔法・罠／《儀式の宝札》リバース×２

「なるほど…バトルフェイズがなくとも関係ないという事か」

「どうする？あんたにこの状況を覆す事ができるかしら？」

不敵に笑う早苗。…そうだ。この強気なところがルーナに似ていると、いつだったか思った事があったな。

『どうしますか、マスター？だいぶライフを減らされましたが…』

「確かに、ライフコストは満足に払えそうにないな」

随分追い詰められたもんだ。後1体リチュアの儀式かエクシーズ

モンスターがいれば、俺は負けていた。おまけに、今の早苗の手札には《リチュア・ヘルパー》がいる。戦闘も難しいな。

やはり、早苗はそこら辺のデュエリストとはわけが違う。並のデュエリストにはない別格の強さ。だからこそ、倒しがいがある。

「言ってろ。負けるつもりは毛頭ないからな」

「ならやってみなさいよ！」

『（何だかんだで、早苗も凄く楽しんでるじゃない。最近和馬の事で思い詰める事が多くなってたから、秋斗とデュエルしたのは正解みたいね）』

「俺のターン！」

引いたのは《闇の誘惑》か…。エンディミオンが手札に戻った事だし、丁度いい。

「魔法カード《闇の誘惑》！カードを2枚ドローし、手札の闇属性モンスターを1体除外する！」

「ここでドロー加速…！」

「手札からエンディミオンを除外」

淡々と効果の処理を済ませる。だが、まだだ。俺はたった今引いたモンスターを取り出した。

「手札から《連弾の魔術師》を召喚！」

杖を２つ持ち、紫の法衣を着た魔術師が姿を現した。色とりどりの球体を５つ宙に浮かせている。

《連弾の魔術師》
効果モンスター
星４／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１２００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分が通常魔法を発動する度に、相手ライフに４００ポイントダメージを与える。

《連弾の魔術師》　ＡＴＫ／１６００

そして、手札で腐っていた１枚を取り出しディスクに差し込んだ。

「さらに、魔法カード《異次元の魔札》を発動！除外されている魔法使い族を３体デッキに戻し、カードを２枚ドローする！」

《異次元の魔札》
通常魔法（オリジナル）
ゲームから除外されている自分の魔法使い族モンスター３体をデッキに戻す。
その後、デッキからカードを２枚ドローする。

「《マジシャンズ・ヴァルキリア》《魔導戦士　ブレイカー》《神聖魔導王　エンディミオン》をデッキに戻す。そして２枚ドロー」

また躊躇いなくカードを引き、内容を確認する。

「…！」

…そうか。和馬…お前は、今の早苗に納得がいかないか。

「…早苗」

「？」

「悪いが、勝ちに行かせてもらうぞ！」

「え？」

この手札なら、この戦況なら、このターンで勝てる。

「《連弾の魔術師》の効果発動！俺が通常魔法を発動する度に、相手に４００ポイントのダメージを与える！」

《連弾の魔術師》の球体から魔力弾が１つ放たれ、早苗にダメージを負わせる。

「つぅっ！」

早苗　ＬＰ／２４５０→２０５０

「そして、魔法カード《魔導帰還》を発動！」

『《魔導帰還》！？さっきガストクラーケの効果でデッキに戻した…！』

「１度デッキに封じたカードを、土壇場で引き当てたっていうの…！？」

「フィールド上にレベル7以上の魔法使い族モンスターがいる時、魔力カウンターを任意の数取り除き取り除いた数2つにつき1体除外されたモンスターを特殊召喚する！俺のフィールドには1度除外されてレベルが7に戻ったヴァルキリアがいる！《漆黒のパワーストーン》から魔力カウンターを2つ取り除き、除外されている《魔導竜　レイヴェルト》を特殊召喚！」

《漆黒のパワーストーン》　Ｍ／２→０

パワーストーンの周りを飛び交っている魔力カウンターが2つ軌道を外れ、空中に巨大な円を描く。すると、その円が異次元の穴に変化し、中からレイヴェルトが飛び出した。

《魔導竜　レイヴェルト》　ＡＴＫ／２７００

「魔力カウンターを全て失った《漆黒のパワーストーン》は破壊される。また通常魔法を発動した事で、《連弾の魔術師》の効果発動！４００ポイントのダメージを受けてもらう！」

また魔力弾が飛び出し、早苗に命中した。着実にライフを削っていく。

「くっ！」

早苗　ＬＰ／２０５０→１６５０

「さらに、レイヴェルトの効果発動！手札の魔法・罠を墓地に送り、相手の魔法・罠を1枚破壊する！手札から《魔力掌握》を墓地に送り、右の伏せカードを破壊だ！黒焔葬破！」

レイヴェルトが再び黒い炎で伏せカードを燃やしにかかる。なるべく危険な要素は消しておくべきだ。

「ハズレよ！罠カード《リチュア・フォース》！リチュアのモンスター全員の攻撃力と守備力を、エンドフェイズ時まで１０００ポイントアップさせる！」

《リチュア・フォース》
通常罠（オリジナル）
このカードは相手ターンのみ発動する事ができる。
自分フィールド上に表側表示で存在する「リチュア」と名のついたモンスターの攻撃力・守備力をエンドフェイズ時まで１０００ポイントアップさせる。

《イビリチュア・メロウガイスト》　ＡＴＫ／２１００→３１００

《イビリチュア・マインドオーガス》　ＡＴＫ／２５００→３５００

《イビリチュア・ソウルオーガ》　ＤＥＦ／２８００→３８００

一時的な全体強化か。二重に罠を張っていたようだな。これならルリアとレイヴェルトの両方を返り討ちにできる。

「手札から速攻魔法（サイクロン）を発動！相手の魔法・罠を１枚破壊する！狙いは当然残りの伏せカードだ！」

「これもフリーチェーンよ！罠カード《エナジー・アーマー》！戦闘破壊を無効にする装備カードとしてソウルオーガに装備するわ！」

《エナジー・アーマー》
通常罠（オリジナル）
発動後このカードは装備カードとなり、自分フィールド上に存在する儀式・融合・シンクロモンスター1体に装備する。
装備モンスターは戦闘では破壊されない。
装備カードとなったこのカードが破壊され墓地へ送られた時、装備モンスターの守備力分だけ自分のライフポイントを回復する。

翡翠色の鎧がソウルオーガに装着される。だが、《サイクロン》ですぐに破壊された。

「そして、破壊された時に装備モンスターの守備力分だけライフを回復する！」

早苗　ＬＰ／１６５０→５４５０

『ライフポイントが５４５０…！？』

「これでもまだ勝てるなんて言えるかしら？」

一気に３８００もの回復か。とんだ強者だな、こいつは…。だが、この程度は誤差の範囲だ。

「…さすがだな。だが、削り切れない数値じゃない」

「え？」

削り切るためには、確実に戦闘で勝つ必要がある。そこで、このカードだ。

「まずは邪魔な手札を除外してもらう。魔法カード《異次元の指名者》！」

「なっ…！？」

「カード名を宣言し、そのカードが相手の手札にあればそのカードを除外する。外れた場合は俺の手札が１枚除外される」

《異次元の指名者》
通常魔法
カード名を１つ宣言する。
相手の手札を確認し、宣言したカードが相手の手札に存在する場合、そのカード１枚をゲームから除外する。
宣言したカードが相手の手札に存在しなかった場合、自分の手札をランダムに１枚ゲームから除外する。

「まあ、外しようがないがな。宣言するのは《リチュア・ヘルパー》だ」

「ぐ…」

早苗は半ば悔しそうに手札の《リチュア・ヘルパー》をズボンのポケットにしまった。

「まさか、そんなカードまで入れてるなんて…」

「デッキや墓地からカードを手札に加えるなんてのはよくある事だろ。通常魔法が発動した事で、レイヴェルトの効果で俺はライフを５００ポイント回復し、《連弾の魔術師》で相手に４００ポイントのダメージを与える！」

秋斗　ＬＰ／　２５０→　７５０

また魔力弾が炸裂し、さらに俺のライフが回復した事で、ライフ差はさらに縮まっていく。

「うっく…！」

早苗　ＬＰ／５４５０→５０５０

「でも、《リチュア・ヘルパー》がいなくなったところで、エリアとメロウガイストを戦闘破壊するなんてできるのかしら？」

「できるさ。これを使えばな」

さて…力を貸してもらうぞ、和馬！

「魔法カード《フュージョン・チャージ》！」

「《フュージョン・チャージ》！？それって…！？」

俺が発動したカードを見て、早苗は酷く驚いた。まあ、無理もないか。

「知らなくて当然だ。お前が消えた後に持ち出したからな」

過去の世界に行く前に1度ネオ童実野シティに向かう時、俺は家に寄って和馬の部屋に来ていた。

主はいなくとも御袋が丁寧に掃除していて、汚いという事はない。俺は埃1つ被っていない机に置かれた写真立てに向き合った。

『早苗が消えた理由ははっきりとはわからない。お前が消えた理由もな』

俺は話を切り出した。他人から見ればただの一人言だが。

『…勝手な推測だが、俺はお前の病気に原因があるんじゃないかと考えている。そう考えるのが自然だろ?』

そこまで言って、俺は机の引き出しから1枚のカードを取り出した。これが家に戻った目的だ。

『《フュージョン・チャージ》。お前がよく使っていたカードらしいな。早苗とクラスメートの会話でたまたま耳に入ったのを覚えている』

おかげで、和馬のデッキに融合モンスターが関係している事がわかっちまった。いつかデュエルする時まで知らないでいたかったから、少し残念だ。

『余分にあるようだから、1枚持っていく。この先必要になりそうなんでな』

柄でもないくせに御守り程度に持ち出したが、まさか早苗相手に使う事になるとはな。皮肉なもんだ。

「効果は知っているな？相手モンスター１体の効果をエンドフェイズ時まで無効にし、そのモンスターの攻撃力を自分フィールド上の融合モンスターの攻撃力に加える！」

《フュージョン・チャージ》
通常魔法（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在する融合モンスター１体を選択して発動する。
エンドフェイズ時までフィールド上に表側表示で存在するモンスター１体の効果を無効にし、そのモンスターの攻撃力分選択したモンスターの攻撃力をアップする。

「俺が選ぶのは《イビリチュア・マインドオーガス》だ。効果を無効にし、３５００の攻撃力をヴァルキリアに加える！」

『今だけ、あなたの力を借ります』

『ぐ…！』

ルリアが剣を高く真っ直ぐに掲げると、剣が紫の光を発してエリアの魔力を吸収していった。

《魔導戦姫　ヴァルキリア》　ＡＴＫ／２５００→６０００

「通常魔法が発動した事で、もう１度レイヴェルトと《連弾の魔術

師》の効果を発動する。ライフを５００ポイント回復し、相手には４００ポイントのダメージを与える！」

秋斗　ＬＰ／　７５０→　１２５０

「ぐぅっ！」

さらに魔力弾が飛び出し、命中する。通常魔法を多く使う俺にとっては、なかなか使い勝手がいい魔術師だ。

早苗　ＬＰ／５０５０→４６５０

「仕上げだ。《魔導戦姫　ヴァルキリア》の効果発動！１ターンに１度、自分の墓地から魔法カードを任意の数除外する事で、エンドフェイズ時まで１枚につき４００ポイント攻撃力をアップさせる！…さて、俺はこのデュエルで何枚魔法カードを使ったか覚えているか？」

「ちょ…ちょっと待ちなさいよ！あんたのデッキでそんな効果を使ったら…」

「墓地の魔法カードは合計１４枚。これを全て除外し、攻撃力を５６００ポイントアップさせる！」

ルリアが掲げたままの剣の刀身が青緑の魔力を吸収し、さらに力を肥大化させた。空気がビリビリと音を鳴らし、その破壊力の一端を見せる。

《魔導戦姫　ヴァルキリア》　ＡＴＫ／６０００→１１６００

『攻撃力…１１６００…！？』

「そんな…！？」

「終わりだ。《魔導戦姫　ヴァルキリア》で《イビリチュア・マインドオーガス》を攻撃！天牙嵐星！」

『ハァァァァ！！』

ルリアが縦に思い切り剣を降り下ろし、莫大な魔力を斬撃として撃ち出した。

『きゃあぁっ！』

「うあぁぁぁぁぁ！」

それはエリアはおろか早苗までも飲み込み、道路を伝い遠くまで飛んでいった。ソリッドビジョンとはいえ、なかなかの迫力だった。

早苗　ＬＰ／４６５０→　０

秋斗　ＷＩＮ

ソリッドビジョンが消えていく中、俺は手早くデュエルディスクを片付けた。ルリアも普段の姿に戻った。

「…はは…負けちゃったか…」

「随分さっぱりしたような顔だな」

てっきり悔しがるかと思っていたが、早苗の顔は残念そうではあるものの晴れ晴れとしたものだった。

「悔しくないって言ったら嘘になるけど、何ていうのかな…？久々だったから、楽しすぎたのよ」

「そうか…。仮にも敵同士、呑気なもんだな」

「そういうあんたも、憑き物が落ちたような顔してるけど？」

「！」

思わず口元に手を当てようとしたが、何とか押し留まった。そんな顔をした覚えはないが…。

「何年一緒に暮らしたと思ってんのよ？家族の表情くらい、見抜けないわけないでしょ？」

「…俺も随分甘くなったな」

『それぐらい甘くてもいいと思いますよ？』

『あなたは冷めすぎなのよ。もう少しフレンドリーになった方がいいんじゃないかしら？』

ルリアや、同じく元の姿に戻ったエリアにまでダメ出しをされた。一応自覚はあるが、特に直そうとも思わなかった。

だが、気づけばうるさい連中に囲まれていて、いつしかそれも悪くないと思うようになった。自分から騒ぐつもりは毛頭ない。ただ、

紅刃達（あいつら）といる事が少しでも心地のいいものになったというだけだ。

「…そうだな。考えておいてやる」

『素直じゃないわね』

「ほっとけ」

そう返しながらも、俺の表情は確かに笑ったそれになっていた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…

「「『『!?』』」」

突然、軽い談笑を遮るかのように妙な轟音が響き出した。まるで地鳴りのような、そんな感じの音だ。

『何なの？』

「何この重苦しい感じ…？」

その場にいる生物全てを押し潰さんばかりの重圧。只事でない事

は十分わかる。

『皆さん、あれを…！』

「…！」

ルリアが指を差した方角の遠くでは、黒い何かが何本も天に伸びてのたうっている。あんな物は見た事すらないが、何かしら邪悪な気配を感じる。

「早苗、エリア。あれは何だ？」

「わからない。この作戦に参加したあたしの仲間の中にも、あんな事ができる奴はいない」

早苗にもわからないという事は、完全な第三者の仕業か？

『あれはまさか、邪神の瘴気！？』

「邪神だと？」

『私のいたリチュアの一族は、元々邪気にまつわる儀式を扱う集団。その里にある文献で読んだ事があるわ。その文献に載っていた先祖が遺した絵の中に、確かに邪神と一緒にあんな感じの瘴気が描かれていた…！』

「まさか、そんな昔話だけの存在がこの町に現れたとでも言うのか？」

『でも、他に心当たりがないのも事実よ』

「この重圧に邪悪な気配…あながち間違いでもなさそうね」

邪神、か…。あまりいい響きじゃないな。一体この町で何が起きている…？

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第７０話　楽しむ心に善悪なし（後書き）

☆今回のキーカード☆

吹雪「やあ、みんな！『今回のキーカード』の時間だよ！司会は天上院吹雪と…」

三沢「三沢大地が勤めさせてもらう。…ところで、何でこの組み合わせなんだ？」

吹雪「本編の時系列では亮がヘル化しちゃってるし、万丈目君と明日香は光の結社にいて相手してくれないし…。今回僕が出る事は確定してたそうだから、その…作者が消去法で君を選んだそうだよ」

三沢「消去法で選ばれた俺って一体…」

吹雪「ま、まあまあ、気を落とさないで！せっかくの出番だし、元気出していこう！」

三沢「…そうだな。『ようやく』更新された事だしな。くそ、人を散々待たせといて…少しは執筆の効率や責任というものを…」

吹雪「（あれ？怒ってる？）え、ええと…今回は秋斗君と早苗ちゃんのデュエルに決着がついたね」

三沢「ん？ああ、そうだな。１ターンに何度も儀式召喚を行う早苗君には驚きだが、墓地の魔法カードをも利用してたった一撃で勝負を決めた秋斗も大したものだ」

吹雪「攻撃力が１００００を超えたもんね…。一方では邪神が暴走し始めたようだけど、結構まずい状況じゃないかな？」

三沢「俺達がいくら考えたところで、対抗できるのは紅刃達しかいない。黙って見守るべきだろう」

吹雪「それもそうだね。それじゃ、カード考察に入ろうか。今回紹介するのは、早苗ちゃんが使用しているパートナー《イビリチュア・マインドオーガス》だよ」

《イビリチュア・マインドオーガス》
儀式・効果モンスター
星６／水属性／水族／ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ２０００
「リチュア」と名のついた儀式魔法カードにより降臨。
このカードが儀式召喚に成功した時、お互いの墓地に存在するカードを合計５枚まで選択し、持ち主のデッキに戻す。

吹雪「儀式召喚に成功した時、お互いの墓地から合計５枚までデッキに戻す効果を持っているよ」

三沢「一見地味に見えるかもしれないが侮ってはいけない。墓地利用が多い現在では相手の戦略を崩すのに一役買ってくれる」

吹雪「自分の墓地のカードも戻せるから、すぐには使えないけどサーチ系のカードを回収できるよ。リチュアの儀式モンスターだから儀式召喚もしやすいだろうし、攻撃力も十分あるね」

三沢「ただ、この効果自体はフィールド上に干渉しない事に注意だ。不利な状況だと立て直しが利かない事もよくある。そんな時は、儀

式召喚の生け贄…じゃなかった、リリースにするのもありだ。【リチュア】には同じレベルの儀式モンスターが多い。状況に応じて様々な儀式モンスターと使い分けるべきだろう」

吹雪「よし、今回はここまでにしよう。それにしても、GX勢の僕達が墓地アドバンテージについて説明するのは、どことなく妙な感じがしないでもないね」

三沢「吹雪さんだってよく墓地利用しているじゃないか。まあ、紅刃達のデュエルを見て価値観が変わったのもまた事実だ。いろいろと学ばせてもらっているよ」

吹雪「時代が移り変わるにつれて、デュエルが進化してるって事だね。これは僕もうかうかしてられないな」

ミサワ「まだ他にもいろんな戦術がある。俺はまずそれらを研究するとしよ…ん？何か表記がおかしくないか？」

吹雪「あ、そうそう！活動報告で『復活』なんて書いといて長らく更新できなくてごめんね。言い訳がましいかもしれないけど、作者はこれでも受験生だから何かと忙しいんだ」

ミサ　「こういう折り合いはやはり難しいものだな。なるべく早く更新しなければ…ちょっと待て！俺の名前が１文字消えてるぞ！？」

吹雪「あはは…そろそろ時間だからさっさと進めるね。感想はいつでも受け付けてるよ。こんな作品でも書き込んでくれたら嬉しいな」

ミ　　「ぐ…ではまた次回…おい、『ミ』しか出てないぞ！さっき俺が皮肉を言ったからか！？」

吹雪「本当に怒ってたんだ…。それじゃ、次回もよろしくね！」

「それは俺のせり…あああ！！名前が全部消えたぁぁぁぁ！？」

ーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

更新が異常なまでに遅れてしまい、申し訳ありません…。夜遅くまで学校祭の準備→夜遅くまで部活の毎日→期末・受験勉強と気力が持たない上にサイトに行く暇すらなくて…。

今回秋斗が使用した《魔導師の導き》と《魔導戦姫　ヴアルキリア》は紅さんが、早苗が使用した《使い古された儀水鏡》は言羽・D・カタストロフィーさんが投稿してくださったオリカです。皆さん、ありがとうございます。

【リチュア】は凄まじいですね。手札がガンガン回るし、できれば実際に相手にしたくないです。

早いところ長編終わらせないと…。いつまでも足踏みしているわけにはいかないし、何とかしてペースを上げたいです…。

では、また次回！

第７１話　物語の中には１人くらいは底抜けに明るい奴がいる（前書き）

☆精霊の呟き☆

ヒジュラ『今回は俊也達の方はどうなっているかの話だな』

ロコナ『もう建物に着いたのかな？』

スイレン『それは読んでみてのお楽しみです！もちろん、デュエルもありますよ！』

ヒジュラ『残ってんのは俊也とルーナ、後ディヴァインだ。向こうも向こうだし、誰がやっても苦戦しそうなもんだが…』

ロコナ『大丈夫だよ！みんなとっても強いし！』

ヒジュラ『それは十中八九相手も同じだっての…』

スイレン『今回の締めの言葉は、ノウレッジさんからのリクエストです！それでは、第７１話スタートです！

次回もみんな、デュエルスタンバイ！』

ロコナ『あれ？もう終わっちゃうの？』

ヒジュラ『終わらねえよ！？』

第71話　物語の中には1人くらいは底抜けに明るい奴がいる

ＳＩＤＥ／千景

しばらく《ジュラック・ヴェルヒプト》となったアウロに乗った私と芽依は、海馬コーポレーション本社ビルに向かって移動していた。

が、もうじき着く。目的地は近い。

「もうすぐ着きますよ！」

芽依の言葉に、私は軽く頷いた。そして、チラリと後ろを確認する。

「…止まって」

「え？…アウロ、ストップ！」

芽依は一瞬戸惑いつつも、すぐにアウロを止めた。私はアウロから降りて後ろを向いた。

追っ手は2人。どちらも速い。

「追っ手が近い」

「え、あたいは見えないんですけど…やっぱり千景先輩って視力凄いですね！」

「風嶺俊也を足止めして。石板の回収は私が行う」

「はい！」

手短に指示を出して、私は本社ビルへと走った。

本社ビルはもう目と鼻の先。それに、隠密行動なら私の方が向いている。

元より初めからこうするつもりだった。純粋にデュエルを望む芽依にとっては、足止めでも褒美のようなもの。イレギュラー達とのデュエルはいい経験になるはず。

残りは九条院ルーナ。今回の石板に対応するカードの持ち主。彼女が先か、私達が先か…。

ＳＩＤＥ／俊也

とりあえず、僕はルーナと一緒にニュートラルを追いかけている。だいぶ人数が少なくなったな…。

「もうそろそろ本社に着くわね。向こうはもう着いてるかもしれないけど…」

「なら、尚更急がないとね」

先に石板を取られるのはまずい。何としてでも僕達が石板を回収しないと…。

「…ん？」

前方に誰かいる。短めのツインテールで青い髪の小さな女の子…変身する恐竜に指示を出してた子だ。隣には…ティラノサウルス？

ゴアァァァ！

「うわっ！？」

「ちょっ！？」

突然、頭が黄色いティラノサウルスが炎を光線みたいに吐き出してきた。しかも僕だけに向けて。

僕は足から風を出して上に飛び上がってかわし、宙返りして着地した。ルーナもびっくりしてスケボー化したナージャを止める。

「止まった止まった！」

「ちょっと！危ないじゃない！」

「こうでもしなきゃ止まってくれないですよね？」

文句を言うルーナに、女の子は至極当然のように言い返した。まあ、確かにそうなんだけどさ…。

「君も足止めかい？」

「もちろん！風嶺俊也、あたいと勝負です！」

女の子はビシッと僕を指差して宣戦布告してきた。

「ぼ、僕と？」

「はい！あ、九条院ルーナは先行っていいですよ。用事ありませんから」

「はあ！？どういう意味よそれ！？」

「だってあたいはデュエルしたいし、千景先輩にも通していいって言われてるし…」

「ルーナが石板に対応するカードを持ってるってわかってるんでしょ？何でルーナに勝負を挑まないの？」

「さあて、何でででしょう？」

女の子はニコニコしながらはぐらかしてくる。言うつもりはないみたいだね。

「とにかく、デュエルしないと通しませんよ！」

「強行突破って選択肢は…」

ギュオッバシッ！

「!?」

僕が言い切る前に、女の子はデュエルディスクから赤い光線を放った。光線は縄のように僕の右手首に巻き付いて、すぐに透明になった。

「デュエルアンカー、でしたっけ?これでデュエルの決着が着くまで、あなたは逃げる事ができません!」

「…みたいだね」

「というわけだから、ルーナさんはさっさと行っていいですよ。でもデュエルの妨害は厳禁で」

「何かすっごいムカつく…!」

「抑えて抑えて」

『時間の無駄だから早く行きましょうよ~』

「ぐ…まあ、いいわ」

怒りでプルプル震えるルーナを、僕は宥めつつ引き留めた。そこにナージャも加勢してくれた事で、何とか思いとどまってくれた。

「じゃ、遠慮なく行かせてもらうわ!俊也も後から追いかけてきなさいよ!」

ルーナはそれだけ言って、スケボー化したナージャを走らせて先

へ進んでいった。これでここにいる人間は僕と女の子だけだ。

「アウロ、カードに戻って」

「ギャオオオ！」

アウロと呼ばれたティラノサウルスは、光になってデュエルディスクに入れたカードに戻っていった。それと同時にディスクが展開された。僕もまた同じようにディスクを展開させる。

「引けないなら仕方ない。行くよ」

「はい！…と、その前に…あたいは鬼灯芽依と言います！よろしくお願いします！」

「え？ああ、うん、芽依ちゃんだね。よろしく」

いきなり自己紹介されて少し言葉に詰まったけど、すぐに返事を返した。それじゃ…。

「よし、始めよう！」

「行きます！」

「「デュエル！」」

俊也ｖｓ芽依

「先攻は譲るよ」

「ありがとうございます！ドロー！モンスターをセット！さらにカードを１枚セットしてターンエンドです！」

芽依
ＬＰ／４０００
手札／４
モンスター／リバース×１
魔法・罠／リバース×１

まずは様子見か…。さて、僕はどうしようかな？

「僕のターン！」

う～ん…攻撃力は低めだけど、このモンスターを出そうか。

「手札から、《ガスタ・コドル》を召喚！」

最初に召喚したのは、頭が薄紫で、体が緑色のコンドルだ。胴体と頭には西洋風の甲冑を装備している。

《ガスタ・コドル》
効果モンスター
星３／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ　４００
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから守備力１５００以下のサイキック族・風属性モンスター１体を特殊召喚する事ができる。

《ガスタ・コドル》　ＡＴＫ／１０００

「バトル！《ガスタ・コドル》で裏守備モンスターに攻撃！」

コドルが上空から勢いよく突進する。すると、裏守備モンスターが背中にある3本の赤い線から炎を出している青い恐竜の姿になって、突進をまともに受けて消滅した。

「《ジュラック・スタウリコ》の効果発動！戦闘破壊された時、自分フィールド上に《ジュラックトークン》を2体守備表示で特殊召喚します！」

《ジュラック・スタウリコ》
効果モンスター
星２／炎属性／恐竜族／ＡＴＫ　５００／ＤＥＦ　４００
このカードが戦闘によって破壊された場合、自分フィールド上に「ジュラックトークン」（恐竜族・炎・星１・攻／守０）２体を守備表示で特殊召喚する。
このトークンは「ジュラック」と名のついたモンスター以外のアドバンス召喚のためにはリリースできない。

「その前に《ガスタ・コドル》の効果を使わせてもらうよ！《ガスタ・コドル》が相手モンスターを戦闘破壊した時、デッキから守備力１５００以下のサイキック族・風属性モンスター１体を特殊召喚できる！」

追撃したいところだけど、相手が墓地に送られないトークンだからウィンダールの効果を発動できない。だったら守りを固める。

「《ガスタの巫女　ウィンダ》を守備表示で特殊召喚！」

コドルの横から、ウィンが現れた。ただ、このカード自体にはウィンは宿っていない。

《ガスタの巫女　ウィンダ》　ＤＥＦ／　４００

そして、芽依ちゃんのフィールドにも火がついて燃えている恐竜の卵が２つ現れた。

《ジュラックトークン》　ＤＥＦ／　０

《ジュラックトークン》　ＤＥＦ／　０

「カードを２枚セットしてターンエンド！」

俊也
ＬＰ／４０００
手札／３
モンスター／《ガスタ・コドル》（ＡＴＫ／１０００）《ガスタの巫女　ウィンダ》（ＤＥＦ／　４００）
魔法・罠／リバース×２

「あたいのターン！《ジュラックトークン》２体をリリースして《ジュラック・タイタン》をアドバンス召喚！」

２つの卵が巨大な炎になって一体化し、その中から赤と黒の巨大でいかにも凶暴そうな肉食恐竜が現れた。さっきまでのデフォルメっぽい恐竜達とは違い、ワイルドな感じを１００％前面に出したような風貌だ。

《ジュラック・タイタン》
効果モンスター
星９／炎属性／恐竜族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２８００

このカードは特殊召喚できない。
このカードはフィールド上に表側表示で存在する限り、罠・効果モンスターの効果の対象にする事はできない。
１ターンに１度、自分の墓地に存在する攻撃力１７００以下の「ジュラック」と名のついたモンスター１体をゲームから除外する事で、このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで１０００ポイントアップする。

《ジュラック・タイタン》　ＡＴＫ／３０００

「何か凄そうなのが出てきた…！」

「『凄そう』じゃなくて『凄い』んですよ！タイタンの効果発動！１ターンに１度、墓地から攻撃力１７００以下のジュラックを１体除外する事で、エンドフェイズ時まで攻撃力を１０００ポイントアップさせます！墓地から攻撃力５００の《ジュラック・スタウリコ》を除外！」

《ジュラック・タイタン》　ＡＴＫ／３０００→４０００

「攻撃力４０００…！？」

「さらに、タイタンは相手のモンスター効果と罠の対象になりません！」

「う…！」

まずい…！僕が伏せた罠は相手モンスターを対象に取るカード。
つまり、防げない。

「まだ行きますよ！魔法カード《二重召喚》！このターンもう1度通常召喚を行います！《ジュラック・グアイバ》を召喚！」

爪や背中に炎を纏った青と赤の恐竜が出てきた。一気に畳み掛けるつもりだ。

《ジュラック・グアイバ》
効果モンスター
星４／炎属性／恐竜族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ　４００
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、自分のデッキから攻撃力１７００以下の「ジュラック」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚したモンスターは、このターン攻撃宣言をする事ができない。

《ジュラック・グアイバ》　ＡＴＫ／１７００

「バトル！《ジュラック・タイタン》で《ガスタ・コドル》に攻撃！ヴォルケーノ・クラッシュ！」

タイタンが手に炎を纏わせ、コドルを叩きのめそうと走ってくる。でも、ただでやられるわけにはいかない。

「罠カード《ガスタの風壁》！戦闘ダメージを半分にする！」

《ガスタの風壁（ふうへき）》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在する「ガスタ」と名のついたモンスターが相手モンスターの攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。

戦闘ダメージを1度だけ半分にする。
このカードを発動したエンドフェイズ時、このターン戦闘破壊された「ガスタ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

罠を発動したと同時に、タイタンの爪がコドルを引き裂いた。当然、僕にもダメージが来るけど、風の壁が出現して幾らかダメージを和らげてくれた。

「っ！」

俊也　ＬＰ／４０００→２５００

「続いて、《ジュラック・グアイバ》で《ガスタの巫女　ウィンダ》を攻撃！ディノ・ブレイク！」

今度はグアイバが突進攻撃を仕掛けてきた。ウィンダは突き飛ばされ破壊される。

「ウィンダが戦闘破壊された時、デッキからガスタのチューナー1体を特殊召喚できる！《ガスタ・ガルド》を特殊召喚！」

緑の兜を被った緑色の鳥、ガルドが飛び出した。当然守備表示。

《ガスタ・ガルド》　ＤＥＦ／　５００

「こっちもグアイバの効果を発動しますよ！戦闘破壊に成功した時、デッキから攻撃力１７００以下のジュラックを特殊召喚できます！チューナーモンスター《ジュラック・モノロフ》を特殊召喚！」

向こうも首の後ろから炎を出している恐竜を繰り出してきた。配

色は頭と手足が黄色、胴体が青、目元と尻尾の先が赤といった感じだ。

《ジュラック・モノロフ》
チューナー（効果モンスター）
星３／炎属性／恐竜族／ＡＴＫ１５００／ＤＥＦ１２００
このカードは相手フィールド上に存在する全てのモンスターに１回ずつ攻撃をする事ができる。

《ジュラック・モノロフ》　ＡＴＫ／１５００

「この効果で呼び出したモンスターはこのターン攻撃できませんが、関係ありません！罠カード《ジュラック・チューン》！バトルフェイズ中にジュラックのシンクロモンスターをシンクロ召喚します！」

《ジュラック・チューン》
通常罠（オリジナル）
このカードはバトルフェイズ中のみ発動する事ができる。
「ジュラック」と名のついたシンクロモンスター１体をシンクロ召喚する。
この効果でシンクロ召喚に成功したシンクロモンスターはエンドフェイズ時まで以下の効果を得る。
●このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、自分のデッキから攻撃力１７００以下の「ジュラック」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

「バトルフェイズ中のシンクロ召喚？」

「レベル４《ジュラック・グアイバ》にレベル３《ジュラック・モノロフ》をチューニング！」

モノロフが３つの輪に姿を変えて、グアイバがその中を潜り４つの星になる。

「太古の魂、豪炎喰らいて咆哮する！暴君の記憶よ、その身に宿れ！」

☆４＋☆３＝☆７

「シンクロ召喚！唸れ！《ジュラック・ギガノト》！」

現れたのは、尻尾の先に１つ、頭に２つ炎を灯している、巨大化したモノロフ。さっき炎を吐いてきたのはこのモンスターだ。

《ジュラック・ギガノト》
シンクロ・効果モンスター
星７／炎属性／恐竜族／ＡＴＫ２１００／ＤＥＦ１８００
チューナー＋チューナー以外の恐竜族モンスター１体以上
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する「ジュラック」と名のついたモンスターの攻撃力は、自分の墓地に存在する「ジュラック」と名のついたモンスターの数×２００ポイントアップする。

《ジュラック・ギガノト》　ＡＴＫ／２１００

「さっきのティラノサウルスだ…！」

「『ギガノト』サウルスですっ！」

「え、そうなの？ごめん…」

怒った顔で訂正してくる芽依ちゃんに、僕は反射的に謝った。恐竜が好きなのかな？そうじゃなくても、自分のモンスターが間違われたらいい気持ちはしないよね。

「全く…。ギガノトの効果で、あたいのジュラックの攻撃力は墓地のジュラック1体につき２００ポイントアップします！墓地のジュラックはグアイバとモノロフの2体！よって、４００ポイントアップです！」

《ジュラック・タイタン》　ＡＴＫ／４０００→４４００

《ジュラック・ギガノト》　ＡＴＫ／２１００→２５００

「《ジュラック・ギガノト》で《ガスタ・ガルド》に攻撃！ギガント・ファイア！」

ギガノトが僕にやったように口から火炎放射を放ち、ガルドを焼き尽くす。でも、僕だってただじゃ起きない。

「《ガスタ・ガルド》が戦闘で破壊された時、デッキからレベル２以下のガスタを特殊召喚できる！《ガスタ・ファルコ》を特殊召喚！」

ガルドの代わりに、緑の甲冑を纏った黄緑の小鳥が現れた。小鳥って言っても普通の鳥よりは大きいけどね。

《ガスタ・ファルコ》
チューナー（効果モンスター）
星２／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ　６００／ＤＥＦ１４００

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが戦闘以外によって墓地へ送られた時、自分のデッキから「ガスタ」と名のついたモンスター1体を裏側守備表示で特殊召喚する事ができる。

《ガスタ・ファルコ》　ＤＥＦ／１４００

「む…！《ジュラック・チューン》でシンクロ召喚したシンクロモンスターがこのターンの間に相手モンスターを戦闘破壊した時、デッキから攻撃力１７００以下のジュラックを特殊召喚できます！《ジュラック・ヴェロー》を特殊召喚！」

今度は頭が赤、手足が青、胴体と尻尾が黄色の恐竜が出てきた。さっきから肉食系ばかりだな…。

《ジュラック・ヴェロー》
効果モンスター
星４／炎属性／恐竜族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ１０００
自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するこのカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力１７００以下の「ジュラック」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

《ジュラック・ヴェロー》　ＡＴＫ／１７００→２１００

「《ジュラック・ヴェロー》で《ガスタ・ファルコ》を攻撃！」

「させないよ！罠カード《ゲイル・エッジ》！風属性モンスターがシンクロモンスター以外のモンスターに攻撃される時、デッキから風属性モンスターを2体墓地に送る事で戦闘を行う互いのモンスターを破壊する！」

《ゲイル・エッジ》
通常罠（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在する風属性モンスターが相手のシンクロモンスター以外のモンスターの攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。
自分のデッキから風属性モンスター2体を墓地に送る。
その後、相手の攻撃モンスター1体と攻撃対象となった自分モンスター1体を破壊する。

「《ガスタ・イグル》と《ガスタ・サンボルト》を墓地に送り、《ガスタ・ファルコ》と《ジュラック・ヴェロー》を破壊する！」

カードを2枚墓地に送ると、ファルコが風の刃へと姿を変えてヴェローを切り裂き破壊した。そして、効果はさらに続く。

「さらに《ガスタ・ファルコ》が戦闘以外で墓地へ送られた時、デッキからガスタ1体を裏側守備表示で特殊召喚できる！」

「またリクルート…！？」

「《ガスタの希望　カムイ》をセットするよ」

フィールド上にはモンスター自体の姿はなく、代わりに裏側表示のカードが現れた。

「【ガスタ】はやられても互いに仲間を呼び合う。闇雲に攻撃し続けても通じないよ」

「みたいですね…。でも、無駄ではありませんよ！墓地のジュラッ

クが1体増えた事で、タイタンとギガノトの攻撃力がさらに２００ポイントアップします！」

《ジュラック・タイタン》　ＡＴＫ／４４００→４６００

《ジュラック・ギガノト》　ＡＴＫ／２５００→２７００

「そして、魔法カード《バトル・ドロー》を発動！このターン戦闘破壊したモンスターの数だけカードをドローします！」

《バトル・ドロー》
通常魔法
メインフェイズ2に発動する事ができる。
このターン自分が戦闘破壊したモンスターの数だけデッキからカードをドローする。

「3体戦闘破壊したので、３枚ドローです！」

一気に3枚も…！？リクルートが裏目に出たかな？

「カードを４枚セットしてターンエンドです！エンドフェイズ時にタイタンの攻撃力は元に戻ります！」

《ジュラック・タイタン》　ＡＴＫ／４６００→３６００

「こっちも《ガスタの風壁》のもう1つの効果を発動するよ！エンドフェイズ時にこのターン戦闘破壊されたガスタを1体だけフィールドに呼び戻す！選ぶのは、《ガスタ・コドル》！」

周囲から風が一点に集まり、さっきフィールドを離れたコドルへ

と変化した。一応、フィールドに残す事ができたのはよかった。

《ガスタ・コドル》　ＡＴＫ／１０００

芽依
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《ジュラック・タイタン》（ＡＴＫ／３６００）《ジュラック・ギガノト》（ＡＴＫ／２７００）
魔法・罠／リバース×３

「次はどんな手で来ますか？どこからでもかかってきてください！」

やけに明るく次の手を要求してくる芽依ちゃん。状況が状況なだけに、何か調子狂うなぁ…。

「それじゃ、お言葉に甘えさせてもらうよ！僕のターン！《ガスタの希望　カムイ》を反転召喚！」

カードが表になり、ベージュのコートと黄緑のマフラーを身につけた少年が現れた。黄緑の髪を後ろの高めの位置でまとめていて、先端に青い宝玉を嵌めた杖を持っている。

《ガスタの希望　カムイ》
効果モンスター
星２／風属性／サイキック族／ＡＴＫ　２００／ＤＥＦ１０００
リバース：自分のデッキから「ガスタ」と名のついたチューナー１体を特殊召喚する。

《ガスタの希望　カムイ》　ＡＴＫ／　２００

「カムイのリバース効果発動！デッキからガスタのチューナーを1体特殊召喚する！《ガスタ・ガルド》を特殊召喚！」

カムイが魔方陣を描くと、中心から2体目のガルドが召喚された。レベル3のチューナーは今のところガルドしか入れていない。

《ガスタ・ガルド》　ＡＴＫ／　５００

「レベル2《ガスタの希望　カムイ》とレベル3《ガスタ・コドル》にレベル3《ガスタ・ガルド》をチューニング！」

ガルドが舞い上がり3つの緑の輪に変化して、カムイとコドルが中に入って合計5つの星になった。さらに互いに共鳴して光の柱になる。

「翡翠の薫風よ！晴天に羽ばたき想いを紡げ！」

☆2＋☆3＋☆3＝☆8

「シンクロ召喚！飛び立て！《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》！」

額に風車のようなガスタのシンボルマークを刻んだ緑の鳥のようなドラゴンが光の柱から飛び出した。

《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「お～！かっこいいです！」

「ははは…ありがとう。でも、これだけじゃ終わらないよ。《ダイ

ガスタ・ウル・ドラゴン》の効果発動！1ターンに1度、墓地の魔法・罠を1枚除外する事で相手フィールド上の魔法・罠を1枚破壊する！《ゲイル・エッジ》を除外して、真ん中の伏せカードを破壊！ハリケーン・スラスト！」

ダイガスタ・ウルが翼を振るって風の刃を飛ばし、真ん中の伏せカードを真っ二つにした。これで少しは安全かな。

「…っ！」

「魔法カード《ガスタの風札》！墓地のガスタを2体デッキに戻す事でカードを2枚ドローして、フィールド上のガスタの攻撃力をエンドフェイズ時まで１０００ポイントアップさせる！」

《ガスタの風札》
通常魔法（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在する「ガスタ」と名のついたモンスター1体を選択し、自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたモンスター2体をデッキに戻して発動する。
デッキからカードを2枚ドローする。
その後、選択したモンスターの攻撃力をエンドフェイズ時まで１００ポイントアップさせる。
「ガスタの風札」は1ターンに1度しか発動できない。

「《ガスタ・ガルド》と《ガスタ・コドル》をデッキに戻して2枚ドロー！そして《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》の攻撃力を１０００ポイントアップさせる！」

《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００→３６００

「さらに、ダイガスタ・ウルの効果発動！フィールド上か墓地のカードが手札かデッキに戻った時、１ターンに１度だけ攻撃力と守備力をエンドフェイズ時まで１０００ポイントアップさせる！」

《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》　ＡＴＫ／３６００→４６００

「攻撃力４６００！？」

「まだ終わりじゃない！手札から速攻魔法《緊急テレポート》を発動！手札かデッキからレベル３以下のサイキック族を特殊召喚する！デッキから《ガスタの巫女　ウィンダ》を特殊召喚！」

フィールド上に緑色の球体が現れる。すると、それが弾けて中から２体目のウィンが飛び出した。

《ガスタの巫女　ウィンダ》　ＡＴＫ／１０００

「そして、手札から《ガスタ・ガルド》を召喚！」

手札からは３体目のガルドを呼び出した。これでパートナーを出す準備は整った。

《ガスタ・ガルド》　ＡＴＫ／　５００

「レベル２《ガスタの巫女　ウィンダ》にレベル３《ガスタ・ガルド》をチューニング！」

ガルドが飛び立ち３つの緑の輪に姿を変え、ウィンダが２つの星になり同調する。

「巫女の春風よ！朝日に羽ばたき希望を掴め！」

☆２＋☆３＝☆５

「シンクロ召喚！吹き渡れ！《ダイガスタ・ガルドス》！」

巨大化したガルドに乗ったウィンがフィールドに舞い降りる。これで準備完了だ。

《ダイガスタ・ガルドス》　ＡＴＫ／２２００

『俊也、ここから先は任せて！』

『ピィッ！』

「うん、頼むよ！《ダイガスタ・ガルドス》の効果発動！１ターンに１度、墓地のガスタ２体をデッキに戻す事で相手モンスター１体を破壊する！ウィンダとガルドをデッキに戻して、《ジュラック・ギガノト》を破壊するよ！ガルーダ・テンペスト！」

『ガルド、お願い！』

『ピィーッ！』

ガルドが魔力の球体を作り出し、そこから嵐を繰り出した。ギガノトは一時踏みとどまるも、嵐に耐え切れずに破壊された。

「ギガノトが…！？」

「ギガノトがフィールドから離れた事で、タイタンの攻撃力も元に

戻るよね」

《ジュラック・タイタン》　ＡＴＫ／３６００→３０００

「バトル！《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》で《ジュラック・タイタン》を攻撃！エアロ・ジャード・ストーム！」

ダイガスタ・ウルが翡翠色の竜巻を吐き出して攻撃する。さすがのタイタンも抵抗できずに吹き飛ばされた。

「うぅ…っ！」

芽依　ＬＰ／４０００→２４００

「これでがら空きだよ！《ダイガスタ・ガルドス》でダイレクトアタック！緑風念波！」

『一気に攻めさせてもらうよ！』

ウィンが杖から光線と嵐を同時に放ち、芽依ちゃんに命中させた。遮る障害はない。

「きゃあっ！」

芽依　ＬＰ／２４００→　２００

「く…！罠カードオープン！《ディノ・リターン》！戦闘ダメージを受けた時、受けた戦闘ダメージを回復してその数値以下の攻撃力を持つジュラックを墓地から特殊召喚します！」

《ディノ・リターン》
通常罠（オリジナル）
自分が戦闘ダメージを受けた時に発動する事ができる。
その戦闘で受けた戦闘ダメージの数値分だけ自分のライフポイントを回復し、その戦闘ダメージの数値以下の攻撃力を持つ「ジュラック」と名のついたモンスター1体を墓地から自分フィールド上に特殊召喚する。

芽依　ＬＰ／　２００→２４００

「戦闘ダメージは２２００！墓地から攻撃力２１００の《ジュラック・ギガノト》を特殊召喚します！」

　せっかく与えたダメージが即座に回復され、さっきガルドが倒したギガノトまで復活した。しかも攻撃力はさっきよりも高い。

《ジュラック・ギガノト》　ＡＴＫ／２１００→２９００

『あっちゃあ…倒したと思ったのに…』

「そう簡単にはいかないみたいだね。カードを2枚セットしてターンエンド！エンドフェイズ時にダイガスタ・ウルの攻撃力は元に戻るよ」

《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》　ＡＴＫ／４６００→２６００

俊也
ＬＰ／２５００
手札／１
モンスター／《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》（ＡＴＫ／２６００）

《ダイガスタ・ガルドス》（ＡＴＫ／２２００）
魔法・罠／リバース×２

フィールドは整えたけど、相手にはギガノトがいる。ここからどうするか…。

「く～！燃えてきたぁ！」

「『え？』」

出方を伺っていると芽依ちゃんが急にそんな事を言い出したものだから、僕とウィンは揃って間の抜けた声を出してしまった。

「今すっごいワクワクしてます！こんなに強い人とデュエルできるなんて、感謝感激ですよ！」

「そ、そうかい…？」

あまりの元気さに、思わずたじろいた。何ていうか、凄く明るくて純粋だ。

『とても悪い子には見えないね…』

「（うん。あんな子が何でニュートラルにいるんだろう…？）」

今はそう思っても許してね？だって凄くキラキラした笑顔なんだもの、尚更疑問に思っちゃうよ…。

「だから、あたいもそれに応えられるよう全力で行きます！あたいのターン！」

と、来るね。さて、どう出るかな…？

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第７１話　物語の中には１人くらいは底抜けに明るい奴がいる（後書き）

☆今回のキーカード☆

レイ「皆さん、おはようございます！こんにちは！こんばんは！『今回のキーカード』の時間です！司会は早乙女レイと…」

剣山「ティラノ剣山が勤めるザウルス！恐竜さんが活躍する回にこのコーナーの司会をする事ができて光栄ザウルス！」

レイ「ここでの剣山の起用って、明らかに狙ってるよね…」

剣山「先にこのコーナーに出演したアニキ達を見習って、俺達も頑張るドン！」

レイ「は！このコーナーには既に十代様が…！どうせなら十代様と出たかったなぁ…」

剣山「レ、レイちゃん…」

レイ「あはは、冗談冗談！」

剣山「（全然冗談に聞こえないザウルス…）」

レイ「さて、今回は俊也さんとニュートラルの一員である芽依ちゃんのデュエル…なんだけど…」

剣山「芽依ちゃんの恐竜さんはカラフルで見ていて飽きないザウル

ス！攻める事で次々と仲間を呼び出すタクティクスは侮れないドン！」

レイ「いや、それ以前にツッコむところがあるでしょ。あのどこまでも無邪気な態度、本当に悪者なのかな？」

剣山「恐竜さんデッキを使うデュエリストに悪い人はいないドン！」

レイ「何その超理論！？あ、でもああいうデュエルをとことん楽しむ姿勢が十代様に似て…ってそうじゃなくて！カード考察に行くよ！今回のキーカードは、ｍ「芽依ちゃんが使う炎の暴竜ザウルス（ジュラック・ギガノト）！」こら！剣山、台詞取るな！」

《ジュラック・ギガノト》
シンクロ・効果モンスター
星７／炎属性／恐竜族／ＡＴＫ２１００／ＤＥＦ１８００
チューナー＋チューナー以外の恐竜族モンスター１体以上
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する「ジュラック」と名のついたモンスターの攻撃力は、自分の墓地に存在する「ジュラック」と名のついたモンスターの数×２００ポイントアップする。

剣山「チューナーとチューナー以外の恐竜さんでシンクロ召喚できるシンクロモンスターザウルス！」

レイ「効果はｂ「墓地のジュラックと名のついた恐竜さん１体につき２００ポイント攻撃力を上げる強化系統だドン！」え、ええｔ「一見上昇値が少ないように見えるかもしれないけど、今じゃ墓地肥やしの方法なんていくらでもあるドン！」ゴホン！ｓ「さらにこれはフィールド上のジュラックの恐竜さん全体に効果があるドン！攻

撃力が上がった恐竜さん達で攻めまくるザウルス！」ストップ！ストォォォォォップ！」

剣山「ん？どうしたザウルス？」

レイ「どうしたもこうしたもない！さっきから台詞取りすぎ！テンション抑えて！」

剣山「恐竜さんの説明で手は抜きたくないし、テンション抑えるなんてもってのほかザウルス！」

レイ「誰かぁぁぁ！この人交代させてくださぁぁぁぁぁい！できれば十代様希望で！」

剣山「それじゃ、続けるザウルス！たｄ「ただしぃ！この効果があるせいかぁ！」元々の攻撃力がｈ「低いのがぁ！」難点ザウルス！効果を「無効にされたらぁ！簡単にｓ」戦闘破壊ｓ「されてしまう事もあります！！いざｔ」いざと言う時は《火霊Ｊ「《火霊術－「紅」》　やぁ！《亜空間物質転ｓ」《亜空間物質転送装置》とかでフィールドから「離すのｍ」離すのもありザウルス！このモンスターは【ジュｒ「【ジュラック】のぉ！！主力ｔ」主力として活躍でｋ「できます！！そして、【ジュラｔ」【ジュラック】の攻めの切り札と言えるザウルス！「だぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁ！！！」」

レイ「台詞取るなぁぁぁぁ！！めんどくさい！今のあんたすっごいめんどくさい！げほっごほっ！」

剣山「レイちゃん！？大丈夫ザウルス！？」

レイ「ハァ、ハァ、誰の、せいだと、思ってるの…」

剣山「と、とりあえずカード考察は終了だドン！」

レイ「ていうか、今の説明でちゃんと伝わったの…？」

剣山「次回も恐竜さんが大活躍するドン！みんな注目するザウルス！」

レイ「ハァ…感ｓ「感想はいつでも受け付けてるザウルス！書き込んでくれたら嬉しいドン！」じ、次ｋ「次回もよろしくザウルス！」だぁかぁらぁ！！台詞取るなって言ってるでしょうがぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

今回俊也が使用した《ガスタの風札》は機皇帝プラシド∞さんが投稿してくださったオリカです。機皇帝プラシド∞さん、ありがとうございました。

今回はお互いにリクルート合戦になってしまいました。どちらもこれでもかってくらいデッキから呼び出してるし…。

続きのデュエルパートは既に書き上げてあるので、次回の更新はそれほど遅くはない…と思います。次の更新、いつになるかな…。

では、また次回！

第７２話　全体除去のソリッドビジョンは何かおっかないイメージがある（前書き）

☆精霊の呟き☆

カイエン『今回は俊也と芽依のデュエルの後半ね』

ロディス『対極的であれど、互いに次々とデッキからモンスターを呼び出す戦術を用いるデュエリストだ。果たしてどちらに軍配が上がるか…』

フィレス『ガルルル！』

ゴーズ『今回はデュエル以外にも動きがあるぞ。別地点ではどうなっているかも注目してくれ』

カイエン『私達の出番はいつになるのかしら…』

フィレス『グルル…』

ゴーズ『今回は後書きにミニ企画があるからしっかり読んでくれ』

ロディス「今回の締めの言葉は機皇帝プラシド∞さんからのリクエストだ。それでは第７２話、始まるぞ。

一見正しいように見えた今の攻撃…だがそれは大いなる間違い」

ゴーズ『……何か、凄くリアクションしにくい台詞だな』

ロディス『発案者に謝ってこい』

第７２話　全体除去のソリッドビジョンは何かおっかないイメージがある

ＳＩＤＥ／俊也

「あたいのターン！」

ニュートラルの一員、芽依ちゃんとデュエルする事になった僕。
今の状況に似つかわしくないほど底抜けに明るいけど、実力は確かだ。

で、今の戦況はこんな感じ。

俊也
ＬＰ／２５００
手札／１
モンスター／《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》（ＡＴＫ／２６００）
《ダイガスタ・ガルドス》（ＡＴＫ／２２００）
魔法・罠／リバース×２

芽依
ＬＰ／２４００
手札／１
モンスター／《ジュラック・ギガノト》（ＡＴＫ／２９００）
魔法・罠／リバース×２

単純に数で言えば僕が有利。でも、向こうには味方ごと攻撃力をどんどん上げていく《ジュラック・ギガノト》がいる。まだ勝負はわからない。

「魔法カード《オーロラ・ドロー》を発動！手札がこのカードだけの時、カードを2枚ドローします！さらに魔法カード《変調の宝札》！カードを1枚ドローし、相手の場にシンクロモンスターかエクシーズモンスターがいれば、さらにその数だけドローします！」

《変調の宝札》
通常魔法（オリジナル）
デッキからカードを1枚ドローする。
相手フィールド上にシンクロ・エクシーズモンスターが表側表示で存在する場合、さらにその数だけドローする事ができる。

「シンクロモンスターの《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》と《ダイガスタ・ガルドス》がいる事で、合計3枚ドローです！」

一気に3枚も…！でも、『エクシーズモンスター』って何だろう？聞いた事ないけど…。

「永続罠（ディノーサー・リバース）！除外されている恐竜族モンスターを特殊召喚します！」

《ディノーサー・リバース》
永続罠（オリジナル）
ゲームから除外されている自分の恐竜族モンスター1体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する。
このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「タイタンの効果で除外した《ジュラック・スタウリコ》を特殊召喚！」

異次元の穴が開き、その中からスタウリコが飛び出してきた。さらにギガノトの効果でパワーアップしている。

《ジュラック・スタウリコ》　ＡＴＫ／　５００→１３００

「そして、チューナーモンスター《ジュラック・アウロ》を召喚！」

頭が青、手首足首より先が紫、胴体と尻尾が黄色と黒の小さな恐竜が出てきた。何ていうか、生まれたばかりの子供といった感じだ。

《ジュラック・アウロ》
チューナー（効果モンスター）
星１／炎属性／恐竜族／ＡＴＫ　２００／ＤＥＦ　２００
このカードをリリースし、自分の墓地に存在する「ジュラック・アウロ」以外のレベル４以下の「ジュラック」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。

《ジュラック・アウロ》　ＡＴＫ／　２００→１０００

『キュイ！』

『？その子、もしかして精霊？』

「はい！いろんな恐竜に変身できる、あたいの相棒です！」

『キュイ！』

ウィンの指摘通り、あのモンスターは精霊らしい。芽依ちゃんの

言葉に応じるように元気よく一声鳴いた。トリケラトプスとか《ジュラック・ギガノト》とかに変身していたのはあのモンスターだったのか…。

「それじゃ、行きますよ！レベル７《ジュラック・ギガノト》とレベル２《ジュラック・スタウリコ》にレベル１《ジュラック・アウロ》をチューニング！」

アウロが１つの輪になり天高く飛んでいき、ギガノトとスタウリコもついていくように飛び上がって輪を潜る。

『レベル１０のシンクロ？』

「ギガノトまでシンクロ素材に…どんなモンスターを出すんだろう？」

「太古の魂、流星と化す！滅亡の記憶よ、その身に宿れ！」

☆７＋☆２＋☆１＝☆１０

「シンクロ召喚！墜落せよ！《ジュラック・メテオ》！」

遥か上空で輪と星になったモンスター達が光り……光り……光り……光、り……。

「……あれ？」

『何も…起きない…？』

『ピィ？』

見上げても何も見えない。ただ青い空が広がっているだけだ。あれ、モンスターはどこに…？

「そろそろ『降って』来ますよ？」

「『降って』？」

「ほら、見えてきました！」

また上を見上げると…あ、何かいる。段々近づいて…あれ？何か燃えてない？

ゴォォォォ…

「…え？何あれ？」

「《ジュラック・メテオ》です」

遠目で見た限りだと、体が肥大化して隕石みたくなった恐竜だ。体が大きすぎて顔や前足が小さく見える。

《ジュラック・メテオ》　ＡＴＫ／２８００

「《ジュラック・メテオ》がシンクロ召喚に成功した時、フィールド上のカードを全て破壊します！」

「『ええっ！？』」

《ジュラック・メテオ》

シンクロ・効果モンスター
星１０／炎属性／恐竜族／ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ２０００
「ジュラック」と名のついたチューナー＋チューナー以外の恐竜族モンスター２体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを全て破壊する。
その後、自分の墓地からチューナー１体を特殊召喚する事ができる。

ゴオオオオオオ！

物凄い勢いで《ジュラック・メテオ》が空から降ってくる。もしかして、このまま墜落してドカーンっていくつもり！？

『ちょ、ちょっとストップ！いくら全体除去でもあんなのあり！？』

「まあ、これは保険ですけどね。本命はこっちです！罠カード《火霊術－「紅」》！炎属性モンスターの《ジュラック・メテオ》をリリースし、元々の攻撃力分、２８００ポイントのダメージを相手に与えます！」

「『うえぇ！？』」

《火霊術－「紅」》
通常罠
自分フィールド上に存在する炎属性モンスター１体を生け贄に捧げる。
生け贄に捧げたモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

《ジュラック・メテオ》の前に赤い魔方陣が現れ、そのまま突き

抜けると同時に全身に炎を纏い出した。大気圏を2、3層続けて突破したんじゃないかってくらい激しく燃える隕石としてフィールドの中央に向かって落ちてくる。

心なしか、メテオ自身生き生きしてるように見える。潰す気満々だ。正直、かなり怖い。ていうかこのままだと２５００しかない僕のライフが持たない。

『えぇぇぇ!?何あれ!?』

「怖っ!?何かすっごい怖っ!?うわわ!と、罠発動!《ダメーg」

ズドォドガァァァァァァァァァン!!!

『きゃあぁぁぁぁぁっ!!』

「うわぁっ!」

慌てて罠を発動させたけど、カード名を言い終わる前に《ジュラック・メテオ》が墜落。そして大爆発を引き起こした。

ウィンとガルドは当然まともに食らって破壊され、僕も同じく吹

っ飛ばされた。ソリッドビジョンなのにとんでもない威力だ。

「痛た…」

立ち込めた爆煙が少しずつ晴れていく中、僕は打ちつけた背中を擦りながら定位置に戻った。

ええと、フィールドは…。

《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

《ジュラック・アウロ》　ＡＴＫ／　２００

俊也　ＬＰ／１１００

「「え？」」

僕と芽依ちゃんは揃って声を上げた。僕は何で相手フィールド上にモンスターがいるかわからないからで、芽依ちゃんもほとんど同じ考えだろう。

「何でライフが残ってるんですか？しかもドラゴンが破壊されてないし…」

「ええと、僕からも聞きたい事があるんだけど…。罠カード《ダメージ・ダイエット》でこのターンのダメージを全て半分にしたんだ」

《ダメージ・ダイエット》
通常罠
このターン自分が受ける全てのダメージは半分になる。

また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、そのターン自分が受ける効果ダメージは半分になる。

「いつの間に!?」

「それと、もう1枚発動するよ」

「もう1枚?」

「罠カード《ガスタの守護》！破壊された時にデッキからガスタと名のついた罠カードをフィールド上にセットして、エンドフェイズ時まで相手モンスター全ての攻撃力を５００ポイント下げる!」

《ガスタの守護》
通常罠(オリジナル)
セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、デッキから「ガスタ」と名のついた罠カード1枚を選択してお互いに確認し自分フィールド上にセットする。
その後、このターンのエンドフェイズ時まで相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターの攻撃力は５００ポイントダウンする。

「デッキからは《ガスタへの祈り》をセットするよ。そして、君のモンスターの攻撃力はこのターンの間５００ポイントダウンする」

《ジュラック・アウロ》　ＡＴＫ／　２００↓　　０

「破壊効果を利用して…！凄いです！」

「それと、ダイガスタ・ウルは対象を取らない効果じゃ破壊されないよ」

「なるほど…だからフィールドに残ったんですね！」

《ダメージ・ダイエット》がなかったら本当にお仕舞いだった。危ない危ない…。

「そっちこそ、何でアウロがフィールドに？」

「ああ、《ジュラック・メテオ》にはもう１つ効果があって、フィールド上のカードを全て破壊した後に自分の墓地からチューナーを１体特殊召喚するんです」

『キュイ！』

「それでチューナーであるアウロがフィールドに戻ったのか…」

とりあえず、現状は把握できた。ダメージは半分だから、このターンは大丈夫だろうけど…。

「続けますよ！《ジュラック・アウロ》の効果発動！アウロをリリースする事で、墓地からレベル４以下のジュラックを１体を特殊召喚します！墓地から《ジュラック・グアイバ》を特殊召喚！」

芽依ちゃんのモンスター大量展開を助けた恐竜がフィールドに戻ってきた。変身はこの効果から来てたのか…。

《ジュラック・グアイバ》　ＡＴＫ／１７００→１２００

「そして装備魔法《爆炎の継承》！自分フィールド上の炎属性モンスターをリリースし、墓地の炎属性モンスターを特殊召喚してこの

カードを装備します！」

《爆炎の継承》
通常魔法（オリジナル）
自分の墓地に存在する炎属性モンスター１体を選択して発動する。
自分フィールド上に表側表示で存在する炎属性モンスター１体をリリースし、選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚してこのカードを装備する。
装備モンスターの攻撃力は、この効果でリリースしたモンスターの元々の攻撃力の数値分アップする。
また、このカードを墓地に送る事で、装備モンスターはエンドフェイズ時までカードの効果で破壊されない。

「《ジュラック・グアイバ》をリリースし、墓地から《ジュラック・ギガノト》を特殊召喚します！」

グアイバが炎に包まれ巨大化し、その中からギガノトが姿を現した。墓地のジュラックが増えてるからさらに強くなっているけど、《ガスタの守護》の効果で攻撃力は少し下がっている。

《ジュラック・ギガノト》　ＡＴＫ／２１００→３５００→３０００

「これで終わりじゃありませんよ！《爆炎の継承》で特殊召喚したモンスターの攻撃力は、直前にリリースしたモンスターの元々の攻撃力分アップします！」

「！？」

「リリースした《ジュラック・グアイバ》の攻撃力は１７００！よって、１７００ポイントアップです！」

《ジュラック・ギガノト》　ＡＴＫ／３０００→４７００

「４７００！？」

ただでさえダイガスタ・ウルを上回るほどの攻撃力なのに、さらに上乗せしてきた。４７００なんて数値、普通ならあまりお目にかかれない。もちろん、例外もいるけど…。

「バトル！《ジュラック・ギガノト》で《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》を攻撃！ギガント・ファイア！」

ギガノトがまた火炎放射を繰り出した。今までとは見違えるくらいに威力が上がっていて、ダイガスタ・ウルを焼き尽くすには十分すぎるほどだった。そして、攻撃の余波が容赦なく僕を襲う。

「ぐぅ…っ！《ダメージ・ダイエット》の効果で、ダメージは半分になる！」

俊也　ＬＰ／１１００→　５０

「ギリギリ耐えましたか…。そうじゃなきゃ面白くありません！カードを１枚セットしてターンエンドです！エンドフェイズ時に《ガスタの守護》の効果で下がっていた攻撃力が元に戻ります！」

《ジュラック・ギガノト》　ＡＴＫ／４７００→５２００

芽依
ＬＰ／２４００
手札／１

モンスター／《ジュラック・ギガノト》（ＡＴＫ／５２００）
魔法・罠／リバース×１

な、何とか耐え切った…。攻撃力が後１００ポイントでも高かったら負けていた。この子、強い…！

「《爆炎の継承》を墓地に送る事でエンドフェイズ時までカードの効果で破壊されません！《ダイガスタ・ガルドス》を蘇生させても無駄ですよ！さあ、どうします？」

「…！」

ただガルドスを蘇生させても意味はない。なら、どうすれば…。

「（伏せたのは《ブレイク・アブソープション》。手札を１枚捨てる事で、攻撃モンスターを破壊してそのモンスターの攻撃力の半分だけライフを回復できる）」

《ブレイク・アブソープション》
通常罠（オリジナル）
相手モンスターの攻撃宣言時、手札を１枚捨てて発動する事ができる。
その攻撃モンスター１体を破壊し、破壊したモンスターの元々の攻撃力の半分の数値分だけ自分のライフポイントを回復する。

「（でも、どうせダイガスタ・ウルを復活させて破壊されちゃうよね。それくらいしてきてくれても面白いのに…）」

効果で破壊できないとなると、他には何ができる？次のターンで決めないと、かなり危険だ。

「（次はどんな手で来るんだろうな～！すっごい楽しみ！）」

…うん、いい笑顔だ。考えてる事が顔に出てるって、ああいうのを言うのかもね。ニコニコ顔が、１００％デュエルを楽しんでるように見える。思わず苦笑した。

「本当に、純粋に楽しんでるんだね…」

「そりゃあもう！相手がどんな戦術を使ってくるのかとか、それをどうやって打ち破ろうかとか、そんな事を考えると楽しくって仕方ないんです！」

「楽しい、か…」

気持ちはわかる。デュエルを始めた頃は、芽依ちゃんほどじゃないけど僕も同じ気持ちだった。でも、ダークシグナーやニュートラルとの戦いで、知らない内に薄れていたのかもしれない。

そうだよね。デュエルは本来楽しむべきもの。それだけは忘れちゃいけないんだ。

「…ありがとう」

「え？」

「さてと…ここまで期待されたら、応えないわけにはいかないよね」

小声で軽くお礼を言ってから、思考をフィールドに戻した。

モンスターは0。ライフもたったの５０と絶望的。でも、《ガスタへの祈り》だけは残す事ができた。芽依ちゃんの伏せカードが攻撃反応系だとすれば…。

…！そうか！別にギガノトを『破壊』する必要はないんだ！

「僕のターン！ドロー！！」

…これなら…いけるかな？

「罠カード《ガスタへの祈り》を発動！墓地のガスタを2体デッキに戻し、墓地からガスタを1体特殊召喚する！墓地から《ガスタの希望　カムイ》と《ガスタ・ファルコ》をデッキに戻す！舞い戻れ！《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》！」

地面から緑に縁取られた白い竜巻が巻き起こり、中からダイガスタ・ウルが竜巻を吹き飛ばすように翼を広げて現れた。

《ダイガスタ・ウル・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「来ましたね…！」

「ダイガスタ・ウルの効果で、墓地の魔法・罠を除外する事で相手の魔法・罠を破壊する！墓地から《ガスタへの祈り》を除外！ハリケーン・スラスト！」

風の刃が再び伏せカードを切り裂く。…特に何もないみたいだ。

なら、このデュエルは僕の勝ちだ！

「魔法カード《死者蘇生》！墓地からモンスター1体を特殊召喚する！《ダイガスタ・ガルドス》を特殊召喚！」

ウィンとガルドがフィールドに戻ってきた。ただ、ウィンはあまり気分がよくないみたいだ。

《ダイガスタ・ガルドス》　ＡＴＫ／２２００

『全く…心臓止まるかと思ったじゃない…』

「でも、迫力あってよかったでしょう？」

『全っ然よくない！トラウマになったらどうするのよ！？』

「そうですか？そういえば、《ジュラック・メテオ》の効果を使う度に大抵の人は顔が引きつるんですよね…」

『毎回あんな演出なの！？』

ウィンは《ジュラック・メテオ》についてご立腹らしい。ていうか、毎回上からズドーンはさすがに勘弁してほしいかな？ただでさえ今回は特別バージョンだったし…。

「あはは…それじゃ、続けるよ。手札からチューナーモンスター《ガスタ・イグル》を召喚！」

トサカ付きの緑の兜を被った、頭が白で体が緑の小鳥が現れた。

《ガスタ・イグル》　ＡＴＫ／　２００

「レベル５《ダイガスタ・ガルドス》にレベル１《ガスタ・イグル》をチューニング！」

『ハァ…後はよろしく』

『ピィー！』

イグルが１つの緑の輪になり、少し機嫌が悪いウィンを乗せたガルドが輪を潜って５つの星になる。

「聖なる疾風よ！暗雲（あんうん）を突き抜け天を照らせ！」

☆５＋☆１＝☆６

「シンクロ召喚！輝く嵐！《ダイガスタ・スフィアード》！」

呼び出したのは、先が朱色になっている緑の長髪の女性だ。黒い杖を持ち、左腕に黄緑の布を巻き、額には青い宝石を埋め込んだ黄色い鎧のような額当てを付けている。

《ダイガスタ・スフィアード》
シンクロ・効果モンスター
星６／風属性／サイキック族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ１３００
チューナー＋チューナー以外の「ガスタ」と名のついたモンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたカード１枚を選択して手札に戻す事ができる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する「ガスタ」と名のついたモンスターの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは代わりに相手が受け

る。
また、このカードは戦闘では破壊されない。
《ダイガスタ・スフィアード》　ＡＴＫ／２０００
「スフィアードがシンクロ召喚に成功した時、墓地からガスタのカードを1枚手札に戻す事ができる！《ガスタの風札》を手札に！…まあ、今はあまり意味ないけど…」
「どういう事ですか？」
「すぐわかるよ。これで終わりだからね」
「え？」
「バトル！《ダイガスタ・スフィアード》で《ジュラック・ギガノト》に攻撃！」
スフィアードが杖に緑と黄色の魔力を溜める。杖の先に集まった魔力は少しずつ大きさを増していく。
「ちょっと待ってください！攻撃力が全然足りてないじゃないですか！」
「だからいいんだ。スフィアードがフィールド上にいる限り、ガスタの戦闘で発生する僕への戦闘ダメージは全て相手が受ける事になる！」
「ええっ！？」

芽依ちゃんのライフは２４００。攻撃力５２００の《ジュラック・ギガノト》に攻撃力２０００の《ダイガスタ・スフィアード》が攻撃したら…もうわかるよね？

「行け！セイント・テンペスト！」

緑と黄色、２つの色を持つ嵐が魔力の球体から放たれ、ギガノトを貫通して芽依ちゃんに命中した。

「きゃあっ！」

芽依　ＬＰ／２４００→　０

俊也　ＷＩＮ

ソリッドビジョンの衝撃からか、芽依ちゃんは尻餅をついた。その直後にソリッドビジョンが消えていく。

『やったね、俊也！』

『キュルル！』

ウィンと元の大きさに戻ったガルドがカードから出てきた。ガルドは相変わらずウィンの肩に留まっている。

「うん。…！」

気がつくと、芽依ちゃんは座ったまま顔を俯かせていた。え、急にどうしちゃったんだろう…？

『俊也…』

「何でそんな非難するような目で見るの!?」

『だって、小さい女の子を泣かせちゃったじゃん』

『キュル…』

「泣いてない泣いてない!多分大丈夫!ていうか何で!?勝ったから!?勝ったから悪いの!?もしそうだとしても君も同罪だよね!?ガルドもそんな目しないで!」

って、あれ?芽依ちゃん軽く震えてる!?あれ!?僕本当に勝っちゃまずかった!?

「え、ええと、あ、あの…」

「ぷ…くく…」

「え?」

「あっはははは!」

突然、芽依ちゃんは大声で笑い出した。突拍子もない出来事に、当然僕らは面食らう。

「凄いですよ、俊也さん！まさか戦闘ダメージを丸々跳ね返されるなんて思ってもみませんでした！」

「え…え？」

「攻撃力が高い事が弱点になる事もあるんですね！勉強になりました！ありがとうございます！」

「ど、どういたしまして…」

笑顔でお礼を言ってきたものだから、反射的に返事を返した。どうやら杞憂だったみたいだ。

…うん、わかった。この子、十代君並のデュエル馬鹿だ。いや、それ以上かも…？

「デュエルの決着もついた事ですし、ここを通ってもいいですよ！デュエルアンカーはもう切れてますよ」

「いいのかい？」

右腕が軽くなったような感覚を覚えながら、僕は一応聞き返してみた。

「はい！あたいはもう十分満足しましたから！でも、次は負けませんよ！」

半分予想通りの返答が返ってきた。案の定、また宣戦布告されたけど…。

「…うん。僕だって今以上に強くなってみせるよ」

『次にやる時は《ジュラック・メテオ》のあれだけはやめてよね。心臓に悪いから…』

『ピィー！』

1人（？）一言ずつ言い残して、僕達はまた海馬コーポレーションに向かって走り出した。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…

…走り出したけど、すぐに立ち止まる事になった。

「「『『！？』』」」

何かの轟音と共に、とてつもない重圧が体にのしかかってきた。感覚で言えば、とても不気味で嫌な感じ。

『な、に…これ…？』

「気のせい…じゃないみたいだね…」

「な、何ですかあれ！？」

芽依ちゃんが驚きの声を上げた。視線の先を辿ると、異常現象が視界に入った。

黒い何かがまるで巨大な棘のように何本も空に向かって伸びていて、さらにぐにゃぐにゃと動いている。誰がどう見ても現実からかけ離れている。

「あれは…？」

ＳＩＤＥ／ディヴァイン

「ハァ…ハァ…」

「ゼェ…ゼェ…」

わたしと敵サイドであるギュラは、《緊急テレポート》で何とか本社から脱出した後、近くの白い石畳の広場に腰を下ろして息を整えていた。体力的には大した問題はないが、精神的に疲れた。

「まんまと見つかっちまうとはな…」

「参ったな。侵入者として我々が見つかった事で、今頃社内の警備もより厳重になっているだろう」

「ちっ、このビルにあるのは間違いねえってのに…」

マスクを取りながら現状の予想を呟くと、ギュラは同じくマスクを外して何かの端末を取り出した。地図が表示された画面の丁度本社に当たる箇所で朱色の印が波紋付きで点滅しているところを見ると、石板の探知機のようだ。

『全く、情けないのぉ』

すると、我々の目の前に誰かが出てきた。

何か黒くて腹部と胸部が朱色で、カブトムシっぽい大柄の人型のモンスターだ。どう考えても精霊だな。

「ガザス！」

『儂の忠告を無視するからだ。みすみすと事態を悪化させよって…』

ガザスと呼ばれた精霊は、妙な威厳を放っている。台詞からして、老人だからこその成せる技だろう。

『だからあれほど…

段ボールを使えと言ったじゃろうがぁぁぁぁぁ！』

「だから無理だっつってんだろぉぉぉぉぉ！」

「……は？」

何を言い出すかと思えば…予想の斜め上を行く言葉に、わたしは一瞬思考が止まった。

『まだ否定するか！？』

「当たり前だ！あんな小綺麗な廊下に段ボールが1箱置いてあったらどう考えても不自然だろうが！」

『段ボールを見くびるな！彼の有名な国境〇き軍隊のボスも段ボールで数多の危機を潜り抜けてきたのだぞ！？』

「それは違う世界観だろ！現実を見ろ現実を！」

『現実なら見えておるわ！あのゲームはメニュー画面になっても時間が止まらん！他のゲームよりも現実味があるじゃろう！』

「そっちのリアリティじゃねえよ！何お前！？メ〇ルギアにハマッ

てんの!?ＢＩ○　ＢＯＳＳに憧れてんのか!?」

立ち上がって口論するギュラとガザス。半分くらい話についていけないが…このご老人（？）がどこかボケているのはわかった。

「まあまあ、落ち着いて。ここは一旦協力して、石板の件を何とかしようじゃないか」

「協力？」

「お互いこのままではセキュリティを掻い潜りつつ石板を回収するのは無理がある。まずは協力して石板を回収。奪い合うのはそれからだ」

とりあえず、論争を止める事も兼ねてそう提案した。さすがに今の状況だ、単独で解決できる自信はない。

「いいのかよ？あっさり約束破って、体よく横取りしてずらかるかもしれねえぞ？」

「その時はその時さ。それに、その手法はわたしにもできる事だ」

『協力しつつ腹の探り合いか。面白い事を言うのぉ』

危険だが、こちらの方がより確実に石板の下に辿り着ける。後の話はその時に考えればいい。

「へっ！そうと決まれば…」

ザッ！

「「『！』」」

ギュラが言い終える前に、足音らしき物音が聞こえた。音のした方を見ると、帽子を被った赤い髪の少女がいた。

「千景！」

「何してるの？」

千景と呼ばれた少女は、無表情で静かに問い掛けた。そういえば、ルーナに攻撃したのはこの子だったな。

「いや、ちょっと…」

キィィッ！

「先生！？」

ギュラが説明しようとした時、千景に続いてルーナも到着した。そのスケボーはどこで用意したかはこの際置いておくとして、デュエルディスクのエクストラデッキの部分から朱色の光が漏れているのは気になる。

「そんな格好で何してんの！？」

そんな格好と言われて、自分がフード付きコートとグラサンを身につけている事を思い出した。某油女の忍スタイルもどきの男がギュラも合わせて2人。我ながら何ともシュールな光景だ。わたし達は今更ながらグラサンとフードを外した。

「いや、変装して本社に侵入したのはいいんだが…」

「途中でこいつとばったり出くわした時にセキュリティに引っ掛かっちまってよ。やむを得ず一旦脱出したところだ」

「今頃セキュリティもより厳重になっているはず。強行突破も考えものだ」

「はあ!?何やってんのよ!?」

ルーナが怒るが無理もないか。さて、どうやって挽回しようか…?

「……」

「あの…千景、何か言ってくれないか?沈黙とその視線が逆に痛いんだが…」

「……Mなの?」

「違うわ!!どう解釈したらその結論に達するんだよ!?」

「うわぁ…あんたそういう趣味あるんだ…」

『変態ね~』

「ねえよ!微塵たりともねえよ!変な誤解をするな!」

『ほぉ、お前さんにそんな趣味が…』

「てめえまでボケんでいい！」

千景の予想外の一言で誤解を解く事に全力を尽くすギュラ。その、何だ…頑張れ。口には出さないが。ところで、いつの間にかナージャが出てきて代わりにスケボーが消えているのだが、どういう事だ…？

「ていうか、そこの黒いモンスターって《天空の聖域》で戦った奴とほとんど同じタイプじゃない！？あの時攻撃してきたのはあんただったのね！？」

「ああ、そうだよ。でも怪我人が出てないだけまだマシだろ？」

「冗談も程々にしなさい！あんたが放り出した機械が操るモンスターのせいで、腹を刺されて重症を追った奴がいるのよ！？これでも怪我人０って言うつもり！？」

「はあ！？おい、ちょっと待て！あれは人間や精霊には攻撃しないはずだぞ！？」

「とぼけるんじゃないわよ！」

ギュラは今度はルーナと口論を始めたが、何か話が噛み合っていないようだ。話は紅刃達から聞いているが、もしギュラの言葉が本当だとしたら、一体何が…？

「ギュラ。過激派が私達の目を盗んでプログラムを弄った可能性がある」

「何！？だとしたら…ちっ、あのイカレ野郎…！」

「か、過激派？どういう事？」

ルーナが謎の単語について見逃す事なく言及する。過激派…『派』という事は、ニュートラルにも派閥があるのか？

「ああ、それか？…まあ、それぐらいならいいか。ニュートラルには…」

「！」

ギュラが過激派について説明しようとすると、突然千景がギュラから探知機を奪い取った。

「ち、千景？」

「……九条院ルーナの持つカードの反応が強い。それに引き寄せられて…

石板がこちらに移動している」

「「「『！？』」」」

衝撃の発言だ。だが、石板が移動？機械でも、ましてや生き物でもない物体がひとりでに動くとは考えられないが…。

「た、確かに本社に近づくにつれて《ブラック・ブルドラゴ》の光も強まってきたけど…石板が勝手に移動してるって言うの？」

「…来た」

「え？」

バキャアッ！

千景が短く呟いた直後に、本社の出入口を突き破って朱色に光る何かがこちらに向かってきた。

それはわたし達から少し離れた所まで飛んできて、そこで静止した。ちなみに空中浮遊の状態だ。

「これって…！？」

ルーナが思わず驚きの声を漏らす。…間違いないな。

それは、我々が探し求めていた伝説の龍の石板だった。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第７２話　全体除去のソリッドビジョンは何かおっかないイメージがある（後書き）

☆今回のキーカード☆

遊馬「よっしゃあ！今回のキーカードの時間だぜ！司会をするのはこの俺、九十九遊馬と！」

アストラル『アストラルだ。…ところで、わたしの姿は他人には見えないのだが…』

遊馬「大丈夫だって！後書きとかはある意味何でもありの世界だからみんな見えてるってさ」

アストラ『いまいち理解に苦しむが…ん？わたしの名前が１文字消えているぞ？』

遊馬「読みやすいように名前表記は４文字までに制限してるらしいぜ？」

アストラ『…まあ、いいだろう。今回は俊也と芽依のデュエルの決着がついたな』

遊馬「戦闘ダメージを跳ね返しちゃうなんて、シンクロモンスターも凄えのがたくさんいるんだな！」

アストラ『《ジュラック・メテオ》を用いたコンボはなかなか強力だった。全体除去と高火力の効果ダメージ、さらに後続の特殊召喚を兼ねたのは目を見張るものがある』

遊馬「あんなコンボ、俺にもできっかな?あ、それとやっと石板が出てきたな」

アストラ『今回の争いの原因になった重要アイテムか。果たしてどちらの手に渡るか…』

遊馬「振り返りはここまでにして、カード考察に行こうぜ!今回紹介するのは、俊也が使ったガスタのシンクロモンスター《ダイガスタ・スフィアード》だ!」

《ダイガスタ・スフィアード》
シンクロ・効果モンスター
星６／風属性／サイキック族／ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ１３００
チューナー＋チューナー以外の「ガスタ」と名のついたモンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたカード１枚を選択して手札に戻す事ができる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する「ガスタ」と名のついたモンスターの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは代わりに相手が受ける。
また、このカードは戦闘では破壊されない。

遊馬「チューナーとそれ以外のガスタのモンスターでシンクロ召喚できるぜ!」

アストラ『シンクロ召喚に成功した時、墓地からガスタのカードを手札に戻す事ができる。魔法や罠も回収できるのは嬉しいところだ』

遊馬「戦闘破壊もされないんだぜ！ただ、攻撃力が他のシンクロモンスターより少し低めだけどな。でも、それも長所なんだ！」

アストラ『このモンスターの真価は戦闘にある。ガスタのモンスターの戦闘で発生する戦闘ダメージは、全て相手が代わりに受ける事になる。これを利用して、リクルート効果を持つガスタの下級モンスターで自爆特攻を繰り返すと、簡単に相手のライフを削り続ける事ができる。元々攻撃力が低めで、なおかつ数種類のモンスターと互いにリクルートし合う事ができる【ガスタ】だからこそ可能な戦術だ』

遊馬「スフィアード自身、普通の下級モンスターくらいなら戦闘破壊もできるよな。弱点なんて…いや、あるな…効果を無効にされたらまずいじゃん…」

アストラ『確かに強力な効果を持つモンスターだが、それ故効果を無効にされると脆い。攻撃時に《禁じられた聖杯》などを使われたら、逆に手痛いダメージを受けてそのまま負けてしまう可能性もある』

遊馬「どんなカードも無敵ってわけじゃないんだよな。シンクロモンスターにエクシーズモンスター、それにナンバーズだって、効果を封じられたり逆に利用される事だってあるんだ」

アストラ『シャークやカイト達とのデュエルで、少しは成長したようだな。今回のカード考察はこれで終了だ』

遊馬「次回は石板の取り合いは絶対あるとして、紅刃達の方はいつ出番があるんだ？」

アストラ『安心しろ。次回は紅刃達も登場する』

遊馬「そうか！く～、みんなすっげえデュエルしてるし、俺もデュエルしてえ！」

アストラ『それと、これは予告だ。作者曰く、「今度こそは１００％」らしい』

遊馬「って、最近予告通りにいった試しないだろ…？本当に大丈夫なのか？」

アストラ『わたしの知った事ではない。このコーナーで様々な人物が司会の代役を勤めてきたが、次回で代役は終了だそうだ』

遊馬「何でだよ？長編が終わるまでは代役を用意するんじゃなかったのか？」

アストラ『だからだ。修学旅行編は後２話で終了する』

遊馬「え！？マジかよ！？」

アストラ『本当だ。もうデュエルは入らないらしく、残りの展開をまとめると丁度２話分の量になるそうだ』

遊馬「おお！やっと決着がつくのか！」

アストラ『しかし、カード考察は行うらしい。そこでだ。最後の代役は読者のリクエストで決めようと思う』

遊馬「リクエスト？」

アストラ『投票数が1番多い2名が次回の代役だ。無論、わたし達を含む今までに代役を勤めた者達にも投票可能だ』

遊馬「て事は、もう1度俺達が代役をするって事もあるのか？」

アストラ『そういう事だ。ただし、投票数が同じ者が多い場合はランダムで決定する。そして、作者がキャラを把握し切れていない者は出演できない可能性があるらしい。そこは了承してもらいたい』

遊馬「案外シビアだな…」

アストラ『投票したい人物を1位から3位まで選択してくれ。1位には3票、2位には2票、3位には1票が入る。期限は２０１１年９月２９日までだ』

遊馬「とりあえず、みんなガンガンリクエストしてくれよ！」

アストラ『では、感想を待っている。次回も楽しみに待っていてほしい』

遊馬「今は地震の被害とかいろいろあるけど、頑張って乗り切ろうぜ！かっとビングだぜ、みんな！」

ーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

《ジュラック・メテオ》の効果をソリッドビジョン付きで使うと

大体ああなるんじゃないかと考えて描写しました。《火霊術ー「紅」》も合わせたら凄い事に…。

ラストの代役のリクエストについてはアストラルが説明した通りです。リクエストよろしくお願いします。

では、また次回！

第７３話　無駄にハイテンションだと周りに引かれる事もある（前書き）

☆精霊の呟き☆

ゴーズ『《ブラック・ブルドラゴ》の石板が出てきたのはいいが、敵の眼前でもあるからちゃんと回収できるか不安だな…』

ウィン『平気平気！ルーナ達なら上手くやってくれるでしょ？』

ガルド『ピィー！』

カイエン『私はナージャが心配だけど…。スケボー状態で飛ばしてたから疲れてないかしら？』

ゴーズ『言われてみれば…。途中まで２人乗りだったしな』

ウィン『後で何かご馳走してあげよっかな？』

ガルド『キュルッ！』

カイエン『後書きのコーナーの代役はキャラ投票の１位と２位に任せています。意外な組み合わせなので是非最後まで読んでみてくださいね』

ゴーズ『今回の締めの言葉は通りすがりのデュエリストさんからのリクエストだ。第７３話、始まるぞ。

守るって誓ったんだよ…誰にでもない、オレの魂にだ！！』

ウィン『かっこいい！ついでに卍〇も…』

ゴーズ『いや、できないから』

第７３話　無駄にハイテンションだと周りに引かれる事もある

ＳＩＤＥ／ルーナ

「これって…！？」

突然海馬コーポレーションから飛んできた朱色に輝く石板。《ブラック・ブルドラゴ》に似た模様が刻まれているそれは、私達から少し離れた所で空中静止している。

「へっ！わざわざ出迎えてくれるたぁな！探す手間が省けたぜ！」

「協力の件はなしという事になるな…」

まあ、本社に入る必要がなくなったのはいいけど…今は味方はもちろん敵もいる。つまり、早い者勝ち。

「ギュラ」

「わかってらぁ！」

「石板は渡さん！」

ディヴァイン先生とギュラが同時に動いた。石板に向かって一直線に走る。

『儂は見ているとしよう』

『儂？へえ、歳はわきまえてるのね～』

インヴェルズっていったっけ？そのモンスターとナージャは今のところ奪い合いに参加する気はないみたい。

「もらったぁ！」

「させるか！」

「ぐっ！？」

一足先にギュラが石板に手を伸ばしたけど、先生が咄嗟に飛びついた事で2人一緒に倒れた。

その横を千景と呼ばれた女の子が走って通り過ぎる。今度はあいつが石板を取る気だ。

ヒュオッ

「！」

後一歩で手が届くというところで、石板はその手をすり抜けるように上へと動いた。そして、そのまま私の所まで引き寄せられて私の手に収まる。

「もらいっ！」

ちゃんと種はあるわよ？私が鞭を石板に巻きつけてそのまま引っ張ったのよ。伸縮自在って役に立つわね。

「何ぃ！？」

「よくやった！」

ビッ！

「っ！？」

でも、首筋に冷たい嫌な空気。目だけ動かすと、大剣を片手で持って私の首筋に当てている誰かが見えた。

「石板を渡せ。さもなくば、斬る」

薄い桃色の髪に赤いマスク。白を基調とした鎧に似た戦闘用スーツを着たそいつは、《D．D．アサイラント》だ。確か、千景の精霊…で、合ってるはず。

「…お断りよ」

それでも、私は軽く笑みを浮かべて返す。

「何？…っ！」

ババババババ！

《D．D．アサイラント》の精霊が危険を察知して剣を引いて飛び退くと、ギリギリのタイミングで無数の毒針が元いた空間を通り過ぎた。そして私もすぐ後ろに下がる。

「あらら、気づかれちゃったわね～。できれば無力化しておきたか

ったんだけど」

今のは実体化したナージャの攻撃よ。変に邪魔されないようにあのインヴェルズから離れた上でね。

「サイラ、無事か！？」

「異常なし。だが、不覚」

ギュラが一言声を掛けるとその精霊…サイラは静かに返して大剣を構え直した。先生は一旦離れて私に並んだ。

さて、どうしようかしら？千景が私に攻撃した時のあのスピードから見て、ナージャにスケボー化してもらっても逃げ切るのはほぼ不可能。先生が足止めするにしても人数が足りない。最悪、タッグデュエルに持ち込めばまだ可能性があるけど、もしあの2人がリアリストなら意味がない。他に方法は…。

「そこまでだ！」

「「「「「「『！？』」」」」」」

私が脱出方法を模索していると、誰かが叫ぶ声が聞こえた。よく通る、厳しい男の声。

「我が社に侵入した挙げ句、私有物を取り合うとはどういうつもりだ？」

黒い服の上に裏地が赤の白いロングコート。茶髪と鋭い目付き。首にはデュエルモンスターズのカードを模したペンダントを掛けている。

うわぁ…思いっ切り見た事ある顔。名前だけでも知る人ぞ知る超有名人。そして、今の状況で1番会いたくなかった人物。

「て、てめえは…

『海馬瀬人』…！？」

そう。海馬コーポレーションの社長にして伝説のデュエリストの1人、海馬瀬人（かいばせと）だ。

「なぜ石板が勝手に飛び出したのかは置いておく。それは我が社が発掘した石板だ。どんな用途があるかは知らんが、所有権は俺にある。大人しく返してもらおうか」

うん、海馬コーポレーションにある時点で何となく予想できていたけど、社長が出てきたからにはこうなるわよね…。

「…へっ、悪いが断らせてもらうぜ。どうせ美術館送りか物好きな学者やマニアに売り飛ばすかする気だろ？」

それでもギュラはめげずに張り合う。向こうも第三者の介入はよろしくないみたい。

「ふぅん、だとしたらどうする？貴様らには関係のない事だ」

「お前も見ただろ？石板が今みたいに光ってひとりでに飛んでいくのが。その石板は洒落にならない量のエナジーが詰まった超常的な代物だ。俺達にはそれが必要なんだよ」

「知った事か」

「ま、お前の嫌いなオカルトが盛大に関わってるのは認めざるを得ないだろ？現に精霊が2体も実体化してんだからな」

そう言いつつ、ギュラはサイラの肩をポンと叩いた。サイラはまだしも、ナージャはコスプレじゃ片付かないわよね。

「（《D．D．アサイラント》と…あの蛇の小娘は何だ？あんなモ

ンスターは記憶にないぞ？）ちっ…。どちらにせよ、貴様らが不法侵入したというのは揺るがない事実。責任は取ってもらうぞ。その仲間にアカデミアの生徒がいる事は少し残念だがな」

「…っ！どう言われようと、石板は渡さないわよ」

私は丁度マントの下にアカデミアの制服を着ている。創始者の海馬瀬人に幻滅されても仕方ないわね。

でも、《ブラック・ブルドラゴ》とこの石板が反応し合っているなら、この石板には《ブラック・ブルドラゴ》の進化の力が封じ込められているはず。紅刃の《ライトエンド・ドラゴン》も、将人の《ダークエンド・ドラゴン》もそうだった。

私が使うに相応しいかはわからない。まだ早いかもしれない。でも、やっとできた友達の力になれるなら…！

これは、誰にも渡さない！

カァァァァァ！

「！？」

「これは…！？」

「おわっ！？」

「「…！」」

「あらら？」

『ぬ？』

「何…！？」

突然、持っていた石板が放つ朱色の光がさらに強まった。１番遠くにいる海馬社長の影がはっきり映るくらいに強く。まるで私の想いに反応したように。

すると、石板に皹が入った。ビキビキと音を立てて、亀裂となって広がっていく。

パキィィィン！

やがて、石板は粉々に破裂した。

「砕けただと！？」

海馬社長を始めとしてみんなが驚く中、手元に残ったのは空中に浮いて朱色の光を発しているカードだった。

ほとんど無意識にそれを手に取ると、光は徐々に消えていった。

「カード…だと…？」

手にしたカードは2枚。1枚は枠以外何も書かれてないシンクロモンスターのカード。もう1枚は…何これ？枠すらないじゃない。完全に白1色だ。

「…ミッション失敗」

「みてえだな」

「……」

千景とギュラは諦めたみたいに呟き、サイラは自分の大剣を消した。海馬社長はサイラについては眉を少し動かしただけで特に何も言わなかった。

「失敗…というのは？」

「俺達が必要なのは石板だ。カードじゃねえ」

「そのカードはあなたが持つべき物。私達が扱う事はできない」

どういう事？少なくとも、私達とこいつらが敵同士ならカードを奪って私のデッキを強化させない事だってしてきてもおかしくない。むしろそれが普通。なのに、カードになった途端にあっさり投げ出すなんて…。

「あんた達の目的は何？」

「それは教えるわけにはいかねえな。で？社長さんはどうするよ？」

「？」

「あんたの言う通り、現時点での所有者はあんたで間違いないだろ。だが、そのカードはあんたには使えねえ。俺達でも、どんな伝説のデュエリストでもな」

「その小娘なら使えるとでも言うのか？」

「そのカードの発現は対応したカードを所有し、なおかつ認められている事が絶対条件。その条件を満たしている人物が彼女。故に、彼女しか使用できない。あなたの《青眼の光龍》と似たようなもの」

「…！」

千景が説明を引き継ぐ。《青眼の光龍》…海馬社長の最後の切り札。社長の言うオカルトが関わっているわけじゃないけど、専用って考えれば確かに似ているわね。

「……」

社長が私を見つめる。いや、睨む。眼光をギラギラさせてる。物凄く睨んでくる。

少し気圧されかけたけど、私も睨み返す。気迫で負けちゃいけないと思ったし、何よりプライドが許さない。

『にらめっこは退屈じゃのう』

「てめえは黙ってろ」

インヴェルズが何か言ってるけど無視よ無視。

やがて、社長は小さく笑みを浮かべた。

「…ふぅん。いいだろう。くれてやる」

「！」

「ただし…」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…

社長が何か言いかけた時、何かの地響きがそれを遮った。

「な、何よこれ！？」

「地震か！？」

そして、嫌な感覚の重圧を感じた。口じゃ説明しづらいけど…何か、毒々しい感じ？

「何だあれは!?」

先生が東を見て驚愕する。つられて私達も同じ方向を見る。

…うん。何かいる。黒くて巨大な触手っぽいのがうねうね動いてて、同じく黒い龍やら巨人やらがいる。

「（あれは…三幻神…？）ちっ！貴様らは早く避難しろ！」

「避難ったって…」

ピリリリ、ピリリリ

『聞こえるか？俺だ』

「ん？」

「…？」

突然、ギュラと千景の左手首から声が聞こえた。よく見ると腕時計型のテレビ電話みたくなってるみたい。

「シュルク？」

シュルクって、確か白い馬のモンスターに乗ってた奴よね？

『1度しか言わないぞ？お前達も見えるだろ？巨大なモンスターが暴れているのが。手短に言う。あれは過激派の一員が呼び出したモンスター、三邪神だ』

「はあ！？」

『俺達全員で押さえる。イレギュラーにも協力を呼び掛けろ。このままでは町１つ吹き飛びかねない』

プツッ

「お、おい！ちょっと待て！…ちっ、切りやがった」

一方的に用件を告げて電話を切ったシュルク。よく聞き取れなかったけど…何て言ってたのかしら？

「おい、お前ら！」

「「「「！」」」」

「ちょっと手を貸せ。町１つ吹き飛ばされたくなかったらな」

ＳＩＤＥ／紅刃

「グカカ…」

俺達は三邪神と何かやばそうな力を得た尾形と対峙している。デュエルに持ち込めればいいとは思うけど、そうはいかないみたいだ。

「どうする？息の根を止めるだけなら首を狩ればそれまでだが…」

「エグい考えするなオイ」

将人が物騒な言葉を口に出す。言ってる事は合ってんだけどさ…。

「何とかして邪神から切り離す」

「どうやってだ？」

「それがわかったら苦労しねえよ」

シュルクの質問に答えた直後、尾形が闇の触手っぽい奴を4、5本くらい伸ばして攻撃してきた。それに対して、俺は剣を横に振るって電撃を叩きつけた。

「行くぜ！」

「ああ！」

触手っぽい奴…面倒だから触手でいいか。触手を残らず焼き払った後、俺と将人は同時に駆け出し…。

「「…ん？」」

１０ｍも進まない内に思わず立ち止まった。

「？どうした、かかってこないのか？」

「「……」」

…いる。尾形のずっと後ろに何かいる。

「今更怖じ気づいたか？ならば、大人しく…」

「滅びのバーストストリィィィィィム！！」

ズドォォォォォォ！！

「「……は？」」

俺と将人が思わず声を漏らしたのも無理はないと思ってくれ。

いきなり尾形のずっと後ろにどっかで見たような白いドラゴンが3体現れたかと思うと（立ち止まったのはこれが原因）、誰かの指示で3体揃って光線をぶっ放してきた。

三邪神にそれぞれ直撃＋爆発。俺と将人どころか全員呆気に取られた。

「ふぅん…性能は確かのようだな」

「当然だ。誰のデュエルディスクだと思ってやがる」

「さすがは我がブルーアイズ。名に恥じぬ破壊力だ」

「って、聞いちゃいねえ…」

3体のドラゴンの足下には人影が7つ。先に進んだはずのルーナとディヴァイン、ギュラと…千景って名前だっけか?それと《D.D.アサイラント》と《インヴェルズ・ガザス》の精霊に、後の1人は白いコートを着た男だ。

「誰だ、俺の邪魔をする奴は!?」

「それはこちらの台詞だ。俺の目が届く中でぬけぬけと破壊行動をするとは、何様のつもりだ?」

やけに態度でかいな。誰だあいつ?

「あいつは…海馬瀬人!?」

「え?あいつって海馬なのか?」

「お前、顔を知らないのか!?アカデミアの教科書に載っていただろ!?」

将人が言った情報を頼りに記憶を探る。教科書…確か、歴史だか社会だかの奴にそんな写真があったような…。

「あ～…そういや、あんな顔だったな…」

「アカデミアのテストでも出てただろうが…。私でも覚えてるぞ?」

「あんなに有名なのに…」

「紅刃って社会にあまり関心ないからね…」

「悪かったな…」

勇香と加奈実がジト目で俺を見てきて、月沙は苦笑いしながら痛いところを突いてくる。仕方ねえだろ、新聞とかあまり見ないタイプなんだから…。

「海馬瀬人か…!」

「オカルトなど興味はないが、この町を脅かすというのなら話は別だ!魔法カード《融合》!3体のブルーアイズを融合する!」

《青眼の白龍(ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン)》
通常モンスター
星8／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２５００
高い攻撃力を誇る伝説のドラゴン。

どんな相手でも粉砕する、その破壊力は計り知れない。

「現れよ！《青眼の究極龍》！」

３体の白いドラゴン…《青眼の白龍》融合し、三つ首のブルーアイズへと姿を変えた。あれがブルーアイズの融合体…実際に見るのは初めてだ。

《青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメットドラゴン）》
融合モンスター
星１２／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ４５００／ＤＥＦ３８００
「青眼の白龍」＋「青眼の白龍」＋「青眼の白龍」

「装備魔法《巨大化》と《レインボー・ヴェール》を発動！ブルーアイズの攻撃力を2倍にし、戦闘時のみ相手の効果を無効にする！」

《巨大化》
装備魔法
自分のライフポイントが相手より下の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。
自分のライフポイントが相手より上の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を半分にした数値になる。

《レインボー・ヴェール》
装備魔法
装備モンスターが相手モンスターと戦闘を行う場合、バトルフェイズの間だけその相手モンスターの効果は無効化される。

「はい！？」

「ちょっ！？」

ディヴァインとルーナがいち早く驚く中、《巨大化》の効果でさらに一回り大きくなり、《レインボー・ヴェール》の効果で体が虹色になった。ちょっと待て、ライフはいつ払ったんだ？

「ブルーアイズよ、愚かな邪神共を消し去れ！アルティメット・レインボー・バーストォォォ！！」

「「「ギャオォォォォォォ！！！」」」

ゴォォォォォォォォ！！

《青眼の究極龍》が３つの口から虹色の極太光線を発射する。ギュラからサイコディスクを借りてるみたいで、実体化したそれは１発ずつ狂いなく三邪神に直撃した。効果を無効にされた三邪神は大ダメージを受け、それでも攻撃は止まない。

「ワハハハハハ！塵と化して消え去るがいい！強靭！無敵！最強ぉ！！粉砕！玉砕！大喝采！！ワハハハハハ、アーッハハハハハハハハ！」

物すっげえノリいいなオイ。攻撃しまくる《青眼の究極龍》と高笑いする海馬。これで様になってるから不思議だ。

「は、ははは…連れてきて正解だったぜ…」

「何なのこのノリ…？」

『これまた、大した威力じゃのう』

乾いた笑いを見せるギュラに疲れたような顔をするルーナ、そしてブルーアイズの攻撃力に感心する《インヴェルズ・ガザス》。さすがにこの展開は予想外だったみたいだ。つーか、見方によっちゃ海馬が悪者に見えなくもねえんだけど？

やがて攻撃が止むと、そこにいたのは体の一部が消し飛んでいる三邪神だった。最も、1番位の高いアバターはすぐに再生したけどな。

「貴様ぁ…！」

「しぶといな。だが、邪神と言えど所詮この程度…大人しく降参するがいい」

「確かに、あんなに強いモンスターがいるなら、いくら邪神でも勝ち目は薄いですね…」

「これくらいで引き下がるとは思えないけど…」

海馬が降参を促す中、スイレンと月沙の会話が耳に入る。俺としてはさっさと折れてほしいんだけど…。

「…この程度だと？」

「？」

「これしきで邪神に勝ったと思うな！凡愚風情がぁぁぁぁ！！」

尾形が激昂する。すると、三邪神がそれぞれ黒い霧へと姿を変えていく。

「何だ？」

「邪神の体が…崩れていく…」

「おいおい、次はどんなびっくりショーをしでかす気だ？」

ゴーズ、ディヴァイン、ヒジュラがそう呟くと、霧となった三邪神は尾形に向けて移動していった。

「邪神よ！俺にもっと力を！」

両手を上げて吼える尾形を、黒い霧が包み込む。

「一体、何を…」

カイエンが声を出した直後、球状になっていた霧が縮まっていった。いや、尾形に吸収されたって言った方が正しいな。

「ハァァァァァ…」

再び姿を現した尾形は…異様だった。肌が真っ黒で、邪悪な気配をガンガン感じる。

「な…何、あれ…？」

「まさか…三邪神を取り込んだってのか…？」

加奈実が震える声で疑問を口にし、勇香がその推測を提示する。
確かに、そうとしか言えないな…。

「ガァァァァァァ！！」

ゴゥッ！

いきなり大声を上げたかと思うと、全身から闇色の衝撃波を出してきた。

「「「ぐぁっ！？」」」

「「「きゃあっ！？」」」

「「がぁっ！？」」

「「ぐぅっ！？」」

「ブルッ！？」

「ギャウッ！？」

「「…っ！」」

「ごあっ！？」

「ぬぅぅっ！？」

「ぐわっ！」

「「「ゴギャアァァァ…！？」」」

「危ない！がぁぁっ！」

「きゃっ！？」

俺達はほとんど何もできずに攻撃を受けて吹っ飛ばされた。ディヴァインは咄嗟にルーナを抱き締めて庇ったみたいだ。

合わせて周りの建物も瓦礫と化す。攻撃が止むと、尾形を中心にクレーターが出来上がっていた。

ＳＩＤＥ／ルーナ

「ククク…素晴らしい！これが邪神と融合した者の力！」

「ぐ…みんな無事か？」

「何とか…」

「問題ない…」

紅刃が剣を杖代わりにしつつ無事を確認すると、月沙と将人がそうだと返事をした。一応全員大丈夫みたい。ブルーアイズも今の攻撃で消滅してしまった。

でも、私の意識はもっと別にあった。

「先生!?何で…!?」

私を庇ったディヴァイン先生だ。ダメージも少し重い事が表情から見て取れる。

「ぐ…生徒を護らない教師がどこにいる?そういう事だ…」

私から離れて、よろめきながら片膝をつく先生。そんな事で私を…。

ナージャはスケボー状態で飛ばしすぎたせいで疲れてるからカードに戻ってる。でも、それでよかったって思うわ。

邪神を取り込むなんて…尾形って奴は一体何考えてるのよ…?

「今なら負ける気がしない!…だが、いささか人数が多くて面倒だ」

「そうかよ…だったら、畳み掛けるまでだ!」

紅刃が真っ先に尾形に向かって飛び出す。それに続くように将人と月沙、シュルクが、背後からはサイラと同じ大剣を取り出した千景が駆け出した。

「少し一度に相手をする人数を減らしておこう」

ブワァッ!

「「「「！？」」」」

尾形が何か呟いた途端、尾形を中心に黒いドームみたいな闇が広がった。それが千景を弾き飛ばした。

「ぐっ！？」

「千景！？」

「紅刃！？将人！？」

「月沙ちゃん！？」

ギュラの他にもリーシェ、加奈実の叫び声が響くと、ドーム状の闇は私達まで飲み込む事なく拡大をやめた。

ＳＩＤＥ／璃音

「今のは…？」

「事態は悪い方向に進んでいると考えるべきですね。急ぎましょう」

建物が倒壊していくのを見て、私と弥一は走るペースをさらに上げた。

全く…マンホールを使って地下水道を通らなかったら、今頃はまだあの黒い壁の中だったわね。

その後にシュルクから弥一へ尾形と邪神について連絡が来た。何とも傍迷惑な話ね。

「…！あれは…」

瓦礫の山の向こうに、私達を閉じ込めていたのと同じドームが見える。

「フィレス、私達を運んで」

「ガウッ！」

カードから出て実体化したフィレスに乗って、私達は瓦礫の向こうに飛んだ。

瓦礫の山に囲まれた道路の中央に巨大なドームがある。その前に勇香とスイレン達がいた。

「みんな、無事！？」

「璃音、フィレス！？」

フィレスが地面に着くと同時に飛び降りて、メンバーを確認する。勇香、スイレン、ロディス、リーシェ、ゴーズ、カイエン、ヒジュラ、シュルク、《魔轟神獣ユニコール》、加奈実、《ナチュル・ビースト》…え？

「加奈実!?何でここに…!?」

珍しく大声を出してしまった。なぜか加奈実がいた。加奈実は私達の時代の人間。なぜ彼女がここにいるの?

「璃音ちゃん!?あ、えっと、その…」

「今はこの状況の確認と対処が先決です。何が起こったのですか?」

弥一が口ごもる加奈実の言葉を遮ってきた。…気になるけど、正論ね。後で聞き出しましょう。

「尾形が邪神と融合した」

「何と…!?」

「融合?」

「取り込んだと言った方が正しいな。何とか追い詰めたのだが…尾形は邪神を取り込みとてつもない力を手に入れてしまった」

シュルクとロディスの返答はどうにも現実離れしているものだった。邪神を取り込んだ?一体何でそんな事に…?

「みんな!」

聞き慣れた声がして振り向くと、俊也を筆頭にウィン、ガルド、秋斗、ルリア、ルーナ、ディヴァイン、後千景に《D・D・アサイラント》、さらにいつの間にか集まったニュートラルのメンバーであろう人達がやってきた。

「ギュラ君！芽依ちゃんに早苗ちゃんも！」

「璃音、怪我はない？」

「大丈夫。ついさっき来たばかりだから」

俊也が真っ先に私の心配をしてきた。私以外にも他の人も気にするべきだと思うけど…何となく、ちょっぴり嬉しかったりする。

「私達もさっき合流しました！」

「状況はギュラから聞いたわ。面倒な事してくれたわね、あのクズ男…！」

「一応、そっちも無事のようだな」

加奈実に芽依、早苗と呼ばれた女の子達の話の後に、秋斗が全員の無事を確認した。

「無事ではない！尾形が創り出したこのドームの中に紅刃や将人達が飲み込まれている！」

「何？」

リーシェの証言で、私達を閉じ込めた壁が尾形による物だと判明した。でも、この中に紅刃と将人が…？

「姫様もあの中にいるんです！」

「月沙も？」

スイレンの話を思わず聞き返す。あの中にいるのは紅刃と将人、そしてよりにもよって月沙まで…。

「ちっ！民間人を危険に晒した上に町を破壊するとは…！」

「あなたは…海馬瀬人！？」

よく見ると、海馬コーポレーションの社長である海馬瀬人がドームを睨んでいた。直接会うのは初めてだけど、教科書で顔写真を見た覚えはある。

「なぜここに！？」

「町がこの有り様だ。俺が黙っているわけがないだろう？」

「海馬にサイコディスクを貸したおかげで大分追い詰めたと思ったんだがな…。邪神も甘くねえってわけか」

赤茶の髪の男がぼやくのを聞いた後、私はドームを見た。

生半可な攻撃は通じないけど、この人数なら突破できるかもしれない。一刻も早く助け出さないと…！

ＳＩＤＥ／月沙

「う…」

いきなり尾形が広げた闇に飲み込まれて怯んだ私は、何とか倒れずに踏みとどまって思わず瞑った目を開けた。

回りは黒と紫が混じり合ったような奇妙な色合いの闇で囲まれていて、天井すら閉ざされて日の光が入ってこない。でも、周りを見渡せるくらいには明るい。

「これは…」

「俺達を閉じ込めたのと同じ仕掛けだ…！」

同じように飲み込まれていた紅刃と将人は、これが何かは知ってるみたい。私もデュエル前に尾形が見せてきたからすぐに闇の結界だとわかった。

「三邪神と融合した俺が張った結界だ。力ずくで破る事はできんぞ」

結界の中央には肌が真っ黒に染まった尾形がいた。体のあちこちから黒い靄（もや）が出ている。

「どうやら、お前を倒さない限りは脱出できないようだな」

将人が大鎌を構え直し、私と紅刃もそれに続いて体勢を整えた。

「ククク…そうだ、それでいい。それでこそなぶり殺し甲斐がある」

尾形も、右手から黒い靄を出して剣の形に変えた。あれを武器に

するみたいだ。

「貴様に殺されるつもりはない！」

直後、将人が率先して正面から斬りかかった。

尾形はそれを右手の剣で軽々と防ぐ。その後ろから一瞬で背後に回った紅刃が剣を振るう。

バチィッ！

「！？」

でも、尾形は黒い靄を纏わせた左手を突き出して紅刃の剣を受け止めた。

「（こいつ、ほとんど素手で…！？）」

「ハァッ！」

ゴアッ！

「ぐあっ！？」

「ぐぅっ！？」

その体勢のまま尾形が全身から闇の衝撃波を出した。紅刃と将人は防ぐ間もなく吹き飛ばされる。

その隙を突いて、私は銃型のデュエルディスクからレーザーを撃

ち出した。

「むぅん！」

でも、尾形が自由になった剣で受け止め、少し拮抗した後に斬り払われた。

すかさず紅刃が飛び込み剣を横薙ぎに振るい、尾形はそれも防いだ。それだけで終わらずに連続で剣を振るい続ける。

「見える！貴様の動きが見えるぞ！いくら剣に長けていようとも、俺には決して敵わない！」

「結果を出すにはまだ早えだろ！」

紅刃と尾形が斬り結んでいる内に、今度は将人が尾形の背後に迫る。そして、襲いかかる鎌を左手に纏った黒い靄で受け止めた。

「何度やっても同じ事…」

「これならどう？」

右手の剣で紅刃の剣を、左手の靄で将人の鎌を防いで両手が塞がっている尾形の腹に、私は両手で構えたディスクの銃口を押し当てた。つまり、ゼロ距離。

「な…！？」

ギュドォ！！

躊躇う事なく引き金を引き、人1人分飲み込むほどの水色のレーザーを放った。レーザーは尾形を飲み込んで壁際まで押しやり、結界にぶつかった途端に爆発を起こした。

「やったか？」

「だといいんだけどな…」

「結界が消える気配はないし、まだ終わりじゃないよ」

私達は油断する事なく尾形を包み込んでいる爆煙を睨んだ。邪神と融合したくらいだから、これくらいでやられるとは思えない。でも私達は全員覚醒してるし、少しでもダメージは入ったはず…。

ズアァァァァァ！

「ぐっ！？」

「がぁっ！？」

「きゃっ！？」

煙から無数の触手が飛び出してきた。1本1本が刃物のように鋭く、私達は防ぎ切れずにいくつもの切り傷を負う。

「その程度、今の俺には通用しない」

晴れてきた煙からほとんど無傷の尾形が出てきた。ゼロ距離で撃っても効かないなんて…。

「これでも食らってろ！」

紅刃が片手で剣を振り下ろすと、刀身の電撃が地面を這うように放たれた。

「無駄な事を…」

尾形はそれすらも剣の一振りで防ぐ。でも、そこに隙がある。

防いで剣を払った瞬間、将人が懐に潜り込んだ。

「！？」

ザン！

袈裟懸けに刃が振り下ろされ、尾形は大鎌に斬られた。斬り裂く音も聞き取れた。

「（手応えありだ！）」

「それで攻撃したつもりか？」

「っ！？」

何事もなかったようにぴんぴんしている尾形が剣を横に振るうのに対して、将人は咄嗟に後ろに跳んで回避した。

「ぐ…！」

「将人！？」

「傷が…！？」

かわし切れなかったみたいで、将人のお腹には横向きに大きな切り傷ができていた。血が流れ出る傷を空いてる左手で押さえている。

「気にするな…。くそ、確かに斬ったはずだ…！」

「1回斬ったくらいで倒せるとでも思ったか？」

一方の尾形は切り傷がみるみる内に塞がっていく。殺すつもりで撃っても斬っても効かないなら、どうすればいいの…？

「単体じゃ、俺達の攻撃は通用しないって事か？」

「物解りがいいじゃないか」

「だったら…」

紅刃は一旦言葉を切り、刀身に膨大な雷を込めた。

「同時に攻撃すればいいだけだ」

「そういう事か…」

「よし…！」

将人は鎌を振り上げ、私もディスクに力を込めた。１人で駄目なら、２人以上で攻撃するだけ…！

「攻撃が当たればなぁ！」

尾形が紅刃に向かって斬りかかってくる。スピードはかなり速い。黒い剣が振り下ろされる。

でも、そこに紅刃は『もういない』。

「む…？」

いや、消えたわけじゃない。一瞬で尾形の真上に跳んでいた。錐揉み回転の要領で、両手で握った剣を右に振り抜き電撃を放つ寸前だ。

尾形の上に紅刃、左に将人、右に私。丁度３方向から挟み込む形だ。

ドンッ！！！

黄色の電撃、紫の衝撃波、水色の光線。最大威力の攻撃が３つ同時にぶつかった。

「きゃっ！」

「ぐあっ！」

「がっ！」

超至近距離で繰り出したから、私達も無事じゃ済まない。攻撃の反動で3人まとめて別方向に吹っ飛んだ。紅刃は何とか着地したけど、紅刃ほど運動慣れしていない私と1番怪我が酷い将人は上手く着地できずに地面に転がった。

「う…っ…」

尾形とデュエルした時のダメージも合わさって、どことなく体が重く感じる。これ以上はちょっとまずいかも…。デュエル前から下ろしたままの髪を払って、私はそんな体を無理に動かして片膝をつき、ふらりと立ち上がった。

「ガァァァァ！」

「！？」

そこで、煙の中から尾形が飛び出して私に猛スピードで向かってきた。突然の事に、紅刃と将人も動けない。

ザシュッ

「ぐぅっ…！」

突き出してきた黒い剣に何とか反応して、それでもかわすのは無理だと悟った私は体を右にずらした。案の定、かわし切れずに左肩

を貫かれる。

ズリュ…

「あぐっ…」

尾形は左肩を貫いた剣を捩りながら抜き取った。表情が苦痛に歪む。正直、物凄く痛い。

「そうだ！その顔だ！もっと見せろ！」

傷を押さえる間もなく、尾形は嬉々として剣を振り下ろした。

ギィン！

「「！？」」

でも、誰かが割って入って剣でそれを受け止めた。紅刃だ。

「てめえ…！」

「ほぉ、その傷で邪魔を…。…！」

何かを感じ取ったのか、尾形は右に跳んだ。直後、背後に迫っていた将人が振り下ろした鎌が空を切った。

「ちっ！」

ガキィッ！

紅刃と将人は距離を詰めて、同時に尾形に斬りかかった。尾形は剣1本で両方防いだ。そのまま鍔ぜり合いになる。

「何でそこまで復讐にこだわるんだよ!?怪我が治ったなら、夢でも何でもやり直せるじゃねえか!」

「黙れぇぇぇぇ!!」

ゴゥッ!

「ぐあぁっ!」

「がぁっ!」

「うあっ…!」

さっきよりも強い衝撃波で紅刃と将人が弾き返され、さらに私まで吹っ飛ばされた。2人は何とか着地したけど、私は地面に叩きつけられた。

「貴様らにわかるか!?人生の全てを懸けた夢を奪われた絶望が!それを奪った者がどれほど憎いか!人を乗せて空を飛び回る夢を、その女は根こそぎ奪ったのだ!」

「月沙はまだしも、それが無関係の人々を巻き込んでいい理由にはならないだろ!」

「理由ならあるとも!俺は月沙が憎い!俺の夢を奪った奴に関わる全てが憎い!そんな奴を生かしている世界そのものが憎い!」

将人の説得も全く聞かずに、尾形は剣を如意棒のように伸ばして攻撃してきた。攻撃の対象は、やっぱり私。

「くっ！」

「きゃっ！？」

左肩を押さえて立ち上がりかけた状態避けられない私を、紅刃が空いている左腕で抱いて地面に滑り込んだ。地面につく前に、ザシュッと嫌な音が耳に入る。

「ぐ…！」

紅刃は私に背を向ける形で片膝をついた。背中には、今の攻撃でついた大きな傷がある。

「避け切れるとでも思ったか？」

「始めから避け切れるなんて思ってねえよ…！」

紅刃…まさか、私を庇って…？

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第７３話　無駄にハイテンションだと周りに引かれる事もある（後書き）

☆今回のキーカード☆

遊星「すまない、待たせたな。『今回のキーカード』の時間だ。代役は俺、不動遊星と…」

ゾーン「ゾーンが勤めます。まさかわたしが最後の代役に選ばれるとは思いませんでしたよ」

遊星「代役にしたいキャラの投票結果は以下の通りだ」

１位…不動遊星（７票）

２位…ゾーン（５票）

３位…天城カイト、アポリア、ブルーノ（４票）

４位…海馬瀬人、十六夜アキ、三沢大地、アテム、真川紅刃（３票）

５位…インセクター羽蛾、《Ｎ・アクア・ドルフィン》、武藤遊戯、神代凌牙、波星月沙（２票）

６位…《エンシェント・フェアリー・ドラゴン》、ディヴァイン、パラドックス、早乙女レイ、ロットン（１票）

遊星「というわけで、投票数１位の俺と２位のゾーンが代役に選ばれた」

ゾーン「５Ｄ'ｓの主人公であるあなたとラスボスであるわたしが共にカードの解説とは…世の中、わからないものですね」

遊星「だが、やるからには最善を尽くす。そうだろう？」

ゾーン「フフフ…あなたならそう言うと思いました。その前に、今回の話を少し振り返ってみましょう」

遊星「ああ。前半では、無事に石板がルーナの手に渡ったようだな」

ゾーン「シンクロモンスターはともかく、もう１枚は枠すらないカード…。波星月沙のように、アクセルシンクロなどとはまた違う進化の形なのでしょうね」

遊星「正体を知る事ができるのはまだ先になりそうだな。邪神の方は海馬瀬人の助力で優位に立ったように見えたが…」

ゾーン「邪神を全て取り込んだ尾形によってリアルファイトに突入、しかも次回に持ち越してしまいましたね。カードゲームの小説なので、長時間の戦闘は控えていただきたいのですが…」

遊星「（そこそこ短時間とはいえ前科があるから、あまり強くは言えないな…）流れでそうなってしまった以上、紅刃達が無事に勝利する事を祈るしかない」

ゾーン「そうですね。それでは、カード考察に入りましょう。今回紹介するカードは、海馬瀬人が使用する有名な融合モンスター《青眼の究極竜》です」

《青眼の究極竜》（ブルーアイズ・アルティメットドラゴン）
融合モンスター
星１２／光属性／ドラゴン族／ＡＴＫ４５００／ＤＥＦ３８００
「青眼の白龍」＋「青眼の白龍」＋「青眼の白龍」

遊星「《青眼の白龍》じゃないのか？」

ゾーン「今回最大の見せ場を獲得したのはこのカードだからです。《青眼の白龍》３体を融合する事で融合召喚できます」

遊星「攻撃力は４５００。効果を持たない融合モンスターの中では最大の攻撃力を持つ」

ゾーン「フィールドに出す方法としては、《未来融合－フューチャー・フュージョン》で《青眼の白龍》を3体まとめて墓地に送り、《龍の鏡》で融合召喚すると楽ですね。ただ、《青眼の白龍》を１枚でも引いてしまうとこの方法が使用できなくなります」

遊星「《カオス・ソルジャー》を利用した《高等儀式術》に、《伝説の白石》や《召喚師のスキル》《古のルール》…3体揃える方法は割りと多い。特に、《カオス・ソルジャー》なら《究極竜騎士》を融合召喚する事もできる」

ゾーン「融合素材の有無に関係なく、【サイバー・ダーク】にも１枚は入れておきたいカードですね。《フュージョン・ガード》で墓地に送る事ができれば、《鎧黒竜－サイバー・ダーク・ドラゴン》の大幅な強化に繋がります」

遊星「戦闘面で言えば、《融合解除》で3体の《青眼の白龍》に戻す事で、破壊効果の回避や連続攻撃が可能だ。光属性で《オネスト

≫に対応している点も大きい。また、強力な効果を持つ≪青眼の光龍≫を特殊召喚する時にこのカードのリリースが必要だ」

ゾーン「強大な攻撃力を持ち、更なる進化の可能性を秘めたこのカード、画面の前のあなたも1度使ってみてはいかがですか？」

遊星「よし、今回はここまでだ」

ゾーン「長編中の最後の代役としてあなたとカード考察ができて、なかなか面白かったですよ」

遊星「俺もだ。またこういう機会があればやってみたいものだな」

ゾーン「さて、いよいよ次回で修学旅行編終了です。果たして紅刃達は、邪神を取り込んだ尾形を倒す事ができるのでしょうか？」

遊星「紅刃達の絆はあの程度で切れるほど脆くはない。必ずその先の希望を掴み取れると、俺は信じている」

ゾーン「感想はいつでも受け付けています。何か思う事があれば、是非書き込んでください」

遊星「次回もよろしく頼む。みんなの手で、これからの未来を切り開くんだ！」

ーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

はい、投票の結果、代役は遊星とゾーンになりました。遊星はと

もかく、ゾーンが2位に入ったのは意外でした。おまけに同じ作品の主人公とラスボスが選出されるとは思ってなかったので、個人的に意外な結果となりました。投票してくださった方々、ありがとうございました！

海馬は最初から出すつもりでした。違和感なく書けているか不安ですけど…。《青眼の究極竜》のあれはほぼ完全に個人的なイメージです。

戦闘は次回も続きます。書いていく内にデュエルに持ち込める状況じゃなくなってきたので…。デュエルを書きたくなってきた…。

いよいよ次回で長編終了ですね。どんな結末かは読んでみてのお楽しみです。

では、また次回！

第７４話　命は尊いもの（前書き）

☆精霊の呟き☆

リーシェ『ようやく今回で長編終了だな』

ヒジュラ『ったく…半年以上もかかるたぁ、この小説も随分ちんたら進むようになっちまったな』

スイレン『そんな事言わないでください。受験シーズンなのに文句なんか言ってられませんよ』

ゴーズ『まあ、一応作者は受験を終わらせたからいいだろ。結果はまだ届いてないが…』

ヒジュラ『とっとと合格決めて、ガンガン更新してもらいたいもんだぜ。結局2話連続でデュエルしてねえんだし』

リーシェ『確かに、カードゲームの小説としては少しまずいが…』

スイレン『はい、この話はここまで！ここで読者の皆様にお知らせがあります！』

ゴーズ『お知らせ？』

スイレン『以前このコーナーで使用する「締めの言葉」を読者の皆様から募集しましたが、もう1度募集したいと思います！』

リーシェ『おお、そうだったな！』

ゴーズ『何だ、またやるのか？』

ヒジュラ『とうとう前に募集した奴が底をつきやがったな…？』

スイレン『要項は以前と同じです！遊戯王シリーズはもちろん、別の漫画やアニメの名言でも何でもＯＫ！ただし、下ネタなどは厳禁なので注意してください！』

リーシェ『投稿できるのは１人１つまでだ。小説のキャラを使っての複数提案はできないから注意しろ。期限は１１月６日（２０１１年１０月１６日現在）までとする。使ってほしい言葉と言ってほしい精霊を教えてくれ』

スイレン『駄目ですよ！こういう時は敬語を使わないと！』

リーシェ『し、仕方ないだろう！敬語は慣れていないのだ！』

ヒジュラ『そう固い事言うなって。つーわけだ！画面の前のてめえら、気軽にどしどし投稿してくれよ！』

スイレン『だから言葉遣いが乱暴すぎますって！』

ゴーズ『敬語は世の中を渡る上で必須だからな…。さて、今回の締めの言葉はシルフさんからのリクエストだ。修学旅行編最終回となる第７４話、始まるぞ。

運命の切り札（カード）を掴み取れ！』

リーシェ『お前にはやたらかっこいい台詞ばかりが回されるな。もう少し面白いものがあってもいいと思うが…』

ゴーズ『お前は俺に何を求めているんだ…？』

第７４話　命は尊いもの

ＳＩＤＥ／紅刃

結界の中で、俺と月沙、将人は尾形と対峙している。でも、俺達の方は結構ボロボロだ。

まずいな…。さすがに邪神を3体も取り込んだ奴が相手じゃ厳しいか。ただ、別に視界が霞んでるわけじゃない。ダメージはそこそこでかいけどまだ動ける。

「自爆覚悟の同時攻撃は少しは効いたが、所詮無駄な足掻きだ」

尾形を見ても、目立った外傷は見られない。服が焼け焦げてるけど、本体まではまともにダメージが通ってないみたいだ。

「もっと楽しませてくれ。貴様らをなぶり殺すにはまだ少し物足りない。外の連中を皆殺しにするのはその後だ」

「元々、復讐の対象は…私だけのはず…。他の、人は…関係ないでしょ…」

月沙が少し途切れ気味に言葉を紡ぐ。押さえている左肩の傷からは血がどくどくと流れている。何とかしたい俺と将人には医療の心得がない。早く脱出しねえと…。

「言っただろう?俺は貴様を生かしておくような世界そのものが憎いと!貴様と貴様に関わる事象全てを葬る事が、今の目的だ!」

「そのためなら、邪神と融合する事をもいとわないというのか…？」

「その通り！どうだ、この溢れるほどの圧倒的な力は！？俺の夢を奪った人間を裁くのに相応しいだろう！？」

将人の問いかけにも、さも当たり前かのように返してくる。

……。

「てめえは…事故に遭いかけた月沙を助けた結果、両足が使えなくなって航空士になれなくなったんだよな…？」

「知っていたか。そうだ！だからこそ復讐を誓ったのだ！」

「…だったら、そこから立ち上がったのかよ？」

「何？」

「なくした夢に押し潰されてばかりいないで、少しでも立ち上がろうとしたのかって聞いてんだ…！」

剣を杖代わりにして立ち上がる。少しふらつくけど、まだ行ける。

「さっきから黙って聞いてりゃ…。確かに、てめえのそれには月沙が関わってる。でも、それが殺していい事には繋がらねえだろ…！」

「何を言うかと思えば…。憎い奴を殺して何が悪い？」

「だから復讐して殺すってか？そんなんじゃ、また恨みを買うだけ

だ。何も変わりゃしねえよ」

恨んで殺して恨まれて殺されて。そんな連鎖は駄目だ。あっちゃいけねえんだ。

「てめえは人を運んで空を飛ぶのが夢だって言ったよな？それは人の命を預かる仕事って事だろ？どんなに憎い奴でも、そいつの命を預かって、目的地まで安全に運ぶのが仕事だろ？」

「…！」

「なのに、今のてめえは逆に人を散々殺している。命の重さぐらい学んでたっていいはずなのに、てめえは何やってんだよ？」

「な…！？」

「夢をなくしたとしても、志まで簡単に捨てんじゃねえよ！」

剣の切っ先を真っ直ぐ向けて、俺はただはっきりと叫んだ。

「例え叶わなくなったとしても、忘れちゃいけねえもんがあるはずだろうが！」

「紅刃…」

将人の呟きが耳に入る。将人も尾形に利用された事がある。殺されてはいないけど、仲間を人殺しに利用されたのは許せねえ。

「黙れぇぇぇぇ！！貴様に何が解る！？夢を失った絶望の何が！？」

「わかんねえよ！」

「何！？」

「ただ、てめえみたいに夢を絶たれても、堕ちずに前へ歩いた人を知っている！だから言えるんだ！」

「戯れ言を！いいだろう！その減らず口を閉じるために、貴様から殺してやる！」

尾形はターゲットを俺に絞ったみたいだ。言いたい事を言いたかったのもあるけど、多分これで月沙と将人から注意を逸らせた。特に月沙はお世辞にも戦える状態じゃない。ここは俺が…！

カァァァァァ！

「「「「！？」」」」

柄を握る手に力を込めると、突然剣が黄色に光り出した。

「何をするつもりだ？」

「いや、俺にもわからねえ…」

俺がいきなりの事に戸惑っていると、剣から光の球体が１つ飛び出した。球体は空中に浮かび上がり、どんどん巨大化して龍の形に変わっていく。

「ギャオオォォォォォ！」

光が弾けた後にそこにいたのは、俺がついさっき召喚できるようになった切り札だった。

「何だこのドラゴンは…？」

「《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》！？」

「紅刃？そんなモンスター、いつの間に手に入れたんだ？」

「手に入れたも何も、俺のアクセルシンクロモンスターだ！」

「嘘…！？」

何でアルヴェルグ・エヴォルトが勝手に出てきたんだ？それに、こいつは精霊じゃ…。

――――全く――おちおち寝る事もできぬ――――

「！」

アルヴェルグ・エヴォルトが出てきた事に驚いていると、誰かの男の声が聞こえた。いや、聞こえたっていうよりは、頭の中に直接

響くテレパシーみたいな感じだ。

――――仕方あるまい――少し力を貸してやろう――――

「ギャオオォォォォ！！」

また声が響いたかと思うと、アルヴェルグ・エヴォルトがまた吠えて、今度は全身から光を放った。

「っ！？」

「これは…？」

体の傷が少しずつ癒えていく。あの時と同じだ。冥界で《ライトエンド・ドラゴン》が光った時も同じような事が起こった。

「傷を癒すだけか？その程度、すぐにでも…」

シュウゥゥゥゥ…

尾形の体から黒い瘴気が蒸発するように飛び出して霧散していく。それにつられるように、黒い肌の所々が元の色に戻り、黒い剣も崩れ去っていく。

「な…！？何だこれは！？」

「何、あれ…？」

「まさか、このモンスターの光で力を削がれているのか…？」

全員が驚く中、さらに声が響く。

――――邪神と言えど所詮は闇の塊――光の力を持つわたしには敵わぬ――――

聞いて、ハッとしてアルヴェルグ・エヴォルトを見上げる。この声はこいつのものなのか？

――――斬れ――汝とわたしの力を持って、愚か者を裁くのだ――――

アルヴェルグ・エヴォルト…。

柄と鍔が光を失い、その分刀身が輝きを増す。俺は覚悟を決めて前を見据えた。

「終わりみたいだな、尾形」

「終わりだと!?ふざけるなぁ！」

尾形が手から黒い触手を伸ばして攻撃してくる。俺はそれを剣の軽い一振りで斬り伏せた。触手は今まで苦戦してたのが嘘みたいにあっさり消え去った。

「何!?」

「邪神が月沙を裁くのに相応しいっつったよな?」

一旦言葉を切り、一瞬で間合いを詰める。正面に立った俺は、剣を右手で振り上げた。

「裁かれるのはてめえだ」

ザンッ！！

そのまま、勢いに任せて降り下ろした。

「が…！？」

尾形の肌がさらに元に戻っていく。それと同時に、今まで周りを覆っていた結界も天井から崩れて消えていった。

「結界が消えていくぞ！？」

「あれは…《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》？」

ギュラとシュルクの声が聞こえる。周りをチラリと見ると、俊也達が全員集まっていた。後、ニュートラルの連中はもちろん、見慣れない奴も何人かいる。あいつらもニュートラルか？

「姫様！」

スイレンが真っ先に月沙へ駆け寄ってきた。他のニュートラル以外のみんなもつられて駆け寄ってくる。

「スイレン…！」

「ご無事ですか！？」

「一応。ちょっときついけど…」

「カイエン、月沙の治療を頼む。1番怪我が酷い」

「はい！」

将人の指示でカイエンが月沙に治癒術をかける。スイレンも一応使えるけど、カイエンほどじゃないって聞いた事がある。

「ぐお…おぉぉ…」

尾形は斬られた胸を押さえてふらつきながら後ろに下がった。外傷が出ないように念じてあったから、血は流れていない。ただ、もう戦える状態じゃないだろ。

「紅刃、無事か！？」

「ああ、何とかな」

ロディスとリーシェは俺の所に来た。アルヴェルグ・エヴォルトのおかげで少しは回復したし、大丈夫だ。

「ぐふ…貴様ごときに、この俺が…」

さて、こいつをどうするか…。許せない事に変わりはねえけど、殺したくはねえ。それじゃ、こいつと同じだ。まずは何とかして邪神を引き剥がして…。

ビキッ

「？」

耳に嫌な音が飛び込んでくる。音源は、俺の手元。

バキャアッ！

「な…！？」

俺が持っていた剣の刀身が音を立てて砕け散った。それも粉々に。

同時に剣のアビリティも割れるような音を出して解けた。ソリッドビジョンでモンスターが破壊されて砕けるような感じだ。

元に戻ったデュエルディスクは刀身が砕けて無くなっていて、残った部分もボロボロだ。デッキだけは無事みたいだけど、これじゃ使い物にならない。

「デュエルディスクが…！？」

――――その武器では、わたしの力の負荷に耐え切れなかったか――

おいおい、マジかよ！？これ以上長引くのはまずいぞ！？

「ぐ…くく…その妙な力はもう使えないようだな…」

リーシェを始めとしてみんなも驚く中、尾形は苦しげな顔をしながらも笑みを浮かべた。

「あ？状況わかってんのか？確かに将人達はボロボロだし紅刃も戦えそうにねえけどよ、まだてめえが仲間外れにしてた連中がたくさんいるんだぜ？当然、俺もな」

「今回の件については俺達穏健派も容赦はしない。大人しく諦めろ」

「これだけ町を荒らして、ただで済むと思っているのか?然るべき処置は受けてもらうぞ」

ヒジュラが最もな事を言い、シュルクと海馬が尾形を捕まえようと1歩前に出る。他のみんなもいつでも動ける状態だ。

「ぐ…俺は邪神を取り込んだ…。邪神が、この程度で屈するとでも…ぐっ!?」

突然、尾形が頭を抱えて苦しみ出した。その場にいる全員が不思議そうな表情を浮かべる。

「ん?」

「おぉ…が、ぐ…ごふっ…ぐお、ガアァァアァアァァァァァアァァアァァァァ!!」

ズアァァァァァァァァァァ!!

「!?」

突然、尾形の全身から黒い闇が大量に噴き出した。それが尾形を包み込み、ボコボコと泡立ちながら巨大な形を変えていく。

「何、これ…!?」

月沙が小さく呟くと、闇は段々形を整えていった。

下半身はイレイザー、腹はアバター、胸より上はドレッド・ルートになっている巨大なモンスターだ。左手はイレイザーの頭になっている。そして、全身が真っ黒だ。

「ななな、何ですかあれ!?」

「三邪神をまとめて融合したみてえだ…！」

青いツインテールの小さな女の子がテンパり出し、勇香も思わず感想を漏らす。俺とロディス、リーシェは一旦後ろに飛び退いて距離を取った。

「どうやら、1ヵ所に留め続けたために、取り込んだ邪神自体が融合し合って力を増大させているようだな」

「何だと!?」

「なるほどな。尾形を飲み込む事も容易くなったから表に出てきたのか…！」

シュルクの分析に海馬が驚くのと反対に、秋斗は冷静に理解して自分の考えを繋げた。それでも、2人の表情に余裕は見られない。

「ゴァアァアァアァアァアァアァ！！！」

「きゃあっ!?」

「ぐ…！」

邪神が雄叫びを上げると、大地が震えるような感覚を感じた。あまりの強烈さにウィンが悲鳴を上げ、ゴーズが呻き声を漏らす。

「グルル…」

アルヴェルグ・エヴォルトは警戒心を強め、戦闘体勢に入った。戦う気だな。

「璃音、アビリティで剣作れないか？鉄の棒切れでもいい」

「できるけど…あなたも戦う気なのね」

「剣さえあれば俺も戦える。相棒だけに任せられねえよ」

「全員でかかっても勝てるかどうかわからねえぞ？」

「それでもやるしかないでしょうが！野放しにする方が危険よ！」

ギュラとルーナの会話を耳に入れつつ、俺は邪神を睨みつけた。こいつをほっといたらこの町はもちろん、十代達まで危険だ。護るためにも、ここで引くわけには…！

「ゴォオォォォ！？」

「？」

ん？邪神の様子がおかしい。何かに苦しんでいるように見える。

「ゴアァアァァァァァ！！？」

邪神が真っ白な光になり、後ろの何かに吸い込まれていく。全員が何事かと目を見開く。

やがて、邪神は完全に姿を消した。そして、邪神の影になって見えなかった、邪神を吸い込んだそれの正体がはっきり見えた。

そこには逆立った金髪の男がいた。服装は茶色のズボンに袖無しの黒いシャツ、その上に袖無しでチャックと襟付きの灰色の上着を着ている。チャックは腹の辺りまで開けてある。

その手には1枚のカードがあった。色から見れば魔法カードだ。イラストには無数の白い線が張り巡らされている。

「ヒュ～！あんなデカブツを吸い込めるなんて、大した性能だな！」

「…誰だお前？」

当然、俺はいきなりの乱入者に名前を尋ねた。少なくとも、俺が知ってる奴じゃない。

「ヘリド！？なぜお前がここにいる！？」

「俺はただ、邪神を暴れさせてる奴を連れ戻しに来ただけだぜ？」

シュルクはあいつの事を知ってるみたいだ。『連れ戻しに』って事は、あいつはニュートラルの一員か？

「しっかし、連れねえなぁ！こんな面白い祭りをやってんなら、誘ってくれたってよかったのによぉ！」

「この一件に参加を許したは穏健派のみ。過激派は関係ない」

過激派？派閥がある事は聞いたけど、あいつがその過激派なのか？

「固いねぇ！どのみち目的は同じだろ？」

「やり方ってもんがあるでしょうが。あんた達が関わったらろくな事にならない。あんた達のやり方は気に入らないのよ」

茶髪の女子は敵意を剥き出しにしている。多分こいつも穏健派なんだろうけど、やっぱ仲悪いんだな。

「まあ、てめえらがどう思おうが関係ねえがな。邪神（こいつ）は回収させてもらうぜ。いろいろ使えそうだからな」

「…尾形はどうするつもりだ？」

俺は気になってヘリドに聞いてみた。何をしてくるかはわからないから警戒は解かない。

「知るかよ。邪神に侵食されて野垂れ死ぬなり好きにすりゃあいい」

「同じ過激派なら、仲間も同然だろ？何とも思わねえのかよ？」

「関係ないね。死ぬなら死ぬで所詮その程度の奴だったって事だろ？尾形がどんな奴だろうが、こうなっちまったら興味なんてねえよ！」

「……」

俺にとっては、尾形はどうでもいい。むしろぶった斬りたいくらいだ。転生前の月沙を殺し、月沙の家族や町の人達を殺し、将人を利用し、月沙を傷つけ、今も殺して復讐する事しか考えてねえ。許せるわけがねえんだ。

それでも、納得いかねえ。

「それとも何か？尾形に愛想でもあんのか？あんな殺人鬼、死んだ方がマシじゃねえのって思うのが普通だろ？」

「…別に、尾形を許したわけじゃねえ」

「あ？」

「今でも何十回でもぶん殴りてえ。許すつもりなんてさらさらねえ。でも、納得いかねえんだ」

みんな黙っている。誰も口を挟もうとしない。

「どんな奴でも、殺そうとは思えねえ。見捨てて殺したり、憎いから殺したりなんて事は、俺にはできねえ。それだけだ」

「ヒャハハ！とんだ甘ちゃんだなぁ！そんな考えでよく今まで戦ってこれたもんだぜ！」

「どう言われようが、この考えは捨てねえよ」

誰に何と言われようが、この考えは変えるつもりはねえ。だからこそ、それを実現できるように自分を鍛えている。今までも、これからも。

「まあ、いいか。そういう甘ったれこそ潰し甲斐があるってもんよ」

ヘリドは懐から何かの球を取り出しピンを抜いた。…って、まさか手榴弾か！？

「今日は引いてやるが、いずれてめえは俺が潰す！せいぜい首を洗って待ってな！」

そう言って、ヘリドは手榴弾を軽く放り投げた。

ドゴォォォォン！！

「っ！」

爆風を体に受けて、倒れないように踏ん張る。煙が晴れた跡には、ヘリドはもういなかった。

「帰ったみたいですね」

「ちっ、出しゃばりやがって…」

紫の髪の男…弥一っつったっけ？そいつとギュラが呟くのが聞こえた。表情から見て、あまりいい印象はないみたいだ。

「少なくとも、邪神を封じたのはヘリドだ。あいつには少なからず感謝しなくてはならないな」

「そりゃそうだけどよ、後々邪神で何かやらかしてもおかしくねえだろ」

「その時はその時だ」

シュルクの言ってる事は合ってるけど、ギュラはどうも納得いかないらしい。

「ギャオォォォォォ！」

アルヴェルグ・エヴォルトは邪神がいなくなったからか、姿を消した。あいつは、もしかして精霊なのか…？

「アルヴェルグ・エヴォルト…」

「ところで、石板はどうした？」

「取られたよ。先にカードを取り出されて終わりだ」

「そうか…」

「いつの間に回収してたの？」

「ええ。ほら、この通り。使い方はまださっぱりだけど」

俊也が聞くと、ルーナはカードを2枚取り出して見せてくれた。1枚は枠だけのシンクロモンスターのカードで、もう1枚は枠すらない完全に真っ白なカードだ。

「…取られたなら、もうここに用はない。撤収するぞ」

「いいのか？てっきりカードを奪いに来ると思ってたんだが…」

「俺達に必要なのは石板だ。カードじゃない」

あっさり撤収しようとするシュルクにゴーズが問い掛けると、当たり前のように返事が帰ってきた。

ニュートラル側の精霊は次々とカードに戻っていった。ギュラ達は俺達から距離を取るようにある程度離れていく。当然、その中には加奈美もいる。

「加奈美！」

月沙が呼び止めた。まだ治り切ってない左肩を押さえて立っている。加奈美は一旦立ち止まって振り返った。

「本当に、ニュートラルに入ったんだね…」

「…うん。そうだよ」

「何で？どうして入ったの？」

「……」

泣きそうな顔で問い詰める月沙をまともに見れずに、加奈美は辛い表情を浮かべて顔を逸らした。

「…ごめんね。言えないよ」

「どうして何も教えて…！」

叫びかけた月沙の無事な右肩に、手が1つポンと置かれる。将人だ。

「行かせてやれ。後で話す」

「将人…」

「銘丈君…ありがとう。本当に…」

加奈美は、月沙を引き止める将人に礼を言った。ただ、俺は引き止めた事だけに礼を言ったわけじゃないと何となく思った。

「！」

ふと視線を感じてそっちを見ると、赤い髪で帽子を被ってる奴が俺を見ていた。確か、名前は千景だったはずだ。

ズキッ…

「っ！」

目が合った途端急に頭痛がして、思わず左手で頭を押さえた。

頭痛はすぐに収まった。血を流しすぎたか…？

「待て。どうやら貴様らはあの男の知り合いのようだな。このデュエルディスクを返す代わりに、詳しく話を聞かせてもらうぞ」

海馬が撤収しようとするシュルク達を呼び止めた。まあ、こんなに町を荒らされたんじゃあな…。

「生憎、話す事は何もねえよ。それに…」

カチッ　ボンッ！

「ぬっ！？」

ギュラが何かの鉄の棒を取り出してスイッチを押すと、海馬が付けていたサイコディスクの一部が軽い爆発を起こした。砕けた部品が辺りに散らばる。

「万が一盗まれた時のために自爆機能を付けといたんだよ！量産されちゃ、堪ったもんじゃねえからな！」

「貴様…！」

「弥一」

「はい」

シュルクに呼ばれた弥一は、両手から霧を出した。辺り一帯が霧に包まれる。

「逃げるつもりか！？」

「シュルク！」

「いずれまた会う事になるだろう。それまでに、さらに強くなっておけ」

俺が叫ぶと、霧の向こうからシュルクの声が飛んできた。その後、霧がひとりでに晴れていった。

シュルク達の姿は消えていた。アジトか何かに帰ったんだろ。

「行ってしまいましたね…」

「結局、はっきりした目的はわからず終いだったな」

「グルル…」

ルリアとロディスがポツリと言葉を溢した。フィレスは少し残念そうに唸ると、一足先にカードに戻っていった。

「フィレス、お疲れ様」

「ちっ！」

海馬は舌打ちしながらデッキを取り外し、壊れたサイコディスクを地面に叩きつけた。璃音はそれを拾って軽く調べ始めて、すぐに目を離した。

「駄目ね。肝心なコンピュータの部分が綺麗に破壊されてるわ」

「仕組みがわかったところで、世の中に出回らせるべきではない。それこそ戦争が起こりかねん。それより、お前達は奴らについて何か知っているのか？」

「さっぱりだ。ただ、破壊活動をたくさんやらかしてるから止めるべきだって事は確かだぜ」

海馬の質問には勇香が答えた。目的さえわかればやれる事ももうちょい見えてくるんだけどな…。

「確かに、ここ最近妙な破壊工作が相次いでいる。警戒はしておこう。…おい、桃色の小娘」

「…それって私の事？」

「他に誰がいる？」

ルーナは不機嫌そうに返事をした。桃色の小娘がそんなに気に入らねえのか？まあ、あまりいい気はしねえだろうけど…。

「石板から出てきたカードはいつ使えるようになる？」

「そんなの私が知りたいくらいよ。その内絵柄が浮かんでくるんじゃない？」

「なら、全容がわかり次第報告しろ。そのカードは俺も気になる。それがそのカードをくれてやる条件だ」

「はぁ！？」

海馬が出した要求を聞いて、ルーナが素っ頓狂な声を上げる。とりあえず、『くれてやる』の意味が気になる。

「『くれてやる』ってどういう事？」

「石板は海馬コーポレーションが偶然発掘して保管していたらしい」

俊也が俺の気持ちを代弁してくれると、ディヴァインが疑問に答えてくれた。『俺が見つけたから俺の物』って奴か…。

「何でわざわざそんな事…」

「小娘、デュエルは好きか？」

「デュエル？そりゃあ、好きだけど…」

「この俺が直々にデュエルをして、そのカードの力を確かめてやる」

「え！？」

まさかの提案に、ルーナはもちろん他のみんなも驚いた。海馬は伝説のデュエリストのはず。そんな奴が宣戦布告？

「ついでにシンクロモンスターとやらについて聞いておこう」

「！？」

「お前達がアカデミアでシンクロモンスターなどという妙なモンスターを使っている事は知っている。つい最近知ったばかりだがな。よもや、偽造ではあるまいな？」

「そんなわけないですよ！シンクロモンスターは未来のむぐっ！？」

「それを話しちゃ駄目！」

「信じてもらえると思っているのか！？」

俊也が思わず反論しようとするのを、ウィンとリーシェが口を塞いで小声で諭した。普通の奴に言っても信じてくれねえだろ…。

「…話が長くなりそうだな。怪我人がいるから病院に案内してやる。治療費は俺が出す。そこで話を聞こう」

…病院はありがたいけど、面倒な事になりそうだな…。

「紅刃、D・ガレージを貸してくれない？」

「いいけど…どうしたんだ？」

夕日が差し込む病室に入ってきた俊也の要求は、俺のD・ガレージだった。

あれから病院で治療を受けた俺と月沙、将人は、アルヴェルグ・エヴォルトのおかげである程度治ったものの、傷の数と具合から見て一応安静にって事で入院する事になった。まあ、前は傷の治りも早まったから、1日もすれば完治するだろ。

病室は俺と将人が同じ部屋で、月沙は別の部屋だけど今はついさっきから俺達の部屋に来たばかりだ。ディヴァインは大きな手当てするほどの怪我はしてなかった。

「いや、あの頑固な社長さんを納得させるのに手間取っててさ…」

『ふざけるな！そんな非ィ科学的な事があって堪るか！』↑海馬

『本当なんだっての！ここで嘘吐いたって何の得にもならねえだろ！』↑勇香

『寝言は寝て言え！絵空事を抜かすとは、この俺をナメているのか！？』↑海馬

『あんたは頭が固すぎんのよ！精霊は普通に納得したでしょうが！』↑ルーナ

『この目で確認したからこそだ！どうしても信じてほしいのなら、物的証拠を上げてみせろ！』↑海馬

「っていう感じで…」

「あはは…海馬さんは非現実的な事をあまり信じないからね」

いきさつを聞いて、月沙が苦笑いをした。いくら怪我人以外の面子総出で説得していても、あの性格じゃ信じさせるのに骨が折れそうだな…。

「それで、璃音が『D・ホイールやモーメントを見せれば納得してくれるでしょ』って…」

「D・ホイールはともかく、モーメントは見せていいのか？未来の永久機関だぞ？」

「こうでもしなきゃ、シンクロモンスターの偽造疑惑で刑務所行きになるかもしれないから仕方ないでしょ？」

「う…さすがにそれはまずいな…」

将人はモーメントを見せる事を渋っていたけど、俊也の意見で考えを改めた。このまま全員逮捕はごめんだしな。ニュートラルどころじゃなくなっちまう。

「ほら」

俺はD・ガレージを取り出して俊也に投げ渡した。俊也はそれを難なくキャッチする。

「ちゃんと返せよ」

「わかってるよ。ありがとう」

俊也は一言礼を言って部屋を出ていった。

「月沙、肩は大丈夫か？」

「ちょっと痛むけど、骨に異常はないからすぐに治るよ」

服の上からはわかりづらいけど、月沙の左肩には包帯が巻かれてある。将人は頭と腹に、俺は背中に巻いている。後は所々に絆創膏や湿布を貼ってるくらいだ。

「そうか。ならいいけど…」

「…それと、ありがとう」

「え？」

「私の事、庇ってくれたでしょ？そっちこそ背中は大丈夫なの？」

あ～…あの時はほとんど反射的に体が動いた結果だったな。その時に受けた背中の傷は、今じゃだいぶ塞がっている。

「これくらいどうって事ねえよ。心配してくれてサンキュな」

「いや、そんな事…。お礼を言うのは私の方だよ」

「そんなに気にすんな。お前が殺されるくらいなら、こんな傷いくらでもくれてやるよ」

「！…う、うん…ありがと…」

月沙は急に顔を赤らめて、今度は少しどもり気味に礼を言ってきた。何か妙な反応だけど、大丈夫か？

「俺も話したい事があるが、いいか？」

「ん？何だ？」

「まだ加奈美の事を話してなかったな」

「「！」」

俺と月沙はハッとして将人を見た。加奈美と戦ったのは将人だ。あいつと何があったんだ？

「どうだった？」

「デュエルで何とか倒した。最後まで目的は教えてくれなかったがな」

目的が聞けなかった事よりも、将人が加奈美を倒したという事実に驚いた。将人は今まで加奈美に勝った試しがない。こいつはそこまで強くなったのか？

「自分の意志でニュートラルに入った事は間違いなさそうだ。俺達に対する甘さを捨てるために、絶交する事を本気で考えていたくらいだ」

「そんな…！？」

月沙が驚いて声を上げる。目は悲しみの色に染まっている。俺だって驚いてるさ。超がつくほどのお人好しな加奈美がそんな事を考えてるなんて…。

「だが、その心配はもうないだろう」

「え？」

「例え敵対していようが、俺達は仲間だ。それを伝えたからな」

将人の表情に曇りはない。少なくとも、悪い方向には進んでない事はわかった。

「あいつは今でも、いつか俺達の所に戻る事を望んでいる。だが、それをせずにニュートラルに入っているという事は…」

「余程そうしなきゃいけない事情があるって事だろ？」

俺は将人の言葉を途中で遮って引き継いだ。加奈美を連れ戻すなら、方法はもう見えている。

「だったら、さっさとニュートラルの件を解決しないとな。全部が終われば、あいつも戻ってくるだろ」

「…うん、そうだね。敵同士になってしまったとしても、絆が切れるわけじゃないんだ」

「そういう事だ。過度な心配をする必要はない」

「うん。ありがとう」

礼を言う月沙は、もう明るい表情に変わっていた。

そうだ。いつか、また４人で笑い合える日が来る。それを迎えられるかは、俺達自身に懸かってるんだ。

「紅刃、1ついいか？」

「ん？」

「尾形と話している時に言っていた、『夢を絶たれても堕ちずに前へ歩いた人』は誰の事だ？」

「あ、それ私も気になってた！」

将人の質問に、月沙が真っ先に反応を示した。…できればあまり聞いてほしくなかったんだけど…。

「あ、ああ…。それが…」

「「？」」

「思い出せねえんだ」

「は…？」

「え？」

「確かにいた。知ってるはずなんだ。なのに、何一つ思い出せねえ」

自分でも、あの言葉を言い放った時に疑問だった。俺の記憶にはそんな奴はいない。でも、確かにいたはずだと頭が訴えている。

「それに、思い出さなきゃいけない気までするんだ」

「…俺の記憶にもないという事は、俺達と出会う以前に会った人だろうな。いたとわかっているなら、いつか思い出せるはずだ」

「焦る事はないよ。ゆっくり思い出していこう」

「…そうだな。悪い」

2人の言う事も最もだと思った俺は、礼を言ってこの話を切り上げた。

…それでも、どうしても気になる。記憶にあって記憶にない人。一体誰なんだ…？

ＳＩＤＥ／シュルク

灰色のケースを持ち、薄暗い廊下を歩く。

1度解散した後、俺はアジト内のある部屋に向かっている。連れ

はカードで休んでいるユニコール以外誰もいない。

やがて、そこそこ大きな扉に辿り着いた。脇にはカードリーダーがある。

ピーッ　シュイーン

カードリーダーにＩＤカードをスキャンすると、扉が縦に割れて左右に開いた。部屋に入ると、扉は勝手に閉まった。

部屋というよりは、巨大な広間だ。天井も異様に高い。壁の色はほとんど黒で、広間の中は当然暗い。

中央には柵に囲まれた巨大な穴が空いていて、底は暗くて見通せない。何より目立つのは、いくつものチューブに繋がれて穴の上に宙吊りにされている虹色の球体だ。運動会で見かける大玉の二回りくらいの大きさで、これがこの部屋における照明となっている。さらに、柵から少し離れた位置には立って操作できる高さの操作パネルのようなコンピューターが設置されている。

「持ってきたぞ」

俺はコンピューターの前に立っている男に話し掛けた。白髪のオールバックで、白衣を着ている５０代の男だ。

「そうか」

俺は男に持っていたケースを手渡した。男は何も躊躇う事なくケースを開けた。

ケースには金属製の棒状の容器が１４本入っている。側面には中身を確認できるように透明になっている部分があり、どれも虹色の光が容器一杯に入っている事がわかる。

「ほぉ…上出来だ。後で『コア』に注入しておこう」

男はケースを閉じて適当な所に置いた。『コア』というのは、そこで虹色に光っている球体の事だ。

この容器は俺達のデュエルディスクに2本ずつ取り付けてあった物だ。ギュラの分は海馬にディスクを貸す前に本人が回収していた。

「『エナジー』もだいぶ溜まってきたが、『起動』させるにはまだ足りん。まだたくさん集める必要がある」

「あらゆる運動で発生する自然的な不可視のエネルギー、だったか。ソリッドビジョンの他に効率のいい方法は見つかったのか？」

「まだだ。電力、火力、風力…どれも大して集まらん。原子力や地震、過激派がやっているような派手な破壊活動がいいところだ」

「そうか…」

知らせるわけにはいかない。万が一、伝承に関わるほどのモンスターのぶつかり合いが1番多くエナジーを収集できるという事が過激派に知られてしまったら、何をしでかすかわからない。こいつが極度の放任主義なのがせめてもの救いだ。自分でやると決めた事以外は、部下任せで手段を一切問わないからな。

「だが、着実に目的に近づいている。起動できる日もそう遠くはな

いだろう。ククク…」

男は不気味に笑いながら虹色の球体を見上げた。

悪いが、お前に付き従うのは『起動させるまで』だ。

起動に成功したら、その時は…。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第７４話　命は尊いもの（後書き）

☆今回のキーカード☆

勇香「修学旅行編、終了だぁぁぁぁぁぁ！！」

ロコナ『イェーイ！』

璃音「このコーナーに戻ってくるのも随分久しぶりね」

フィレス『グルルル！』

勇香「いろいろ大変だったもんな。主に邪神とか邪神とか邪神とか…」

璃音「邪神しかないじゃない…。さて、今回はゲストとして紅刃を呼んでいるわ」

紅刃「あの…何で俺が呼ばれてんだ？これってお前らのコーナーだろ？」

璃音「今回の長編の反省会をするためよ。主人公がいないと話にならないでしょ？」

勇香「今回は特に紹介するカードもないし、さっさと反省会始めようぜ！」

紅刃「お、おう。って、いきなり反省会っつってもな…」

璃音「大きな出来事としては、まずニュートラルの勢力が少しずつ判明してきたわね」

勇香「前から出てたシュルクやギュラはまだいいとして、加奈美が向こうサイドについちまったのはショックだったな…」

紅刃「将人のおかげで最悪の事態は避ける事はできた。あいつはいつか必ず戻ってくるさ。その間に何度衝突してもな」

璃音「私もそう信じたいわね」

ロコナ『ドラゴンもいっぱい出てきたよね！』

勇香「そうそう！将人の《ディアボロス・サタン・ドラゴン》がまた美味しい活躍してたし、何と言っても紅刃の《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》と月沙の《トライデント・ネヴァーダ・ドラゴン》が登場したのはでかいよな！」

紅刃「シュルクまでアクセルシンクロを使ったのは驚いたけど、何とか成功できてよかったぜ」

勇香「特に月沙はこの小説の中で初めてエクシーズ召喚をしたし、この小説独自の召喚方法『トランスシンクロ』までやってのけたんだぜ？あいつもどんどん強くなってくな！私も負けてられないぜ！」

璃音「ルーナも無事に石板のカードを獲得したけど、まだ詳細はわからないわね。枠すら描かれていないカードが進化の鍵でしょうけど…」

紅刃「どう化けるかは後々のお楽しみってわけか」

勇香「他にもいろいろあったな。ニュートラルの穏健派と過激派の存在、秋斗と早苗の過去、尾形との決着、そして新たな敵…」

ロコナ『オガタって人、何か凄く怖かったなぁ…』

紅刃「邪神を取り込んでまで月沙や俺達を殺しに来た。元々は普通の人間だったはずなのに、人ってあそこまで変わっちまうんだな…」

ロコナ『それでも、殺すのはよくないよ！みんな仲良しが1番！』

紅刃「そうだな。シュルク達穏健派の奴らは、やっぱ悪い奴らには見えねえ。いつか解り合える日が来るはずだ」

璃音「ええ。目的が完全にわかれば、その道も見つけられるかもしれないわ」

勇香「で、過激派の奴が尾形を邪神ごとカードに封印したよな。名前は、ヘリドだっけ？」

璃音「彼からは危険な匂いがするわ。紅刃、目を付けられたんだから気をつけなさいよ」

紅刃「ああ、わかってる。負けるわけにはいかねえんだ。今以上に強くなってあいつを倒す！」

勇香「その意気だぜ！…あ、この感想欄を読んだり感想を書き込んだりしてる人達にしかわからないんだけどよ…」

紅刃「？」

勇香「尾形を感想欄でフルボッコにしたがってる人達がたくさんいるだろ？結局どうなるんだ？」

紅刃「あ～…散々待たせた挙げ句に、尾形は今カードの中だしな…」

璃音「問題ないわ。煮るなり焼くなり好きにしなさい」

紅・勇「「いいのかよ！？」」

璃音「そこまでいちいち気にしていたらキリがないわ。ご都合主義だと思ってじゃんじゃんやっていいわよ」

フィレス『ガルルッ！』

紅刃「それで大丈夫なのかよ…？」

勇香「まあ、その話は置いといて…1番の失態は更新速度の大幅ダウンだな」

ロコナ『忙しくて、1番長いので2ヶ月くらい空いちゃったもんね…』

紅刃「今までの『最終投稿日から1週間以内での更新』が上手く行きすぎてたんだよ。さすがに2ヶ月は空きすぎだけど、前みたいにやっていくのは結構難しそうだぞ？」

勇香「そうだけどよ、そのせいで長編に半年以上使ってんだぜ？他にもリアルファイトを2話に渡ってやってるだろ？書いてる内に『

あれ?これってカードゲームだよな?』って自問し始める始末だし…」

紅刃「悪かったな、さっさと終わらせられなくて…」

勇香「作者もいい加減デュエルを書きたくなってきてるわけよ。コラボも控えてるし、ドーンと派手な奴を1本書いてほしいっつーか…」

紅刃「おい、さりげなくとんでもない事言ったよこいつ」

璃音「というわけで、次回はコラボよ。どことやるかはお楽しみに」

紅刃「え、マジでやるのか!?」

璃音「大マジよ。さて、だいぶ時間を使ったわね。今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ!』

ロコナ『感想待ってま~す!』

紅刃「これからもこの小説をよろしくな!」

勇香「それじゃ、次回も見てくれよな!」

ーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか?

ついに、修学旅行編終了です！ここまで本当に長かった…！達成感で一杯です。本当は半年以内で終わらせる予定だったんですが、学校祭の準備や受験勉強に時間を取られてここまで遅くなってしまいました。無事にここまで来れたのも感想を書き込んで応援してくださった方々のおかげです。ありがとうございました！

次回は本当にコラボをやります。どことかは楽しみにしててください。

では、また次回！

特別編　来訪者は蟹と魔女の娘（前編）（前書き）

☆精霊の呟き☆

ウィン『本編はちょっとお休みして、今回はコラボをやるよ！』

ガルド『ピィー！』

ルリア『お相手は戎鴛さんの「遊戯王ＧＸ－蟹と魔女の娘－」です』

ロディス『我々と同じように未来から過去に来た者だったな。デュエルの相手は誰だ？』

ルリア『それが、少し意外な人でして…』

ロディス『意外な人？』

ウィン『読めばわかるよ！さあさあ！ロディス、いつものやっちゃって！』

ロディス『我がいつもやっているわけではないだろ…。今回の締めの言葉は通りすがりのデュエリストさんからのリクエストだ。…では行くぞ。

これより「Ｖｉｓｉｔｏｒｓ　ｆｒｏｍ　ｔｈｅ　ｆｕｔｕｒｅ」の特別編を始める！決定事項だ、異論は認めん！』

ウィン『それじゃ、行ってみよ～！』

ガルド『ピィーッ！』

特別編　来訪者は蟹と魔女の娘（前編）

ＳＩＤＥ／加奈美

「ギュラ君、富岡君。よかったらこれどうぞ」

「お、気が利くじゃねえか。ありがとよ」

「ありがとうございます。遠慮なくいただくとしましょう」

私はギュラ君と富岡君に、自分で焼いた差し入れのクッキーを渡した。

ここはそこそこ大きな台みたいな機械が置かれている部屋。２人共この機械のメンテナンスをしていたところなの。

この機械は穏健派の中でも特定の人しか使えない時空間移動装置。私用とかで出掛ける時によく使ってるの。他の団員の人達は別の装置を使ってるよ。実はこの部屋自体が極秘で、知っててなおかつこの機械を使えるのは、一昨日童実野町へ石板回収に向かったメンバーだけなんだ。

「どうかな…？」

「…ん、美味えな！」

「本当？」

「ええ。加奈美さんは我々の中で1番料理が上手ですからね」

「そんな…大袈裟だよ！」

私はたまにこうして差し入れにお菓子を作ったりしてるんだ。月沙ちゃんと一緒に料理してた頃が懐かしいなぁ…。

シュイーン

「あ、シュルク君！」

「何だ、お前達もいたのか」

スライド式の扉を開けて入ってきたのは、灰色のデュエルディスクを身につけたシュルク君だった。扉が自動で閉まると同時に近づいてきた。

「シュルク、お前も食うか？」

「クッキーか。1つ貰おう」

シュルク君はギュラ君に勧められて、私のクッキーを1つ食べた。しばらく噛み砕いてると、優しく微笑んだ。

「美味いな。加奈美が焼いたのか？」

「そうだよ」

「よくできてるじゃないか。後で芽依達にも分けてやってくれ」

「えへへ、ありがと。芽依ちゃん達はもちろん、もう他の団員の人達にも配ったから大丈夫だよ」

シュルク君にも好評みたいでよかった。みんな美味しいって言ってくれるから、私も作りがいがあるよ。

「ところで、お前は何しに来たんだ？」

「一昨日の一件で童実野町に異変がないか確かめてくる。万一、遊城十代達の行動に支障が出ると面倒な事になりかねないからな。後、ちょっとした気分転換も兼ねている」

「おいおい、大丈夫なのか？そんなに日にち経ってねえだろ？海馬に顔見られてるってのに…」

「心配はいらない。日が沈むまでには戻る」

シュルク君は一昨日行ったばかりの童実野町に行くつもりみたい。心配だから私もついていきたいけど、この後やる事があるし…。

「丁度メンテナンスが済みましたから、すぐにでも使用できますよ」

「そうか」

シュルク君はコンピューターを操作して座標指定を手早く済ませると、時空間移動装置の中央から白い長方形の光が伸びた。これを潜ると指定した場所に着くの。どこ〇もドアみたいな感じって言ったらわかるかな？

「行ってくる」

「うん。気をつけてね」

「ああ」

短い返事を最後に、シュルク君は光の扉を潜っていった。完全に見えなくなると、光の扉は勝手に消えちゃった。

「さて、僕達は他の団員の様子でも見てきましょうか」

「そうだな。残業沙汰になってなけりゃいいけどよ…」

「大丈夫？胃薬足りてる？」

「問題ねえよ」

富岡君とギュラ君は見回りに行くみたい。ギュラ君は少しうんざりそうな顔をしてるけど…。さて、私も次の仕事をしに行かなくちゃ…。

ピリリリ、ピリリリ

「ん？電話か？」

「僕の携帯ですね」

富岡君は、突然鳴り出した腕時計型のテレビ式携帯電話のスイッチを押した。

「どうしましたか？」

『ハッ！先程、時空間関係で問題が発生しまして…』

「問題…？詳しく教えてくれませんか？」

ＳＩＤＥ／？？？

「きゃあっ！」

ドサッ！

「痛た…」

何とか受身はできたものの、いきなり地面に落ちたのはやっぱり痛い。私はそれを堪えて立ち上がり、上を見た。

私の目に映ったのは、たった今閉じた時空の穴だった。

「消えた？それにここは…？」

周りを見渡すと、どこかの公園だった。人は偶然か誰もいない。

私はデュエルアカデミアの午後の授業に出るために、デュエルディスクを持ち出しデュエル場に行くところだった。そこに何かの穴が丁度私の足下に開き、私はそれに落ちてしまった。

その穴の出口がこの公園。ここって、どこかで見た事が…。

「…！思い出した！ここは童実野町の公園！」

そうだ！確か、入学するまで海馬社長のお世話になっていた時に通り掛かった事がある。という事は、童実野町まで飛ばされたの？

『主』

突然、デュエルディスクにセットしてある私のデッキから1人の精霊が飛び出した。白い軽装と顔を隠す緑色の兜、何より背中から生えた大きな翼が特徴だ。

「ミリトゥム！」

『これは一体…？時空間を繋ぐ穴に落ちた事はわかるのですが…』

「私にもわからないわ。とりあえず、社長に連絡してみましょう」

私はパートナーのミリトゥムに返事を返してから、ＰＤＡを取り出して社長の番号を入力した。

『お掛けになった電話番号、現在使われておりません』

「え！？」

画面に表示された文章を見て、思わず目を疑った。なぜか番号違いで繋がらない。

「そんなはずは…」

私はもう1度社長の番号を入力した。でも、表示されるのはさっきと同じ文章だ。半分やけになってアカデミアの友人にも片っ端から掛けてみたけど、これも駄目。メールもすぐに宛先不在で送り返されてしまった。

「どうなってるの？ＰＤＡが故障したのかしら？」

『このままここにいても仕方ありません。この町を散策しましょう。何か手掛かりを掴めるかもしれません』

「…そうね。とりあえず、海馬コーポレーションに行って社長に会いましょう」

船で海の向こうのアカデミアに戻るには、手持ちのお金じゃ足りなさすぎる。私とミリトゥムは社長に会いに海馬コーポレーションへ向かう事にした。

ＳＩＤＥ／シュルク

一昨日戦いの舞台となった場所は立ち入り禁止となっていて、再建作業が行われている。海馬コーポレーションなら完全修復にそう時間は掛からないだろう。

俺はそれを軽く確認してから現場を後にした。

…しかし、面倒な仕事が入ったな…。

『漂流者？』

「はい。先程時空間移動装置を起動させた時に不備が生じてしまい、今あなたがいる世界とは別の世界に時空の歪みが発生してしまいました」

童実野町に着いて少しした後、弥一からテレビ電話を通してそんな連絡が届いた。

「その時空の歪みで発生した穴にその世界の住人が1人落ちてしまったそうなんです」

『そいつが、この世界に漂着したという事か？』

「はい。正確には、そちらの世界の童実野町にですけどね。メンテナンスは完璧だったはずなのですが…。すみません」

『気にするな。誰にでも失敗はある。疲れているなら早めに休め』

「バレましたか。そうする事にしますよ」

弥一ほどの奴がギュラと一緒にも関わらずメンテナンスをしくじ

るなんて事は滅多にない。昨日はろくに休んでなかったみたいだな。

『とにかく、そいつを保護すればいいんだな？』

「話が早くて助かります」

『不足の事態は早めに解決すべきだからな。特徴は？』

「それが、その方が直前にいた世界を調べたところ、随分面白い事が判明しまして…」

『？』

「デュエルアカデミア・ネオドミノ校の制服を着た女子高生です」

『それがどうした？』

「彼女が直前にいた世界がＧＸの時間軸なんです」

『何？』

この事実を聞いて、俺は目を少し見開いた。遊城十代がアカデミアで活躍した時期を『ＧＸ』と読んでいるが、その時代にネオドミノ校は存在しないはずだ。

「どうやら、何らかの理由で未来から転移したようですね。とにかく、この時代なら目立つので見つけやすいと思いますよ」

『そうか…』

「僕達は彼女を元の世界に送り返す準備をします。あなたは彼女を見つけ次第保護してください」

『わかった。一応聞いておくが、他に何か特徴はないのか？』

「それは会ってからのお楽しみです」

『は？』

「会ってみればわかります。見た目的にも名前的にも面白い方ですよ」

「見た目的にも名前的にも面白い、か…」

画面に映った弥一が心底楽しそうなのが気になる。あいつは面白そうな事を好む性格だ。きっと俺を驚かせるほどの人物に違いない。

しかし、1人で探せというのも少し無理があるな。こっちの人員を増やす気はないのか？

今はコンビニに入って中を確認しているところだ。あの赤いブレザーと黒いスカートの制服は見当たらない。

…小腹がすいたな。俺は棚に置いてある食品から適当に焼きそばパンを選んで左手を伸ばした。

ガッ

「「ん？」」

焼きそばパンを掴んだ手はなぜか２つ。１つは俺の左手。もう１つは誰かの右手。

当然、互いに掴んだ奴を確認する事になる。

…気にせずに譲るつもりだった。それはいい。だが、その相手が…。

「あ！お前…！？」

なぜ『真川紅刃』なんだ…！？

「な…！？」

「シュルク！？何でお前がここに…！？」

「それはこっちの台詞だ！修学旅行は昨日が最終日！生徒は全員アカデミアに帰ったはずだぞ！」

「何でスケジュール知ってんだよ…？一昨日の件で俺達怪我しただろ？念のためって事で一旦入院したんだよ。俺はもう完治したからこうして町をぶらついて暇潰ししてんだ」

確かに、紅刃の体に目立った外傷は見られない。独特な黒い制服の上着と赤いシャツ、藍色のズボンも直っている。

「あれだけの傷をたった1日で完治させたというのか？」

「《アルヴェルク・エヴォルト・ドラゴン》のおかげさ。あいつの光は傷の治りを早める効果があるんだ。持ち主の俺が1番影響を受けるみたいで、俺が真っ先に完治したんだよ」

「あの龍にそんな力が…」

さすがは石板の龍と言ったところか。まだ俺達も知らない秘密が数多く残されているのかもしれないな。

「お前こそ、何でここに？また何か企んでるのか？」

「安心しろ。今日は非番みたいなものだ。何なら今からお前が監視してもいいぞ？」

「…その様子じゃ、特に何もないみたいだな」

紅刃はようやく警戒を緩めた。最初からそこまで身構えているわけじゃなかったが…。

「…デュエルディスクはどうした？」

「え？」

今気づいたが、今の紅刃は剣型のデュエルディスクとそれを納めるホルダーを身につけていない。それが普通なのだが、どことなく違和感が拭えない。

「ああ、あれか？お前も見ただろ？ぶっ壊れたの」

そういえば、結界から出た後の剣に変化したデュエルディスクはなぜか刀身が輝いていて、やがて刀身が粉々に砕けてしまった。

「アルヴェルク・エヴォルトの力を借りて強化したのはよかったんだけどな…。もうデュエルにすら使えないから取り替えるしかなくなったんだ。せっかく遊星が作ってくれたのにな…」

紅刃は少し寂しそうに笑いながら理由を告げた。石板の龍の力が強大すぎた故の損壊か。表情から見て、思い入れのある代物だったようだな。

「…！お前、ネオドミノ校の制服を着た女子高生を見なかったか？」

ふと思い立ち、念のために聞いてみた。未来の住人であるこいつなら、見つけたら放っておかないだろう。

「ネオドミノ？んなわけあるか。この時代にいるわけねえだろ」

「いや、いる。別の世界から迷い込んだらしい」

「別の世界から？」

「しかも、お前と同じく未来から過去に来ている奴らしい」

「！」

「そいつを見つけて送り返す必要がある」

さすがに紅刃も驚いた。自分と似たような境遇の人間がこの世界に飛ばされたと来れば、当然の反応だろう。

「そうか…。やっぱお前らの目的はよくわからねえな」

「勘違いするな。俺達の脅威になる可能性のある存在を、わざわざ野放しにするつもりはない。好き好んで敵を増やす真似はしないだけだ」

もしニュートラルを潰すために動くようになり、それ相応の実力を持っているなら厄介な敵になる。だから送り返すだけだ。

「…ネオドミノ校の女子高生だっけか？未来の服装なら、俺でも見つけやすいな」

「何？」

「俺もそいつに興味があるからな。手伝ってやるよ」

紅刃は目的の人物を探す協力を申し出てきた。次から次へと意外な事が起こるな…。

「…勝手にしろ」

「それじゃ、好きにやらせて…ん？」

「どうした？」

「何だあいつら？」

何かに気づいた紅刃の視線の先にあるのは、店の外で不自然に群がる男達だった。

ＳＩＤＥ／？？？

「そこの女」

海馬コーポレーションに行く途中でコンビニの前を通り掛かると、いかにも不良ですと言わんばかりの集団に声を掛けられた。

とりあえず無視。

「お前だよお前！赤い女！」

私の事だろうけど無視。

「俺様の声が聞こえねえのか！」

目の前に回り込まれた。人数は前に3人、後ろに3人。輪から離れて1人の男の人が声を上げている。

「アニキを無視するたぁいい度胸じゃねえか！」

「何の用ですか？私急いでるんですけど…」

取り巻きっぽい人に対して、私は心底めんどくさそうに問い掛けた。

「今俺様達には金が足りないんだよ。だから小遣い寄越せ」

今度はリーダーっぽい人が話した。要するにお金がほしいだけ？

「何が『だから』なんですか？お金がほしいならバイトすればいいでしょう？」

「そんなのかったるくてやってられるか。俺様達は楽して金がほしいんだよ」

「働いて稼ぐからこそ価値があるんですよ？無理矢理奪ったようなお金なんて、不快なだけです」

「わかってねえなぁ。わざわざ働いて端金だけ貰うよりも、その辺の奴から根こそぎもぎ取った方が楽してたくさん稼げるだろ？」

取り巻きの言葉でますます気分が悪くなる。駄目だこの人達、人として腐ってる。

「…最低ね」

「あ?どの口が言ってんだ?立場わかってんのか?」

思わず呟いた言葉は聞き取られたみたい。

確かにまずいわね。囲まれて逃げ場はなし。私はパパみたいに腕っぷしが強いわけじゃないし、デュエルで話をつけようにも、相手はデュエルディスクを持ってないから無理。精霊であるミリトゥムに頼むわけにもいかないし…。

「お前ら、ちょっと路地裏まで連れていけ」

「へいアニキ!」

ジリジリと詰め寄られて、いよいよ逃げ場がなくなった。こうなったら大声で助けを求めるしか…。

「おい」

「あ?」

ゴッ!!

「ごぶぅっ!?」

「…え？」

指示を出していたリーダーが文字通り吹っ飛んだ。

リーダーがいた所には、黒髪の男の人が立っていた。私と同じくらいの年で、服装は藍色のズボンに赤いシャツ。その上にこの時代のアカデミアの制服の上着を着ている。ただ、色は赤でも黄色でもない黒で、ラインは赤だ。

どうやら、あの人が殴り飛ばしたみたい。

「アニキ！？」

「何者だてめえ！」

「ごく普通の一般人だ。それ以上でもそれ以下でもねえ」

黒髪の人はさも当然かのように言い放った。黒い瞳には強い光を宿している。

「大勢で寄ってたかって何のつもりだよ？みっともねえからさっさと帰ってくれ」

「あぁ！？誰に口聞いて…」

バキッガッドゴォ！

「がぼっ！？」

「うごぉっ！？」

「あべしっ！？」

後ろからそんな音や声が聞こえたから振り返ると、囲んでいた不良の内３人が倒れていた。

「口ほどにもない」

黒いポロシャツと藍色の上着、灰色のズボンを着こなした、鈍色のボサボサ頭の男の人が興味なさそうに呟いた。左腕には灰色のデュエルディスクを装着している。３人をあっという間に倒したのはこの人だ。

「…！お前は…」

鈍色の人は私を見て少し驚いた様子を見せた。私は彼を知らないから、何で驚かれたのかさっぱりだ。

ドガッゴスッズガッ！

「おぶぅっ！？」

「ごばっ！？」

「がぼっ！？」

また後ろから打撃音と悲鳴。前に向き直ると、黒髪の人が残りの

3人を一撃で叩きのめしていた。

「っ！？お前…！？」

黒髪の人も、私を見るなり驚いた表情を見せた。程度は鈍色の人よりずっと上だ。この人達って一体何なの？

「ぐふ…き、貴様らよくも…」

黒髪の人が続けて何かを言う前に、最初に殴られたリーダーが立ち上がってきた。左の頬にはくっきり痣が残っている。

「何だ、まだ立てんのか？」

「お前が剣なしでここまで戦える事の方が驚きだがな」

「どういう意味だコラ」

相手の目の前で軽口を叩く見知らぬ人達。とりあえずこの人達についてはっきりわかる事は、私を助けてくれている事と物凄く強いという事。

その直後にリーダーが襲い掛かってくる。

「ナメてんのかゴｒ」

ズゴォッ！！

「らぼごっ！？」

黒髪の人が右の拳を、鈍色の人が左の拳を同時に突き出し、リーダーの顔面に命中。今度こそ完全にダウンした。

「アニキィ!?」

「何だこいつら、強すぎる!」

「畜生!覚えてろ!」

先に倒された6人の不良は、気絶したリーダーを運んで逃げていった。

「あ、あの…助けてくださってありがとうございました!」

私は助けてくれた2人に真っ先にお礼を言った。この人達が来なかったら今頃どうなってた事か…。

「気にすんな。怪我なかったか?」

「はい。お陰様で…」

『主、ご無事ですか!?』

しばらく様子を見ていたミリトゥムが、焦った調子で飛び出してきた。

「うおっ!?何だお前、いつの間に精霊を連れるようになったんだ!?」

「え!?」

黒髪の人はいきなりミリトゥムが出てきた事に驚いた。この人、精霊が見えるの…!?

『私が見えるのか!?』

「いや、まあ、一応そういう体質だし…。こいつも見えるぞ」

『何と…!?』

鈍色の人も精霊が見えるみたい。ますますこの人達がわからなくなってきた…。

『そうか…。すまないな、主を助けてくれて。丁度私が干渉すべきか迷っていたのだ』

「精霊なら仕方ねえよ。怪奇現象とかで騒ぎになったらまずいからな」

黒髪の人はミリトゥムと一通り話した後、私に向き直ってまた話し掛けてきた。

「それよか、何で『アキ』がここにいるんだよ?」

「え…?」

今、何て…?私は黒髪の人が言った名前を聞いて耳を疑った。

「正直驚いたぜ。何かで飛ばされちまったのか?とにかく、『遊星』達が心配してんじゃ…」

聞き間違いじゃない。しかも『パパの名前』まで出てきた。

「パパとママを知ってるんですか！？」

私は思わず、黒髪の人に迫るように問い掛けた。

どちらもこの時代じゃ聞く事のない名前。その名前を知ってる人に会えた事は、私にとって重大な意味を持つ。

「は？パパとママって…」

「よく見ろ。こいつは『十六夜アキ』じゃない」

「あ、言われてみれば確かに…」

鈍色の人が言った名前で確信した。この人達はパパとママを知ってる！

「やっぱり知ってるんですね！」

「て事は、お前は一体…？」

感極まった私は、何も躊躇う事なく名乗りを上げた。

「私は『不動遊璃』！不動遊星と十六夜アキの『娘』です！」

ＳＩＤＥ／紅刃

「む…娘ぇ！？」

思わず素っ頓狂な声を上げちまった。

意外とかそんなレベルじゃねえ。一昨日の出来事が頭から全部吹っ飛ぶくらいの衝撃だ。

よく見ると、見た目は独自の制服を着たアキそっくりだけど、所々が違う。髪飾りは付けずに前髪を下ろしてて、瞳の色は遊星と同じ青だ。そして、朱色の龍を象ったようなデュエルディスクを装備している。

「娘だと…！？」

シュルクも驚きを隠し切れてない。いや、無理ねえか。月沙達が知っても１００％驚く。間違いない。

「はい！あなた達の名前は何ですか？」

「あ、ああ。真川紅刃ってんだ。よろしくな」

「…シュルク・ディグレイだ。とりあえず、ここで話すのはまずい。

移動するぞ」

動揺しながらも自己紹介を終えて、シュルクの提案でこの場を後にした。

俺達が着いたのは、人気のない白い石畳の広場だ。屋根付きの小さな小屋の下にある長椅子に腰掛け、テーブルを間に挟んで遊璃、ミリトゥムと向かい合っている。

「しっかし、見れば見るほどそっくりだな…」

「よく似てるって言われます。紅刃さんとシュルクさんはパパやママとどういった関係なんですか？」

「遊星やアキとは仲間同士だ。特にアキとはアカデミアで同じクラスだったな」

「俺は名前や顔と経歴を知っているだけで、面識はない」

にしても、ここまで母親のＤＮＡを色濃く受け継いでる奴も珍しいよな。遊星の面影はほとんどないけど…。

「でも、俺の知ってる遊星とアキはまだ成人どころか恋人にすらなってねえぞ？」

「そうなんですか？」

「それなのにいきなり『娘です』って言われても…」

「おそらく、紅刃の時代よりさらに未来から来たんだろう。紅刃と同じ世界の住人かはわからないが」

シュルクは遊璃が俺の生きる世界とは違う平行世界の人間だと考えているみたいだ。俺は同じ世界の人間であってほしいけどな。あいつらお似合いだし。

「1つ聞くが、お前は何か不自然な穴に落ちなかったか?」

「!?何でそれを…」

「俺は別の世界から紛れ込んだネオドミノ校の制服を着た人物を探している。どうやらお前達で間違いないようだな」

やっぱりこいつらがシュルクの探している奴か。確かにネオドミノ校の制服を着てるし。

「お前達を元の世界に送り返す事が俺の任務だ。今、俺の仲間がその準備をしている」

『任務?あなたはどこかの組織に所属しているのか?』

ミリトゥムの質問に対して、シュルクが一瞬言葉を詰まらせたのがわかった。俺とシュルクが敵同士だなんて夢にも思わないだろうし、そもそも目的自体話そうとしないだろ。

「…どことは言わないがな。俺の組織が作った機械の不手際で生じ

た歪みがお前の世界でこの世界と繋ぐ穴を生み出し、たまたまお前がそれに落ちたというわけだ」

「じゃあ、こんな事になったのはあなたの組織のせいなんですか？」

「ああ。すまない。だが、俺の仲間がお前を元の世界に送り返す準備をしている。少し時間がかかるが、すぐに戻れるだろう」

シュルクは素直に事の顛末を述べた。ニュートラルの不手際だってのは俺も初耳だぞ？

「そうですか…。戻れるならいいですけど…」

『あなたの組織は何をやっているのだ？』

「企業秘密だ」

『そうか…』

目的に関しての質問はピシャリと断った。やっぱ意地でも言わないつもりか。

…そうだ！今の内に聞いておくか。

「そういや、シュルクの組織の調べじゃお前も過去のアカデミアに飛ばされてるって話だけど、本当か？」

「！…はい…」

俺が気になっていた事を聞いてみると、遊璃は少し表情が暗くな

った。思った通り、あまりいい話じゃなさそうだな…。

「…私は事故に巻き込まれて過去に飛ばされました」

「「！」」

「パパが研究で作っていた機械の暴走で、たまたまパパに会いに来た私はほとんど何もわからないまま昔の童実野町に…。幸い、わずかな時間だけ繋がった通信でパパが送ってくれたメールとシンクロモンスターのデータのおかげで、不安定だけど帰る見込みがつきました。今は海馬社長の計らいでアカデミアで過ごしています」

事故、か…。自主的に来たってわけじゃないな。様子を見る限りじゃ、遊星を恨んではなさそうだ。

「先に言っておくが、お前を本来の時間軸に戻す事はできない」

「え？」

「俺の組織が移動できるのはここにいる紅刃が本来いるべき時間までだ。紅刃の未来にお前がいようといまいと、お前が本来いるべき時間軸には干渉できない」

「そう…ですか…」

どこかで期待してたのか、遊璃はしょんぼりした感じで返事をした。シュルク達が未来に送り返すのは無理みたいだ。

「遊星が何やってんのかは聞かないけど、あいつも何かお前を連れ戻す方法を考えてるはずだ。メールで帰る見込みがついたって事は、

お前がやれる事も書かれてたのか？」

「はい。ある博士に協力をしてもらうようにと…」

「ならそれでいいさ。自分ができる事をやるのが1番だろ？可能性は0じゃねえんだからな」

遊星の事だ、今でもあれこれ考えて方法を探してるだろ。自分にやれる事を頑張りながら信じて待ってりゃ、いつか帰れるさ。

「…そうですね。ありがとうございます」

礼を言ってきた遊璃の目には、消極的な色は欠片も見当たらない。元気を出してくれたみたいでよかった。

『そういえば、紅刃はなぜこの時代にいるのだ？ここから見れば未来人のはずだが…』

また答えづらい質問を…。ミリトゥムが今度は俺に話を持ち掛けてきた。まさか『自称神様（笑）の頼みで来た』なんて言えねえよな…。

「ま、まあ、遊璃と似たようなもんだ。ただ、もし今すぐ元の時代に帰れるとしても、まだ帰らねえけどな」

「え？何でですか？」

「この時代にはまだやり残した事があるからな。帰るのは全部片付けてからだ」

ほんのたまになら帰ってるけど、D・ホイールの製造くらいで一時的だからノーカンで。ニュートラルの件を解決するまでは、本当の意味で帰るつもりはねえ。

「全部片付けてから…」

「ま、このまま帰るのは少し惜しいってのもあるけどな。この時代でせっかく仲良くなった奴らとこのまま別れるのは名残惜しいっつーか…」

「…！」

未練なしで帰るには、十代達とは仲良くなりすぎた。いつか別れなきゃいけないのはわかってる。でも、そんな簡単には割り切れねえんだ。

「（そう、か…。いつかは、雪乃や瑞波とも…）」

「…遊璃、と言ったな」

「は、はい！」

「聞くまでもないと思うが、お前はデュエリストだな？」

「そうですけど…」

シュルクはまた少し暗い顔をした遊璃に問い掛けた。そりゃあ、デュエルディスクを持ってて精霊も連れてるからデュエリストで間違いないだろ。

「準備ができるまではまだ時間がかかる。待っている間に、俺とデュエルしてみる気はないか？」

「「『！？』」」

「お前の実力がどれほどのものか興味がある。デュエリストなら当然の欲求だろ？」

シュルクの提案はまさかのデュエルだった。挑まれるとは思ってなかったのか、遊璃は目を見開いた。

でも、それは少しの間だけだ。

「…わかりました」

すぐに戦う眼になった。

ＳＩＤＥ／遊璃

広場に出て、私とシュルクさんは互いに距離を取って向かい合った。紅刃さんは中間の位置で観戦する事にしたみたい。

「シンクロモンスターでも何でも使ってこい。手は抜くな」

シュルクさんはそれだけ言ってデュエルディスクを起動させた。

デッキが自動でシャッフルされる。

「はい！」

『主、私は待機しています』

「うん、お願い」

ミリトゥムがカードに戻ったのを確認してから、私は朱色の龍を象ったデュエルディスクにデッキをセットした。

龍の目が光って動力源のモーメントが起動し、広がった翼がモンスターゾーンになり、絵のように収納されていた金色の龍の額の２つの槍がせり上がり、枠となったものが墓地になった。朱色の龍の額には『４０００』の電子文字、ライフカウンターが表示される。当然、私のデッキも自動でシャッフルされた。

「私も全力で行きます！」

「来い！」

「「デュエル！」」

シュルクｖｓ遊璃

「先攻はやる」

「なら、遠慮なく行きます！私のターン！」

先攻を取れたのはいいけど、シュルクさんのデッキがどんなもの

かはまだわからない。どうしようか…。

「チューナーモンスター《ドラグニティ－ピルム》を召喚！」

最初に出したのは、細長い角を1本生やした黄緑の龍だ。

《ドラグニティ－ピルム》　ＡＴＫ／１４００

「やはり【ドラグニティ】か…」

「《ドラグニティ－ピルム》が召喚に成功した時、手札からドラグニティの鳥獣族1体を特殊召喚してこのモンスターを装備します！手札から《ドラグニティ－ミリトゥム》を特殊召喚！」

早速ミリトゥムを呼び出すと、ミリトゥムはそのままピルムの上に飛び乗った。

《ドラグニティ－ミリトゥム》
効果モンスター
星４／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ１７００／ＤＥＦ１２００
自分の魔法&罠カードゾーンに存在する「ドラグニティ」と名のついたカード1枚を選択して発動する。
選択したカードを自分フィールド上に特殊召喚する。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

《ドラグニティ－ミリトゥム》　ＡＴＫ／１７００

『随分出番が早いですね』

「今回も頼んだわよ！」

『御意！』

「ミリトゥムの効果発動！１ターンに１度、魔法・罠ゾーンに存在するドラグニティ１体をモンスターゾーンに特殊召喚します！《ドラグニティ－ピルム》を特殊召喚！」

ミリトゥムがピルムから飛び降りて隣に並んだ。これで準備は整った。

《ドラグニティ－ピルム》　ＡＴＫ／１４００

「カードを2枚セット！そして、レベル４《ドラグニティ－ミリトゥム》にレベル３《ドラグニティ－ピルム》をチューニング！」

『後はお願いします！』

ピルムが３つの輪に変化し、ミリトゥムが中を潜って４つの星になる。

「秘境の竜騎士が、三又の槍を振るい策を為す！戦場を鎮める風となれ！」

☆４＋☆３＝☆７

「シンクロ召喚！鎮圧せよ！《ドラグニティナイト－トライデント》！」

輪と星が織り成した光の柱から出てきたのは、三又の角のような顔と蝙蝠のような翼を持つ青い龍に乗った竜騎士だった。

《ドラグニティナイト－トライデント》
シンクロ・効果モンスター
星７／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１７００
ドラゴン族チューナー＋チューナー以外の鳥獣族モンスター１体以上
自分フィールド上に存在するカードを３枚まで墓地へ送って発動する。
相手のエクストラデッキを確認し、この効果を発動するために墓地へ送った枚数と同じ数だけカードを選択して墓地へ送る。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

《ドラグニティナイト－トライデント》　ＡＴＫ／２４００

「《ドラグニティナイト－トライデント》の効果発動！１ターンに１度、自分フィールド上のカードを３枚まで墓地に送り、その数だけ相手のエクストラデッキのカードを墓地に送ります！」

「エクストラデッキのカードを直接…！？」

「そう来たか…」

「リバースカードを１枚墓地に送ります！」

今の内にエクストラデッキを覗いて戦術を読み取った方がいい。
私がカードを１枚墓地に送ると、ソリッドビジョンでカードリストが表示された。

何これ…『魔轟神』？聞いた事のないカードばかり…。レベルも４から１０までいろいろある。

「…！」

私はリストを吟味している内にあるカードに目が止まった。

《魔轟神龍ウロボロス》。シンクロ素材は…『シンクロモンスターのチューナー』と『魔轟神のシンクロモンスター』！？この人、パパと同じアクセルシンクロが使えるの！？確かに、シンクロチューナーもリストに入っている。

でも、これはライディングデュエルでしか使えないはず。なら、驚いたけどこの2枚は無視ね。後は…。

「…《魔轟神獣ユニコール》を選択します」

「…妥当な判断だな」

シュルクさんは特に大きなリアクションをする事なくユニコールを墓地に送った。まるで最初から私が選ぶカードを読んでいたかのように…。

ユニコールはお互いの手札が同じ枚数の時、相手のカード効果を全て封印する効果を持つ。選択は間違ってないはず。

「…ターンエンドです」

遊璃
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《ドラグニティナイト－トライデント》（ＡＴＫ／２４００）

魔法・罠／リバース×1

情報アドバンテージは得た。フィールドも整えた。なのに、この不安感は一体何なの…？

「…遊璃、1つ言い忘れてたけど…」

「？」

観戦している紅刃さんが、少し歯切れ悪そうに私に話し掛けてきた。

「そいつ、とんでもなく強いから気をつけろよ」

「え…？」

「…この程度なら、丁度いいハンデだな」

シュルクさんが淡々と感想を呟くのが聞こえた。背筋が凍りつくような感覚が私を襲う。

「俺からも行くぞ。…覚悟はできているな？」

威圧のこもった言葉に、私は思わず身構えた。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

特別編　来訪者は蟹と魔女の娘（前編）（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「この話は一旦ここまで。『今回のキーカード』の時間よ」

勇香「コラボって事で、今回はゲストとして『遊戯王ＧＸ－蟹と魔女の娘－』から藤原雪乃と桃埜瑞波（ももの みずは）に来てもらったぜ」

雪乃「よろしく」

瑞波「どうも！わざわざ呼んでくれてありがとな！」

雪乃「早速だけど、今回遊璃のデュエルが短すぎないかしら？」

璃音「確かに、今までのコラボと比べて前降りに随分尺を使ってるわね」

勇香「文句ならチンピラ共に言ってくれよ…。おまけにシュルクがニュートラルのメンバーだから、私達サイドのフォッタを使うわけにもいかねえし、いろいろ考えてたら話が膨らんできたし」

瑞波「まあまあ、それだけこっちでの出番も増えるからいいじゃん！」

璃音「瑞波は何か感想とかない？」

瑞波「そうだな…。紅刃とシュルクって敵同士だよな？鉢合わせし

たのはいいとしても、仲良くしすぎじゃないか？」

勇香「この前のデュエルで何か通じるものがあったんだろ。そういや、ああいう関係ってあまり見ないような…」

雪乃「とりあえず、そろそろカード考察に入らない？」

璃音「それもそうね。今回紹介するのは、遊璃が1ターン目から呼び出したシンクロモンスター《ドラグニティナイト－トライデント》よ」

勇香「すっげえ久々にやるな…」

《ドラグニティナイト－トライデント》
シンクロ・効果モンスター
星7／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１７００
ドラゴン族チューナー＋チューナー以外の鳥獣族モンスター1体以上
自分フィールド上に存在するカードを3枚まで墓地へ送って発動する。
相手のエクストラデッキを確認し、この効果を発動するために墓地へ送った枚数と同じ数だけカードを選択して墓地へ送る。
この効果は1ターンに1度しか使用できない。

璃音「ドラグニティに属するシンクロモンスターの1体よ。召喚条件がドラゴン族チューナーとチューナー以外の鳥獣族モンスターで少し縛りがきついけど、元々鳥獣族非チューナーとドラゴン族チューナーばかりの【ドラグニティ】なら関係ないわね」

瑞波「自分フィールド上のカードを3枚まで墓地に送り、その分だけ相手の融合…じゃなかった、エクストラデッキからカードを墓地

に送る事ができるぞ。エクストラデッキに直接干渉するなんて、随分珍しい効果だよな」

勇香「墓地に送るなら、装備カードになったドラグニティやいらなくなった魔法・罠を使えばいいだろ。ランダムじゃなくて『選択して』ってところが使いやすいんだ」

雪乃「エクストラデッキから直接墓地に送られたモンスターは、蘇生制限を満たしていないからそのまま特殊召喚する事はできないわ。一応相手の行動を阻害できるわね」

瑞波「『一応』ってのは、最近墓地利用の手段が増えてきてるからだな。墓地に送っといたモンスターが墓地から除外するコストに使われたり、《貪欲な壺》でデッキに戻されるなんて事はざらにある」

勇香「相手に墓地アドバンテージを与える事にもなるから、効果を使う相手には気をつけろよ」

璃音「今回はここまでよ」

勇香「しばらく続きそうだからな。コラボが終わるまでは来てくれないか？」

雪乃「構わないわ。次もよろしくね」

瑞波「出番が増えるのはこっちとしても嬉しいよ。あ、『遊戯王GX一蟹と魔女の娘一』も是非読んでくれよ！」

璃音「宣伝はコラボ終了時でもいいんじゃない…？感想はいつでも受け付けてるわ。気軽に書き込んでね」

勇香「次回も見てくれよな！」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

今回は戎鴛さんの『遊戯王ＧＸ－蟹と魔女の娘－』とのコラボです。そしてまだ続きます。いろいろ前振りが長くてすみません…。

ニュートラルのメンバーとのデュエルなので、フォッタはまず使えません。ならどうやって会わせるかと考えた結果、この形に落ち着きました。

かなり長くなってしまったので、２～３話に分けます。次回は本格的にデュエルに入りますよ。

では、また次回！

特別編　来訪者は蟹と魔女の娘（中編）（前書き）

☆精霊の呟き☆

リーシェ『今回も「遊戯王ＧＸ－蟹と魔女の娘－」とのコラボだ』

ゴーズ『まさか前中後の３部構成になるとはな』

ルリア『前置きが結構長かったですからね。でも、これはこれでいいんじゃないでしょうか？』

ロコナ『どんなデュエルになるんだろう？楽しみ！』

ルリア『読めばわかりますよ。ドラグニティと魔轟神の戦いを是非ご覧ください。楽しんでいただければ幸いです』

リーシェ『今回の締めの言葉は池上さんからのリクエストだ。それでは特別編の中編、始まるぞ。

拳を握れ、顔を上げよ！命運は尽きぬ！』

ゴーズ『お前の場合、大抵妙に男らしい台詞だよな…』

リーシェ『何が言いたい！？口調を変えるつもりはないぞ！』

ロコナ『誰もそんな事聞いてないよ？』

特別編　来訪者は蟹と魔女の娘（中編）

ＳＩＤＥ／シュルク

「覚悟はできているな？」

俺がそう問い掛けると、遊璃の顔にさらに緊張が走った。

ユニコールが墓地に送られたのは少し痛いが、すぐにエクストラデッキに戻せる。そして、このターンでやるべき事も見えている。

遊璃
ＬＰ／４０００
手札／２
モンスター／《ドラグニティナイト－トライデント》（ＡＴＫ／２４００）
魔法・罠／リバース×１

シュルク
ＬＰ／４０００
手札／５
モンスター／なし
魔法・罠／なし

「俺のターン！魔法カード《手札抹殺》！互いに手札を全て捨て、その枚数分だけカードをドローする！」

「いきなり《手札抹殺》…？私は２枚捨てて２枚ドローします」

「俺は5枚捨て、5枚ドローする」

さて…ここからが本番だ。

「墓地の《魔轟神ルリー》《魔轟神獣ガナシア》2体、チューナーモンスター《魔轟神獣ケルベラル》の効果発動！手札から捨てられた時、自身を特殊召喚する！」

仮面を着けた小さな悪魔、2体の2足歩行の象、頭が3つある小さな赤い獣が全員同時に飛び出した。

《魔轟神ルリー》　ＡＴＫ／　２００

《魔轟神獣ガナシア》　ＡＴＫ／１６００

《魔轟神獣ガナシア》　ＡＴＫ／１６００

《魔轟神獣ケルベラル》　ＡＴＫ／１０００

「一気に4体も！？」

「ガナシアはこの効果で特殊召喚された時、攻撃力が２００ポイントアップし、フィールドから離れた時除外される！」

《魔轟神獣ガナシア》　ＡＴＫ／１６００→１８００

《魔轟神獣ガナシア》　ＡＴＫ／１６００→１８００

「さらに、同じく手札から捨てた《魔轟神獣キャシー》の効果発動

！このモンスターが手札から墓地へ捨てられた時、表側表示のカードを1枚破壊する！《ドラグニティナイト－トライデント》は破壊させてもらう！」

「っ！永続罠《渓谷防護壁》！モンスター効果でドラグニティが破壊される時、手札かデッキからフィールド魔法《竜の渓谷》を、デッキから効果を発動したモンスターのレベルの合計分の鳥獣族モンスターを墓地に送る事で、エンドフェイズ時までドラグニティはカード効果で破壊されません！」

《渓谷防護壁》（ラヴィン・リフレクション）
永続罠（オリジナル）
このカードは相手モンスターの効果によって自分フィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついたモンスターが破壊される時のみ発動する事ができる。
自分の手札・デッキから「竜の渓谷」を墓地に送り、デッキから効果を発動したモンスターのレベルと同じになるように鳥獣族モンスターを墓地に送る事で、このターンのエンドフェイズまで自分フィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついたモンスターはカード効果で破壊されない。
このカードがカード効果で破壊された場合、自分はフィールド上に存在するカードの数×２００ポイントのダメージを受ける。

「…キャシーのレベルは1だ」

「なら、デッキから《竜の渓谷》とレベル1の鳥獣族《ドラグニティ－ベビーバード》を墓地に送ります！」

黒猫の幻影が竜騎士に突撃するが、突如発生した風の防壁に遮られ、逆に吹っ飛ばされてしまった。

「まさか、５枚とも手札から捨てた時に効果を発揮するなんて…」

「たまたまツイていただけだ。レベル３《魔轟神獣ガナシア》２体にレベル２《魔轟神獣ケルベラル》をチューニング！」

ケルベラルが２つの輪に変化し、ガナシアが２体共輪を潜りそれぞれ３つの星に変化する。

「目覚めし神が、剛を以て我が敵を砕く！永久（とわ）の果てに蘇れ！」

☆３＋☆３＋☆２＝☆８

「シンクロ召喚！復活せよ！《魔轟神ヴァルキュルス》！」

黒い翼を広げ、赤・黒・金の鎧を身につけた人型の悪魔が現れた。攻撃力は十分ある。

《魔轟神ヴァルキュルス》　ＡＴＫ／２９００

「攻撃力２９００…！」

「手札の《魔轟神グリムロ》の効果発動！フィールド上に魔轟神が存在する時、手札からこのモンスターを墓地に捨てる事でデッキから魔轟神を１体手札に加える！《魔轟神クルス》を手札へ！そしてヴァルキュルスの効果発動！１ターンに１度、手札の悪魔族を捨てる事で、カードを１枚ドローする！さらに今捨てた《魔轟神クルス》の効果発動！手札から墓地に捨てられた時、墓地からレベル４以下のモンスターを特殊召喚する！《魔轟神グリムロ》を特殊召喚！」

黒い翼を持つ、肌以外は全身黒づくめの女性が復活した。そこそこの戦闘になら耐えられるだろ。

《魔轟神グリムロ》　ＡＴＫ／１７００

「まだ通常召喚をしていないのに、何て展開力なの…！？」

「これだけやってまだ手札５枚かよ…！？」

「まだ終わりじゃない！このモンスターは魔轟神１体をリリースする事でアドバンス召喚ができる！《魔轟神ルリー》をリリース！出でよ、《魔轟神ディアネイラ》！」

上半身が桃色で下半身が黒い巨大な悪魔が現れた。一目で凶暴である事がわかる。

《魔轟神ディアネイラ》　ＡＴＫ／２８００

「ディアネイラがいる限り、１ターンに１度お前の通常魔法の効果を『俺が自分の手札を１枚選択して捨てる』効果に変更できる。これがどういう事かわかるな？」

「…見る限りだと、魔轟神は手札から捨てられる事で効果を発揮するモンスター。今通常魔法を使っても、シュルクさんのメリットにしかならない…」

「…俺、こんな奴と戦ってたんだな…」

紅刃が遠い目で何か呟いてるが無視だ。

「バトル！《魔轟神ディアネイラ》で《ドラグニティナイト－トライデント》に攻撃！フィアーズ・ブレイク！」

ディアネイラが拳を振りかぶりトライデントに襲い掛かる。このまま終わるとは思えないが…。

「墓地から《ドラグニティ－ガードナー》の効果発動！」

「墓地からの発動だと？」

「このモンスターを除外する事で、エンドフェイズ時まで攻撃されたドラグニティ1体の戦闘破壊を無効にします！」

《ドラグニティ－ガードナー》
効果モンスター（オリジナル）
星3／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ１７００
自分のフィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついたモンスターが攻撃対象になった時、墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。
攻撃対象となった「ドラグニティ」と名のついたモンスターはバトルフェイズ終了時まで戦闘で破壊されない（ダメージ計算は適用する）。

「《手札抹殺》で墓地に送られていたとはな。だが、ダメージは受けてもらうぞ」

西洋の鎧に身を包み、大型の盾を持っている竜騎士の幻影が現れ、ディアネイラの拳を受け止めた。その余波までは防ぎ切れず、ダメージとなって遊璃を襲う。

「うっ！」

遊璃　ＬＰ／４０００→３６００

「続いて《魔轟神ヴァルキュルス》で《ドラグニティナイト－トライデント》を攻撃！ダーク・バレッティア！」

ヴァルキュルスが手から無数の緑の光弾を放つ。これもガードナーの幻影が防ぐが、流れ弾がライフを削る。

「ぐ…！」

遊璃　ＬＰ／３６００→３１００

「カードを3枚セットしてターンエンドだ」

シュルク
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《魔轟神ヴァルキュルス》（ＡＴＫ／２９００）《魔轟神グリムロ》（ＡＴＫ／１７００）《魔轟神ディアネイラ》（ＡＴＫ／２８００）
魔法・罠／リバース×３

できればグリムロもシンクロ素材にしてしまいたかったが、まあいいだろう。さて…どう来る、不動遊璃？

ＳＩＤＥ／遊璃

たった１ターンでここまでするなんて…。しかも１枚１枚の役割にほとんど無駄がない。この人、紅刃さんの言う通りとんでもなく強い…！

でも、大丈夫。まだ負けたわけじゃない。

「私のターン！」

それに、このターンで倒せる！

「《ドラグニティ－レギオン》を召喚！」

緑の翼と白い服が特徴の屈強な鳥人が現れた。このモンスターが反撃に必要なキーカードの１体。

《ドラグニティ－レギオン》
効果モンスター
星３／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ　８００
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル３以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター１体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。自分の魔法＆罠カードゾーンに存在する「ドラグニティ」と名のついたカード１枚を墓地へ送る事で、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を破壊する。

《ドラグニティ－レギオン》　ＡＴＫ／１７００

「レギオンが召喚に成功した時、墓地からレベル3以下のドラゴン族ドラグニティ1体をレギオン自身に装備できます！墓地から《ドラグニティ－アキュリス》を装備！」

頭から翼を生やして槍を身につけた赤い龍が飛び出した。体は細長く、銀色の鎧を着込んでいる。

《ドラグニティ－アキュリス》
チューナー（効果モンスター）
星2／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ　８００
このカードが召喚に成功した時、手札から「ドラグニティ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚し、このカードを装備カード扱いとして装備する事ができる。
モンスターに装備されているこのカードが墓地へ送られた時、フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。

「さっきの《手札抹殺》で墓地に送られたもう1枚のカードか！」

「そして、ドラグニティが装備された時、墓地から《ドラグニティ－ベビーバード》を特殊召喚します！」

卵から顔を出している鳥の雛が飛び出した。さっきの《渓谷防護壁》で墓地に送ったモンスターよ。

《ドラグニティ－ベビーバード》
効果モンスター（オリジナル）
星1／風属性／鳥獣族／ＡＴＫ　６００／ＤＥＦ　０
自分フィールド上のモンスターに「ドラグニティ」と名のついたチューナーモンスターが装備された場合、墓地に存在するこのモンス

ターを特殊召喚する事ができる。

《ドラグニティ－ベビーバード》　ＡＴＫ／　６００

「そして、レギオンのもう1つの効果！魔法・罠ゾーンのドラグニティを1枚墓地に送る事で、相手フィールド上にいる表側表示のモンスターを1体破壊します！《魔轟神ディアネイラ》を破壊！」

レギオンの指示でアキュリスがディアネイラに突撃していく。それでもシュルクさんの表情は変わらない。

「罠カード《魔轟同調》を発動する！墓地の魔轟神とフィールドの魔轟神をデッキに戻し、シンクロ召喚を行う！」

《魔轟同調》
通常罠（オリジナル）
このカードは相手ターンのみ発動する事ができる。
自分のエクストラデッキの「魔轟神」と名のついたシンクロモンスター1体を選択する。
選択したモンスターのシンクロ召喚に必要なチューナー及びチューナー以外のモンスターを自分フィールド上及び墓地から選択してデッキに戻し、選択したシンクロモンスター1体を自分フィールド上にシンクロ召喚扱いで特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

「このタイミングでシンクロ召喚！？」

「フィールド上のレベル8《魔轟神ディアネイラ》と墓地のレベル2《魔轟神獣ケルベラル》をデッキに戻しチューニング！」

シュルクさんの宣言と共にケルベラルの幻影が現れた。幻影はすぐさま2つの輪になり、ディアネイラもそれに飛び込み8つの星になる。

「目覚めし神が、魔轟の玉座より威光を放つ！永久（とわ）の果てに蘇れ！」

☆8＋☆2＝☆10

「シンクロ召喚！復活せよ！《魔轟神レヴュアタン》！」

金色の鎧を身につけた赤い長髪と赤い翼の悪魔が現れた。空中に浮かぶ石造りの玉座に乗っている。

《魔轟神レヴュアタン》　ＡＴＫ／３０００

「ただし、この効果で呼び出したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される」

「おいおい…デメリットになってねえだろ…」

トライデントの効果で確認した時、レヴュアタンのテキストには『破壊され墓地へ送られた時に墓地から魔轟神を3体まで手札に戻す』と書かれていた。つまり、私が破壊しても《魔轟同調》の効果で自壊しても墓地の魔轟神が手札に戻ってしまう。

「真っ先にディアネイラを狙うのは読めていた。対策くらいは施している」

「…！装備カードとなった《ドラグニティ－アキュリス》が墓地に

送られた時、フィールド上のカードを1枚破壊します！《魔轟神ヴァルキュルス》を破壊！」

対象を見失いキョロキョロしているアキュリスがヴァルキュルスを見つけるなり再び突撃した。今度は特に邪魔されずにヴァルキュルスを貫き破壊できた。

「……」

「魔法カード《マジック・プランター》を発動！自分の永続罠を墓地に送る事で、カードを2枚ドローします！《渓谷防護壁》を墓地に送り、2枚ドロー！続けて魔法カード《調和の宝札》を発動！手札から攻撃力1000以下のドラゴン族チューナー1体を墓地に捨てる事で、カードを2枚ドローします！」

《調和の宝札》
通常魔法
手札から攻撃力1000以下のドラゴン族チューナー1体を捨てて発動する。
自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「攻撃力500の《ドラグニティ－ファランクス》を墓地に捨てて、2枚ドロー！」

よし、これなら…！

「さらに魔法カード《シンクロキャンセル》を発動！シンクロモンスターをエクストラデッキに戻し、そのモンスターのシンクロ素材となったモンスターを特殊召喚します！《ドラグニティナイト－トライデント》をエクストラデッキに戻し、《ドラグニティ－ミリト

ゥム》と《ドラグニティ－ピルム》を特殊召喚！」

トライデントの全身が光り出す。その全身が２つに分かれたかと思うと、それぞれミリトゥムとピルムに変化した。

《ドラグニティ－ミリトゥム》　ＡＴＫ／１７００

《ドラグニティ－ピルム》　ＡＴＫ／１４００

「レベル４《ドラグニティ－ミリトゥム》レベル３《ドラグニティ－レギオン》レベル１《ドラグニティ－ベビーバード》にレベル３《ドラグニティ－ピルム》をチューニング！」

「レベルの合計は…１１か！？」

「レベル１１のシンクロだと？」

紅刃さんとシュルクさんが驚く中、ピルムが変化した３つの輪にミリトゥム、レギオン、ベビーバードが飛び込んでいく。

「秘境の竜騎士が、今ここに一騎当千の竜騎士を紡ぐ！戦場を鎮める風となれ！」

☆４＋☆３＋☆１＋☆３＝☆１１

「シンクロ召喚！咆哮せよ《ドラグニティナイト－セイリュウ》！」

現れたのは、刀と鎧を身に着けた武将を背中に乗せた巨大な黄色の龍だった。龍自身もその体格に見合うほどの大きさの刀を持っている。

《ドラグニティナイト－セイリュウ》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星１１／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３５００／ＤＥＦ２５００
ドラゴン族チューナー＋「ドラグニティ」と名のついたチューナー以外のモンスター１体以上
このモンスターはシンクロ召喚でのみ特殊召喚する事ができる。
このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「ドラグニティ」と名のついたモンスター２体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する。
１ターンに１度、このカードに装備された「ドラグニティ」と名のついたモンスター１体を墓地に送る事で、相手フィールド上にセットされた魔法・罠カードまたは相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する事ができる。
このモンスターが「ドラグニティ」と名のついたモンスターを装備していない場合、破壊される。
このモンスターがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は魔法・罠カードを破壊する事ができない。
また、このカードが相手のカード効果によってゲームから除外された時、自分の墓地から攻撃力１０００以下の「ドラグニティ」と名のついたモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

《ドラグニティナイト－セイリュウ》　ＡＴＫ／３５００

「こいつが、レベル１１のドラグニティ…！？」

「セイリュウがシンクロ召喚に成功した時、墓地からドラグニティを２体装備します！《ドラグニティ－アキュリス》と《ドラグニティ－レギオン》を装備！」

アキュリスとレギオンの幻影が現れ、光になって武将の刀に宿る。
本当ならファランクスを装備したかったけど、装備モンスターが尽きたら自壊してしまうから仕方ない。

「ドラグニティが装備された事で、墓地から《ドラグニティ－ベビーバード》を特殊召喚します！」

再びベビーバードがフィールドに現れた。たくさん動いてもらう事になると思うけどよろしくね。

《ドラグニティ－ベビーバード》　ＤＥＦ／　０

「（厄介なモンスターだな…）」

「《ドラグニティナイト－セイリュウ》の効果発動！自身に装備しているドラグニティを墓地に送る事で、相手のセットされた魔法・罠と表側表示のモンスターのどちらかを全て破壊します！」

「何…？」

「《ドラグニティ－アキュリス》を墓地に送り、シュルクさんのモンスターを全て破壊します！」

セイリュウに乗った武将が刀を振るい、巨大な真空波を飛ばす。
真空波はレヴュアタンとグリムロを一瞬でまとめて斬り裂き破壊した。

「ちっ、全体除去か…！レヴュアタンがフィールド上から墓地に送られた時、墓地から魔轟神を3体まで手札に戻す！選ぶのは《魔轟神クルス》と《魔轟神獣キャシー》、そして《魔轟神獣ユニコール

≫だ！シンクロモンスターであるユニコールはエクストラデッキに戻る！」

う…厄介なカードが手札に…。しかも、せっかくトライデントの効果で墓地に送ったユニコールがエクストラデッキに戻ってしまった。

でも、あえて自壊を待たずに自分から破壊したのは、攻撃を止めずに少しでも多くシュルクさんのライフを削るため。それに、魔法・罠の対策がないわけでもない。

「まだです！墓地に送られた《ドラグニティ－アキュリス》の効果で、フィールド上のカードを1枚破壊します！左の伏せカードを破壊！」

アキュリスの幻影が突撃し、伏せカードを貫く。破壊したのは…《次元幽閉》！？危なかった…。

「バトル！《ドラグニティナイト－セイリュウ》でダイレクトアタック！青龍の憤怒斬！」

セイリュウが刀を降り下ろし、龍を象った衝撃波を放つ。でも、シュルクさんは慌てる事なく残った伏せカードを発動させた。

「罠カード《魔轟召集》！手札からチューナーを1体墓地に送る事で、戦闘ダメージを0にする！」

《魔轟召集》
通常罠（オリジナル）
相手ターンの戦闘ダメージ計算時、自分の手札からチューナー1体

を墓地に送って発動する。
その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージを0にする。
その後、除外されている自分のシンクロモンスター以外の「魔轟神」と名のついたモンスターを2体まで自分フィールド上に特殊召喚する。

「墓地に送るチューナーは《魔轟神獣キャシー》だ！」

シュルクさんの前に透明な障壁が展開され、セイリュウの攻撃が防がれる。

「そして、除外されているシンクロモンスター以外の魔轟神を2体まで特殊召喚する！《魔轟神獣ガナシア》を2体特殊召喚！」

さらに、さっきシンクロ素材にされたばかりの白い2足歩行の象が2体フィールドに戻ってきた。

《魔轟神獣ガナシア》　ＡＴＫ／１６００

《魔轟神獣ガナシア》　ＡＴＫ／１６００

「またモンスターが…！」

「本来ならキャシーの効果でセイリュウを破壊したいところだが、キャシーの効果が発動するのは墓地に『捨てた』時だけだ。墓地に『送った』場合は発動しない」

「あ、そうなんですか…」

シュルクさんの説明を聞いて、私は少しだけ安心した。とりあえ

ず、セイリュウは破壊されずに済んだからよかった。

「カードを1枚セットしてターンエンドです」

遊璃
ＬＰ／３１００
手札／１
モンスター／《ドラグニティナイト－セイリュウ》（ＡＴＫ／３５００）《ドラグニティ－ベビーバード》（ＤＥＦ／　０）
魔法・罠／《ドラグニティ－レギオン》リバース×１

まだお互いにダメージは受けてないけど、シュルクさんのフィールドにはガナシアが2体戻ってきて、墓地からカードを回収している。

おそらく、回収した3枚の内唯一手札に残っている《魔轟神クルス》はあのデッキにおけるキーカードの1枚。手札を捨てるギミックが多彩な【魔轟神】なら効果を使うくらい造作もない事。厄介なカードね。

何より怖いのは、あの驚異的な展開力。1ターンで何体呼び出すつもりなの？クロウおじさんと同じくらい…いや、それ以上かもしれない。

「俺のターン！魔法カード《魔轟狂》を発動！自分の手札から魔轟神を任意の枚数捨て、その枚数分ドローする！」

《魔轟狂》
通常魔法（オリジナル）
自分の手札から「魔轟神」と名のついたモンスターを任意の枚数捨

て、自分のデッキから捨てた枚数分ドローする。
墓地に存在するこのカードを除外する事で、自分の手札を1枚捨てる事ができる。

「また手札を捨てるカードを…」

「手札から《魔轟神クルス》と《魔轟神ラグリス》を捨て、2枚ドロー！そして、手札から捨てた《魔轟神クルス》の効果を発動！墓地からレベル4以下の《魔轟神獣キャシー》を特殊召喚する！」

今まで幻影でしか出てこなかった黒猫が、今度は実体化してフィールドに現れた。

《魔轟神獣キャシー》　ＡＴＫ／　８００

「さらに、手札から捨てた《魔轟神ラグリス》の効果発動！カードを2枚ドローする！…！」

ドローしたカードを確認したシュルクさんは、少しだけ驚いた顔をした。ただ、それは一瞬だけですぐに引っ込み、代わりにほんの少しだけ微笑んだ。

「（面白い…！）キャシーはチューナーモンスター！よって、シンクロ召喚が可能だ！レベル3《魔轟神獣ガナシア》にレベル1《魔轟神獣キャシー》をチューニング！」

キャシーが1つの輪になってガナシアに被さり、ガナシアを3つの星に変化させる。

「目覚めし神獣、獣身の精、警告を得て邪(じゃ)を告げる！永久(とわ)の果てに

蘇れ！」

☆３＋☆１＝☆４

「シンクロ召喚！復活せよ！《魔轟神獣クダベ》！」

出てきたのは、白い布で顔を覆い隠し、体には金色の模様を入れた赤い布を身につけ、２本の角と黒い馬のような体を持つ奇妙な獣だ。

《魔轟神獣クダベ》
シンクロ・効果モンスター
星４／光属性／獣族／ＡＴＫ２２００／ＤＥＦ１１００
「魔轟神」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードは自分の手札の枚数によって以下の効果を得る。
●０枚：このカードは戦闘及びカードの効果では破壊されない。
●３枚以上：エンドフェイズ時にこのカードを破壊する。

《魔轟神獣クダベ》　ＡＴＫ／２２００

「え…！？」

「クダベ？ユニコールじゃないのか？」

紅刃さんは同じレベルのユニコールじゃなくクダベを出した事に疑問を持っているけど、私は別の意味で驚いた。トライデントの効果でクダベの効果を確認したからこそだ。

「俺の手札が０枚の時、クダベは戦闘とカード効果で破壊されない。

だが…」

「今のシュルクさんの手札は5枚。確か、クダベは手札が3枚以上の時エンドフェイズに自壊する効果を持っているはず…」

「自壊！？」

このタイミングでクダベを出した事が理解できない。わざわざ破壊してどうするつもりなの？墓地肥やしにしても、もっと効率のいい方法があるはず。

「そうだ。クダベには悪いが、破壊されてもらなければならない。魔法カード《シンクロ・オーバーパワー》を発動！シンクロモンスター1体の攻撃力を１０００ポイントか２０００ポイントアップさせる！」

《シンクロ・オーバーパワー》
通常魔法（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター1体を選択して発動する。
エンドフェイズ時まで選択したモンスターの攻撃力は１０００ポイントまたは２０００ポイントアップし、選択したモンスターの戦闘で発生する戦闘ダメージを0にする。
選択したモンスターの攻撃力が４０００以上になった場合、選択したモンスターを破壊し自分のデッキからカードを1枚ドローする。

「俺はクダベの攻撃力を２０００ポイントアップさせる！」

《魔轟神獣クダベ》　ＡＴＫ／２２００→４２００

「そして、攻撃力が４０００を超えた場合はそのモンスターを破壊し、カードを1枚ドローする」

「「？」」

クダベは特にリアクションを取る事もなく、光の粒になり消えてしまった。

「（何でわざわざ破壊したんだ？あいつの事だ、意味のない動きには見えねえけど…）」

何で自分から破壊するような事を？クダベじゃセイリュウには敵わないけど、もっと他に方法があるはず…。

…ちょっと待って。『自分から』…？

「…！まさか、発動トリガー！？」

「察しがいいな。魔轟神のシンクロモンスターが破壊された時のみ、このカードを手札から特殊召喚する事ができる！現れよ！《魔轟神王アモン》！！」

クダベがいた場所に巨大な黒い穴が開く。その中から、ゆっくりモンスターが昇ってくる。

「何だこいつ…！？」

レヴュアタンと同じように玉座に座る巨大なそのモンスターは、黒い長髪と白い肌を持ち、金と黒の鎧を身につけた人型の悪魔。翼はなく、赤い双眸が私達の姿を捉えている。

《魔轟神王アモン》
効果モンスター（オリジナル）
星１２／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　？／ＤＥＦ　？
このカードは通常召喚できない。
自分フィールド上に表側表示で存在する「魔轟神」と名のついたシンクロモンスターが破壊された場合のみ特殊召喚する事ができる。
このカードを特殊召喚する直前に破壊されたモンスターは墓地から特殊召喚する事ができない。
このカードの元々の攻撃力と守備力は自分の墓地に存在する「魔轟神」と名のついたモンスター×４００ポイントの数値となる。
このカードがフィールド上を離れる場合、代わりに自分の墓地から「魔轟神」と名のついたモンスター１体を除外する事ができる。
以下の効果をそれぞれ１ターンに１度ずつ使用できる。
●手札の「魔轟神」と名のついたモンスターを墓地に送る事で、相手フィールド上のカード１枚を破壊する事ができる。
この効果を使用するターン、このカードは攻撃できない。
●自分のデッキから「魔轟神」と名のついたモンスター１体を手札に加える事ができる。

《魔轟神王アモン》　ＡＴＫ／　？

「クダベを破壊したのは、こいつを呼び出すためだったのか…！」

「アモンの元々の攻撃力と守備力は、墓地の魔轟神の数×４００ポイントとなる。墓地の魔轟神は９体。よって、攻撃力と守備力は３６００となる」

《魔轟神王アモン》　ＡＴＫ／　？→３６００

「３６００…！？」

手札からモンスターを墓地に捨てる【魔轟神】にとって、墓地のモンスターを増やす事は造作もない事。つまり、アモンの攻撃力と守備力はその気になればいくらでも上がる…！

「ただし、アモンを呼び出す礎となったモンスターは墓地からの特殊召喚を封じられる。俺はまだ通常召喚を行っていない！チューナーモンスター《魔轟神獣ペガラサス》を召喚する！」

シュルクさんはさらにモンスターを繰り出してきた。翼と黒いたてがみを生やした小さな白馬だ。

《魔轟神獣ペガラサス》
チューナー（効果モンスター）
星１／光属性／獣族／ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ１６００
このカードが手札から墓地へ捨てられた時、このカードを自分フィールド上にセットする事ができる。
このカードがリバースした時、手札の「魔轟神」と名のついたモンスター１体を見せる事で、自分のデッキから「魔轟神」と名のついたモンスター１体を墓地へ送る。

《魔轟神獣ペガラサス》　ＡＴＫ／　１００

「レベル３《魔轟神獣ガナシア》にレベル１《魔轟神獣ペガラサス》をチューニング！」

ペガラサスが変化した１つの輪に、２体目のガナシアが飛び込み３つの星になる。

「目覚めし神獣、眩き尖角、光と闇の狭間を穿つ！永久（とわ）の果てに蘇れ！」

☆３＋☆１＝☆４

「シンクロ召喚！復活せよ！《魔轟神獣ユニコール》！」

今度は金色のたてがみと黒い尻尾が特徴の白馬が現れた。大人の馬くらいの大きさのそのモンスターの額からは、銀色の鋭い角が生えている。

《魔轟神獣ユニコール》　ＡＴＫ／２３００

「やっぱり出てきやがった…！」

「エクストラデッキから直接墓地に送った程度で、俺の相棒を封じる事はできん」

『ブルル！』

「！」

相棒…。私はある事に気づいた。あのモンスター、ミリトゥムと同じような感じがする…。

「もしかして、そのモンスターは精霊ですか？」

「当たりだ。こいつには何度も助けられている」

シュルクさんの目は、ユニコールの事を話す時だけ優しくなって

いるような気がする。いきなり精霊のカードを墓地に送ったのは、ちょっと悪い事しちゃったかな…？

「続けるぞ。墓地の魔轟神が増えた事でアモンの攻守がさらに上がる！」

《魔轟神王アモン》　ＡＴＫ／３６００→４４００

セイリュウの攻撃力を超えた…！ユニコールの効果が頭を過り嫌な予感を瞬時に感じ取った私は、自分の伏せカードに手を掛けた。

「速攻魔法発動！《収縮》！相手モンスターの攻撃力を半分にします！」

《収縮》
速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターの元々の攻撃力はエンドフェイズ時まで半分になる。

「対象は《魔轟神王アモン》です！」

アモンが半分くらいの大きさに縮んでいく。カウンターで使うつもりだったけど、ユニコールに無効化される可能性があるから今使うしかない。

《魔轟神王アモン》　ＡＴＫ／４４００→２２００

「ユニコールを警戒したか…いい判断だ。アモンの効果発動！１タ

ーンに1度、デッキから魔轟神を1体手札に加える！俺が選ぶのは《魔轟神獣キャシー》だ」

2体目…！しかもこのタイミングでサーチするって事は…！

「墓地の《魔轟狂》の効果を発動！」

「墓地から魔法…？」

「まだ効果があるのかよ？」

「墓地からこのカードを除外する事で、手札を1枚捨てる事ができる！当然《魔轟神獣キャシー》を捨て、効果発動！表側表示のカード…《ドラグニティナイト－セイリュウ》を破壊する！」

やっぱり…。また黒猫の幻影が一直線に突撃して、セイリュウを貫き爆破した。これで3回目…。

「セイリュウが…！？」

「墓地の魔轟神が増えた事で、アモンの攻守はさらに４００ポイントアップする。だが、《収縮》の影響で上昇値は２００ポイントだ」

《魔轟神王アモン》　ＡＴＫ／２２００→２４００

「う…」

「カードを1枚セット！これで互いの手札は同じ1枚！手札が同じ枚数の時、ユニコールの効果が発動する！」

「相手のカード効果を全部無効にして破壊する永続効果か…！」

シュルクさんの説明を紅刃さんが引き継ぐ。これが怖いからユニコールを墓地に送ったのに、大して意味ないじゃない…！最も、今の時点では特に発動するカードはないけど…。

「バトル！《魔轟神獣ユニコール》で《ドラグニティ－ベビーバード》を攻撃！コラージュ・スパーク！」

『ヒヒィィィン！』

ユニコールが灰色の光を纏って突進してきた。ベビーバードは突き飛ばされてあっさり破壊されてしまう。

「…！」

「《魔轟神王アモン》でダイレクトアタック！ヘルフォース・ゴルペ！」

アモンが両手から黒いエネルギー砲を放つ。半分の威力でもライフを削るのには十分で、私は防ぐ術もなく直撃を受けた。

「きゃあぁぁぁっ！」

遊璃　ＬＰ／３１００→　７００

「遊璃！」

「ターンエンドだ。アモンの攻撃力は元に戻る」

ターンエンドの宣言の後に、アモンは元の大きさに戻っていった。

《魔轟神王アモン》　ＡＴＫ／２４００→４８００

シュルク
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《魔轟神王アモン》（ＡＴＫ／４８００）《魔轟神獣ユニコール》（ＡＴＫ／２３００）
魔法・罠／リバース×１

また致死量レベルの攻撃を…。しかも、私のフィールドには何もない。次でアモンとユニコールをどうにかしないと負ける…！

「（ユニコールのせいでカード効果は使いにくいし、攻撃力をガンガン上げるアモンも脅威だ。しかも遊璃のフィールドはがら空きになっちまった。ここからどうする…？）」

「さあ、お前にこの布陣を崩せるか？」

ここで終わり…？いや、違う。まだ戦える。まだ希望は繋がっている。

「…やってみせますよ」

「「！」」

「ここからが、勝負です！」

このデュエル、諦めるにはまだ早い…！

To be continued...

特別編　来訪者は蟹と魔女の娘（中編）（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「さ、始めましょうか。『今回のキーカード』の時間よ」

勇香「前回に引き続き、雪乃と瑞波がゲスト出演だ！」

瑞波「いやぁ、いろいろとやばい状況になってんな…」

雪乃「遊璃の残りライフがたったの７００で、しかもフィールドがガら空き…！？」

勇香「おいおい、大丈夫なのか？相手は厄介なユニコールまで出してやがるし…」

雪乃「いえ…大丈夫、大丈夫よ。遊璃ならこの状況を突破できるはず…！」

璃音「そうね。幾多の戦いを乗り越えてきた彼女なら、きっとやってくれるはずよ」

瑞波「ま、あたしらが信じなきゃ始まんないよな。ファイトだ、遊璃！」

璃音「さて、カード考察に入りましょうか。今回紹介するのは、遊璃が使用した大型のシンクロモンスター《ドラグニティナイト－セイリュウ》よ」

《ドラグニティナイト－セイリュウ》
シンクロ・効果モンスター（オリジナル）
星１１／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３５００／ＤＥＦ２５００
ドラゴン族チューナー＋「ドラグニティ」と名のついたチューナー以外のモンスター１体以上
このモンスターはシンクロ召喚でのみ特殊召喚する事ができる。
このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「ドラグニティ」と名のついたモンスター２体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する。
１ターンに１度、このカードに装備された「ドラグニティ」と名のついたモンスター１体を墓地に送る事で、相手フィールド上にセットされた魔法・罠カードまたは相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する事ができる。
このモンスターが「ドラグニティ」と名のついたモンスターを装備していない場合、破壊される。
このモンスターがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は魔法・罠カードを破壊する事ができない。
また、このカードが相手のカード効果によってゲームから除外された時、自分の墓地から攻撃力１０００以下の「ドラグニティ」と名のついたモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

璃音「ドラゴン族チューナー＋鳥獣族非チューナーの縛りがある今までのドラグニティナイトとは違い、ドラグニティのチューナーと風属性非チューナーで出せるわ。レベルがかなり高いものの、比較的召喚条件が緩いわね」

勇香「遊璃がやったようにドラグニティのシンクロモンスターをシンクロ素材にできるのは助かるぜ。他だとこうはいかねえからな」

瑞波「シンクロ召喚した時に墓地からドラグニティを2体まで装備できるんだったな。シンクロモンスターを装備して《ドラグニティ－ミリトゥム》の効果で特殊召喚、なんて芸当もできるぞ」

雪乃「ただ、装備しているドラグニティを使い切ると自壊してしまうから、それは少し難しいわね。このモンスターの1番の魅力は、豪快な全体除去にあるわ」

勇香「自身に装備しているドラグニティ1体を引き換えに、相手のセットされた魔法・罠か表側表示のモンスターをまとめて破壊する効果だっけ？表側の魔法・罠は無理だけど、状況に応じて破壊するカードを選べるのは強いな」

瑞波「今回遊璃がやったみたいに《ドラグニティ－アキュリス》を使えば、全体除去の後に残ったカードも破壊できるぞ。決まれば爽快だな！」

璃音「自壊効果のせいで、普通に召喚しても破壊効果は1回が限度なのが難点ね。《竜操術》などで装備を増やせば何回かは発動できるわよ」

瑞波「効果はまだあるぞ！こいつがいる限り相手は魔法・罠を破壊できない！装備カードを破壊されて勝手にこいつを自壊させられる心配はないんだ！」

雪乃「後、除外された時に攻撃力１０００以下のドラグニティを特殊召喚する効果も持っているわ。何気にお得ね」

勇香「《次元幽閉》や《奈落の落とし穴》でやられても、一応モンスターは絶やさずに済むな。この除外された時の効果はフィールド

からだろうが墓地からだろうが関係なく発動するぞ。ただ、自分からの除外じゃ発動しないからそこは注意しろよ」

璃音「今回はここまでよ」

勇香「何となく予想はしてたけど、本当に3部構成になるなんてな。楽しみが増えていい感じだぜ」

瑞波「次回で決着か…。あたしとしては遊璃に勝ってほしいな」

雪乃「同感ね。とにかく、次回を待ちましょう」

璃音「感想はいつでも受け付けているわよ。気が向いたら書き込んでくれると嬉しいわ」

勇香「次回も見てくれよな！」

ーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

今回シュルクが使用した《魔轟狂》は機皇帝プラシド∞さんが、《魔轟神王アモン》はユタさんが投稿してくださったオリカです。機皇帝プラシド∞さん、ユタさん、ありがとうございます。また、遊璃が使用した《渓谷防護壁》《ドラグニティ－ベビーバード》《ドラグニティ－ガードナー》《ドラグニティナイト－セイリュウ》は『遊戯王ＧＸ－蟹と魔女の娘－』で遊璃が実際に使用したカードです。

何度も書き直し、さらに諸事情で修正を加えていて遅くなりまし

た。《魔轟神獣クダベ》の効果を『手札が3枚以上なら即自壊』と勘違いしていた事もあって、なかなか大変でした。

コラボ回2度目の3部構成となりましたが、とりあえず今月中には終わらせます。中間考査があったりと忙しいですが、頑張ります。

では、また次回！

特別編　来訪者は蟹と魔女の娘（後編）（前書き）

☆精霊の呟き☆

カイエン『いよいよ「遊戯王ＧＸ－蟹と魔女の娘－」とのコラボも後編ね』

スイレン『1枚の手札しか残されていない遊璃様はどのような反撃を見せてくれるのでしょうか？』

ゴーズ『馬鹿高い攻撃力と効果無効が相手だからな。生半可な戦術じゃ太刀打ちできないぞ』

カイエン『かといって、このまま終わるとも思えないわよ？どう出るのかしらね？』

スイレン『いよいよ大詰めです！最後まで是非読んでください！』

ゴーズ『今回の締めの言葉はスペリオルスさんからのリクエストだな。それじゃ、特別編の後編スタートだ。

これが俺の正義…護る正義だ！』

カイエン『その台詞、今回の話とは特に関係ないわよね？』

ゴーズ『ほっとけ！』

特別編　来訪者は蟹と魔女の娘（後編）

ＳＩＤＥ／遊璃

まずいわね…。状況は最悪。

シュルク
ＬＰ／４０００
手札／１
モンスター／《魔轟神王アモン》（ＡＴＫ／４８００）《魔轟神獣ユニコール》（ＡＴＫ／２３００）
魔法・罠／リバース×１

遊璃
ＬＰ／　７００
手札／１
モンスター／なし
魔法・罠／なし

シュルクさんは４０００を超える攻撃力を持つ《魔轟神王アモン》と、手札が同じ枚数の時にあらゆるカード効果を無効にして破壊してしまう《魔轟神獣ユニコール》を揃えていて、ライフは１ポイントも減っていない。それに対して、私のフィールドには何もない。ライフも７００しかないし、手札も１枚だけ。

それでもまだ諦めない。フィールドには何もなくても、デッキと墓地には可能性が残されている。それがある限りは…！

「まだ、諦めない！私のターン！」

ユニコールがいる以上、手札には細心の注意を払わなければならない。手札が２枚の時に手札からカードを発動するのは無理。上手く調整しないと…。

「カードを１枚セット！そして魔法カード《オーロラ・ドロー》を発動！手札が０枚の時、カードを２枚ドローします！」

これは手札に残していたカード。半分祈るような気持ちでカードを引く。

「…！」

来た。でもまだ足りない。

「さらに今伏せた魔法カード《埋葬呪文の宝札》を発動！墓地の魔法カードを３枚除外する事で、カードを２枚ドローします！《マジック・プランター》《調和の宝札》《シンクロキャンセル》を除外！２枚ドロー！そして魔法カード《調和の宝札》！手札から攻撃力１０００以下のドラゴン族チューナー《ドラグニティ－コルセスカ》を墓地に送り、カードを２枚ドローします！」

《ドラグニティ－コルセスカ》
チューナー（効果モンスター）
星１／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ　７００
このカードがカードの効果によって装備カード扱いとして装備されている場合に発動する事ができる。
装備モンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、自分のデッキから装備モンスターと同じ種族・属性のレベル４以下の

モンスター1体を手札に加える事ができる。

…よし！ほしいカードは揃った。後はシュルクさんに妨害されない事を祈るだけ。

「魔法カード《ミラクルシンクロフュージョン》！」

「《ミラクルシンクロフュージョン》？」

「フィールドと墓地から融合素材を除外し、シンクロモンスターを融合素材とする融合モンスターを融合召喚します！」

「融合だと…？」

「墓地からレベル6以上のドラグニティのシンクロモンスター《ドラグニティナイト－セイリュウ》と、風属性ドラゴン族の《ドラグニティ－コルセスカ》を除外！」

紅刃さんとシュルクさんが意外に思う中、セイリュウとコルセスカの幻影が光になって1つに合わさる。

「融合召喚！《ドラグニティパラディン－エクスカリバー》！」

光がモンスターの姿を象って実体化する。そのモンスターは黄緑の龍で、薄い緑の盾と細長い槍、緑の鎧とマントを身につけた騎士を背負っていた。

《ドラグニティパラディン－エクスカリバー》
融合・効果モンスター（オリジナル）
星10／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２８００

「ドラグニティ」と名のついたレベル6以上のシンクロモンスター＋風属性ドラゴン族モンスター
このモンスターは融合召喚でしかエクストラデッキから特殊召喚できない。
このカードの融合召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「ドラグニティ」と名のついたチューナーを任意の数だけこのカードに装備する事ができる。
このカードは通常の攻撃とは別にこのカードに装備されている「ドラグニティ」と名のついたチューナーの数だけ攻撃する事ができる。
このカードに装備された「ドラグニティ」と名のついたモンスターの効果は無効化される。
このカードが戦闘及びカード効果で破壊される場合、装備されている「ドラグニティ」と名のついたカードを2枚墓地に送る事でこのカードの破壊を無効にする（この時、装備カード扱いの状態から墓地に送られる事で発動する効果は発動しない）。

《ドラグニティパラディン－エクスカリバー》　ＡＴＫ／３０００

「攻撃力３０００…！？」

「エクスカリバーが融合召喚に成功した時、墓地のドラグニティのチューナーを任意の数装備できます！墓地の《ドラグニティ－ピルム》《ドラグニティ－アキュリス》《ドラグニティ－ファランクス》を装備！」

３体のドラグニティの幻影が光になって騎士の槍に宿る。後1体はほしいけど仕方ないわね。

「ただし、装備したカードの効果は無効化され、墓地に送られた時に発動する効果も発動しません！さらに、ドラグニティが装備され

た事で、墓地から《ドラグニティ－ベビーバード》を特殊召喚します！」

卵の殻を着た小さな鳥がまたフィールドに戻ってきた。これで3度目ね。

《ドラグニティ－ベビーバード》　ＤＥＦ／　０

「で、どうするつもりだ？攻撃力はアモンに遠く及ばないぞ？」

「足りないなら超えるまでです！永続魔法《竜操術》を発動！ドラグニティを装備したモンスターの攻撃力は５００ポイントアップします！」

《竜操術》
永続魔法
「ドラグニティ」と名のついたモンスターを装備した、自分フィールド上に存在するモンスターの攻撃力は５００ポイントアップする。また、１ターンに１度、手札から「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター１体を装備カード扱いとして自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体に装備する事ができる。

《ドラグニティパラディン－エクスカリバー》　ＡＴＫ／３０００
↓３５００

「カードを1枚セット！そしてバトル！《ドラグニティパラディン－エクスカリバー》で《魔轟神王アモン》を攻撃！」

「「！？」」

攻撃力がまだ低い事を気にせずエクスカリバーが飛び立ち、騎士が槍を構えて攻撃体勢に入った。槍が光を纏い、巨大な槍を象る。

「自滅…ではなさそうだな。攻撃は通す」

「なら、ダメージステップ時に手札から速攻魔法《突進》を発動！フィールド上のモンスターの攻撃力を７００ポイントアップさせます！さらに、チェーンして墓地から《スキル・サクセサー》の効果発動！」

「《スキル・サクセサー》！？いつの間に！？」

「《ドラグニティナイト－トライデント》の効果で墓地に送ったカードか…！」

「正解です！」

そう、最初のターンにトライデントを出す事に決めたもう１つの理由がこの《スキル・サクセサー》。発動コストには丁度よかった。

「墓地の《スキル・サクセサー》を除外する事で、自分のモンスター１体の攻撃力を８００ポイントアップさせます！」

《ドラグニティパラディン－エクスカリバー》　ＡＴＫ／３５００→４３００→５０００

「アモンを上回った！」

「疾風迅雷－聖なる槍撃（セイント・スピア）！」

エクスカリバーがアモンに急接近し、勢いのままアモンに巨大な光の槍を突き出した。

ガキィッ！

「え…！？」

でも、アモンが片手を翳して張った紫のバリアに防がれてしまった。

「所詮は一時的な強化に過ぎない！凌げばそれまでだ！《魔轟神王アモン》がフィールドから離れる時、墓地の魔轟神を除外する事でフィールドに留まる！《魔轟神獣クダベ》を除外して破壊を無効にする！」

シュルク　ＬＰ／４０００→３８００

《魔轟神王アモン》　ＡＴＫ／４８００→４４００

う…破壊や除外、バウンスにまで耐性を持っていたなんて…。でも、まだよ。効果を使用する度に弱体化するなら、まだ勝機はある。

「破壊できないなら削り切る！エクスカリバーは装備したドラグニティの数だけ追加で攻撃できます！」

「何…！？」

さすがのシュルクさんも驚きを顕わにする。この連続攻撃こそが、エクスカリバーの最大の強み！

「もう1度アモンに攻撃！聖なる槍撃（セイント・スピア）・2！」

エクスカリバーがバリアを壊そうと再び槍を突き立てる。アモンに攻撃自体は通らなくても、衝撃は十分に伝わっている。

「く…！《魔轟神獣ペガラサス》を除外する事で破壊を無効にする！」

シュルク　ＬＰ／３８００→３２００

《魔轟神王アモン》　ＡＴＫ／４４００→４０００

「もう1度！聖なる槍撃（セイント・スピア）・3！」

光の槍でさらに突く。アモンが苦悶の表情を浮かべているところからも、アモンの力が確実に弱まっている事がわかる。

「ちぃ…！《魔轟神獣キャシー》を除外！」

シュルク　ＬＰ／３２００→２２００

《魔轟神王アモン》　ＡＴＫ／４０００→３６００

「凄え…！後一撃で遊璃の勝ちだ！」

「これで最後！《魔轟神獣ユニコール》に攻撃！ラスト・セイント・スピア！！」

私は迷う事なく攻撃対象をユニコールに変更した。エクスカリバーは一旦空中に下がり、槍を構え直してユニコールに突撃する。

『ブルル…！？』

「すまない…！罠カード《ガード・ブロック》！戦闘ダメージを無効にし、カードを1枚ドローする！」

ユニコールはようやく標的を捕らえた槍に貫かれて破壊されたけど、シュルクさんは透明な障壁のおかげで無事だった。当のシュルクさんはほんの少し苦い顔でカードを引いた。

「…墓地の魔轟神が増えた事で、アモンの攻撃力は４００ポイントアップする」

《魔轟神王アモン》　ＡＴＫ／３６００→４０００

「防がれた…。リバースカードオープン！魔法カード《一時休戦》！お互いにカードを1枚ドローし、次の相手のエンドフェイズ時までお互いのダメージを0にします！」

《一時休戦》
通常魔法
お互いに自分のデッキからカードを1枚ドローする。
次の相手ターン終了時まで、お互いが受ける全てのダメージは0になる。

このままだと、攻撃力を上げたアモンにとどめを刺されかねない。とりあえず、これで1ターンは持つ。

「攻撃した後に発動する事で、デメリットを軽減したか…。まあいい、ドローさせてもらうぞ」

「ドロー！カードを１枚セットしてターンエンド！」

私がターンを終えると、エクスカリバーの槍は元に戻った。

《ドラグニティパラディン―エクスカリバー》　ＡＴＫ／５０００↓３５００

遊璃
ＬＰ／　７００
手札／０
モンスター／《ドラグニティパラディン―エクスカリバー》（ＡＴＫ／３５００）《ドラグニティ―ベビーバード》（ＤＥＦ／　６００）
魔法・罠／《ドラグニティ―アキュリス》《ドラグニティ―ピルム》《ドラグニティ―ファランクス》《竜操術》リバース×１

後一歩のところでライフを削り切れなかった。ユニコールを倒せただけマシだけど…。

「やるな。後１体ドラグニティが装備されていたら負けていた。不動遊星と十六夜アキの娘というだけはある」

「…！」

次の手を考えている途中に耳に入ったシュルクさんの言葉に、私はイラッとした。

「…私の実力はパパとママから貰ったわけじゃありません」

「「！」」

言葉を遮り、私はイラついた調子で静かに言い返した。

「いろんな人達とデュエルして、何度も勝って何度も負けて、それで今の私がいるんです！」

『2人の娘だから強い』だなんて目で見られるのは嫌いだ。自分自身で数え切れないほど戦って、その中で手に入れた実力をそんな価値観で見ないでほしい。

シュルクさんは少し黙ったままでいると、小さく笑みを浮かべてこう言った。

「…どうりで強いわけだ」

「え？」

予想外の返答に、私は思わずきょとんとした。

「両親が凄腕のデュエリストともなると、どうしても最初は『両親が強いから娘も強いはず』だという先入観が働いてしまう。俺も例外ではない」

「……」

「だが、お前はそれに甘える事なく自分の足で上を目指し、自ら勝ち得た強さを持っている。それを親の遺伝の一言で片付ける事はできないし、お前への無礼に値する」

真っ向からそんな評価をされるとは思わなかったから、私はただ呆然と話を聞くだけだった。

「お前の強さがどこから来るかを確かめたかっただけだ。気を悪くしたなら謝る」

「い、いえ！悪気はなかったんですし、大丈夫ですよ！それに、私の事をそんな風に評価してくれたのは嬉しいですし…」

謝ってきたシュルクさんに対して、私は慌てて返事を返した。シュルクさんが謝る必要はないし、何か少し照れ臭い。

「シュルクはもちろん、俺も遊璃の事を1人のデュエリストとして見てんだ。ケチなんて付けさせやしねえよ」

「紅刃さん…」

さっきまで黙っていた紅刃さんも話に入ってきた。『1人のデュエリストとして』…。私の素性を知って、なおかつそう見てくれる人達に会えたのはとても嬉しい。

そして、こんなに強い人とデュエルできる事も…。

「さて、そろそろ続けるか。負けるつもりは毛頭ないからな。俺のターン！」

シュルクさんがカードを引くのと同時に、私は気を引き締めた。あの脅威的な展開力がある以上、何をしてきてもおかしくない。

「《魔轟神王アモン》の効果発動！1ターンに1度、デッキから魔

轟神を1体手札に加える事ができる！俺が選ぶのは、2体目の《魔轟神クルス》！」

2体目…！また蘇生効果を使うつもりなの？いや、問題は手札を捨てるための手段。場合によってはさらに不利になる。

「永続魔法《魔轟神の報復》を発動！1ターンに1度、フィールド上に存在するレベル5以上の魔轟神の数だけカードをドローする！」

《魔轟神の報復》
永続魔法（オリジナル）
1ターンに1度、デッキから自分フィールド上に存在するレベル5以上の「魔轟神」と名のついたモンスター1体につき1枚カードをドローする。
自分のターンのエンドフェイズ時に手札を1枚墓地に捨てる。
捨てなければこのカードを破壊する。

「今フィールド上にいるレベル5以上のモンスターはレベル12の《魔轟神王アモン》のみ！よって、1枚ドロー！そして、手札から速攻魔法《魔轟神の謀略》を発動！手札を1枚捨てる事で、表側表示のカードを2枚破壊する！」

《魔轟神の謀略》
速攻魔法（オリジナル）
手札から「魔轟神」と名のついたモンスター1体を墓地に送り、フィールド上に表側表示で存在するカード2枚を選択して発動する。
選択したカードを破壊する。

「《ドラグニティパラディン－エクスカリバー》と《竜操術》を破壊！」

ソリッドビジョンのカードから白い光線が飛び出した。１本は《竜操術》を貫いて破壊し、もう１本はエクスカリバーに向かう。

「エクスカリバーが破壊される時、自身に装備したドラグニティを２体墓地に送る事でフィールド上に留まる事ができます！《ドラグニティ―アキュリス》と《ドラグニティ―ファランクス》を墓地へ！」

エクスカリバーの槍から光が２つ飛び出し、それぞれアキュリスとファランクスの幻影に変化した。２体は並んでエクスカリバーの盾になり、光線を防ぎ切って消滅した。

「エクスカリバーも破壊耐性を持っていたのか！？」

「だが、その効果はもう使えないと見てよさそうだな」

確かに、今のエクスカリバーに装備されているのは《ドラグニティ―ピルム》だけ。破壊を防ぐには後１体足りない。

「…《竜操術》がフィールド上から離れたので、エクスカリバーの攻撃力は元に戻ります」

《ドラグニティパラディン―エクスカリバー》　ＡＴＫ／３５００→３０００

「手札から捨てた《魔轟神クルス》の効果で、墓地からレベル４以下の魔轟神を特殊召喚する！《魔轟神獣ユニコール》を特殊召喚！」

『ヒヒィーン！』

せっかく倒したユニコールがまたフィールドに出てしまった。そういえば、ユニコールのレベルは丁度４だった。

《魔轟神獣ユニコール》　ＡＴＫ／２３００

「また…！」

「やっぱりそいつか…！」

「そして、チューナーモンスター《魔轟神レイヴン》を召喚！」

赤黒い翼と白い肌が特徴の人型の悪魔が現れた。黒い服を着ていて、頭の上半分は黒い被り物の仮面で隠れている。

《魔轟神レイヴン》
チューナー（効果モンスター）
星２／光属性／悪魔族／ＡＴＫ１３００／ＤＥＦ１０００
１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。自分の手札を任意の枚数捨て、その枚数分このカードのレベルをエンドフェイズ時まで上げる。
このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、この効果によって捨てた手札の枚数×４００ポイントアップする。

《魔轟神レイヴン》　ＡＴＫ／１３００

「効果発動！手札を任意の枚数捨てる事で、捨てたカード１枚につきレベルを１つ、攻撃力を４００ポイントアップさせる！残りの手札２枚を捨て、レベルを２つ、攻撃力を８００ポイントアップ！」

《魔轟神レイヴン》　ＡＴＫ／１３００→２１００　☆２→４

「さらに、《魔轟神ルリー》は手札に捨てられた場合特殊召喚する！」

２体目の小さな仮面の悪魔がレイヴンの横に現れた。レベルの合計は…５。

《魔轟神ルリー》　ＡＴＫ／　２００

「レベル１《魔轟神ルリー》にレベル４となった《魔轟神レイヴン》をチューニング！」

レイヴンが４つの輪に変化し、ルリーが翼をばたつかせて輪を潜り１つの星になる。

「目覚めし神が、勝利の栄光へ歩を進める！　永久（とわ）の果てに蘇れ！」

☆１＋☆４＝☆５

「シンクロ召喚！復活せよ！《魔轟神レイジオン》！」

輪と星が光の柱となり、中から黒い翼を背中に生やした黒と黄色の人型の悪魔が飛び出した。

《魔轟神レイジオン》　ＡＴＫ／２３００

「自分の手札が１枚以下の時にレイジオンがシンクロ召喚に成功した時、手札が２枚になるようにカードをドローする！そして、レイヴンの効果で捨てたカードも含めて墓地の魔轟神が増えた事により、

アモンの攻撃力がさらに上がる！」

《魔轟神王アモン》　ＡＴＫ／４０００→５２００

「攻撃力５２００！？」

私は思わず声を上げてしまった。《一時休戦》がなければ、間違いなく負けていた。

「エクスカリバーには今の内に退場してもらうか。墓地の《魔轟神クシャノ》の効果発動！」

「《魔轟神クシャノ》？」

「レイヴンの効果で捨てたもう１枚のカードか…！」

「手札を１枚捨て、墓地のこのモンスターを手札に加える！そして、手札から捨てた《魔轟神獣キャシー》の効果発動！表側表示のカード…エクスカリバーを破壊する！」

３体目のキャシーの幻影がエクスカリバーに突撃する。エクスカリバーの破壊を防ぐ手段はない。だから、これを発動するのは今しかない！

「罠発動！《ドラグニティ・ブレイク》！装備状態のドラグニティを墓地に送り、相手の表側表示のカードを２枚破壊します！」

《ドラグニティ・ブレイク》
通常罠（オリジナル）
自分の魔法＆罠カードゾーンに存在する「ドラグニティ」と名のつ

いたカード1枚を墓地に送り発動する。
相手フィールド上に表側表示で存在するカードを2枚選択して破壊する。

「何！？」

「《ドラグニティ－ピルム》を墓地に送り、《魔轟神獣ユニコール》と《魔轟神レイジオン》を破壊！」

『ブルッ！？』

フィールド上に2つの砲搭を持つ砲台が現れ、同時にキャノン砲を発射する。それを通り抜けてキャシーがエクスカリバーにぶつかり爆発を引き起こして破壊し、直後にユニコールとレイジオンが砲撃を受けて爆散した。

「ちぃっ…！墓地の魔轟神が2体増えた事で、アモンの攻撃力は８００ポイントアップする！」

《魔轟神王アモン》　ＡＴＫ／５２００→６０００

「バトル！《魔轟神王アモン》で《ドラグニティ－ベビーバード》を攻撃！ヘルフォース・ゴルペ！」

威力がさらに高まったアモンの黒いエネルギー砲は、簡単にベビーバードを葬った。これで私のフィールドは再びがら空きになってしまった。

「エンドフェイズ時に《魔轟神の報復》の効果で手札を1枚捨てる。捨てたのは《魔轟神クシャノ》。アモンの攻撃力はさらに４００ポ

イントアップする」

《魔轟神王アモン》　ＡＴＫ／６０００→６４００

「ターンエンドだ」

シュルク
ＬＰ／２２００
手札／１
モンスター／《魔轟神王アモン》（ＡＴＫ／６４００）
魔法・罠／《魔轟神の報復》

「（残りの手札は3体目の《魔轟神獣ガナシア》。次のドロー次第でまたシンクロ召喚ができるが…どう来る？）」

何とか持ちこたえた…。ユニコールはもういないから、効果は自由に使える。アモンの破壊はほぼ不可能。なら、他の方法を考えるしかない。

「私のターン！」

！《壺の中の魔術書》…！確かにこの状況では嬉しいけど、シュルクさんの手札も増やしてしまう。シュルクさんの事だからまたユニコールを蘇生させるなりアモンの攻撃力を上げるなりしそうだし…。

要するに、これで逆転できなかったら私の負け。

「魔法カード《壺の中の魔術書》を発動！互いにカードを3枚ドローします！」

「ほぉ…勝負に出るか」

シュルクさんは感心しつつカードを引いた。

正直、緊張している。これでいいカードが引けなかったらと思うと、少し怖い。

それでも、私は自分のデッキを信じる。信じていられる。今までも、これからも。

「ドロー！！」

そして、この瞬間も…！

「（さあ、どう出る…？）」

「……っ！」

引いたカードを見た瞬間、無意識に頭の中でカードの方程式が組み上がっていく。

全てが繋がり、導き出された答えは…。

「…手札から、《ドラグニティ－ドゥクス》を召喚！」

私は手始めに、指揮棒を持った白い鳥人を呼び出した。今引いたカードの1枚目よ。

《ドラグニティ－ドゥクス》　ＡＴＫ／１５００

「ドゥクスが召喚に成功した時、墓地のレベル3以下のドラゴン族ドラグニティを自身に装備します！墓地の《ドラグニティ－ファランクス》を装備！」

金色の鎧を身に纏う青い龍が飛び出し、ドゥクスがその背中に飛び乗った。

「ファランクスの効果発動！装備されている時、フィールドに特殊召喚できます！」

ドゥクスが指揮棒を振りながら飛び降りると、ファランクスはドゥクスから離れて横に並んだ。

「行きます！レベル4《ドラグニティ－ドゥクス》にレベル2《ドラグニティ－ファランクス》をチューニング！」

ファランクスが2つの輪になり、ドゥクスが4つの星になり、互いに共鳴して光の柱になる。

「秘境の竜騎士が死に嘆く時、天(あま)より新たに雷槍を授かる！戦場を鎮める風となれ！」

☆4＋☆2＝☆6

このモンスターが、逆転の鍵！

「シンクロ召喚！殲滅せよ！《ドラグニティナイト－ヴァジュランダ》！」

光の柱から飛び出したのは、巨大な真澄の龍。その背中には、稲妻が走る槍を持つ真澄色の鎧の女騎士が跨っている。

《ドラグニティナイト－ヴァジュランダ》　ＡＴＫ／１９００

「ミリトゥム、もう１度力を借りるわよ」

『御意！』

「そのモンスター、ミリトゥムなのか！？」

紅刃さんが気づいた通り、この騎士は色が違っても間違いなくミリトゥム本人。私の大切なパートナーだ。

「ヴァジュランダがシンクロ召喚に成功した時、墓地からレベル３以下のドラゴン族ドラグニティ１体を選択して自身に装備できます！《ドラグニティ－アキュリス》を装備！」

アキュリスの幻影が、今度はミリトゥムが持つ槍に宿る。

「ドラグニティが装備された事で、墓地から《ドラグニティ－ベビーバード》を特殊召喚！」

ベビーバードが本日４回目の登場を果たす。これで終わりだから、もう少しだけ頑張って！

《ドラグニティ－ベビーバード》　ＤＥＦ／　６００

続いて、２枚目の手札！

「装備魔法《巨大化》を発動！自分のライフが相手のライフより少ない時、装備モンスターの元々の攻撃力を2倍にします！ヴァジュランダに装備！」

ミリトゥムの槍が雷を纏い始め、ヴァジュランダも口に膨大な雷を溜め始め、両方共一気に膨れ上がった。いつでも攻撃できる状態だ。

《ドラグニティナイト－ヴァジュランダ》　ＡＴＫ／１９００→３８００

「2倍…。確かに発動条件は満たしている」

「さらに、ヴァジュランダの効果発動！自身に装備したカードを1枚墓地に送る事で、攻撃力を2倍にします！」

槍と龍の口に溜まる雷がさらに大きさを増す。攻撃力は…。

《ドラグニティナイト－ヴァジュランダ》　ＡＴＫ／３８００→７６００

「７６００！？」

「攻撃力が4倍だと！？」

「そして、装備状態のアキュリスが墓地に送られた時、フィールド上のカードを1枚破壊します！《魔轟神の報復》を破壊！」

槍から飛び出たアキュリスの幻影が突撃し、ソリッドビジョンのカードを突き破り破壊した。念のためにという事でね。

準備は整った。後は、攻撃するだけ！

「バトル！《ドラグニティナイト―ヴァジュランダ》で《魔轟神王アモン》に攻撃！救済の雷撃（ヴィクテム・ライトニング）！！」

ヴァジュランダが口から極大の白い電撃を放つ。アモンすらも飲み込まんばかりの攻撃を、アモンは紫のバリアで何とか防ぐ。

「ぐぅっ！アモンの効果で墓地の《魔轟神獣ガナシア》を除外し、アモンの破壊を無効にする！」

シュルク　ＬＰ／２２００→１０００

《魔轟神王アモン》　ＡＴＫ／６４００→６０００

「駄目だ、削り切れねえ！」

「まだ終わりじゃありません！」

紅刃の言葉を半分聞き流し、私はすかさず残りの手札を掲げた。

これが、３枚目！勝利を導く最後の一手！

「速攻魔法《風神の号令》！風属性モンスターを1体リリースする事で、このターン私の風属性モンスターは2回攻撃できます！」

《風神の号令》
速攻魔法（オリジナル）
自分フィールド上に表側表示で存在する風属性モンスター1体を選

択し、自分フィールド上の風属性モンスター1体をリリースして発動する。
このターン、選択したモンスターは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

「何…だと…！？」

「《ドラグニティ－ベビーバード》をリリース！」

シュルクさんが目を見開く中、ベビーバードが風になってヴァジュランダに纏わりつく。ライフはまだ私の方が低いから、《巨大化》の効果もそのまま。

「て事は…！」

「これで決める！《ドラグニティナイト－ヴァジュランダ》で、もう1度《魔轟神王アモン》に攻撃！！救済の雷撃（ヴィクテム・ライトニング）！！！」

『ハァァァァァァァ！！』

ミリトゥムが槍に溜めたありったけの電撃を解き放つ。バリアは2つの電撃に耐え切れずに粉々に砕け、アモンを飲み込み消し去っていく。

「…さすがだな…」

シュルクさんは抵抗せず、微笑みすら湛えてその電撃を受け入れた。

シュルク　ＬＰ／１０００→　０

遊璃　ＷＩＮ

「勝った…！」

ソリッドビジョンが消えてミリトゥムが元の姿で出てくる中、私は安堵して息を吐いた。途端に緊張が解けた反動でへたり込みたくなったけど、紅刃さんが駆け寄ってきたのを見て何とか踏み留まった。

「やったな！遊璃、ミリトゥム！シュルクを倒すなんて、大したもんだぜ！」

「かなりギリギリでしたけどね…」

本当に、どのターンも一歩間違えれば負けに繋がるものばかりだった。デュエル中も思ったけど、恐ろしく強い。

「最後に《ドラグニティ－アキュリス》でアモンを破壊して攻撃力を減らそうとしなかったのは、攻撃力が1体分でも下がれば《巨大化》の効果で攻撃力が半分になってしまうからか」

当のシュルクさんは、ユニコールを従えてこっちに歩いてきた。確かに、攻撃力が４００ポイント高くても低くてもライフを削り切るのは不可能。アモンの攻撃力が６４００だったからこその結果だ。

「まさか、負けるとは思わなかった。強いな」

『ブルルッ』

「何言ってるんですか。攻撃してくる度に寿命が縮むかと思いましたよ…」

『確かに、あなたはかなりの強敵だ。何かが少し違えば、我々の負けだった』

「そのシュルクさん相手に1本取ったのですから、あなた方は相当な実力者ですよ」

「え？」

突然聞き慣れない声がした方を見ると、灰色のスーツと青いネクタイを身につけた紫の髪の男性が歩いてきていた。大体私や紅刃さんと同じくらいの年齢に見える。

「弥一…いつからいた？」

「丁度彼女が最後のターンを始めた頃です。少し見学させてもらいましたよ。僕はシュルクさんの仲間である富岡弥一という者です。以後お見知り置きを」

「は、はぁ…。私は不動遊璃です。よろしくお願いします」

「こちらこそ」

私は流れのままに自己紹介をした。何ていうか、礼儀正しい人みたい。

「それにしても、シュルクさんほどのデュエリストを打ち負かしたあなた方2人が戦うとどうなるか、興味深いところですね」

「え?それってどういう…」

「紅刃も俺を倒した1人だ」

「ええ!?そうなんですか!?」

あっさり自白したシュルクさんの言葉を聞いて、私は思わず紅刃さんを見た。その紅刃さんは何だか歯切れが悪そうにしている。

「あ~…まあ、そうなんだけど…今のデュエルを見てたら、よく勝てたなって思うんだよな…」

そうは言っているけど、シュルクさんをも倒した紅刃さんってどれくらい強いんだろう?気になるといえば気になる。

「弥一。お前が来たという事は、準備はできたのか?」

「はい」

富岡さんは細長いリモコンっぽい機械を取り出して、地面に向けてスイッチを押した。すると、先端からレーザーが放たれて地面に当たり、着弾点を中心に時空間の穴が開いた。

「この穴を潜って真っ直ぐ下に降りれば、元の世界に着きますよ」

「え、あの…また落ちるんですか…?」

せっかく用意してくれたのに失礼だとは思いつつも、私は顔を引きつらせたまま聞いてみた。

実は、異世界に飛ばされるという経験は今回が初めてじゃない。ないけど、落とし穴に落ちたりモンスターに食べられかけたりと、ろくな移動方法じゃない事もあるせいで抵抗を感じてしまう。

「ご心配なく。これを飲んでください」

そういって、富岡さんは1本の瓶を私に手渡した。瓶は透明で、中身も無色の液体だ。

「何ですかこれ？」

「一時的に身体能力を上げる薬です。あまり強力な物ではありませんが、着地程度なら問題なくできるようになりますよ」

「そう…ですか。なら、いただきます」

私は少し疑いつつも、瓶の口を開けて薬を飲み始めた。あ、特に味はないんだ…。

「おい…それは確か、効力が切れたら反動で半日くらい動けなくなる奴じゃなかったか？」

「ぶほぉっ！？」

副作用の説明を聞いて、私は飲んでいた薬を思い切り吹き出してしまった。

「げほっげほっ！な、何飲ませるんですか！？」

「そういう事はさっさと説明しろよ！」

『主の身に何かあったらどうするつもりだ！』

「大丈夫ですよ。効力はは3時間持ちますし、以前ギュラさんに実験台になってもらった物を量産しただけですから」

「そういう問題じゃねえんだよ！」

私と紅刃さんとミリトゥムの抗議に対して、涼しい顔をしながらニコニコ話す富岡さん。ギュラさん、御愁傷様です。

「とにかく、つい最近開発したばかりの上に調合が難しいので、改良のしようがないんですよ」

「まあ、今は夕方だ。向こうも夕方なら、半日の反動は夜中で済むだろ」

シュルクさんの話を聞いて、私は時間を確認した。夕方の5時…。3時間後は8時だから、朝の8時までは動けないって事ね。朝ご飯も合わせたら、明日の授業間に合うかな…？

「とりあえず、無事に帰れるならそれでいいです。瓶はお返しします」

「どうも」

私はさっさと瓶を富岡さんに返却した。いつもこんな奇怪な薬を作っていたりして…さすがにそれはないか。

「シュルクさん、デュエルしてくれてありがとうございます。おかげ様で、楽しいデュエルができました」

「ああ、俺もだ。次に戦う機会があれば、その時は勝たせてもらうぞ」

「なら、私もそれまでにもっと強くなりますよ。富岡さんも、元の世界に帰る準備をしてくれてありがとうございました」

「いえ、お気になさらず」

そろそろ帰る時間なので、私はシュルクさんと富岡さんにそれぞれお礼を言った。そして、後1人。

「紅刃さん」

「！」

「もしまた会う機会があれば、その時はデュエルしてくれませんか？」

「…ああ。あんなデュエルを見せられたんだ、俺もあれくらい戦えるように強くなっとかねえとな。それと、もしお前が元の時間軸に戻って、お前のいる未来に俺がいたら、遊星とアキによろしく言っといてくれ」

「はい。必ず」

紅刃さんが私の生きる世界の人間かはわからない。紅刃さんの未来に私がいるかなんて、調べようがない。でも、今の紅刃さんでも

未来の紅刃さんでも、もしまた会う事ができたなら。その時は紅刃さんともデュエルしてみたい。そう思う。

「さ、行こう、ミリトゥム」

『御意』

私とミリトゥムは時空間の穴のそばまで歩いて、紅刃さん達に振り返った。お別れの時間だ。

「皆さん、本当にありがとうございました！」

「ああ。気をつけてな」

「また会おうぜ！」

「はい！それじゃ！」

それ以上は何も言わずに、私とミリトゥムは時空間の穴に飛び降りた。

さて…帰って雪乃達に会ったら、とびきりの土産話をしてあげよう。

ＳＩＤＥ／紅刃

遊璃とミリトゥムが飛び降りた後、時空間の穴はひとりでに閉じた。後には何も残らない。

「…さてと、帰るか」

「おや？僕達を捕まえなくてもいいのですか？」

踵を返して歩き出した俺を、弥一が不思議そうに呼び止めた。それでも表情には余裕が見て取れる。

「今日は非番なんだろ？お前らがその気じゃなけりゃ、敵対するつもりはねえよ」

「…甘い奴だ」

「ほっとけ。第一、武器もデュエルディスクもないんじゃどうしようもねえだろ」

「違いない」

シュルクは少しおかしそうに口元を歪めた。ロディスとリーシェは他の精霊達と一緒に行動してるからな。対抗手段はほとんどない。

「では、お暇させていただきます」

「次に会う時は敵同士だ」

「わかってら」

「いずれお会いしましょう」

弥一は右手から霧を出して辺りを覆い尽くした。少し経って霧が晴れると、もう誰もいなかった。

「…俺達が敵同士だなんて知ったら、遊璃の奴、どんな反応するんだろうな」

まだ日は少し高いけど、そろそろ夕暮れ時か…。俺は月沙達がいる病院に向かって歩き出した。

今日の出来事を言ったって、ただの冗談だって聞き流されるだろうし、俺だけの秘密にしといた方がいいな。

…未来に帰って、まだ遊星とアキがくっついてなかったら、全力で応援してやるか。

もしかしたら、その先の未来でまた遊璃に会えるかもしれないからな。

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

特別編　来訪者は蟹と魔女の娘（後編）（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「コラボはもう少しだけ続くわよ。『今回のキーカード』の時間よ」

勇香「今回もゲストとして雪乃と瑞波に来てもらったぜ」

瑞波「よっし！遊璃が勝った！」

雪乃「怒濤の連続攻撃でのフィニッシュ、さすがお姉…ゲフンゲフン！遊璃ね」

勇香「どうした？まあ、アモンがいるにも関わらず、攻撃力をきっちり超えた上でサンドバックだからな…。並大抵の奴じゃまず防ぎ切れねえよ」

璃音「結構ギリギリのデュエルだったけど、それだけ2人のレベルが高いって事でしょうね」

瑞波「どっちが勝ってもおかしくなかったしな。ゲームエンド級の攻撃ばかりだったし…」

璃音「それじゃ、カード考察に入りましょうか。今回紹介するのは、攻撃力4倍の2回攻撃でフィニッシャーになった遊璃のエースモンスター《ドラグニティナイト－ヴァジュランダ》よ」

《ドラグニティナイト－ヴァジュランダ》
シンクロ・効果モンスター
星６／風属性／ドラゴン族／ＡＴＫ１９００／ＤＥＦ１２００
ドラゴン族チューナー＋チューナー以外の鳥獣族モンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル３以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター１体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。
１ターンに１度、このカードに装備された装備カード１枚を墓地へ送る事で、このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで倍になる。

璃音「ドラゴン族チューナーとチューナー以外の鳥獣族でシンクロ召喚できるわ。この点は他のドラグニティナイトと同じね」

雪乃「シンクロ召喚成功時に、墓地のレベル３以下のドラゴン族ドラグニティを１体装備できるわよ。この効果で装備状態から特殊召喚できる《ドラグニティ－ファランクス》を装備すれば、一気にレベル８のシンクロモンスターを呼び出せるわ」

瑞波「装備カードを墓地に送れば、１ターンの間だけ攻撃力を２倍にできる！墓地に送る装備カードはドラグニティじゃなくても発動できるぞ！」

勇香「倍にするのは元々の攻撃力じゃないから、装備カードとかで上がった分も倍になる。攻撃力が２５００の状態で効果を使うと５０００になるって感じでな」

雪乃「弱点は素の攻撃力の低さね。倍加は１ターンしか持たないから、返しのターンで戦闘破壊されやすいわ」

勇香「ま、その辺りは守るなり何かのリリースやコストでフィールドから離すなりするしかねえだろ」

瑞波「《竜操術》で装備ドラグニティを追加するのもありだな。攻撃力も倍にすれば４８００になるし、《ドラグニティ－ブランディストック》を装備して２回攻撃って戦術もあるぞ」

璃音「今回はここまでよ」

勇香「２人共お疲れさん！３回も来てくれてありがとな！」

雪乃「こちらこそ、とても楽しかったわ」

瑞波「またこういう機会があったらよろしくな！」

勇香「おう！いつでも来いよ！」

璃音「感想はいつでも受け付けているわよ。気が向いたら書き込んでくれると嬉しいわ」

雪乃「遊璃や私達が活躍する『遊戯王ＧＸ－蟹と魔女の娘－』も是非読んでちょうだいね」

勇香「それじゃ、次回も見てくれよな！」

ーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

今回シュルクが使用した《魔轟神の謀略》は言羽・D・カタストロフィーさんが、《魔轟神の報復》はユタさんが投稿してくださったオリカです。皆さん、ありがとうございます。また、遊璃が使用した《ドラグニティパラディン－エクスカリバー》《ドラグニティ・ブレイク》《風神の号令》は『遊戯王ＧＸ－蟹と魔女の娘－』で遊璃が実際に使用したオリカです。

《魔轟神王アモン》の攻撃力の計算が非常に面倒でした。何度も文章を読み直してどのモンスターが何体墓地にいて合計何体かを数え、数と攻撃力が合わなかったらまた数え直して…。墓地の枚数で決まる攻撃力がここまで面倒だとは…。

次回からは本編に入りますが、テストが近いので遅くなるかもしれません…。そこはご了承ください。

最後に、戎鴛さんの『遊戯王ＧＸ－蟹と魔女の娘－』はとても面白い作品なので、皆さんも是非読んでみてください。

では、また次回！

第７５話　デッキ破壊は諸刃の剣（前書き）

☆精霊の呟き☆

ロディス『今回からジェネックス編突入だ』

スイレン『今年度はシリアスなデュエルが多かったので、少しでも楽しいデュエルをできたらいいなと思っています！』

リーシェ『どう転ぶかはまだわからないが、今後もこの小説をよろしく頼む』

スイレン『新展開という事で、いつもよりも少し多めのページ数でお送りします！』

リーシェ『後書きには重大発表がある。最後まで読んでほしい』

ロディス『今回の締めの言葉はクレセントさんからのリクエストだ。第７５話、始まるぞ。

疾風を超えた軌跡の果て、無限の光が全てを照らす！量子の海に眠りし龍よ、神の奇跡を体現せよ！』

☆８＋☆２＝☆１０

『アクセルシンクロ！切り開け、陰らぬ光条！《アルヴェルグ・エヴォルト・ドラゴン》、光臨！』

リーシェ『…今回はアクセルシンクロどころか、ライディングデュエルですらないがな…』

ロディス『それは言わない約束だ』

第７５話　デッキ破壊は諸刃の剣

ＳＩＤＥ／亮

「……」

いつものように大観衆の前でデュエルを行い勝利を納めた夜、俺はホテルの自室で自分のデッキを眺めている。調整するわけでもなく、ただ眺めている。

プロリーグでエド・フェニックスに負けてからというものの、俺は連戦連敗するようになった。挙げ句の果てには、プロリーグに復帰するために地下デュエルにまで手を出してしまった。

地下デュエルは文字通り地下で行われる非公式のデュエルで、デュエリストは檻の中で戦う。さらには衝撃増幅装置を装着させられ、金持ちの観客はその苦悶の表情を楽しむ。

そこでも俺は追い詰められてしまう。しかし、そんな俺を救ったのは勝利への渇望だった。

『俺は！！負けたくないいいいい！！！』

リスペクトなんてどうでもいい。ただ勝ちさえすれば、方法もなりふりもどうでもいい。そんな考えに切り替えた俺は、そのデュエルに勝利した。そして、プロリーグに復帰した今も勝利を求めて戦い続けている。

だが…。

「…これでいいのか…？」

ポツリと呟く。答える者は誰もいない。

『この先何があっても…カードを信じる心を忘れないでください』

アカデミアで卒業模範デュエルを行った夜、灯台で月沙の挑戦を受けた後に、その月沙が言った言葉。それが今でも引っ掛かっている。

あいつは、自分のデッキを信頼している。1枚1枚の可能性を信じて戦っている。月沙だけじゃない。十代も、紅刃も、それぞれ自

分のデッキに信頼を寄せている。

対して、俺は勝利のためにモンスターを踏み台にするような事までしている。そこには信頼も何もない。リスペクトを捨てたのだから当然と言えば当然だが…。

俺はただ勝ちたいがためにリスペクトを捨て、絆を捨てた。鮫島師範を倒し、リスペクトと対極の位置にある裏サイバー流のカードを手に入れた。そして、今はプロリーグで次々と白星を上げている。

だが、いつも心のどこかに月沙のあの言葉が居座って動こうとしない。俺の中には常に迷いがある。

近い内に、デュエルアカデミアで『ジェネックス』というプロデュエリストも参加可能な大会が開かれる。月沙達も当然参加するはずだし、俺も出るつもりだ。

だが、不安だ。

「俺は…勝てるのか…？」

自分のデッキを信じるあいつらに。今の俺とは正反対のデュエリスト達に。

「…駄目だ…！」

勝てない。どうしても、俺が月沙達に勝つビジョンが浮かばない。月沙達だけじゃない。このままでは、いずれプロリーグでも通用しなくなる。

俺は間違っているのか？ただ勝利を求めるだけでは駄目なのか？
俺はリスペクトをしても勝ち続ける事はできなかった。だが、月沙達にはそんな様子は見られない。

俺とあいつらとで、一体何が違うんだ…！？

「くそ…！」

「おいおい、随分お悩みのようじゃねえか」

「！？」

突然、誰かの声が部屋に響いた。

すると、何もない空間に『穴』が空いた。

「な…！？」

異常な光景を見て思わず立ち上がる。警戒を強めると、穴から誰かが出てきた。

逆立った金髪の男だ。服装は茶色のズボンに黒いシャツと、チャ

ックと襟付きの灰色の上着。上の袖は両方ない。チャックは腹の辺りまで開けてある。

「誰だ…！？」

「俺はヘリド。まあ、詳しい話は向こうでするぜ」

「何？」

「ウチの科学者が実験したい事があるってうるさくてよぉ。手頃な強さを持ってめえが必要なんだよ。めんどくさいったらねえぜ、ったく」

実験？どういう事だ？こいつは何を企んでいるんだ？

「とにかく、一緒に来てもらうぜ」

「…断る、と言ったら？」

「てめえに拒否権はねえ」

ヘリドは俺の顔に右手を翳した。黒いグローブをはめている。

「…っ！？」

何だ？急に眠気が…。

「悪いようにはしねえよ。ヒャハハッ！」

「く…！」

状況を上手く掴めないまま、俺の意識は闇に沈んだ。

ＳＩＤＥ／紅刃

「っと、着いた！」

「ディヴァイン、サンキュな」

「どういたしまして。後おじさんか先生と呼びなさい」

モーターボートを降りて港に足を着けた後、俺は代表してディヴァインに礼を言った。

俺と月沙と将人はようやく怪我が完治したから、ディヴァインが操縦するモーターボートでアカデミアに帰ってきた。他のみんなは軽傷か無傷で済んだから他の生徒と先にアカデミアに戻っている。一緒に帰ったディヴァインがモーターボートで迎えに来て、修学旅行が終わって２日後の帰還を果たしたってわけだ。

「６日ぶりか。アカデミアがやたら懐かしく見えるな」

「言えてる。さ、十代達に顔を見せに行こうよ。多分レッド寮に集まってると思うし」

将人の呟きに同意しつつ出した月沙の提案で、俺達はレッド寮に向かう事にした。今の時間帯は放課後だから丁度いいな。

しばらく歩くと、久々のレッド寮が見えてきた。見えてきたのはいいけど…。

「あれ？誰かデュエルしてる」

「あのモンスターは…勇香と十代か」

月沙が真っ先に異変を見つけて、ディヴァインがすぐに状況を分析した。

勇香と十代が光の結社の連中と1人ずつ戦っている。勧誘されて追い払ってるのか？まあ、特に苦戦してる様子はないけど…。

「《ラヴァルフレイム・ドラゴン》でダイレクトアタック！バーニング・ブレイザー！」

「ぐわぁぁぁぁ！」

生徒　ＬＰ／１２００↓　０

「《Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス》でダイレクトアタック！ラス・オブ・ネオス！」

「ぶげらっ！？」

生徒　ＬＰ／　６００↓　０

まあ、案の定というか何というか…。２人のエースモンスター、ラヴァルフレイムとネオスの攻撃で、光の結社の連中はあっさり敗れた。

「っしゃあ！決まった！」

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

「く、くそ！レベルが違う！」

「覚えてろ！」

負けた２人はお決まりの捨て台詞を吐いて走り去っていった。喧嘩吹っ掛ける相手を間違えたな。

「よお、元気そうだな」

「あ、紅刃！月沙に将人、先生も！」

俺が声を掛けると、真っ先に十代が反応した。よく見るといつものメンバーは全員いるな。

「怪我はもういいのか？」

「うん。もう大丈夫」

「無事に帰ってきてくれてよかったドン！」

「災難だったっスね。地震でのビルの倒壊に巻き込まれるなんて…」

「五体満足でいられるなら問題ねえよ」

月沙が十代や剣山と話す中、翔の言葉に俺は自然に返事を返した。

一応、表立っては『老朽化したいくつかのビルが地震で倒壊して、それに巻き込まれた』って事にしてある。邪神がどうのこうのっつっても信じにくいし、何より余計な心配は掛けたくない。

「紅刃」

「ん？っと！」

璃音に呼ばれて振り向くと、何かを投げ渡されて反射的にキャッチした。

「予備のデュエルディスクよ。しばらくはそれを使いなさい」

受け取ったのはデュエルディスクだった。このアカデミアの支給ディスクじゃなくて、未来で一般販売されている汎用型の方だ。

「サンキュな。…って、『しばらくは』？」

「剣型のデュエルディスクに挑戦するつもりよ。まだ設計段階だけど」

「昨日から設計図を書いてるんだ。それも凄く楽しそうに」

「フフフ…腕が鳴るわ」

俊也、小声での報告サンキュー。珍しく璃音が燃えている。完成品を自分が使うわけでもねえのに…メカニックの性(さが)って奴か？

「…？三沢はどうした？見当たらないが…」

将人が三沢の不在に気づいてみんなに聞いてみた。すると、途端にみんなが気まずそうな顔をした。

「あ～…彼は光の結社に捕まってしまってね…」

「「「！？」」」

吹雪さんが言いにくそうに事実を述べた。当然、俺達3人は驚く。三沢までやられちまったのか…！？

「彼ほどの実力でも敵わないとなると、光の結社の中でも上位のデュエリストに当たったと見るべきだな」

ディヴァインは最初から知っていたのか、特にリアクションを取る事もなく指摘した。他の奴らの活躍に隠れてるけど、あいつアカデミアでもかなり強い方なんだよな。ラーイエローの首席だし。

「ま、光の結社を壊滅させれば、万丈目と明日香も合わせて嫌でも戻ってくるでしょ」

「かと言って、今乗り込むのは得策じゃない。命が懸かっているわけでもない以上、機会が来るまで待つのが最善だ」

ルーナと秋斗はある程度前向きに考えている。確かに、後先考えずに敵陣に乗り込むよりはリスクが小さいな。

「今は待つしかないか…。それじゃ、決戦までの修行と紅刃達の退院祝いって事で、デュエルしようぜ！」

「それってお前がデュエルしたいだけだろ…」

十代の提案に、俺は小さくツッコんだ。まあ、こいつの考えそうな事だよな。でも、デュエルか…。悪くねえな。

「何の気兼ねもなく楽しくデュエルするのもいいね」

「病院では調整くらいしかしてなかったな。あまり腕が鈍るのはよくない」

月沙と将人はもうやる気を出している。修学旅行の大半はシリアスな場面が多かったしな…。俺に至ってはデュエルディスクがぶっ壊れる始末だし…。

「そうだな。やるか！」

「そう来なくっちゃ！」

その日は授業も終わってるから、みんなでデュエルをして時間を過ごした。やっぱこうしてみんなとワイワイやってるのが1番だ。

「ふわぁ～…朝っぱらから何で朝礼があるんだよ…」

「愚痴ってもしゃあねえだろ…」

十代が欠伸をしながら呟いた。話し相手の俺も正直少し眠い。

朝早くから、ＰＤＡに『朝礼をするから全生徒は大講堂に来るように』って内容のメールが来たからこうして集まってるけど、何を話すつもりなんだ？

一応説明しとくけど、今の俺は腰に黒い木刀を差している。デュエルディスクができるまではこれを持ち歩くつもりだ。

「あ、校長先生が来たよ！」

俊也の反応で一斉にステージに注目が集まる。赤紫の服にスキンヘッド…確かに鮫島校長だ。ようやく出張から帰ってきたんだな。

「久しぶりだね、諸君。わたしがいない間に見慣れぬ制服の生徒も増えたようだが…」

「「ギクッ！？」」

「ははは…」

鮫島校長の最もな反応に、クロノス先生とナポリタン教頭がわざとらしい反応をして冷や汗を流す。あれ、何か名前おかしくねえか？まあ、いいか。ディヴァインも乾いた笑いを漏らしている。つー

か、光の結社の事説明してなかったのかよ…。

「だが、それはまあいいでしょう。さて、今日は皆さんにわたしからプレゼントがあります」

「プレゼント？」

ルーナの呟きは、のプレゼントという言葉に反応した生徒の騒ぎ声に消えていった。光の結社の連中は騒いでねえけど。

「なあなあ、プレゼントって何かな？」

「きっと凄いレアカードっすよ！」

「これだけの人数分のレアカードなんて用意できるか」

十代の質問に答えた翔の意見を、秋斗真っ向から否定した。デッキとの相性も考えたらまず無理だな。

「恐竜の化石だったら嬉しいドン！」

「貰って嬉しいのはお前だけだろ」

今度は剣山の意見が将人にバッサリ切り捨てられた。世界中を巡っといてそれはねえって…。

「珍しい機械なら…。できれば解体ＯＫで」

「ないない。後半はもっとない」

璃音には勇香がダメ押しした。喜ぶのは璃音や遊星にブルーノあたりだろ。

「静かにするでア～ル！」

ナッポー教頭の一喝で大講堂が静かになった。これも違うな…。

「ごほん！わたしからのプレゼントは…これだよ！」

咳払いした鮫島校長の背後に用意されている巨大モニターが映像を流す。モニターには『ＧＸ』のロゴが映っている。

「世界中のＧＸ…ジェネレーションネクストのＮｏ．１を決めるためのデュエル。名付けて、『ジェネックス』第１回大会の開催を宣言する！」

鮫島校長の宣言に生徒はもちろん、教員にまで戸惑いが走る。ジェネックスって…何だそりゃ？

「デュエルアカデミア高等部の生徒・職員全員に参加資格が与えられる。また、ノース校を始めとする世界中のデュエルアカデミアの代表者、さらにはプロリーグのデュエリストも参加するという、プロアマオープンの大会なのだ！」

範囲広ぉっ！？世界中を回ってたのって、強い奴を根こそぎ集めてこの大会を開くためだったのか！？

「凄え！プロとデュエルできんのか！？」

「確かにプレゼントだな！燃えてきたぜ！」

十代と勇香は早速やる気満々でいる。確かに、世界で活躍するデュエリストと戦える絶好のチャンスだな。熱血のこの2人が燃えるわけだ。

ん?待てよ?て事は、プロデュエリストになった亮さんも出るのか?何か最近豹変し出したし、嫌な予感がするな…。

「デュエル会場はこの島全てを使って行います。参加者にはこの資格メダルが与えられます!」

鮫島校長がポケットから手の平サイズのメダルを取り出した。表面には『GX』の文字が彫られている。

「そしてここからが重要です。ルールとして、参加者には最低1日1回のデュエルが課せられます。その日最初のデュエルは挑戦されたらその挑戦を拒む事はできず、勝った者が負けた相手のメダルを全て奪います。そして最終的にメダルを持つ残った2人が決勝戦を行い、勝者が初代ジェネックス優勝者となります」

要するにメダル争奪戦か。負けたら全部没収ってのは厳しいけど、これだけの参加者がいるならしゃあねえか。

「是非とも我がアカデミア本校から第1回優勝者が出るように頑張ってほしい。最後に、優勝者には取って置きの賞品を用意してあります。皆さんの活躍を期待していますよ!」

説明を終えた鮫島校長がステージから降りると、辺りは一気に騒がしくなった。

「よっしゃあ！優勝は任せとけ！賞品は俺のものだぁ！」

「大きく出たな、十代。僕がいる事を忘れてないか？」

いきなり優勝宣言をする十代の前に、エドが近づいてきた。何か久々に見るな。

「エド！」

「お前も参加すんのか？」

「当たり前だろ。優勝は僕で決まりだ」

「人の事言えねえだろうが…」

勇香の問い掛けに対して、十代と同じように優勝宣言をするエド。勇香の言う通り、どっちもどっちだな。

「私達もそう簡単に脱落するつもりはないよ？」

「それなりに自信はある方だしね」

月沙と俊也も話に入ってきた。他のみんなももちろん、俺だってやるからには優勝狙いでいる。

「どうせなら、仲間内で戦うのは大会終盤にしないか？」

「いいわね！楽しみは後に取っとく方がいいし！」

「僕も賛成っス！」

将人の提案にルーナと翔が賛成した。つーか反論は一切ない。

「それじゃ、決まりだな！」

さて、今日は念入りにデッキ調整をしねえとな。絶対勝ち上がってみせる！

「ハァ…」

森の中で思わず溜め息を吐いた。何か拍子抜けだ。

今日はジェネックス当日。俺達は早速対戦相手を探して解散したのはいいんだけど…。

「何で誰も勝負を受けてくれねえんだよ…？」

俺はまだ1回もデュエルできていない。というのも、俺を見つけた他のアカデミアの生徒が片っ端から逃げちまうからだ。

『仕方あるまい。お前はアカデミアの中でもトップクラスのデュエリストだ。1度負ければ即脱落となる以上、初日から強豪と戦うのは避けたいのだろう』

『全く、軟弱な者共だ！今から敗北に怯えるのでは、戦績など高が知れる！』

自分で認めるのはどうかと思うけど、ロディスの予想は多分合ってる。リーシェはなかなかデュエルにまで持ち込めないせいでイライラしている。

「落ち着けよ。まだ昼にすらなってねえんだし」

『だが、大会開始から2時間ずっとこの調子だぞ？このままでいいわけがないだろ？』

「う…」

確かに、俺から声を掛けても話し終わる前に全速力で逃げられちまう。中には悲鳴を上げる奴までいるし…。

「あ、紅刃！」

急に呼ばれて振り返ると、ルーナとエドがこっちに来ていた。ナージャも外に出ている。

「ルーナ、エド！」

「調子はどう？」

「さっぱりだ。みんなして逃げやがって…」

「私はもうメダルを取ったわよ」

ルーナは自慢気にメダルを取り出した。もう3つに増えている。

「あ！？」

「光の結社の信者は勧誘目的でも自分から挑んでくれるから、手間が省けて助かるわ。他の一般生徒はみんな逃げちゃうからこうはいかないしね」

「そうか！その手があったか！」

光の結社は今でも勢力を増やし続けてるからまず逃げねえ！戦うには丁度いい相手じゃねえか！

「僕はプロ相手にも戦ったけどね。この通りだ」

エドのメダルは…もう４個かよ…。ペース早すぎだろ…。

『ま、気づくのが遅かったわね～。月沙達も手始めに信者狩りから始めてるわよ～』

『ちっ、出遅れたか…！』

ナージャの情報にリーシェが歯噛みした。多分、まだデュエルしてないのは俺だけだろうな。つーか『狩り』って…。

「くそ、俺もデュエルさえできれば…！」

「では、わたしとはいかがですか？」

「は？」

今度は聞き慣れない声が耳に入った。もう１度振り返る。

何かスーツ姿で眼鏡を掛けた男がいる。どう見ても大人なあたり、この学園の関係者じゃないな。

「誰だあんた？」

「わたしはエックス。プロデュエリストです」

「プロ！？」

「エックス…！」

「あ～、雑誌で読んだ事あるような…」

ルーナはあやふやだけど知ってるみたいだ。俺はそういった雑誌は全然読まないから、プロの世界の状況なんてほとんど知らない。

「真川紅刃さんですよね？」

「あ、ああ。俺の事知ってるのか？」

「ええ。このアカデミアの中でも最上位に輝いている1人だと聞いていますよ」

「んな大袈裟な…」

いつの間にそんな噂が出回ってんだ？こりゃあ、マジで一般生徒に相手にされなさそうだな…。

「ま、いいか。丁度相手を探してたんだ！受けて立つぜ！」

「待て、紅刃。彼とはデュエルしない方がいい」

俺がデュエルディスクを展開すると、なぜかエドに止められた。

「何でだよ?どのみち、今日最初のデュエルだから大会ルールで断れないじゃねえか」

「それはそうだが…」

「それに、いい加減遅れを取りたくないしな!」

『よし、さっさと蹴散らすぞ!』

『初戦がプロか…。相手に不足はないな』

リーシェとロディスは先にデッキに戻った。いきなりプロとの対戦か…勇香じゃねえけど、燃えてきた!

「それでは、始めましょう」

「ああ!全力で行くぜ!」

「「デュエル!」」

紅刃ｖｓエックス

「では、わたしから行かせてもらいます。ドロー!わたしは魔法カード《手札抹殺》を発動!互いに手札を全て捨て、その枚数分ドローします!」

「いきなりそれか…」

特に支障はねえからいいか。俺は5枚を墓地に送って5枚ドローした。

「墓地に送られた罠カード《誘蛾灯(ゆうがとう)　レベル４》の効果発動！カード効果で墓地に送られた時、デッキからレベル４のモンスターを特殊召喚します！」

《誘蛾灯(ゆうがとう)　レベル４》
通常罠(アニメオリジナル)
このカードがカード効果によって墓地へ送られた時に発動する事ができる。
自分のデッキからレベル４のモンスター1体を選択して特殊召喚する。

《手札抹殺》で発動条件を満たしたのか。手札から捨てて効果発動…何かシュルクを思い出すな。

「この効果により、デッキから《トラップ・スルーザー》を特殊召喚！」

最初に出てきたのは、足が3本ある紫と灰色の球体だ。何かヘンテコな姿だな…。

《トラップ・スルーザー》
効果モンスター（アニメオリジナル）
星４／闇属性／機械族／ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ１３００
このカードがフィールド上に表側攻撃表示で存在する限り、このカ

ードのコントローラーは永続罠カードの効果を受けない。

《トラップ・スルーザー》　ＡＴＫ／　８００

「カードを2枚セットし、ターンエンドです」

エックス
ＬＰ／４０００
手札／3
モンスター／《トラップ・スルーザー》（ＡＴＫ／　８００）
魔法・罠／リバース×2

「俺のターン！」

「紅刃ならプロ相手でも十分渡り合えるわよね」

「そう簡単には行かない」

「え？」

「あのエックスは、初めてデュエルした相手に1度も負けた事がない。プロデュエリスト界に、奴とデュエルしたがる奴なんていないんだ」

「どういう事よ？」

「奴と戦ったデュエリストは負けるだけじゃない。デュエルに向かう情熱も誇りも、全て失う事になる」

「全て失う…？」

エドはエックスの事をよく知ってるらしい。誰もデュエルしたがらないって、どんなデッキを使うんだ？

「フィールド魔法《天空の聖域》を発動！」

周りが一変して、青空に浮かぶ神殿になった。これで俺のデッキがほぼ１００％力を発揮できる。

「そして、手札から《奇跡の代行者　ジュピター》を…」

「おっと、その前に永続罠（モンスターレジスター）を１０００ポイントライフを払い、発動します！その効果により、互いのプレイヤーはモンスターが召喚・特殊召喚された時、そのモンスターのレベルと同じ数だけデッキの上からカードを墓地に送ります！」

《モンスターレジスター》
永続罠（アニメオリジナル）
自分のライフを１０００ポイント払って発動する。
モンスターが召喚・特殊召喚に成功した時、お互いのプレイヤーはそのモンスターのレベルと同じ数だけデッキの上からカードを墓地へ送る。

エックス　ＬＰ／４０００→３０００

「何だそりゃ？まあ、いいか。《奇跡の代行者　ジュピター》を召喚だ！」

筋肉質な朱色の代行者が現れる。このデュエルの先陣はこいつに任せた！

《奇跡の代行者　ジュピター》　ＡＴＫ／１８００

「ジュピター？代行者にそんなモンスターがいたか？」

「レベルは…４ですね。さあ、デッキからカードを４枚墓地に送ってください」

俺は言われるがままにカードを墓地に送った。お、いいカードが落ちた！

「もしかして、あいつの狙いってデッキ破壊？」

「うふふふ、お嬢さんのお察しの通りです」

不気味な笑い声を上げるエックス。正直、気持ち悪い。

「あれが奴のやり方、デッキ破壊。ライフポイントでなく、相手のデッキの枚数を削るデュエルだ」

「ふ～ん…。ま、紅刃の敵じゃないわね」

「は？どういう意味だ？」

「まあ、見てなさいよ。あいつのデッキ、あんた知らないでしょ？」

ルーナは大した反応も見せずに余裕の表情でいる。確かに、俺から見ればむしろ礼を言いたいくらいだ。

「ジュピターの効果発動！墓地の代行者を除外する事で、自分フィ

ールド上の天使族1体の攻撃力をエンドフェイズ時まで８００ポイントアップさせる！《英知の代行者　マーキュリー》を除外して、ジュピター自身の攻撃力を８００ポイントアップ！」

《奇跡の代行者　ジュピター》　ＡＴＫ／１８００→２６００

「手札を消費せずに攻撃力２６００を叩き出した…！？」

「ぬ…！？」

「さらに、ジュピターのもう1つの効果！《天空の聖域》が存在する時、手札から天使族モンスター1体を捨てる事で、除外されている光属性・天使族モンスター1体を特殊召喚できる！《神聖なる球体》を捨て、マーキュリーを特殊召喚！」

今度は本を持った青い代行者が飛び出した。何やかんやで役に立ってくれるモンスターだ。

《英知の代行者　マーキュリー》　ＤＥＦ／１７００

「《モンスターレジスター》の効果でデッキから4枚墓地へ！バトル！ジュピターで…」

「甘～い！罠カード《威嚇する咆哮》！このターン、あなたは攻撃できません！」

「攻撃はなしか…」

後攻1ターン目だからカウンター罠も使えないし、防ぎようがねえな。次のターンまで待つか。

「カードを3枚セットしてターンエンド！ジュピターの攻撃力は元に戻る！」

《奇跡の代行者　ジュピター》　ＡＴＫ／２６００→１８００

紅刃
ＬＰ／４０００
手札／０
モンスター／《奇跡の代行者　ジュピター》（ＡＴＫ／１８００）
《英知の代行者　マーキュリー》（ＤＥＦ／１７００）
魔法・罠／《天空の聖域》リバース×３

墓地に《ブーテン》が落ちてるからシンクロ召喚もできるけど、落としすぎて自滅したらまずいからな。ここは温存しておく。

「うふふふ…気持ちがいい、最高に気持ちがいいですねぇ。自分のデッキを信頼しているデュエリストとデュエルするのは」

「何が言いてえんだ？」

「ふふふ…。わたしのターン！」

無視かよ…。

「モンスターをセット！カードを2枚セットしてターンエンドです」

エックス
ＬＰ／３０００
手札／１

モンスター／《トラップ・スルーザー》（ＡＴＫ／　８００）リバース×１
魔法・罠／《モンスターレジスター》リバース×２

また伏せカードが２枚…。とにかく、今は攻める！

「俺のターン！マーキュリーの効果発動！相手のエンドフェイズ時に俺の手札が０枚だった場合、俺のスタンバイフェイズ時にカードを１枚ドローできる！」

これで手札は２枚だ。さて、行くか！

「マーキュリーをリリースし、《裁きの代行者　サターン》をアドバンス召喚！」

紫の代行者がマーキュリーと入れ替わりで登場した。こいつを上手い具合にフィールドに残せればいいんだけどな…。

《裁きの代行者　サターン》　ＡＴＫ／２４００

「レベルは６。デッキから６枚墓地に送ってください」

「わかってら！ジュピターの効果発動！墓地の《力の代行者　マーズ》を除外し、サターンの攻撃力を８００ポイントアップさせる！」

《裁きの代行者　サターン》　ＡＴＫ／２４００→３２００

「バトル！《裁きの代行者　サターン》で《トラップ・スルーザー》を攻撃！フラッシュ・ジャッジ！」

サターンが紫色の光で《トラップ・スルーザー》を粉々にした。
攻撃力は丁度８００だから、直接攻撃したも同然だ。

「ぐぉっ…！」

エックス　ＬＰ／３０００→　６００

「《奇跡の代行者　ジュピター》で裏守備モンスターに攻撃！ミラクロス・ナックル！」

続いてジュピターが拳から朱色の光弾を繰り出した。でも、表側表示になった緑色の岩みたいなモンスターは攻撃を耐え抜いた。

「《レベルポッド》の守備力は１８００。ジュピターの攻撃力と同じなので破壊されません」

「同じか…。戦闘ダメージもなしだ」

「そして、《レベルポッド》のリバース効果発動！フィールド上のモンスターを全てデッキに戻す！」

《レベルポッド》
効果モンスター（アニメオリジナル）
星４／地属性／機械族／ＡＴＫ／　５００／ＤＥＦ１８００
リバース：お互いのプレイヤーはフィールド上のモンスターを全てデッキに戻してシャッフルする。
その後、デッキに戻したモンスターのレベルの合計と同じ数だけデッキからカードをドローする。
その中にデッキに戻したモンスターが1体でもいる場合、ドローしたカードを全て手札に加える。

いない場合、ドローしたカードを全て墓地へ送る。

「何！？」

ジュピターとサターンと《レベルポッド》がフィールドから消える。俺が2体をデッキに戻すと、自動でシャッフルされた。

「ほぉ…先程も思いましたが、面白いデュエルディスクをお持ちのようですね。《レベルポッド》の効果でモンスターをデッキに戻した後、互いにデッキに戻した自分のモンスターの合計レベルと同じ枚数分カードをドローします」

「ジュピターのレベルは4で、サターンは6…」

「10枚引く事になるな」

凄え枚数だな…。これだけあれば何でもできるけど。

「わたしは4枚ドローします。そして、その中に先程デッキに戻したモンスターが1体もいなければ、ドローしたカードを全て捨てなければなりません」

「俺の手札にはジュピターもサターンもいる。捨てる必要はなしだ」

「わたしは《レベルポッド》を引けなかったので4枚全て墓地へ。そして罠カード《穴あき財布》を発動！相手の手札が5枚になるようにランダムで墓地に送ります！」

《穴あき財布》
通常罠

相手の手札が6枚以上ある時に発動する事ができる。
相手の手札が5枚になるようにカードをランダムに選んで墓地へ送る。
このカードを発動したターン、相手は手札をプレイする事ができない。

「ハンデス！？」

「そして、このカードを発動したターンの間、相手は手札を使用する事ができません」

手札が使えないのは痛いけど、ここは通すか…。

目玉がついた財布が現れて、口から舌を伸ばしてきた。その舌先がさらに枝分かれして手札を5枚吸盤みたいに貼り付けて取り出し、墓地に送っていった。つーかどんな構造してんだよ、その舌…？

「さらに罠カード《魂のつながり》を発動！デッキからモンスターを1体手札に加えます！」

《魂のつながり》
通常罠
相手の手札を墓地へ送った時に発動する事ができる。
自分のデッキからモンスターカード1枚を選択して手札に加える。

「わたしが選択するのは《トラップ・スルーザー》！」

「…ターンエンドだ」

紅刃

ＬＰ／４０００
手札／５
モンスター／なし
魔法・罠／《天空の聖域》リバース×３

「このターンだけであなたのデッキは１６枚減りました。後何ターン持ち堪えられますかな？」

「……」

「このデュエルが終わる頃、あなたとデッキの信頼関係は完全に崩れ去ります。そして、二度とそのデッキを使う事はできなくなる」

何言ってんだこいつ？そんな簡単に絆が切れて堪るかっての。

「いいからさっさと続けろよ」

「ははは。いくら強がったって、あなたには何もできませんよ！わたしのターン！《トラップ・スルーザー》を召喚！」

また３本足のメカが出てきた。一体何の意味が…？

《トラップ・スルーザー》　ＡＴＫ／　８００

「《モンスターレジスター》の効果でデッキから４枚墓地に送ります。《トラップ・スルーザー》が攻撃表示で存在する限り、わたしは永続罠の効果を受けません。召喚時は適用できませんが、これでわたしのデッキは破壊されません」

あ～なるほど、そういう事か…。

「《強欲な壺》を発動！カードを2枚ドロー！カードを3枚セットしてターンエンドです」

エックス
ＬＰ／　６００
手札／０
モンスター／《トラップ・スルーザー》（ＡＴＫ／　８００）リバース×１
魔法・罠／《モンスターレジスター》リバース×３

「うふふふ、これで私の勝利の環境は完璧に整いました。いよいよカウントダウンです」

「…俺のターン」

これでデッキの残り枚数は４枚。手札は６枚。まあ、デッキの枚数を数えるまでもねえけど。

「どうするつもりだ？強力なモンスターを１体でも出せば終わりだぞ？」

「…一暴れ来そうね…」

「は？」

ルーナがジト目で呟いた。この先の展開が大体読めたからだろうな。

「ゾクゾクしますねぇ。デッキ破壊に絶望のデュエリスト。うふふ

ふふ…。あなたのデッキは残り４枚。絆も何もかもぐちゃぐちゃになる様を見るのは楽しいですねぇ」

「…要するに、あんたはデッキとデュエリストの絆を踏みにじるのが趣味ってわけか？」

「その通り。カードの信頼など、デュエルには無意味なのです。あなたとあなたのデッキとにある絆も、全て壊してさし上げますよ！」

「…そうかよ…」

別に、デッキ破壊が悪いわけじゃねえ。デッキ破壊だって立派な戦術だ。

ただ…相手の絆を貶す考えが気にいらねえ。

「…『諸刃の剣』って言葉、知ってるか？」

「何？」

だから、全力で叩き潰す！

「あんたが馬鹿にするもんがどれだけの力を持ってるか、見せてやるよ！チューナーモンスター《神秘の代行者　アース》を召喚！」

緑の宝玉を取り付けた杖を持つ、白い代行者が飛び出した。丁度デッキに残っていたから都合がいい。

《神秘の代行者　アース》　ＡＴＫ／１０００

「また知らない代行者だ！しかもチューナーだと！？」

エドはさすがにジュピターやアースを知らねえよな。そして、今から出すこいつの事も！

「《モンスターレジスター》の効果で、デッキからカードを2枚墓地へ！そして、こいつは手札・フィールド・墓地のどれかから代行者を1体除外する事で、手札から特殊召喚できる！現れろ！《マスター・ヒュペリオン》！」

炎の翼を持つ代行者のリーダーが降り立つ。さっきは出せなかったけど、もうその心配はいらねえ！

《マスター・ヒュペリオン》　ＡＴＫ／２７００

「《モンスターレジスター》の効果で、デッキから最後の2枚を墓地へ送る！」

「ははははは！最後は自滅ですか？」

「アホ言え！デッキからカードをドローできなくなったら負けでも、効果でデッキから墓地へ送るカードがなくても負けにはならねえんだよ！」

「何？」

つーか、ずっとそのデッキ使ってんなら嫌でもわかるだろ。馬鹿かこいつは？

「ですが、このターンで決めなければあなたの負けです！永続罠《

グラヴィティ・バインド－超重力の網－》を発動！全てのレベル４以上のモンスターは攻撃できない！」

「関係ねえ！カウンター罠《盗賊の七つ道具》！ライフを１０００払い、相手の罠の効果を無効にして破壊する！」

「何だと！？」

紅刃　ＬＰ／４０００→３０００

これ以上出し惜しみはなしだ。このターンで終わらせる！

「そして、手札の《冥王竜ヴァンダルギオン》の効果発動！カウンター罠で相手のカード効果を無効にした時、こいつを手札から特殊召喚する！」

黒い大穴が開き、中から竜の姿になったロディスが飛び出してきた。デッキはもう０枚だから《モンスターレジスター》を気にする必要はない。

《冥王竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／２８００

「ヴァンダルギオンが罠カードを無効にして特殊召喚された場合、フィールド上のカードを１枚破壊する！残りの伏せカードを破壊だ！カーディナル・フレア！」

『失せろ！』

ロディスが赤い炎を吐き出して伏せカードを焼き尽くした。ミラーフォースか…。ま、破壊できてラッキーだな。

「ぐぅ…！」

「まだだ！墓地の光属性モンスター《創造の代行者　ヴィーナス》と《裁きを下す者－ボルテニス》を除外して、手札から《神聖なる魂》を特殊召喚！」

純白の女天使がアースの横に並んだ。ここまで大量に墓地に送られてんなら、簡単に呼び出せる。

《神聖なる魂》　ＡＴＫ／２０００

「え？」

「さらに永続罠発動！《奇跡の光臨》！除外されている天使族モンスター1体を特殊召喚する！」

《奇跡の光臨》
永続罠
ゲームから除外されている自分の天使族モンスター1体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する。
このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「え…え？」

「除外されている《裁きを下す者－ボルテニス》を特殊召喚！」

ルーナが戸惑うのを無視して、俺はたった今除外したリーシェを

フィールドに呼び戻した。

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００

「ちょ、ちょっと…」

「これは…」

『あ～らら、徹底的に懲らしめるつもりのようね～』

「そして、レベル６《神聖なる魂》にレベル２《神秘の代行者　アース》をチューニング！」

アースが２つの黄色い輪に変化し、《神聖なる魂》が輪を潜って６つの星になる。

「舞い散る白羽が、天空を翔け現世を照らす！希望の光を振り翳せ！」

☆６＋☆２＝☆８

「シンクロ召喚！飛来せよ！《ライトエンド・ドラゴン》！」

輪と星が光の柱に変化すると、中から４枚の天使の翼と金の飾りを煌めかせた純白の聖龍が現れた。

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「チューナーとそれ以外のモンスターをデッキに戻し、融合デッキからシンクロモンスターを特殊召喚する！これがシンクロ召喚だ！」

面倒だからシンクロ召喚についてさっさと説明しとく。これからプロと戦う度に説明しなきゃと思うと、少しうんざりするな…。

「仕上げだ！《マスター・ヒュペリオン》の効果発動！墓地の天使族モンスターを1体除外して、フィールド上のカードを1枚破壊する！《豊穣のアルテミス》を除外して、最後の伏せカードを破壊！ソーラー・プロミネンス！」

ヒュペリオンが右手から炎の束を繰り出して伏せカードを燃やしにかかる。その前に伏せカードが起き上がった。

「と、罠カード《和睦の使者》！これでわたしのモンスターは…」

「知るか！カウンター罠《神の宣告》！ライフを半分払い、魔法・罠とモンスターの召喚を無効にして破壊する！」

「なっ！？」

紅刃　ＬＰ／３０００→１５００

ソリッドビジョンの《和睦の使者》のカードは発動する事なく燃やされた。もちろん、これで終わりじゃない。

「さらに、《マスター・ヒュペリオン》の効果は《天空の聖域》がある時2回発動できる！《天空の使者　ゼラディアス》を除外して《トラップ・スルーザー》を破壊！ソーラー・プロミネンス・セカンド！」

今度は左手から炎を放って《トラップ・スルーザー》を焼き尽く

した。これでエックスのフィールドにあるのは《モンスターレジスター》だけだな。今俺のフィールド上にいるモンスターはこの通りだ。

《マスター・ヒュペリオン》　ＡＴＫ／２７００

《冥王竜ヴァンダルギオン》　ＡＴＫ／２８００

《裁きを下す者－ボルテニス》　ＡＴＫ／２８００

《ライトエンド・ドラゴン》　ＡＴＫ／２６００

「うわ…エースモンスター勢揃いじゃない…」

「何と…」

『こうして並ぶと圧巻よね～』

ルーナ達が次々に感想を呟く。その一方で、エックスはガタガタ震えているように見える。

「あ…ああ…」

『各々のデュエリストとカードの間にある絆を、土足で踏みにじる下劣な考えは許さん！』

『見るに堪えぬ。その手の者に訪れる末路を思い知るがいい』

いや、気のせいじゃなかった。リーシェは当然のようにキレてるし、ロディスも裁く気満々だし、ヒュペリオンとライトエンドもガ

ンを飛ばしてるし。

まあ、エースをわざとまとめて呼び出した俺も俺だけどな。

「墓地にカードが溜まれば溜まるほど強くなる。そんなデッキはいくらでもあるんだよ。馬鹿げた考えで使うデッキ破壊なんかで絆は切れたりしねえ。それじゃ…終わらせようぜ」

「ひっ!?」

「てめえを裁く!《マスター・ヒュペリオン》《冥王竜ヴァンダルギオン》《裁きを下す者ーボルテニス》《ライトエンド・ドラゴン》でダイレクトアタック!アポロヌス・デプティー!!冥王葬送!!ボルティ・ジャッジライト!!シャイニング・サプリメイション!!!」

火炎放射、黒いエネルギー砲、白い電撃、光のブレス。４つの攻撃が一斉にエックスを襲い、同時に命中して大爆発を引き起こした。

「ぐわぁぁあぁぁぁあああぁぁあぁぁ!!?」

エックス　ＬＰ／　６００→　０

紅刃　ＷＩＮ

エックスは衝撃で大きく吹っ飛ばされて、仰向けで倒れ込む。俺はそれを見届けてからカードを片付けた。

「ま、いい薬にはなったろ?」

「凄まじいオーバーキルね…」

「オーバーキルなんて柄じゃねえけど、1度これくらいやっといた方がいいと思ってな」

こういう奴は一辺ズタボロに叩きのめした方が身のためだからな。後悔は一切してねえ。

「デッキ破壊をこうも完璧に利用するとは…」

「相手が勇香じゃないだけまだマシだろ。あいつのデッキなんて墓地アドの塊みたいなもんだし」

「言われてみれば確かに…」

おまけに除外したモンスターもポンポン出してくるし、展開力なら俺達の中で1番上じゃねえか？つーかエドって勇香のデッキ知ってるのか？

エドに返答しつつ、俺は伸びているエックスのポケットを漁ってメダルを取り出した。個数は…1個か。

「とにかく、これで初勝利だ！」

『たった1つか。2、3個は持っていると思ったが…』

『始まったばかりだから当然の事だ』

『そんなに焦る必要ないわよ～？地道に行きましょうよ～』

リーシェは不満そうだけど、ロディスはそうでもないみたいだ。
ナージャの言う通り、地道に集めるしかねえな。

「それじゃ、こいつを校舎に送ってから相手を探すか」

俺はエックスを肩に担いで校舎に向かった。普段から鍛えてるからこれくらいは平気だ。

とにかく、これでまずは1勝だ。最低でも、月沙達と当たるまでは負けられねえ！

…Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第７５話　デッキ破壊は諸刃の剣（後書き）

☆今回のキーカード☆

璃音「さて、『今回のキーカード』の時間よ」

ロコナ『久しぶりの登場だよ！』

フィレス『ガウッ！』

勇香「ようやくジェネックスに入ったな。いやぁ、長かった！」

璃音「修学旅行編が始まってから半年以上経っての突入になるわね。そのスタートが情け容赦不要のオーバーキルと…」

勇香「まあ、いいんじゃねえか？大切にしてるもんを馬鹿にされんのは誰だってムカつくし」

璃音「それもそうね。それじゃ、カード考察に入りましょう…って言いたいところだけど…」

ロコナ『今回はしないんだって。その代わり、重大発表があるよ！』

璃音「去年、年末年始にかけて番外編をやったのを覚えてるかしら？あれを今年もやるわよ」

勇香「つーわけで、アンケートを取る。今から説明するから、しっかり読んでくれよ」

璃音「１つ目は質問コーナーよ。この小説に関する疑問からお悩み相談まで、私や紅刃達が何でも答えるわ」

勇香「質問は…思い切って1人3つまでだ！自分の考えたキャラを使ってもいいけど、合計3つ以上ってのはなしだから注意しろよ！」

ロコナ『番外編という事で、おんけんは…だっけ？その人達も登場するからその人達への質問もありだよ！』

璃音「２つ目は人気投票よ。今回は第７４話終了時点までに登場したキャラになら投票できるわ。ただ、十代とかの原作キャラはなしよ」

勇香「前回はまさかの遊星がノミネートされたからな…」

璃音「例外として、半オリキャラ化してるディヴァインは投票ＯＫよ」

勇香「いいの！？アニメでビジュアルが知られてる分、結構ハンデがあるぞ！？」

璃音「まあ、なるようになるでしょ」

勇香「んな適当な…」

璃音「今回は、好きなキャラを１０位まで選んで投票してちょうだいね。ポイントは以下の通りよ」

１位…１０票

２位…９票
３位…８票
４位…７票
５位…６票
６位…５票
７位…４票
８位…３票
９位…２票
１０位…１票

璃音「投票は１人１回まで。複数回投票した場合は最初の分以外全て無効になるから注意しなさいよ」

ロコナ『１位に選んだキャラには一言コメントを付けてね！いくつか選んで公表するよ！』

勇香「締め切りは両方共２０１１年１２月３０日までだ！間違えんなよ！」

璃音「説明は以上よ」

勇香「ま、こんだけやれば、去年みたいに時間稼ぎでグダグダになる事もねえはずだよな」

璃音「次も上手く引き延ばせる自信はないらしいし、そうならない事を祈るばかりね…。さて、今回はここまでよ」

フィレス『ガウッ！』

ロコナ『質問と投票、どしどし投稿してね！感想もよろしく！』

勇香「気が向いたら投稿してってくれ。それじゃ、次回も見てくれよな！」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

いかがでしたか？

久々に自作オリカなしで書けました。やっぱり既存のカードだけでデュエルを書き続けている人達は凄いです…。

相手がデッキ破壊という事で、フル活用してエース４体を並べてみました。５体目はいないので５体総攻撃まではやりませんでしたけど…。

質問と投票については説明した通りです。不正のないようお願いします。皆さんの投稿、お待ちしています。

では、また次回！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0671m/

Visitors from the future

2011年11月27日12時51分発行